TRAL REVIEW

中央公論

新年號

第四十年　第一號　第四百四十三號

此廣告を見て御申込の方は中央公論愛讀者なる旨御申添を乞ふ



卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社

獨逸 ショーペンハウエル著
增富平藏譯

七版

處世哲學

ショーペンハウエルの處世論は類書中の最尊也。偉大なる哲學者、「人間を知れる」者としての著者が晩年に於ける深遠の體驗と老熟の思想とを擧げて人間處世の妙諦を說き人世に於ける明闇、幸不幸、安危、得失等の根源を論じて一大寶鏡を懸くるが如く、譯文亦明快を極む。

四六判總布製
定價 貳圓八十錢
郵稅十二錢

英國 ギッシング著
文學士 栗原古城譯

田園春秋

「ヘンリ・ライクロフトの手記」全譯

▲著者肖像及筆跡入
▲定價貳圓參拾錢
▲郵稅十二錢

七版

印度マドラス大學 ナラス教授著
曹洞宗大學教授 立花俊道譯

佛教の要諦

▲釋尊影像、アジャンタ壁畫等の寫眞版十一頁入
四六判總布製・定價參圓貳拾錢・郵稅拾貳錢

十六版出來

高橋五郎譯

ベーコン論文集

世界論文集中の珍として三百年來學者の爭て愛誦する全篇五十八の名什、句々金玉『之を讀む二十回讀む毎に新意味を發見し來る』とは眞なり。以て處世經たるべし、以て思想辭典たるべし。

四六判總布製
定價 貳圓參拾錢
郵稅十二錢

東京本郷西片町 玄黃社 電話小石川一三九九番 振替東京七九九五番

科學畫報

人工で人間を作り得るか(果して人間は造物主たりうべきか)……岡部長節

驚くべき最近の科學文明(近代の科學文明の總まくり)……理學士 原田三夫

一本の毛髪が語る秘密(驚くべき探偵科學の進歩)……工學士 妹尾太郎

散り迷ふ落葉の力學(面白い物理學觀察法)……理學士 大野岩太郎

天然色活動寫眞の解剖(自然のまゝの色をつける最新發明)……宮里良保

最新知識

寫眞電送の話……工學士 妹尾

無線で操縦する飛行船……鈴川八郎

太陽熱と地下熱の利用……理學士 山田

空中から爆藥と肥料……工學士 木下

文明の華コロイド科學……藥學士 橋爪

興味津々

蟻の面白い社會生活……山下初雄

未來の都市……栃内吉彦

無色透明の動物……理學士 内山

鼻の藥で自殺する人……醫學士 弘中

家庭電化の實際……記者 一

新年特輯

最新科學文明號

本號特價金八十五錢稅六十錢稅二錢、三ケ月一圓九十五錢半年三圓六十五錢一年六圓九十五錢稅共、普通號

世界最新の科學上の問題を具象化せる畫報欄の一大壯觀を見よ

最新の材料

材料は世界最新のものにして何れも懇ろ丁寧なる解說により一讀何人も問題の根本に觸れしむる獨特の編輯

獨特の印刷

印刷は本邦雜誌界に多く類例を見ざるグラビア版にして之が日本の雜誌かと思はるゝ位本誌の努力を見よ!

面目又一新

新年號より既往の經驗により根本的改良を施したり其鮮明にして優秀なる技術は全く面目を一新せり

第一附錄

最新科學遊戲十種

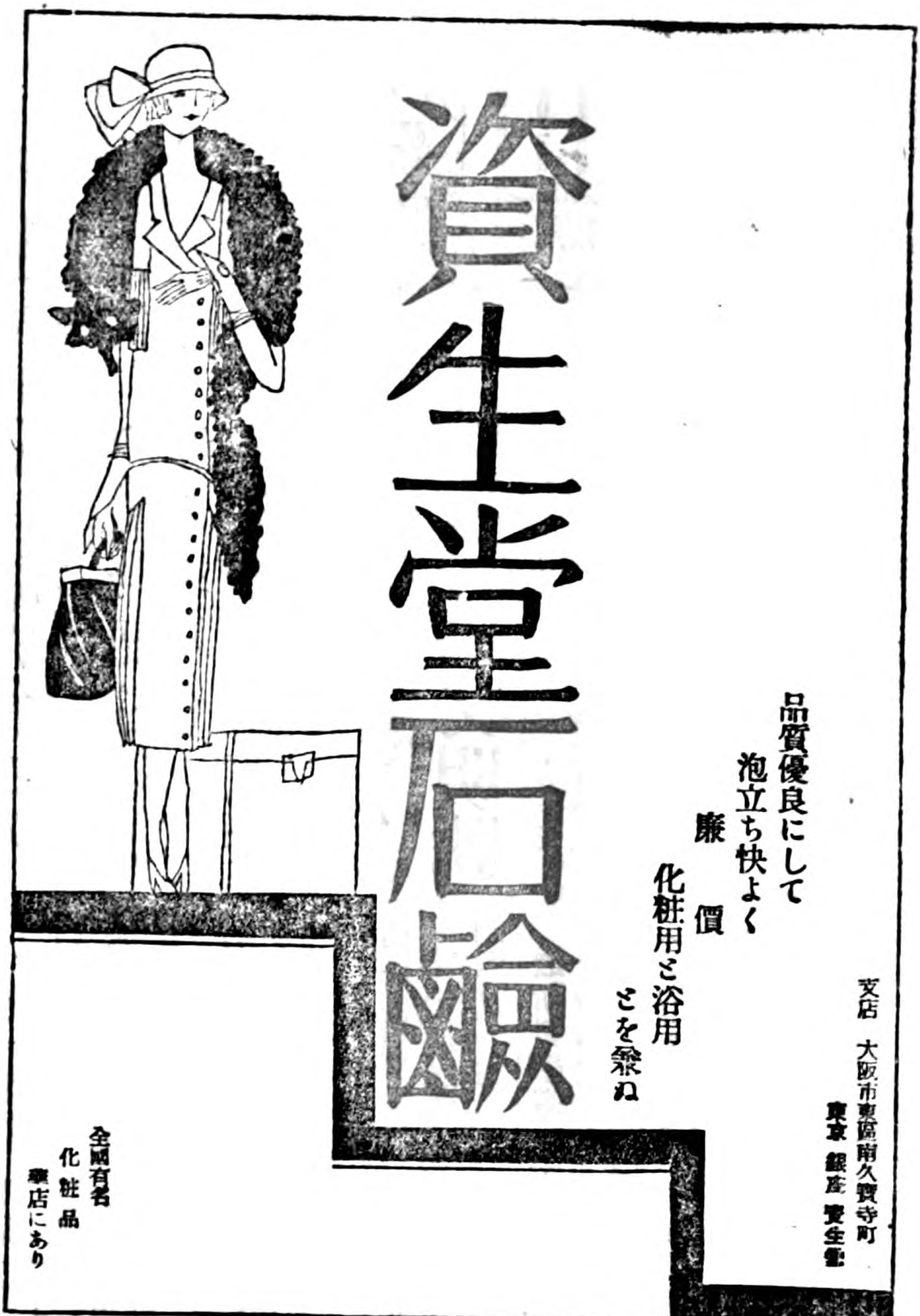
△魔法陣の作り方
△不思議な砂文字
△お手製死の假面
△何模樣描寫法
△黑インキの手品
△科學的の鍵
△白紙の手紙
△カード魔術
△飛び出す栓
△美い胡蝶風

第二附錄

科學小說 **臨終七ケ月** アランポー作 岡部長節譯

臨終に當り催眠術の暗示にて死の壓倒的來襲を危くも防ぎ止めて前後七月、生ける屍の奇蹟を現したワルドマール氏事件の眞相・覺醒と共に腐肉と化する戰慄すべき科學小說

東京市麹町區下二番町三
新光社
振替東京四三二四〇番
電話四谷二六四六番


資生堂石鹼
品質優良にして
泡立ち快よく
廉價
化粧用と浴用
とを兼ぬ
支店 大阪市東區南久寶寺町
東京 銀座 資生堂
全國有名
化粧品
藥店にあり






クラブ煉歯磨
現代醫學上理想の優良歯磨
便利で徳用で衛生的な歯磨
CLUB
クラブ水歯磨



[illegible]兒　　小林古徑筆

賀川豊彦著

死線を越えて 下巻
壁の聲きく時

最新刊發賣

「死線を越えて下巻」が出版されました。我國の男女階級の總ての人々が本書を爭ひ購讀する勢ひは全く凄じいものです。これも著者の感激的生活と其崇高なる人格の賜です。

その勞働者の味方として牢獄を辭せなかつた涙ぐましい犧牲的精神、可憐の或る女より死を以て纏せられてそを感化し得た博大の愛、關東の大震災に一死を投げ出して救濟事業に努力した人道的貢献は本書を手にするものの涙ならでは讀み能はゝ所です。

本書は著者の自傳的小説と見るべき聖なる記錄だ。著者が名門に生れて富に赴くを捨て、名譽に趨るをやめて一念發奮、貧民窟に入りてより玆に十五年、彼が眞實の世界に生きんとする努力は本書を一讀するものの誰でも首肯する處だ。敢えて此一書を江湖百萬の男女愛讀者に贈る。

◇四六判上製　定價貳圓八拾錢　送料廿壹錢◇

東京市芝區愛宕下町　改造社發行　振替東京八四〇二

巽軒叢書

巽軒井上哲次郎先生の教養を受けたる人々によりて組織されたる巽軒會の事業として本社に於て叢書を刊行す。巻を定めず時を定めず又種類を限らず、凡て學者の權威あるものを網羅し、之に據つてこれを刊行せんとする。著者はいづれも斯界一流の大家、蓋し明治大正に於ける學界的一大學術叢書たるべきを信ず。

文學博士 井上哲次郎先生著

改訂増補 日本陽明學派之哲學

菊判 六二五頁
定價 四圓五十錢
郵税 十八錢

重版 本書は同じく著者の執筆になる「日本朱子學派の哲學」「日本古學派の哲學」と相俟つて、日本に發達せる東洋道德の精華を攬し、所謂國民道德の由來背景を明にしたものである。今回改訂増補多くの新しき資料を加へ、「巽軒叢書」の第一册として出づ。

井上文學博士著 日本朱子學派之哲學 定價五圓 郵税十八錢

井上文學博士著 日本古學派之哲學 定價四圓八十錢 郵税十八錢

文學博士 吉田靜致先生著

人格の生活

菊判 三七六頁
定價 二圓八十錢
郵税 十八錢

新刊 人生一切の問題の解決に當り先づ以て闡明すべきは「人格の生活」でなければならぬ。本書は困難な人格の問題を説いて何人にも解し得べく、また著者の持説たる「同圖異中心主義」の平易なる説明をも見ることが出來る。思想問題研究者の必讀書。

文學博士 深作安文先生著

思想と人格

菊判 五〇〇頁
定價 金參圓五十錢
郵税 金十八錢

新刊 變轉極りなき近時の社會思潮に對し、深き人格の根據から、一々鋭い批判を下し、思想と人格の複雜纖細なる關係を明かにし、その歸趨を暗示したもので、吉田博士の著者を人格の内面的研究さすれば、本書はその外面的研究ともいふべく、教育家、宗教家、思想家の必讀すべき名著である。

東京市神田表神保町 **富山房** 振替東京五〇一番

新刊圖書目錄進呈

成功者は何れも熟慮果斷の人！

煙草の害を知りつゝ永年禁煙の出來なかつた人も

一度「カロツト」を口にすれば斷じて再び煙草は吸へぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロツト」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロツト」の御註文がありました店員が此事を主事に報告しますと主事は「明日私自身で代理部へ上つて「カロツト」を御説明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロツト」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる次第を述べて「カロツト」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、そして先づ一社員の煙草好な方に御試しを願ひました、すると其社員の方は早速「カロツト」を取上てお試しになりました、暫くして其方は「カロツト」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですね―、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立ちになつて「カロツト」を取上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草は吸へませんね―」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞讃下さいました、其處で更に店主は口を開いて「カロツト」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロツト」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇乞をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御獎勵の言葉を述べて下さいました。

特徴

外見少も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に温雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する惡しき嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

カロツト（凡百日分）

パイプ ベークライト付	壹組	貳圓五十錢
パイプ 象牙製サツク入付	壹組	參圓五十錢

	内地	臺、朝、樺
送料	十八錢	四十五錢
引替送料	三十錢	五十五錢

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

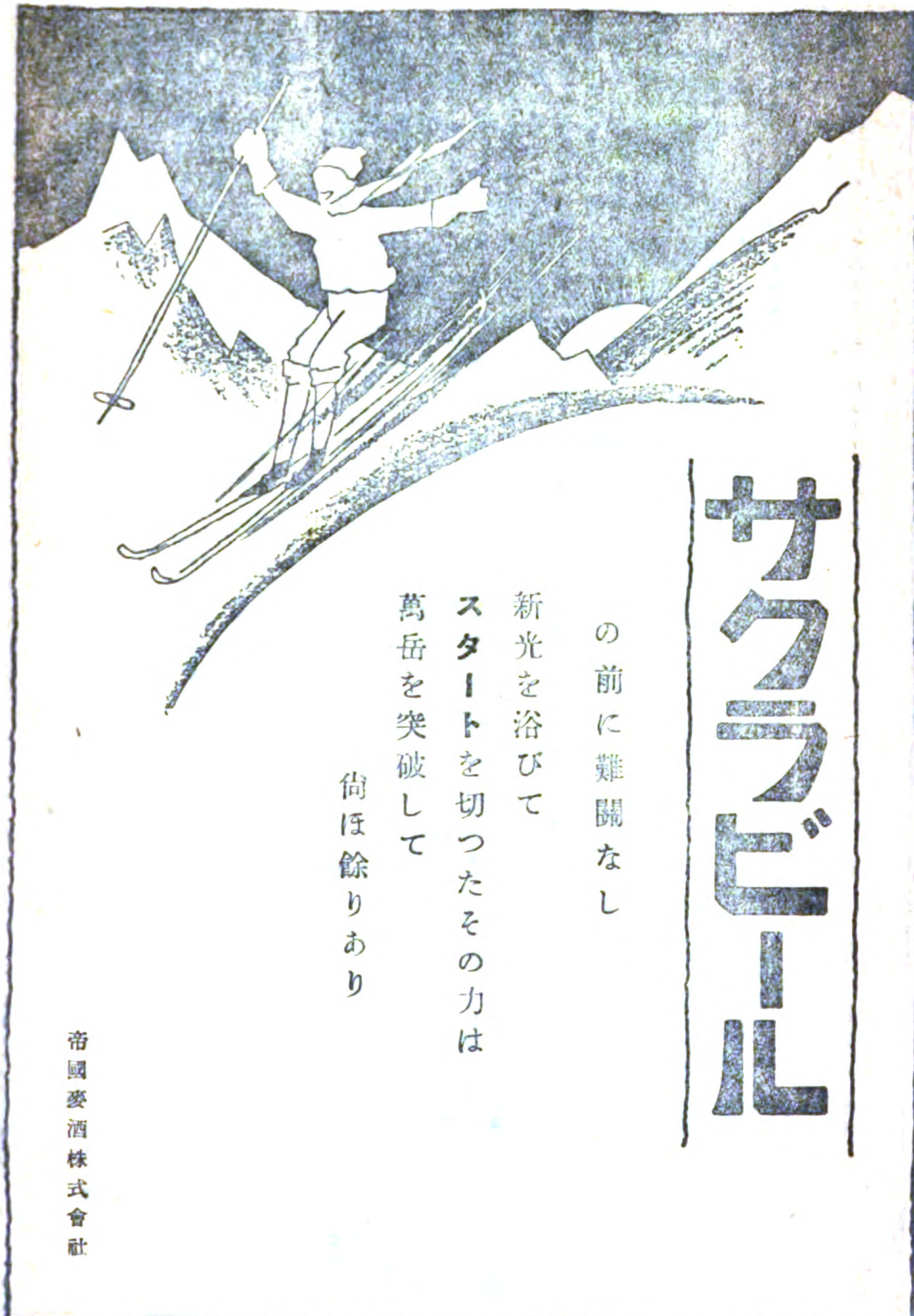
東京府大森入新井町不入斗四五一

榮川堂

振替東京五二一九壹壹

東京市京橋區瀧山町十三番地

代理店 天下堂


サクラビール
の前に難關なし
新光を浴びて
スタートを切つたその力は
萬岳を突破して
尚ほ餘りあり
帝國麥酒株式會社

大正十四年

中央公論

一月一日發行

一月號

第四十年第一號

第四百四十三號

失職者問題と思想善導問題

來るべき一年に於て何が世間のやかましい論議に上るだらうかの豫言は出來ぬが、何が吾人の愼重なる攷究省察を要するかと云ふなら、吾人は遲疑する所なくそは失職者問題と青年思想善導問題との二つだと斷言する。所謂國事多端の際、論ぜらるべき問題は外にも澤山あらう。併し其の取扱方の如何に依ては遂に帝國將來の致命的痼疾となるの恐あること右の二問題に若くものはあるまい。

失職者問題の根本的對策は決して所謂求人開拓ではない。馘首者に對する潤澤なる給與では無論ない。若干の退職賜金は以て一時の窮を救ふに足らんも、結局に於て多數は早晩何かの職業にありつくの必要に迫らるゝ。そこで職業紹介が本問題の根本的解決なるかに看做され、その爲にや政府側でも或は職業紹介の全國的統一をはかるとか又は求人開拓デーなどと騷いで頻に應急の效果を舉げんと努めて居る。洵に結構なことだが、只一つ遺憾なことには、折角の努力奮鬪も無い仕事を探すに焦り、仕事其ものを潤澤ならしむべき根本的滋養策を彼等は等閑に附して居るのではあるまいか。諺にも無い袖は振れぬといふ。求人開拓も職業紹介もそが能く失職者問題の解決策たり得る所以は實は世上に勞働の機會が澤山ころがつて居ることを前提としての話ではないか。

所が世間に仕事がない。仕事のないのは不景氣の結果で不景氣は戰後世界の一般風潮だといへば夫れ迄の話だが、我國には外にモ少し考ふべき點がある樣に思ふ。そは民間經濟に對する過當なる財政的壓迫といふことである。この壓迫が單に課税の形に現るゝものゝみに限らぬことは言ふ迄もない。然らば何の爲に這の壓迫が餘儀なくさるゝかといふに、申す迄もなく第一に來るものは尨大なる軍備である。今日の軍備が量に於ても質に於ても一大整理を要するは公知の事實。軍備以外の費目と雖も、政府從來の放慢無責任なる施設やら政治的意義を帶ぶる無謀の對外投資やらの爲に、轉々民間を潤ほすの用を爲さずして空に飛んで了つたもの亦頗る巨額に上る。其外にも種々の原因はあらうが、要するに民間今日の經濟を此種の財政的壓迫から何とか解放してやらなくては、産業は到底興りやうがない。産

青年はそんな[illegible]こ

とになる。昨今の[illegible]問題を一個の[illegible]といふ[illegible]

青年思想の善導、之も[illegible]提唱された問題だ。現代の[illegible]

伴し乍ら所謂[illegible]一度みらるゝものゝ中には、之を[illegible]

しておきたい。純真なる心を以て社會の缺陷に直面し、爰に改革の熱[illegible]に、實に内

習慣に從順ならざるの故を以て、一概に罵倒し去るは間違つて居る。眞に憂ふべきは寧ろ他にあつて茲處にはない。

それは何かといふに爲すまじきことを考へる斗りでなく更に之を輕々實行に移さんとする者の昨今著しく多くなつたことである。思想そのものが恐るべきではない。直に之を實行に移したがる傾向が恐いのだ。この問題の要[illegible]見損つてはいけない。

此憂ふべき傾向に對し、始めから青年にそんな不都合な事を考へさせまいと骨折ることは、愚の骨頂である。文政當局は之を適策と信じてか昨今色々制限する所ある樣だが、それは年頃の男女に性慾のことを思はせまいとするに同じく、努めて効なきに了るや言を待たぬ。考へるだけのことは致し方がない。要は考へることゝ實行することゝを離せばいゝ。而してこの二者の間に自ら一の溝渠を作るものは實に境遇の力ではないか。思想は人をラヂカルにする。而して境遇は人を保守的にする。茲にうまく釣合の取れる所に健全な進歩がある。夫の虚無黨的思想は全く境遇の産物なりといふ西諺は實に味のある教訓である。

果して然らば本問題の根本的對策が青年の境遇改善の外に絶對に途のないことは明であらう。斯の立場から熟々當今の形勢を見ると實に寒心に堪へぬものが多い。金なくば碌な勉強も出來ぬ。あつても入學試驗の難關を如何せん。うまく第一關門を通ても第二第三の難關は常に若い心を極度に不安ならしめる。數へ擧げれば際限もないが、要するに當今の青年は人世の大事な時節を危惧不安に襲はれ通して暮す。若し夫れ一旦途中で蹉跌することあらん乎、彼の前途は忽ち暗黒となる。斯うした陰慘な境地に投ぜられて青年の心狀が如何の傾向をとるかは智者を待たずして明であらう。青年の思想を憂ふる者は須らく先づ此點に思を致すの必要があると思ふ。

中央公論



第十四年　第一號
一月號
第四百四十三號

現代文化に於ける本質的傾向と偶然的勢力との關係

杉森孝次郎

一　序想

社會進歩の可能と價値に對する最も合理的だと現在の私によつて考へられる興味または信仰の立ち場からして、どの一とつの文化的全體についても、それの一瞬間態即ち一時代相だけを任意に選擇して觀察する限り、そこには、比較的

社會において、[illegible]

どうしてこの必然が彼の前に立つといふに、それには、一とつの目的として、或はまたそれに、また同時に、[illegible]な性質のものではない。それは、一とつの意志的な性質の問題として特徴づけられる自由を充分にわれらに意識させるものだ。進步は、一とつの判斷として、また殊に、或ひはすくなくとも、人の社會に於ける一とつの事實としてはそれ自身の各細的性質に於いても、或る顯著な樣式と程度に於いて行はれる選擇を意味する。或る保存及び採用のかたちに於いて選擇される部分が本質的傾向であり、或る拒斥及び廢棄のかたちに於いて選擇される部分が偶然的勢力だ。

例へば政治について考へるに、人間協力としての所與の材料、實質、本體にむかつて、いひかへれば目的物にむかつて、その目的物自身の全體のために、それの最も經濟的な在りかたとしての組織を與へることが、政治に於ける本質的傾向だとして常に發見され、且つ確認されるが、同時に、過去のいかなる政治でも、當の社會及び時代に於ける優越强制力の所有者の利己的動機に對する或る機會としての性質を多少必ず帯んだ。その優越强制力は優越暴力、優越財力、或ひは優越知力、及びなほそのほかの特質のものでもありまたが、いづれにしても、動機が公善でなく私益であつた限りに於いて、その場合の政治には、すくなくともそれだけの偶然的勢力が、多少の本質的傾向と共に、協働的、合同作用的に實在であつたと見ねばならん。

政治について考へた結果と同樣の結果が經濟について考へた結果として、またその他の種類の文化内容について考へた結果としても見つかる。

二　社會進步に對する非宿命觀

自然法そのものがまた習性の或るかたちにほかならない。社會に於ける慣習、人に於ける品性と同じ方向に於いて、但し異なる程度に於いて、多少の未確定的變化の可能が自然に、したがつてそれの現に公認されてゐる法則にもある。

各の意志的存在にはいくらかの選擇力があるといふことは、いかなる宿命主義者でも、幾時には比較的に顯著に、常時にも比較的に不斷著ながらに、選擇の可能と價値に對する積極的、肯定的態度を、かれの全人を最も有責任に代表する形式の自己表現に於いて、示すといふ一事實によつて有力に裏書きされる。宿命主義者が宿命論を鬪はす全行動も、この全行動内の各方法もかれの選擇としての要素を多少持つ事實だが　口論や爭論には絶對に從事しない宿命主義者にしても、かれの覺醒時の、しかも比較的に意識の最も明瞭な瞬間または期間の生活が、選擇を聰明にする可能と價値に對するかれ自身の深い信仰を證據立てる性質をそれの、もし最大でないと過當に割引しても、すくなくとも一大特質としない可能は決して成り立たない。

宇宙内のいかなる一小部分にたりとも選擇力のいかなる小量をたりとも認め許すことは、全宇宙の將來の在りかたを多少不確實的、未決定的だと認め許すことを論理的に勿論意味する。宇宙に於けるその一小部分以外の全部分の在りかたがその一小部分の選擇力によつて決定される可能が確實に多少存在するといふ判斷が成り立つからだ。

宿命説に對する批評はなほ複雜でありうるが、それは別の問題として、いはゆる本質的傾向は早晩必ず積極的に選擇され、いはゆる偶然的勢力は早晩必ず消極的に選擇されるかといふ問ひは、直接に社會進歩に關する問題としての場合に於いては、進化の概念が過去に於いて構成され、使用された或る場合に於けるほど高い確かさに於いて然定的には答へられない。單なる自然界は最も無條件的必然に近い確かさに於いて豫測を許す。例へば、攝氏百度の温を與へよ、水は必ず沸騰せん、或いは、攝氏百度の温が與へられる確實可能がある、したがつてその水はその際屹度沸騰するだらう、

との[illegible]在る時には、それ[illegible]高度の[illegible]一ある[illegible]故に、最低度の[illegible]さに於て[illegible]許す[illegible]には、それの一特質に於いては、選擇力の發達にほかならない。一定のものを選擇する必然なある選擇力といふ觀念または概念には成り立たない。いはゆる本質的傾向は、社會進步の方法または形式に於いて、積極的に選擇される或るものであり、いはゆる偶然的傾向も、それに於いて、消極的に選擇される或るものだといふ事實が存する限り、即ち、社會進步の方法または形式に選擇といふ要素または性質が認められる限り、社會の進步または進化に、それが未實現の將來に屬するあひだ、必然性を許容することの合理性は、それだけの割引なしには成り立たない。實に、人は、生物學的にはたに不足なき適者である場合に於いてさへ、心理學的法則に支配されて、自殺を選擇することがある。しかも　かくの如きは、人の選擇力を、それの比較的に低い程度の發達狀態に於いて、通則的には、例示する一材料にすぎない。

社會の將來は充分に必然的な進步または進化からは成り立たない。社會には常に退步または退化の可能もある。社會の場合にあつては、進步または進化も、退步または退化も、そのいづれもが、宿命的必然のかたちに於ては成り立たない。社會には、常に、その兩者が可能として存在する。社會の將來を一定の簡明な樣式に於いての必然的進化として思念することは、自然科學的、生物學的、及び機械學的考察の方法が習性的に社會學的考察の方法を決定した結果として意義を、近代及び現代の場合に於いては大きく持つ。近代に發達した自然科學的精神と歷史的精神とが協働した一結果として進化論が生まれ、機械の發明が産業を生んだ瞬間の次ぎの瞬間にいかなる社會觀と人生觀とが發達しうるかは、事後の今日から廻顧すれば、事前の豫測をさへかなり有效に成り立たせえたらうと思はれる一問題だ。

社會には、いつでも、退步または退化の可能が多少あるといふことは、進步または進化も、社會にあつては、或る可

能としてのみ存在することを同時に意味する。兩者のいづれもが必然的位置をば社會に有しない。

社會進歩は、それがいかなる必然でもなく、或る可能であるが故に、これを出來るだけ必然化するためには、その方法として聰明が必要だ。

いはゆる本質的傾向と偶然的勢力との間なる差別も、根柢に於いては、聰明の程度に於ける高と低との間なる差別にほかならない。本質的傾向を積極的に選擇し、偶然的勢力を消極的に選擇するものが、それ自身、また聰明にほかならないことは、更に一層直接だ。

近代に於ける聰明の增進が科學に新發達を與へ、科學に於ける新發達が機械に新發達を與へ、ここに產業文明が形成された。一とたび形成された產業文明は、一とたび動力づけられた機械同樣に、しばらくは、それ自身の惰力、加速力をも加へて、獨自の、多少專制的な、運轉と進展を續ける。唯物史觀と經濟決定說とは、この時代に於ける思想的產物の一であつた。

しかしながら、科學は直接に人性の一表現だ。機械の發明、技術及び工藝は、明白に、人が、人の興味と目的と本能とにしたがつて、人自身の性能を動かせる或るかたちだ。產業革命が意味した生產の新方法そのものが、一とつの聰明的、人性的一現象にほかならなかつた。生產の新方法は、それの原因と目的と本質と全體的關係及び位置的意義に於いては、唯物的であるよりも唯心的であつた。

知ること、考へること、行ふこと、そしてこの三者を通じて欲すること、これをほかにしては生產の新方法は成り立たなかつたし、これを第一位以外に置いてもそれは成り立たなかつた必然理由がある。生產の新方法が物的自然に對する心的自然即ち人性の聰明なる自己主張の一新形式であつたことは、當初、無反省的に自明であり、その後、不完全反省

的に不利となつたが。これが完全な時に伴つて日に新にすることだ。現代に於ても亦、これを此せずしての一般的なる。

この場合にも、それが必然として承認されるためには、現代は、それを原因づける必然がある。その原因へ遡るためには現代を透明化するほかにない。現代文化に於ける本質的傾向と偶然的勢力とを決定的に識別し、取捨する智と勇との上に、即ちそれをいかに選擇するかの様式の上に、勿論現代人自身の綜合的形式に於けるこれの上に、明日の社會の在りかたは先づ最も信頼される資格を備へて掲示される。

三　生産の新方法と共に發達した賢愚

經濟的生産の方法がその社會の在りかた、その社會の人々の心的狀態をいかに決定するかは最近代に於ける注意の一焦點だが、分析的にも、綜合的にも、この問題は、現代の聰明になかつてない程盡きざる用務を供給する。

現代の聰明に最も有意義に挑戰する二大問題と見られるものがあるが、そしてその一は團結の新方法と共に發達した賢愚の問題だが、他の一は生産の新方法と共に發達した賢愚の問題だ。團結の新方法は第一に國民主義によつて代表され、生産の新方法は産業文化の全延以上の波紋をさへもゑがく機械的生産主義そのものだ。

機械の發明と發達と使用と慣用とは、それに於ける本質的傾向が注意される限りに於いては、一貫して聰明以外のものではありえないが、それに於ける偶然的勢力が注意される限りに於いては、いく多のかたちに於ける愚であつた。

その愚の一形は機械の目的化だ。機械は道具の發達したものにほかならない。機械の價値は、代表的には、それ自身には存しない。機械の代表的價値は或る手段價としての性質以外のものでは、眞實には、ありえない。然るに、機械が發明され、それの生産的能力及び功績は、當時の、及びその事質の發達と同時のとしてのその後の、近代人を驚歎させ、

眩惑し、催眠狀態化するに足るものであつた。新神出現の位置を機械は近代人によつて次第に確實に與へられた。人心が次第に機械化された。目的を完全に、若しくは代表的に、それ自身に有する行動が、本質的意義に於いてのすべての藝術行動だが、機械の製作及び使用は、それが機械の製作及び使用である限り、**本質的には、目的をそれ自身に主として有することは出來ない。**

本質的意義に於いての藝術行動を求め、選び、なすことによつてのみ實質には滿足させられうる本能と欲望とをも、即ち人性に於けるそのやうな部分をも、近代人は、産業革命以來は、機械行動によつて滿足させうるかの如くに考へ、信じ、試みた。十九世紀のドイツに發達した國家哲學と國家組織、義務至上主義の理論、經濟禮拜的社會主義の思想、これらは、外觀に於いて甚だしく相異なり、起原に於いても、殊に義務至上主義の理論の如きは、それが社會組織に適用されない抽象的、初發的形式に於いては、産業革命以前と見られる關係をも有するが、そのいづれもの十九世紀に於ける發達が注意される限り、みな、機械主義の特徴をいちじるしく示す。經濟的生産の新方法が直接的及び間接的にそれらの考へかた、興味しかた、構想しかた、及び行ひかたに與へた決定力は、それが研究されたならば、著大なものだつたとして發見されるだらうと豫察される。

國家禮拜、社會禮拜、義務禮拜、經濟禮拜、これらは、十九世紀に發達した學說及び行動としては、同じ十九世紀に發達した機械禮拜と、あまりに不可疑的な原則的同一を示す。國家と社會とは、それが組織、殊にも人爲の組織である點に於いて機械と共通だ。國家と社會と義務と經濟とは、いづれも、それの僞はらざる本能と囚はれない知力とによつて理解された、それ自身の最初的及び結論的純粹形に於いては、個々人に取つての、或ひは人々の生活に取つての、或る手段價以上のものでは**決してありえない。その點に於いては**、それらの各は機械と共通だ。

組織として[illegible]

きつたやり方で、組織として[illegible]にした[illegible]
な[illegible]的[illegible]たつたらしく考へられる如くに、方法として[illegible]を通じ方法化した[illegible]方法として自
家、社會、經濟、或ひは國家と社會とを操作とする種類の技術等を同様に組方法化する或る巨大なる勢力として自然
に作用したらしい可能も考へられる。

生産の新方法は、それの發明と發達とは、直接に及び間接に、文化と社會の在りかた全體にむかつて、その生産の新方法自身に固有の組織性と方法性とを、しかもそれが次第に神化され、藝術化されるにしたがつてその神化され、藝術化されたかたちに於いてのそれを、深く且つ廣く醱生させる酵母としての作用を、時系的觸發力と染色的强制力とを兼ね備へたかたちに於いて示し續けた。それが間接になされた場合のうちには、社會的本質としてはまだ産業國、或ひは發達した産業國になつてゐない國家や國民が、理論的、感傷的、空想的、狂熱的、盲信的各種形に於いて、神化され、藝術化された生産の新方法の商品的或ひは時代錯誤的敎宗者となつたといふ性質のものもある。

組織と方法は近代ドイツ人の天才だ。その國語の多少古い歴史を有する文法さへも例外でないと考へられるが、成文律、行政、軍隊、殆どすべての方面にわたつての嚴格なる編成またはレジメンテーション、大量的及び形態的な關係づけ、體系化、方法論、認識論、範疇、概念、義務、それらの先天的、超經驗的絶對價値、外在的、超在的、固定的、劃一的規範または理念とそれらの無制限的專制、これらのものはそれの或る現象だ。

そこには原始的衝動としての最初と結論的目的としての完成がない。そこにあるものはすべて道中だ、過程だ、中間だ。眞の發明的要素と眞の創造的性質はそこには極めて乏しい。そこにはジェームスに比されたヴント、またはミルに

比されたカント、またはラスセル、エルズ、モリスらに比された史的一巨人の特質の或るものが代表的にいちじるしい。國家至上說、社會至上說、經濟至上說の外だ、義務至上說が生育した土壤を自然に選んで先づ發達したことも、かくして、われらの研究に或る普價ある光明を投ずる可能を持つ關係でもあつたらしい。

不斷の努力、勵進、意志のための意志、方法のための方法、組織のための組織、冷嚴に、そして果てしもなく內外を制服し、克治して行く力、ツランセンデンタルな、音樂的な主觀的陶醉と客觀的痴呆、エナージズム、エッフィシエンシ、政治に於いて權力的專制に直接してゐる社會——神化され、藝術化された生產の新方法が、いよ／＼ます／＼さうされたかたちに於いて發達するための適地は、歷史が明示する通りのものであるほかなかつたと、今日からの廻顧的思索眼には確實に映ずるやうな氣がする。

目的化された方法が刺戟する現代生活の不安は、恐らくは現代生活の不安の最深層を形成する。野蠻であるよりも俗惡であること、極めて遠まはしの、廻はりくどい、持つて廻つた說明またはこじつけまたは詭辯を大げ袈裟に雇用して強ひて求められる滿足と愉悅と幸福、そこに生ずる皮肉主義、容き屋としての大殿堂及び大建築、生活の目的が直接的でなく、自明的でないこと、さもしさと、さびしさと、すさまじさ、つひに堪へ切れないで戰爭と革命を、戰爭と革命自身のために選び拜むこと、自暴自棄し盡くまで、暴棄する自己が無くなるまでも自暴自棄し極めること、およそこれらの現代的特質は、生產の新方法を使ふ聰明を現代人が維持しえず、また發達させえず、それに使はれる、もしくは臣事的、奉仕的、最惡形式の奴隷主義的につかへる不聰明を直接的及び間接的に多分に意味する。

最惡形式の奴隷とは、或る不自然なかたちに於いての幸福的、甘心的、滿足的、即ち無自覺的奴隷をいふ。

生活の目的が直接的でなく、自明的でないことが、生產の新方法と共に發達した愚の一形だと私はいふた。

[illegible]

[illegible]代の生產に[illegible]

[illegible]續してゆく目標」「[illegible]の上に[illegible]」といふ[illegible]のに、この[illegible]。しかしたから、農業時代の生產にあつては、それによつて代表される生活が、目的としての消費と、その生產者自身の個人格内に於いて、安靜な結合と組織と統一とを保有した。かれら農人は、夏時には「生產者」として、或ひはそれを作ふ生產に從事するが、秋冬の季に到れば、その結果としての種々を家庭の食膳に供することも出來た。

目的としての消費と、手段としての生產が、農業時代の生產者の場合にあつては、かれ自身の生活體系內に於いて決濟された。目的としての消費と、手段としての生產とが、社會的に、階級別を發達させた在りかたは、その時代にあつては、工業時代との比較に於いては、極小限に近かつた。

農業以外の形式に於ける經濟的生產について見ても、それが道具と手によつて方法づけられる性質のものであつたあひだ、そこには個性表現の悅びとしての藝術的消費も同時に多少ありえたが、生產される品物の性質が、比較的に、その儘消費されうる完成的及び全體的のものでもあり、生產者と消費者との間の距離が同一人に於ける異時的性質にすぎないものであつたり、それが別人間にわたつてゐても、比較的に徑路が近くもあれば知れてもゐた。それは、たとひ、純藝術的生產ほどには、生產が文字通りに同時に消費だといふ關係を持たず、また、それほどには作品が完成的及び全體的でないが、工業的生產にくらべては、仕事のどの部分は自分の成績であることも、これは誰れの作であるかといふことも、容易に、確實に私認され、且つ公認されうる性質と事情を持つてゐた。

人性に深く根ざしてゐる本能の一は、自分を知ること、及び自分が知られることだ。名譽心または榮譽心はこの第一

部分に代表されるその本能の或る現はれにほかならない。農作や、手工は、機械の組織的使用を方法とする生産と對比される時代及び種類のそれが注意される限り、人性に於けるこの深本能を否定する性質を遙かにすくなく持ち、それを肯定する性質を遙かに多く持つた。藝術的生産にはいふところの本能に於ける第一部分、即ち自分を知ることを必要とする本能がそれの一大要素たる位置を構成して發見される。

生産の新方法は機械の使用によつて代表される。機械は、それ自身としても、道具との比較に於いて遙かに複雑な、そして大規模な組織だが、機械の使用そのものは、機械自身があるよりも更らに遙かに複雑な、そして大規模な組織だ。機械の使用は組織的機械の一層組織的使用だ。例へば停車場、鐵道、汽車の各個態がすでに或る複雑な、そして大規模な組織だが、西南日本の製産物が東北日本の消費を目的として輸送される場合には、その製産地と消費地との間なる全路を繫ぐ交通機關が、すくなくとも或る限度に於いて、組織的に、或ひは一組織として、使用される必要がある。鑛物が採掘される瞬間から、精錬され、製作され、使用即ち消費される瞬間までには、實に複雑にして多種類の機械使用、それに伴ふ勞働または作業を內容とする多くの瞬間が必要的に經過される。私は去年、佐渡の金山を、地下及び地上の全作業にわたつて、順を追うて、係りの專門家の說明を聽きながら見せて貰ふ機會を偶然持つたが、そして、眇たる一島の更らにまた眇たる一山角に於ける機械使用、それに伴ふ勞働または作業が、準備知識なき一訪察者の眼に先づ映じた外觀の割合に、極めて複雑なる組織の一全體を構成してゐることに新たなる注意を拂はせられた。然るに、その一全體が、純粹にまだ生産過程中の一部分以上のものではなかつた。最後の工室へ案內されて、最後に示說された目的物は、土によごれた鉛塊のやうに觀えた一個の野球用の球のや丶大なるものに似たかたちのものであつた。それは普通に理解される、即ち消費者によつて直接に知覺される金とは似もつかぬ外觀のものであつた。しかし、佐渡では金の生

産されれ以上に[illegible]にまでにて、[illegible]ない。[illegible]に、これた[illegible]らの生命を[illegible]、[illegible]ど
ての[illegible]たなにかへこれを[illegible]れたのか、ふたといふ。会が一[illegible]とし
て使用され、消費されることが、その生産全過程の目的だと考へられる限りに於いては、作業の全体の目的に依存す
る比較的細分働者の生活の如きは、目的としての消費から實に遠い距離にある。且つ、その生産の全組織に於ける實に
小さい部分位にあるものだといはねばならぬ。

今は比較的に不重要な生産の一例にすぎないが、現代の生産のすべてを通じて同様の原則的關係がある。現代に於ける各の生産者の生活は、概しては、手段の手段であり、手段としての組織に於ける部分の部分であるといふ位置と關係と性質とを、即ち意味を持つてゐる。

手段生活、しかもそれに於ける部分生活が、生産の新方法の發達と共に發達した新現象だ。殆ど生涯的、每年的、每月的、每週的及び每日的、且つ每時的ともいひえられる程度に於いて、最近代人の生活は、手段生活、しかもそれに於ける部分生活によつて強制された結果、或る最も非本質的、反本質的な習性がかれらの個人的及び社會的生活全體の上に形成された。

例へば、國家は一とつの手段としての組織にほかならないことをそれの本質とするが、それを目的視する思想と實行も近代に於いては發達した。また例へば、社會も一とつの手段としての組織にほかならないことをそれの本質とするが、それを目的視する思想と實行が最近代に及んで發達し始めた。或ひは、經濟も一とつの手段としての組織にほかならないことを、それが發達するにしたがつていよ／＼それの本質とするが、それを目的視する、及び運命視する思想と實行も最近代に及んでは發達し始めた。國家崇拜の近代的各種形、例へばヘーゲル、ビスマークの名と共に普通に聯想

されるかたちのそれ、國家社會主義及びそれの一形としてのボルシェギズムが例示するかたちのそれ、社會禮拜の近代的各種形、即ち無暗に社會がるセンチメンタリズムの各種形、經濟組織に對する對第一原因的及び對最後價値的態度、これらはその事實だ。

信仰またはそれの社會的集團形としての宗教は、變化こそすれ消滅はしない必然がある。農業時代、科學未發達時代の宗教は、工業時代、科學發達時代に及んでは保存されない部分を漸大にするが、工業時代、科學發達時代には、また、それ自身の宗教が發生し、發達する。國家禮拜、社會禮拜、經濟禮拜の各には、科學的及び哲學的聰明が帶合されてゐるばかりでなしに、宗教的聰明及び不聰明が帶合されてゐる。その各が、それぞれに、國家使用でなく國家禮拜であり、社會使用でなく社會禮拜であり、經濟使用でなく經濟禮拜である限りに於いて、それは、おの〳〵、それだけの宗教的不聰明であることを殆ど代表的に意味する。

宗教的不聰明の一別名は迷信だ。それは偶像崇拜とも呼ばれる。英語でいふアイドラツリだ、或はアイドリズムだ。現代は、それの最も革命的な部分に於いては、徹底的に偶像破壞的だとしば〳〵考想される。この考想は、しかしながら、その部分の全部の眞理または事實ではない。

生産の新方法は、それの發達と共に一つの新らしい宗教の發達に機會を與へた。その宗教が、手段一般を、及び殊に手段としての組織を、或ひは組織的形式に於いての手段を、現代人または近代人が次第に目的化した結果である限りに於いて、それは現代に於ける最も巨大なる醜惡物の一だ。現代人または近代人は、それが、即ちその組織的形式に於いての手段が、手段として理解される場合に於いて、即ちそれが使用される限りに於いて、經驗いかにもいやちこにして且つあらたかなるに先づ眩魅され、そこに偶像の奇蹟力をさへも殆ど想信し、續いて、それの宏壯なる、雄大なる、も

しくになした[illegible]
り、これ自體[illegible]モメンタムを加へて[illegible]
からの一特質である[illegible]を、そのサブリミチに[illegible]によつて新たに[illegible]、[illegible]に、生産の新方法に於いて、先づ方法としての御利益を發見した。そしてこれはかれの理性の功績であつた。かれは、續いて、その方法の目的はかれ自身にあることを忘れて、それがその方法自身にあるかの如くに思ひ込むやうになつたまで、その方法に同化されて行つた。そしてこれはかれの不聰明の、或ひは聰明不足の祟りであつた。

生産の新方法は近代の一大宗教であるが故に、或ひは、近代の宗教の一大特質であるが故に、それは、いはゆる勞働階級といはゆる資本階級との兩者を一通してそれの賢愚の波を打つたことは、その判斷の内にすでに含蓄されてゐる。生産の新方法の酵母としての作用は、近代社會の全面と全深に醱酵したのだ。いはゆる勞働階級といはゆる資本階級との差は、たしかに搾取被搾取の對立關係を意味するものではあるが、兩者ともに、生産の新方法によつて革命的變化を發達させられた世界内の産物でもあり、現象でもある。

いはゆる勞働者の生活はいはゆる資本家の目的を目的とする生活だ。いはゆる勞働者は、即ち、いはゆる資本家の奴隷だ。生活の目的がその生活者自身に存せず、かれ以外のなにものにか存する場合に、かれは最も適當に奴隷と呼ばれうるが故にだ。然るに、いはゆる勞働者の勞働者としての生活の目的は、かれ自身には存せずしてかれの雇主または廣く資本家階級に存すると判斷される理由がある。

勞働者は機械使用の結果としての物質的價値即ち物質善または富の生産を目的とする。資本家に勞働者雇用の、即ち使用の結果としての富の消費を目的とする。勞働者は物質的價値を生産し、資本家にそれを消費する。勞働者は、資本

家が消費するための物質的價値を生産する。かれは他のなにものをも生産しない。かれはまた物質的價値をも、自己が生産する物質的價値をも消費しないが、すべての精神的價値をも消費しない。資本家は物質的價値をば生産はしないが消費だけはする。しかしかれは物質的價値以外の價値をば消費しない。かれはまた物質的價値以外の價値をば生産もしない。即ち、勞働者と資本家とは、精神的價値をば生産もせず、消費もしない點に於いて共通だ。勞働者と資本家との差は、物質的價値だけを、一は專ら他のために生産し、他は專ら自分のために消費するといふ唯一點に存する。

勞働者は、資本家によつて、勞働者自身が消費する可能なき物質的價値を、資本家自身が消費する意志のために、生産させられる弱者または奴隷であり、資本家は、勞働者をして、勞働者自身が消費する可能なき、そして資本家自身が消費する意志ある物質的價値を、資本家自身の意志にしたがつて、そして勞働者自身の意志に反してまでも、生産せしめる强者または英雄であるのだ。勞働者と資本家との差は、實に、これだけのものであるのだ。

されば勞働者の世界を見よ。それは或る量的多數及び集團にほかならないではないか。朝と晩に、雲霞の如くに工場から吞吐される勞働者の個々が、單なる同質異量でないといふ印象をたに人か容易に構成しえよう。單なる同質異量、これは近代勞働者の外觀であると同時に内質だ。

轉じて資本家の世界を見よ。かれらの個々が單なる同質異量だといふ印象は、ここにもすぐに、そして反省するにしたがつていよ〳〵明確に、成り立つ。勞働者の場合に於いては、瘠せた、飢ゑた、乾いた、不幸な、不滿足な、或ひは悲壯なかたちに於いての同質異量が通則であつたり、或る場合であつたりする。資本家の場合に於いては、肥えた、飽いた、油ぎつた、幸福な、滿足な、或ひは驕泰たかたちに於いての同質異量が通則であつたり、或る場合であつたりする。しかしながら、その兩者のいづれの場合に於いても、即ち瘠せてゐるのも肥えてゐるのも、飢ゑてゐるのも飽いて

わないし、[illegible]

點であるいは[illegible]ものも、要するにすべて、物質的[illegible]に就してのみのそれだ。

勞働者は貧だ、しかし精神財に於いて資本家よりも貧なわけではない。資本家は富んでゐる、しかしそれは[illegible]關する限りに於いてだ。勞働者は、精神財に於いてのみならず物質財に於いても貧しく、資本家は物質財に於いてだけは貧しくない、勞働者と資本家との貧富別もこれ以外のものではない。

資本家かたぎまたは資本家型と呼ばれうる性質が生産の新方法と共に發達した。現代の資本家階級を形成する人々は、その性質の分有者にほかならない。それは、即ち、たとひそれがいかなる大人口であらうとも、その一性質の共有者にほかならない。**人的個性別などはそこにはない。**かれらのすべては、即ち各は、顏を見ても、聲を聽いても、觀念をしらべても、感情をさぐつても、意志を知り確かめればなほさら、物質價深だ。かれらは、かれらの存在のどのメンションから近寄つて見ても、生産の新方法の産物だ。かれらは産業文化に於ける、もしくは産業に於ける、勝利的派生物そのものだ。産業がかれらから發生してゐるのではなく、かれらが産業から發生してゐる。かれらの深さは産業の深さより淺くとも深くはない。かれらは産業文化に於ける勝利的派生物だが、その勝利の原因は甚だしば〳〵かれら以外にある。かれらの條件としての勞働者は産業文化に於ける敗北的派生物だが、その敗北の原因は甚だしば〳〵かれら以外にあること、資本家の勝利因がその資本家自身以外の偶然力にあると率に於いて相匹敵すると見られる。その勝因が内在でなくして外在であり、その敗因がまた内在でなくして外在である限りに於いて、資本家と勞働者の間に利益と權力の内在力本位的分配改正が必然づけられてゐる。現代の資本家に多少の憂色が增し來たり、現代の勞働者に多少の喜色が增し來たりつつある原因も、富を失ふ憂ひと、貧を失ふ喜びとにほかならぬものとして記述される。

資本家は生産の新方法に於ける立法と行政を創作し、その方法の結果を消費する、その限りに於いてかれの生活は藝術的だ。勞働者は生産の新方法に於ける立法と行政を創作する悦びを機會づけられず、その方法の結果をも消費しない。その限りに於いてもかれの生活は非藝術的だ。生活の目的がその生活者自身に存せずして、かれ以外のなにものかに存することを奴隷の特質として私は認めたが、それは同時に非藝術的生活の特質だ。奴隷的生活と非藝術的生活とは同義であり、自由人的生活と藝術的生活とは同義だ。勞働者は資本家の奴隷であり、資本家は富の奴隷であるのだ。

生産の新方法は、それの本質的傾向に於いては、即ちそれが聰明に位置づけられたかたちに於いては、人をして物質及び物質的價値に對する奴隷状態からかれ自身を解放せしめるための、かれ自身によつて發明され、設定された代表的使用價値または職能以外のものではありえないが、それがかれによつてまもなく禮拜され始めたために、人類の新らたなるかたちに於いての物質化、物質價値化、手段價値化、及び初めてのかたちに於いての機械組織化が結果した。

生産の新方法が、同時に完全に或る藝術價だと考へうる人はありえないが、考へらるかの如くに想ふ人はありうる。工場の蜿蜒、烟突の林立、煤雲の滿天、機械の音、及びそれらが意味する勞働と作業、これが或る完全な藝術價だとは、なに人も、自己を極端に僞はらない限り、達しえない結論だ。

人の藝術本能に自由選擇を機會づければ、かれは生産の新方法そのもの丶如きをば決して選擇しなかつたにきまつてゐる。生産の新方法を藝術視することは、事前の衝動ではなくして事後の努力だ。しかもその努力は成功しない筈のものだ。功利意識にもとづいて始めた仕事を、あとになつてから、それが同時に、或ひは主として、藝術的價値ある仕事だなどと、蟲のいゝ考へかたをしやうとしても、或ひはさせやうとしても、客觀的事實と人の性能とは、つひにそれを許さない。

ほかに、ただその生の[illegible]にのみ[illegible]一致し、[illegible]工場や機械や技術や勞作に、市場に販賣されるためのものではなくして、生産に從事さるるためにでは[illegible]自身の、しかも最も聰明なる勞働者自身の[illegible]にたづねて見て、なほ且つかれの勞作が[illegible]之を作する時の如く、それを消費する時の如く、すきな遊戲に從事する時の如く愉快だといふ答へがえられたならば、その時こそ生産の新方法そのものに藝術價を認めることが出來るかも知れんが、それ以前にはさうすることは出來ない。

生産の新方法はそれの社會的職務を持つ。それは、すべての人を有閑者とすることだ。機械の組織的使用が發生せず、發達しなかつたならば、人類は生物人的自己保存を可能にするためにかれの時間と精力の全部を費やし用ひてなほ及ばないかも知れないところを、それあるが故にかれはかれの時間と精力に剩餘を生じ、本質的に藝術價ある活動と生活に從事することを可能にされる。

十九世紀に及んで人類の人口は劇增した。生産の新方法に負ふところが最も多い現象でこれはあつた。生産の新方法は、それほどにも富の大量生産を可能にしたのだ。しかるに、十九世紀に及んで、人類の漸增的大部分は、單なる生物人的自己保存を可能にするために終年的、終生的に、苦役し續けるといふ現象が始まつた。

純粹に愛知的な、愛美的な時間と精力と活動とは勞働階級、貧乏階級には許されなくなつた。それらのものは、手で機械を使ふ勞働者に對して事實上禁制されたのみならず、頭で勞働者を使ふ資本家に對しても同様にされた。かれらは、勞働者を使ふための立法活動、行政活動、その結果としての富の消費、これだけの仕事に、或ひはこれだけの生活に、かれらの時間と精力のすべてを獻げる。純眞なかたちに於いての愛知、愛美の活動は、生産の新方法と共に專らかれらに發達しさうな事柄のやうに、また發達した事柄のやうにも、或る眼には視えたかも知れんが、事實は或るいちじ

ろしい程度に於いて反對であつた。

各の個體と全體とをそれ自身の價値にしたがつて判斷し、各の活動と生活とをまたそれ自身の價値にしたがつて判斷する學及び術は、生産の新方法と共に發達した率に於いよりも、退却した率に於いていちじるしい。知も、美も、それの技術的、工藝的、功利的、政策的、商品的價値にしたがつて判斷される個人的及び社會的習性が生産の新方法と共に發達した。

この個人的及び社會的習性は、對量的興味を、對質的興味から抽象されたかたちに於いてのそれを、發達させた。かさばりが價値構成に於ける第一要件とされて來た。それの或る特徴にしたがつて判斷される現代アメリカ主義または現代アメリカ式は、その事質を指標し及び代表する一とつの場合だ。

生産の新方法と共に量の文明が始まつた、そして生産の新方法を一條件とすることによつて可能にされるかたちの、または規模の質の文明はまだ始まらない、かへつて、質の文明は一般に衰滅の速度を加へつつある。現代文化の全體が、産業的文化及び機械的文化といふ表現によつて適切に記述されるといふ事質は、現代文化の在りかたが文化の本質的傾向に逆行しきたはそれから脱線した變態だ、或ひは病態だと判斷される材料としての意味を持つ。

生産の新方法の本質的傾向は、人性の基礎的必要が關する限り、人性にむかつて閑暇と安全を供給するにある。生産の新方法は富を供給する。しかしこれは生産の新方法の究極目的ではない。なぜかといふに、富の消費は人性に取つての究極目的たる位置を持たないからだ。

人性は富の消費を必要とする。しかしそれは人性の基礎的必要としてだ。それは人性の完全的必要としてではない。富を消費することとなしでは、人性はそもく成り立たない。即ち富の消費を缺いては人はいやしくも生きることとすら出

[illegible]ては愛知も、愛美も、即ち學問も、藝術も、それから[illegible]徳も、現に文化の[illegible]

の如きはなほさら問[illegible]に、始まりやうすら出來ない、發達しやうはいふまでもなくない。

人生に於ける經濟の位置は、本質的には、要するに一とつの基礎たるにある。それが人生に於ける一とつの基礎業であるといふことは、人生には別に完成業が存することを意味する。

生產の新方法は、人をして、かれの基礎的一要件としての富の生產をば、かれ自身の時間と精力を使はずに可能ならしめることを、それの本質的傾向とする。即ちそれは、富をば機械の力によつて人に供給することによつて、人をして富以外の價値の生產と消費とにかれの時間と精力を多分に、代表的に多分に使はしめることをそれの本質的傾向とする。經濟生活に於ける安全と閑暇、これが生產の新方法の職務を本質的には構成する。單なる基礎的生活そのものが不安であつたり、單なる基礎的生活そのものゝ計に追ひまくられてゐては、人は深く考へたり、しんみりと味はつたり、念を入れて造つたりすることは想ひも寄らぬ不可能事だ。しかし、これでは人生の、或ひは人性の本質的傾向は到底滿足させられないが故に、それを可能事とするために、生產の新方法は人自身によつて發明されたと、純進化的見地からしては判斷される。

生產の新方法は、愛知、愛美の純眞的活動に、人をして集中せしめうる新可能として、人の聰明によつて、發明されたのだが、それの發達は、人の不聰明によつて、その新可能に於ける營養過多的肥滿症をいちじるしくした。そして、それは、人性及び人生に取つての完成業的活動に營養過少的及び不使用的萎縮症をいちじるしくした。生產の新方法そのものにはハイパーツロフィが現はれ、學問及び藝術の眞の活動にはアツロフィが現はれた。手段機能が全身の血液を寄せ集

め、その部分のみが不斷に使用されていよ〳〵厚大化し、目的部分は閑却され、荒廢され、貧血し、見るかげもない、あはれむべき一附屬物の位置と狀態をわづかに保存する、名ばかりのものにいよ〳〵ます〳〵なつて來た。一方に於いて、富を生產することそのことを目的として富を生產する習性と加速勢が發達したゝめに、他方に於いて、富を消費することそのことを目的として富を消費する習性と加速勢が發達した。勞働群も、資本國も、相競うて人性及び人生の航路に於ける一新舟としての生產の新方法を操縱しえずに、それの自動勢に載せ驅られて、舟を破り、航路を中絕する危險に近寄りつゝある。

生產の新方法を、一全體としてのそれを、それの內部組織または內的關係にしたがつてのみならず、それの外的關係にしたがつて反省する價値が現代に於いては大きく發達した。生產の新方法を、それを內的關係にしたがつて反省する努力はすでに始まつた。產業自治はそれの一形だ。國家社會主義もそれの一形だ。富が關する限り、それの生產と消費とを、勿論生產の最後階段としての分配をも、分析して、新らしい、發達した、一層社會的な、一層人性に忠實な、即ち一層正義的な、一層個性發揮または保護的なかたちの綜合をそれらの各及び組織的全體に與へる必要の存在は現代に於いていよ〳〵新鮮な、强烈な注意を加へて來た。

しかしながら、生產の新方法が、即ち產業そのものが、いかなる位置を人生または社會に於いて與へられる可能があるか、その可能のうちのいかなる可能が最も選擇を値ひするかといふかたちの反省は比較的に未發達だ。曾つてモリスはこの反省の一閃光を放つた。最近にラスセル氏は、かれの「產業文化の將來」（プロスペクツ・オヴ・インダストリアル・シヴィリゼーション）に於いて、いく條かの光明をその反省のかたちに於いて放つべく試みた。それはそれの必讀が希望される或る程度に於いて成功し、或る程度に於いて、その反省自身が更らに深い、全い、明かるい反省を要する獨斷的なものであると私には考斷される。

[illegible]つた。この一大事實に[illegible]。[illegible]一とつの最も大きな仕事であることに於いて疑ひを挾む餘地はない。[illegible]。それと同時に、人[illegible]に於けることは[illegible]の新方法そのもの〻全體的位置、したがつて全體的價値をいま一とたび問題として扱ふことを必要[illegible]に價値づけ[illegible]と事實と情勢とが充分に發達して見える。

生産の新方法は合吟を値ひするか、値ひしないか、値ひするといふならばその理由はなにか、また値ひしないといふならばその理由もなにか、そこまで考へつめることに、單たる學理的、認知的意義があるばかりでなしに、現代の實情からいふと、いく多のかたちに於いての大きな功利的、實際的價値がある。

そこの原則意識が充分に準備されたかたちに於いて、資格に於いて、現在の産業組織、經濟制度、生産の新方法を再見するならば、それの外的關係としての全位置が多少の變化を必要示する可能は確實に考へられるが、それの内的組織の變改も、一層完全にそれの目的と方法を知つたものとなるホープがある。

原則意識の比較的缺乏は、實に、生産の新方法そのもの〻偶像化によつて加速された。それはそれによつて、またそれと共に、いよ〳〵甚だしくされ、またなつた。

生産の新方法の手段としての爲善力及び爲惡力の顯著にして強大なこと、それの組織としての大きさと複雜さの途方途轍もないこと、生産の新方法に於けるこれらの性質は、淺弱なる原則意識を壓倒しつくし、それをして呆然自失せしめ、やがてそれの持ち主をして催眠行動の主體化された狀態と作用と現象を呈示せしめるに充分な力であつた。當から離れることは自己のいのちから離れること、自己の身體が自己の意識から離れることを、生産の新方法にすべての價値

勞働者に明確に、適切に知らせた。經濟の人生存在に對する決定力のみならず、それの人生價値に對する決定力までもが、この事情によつて想信された。組織的作用または行動が、それの爲善力及び爲惡力に於いて、いかにも超個人的に絕大であり、不可抗的であることを、生産の新方法によつていよ／＼痛烈に學び知つた結果として、國家の超個人的實在及び價値、社會のそれ、集團のそれ、或ひは一層無反省的に單なる民衆または大衆のそれ、等、々、々が、自明眞的に且つ唱へられ且つ信ぜられる。群衆心理が、一時、一部の人々によつて、個人心理から絕對に離れて、それ自身の存在を有するかの如くに說かれたり、想はれたりしたことなども、この大勢內の一とつの微小なる現象であつた。

國家、社會、制度、組織、民衆、大衆、これらの各種物が、各の個人の上に絕大勢力的に君臨して、原則意識稅を容赦なしに、假借も猶豫許與もなしに現代人から徵奪しつゝある光景が地上全景大になつてゐる。生産の新方法がこれを發生し且つ發達させる一大原因力、一大機會力であつたことは、恐らくは研討するにしたがつていよ／＼大きく肯定される。

原則意識に再生する餘地が、科學と技術を眞に科學と技術として持つため、眞にそれらとするためには、餘地として保存されることは出來ない。現代に於けるすべての保守的分子には、原則意識の缺乏は比較的に最もいちじるしい。固陋、頑冥、不楽、これらのことばが文字通りにかれらに妥當する場合が多い。しかしながら、現代に於ける進歩的及び革命的分子にも、原則意識は、意外に甚だしく準備されてゐない證據と兆象が、後世の判斷力ある文明史家によつては、時代的一特質として明記される程度に恐らくは達してゐるだらうと想像する。それが時代的一特質であるわけ、即ち原因及び事情は、しかるに、勿論、それが、生産の新方法に最も深い、廣い關係を有する性質のものだといふ點にある。

[illegible]代になりに[illegible]それ[illegible]

助長された限り、國家組織が存續する限り、既に移つた[illegible]存在とはならない。それは、或る[illegible]、

國家が關係した範圍内に於ける或る進步にすぎないかも知れんといふ判[illegible]のかたち[illegible]時代に、現代[illegible]、まづ、

國家を經驗して社會を助成したといふ事實があるとしても、現在までの成績が示す限り、それは、何[illegible]の内外關係に、或ひは目的手段關係的錯位が改變されたことをば意味しない。それはその錯位が保存されてゐる限度内に於いての或る改進だ。一人專制が少數專制に、それが多數、民衆、大衆、全數專制即はち完全共和に移り變はつても、それは現在のアメリカが多少有力に例示する如く、經濟そのものが全體的にそれの固有質として意味する外在價に對する内在價本位の社會組織がその割りに發達したことをば必ずしも意味しない。とても歷史の研究の手の屆かない昔の昔に生きて倘らいたと想定される創造神や、とても望遠鏡や天文學では模索することすら出來ない上の方に在つて人生を司宰すると想定される上帝または主宰神や、到底知覺することの出來ない性質のものとしての超經驗神やに對する絕對的忠愛を說教した歷史的宗教との比較に於いては、經濟決定說は遙かに有責任だが、それも、一つの宗教的信條とまでに高く、全體價的に位置づけられたかたちに於いては、人しかも現在の各人を目的とする神が、久しく宇宙のそとあたりにまごついて、かれを探がし當てなかつた狀態からはいちじるしく進化して、かれの身體をつかむまでにはなつたが、更らに内進して、かれの精神生活そのものを直接に分析し且つ綜合する眞神の唯一の狀態にまではなつてゐない現代的原始教だ。

國家は、それの外延に於いて、全社會大に完全に進化することをそれの本質的傾向とするものだが、もしもそれを認容しないかたちの國家があるとするならば、そのかたちの國家は社會進化の或る期間だけに於ける一現象にすぎない。そしてそのかたちの國家は、或る民族を絕對目的とする政治組織にほかならない。

しかしそのやうな國家が、社會進化の一過程として、當然廢存に移されるためにも、國家組織そのものにはなんらの、したがつて國家權力そのものにもなんらの、究極目的價は存しないことを、その國民自身が、それがかれらの有力なる一輿論となるまでに、知り拔くことを一先要件とする。

國家といふ組織は、すくなくともその國民の各員の個々の人格または個性內の一內容として、またその個々の人格または個性に取つての一手段として承認されるほかに、承認されやうはないといふ本質的自明理が、生產の新方法に感化された現代人には現象的不明理となつてゐる。國家を、その國民の各個人員が、自分の生活の一部內容、自分の生活に取つての一方法として見ることを學ばないあひだ、國家に對する批判は、したがつて進化的意義ある改造は、その國民自身からしては、決して始まらない。

社會と經濟とは、組織としても手段としても、國家の如くに暫現的なものではなく、永久的なものだが、しかしながら兩者ともに、當事者としてそれに關係する個々人の生活內の或る價値及び存在にほかならず、またその個々人の生活に取つての或る方法にほかならないことは、生產の新方法としての機械が、組織であると同時に方法であるが、それが或る方法であるといふ位置は、絕對的だと考へられることが本質的妥當な考へられかたであると同樣に、絕對的だと考へられることが本質的妥當な考へられかただ。社會も經濟も機械同樣に、それぞれに、或る手段としての組織以上のものではない。目的は、當事者としてそれに關係する個々人、卽ち概念的にいふならば個人に、完全なる一貫を保つかたちに於いて、恒に存し、專らそこにのみ存し、それの唯一の在りかた及び在りどころとして存する。

社會が個人の手段だと聞かば、一とつの社會に於ける各一人以外のすべての人は、その一人の手段として見られるのか、それは人格の、しかも多數人格の、或る一人によつての手段化を意味する暴言だと憤激する人があるかも知れんが、

一人の目的は或時期までは[illegible]に於いては、[illegible]いこの人格價値感誠でさへもが、そしてこれら他の人に對する場合のまでで[illegible]形に於いては、一人の生活もしくは意識に於ける或る經驗にほかならない。すべての經驗は、これが一人の[illegible]り、かれの本質的、綜合的目的によつて統一されることを、この經驗の意味が完成されるための必要條件とする。複數の絶對目的を、複數の絶對目的として經驗しながら、一人が文字通りに眞實に一人であることは不可能だ。人には、自己の統一を條件として持つべきものは無限に豐多だが、そして國家も、社會そのものも、その或る可能だが、自己の統一を犧牲として、交換物として、代價として、持つことを値ひするものは一とつもない。そして國家も、社會そのものさへも、その一とつたりえない。社會が個人の或る手段だといふ判斷は、生産の新方法の發達と共に、更らに新たに堅らされたる原始的自明理を、人がかれの正直な知力によつて再認したかたちにほかならない。

個人は社會の手段だといふまちがつた考へかたも、戰爭、革命、産業等を原因づけたり、機會づけたりする力には甚だしく缺けないことが出來る。しかしその考へかたは、眞の藝術、眞の學問を生育する資格には殆ど、いな精確に絶望的に缺けてゐる。すべての藝術とすべての學說とを、それを準備し且つ觸發した社會的または環境的勢力にしたがつてでなく、またそれが當代及びその後の社會にいかなる影響と結果を生じたかにしたがつてでなく、それの創作及び發明の純粹經驗にしたがつて評價することは、それを最も正しく評價するための第一主要條件だが、これも、個人を社會の一部または手段と究極的に見る立ち場からしては達せられない目的だ。

戰爭、革命、産業、これらはすべて、一茶は好んでかれの發句をよみ、餘人は自由にかれの作を評價し、ラスセルは自由にかれの思案を發表し、餘人は氣儘にかれの文字を讀むことが出來るやうになることを、それを多少の程度に於い

て充分化することを、目的として始めて聰明な從事目的物たりうる。その目的から抽象された、或ひはその目的なしの戰爭、革命、産業は、ひとへに量的な、ひとへに力的な、むしろひとへに物的な活動及び功業だ。地球の自轉、天文學的宇宙の組織が、單なる力的、量的、及び機械組織的興味を滿足させるには殆ど充分だと考へられる。人の營みは、能ふ限り質的優秀を目的とするものであらねばならん。すべての量的、機械的文化は、その質的優秀を直接に代表する種類の文化に對して手段位に立つ條件として位置づけられべき本質のものだ。

社會の目的は、それのいかなる組織のかたちに於いても、それのいかなる組合または結社のかたちに於いても、それの成員としての各一人にある。同樣に經濟の目的は、たとひそれの生産の方法がどんなに複雜に、大規模に組織されやうとも、經濟的生産自身には決して存せずして經濟的消費に存し、またその經濟的消費自身にも結論的には存せずして一層直接に、純粹に精神的な生産及び消費を手段づけ、機會づけるにある。社會の目的はその社會を組成する各一人に存し、社會に於ける經濟の目的はその各一人の精神的自由に存する。

活動寫眞が芝居の不完全な、しかしながら有用な代用として意識されるあひだは聰明だ。汽車旅行が、遠隔の山村水廓に漫歩することを目的として營まれるあひだは聰明だ。蓄音器が音樂の供給力と需要力との間なる空隙を充たす、無に優る或るものとして愛重されるあひだは聰明だ。活動寫眞が即ち芝居であり、汽車旅行が即ち旅行であり、蓄音機が即ち音樂であると、代表的、唯一的、選擇的に想信されるならば不聰明だ。

十八世記の一聰明者は小國家を主張した。古代ギリシヤの一聰明人も同樣の主張をなした。社會が人を手段とせば、組織は或る程度までひとへに發達するだらう、しかし人は反比的に衰凋する。

生産の新方法の發生と發達は、これらの先覺者の警告に靜聽する餘裕を最近代人に拒んだ。

[illegible]

それも直接に生活の目的を[illegible]、要するに、現代をして、いよ／＼ますます このやうに非直接的、非自明的ならしめ[illegible]

たる運命か[illegible]させしめつゝある。

生活の目的が直接的でなく、自明的でないことが現代の一特質だと私は一度のみならず注意した。然もこのもの、遊戯そのもの、自己を僞はらぬかたちに於いての、したがつて會心の藝術的創作及び鑑賞、およそこれらによつて、目的が直接的であり、自明的である生活の可能と方向は知られる。手段の發達と、手段としての組織の發達は、然るに、目的としての生活と、手段としての生活とを、社會階級的に、別々に發達させる一大新勢力となつたのみならず、その目的としての生活に專從するかの如くに觀える階級自身をすら、實は、手段としての生活内に於ける目的階級にすぎないものとするにあづかつて一大新勢力であつたことは、すでに注意された通りだ。

生活の目的が出來るだけ直接的であり、且つ、またはしたがつて自明的であることは各人に取つての本質的必要事だ。ここに於いてか、勞働運動は、つひに成功する必然がある。どうしてかといふに、現代に於いては、いはゆる勞働階級者が、その階級に屬する個々人が、生活の目的を最も非直接的に、最も非自明的なものにして持つてゐる。然るに、その勞働階級には、その狀態を救ふために必要な力が、生産の新方法そのものによつて與へられた。かれらは、組織的行動の習性と便宜とを、それによつて發達させられて、且ついよ／＼發達させられつつ、持つてゐる。

生産の方法が社會の全骨格を一全體としてそれの條件化して來た現代に於いて、原始的形式に於いての私有制が維持される可能は、次第に制限されて見透かされる。産業發達國に於けるいはゆる財界、企業界の巨頭なるものの位置は、生産の新方法そのものに固有の組織的勢力の增大と、その從業員の人格的自覺の發達との合成力によつて、次第に失は

れて行く本質的傾向がある。

產業は、文化全から取り離して考へられたそれ自身だけとしては、比較的に非人格的な事實であるが故に、それ[illegible]する限り、それの所有關係と經營關係とは、次第に非人格化されて行く必然が、產業が發達してやまないあひだ[illegible]る。道路、鐵道、水道、ガス、電燈、下水等が、それ自身としては、人に取つての或る手段ではあるが、目的では[illegible]が故に、それらのものは、次第に公有と公營に移る必然を持つた。且つなほ持つ如くに、產業中の比較的に機械的な部分は、即ち比較的に非藝術的な部分は、それの生產方法に於て、機械組織を多數人が組織的に使用するといふ性質によつて最も公營に代表されるものであるが故に、私有及び私營的關係を次第に失ひ、公有及び公營的關係を次第に增して行く必然が考へられる。

私有及び私營性が最も安全に保存されたあひだは、各人もしくは各家族が、經濟的に絕對自給に近い狀態を維持したあひだであつた。

有力にして大規模なストライクが可能にされた時代に及んで、いはゆる雇主またはかれが代表する側によつての、その產業の私有及び私營が如何に不安全なものであるかは多く考へて見ないでわかる。

道路を公有及び公營にすることは、往來訪すべき友人を同樣にすることをば目的とする必要がなく、目的としない必要がある。電燈を公有及び公營にすることは、なにを讀むべきか、即ち讀むべきもの、なにを書くべきか、即ち書くべきものを公有及び公營にすることをば目的とする必要がなく、目的としない必要がある。精神生活に於ける選擇と自由を各人にむかつて出來るだけ充分に、完全に供給することが、產業の第一目的でなくてはならん。これは、產業が個人的または家族的自給であつた當時に、それが、不完全ながらに、その個人または家族の一層精神的な生活に對する手

展と現代を與へることを忽略した為りに、[illegible]時代において

は、あたり前の進みかた、または成り行きだと考へられる。

産業の代表的大部分が、私有及び私營の形のみでなく、資本も膨大な程度に保有されてゐる現状は、権力と習慣と無知識とによつて維持されてゐるものにほかならない。

本質的に最も各人各別である性質に充分の保護を供給するために、本質的に多人通有の必要をば機械的、組織的方法によつて滿たすことが、生産の新方法の最もまたは唯一の聰明な在りかただ。

經濟的生活、しかも比較的に非藝術的即ち非個性的性質のそれは公有と公營に移り行き、戀愛、教育、學問、藝術、宗教等が代表しうる部分の生活は、私有と私營に進み行くことが、賢明なる政治に取つての、即ち賢明なる社會經營にとつての一大目標でなくてはならん。

生産の新方法の發達と共に、經濟決定説が、或ひは經濟決定説的思想が發達したけれども、生産の新方法が、たとひそれがどんなに發達しやうとも、要するにそれ自身は讀んで字の如くに一とつの方法であることは、繰り返しわれらの注意を値ひする。

土地こそ、それが含む原料こそ、いまだすこしも開發されない純自然的狀態に於いてこそ、文化ではないが、それが注意され、選擇され、それの位置と性質とにすこしでも科學と技術の力が加へられる瞬間に於いて、それはすでに人の創作としての意味をそれだけ獲得する。科學が認識のかたちに於ける人の創作であり、技術がその科學的認識の目的物としての物體、物質、空間の或る可能の實現のかたちに於ける人の創作であることは自明的に確實だ。機械の製作も、製作された機械の使用も、自然現象ではなく、それを或る條件とする心理現象だ。生産の新方法は、それの究極の意義

に於いては、或る心的活動以外のものではない。心的法則が物的法則を支配し、決定する或るかたちが生産の新方法だ。

この根柢的、原始的事實、關係、及び性質に對する知識が原則化されさへしてゐれば、即ちそれが本能化され、必要に應じてそれが意識化される健康を保つてさへゐれば、經濟決定說が一とつの綜合的認識即ち哲學としての位置を與へられる可能はない。最後の結論は最初の意味以外のものではありえないといふ考察の妥當は、この場合に於いても明確だ。

富は自由のすべてではないが、自由の或るもの以外のものでもない。經濟的自由は、それ自身、自由の或るものだが、一層精神的な自由にむかつて手段的に奉仕するかたちに於いて、それの自由は代表される。飢寒は或る自由だ。その限りに於いて、衣食のかたちに於ける富は、それ自身、自由の或るものだ。勿論、富は經濟的自由の一別名だ。しかしながら、飢寒の狀態にあつては、人は、たとへばその人がどんなに藝術的一天才者であつても、美を創造することも出來ず、またたとへばその人が藝術的一凡才者であつても、その天才の成績にしたがうてその美を模倣的に創造すること、即ち鑑賞することも出來ない。同樣に、いかなる學問的天才者も、飢寒に苦しめられてゐては、眞を創造することは出來ない。凡才者も、飢寒に苦しめられてゐては、創造された眞を追隨的に創造すること、即ち研究者として消費することは出來ない。現に飢寒に苦しめられてゐるあひだ、人は、即ち、美や眞を創造者として消費することも、模倣者として、ドイツ語にいはゆるミットエルレーベンする人として、消費することも出來ない。また、次ぎの瞬間に豫期される飢寒を豫防するために、現に衣食の計に從事する場合に於いても、それが全日的、全週的、全月、全年、全生涯的であるならば、人は、美や眞の創造を、天才者としても、凡才者としても、享樂することは出來ない。時間と精力がそれを許さない。經濟的自由は、かくして、一層精神的な自由にむかつて手段的に奉仕するか

たちに於いての自由なく、其なく終る。

物質財の消費が、それ自身、直接に意味する自由と、生產者の生存及び消費を可能にするために必要な社會的條件として、間接に意味する自由との兩者が、現代の經濟組織にあつては、社會人としての各人の本質價とかれの社會價とを完全に標準または條件とせずに、多少迂遠な、しかしながら或る人爲的價値としての外在力または偶然力に依據してかれらの間に分配される。この事實の恐らくは最も代表的な現象は或るかたちの土地私有と或るかたちの財產世襲にある。

土地私有は、土地を貸せたり、賣つたり、抵當または信用にしたりすることから生ずるかたちの利益をも意味するが、それが含む自然資源即ち原料のかたちに於いての利益の獨占を一層有力に意味する。かくの如き廣義に於いての土地私有と財產世襲との或るかたちが、現代をして、經濟的自由の社會的分配を、いかに社會人としての各人の本質的對自己價とかれの本質的對他人價即ち對社會價とに準據せしめない性質のものであるかは、また、それらの制度そのものが、經濟的自由の社會的分配として、いかにそれに準據させられてゐない性質のものであるかは、多く考へて見なくても明白だ。

各人の本質價は各人の生存が各人自身に取つて有する價値だ。各人の社會價は各人の生存がその社會に於ける殘部に取つて有する價値だ。前者は廣義の生存慾または自己保存慾及び消費慾によつて代表され、後者は廣義の勤勞及び生產によつて代表される。土地私有と財產世襲との或るかたちは、生產の方法が多くの人の組織的協力を通則的に必要とする現代に及んでは、大多數者としての勤勞者、生產者、即ち社會價ある人々は、或る少數者の私人的目的及び私人的權力の材料及び手段たる位置を保つことによつて、心理的に奴隷的不自由を意識させられ、また有害に習性づけられる、という關係を新たに助長するのみならず、經濟的自由の一層物質的形式に於ける分配をも、社會に於ける無社會價的小部

分に集中し、社會に於ける有社會價的大部分に省除するといふ關係を新たに助長する。その兩制度の或るかたちは、現代に於ける經濟的自由の社會的分配をして、各人の本質的私價及び本質的公價を目的とせず、或る人々の偶然的私價のみを目的とするものたらしめてゐる或る大勢力であると同時に、現代に於ける經濟的自由の社會的分配が、或る大いなる程度に於いてその通りのものであることの最も代表的な證據だ。聰明なかたちに於いての個人主義、したがつて聰明なかたちに於いての社會主義が未發達であるが故に、そのやうな制度が現になほ保存されてゐるのだといふ關係が、この問題の場合に於いては、しかしながら、勿論最根本的だ。

生産の新方法の發達と共に、單なる物的關係としては、またその意味に於いての技術的側面に於いては、即ち經濟的自由の總量は著增したにかかはらず、經濟的自由に關する社會組織的方面に於いて、殆どいささかの進化的革命も行はれず、かへつて生産の舊方法時代の制度と慣習の火熱が新油の新供給を受けて再び、そして未曾有式に大きく勢焔を張り擴げたために、現代は、經濟的自由の獲得によつて一層精神的な自由にむかつて解放されたかたちをば示さず、その反對に、經濟的不自由の壓迫によつて一層精神的な自由への興味や努力をば忘却させられてゐるかたちを示す。大多數者に於ける經濟的不自由の意識、經濟的自由を必要とする意識、少數者に於ける經濟的自由死守の意識、經濟的自由滅却及び喪失の悲哀、恐怖、嫉怒の意識、及びなほその他の百千萬種形に於いて、經濟意識が現代の頭腦と心胸と手脚を獨占してゐる。

この事情が續くあひだ、そしてこの事情は比較的直接に生活と行動の實質に關係したものであるが故に、そのあひだは、經濟決定說的思想が衰滅も、斷絕もしない可能がある。足の裏に大きなとげがくすがつてゐるあひだ、その足の持ち主たる人としては、たとひかれがいかなる高遠なる目的の持ち主であらうとも、主としてその足を意識しないことは

出來ない。

人生及び社會に於ける經濟の位置は個人に於ける脚、足のそれだ。それは一切の文化に對する基底的要件だ。脚足が弱くもなく、傷つけられてもゐず、疲れてもゐない限り、人は、用事で歩行する際にも、理想を追求する際にも、目さきと景色とに意識を占領されて、別に脚、足の事などは考へない。

生産の新方法が、それの技術的側面に於いて、新機械の發明をます／＼顯著にして行くことは、無限に許容される。結局、機械が勞働に取つて代はる人間的、人格的必要がある。そして、その可能は決して絶對的に制限されてはゐない。

しかしながら、その根柢的、不斷的努力のほかに、生産の新方法を、それの社會組織的、制度的及び慣習的側面に於いて、各人の本質的個人價とかれの本質的社會價とを支配則として、決定する努力が一層深い、そして急な必要だ。この努力が充分に拂はれるならば、經濟意識は、經濟がそれの最も直接な人間的關係即ち道德的關係に於いて無病にされたただがめの結果として、現代に於けるそれの痛烈さを失ふにきまつてゐる。それの系的、派生的一現象は、經濟決定說の自然的退却だらう。

最廣義に於いての土地私有制に於ける或る性質と、最廣義に於いての財產世襲制に於ける或る性質とが、生産の新方法の發達と共に廢棄されべき、もし完全に必然的でないとしても充分に必要的な、位置にあることは、極めて深い注意を値ひする。それは、最近代に及んで、團結の新方法として發達した國民主義そのものが、また實にそれの根本的特質の或るものを、最廣義に於ける土地私有、及び最廣義に於ける財產世襲の兩制度の全部的性質のただ出來るだけ大化されたものとして所有するものだといふ事實によつて更に多く基礎づけられる關係だ。

最廣義に於ける土地私有、及び最廣義に於ける財産世襲の兩制度が、いかに現代國民主義の或る根本的特質でもあるかは、一九一七年晩秋以來のロシヤが、帝政時代のロシヤの全領土を決して國際的または人類社會的に開放しやうとはせず、かへつてそれを神聖權的に保存し來たつたといふ一事實によつても例證される。同じソヴエット、ロシヤは、一九二一年末に列强にむかつて、かれらが華府會議に於いて東支鐵道を附議することに抗議したといふ。そしてその抗議の聲明理由は、東支鐵道は支那とロシヤに專ら關する問題だから、ロシヤは、東支鐵道に關して、ロシヤの勞働群の權利を列强に對して防衛し、主張する自由と必要があるといふにあつたさうな。同年十二月二十二日の英國の勞働紙『デーリ、ヘラルド』にこの意味の記事があつたさうな。東支鐵道は、帝政時代または帝國主義時代及び資本主義時代のロシヤが資本を投じ、支那の苦力が勞働を賣いで出來た財産だ。それはまた或る意味に於いてはさうして出來た土地でもある。一九二一年末のロシヤ政府は、帝國主義的及び資本主義的原則を、すくなくとも土地私有と財産世襲とが關する限り、原則的に全廢してはゐなかつたのだ。

一九一七年晩秋以來のロシヤさへもが土地私有、及び財産世襲の兩制度の原則的否定者でないことは、いはゆる列强によつて代表される部類の國民主義がいかにその兩制度の良心的肯定者であるかを間接に、しかしながら最も有力に證示する。

四　團結の新方法と共に發達した實感

團結は人性に固有の――勿論特有のではない――一傾向だ。團結本能は鬪爭本能よりも深いか、淺いか、即ちその兩本能のうちのどちらが一層、人性に於ける支配力的、決定力的位置を有するかは、ここでは問題とせずに置く。

國民主義が一種の團結形式であることは、一つの自明的な事實だ。その國民主義が十九世紀に入つて一般的發達を遂げたといふ事實は、しかしながら、それの原因に於いて決して自明的ではない。それは、たとへば、十九世紀の一新現象だといふ判斷に於いては、殆どすべての歴史家が一致してゐる。しかし、それの、即ち國民主義の原因に關する理論比較的意義に於いての——はなんであつたかは、歴史家によつて一致的に明記されるほど確認された事實、さらに解決された問題とはまだなつてゐない。

生産の新方法が國民主義の發達に對して、一大助勢力であつたことは、それの本質内では決してなかつたこととの複雜なる關係に於いて、先づ注意される。

生産の新方法は人に組織、しかも手段としての組織の或る新可能を示教した。その示教は明示的及び暗示的團結形式に於いてなされた。國民主義は、生産の新方法によつて、或る程度までは明示され、或る程度までは暗示された手段としての組織の一新可能の實現たる意味を部分的に持つ。

國民主義を、それの根本的一特質としての、最資産に於いての土地の私有、及び最資産に於いての財産の世襲といふ性質にしたがつて觀察すれば、國民主義と資本主義とは、同一原則の二適用にほかならないといふ判斷が成り立つ。

國民主義の根本的一特質が土地私有に存することは、世界地圖を展べて見て、國境が明示されてあることによつても證據立てられる。それは關稅の存在によつても證據立てられるが、自由貿易の殆ど名ばかりの存在によつてさへも、それが單に貿易といはれずに、特に自由といふ文字を冠なつてゐることによつても證據立てられる。それが國防の方法と性質と目的とによつても證據立てられることはなほ更ら自明的だ。

近代殊に最近代に發達した團結の新方法の一としての國民主義が、それ自身の性質と組織と關係との範圍内に、兩國

的要素としての本質的傾向と、不聰明的要素としての偶然的勢力とを多種に、そして大量に持つてゐることは、生產の新方法に於ける場合と比して、一層急切——根本的に一層重要だとはいはないが——の注意を必要とする程度、時期、狀態に達してゐると判斷される位置に、現在、ある。

國民主義のためには一九一四年から一九一八年へかけての戰爭が意味した破壞もなされた。そして事實上、その國民主義のための戰爭のためには、生產の新方法即ち產業の發達した各國、例へば英、米、獨の如きは、國內的に階級鬪爭の中絕を見た。英、獨、米の如きに於いて、國內的に勞働階級の從軍拒絕、または軍器彈藥製造罷業が、その階級自身によつて意志されたならば實行される可能はあつたが、そしてそれが實行されたならば戰爭は中絕または即時的不可能にされる必然的確實があつたが、それはそれによつて意志されなかつたが故に實行されなかつた。事實上、國民主義的對外衝動としての敵愾的愛國心が勞働階級をも例外とせずに內襲した。それが自發的にそれを强制した。即ち戰爭はそれによつてさへも意志された。國民主義のための戰爭のためには、すくなくとも一度は露、佛、英、伊、日、米等及び等が關する限りの、そして大體に於いてたしかにその稱呼を値ひする程度の國內的及び國際的團結行動も成り立ち、獨、墺、武、土等が關する限りのそれも成り立つたが、社會主義のための革命のためには、それの脚もとにすら及ぶ國際的團結行動がただの一度も成り立つたことがない。レーニンの世界橫斷的階級革命の意圖の今日までの歷史を見よ。

國民主義と社會主義との比較は、現代に於いては、善かれ惡しかれ、手と掌との或る比較を妥當に聯想させる。

一 國民主義と社會主義とは、前者がそれの生物學的本能にしたがつて觀察され、後者がそれの社會學的意見にしたがつて觀察される限りに於ては、前者の方が原始的であり、後者の方が文化的だといはれうる。生物學的本能は必ずしも社會學的意見を假定しないが、社會學的意見は必ず生物學的本能を假定するからだ しかしながら、經濟機能に故障があ

ろうれた。[illegible]それに集中する[illegible]

ひだ。人間に[illegible]がまづこれに集中する必要[illegible]であらう。

國民主義の善は、それが現代個人性の綜合目的に對する一手段としての團結たる意義を[illegible]に持つ場合に限られる。

國民主義の惡は、それが現代個人性の綜合目的に對する一手段としての團結たる意義を持たないすべての場合だ。

現代が眞實に最も必要とする、そして現實に最も缺乏してゐるものは、その表現の意味と共に必ずしも一種のみではないが、現代個人性に對する分析的及び綜合的認識はすくなくともその多種のうちの一種だ。現存の國民主義に本質的傾向と偶然的勢力とが識別される可能は確實だが、その偶然的勢力は、現代個人性に對する分析的知識に於ける或る缺乏、及び、且つしたがつて、それに對する綜合的知識に於ける或る缺乏をそれの原因とし、また自體とする。

現代個人性を分析すれば、そこに或る民族性が發見される。即ち特殊の言語、血液、風俗習慣及び傳統、歴史、地理等の諸要素が、或ひは多少單獨的に、或ひは多少合同的に、その分析の結果として現はれる。しかしながら、現代個人性の分析は、特徴に於いてそれらの民族性的諸要素とは多少異なる、すくなくともその意味に於いてそれらの民族的諸要素以外の、ものの發見をも結果する。それはなにか。それは數學、科學、哲學、藝術、道德、宗教、及びなほその他の特徴に於いて存在する種々の、或ひは無限的に種々のものだ。

國民主義が現代個人性に取つての統導原則でありうるためには、それは現代個人性のすべての要素を最も完全に綜合する力であらねばならん。しかるに、國民主義は言語、血液、風俗習慣及び傳統、歴史、地理等が代表する部分の現代個人性的要素をば、比較的に代表的有能者または適能者として綜合しうる位置にあるが、數學、科學、哲學、藝術、道德、宗教等が最も直接に代表する部分のそれらをば、さうしえない位置に本質的にある。

勿論民族性的諸要素と數學、科學、哲學、藝術、道德、宗教等との間には二元的、隔在的關係はない。兩者間の差は同一實在の特徵間の差にすぎない。例へば民族性的一要素として注意される言語は藝術の一形式としての詩と、關係といふことばの最も實質ある使用方にしたがつても、無關係ではない。實に、詩は言語の本質的一目的だといふことが出來る關係がそこにはあるのだ。數學についてさへも同樣のことがいへる。例へば和算は珠算であり、洋算は筆算だが、珠と筆とは方法、條件、偶然であつて、目的、內容、本質は算にある。この場合に、しかるに、珠と筆は勿論民族性殊に風俗習慣に屬し、算が數學を代表する。

哲學、道德、宗教等も、それらのいづれにしても、それの本質的部分になればなるほど、したがつてそれの高級的、進化的、發達的、または原則的部分になればなるほど、人性に通有であるといふ特徵においては、極大限的傾向を帶んで、増し、民族性に特有であるといふ特徵に於いては、極小限的傾向を帶んで、減ずる。

民族性の構成要素としての言語、血液、風俗習慣及び傳統、歷史、地理等は、數學、科學、哲學、藝術、道德、宗教、戀愛、經濟等に對して、一般的に、或る基礎的、材料的、方法的要件たる位置を有し、數學、科學等、等は、言語、血液等に對して、一般的に、目的としての位置を有する。

國民主義は民族性に對する自覺及び信仰をそれの精神的內容とする。そして或るかたちの社會組織、普通にいはゆる國民主義的國家または單に國家をそれの形式的または制度的表現とする。

個人性に於ける諸要素間の關係に於いて、本質的に目的位を占むる要素が、本質的に方法位を占むる要素によつて支配されることは、すくなくとも理想主義の見地から見て、錯位だ。それは、自然主義の立ち場から考察しても、或る不自由を意味する不自然だ。それは、それの根本的關係に於いて、反自然的だ、或ひは・自己の不統一による自己否定だ。

それは、即ち、一とつの共同的自然意識だ。

國民主義は、自己の民族性に對する一民族の自覺及び信仰をそれの精神的內容とし、或るかたちの統一意識をそれの形式的表現とすると私はいふたが、その社會組織は、團結の或るかたちだ。これは、いひかへれば、國家または結社の或るかたちだ。

一とつの個人性の世界內に於いて、本質的に或る手段位を占むる民族性的諸要素は、それがどんなに組織され、統一された一全體を形成しえても、その世界內に於いて、本質的に目的位を占むる一層發達した、また一層純粹な文化的諸要素の目的とは、聰明を條件とする限り、決してなりえないが故に、社會組織としても、民族性を唯一的、主要的、代表的內容とする團結または結社は、一層純粹な文化性を直接內容とし、直接目的とする團結または結社に對して、或る服從關係をば聰明によつて命令されるが、いかなる統率關係をもそれによつては許されない。

國民主義のための團結が、學問的、藝術的、道德的、宗教的、經濟的目的を直接にそれの目的とする種々の團結に對して、本質的に必要づけられてさうしてゐるかの如くに、權力者の位置を構成してゐる現代の通則的狀態は、社會進化の實力としての社會的聰明が增すにしたがつて、それらの種々の團結が國民主義のための團結と對等的に協力する狀態に先づ變化し、續いて、それらの種々の團結が國民主義のための團結に對して完全なる目的位を形成する狀態に變化する必然がある。

國際聯盟が示す如き性質の努力は、右の如き狀態の變化を原因づけ、機會づける資格に於いて、或る特殊の位置をば占めるが、最も根本的な、實質的な、有能力な團結行動ではない。

國際聯盟自身が、一つの團結形式だ。それは、その特殊の團結形式を方法として、國民主義のための團結を合理化す

ることをすくなくともそれの公示的目的とする。しかしながら、絶對に無害にして、そして國際聯盟よりも遙かに有益な方法は、現存の國民主義的團結を合理化する方法としてのそれは、同じく團結的形式に於いてではあるが、國家としてのそれでもなく、國際聯盟としてのそれでもない第三形式に於いて可能だ。

その第三形式は、現代個人性に於いて、國民主義よりも一層本質的な、したがつて一層普遍的な興味を內容とする各種團結だ。學問的團結、藝術的團結、宗教的團結、經濟的團結の如きが即ちそれだ。

それらの、最も純粹に、直接に文化的な、或ひは單に民族深であるよりも更に深く人類深である興味または生活を內容とする各種團結が發達することは、多くの意味に於いて進化的自然だが、それが發達すれば、國民主義的團結は、したがつていよ／＼それの次位的位置へむかつて本質的即ち全關係的に進化する、いひかへるならば現象的には、即ちその部分だけが抽象的に注意される限りに於いては、退化する必然的可能がある。

國際聯盟が例示するかたちの團結は、それの目的が、意識的に、形式的に、國民主義的團結に對する或る制限であるが故に、かへつて反對的暗示及び衝動を結果する可能がある。その制限が國民主義に於ける本質的、聰明的要素に對する制限である場合には、その反對的暗示及び衝動が結果されることは勿論至當だが、その制限が國民主義に於ける偶然的、不聰明的要素に對する制限である場合には、その反對的暗示及び衝動が結果されることは、社會進化に於けるそれだけの不成功だ。

人生觀、世界觀、社會組織に對する意見、政治組織に對するそれ、また經濟組織、性關係組織、教育組織等に關するそれ、藝術的傾向、學問的主張、これらの各が、それぞれの細別形式に於いて、それ自身の社會または社會組織を、團結、結社、組合のかたちに於いて、及びまた或ひは、それに類するかたちに於いて、發達させることは、單純に、純粹

に、それらの各の自己部分の興味において最も自覺的になされてゐる、目的としては、[illegible]いては、その場合には、例へば政治組織に關する或る特殊なる智的興味としての[illegible]あるだけだ。[illegible]に關する、または經濟的利益に關する純眞なる智的または道徳的または實際的興味としての或る主張があるだけだ。然るに、結果に於いては、本質的社會部分の組織的自己主義のために、自然的生活要素がそれの眞價相當の位置に移されるといふ事實も生ずる。方法または過程において平常であり、結果または到達に於いて成長であることは力の經濟的使用の一要件だが、特に國民主義をも、特に國際主義をも、そのいづれに對する肯定、否定のいかなるかたちにおいても、意識しないかたちの、即ち、眞實質的な、根本的な、直接興味的な團結行動の發達に、各人各所的に誠實に從事するならば、蛹が蛾となり、蛾が繭を破つて廣い世界へ自己を解放するに似た過程が自然に實現される。

破られる繭としての國民主義も、しかしながら、人としての蛹が、かれ自身の必要にしたがつて、かれ自身の學問力と技術力を働かせて創造したものにほかならない。かれが繭よりも自由な社會としての國際主義を持つためには、かれは先づ繭が與へらる限りの保護と自由を消費する時代的、發達階段的、方法的必要を持つたのだ。

現代政治の國内的惡は、それの代表的一特質は、各種職業、各種專門、各種使用及び消費、各種意見、各地方が、それぞれに、利益、目的、興味の共通範圍を識別して、その共通範圍を完全に保護する自治組織を發達させることによつて、自然に救除される性質のものだ。そして、國家權力内に於ける、したがつて同時に國家領土内に於ける中央集權の不必要的、有害的部分は廢棄される過程が、各特殊自治組織の發達の必然的半面現象として進行しつつある。

國民主義の外的關係にあつても、同様に、物質的及び精神的最廣義に於いての生産的興味と消費的興味との各の細別性質が、それぞれに、同一性質の現實的及び可能的全範圍を知り究め、純眞なる專門的即ち特殊生活内容的興味におい

てそれを保護し、愛育する方法としての自治的組織を發達させる方向に智勇を使ふならば、實質的形式に於いて、最有意義な國際撤壁が、外面的割據主權の上に現はれる進化的改作または改廢を待たずして、先ず行はれる可能がある。

結果主義または功利主義の最も賢明なるかたちは或る意味に於いての手段主義または直覺主義に存するが如くに、即ち例へば應用科學的及び機械發明的世界に於ける最大成功は、かへつて無邪氣な、しかしながら純烈な愛知的態度の自然の産物であるが如くに、一般的關係を改善する最捷徑は、しばしば、特殊的關係を改善するにある。政治は一般的關係の直接的責任者、決定者、當事者だ。そして國民主義は、現代に於いて、最も直接には政治殊にそれの外的關係即ち普通にいはゆる對外政治によつて代表される。現代政治の半面としてのいはゆる外政關係を改善することは、國民主義を、それの表現にしたがつて改善することだ。いひかへるならば、國民主義を改善することは、外政を、それの衝動にしたがつて改善することだ。

國家の目的は個人にある。個人の目的は自由にある。大社會は小社會よりも一層自由だ。かくして個人は、國家よりも大たる社會を持ち得る限り、それを持つことを自己の必要とする本質的理由がある。こゝで個人といふたのは、勿論、概念的個人、即ち各個人、更に即ちすべての個人をさしたのだ。そして、いはゆる自由は、分析された、及び綜合された現實の個人性の目的に對する極小限の障碍と極大限の保護との兩者以外のものではない。その分析された現實の個人性の目的の或るものは經濟的興味だ。それの他の或るものは藝術的味興だ。それのなほ他のあるものは學問的興味だ。それの内容は、これら以外にも殆んど無限に豐富にして夥多だ。そして、その綜合された現實の個人性の目的は、その分析された現實の個人性の目的の統一された全體だ。

團結は力だ。國民主義は一種の團結だ。或る時代と或る事情と或る環境が注意される限り、個人は、かれ自身の自由

に對する障碍を極小限化し、從つて[illegible]に對する[illegible]の一方法として、國民主義を選び、而して、[illegible]
個人が國民主義を選ぶ目的も、待つ目的も、それを選ぶこと自身、待つこと自身にはなくて、それとは別にある。
その或る時代と或る事情と或る環境とはなにか。これは、交通が異民族間の競爭を、[illegible]上に[illegible]に異民族間に敵、信、愛の感情が絶望的に未發達であり、蔑、疑、憎の本能が壓倒的に有勢であるといふ事情と、外在民族は、自民族に對して武力的征服を試みる能力をば持たない場合に於いてすら、意志をば常に傾向的に持つてゐると確信され、または、假想されるといふ環境だ。

かかる時代と事情と環境が現存的である場合には、聰明にして氣力ある民族は、保護色として、或ひは武器として、國民主義を發達させる。

日、獨、露、佛、英のそれぞれの國民主義の發生と發達の歷史は精確に右の考察を裏書きするが、一見してそれほどに明瞭でない北米合衆國の場合も、同一原則の範圍内だ。北米合衆國の國民主義は獨立戰爭當時に紀元づけられる。その以前のそのアメリカ部分は統一的國民主義によつてよりも十三州の各別的愛國心によつて支配された。英國教會からの背離團が新世界に渡來してから百五十年の期間に、すくなくとも地理的に、それから歷史的に、及び傳統的に一民族が新たに形成されたのであつた。

そのアメリカの國民主義も、しかしながら、日本までもが「聯合」勢の一員となつて、國旗を英、露、佛の街頭に連翩させた世界的合從連衡戰に刺激されるを待つて、始めて反省的決意を固めたかたちに於いて、發達したかたちに於いて基礎づけられた。獨立戰爭によつて說明される國民主義はなほ幼弱なものであつた。その後百年を隔てて內亂が發生しえたことはこれを證據立てる。心理學者であり、プラグマチストであり、哲學者であつた故ウイリアム・ジェームスが、かれ

の有名なる論文「戰爭の道德的等價」に於いて、豫言者的愛國者の熱情を充分に——たとひ聰明なる客觀眼には、事實不妥當的に、滑稽的に過當なものでそれがあつたことは否まれないとしても——筆端にこめて、恐日宣傳を極めて大まじめに、そして大袈裟に試みたことを、私は、最近代に於けるアメリカの國民主義の發達の事情を考へる際には、自然に想起させられることが從來たび／＼あつた。私はまた、一九一六年の七月に、日露協商が締結された當時のアメリカの感情狀態をも、いまも自然に追憶させられる。石井ランシング協約も、同樣に輕い、淡いしかたに於いてではあるが、自然に私の意識內へこの際かげをさす。

外在民族が自民族に對して脅威であり、壓迫であり、現實的侵害である場合には、自民族を國民主義化することは、個人性の自己保存のための最低限的必要方法だ。國民主義は一團結だからだ。しかるに團結は力だからだ。力のかたちに於ける敵に對する方法としては、力のかたちに於ける味方を持つことが最も確實に有效だ。民族的團結としての國民主義は常にかくして生まれた。

しかしながら、國民主義は力だから、外敵を擊退するためにそれは有用だが、同じ國民主義は、自民族の個々人の本性に於ける民族性以外の要素、或ひはしば／＼、自民族のための名と意識とに於ける單なる尙武的要素以外のすべての要素に對する脅威、壓迫、現實的侵害、破壞力として作用する多少の可能及び必然がある。

おの／＼の國民と民族は、個人性のための名と意識とに於いて、國民主義のこの副作用を擊退する必要がある。然るに、この場合にも、その必要を滿たすための最低限必要的方法としては、團結があるばかりだ。

道德的興味、哲學的興味、科學的興味、教育的興味、藝術的興味、經濟的興味、例へばこれらの各は、それぞれに、みづからの世界を組織することによつて、自國の國民主義の專制に抵抗することが出來る。すくなくとも、それを組織

することを許さなかつた。これに抵抗する[illegible]に生きない。[illegible]は[illegible]

は、個人性に於ける[illegible]以外の[illegible]、[illegible]として自己を[illegible]するほかない。[illegible]としての[illegible]に

於いて自己を武裝するほかない。團結することが武裝することだ。

國民主義は、外在民族または廣く外在人類からの壓迫に對して、自民族の獨立的自由を獲得する努力として常に始まり、それが成功して、力に多少の餘裕が生じた瞬間からしては、外在民族または廣く外在人類に對して壓迫を試みる態度及び行動に常に移つた。一とつの國民主義の初期は一とつの民族がなすかれの自治への努力であり、それに中期があるとすれば、それは獲得された自治のかれによる保存であり、それの終期は外在人類に對するかれの能ふ限りの專制だ。比較的無自治から比較的自治へ、比較的自治から比較的專制へ一民族が進む全過程が、從來の國民主義の發達形式だ。

自治と專制との間には、倫理的には絶大距離がありうるが、心理的には同一傾向が兩者に共通の一大部分的性質として發見される。專制が或る程度に制限されたかたちが自治だとさへいふことが出來る。そして、人は本來、專制的動物だと妥當に見られる可能もある。國民主義は、この意味に於いては、帝國主義の卵であり、雛であるといはれうる。

しかしながら、人性の根本的傾向からの國民主義觀は別の問題として、國民主義は、最も若かい、そして最も大きな團結であるといふ事實に含み帶ばれる或る性質として、最も無反省的だ。

若かいものが無反省的であることは殆ど自明理だが、大きな團結が無反省的であることも、恐らくはそれに優るとも劣らぬ自明的、通則的一事實または可能だといふことが出來る。そこにはいはゆる群衆心理が發動する多少の必然及び可能があるからだ。一とつの團結行動に從事する際の各個人員の責任觀念は、その人數を分母とし、一とつの個人行動に從事する際の一人の責任觀念を分子とした位の槪がしば〳〵成り立つ。またいはゆる群衆心理に於いては、原始的本能

及び低級本能が支配位を占める可能がしば〳〵ある。國民主義は、それの原料に於いて多分に、或ひは主として、生學的、自然的だ。これに加ふるに上述の如き事情があるのだから、それがいかに無反省的なものでありうるかは想察するに難くない。

國民主義によつて直接に、そして有能に代表されうる性質以外の性質が、現代個人性のなかなるこれが、それ自身の團結を持つことの價値は、かくしていよ〳〵積極的だといひうる。

しかしながら、現代文化に於ける國民主義の位置が極めて複雑なものであることは、支那が眞實に最も必要とする、そして現實に最も缺乏してゐるものの一がかれ自身の國民主義だといふ結論がつひに不可避であることによつても例示される。支那の最近代史は、自身の國民主義を造らない、したがつて持たない、即ちしたがつて使はない一大民族が、自身の國民主義を持つ多くの民族のためにいかに搾取されたかの記録だ。支日戰に於いて支那が負け、日本が勝つた一大原因も、支那はいまだ自身の國民主義を持たず、日本はすでにそれを持つてゐたにあつた。阿片戰後の香港被割取または被搾取以來、臨城事件直後に再現しかけた共管私語に至る八十有餘年間の支那は、外在國民主義の帝國主義化に對する一大誘發物そのものであつた。

國民主義に於ける根本的特質の或るものは、すでに注意した通り、土地の無條件的私有と財産の無條件的世襲だ。國民主義は同時に民族的自覺だ。民族性の構成要素としての位置を有する地理は即ち土地關係であり、歴史、風俗習慣及び傳統、それから言語と血液とさへもが、廣義の世襲關係以外のものでは決して、或ひはすくなくとも殆ど、ないが故に、上記兩判斷の間には一致的または部對全的關係がある。

土地の無條件的私有と、主としては最廣義に於いての土地が意味する財産の無條件的世襲とが國民主義の根本質だと

するならば、國民主義が人類の[illegible]にはいふまでもないが、[illegible]、[illegible]ものであることは爭ふ餘地がない。どうしてかといふに、アメリカ、支那、ロシヤ、現在の[illegible]をのぞいては、[illegible]て は、第一に生活または文化の基礎的要件としての經濟に於いて自給の見込が立つ民族は[illegible]すところ殆ど一つもない。

かくの如くにして、すくなくとも制限的國際聯邦の形成が、人類がかれらの國民主義を現代に於いて最も聰明に使ふ方法に於ける一要件だと考斷される。地上のすべての民族が、各別的に國家を、獨立を要件としてのそれを、形成しうる可能もないが、かりに形成しえても、永く維持しうる可能は明白にない。地理的に隣接してゐる或る複數民族及び複數國民は、合して一大聯邦を形成することの時代的賢明が考へられる。そのおの〱の聯邦の大きさは、經濟的に自給しうる程度をそれの最低限とする。

一國家の領土の大は、それの原因に於いて、あまりにしば〱あまりに不道徳的であり、またあまりにしば〱あまりに偶然的だ。一民族の人口の大は、またそれの原因に於いて、あまりに通則的にあまりに偶然的だ。然るに、大領土を私有する大人口が團結せば、帝國主義と資本主義とはかれによつて無制限に機會づけられる可能がある。

五　生産及び團結の未發達的可能に對する信仰

人生及び社會の在りかたを決定しうるものは經濟的生産の方法には限らない。經濟的生産の方法それ自身が一層深根柢的な、一層全生命的な生産過程の一成績にほかならない。現代の注意は、その一層深根柢的な、一層全生命的な生産過程にもつと充分に向けられる餘地がある。その一層深根柢的な、一層全生命的な生産過程を、私は、こゝでは、こ

ことばの或る意味にしたがうての哲學的活動と呼んで置きたい、呼んで置くことを選ぶ理由を持つ。

團結の方法は、將來なほ民族的及び經濟的兩團結に代表される必要はなく、さうされない必要がある。團結の代表的形式は、やはり、そのことばの或る意味にしたがうての哲學的團結であることが、人類が自分を知る一大證據だと私は考へる。

ブラジル移民論

法學博士
農學博士　高岡熊雄

一　海外移住の必要

我が國は人口の增殖の頗る盛んなる國である。試みに大正年代の最初の十ケ年間に於ける人口增加の實數を見るに六、九四三、二〇二人即ち約七百萬人の多きに上り一ケ年の平均增加實數も流行性感冒の爲め死亡の多かりし大正七八年の兩年を例外の年として取り除き殘りの八ケ年を平均すれば七五五、六五八人にして人口千人に對する增加率は十三人八五である。若し今後も此の割合を以て人口增加するときは遠からざる内に人口は億を以て算ふるに至るであらう。されば今にして之が對策を講究して之を處理するにあらざれば比較的領土の面積狹く天然富源の餘り豐かならざる我が國は物資の需給關係よりして益物價の騰貴を來し生活は一層困難の域に陷るのみならず失業或は就業難を訴ふるもの多く簇出し遂には經濟上に於ても社會上に於ても又惹ては政治上に於ても由々敷結果を生ずるに至るやも計り知り難いのである。之が對策として世に論議せらるゝ處を見るに消極的政策としては產兒の制限等に依り人口の增加を抑制すべしと主張せられ積極的政策の一としては海外に多數の移民を送り出して人口の增加に伴ふ弊害を救濟すると共に我が國力の海外發展に資すべしと論議せらる。一般人口政策として又我が國力の海外發展策として今日海外移民を奬勵することの最も必要なるは恐くは何人と雖も之に向つて異議を唱ふるものはなからう。吾人の今日最も解決を要するものは何處に向つて我が移民を送るべきや如何なる施設經營をなして之を奬勵すべきやの問題である。

二　何處に移住すべきか

兎角國外に出づることを好まざる我が同胞を勸誘し奬勵して海外に移住せしむるは極めて困難なる事業なるも而かも重要なる國家的政策の一である。海外移住を奬勵するに當り現今

上には開きて以て人類の用に供し得べき土地は尚頗る多いのであるが我が同胞の移住地としては北米合衆國就中加州の右に出づるものは恐くは少なからう。天然の富源と言ひ氣候と云ひ我が國よりの距離と云ひ交通の關係と云ひ又廣漠なる未開の土地が今尚存在すると云ひ其の他文化の既に發展せる點より見又既に七八萬の同胞が先住することを思つても他に之に匹敵すべき良好なる移住地は少ない。然しながら如何にせん彼の國に於ける排日運動は頗る激烈にして現在彼の地に住する同胞すら其の堵に安んぜざるが如き狀態であつて到底近き將來に於て新たに多數の日本人を彼の地に移住せしめ得べき望は少しもない。隣邦加奈陀の如きも曾て日英同盟の時代に於てすら英領コロンビア州にて排日案を決議せしことある位なれば今後排日運動は益其の鋭鋒を現はすと見るが至當である。濠州は白人の濠州なりと豪語して居ることは人の能く知る處である。若し夫れ南亞地方に於ける有色人種の排斥に至りては事極めて露骨に行はれ一般旅行者すら足を入るゝの餘地が少ない。此等諸國の排日行動に關しては大に論議すべき要あるも事實に於て我が帝國を圍める國は殆んど皆な我が同胞の移り住むことを拒絶しつゝあるを吾人は今直ちに之に向つて如何ともなすことが出來ない有様である。是に於て乎我民族の發展地としては只僅かに亞細亞大陸の東北部と南亞米利加あるのみである。前者に就ては今此に何等論究しない。他の候補地たる南米は實際我が同胞の移住を奬勵するに適應せる處であらうか。等しく南米と稱するも其の土地は廣くして十四ヶ國に分かたれ州の東部と西部にあるものとは日本に對する關係も自から異なり我が移民問題を解決するに當り特に考慮を廻らすべき處は東部諸國就中ブラジルである。

三　日本人の移住地としてのブラジルの價値

我が日本人の移住地としてのブラジルの價値如何を斷定するには種々なる方面よりして能く之を觀察する必要がある。吾人は（一）氣候は日本人に適するや（二）衞生狀態に憂ふるに足らざるや（三）有色人種は排斥せらるゝことなきや（四）法律上差別的待遇をなすことなきや（五）移住開墾をなす餘地ありや（六）農業的企業は有利なりや等の諸問題に付き研究を試みよう。

四　氣候は日本人に適するや

ブラジルは南半球に在るを以て氣候は極めて炎熱なるべしとは一般に想像する所である。本邦人の彼の地に移住することを

ことは論すること其の點が甚大なる問題である。尚以上ブラジルは日本人の移住に適するや否や我が國の政府觀測所の氣象報告に依り一八九〇年より一九二〇年に至る三十一ケ年間の氣候狀況を見るに平均氣温は二十二度七分（華氏七十二度九分）にして最高温の平均は二十五度九分（華氏七十八度六分）最低氣温の平均は十九度八分（華氏六十七度六分）である。夏季即ち十二月、一月及び二月の三ケ月に於ても平均氣温は二十四度四分（七十五度九分）より二十五度五分（七十七度九分）最高氣温の平均は二十七度八分（八十二度）から二十九度（八十四度四分）の間にして六月七月及び八月の冬季に於ける最低氣温の平均は十七度二分（六十二度九分）より十七度七分（六十三度九分）である。

全國を平均したる氣温現象にてはブラジルは暑からず寒からず眞に住心地善き處と言ひ得る。然しながらブラジルは北緯四度二十二分に起り南緯三十三度四十五分に達し南北の延長線二千六百五十哩の長きに及べる一大國にして地方に依り氣候に非常なる相違がある。氣候上より見れば此の國は熱帶地方亞熱帶地方及び温帶地方の三區に區分することが出來て各區互に氣候上の狀況が異なる。故に氣候上より移住地としてのブラジルの適否を論ずるには更に進んで此等地方別に依る氣候の狀況如何することゝする。

（一）熱帶地方。はアマゾナス州を始め北部一帶にして赤道直下に位してブラジル國内に於ても最も炎熱なる地方である。例へばマナオス市に於ける一九一〇年より一九一七年に至る九ケ年間の平均氣温は二十七度一分（華氏八十度九分）にして最高氣温の平均は三十二度（八十九度六分）である。而して此の期間に於ける最高極氣温は一九一四年十二月九日三十八度六分（百〇一度五分）であつた。等しく熱帶地方に在るペルナンブコに至りては氣温はマナオスより下り平均氣温は二十六度八分最高氣温は平均二十九度六分最高極氣温は三十四度四分（九十三度九分）である。

（二）亞熱帶地方。は中部諸州及びサンパウロ州の一部分を含むが其の内リオデジヤネイロ市にては一九一六年より一九一八年に至る三ケ年間の平均を取れば平均氣温は二十二度三分最高氣温の平均は二十七度五分最高極氣温は三十九度三分である。

（三）温帶地方。はサンパウロ州及び南三州を含み日本人の移住に最も關係の多き地方である。ベンデイランテスに於ける一九一四年より一九一九年に至る六ケ年の平均氣温は十九度五分（華氏六十七度一分）最高氣温の平均は二十六度二分（華氏七

十九度二分）最高極氣溫は三十五度八分（華氏九十六度四分）である。

之を我が領土内にて熱帶及び亞熱帶圏内に在る臺灣地方と比較するに左表の通りである。

	平均氣溫	最高氣溫平均	最低氣溫平均	最高極氣溫
臺北	二一、六	二六、〇	一八、三	三七、五（大正四年七月二十八日）
臺中	二二、一	二七、五	一八、二	三七、三（明治三十五年八月一日）
臺南	二三、〇	二八、四	一九、一	三六、九（大正五年七月十八日）
臺東	二三、四	二七、六	二〇、一	三九、〇（大正三年七月二十七日）
恆春	二四、三	二八、〇	二一、七	三四、九（大正七年六月二十六日）
花蓮港	二三、四	二六、四	一九、〇	三五、七（大正六年八月一日）

平均氣溫にても亦最高氣溫の平均にても北部ブラジルは臺灣より高く中部ブラジルは中部臺灣と相等しく而して南部ブラジルは平均氣溫にては臺灣より遙かに低く最高氣溫の平均にて北部臺灣と相等しきか或は低くして地方に依り多少異なる。若し夫れ最高極氣溫に至りてはブラジルは臺灣より却つて低いのである。要するに北部ブラジルは熱帶圏内に在りて氣溫は一般に臺灣より高きも中部及南部地方は却て臺灣より低きことを知る

更にブラジルの氣溫を以て沖繩縣に比較すれば那覇にては累年の平均に依れば平均氣溫は二十二度一分最高氣溫の平均は二十五度五分なれば中部ブラジルと其の氣溫稍相等しく南部ブラジルの氣溫は沖繩縣より遙かに低い。

若し夫れ最高極氣溫に至りては我が府縣朝鮮滿洲に於てもブラジルよりより高き地方がある例へば

新潟市三十九度一分（四十二年八月）金澤市三十八度五分（明治三十五年九月）熊本市三十八度三分（明治二十六年七月）岐阜市三十八度二分（明治二十六年七月）元山三十九度六分（明治三十九年七月）大邱三十九度（大正四年八月）奉天三十九度三分（大正九年六月）等である。

加之ブラジルに於ては一般に空氣が乾燥して居るから氣溫の高き割合には其の暑を感ぜず夏季日當りの場所は暑くとも日陰は涼しいのである。ブラジルは氣候上より見れば其の一部地方を除くの外は概して日本人の生活に對して別に憂慮するに及ばないのである。

五　衛生狀態は憂ふるに足らざるや

ブラジルに移住せんとするものゝ憂慮する點は氣候に次ぎては斯國の衛生狀態である。兩者共に吾人の生命に直接關係を有するが爲めである。大凡新開の土地は何れの處と雖も最初の間

は公共的衛生設備の如き[illegible]未だ完備せざる[illegible]の多くは下層社會に屬するものにして衛生思想の如きも[illegible]其[illegible]達せざるとは兩々相俟つて衛生狀態は自から不完全に流れ種々なる風土病發生して先覺の移民中には之が犠牲となるもの少なくないのである。植民事業や移民事業は此等犠牲者の貴き血液の結晶である。ブラジルも亦此例に漏れず現にリオ市の如き今日に於てこそ世界に於ける三大美港の一として天下に誇ると雖も二十年前頃までは世にも有名なる不健康地にして黄熱病やマラリヤの盛んに流行した處であつた。隨て死亡率の如き頗る高く十九世紀の中葉即一八五九年—一八六四年には人口千人に付き實に五十四人八の多きに上り同世紀の末葉には其の率大に減退したるも尚且一八九〇年乃至一八九四年頃には三十七人四の高率を示した。然るに今や都市改善の遂行せられし結果として黄熱病の如きも殆んど其の跡を絶ち死亡率の如きも一九二一年には十九人六に減退した。之を大正六年に於ける日本全國の死亡率二十一人四、人口五萬以上の都市の十九人八東京市の二十二人七に比すればリオ市の衛生狀態は短時日の間に改善せられたりと謂はざるを得ない。されば嘗てはペトロポリスの高地に在りし中央政廳や各國の大公使館の如き何れも皆なリオ市に其の居を移した。

[illegible]した[illegible]國民の死亡率[illegible]の十七人九にして調査當二十一ヶ國の内死亡率[illegible]より算ふればブラジルは第十七位に在りて此の國よりも死亡率の低き國は只僅かに北米合衆國ウルグエー瑞典和蘭及亞爾然丁の五ヶ國あるのみ。最高率死亡率を示せる露西亞の四十一人六に比すれば僅かに其の四三%である。又以てブラジルが一の健康地たることを證明する。

六 有色人種は排斥せらるることなきや

今日日本人が北米に濠洲に將た南亞に各地到る所に於て排斥を受け堅く門戸を閉鎖せられ入國移住し能はざるに就ては種々の原因が論究せられると雖も其の主なるものは疑もなく人種問題であつて我々日本人が有色人種なるが爲めである。吾人より見れば人種的觀念よりして他民族を排斥するが如きは常に正義人道を高唱する文明國民の行動としては全く了解に苦しむ所なるが事實は依然として事實である。されば南米移民に付ても悲觀的意見を有するもの或は少なくも其の前途を憂慮するものは現今ブラジルの如き大に日本人を歡迎しつゝあるも何ぞ知らん他日加州の轍に倣ひて門戸を閉鎖し我々排斥することなしと[illegible]

保し難しと論ずるも決して無理からぬことである。悲觀論者の憂ふる如く、日本人は有色人種なりとの理由の下にブラジルに於ても他日排斥せらるゝが如き悲運に際會するであらうか。此の問題の肯否如何は日本人の移住地としてのブラジルの價値如何を左右する。之を解決するが爲めには先づ斯國に於ける人口の狀態を察し後ち更に進んで之を構成する人種的關係を研究する必要がある。吾人は先づ人口問題より步を進めん。

四百有餘年の長き歷史と三百三十萬方哩と云ふ廣漠なる土地とを有するブラジルの人口數は幾何なりや。斯國が葡萄牙人に依りて初めて發見せられし當時には多數の亞米利加印度人が先住したりして勿論其の數は不明である。其の後稍精確なる人口數の記載せらるゝに至りしは十七世紀の半ば以降にして今左に人口增加の趨勢を示さう。

葡萄牙時代	
一六五五年	五七、〇〇〇
一八一七年—一八年	三、八一八、〇〇〇
帝政時代	
一八三五年	五、三〇〇、〇〇〇
一八七二年	九、九三〇、四七八
一八八八年	一四、〇〇二、三三五
共和政治時代	
一九〇〇年	一七、三一八、五五六
一九二〇年	三〇、六三五、六九五

即ち十九世紀の初めには人口の數未だ四百萬に滿たざりしが一九二〇年には增して約三千一百萬人となり一世紀間に約八倍となつた。而して又二十世紀に入りて以來は人口の增加殊に著しく一九〇〇年より一九二〇年に至る二十ケ年間に一千三百三十餘萬人を增加した。近來人口は斯くの如く著しき速度を以て增加したりと雖も土地の面積頗る廣漠なるが爲め其の密度に至りては尙極めて疎薄にして一方哩に對し之が密度は僅かに九人三である。日本人の最も多く移住するサンパウロ州の如き比較的人口の稠密なる地方なるも尙四十人九に過ぎない。

ブラジルは三百三十萬方哩の面積を有するを以て人口の密度九人三の代りに若し本邦の新開地たる北海道の人口の密度即ち一方里に對する三百九十四人を標準となすときは一億一千百三十萬人の人口を抱擁することを得。全世界の人口の密度たる一方哩に對する三十一人を取るときは尙一億〇百五十四萬人を入るゝことが出來る。若し夫れ我が國の人口の密度たる一方里に對する二千二百三十九人を入るゝものとせば實に十二億三千二百萬人の人口を抱擁し得るのである。亦以て今後ブラジルが收

[illegible]されば大に[illegible]の富源を開發して之を利用せんとするには出來得るだけ多くの勞力と資本とを投入する必要あり來住者の膚色の黄白如何の如きは全も問ふの暇なき有樣である。

加ふるにブラジルに在住するものゝ人種的關係は北米合衆國の夫れ抔とは大に其の趣を異にする。ブラジルの人口三千餘萬人を構成する人種的關係を見るに

（一）亞米利加印度人則銅色人種はブラジルの先住者にして此の國の發見當時は主として沿岸地方に住居し其の種類も百六十種に上りたりと云ふ。彼等は白人の來住と共に漸次山奥に逃げ込みたものである。此の人種中には所謂生蕃と熟蕃との二種がある。亞米利加印度人の數は或は八十萬人と稱し或は五十萬人と唱へ一九二四年版の政家年鑑にはアマゾン流域に住するもの六十萬人ありと云ひ精確なる數は不明である。彼等の多くは北部諸州に住む。

（二）黒人種。は奴隸として西亞弗利加より輸入せられたものである。一五八三年より一八六〇年まで二百七十七年間に此の國に輸入せられたる數に付ては全然不詳なるも種々なる記錄に依るときは現在數は一八一八年には百九十三萬人一八七〇年には百八十萬人一八八五年には二百〇五萬人而して一九〇七年には二百[illegible]萬人にして現[illegible]然も北米合衆國の現在人口と殆んど其の[illegible]黒人が一九〇〇年に一千萬人の黒人種を有し米國に於ける一大社會問題を釀しつゝあるとは到る事情を異にする。

黒人種は總て皆な奴隸として束縛限制の下に勞働に從事しつゝありしが北米合衆國に於てリンカーン大統領の時代に奴隸を解放せし影響は此の國にまで波及し來りて漸次識者の注意を喚起し遂に一八七一年九月二十八日に「ブラジルには今後奴隸として生るゝものなし」との有名なる勅令の發布となつた。其の後一八八八年五月十二日の勅令に依り奴隸を解放し二百萬人の黒人は全然自由の身となつて職業の選擇居所の自由權等を獲得した。是よりして奴隸の勞力に代ふるに自由勞働者を以てすとの必要に迫まられ廣く海外よりの來住者を歡迎するに至つた。

（三）白人種。ブラジルには歐洲諸國民の殆んど總てが代表せられざるなきが如く多數の白人種の集合地なるも就中此の國と最も關係の深きは元と母國たりし葡萄牙人である。葡萄牙人及び其の血統を引けるものが白人種の主要部を占めブラジル國民の中堅を形成する。現今は數に於ては純粹の葡萄牙人よりは伊太利人多く百五十萬人に上り、獨逸人は主として南三州に[illegible]り、英米人は比較的少なくして白人種の多くはラテン民族

所屬する。是れ歴史的發展の結果にしてラテン亞米利加の稱ある所以である。

（四）黄色人種。東洋より移住せるものにして其の内最も多きは我が同胞なるも其の數僅かに約四萬人に過ぎない。支那人は極めて少數にして殆んど論ずるに足らない。是れ恐くは此の國にては彼等の商業的手腕を振ひ得べき餘地少なきが爲めであらう。

（五）混血種即ち雜種。ブラジルには混血種が極めて多い即ち亞米利加印度人と白人種との雜種なるカボクロあり、黒人種と白人種との雜種なるムラトーあり黒人種と亞米利加印度人との雜種なるカフーズあり。其の外極めて少數ながら黄色人種と他の人種との雜種もある。

斯くの如くブラジル人は種々なる人種より成り立てるが其の最も主なる部分を占むるものは白人種及び其の血統を引けるものにして彼等の多くはラテン民族に屬する。ラテン民族はアングロサクソン民族が理性に長ずると異なつて其の性質極めて感情的である。同一民族に屬する種々なる國よりの住民が相互に容易に結婚するばかりでなく他の種族のものとも結婚するもの少なくない。而かも此等の雜種は他の純血種若くは雜種と結婚を重ぬるを以て血液の混合は實に複雜を極めブラジル人中には純粹の白人よりは寧ろ他の人種の血液を多少なりとも混ぜるものが却つて多數である。故を以てブラジル人中には人種的差別觀念は極めて薄く政治的には勿論の事社交上に於ても皮膚の色を以て掛け隔てをなすことなく黒白黄等相携へて交りつゝあるのである。之を北米合衆國に於て銅色人種は一小區域内に閉鎖し黒人種は全然劣等人種として取扱ひ日常生活に於てすら之と齒するを欲せざる國とは大に其の趣を異にする。新約克港を出帆して後ち十二日目にリオ港に到着すれば人種的關係が全然異なれる雰圍氣の內にあることを直感しリンカーンの「人は總て皆な生れながらにして平等である」との有名なる言は北米合衆國に於ては認められずして却つてブラジルに於て之を味ひ得るは實に奇なる現象である。遠き將來はいざ知らず近き將來に於ては有色人種たるの故を以て日本人を排斥するが如きことは萬萬無かろ可し。若し斯る議論を主張せんか黒銅何れかの血液を混ずるもの多きブラジル人は彼等自からを排斥することゝなり恰も天に向つて唾するが如きものである。天下豈に斯る愚をなすものあらんや。

七　國法上日本人は特殊待遇を受る事なきや

外國よりの移民を如何に待遇すべきやの問題は主として移民

を[illegible]の國情如何に依りて定むべきものにして移民が猥りに之に向つて嘴を容るゝ限りのものでない。然しながら今日食糧の供給に關して各國が何れも措置を惱ましつゝある際獨り徒らに廣漠なる未開地を包容しながら他よりの移民を拒絶して充分に土地の利用を計らざるが如きは果して人道の上より見て之を是認すべきものなりや又移民收容國が總ての國よりの移民に對して同等の待遇をなさず特に或る國の移民を劣等視し特殊なる待遇をなすが如きは論議する餘地がある。移民特殊待遇に付きては我が國民は眼前極めて痛切に且つ極めて峻酷に侮辱を被むりつゝある問題にして臥薪嘗膽以て我が國の經濟的實力の充實を計り以て他日の報復を期しつゝあるのである。

ブラジルに於ても彼の隣邦の如く我が移民に對して特殊的冷遇をなしつゝありやと云ふにブラジル合衆國は合衆共和國たる北亞米利加と異なりて斯國の憲法に平等を以て則とし內國人と外國人とを全然均等に待遇し且人種間の區別の如きは少しも之を認めず又各州の憲法及び聯邦の法律の如きも何れも皆な此の精神に基きて制定せらる。

聯邦憲法第四章第二節は「權利の宣言」と標題し第七十二條に於て「憲法は國內に居住するブラジル人及び外國人に對し自由と個人の安全及び財產に關する權利の浸すべからざることを保障す」と規定し更に[illegible]は行使に關して內國人及び外國人に[illegible]」とし[illegible]む。尚聯邦憲法第七十二條に於ては[illegible]及び入國出國の自由を保障し、[illegible]權及び完全なる所有權を認め、工業上の發明權、文字及び美術に關する著作權及び商標所有權を確保し、身體家宅及び信書の侵すべからざる事等を詳細に規定してある。尚同條には「法律の前には何人も平等なり」と特に明記しありて法律の前には貴族及び平民の如き社會的階級別もなく、況んや人種類的差別に於てをやであつて我移民も彼等がブラジル國民と全然同樣に私權の取得行使等を行ひ同樣に法律上の保障を受けつゝあるのである。

只獨り公權の享有及び行使に關してはブラジル人にのみ限らるるは當然である。然しながら外國人は二ケ年間彼の國に居住し殺人、强盜、竊盜、破產、僞計、密輸入、詐欺取財、通貨僞造及び醜業婦媒介の罪により裁判宣告若くは、刑を受けたることなきものは國籍及び人種の如何を論せず何人と雖も出願の手續をなしてブラジルに歸化してブラジル人となることが出來る。

尚憲法の規定に依れば外國人にしてブラジル國內に於て不動產を所有するものがブラジル婦人と結婚し引續き此國に居住するか或はブラジル人たる子を有し引續き此國に居住するときは

國籍を變更せざる意志を表示せるものを除くの外は居住年限の制限等なく自然とブラジルに歸化せるものと見做さるゝのである。

斯くの如き種々なる方法に依つて彼の國に歸化したる外國人は總ての私權及び公權を享有し憲法に於て規定せる或る制限を除くの外は一切の官職及び公職に就くことを得るのである。玆に憲法上の規定せる制限と稱するは外國人の歸化したるものは其の人一代の間はブラジル共和國の大統領及副統領に選擧せらるゝことを得ざると歸化して後六ヶ年間は上院議員に又四ヶ年間は下院議員に選擧せらるゝ權能のないことである。勿論ブラジルに於て生れたる歸化人の子孫は純然たるブラジル國民なれば年齡三十五歳に達すれば當然大統領及び副統領の被選擧權を有し又歸化人と雖も前記の年限を經過するときはブラジル人同樣に上院議員及び下院議員たり得る權利を有することは言ふまでもない。斯くの如くブラジルに於ては國法上外國人を極めて寛大に取扱ひ且つ其の間何等特殊的待遇をなさず我國よりの移民も他の外國人と全然同一の規定の下に取り扱はれて何等不愉快の感を起すが如きことなし。徒らに猫額大の土地を經營して生活難に苦しむよりは早く彼の地に移り子孫をして三百三十萬方哩の大國の統治者たり得る權能を有せしむるも亦男子の一大決心事ではないか。

八　移住開墾をなす餘地ありや

ブラジルは北緯四度二十二分より南緯三十三度四十五分に及び西經三十四度四十分より七十三度十五分に達し東西の延長約二千七百哩南北約二千六百五十哩に及ぶ大國にして其面積に付ては種々の說あるも一九二四年版の政家年鑑に依れば三、二七五、五一〇方哩即ち約三百三十萬方哩である。地球上に於ける陸地の約十五分の一、新大陸の五分の一、南亞米利加の二分の一に相當し北米合衆國より大なること二十五萬方哩にして新大陸の最大國である。之を我が國に比較すれば植民地を合せたる帝國の面積の十三倍半本國のみに二十二倍餘の大さである。此等三四の比較を以てして見ても如何にブラジルの面積が廣大であるかを知るに足るであらう。

ブラジルの面積は斯くの如く實に廣大なるを以て地勢も自ら處に依りて異なるが之を概評すれば北部及び南部は平野にして中央は一の高原地である。北部の原野はアマゾン河及び其支流の流域にしてブラジルの殆んど四分の一を含む。南部の平野はパラナ、パラグアイ、ウルグアイ等の諸流の貫流する所である。此兩平野の中間は即ち一の高原地にして西はアンデス山東は大

[illegible]百尺より三千尺に及び[illegible]國の總面積の約半を含む。斯る大面積の土地が高原地となることは緯度の高き割合に炎暑甚しからざる原因にしてブラジルに取りては眞に天惠とも稱すべきである。

ブラジルの土地利用に關しては未だ何等の調査なきを以て將來幾何の森林地を設定すべきや幾何の農耕地牧草地及び放牧地を得べきや全く之を知るに由なきは實に遺憾である。然しながら山岳は比較的少くして平野は多く且つ高原地と雖も農業上に充分に利用し得べきを以て農業上有利的に利用し得べき土地の面積の莫大なることは推測するに難くない。

一九二〇年九月の農業調査の結果に依れば全國に於ける土地所有の數は六四八一五三其の面積は一七五一〇四、六七五町歩にして全面積の二〇・五%即ち五分の一を少しく超過するのみで殘りの七九・五%は未處分の土地である。處分濟の土地も最早既に開墾を終りて農業上に利用せられつゝあると云ふに左にあらず其の大部分は今尚天然林や放牧地等自然の儘に放任せらる。

而して全國内に既に開墾して農業上に利用せらるゝ土地の面積は極めて少なくブラジル政府の調査資料に依れば一九二一年

[illegible]
して[illegible]
併に[illegible]
開墾の面積と大差なき有様である。

是に由て之を觀てもブラジルに於ける開墾事業は勿論地方に依りて多少の差ありと雖も今や漸く其の端緒に就きたるに過ぎずと云ひ得る程度にして斯國の農業界の發展如何は實に今後の問題である。官民相一致して廣く移民の招徠に腐心しつゝあるも決して故なきにしもあらずである。

九　農業的企業は有利なりや

農業的企業をなすに最も大切なる要件の一は土地の獲得である。舊世界を去つて新大地に移り以て新運命を開かんとするものは主として土地を獲得して安全なる生活を營むと共に子孫の爲めに後圖の計畫を樹てんとの希望を有するが爲めに外ならない。ブラジルに於て農業を經營するが爲めに土地を獲得するには官有地と私有地との二種がある。官有地は主として州有地にして間に郡有地等あるも聯邦有は極めて少く殆んど論ずるに足らない。隨て官有地の處分は主として州政府の掌る所にして聯邦政府の預り知らざる所であつて北米合衆國の土地狀況と大い

に趣を異にする。官有地は多く無代價にて希望者に交附せらるゝも交通の不便なる所に在るか或は地味の劣れるものが多い且つ大地積の交附を受くるときは地積の測量に要する經費の如きは出願者自から之を負擔するのである。

之に反して私有地は既に約一億七千五百餘萬町歩に上り多くは交通の便なる所に在り而かも之が賣買移轉は頻繁に行はるゝを以て土地を獲得して農業を經營せんと欲するものは官省地の交附を受くるよりは寧ろ私有地を買ひ入るゝを以て得策なりとする。

土地の價格は地方に依り又土地の種類等に依りて異なるもブラジル政府が一九二一年に出版せし「ブラジルに於ける土地の價格」には州別に依る土地の最高價格と最低價格とが示されてある。此所に云ふ最高價格とは交通の便なる所に在る土地の價格にして最低價格とは交通の不便なる所に在るものゝ夫れを云ふのである。今日本よりの移民と最も關係の深き州に於ける一町歩の土地の價格を見るにサンパウロ州にては十五乃至四百ミルレース、ミナスゼラホスにては十乃至二百ミルレース、パラナ州にては十五乃至五百ミルレースである。又日本移民がバウルー領事館管内にて實際を買入れたる土地の總面積の平均價格を見るに、約六十ミルレース即ち我が十五圓である又以て土地の價格の頗る低廉なるを知る。

ブラジルに於ける農業狀態を調ぶるに此の國に於て栽培せらるゝ作物の内には普通作物としては玉蜀黍、米、豆、マンジオカ、小麥等が主なるものにして特有作物としては珈琲、棉花、甘蔗、煙草等がある。其の外裸麥大麥燕麥等の穀類あり馬鈴薯其の他の蔬菜類及び果樹類がある。其の他農産物にはあらざるもカカオあり護謨ありマテ茶がある。何しろブラジルの土地の面積は頗る廣く且つ熱帶より溫帶に亘り種々なる氣候の下に在るを以て栽培せらるゝ作物の種類も極めて多きに上つて居る。然しながら此等の農作物内には珈琲マンジオカの如き本邦移民が母國に於て全然未知のものもあるも其の大多數は母國に於て既に之を栽培して經驗を積めるものである。彼の地に渡つて始めて全然未知の作物を手にするとは大に其の趣きを異にする。加之珈琲マンジオカ若くはカ、オの如きに至りても之が栽培の特に困難なるものにあらず何人と雖も直ちに之に慣れ得るものである。是れ本邦移民に取りて農業經營上有利なる點である。此等の作物の内には大に機械を利用して大規模に栽培し得るものがある。現に他の國に於ては斯る經營法を實施して居る。例へば小麥甘蔗棉花の如き何れも皆な然りである。然るに從來ブラジル殊に日本人の多く移住するサンパウロ州に於て行はるゝ

[illegible]是れ既に述べし如く[illegible]未だ[illegible]をなすために機械の使用に便ならざるが一の原因をなすと共に[illegible]の所土にして[illegible]林多く先づ之を伐採して開墾するの必要あり加ふるに[illegible]未だ[illegible]ならざる[illegible]めである。されば從前は専ら利加よりして黒人を盛んに輸入し之を奴隷として使役した。奴隷解放後は外國より移民を招徠し最初は契約移民なりしが現時は表面上は自由移民なるも其の實際は契約移民と餘り大差はない。又此國の農作物中最も重要なる珈琲栽培の如きは機械を利用し得べき餘地が比較的少なく事業經營上主として人力に依らざるを得ない。さればより多くの勞力を供給し得る途開くればより大規模に農業を經營し得るのである。農業の規模の大小は一に勞力の多少に依りて定まる觀がある。農業は工業に比すれば機械の利用及び分業の利益を受くること比較的少なきものなるも此の國にては一般に論ずれば大規模の農業經營にても他の國に比して此種の利益を受くること更に少ない。爲めに小規模の經營も大規模のものと相並んで經濟上能く經存し得るのである。是れ資力の豐かならざる本邦の移民に取りて有利なる點であつて彼等は自己及び家族の勞力を基礎として其の事業を始め漸次農業經營の規模を擴張し得るのである。若し然らずしてブラジ[illegible]ん[illegible]ブラ[illegible]中サンパウロ[illegible]である。勞力的農業と稱す[illegible]であつて勞力的農業でない。ただ多くの機械を利用せずして比較的資本こと少きなきが爲め一般の農業者間には家畜の飼養が廣く行はれて居ない。是れは農業勞働者としての日本移民に取つて幸である。何故なれば元來日本の農業が無畜農業なるを以て本邦よりの移民は家畜に親まず寧ろ之に對して恐を抱き之が取扱ひには極めて不得手である。されば若しブラジルもアルゼンチンの如く大機械を使用して穀類を栽培するか或は家畜の飼養を以て主なる事業となす國なりしならば農業勞働者としての本邦の移民は其の職を求むることは困難であらう。自己の勞力を唯一の頼みとなすもの、多き本邦移民に對して天惠豐かなるブラジルは門戸を開かざるに相違ない。然るに我が國の移民が實際農業勞働者として彼の地に於て外國の勞働者と能く競走し彼等に對する需要多き所以のものは畢竟ブラジルの農業が人力的農業であるからである。彼等の肉體的勞力を利用するも動物を使役する必要が比較的少なきが爲めである。

要するにブラジルに於ける農業に栽培する作物の種類と云ひ

之が經營の方法と云ひ我が國よりの移民が或は農業勞働者として或は農業經營者として充分に能く其の手腕を振ひ以て遂く彼地に移住せし目的を貫徹するに適して居ると言ふことが出來る。

十 結言

上來吾人は日本人の移住地としてのブラジルの價値如何を知る爲めに種々なる方面より之が批判を試みた。先づ氣候上より之を見れば何しろ南北二千六百五十哩に亘れる大國なれば地方に依りて氣溫の如き其の差甚しきものあるも概して言へば一部分を除きては日本人の生活に取りて別に心配するの必要なきことを知つた。此の國の衛生狀態は最初は不良にして死亡率なども頗る高かゝりしが開拓の進捗すると共に多額の經費を投入して公共的衛生事業を改善したる結果は風土病の威力も著しく減退し死亡率の如きも大に低減した。移民問題を論ずるに當り氣候及び衛生問題に相並んで日本人の最も痛切に煩慮する點は有色人種を排斥する風潮あるや否なやであるが此の國に於ける人種的組織は頗る複雜にして住民の大多數は何れも皆な多少他の人種若くは民族の血液を混ぜるものにして人種的差別感念は極めて薄く單に東洋人種たるの故を以て本邦よりの移民を特に嫌惡するが如き樣子は未だ之を認めないのである。其の上國[illegible]全然平等を旨とし私法上に於ては內國人と外國人との間に少しも差別を設くることとなし只公法上に於て多少の區別あるは當然である。其の代り何人と雖も或る條件の下に自由に歸化を許してブラジル國民たらしめて居る。

而して新開の國なれば土地を獲得することに比較的容易にして其の價値も低廉である。彼の地に於て栽培する作物の種類の如き我が國に於けるものと同一なるもの多く其の然らざるものに至りても之が栽培は別に六ケ敷からず加ふるに農業の經營は資本的農業と稱するよりは寧ろ勞力的農業であつて勞力を以て主要なる經營手段となす本邦の移民は努力如何に依りては或は農業勞働者となり或は半獨立農となり遂に進んでは獨立農となる等漸次其の地位を改善し得るのである。

是れを思ひ彼れを考ふればブラジルは我が同胞の發展地として現今最も適應せる處なりと批評せざるを得ない。今後如何に多くの移民が相携へて我國より渡航するとも之が爲めに人口に過剩を來たすと云ふが如き虞は毫も之れなしと斷言して少しも差支ない。北米合衆國に逐はれ濠洲及び南亞に拒まるる我が同胞は南米就中ブラジルに其の活路を開くか最も有利にして而かも唯一の進路である。然しながらブラジルに對する我が移民事

[illegible]するに過ぎない。[illegible]ブラジルに於ける移民[illegible]よりの移民は僅かに二、五乃至三、六%にして[illegible]の移民[illegible]には殆んど重きを為して居らざる有様である。而かも我が移民の殆んど全部は所謂[illegible]移民と称するものにして彼の國の[illegible]くは珈琲園主杯よりの補助を受けて始めて漸く移住の目的を遂し得たるものであつて自己の資力に依りて渡航したるものは極めて少數にして殆んど算ふるに足らない。若し此等の補助なかはじならばブラジルに於ける本邦の移民は今日の如き程度にして發展することが出來なかつたのである。移民數と云ひ彼等の資力と云ひ伊、西、葡よりの移民に對しては云ふまでもなく其の他主なる移民國の夫れに比しても到底其の側にも寄り附くことが出來ぬ有様である。今日我が國の人口問題を解決するが爲め又農村の振興を計るが爲めにも如何なる犧牲を拂ひ如何なる手段方法を講じても大に海外移民を補助する必要切なるものあるにも拘はらずブラジルに於ける我が移民の狀態が斯くの如き有様であるは實に遺憾の至りである。

　ブラジルの如き我が國民の移住地たるに最も適應せる國は又我が國と等しく温帶地方に在る歐洲諸國のものゝ移住にも最も善く適し現に年々多數の移民を送りつゝあれば若し我が國が今[illegible]して今日は我が移民は一[illegible]めて稀にして[illegible]將來に於ても[illegible]に於ける[illegible]ぶ本邦人排斥の擧に出づることは萬々なかるべしと信ずと雖も而かも決して楽觀を許さず決して安心すべきにあらず、他日彼の地の人口増加し白晢人種の勢力膨脹するの曉に至れば如何なる出來事が發生するや恐くは何人も之に豫言することは出來ない。今後の十年間こそブラジル移民に付き我が國民が相一致して大努力を要する最も大切な時期であつて此の期間内に彼の地に於て牢乎として拔くべからざる根據を築き上げなければならない。此の期間に我が移民の數を増して少なくも三四十萬人となし彼等は何れも皆法律の許す範圍内に於て一日も早く彼の國に歸化し彼の忠良なる國民として政治上の權利を獲得し假とひ他日如何に不法なる侮辱をなすものありて我が移民事業に反對せんとするものありても最早如何とも爲すこと能はざらしむべきである。然らずんば他日必ずや臍を噬むの悔があるであらう。實に今日はブラジルに於ける我が移民事業の盛衰の分かるゝ時にして決して輕々に看過することの出來ざる最も重要なる時期である。

吾人は上來主として我が同胞の移住地としてのブラジルの價値如何に付て論究したるが更に進んで斯國に於ける我が移民の實情は如何我が移民發展策は如何にすべきや等ブラジル移民研究上重要なる幾多の問題に關しては餘り遠からざる內に讀者の批判を仰ぐの機あることゝ信ずる。

（大正一三、一〇、一二）

日本の外交的環境

法學博士　米田實

一

大正十三年を送り同十四年を迎ふるの時に當りて、吾人は我國の地位と其姿とを想ひ、種々なる感想の油然として湧き來るを禁ずることができないのである。

顧みれば我國民は明治の時代より大正の代を通じて、屢々幾多の難關に遭遇し曲りなりにも之を解決し、其間を無事通過し得て、遂に今日の盛運に達したのである。然かも現在の狀態は如何であるか、我國運は多少發展の狀を示したけれども、同時に困難なる諸問題蝟集しつゝある事を拒むを得ない。無論其中には若干の內政問題がある、例へば、政治改革の上からは普通選擧の實行、貴族院の改革などによつて憲政の基礎を確立することも必要であるに相違ない。又一方年々七十萬の人口增加を見つゝある今日、之に生活の基礎を與ふる爲め、徹底的に國內に於ける工業の發展を期せなければならぬと同時に、對外移民策も講究しなければならぬ。その他教育問題社會問題など數へ來れば一として吾々の焦慮を必要とせざるものはない。而して是等の諸問題の解決正しきを得れば、國家の前途には必ず春風が吹くであらうが、若し之を處するに正しきを得ざれば國家は時ならぬ秋風に襲はることもあるであらう。併しながら余として一層深く焦慮しなければならぬ事は我國の國際關係である、就中年將に新たならんとする今日に於て、至深の心痛と

[illegible]の外交的環境が如何なる狀態にある乎、果して我國の歡迎すべき好都合で且つ滿足なるものであるかと云ふことである。其上の[illegible]は或は兩三問題を屢々し、或に[illegible]問題を云爲し、或は又[illegible]問題乃至[illegible]問題をも論及する、其他猶し來れば我國外交に於ける問題は洲砂[illegible]の如く多きことを感ずる。此次に於て我等が忘れてならぬことは、其等幾多の問題を整理するに當つても、單獨に自由に之を處分し得るにあらずして、皆我れを繞れる幾多の國家と關聯して若くは往々之と共に之を處理せねばならぬ立場にあることである。從つて我國の外交的環境が良好ならば、現在存在し若くは將來起るべき種々なる問題を、極めて良好なる條件の下に解決し得られるが、之に反して若し外交的環境が惡ければ現に存在し若しくは將來起り來るべき問題も滿足に解決する機會の極めて少なくなることは云ふまでもない。予は少しく所謂我外交的環境の問題に就て所見を述べて見たいと思ふ。

二

國家に取つて外交的環境が如何に重大であるか、之を說明する材料は洋の東西を問はず時の古今を論せず、過去國際關係の[illegible]一の例を取つて少しく之を說明し[illegible]の[illegible]と思ふ。それは[illegible]である。[illegible]にはビスマルク時代に於ける普魯西及び[illegible]の外交を[illegible]、其と後の世界大戰を以て終了したウイルヘルム二世時代のそれとの比較是れである。顧みるに一八六二年九月ビスマルクが伯林に於り普魯西假首相となり、同年十月首相となつてより約二十八年間に亘る普魯西及び獨逸の政治は、實に其國民に取つての黃金時代であつたと云ふも過言ではない。それには[illegible]獨逸國民自からの力もあつたことと云ふまでもないが、ビスマルク並に之を繞れる外交家が獨逸の外交的環境を非常に良好ならしめ、之によつて獨逸の別言すれば普魯西の志を歐羅巴大陸に遺憾なく伸ばし得せしめたことを忘れてはならぬ。試みにビスマルク等の造り口の一端を檢するに、先づ第一に一八六四年獨逸民族の一部を含むホルスタイン及びシユレスウイヒを丁抹より引離し、之を墺地利及び普魯西の支配下に歸らしめたのであつた、其希望の實現に就てはラツセル卿を中心とする英國の[illegible]も猛烈に反對した、丁抹政府も亦英國の對獨反對を丁抹支持を信じて之に對抗したものであつたが、英國の反對は[illegible]普魯西の志をして行ふを得せしめた。之にはビスマルクの[illegible]

て巧妙なる英國及び丁抹操縱もあつたけれども、彼が甚深の注意によつて普魯西の志を行ふに對し、所謂外交的環境を良くして居たからである、何となれば先づ露西亞に對しては皇室の血緣關係即ち露帝アレキサンドル二世と普魯西王ウヰルヘルム一世との叔父甥の關係を利用し、又た波蘭叛亂の場合に於ては彼は露西亞に好意を表し、之によつて恩を作つて居た關係をも利用し、一は普魯西の歐羅巴に對する意圖を善意に解釋せしむる空氣を聖ピータスブルグに作り、以て干渉の機運を阻止したのであつた。又佛國に對しては奈翁三世が民族主義支持の思想あるに乘じ、獨逸民族の場合に於ても其民族的統一を正當とする感じを彼に起さしめ、奈翁三世をして「吾々は波蘭問題に於ても伊太利問題に於ても民族主義を支持せし以上、獨逸に對してのみ他の感情を有つこと能はず」と云はしむるまでに一時操縱したのであつた。其外波蘭問題に對して英國が奈翁三世を支持しなかつたに對する奈翁の不滿をも利用し遂に一八六四年シュレスウイヒ、ホルスタイン問題に對する英國の國際會議提案出づるも、奈翁三世をして同意するを躊躇せしめ、斯くて普魯西の志はホルスタイン恢復問題に於て遂げられたのであつた。又た一八六六年普魯西が墺地利と戰ひ之を擊破したことは、即ち普魯西をして先づ北獨聯合を成就する機會を得せしめ、獨逸帝國の第一基礎を作つたもので、頗る重要な事件であつたが、此問題に於ける成功も世人は普魯西軍隊の軍事的成功方面にのみ考へを向けて居るやうだが、吾々の忘れてならぬことは同戰爭に於けるビスマルクの功績である、即ち彼の巨腕は普魯西の成功を可能ならしむるが如き外交的環境を作つて居たことである。彼は英國に對しては所謂相互間に於ける低率なる關稅其他で實際的な英國人の好感を得て居た、英國政治家中には普魯西の對墺政策に對し疑懼の念を懷くものもあつたのは事實であつた、併しながら少くとも英國に對し反普的干渉を企てしむることなきだけの空氣を作つて居たのであつた。一方露西亞に對してはやはりシュレスウイヒ、ホルスタイン問題に於ける場合と同樣にビスマルクは普露兩皇室の血緣關係と、一八六三年波蘭叛亂に於ける普魯西の露西亞援助によつて生じた好感を持續することに巧みに努め、之によつて露西亞方面を外交的に安全にして居たのである。否な獨りそれのみではなかつた、ビスマルクは誰も知る如く一八六五年九月靜養を名としてビアリック溫泉場に赴き、滯在一ケ月此間に奈翁三世と會見し、將來墺地利普魯西戰爭の場合に於ける佛國の好意を確保する手段に出たのであつた。即ち佛國をして墺地利に同情し普魯西に反對するが如きことなからしめ、飽くまで中立を守らしむることにしたば

[illegible]實に於ても、[illegible]の支持を得たのであつた。[illegible]伊國の支持を得たことは伊太利が其國家の統一を完成せる場合に、奈翁三世の力に依頼せる事實に鑑みても、大いに普魯西の對伊太利外交を援けたのであつて、之が爲めに二三箇月で一八六六年四月普魯西伊太利の反墺同盟條約を成立せしめたことを忘れてはならぬ。即ちビスマルクは對墺戰爭の場合に軍事的用意も十分整へたけれども、更に之に對する外交的準備を爲し、普魯西の活躍に對して、關係諸國の對獨態度を最も良好にせることが、事實上墺地利打破に成功せるばかりでなく、遂に北獨逸聯合を成功せしめた基本であつたことを知らねばならぬ。

而して其後一八七〇年より七一年にかけての普佛戰爭の場合は如何と云ふに、やはり略同樣であつた。此事は歷史研究家學生等は無論詳細に知つて居ることとで、詳述するに忍びないが、ビスマルクは前述の如く歷史的關係及び血緣關係を利用し、露西亞を飽くまで自家藥籠中のものと爲し、之によつて墺地利を牽制した、即ち墺地利が一朝有事の場合に於て佛國を援くることを阻止したのであつた。又伊太利に對しては羅馬が、未だ伊太利帝國の領土とならず、依然として羅馬法王の下に屬し、而して佛國が羅馬法王を支持するが如き姿あるを利用し、羅馬占有を[illegible]ことを[illegible]。一八七[illegible]に倫敦タイムス紙上に[illegible]發表せしめ、[illegible]白耳義を[illegible]て國に對し同國に對する佛國の[illegible]し、其親佛的態度を[illegible]せしめたのであつた。而して其結果英國をして普佛戰爭中[illegible]で外交[illegible]中立[illegible]の主唱者たらしめたことも忘れてはならない。又ビスマルクは露西亞の最も重要視せる巴里條約の改正に就て黑海中立規定の廢止を普魯西自から支持するの約を露西亞に與へた等、一面露西亞をして其親普的態度を繼續せしめるに與つて力あるものであた、彼が斯う云ふ外交振りに依つて、普國に好都合な外交的環境を作ることに努力せる功績は、普佛戰爭に於けるモルトケ將軍其他の武略上の功勞に比して決して少なりとは云はれないのである。殊に吾々の忘れてならないのは右普佛戰爭の後ビスマルクは種々の同盟、種々の協商を作り以て、獨逸を安全にして其活動を容易にし、同時にアルサスローレン問題などにより、敵意を獨逸に包藏せるその相手國佛國をして二十年間完全なる孤立狀態に在らしめたのであつた、即ち[illegible]る通り獨逸は一八七九年墺地利と二國同盟を結び、更に一八八二

年には伊太利を加へて三國同盟を作つた、併し彼は是れのみを以て決して滿足しなかつた、彼は英國とも或程度の締託を作ることに成功した、即ち一八七九年墺獨兩國が同盟を締結した時ビスマルクは英國宰相ベーコンスフイールド卿を說いて英國をも該同盟に入れんと企てたのであつたが、それはソースベリー卿の提議によつて成立はしなかつた、然もソースベリ卿は一八七九年十月ハツトフエルドに於ける獨逸大使との會見に於て、露西亞と獨墺地利衝突の場合に於ける英國の好意と或程度の援助を約束した位であつた。其後三國同盟の締結と共に更らに英國との間に地中海問題並に巴爾幹其他東方問題に關聯して一の協商が出來した、而して此三國同盟と英國との關係は十數年に亘つて繼續したことを記憶せねばならぬ。ところが斯の如く獨逸は三國同盟に於て墺伊兩國と結託し、更に英國とも協商を作つたばかりでなく其相手國として危險少からざる露西亞とも依然として或程度の關係を維持したものである、それは世間誰も知る如く一八八一年の三帝同盟條約、一八八四年の三帝同盟條約並に一八八七年の獨露再保險條約等によつて明かである、即ち斯の如くにして獨逸は歐羅巴強國と各種の方法により各種の方面に於て結託したのであつて、爲めに獨逸の外交的活動は頗る容易に行はれねばならぬ良好なる境遇に置かれて居た。之に反して相手國たる佛國は如何と云ふに何れの國とも同盟もしなければ協商も作り得ない、國際關係の大勢から當然締託し得らるゝと思はれて居た露西亞との間に於てさへ、一八九一年の佛露協定の結ばるゝ迄は何等兩國間の關係改善を見なかつた。否一八九一年に於ける協定と雖も唯單に將來相互協議すると云ふ協定たるに止まり、之が眞の同盟となり得たのは一八九四年であつた。これはいづれも一八九〇年ビスマルク退隱後の新發展なることを忘れてはならない、斯くて獨逸は歐羅巴の形勢が變轉するに至るまで久しき年月に亘つて、周圍各國との關係頗る可であり、極めて良好なる外交的環境に生活して居たと云つても宜しい。其結果國運隆々として進み、帝國を作つて二十年ならざるに眞に歐洲の强邦とはなり得たのであつた。無論吾は今日世界思想の變化したる時期に於てビスマルク流の舊式外交を同一の形式に於てその儘行へと云ふのではない、時勢が推移し場所が變れば自から其手段方法の如きも變轉しなければならぬ、何時迄も舊思想、舊形式方法に囚はれて居る秋ではない。併し乍ら根本的に見て、國家が自己の國際的關係を改善し、其環境を良好にし之によつて如何なる問題が起り如何なる紛爭を生じた場合でも、自己の活動を容易ならしめ其主張の達成を安からしむるが如き状態を作つたと云ふ一點に於いては、實に巨大

[illegible]

而かも之に對して人種的反對の說を示せるものは、合するところ[illegible]恐らくウヰルヘルム二世時代に於ける獨逸である、就中世界大戰前に於ける獨逸帝國の外交振りであると云はなければならぬ。一八八八年皇帝となり、其翌々一八九〇年ビスマルクを驅逐し以て自から獨逸の外政を支配するに至つた獨帝ウヰルヘルム二世と雖も決して國家の外交的環境を惡くしやうと思つたのではない、大いに良くせんと欲したに相違なからうが、遺憾ながら彼には隱忍の性質乏しく、開熱せる鋒動振がない、往々にして脱線し、又往々にして無益に他の感情を刺戟し、粗暴且傲慢なる遺口のあつたとは、獨逸の國際社會に於ける地位を惡化せしむるに力あつたことを記憶せねばならない。一々事例を舉げて述ぶるの煩に堪へないが、唯顯著なる若干の例を示せば、彼の英獨海軍競爭に於ける遺口などは大いに獨逸外交に對する世界の感覺を惡化せしめたのは疑ふべくもなかつた。誰も知る如く英獨の海軍競爭問題は世界大戰を導く一の重要なる原因であつたには相違ないが、然も其競爭に關聯して獨逸の態度が協和的でなく、往々にして禮讓を失したのに世界各國の感情を惡化させたものであつた。無論獨逸は帝國を作ることも早く同時に世

[illegible]

[illegible]

る國のものは極めて[illegible]なかつた。[illegible]を以て最上[illegible]である。さりながら一九〇八年ホルデン卿が[illegible]を訪問して以來、英國側が屢試みんとした海軍協定案に對し、引續き非妥協的態度を執り、延いて世界をして獨逸の平和愛好の念を疑はしむるに至つたことは、何人も恐らくは到底異議を挾むの餘地を發見しない所であらう。少しく其經過を述べんに先づ一九〇〇年獨逸は海軍大擴張計畫を立て、同艦隊を以て戰鬪艦三十八隻大巡洋艦十四隻、輕巡洋艦三十八隻及び適當なる水雷艇隊に補助艦より成立せしむるの案を作るや、之に對し英國側の警戒一方ならず、漸々妥協案に向つて歩を進めた、就中一九〇五年統一黨內閣倒壞し、自由黨內閣はサー、ヘンリー、キヤンベル、バンナーマン氏を首相として成立した後、其下に於て妥協政策は進められて來た。首相バンナーマン氏は倫敦ネーション誌上に論文を發表し、海軍問題に就き獨逸をして英國と協議せしめんとを唱道した。然るに獨逸宰相ビューロー公は一九〇六年帝國議會に於ける演說に於て之を拒絕したのであつた。次で一九〇七年第二回海牙會議が開かれると、英國政府は此に於ても軍備縮小

問題を協議せんと大いに努力したのであつたが、是亦獨逸側の反對によつて實現するに至らなかつた、のみならず獨逸は同年に於て更に海軍法案を作り、戰鬪艦は二十五年を待たず二十年を以て更新するの案を立て、又た一年間に戰鬪艦四隻を建造することゝした。而して該案は一九〇八年獨逸議會を通過し法律となるに至つたのである。そこで同年夏英國皇帝エドワード七世はサー、チヤーチル、ハーデイングを伴ひてクロンベルヒに獨逸皇帝を訪問し、英獨海軍競爭緩和の策を講ぜんとしたが、獨帝は此會見に於て英國側の協定意見を拒絕して了つた。爾來英獨の海軍擴張競爭は止む時とてなかつたが、一九一〇年に及び英國側は其前年ビューロー公が獨逸宰相の位を去り、ベートマンホルウエツヒが其の後を襲へる形勢にも鑑み、又復妥協案を講ぜんと欲し、英國より獨逸に對して今後秘密に軍艦を建造せざることと並に造船所の造艦工事の進捗に就て相互に報告を交換するの案を提出したが、是又獨逸によつて拒絕され、ホルデン、モーレル諸氏等によつて兩國間に種々斡旋を試みられたが遂に成功するに至らなかつた。越えて一九一二年英國海軍卿チヤーチル氏は所謂海軍休日案なるものを出し、英獨双方造艦を休み軍備を制限せんことを主張したけれども、獨逸側の容るゝ所とならずに終つた、斯の如く海軍縮小協定策の不成功は獨り英國人の眼に於て然りと云ふのみに止まらず歐羅巴全體個の獨逸に對する感想を惡化せしめた。即ち獨逸は斯の如　定に反對することに於て所謂戰爭を準備しつゝあるものなりとの感じを世界各國に與へた、之が獨逸をして世界文明國より孤立せしむるに至る原因の一となれるは疑ひなき事實である。

次に世界に於ける獨逸の批評を惡化せしめたものは何であつたか、第一回及び第二回の海牙會議に於ける其行動であることを指摘しなければならぬ。其一は獨英海軍競爭問題に關する態度と同じく此處でも軍備縮小制限問題に反對的態度を取つたことである。而して其二は戰爭に訴へず國際仲裁々判により國際紛議を解決せんとする案に對し、終始反對の態度を執れることであつた。一八九九年一月十一日露國外務大臣ムラビーフ氏第一回々文に於ては平和的手段によつて戰爭を防止するの可能に就き問題を研究することゝ云ふのが重大なる題目の一として擧げられた、そして佛國のレオン、ブルジョア氏を議長とする第三回委員會は、此國際仲裁問題に就て着々と協議を進め、一八九九年五月二十六日レオン、ブルジョア氏は愈國際仲裁案の採用に就て委員會の所見を發表し、而して英國代表サー、ジユリアン、パーンスフオート氏も亦之に贊成した。米國代表の如きは

[illegible]
て[illegible]
殆ど[illegible]仲裁制度の採用に一致し一面為、中に於て獨り獨逸代表のみは極力反對の態度を取つたのである。而して其時[illegible]一片の國權論を手に取り國際仲裁は國家の主權を毀損するものであると云ふが如き變な[illegible]的議論を唱道したのであつた。會は種々協議を重ぬると共に米國代表者ホワイト氏等の盡力もあつて、獨逸使節ツオールン博士は本國政府と協議の爲め伯林に歸還することゝなつた。其結果として結局獨逸は常設仲裁々判所其物の設立には反對せざることに態度を變更した、謂ば一の妥協が成立したやうなものであるけれども、然も義務的仲裁々判制の採用に就ては猛然として反對を表し遂に成立を見るに至らなかつた。獨逸の斯る態度は一八九九年第一回の海牙會議のみに止まらず一九〇七年の第二回同會議に於ても同樣であつた、第二回會議に於ては其會議第三委員會は如何なる事項が國際仲裁裁判に適するか、に就て一旦仲裁すべき事項の表を作つたものである、併しながら之も義務的仲裁々判制度を確立する譯でもなく、唯仲裁制の實現並に運用に就て一歩を進める位のものに過ぎなかつたに拘らず、獨逸は依然として之に反對し遂に第一歩さへも失敗せしめた。そこで同會議は單に條約の解釋

[illegible]
[illegible]以上[illegible]
か、[illegible]
決せんことを希望し、平和的手段による[illegible]ものゝ如き感を世界に抱かしめ、恰も國家に於て[illegible]とされるが如き第一歩を作り出したのである。

ウヰルヘルム二世皇帝の對外態度の失敗は獨り是れのみではない。一八九六年南阿弗利加に於てゼームソン侵入事件勃發するや、トランセバール政府の中心人物にしてボーア人派の巨頭たるクルーゲル氏に對し一の獎勵的電報を贈れる事件などを其一例である。無論トランスバール、オレンヂ自由邦等は完全なる英國領土と稱すべきか疑問であつたが、事實上英國の保護下に立ち其下に發展した國である。然るにその反英派に對して一種の獎勵的電報を贈り、露骨に反英的態度を示せるが如き、所謂獨帝の粗暴なる國際的行動は、以て獨逸が平和を愛好せず何等かの現狀變化を希望し、紛亂を望みつゝあるが如き感じを世界に與へたことは疑ふべくもなかつた。

次は一九〇五年から六年頃に於てモロッコ問題に對する獨逸國の態度である。無論佛國は一九〇〇年十二月伊太利と外交

書を交換しモロッコに於ける佛國の利益を伊太利側に致さしめ、之によつて佛國のモロッコ發展を可能ならしむる第一歩を作り、次で一九〇四年多年爭つて居た英國と埃及モロッコの交換を約束した、即ち佛國は埃及をば英國の權力下に置くことを認むると同時に、英國は將來モロッコに於ける佛國の發展を認むることに協定したのであつたが、此佛國の協定策は獨り獨逸との間には行はれて居なかつた。爲めに獨逸側が之に異存を唱へ始めたのも敢て不思議ではない。何れの國と雖も同一の境遇に立つたならば異存を唱へない譯には行かなかつたかも知れない。併しながら唯此間に於ける獨逸皇帝の遣方は亂暴且つ急轉直下的にして、世界の人心を刺戟すること極めて熾烈であつた即ち獨逸はモロッコ問題に就て急に同國を煽動するの策に出で、一九〇五年三月獨逸皇帝自からモロッコを訪問し、其君長たるアブヅルアジスと會見し、明かに正面からモロッコに於ては各國平等たらざるべからず、而して一國の獨占的行動を觀るものあるべからずとの主張を爲し、直にモロッコ君長の贊助を得、國際會議を唱道し、所謂アルヘシラス會議の開催を見るに至つた。何もモロッコに關する國際會議の開催が悪いと云ふのではない、寧ろ當然であるが唯之を來せる道筋就中獨逸皇帝がモロッコを正面より煽動せる遣口は、所謂穩便なる國際政策とは云ひ難かつた。其他一九〇八年のカサブランカ事件の如きも、或は一九一一年モロッコ王ムライハフィッドが内亂鎭定のため、佛國軍隊の援助を求め來るや、此機會に於て勢力均衡の立場より獨逸は自から軍艦をモロッコのアガヂールに派遣し、對抗策を取つた遣方の如き、所謂思慮淺き國粹的論者反動的論者から見れば、極めて愉快なる芝居と考へられるかも知れぬが、國家の大策上より見る時は、遺憾ながら諸外國の信用を其上に、收め來る行動ではなかつた。

斯の如くウヰルヘム二世並びに其下に於ける政治家連の活動振によつて作られたものは悪い獨逸の外交的環境であつた、世界幾多の國は強國と云はず弱小國と云はず獨逸を以て好戰國家と目するに至り、其結果は獨逸が假令正當なる行動を取り、正當なる政策を執る場合と雖も、一種の疑惑の念を以て觀られ、遂に他の正解を得ること困難に陷つたのである、正解が困難となればなる程其政府も國民も憤慨の念を催さねばならなくなり、感情の刺戟は更に刺戟を加へ、斯くして其行動は益々穩健と平衡を失ふに至るのである、穩健を失つて來ると、それが又直に世界の輿論に反響して行くのである。斯くの如くして獨逸の外交的環境を一層悪化せしめる傾向を釀成したことは否定されぬ事實である、彼の一九一四年より一八年に亙つて行はれた世

[illegible]

る[illegible]するに至つた。[illegible]あつた。[illegible]

の[illegible]に遺憾なく[illegible]

的環境が悪化して居た[illegible]である。[illegible]獨逸に世界戰争を[illegible]

したものであるかどうか、[illegible]外交[illegible]

等に照して、必ずしも世界大戰を企てゝ居たとは云ひ難いやうに吾々をして感ぜしめる。獨逸は三四十年間大戰争を豫期し計畫して居たと世間から云はれて居るけれども、最近發表せられた獨逸政府の外交文書（獨逸大使と本國政府との間に往復したもので本來は秘密的性質のものである、先づ過般十九世紀の終に至る部分が發表され天下に知られてゐる、今後漸次世界大戰に至るまでの種々の文書が發表せられて來ることになつてゐる）及び吾々が今まで手にせる各種の材料に就て檢するに、少くとも十九世紀の終に於て獨逸が戰争を企てゝ居なかつたことは確かであつて、寧ろ他國側に於て獨逸以上に戰争論を唱道して居たものさへ見える位である。然るにも拘らず獨逸が自から進んで久しく世界大戰を希望し之を企圖したるかの如く見られて居たのは何故であるか、やはり獨逸の誤れる行動によつて其環境を悪化させて居た爲めである。其理由の一は獨逸人が下らない程理窟ぽつく、實際上の利益で常識的に之を處分することを

[illegible]

ふ[illegible]によつて外交官となつてゐる連中が多い、然も之を以て自分の特色を維持して居るのだから、動もすれば下らない法律論に拘泥し、大なる理窟は云ひ得られず、小理窟に捉はれ自己の主張を固持することを以て、恰も國家の體面を保持し利益を齎らすものなりと信ずる徒輩が少なくない。吾々は國際會議に臨んだ獨逸代表者に於て殊に其弊の顯著なるを認める、是れ亦獨逸國家を誤つた一因ではないかと思はれる。併し吾人は部分的原因を茲に探究せんと欲するものではないが、要するに國家の外交的環境が良ければビスマルク時代の如く、國運隆々として進むのに反し、外交的環境が悪ければ進むべき國運も進まず、却つて悲境に陷らねばならぬ事實を、ウヰルヘルム二世の下に於ける最近の獨逸外交に見なければならぬことを、極めて遺憾とするものである。

茲に於て吾人が翻つて考へなければならぬ點は、我日本の外交的環境が今果して如何の狀にあるかと云ふことである。予は短刀直入に言つて見たいと思ふ。それは我日本の外交的環境が極めて悪いと云ふことである。然も其悪さは大正十三年度に於て一層度を加へたのではないかと思はれることである。無論之に就ては我國は歐羅巴白人種諸國と異り、黄色人種を以て國を作り然も黄色人種其他有色人種が、世界に於て劣等の地歩を占め且境遇に陷つて居る中に、獨り我國のみ猶ほ微弱ではあるが、所謂世界強國の伍伴に加はれること、及び之に對して動もすれば人種的差別其他から起り易い白人間の嫉視と猜疑があることも其一因でないとは云はれぬのである。喬木は風に折られ易し況んや種を異にする喬木に於てをや。吾々は此事情を否認せんとするものではない、併しながら大局より之を見れば斯の如きは未だ原因として極めて一小事に屬する。然らば我外交的環境を悪化せしむる大きい原因は何であるか、思ふに我國際的行動が不用意勝ちで、又適處を得て居無いことが其主たるものではなからう乎。先づ過去に就て見れば世界大戰中に於ける我國の支那其他に對する外交振りが過つ一端を爲せることは疑ふべくもない、其最も顯著なるものを云へば大正四年春に現はれた有名な日支二十一ケ條要求の交渉であらう。然も右日支交渉は最後に於て所謂我要求の第五項と稱するものが、悉く放棄せられた。即ち我國より支那に對し政治顧問を入るるが如き、若くは支那の警察行政に對し我國より人を派し、之によつて警察行政に於ける日本の勢力を扶植せんとするが如き、其他支那人から見て若くは諸外國人から見て、恰も支那を第二の埃及化するのではあるまいかと解釋せらるゝが如き條項は悉く放棄せられたけれども、歐羅巴諸國が歐洲大戰に忙はしく東洋を顧るの機會なき時に於て、斯の如き要求を出したことは恰も歐米人間に、日本は他の障害ある場合は已むを得ず其爪を匿すも、若し他の障害なき時に於ては支那に對し、第二の埃及を作るが如き野心を有つて居るのではないかとの感想を懷かしめしは、如何に否認せんとしても得ざる點である。實際から云へば當時の我對支要求なるものは、必ずしも我政府並に國民が十分考慮し國策として出したものとは云ひ難い、當時の眞相を知れるものは首肯するであらうが、個々日本國内に於て支那に何事かを爲さんとする各方面少數の面々が希望せるものを、未だ政治的地歩の薄弱なりし大隈内閣が、無判別無顧慮の裡に之を蒐集編成し隣國に突付けたもので、決して我國民及び政府に於て熟慮の上決定せる國策と云ふ程のものではなかつたのである、然かも斯の如き要求が一度提案されると、外國に於ても恰も之を我國策

つ[illegible]

一[illegible]に依つた[illegible]に[illegible]し

疑念を惹起せしめ[illegible]、更に一億五千万円借款を段政府に貸付けた、少くとも其金の一部分が支那に於ける親日的一派若くは親日なるが如く装へる一派を援け、結果に於て支那の紛亂を助長せるが如き觀あることは、又我國の世界に於ける評判を惡化せしめた一因であつた、併し這は既に過去のことに屬する、吾々は今深く之を説かんとするものではない。さりながら今日吾人が問題としなければならない點は、斯る過去の歴史及び背景によつて相當に惡化せる世界に於ける日本の評判が、最近の外交振により更に惡化を加へ來つたことであつて、這は如何に考へざらんとしても考へざるを得ぬ所のものである。然らばそれは何か、吾々は差當り大正十三年九月一日ゼネヴァに於て開會し、十月上旬に亘れる彼の國際聯盟會議に於ける我外交に就て、多少疑義を挾まざるを得ないのを遺憾とするものである。

吾人の云はんとする疑義とは何か、國際聯盟會議に於ける我石井安達兩代表者以下の外交振並びに之を含んだ我が外交是れである。その第一は平和議定書草案に現はれた所謂內政問題除外規定に關するものであつた。即ち右原案に依ると、聯盟機關

[illegible]

[illegible]

[illegible]なりとせる[illegible]

いのに拘らず、我代表は[illegible]

すことにしたのであつたのみならず、[illegible]主張し此

常設仲裁々判所其他の內政問題に關する決定に滿足せず戰爭を

開ふるが如き場合に於て、國際聯盟は之に對して所謂經濟的制裁若くは武力的制裁を加ふることにしたのであつた。此規定に對して我日本代表者が異議を挾み、之を變更せしめた點に就ては、吾人と雖も決して異議を唱へんとするものではない。主張としては當然過ぐる程當然の主張であつて、日本としては此態度に出でなければならなかつたことは、吾々も之を承認するに吝かならざる所である。顧るに日本は一九一九年巴里平和會議以來人種平等待遇問題、殊に移民問題を含む同問題に就ては、頗る不當の苦境に置かれ不愉快なる經驗を嘗めねばならなかつたのである。即ち同年二月十三日日本は聯盟委員會に於て人種差別待遇撤廢の修正動議を提出した、所が我動議に對しては委員中に於て同情なく、殊に聯盟規約原案の公式に發表されんとする前日なりし爲め理由も吟味されて、何等の賛同をも求められず、其最終日の聯合國總會議に於てウイルソン氏によつて撤回せ

られ世界に發表せられた聯盟規約原案には、何等痕跡を見るに至らなかつた。二月西園寺公の巴里入と共に又復該運動は開始せられた。然るにウイルソン、ロイド、ヂョーヂ氏等は堂々と之に反對することを困難なりとした。けれども尚此種問題は各國の國内問題である。即ち當事國の管轄に屬する問題なりとの理由を以て、之を國際聯盟規約中に入るることの穏當ならざるを仄めかしたのであつた。三月二十二日我日本は決意して聯盟規約に對し修正動議として「國際聯盟加入國は各自其領土内に於ける聯盟加入國の市民たる外國人に對し出來得る限り速かに平等公正の待遇を爲すべし」と云ふ案を提出した。ところが此主張は各國委員によつて容られなかつたのみならず、三月二十五日に至つて却つて反對の意味の修正動議が採用せらるゝこととなつたのである。之れは何かと云ふに、日本が斯の如き動議を出すのを看取せる英米諸國に於ては、日本が移民問題を國際會議に持出す決意あるものなることを信じ來り、之を阻止するの案を採用し置くの必要なることを悟らしめ、一面には大統領ウイルソン氏が二月末米本國に歸り三月再び渡歐せる其中間期に於て、米國の輿論殊に反對黨たる共和黨側の要求として、移民問題を國際聯盟の所管事項より除外すべしと主張されたことも、一の助成的原因を爲したと思はれる。斯くて聯盟規約修正案としては下の如き國際聯盟規約第十五條第八項が採用せられたのである。

紛爭當事國の一國に於て紛爭が國際法上專ら該當事國の管轄に屬する事項に就き生じたるものなることを主張し聯盟理事會之を是認したる時は聯盟理事會は其旨を報告し且之が解決に關し何等の勸告をも爲さゞるものとす。

即ち此案の採用は聯盟機關に於て移民問題その他人種問題の處理を爲さざる決意を示したものといつて差支ない。我國側では無論之を遺憾としたが、尚自己の主張を一方に於て幾分なりとも實現せんことに努力を繼續し、四月十一日日本委員は四面楚歌の中に下の如き修正案をも出した、それは聯盟規約の各條文には入れないとしてもせめて其規約の前文に於て「各國は各國均等の主義を認め其等國民を正當に待遇し」といふが如き意味の文句を挿入し、人道主義を發揚せんことを希望したのであつたが、之も遂に失敗した。即ち周圍の事情に鑑みて四月二十八日日本は之を撤回するに至つたのである。内政問題を國際聯盟より完全に除外して了つた所の第十五條第八項の規定の不當なるは勿論であると同時に、我日本の當然過ぐる人種平等待遇の精神を聯盟規約前文に入れよと云ふ切なる要求をも拒否せしことは、決して正當なる沙汰とはいはれなかつた。

[illegible]
[illegible]
[illegible]
は、從來存在せる國際規約よりも更に一歩を進めたものであるこ
とは疑ない。而してそれは內政問題に關する調停若くは仲裁の
除外規定にも押及ぼされ、一方に於て此不當なる除外を默認し
ながら、適當の解決を國際聯盟に於て審議することとなせるに拘らず、
唯仲裁裁定をのみ此內政問題云々の紛爭に關係せる當事國にも
及ぼさんとするに至つては、無論日本側が之に異存を主張し修
正を加へんとするのは寧ろ當然である。殊に一九一九年講和會
議に際しても將來人種平等待遇問題を出すことを聲明して居た
日本としては、聯盟總會に於ても此主張を繰返すことは自然の
進路であつたと云はねばならぬ。而して我委員主張の結果吾々
は一個の項目を平和議定書に加ふることが出來たのである、そ
れは聯盟當事國の一方が自國の管轄なりと主張する事項に就き
國際紛議が發生し、それが裁判所若くは聯盟理事會に於てよし
や當事國の一方の國內管轄に屬する事項なりと認めたる場合と
雖も、尙聯盟理事會若くは聯盟總會が事態を審査することを妨
げない。と云ふ規定を作つたことであつて、卽ち同平和議定書
第五條の末項にある下の文句がそれである。

[illegible]
[illegible]
又は[illegible]十一條に基き事態を審査なすことに
を妨ぐるものとす
此次更に日本側の主張によつて、平和議定書中、仲裁々
判所若くは理事會が單に當事國の一方の國內管轄問題なりと宣
言し之が解決方法を講ずることなく、即ち紛爭を依然として殘
せるに拘らず尙該紛爭の爲に、何等解決策が講ぜられざる結果、
其當事國の一方が戰爭若くは其他の行動に出ずる場合に、之を
侵略國なりと認め聯盟の制裁を加へんとする案に對しても、下
の如き修正を加へられたのである。

敵對行爲の開始せられたる場合には右記に該當する國際聯盟
理事會の全會一致の決定によるに非ずと宣言する場合の外之
を侵略國と推定せらるべし

一、紛爭を聯盟規約第十三條及第十五條に規定せられ本議定
書に依り擴張せられたる平和的解決の手續に附託することと
又は司法判決、仲裁判決若くは聯盟理事會の全會一致の勸
告に服することを拒絶し、或は該國と他の交戰國との紛爭
が國際法上專ら後の國の國內管轄に屬する事項に付生じた
るものなることを認むる聯盟理事會の全會一致の報告、判

決判決又は仲裁判決を無視したる國
但最後の場合に於ては該國は右問題を聯盟規約第十一條に從ひ豫め聯盟理事會又は聯盟總會に提出せざりし場合に限り違約國と看做さるべきものとす

即ち我全權の修正案採用の結果一方に於ては國際聯盟理事會若くは其機關は、移民問題其他所謂國内問題と稱する事項に於ても、何等かの解決方法を講究するの義務を不徹底ながら負ふに至つたものである。國際紛議の平和解決を主張し役目とする聯盟機關は、内政問題に就て曖昧ながらも何等かの解決策を講ぜねばならぬ義務を負ふたものである、其點に於て吾々日本の主張が幾分か實現し、内政問題なりとの裁判所若くは理事會の決定ありたる場合と雖も、尚解決方法の講究を當事國の一方は聯盟機關に要求するの權利を有し、之を要求せざりし場合即ち考慮研究を求めざりし場合にのみ違約國と見做されて、聯盟の制裁を受くることに規定が改正されたのである。斯くして場合によつては事を干戈に愬ふるも聯盟の制裁來らざるの保障が作られた譯である。斯の如き進路を執つた帝國外交其物に就ては吾々は異存を唱ふるものでない、併し乍ら茲に吾々が問題としなければならぬものがある。それは何であるか、此主張を續つた帝國外交が果して遺憾なきを得たかどうかである。

聯盟規約の修正若くは議定書作成の修正は甚だ重大業であつた、當路者の奮鬪は多とすべきも、斯る重要なるを實現せしむるまでに於て、我國は果して國家の大策を能く聯盟諸國側に理解せしめたのであるか、好ましからざる誤解を發せしめた如きことはなかつたか。淡泊に云へば我國が聯盟機關に修正を要求した精神は、聯盟機關が一切の國際紛議を解決し以て戰爭を絶滅せしめんとする精神の上に立てるに對して、國り内政問題なりとの理由を以て國際的紛議となれる問題を除外するの不當を指摘し、即ち一切の問題を例外なく聯盟機關に於て解決するが、眞に世界の平和實現に貢獻する所以であると云ふ立場から出でたことは、吾人の信じて疑はざるところである。我國の希望は飽くまでも國際紛議の平和的解決であつて、決して聯盟機關が國内的問題なりと云ふ立場から、國際紛爭を解決するに苦しめるに乘じ濫りに戰爭を起さんことを希望する好戰態度に出たものではなかつたに相違ない、又戰爭を希望すると共に戰爭を遂行する上に於て國際聯盟の制裁の來ることを不便とし、其制裁を除去せんと考へた譯でもなかつたに違ひない、換言すれば我國は平和解決其物を熱望するのが精神であつて、平和解決の行惱み若くは解決上の欠陷に乘じて戰爭を遂行し、又は戰爭を遂行するの便利から國際的制裁を逃れんとする

[illegible]にして[illegible]れたのであつて、[illegible]るの各國は[illegible]寧ろ一部に於ては却つて日本が移民問題に就て[illegible]をも作らんとするが如き考へがあるやうに解せられて居ないでもあらう乎、是れ吾々が深く心を潜むると共に攻究したければならぬ點である、今一つは此點に於ける帝國外交は、日本の移民策に對する誤解を擴大したのではなからう乎。今日我國の移民策は敢て我移民を歡迎せざる米國若くは濠洲に之を強ひんとし押付けんとするものではない、換言すれば無論道德上から言ふと廣き領土を有し人口稀薄なる國が、他の移民を歡迎することは正當であるに相違ない、然れども今日の如く國家獨立し相對峙し居る場合に於て、敢て一國が他國に之れを強ゆべきものたらざることは、既に日本自から諒解する所である。濠洲の如きは一方哩僅かに一人十分八の居住民を有するに過ぎぬ、米國と雖も一方哩三十人を數ふるのみなるに拘らず、吾々は是等に向つて我移民を強んとは考へて居らない、唯今日の問題は諸國の移民制限が帝國の體面の損はれざる形式に於て行はれんことを希望して居るに止まる、即ち我は實利よりも寧ろ體面を重んじて居るのである。之は所謂東洋思想の議論とも言へやう、斯う云ふ

[illegible]つ[illegible]人に[illegible]ト、[illegible]ない、[illegible]ゞに於ける諸種の議論は日本の[illegible]して居る[illegible]ども、我に要するに移民を送らんとする乎に過ぎないと解せられて居る。是れ彼等が實利主義に立つて居るアングロサクソン民族の心理を他に及ぼし、他も我の如くならんと推量せる點もあらう、蓋し西洋人側では實利の伴はざる空理に對し、國際議會其他に於て飽く迄他の反對を無視し困難を打破してまでも爭ふ場合が少ないからである。そこで吾人の爭ふ所は我日本の平和議定書修正主張其物は敢て差支なしとするも、之を繞れる外交に於て如何なる印象を他國に與へたのである乎、寧ろ我帝國の膨脹主義並に移民を他に強んとするが如き政策を執るものなるかの如き印象を強からしめたる點はなかつたらう乎、換言すれば、一方に於て內政問題に關する制裁除外を唱道し議定書原案を修正せしむると同時に、他方に於ては日本の此要求が好戰國たる如き印象、移民問題を戰因とせんとするの印象、將た體面論よりも寧ろ他の主權を尊重せず移民を強制せんとするとの誤解(此誤解は隨分以前から存在するのである)を誘起するの因たる大切な外交的事實は遂げられたであらう乎、[illegible]く

隅をのみ見て、全局に及ばない我が當局は、全然此後記の最も重大な仕事を閑却したのでは無かつた乎、果して然らば是れ實に重大なる悪結果を我が外交環境の上に生じたものと云はなければならぬ。

次には帝國は果して所謂強制仲裁々判制採用に對する適當なる態度を執つたかどうかである、云ふまでもないことだが昨年九月よりゼネヴアに開かれた第五會聯盟總會は平和主義の歴史に於て非常に重大なる時期を劃したものであつたと云ふて宜い。蓋し是れまでの國際聯盟總會は第二流政治家の出席を例としたのであつて、各國を直に代表せる總理大臣其他重要人物の相會議ではなかつた、從つて總會の勢力は極めて薄弱であつた。所が第五回總會は全然之に反して英國よりは勞働黨内閣の首たるラムジー、マクドナルド氏が自ら臨席すれば、佛國からは首相エリオ氏が出席した、伊國よりは前首相サランドラ氏其他が起き各國よりも夫々有力なる政治家の出席を見、其人物の目錄に於て未曾有の聯盟總會であつた。何故に斯の如き聯盟會議を實現したかと云ふに、云ふまでもなく英佛兩國を中心とし眞の國際平和を實現するの基礎を此會議に於て作らんと企てられた爲めであつた。誰も知る如く一昨一九二三年十一月行はれた英國總選擧は保守黨の失脚を來し、昨年一月以來勞働黨内閣の組織を見たのであるが、同黨は夙に國際聯盟を強力にし、世界平和主義を確立せんことを政綱の一とし理想ともして居つた。而して隣國佛國に於ても一九二四年（大正十三年）五月の總選擧によりポアンカレー等國粋的保守的勢力の失脚を見、久方振にて自由的たる所謂急進黨内閣はエリオ氏を中心として、其年六月出現したのである、斯く英佛政界が改善し、平和主義全盛とも見る可き空氣の中に於て聯盟總會開かるや、茲に問題として強制仲裁制度の採用が高調せらるゝに至つたのも何の不思議があらう。無論是より先一九二二年より二三年にかけて協議され始終問題となつて居た相互援助條約問題もあつたが、結局該條約に就ては種々の欠陷もあり殊に英國首相マクドナルド氏の意見として、各國間の相互安全保障並に軍備縮小協定案の如きも、一切の國際紛議を強制的に仲裁々判に附し以て戰爭に訴ふる機會を絶滅する制度を本とし根柢とするにあらざれば、眞の成功を見難きことを主張したのであつた。此主張は五月四日に於けるマクドナルド氏の演説以來英國側で高唱され、佛國側も之を認め遂にゼネヴアの空氣は殆ど之に一致せるものがあつた。それが今回議定書に現はれた強制仲裁制度の採用となつたことは云ふ迄も無い。此點は漸次各國に於ける平和思想の發達に伴ふて當然來るべきものが來つた譯で、殊に一九

一二[illegible]

[illegible]に[illegible]し、[illegible]一[illegible]するに至つたは

が常久間法[illegible]されたのにも拘らず、又十[illegible]三[illegible]略して居たが一九二三年までに世界約十八ヶ國が仲裁を[illegible]的ならしむ樣に同意したのに鑑みて、[illegible]ねばならぬ所のものであつた。そして今回會の議に於ては歐[illegible]小國[illegible]強制仲裁制に贊成を表すると共に、大國として從來贊成を躊躇しつゝあつた諸國も遂に贊同するに至つたのである。

茲に至り吾々が考へて置かねばならぬ問題は、今次の聯盟總會に於ける強制仲裁々判制度に對し、帝國代表者は果して同情ある態度を執つたかどうか、議定書の表面だけを見れば、內政問題除外に反對した一點だけが殘つて居る、併し該議定書の成立に至る過程に於て、我國代表者は強制仲裁々判に反對たるが如き態度を執らなかつたであらう乎。例へば國家の名譽其他緊切なる利益に關する問題を仲裁に附するが如きは好ますと云ふ樣な、獨逸的舊思想を吐露した如きことはなかつたであらう乎。不幸にして若しもさう云ふ態度が日本に存したとして、獨り英佛伊の如き大國のみならず其他四十數國の出席代表者に惡感を印象せしめた樣な事實はなかつた乎。吾々は會議の內外に於ける代表者の議論に此痕跡を含むことを憂ふるものである、若し然ら[illegible]

一[illegible]

[illegible]の[illegible]

が讓步したのであつたが、併し[illegible]如何に拘らず[illegible]にとつて世界に與へた感じは、獨逸は故らに國際紛議の仲裁に反對し平和的解決に滿足するものにあらず一と云ふ疑問[illegible]であつた。實際から之を視れば獨逸は必ずしも仲裁々判に反對したといふよりは寧ろ獨逸流の法律的理窟が大いに獨逸を禍したと思はれる。然らば今回日本の執れる態度は如何であつたか、內政問題除外に固執し日本は其眞の態度を理解せしむることに成功したかどうかを疑はねばならぬ。我々は、更らに強制仲裁問題に於ける我代表者の態度が又た帝國の信用を墜したことを非常に憂慮せねばならぬのである。

此外に於ても吾々は同會議に際し日本の態度に就て、良き印象を列國に與へたかどうかを疑ふべき幾多の節あるを認める。餘り詳しくは述べまいが一二の事例に徵すれば阿片問題の如き然りである。支那に於ける阿片問題の重大なるは論ずるまでもなく、各國互に協力し阿片の弊害を絕滅せんことに努めて居る、一九〇六年支那光緒皇帝は自から阿片禁止令を發し、續いて一九〇九年上海に阿片會議開かれ、一九一一年には[illegible]

間に今後七ヶ年間支那國內に於ける阿片の栽培禁止を條件として、印度よりする對支那阿片輸出を遞減するの阿片禁止協約が出來たのは人の知る所、又同年海牙に阿片會議開かれ、各國阿片禁止策を講じたことも周知の事實である。而して國際聯盟が成立するや、該聯盟は阿片禁止問題に就て相當努力し、一九二〇年（大正九年）の第一回聯盟總會以來、毎回問題とされ、今回の第五回總會から羅馬の理事會にかけて亦協議が行はれた。總會開會中並に其後續いて行はれた阿片問題協議に於て、帝國代表者は如何なる態度を執つたのであるか、果して誠意を以て阿片禁止策に協力するものと、列國をして思はしめたのである乎、例へば支那に對する阿片密輸入問題の如き、今日にては重大問題の一である、此密輸入に關しては英國人其他外國人にこそ少からざる責任ある如く思はるれども、同時に帝國代表者は所謂コカインモルヒネ其他藥品の形式等に於て、支那の阿片禁止政策を阻害するが如き日本人側の非行を十分に制止する誠意を示したと言へるであらう乎、吾々は今日に於て我國民の一部の中に行はるゝ所の醜態を防禦するのみが、國家の執るべき道筋ではあるまいと思ふ。勿論我國は阿片產國ではない、寧ろ世界阿片の產地としては支那自身が其第一に居り、最近の統計によれば二千五百萬封度を產出して居る、其次は英國である、其屬領たる印度に於ては二百萬封度を產出し、土耳其は六十萬封度を產出して居る、我日本は僅々一萬一千封度の生產あるに過ぎない、故に支那に於ける阿片問題に就て最も責任を有するものあればそれは英國若くは他國であり日本ではない。大局から觀する時、日本人の支那に於ける阿片問題責任は實に微細なるものである。併しながら假令微細であつても日本人側の缺陷を掩はんとするが如きは不當であり、寧ろ此際眞に阿片禁止に對し協力的態度を執ることが、對支政策上から將亦對世界政策上から見ても至當且つ賢明ではなからう乎。今一つは淫賣婦問題である、國際聯盟設立以來婦人小兒の保護を重要事項として居り、公娼廢止問題は屢論議されて居る、それは風紀の問題と云ふばかりでなく奴隸制度の問題としてである。つまり人身賣買と見られるからである。而して今回の會議に際し此問題に對する日本の態度は果して正當であつたかどうか、勿論公娼を許して居る我國內に於ては種々の改善策に共鳴し難かつた事情もあるとは云へ、我代表者の遣り口は良い印象を諸國に與へたとは云はれないのである、尤も是等は比較的些細の問題ではあるが、世界に於ける日本觀を害する助因となつたことは疑ひが無い。思ふに對支二十一ヶ條要求以來面白からざる我帝國の外交的環境が大正十三年の我外交振りに依つて一層惡化し來つたことを認

めねばならぬ[illegible]ように。目下は[illegible]すると、我[illegible]つ政策に[illegible]て居[illegible]無い。過去の歴史的行がかりや事情に制されて居る點もあれば害もあらうが、大體に於て我外交的活躍の舞臺であつて[illegible]でない結果、恰も我國を侵略主義的國家とし、或は好戰國家なるかの如く見せしめた點少なしとしない。斯の如き外交的環境に在ることは國家が今後種々の主張を有ち、種々の要求を各國の前に提案せざるを得ぬ境遇に立つ場合に於て、果して適當なる狀態を得て居るものと言はれるであらう乎。蓋し我外交的環境が良好なれば我主張は易々と通過するばかりでなく、假りに之を邪魔せんとする強國ありとしても其妨害政策は成功せざる場合が多い。之に反して我外交的環境が不良なれば動もすれば我と對抗し易き境遇にある他の強國は、我に不利なる狀態を利用し遺憾なき活躍を爲すことが出來るのである。我正當なる主張も不正當なるが如く紹介し宣傳し、而して之を聽く他の諸國も亦已にその誤れる對日本觀に誤られ、反日本策に共鳴し易いのである。是れ吾人の最も考慮を要する一點でなくて何であらう。

四

殊に此帝國の外交的環境に對し、吾人が一層重視したければ

たかに[illegible]へんとする[illegible]述べて見やう。

列强と云つても予が茲に擧げんとするに[illegible]である、其兩院は一は昨十一月四日の選擧により他は昨年十月二十九日の總選擧によつて新活動の氣勢を作り出して來た。先づ米國より之を檢せんに、現大統領カルヴィン・クーリッヂ氏は十一月四日の大統領選擧に於て大勝利を得るまでは頗る薄弱なる基礎の上に立つて居たと云つて宜い。從つて其内政外交に於ける活動も困難であつた。何となれば彼が四年前選ばれたのは副大統領としてであつて、即ち上院議長として立つと云ふのが人民の豫期した所であつた。然るに昨年八月俄然大統領ハーディング氏の死去により、其任期の殘餘に對する後繼者として位に上つた關係から、どうしても人民の支持を基礎として以て議會に對し又海外に對する上に於て、非常な弱點があつた。加ふるに議會の形勢は表面共和黨が上下兩院とも若干の多數を占めて居たけれども、共和黨中に所謂急進派の分子が含まれて居り、屢反對派たる民主黨と聯合し活躍を試みる爲め、其所謂政府側の多數はあやふやな危險のものであつた。されば大統領の熱心に主張せるものも、往々議會に依つて拒絶せらるゝ有樣であつた、

顯著の例として知らるゝものは在郷軍人手當法案に對する大統領の反對が、議會に於て無視せられ、大統領の否認權行使あつたる後議會は更に同案を通過したことである。又大藏卿メロン氏が提案した財政案は大統領の熱心なる支持ありしに拘らず、議會は徹底的に之を修正し其精神を殺して了つたのである。次は排日移民法案である、即ち大統領は日本との交渉を期する考へがあり、種々努力したけれども、議會は之を無視したのであつた。斯の如く大統領の地位は弱かつたのである、ところが今回の選擧に於けるその勝利は其地位を改善したのである、即ち先づ大統領ターリッヂ氏自身は各州代表選擧人數中三百八十二名を占め、之に對し反對派民主黨候補デヴィス氏は百三十六名を獲得し、第三黨たるラフォレット氏は僅々十三名を得たるに止まつたので、ターリッヂ氏は一月非常なる多數で公式に選擧人の手で選擧せらるゝことは明かであり、更に本年三月より以後四ケ年間十分に人民の支持を得た大統領として米國の政治を總攬する地位に立つのである。彼が三百八十二名と云ふ多數を以て勝利を得たことは、四年前共和黨候補ハーディングが占めた四百四名に對しては多少遜色はあれども、之を更に八年前の大統領ウイルソン氏が再選せらるゝに際して、二百七十七名しか占め得なかつたのに對比する時は非常の多數であり、又ハーディング以前に共和黨より大統領となれる例のタフト氏が一九〇八年の選擧に於て占めた三百二十一名の數に對しても尚ほ高いのである、それだけターリッヂ氏の勝利の大なることを認めねばならぬ、のみならずターリッヂ氏系は今回の選擧の結果議會に於ても、有爲の地位に立ち得るに至つた。二年前の議會選擧に際して下院に於ける共和黨議員數は從來の三百名より二百二十三名に減じ、反對派民主黨の二百六名に對して僅かに十七名の多數を下院に有するに止まつたのであるが、今回の選擧にて共和黨は議員數二百四十二名を算し、民主黨は百八十九名に落た結果議會に於ける共產は共和黨側多數の五十三名を數ふるに至つたのである。上院の形勢は下院程有利ではないが、共和黨は五十三名から五十五名に增加し、民主黨は四十二名から四十名に減少したので、是亦幾分改善の跡あるは疑ひなき所である。此ターリッヂ氏が新たに人民の確實なる後援と支持とを得、又た議會をも支配して新しく世界に臨むに至つたと云ふ事實は、今後に於ける現政府の活躍を容易にするものであつて政府の地位の鞏固となれることは必ず其內政上外交上の活動に反映しなくては止まない所であらう。併し內政は說かぬ、外交的活動は如何なる方面にせらるゝであらう乎、それは種々の方面があり又種々の性質があらうと思ふ。併しながら吾々が差當

つ[illegible]
[illegible]
[illegible]三である。

先づ軍備縮小會議に於て[illegible]一九二一年より二二年にかけての彼の華盛頓會議に於ては、主力艦制限を相互に協約したのみで、その他の補助艦以下の制限案が行はれなかつたのに徴して、それが自然來らねばならない問題であるとは何人も否認せし所であつた。而して又クーリッヂ共和黨政府は既に之が實行を國民に公約したのである。即ち昨年六月市俄高に開かれた共和黨全國大會に於て採用した其政綱には軍備縮小會議召集を主張した、其綱領の内容は「獨逸の賠償計畫が採用せられ之によつて歐羅巴の形勢が協議協力を可能とする場合に到達した時、吾々は潜水艇の使用毒瓦斯の使用並に陸軍等の制限に就て國際會議を召集せんことを主張す」と云ふのであつた、然も此内容に對してはクーリッヂ氏は同年八月十四日大統領候補たるを承認せる演説に於ても之に贊同の意を表し、吾々は常久仲裁々判所設置を主張すると共に、更に軍備の制限を主張すると聲明し、而して同じく獨逸賠償問題解決策が愈實行せらるゝに至つた時を以て軍備制限會議を唱道するの適當なる時期とせんと言明した。國務卿ヒューズ氏も昨年十月上旬オハイオ州シンシ

[illegible]
[illegible]
[illegible]した。斯の如く共和黨の大統領及國務卿は[illegible]國民に公[illegible]したのであるが、其後ドウス氏の賠償問題解決案は英佛伊等の賛成を得て採用せられ、今や英米其他よりする計畫借款の實現と共に所謂賠償計畫は實行の緒に就くに至つたのである。從つて米國政府としては國民に公約せる軍備縮小會議を召集せんと考へるのは寧ろ當然であつて、目下英米間に種々の相談行はれつゝありとの説傳へらるゝも、何等不思議ではない。吾々は此第二軍備縮小會議に對しては期待を以て自然と思ひ又之を可とするに吝かならざるものである。併しながら同會議に於ける我日本の地位に就ては、相當に重視しなければならぬものがある。それは何であるか。彼の華盛頓會議に於ては五國海軍力を制限し英國十米國十日本六佛國三、伊國三、の率を採用し、同時に東洋島嶼防備の現狀維持を約束したが、此結果に就ては米國にも不平があり日本に於ても不滿があつた、公平なる見地から觀れば此比率は周圍の事情に照して大體適當と云つて差支ない。此點よりして、よしや多少の批評はあつても、國務卿ヒューズ氏は比較的一國の立場のみに捉はれなかつたことを

しなければならぬと思ふ。所が來るべき軍備縮小會議は如何と云ふに、之には少からざる困難があり且面倒なる事情が伏在し若くは公在すると思はれるものがある。何故ならば米國側に於ける排日熱の勃發と海軍擴張運動がそれである。殊に排日案通過後に於て熱度一層烈しきを加へたやうに觀ぜられ、延いて此運動は議會にも反映し、現に昨春一度海軍經常豫算を決定したる後、更に追加として巡洋艦八隻潜水巡洋艦三隻並に砲艦若干の建造案を可決するに至つたのである。又た從來米國海軍は六隊に分れ、是等は相互間獨立的のものであつたが、最近之を變更し所謂合衆國艦隊の名目下に全艦隊を統一し、一司令長官の下に於て相聯合せしむることに改め、同時に毎年三ケ月間演習を行ふが如き案をも作れることは、吾々の注目を避くること能はざる點である。然も近來現海軍卿ウイルバー氏等は米國海軍力が英國日本に對して有利の地位にあらざることを説き、理論上英國十米國十日本六の比率である筈だが今日の實勢力は英國十米國八日本六の割合であると主張し、殊に海軍兵員問題に於ては米國は遙かに日本の後にゐると高唱した。斯やうな米國側海軍熱の勃興なるものが、軍備縮小會議の上に於て如何なる影響を及ぼすであらうか、道は現クーリツヂ大統領ヒューズ國務卿等に取つても厄介至極なる問題たるに相違ないが、同時に我日本に取つても斯る會議開催され之に參加せざるを得ざる場合に於ては、極めて面倒なる事情の發生し來ることを知らねばならない。取りも直さず來るべき軍備縮小會議は過去に於ける軍備縮小會議以上に、重大なる意義を加へ來るものたるは否定し能はざる所である。

軍備縮少會議固より重大ではあるが、特に吾々が一層注意を喚起しなくてはならぬ問題は、來るべき日月に於て米國が對極東活動を開始すると云ふことである。それは今日共和黨が外交活動を爲すに漸く便利の地位に立つた政治的事情も其一理由でゐるけれども、今一の理由は米國の國力益充實し最近の財界事情は、所謂弗外交即金力によつて海外に發展する途を行ふを頗る便とする状態になれるとである。蓋し今日までの所にても米國々富の世界に冠たるは人皆知る所、今や七千億圓の國富を有し英國と雖も遙かに彼に劣つて居るではないか。世界の黄金の半數は米國に集まり、世界の鐵道の五分の二は米國に於て占有せられ、世界の自動車の八割三分は米國にあり、世界の電話の六割三分は米國にある、米國銀行の預金額丈けでも佛國戰前の富に對抗すると云はれる。茲に於て富める米國の財力は近來漸々として對外的に投資せらるゝことゝなり、現に大正十三年度中の統計を見ても、我日本に三億餘圓を貸し、獨逸に二億餘圓を貸

[illegible]到る是に[illegible]せられ、[illegible]八[illegible]せらるゝ點[illegible]く[illegible]十億圓に上ると稱せられて居る。[illegible]して米國政府の[illegible]する所によれば現在米人が有する海外投資の利子のみにても優に年八億以上十億圓の間にあると稱せらる。此有利なる狀態は米國の財政上にも反映し現に過去共和黨政府當政三年間に於て、四十億圓以上の國債を償還し更に八億圓以上の減税を實行して居る、のみならず今後も尚一層公債償還及び減税を行はんとし、國民に之を公約して居る有樣である。斯くの如く今日世界各國が困窮せるもの多き中に於て、非常に有利な地位に立てる米國は、其無限の富を以て海外に活躍せんと志すに何の不思議があらう。而して現在歐羅巴大陸諸國程に強國間の關係面倒でなく、然も未開發の富源極めて多き支那共和國の如きが、米人の眼の注ぐ所たらざるを得ないのも亦自然である。而して今後米國の對支活動は種々あらうが已に其の一端としてに曙光を示せるものは、支那鐵道其他の協同管理論再現の如きものであらうと思ふ。米國にて支那鐵道管理否な獨り鐵道管理のみならず、支那の財政其他の國際管理論が唱道せられたのは決して新しきことではない。丁度一九一九年春紐育を中心にする平和協會委員會の手に於て先づ之が唱道せられた。同會はコロンビア

[illegible]委員とせる團體であつた。[illegible]によると支那[illegible]は列國より出せる委員によつて管理さるるのみならず、支那に國際警察隊を組織し、之によつて支那平和を保障せしむると共に、支那の財政に關しては右國際管理委員會は二十億圓以上の借款に就ては一々調査の上、之を是認し若くは否認するの權利を有するものとす等を始めとし、殆ど一歩々々にて佛英が埃及に行へると同樣の協同管理策の如きものに歩を進めんとする案であつた。所が米人側の該主張は失敗し何等實現の運命には至らなかつた。其後一九二一年華盛頓會議開かれし當時に於ても、米人間には支那管理問題が研究せられ、米國商務卿たりしフーバー氏によつて、非公式に提議せられたことは世人の記憶に殘る所であらう。吾々は最近又復米國側に對支國際管理論が形を變へて現はれつゝあることを認める、那は所謂獨逸に採用せられしドーヅ案を支那にも異れる形式に於て適用せんとする運動である。獨逸に對するドーヅ案は人も知る如く昨年四月發表せられ同年八月歐羅巴諸國の承認を得て實行の緒についたものであるが、それは獨逸國有鐵道を引揭げて之を私立會社の手

に委ね、該鐵道の價格を二千二百六十億馬克（百三十億圓）と計算した。而して該鐵道經營の私立會社には云ふまでもなく英米佛其他の各國人に獨逸人も加はり管理せらるゝことゝしたのである。斯くて鐵道其他の生產機關は外人管理の下に存立を見ると共に、外國も是等を所謂保障として巨額の金額を貸付くることになり、これによつて獨逸の對外賠償義務を果さしたると云ふ案であつたが、之を支那に適用するとせば果して如何。支那は無論獨逸の如く賠償の義務を負ふものではないけれども、併し海外に對して彼是十九億兩を數ふる（種々のものを合せての借款ではあるが）債務を負ふて居るのである。米人の採用せんとするドーヅ案に依れば、支那をして此債務を果さしむると同時に今後外國人が支那に對して危險を感ぜず資金を貸し得る狀態を作らんとする意嚮を有し、此目的を以て支那の鐵道其他を外人の手で管理せんと欲するものであつた。無論此問題は米人側に於て甚く熱心に希望しても、支那人側が承諾するや否や頗る疑問である。從つて之が成立の發生するまでには幾多の難關あるは論ずるまでもない。然かも此の鐵道管理問題が支那の將來にとつて重大であると同時に、東洋に於て特殊の地位に立てる我國に取りても輕視すべからざる難問題であることは贅するを要せない。殊に此問題に關聯して起る南滿鐵道其他の問題あることを知らねばならぬ。確か一九一九年頃の問題でつたと思ふが支那鐵道國際管理が白人側に於て唱道せられた際、然も支那に餌として與へられたものは、該管理を實行する時は、現在外國の手にある鐵道をも此案によつて支那に回收し得る機會を作るものなりとの論據に於てゞあつて、此點だけは當時支那人側の歡迎を受けたものである。併し支那人側は外國支配下にある鐵道回收こそ之を欣んだが、支那自からの鐵道が外人に管理せらるゝことに對しては、國家主權論の立場より異議を唱へたのであつた、今後も鐵道管理問題に附隨しては一九一九年に於ける形式の下に滿鐵問題が起つて來るかも知れないことを忘れてはならぬ。又場合によつては支那鐵道管理問題發生に當り、英米其他は日本は既に南滿鐵道に於て其地位を保持するが故に、支那本土に於ける鐵道新管理は英米の手に之を占めんとするが如き案を立てるやも知れない。

是れ現に英米人間に行はれつゝある議論に徴しても考へられないことではない、斯くの如きは支那のみならず我國にとつて外交上の重要案件ではあるまい乎。以上は一例に過ぎないが、米國の對支活動は必ずしも鐵道其他交通機關管理のみの形式を取り來るとは云へない。否な此形式を取らずとも目下資本的海外發展の好機運に際會せる米國が、必ず現在の米國外交機關を

[illegible]ある。[illegible]を[illegible]政策を採り、國内工業を發展せしむる[illegible]に於て、所謂金力階級と良好関係にある事も一原因であらう。現に金力系と良好関係あるは常に行はるゝ大統領選擧に際し共和黨の寄附が共和黨側に於て極めて莫大なるものあるに依しても明かである。最近第三黨を組織せる上院議員ラフォレット氏は昨年七月發刊したる進歩黨の綱領に於て、米國外交が資本的帝國主義化せることを非難し「我々は財政的帝國主義者、石油獨占業者、國際銀行家の爲めに偏れる最近我執政者の外交政策の被傭的組織を非難す」と唱破して居る。是れ即ち米國外交機關が資本家に傭はれて居るが如き組織を爲つたのである。斯う云ふ状態ことは實に來るべき米國の對支政策上に現はれることを覺悟しなければならぬのである。

併し新しき外交的活動を見んとするものは獨り米國のみではない、英國も亦然ることを知らなければならぬ。顧るに昨年一月政府を組織し十一月に及んだラムシー、マクドナルド氏を首相とする英國内閣が、其最も力を用ひたものは内政々策であつた、無論外交問題にも意を用ひたるは違ひないが、要は決して資本的帝國主義的、膨張主義的海外發展策と云ふが如きもので[illegible]な材料を有しないけれども、勞働黨に近いもつとも[illegible]的に[illegible]自由黨の指導者であつたと云つても宜しい自由黨の執政に於ても同じやうな現象は見られたのである。過去の歴史に依しても、ラッセル卿の執政時代やグラッドストーン卿の執政時代に於ては、外交問題に對するよりも特に内政問題に重きを置いた、從つて對外硬論やら海外に於ける自國勢力を極端に擴張せんとするが如き活動は見られなかつたのである。而して此傾向は勞働黨の執政に於て一層甚しかつたと云つてよい、其一例として新嘉坡に於ける防備策中止の事實に就ても右精神の現はれを見ることが出來る、所が十月二十九日の總選擧は此形成を一變した、その結果保守黨は勞働黨の百五十一名自由黨の四十名に對し實に四百十三名の多數を英國下院に占むるとゝなり、同黨の歴史に於ても議會支配力は絶對的と云つても宜い程度に進んだのである。而して遂に十一月六日統一黨は勞働黨に代り政權を掌握することゝなつたが、之に關聯して我々の知らなければならぬことは、保守主義者である統一黨の執政になると、其外交策も亦[illegible]國勢力の海外大發展を意味する外交活動に大いに力を盡さねば

止まないといふ點である。此事實は明かに過去の同黨の歷史が示して居る、即ち十九世紀に於て英國外交が對外活躍を爲し、外國に於ける勢力增進に最も力を盡したものは例のパーマーストーン執政時代の外交であつた、其後に於て大活動を開始せるものは例のヂスレリー、（ビーコンスフエルド卿）時代の外交であつた、次で現はれた活動はソースベリー卿時代のであつた、而して此種の人物は保守黨に屬し、その執政は統一黨即ち保守黨の政權掌握時代で、あつたことを記せねばならぬ。自由主義者が內政改善に重きを置き、對外活動を重視せざる傾向あるに反し、保守主義者は常に國內問題よりも國外問題に注意を拂ひ、然も海外に於ける國家勢力の增進に盡したものであつた。這は獨り英國のみならず他の國に於ても同樣傾向を有するが、英國に於て一層其の甚しきを見るのである。從つてボールドウイン新內閣も矢張り之と同樣海外發展就中對東洋活動を開始するものと吾吾は確信して疑は無い。特にボールドウイン首相が十一月十日倫敦市長の晩餐會に臨み、內治外交に關する一大演說を試みたる際、支那問題に言及し對支活動を誓約せることは、最も注目すべき事實である。米國既に對東洋活動を志し、英國亦新政變の結果對支活動派の執政を見るに至れるに鑑み、東洋の風雲一層多事なるを思はねばならぬのである。

斯く云へばとて吾々は日英間の關係良好にあらずと切言するものではない。英國現內閣員中にも相當日本と親善を希望する分子がある。例へば現外務大臣たるオースチン、チエンバーレン氏の如きは、其父たるジヨセフ、チエンバーレン氏が日英同盟最初の主唱者であり、東洋其他遠距離地域に於ける英國の地步を維持するに於ては、該地方に友國を要するとの父の思想を繼承し、久しきに亘つて聲明しつゝあつたと了解せられてゐる。オースチン、チエンバーレン氏最近の所見は知らないが、斯の如き人物が外相の地位に立てることは日本に對して必ずしも不利でない一點ではあるまい乎。併しながら單に右の如き小なる材料を以て英國が親日的政策を執るものと速斷するは必しも正鵠を得たものではない。何となれば英國外交は今や英本國のみの外交でなく帝國の外交である、換言せば英國は加奈陀、濠洲、南阿弗利加等の自治植民地を有し、是等植民地は一九一一年（明治四四年）頃までは唯英本國に從屬せる外交的地位を有せるに過ぎなかつた、彼の英帝國會議と稱するものゝ如き英國植民大臣の召集せる不對等會議であつたのだ。然るに世界大戰に於ける英國領土の活動の結果は、今や其地位を變更し英帝國は南阿前首相スマッツ將軍の所謂對等なる姉妹國民の聯合となつた。而して此事情の變化は一九二一年（大正十年）六月倫敦

にまおた [illegible]

らう。當時從の日英同盟は如きも [illegible]

因は日英同盟は [illegible] からすとは [illegible] たお、英當つて之が廢棄を預期し一時的繼續を希望したと見て宜い。少くとも英米其他の新諒解成立するまでは暫し日英同盟の繼續を希望して居たと信ずべき理由がある。所が之に反對し遂に該同盟繼續を阻止したるものは、加奈陀の力ではなかつたか、之は一例ではあるが英帝國の外交は今や英本國のみによつて決せられず、屬領の勢力與つて大いに力あるに至つた、殊に太平洋に位する濠洲並に加奈陀の主張の如き、東洋問題に關して頗る有力なるものとなつた。此事實は最近種々の事情より親善を加へざるを得なくなつてゐる英米關係と相俟つて、支那問題に於ける日英米の外交狀態を極めて複雜ならしめつゝあることは何としても否認し能はざる所である。

以上は英米の來るべき外交活動に就て述べたのであるが、唯茲に於て吾々の考慮を要するものは、斯の如く列強外交活動の時期に際せるに當つて、我外交的環境が良好ならざることゝその將來に於ける影響である。此一事こそ我國家の現在及び將來に關する大策上からも一段重き事項であらねばならない。予は是れ以上餘り多くを述べないが、帝國の識者は之に就て深く思

[illegible]

五

然らば我外交的環境 [illegible] に [illegible] あるか、是れ實に我外交的の問題であつたのである。予が [illegible] を要する目的は目下の我日本の立場を [illegible] の注意を此問題に就て喚起せんと欲するのであつて、敢て今後に於ける政策を試んとするものではない。但し、試みに少しく所思を附言すると、

（一）我外交當局の活動は、いつも眼界狹小で、遠く且つ廣く注意し無いと言ふ缺點がある、會議などでも、其以外でも、當面の問題を如何にか決定するを以て足れりとし、自己の態度、主張が如何に周圍に反響して居るかと言ふ如きことは考へ無い、從つて外界の對日誤解盛んに生じ、又た生じた後もその儘に放棄せられて居る、又た我外交家の選擇も法官的であつて政治家的では無い、之を改むることは我外交的環境の改善上、最も重要なるものゝ一であらう。

（二）同時に吾々日本國民の外交的訓練を一層徹底せしむる必要を認むるものである。今日我が國民程外交的訓練を有しない國民は少ない、即ち國際的生活に關しては其經驗も無か

いだけそれだけ訓練が出來て居ない。一方國內にありては國家の大策にも添はない突飛且滑稽なる議論行はれ、爲めに帝國外交の眞意を外部に誤解させ、又は其外交の活動を禍したりすることが多い。恰も戰爭前獨逸に於て見た現象も少く無い、是れ亦た吾人が切に、玆に於て、國民の反省をも乞はなければならぬ所である。

(三)今一つは政府が此重大な時期に於て我改善せる對支政策につき今少し明かに之を天下に知らしむることが必要であると思ふ。一度此手段に出ずるに於ては動もすれば軍國主義と目され領土膨脹熱に驅られ居るかの如く見られし誤解を說くことゝなり、啻だ之のみで無く、延いて其他の各種の點に於て、日本が既に受け若くは將に受けんとしつゝある不評判を一掃することも出來やうと思ふ。

之は差當り思ひ浮べたものを記したのであるが、我外交的環境の改善策につきては、猶ほ江湖先達と共に徹底的に考慮し且つ之が匡正救治の策を講ぜねばならぬと信ずる、從つて玆に新しき年を迎ふるに當つては、予は先づ江湖の諸賢が日本の國際的地位に就て、深く深く考慮を拂はるれば幸ひ尠からずと思ふものである。

國民經濟力の整頓と財政及び行政の整理

法學博士 渡邊鐵藏

(一) 政策の轉回期

現內閣は目下財政及び行政の整理に沒頭して居るやうであるが、我國の政治、經濟、財政は、今や總ゆる方面に於て整理、改

革を必要とする[illegible]にある。大正十[illegible]。政策を實行することが、政治並びに經濟[illegible]に於ける最も重要な仕事となるであらう。現内閣としては[illegible]十年やうやくにして政權を掌握した時に於て、將に戰後の經濟界の不況並びに大震災後の大打撃に對抗するために、其經濟政策及び財政計畫に於て、頗る困難な境遇に立ち、又加ふるに貴衆兩院の制度改革、其他政治上の難問題を控へ、且又對米問題、支那の紛亂、等頗る多事の狀況に在つて、其仕事の總てが困難である許りでなく多くは人を喜ばせることの出來ないものか、或は或方面から憎まれる惧れのあるもの、又政治的危險の伴ふ問題が多いのであるから、現内閣は餘り巡のよくない時機に廻り合せたものと云はねばならぬ。其上現内閣は所謂三派聯立であるために、各方面の政策を遂行する上に於て、現在及び將來の各派の利害並びに從來の行掛り上からまゝ歩調を一にし難いことのあるのは當然のことである。内部の足並を揃へながら、外部に對して强い、而も苦い政策を强行することは餘程の勇氣と手腕を必要とする。之等の點から考へれば現内閣は寔に不運な廻り合せであるが、併しそれは恐らく憲政會を中心とする内閣の宿命であつたのであらう。

政友會内閣は戰時、戰後の經濟界好況の順調に乘じて、其經[illegible]自ら[illegible]なものであつたために、[illegible]負擔[illegible]の[illegible]に[illegible]の計[illegible]事業、其他各般の方面に於て放漫的の政策を採り入れたことは、政府として極めて好都合であり、幸運であつたのみならず、其背後に在る政黨並びにそれを組織する個人も政治上の勢力に於て又物質的の方面に於ても利益ある處が多かつたに相違ない。又政治上に於ても貴族院の大多數と密接な關係に在つて、政權の維持、政策の遂行に便益を得たことは是れ又大なる幸運であつた。從つて此政黨に反對の立場に在るものが、政權を掌握した場合には、經濟政策並びに財政計畫に於て、殊に政治上の勢力の所在、及び制度に就いて當然大改革を行はねばならぬ勞にあると云ひ得る。殊に政友會の天下が十年も經續し、且つ經濟界の不況、財政困難の轉回期に遭遇したのであるから、總ゆる政策が根本的に從來と異らねばならぬことは自明の理である。憲政會としては困難な破目であるかも知れぬが、我國の經濟も財政も、政治も總て全然變つた主義方針の内閣の出現を待つて居たのであつて、而も其要求の存在は自ら大正十三年五月の總選擧に現れて居るのであるから、如何に難事であつても、現内閣としては其存立の使命である政治上の改革は勿論、財政整理、行政整理、並びに經濟界の整頓等の諸政策を斷行せねばなら

ぬ。憲政會としても此際短くとも太く行ふことが將來の大を爲す所以ではなからうか。

(二) 經濟界の難境

大正七年にヨーロッパの大戰爭が終了した後も、約一年餘りの間我國の經濟界は引續いて好況を示して居たが、之れは日清戰爭後、日露戰爭後も同樣の狀態であつて、殊に今回の如き大戰爭にあつては、人の出入、財貨の移動も、戰後或る期間は繁激である故、經濟界の實質的好景氣が數ヶ月間繼續することは豫想し得る。且つ從來の取引の惰性、及び生產者、商人等の心理作用の爲めに、更に或る期間の間形式上の好景氣が續くことも豫想し得る。形式上の好景氣とは投機的の取引と、之に伴ふ價格の騰貴を意味するのである。乍併火が消えれば殘る煙も間もなく消散する。財貨の需要、生產の激增、價格の騰貴、收益並びに收入の增加等好景氣の原因をなしたものは即ち彼の大戰爭であるから、それが終熄すれば、火の消えた如く好景氣の消え去ることは當然である。然し火の消える時に一時煙が高く上る如く、孰れの國でも好景氣の斷末魔には不自然な好景氣の狀態が現はれるものである。大正八年末より、九年三月迄の經濟界の狀態はそれである。然るに大正九年三月の最高物價指數を最後として、各國共一齊に物貨が急落し初めた。大正三年開戰當時の物價を百とすれば、大正九年三月の物貨指數は東京——三三八、ロンドン——三二六、ニユーヨーク——二四〇の最高點に達し、九年四月より各國共に物價が急激に下落し初めて、大正十三年十月の物貨指數は東京——二二四、ニユーヨーク——一五〇、ロンドンは九月の指數が一八四である。即ち英國では開戰當時と現在を比較すれば物價は約八割の騰貴であり、而も之を生活の必要品のみに就いて見れば六七割の騰貴に過ぎぬ。殊に米國は僅かに五割の騰貴に過ぎないに拘らず、我國では十二割强の騰貴を持續してゐる。而して大正九年に於いては、物價の高さは英、日、米の順であつたが、大正十年以來日、英、米の順になり、今日に至る迄我國の物價は絕えず英、米の上にある。

戰爭の終了に依つて我國は戰時中偶然に得た輸出市場を失つて、輸出貿易の減退することは當然の事であるが、加ふるに右の如く各國との物價の關係に依り、財貨は價の高き方面に向つて流れる原則に從つて、我國への輸入の增進すべきことは當然である。從つて戰爭中の輸出超過の勢は戰後忽ちに變じて大正九年よりは巨額の輸入超過が引續て現れ、大正十二年の震災後は益々輸入が激增して、結局戰時の出超總計十四億八百萬圓に對

して、[illegible]大正十三年十一月末迄に二十一億[illegible]千二百萬圓[illegible]輸入超過を生じ、差引八億三千五百萬の輸入超過を生じて居る。十三年十一、二月の出超を見込しても猶結局大正三年より十三年末までに、我國は約八億圓の輸入超過を見ることになる。此數字は國民がよく記憶して居らねばならぬ。

戰後好況時代には巨額の海運賃、傭船料收入あつて、或年は二億圓に達したとも稱せられて居るが、現在之れが激減して居ることは云ふまでもない。而して毎年六千萬圓の外債支拂をなして居るのであるから、開戰當時の約三億圓より大正九年末に最高二十一億八千萬圓に達した我國の正貨が激減せねばならぬことは疑もなきことである。大正十三年三月の現在に依れば、正貨總額十六億（內地十二億、海外四億）に減じて居る。但し各種の國際貸借勘定を綜合して考へれば正貨の減じ方が割合に尠いが、之は金の輸出禁止の影響と見るべきものであらう。

次に我國の金融市場の狀態を見るに、頗る窮迫、不安定の狀態に在る。先づ全國銀行の勘定に就いて見るに、開戰當時大正三年六月には預金總額二十三億であつたものが、大正十年末には百四億に增加し、八十億強の資金增加があつて、實に國民の資力の激增を示すものと云ひ得るが、同時に之等の資金の貸出のゝ狀況を見れば、資金固定の事實を示して、明かに金融困難[illegible]きを[illegible]の勘定に就いて見るに、預金に對する貸出しの割合は八〇乃至九〇％を常態とし、大正七年末の如きは七九％の低位にあつたものが、大正八年末には八九％、九年末には一〇一％と累進し、十、十一年は大差なく、十二年末には大震災の影響として、預金に於て半年間に四千五百萬圓の減少を見、貸出しに於て二億七千萬圓の增加を見たゝめに、忽にして預金に對する貸出率は一一三％に增加し、大正十三年九月には預金が更に一千三百餘萬圓減少したことゝ、貸出しが更に二億一千五百萬圓增加したゝめに、貸出率は一三三・七の高きに達するやうになつた。此狀況を見ても戰時以來激增した我國の資金は殆んど總て放資され、且つ大部分が固定して其率が增加する傾向にあること明かである。殊に震災後其傾向が著るしくなつたことは止むを得ざることゝ云ひながら最も注目すべきことである。貸出率約一三八％といふに至つては、我國の資本市場に於ては、最早我國の經濟界の需要並びに政府財政の要求に對して供給すべき餘力を有しないものと思はねばならぬ。

資本市場に於ける放資過剩、資金固定の狀況は金利が明かに之れを語る。金利は即ち資金の價格を表示するものであるから、資金が潤澤であれば安く、窮屈であれば高くなる。金

は、理由の説明は玆に省くが、絶えず昇つたり下つたりして居るもので、而も一定期間其上下を續ける。我國に於ける明治二十六年以來存在して居る統計に依れば、東京に於ける市場割引歩合は凡そ二年間騰貴を續けて、又二年間下落を續け、此形を繰り返して居るやうで、而て金利は一般に漸次低くなる傾向に在り、明治四十三年に最低の點に達した。然し日露戰後の外債輸入と、其元利償還の關係に依つて、金利は明治四十四年、五年と騰貴を續け、大正二三年は其高い點に金利が居据つて居た。二年間も高い點に金利が一定することは我國の最初の例であるが、大正三年開戰と共に我國の經濟界の好調は資金を豐富ならしめ、金利は立板に水を流すやうに下り初めて止まる處を知らず、大正五年に於て最低位に達した。六年より金利はじりじりと上り初め、八年秋より上騰の勢を急にし、九年三月に至つて最高頂に達し、彼の經濟界の大恐慌を惹起したのである。其後金利は幾分下つたが、猶現在に至るまで五年間引續き大正二三年の高利時代より遙かに高い點に止まり、目下日歩二錢七八厘、即ち一割見當の高い金利である。之れを外國の金利四五分と比較すれば、其差頗る大にして、我國の事業家の金利の高きに苦むことは當然のことゝ云はねばならぬ。

次に我國の勞働市場の状況に就いて見るに勞働賃金は明治三十三年十月の指數を百とすれば、東京に於ては開戰當時大正三年までの十五年間に僅かに三割四分の騰貴を見たに過ぎないが、大正九年には四二三%となり、三十二割の騰貴を來して居る。開戰當時から見れば約三十割の騰貴と見るべきである。而も其後一向下落の樣なく、大正十一年に至つては更に二割強の騰貴をなし、十二年に至つても亦騰貴した傾がある。即ち物價は開戰當時と現在では十二割の騰貴であるが、勞銀は三十數割の騰貴を示して居る譯である。此勞銀の異常に高いことは恐らく我國の事業家の最も苦痛とする處に相違ない。大正九年までの賃銀騰貴は從來不良であつた我國の勞働者の賃金の増加として當然と見得るが、其後震災後の騰貴は當然として、それまで幾分でも騰貴を續けたことは、其原因の説明は玆に省くが、之れは異常な現象と云はねばならぬ。外國に於ては何れも物價の大下落より少し遲れて賃金の低下を來し、英國の勞働者の如きは大正十年、十一年の二年間收入甚しく減少し、其總額五十餘億圓に上つて居る。之れは勿論賃金の決定に關して、企業家と勞働組合との間に多年の間に出來た勞銀縮減に關する約定と慣習があるためであるが、それにしても我國の状況は餘りに隱隔てゝ居る。

右の事實を玆に總括して考へるのに、我國の物價の比較的に

高いことに[illegible]のみならず、一國の我國の生産費を昂進する。而に我國の金利や[illegible]がかやうに高く、勞賃が又甚だ高いことは、我國の生産原料を大部分外國より輸入せねばならぬことゝ相俟つて、經濟學上の所謂比較生産費が我國に於て高い結果となる故に內地需要品の製造工業の不振であるべきことは勿論、輸出品の製造工業が殊に最も窮境に立ち入るべきことは疑を容れぬことである。

(三) 一條の活路

大戰爭後の我國の經濟狀態は右の如く貿易、生産、金融、各方面共甚しく不況の狀態を繼續し來り、何時恢復する共全く見當が付かなかつたが　其上に先般の大地震が襲來して、約六七十億圓の物質的損害を加へ、且つ我國の生産能力、國民所得に大打擊を加へたのであるから、我國の經濟界は益々窮乏し、從つて國民の負擔能力も減少し、國家の財政が益々困難な狀態に陷ることは疑を容れない。斯かる時期に當つては、國民の經濟力の恢復と財政の基礎を鞏固にするため種々の手段が講究されねばならぬが、固より積極的に繁榮の途を見出し得る筈はな[illegible]經濟界の整頓恢復を計らんとしても、如何なる政策をとつても、人為的に[illegible]得るならば[illegible]の恢復は唯に時の經過を待つの外はない。[illegible]ものである。然しながら拱手して其[illegible]とも、自ら斯かる際に處して爲すべきことはある。政府が率先し實行し居る消費節約及び奢侈品の輸入防止の如きは固より消極的のものであり、其效果の大きさも不判明であるが精神としては固より好いことに相違ない。但し先般の輸入關稅品目全般に就いて是認する意味ではない。尚生産者は勿論消費者も亦資本の蓄積を計つて資本市場が漸次豐富となつて金利の低下を見る程度になれば、茲に景氣恢復の曙光が現はれる。現在の高い金利は一般我國の經濟界に對する警戒を與へる自然的のバロメーターであり、同時に資本市場を[illegible]する誘因となるのであるから、之れに對し人爲的の方策を加へるよりは、寧ろ資本の自然的蓄積に依つて金融市場の自ら恢復するを待つの外はない。

貿易の振興、生産增進は固より政府の經濟政策に依つて強く之れを左右し得るものではない。總て其國の生産條件如何に依つて左右されるものである。我國の生産費が目下高賃金、高金利の爲めに甚だ不利な狀態に在り加ふるに我國の自然、富[illegible]頗る貧弱の狀態に在るのであるから、外國との比較生産[illegible]

てゞ從來より更に不利益な狀態になつて居ることは明かである。經濟學の入門に云ふ自然、勞力、資本の三生產要素の、生產に對して最も重要なる事は絕えず變らない。且絕對的な力を持つて居る。今や望み得る處は科學の利用及び經營の力に依つて生產費の低下を計るの外はないが、之れすら固より歐米に一籌を輸する次第で、殊に經營の點に於ては、企業者間並びに國家間の生產競爭の激しい歐米にあつては、最近數年來異常の發達をなし、能率增進、生產費の低下は、經濟の學問の方面でも、實際界に於ても、熱心に研究されて居る次第である。平素の生活に於ても、不合理な點、浪費の多い我國に於ては、企業界に於ても同一の狀況が存在する故、特に此機會に於て、經營に就いて十分の改革を行はねばならぬ。經濟界の好況の際には、放漫の經營も多少の浪費も、影響を感ずること少いが斯かる不況の際に於てこそ、此點に關して十分の注意を用ふべきである。經營の改良は單に個々の事業の利益のみではない。之れに依つて生じた生產費の低下は、直ちに其國の生產業が他の國の生產業と相對するに當つて有利となる。又それは一般消費者のためにも利益と云ひ得る。

假りに十數年の後に今回の大震災の復舊が完成したとて、それは只國民の從來の生產能力及び收益力、所得を恢復し得たに過ぎないのであるから、少くとも其時まで國民の生產力擔力は明かに從來より弱いものと見ねばならぬ。殊に右の消費節約、資本市場の涵養、能率增進、經營の改革に依つて、幾分生產及び貿易の勢力を恢復し得るとしても、其程度は甚だ低いものである。從つて我々は今後少くとも十年間位は臥薪嘗膽、國民經濟の實力の自然的復活及び國民の負擔能力の恢復を待たねばならぬ。

(四) 財政整理

經濟界の不況が直ちに國民の負擔能力に影響し、政府及び公共團體の財政に影響することは云ふを待たないが、戰後の經濟界不況の進行と共に、直ちに民間には豫算削減の聲が勃興し、或は豫算二割大引論が行はれ、又事實に於ても政府は大正十年以來或程度迄此精神に基いて緊縮方針を執つて居た。乍併今回の如き大災害に遭遇しては國民の負擔能力の激減することは當然であり、罹災地に於ては既に租稅の減免も實行された。此故に一層豫算に對して緊縮を行はねばならぬ理由は明白に存在する。現內閣は財政整理を標榜して大藏大臣が之れに熱中して其主張を固持することは正に理の當然である。

財政整理は單に事業關係及び物質の節約のみに依つて行ひ得

べきものではない。[illegible]從つて自ら行政整理の必要を生ずるものである。

政府が財政整理を行ふ理由は、第一には戰後の不景氣に依る國民負擔の減少に對し一層の考慮を拂すこと、第二には震災の損害に依る負擔力の減少に備へること、第三には右と關係なく從來より認められた各會計の制度の改革、並びに出來得る限りの節約等に基くものであらうが、之れと同時に行はれる行政整理は、第一には財政整理に必然伴つて行れるべきものであるが、然し其他、第二には、此機會に制度組織の整理改革、人物の淘汰、新陳代謝を行はんとするものであらう。後者には固より整理並びに停滯を疏通する意味が主であらうが、一部分には政治的意味もあらう。我國の總豫算は明治三十五年には經常、臨時を合せて決算額約三億に過ぎず、大正元年度は六億弱であつて、此十年間に僅かに三億の增加を見たに過ぎない。而て大正三年開戰の年の豫算は、決算額六億五千萬圓弱であつたが、大正九年には十三億六千萬となり、僅かに六年間に七億圓弱の增加を見、其後絕えず緊縮方針が執られたに拘はらず、大正十三年度の實行豫算は經常部、臨時部合して十六億一千萬圓の巨額に達し、開戰當時より見て、十年間に約十億圓、即ち每年約一億の割で增加して居る計算である。若し此儘にて逐年豫算が増大するに於ては、[illegible]たのである。[illegible]整理を企てたのであらうが、政府は[illegible]十三年度の豫算に[illegible]して整理、緊縮を加へ、十三年十月末の閣議で決定した處に依れば、一般會計、經常部に於て約六百萬圓、臨時部に於て約二千四百萬圓、合計三千萬圓、並びに特別會計經常部に於て千四百七十萬圓、臨時部に於て二百三十萬圓合計千七百萬圓、即ち一般、特別會計合して四千七百萬圓の整理を行ふことを決定し、更に十四年度の豫算作製に當つても極力整理繰延を企て、各省の新規要求額總額二億圓の巨額に達したものに斷然たる斧鉞を加へて、僅かに四千數百萬圓を認めたに止まり、結局十一月十九日の閣議で大正十四年度の總豫算歲出の部は、經常部十億九百萬圓、臨時部五億二千四百萬圓、合計十五億三千三百萬圓に決定した。此歲出金額は十三年度の實行豫算歲出十六億一千三百萬圓に比較すれば、僅かに八千萬圓、即ち五分の減額に過ぎないのであるが、今回の行政整理並びに、之れに依る財政整理の結果として一般特別兩會計に於て節減若くは繰延された金額として右の閣議で決定された數字は次のやうに發表されて居る。即ち一般會計に於ては經常部の節減額五千四百萬圓强、臨時部千百萬圓强、合計六千六百萬圓、之れに臨時部の繰延額、

千五百萬圓餘を加へて整理額合計一億五千二百萬圓、特別會計に於ては十八の特別會計に整理を加へ、節減額四千九百萬圓餘、繰延額千五百萬圓、合計六千四百萬圓、他に鐵道特別會計に於て節減繰延合せて三千五百萬圓即ち一般特別兩會計に於ける節減繰延額は約二億五千百萬圓に達し、內節減額は一億一千六百萬圓となつて居る。要するに現內閣は十三年度に於て既記の如く四千七百萬圓の整理を行ひ、更に十四年度豫算に於て右の如き整理を行はんとするものである。

前年度の一般會計歲出豫算十六億に對して一億五千二百萬圓の整理額は一割弱のものであり、殊に特別會計に於ける整理額は一億圓に過ぎず、猶少きの憾みはあるが、最も強力な內閣を以つしても、行政、財政の整理は困難な事業であり、殊に現內閣の如く三派聯立の內憂ある內閣に於ては、それ丈けの整理額を得たことは先づ一應の成功と認むべきものではなからうか。特別會計は一層の整理が望ましいことではあるが、數十の會計が各々獨立して居る關係上、一般會計の如く整理容易ならず、比較的小額の整理に終つたものと認めねばなるまい。戰爭後の物價騰貴は自ら豫算の膨脹を來す傾向もあるのであるから開戰當時六億の一般會計歲出が十六億になつたとて、固より政府事業の無益の擴張又は濫費とは見ることは出來ないが、戰後の經濟界の不況、大震災等に依る國民負擔力の減少、並びに近き將來に於ける國民の生產、收益の增進を望み得ないとすれば、政府の歲出も今回の整理に止まらず、出來得る丈け節約の方針に出ることは、政府財政の基礎を鞏固にする點よりも、又國民の資力を恢復する點からも望ましいことである。

豫算額中常に巨額を占めるものは陸海軍費であつて、大正十三年度の實行豫算に於ては、經常、臨時合せて約四億五千萬十四年度の豫算に於ては四億一千八百萬圓であつて、約三千二百萬圓の節約が行はれんとして居るやうであるが、猶十四年度の豫算に於ても陸海軍費は一般會計に於て共二七%を占め、豫算に最も大なる影響を與へるものであるから、震災の影響として約七十億の損失を見たる今日少くとも五年間位は、出來得る丈け國防費を節約しても震災に依る我國の經濟力の破壞の迅速なる復興を計るべきではないかと思ふ。固より國防は非常の際には單に國民の經濟力、負擔力を顧慮して居られぬものであるが、平時に於ては常に之れを顧慮する必要があり、殊に目下の如く國民の經濟力、政府の財政力が困窮の地位に在る時に當つては、寧ろ軍備こそ第一に進んで大なる節約整理を引受くべき地位にあるものではなからうか。國の實力、國民の幸福を離れて國防があり得るものではない。我々門外漢は固より最少限度

つて[illegible]を確立し得るものではないが、現今の[illegible]に於ては[illegible]措置、又我國民の覺悟に於ける[illegible]に見ても、[illegible]支那の動亂、日露支間等外交的紛擾を來し得べき多少の事態はありとしても、積極的に軍備を利用すべき緊急な事態の起り得ることは想像し得られぬ。國際關係の緊急状態は、現今の如く國際間の監視の嚴なる中に於ては、一方のみの發動に依つて起り得べきものではない。强いて事を求めず、自重の態度を執れば、固より輕々しく衝突の生ずべきものではない。況んや目前我國が大戰敗にも勝る災害を被つて居る際であれば、目前の軍備よりは目前に國民生活及び國民經濟力の復活こそ最も急務とすべきではなからうか。飛行機其他必要な新軍備は、固より完備せねばならぬが、斯かる國家非常の際に於て、軍事當局が其財産の利用、豫算の請求に於て、國民の經濟力、國家の財政力を考慮して、出來得る限りの好意を以て進んで整理、節約に誠意を示すことは國民として最も望ましいことである。

假りに一の例を擧げて見れば、陸軍數個師團を減少し、軍艦二三隻の建造を見合せたとしても、其代りに東京、大阪市其他大都市の耐火建築が實現するとすれば、國民生活と財産の安全、及び國の生産力の保護の爲めにどれほど利益であらうか。國の防備といふ點から云つても果して孰れの方が大切であらうか。[illegible]であるが、[illegible]者は、又[illegible]時、一[illegible]して貰ひたい。私が曾て大正八年の[illegible]の大火を見て得た感想と同じ感想を、何故に今回の大地震に基く大火災のために、數十億の財産の損害を受けた際に、我國の政治家並びに一般國民が感得しないのであらうか。或國との戰爭を假想して、假へ我海軍が敵艦を絶滅し、敵の陸軍を撃破したとしても、其代りに東京、大阪、其他の大都市を敵のために空中より焼き拂はれたとしたならば、戰は勝つたのであらうか、負けたのであらうか。私は必しも決して戰時を惧れて此言を繰返す次第でない。今回の地震後の大火災を見て、數年來の切實な感じを更に／＼深く强くしたゝめに、執拗に此言を繰返すのである。帝都を初め、大阪其他の大都市の建築を漸次耐火式に改革することの急務なることに就いて、我國の政治家や一般國民が明確に覺醒するまでは、總ゆる機會に於て私の此言葉を繰返したいと思ふ。

（五）行政整理

現内閣は財政整理と共に行政整理を行つた。然し、行政整理は現内閣が財政整理の絶對的必要を感得しなかつたならば恐ら

く行はなかつたのであらう。行政整理は財政整理の一の手段である。行政組織の改革の問題は自ら所謂行政整理と異つた意味のものとして考へねばならぬ。政府が行政整理を行ふことは、行詰つた財政を整理するために、一方に於て涙を呑んで斷行するものであらうが、又時を隔てゝ偶に行政整理を行ふことは、老朽無能を淘汰するに適當の機會を與へ、新陳代謝の作用を發揮して有爲の新人のために途を開くに利益があると云ひ得る。乍併今回の如き行政整理は輕々しく行ふべきものではなく、又其範圍方法に就いては愼重の注意を要し、殊に何處までも人情を忘れざるものでなければならぬ。官私を問はず、人の職に就くや、其職を樂むと共に、之れを生計の源として之れに依賴するものである。單に一時の財政の爲め、一時の損益の爲めに其人の職を奪ふことは私人の事業に於ても甚しく不德義であり、不人情なことであるが、其理は國の官職に在る者に對しても同一である。殊に我國の官人は一般の事業界の者より收入の少いは勿論、他國の官吏に比較して大いに廉潔の德があるのであるから、突如として職を奪はれた場合には途方に迷ふ者が多數である。整理の方法が人情味を缺いて「官仕への悲哀」を感ぜしむるやうになつては誠に不本意のことである。然し上に述べ來つた如く、國の經濟、財政の困窮の境に陷入つたゝめに、之れを救濟する爲めとあれば、或程度まで人の整理も止むを得な が、出來得る限り財政整理の目的を事業と物の整理に求めて、人の整理に關しては、止むを得ざる場合か、特に明かな必要ある場合でなければ、出來る丈け之れを容赦すべきではなからうか。殊に目下の如く經濟界苦境の際には、從來實業方面にあつた者でさへ多々失職者が生じて居る。其上に今回の行政整理に依つて職を奪はれると稱せられる數萬の人を吸收、消化し得る力は甚だ小いことであらう。但し國の負擔に於て用少き人を養ふより、私人の力に於て之れを養ふ方が正しいと云ひ得るであらうが、突如として官職を失つた人が、若し直ちに生計の途を求め得なかつた場合には、之れ又或場合には國の責任となり、又何等かの費用支出の原因ともなるであらう。それをも政府が考慮せず、失職者を路頭に迷はす如き不人情なことは固より爲すべきことでない。要するに既に行政整理の決定された以上は、失職者の生計を保障するために、又其恨みを買はざるために、政府としては十分の待遇を與へねばなるまい。

失業救濟の制度殊に失業保險でもあれば、斯かる際には餘程有効に働き得るであらうが、失業保險は歐洲の先進國でも割に新しい發達である。元來失業問題は盛衰浮沈の甚しい經濟社會、殊に製造工業に從事する者の間に起るのである。從つて工

[illegible]者に屢々多數の失業者の起るやうな國に於て、[illegible]失業保險の制度が發達するのであつて、獨逸の如き、英吉利の如き夫れである。英國の如きも二〇%の失職數を見た千九百二十年に於て、初めて失業保險の制度が實現されたのであるから、我國に失業保險の制度がないからとて、それ程遲きを責めることも出來ぬ。殊に數多の官吏が職を失ふ如きことは、到底平常の時機に於て起り得ざることとである。從つて今回の失業の例を見て直ちに失業保險の實行を叫ぶ論據とはならぬが、少くとも失業の當面の救濟殊に職業紹介の手段に就いては、幸ひ數年前から政府が着目し、施設し來つた職業紹介の設備其他を利用して十分に救濟の途を講ぜねばなるまい。

行政整理に依つて數多の失業者が生じた。而て數年來既に實業界よりの多數の失業者が諸方に不安定の生活を營んで居る。更に多數の專門學校は毎年數多の卒業生を社會に送り出して居る。其の一部分は未だ一度も職を得ずして而も失業者である。斯くの如き狀態は或は戰後經濟界の不況及び大震災後に於ける民間並びに政府の事業と、財政の都合に依るものと解することが出來やうが、併し翻つて悉しく之れを考へれば、單に此數年間の國の生産力及び國民の資力の恢復の期間のみ此苦痛を忍ばねばならぬものと輕く考へることは出來ぬ。土地富源と資本に乏しき我國に於ては、[illegible]ぜられざる限りは、努力は[illegible]、[illegible]强きと共に、往々努力の過剩、否、科學上の努力と[illegible]ざる人口の過剩のために苦むべきことは餘りに明かな事實である。土地富源の豐富な英、米や、南米、濠洲等に於ては其自然を容易に生活に利用し、又資本も容易に積み得るであらうが、津々浦浦の果てまで、山の中腹まで耕された我國に於ては、假へ數年の後に震災の痛苦から恢復することはあつても、猶「貧しき小島國の悲哀」は永く全國民が味はねばならぬことであらう。「農村の窮迫」「中流階級の困窮」「卒業生の過剩」「官吏失職」、此先きに多々是れに似たやうな現象が生ずるであらうが、極りなき文明に對する要求と、人と物との分量の不均衡な關係は、段々此厭な現象を我國の社會に於て、深く、廣くして行くかと思へば甚だ心細い氣持がする。

大正十四年の初頭に當つて、餘りに陰氣な悲觀論を述べることとは甚だ本意でないが、人和すれば天に勝つ、震災後の復興も、又困難な我國の經濟、財政の轉回も、又一般社會生活の改善も、個人の努力、政治の改革に依つて或程度まで實現し得ることを思ふて、世人と共に將來の國運の展開を希望する次第である。

學生の社會意識と當局の階級的專制

社會科學研究團體に對する文部省の壓迫

大山郁夫

一　暴戻なる抑壓主義の教育政策

近來、文部當局が、その對學生問題の處置に於て、事毎に機宜を誤まり、際限もなく醜態を暴露してゐる有樣は、多くの傍觀者をして、坐ろに憐愍の情を催さしめるものがある。が、彼等としては、別に彼等自身の態度の醜陋さに氣附かないで、平氣で濟まして居るかも知れないばかりでなく、寧ろ得意にさへなつてゐるかも知れないことが推測し得られる根據も、決してない譯ではない。若しさうだとすると、新時代の文教當事者としての使命に對する彼等の無感覺の程度は、沙汰の限りだと言はなければならないのである。

素より、この頃の重大問題の一つであるところの、例の軍事教育問題に關聯しては、恰かも軍閥の手先きであるかのやうな言動を憶面もなく公演し、しかもそれの肯定の根據を示すためには、武裝平和論と言つたやうな、今日では生粹の軍閥の代表者たちさへも口頭に上ぼすのを憚るゐやうな意見を、事もなげに發表することを躊躇しないやうな岡田文相を主腦として戴いてゐる文部省が、若き學生たちを向ふに廻して、極度に無理解な態度を示して居るのは、別に不思議とすべきほどのことでもない。――と、このやうに言つてしまへば、それまでのことである。けれども、この際文部當局のさうした態度の社會的影響の相當に廣大なもののあるべきことを考へるときには、私たちは、それをそのまゝ默殺に附してしまふことが出來ないことを、痛感せしめられないで居られないのである。

かういふことの一例として、私は、最近一二の新聞紙に依つて報道された通りの、學生の社會科學研究團體に對する文部當局の壓迫の事實を擧げたい。十二月五日の『報知』の朝刊の一記事によれば、去る十一月末に擧行された全國高等學校長會議

て、右の各高等學校内の社會科學研究會[illegible]に、左傾的に見える諸團體の徹底的一掃が議決されたが、去る十二月一日、熊本市の五高校長溝淵進馬氏は、突如文部大臣の名によつて、同校内の社會科學研究會に解散を命じ、且つこれを全國の高等學校に通牒して、各校の奮起を促した、といふことである。また、右の記事の出た數日前に、岡山市の六高でも、同校の生徒監が、校内の社會科學研究會に解散命令の内意を傳へた、といはれてゐる。その後私たちが直接に手にした情報によると、三高、八高及び同志社内の社會科學研究團體も、同様の暴壓の犠牲となり、また一高内の社會思想研究會は、對外運動をしないといふ條件の下に於て、纔かに解散の運命を免れた、といふことである。

素より、新聞紙のこれらの報道の中には、多少の錯誤がないにも限らないことは、私たちに於てもそれを認めていい。就中、右の『報知』の記事に見えたところの學生の社會科學研究團體などへの彈壓の件に關する全國高等學校長會議での議決が果してどの程度にまで及んだものであるかは、幾分精細な調査の餘地がある様に、私たちには考へられる。(一説には、この案件は、そこで否決されたとも傳へられてゐる。)それからまた、上掲の各高等學校に於ける社會科學研究團體に對する解散の命令が、文部省から[illegible]に出たものか、[illegible]的に出したものかは、私たちにはまだはつきりしてゐない。けれども、新聞紙上のこれ等の報道は、假し、その[illegible]に多少の誤謬が含まれてゐないに限らないにもせよ、根本的には決して的を外づれてゐるものでない、と信じられる根據がある。殊に、右の各高等學校に於ける學生の社會科學研究團體に對する解散命令が、縱し直接に文部省から出たものでないにもせよ、少くとも文部省に依つて認定されてゐるものだ、といふことだけは、確かである。いづれにせよ、文部省からそれに對する取消しが出ない限りは、我々はさう信じて差閊がないばかりでなく、さう信じるのが正當だ、とさへ言ひ得られるのである。文部省の吏僚たちは、或は、一々さうした報道の取消しに掛つては居られない、と言つたやうな逃げ口上を構へるかも知れない。さういふことは、官人心理から見て、如何にもありさうなことである。といふのは、さういふことは、法制上權能のあることなら、そのことの政策上の當否如何に拘らず、何でも出來るものだ、とのやうに、動もすれば妄斷しがちな彼等の心的習慣と、相互に表裏をなしてゐるものだからである。けれども、私が今取り合つてゐる様な、社會的影響の極めて重大な問題に關する新聞記事に對しては、若しそれが幾分でも

つて居るならば、文部省は、それ自身の對世間的道德的義務としても、當然取消し若くは訂正を試みなければならないものである。我々が一國の文敎の府である文部省から、それだけの勞を期待するのは、決して過大の注文である筈はないのである。

けれども、多くの場合に於て驚くべき蟲の好さを示す文部當局は、それに關しては必ずしもさうは考へて居ないやうである。それ故に、たとへば軍事敎育問題に關して世論が沸騰し始め來ると、彼等は、一部の評論家たちが、その具體案のまだ公表されないうちから、兎や角と難癖を附けるのは間違つてゐる、と言つたやうな不平を陰口に漏らすやうなことをしたのである。ああした計畫に嚴正批判を加へる社會的義務を鋭く感じてゐる論者たちは、文部當局や軍務當局の望み通りの時まで議論を差控へようとするほども、それほども悠長な氣持で居られるものではない。さういふことをしてゐると、肝腎な時機を失する虞れがないとは言へない。それ故に、苟しくも、その計畫の根本的要點が知られた以上は、縱しそれに關する具體案が出されるに至らない時でも、少くともその根本要點に向つて、彼等が批判の言葉を向けることは、そこに何等の不都合な點がないのである。そして、苟しくも彼等が、それを否認する限りに於て、容赦なくそれを糺彈することもまた、當然すぎるほどの當然である。で、萬一その具體案が愈よ公表された曉に於彼等が論難した點がその案から引込められてゐるのを見た彼等は彼等の批判が有效であつたことに滿足を感ずるまでのことである。また萬一、彼等が論難した點が、當初から當事者の計畫の中になかつたことが證明されたら、彼等はその點が彼等の誤認であつたことを喜ぶほどの、襟懷の公明さを示していいのである。のみならず、彼等の批判が事實の誤認から出たと否とに拘らず、彼等が論難の的とした點に關して、彼等が彼等自身の意見を公衆の前に陳述する機會を持つたことが、決して無意義なことではなかつた、といふやうなことすらが、當然彼等に考へられる筈のことである。かういふことは、自分達の社會意識の命令に從つて評論に從事するものに取つては、その道德的義務でもあると同時に、その道德的權利でもある。と考へられることである。それを兎や角いふ文部當局こそ、沒分曉の譏を通り越して、卑怯だとも、陋劣だとも言へるのである。殊に、問題の軍事敎育計畫の場合に關しては、それを批難した評論家たちが狙つた諸要點が、當局の具體案の上に、――無論さまざまの誤魔化し的細工の下に於てではあるが、――そのまま姿を現はさうとする可能性の方が、さうでなささうな可能性よりも、一層多くあるといふことは、今では可なり明白になつて

ゐることである。だとすると、我々は更らに一層有効に、右に述べた點を強調することが出來る、と信ずるものである。
　かういふ理由に依つて、私は、學生の社會科學研究團體に對する文部當局の壓迫の本質に關しても亦た、少くとも試驗的に、私たちが新聞紙を通じて、並びに私たちが直接に、得たところの報道を基礎にして、私の意見の一端を次に提出しようとしてゐるものである。

二　理論に對しての力の行使

　文部省は、一體如何なる動機から、學生の社會科學研究團體の上に壓迫を加へ始めたのか？
　この問題に關しては、少くとも二つの解釋が成立ち得る。その第一は、文部省の右の處置は、現在學生間に急速に瀰漫しつつある軍事教育反對運動を阻止しようとする意圖から出て居るものだといふ推測に關聯するものである。その第二は、文部省の右の處置は、一般學生を、現實社會生活事實の觀察、及び現實社會問題の批判から隔離しようとする意圖から出たものだといふ推測に關聯するものである。尤も實際上に於ては、文部省の右の處置が、これらの二つの動機の結合の裡から出たものだと想定するのが、明かに最も自然な解釋とすべきものである

お、しかし私は、[illegible]、それを、[illegible]々に二つの場合に分けて考察しようとしてゐるのである。
　そこで、私はまづ、私の注意を第一の場合に向ける。學生間の軍事教育反對運動が次第に熾烈に赴きつつあることに不安を感じ出した文部省が、その反對運動の火元だと獨り決めに見當をつけた學生の社會科學研究團體の各個に對して、強硬なる壓迫を加へ、場合によつてはその解散を命ずるやうな處置に出でようとするやうになつたことは、ありさうでないことだとはいへないのである。
　無論、道理上からいへば、この際文部省の立場から見て最も賢明な遣り方とすべきことは、軍事教育反對運動に從事してゐる學生たちに向つて、堂々と理論を說き聞かせて、彼等をしてそれに推服せしめることに依つてその反對運動を撤回せしめる途を講じる、といふことでなければならぬ。さうすることが、文部省の存立の根據を提供するところの、所謂「教育の本質」から見ても、當然至極だといはなければならないのである。今日では、小學校教育に於て、個々の學童の惡癖を矯正するためにも、昔のやうに體罰を課するやうなことは、最も非教育的なことになつて來てゐる。ところが、學生の集團運動に對して、

の理否曲直を問はずに、正面から强制力を振り翳して、遮二無二それを阻止しようとするやうなことは、學童の個人的罪惡の矯正のために體罰を用ふるのと、理論上少しも異がつたところがないのである。そして、文部省が自ら率先して斯うした非教育的態度を取るやうになつては、その社會的影響の恐るべきものがあらうことが、誰れにでも容易に豫期し得られるのである。といふのは、文部省は、さうした暴擧に出ることに依つて、すべての問題の最後の解決者は正義感ではなくて、單なる力だといふことの實物教訓を、公衆に與へて居るものだ、といふ譯合になるからである。

けれども、實際上に於ては、問題の軍事教育計畫に關して公衆及び學生の反對論を沈默せしめるに足るほどの堂々たる理論が、文部省の側にあらうと思へない。このことは、それが今日に至るまで、まだ世間に出されてゐないことに依つて、何よりも有力に證明されてゐる。尤も、岡田文相の如きは、他所眼には無鐵砲と見えるほど勇敢に、時々軍事教育計畫の辯護論を試みてゐることは事實である。しかも彼は、その無鐵砲さを、最近に於て彼が直轄學校體育協議會の席上で試みた辯明に於て、最も率直に發揮してゐる。(十一月二十八日『東京朝日』の朝刊參照。)しかし私は、無鐵砲でも何でも、彼が自己の所信(?)を邊り憚らず述べてゐる勇氣には、寧ろ敬意を表したい。けれども、彼の勇氣に敬意を表することと、彼の意見に承認を與へることとが、全然別問題であることは、無論のことである。彼がそこで述べて居ることは、依然として相も變らぬ根據の薄弱な皮相論である、尤も、それがさうした皮相論であればあるだけ、彼の勇氣が一層眼立つ譯であるが、しかし同時に、彼の議論の說服力が、恰度彼の勇氣に逆比例してゐるやうな傾向の見えることは、彼のためには寧ろ笑止千萬なことである。

三　岡田文相の僻論

私はもとより、何の根據もない漫罵に耽つて、獨りよがりをしてゐるものではない。といふことは、彼の右の辯明を讀めば、誰れにでも頷かれることである。即ち、そこでは彼は、まづ第一に、『全國中等學校以上に現役將校を入れて兵式訓練の改善を圖ることになつたについて、世間ではこれを軍事教育の實施なりとして反對するものもある』ことを難じて、單に用語上の相違にすぎないやうな問題にムキになつて拘泥してゐる。次に彼は、『平和を維持する上に軍備を全然度外視する』『一部理想論者の夢想』を攻撃して、武裝平和論を高唱してゐる。それから彼は、國防と軍備とを混同してゐるやうな論據から、豫備將

[illegible]八[illegible]

[illegible]にも均しい[illegible]なことを述べてゐる。かういふところに彼の議論の眼目があるのである。

しかも彼は、國防の見地から問題の軍事教育の必要を說くに際しても、例の彼の愛用の『兵卒は得易く一將は得難し』といつたやうな、國民の個々人の人格を無視して、それを機械視するやうな、野蠻な軍國主義的標語を平氣で使用しては居るが、現在の我國の四圍の事情の變化とか、國際關係の推移とか、軍備と產業と一般文化の關係とか言つたやうな現實問題には、一言も觸れて居らないのである。その辯彼は、問題の軍事教育に反對するものの議論の一切を、軍備絕對無用論の主張と同一の範疇に屬するものと獨り決めに獨斷する樣な口吻を弄して、暗にそれを非現實視するやうな意向を仄めかしてゐるのである。

彼はまた、その辯明のうちに、『學校で兵式訓練をやる結果、從來の一年志願兵の在營年限が短縮されることになるのであるから、學生としては寧ろ一擧兩得といふべきである』といふやうな點を持ち出して、利害感を以て學生たちを釣らうとするやうな陋策に出てゐる。けれども、學生たちが問題の軍事教育計畫に反對してゐるのは、決して區々たる利害感から來てゐるのでなくて、公明なる主義から來てゐるのである。それは私が、

[illegible]

[illegible]

けれども、今度の[illegible]にすることにしても、在營年限短縮の要求は、國民の[illegible]外に於ける生活上の能率の增進の見地から來てゐるものである。ところが學生たちの在學中の長年月に亘つて、精神上及び肉體上過大の負擔を加重する軍事教育を受けることに依つて、學校生活の能率を非常に減退させてまでも、在營年限の短縮の要求を貫徹させようなぞとは、眞面目にこの問題を考慮するものの誰れもが、思ひ及ばないことである。岡田文相は、身を文教の樞機の上に置きながら、何故に斯うした狡猾な誤魔化し的文句を、恥づることなしに使用するのであらうか？

しかし、假りに、岡田文相の言葉の全部を文字通りに受け容れて、それを承認したところで、そこには、世上の反對論の要點に答へたものが、少しも見當らないのである。そこには[illegible]に、陸軍省直屬の現役將校を中等學校以上の諸學校に配屬して、教育の一部を擔任せしめることが、何故に教育の獨立性を脅威するものでないかの論證が與へられてゐない。（陸軍側は、現在我國の教育には事實上獨立性が缺けてゐるのだから、それを今更ら兎や角いふのは間違ひだ、といふやうな議論

てゐる人々があると聞いたが、さうした暴論こそ責講識闘である。現在我國の教育に獨立性が充分にないといふことは、我々から見れば、それを更らに擴大せよと要求する根據にこそなれ、この上更らにそれを蹂躪せよと主張する理由にはならないのである。）そこにはまた、陸軍現役將校が、全體として見て、學校教育上の不適任者でない、といふ要點が闡明されてゐない。そこにはまた、學生の個性の社會生活への自由展開の助長を基調とすべき學校教育が、直屬上官に對する絶對的服從を本旨とする軍事教練とは、主義に於て相容れないものであるといふ根本論に對する駁論が全然示されてゐないのである。更らにまた、假りに我々が、譲歩すべからざる點まで譲歩して、我國の現在の國防的見地から、『平素豫備將校を適當に養つておく』心要があるといふ岡田文相の議論を肯定するにしても、それにしても尚ほ、それ自身に獨特の社會的機能を持つ教育機關を、その目的の下に從屬せしめようといふ主張が、單純にそこからは出て來る筈がないのである。換言すれば、我國の中等學校以上の諸學校の男性學生を擧げて、豫備將校の製造の材料とせようといふ議論が、單純にそこからは出て來る筈がないのである。けれども岡田文相の辯明を論理的に追究してゐると、それは自然とそこへ落ち着かない譯には行かないのである。それ故に、若し彼が自說の理論的徹底を求めようとするならば、は必然的に、教育の軍國主義化の前提から出發しなければならない筈である。ところが、彼としても流石に、さうとは明らさまに言ひ兼ねたと見えて、寧ろ世人が『兵式訓練の改善』を『軍事教育の實施』と誤解してゐることを擧げて、間接にそれが教育の軍國主義化の意圖から出たものでないことを辯明するやうな態度を示してゐるのである。しかも彼は、さうすることが、如何に彼が直ぐ次に持ち出した武裝平和論と矛盾するものであるかを、一切顧みないで居るのである。

文相は無論、かうした矛盾に充ちた不徹底な議論が、到底今日の青年學生を說服する力のないことを、百も承知してゐるであらう。さうであればこそ、彼は彼の議論で學生たちを說服しようと試みる前に、先づ彼が軍事教育反對運動の火元だと考へてゐる學生の社會科學研究團體の上に、抑壓の手を向けようとするのであらう。若しくは、自ら抑壓の手を向けないまでも、それが向けられるのを默認してゐるのであらう。さうでなければ、學生の社會科學研究團體のやうな、寧ろ當局の側から奬勵しなければならない位に我々に考へられるものが、一つ一つと相次いで薙ぎ倒されるやうな蠻行が頻々と演ぜられてゐるのを、文部省が積極的に慫慂しないまでも、消極的に默認してゐ

ことが、我々に[illegible]りに新し、[illegible]それこそ專制政治の[illegible]として、[illegible]に依つて[illegible]なければならない筈だが、それが教育界に於て行はれると、世人が比較的に沈默を守る習慣があるのは、一體何に起因するのであらうか？　これは恐らく、主として、久しく我國の教育界を支配して來た官僚的空氣に依つて、世人の注意が麻痺され切つてゐるところから來てゐるものであらう。それにしても、年來『國民思想の善導』といつたやうな殊勝らしい口を利き續けてゐた文部省が、一旦理論上の說得に依つて青年學生たちを指導することが出來ないと見て取るや否や、忽ち專制政治家の常習を學んで、『力の表示』といふ奥の手を出して、彼等の上に無法な强制の手を加へるか、少くともそれが加へられるのを坐視しようとしてゐるのは、文部省が自らそれ自身の文教の當局者としての資格のないことを表白して居るものでなくて何であらう！

四　抑壓政策の效果の臆測

文部省内の官人たちの中には、流石にかういふ點を氣にしてゐるものがあるらしく見える。といふのは彼等の或るものは、

[illegible]自分[illegible]言してゐるから[illegible]に引用した『報知』の記事に依れば、[illegible]事教育反對の[illegible]と誤解されては困る』と述べてゐる。しかし彼は同時に、目下計劃されつつある軍事教育に於ける兵式教練は『現在の遣り方とはさまで異がはないから、高等學校の生徒が軍事教育實施に反對する理由はないと思ふ。今のところ、それほど猛烈な反對運動が起るやうな報告も受けて居らぬ』と述べてゐる。それ故に、これらの二つの談片を繫ぎ合はせると、彼が一方に於て、軍事教育反對運動を阻止するために學生の社會科學研究團體を壓迫してゐるのでないと言つてゐるのは、學生たちの猛烈な反對運動が起つた報告が來てゐないといふことを前提として述べてゐるだけのものだ、とも解釋し得られるのである。

それにしても粟屋氏が『現在の遣り方とはさまで違はないから、高等學校の生徒が軍事教育實施に反對する理由はない』と言つて居るのは、何といふ白ばくれた物の言ひやうだらう！　我々の耳には、それが輕蔑すべき役人根性から滲じみ出た言ひ草のやうに響くが、實際はどういふものであらうか？　多くの

學生たちが、問題の軍事教育計畫に反對してゐるのは、その遣り方が現在の兵式教練と異がふとか、異がはないとかの問題から來て居るのではないのである。それは恰度、彼等が利害問題からそれに反對してゐるのではないと同じことである。否、彼等は、主義の問題からそれに反對してゐるのである。彼等は、問題の軍事教育の實施が、教育の軍國主義の結果を將來する必然性があるといふ憂慮から、それに反對してゐるのである。しかも岡田文相の辯明は、愈よ出でて、愈よその憂慮の不當でないことを證明してゐてゐるのである。のみならず、軍事教育實施の一結果として、當然陸軍から押し掛け的に遣つて來る筈の現役將校の手に依つて、——そして恐らく彼等に伴つて遣つて來るであらうところの准士官下士官等の助力に依つて、——學生たちの上に成績審査試驗が行はれることになる筈だが、かうして行はれる成績審査試驗が、學生の思想及び研究に對する一種の監督のために濫用され惡用される危險のないものとは、誰れにも保障が出來ないことである。彼等學生たちの本能は、容易にそれを直感することが出來るのである。で、若し彼等がこれを默過すると、彼等は軍閥と稱する一特殊集團の教育界への侵入を、見す見す座視するやうな譯合になるのである。純眞な學生たちの感情が、それに反抗しないで居ることが出來ないのは、決して不自然ではないのである。彼等は、文部省の官人たちのやうに、時々の風向きに應じて、軍閥の傀儡となることに甘んずることが出來るものでないのである。それは彼等學生たちの、生一本な自治的精神の發露である。若し栗屋氏が、これを知らないであゝした生意氣な口を利いたものとすると、それは彼の鈍感から來たものだといはなければならない。若しまた、彼がそれを知りながら言つたものだとすると、彼は柄にもなき横着氣を出したものだといはなければならない。いづれにしても、それが文教の當局者の言葉として不穩當のものであることだけは、一つである。

かう考へて來ると、文部省は、軍事教育反對運動を阻止するために學生の社會科學研究團體を壓迫してゐるものでない、といふ栗屋氏の言葉も、甚だ足許が危ぶなかしいものになつて來るのである。だが、かうした問題を片ッ端から論究してゐては限りがないことだから、それはこの邊で打止めにすることにして、次に私は、茲で一應文部當局の身になつて、さうした壓迫の效果如何の問題を考察して見よう。で、この點で先づ私の結論から先きに述べることにすると、私は、その效果が甚だ稀薄なものであらうと思ふ。少くとも、それは到底、その壓迫が

ら來る〔[illegible]〕の學〔[illegible]〕に對するに〔[illegible]〕ふ。といふのは、先づ第一に、現在の軍事教育反對運動は、文部當局が考へてゐるらしく見える樣に、學生の社會科學研究團體だけに限られたものでなくて、それは更に一層廣い基礎の上に立つてゐるものだからである。それからまた、假りに文部當局が學生の社會科學研究團體を壓迫することに依つて、軍事教育反對運動を阻止することが出來るにしても、彼等はそれに依つて、その反對運動の當事者たちの反對意志そのものを如何ともすることが出來ないことは、言ふまでもないことである。軍事教育への反對意志は、前にも言つた通りに、主義の問題として、彼等學生たちの心頭に深く彫りつけられてゐるものである。そしてそれは、如何なる外部的壓迫手段を以てしても、容易に鎮壓し盡くし得られるものではないのである。素より文部當局は、彼等が現在用ひ得る強制力に依つて、それを押し切つても、軍事教育計畫を遂行することが出來るであらう。けれども、さうして無理遣りに學生の胸裏に押し込められた該計畫への反對意志が、その實施後になつて、何時如何なる機會に乘じて爆發して、我々から見て極めて好しからぬ結果を現出しまいには限らないのである。文部當局は、それに對してだけは、今のうちから覺悟を決めておくのが緊要であらう。

五　學生の社會科學研究への壓迫

以上私は、文部省が學生の〔[illegible]〕加へる傾向を示してゐることが、〔[illegible]〕して、その點だけでも、私の議論は既に可なり長いものになつたから、この上私が本文の初めの方に掲げた第二の假定の下に議論を進め得る時間も餘白も、甚だ少くなつた。けれども私は、たとへ手短かにでもせよ、それに言ひ及ばないことを、甚だ不本意に思ふ。私はそれ故に、それに關して私が當初言はうと考へてゐたこととの荒筋だけを、次に附け加へておくことにする。

所謂第二の假定とは、文部省が學生の社會科學研究團體に對して壓迫を加へる傾向を示してゐることが、學生を出來るだけ、現實社會事實の直接觀察、及び現實社會問題の直接批判から隔離しようとする意圖から出てゐるものだ、といふことに關聯するものである。で、それに關する私の意見の要旨は、大體次の諸點に歸着するのである。

今日の我國の學校教育の下に於ても、內外〔[illegible]〕に對する限りの範圍內では、「調査」及び「實驗」が、〔[illegible]〕上にも重要な事項

だとされてゐる。それは無論、當然至極のことである。といふのは、個々の科學者の苦心慘憺たる研究の成果として得られた結論を知らしめることは、單にそのことだけとしても價値がない譯ではないが、しかし、教育的効果といふことからいへば、そうした結論が得られるまでに踏み越されて來た研究の過程を知らしめることが、更らに一層貴重なものだからである。この事實の認識が、一般教育の上に於ける實物教訓の尊重となり、更らに自然科學的知識の教授の上に於ける實驗室での作業の必要の强調となつたものである。

が、不思議にも、今日の我國の學校教育の下に於ては、社會科學の關する限りの範圍内では、この一點の重要さが、殆んど全然と言つてもいい程に無視されてゐるのである。いかにも、社會科學の研究の場合に於ては、自然科學の研究の場合に於て行はれて居る通りの實驗室的裝置を人爲的に設けて、それを通じて或る研究の過程を完了する上に依つて、或る一定の結論に到達したり、或る一定の成果を得たりするやうなことの可能性の、殆んど絕無といへる狀態に近いことは、確かな事實である。けれども、社會科學の研究の場合に於ては、活きた社會現象の上に於ける諸般の事實を直接に觀察したり、諸般の統計を直接に檢討したり、活きた社會問題を直接に批判したりすることが、自然科學の研究の場合に於ける『觀察』や『實驗』と、少くとも同等の効果のあるものでもあれば、同等の價値のあるものでもあり、從つてまた、少くとも同等に尊重され、重要視されなければならないものである。

それにも拘らず、今日の我國の學校教育に於ては、社會科學の方面に關する知識の教授は、その殆んど全部が、開發教育の方法に依つて行はれてゐるのではなくて、注入教育の方法に依つて行はれてゐるのである。從つて、そこでは、客觀的觀察、若しくは實驗的檢討の範圍が極度に限局されてゐて、空疎なる觀念の傳授とか、硬化した定義の羅列とか、訓詁註釋式の說明とかが、過度に重要視されてゐるのである。若しそれを疑ふ人人があるなら、彼等はよろしく、我國の諸學校に於ける、國民道德とか、法制經濟とかの教授の――時としては社會學とか、政治學とかなどのそれのも――實狀を見るがいい。彼等は容易に、そこでの教習が、一般に、如何に形式的のものであり、如何に空疎なものであり、無實質、無內容のものであるかを認識することが出來るであらう。

社會科學の方面に於けるかういふ教授法は、一般の學生界の上に、樣々の惡影響を與へないでは已まなかつたのである。そこでは、如何に衒學的風習が瀰漫してゐもすれば、如何に百科全書

[illegible]されてゐるし、且つまた、如何に[illegible]理由、[illegible]の[illegible]、[illegible]の[illegible]にりあげ示されてゐるのに、種々細心な[illegible]者たちの[illegible]に上ぼつたことである。しかも、かういふ傾向は、既に或る時系のために好都合な各種の觀念の遊戲に關係してゐる學生たちの上に於て現はれてゐるばかりでなく、所謂新社會思想の追求に從つてゐる學生たちの上にもまた、或る程度に於て現はれてゐるのである。彼等が時として、その所謂新社會思想上の諸公式を金科玉條と見做して、盲目的にそれらの前に拜跪してゐる間に、肝腎の彼等の周圍の現實の社會的諸關係の推移に留意することを忘れるやうなことのあるのは、その大部分は、官僚式教育に於て扶植された觀念崇拜の習慣が、偶ま彼等が新たに開始した社會思想の追求の上にも乘り移つて來たものでなくて、何であらう！

しかし私は、さうした問題に關はつてはゐるよりも、寧ろ、眞面目に社會科學の方面の研究に志してゐる學生たちの進路の上に、如何に多くの障碍が横つてゐるかの一點を強調しなければならぬ。疑ひもなく、それらの障碍のすべてが、悉く國政の當局者たちの側から置かれたものだとするのは、事實の正當な認識から來たものだとはいへない。がしかし、それにも拘らず、國政の當局者たちの側から置かれたものが、それらの少からず[illegible]を占めてゐるものだといふ[illegible]に、[illegible]今日の[illegible][illegible]に[illegible]しないやくの學生たちが、[illegible]て、社會科學の研究に從事し始めると、[illegible]が、彼等の上に投げられるのである。[illegible]も、自然科學のそれの場合と同じく。[illegible]個人的孤立研究よりも、遙かに優れた効果のあるものだといふことは、經驗に依つて充分に證明されてゐることである。しかるに學生たちが社會科學研究團體を組織することの上にまで、當局の頻繁な干渉が及ぶことは、[illegible]、若しくは個人的絶望行動の促進かの、二つのうちの何れかへ導く可能性のないものだとは、誰にも保障が出來ないことである。それ故に、當局が學生の社會科學研究團體組織の上に不當に[illegible]なる束縛を加へることは、關係學生たちの群を驅つて、或る恐しき陥穽の方へ追ひ立ててゐることに當るものだとさへも、決して言ひ得られない譯ではないのである。

且つまた、學生の社會科學研究團體の組成が、或る條件の下に許された場合にせよ、その研究題目の上に、無法な制限が置かれることも、決して異例とすべきものではないのである。私が上來屢々引合に出した「一般知」の理解に依つても、[illegible]

務局長は『（高等學校の生徒らが）堂々と團體をこしらへて、社會主義その他の研究をやるとは考へものであるから、今後斷然許さぬ方針である』と公言してゐる。かういふところに、官僚式教育家の岡田文相を戴いてゐる文部省の方針も覗はれるが、しかし、頑冥さにかけては文部に劣らない內務省が、まだその上に、學生の社會科學研究團體の上に、その凄い眼を常に光らせてゐるのである。かういふ譯であるから、社會科學の研究に志す學生たちが、その學問の本質に從つて、活きた社會事實の直接觀察や、活きた社會問題の直接批判に從事し始めると、無限の不便が態々彼等の頭上に積み累ねられ、時としては、堪へられない束縛の手が彼等に向けられることとすらあるのである。私は、この點を、最近數個年に於て私自身が遭遇して來た直接經驗から、斷言することを憚るものではない。

六　學生生活と社會科學研究の要求

學生を社會事實の直接觀察及び社會問題の直接批判から隔離しようとするやうな文部當局の教育上の干涉政策が、眞の意味に於ける『教育の本旨』から非常に遠ざかつてゐるものであることは、言ふまでもないことである。が、それと同時に、さうした干涉政策の實行は、學生生活は現實社會生活の雰圍氣の外に置かれてあるものだ、と言つたやうな、事實を甚だしく無視した前提からでなければ、如何なる點からも支持することが出來ない筈のものである。ところが、實際上に於ては、學生生活は、――少くとも、高等學校や專門學校からの學生生活は、――一般の現實社會生活の有機的一部をなしてゐるものである。しかも、刻々複雜さを增しつつある現實社會現象の進みは、ますます不可抗的に、それをさうならせようとする傾向を示してさへゐるのである。手ツ取り早くいふと、彼等學生たちは、空中に生存してゐるものでもなければ、お伽噺の王國のうちに棲息してゐるのでもなく、まさしく地上で呼吸しつつ、地上の食物を攝取しつつ成長して來たものである。それ故に、彼等の生活が學生生活だといつても、それは實に、人間界の葛藤の中に織り込まれてゐるものでもあれば、現實社會生活の渦卷の中に投げ入れられてゐるものでもある。

善いにせよ、惡いにせよ、事實はまさにその通りである。かういふ風に、彼等の學生としての生活が一般の現實社會生活の有機的一部であることの結果として、彼等が生活することは、或る一面に於て、社會的に生活することであり、彼等が思惟し行動することは、或る一面に於て、社會的に思惟し行動することである。それは、さうでない譯には行かないものである。

な[illegible]かといへば、一般[illegible]の[illegible]、[illegible]に彼等自身の問題である。そして、一般智識階級の問題の現在及び將來は、社會過程の進みに不可分的に結まつてゐるものである。この點に關聯して、私は、現在直接に我々の眼前に展開されてゐる[illegible]の手近の一例として、近年に於ける知識階級者の失業問題の慢性的存續のことを擧げることが出來る。かういふことが、まだ學窓に居る學生たちの上にも、或識的に或は無意識的に、或る深刻なる影響を及ぼして居るのである。それからまた、たとへば、最近に於ける現內閣の行政及び財政整理の結果として、四萬人ばかりの失業者が社會に送り出される、といふやうな新聞記事が出た時などには、さうしたことは、暗々裡に、一般の知識階級の——そして同時に青年學生たちの——心境の上に、容易に收まり切らない衝撃を與へたことも、一般に周知されてゐることである。かういふことを考へると、青年學生たちの多くが、現實社會事實の直接觀察や、現實社會問題の直接批判の方へ、不可抗的に引き附けられて行く傾向のあるのは、決して彼等の贅澤沙汰から來たものではなくて、彼等の生活上の必然的要求から來たものである。しかるに、國政上の當局者たちが、それを國家權力の行使に依つて阻止しようとするやうなことは、甚だしき無理解であることは

[illegible]る。苟しくも「國民思想の善導」を口にする當局者たちとして、[illegible]ういふことを平氣で[illegible]念から見ても、極度に糾彈すべきものとされなければならない管のことである。まして文教の樞機の上に立つ文部當局の場合に於ては、それを批評する資格さへない譯である。

だが、多くの青年學生たちが、社會事實の直接觀察や、社會問題の直接批判に赴く傾向を示すのは、單に淺薄なる意味に於ける生活上の必然的要求だけから來たものでもなければ、また單に彼等の眞理追求意欲だけから來たものでもない。それは實に、最終に於ては、近年來冥々の裡に漸進的變化を遂げた彼等の生活哲學ともいふべきものからも來てゐるのである。單に彼等といはず、一般現代人は、——少くとも頽廢的若しくは絕望的デカタンスの傾向を辿らない限りの現代人は、——今日に於ては最早や、從來支配階級の側から彼等に向つて、彼等自身の個々の生活の價値を量定すべき尺度として與へられて來た各種の觀念や理想に絕望して、彼等自身の生活そのものの上に價値を發見しようと——若しくは創造しようとする傾向の方へ追ひ立てられつつあることを感じてゐる。そして彼等は、彼等の發

見若しくは創造しようとする價値が、彼等自身の生活がその有機的一部をなすところの現實の社會の外部にあるものではなくて、その内部にあるものだ、といふことを感知するやうに――若しくは意識するやうに――なつて來たのである。現代人の悩みといはれるものは、畢竟は、さうした絶望の裡から蘇つた創造意欲に交渉してゐるものである。彼等は實にそれのために、社會生活の現實相の探求に逝く衝動に驅られるのである。それが、彼等の社會科學の研究熱の原動力となるのである。彼等に取つては、社會科學は最早や、過去から蓄積された各種の傳統的社會觀念の形骸を指すものでなくて、現在の社會生活の現實相の直接探求から得られた生々しき知識の集合を指すものである。しかもそれは、彼等の將來への實踐的創造意欲の補導者として役立の種類のものを指すのである。手短かにいふと、彼等は、社會科學を、その現實性に依つて肯定しようとするものである。文部省當局がこの點を無視して、唯何かなしに學生の社會科學研究團體の上に壓迫を加へようとするのは、喩へ様のない暴擧だといふより外はないのである。少くともそれは、彼等の教育政策の階級的專制の特質を無暗に高揚しようとしてるものとして見るより外はないものである。さうした教育政策が、早晩自他共に不幸な結果に導かないであらうことを期待するのる政治的影響を作はないものは、殆んど　ないともいへるのである。この理由で當局が、さうしたものを一々取締つてゐては、人間の生活が堪へ難き窮屈不自由なものとならなければな

は、奇蹟の出來を現代に待つのにも等しい無謀さだといはなければならないのである。

附記　文部當局は　學生たちの軍事教育反對運動が段々と政治問題化しつつある傾向があるから、それで、それを取締らうとしてゐるのだ、と主張してゐるとのことである。若しこの報道が事實だとすると、それは重大な謬見か詭辯だとしなければならないものである。今度の學生たちの軍事教育反對運動は、從前の學生運動とか、辯護士試驗の受驗者らの或る種の運動とは、大にその趣きを異にして、政治的色彩を帶びてゐないところに、最も多くの特色が認められるのである。殊にそれは、その動機に於ては、教育の軍國主義化への反對と、學生生活の自治の擾亂に對する防衛とから來てゐるのであり、またその形式に於ては、純粹の學生運動の體面を失つて居ないものである。しかし、文部當局は該運動の動機及び形式が政治的でないにしても、その影響が政治的になる虞れがある、といふかも知れない。だが、さうなると、それは詭辯の程度を通り越した暴論だ、といはなければならないものであらねばならぬ。現代社會生活に於ける人間のあらゆる行動のうちで、或る程度に於けらないのである。我々はそれ故に、さうした辯明を到底承認することが出來ない。更らにまた、文部當局の學生の社會科學研究團體への壓迫が、さうした根據から出てゐるものだとすると、我々は、一層頻繁にそれに抗議しなければならないことを感するのである。

行政整理の犧牲者と新卒業生の就職難問題

官吏馘首の不合理と新卒業生就職難の緩和

安部磯雄

今は丁度不景氣の際で、これから就職しやうとする人々にとつては一番不利益な時期である。それに今年は行政整理の結果、一方に於て多數の官吏が失業することになり、同時に各專門學校、大學から卒業する者が十二月頃から就職運動を始めるが、それが前者の求職運動と衝突することになり、一般に就職は一入困難な狀態にある。殊に學校卒業生に、例年でも斯かる不景氣の際には就職難を感ずるのに、今年は官吏の失業者を就職の方面に於て競爭者として居るので、其立場は一層困難である。乍然私共は此問題を取扱ふに當つて、官吏の失業者と學校卒業生の就職難には其間自ら區別のあることを思はねばならぬ。同じ就職であつても兩者の間には大分相違があつて、官吏は今迄既に就職して居た者が今度の行政整理の結果職を失つて他に職を求める者であるが、學校卒業生は之に反して未だ就職してゐない者であつて、これから新たに職を求める者であるから、同じ就職難であつても官吏のそれに比して幾分問題は輕いやうに思はれる。何故ならば學校卒業生は多くは獨身者であり半年や一年職業に就くことが出來なくとも、其間止むを得なければ再び學生々活をすることも出來る比較的責任の少い地位にある。然るに官吏は之と異り、既に數年間、或は永年其職に就き、大概の人は家族を持つて居る人達であるから、多少の退職手當金を貰つても猶職を離れて居るために、重い負擔と責任を持ちながら、前途の生活は甚だ不安である。若し假りに國家が此の二者に就職の世話をする場合があるとしたならば、無論官吏の失業者により多くの力を注ぐことが當然である。私は以

下、先づ官吏の失業問題に關して意見を述べ、其救濟策に就いても考慮したいと思ふ。

私は現政府が官吏の淘汰を行ひ、之れを退職せしむることは甚だ誤れる策であると考へる。假令行政整理が如何に重要な意味を持つて居ても、國家として自分が使つてゐる人間を首を切るといふことは非常に不幸なことであり、寧ろ國家自身にとつて甚だ不利益なことである。私は平常の意見として、勞働者であつても、一旦會社なり個人なりが繼續的に之れを傭ふ場合には、原則として彼等を失業せしむることは不都合であると思つて居る。何故ならば失業ほど個人の生活を脅かすものはない。それは後で何とかなるやうに思はれても、其人にとつては大打擊であつて、まかり間違へば餓死に直面する問題であるから、斯かる慘酷なことは人として容易に出來ないものである。然るに今日民間の會社に於ては被傭人を解雇するのを平氣で行ふこと、恰も封建時代の武士階級が他の平民階級に對して斬捨御免を特權と考へたのと同じであつて、今日の經濟界に於て雇人を何時でも勝手に解雇することの出來るのは武士の斬捨御免に外ならない。斯くの如きことは到底文明人の堪え得ざる處であるが、我國に於ては未だに徳川時代の因襲から人々が脫し切れないので、人々は勝手に首を切られても猶仕方のないことゝして諦めるのであるが、此度の官吏の馘首の場合に於てもさうである。乍併尙官吏は少いが此際手當金を貰へるから直ちに餓死するやうなことがないが、勞働階級は其點甚だ憐れな狀態にあつて、解雇手當があるとしてもそれに依つてやうやく僅かに一ケ月の生活を支へることの出來るのが好い方で、失業問題に對しては勞働階級は常に大なる苦痛を嘗めて居る。歐米に於ては失業問題に對して一般が自覺して來て居るが、既に前英國勞働黨內閣の大藏大臣であつたスノーデンは彼が大藏大臣たりし以前に議會に次のやうな案を出したことがある。それは如何なる會社も法定積立金をやつて居るが、其用途は會社が窮境に陷つた時、配當が少いやうな場合に、それを救ふ目的で積立てられて居る金であるが、然るにスノーデンは、會社は單に株主のためにする積立金を爲すばかりでなく、其他に勞働者のためにする積立金が必要であると云ふのである。然らば會社は不景氣の際でも勞働者を解雇する必要はなく、優に其積立金に依つて勞働者の雇傭を繼續することが出來る。要するにスノーデンは、會社は株主、勞働者共通の積立金を爲して、不景氣の際に於ても勞働者を解雇して失業者を出さないと云ふ意味で法律を作ることを議會に建議した。是れは英國に於て勞働者を徹底的に保護する政策をとるならば、當然其處まで進まなければならない

[illegible]者と作つて置いて[illegible]のであるから、[illegible]其立行く先を作らねばならぬのである。斯かる政策が[illegible]に行はれるやうになれ、個人の[illegible]する労働者を眼前に解雇しないといふ議論や方針にたつて来て居るのであるから、國家こそ率先に手本を示して、自分が使つて居る雇人を解雇しない決心を為すべき時期である。それは國家ならば直ちに出来ることである。個人の会社ならば不景氣に備へるためには積立金をする方法をとることも必要であるが、國家は國民から租税を取つて居るから、積立金をせずとも、國家の費用で其必要を辨ずることが出来る。而して國家が其使用する人間を解雇しないことになれば、毎年の豫算以外にそれに關する臨時支出を要しないことになる。而も不景氣の時でも費用は要るから、何時ものやうに國民から租税は取るが、それは國家の力で出来ることである。で、國家は自分が使ふ役人は之れを継續的に使用することが望ましいのであるが、然るに此產業界に於ける解雇を國家自身がやるといふことは好ましくないことであつて、それは悪い手本を示すものであるが、此點に於て甚だ現政府のために惜むものである。國家は常に飽く迄も好き手本を示すものでなければならないが、單に國家が其使用する役人を解雇しないと云ふ丈け[illegible]ても、之れを解雇しないことは勿論、其手當、[illegible]合を見て、[illegible]好い條件で使用するかどうか、待遇上[illegible]に就いても深い[illegible]を拂はねばならぬ。即ち労働時間などに就しても、國家は民間の例はどうであらうとも自ら八時間労働制模範を示さなければならぬ。外國の例などを見ても、中央、地方政府等の事業に於て人を使ふ場合には、其労働時間は他に比して短いのが常であり、斯かる點に於ても國家は範を垂れて居るのである。我國に於ては永い間上の為す處下之れに倣ふで、それで通して来た國であるから、労働問題などに於ても政府が率先して模範を示すことが必要であるが、然るに此度の如き忌むべき失業問題の悪例を政府が率先に示したことは甚だ遺憾千萬である。

どうして今回の如き悲むべき官吏の失業問題が起つたか。それは労働問題に關して政府當局者に理解ある者が少いためにも依るが、他の理由は、現内閣が従来執れの内閣もやり得なかつた行政、財政整理を自分の手でやつてのけようとする多少の名譽心が禍して居るやうにも思はれるのである。故に自ら問題ではあるが、今回の行政整理に依つて、政府が多くの人を減らし

を行ひながら、猶結構事務が運んで行くならば、從來の政府は無駄に人間と費用を使つてゐたことを證明することになる。如何に今の政府が行政整理をやつても事務に澁滯を來す程度までそれを實行する譯はないから、行政整理後に於て尙事務が澁滯なく運ぶことは、明かに從來の政府のやつたことが無駄なことを裏書きするものであり、延いては日本政府の不信用を證據立てる理由となる。若しさう考へて來ると、現内閣が世間の非難や反對にも拘はらず、勇氣を振つて此度の淘汰、解雇を行つたことは、或意味に於て從來の弊害を革正したことにもなるが、併しながら人を解雇するといふことは、原則として、筋肉勞働者であると精神勞働者であるとを問はず、人を失業せしむることが最も避くべきことであるといふ根本的な意味に於て絕對に贊成することが出來ない。若し現内閣に本當の親切心、即ち勞働問題に對する眞の理解があつたならば他に執るべき適當な方法がある筈である。假りに役人が過剩であつたものを、從來の内閣が其組織に改革を加へないで放任して置いたのを、現内閣が初めて其改革を斷行したといふのは好いが、併しそれにしても、大急ぎで大勢の人間を解雇する必要はない。假りに鐵道省で二三百人の人間が不用だとしたならば、それ丈けの人數は解雇しなければならないが、併し一度にそれを解雇する惡例を示さずとも、或年數をかければ無事に此問題を解決する方法がある。即ちそれは不用な人間を減らして行く計畫に從つて作つた案ではあるが、其案は五六年間の年數を見て、其間に漸次人減らしを行はうとする計畫に基くものであつて、此案に依れば、五六年の間には官吏中死亡する者もあり、老年になつて退職する者も出て來る譯であるから、假りに其間一方に於て新に人を雇入れないことにして置けば、最初の計畫に依る淘汰人數も其處で調節される譯になり、一時に多數の失職者を出さずに濟む。併し或人はそんなことでは財政整理は出來ないと云ふかも知れないが、乍併私に云はせれば財政整理は決してそんなに慌てゝやるべき事ではなく、又決してそれは五六年待てぬほど緊急を要する性質のものではないと思ふ。政府に親切心さへあれば、官吏の淘汰は自然に人の減少して行くのを待つ方法に依るべきものであつて、而も一方に於て每年新しく雇入れる人間を差控えて置けば其目的は達せられるのである。然し、官吏の馘首は既に着手しつゝあるのであるから今更ら及ばぬことであるが、然らば今後の對策としては、國家が特別なる機關を設けて、失業者を周旋する一種の職業紹介處を作り、既に失業せる人々を救濟することがせめてもの罪亡しである。

學校卒業生の就職難は歐洲大戰後次第に顯著な事實となりつ

しあるが、今年の如きは最も其困難な状態にあり、學校としても卒業生の就職に對しては餘程迄も努力盡力して居る有様である。然るに一方に於て斯くの如き卒業生の就職難があるにも拘はらず、反對に學校は益々繁昌するといふ現状を呈して居る。其理由は、現代は人間の實力を買ふと云ふよりは寧ろ其人間の履歴を見て採用する傾向があるので、相當の教育を受けて居ないと益々就職が困難になるので、之れがために苦學をしても學校卒業の履歴を取らうとする者が多いためであつて、世間の不景氣にも拘はらず學校が繁昌する所以である。併し一方に於て現在の經濟組織が變らない以上、永久に就職難は學校卒業生の上に見舞ふものと思はなければならぬ。茲に於て今後の學校卒業生は新に考へ直さなければならぬ時期に到達したのである。學校卒業生が總て俸給生活者たらんとすればこそ就職難も生ずる。それを避けるために、學校卒業生は悉くが所謂宮仕をしないで、中には獨力で新らしく自己の途を開拓する者が増へれば、多少其形勢は緩和されることになる。又實際さういふ方面に志す人も少くはないので、俸給生活者としてゞはなく、自ら新規に事業を發見する者であるが、それは科學者の發明と同じく、新事業は一の發見であるから、斯かる方面に才能のある者が自力で自己の生活を開拓するやうになることは最も望ましいことである。

次に此に就いて[illegible]などは、人事課の人達にあつてになく、[illegible]履歴に就いて一瞥して來たければならない。一[illegible]人物を履ふに學校の履歴を欠くしくいふ風にない。殊に人物を重視して居る丈けでは滿足しないで、其の卒業生は何處の大學の卒業であるかといふことが、其處では問題となり、又同じ大學の卒業生でも其學校に於ける成績まで調べて問題にする。其結果は、日本の青年は、其學生時代に、一番でも、殊に學校の成績の良好ならんことを望み、更に其結果は試驗の成績を希み、成績に好成績を得んがために遂に不正まで行ふやうになる時期たる精神をさへ生じ、青年學生に非常な惡影響を與へて居るが、それは單に學生に關する問題ばかりではなく、又同時に我國の高等教育にとつて重大なる問題であつて、其責任の一半は雇主の側に歸さなければならぬ。此點に關して雇主側の反省を待つより外はないが、それには先づ雇主側は從來の卒業生採用の方法を改めて、それに代ふるに人物試驗を主とした新しき方法に依る方が好い。その方法に依れば、専門に人を置いて人物の當否試驗を行ふのであるが、それでも猶不十分であるから、總て新しく雇入れる人間は、少くとも二三ヶ月乃至半年の間に限りにこれを使つ

て試驗的に働かせ、其成績を見るといふやうな方法を執り、總ての傭主がそれに重きを置くことになれば、學生は單に學校の成績に拘泥する弊害を一掃し、機械的、詰込的に學問をする者がなくなつて學問も眞に生きて來るであらう。然らば就職は玆に於て實力の問題となる。而も其時には學校卒業生の就職し得る者は實力ある者に限られるから、初めから實力なき者は精神勞働を棄てゝ、筋肉勞働なり、他の方面に行くことになつて、卒業證書を以て就職運動を試みる、籤引きの僥倖を願ふやうな者もなくなり、又專門學校、大學などへは餘り好い頭を持たない者が押かける傾向も少くなつて、選ばれたる者のみが高等教育を受けることゝなり、結局之れが大勢となれば現在の如き押すなく／＼の學校卒業生の就職難は緩和されることにならう。

官吏の失業問題及び學校卒業生就職難問題は共に悲しむべきことであるが、同時に之によつて國民全般が考へさせられることも甚だ多いことを信ずる。殊に政治家は眞面目に此の問題を考へるべきである。

失業問題と云ひ、就職難問題と云ひ、之れ程不合理な、おかしな問題はない。之等の現象は常に現はれてゐるが故に、人々は別に不思議にも感じないが、元來人間が集つて國家を組織し、各自が分業に當り、國家の繁榮の爲めに努力して居るのであるにも拘らず、高等教育を受けて學校を出た若者が、而も は年數をかけ、巨額の學費を費して學校を卒業し、國家の爲めに働きたいと申出た時に、國家は彼に與へる職業がないと云ふのは甚だ不合理な話である。それは戰爭の際に國家が兵隊を働かす時に、兵隊の中に一人でも、何處に働くべきか定つた仕事がないのと同じく有り得べからざることである。軍隊に於ては何百萬、何千萬の人間を手足の如く働かせて一人の失業者をも出さないのに反して、經濟界などに於て常に失業者の絕えないのは、今日の經濟組織が軍隊の組織程完全に行つて居ないからであつて、其處には唯亂軍と烏合の衆があるばかりで、秩序がない。それが爲めに經濟界の變動がある每に常に多數の失業者を出すのは當然である。我々は此理由を眞劍に考へなければならない。經濟界の此病氣は此理由を一般の人々が明確に認める時に至つて初めて癒やされるであらう。此度の失業官吏も今年學校を出る卒業生も、皆これから就職難を體驗することになであらうから、之等の人々が將來失業問題の解決や經濟組織の改造といふ點にまで氣がつくに至れば、之れ不幸中から生れる唯一の幸、儲け物と云はざるを得ない。

行政整理の犠牲者と新卒業生の就職難問題

法學博士　堀江歸一

一

行政整理の結果として、官吏の罷免される者は全國を通ずれば、幾萬の多數に上る由であつて、近頃は毎日の新聞紙上に罷免者の姓名の羅列されて居るのを見受ける。彼等は必ずしも總て老齢者ばかりでもなからうし、又無能者や、懶惰者のみでもあるまい。尚ほ春秋に富み、平生官吏として相當の成績を擧げ、又技倆熟練を備へて、一廉の役に立つ可きものであり、職務上に於て、何等咎責され可き過失もなきに拘はらず、行政整理殊に經費節約、人員減縮を主眼とする行政整理の進行は彼等の罷免を必要とし、彼等をして其意に反して、官界の外に立たしめる。官吏を罷めた人は他の職に就いてから、如何に自家の運命を開拓するであらうか。世間の廣き、官界を去つてから、民間の事業に從ひ、大に自由の天地に驥足を展した人もないでもない。誠に人の運命の測り知る可からざるは、水の流れと同様であつて、斯る人の立場から云へば、官吏を罷めたこと、又は罷められたことは、其人に取つて、何等の不幸でなく、却つて罷免を機として、一生の運命を展開したのであつて、罷免の遅かりしことを悔るかも知れない。然しながら斯の如きは寧ろ異例に屬するのであつて、之を以つて全體の罷免者を推したならば、大なる間違を生ずるであらう。何故に然るかと云へば、左の諸點に歸着する。

第一、現在の官吏には所謂役人風と稱する一種の鑄型があり、官吏たること、多年に及べば、必ず此一種の鑄型に造り上げられ、融通性や、應用性に乏しく、事々物々、法律規則に準じて、之を取扱はうとし、爲めに民間の實務に執掌するに適せざる人と爲る。

第二、加ふるに官界に於ては、時に今回の如き一大整理の行はれることがあつたり、又時に行政上に能率を増進せしめなければならないと云ふ説が唱へられたりするもの丶、概し

て之を云へば、官吏社會に於ける競爭は頗る緩漫であり、文官任用令や、文官分限令に依つて、其地位を保障され、所謂鰻上りの昇進が期待される。斯る社會から競爭の劇烈であり、又執務の敏活を要する實業社會の如きに身を投じて、能く成效するが如きは、遂に望まれないであらう。

第三、少壯の者にしても職業を轉換し、其新に就いた職業に於て成績を擧げることは困難であるのに、官吏の罷免者中、相當の年齢に達した者の如きに至つては、到底職業の轉換に依つて、成效し難きは勿論、轉換す可き職業すら、見出すを得ないであらう。

故に官吏にして罷免された者は陸軍の廢馬と同樣、悲慘なる地位に陷らざるを得ない。而して何故に多數の官吏をして斯る境遇に立たしめるかと云へば、國家が濫に積極政策を試み、其行はれざるに至つて、消極政策に移るの結果であつて、官吏の罷免者は要するに國家の財政策に於ける急變に基く、犧牲者であると認められる。即ち私が前年來政府殊に原、高橋兩内閣の濫行する積極政策に對して、非難を試み、積極政策から消極政策に移る過渡期の變動を寡小ならしめようとしたのは、斯る悲慘事の生ずることを防ぐことを一の目的としたからであつた。然も今日と爲つては、如何ともするを得ない。積極政策から、消極政策に移る過渡期に於て、若干の犧牲者の官界に生ることが不可避の事實と爲つた。私が今回の罷免者を以つて、犧牲者と云ふのは、職務上の失策とか、不正行爲とか、官吏其人の負う可き責任から、罷免されるのではなく、自身に何等の過失のなかつたのに拘はらず、一に行政整理の生贄と爲つたからである。然らば斯る犧牲者に對して、國家が厚く遇しなければならない道理の存するや、疑を容れない。政府亦此邊の事情を參酌したものか、今回の罷免者に對しては、一時賜金の形態に於て、相當の金額を給與する方針に出で、彼等をして路頭に迷うが如きことなからしめるやに見受けられるが、私を以つて見れば、斯の如きは一時の應急策たるに止まり、更に根本的に考う可き所、爲す可き所の多々あることを信ずる。

第一は我國恩給法の不備である。恩給法にも近年多少の改正が加へられたようであるが、私をして云はしめれば、一方に恩給受領資格の勤務年限を長くする他の一方に、恩給額を増加し、例へば三十年位在職した者には、現職給と同額の恩給を下付することを必要とする。斯の如くしたならば、官吏をして永久の在職を樂ましめ、又其職に安んぜしめると共に、一旦罷免された曉に於ても、生計上に急劇の變動を蒙ることを免かれるを得るであらう。此點から云つて、現行恩給法は帯に短かく、

[illegible]

第二、右の如き退官の改正が恩給法に加へられたならば、政府が行政上の都合に依り、官吏を罷免する場合には、現職給の全額に達する恩給を受ける人、若しくは之に近き地位に居る人から、先に罷免する、本人も亦斯る地位に達したならば、形式上の依願免官でなく、眞實免官を願つて、圓滿に官界を去るであらうし、又斯く在職年限の長きに隨つて、恩給額を現職給同額に引上げる制度の行はれるに至つて、始めて政府は官吏を淘汰するに、何等の斟酌を要せざるに至る道理である。

第三、今回政府が一時賜金として、相當に纒つた金額を罷免者に給與することとしたのは、犧牲者厚遇の一法たるを失はないようなものゝ、併此纒まつた金額を如何に資本として運用して、以つて利殖の計を講ずるかと云ふ問題に爲れば、多年官界に居つて、實務に遠ざかつた者の常として、固より其運用法の有利なるものを知らない。商工業の或る方面に身を投じて、其資金に充てたならば、以つて一身の獨立を謀るのであるが、維新以來所謂士族の商法なる比喩が行はれる如く、官吏上りの輩の營業も亦覺束なきものゝ極であつて、折角の賜金を煙にするのが常であり、此危險を恐れて、確實なる利殖法に甘んずれば、信託預金なり、銀行預金なり、將た又株式投資なりに依つて[illegible]家を[illegible]足するに[illegible]きない、[illegible]所謂の[illegible]も、[illegible]終年限の永き者に依つて、[illegible]、政府として官吏を遇する正しき道であることを信ずるのである。

右は何れも一時の應急策であるが、根本的政策としては、

第一、財政の規模、行政の範圍に急劇なる變動の生ずることを回避し、或る機會に局課を増設したり、官吏を増員したりしないと共に、他の機會に整理と稱して、罷免の擧に出ないこと、

第二、不景氣の永續する原因を除却し、速に景氣の恢復する機運の到來を促すこと

を必要とする。

右の如き應急策や、根本的政策の伴はざる官吏の罷免が官界に幾多の悲慘事を生ずるのは、當然であつて、此事實が果して比較的穩當なりと稱される一時賜金の給與に依つて、回避されるかどうか、私は此點に大なる疑を持つのである。

二、

官吏にして罷免された者の一部分は其れ〴〵縁故手蔓を求めて、實業界に職を求めようとするであらう。然かも不景氣に沈淪する實業界に適當の地位の見出されることは、何としても考へられない。某々保險會社は罷免者を當込んで、勸誘員募集の廣告を新聞紙に揭げたが、是等が罷免者に與へられる實業界の地位として、關の山ではないであらうか。然も一方に每年春に爲れば全國各地方の大學や專門學校から卒業生が社會に送り出され、彼等の多數は必ず職を求めて、生計を立てなければならない地位に居る。從來の例を以つてすれば、新卒業生の一部分は官界に於て、職を求め 他の一部分は實業界に於て、地位を見出すの常であつて、兩者を以つて、彼等に對する登龍門の重なるものとしたのである。然も今や前者は行政整理に依つて、後者は不景氣に依つて、固く新卒業生に對して、門戶を閉鎖して居るとすれば、年々萬を以つて數へられる新卒業生が就職難に遭遇するのは勿論である。彼等の內には、官吏を親とする者もあらう。親は子の成業を指折り數へ、子は親に學資を仰いで就業の後に恩に報ゆることを期して居つたのに、今や親は罷免されて、所得を失ひ、子は成業しても、就職の道を得ないとしたならば　親子共に重々の不幸に陷つた次第であつて、是れが積極政策から、消極政策に急變した犧牲の一種と考へられる。原內閣や高橋內閣の無謀なる經濟政策の餘殃も極めて大なるあり、又斯る政策を遂行した高橋是清氏が今日加藤內閣のとして、消極政策の實行に一臂の力を致して居るが如き、厚顏無恥、驚くに堪えた次第であるが責任論の如きは、今日に於ては、無用の詮議であつて、當面の問題としては、新卒業生に對する授職の道を工風しなければならないが、此點に就ても、私としても別に妙案ありとするを得ない。一般的に云へば、早く景氣恢復に必要なる政策の行はれることを急務とするし、更に卒業生だけに關する特殊の問題としては、私は左の二件に就て、一般世人殊に卒業生並に其父兄の注意を仰ぎたいと思ふ。

其第一は卒業生が東京其他大都會に於て、職業を求めることを能事とせず、多少なりとも地方に根據を有する者は地方に歸つて、父祖の業を繼ぐなり、之を助けるなり、又は地方の開發に必要なる方面に向つて、努力するの一事に外ならない。農村は荒廢し、地方小都會は衰頽し、都會に於て、學業を修めた青年の野心を滿足せしめるに足らないと云ふ言は私の屢々聞く所であつて、一應尤もにも思はれるが、一方から考へれば、農村の荒廢とか、小都會の衰頽とか云ふことは、地方の青年自身が其出身地を見限り、地方に施す可き力を都會に集中させる結果であるとも云へる。都會の就職難に苦む青年が地方に歸つて、出

其地の爲めに、一[illegible]なり、[illegible]なり、其他其れの事業に對し致して、改良に從事することは、地方の爲めに將又青年自身の爲めに考へて、共に得策であつて、自ら當面の就職問題を或る程度まで、解決する道と爲るであらう。

第二に私の希望に堪へない所は我國の青年が修學に志すに當つて、其才能天分の如何を問はず、無形抽象の學科に志すことを制し、有形實地の學科を選ぶの一事である。前者を修めて成業した者の多數は官吏と爲り、銀行會社員と爲ることを志望し、其志望にして果されなければ、他に自家の修得した學藝を應用して、生活を營むの道を見出すを得ない。而して斯る者は最く斯る無形の學問に對して、素質の豐なる者であるかと云へば、必ずしもさうではなく、單に高尚であると云ふ單調なる幻想の下に、之に就くのであつて、是等學問の應用の範圍の頗る廣い結果、[illegible]の知識を[illegible]、之に反して實地學科を主とする學科を選んだ場合には、世間の景氣の良否に依つて、思際を要ることとは、實際に適かた強いとしても、尚ほ自家の修得した所に依り、小に場を持つなり、自ら製圖設計に當るなり、醫術を應めるなり、製劑に從ふなり、實地應用に依つて、活計を立てるを得るのである。我國の青年が無形の學問を好み、動もすれば治國平天下を夢みつゝ、一身の獨立を謀らない封建時代の餘習の然らしめる所と云ひながら、今日の如き就職難に接しては、明に大なる弱點を暴露するの嫌なきを得ない。修學の方針を決するに就ては、本人自身は勿論、父兄の如きも、大に考量する所なければならないのである。

知識無產階級意識の修正

千葉龜雄

一

勞働者といふ階級が、また地平線上に現はれなかつた時代、日本か、支那が、まだ武權によつて支配されて居た時代の そ の歷史を讀んで見る。望月の、缺けたることも無しと思

ば」と誇つて居る支配者の胸には、いつも一脈の憂鬱を與へるところの、一つの階級の存在があつた。それは頭腦勞働階級であり、いはゆる知識階級であつた。支配者が完全に支配する。被支配者が完全に支配される。その間に何等の故障が無い。たゞ一つ、支配者がこの場合に心配すべきは、知識階級者を飢えしめないことであつた。支配者の支配をくつがへす素になる一つが、いつもこの、失業知識階級の絶望から來るものであつたからだ。なぜなら、武權が民衆を征服するといつても、その征服は、要するに外包としての壓力に過ぎない。どんなに民衆の知識が幼稚な時代にあつても、決して、それだけで、民衆の支配は完全されない。いな、民衆の知識が幼稚であればあるほど、なをのこと、民衆は、權力以外の、他の一つの力に歸依し、ひき寄せられる執着が强かつた。さらばその一つの力とは何か。知識の力である。然るに知識階級は、いつの時代でも、必らず支配階級の使用たるに甘んじて、支配階級が彼を無事に保護する間は、柔順に命令に服從して居た。また權力者が、知識階級の助力によつて、始めてその權力を裝飾し、權力內容を强固なものにすることが始めて出來た。かくして知識階級は、知らず識らずの中に、民衆の敵であり、民衆搾取者の作用をつとめて來たのであるが、もし權力者が、何かの理由で知識者と反對の地位に立つか、もしくは、知識者の多くを飢える境遇にくやうな事があれば、この結果は恐ろしいものになつた。即ち彼等はたとへ民衆の味方にならぬまでも、民衆を煽動し、民衆を手馴けて、權力者に對する反逆を企てた。それには彼等の持つて居る知識の能力は、支配者の慣用する權力などとは遙かに違つて、もつと、合理的に民衆を支配する內容があつたからだ。かくの如くして、權力階級の絶えず脅威されて居たものが、一方に知識階級の存在することであつた。

二

たとへば日本近代史を讀む。元龜天正の時代には、「智勇辯力」といふ言葉が、當時の立身出世の唯一の護符として用ひられた。勇とは單なる勇武を指さない。それはその智と辯力を實行する意志の意味である。かくして、あの亂世時代においてさへも、治者階級の黑幕として、いつも治國平天下の規模をつくつたものは、武將の後に隱れた智識階級であつた。が、それが德川時代の治平に入り、幕府が持てあましたものも、またこの失業智識階級の剩餘であつた。その第一爆發が、卽ち慶安の由井正雪である。で、烱眼な松平伊豆が、早くもこの一點に着目して、浪人狩りといふクウデタアを行つたのは、その頃にあつ

て止み得ないものであつたらしい。しかし、彼等の苦心もその効能は薄かつた。それら以後の時代には、絶えず、智識人の沈困と陰謀に苦しめられ通してあつた。そして山鹿素行、熊澤蕃山から、賀茂の竹内式部、山縣大弐にいたり、維新前紀の浪人蜂起によつて、封建制度は完全に息を止められて了つた。社會政策上における知識階級の地位の重要さを、われ等はかくして、わが歴史の上で充分に満喫して居る。

支那の歴史にあつても、また同様である。支那における失業知識階級征伐は、紀元前二一二年、秦の始皇帝が、諸生を捉へて、咸陽の坑の中へほうり込んだ頃から始まつて居る。處士横議！、といふのが、いはゞ今日のいはゆる危險思想だ、そしてその處士は、みな押しも押されもしない知識階級であつた。殊に支那は讀書の國である。讀書人が尊敬される、だからいつの時代にも、支配者の政治を攪亂する心配のある者には、讀書子が多かつた。王侯將相、何ぞ種あらんや、と高唱される支那では、ことにそうした可能性があつた。

三

時代は變つた。社會組織が變つた。けれども、失業者を多數にすることが、社會存立の危機であることは、今も昔も變りがない。しかし[illegible]に、そこに惹き起される[illegible]には、[illegible]つと深刻になつた。昔は、たとへ何人かの使用人にならずとも、まだ、田園、知識、それだけで、どうにか獨立し得る途も開けて居た。その餘地もどうにか與へられて居た。然るに現代のやうな、資本制度の社會組織にあつては、どんな知識の保有者も、何等かの意味で、何ものかの使用人にならずには、知識階級は存在することが出來なくなつた。だから、現代で、社會存在のために、知識階級失業者の族出を恐れるものは、失業したもののためにその救護を考へるよりも、出來るだけ失業させぬやうに心掛けることが必要である。たとへば、萬、止み得ぬために失業さしたにしても、最少限にでも、その生活をひどい絶望に陥らせぬほどの用意が何よりも大切なのである。然るに今日の使用者階級心理は、この點において無情無關心を極めて居る。

第一の、始めから失職者を出さぬやうにするためには、使用者が、人間の能力と、仕事の性質を、始めから充分に精解する洞察がなければならん。つまりは、人數と仕事の交涉する範圍での、能率の本質を發見するのが肝心である。然るに日本人の事業なり、事務なりには、かうした科學的研究がルツズを[illegible]

て居る。殊に官省の仕事にそれが在る。仕事のために人間を置くよりも、人間のために仕事を設けることなどは一向珍らしくない。人間のために仕事を設けるところから、勢ひ仕事の手續を繁瑣にせねばならぬ、官僚主義と赤紐主義(レッドテイプ)がそこから生れる。人間ばかりが多くて、いな人間のみが多いために、仕事が一向捗取らない。一寸した事件を處理するにも、十も二十もの捺印を必要とする。つまらぬ事件に、秘、極秘の印をぺたぺたと捺す。それに反し、もし人間を使用するに、能力本位であり、事務の成績を、能率本位にするならば、もつと、もつと、少數の人數でやれる場合が極めて多い。内閣が變る度に、行政整理が多少とも行はれる。そして、人員が多少でも淘汰される。然るにいつの間にかまた人員が殖える。かくして人員淘汰は、内閣が變る毎に、民衆に對する自慢の一つとなる。犠牲になる人員こそ好い面の皮だ。能率と能力を充分に考へない結果である。

四

加藤内閣が、新たに四萬人の人員を淘汰した。われ等は、かくの如き夥しい失業者を悲しむけれども、それと共に、これほどの使用人員を失つても、なほどうにか、國政を處理して行ける事から見て、案の定、官省の仕事といふ物が、どんなに無駄が多かつたかを察知することが出來るのである。そこでこの四萬の頭腦勞働者は、云はゞ、いつでも失業させられる不安性を帶びたところの、繁文縟禮者帳面上の黒表者であつたことがわかる。それと同時に、現代の使用者階級が、知識階級そのものを、どんなに安價に見積つてゐるかはこれでもわかるのである。凡てが擴大にも、緊縮にも、無方針であり、無組織であるのが、官省にも、事業にも、わが國について廻る缺陷である。犠牲にな者のる不安は、しかも少しも考へられて無いのである。

第二に、官省の失業者には、まだ多少の給與規定があるが、一般の事業界に於いて使用者が使用される知識階級者の生活に對する保障に至つては殆んど正義の觀念が行使されてゐない、こゝにも知識階級生活の永住の不安がある。

五

そこで考へる。四萬の知識階級者の失業は、まことに悲慘の極みである。が、政府は、民間は、その失業の救濟にあくまで努力することを高唱する。そして民間にその使用口を求めて居る。が、今度の行政整理は、政府も、民間も行き詰つての行政整理だ、もし民間にそれほどの好い口があるなら、默つて居て

も、人間は政府から放り出して行く、それだけなのか、政府は、人員ばかりは、いかにも失業者の努力に專念して居るやうでも、平時に於ける、直接に見えない失業救濟の組織や、制度や、法令については、おそろしく冷淡を極めて居る。もつと滑稽なのは政府の連中だ、彼等は今度もさも心配げに、政府の人員淘汰と失職救濟を攻擊して居る。けれども彼等が平生において、どれほど無產階級の失職などいふ問題に實驗的同情と注意を拂つて居るか。彼等の貴族的な生活と、貴族的な心境が、どうして眞劍に、無產知識階級の不安生活に觸れて居るか。ただ口だけなら何んでも云へる。然るに天下の新聞は、それを政府といふものが、さも、民衆の患苦に同情して居るかに讃美する。御目でたい話ではないか。かくして、政府が、どんな美くしい言葉で、失職者救濟を絶叫しても政府がいくら禿頭を光らして、現内閣を叱責しても、事實、失職知識階級の救濟は、容易でないことが、殘念ながら會得されねばならぬ。議論はどうでも、事實がさうした社會の狀態になつて居るのだ。

六

が、問題は、四萬人が、單に失職知識階級の全體でないことである。これからは、知識階級の失職が、益多くとなることも決してなくならないのみか、ここに[illegible]に深刻になつて行くといふ事實である。而して、それには、そこで現代知識階級の、[illegible]たければならない。何を覺醒するか。それは必然に現代社會における、無產知識階級の、不思議な地位に對する共通意識の覺醒でなければならぬ。何をか不思議といふ。自分は無產者であり、頭腦の勞働を賣る一つの勞働者でありながら、いはゆる勞働階級には屬しない、そして有りやうは、支配者階級の使用者として、支配者の玩弄するまゝになつて居る。同じ勞働である。體力勞働者は、たとへ最低限であつても、その勞働を權利として賣る。然るに知識勞働者は、使用者から受ける恩惠の報償として、たとへその勞力を提出する。さういふ不思議な話があり得るだらうか。なぜ體力勞働者の權利として賣るものを、知識勞働者が、義務として奉仕せねばならぬのか。外ではない。一知識勞働者の特性が、地位が、傳統が、體力勞働者のやうな、自覺を與へられることを長く後らしたものである。されどもそれを何時までか待たう。知識無產階級意識の覺醒から、團結に導くべき機運と機會とは、もう熟し切るほど熟し切つてるのである!。

もとより、遠い將來には、純知識階級は消滅するであらう。知識階級といふ特權階級は、どの途、一つの民衆生活の中に融解

されるであらう。たとへば、その日が、遠く、或は近く來るにしても、それが近く來り、そしてそれが來るべきために、なほと、この普遍意識覺醒が大切になつて來るのである。たとへまたどんな時代が來たとても知識そのものの價値が高まるとも、知識そのものの低下する時代は永久に來る筈がない。かくして、知識は、或は有形に、或は無形に、依然として高く酬はるべきである。それを考へれば、恐らく現代のやうな社會ほど、知識が低價されて居る時代はない。知識が民衆幸福の手形とならずに、たゞ一部階級の貨幣價値で取引される？　汚辱だ。

七

四萬の知識階級、即ち俸給衣食者の失業者が出たのに加へて、來年、校門を出る專門もしくは高等の學校修業者が、雲霧のやうに使用階級の關門に押しかけて居る。しかしこの不景氣な民間の經濟社會と、行政緊縮の國家財政では、それを悉く引き受けるのが容易な仕事ではない。こゝにも大きな社會的な惱みと、若い次代國民の精力の空費がある。原則として、高等教育を受け得るものが、多ければ多いほど國民の文化を加へるわけで、それはまことに好ましいものではあるが、たゞその卒業後の目的を、一に精神勞働に向け、不生產的勞働に向ける結果け、果して好ましいものであらうか。どうか、これは[illegible]い。思ふにそれはわが國の傳統である官尊民卑の思想と、[illegible]勞働を賤いとし、筋肉勞働を卑しんで來た教育思想の餘弊であるともいへやう。それとも一つは、資本主義經濟の現代が、勞働者の生活を、極端な悲慘に置くために、勢ひ反動として、なほ使用者階級を目ざし、あはよくば、一擧して資本家階級に成り上らうとする傾むきもあらう。しかし、このやうな生產資料の少ないわが國に、さうした不生產職業のみが充滿した日には、どうなるであらうか。知識無產階級者の生活爭奪が、もつともつと悲慘になるとも、決して緩和される日がある筈は無い。それにはこれからの一國教育の方針は、もつともつと違つたものにされねばならない。また、高等、もしくは專門學校の學生などに、臨時に、世界的、もしくは國內と時代の一般社會や經濟狀態などを、事實に即して自由に知ら知めるやうな注意が行はれたならば、學生をして校門を出た後に、現實の幻滅に絕望させるやうな可能性も尠ないであらう。次には、小學校程度から、勞働の知識、實際勞働の興味を必修させることも一つの必要である。要するに現代教育方針は、實生活と離れ過ぎ居る點で、少しも制定當時と變つて居らぬのである。

が、新時代の青年として、知識勞働の生活に新らしく入つて來

る[illegible]

[illegible]に對して、[illegible]

失業者と就職難

石川半山

失業者の問題と云ふと、西洋では頗る矢釜しい問題で有る、政治家や學者が、統計を調べ、數學を入れて、科學的に精密に研究して居る、そこで日本でも、それを飜譯して、大に新知識を振り廻はす人も有る、いづれ日本でも追々西洋の樣になる時代が來るであらうが、現今の實情に於て、日本の失業者問題は、未だ西洋の如く切迫して居る樣に思はれない。

英國の失業者

僕は今から二十年前、ロンドンに遊んで居る時、或る日、失業者のデモンストレーションを見た、テームス河畔からハイド、パークに至る迄、行列を組んで、歩み出したのだが、其の行列の誠に堂々たるに感服した、日本の勞働團體や普選要求の運動で、時々行列をやると、酒を飲んだ勢を借りてやつて居るので、其の行列の如何にもダラシの無いのが有るが、二十年前のロンドンの失業者の行列は、あんな者ではなかつた、歩調も正確に揃ひ、隊伍の整ふた者で、各自の顏色には、眞面目が溢れて居た、それだけ彼等の要求は、切實で有て、其の生活難は切迫して居たのかも知れない、彼等が行列の間に、持て進める旗には『我等には生活の權利あり』と書いて居るのが有つた、其の或る者の胸に懸けたる大きなプラカードには『餓へたる者は、隣人のパンに對して、權利を有す』と書いて居た、やがてハイド、パークに達して後、彼等の代表者の演説は、熱誠と云ひ、雄辯と云ひ、實に敬服すべき者が有つた、とても東京の芝公園や、赤坂山王臺や、上野公園及び日比谷公園の大集會の

士等の企て及ぶ可らざる者で有つた、僕は此の行列に從て、ハイドパーク迄往つて、彼等の熱烈なる演説を聞て、始めて英國の失業者問題に付て、政治家や學者が熱心なる注意を拂ふの偶然ならざるを知つた。

失業者發生の原因

全體失業者は如何にして、發生する者なるや、早やい時代には機械の發明と其の普及から失業者を生じた、人の手に依て、作られた多くの物が、機械で一時に多く作られる様になつた爲めに、失業者が出來たのである、然かし其の時代の失業者は、新らしい文明の横暴を怨みながらも、時勢の止むを得ざる者とあきらめて、自ら新しい運命を開くに努力し、所謂失業者の運動を起さなかつた、西洋に於て、其の失業者問題を起すに至つたのは、工業が發達したる後、世間の不景氣の爲めに、工場が其の人員を減少し、若くは工場閉鎖のために、突如として多數の失業者を生ずる様になつてからで有る。

日本の失業者

日本で先般來歐洲戰爭の好景氣に乗じて、新に起つた工場が、平和克復後の不景氣に閉鎖したり、戰爭中工場の擴張と共に、増員して居たのが、不景氣のために減員した結果、失業者を生じたのが有る、然るに此等の失業者中、意外に不穩なの多いのは、そこに一種の事情が有つたのだ。戰爭中の好景氣で、農村や漁村の壯丁が、多く都會に出で、工場に取られ、農村も漁村も、數年間働く人が、少ないのに苦しんで居た、そこへ工場の閉鎖若くは減員のために、相當の手當を懐にして、農村や漁村へ、壯丁が歸つたのだから、到る處彼等を歡迎した、それ故に失業者の怨嗟の聲は、意外に少かつた。資本家が恐怖したる十分の一の騷ぎも起らなかつた、或る大資本家の一人は其の大工場の大減員を決行したる後、意外に穩やかなのを見て、『あゝ殘念なことをした、あんなに穩やかに解決するのなら、あんなに多くの解職手當を給するではなかつた』と悔んだ程で有る。

行政整理の失業

行政整理と云ふ者の愚劣なことは、先般中央公論に於て僕の論じて置いた所である、根本的に整理を行ふなら、相當に意義有ることかも知れないが、過ぐる三十年に行はれたる行政整理は、體裁ばかり良くて、事實は至つて詰らないものであつた。今回の加藤内閣の行政整理も、其の愚劣に於て、從來の者と、

[illegible]ない。[illegible]大同小異の者で有らうと思ふ。其の[illegible]だ。[illegible]で行るだけに。其の失業者も。決して高給とは思はない様である。如何な[illegible]三郎内閣の市来蔵相が。其後に山本権兵衛伯の後援を負ひ。其の威力に依て。整理を行ふた時。多くの官吏は。其の整理の列に入らんことを希望した。それは失業手當が。馬鹿に良いからで有る。普通の時に於ても。何時免職になるやら分らない、『すまじき者は宮仕へ』で有る、少しの過失が有ても。恩給を棒に振る様なことが起らぬとも限らない。今日は無事に務めて居ても。明日は如何なる悲運を見るやら分らない。早い話が。動揺の激烈なる官界の事だから。今日信任を得て居る長官が。他へ栄轉するか。又は罷免になつて。彼れに代た男が氣に入らぬとなれば。忽ち首にされないとも限らない。然るに行政整理の結果免官と云ふのは。決して過失の爲めでない。政府の財政の都合上。誠に氣の毒ながらと云ふので。手當はベラボウに多く呉れるし。一般からは同情が有るし。官界から退くとしたなら。之れほど甘まいことはない。されば市来蔵相の行ふたる行政整理の時には。窃かに運動して。整理の列に入らんとした者さへ有つた位で有る。退官者に對しては。一般官吏の多くは。一時金の手當の巨額なるを見て。羨むべしとした者で有つた。整理[illegible]したばで行る。[illegible]にでしも。[illegible]の官吏[illegible]では、[illegible]の整理には。必ず入れて貰ひたい者だ」と[illegible]た。それ故に政府の退官者を。[illegible]の失業者問題の中に[illegible]失業者と全然同一視するわけには往くまい。

獨逸の失業者保護

獨逸が革命の後、エーベルトの政府は、社會黨多年の政綱を實行して、失業者を優遇した、其の結果は、殆んど失業者を奨勵する姿になつた、失業者で夫婦と子供二人位ある者に對して、政府は、一日凡そ二十マークの金を支給する法律を作つた、主人がいくらで、細君がいくら、子供の年齢でも、それ〳〵差は有るが、先づ四人で二十マークはもらへた、彼等は此の[illegible]の支給を受けて、悠々として遊食して居た、其の頃ベルリン大學の立派な教授の俸給は、一ケ月四百マークから五百マークで、右の失業者の一ケ月六百マークの收入よりも少なかつた、或る教授に向て、活動寫眞や芝居の流行に付て問ふたら、彼は苦笑しながら、『芝居や活動寫眞は、現時のベルリンでは失業者か見るもので、我等の如き薄給の者は、それを見物するの餘裕を持たない』と皮肉に答へた、獨逸の社會黨政府は、一風

で、孜々として其の職務に勉强せる大學教授よりも、失業者を優遇する樣なことをやつたが、か丶ることは如何に西洋の飜譯と雖も、日本に採用すべからざることで有る。

多數の失業者

先日或る人は、現に多數の失業者が有るが、此の上に多數の退官者が失業者となりては、社會上容易ならぬことだと言つた、僕は今度の行政整理が、依然として愚劣な者で有ると思ふ、唯一時の事で、間もなく復舊の形になると思ふ、結局國庫が、一時巨額の手當を出すだけ、損失を來すに過ぎない、市來藏相の時も、左樣で有つたから、今度も同樣の結果を見ると思ふ、而して假りに多數の退官者を出した所が、彼等は心中では、欣々として居る者だ、他の同僚や友人から『一杯奢れよ』と言はれる連中だ、不平の出でるべき境遇でない、特に日本の人情は、西洋人の個人主義とは、大に趣を異にし、失業で困難だと云ふと、誰れか彼れか、世話をする樣になつて居る、近來西洋思想が、蔓延して來て、都會は餘程惡化して來たが、田舍は未だ多分の溫情が有る、過失が有て、免官となつたのでなくて、未だ用ひらるる者を、財政上の都合で、罷めされたと云ふ看板だと、賣行きは、普通の失業者よりも早い筈だ、僕は退官者の大部分が、西洋の失業者の如く、社會に厄介をかけるとは思は

學校卒業生の就職難

學校卒業生の就職難は、又別個の一大問題であるが、之れは日本國民の教育に關する思想を改めなくてはならぬ、今日の風潮は、誰れも彼れも、大學教育を受けて、卒業證書を手にしたがつて居る、農民の子にして農業を學べば、一人前の農民になれる者が、法律や文學を學んで、實用に適せざる人間になつたのも有る、高い學資をかけて、社會の厄介物を作りつ丶有るのは、現代教育の弊だ、卒業證書萬能と云ふ思想が、青年の間に行はれ、大學は眞正の人物を作らず、卒業證書を神社のお守札の如く濫發するのだから、今日の大學卒業者の實際に役に立たぬことは夥しい、常識を缺き、學問も怪しいのが多い、それが卒業證書ばかりを手にして、就職難を高唱し、所謂高等遊民となつて、騷いで居るのだ、此の問題を解決するには、青年が天賦の特性を各自に考へて、其の進むべき道を定める時、能く間違はぬ樣にしなくてはならぬ、農民に適する者、工業家に適する者、商人に適する者、又法律家となり、文學者となり、官吏となり、教員たるに適する者、それ〴〵天稟を考へて、進まなくてはならぬ、僕の友人の一人は、其の次男の秀才を、中學校

から見て[illegible]、そ
れは非凡の才能を有し、[illegible]
れて居る、人間は必ずしも大學教育を受けなくてはならぬこと
はない、何れの方面に向つても、其の人物に適する職業を選擇
し、それに十年專心に從事すれば、一人前にはなれる者だ。

現代の大學卒業者の多くは、唯卒業證書さへ有れば、立身出世が出來ると夢想して居り、其の求むる所の地位も、徒らに高きを望み、やらせて見ると、其の實力の乏しいのが多い、而して就職の道を得られない連中が、高等遊民となり、不平を唱へ、これが社會を不穩に導く樣になつて居るが、之れは父兄の愚昧と、教育當局者の無責任と、卒業證書萬能と云ふ思想が彌

ら[illegible]、[illegible]
て、役にもたたなくて、[illegible]、才に[illegible]
を[illegible]ないから、各種々の教育[illegible]、人物を作らず、[illegible]
の切賣り。卒業證書の[illegible]を[illegible]して居る間は、此の種の高等遊民は、年を逐ふて増加すると見なくてはならぬ、其の數が多くなれば、それが世の亂れを惹起す基ひとなるであらう、五十餘年前、徳川幕府は浪人に依て倒された、秩序の有る社會から用ひられない程の高等遊民の中から、一代を震撼する程の破壞力を發揮する人物が出でないとも限らない、大學卒業生の就職難と云ふ、一の潮流を眺めて居ると、其の流末に、狂瀾怒濤を發見する樣な感覺が起るを免かれない。

古手官吏と新卒業者との就職競爭

高島米峰

今年の後半期になつてから、著しく、不景氣風が吹き荒むやうになり、そのために、生み出される悲劇は、毎日の新聞に滿載されてゐる。その原因は、對外的のものと、對內的のものとがあつて、そのいづれも、昨年の大震火災に出立して居ることは、言ふまでもないのである。がしかし、現內閣の消極的[illegible]政策の力も、亦與つて、甚だ多きに居ることを、否む[illegible]

くまい。謂はゆる消極的緊縮政策も、災後の日本に於ては、當然の措置として、許さねばならないことであるが、その手段の拙劣と、及び、理論の一貫しないのとが、累をなして居るのである。

凡そ、前觸れとか、宣傳とかいふことは、新に何事か施設しやうといふ、積極的發展政策を執る場合に於てこそ、必要であるが、從來、繼續して來た事業を廢止し、若くは縮少するといふが如き場合は、出來るだけ、他の視聽を刺戟しない程度に於て、これを行ふべきである。それでも、どうせ知れずにも居らず、知らさずにも置けないこと、勿論ではあるが、しかし、半歳も前から、鳴物入りで、ソレ廢止するぞ、ヤレ首を斬るぞと大々的に宣傳して、社會を不安に導き、人心を險惡ならしめることは、確に不景氣風を吹き荒ませる、有力なる原因の一つであつて、何としても、贊同することが出來ないのである。

早い話が、行政整理の結果、この年末に際して、何萬といふ官吏を罷免するといふことを、隨分長い間、豫告して居たのであるが、そのために、本年の後半期に於ける官吏は、不安の念に驅られて、勢ひ怠業狀態を續けることゝならざるを得なかつたといふことである。誠に、無理からぬことではないか。又社會の方から言へば、同時に、何萬といふ知識階級の失業者が出て來るといふことは、實に由々しき大事件であつて、これ確に、不景氣風に、勢を加へること、頗る強大なるものがある。同じ淘汰を行ふにしても、關係者以外に向つての前觸れを抜きにして、今月は何省來月は何省といふやうに、一省づゝ、順次に、出來るだけ世間の問題にならないやうに、小出しに淘汰してやれば、その影響するところ、比較的弱く、又、淘汰された人々の身の振方も、比較的容易に、片づかぬとは言へない。然るに、同時に多數の求職者を迎へた社會は、到底、その希望を滿足せしむることの出來ないのに、當惑する。

來る三月、諸種の學校から巣立ちする多數の青年、いづれも、今や、何等かの職業を求めて、獨立自活の新生涯に入るべく、憧憬と、希望と、理想とに、燃えて居るであらう。然るに、たださへ財界不況の今日、殊に、思ひもかけない多數の強敵と、就職について、競爭しなければならないとあつては、彼等青年のために、一掬同情の涙、無からざるを得ないのである。退職官吏は、その多くは、恩給を有するものであらう。普通の月給から、恩給を差引いたゞけの給料で、職を求めるとあつては、駈け出しの青年に、相當の給料を拂つて、仕込んでやるよりは、……しかも、血氣の定まらない、危ぶなつけの多い青年を使ふよりは、恩給といふものに、若干拘束されて居る中年ものを使

[illegible]といふやうにかへられる[illegible]
[illegible]する青年[illegible]の前途は、可なり暗いものではないか。

冗員の淘汰は、何處に行はれても結構であるが、官署に於ては、結構の段ではなく、寧ろ甚だ、必要なのである。官吏の執務振りと、餘り誠實でもない、現代の銀行會社員の執務振りとを比較してさへ、如何に官吏が呑氣であるかは、何人も、容易に看取し得るところである。眞に官吏が自己の職務に忠實であるならば、その數を三分の一に減じても、尚、現在の能率以上の能率を示し得るであらう、とは、僕の常に觀測して居るところである。繁文縟禮、屋上更に屋を架するがために、人を要し、人の數を増すがために、更に人を要すといふのが、官署の現狀ではないか。かゝる時、冗員を淘汰することは、その方法が善く、理論が一貫してさへ居るならば、誠に、時宜に適したる措置と言ふべきである。然るに、現内閣は、この有意義の事業を行ふに當り、まづ、その方法を誤つたゝめに、社會に惡影響を與へることゝなつたことを、甚だ遺憾としなければならない。且つ、冗員を淘汰して、行政整理をするといふことが、現内閣の主張の一つであるにも拘はらず、組閣の當初から、全然それを裏切るやうな、政務官政を、新に設けたるが如き、何といふ矛盾であらうか。政務と事務とを區別して、何等成績を示さなかつたこと[illegible]、[illegible]であるのに、今更、[illegible]官を[illegible]けたといふ[illegible]は、行政整理の[illegible]を暴露して居るのではないか。或は言ふ、[illegible]ての、[illegible]だと。果して然らば、これ[illegible]に、人のために官を設けたものであつて、實に、立憲治下に於て、斷じて許すべからざる政界の極である。聖德太子の『十七條憲法』の七に曰はく、『人には各々任じ掌ることあり。宜しく濫がはしくせざるべし。其れ、賢哲官に任ずる時は、頌音則ち起り、奸者官に有るときは、禍亂則ち繁し。世に生れながら知るもの少なり、尅く念うて聖を作る。事に大少なく、人を得て必ず治まる。時に急緩なく、賢に遇へば自ら寛なり。此に因つて、國家永久にして、社稷危きことなし。故に、古の聖王は、官の爲に以て人を求め、人の爲に官を求めず。』（原漢文）と。現内閣の諸公は、この章を、味讀心讀して、その非を改めることに、勇敢であつて欲しい。

歐洲戰爭の當時、人を要すること甚だ多く　下級の實業學校の卒業生でさへ、羽が生えて飛ぶといふ程の、上景氣であつたが、あゝしたことが、今後再び來るか來ぬかは、逆睹することは出來ない。しかし、大體に於て、人口が増加し、教育が

し、入學難々々々と叫びながらも、年々、校門を出づる青年の數は、次第々々に增加することは、極めて明なことである。中には、生活問題を超越して一三昧に、研究を續けることの出來る境遇の人も無いでは無からうが、その大多數は職業を求むることに依つて、生きなければならない人々であらう。然るに、日本の現在には、到底、そうした多數の青年をして、不滿無からしめるだけの、事業は與りそうにもなく、商工業の國際關係を眺めても、現在の日本の立場は、悲觀材料のみが多くて、殆ど、一路の光明をさへ認め難いのである。謂はゆる國步艱難の時に際會したのであつて、かゝる時に生れ合せた青年は、實に眞劍の覺悟を以て、自己の運命を開拓すると共に、國運の發展をも、期しなければならないのである。

それには、まづ、樂をして旨いものを食はふといふやうな安きに就からうとする考を、擲たなければならない。月給取り生活で、ネクタイや帽子の流行を追ふことに、浮き身をやつすよりは、腕と脛との力によりて、額に汗して、自ら養ふといふ方に、心を向けなければならない。そうした青年ならば、北海道でも、樺太でも、台灣でも、朝鮮でも、滿洲でも蒙古でも、人間到るところ青山ありで、どこでも、これを歡迎して與れるのである。二宮尊德翁曰はく、『建國の始め、たゞ一人、豐葦原に、降り立ちたりと思へ』と。就職難緩和の、守本尊とするに足るの金言でもあるし、又同時に、不景氣挽回策の、奧義とするに足るの作句でもある。(大正一三、一二、七)

高等失業者問題

文學博士　三宅雪嶺

德川時代に時々浪人が問題になつた。種々の事情で大名を取潰し、それで施政上に便利を得ると同時に、浪人が何かすると心配があり、事勿れ主義で改易を少くするに傾いた。太平が永續きするのに與つて居るけれど、何處にも無能の武士が多く、

けふに至[illegible]するに至つた[illegible]には生活をおびやかされ、[illegible]の生活に追はれるのを、好みの一事を以て粗、自ら満足なる得ぬとき、腹が空つても饑じくないとて、それで通し得るとした。明治五年の[illegible]は此制度及び習慣を廢したものであつて、武士が衰へたとも何とも云ひやうがない。衰へて騒ぎ立つ程の氣力もなく、泣き寝入りになつたと云へる。所によつて紛擾が起り、佐賀の亂、萩の亂、最も大きくして鹿兒島の亂、皆多少士族の不平に伴つて居る。泣き寝入になつた連中は何うなつたか、萬石以上で家來が働いたのは何とかなり、百石以下で身に勢のあるのは各々職業を得、或ひは立身出世し、中間の何千石より何百石の連中は、例外を除いて、並一通りの零落れ方でない。何處へ行つたか、分らないのも少くない。金祿公債を貰ひ、その利で暮し得る筈であり、政府も之を念としたが、惡い銀行が將來倒しになり、元も子もなくするを免かれなんだ。商賣すれば所謂士族の商法で、片々から仆れる。何とも仕樣が無ささうで、倒れるものは倒れ、起きる者は起き、幾年かを經、少くとも表面上、何とか安定するに及んだ。有祿者五十萬、その家族が何とかして社會に存在を續け、世間で怪しまなくなつただけの事がある。七百年來の制度を撤廢して、案外面倒がなかつたと云へぬでない。

士族も存在[illegible]、一とにかく[illegible]の[illegible]といふ事になる。[illegible]一定の[illegible]にはを計劃する者よりも安全な生活を思ひもし、[illegible]したる時として淘汰の必要を生じ、地震とか何とか、[illegible]の、初めの程、免職で[illegible]つたが、それでは氣の毒と云ふので、年[illegible]年と云ふ事になり、それが變遷し、休職とか退職手當とか、恩給に見るやうになつた。帝大教授の停年制度が定まりかけて延延びになつたのも、退職後の條件が難しかつたのに由る。前に辭令一本で定まつた事が、後にいろいろと色がつく事になつて、恩給もいくらか都合よくなつて居る。行政整理でも何でも單に免職といふだけでは、氣の毒、罷めた後の生活を察してやらねばならぬとなつた。其點は勞働者に似て居り、勞働者の問題が官吏に移り、寧ろ適用された事になつて居る。前に官吏の生活を保障すると云ふなど、俸給と聞えたが、今は當り前の事とし、大びらに評議される。

官僚の職務の能率を高めると、官吏の生活を保障すると、相錯綜し、一方立てれば他が立たず、その調和を正しくするのに骨が折れる。生活に苦しむから役に立たなくても官職を[illegible]はねばならぬとなつては、租税で情實や厄介者を養ふ事になる。さりとて役に立たぬから勝手にせよとしては、思ひ遣り

ない處置ばかりか、日頃心配する社會主義に火を點ける氣遣ひないとせぬ。まさか高等官を勤めた者が主義者の仲間入りすまいと高を括くつても居れぬ。前に官制改革に多くの免職者を出す場合、免職せらるべき者は、高官に泣きつき、何處ぞに世話して貰ふ事になつて居つたが、今は免職に手當がつくと定まり中には生涯勤續して貯蓄し得ない程の金額を一時に貰ひ受けるのがある。四萬人が罷められるとて、それが俄かに窮するのでなく、ゆつくり思案し得るだけの餘裕がある。富豪から見れば僅かな金と云ふものの、貧乏人から見れば結構な身分と云へぬでない。廢藩置縣の際金祿公債を貰つた程でなくても、いくらか之れに似て居る。一萬七八千圓の連中は恩給もあり、贅澤せねば懷手で暮し得るのがあらう。それ程にならぬのは、何とか金を働かす必要があり、之を元手に、商賣しようとか、株を買はうとか、金貸ししようとか、當年の士族に似た所がある。一般に當年の士族よりも才能があり、金を働かすに長じて居り、中には頓々拍子に儲け、大金持ちになるのもあらう。それ程でなくても、官吏としての俸給より多く得るのがあらう。或ひは初めに儲けて後に損するのもあらう。或ひは初めに損して後に儲けるのもあらう。或ひは初めから損失續きで浮ぶ瀬のなくなるのもあらう。官職を捨て自由の身となり、初めて自身本來の能力を知り、全く異なる方面に飛躍するのもあらう。浮ぶのむのと何の比例になるか、豫め知りやうもなけれど、普通に失業者扱ひせぬ者を失業者扱ひせねばならなくなつた。

一方で官吏を淘汰し、失業者を出し、銀行會社にも之れと同じくするのがあり、他の一方に高等教育の機關が擴張し、大學卒業生に職業を得ないのが頗る多きを加へ來つて居る。小學の教育を強制した結果、中學の增設を促し、中學が多くて高等學校入學難に惱み、高等學校が多くなつて、大學入學難に惱み、大學が多くなつて、就職難に惱むの狀態である。或る方面では得たり賢しとして云ふやう、さうなるのを知つて居つたればこそ濫りに大學を增設するべきでないと說いたのであつて、徒らに學士を多くするは、高等失業者を增加し、安寧秩序を紊すに過ぎないと。その云ふ所によれば、教育の程度を高くするのは、安寧秩序を紊すといふ事になる。教育と云ふものは、さうあらねばならぬか。人として教育を受けるのが、之を受けぬよりも好いとせぬか。受けるのを望むべきであつて、その爲めに安寧秩序を妨げるならば、別に考へる所なくつてならぬ。安寧秩序を維持するが爲め、教育の程度を低くして置かねばならぬといふ事があるか何うか。安寧秩序はそれ程大切なものか。安寧秩序を專一にするならば、歐米の社會に入込むより

も政府は當に止まつて居るに若くはない、[illegible]めといふが如く、教育を盛んにすれば、奥山の一軒家に住まふが如く不便でない。何としても教育の程度を高めるのを妨ぐべきでないとしては、大學卒業生の就職難を以て避くべからざる勢とせねばならぬ。中學で止めても、職業を求め得るのに、折角大學まで漕ぎつけ、職業を見出し得ぬとあれば、餘計な學問した事になりはせぬかと云ふが、大學卒業生が如何なる位置を社會に占むべきか、豫め定まつて居らぬ。當人は職業の爲めにしたにしても、何でも當人の望み通りになると限らず、社會は廣大なる大學であつて、其處で學問も練習も受驗もせねばならぬ。大學と稱する或る建築物を出たからとて、それで一生の事が定まるべきでない。直ちに職業を得、年々力を伸ばし、思ふ存分に生涯を暮らすのもあらう。或は幾年も爲すべき事なく記憶した事も忘れ、放浪生活だに遂げ得ないのがあらう。そこは何とも仕様なけれど、若し大學で教育を受けるのが、受けぬに勝つて居ると斷定した以上、卒業生の多くなるのを望むべきであつて、就職難を慮り、卒業生を制限すべきでない。

それならばいくらでも高等失業者が出て差支へないか。口ばかり達者で、居候して働かぬか。腕に飽かせて、主義者仲間に入り、世間を騒がすに任すべきか。其處は一樣に考ふべき所である。[illegible]。[illegible]働くべきに働かず。[illegible]とて、いくらでも職業が轉つてゐるといふものでなく、[illegible]能力に應じて居るのであつて、望みの職業に就くには、それ相應に力を伸ばさねばならぬ。世間に種々の制度があり、低能者が有能者の上に位したりするけれども、石が浮き木の葉が沈むといふ程でない。何處でも能力相當の位置あるとて、能力を伸すに努めれば、次第に望み通りにならうとする。世間に比較的無能な者が多く、有能な者が地位を占め得るとして、差支へない。日本で學士が有り餘るやうな事なく、出れば出る程いよいよ善く。ただ卒業證書が物を云ふのでないといふのを承知せねばならぬ。

併し社會にも缺陷がある。懐手して榮耀榮華を極めるのがあり、朝から晩まで働き通して生計に餘裕を得ないのがある。急に改めやうもなけれど、不勞所得と勤勞所得との區別を明かにし、なるべく前者の負擔を多くするやうにすべきである。世間に懐手で過ぎ行く者があるべきでなく、自ら備へた能力を働かさねばならぬ。金が有つても無くつても、働くべきに働くを要する。働き得て働かないのは、當人の過ちであつて、相[illegible]の制

扱を受くべきである。病氣又は或る不幸で働き得ないとあつては、社會で之を保護する丈けの設備を整へて置かねばならぬ。病氣又は或る不幸の際に保護せられるとあつては、我が職務とする所で働いて居れば宜く、無理して餘計な事するに及ばぬ。怠け者は嚴に處分するとし、働き得て、不幸で働けぬ者は、保護する事になつて居るか何うか。其處は政治機關、自治機關等の衝に當るものに問はねばならぬ。

何にせよ高等失業者が問題になり來つて居る。行政整理でよい年した高等失業者が出て、高等教育機關擴張で高等失業者の卵が續々出るやうになつて居る。それが思想惡化を促しては大變と云ふが、低級失業者ならば思想惡化の氣遣ひないと云ふか。同じ失業者でも高級は低級よりも何かにつけ勝つて居る筈ではないか。盲目で自由に大道を往來した者が、不圖して目が開き、大道の繁雜なるに驚き、一寸も踏み出す事出來ず、目を見張つて、大道に出るまで少からぬ練習を要したといふ事である。前に目を閉ぢて危險を感じなかつた所をば、眼を開いて之を感ずるやうな事がいろ〳〵ある。それと云ふて再び目を閉ぢ杖をついて歩くのも妙でなからう。現在の就職難は何程か大震災の影響を受けて居らうが、世間は時々變遷し、職業を多いと感ずるもあり、少いと感ずるもある。法科工科の繁昌した頃、文科は惨目であつて、今文科は割合に好い。それも高育機關擴張の結果と云へば、何が都合好くなるかが分らぬ。業がブラ下つて居るやうに思ふのが間違ひの基であつて、人は生れた以上、生活し得べきは勿論、一人前として獨特の能力を伸ばし得べきであつて、病氣又は或る不幸の外、生活の心配するを要せぬのである。或る人が懐手で贅澤するとて、怨むに及ばぬ。働くを知らぬ者に眞の幸福を感ずる事が出來ぬ。働くべき位置がないと云ふのは、自ら力を伸ばさず、人頼みするのであつて、就職難は自らの力試しと心掛ければ間違ひない。そして取掛れば必ず適當の地位がある。爲し得る限りを爲し、倘ほ得べきものを得ぬといふ所で社會の缺陥を責むべきである。

行政整理の犠牲者と新卒業生の就職難問題

水野廣德

現内閣の標榜せる三大政策の一たる行政整理に依つて、大小六萬餘の官吏及傭員の首が飛ぶといふことである。欧洲戰爭の好景氣と政友會の積極政策とかに依つて過度に膨張したる財政を整理し、過大なる國費を節減する爲めには行政整理は誠に已むを得さることであらう、更に又人員過多の爲め繁文褥禮の弊に陷るり、却つて事務の澁滯を來す今の官衙より冗員を淘汰することは、事務簡捷、能率增進の點よりするも至當のことである。凡そ官衙と云はず、會社と云はず、扨ては公私の事業と云はず、日本ほど多數の人間を使用せる國は無いやうである。殊に官衙の如きは官の爲め人を置くと云ふよりも、寧ろ人の爲めに官を設くるの嫌なきにしもあらずである。是れ一は個人として我國民の體力能力が西洋人に比し劣弱なるに由るならんも、一は亦人口の過多より生ずる就職難生活難の緩和策として不要の人間を使用せる爲めではなからうか。しかも多くの中には上官上司の情實因緣に因り種々の名義の下に無職無用の人間を解職せる向も少なくないやうである。

理由の如何に拘らず、日本の役人は必要以上に多過ぎるといふことは事實である。現に今回六萬と云ふ多數の役人を馘首しても、國務の遂行に澁滯を來たさずとすれば、從來如何に多くの冗員が月給に衣食して居たかを知ることが出來る。六萬人の馘首に依り、一人平均月給五十圓とすれば、一ケ年に三千六百萬圓、若し之にボーナスを加ふれば四千萬圓を超過するであらう、陸軍四箇師團削減よりも遙に有意義なる整理である。此の多額の國費を節約し而かも事務の進涉を期し得るとせば馘首者に對しては誠に同情の至りではあるが、國民は双手を擧げて行政整理に贊成せざるを得ない。

今回の馘首者が無能者であるか、有能者であるか、老朽者であるか、若朽者であるか、又其の採擇方法が公平であるか、不公平であるか等は、當人としては勿論、官規の上に於ても相當大なる問題であるが、而しそれは別の問題とし、兎も角も六萬

の人間が其の職に離れることゝて一家平均四人と見積るも廿四萬の人間が生活の資源を失ふ譯である。素より中には多額の退職手當を貰ひ、恩給を合して有福なる老後の生計を立て得る者もあるであらうが、大部分は僅少の涙金に依つて追拂はるゝ下給薄給の官吏である。幸に就職口が見付かれば宜し、否らざる場合には手當金を食ひ盡したが最後、浪々無職の乞食と爲らざるを得ないのである。此の點に於て今同の馘首は國家としては誠に已むを得ざる處置なりとは云へ、社會としては極めて重大なる問大と信ずる、人間は生きざるべからず、食ふことが出來ぬとなれば人間何を考へ、何を企つるか判つたものではない。國民思想の惡化とかをペストよりも恐れ嫌ふ樞密院あたりの御老人達が心配するのも強ち無理ではない。

左ればと云つて財界不況、事業界不振、不景氣の風は全國を吹き荒ぶ今日、如何に其筋の御聲掛りを以つてするも、日本の經濟界は此等多數の離職者を收容するの力を持たぬであらう。殊に社會には幾萬といふ先住失業者が夫れこそ虎視眈々として控へて居る。新聞の報道に依れば月給六十圓の書記募集に對し無慮千人の志願者が殺倒したと云ふことである。如何に就職が困難にして、パンを得ざる知識階級の失業者が多きかを窺ふことが出來る

失業問題は獨り我が日本のみならず、今や文明國通有の社會的産物である。英國の如きは歴代の内閣が此の問題に拘れ、其の對策は政府或は政黨の重要なる政策の一とさへなつて居る。元來失業問題は資本主義に依る機械工業の發達に伴ふて生ずる避くべからざる社會病と云はれて居る。經濟學上の理論は兎に角、要するに失業者の生ずることは其の一時的たると永久的たるとを問はず、仕事に對して人間が多ふ過ぎる、或は人間に對して仕事が少な過ぎると云ふに外ならない。左れば此問題を解決するには仕事を増すか、人間を減すかである。即ち仕事を増して失業者に與ふるか、或は自然の儘に放置して失業者を餓死せしむるかである。然らざれば國家的に或は社會的に救濟機關を設けて失業者と其の家族の生活を保護するの法あるのみである。經濟界の自然趨勢に反して人爲的に仕事を増すことは、資本生産等種々の關係上實行不可能である。失業者を餓死の儘に放置することは單に人道上の罪惡たるのみならず、國家社會の安寧幸福を保つの道でない。然らば國家的に之を救濟保護せんとせば多大の國費を要する。是れ右に奪ふて左に與ふるもので行政整理折角の意義を爲さない。社會的に之を救濟するには日本の社會事業は餘りに貧弱にして無力である。結局經濟界の景氣同復して仕事の増加するまで、飢へる者は飢へよ、凍へる者は凍へよと、自然の成行に任かすの外は無いことゝな唯る。

併しパンを[illegible]る者あるに[illegible]ない。
そこに重大たるが[illegible]することを忘れないであらう。
　抑も生殖は生福を意味する。國家は性慾には干渉せずして生殖自然の産物たる生殖に對しては大なる干渉を行ふて居る。親が養育の能力なしと認めて墮胎したる場合に於ても、國家は殺人罪に準じて之に刑罰を課して居る。即ち生れ出づる當人には縦令意識がなかつたとは云へ、事實に於ては人間は國家に強要せられて此の世に、此の門に生れ出たものであるとも考へられる。既に國家の強要に依りて生れ出てたる以上、之に生活の途を與ふることは國家の義務ではないであらうか。或は又國家の強要に依つて生れ出てたる以上、國家に向つて生活の保障を要求することは國民の權利ではないであらうか。國家が強要して生れさしながら之を養育せず、唯戰爭の時ばかりに義務を課し、平時は飢餓凍涘に放置することは、國家として正しき道であらうか。素より今回の犧牲者は何れも皆所謂知識階級なるものに屬し、兩親の自由意思に依つて生れ出てたるもので、直接國家の強要を受けたる者でないとは云へ、國家對失業者問題を考ふる時、何だかそこに疑惑を生ぜざるを得ない。
　失業問題の根本が仕事の數と人間の數とに存する以上、人口と仕事の數が同じ比率を以て進まざる限り、人口問題を解決せ[illegible]
[illegible]資本の上に於ては一方に[illegible]加するに反し、一方には大資本に依る[illegible]め、個人の仕事は縦令減らざる迄も人口程には増加しない傾向がある。殊に我國の工業は原料の關係に於ても、技術の關係に於ても、外國工業と競爭して大發展を遂ぐることは餘程の難事であると思はれる。從ふて我國の工業は中途半端で、唯國内に於ける個人の仕事を奪ひ放しである。生産品の外國輸出に依つて個人に職業を返へすことが出來ない。加之、商業も亦三越式大資本大商業の發達に依り個人の營業に漸次脅迫を受けつゝある。
　併しながら人口問題に依つて失業問題を解決せんとするは一朝一夕の業ではない。然るに今回の離職者に對する救濟問題は當面焦眉の急である。と云つて今日の經濟情勢の下に於て何人も合理的にして徹底的なる對策を講ずることは出來ぬであらう。唯消極的には國家の社會政策と相待つて失業者自身の節約に依り、退職手當を一日でも長く食ひ延ばしつゝ當にならぬ好景氣の復來を待つか、積極的には民間の事業家資本家等が道德的自己犧牲心に依つて此等の失業者を收容するかの二途あるのみであらう。併し斯かる姑息應急の療法が何時までも續くものではあるまい。結局は經濟界の復興を待つか、否らざれば[illegible]

問題と云ふ社會病の病源を驅除するかである。此に至れば自分達素人の言ふべき領分でない。

衣食足つて禮節を知るの諺は聊か適合しないが、人間は生活第一である。名譽や體面は第二義的要求である。一昨年の震災が最も明確に之を立證して居る。「命あつての物種子」とは人間の偽らざる飾らざる最も卒直なる告白である。知識階級の失業者が勞働を厭ふ間は、まだ憂ふるに足らない。彼等の生活に尚ほ餘裕ある證據である。彼等がパンの爲めに愈ペンと十露盤とを抛つて鶴嘴とスコープとを握り、背廣を脱ぎ棄てゝ印絆纏を着るに到る時、社會問題は愈實劍化する。勞働運動は愈生活化する。そこ迄行かねば日本に眞の勞働運動は起らない。扨て夫が良いやら、悪いやら、見る人に依つて考が異なるであらう。

○

行政整理に依る離職者の失業問題よりも、尚ほ一層重大なる問題は新卒業者の就職難である。本年四月、全國に於ける官公私立の實業學校専門學校大學等の卒業者は約四萬人を算するであらう。是等の卒業者の中には、或は獨立の事業に事從し、或は家庭の手傳を爲す者もあるであらうが、少くも三分の二は卒業と同時に就職を求むる者である。此の外中學校卒業者にして職を求むる者も數千人に達するであらう。官私の大學卒業者のみにても四五千人を算する。今回涙を振つて六萬人首したる官衙に多數の收容力なきは問はずして明らかである。さらでだに不景氣の爲めに人員淘汰に忙がしき民間會社亦多くの收容力を持たぬであらう。大學卒業生の如きも一二特種の科目以外、就職口は極めて尠ないと云ふことである。然る時是等數萬の卒業者の身の落付は何うなるであらう。多くの卒業者の中には家庭豐かにして就職を急がぬ者もあるであらうが、大部分は子弟の卒業を唯一の樂みとし、其の就職を唯一の賴みとし、乏しき家計を節して修學せしめたものである。漸く卒業は出來たものゝ就職が出來ぬとすれば、當人の失望は言ふ迄もなく、父兄の落膽、家庭の悲愁、想像に餘りがある。素より修學は彼等の自由意思に依るもので、就職問題に對し國家は其の責に任ぜずと云へばそれまでゝあるが、社會としては相當深刻なる問題である。金も無い癖に學問などをするのが間違つて居ると簡單に、冷酷に笑殺すべき問題ではない。殊に國家が、夫こそ金も無い癖に、巨費を投じて教育機關を設置し教育を施しながら、卒業者を國家社會の爲めに有効に使用せざるは、是れ教育の根本精神と目的とに反せるもので、結局教育費の徒消である。啻に卒業者と其父兄の個人的經濟損失のみならず、國家社會としても人物經濟上に於ける大損失である。

たら、國家の教育に[illegible]目的である。一方より[illegible]つ安寧幸福を保たんが爲め、國民として、社會人としての素質を向上せしむる爲め、一般國民に施す普通教育或は國民教育である。其二は國家の繁榮、社會の幸福を增進せしめんが爲め、特別の國民に授くる各種專門教育である。卒業後就職を求むる者は多くは第二に屬する者である。故に此等卒業者に適當なる職業を與へ、以て其の修得したる學問技術の全能力を發揮せしむると否とは、國家の隆替、社會の榮枯に至大の關係を有するものである。

右の意義に於て教育は最も重要なる國家施設たると共に、學校卒業者は出來得る限り重用すべきである。併しながら現在の日本に於ては教育中毒の弊が無いでもない。男子に在つては、嫁入資格の一として女學校に通ふ女子程に烈しからずとは云へ、而かも倘ほ猫も杓子も教育熱に浮かされて、自己の能力を察せず、家計の如何を思はず、卒業の肩書取りに學校に通ふ者も少くない。其の責素より當人と家庭とに在りとは云へ、國民をして斯くの如く教育萬能熱に浮かれしめたる主なる原因は、國家社會が餘りに學校卒業の肩書に捉はれ、人物技倆の如何よりも卒業の肩書を尊重し過ぎたるに在りと云はねばならぬ。素より肩書尊重にも相當の理由あるとを否定せざるも、徒に肩書の

本とせらるゝ以上[illegible]望む父兄とも教育を[illegible]に[illegible]は自然[illegible]

教育中毒の如何に拘はらず、肩書を求むる者にして就職の途なしとすれば、彼等の前途と境遇とは何うなるであらう。生活に窮せざる者は或は更に高等の研究に志す者もあるであらう。或は家庭に歸り又は下宿に燻つて浪々遊惰の生活を送くる者もあるであらう。生活に窮する者は或は不平と不滿とを忍びつゝパンの爲めに自己の能力以下の職業に就く者もあるであらう。或は之すらも成し得ずして社會を呪ひつゝ自暴自棄に陷ゐる者もあるであらう。而して高等の研究に進む極めて少數者の外は、一年二年と遊んで暮らすから折角學びたる處を忘れることもあるであらう。殊に彼等の殆んど總ては血氣橫溢の青年である。浪浪の間に社會の惡風に染つて酒色に身を持崩す者もあるであらう。罪惡を犯す者も出來るであらう。斯て知識遊民が社會の一隅に充滿する政府者の恐るゝ思想問題は此處にも發生するのである。

併しながら無い袖は振られぬ如く、官衙と雖も、會社と雖も、無い椅子は與へられぬであらう。一つの椅子に二人を備へることは出來ない。左ればとて行政整理、人員淘汰を要する今日、卒業者の爲めに特に新らしき椅子を備へることも許されぬであらう。然る時之が對策如何ゞである。新らしき者を採つて

者を容れるか、舊き者を殘して新らしき者を放つか、策は二つに一つの外はない。新陳代謝は生物進歩の原則である。生物たる人間に依つて構成せらるゝ國家社會も亦此の原則の外に立つことは出來ない。旺盛なる國家と潑溂たる社會の生命を維持せんと欲せば、常に老朽を淘汰して新鋭を注入せねばならぬ。

資本主義經濟の鐵輪内に生活する日本としては、此際一定數の失業者を出すことは免れ得ざるところであらう。唯若き新卒業者を失業者とするか、舊き經歷者を失業者とするかが問題である。併し人事は複雜である。單に新舊再非のみを以て論斷する譯には行かない。新卒業者の殆んど全部は單身者にあるに反し、舊經歷者の多くは家庭の所有者である。一人の失業に依つて多くの家族が飢へねばならぬこともある。左れば最新の教育を受けたる新進氣鋭の卒業者に椅子を與ふることは、國家としては或は利益であるであらうが、社會としては家族諸共生活の道を失した舊經歷者を如何にすべきやの大問題が生ずる。

軍人と文官會社員とは其の職務の性質を異にせるが爲め同一に論じ難きは勿論であるが、文官及會社員は軍人に比して一般に就職年限が長い樣である。軍人の八割以上は四十代に於て豫備役に押し出されるのである。年々社會に出づる新卒業者の就職を容易ならしめんと欲せば、文官會社員も軍人の如く其の在職年限を短縮するか、否らざれば卒業者の數を制限するの外、此の問題に對する根本方策はあるまいと信ずる。素より年限短縮の爲め恩給並に退職手當等の增加を來すは免れざるも、問題解決の爲めには何れか一つは不便不利を忍ばねばならぬ。併し斯かる根本策は目睫の間に迫まれる本年の新卒業者に對しては間に合ふべくもない。唯此際執るべき途は政府も會社も大英斷を以て、生活に窮せざる老朽者を陶汰し、新卒業者に對して成るべく多數の椅子を與へることである。同時に新卒業者人心緩和の策として、せめて採用の人撰を公平にすることである。人物技倆に重きを置くは勿論であるが、動もすれば所謂有力家或は權勢家たる者の請託紹介に依る情實本位の採用法を廢すると共にである。尚ほ成し得れば困窮者を先にして不困窮者を後にすることである。斯んな姑息策でも爲ないよりは幾らか優しであらう。

教育機關の擴張せらるゝに從ひ、學校卒業者は年々增加し、就職難は景氣不景氣に拘らず次第に烈しくなるであらう、併し生產過剩なれば物價は下落し、殘品は材料値段で二束三文に賣却せらるゝ。人も物も變りはない、電車の車掌と運轉手が學士の肩書を有るに至る時、國民は初て教育中毒より覺め　卒業者の就職難は自然的に調節せらるゝであらう。併し我等は電車車掌の總てが學士の肩書を有する時代の來らんことを寧ろ望む者である。

北玲吉氏　高畠素之氏編輯

中判布表紙上製　紙數二百三十頁　◆　一冊壹圓貳拾錢　郵送料一冊八錢

社會哲學 新學說大系

時代の精神を理解す可く、新しき思想を吸收し新しき學說を咀嚼せんとする人の爲に本叢書を創刊し、社會及び哲學を中心とせる新思想新學說の深切平易なる解說を供給す可く企てた。難解なる思想を解り易く嚙み碎き、尨大なる大著を簡便に書き縮め、從來專門家ならずば與り學ぶことの出來なかつたものを、何人の頭にも容易に入り易きやうにした點に譯述者の並み〳〵ならぬ苦心は存する。編輯兩家が、此の方面に於ける造詣の如何に深いかに就いては改めて言ふを要せぬところてある。

ツガン・バラノヴスキイ原著

(1) ■唯物史觀の改造

高畠素之譯述

マルクス主義に對して曇らざる理解をもつといふことは、我々にとつて、もはや一の社會的常識として必要なことである。本書は、一面カントの流れを汲む理想主義的哲人たる原著者が、同時にまた有數の社會科學者としての立場から、マルクスの唯物史觀に對して精到にして理解ある批判を加へたもので、マルクスを知るに最もよき道案內である。

ラッツェンホーファー原著

(2) ■社會學的認識論

宮崎市八譯述

新しき社會學的國家學の集成者たるラッツェンホーファーの『社會學的認識論』は、從來の政治學に對して革命的對立をなすところの、社會學的新政治學派の最も大いなる典據である。說くところ極めて犀利精緻、嚴肅なる立論と深刻なる觀察と、エキゾチックな人種學的素材の取扱ひ方とに、彼獨特の力强さが溢れてゐる。譯述者は、新進氣鋭の學究である、

東京市牛込矢來三番地　新潮社　振替東京一七四二



長井雲坪

——本朝畫人傳の七——

村松梢風

一

彼は豆腐屋の子であつた。

越後の沼垂（ぬつたり）といふ處は、現今は新潟市の一部になつてゐるが、昔は其處だけで獨立した町だつた。信濃川の河口の東側に位し、河を挾んで新潟と相對してゐる。萬代橋といふ四百二十六間の長橋が、二つの市街を聯絡させてゐるのである。新潟港をひかへてゐる沼垂は古來商業殷盛の土地だつた。其の町に一軒の豆腐屋があつた。彼は其の豆腐屋の獨り子で、名を元次郎と云ひ、天保四年二月二日の生れだつた。

家は勿論豊ではなかつた。が、夫婦に子一人の暮しでは生活に困ることもなかつた。親は其の子に家業を繼承させる積りでゐた。

處が、豆腐屋の悴は繪が好きだつた。古へから有名な畫家と云はれた人々は大概天賦の畫才を有つてゐた。所謂學ばずして能く畫くの類にあらずんば畫筆の人とはなり難いやうである。彼も矢張り其の類から漏れなかつた。幼少の頃から、竹馬の遊を顧みずして、紙と筆とを持つて繪を描いて獨りで娯んでゐた。其の上讀書が好きだつた。さうした我が子の傾向を見ても親達はさう困つた子だとは考へなかつた。豆腐屋を繼がせるのもいゝが、悴が萬一學者になれば、賤しい商人（あきんど）の子でも、或ひは別の道で出世をすることがあるかも知れない——といふ風に

考へた。そこで親は其の子を寺小屋へ上げて學問を習はせることにした。貧乏な豆腐屋風情としてはそれは可成り思ひ切つたやり方だつたから、同じ町に住んでゐる人達からは餘り善くは云はれなかつたくらゐだつた。それ程其の時代は保守的で、强い階級意識がすべての人を支配してゐるのだつた。

寺小屋では、豆腐屋の子は獨り飛抜けてよくできた。眞に鷄群中の一鶴の觀があつた。殊に教師を駭かせたことは字を書くことの上手なことで、其の字はやがて教師も及ばない位に上達した。

學問と手習ひの爲めに繪の方はしばらくお留守になつてゐたが、寺小屋をさがる時分から少年の興味は再び繪畫の方へ戻つて行つた。彼はいろ〳〵の手本を何處からか借りて來て、暇さへあれば繪を描いてゐた。然し、其の頃から彼は家業をも手助けしなくてはならなくなつた。それは父親が病氣をしたゝめに一層其の必要が生じて來たのだつた。親達は最早其の子を學者にしてなどゝいふ呑氣な空想を描いては居られなかつた。十二三歳になると、時々病身な父親に代つて彼は豆腐の荷を擔いで町を賣つて歩くのだつた。貸し賣りをする家もあるので、腰に帳面と矢立を差して「豆腐、豆腐」と呼んで歩いた。

然し彼は繪を描くことを忘れたわけではなかつた。其の證據には彼が腰にぶら下げてゐる帳面には、賣り掛けの記入がしあるかと思ふと其の次ぎの處には繪が描いてある。商ひに出て歩いてゐても、途中で何か眼に付くと荷を卸して、腰の矢立と帳面を取つて直ぐに寫生に掛るのだつた。或日も彼は例の如く商ひに出たが、それは夏の事で、信濃川の河べりを通ると、青葉を茂らせた柳が川岸に立ち、其の眞下に小舟が舫つて、舟の中では人が釣竿の糸を垂れてゐる。其の光景が彼の眼には直ぐに一幅の繪になつて映つた。そこで彼は此方の木蔭に荷を卸して、例の帳面と矢立を持つて程よい距離を計つて寫生に取り掛るのだつた。彼はすつかり夢中になつて筆を動かしてゐた。

「面白い圖だ」と自分ながら思へた。

さうして彼が寫生に熱中してゐた時、突然背後から人の聲がして彼を駭かせた。

「おい、豆腐屋の小僧さん、豆腐を犬が食つちまふぜ」

喫驚りして振り向いて見ると、何時の間に寄つて來たのか二三匹の犬が集まつて來て大事な彼の商品をムシャ〳〵食つてゐるのだつた。

「畜生、シツ、シツ」

犬共は油揚げやがんもどきをくはへた儘逃げて行つた。其の後から少年は矢立と帳面を振り上げ乍ら追つて行くのだつた。

一二年経つと、彼は非常に不幸な身の上になつてしまつた。それは彼の兩親が引き續いて世を去つたのだつた。貧乏でもふた親のある間はよかつたが、ふた親に死に別れてしまつては、十三や十四の少年では如何ともしがたかつた。が、幸ひなことにひとりの叔父があつた。叔父は次郎八といふ名で、同じ町で八百屋を營んでゐた。次郎八の家も豆腐屋に負けない貧乏世帶ではあつたが、さういふ場合になつたので氣の毒な甥をば自分の家へ引き取ることになつた。そこで彼は今度は叔父の家の商賣を手傳ふことになつた。

少年とは云ひ乍らもう多少の分別はある齢頃だつた。彼はつくづくと自分の將來の事を考へた。かうしてゐて世間並の小商人になつて見たところで詰まらないやうな氣がした。何になり度いかと云はれゝば無論繪師になり度いと答へるよりほかはなかつた。けれども繪師になることが容易でないことは彼にも解つてゐた。それでも繪師になりたかつた。

叔父の家は赤貧洗ふが如き有樣だつた。それは叔父が人並以上の好人物であるからでもあつた。然し其の貧乏な中でも次郎八は、よく憐れな甥をいたはるのだつた。或る時も次郎八は甥に向つて

「お前は此の後どうする積りだ、親の無い後は此の叔父が親の代りになつて遣る、お、[illegible]前の力になつては遣れないだらう。だから[illegible]で男になれ、何んでも自分の好きな者になるがよい」

と云つて聞かせた。其の言葉には[illegible]ゐた。

彼は其の言葉を聞くと強く感激させられた。

「叔父さん、私は繪師にならうと思ふ」

「さうだ、お前は繪が好きだからそれもよいかも知れんな、然し繪師になれるだらうかな」

「成らうと思へば成れないことはないとわしは思ふ、昔から貧乏な家の子でも、勉強をして偉い學者になつたり、立派な繪師になつたりした人は澤山あるのだから」

「さうか、お前が其の積りならやつて見ろ、どうせ親も兄弟も無い獨りぼつちの貴樣だ、自分獨りが苦勞する積りなら何をやつてもえゝ」

それから彼は叔父の許しを得て、商賣の手助けをする傍ら獨學で繪を習ひ始めた。遊歴の畫家が來たりすると、それを訪ねて揮毫をするところを見せて貰つたりした。そんな事をしてゐるうちに自然に畫道に通じて來た。其の頃は新潟邊りでも畫が流行つてゐた。江戸や上方邊りから名家が來て此の土地で書畫會を開いたりすることも珍らしくはなかつた。當時專ら流行し

てゐる畫は南畫であつた。越後は殊に南畫流行りの國だつた。それは遠く釧雲泉の影響が流れを曳いてゐるのでもあつた。雲泉は肥前島原の人だが、若くより京攝の間に縱遊し、後江戸に出で、晩年更に家を挈へて越後に適いた。そして新潟に抵つて僦居した。彼は幼にして父に從つて長崎に遊び、淸人に就いて學を受けた。是れに依つて頗る華音に通じてゐた。彼はまた繪畫を善くした。殊に其の山水は絶妙であつて、深く元人の趣を究めて風韻雅致興表に出づる畫を作つた。彼はあまねく天下の名士と交遊し、京攝に在つては、蒹葭、梅崖、玉堂、春琴、山陽、杏堂等と友人であり、江戸へ來ては鵬齋、詩佛、雪齋、寒山、文晁、如亭等と親しく交つた。越後に移つた頃から畫技はますく進んで、畫を乞ふ者ひきも切らず、雲泉の名は大いに北越に著はれたのだつた。彼は越後で一人の男の兒をもうけた。其の子に越兒といふ名を付けた。そして文化八年の秋出雲崎に遊んで病に罹つて沒したのだつた。

越後には雲泉の門人が少くはなかつたが、其の中で最も名を知られた者は倉石米山であつた。米山は名は秀、字は子徹、通稱は甚助と云つて、高田の藥商だつた。彼は山水を得意とした。彼はまた考古僻があつて、古代の石器や古錢等の蒐藏家としても知られてゐた。

新潟附近には雲泉の畫が澤山あつた。元治郎も、雲泉や其の一派の影響を受けずには居なかつた。彼も同じく南畫の道へ進まうと其の頃から志したのだつた。

然し、少し畫の事が解つて來ると彼は、いつ迄もこんな田舍にゐても詰まらない、一日も早く他鄕へ行つて良い師に就いて學び度いと思ふやうになつた。さうして彼の憧憬の地は長崎だつた。

二

長崎はあらゆる文化の淵叢の地であつた。わけて德川中期以後の我國の繪畫は、長崎へ舶來する淸客の影響を受けて著しい變化を來した。享保五年二月初めて長崎へ來た淸の呉興の人伊孚九は、文人畫を日本へ傳へた最初の人であつた。ついで享保十六年十二月には沈南蘋が渡來して、寫生の花鳥畫を傳へて行つた。それより文人畫は大雅堂に依つて廣く天下に唱道せられ、江戸に崋山が生れ、九州に竹田が現はれ、京阪には米山人、玉堂、春琴等があつて、南宗文人の一派は天下を風靡するに至つた。同時に南蘋の花鳥畫も全國に傳播して、其の寫生の流派は文人畫と對抗して一大敵國をかたちづくるに至つた。かうして長崎に源を發した繪畫の流れは深く國內に浸潤するに及んで、

多くの天才を出現して、各々特色を發揮せしめ、一時に百花爛漫の觀を呈したが、是等の地の長崎は、伊孚九や沈南蘋が歸國し、其の門弟の人々も沒して後は、却つて著しく不振の姿であつた。然るに、天明以後に至つて、張秋谷、費晴湖、江稼圃、方西園、王克三、徐雨亭等の清客が相續いで渡來して、此の地に僧鐵翁、木下逸雲、三浦梧門の如き名家が輩出するに及んで、再び昔日の隆盛を恢復した。そして、崋山、竹田、椿山等の渡後の長崎は、我國藝苑の中心地として昔日にまさる盛觀を呈した。そこで繪畫に志す者は、笈を負ふて長崎に遊ぶのが常だつた。

元次郎は、人から長崎の話を聞くと、自分も其の土地へ行つて繪畫の研究をして見度いと思つた。鐵翁や逸雲の名聲は、九州の一角から彗星のやうな光を放つて、雪深き北越の地に生れた少年の血をも湧き立たせるのだつた。然し、長崎へ遊學するなどといふことは、容易ならぬ事と思はれてゐた。彼には其の旅費すらもこしらへる道はないのだつた。到底諦めなければならない事柄だつた。だが、元次郎はどうしてゞも行き度かつた。道中は乞食をして行けばよいと考へた。それから彼地へ着いて後の事は——それは彼には考へも及ばなかつた、が、行けばどうにかなりさうな氣持がした。萬一どうにもならなくて知らぬ土地でのたれ死にをしても構はないと思つてゐた。

其の決心を叔父に打ち明けた時には、叔父の大次郎も流石に驚いた、が、元次郎の決心は却々ひるがへさせることができないことを知ると、大次郎八はせめて長崎迄の旅費を彼に與へて遣り度いと思つたが、貧乏な中ではそれさへ出來ない事だつた。それでも漸う工面をして若干の金を道中の小遣として與へた。元次郎は、前途の光明を思ふと、路用のことなどは考へてゐられなかつた。魂は既に先きに長崎へ走つてゐた。

彼が生れた豆腐屋の家の隣りにおきよといふ婆さんが住まつてゐた。おきよ婆さんは職人であつた息子に早く先立たれて寂しい獨り暮しを續けてゐたが、正直者だので人に雇はれたり賃仕事をしたりして辛うじて生活をつないでゐた。其のおきよ婆さんは元次郎を子供の時分からよく可愛がつて呉れて、わけて兩親が亡くなつて後は、彼の身の上を憐れんで、着物の綻びなどもして呉れるのだつた。彼がおきよ婆さんの處へ暇乞ひに行くと、婆さんは老眼を瞬つて驚いた。

「長崎さ行くだつて、それはまアえれえこつた」

婆さんは、此の子が長崎へ行つてしまへばもう自分が生きてゐる間には二度と再び逢ふことは出來ないと思つた。しかし、幼い時から何處か餘所の子供とは違つてゐる此の子のことだ、

ら、他國へ行つたら、あるひは偉い者になるかも知れないやうな氣持もした。其の時婆さんは急に思ひ付ひて、葛籠の中から法華の名號を書いた白衣と、團扇太鼓とを出して來た。そして其の白衣を着て太鼓を叩いて、法華の行者になつて長崎まで行くがよいと云つて二品を元治郎に與へた。婆さんは大の法華信者で、それは數年前彼女が身延山へ參詣する時着て行つた白衣だつたが、さうして法華の行者になつて行けば、祖師の加護によつて道中のもろ〳〵の災難を免がれるばかりでなく、情深き信者の家に行き遇へば一夜の宿も貸して呉れようし、場合によれば行く先々の他人の合力にも預ることが出來るから、路用の乏しい旅をする者に取つては是れ以上の便法は無いと云つて、婆さんはいろ〳〵と敎へて呉れるのだつた。元治郎はおきよ婆さんの厚意に從つて其の二品を貰つて歸つた。

元治郎は其の時十六歳だつた。そしてそれは嘉永元年の春もやがて暮れやうとする頃だつた。彼はおきよ婆さんから讓られた白衣を纏つて、手には團扇太鼓を持ち、旅仕度甲斐々々しく、途中迄叔父に見送られ乍ら、住み馴れた故郷の地を出發したのだつた。

元治郎は上方へ向つて旅を續けた。忙しい獨り旅も、目的に向つて一歩づゝ近付きつゝあるのだと思へば苦勞にもならなかつた。然し路用の金は京都へもまだ遠い頃から盡きてしまつた。そこで彼はおきよ婆さんから敎はつてゐる通りに、團扇太鼓を叩き乍ら「南無妙法蓮華經」と題目を唱へて人の門々に立つた。すると邪險に斷る家もあれば、一文の錢を惠んで呉れる家もあつた。さうして歩くのだから行程は渉らなかつたけれども、大して餓えることもなかつた。錢があれば木賃宿に泊り、無ければ辻堂の椽に寢たり野宿をしたりした。彼には祖師の功德は解らなかつたが、郷里のお淸婆さんの情は此の時になつて有難く身にしみた。京都へ着いても、大阪へ行つても見物どころではなかつた。何處も彼處も素通りで、毎日太鼓を叩き乍ら西へ西へと向ふのだつた。

兵庫の港へ着いた時分にはもう夏の盛りになつてゐた。其の日も例に依つて太鼓を叩き乍ら行くと、ある大きな寺の前を通つた。門前に「阿彌陀寺」と彫つてある大きな石標が建つてゐる。覗いて見ると非常に立派な寺である。彼は、何といふこともなく一寸其の寺へはいつて見る氣になつた。本堂の邊りをぐる〳〵廻つて歩き乍ら、何心無く客殿らしい座敷の中を覗いて見ると、ふと彼の眼にはいつた物があつた。それは正面の處に掛つてゐる書の掛物と、それから他にも澤山の書畫の幅が掛つてゐるのだつた。畫の方は遠くでは判らなかつたが、其の正面

の書幅の表装に書いてある文字がいかにも美事に書かれてあつた。「うまい字があつたものだ」と思つて彼はぼんやり眺めてゐた。

「これ〳〵、そんな處で何を見てゐるのぢや」

突然かう云はれて振り返つて見ると、何時の間に來たのか自分の側に一人の可成り年配の僧が立つてゐた。身なりも立派で人品の高い容子から見てもそれは此の寺の住職らしく思はれた。

「はい……彼處に掛つて居りますお幅の字が餘り美事で御座いますので、ついそれを眺めて居りました」と元治郎は正直に云つた。

「ほう、あの字をうまいと見るやうでは、そなたはなか〳〵字を習つた人らしいな。あれは誰の書だかそなたに解るかな」

「否え、存じません」

「あれは弘法大師の御筆ぢやよ、文章は急就章と申して、此の寺に昔から傳はつてゐる寶物ぢや」

へえ、是れが弘法大師の字かなあと感心して元治郎は猶も一心に其の幅を眺めるのだつた。

「お前さんは餘程書畫が好きと見えるな、して、見れば日蓮の行者のやうだが、是れから何處へ行かれるのぢや」

「長崎へ參ります」

「長崎？とは遠な處へ行くではないか。此寺へ居ることにしては[illegible]お違ふやうぢや」

「否え私はお祖師樣へ詣る者では御座いません」

「然らば長崎へは何しに行かれる」

「長崎へ行つて畫を習ひ度いと思つて、越後國から出て參つた者で御座ります」

「長崎へ畫を學びに……？」

住職は意外といふ顔をして、元治郎の容子を見守るのだつた。それから尋ねられるまゝに元治郎は自分の身の上や目的を住職に物語つた。住職は此の少年の健氣な志にひどく動かされたやうであつた。

「然しそれは大變ぢや、長崎まではまだ容易ならぬ道程ぢやよ。しかも是れから寒氣に向つて其の樣な無理な旅をして、萬一途中で病氣にでも罹つたらどうするつもりぢや」

「…………」

「ではかうしてはどうぢや、わしの寺では今日から什物の風入れを始めたところぢや、寺では猥りに人を入れることは成らぬが、丁度手不足でもあるに依つて、御納解きの手傳ひをして呉るれならそなたが幾日居つても構はぬ。什物を觀たならばそな

たの利益にもならう、そして少し涼かぜでも立つてから長崎へ行くことにしてはどうぢや」

元治郎はたゞ有難く思つた。そして住職の言葉に從つて其の寺へ足を留めることにした。寺には貴重な古書畫の類が澤山あつて、幾日蟲干しをしてもまだ盡きなかつた。此の仕事の手傳ひをするほど元治郎に取つて有益で且つ愉快な仕事はなかつた。彼は記念の爲めに弘法大師の急就章を臨摹してそれを自分の行李へ納めた。

さうかうするうち一と月餘の日數を阿彌陀寺で過してしまつた。盂蘭盆も過ぎ、庭の百日紅はまだ盛りのやうだが、地面にあたる陽の光は急に柔かくなつて來た。寺ではいつ迄居ても行けとは云はないけれども、目的地のことも考へると此の上尻を据へては居られなかつた。元治郎は或日住職に向つて永々厄介になつた禮を述べて暇乞ひをした。住職も强て留めはしなかつた。が、

「長崎へ行つたなら誰の門に就く考へぢやな」と住職は訊ねた。

元治郎は誰とも決めてはなかつた。名家の名だけは二三知つてゐるが、其の人々の内の誰か弟子にしてくれるかどうか、一切彼地へ行つて見なければ見當も付かなかつた。で、住職に向つて其の通りを云ふと、

「鐵翁禪師は、現今は畫人として名高いが、碩學高德の聖ぢやと聞いてゐる、師と仰いで不足のない人には相違ない、わしは禪師とは一面識も無いが、同じく沙門の身ぢや、紹介狀といふわけにはいかぬが、そなたの事を書面に認めて置いた、是れを持つて禪師を訪ねて見るがよい、あるひは承いて下さるかも知れないから」

住職はかう云つて、何時の間に認めてあつたのか一通の鐵翁禪師宛の書面を出して元治郎に與へて、其の上蟲干しの手傳ひをした報酬だと云つて一包の金をも添へて與れるのだつた。

元治郎は其の手紙と金を貰つて、今度は兵庫港から船に乘つて九州へ向つて出發した。

三

長崎春德寺第十四代の住持鐵翁禪師は、其の頃は既に寺を法嗣に讓つて、雲龍寺に移り、其の居を雲龍庵と稱して、門を杜じ客を謝し悠々詩禪三昧の生活をしてゐるのだつた。

當時長崎の大家と稱せられたのが、鐵翁禪師と木下逸雲であつた。鐵翁、逸雲の二人は何れも淸客江稼圃に就いて學んだ。江稼圃が始めて長崎に渡來したのは、文化元年であつた。彼は

名は泰交、字は大來、連山また稼圃と號す、浙中臨安の人である。彼が日本に來んだのは、海中の商船に便乘して、浙中諸々遇る方なく、志を仕途に絶つて、跡を東海に浮べ、蓬瀛の路を探らんと欲した爲めだつた。彼は故國に在つては既に畫を以て識られてゐた。長崎奉行が彼の畫に巧みなることを聞き、令を下して畫を徵し、潤筆料頗る多額を以てした處が、稼圃は傲然として顧みず、つひに其の需めに應じなかつた。其の金錢を見ること土芥に等しかつた。長崎の地は常に清客の往來絶えることなく、皆中華の文人墨客と稱して、自ら高く持し、邦人を眼下に見下すの風があつたが、それらの大部分は商賈であつて隨分如何はしい者が多かつた。賴山陽が長崎に遊んだ時、一日一清客と古詩を論じたことがあつた。清客曰く「日本古詩必ず意を轉じ韻を換へねばならぬ」と。山陽曰く「古詩韻法多し、意を轉じ韻を換ふ、固より古詩の一法ではあるが、悉く一法を以て律すべきではない」と、反覆辯論したが、清客は頭を掉つて肯かない。そこで山陽は一日長篇の韻を換へないものを二三首手寫して、それを自作だと云つて示した。清客は一讀地に擲つて曰く「是れ何の拙作、和臭讀むに堪へぬ」山陽は是れを收め徐ろに問ふて曰く「李白杜甫の詩も亦格調の合はないものがあるか」と。清客曰く「李杜は詩聖である、篇々皆金玉で、後世の者これを以て法とする、[illegible]ものがあらうぞ」と。すると山陽曰く「[illegible]、今示した時の長篇は皆現に李杜集中にあり、[illegible]、大言を吐て人を欺かす、吾れ汝を袪さんと思ひ此の戯れをなす、今後妄言して和臭と罵り、我が國儒を汚す時は決して汝を赦しはせぬ」と。清客慚愧、席を拔つて號哭し間に入つて復た出て來なかつたといふ話がある。さういふ如何はしいものの多かつた中で、江稼圃は畫家及び書家として卓絶の手腕があり、識見また時流を拔いてゐた。仙臺の人菅井梅關も是れに就いて學び、竹田も長崎に遊んで鐵翁等の紹介で稼圃と交遊して、書及び畫の上に大いに發明を加へたのだつた。

鐵翁が初めて稼圃に贄を委ねたのは二十八歲の時で、其の前は石崎融思に就いて學んだが、中年のことで覺えが惡しく稼圃も頗る倦厭の念を生じ、鐵翁に向つて「君は宗門の徒であれば、丹青のために其の本分をおろそかにするは、惡しき事である」と云つて、畫を廢めさせやうとして諭することが度び〳〵だつたが、鐵翁は頑然として肯かずます〳〵刻苦精勵して、遂に稼圃の筆意を得て名聲江湖に噪するに至つた。鐵翁は天性の畫人ではなく、苦心經營、孜々として倦まず、遂に大成した人であつた。竹田は鐵翁の山水を評して沈鬱蒼莽と言つた。梅竹

を畫いては殊に秀韻があり、就中蘭を寫すことに妙を得た。

鐵翁は眞個の禪僧で、名利を見ること土芥の如く、黄金や權勢の前には決して屈しなかつた。嘗て時の長崎奉行であつた高島秋帆が鐵翁の高名を聞いて、屬吏を使に幣を厚うして蘭の揮毫を請ふたところが、鐵翁は少しも憚らぬばかりか、使に向つてから云つてきつぱり斷つた。

「御奉行のお求めではあるが、それはお斷はり申す。眞實老衲の蘭が欲しいと思し召すなら何故御自身でお出でにならぬ、老衲は畫工ではないから左樣御承知ある樣御奉行にお傳へ下さい」

また或時、久留米の藩士某といふ者が鐵翁の門を敲いて、藩侯の命を受け禪師に就いて畫を學ばんと欲して來た、何卒入門を許されたいと云つた。すると鐵翁は甚だ不快な容子で、門人をして「老衲は近來病の上に老齡甚だしく遺憾乍ら御希望に添ひ難い」と云はしめて斷然謝絶した。すると士人は「御病氣とあれば止むを得ませぬ、然らば重ねての御願で御座るが、禪師御揮毫の畫蘭一葉を頂いて、此の由藩侯に復命致し度いと存ずる、是非共此の儀御取做しを願ひ度い」と云つた。それに對して鐵翁は「病中筆を執るのが物倦いからお斷り申す」と云つた。士人は内心甚だ平かでなかつたが強いて押えて「然らばせめて病床へ參つて一謁を賜り度い」と願ふたが、それさへも斷られてしまつた。士人は不平遣る方なく寺を立ち去つたが、日の後再び訪れて來て「最早歸國致さうと存じます故、御病氣御恢復であらば是非共御面晤を賜り度い」と懇願した。が鐵翁は其の日も矢張り氣分が勝れないからと云つて逢はなかつた。すると武士は懷中から近作の詩一篇を取り出して「然らば、是れは甚だ惡作なれど、何卒禪師の御唱和を賜り度い」と云つた。處が鐵翁の答へは「老衲は不文無學で詩など拜見しても解りません」

爰に至つて彼の武士は烈火の如く怒つた。滿面朱を注ぎ、眼を瞋らせ、口角沫を吐き、刀の柄も碎けんばかりに握りしめた。

「拙者は禪師の高徳を慕へばこそ、遙る〳〵長崎に來り、精舍を訪るゝ事數回に及んでゐる。然るに、一度として、拙者の望みを容れないばかりでなく、密かに窺へば禪師の起床動作は病中とは思はれないそれにもかゝわらず言を左右にして謁見を拒むとは高僧にあるまじき振舞である。武士に對し何ゆへ斯くまでの侮辱を加へられるのであるか、御返答如何に依つては拙者にも覺悟が御座る」

門人が駭いて其の趣を傳へると、鐵翁は初めて眞意を以て答へさせた。

一人で[illegible]。[illegible]、武士は[illegible]に忠義にして、[illegible]ならんとしてゐる。されば武士は汲々として武を磨し武を練るのである。文藝の士と雖も筆を投じて武を講ずるの秋ではないか。然るを足下武士の身を以て、君命とは云へ武事を捨てゝ丹青の世界に遊ばんとするのは、是れ甚だしく武士の本分に悖るものである。老衲は左樣な人を見ることは好まない。是れ程の條理をも辨へず、藩主を笠に着て押し付けがましき所望、それを肯かれぬと云つて腹立ちまぎれに人を脅迫しやうとは以ての外ぢや、老衲の首は得ることが出來ても、老衲の蘭を得ることは出來ぬのぢや」

士人は慚愧後悔初めて迷夢が晴れ、門人に向つて厚く罪を謝して立去つたのだつた。

かういふ風であつたから、鐵翁の畫を得ることは容易でなかつた。が、氣が向けば何枚でも即座に書いて人に與へた。そこで、その呼吸を吞み込んでゐる人々は、往々策を擣へて鐵翁を欺いて、さうして易々と畫かせたのであつた。當時長崎に八百屋總右衞門といふ者があつた。畫を好んで鐵翁の門下になつてゐた。彼は鐵翁が蕎麥を好むことを知つてゐて、或時午近い頃蕎麥を携へて鐵翁を訪問し、密に隣室に置いた。少時雜談してゐると、蕎麥の香りが座に入つた。鐵翁が問ふのに「蕎麥の香[illegible]する一[illegible]が一[illegible]お持參[illegible]ました。[illegible]ます。いか[illegible]ある、[illegible]は隣室から[illegible]姿を出して鐵翁に[illegible]した[illegible]は大いに喜んで、それを食べてしまふと「いやどうも有難う、さて何ぞお禮に書いて上げやう」總右はしめたと思つたが色にも出さず「いや別にそれには及びませぬ」[illegible]さうでもあらうが、氣分の快い時は誰もよく出來るものだから、二三枚書いて見やう」鐵翁は興に乘じて得意の蘭をはじめ梅竹と縱横に揮毫して與へるのだつた。總右は此の流儀で度び／＼鐵翁の畫を獲得した。

矢張り其の頃、新大工町といふ處に理髮師の某といふ者があつたが、彼は鐵翁の頭髮の延びた頃を覗つては、よく磨いだ剃刀二三挺を携へて寺へ行つて、鐵翁に謁して「時に師匠お頭が大分延びましたやうですからお剃り申しませう」と自分から云つて鐵翁の髮を剃つた。剃刀を二三挺携へてゐるので、間に合はぬ世話はない。忽ち剃り終つた。鐵翁は心地がよいので大層喜んで、理髮料を與へやうとすると、理髮師は決してそれを受けない。鐵翁は、「然らば畫を描いて進上しよう」と云ふ。理髮師は態と辭退して「決して御心配下さるには及びません」と云ふ。鐵翁は肯かず、必ず何か描いて、無理に與へるのだつた。

共の鐵翁の住んでゐる禪靜庵へ、或日一人の少年が訪ねて來

て、門人にして貰ひ度いと云つた。少年は法華の行者の着る白衣をきて、團扇太鼓を持つてゐた。そして、兵庫の阿彌陀寺の住職からの添書を差し出すのだつた。

鐵翁は直ぐ樣少年を引見した。そしてつぶさに少年の希望を聞いた上でかう云つた。

「それなら寺に居るがよい。然し、畫を學ぶといふ志はよい、が、儂(わし)を學んではいけない、衲を學ぶ者は狂人ぢやから」

四

元治郎は雲靜庵に起臥する身となつた。物慣れない周圍に對する心づかひや不安はあるけれども、是れ迄心のうちで憧憬れてゐた境遇が實現されて、心は常に弓弦のやうに緊張してゐた。自分は今日本で名高い鐵翁禪師のお側にゐるのだと思ふと、それだけでも彼の心は異常に興奮して、畫道に精進しなければならぬといふ氣持になつた。山門から滅多に外へ出ることはないので、まだ長崎の町の樣子も知らないけれども、其處から手に取るやうに見える港の光景、市街の甍、それらの全體を取り圍んで綾つてゐる土の赤い線の山々、雲が飛んでゐる明るい空……すべての物が、あの雪雲に鎖された陰慘とした北越の天地の中で育つた彼の眼には眼新らしく、いかにも山河數百里の旅をして異つた國へ來てゐるといふ心持を強く味はさせるものばかりだつた。

鐵翁は四君子を描いて元治郎の手本として與へた。元次郎は毎日雜用を働き乍らひまひまには紙に對つて筆を把つた。鐵翁の門下は頗る多かつた。前後從遊の士は悉く枚擧に遑あらぬ程だつた。當時京阪に於ける文人畫の大家として名聲嘖々たりし海屋貫名菘翁の如きも、初めは狩野を學んだのを中途で捨てゝ、長崎に走つて鐵翁に就て初めて南宗の畫訣を聞いたのだつた。また、既に有名だつた日根野對山、三浦梧門等も、屢々鐵翁に見えて教を受けてゐた。其のほか重なる門下には、倉野煌園、安田老山、村田香谷、瀧和亭、木下逸江、中村梅香、橫瀨晩松、守山湘帆、山口靜岡、池邊蓮谿、僧金華等の人々があつた。が、平常は四五人の門人が居るだけだつた。

鐵翁の畫蘭は古今の絶品であつた。されば當時畫を愛好する者は、其の一葉の畫蘭を得んが爲めにはいかなる重幣をも惜まぬといふ風だつた。鐵翁甞て夢に一異人に逢ふた。異人は手にせる蘭一莖を鐵翁に與へたと思へば夢は忽ち醒めた。それより鐵翁は蘭の向背正則の法を悟つたのだつた。然るに、其の後二十年を經て有山堂畫譜が淸商の手に依つて舶齎された。其の書に載する所のもの、鐵翁が夢中に授かる所の諸法と一致してゐ

るのであつた。彼は常に蘭を畫いてゐた「蘭は之れ高人君子の性情に適するものなれば、蘭を畫すことを以て樂と爲す時は、即ち賢人君子を尚友するに異ならぬ」と彼は云つた。彼は蘭を畫く法を說いて曰く「蘭を畫くには必ず書法三折の筆意がなくてはいけない、苟も三折の筆意なきものは幽蘭天然の容姿を備ふることは出來ない。然し、其の葉を畫くに當つて故らに三折を成すが如き用意が要るものと誤解してはならぬ、蓋し此の眞意たるや能く節義を執る士人の精神儀容と同一であつて、其の筆一點の俗氣あることなく、而して剛柔相和し、精神充實して觀者をして感動せしむるの態あるを謂ふのである。されど筆未だ熟せずして漫りに三折を成さんと欲する時は必ず、板、刻、結の三病に陷る、また筆勢敏捷なる者は俗氣を生ずるに至る、能く注意すべき事である」と。

されば鐵翁は蘭を畫くに當つて非常なる苦心を費したものだつた。彼は「心が正しければ筆も亦正しといふことは書でも畫でも變りがない、蘭を畫くには心を形似の外に置かなければいかぬ、然らざれば筆は熟すとも眞に蘭意を了したものとは謂はれない」と云つた。そして、一葉でも、少しく筆を失すると直ぐ様裂いて捨てゝしまつた。終日費して一葉の畫蘭も出來ないやうなことが往々あつた。すると彼は筆を投じて靜座して、心を正しくすることを考へるのだつた。

或日彼は、三浦梧門を訪ねた。梧門の家は長崎興善町に在つて、代々長崎の乙名を勤めてゐる家柄だつた。彼は名は惟寛、字宗亮、通稱總助、梧門と號した。初め畫を渡邊鶴州に學び、後更に鐵翁に私淑し、或ひは清人の畫法に倣つて、專ら山水、花卉、翎毛を畫いた。鐵翁より十九齡下だつた。

四方山の談のうち、鐵翁はかう云つて嘆息するのだつた。

「老衲は、蘭を寫すことでは、今は何人にも劣らぬ自信がある。然し、山水を畫く場合にはどうしても自在にいかない」

處が、其の翌朝のこと、梧門の處へ鐵翁から、自作の山水の長卷を贈り屆けて來た。そして書面に「昨夜歸途櫻の馬場に至つて、俄然山水長卷と雖も自在になるの理を發明した、歸庵後直ちに此の卷を試みたので、貴下に贈る次第である。乞是れを評せよ」としてあつた。梧門は卷を展べて觀ると、布置結構、沈鬱蒼勁、風氣人に逼つて、世にも稀なる絶品であつた。

かゝる師の許にあつて元治郎は日夜怠ることなく畫技を磨いたので、數年ならずして著しく上達した。鐵翁は殊に彼の上に眼を掛けて居られた。或年の元旦に師の鐵翁は元治郎に椎山といふ號を撰んで與れた。元治郎は喜んで爾來椎山の號を用ゐてゐた。

それから餘程經つてからのこと、或時元治郎は師の使で町家の某といふ家へ行つた。そして其の店にゐると、奥から其の家の内儀が顏を出して
「桂山さんはまだ來ないのか」と店の者に向つて云ふのだつた。元治郎は變だなあと思つた。桂山は先刻から爰へ來てゐるのに、お内儀さんがまだ來ないかといふのはどういふわけだらうと思つてゐると、
「桂山さんは、只今呼びに遣りました、もう直きに參ります」
と番頭は答へるのだつた。元治郎はます／＼不思議に思つた。番頭まで一緒になつて何を寢呆けてゐるのだらうと思つてゐると、そこへ丁稚小僧に手を曳かれて按摩がやつて來た。すると番頭が
「桂山さん、御苦勞樣、奥でお待ち兼だよ」
と云つた。
「ヘイ／＼、どうも遲なはりまして申し譯御座いません」
と按摩は云つて、大事さうに杖を立て掛けて置いて、元治郎が腰掛けてゐる鼻先きの處を探り／＼奥の方へ這入つて行つた。元治郎の桂山は、何とも云はれない厭アな氣持になつた。折角和尚が撰んで與れた、いゝ號だと喜んでゐた桂山が、按摩の名前と同じだと思ふと、彼は急に情無くなくなつてしまつた。寺へ歸つて來ると鐵翁は
「御苦勞々々、して返事はどうじや」
元治郎は先方の口上を師に傳へた。が、まだ何か用ありげに座つてゐる。
「何をしてゐるのだ、もう用事はないから向うへ行つてもよい」
「お師匠樣、只今お使に參りましたお宅へ、按摩が參りました」
「それがどう致した」
「すると其の按摩の名が桂山と申すので御座います」
「はゝゝ、さうか、それは妙ぢやな」
「わたくしの號と同じで御座います」
「それは分つてゐる、面白い」
元治郎はちつとも面白くはないけれど、仕方がないので師の前を退つた。それから後に彼は度び／＼其の按摩を市中で見掛けるのだつた。五十位で、疱瘡で眼が潰れたと見えて顏一面に菊石がある。其の按摩が、ピーと笛を鳴らし乍ら行くと、お客の家から「桂山さん」と呼び掛ける。すると按摩は見えない眼をキヨロ／＼見廻して「へえーどちらで御座います」と云ふ。
「疳の惡い桂山さんだよ、こつちですよ」と云つてポン／＼と

手を叩くと「ヘイ〳〵分りました、毎度有難う御座います」と桂山は往來からペコ〳〵お辭儀をして、それから彼の行きつけのコツ〳〵やり乍ら得のする方へ行くのである。

元治郎はすつかり氣を腐らせてしまふのだつた。けれども[illegible]が號を變へて逃るとも何とも云はないので其の儘使つてゐるうちに、しまひには妙なもので氣にも懸らなくなつた。

鐵翁は、紫雉を厭ふので、自分の門人でも一と通り技倆が出來てゐると、今度は更に自分が紹介して木下逸雲の門に入らせるのだつた。で桂山も數年間雲浮庵で修業した後、今度は木下塾の學生となつた。

逸雲の家は八幡町にあつて、彼は長崎の乙名を勤めてゐた。彼の先祖は久留米の藩士だつたが、數代前から長崎に來て代々乙名を勤めてゐた。逸雲には一人の兄があつたが、性狷介で世と合はず、飄然として長崎を去て武州八王子附近の村へ行つて、寺小屋を開いて村夫子となつて一生を終つた。そこで逸雲が兄に代つて乙名となつたのだつた。逸雲は鐵翁より九つ齢下で、鐵翁と同じく初め石崎融思に學び、のち更に稼圃に就いて研究した。彼は名は相宰、字は公宰、通稱志雅之助、逸雲と號し、又、物々子、養竹山人、荷香深處等の別號があつた。晩年は如螺山人とも號した。鐵翁と並んで長崎の三大家と稱された。[illegible]つた。だから[illegible]の門人達も多く逸雲に[illegible]して、[illegible]の門人は逸雲に[illegible]き、逸雲の門人は又[illegible]に[illegible]くといふ工合だつたから、桂山が逸雲の門に轉じたといふ事も世間に於てはさう變まつたわけではなかつた。

逸雲は兄に代つて乙名となり、市井を[illegible]いて頗る能吏であつた。が、兄の子の勇助といふが漸く一人前になると、直ぐに家督を嗣がせ、自分は若隱居をしてしまつた。當時長崎の人々は擧つて彼の引退を惜んだ。然し逸雲の志は寧ろ畫にあるので、閑散の身となるをまつて悠々として繪畫に親しんだ。

彼は畫を倶に達成し、董玄宰を法として、山水人物花卉翎毛皆善くせざるはなかつた。彼は又頗る多能で、篆刻を工みにやり、詩歌もまた妙であつた。嘗て牡丹を畫いて自ら題をして曰く

天然國色冠二群芳一　富貴花開[illegible]
亭畔苔青風日好　數杯傾盡到二斜陽一

また雨中鶯の圖に

かきくらし降しく雨の田の面より數あらはれて鶯の立見ゆ

さうかと思ふと彼は遊藝にも通じ、三味線を彈じ、茶道生花にも堪能だつた。其字は[illegible]の見ゆる一[illegible]であつたが、そこにはから

ゆる古書畫文房具骨董の類が足の踏み場も無いまでに充滿し、其の中に蹲踞つて彼は筆を揮ふのだつた。畫を作る場合に、鐵翁は非常に遲筆だつたが、逸雲は頗る早筆だつた。

或年逸雲は淸商に依賴して西湖の蓮根を得た。かねての望みであつたので鉢に植えて最も是れを貴重し、時に應じて肥料を與へ、栽養三年にして初めて一蕊の花を開いた。逸雲は喜ぶこと限りなく、一日門人知友を招きて披露の宴を催した。酒酣にして、逸雲は庭に下り、鍬を持つて來て地を堀つて數尺の穴を作つた。人々之を見て異しむでゐると、逸雲は秘蔵の荷花を鉢の儘其の穴に投じ、忽ちにして埋め終つて、さて人々に向つて斯う謂つたのであつた。

「僕の多年の望みは是れで足りた。然し、今日僕の爲す所は、狂に近しと笑ふ人もあるでせうか、僕は今より此處に畫室を建て其の中に起臥する積りである、さすれば此身は常に荷花の裡にあるも同じである」

其の後彼の畫の落款には、何年何月荷花深き處に寫す云々と記された。

五

桂山の技倆は年々進歩して、間もなく同門中に嶄然として頭角を抽んでた。やがて彼は木下塾の塾頭となつた。然し彼は變らず師の側を離れず研究を續けてゐた。彼は非常に溫厚で、そして熱心で、且つ品行も端正だつたので、逸雲は甚だ彼を愛して、よく目を掛けてゐた。桂山の方でも、逸雲の人格と手腕を崇拜し、また多年の恩義を顧み身に替へて師を思つてゐるのだつた。

元治元年の元旦のこと、逸雲は桂山の爲めに別に號を撰んでくれた。其の時逸雲は、錦雲、雲鶴、雲坪（うんぺい）とこの三つの號を紙に書いて「この中でお前の氣に入つたのを取るがよい」と云つた。桂山は其の中から雲坪といふ號を撰んだのだつた。すると、其の頃來舶中の淸人で、逸雲等と交遊してゐた王克三が「雲坪」の二字を揮毫して扁額にして彼に贈つた。王克三は當時本國の内亂を避けて長崎へ來舶してゐた儒者で、舶舍中に於て稼幽以來の能書家であり、且つ畫は能く一家の梅を畫き、逸雲も頗る推賞してやまなかつた。同時に逸雲も、朱字で雲坪の二字を刻した圓形の石印一箇と、白文の方印で「元吉書印」とあるもの一箇、長方形の「品藻山水」と朱文にて刻したもの一箇と、三箇の印を自から刻して雲坪に與へた。

雲坪が長崎に遊學して以來、實に十七年の星霜を經過してゐた。彼は三十二歲になるのだつた。

[illegible]元年八月、逸雲はかねての計画で、江戸へ向ふことになつた。其の旅行には勿論雲坪も加はる筈になつてゐたところが、其の前になつて彼は急に病氣に罹つて同行することが不可能になつてしまつた。彼は非常に殘念に思つたが、如何んとも仕方がなかつた。そこで逸雲は、雲堤、高石其年、八百屋總右衞門の三名の門人を伴れて江戸へ上つた。

逸雲は先づ八王子の兄の許を訪ひ、何十年振りの對面を遂げ數日そこに留まつて、次ぎに江戸へ行つて大坪衞園の家に寓した、逸雲の名聲は關東にも響いてゐたので、彼の寓居には毫を乞ふ者が頻りに來つて應接に忙殺される有樣だつた。其の頃逸雲は如螺山人とも號した。一日江戸で友人の藤堂凌雲を訪問した時、凌雲が「君の如螺といふ號はどういふ意味なのか」と訊いた。すると逸雲は「近來の畫家は猥りに潤筆料を貪つて、生前に名の高い者が死後になると頓と價が無くなるのが殆ど通例だが、是れは誠に恥づべきことだ、それゆへ僕は潤筆料の如何に關せず氣の向く儘に畫いて人に與へてゐる、然し、死後には必ず價が加はるに相違ない、そこで、螺貝は死後却つて聲を發する、僕の如螺の號はそこから考へたのだ」と云つた。逸雲はまさに得意であつた。二ケ月ばかり江戸に滯在した後、序でに松島見物をしやうといふので、江戸を發つて、途中房州九十九里濱の[illegible]素封家で、畫も能くするのだつた。[illegible]の雲坪に書を送つて「病氣が癒つたならば足下もやつて來てはどうか、歸國の時には是非一緒に旅をしたいから」と云つて遣つた。雲坪は其の書面に接して、自分も直ぐに飛んで行き度いと思つたが、まだ彼の病氣は全快とまでいかなかつた。彼は齒嚙みをして殘念がつた。一方逸雲は、松島見物は氣が變つて中止することになり、一と先づ江戸まで戻つた。旅中で年を迎へ、慶應二年の春になつてゐた。

二月まで逸雲は江戸に滯在してゐた。すると丁度其の時長崎奉行が交迭になつて、新たに服部右衞門之佐が赴任することになつたが、逸雲は長崎に於ける名士のことなので服部と近付きになり、其の結果、服部の一行と一緒に亞米利加の帆船黑龍號に塔乘して長崎へ歸ることになつた。其の事が決つたのは急だつたので、門人の高石其年は差支えがあつて同行することが出來なくなり、また八百屋總右衞門は吉原に流連してゐて出帆の期日に遲れてしまつた。逸雲は雲堤一人を伴れて船に乘り込んだ。同乘者は從者ばかりで五十人許りあつた。船は東京灣から出帆した。が、豫定の日數は過ぎても、其の船は長崎へ着かなかつた。其の儘杳として消息が無くなつてしま

つた。此の事件は當時非常な騷ぎを引起したのだつた。が黒龍號の消息はつひに判らずに終つた。それで、多分航海中颶風に遇つて沈沒したものだらうといふことになつた。逸雲は其の時年六十七だつた。後年靜岡の人高山某が米國へ行つた時、此の船の會社を訪問して當時の事を糺したところが、會社でも矢張り船の行方が判らないといふことだつた。

雲坪の悲嘆は遣る方無かつた。彼は當然自分が伴をして行くべきだつたのを、病氣の爲めとは云ひ乍ら加はることが出來なかつたばかりに、恩師と生死を共にしなかつたことを千載の恨事とした。それ以來彼は、自分が若し病氣をしても決して醫藥を用ゐないといふことを心に誓つた。

其の頃になると雲龍寺の鐵翁もさすがに寄る年波は爭はれず、非常に老衰して、逸雲が沒した慶應二年の秋には大患に罹り危篤に陷つた。其の時鐵翁は門人一同を枕頭に呼び集め、畫事百般に就き胸中に藏する蘊奧を悉く吐露して門下に授け、最早云ふ事は無いと謂つたが、不思議にも其の病は恢復に向ひ、其の年の冬頃になると殆んど以前と變らぬ體になつた。が、一度び大患を切り拔けた鐵翁の健康は矢張り思はしくなく、明治四年の秋に至つて再び病を得、十二月十五日遂に寂定に入つた。齡八十一であつた。

雲坪は、逸雲が沒した後は最早長崎に居ても詰まらなかつた。と云つて、京阪にも江戸にも就て學ぶべき者は居なかつた。そこで彼は多年の念願である支那へ渡つて、直接彼國の風物に接し、名畫を觀、或ひは親しく彼國の文人墨客と交つて一層研究を進め度いと思つた。それには、幕末時勢の變化につれて、海外渡航の禁が緩やかになつたのでことに好都合だつた。そして相變らずの窮措大で獨身生活を續けてゐる雲坪は何時も後顧の患ひは無かつたが、只一つ困難なのは旅費の工面だつた。

「あゝ支那へ行き度いなあ——」と、彼は人に逢ふとさう云つて嘆息した。

其の頃、長崎へ布教に來てゐた和蘭陀の宣教師でフルベッキといふ人があつた。此の人は宗教家にしては相當に趣味の廣い人で、日本の繪畫を觀賞して文人畫の風韻をも稍解するやうになり、逸雲雲坪等とも交際をしてゐた。が雲坪は一向無宗教な人間で、神佛を信仰したことはなかつた。だから、耶蘇の話を聞いても何とも感じなかつた。彼が信仰するものは藝術ばかりだつた。そんな風だから、フルベッキとの交際も極く淡いものに過ぎなかつたが、其のフルベッキに向つてさへも彼はよく「私は支那へ行き度い」と云ひ〳〵したものだつた。すると

門[illegible]に取つて[illegible]ことに[illegible]べきであ[illegible]お伴した。それに、フルベツキが上海の教會へ[illegible]任することになつて、かねがね雲坪が支那へ行きたがつて居ることを知つてゐるフルベツキは、雲坪を支那へ伴れて行つて遣らうと云ふのだつた。雲坪は雀躍りして喜んだ「是非伴れて行つて下さい」と彼は頼んだ。

雲坪が支那へ行くことになると、同じく鐵翁逸雲の門下で長崎に來てゐた、越中の澗川、美濃の安田老山の二人も同行することになた。そして彼等が支那へ渡つたのは慶應三年であつた。

雲坪は宣教師の費用で遊學するのだつたから、表面だけ耶蘇教信者といふことになつてゐた。支那へ行つてからは、老山は吳水、澗川は吳山、雲坪は吳江と號を改めた。そして江南、淛江浙江の附近を歴遊した。

支那では、徐雨亭、王道之、陸應祥等の名士と交遊した。其の中でも徐雨亭は先年王克三等と同時に長崎へ行つてゐたことがあるので、三人とは殊に親しかつた。雨亭は朱文光の同門で、水墨山水を得意とし、其の畫は鐵翁逸雲も推賞措かなかつたもので、日本で彼に入門した者も少くなかつた。

雲坪は、支那では多く畫をかき、畫家と稱してゐた。彼は其[illegible]研究をした。

支那旅遊は彼に取つては非常な利益だつた。[illegible]してゐた彼[illegible]國の山川風物は、實物を觀て初めて正確に[illegible]することが出來た。然し、只困ることは食物の變化だつた。支那の食物はあぶらつ[illegible]體にはどうしても適しなかつた。それが爲めに屢々胃腸を害ね、段々健康を害するやうになつて時には病床に呻吟するやうなこともあつた。

それでも雲坪は恩師の死に遇つた時の心の誓ひがあるので、決して醫藥を用ゐなかつた。異郷に來つて、病氣をしがちの雲坪は心細かつたが、フルベツキのお蔭で困りはしなかつた。幼にして双親に別れて以來彼はよくも他人の世話になつて來たものだと思はずにはゐられなかつた。回顧すれば無限の恩誼が彼の脊中には載つてゐるのであつた。

彼はもつと支那にゐたかつたけれども、健康が許さなくなつたので、滿二年の滯在の後、情あるフルベツキに暇を告げて長崎へ歸つたのだつた。老山と澗川は後へ殘つた。

彼の外遊中に、日本の國情は一變してゐた。王政復古して、明治の代となり、江戸は東京と改まつて天子の在します所となつた。

六

維新直後は、あらゆる美術や工業は衰微のどん底に陷つたが、其の中でも、不思議にも文人畫だけは流行して、畫壇を壟斷して、諸派の畫家を屛熄せしめてしまつた。そして其の中心は東京であつた。西陲崎陽の地に雌伏すること廿年の久しきに亘つた雲坪も、此の機運に乘じ、東都へ出て旗幟を立てやうと考へるやうになつた。そして、明治三年の冬、彼は長崎を去り、東上の旅に上つた。

神戸では阿彌陀寺を訪ねた。すると、彼の時の住持は最早世に在らずして、後住の代になつてゐた。廿年昔の恩は謝する人がないので、前住の墓に詣でたのみで其處を立ち、大阪、京都では、數人の知友を訪ね、名所舊蹟を悉く見物した。それから更に東へ向つた。併し、雲坪は長崎を立つ時持つて來た金は其の時分までにすつかり遣ひ果してしまつたので、京都を出たあたりからは畫を賣つて旅行を續けなければならなかつた。遊歷先生の境涯であつた。其の行商もいゝが、彼は全く口不調法で人との應對が拙かつたので、かういふ時はまことに困るのだつた。長崎では雲坪と云つても桂山と云つても知らない者はなかつたが、地方へ來て見ると自分の名前を知つてゐる者は一人も無かつた。彼は其の頃は多く桂山吳江といふ號を用ゐた。

名古屋には多少彼の知己もあつたので、其處でしばらく足を留めた後再び東へ向つた。遠州のある町へ着いた時も、彼は例の如く宿を取り、揮毫の依賴を受けるとになつた。處が、彼は其處で病氣に罹つてしまつた。風を引いたがもとでどつと床についてしまつた。宿の主人も捨てゝは置けないので醫者を賴んで呉れやうと云つたが、雲坪は例に依つて服藥をしないので斷つた。

其の宿にお仲といふ女中がゐた。其の女は、小柄で、色が黑くて、可成り縹緻は惡い方だつたが、深切な女で、よく雲坪の世話をして呉れた。彼女は忙がしい自分の仕事の暇を偷んで、雲坪の室を見舞つては看病して呉れるのだつた。

彼女は齡も廿五六だが、宿屋奉公してゐるだけに、酒も吞めば煙草も吸ひ、さうして可成り莫連らしいところもあるが、其の代りに一種の俠氣もあつた。溫厚な雲坪が旅で病んで心細い有樣なのを氣の毒に思つて、まことの深切氣から世話をして呉れるのだつたが、雲坪が二た言目には「お仲さん濟みません」と云ふので、彼女は笑つて「濟むも濟まないもあるもんですか、妾を女房だと思つていらつしやればいゝじやありませんか」なぞと云ふのだつた。一と月以上も雲坪は寢込んでしまつた。宿の拂ひは其の儘になつてゐるが、料紙何や彼やと小遣の要るこ

たちゐのことを一切お仲の世話になつた。さうした事から床を離れた時には、彼とお仲との間は他人ではなくなつてゐた。

雲坪は後悔したけれども、其の場合の感情としては止むを得ない出來事だつた。女の方では、さうなると最早人前も憚らなかつた。そして、貴郎が東京へ行くなら妾も一緒に伴れてつて下さいと云ふのだつた。

雲坪は弱つた。自分の目下の境遇として妻帶どころではない。然し、厭だと云へば、死ぬとか殺すとかいふ騒ぎにもなり兼ない有様である。それに、病中受けた恩を思へば、自分から振り捨てるといふのは道がちがつてゐるとも彼は考へた。

全快してから、襖の註文を取つてどうやら宿の支拂ひだけは濟ました。そして彼が其の町を立つ時には、お仲も旅拵へで一緒に附いてゐた。

東京へ來て、麹町に小さな家を借りて世帶を持つた。此處で雲坪は大いに飛躍するつもりだつた。

明治の初期は、藝術界の暗黑時代だつた。德川幕府が瓦解して、旗本八萬騎は方向に迷ひ、江戸の大商人も店を閉ぢて沒落する者が數知れなかつた。大阪も藏屋敷が顚覆し、名代、藏元、銀方等も破壞され、士民の疲弊困難は都鄙を通じて變りがなかつた。人心はなほ不安で、所在に亂を思ふ者が絶えなかつた。加ふるに、當時の政府は、[illegible]成功であつたので、德川三百年の太平に依つて培はれた[illegible]文化の產物は一朝にして地に委してしまつた。人は[illegible]の繪畫も顧みなかつた。雪舟、探幽の名作は路傍に捨てられ、光琳の金屏風は二朱三文で露店に轉がつてゐた。一代の名人巨匠も衣食に窮して社會のどん底に彷徨してゐた。

さういふ時代に於て獨り文人畫ばかりは流行し、上下を通じて愛玩せられたのは不思議な現象だつた。けれどもそれには理由があつた。其の原因の第一は前代の餘勢である。文人畫の最も全盛を極めたのは天保前後のことで、維新の改革に遭遇しても世人の美術的好尚にはさしたる變化がなく、猶前代の傾向を續けてゐるのだつた。第二は、幕末志士の同類が天下を取つた事である。彼等志士の多くは漢學者で、所謂文人墨客流の人々だつた。第三は、文人畫が社會の趨勢趣味に投じたからだつた。激動の人心未だ治まらず、衣は骭に至り袖は腕に至る壯士や書生が横行し、氣節を重じ修飾を屑しとせざる思想は、狩野や土佐の密畫よりも、一筆にして氣韻の生動せる文人畫を歡迎したのは當然であつた。而して其の結果文人畫は益々亂雜になり、山を畫けばつくね芋の如く、蘭は葱の如く、犬猫牛馬辨別すべからざる底の物を畫いて得々として傑作を誇る有様となつた。

雲坪は東京で門戸を張り、而も文人畫極盛の時世に遇ひ乍ら、彼は遂に驥足を伸ばすことが出來なかつた。それは彼が餘り眞面目だからだつた。其の時代は眞面目なものは駄目だつた。醉眼朦朧として筆を走らせれば、忽然として山水生じ、墨煙飛んで花鳥となるやうな、豪放磊落、覇氣縱橫の畫でなければ世間は歡迎しなかつた。雲坪は馬鹿々々しくてそんな物を書く氣にはなれなかつた。彼は鐵翁と同じく頗る遲筆だつた。其の頃の彼の畫は、張瑞圖に倣つたものが多く、渴筆を用ゐて遲々として畫くのだつた。米點山水を畫いても、淡墨より始めて二三十回も墨を重ねて漸く畫が成るといふ遣り方だつた。畢竟彼は時世に適はなかつた。

其の頃、東京で文人畫界の牛耳を執つてゐたのは、女流の奥原晴湖と、支那歸りの安田老山の二人だつた。

奥原晴湖は、名は節といひ、古河藩士の娘で、當時卅有餘歲であつたが、つひに嫁せずして筆硯の技に沒了してゐた。彼女は下谷摩利支天横丁に住んでゐたが、其の附近には文人墨客が澤山住んでゐたので、當時下谷文人の稱があつた位だつた。大沼枕山、福島柳圃、鈴木鵞湖等もみな其の近傍に住んでゐた。晴湖は、其の下谷文人の頭領だつた。また、鷲津毅堂、川上冬崖、大沼枕山、其の他の人々と半閑社と稱する結社を作り、土曜日ごとに會合して詩畫に耽つたが、彼女は座談に長じ、奇才縱橫に發して、常に男子を飜弄し、隱然社長の觀を爲してゐた。時の權勢家木戸松菊は甚だしく晴湖を愛してゐて、地方官なども晴湖に入門したと云へば木戸は大いに是れを優遇したといふ位だつた。晴湖の勢ひは飛ぶ鳥をも落すのだつた。

晴湖は、切髮にしてゐたが、其の言動は男子と異る處が無かつた。彼女は初め畫を藩士牧田水石に學び、また清客鐵胎に就いて南宗の法を問ひ、のち更に清人鄭板橋に私淑して遂に一家の風を完成した。彼女も晩年は却つて密畫を描いたが、壯年時代には多く踈放簡素の畫を描いた。筆力雄健にして男子も及ばぬ氣概があつた。得意の作に對しては、紀元貳千何百何十年東海晴湖と落款した。

晴湖に就いては常に面白い話があつた。それは、彼女が餘りに男性的であるところから、一體晴湖は果して女だかどうかといふ疑問が起つたのだつた。中にはこの世にときめく閨秀畫家に對して野心を抱く者もあつたが、晴湖は決して受け付けなかつた。そこで前の疑問は、平常晴湖と親しく交際してゐる文人墨客の間でも、矢張り疑問になつてゐた。中には晴湖は男女兩性だなぞと、見て來たやうに吹聽する者なども出て來た。で、みんなそれを少しづゝ頭痛の種にしてゐた。

[illegible]あつた。[illegible]のも、[illegible]といふ[illegible]て、[illegible]つた[illegible]に、[illegible]の杯を[illegible]行いて乳を[illegible]上た[illegible]に満[illegible]たか、忽ち[illegible]ばして、[illegible]の上に投げ付けた。

また或時、晴湖は[illegible]の[illegible]の家に招かれて行つたが、酒宴の後で其の家に泊ることになつた。貫用も矢張り晴湖を試さうと思つてゐたので、夜なかに黒装束をして其の室へ忍んで行つて、黙つて床の中へ飛び込んだ。すると晴湖は躍り上つて、貫用の頸を握り、ヤツと云ふ間もあらせず、ツデンドウと投げつけた。晴湖は武術の心得があつたのだつた。

晩年晴湖は熊谷在に隠遁し、悠々として、風月を友として、終つた。

安田老山は、雲坪より後れて、明治六年に支那から帰ると直ぐ東京へ来て門戸を張つた。彼は雲坪と異つて非常に覇氣に富んだ男だつたので、忽ちにして東京畫壇の重鎮となつた。曾ては、其の覇氣が祟つて、師鐵翁の怒に觸れて破門の憂目にまで遇つた程だつた。が、彼は比較的平然たるもので、支那に遊ぶ時は妻を携へて行き、上海に居住して、彼地の名士胡公壽を師友として、大いに得る處があり、旁ら書畫を以て活計としてゐた。

[illegible]つた。[illegible]に[illegible]て[illegible]し[illegible]に人[illegible]に人に下らず、[illegible]内に喚ぐに至つた。彼の[illegible]を[illegible]くした。[illegible]と號し、[illegible]と自稱し、[illegible]に[illegible]し、家に一[illegible]描いて常に相唱和した。

老山と雲坪とは、長崎以来の友であり、支那では常に相携へて嘯遊した仲だつたので、殊に親しかつた。が然し雲坪は世間が何程喋ぐとも老山の畫には推服することが出來なかつた。これは全く胡公壽の模倣であつて、獨自の作風なく、殊故を得て推薦を得ざる下品な畫風であつた。然し乍ら老山は眼中人無く、四方を睥睨し、傲然として人に對した。彼が清國風を吹かすについては面白い話があつた。それは或席上で、老山が、菅原白龍の畫を評して「和臭がある」と云つた。すると白龍が「私は羽前[illegible]郡の産で正に日本人であるから、確かに和臭があるでせう。[illegible]は何れの國の産ですか」とやつたので、流石の傲岸な老山も一言なく、赤面して默してしまつた。

菅原白龍は羽前國[illegible]の人で、家は世々[illegible]で、白[illegible]林院の[illegible]であつた。因つて初めに[illegible]、[illegible]

と改めた。初め業を熊坂適山に受け、のち越後に遊んで富取芳齋に就き花鳥を學んだ。明治二年東京へ出たが一人の知己も無く困難言語に絕したが、偶々奧原晴湖に逢つて自作の畫を見せると、晴湖は大いに驚いて「貴下の伎倆は實に非凡である」と云つて賞揚したので、それに力を得て東京に留まつてゐた。其の後白龍は四方に周遊し、山水を究め、自然に遠近の理を悟り、是れより筆法が頓に一新し、縱橫變化し、神韻生動の畫を描くやうになつて、名聲大いに擧つた。

雲坪の畫は賣れなかつた。また彼に就いて學ばふと云ふ者も無かつた。彼は到底此の時世に適はないことを自覺した。そこで彼は、明治六年の末に家を疊んで、お仲を伴れて旅に出た。

七

彼は、鄕里を訪問して見やうと思つた。最早や數年來故鄕とは音信不通になつてゐた。故鄕の人々も定めて變つたことだらうと思つた。おもへば十六歲にして故鄕を出た時からでは、廿六年の星霜が流れてゐるのだつた。

雲坪夫婦が沼垂へ着いたのは、其の翌年の春もまだ淺く、解け切らぬ雪が斑らに黑土の上に殘つてゐる頃だつた。町の様子は昔も今も餘り變りはなかつた。が、多年長崎に住み馴れた眼には、自分の生れた故鄕の町も暗く侘しくして、知らぬ他國へ來たやうな氣持ちがした。

宿を取つて先づ叔父の家をたづねた。其の家は昔しながらの八百屋であつた。が、雲坪が其の家へはひつて行つた時出て來たのは卅位の男だつた。彼は其の男が自分とどういふ關係にある人間なのか一寸見當が付かなかつた。そこで、兎も角も、

「私は元治郎です」と雲坪は云つた。

然し先方では、彼が名乘りをしてもまだ解らないやうな顏をしてゐた。雲坪は再び

「次郎八叔父さんは達者でゐますか、私は次郎八叔父さんの甥です」と云つた。

すると相手は漸う思ひ出した樣子で

「あゝそれではお前さんが、長崎へ行つた元治郎さんと云ふ人ですか」

「さうですよ、十六の時長崎へ行つた儘だから、もう廿六七年も昔の事です」

「それで解りました、まあ〳〵お上りなさいまし」

といつた調子だつた。挨拶をして、段々話して見ると解らない筈だつた。叔父の次郎八は今から十七年も前に死んだのだつ

た。それから、叔父の[illegible]従兄弟といふのもお六年前に没し、彼が今話してゐる男はその又息子だつた。[illegible]團を出た頃はまだ二つか三つの乳呑兒だつた。

「よくお訪ね下さいました、私の名は長吉と申しますが、お前様とは何に當りますかなあ、叔父甥でもなし」と云つて従兄弟の息子は笑つた。彼は樸訥な氣持のいゝ男だつた。

「お前様の事は、親父から子供の時分によく聞きましたが、餘りだしぬけだつたから思ひ出せませんでしたよ。それから、もつと不思議な事は、お前様は疾うの昔長崎で亡くなつたとかいふはなしで、私が小僧上りの時分だつたが、親父がお前様の葬式をした筈ですよ、それから年忌なぞもしてゐたやうです」

「是れは駭いた、どういふわけで私が死んだ人にされたのだらう」

「さあそれはよくは知りませんが、お前様が長崎へ行つてからなが年便りはなし、風の便りか何かで多分死んだのだらうと親父が極めたのでせう」

長吉の嫁だの幼い子供などにも逢つた。従兄弟の妻も去年とか亡くなつたといふはなしだつた。三十年の間には、いかに多くの人が死んで、そして新らしく生れてゐるのだかといふやうな感じを、雲坪はまざ／＼と見るやうに味はつた。彼は自分の身の上の事なども話して、宿へ訪ねて[illegible]な話をして待つてゐた。

町には彼の知つてゐる人は一人も残つてゐなかつた。幼友達なども、死んだ者もあれば、他の土地へ行つてしまつた者もあつて、會つて話をする者はゐなかつた。おきた婆さんは[illegible]生きてゐる筈もなかつた。今では婆さんの住んでゐた家も、豆腐屋を營んでゐた自分の家も、跡方も無く、其處には別の家が建つてゐた。

雲坪が故郷へ還つても大して歓迎はされなかつた。然し中には彼の書名を知つてゐる者もあつて、畫の依頼も少しは受けたので、それを揮毫したりなどして其の土地を發つた。それはもう秋も終りの頃だつた。

彼は何處へ行かうかと考へた。が、何處と云つて行く處はなし、また何處へ行つても差支えない身の上だつた。ところ／＼で畫を賣り乍ら旅をして、信州下高井郡中野といふ處迄來た。すると、其の村の諏訪神社の神官傳田某といふ人が繪が好きで、雲坪を自分の家へ留めて置いて畫をかかせた。神官は深切な人だつた。

「先生は是れからどちらへ入らつしやるお見込ですか」と雲坪に訊ねた。

「それが、何處と云つて當てはないのです」
「東京へは入らつしやらないのですか」
「止むを得ずんばもう一度東京へ行つて見ようかとも考へてゐるのですが、私は餘り東京は好かないのです」
「それでは當分此處にお在でなすつては如何です。幸ひ家には離室(はなれ)もありますから、あれをお貸し申しませう、煮炊きの道具なども、家のを使つて居ればお買ひになるには及ばない」
と云つて呉れるので、雲坪は其の言葉に從つて、傳田の離れ座敷を借りて住ふことになつた。田舍のことで畫の依頼といつてもさう澤山はないが、それでもちよい／＼頼まれて畫いてゐた。米だとか、味噌だとか、野菜だとか、さう云ふ物は無くなれば母屋の方で默つてゐても補充して呉れたし、村の人も皆深切でよく物を持つて來て呉れたので、生活の心配は更になかつた。近頃ます／＼隱遁的な氣分になつて來た雲坪には、此の生活は理想に近かつた。然し、お仲の方はさうはいかなかつた。二た月三月經つとお仲はもう其の單調な草深い土地に飽きてしまつた。
「ねえ、貴郎、東京へ行きませうよ」と彼女は云ひ／＼した。
「東京へはもう戻らんつもりで家を畳んだのぢやないか。東京の風は俺には性に合はんのだ」
「それでも東京に居た時の方が面白う御座んした、貧乏をしても矢つ張り東京へ出度い、恁んな山の中で何にも見る物は有りやあしない、貴郎は繪を描いてれば不足はないでせうが、妾やお魚一つ食べられない恁んな處はもう死ぬ程厭になりましたよ」
彼女は雲坪と添つてから以前の性質は一變してしまつた。酒を呑むことも廢めてしまつた。雲坪が酒好きだので、毎晩一合づつ買つて來ても、自分は一猪口も呑まずそれを皆夫に呑ませるのだつた。東京で暮してゐる間ひどい貧乏をしても只の一度も不平を云つたことはない。不思議な縁でつれ添つた夫だけれど、自分に取つては勿體ない程分に過ぎた男だと、彼女は心で思つてゐるのだつた。けれども情無いことに彼女は教養がなかつた。夫が教育しやうとしても、それが受け入れられるやうな生れ付きではなかつた。だから不調な夫を精神的に慰めるすべは彼女は知らなかつた。おまけにいかにも不縹緻だつた。それに就いて笑話があつた。それは、雲坪はよく蟹を描いたが、お仲の顏が其の蟹に似てゐるといふ陰口だつた。
「雲坪先生は、細君の顏に倣つて蟹を描くんださうだ」など、惡口を云ふ者もあつた。
半年ばかり經つと、お仲はヒステリーに罹つてしまつた。さうなると、折り／＼解らない事を云つて雲坪を困らせるのだつ

た。[illegible]方から依[illegible]された[illegible]に出かけるといふ時でも、お仲は此度自分も一緒に跟いて行かなければ承知しなかつた。

間も無くお仲は本當の病氣になつてしまつて、床に就いてゐる方が多いくらゐになつた。雲坪は、繪筆を執つたり、炊事をしたり、病妻の看病をしたりしなければならなかつた。お仲は寢たり起きたりしてブラ／＼してゐたが、此の土地へ來た翌年の夏頃になると、彼女の病氣は急に重つて來て醫師も見離す程の容體に陷つてしまつた。彼女にも、國へ行けば身寄りの者も無いことはなかつた。然し彼女はさういふ人達に報らせるには及ばないし、無論誰れに來て貰ひたいとも思はなかつた。雲坪に看病して貰つてゐればそれで滿足だつた。秋の口になつてから、お仲は廿八歲を一期として、果敢なく此の世を去つてしまつた。

葬式は村人の親切で執り行はれた。彼女の遺骨は中野村の某院といふ寺の墓地にさゝやかに埋葬された。

雲坪は當分悲哀に閉ざされて日を送つてゐた。正式の妻といふわけではなかつたけれども、年月連れ添つてゐた間の彼女の親切は心から消え難かつた。遠州の逆旅で自分が曾て病んだ時、お仲の介抱を受けたのがもととなり、艱難辛苦を俱にして來た彼女との今生の緣が此處でプツリと斷たれてしまつたことを考へると、[illegible]

其の後に何となく[illegible]な氣持になつた。

八

或日主人の傳田が離室へ來て雲坪に向つて雜談の後で

「時に先生、先達て私が長野へ行つた時、柏原の問屋で中村六左衛門といふ人に貴君の畫帖を見せた處が、中村氏が非常に感心して、此の先生を是非宅へお招ぎ申し度いと云つて私に話がありました。が、其の時は御内儀の病中だつたから申し上げませんでしたが、中村氏は、梅觀と號して俳諧も中々上手にかき、それに學者で、信州では名代の名家です、交際して損のいく人ではありません、私の處では先生が何時迄おいでになつても構ひませんが、御不幸の後ですから氣晴らし旁々柏原へ遊びにお出でになつてはどうですか」と云ふのだつた。

雲坪は非常に喜んで、早速傳田の紹介を貰つて柏原へ行つた。そして中村家を訪ねると、主人はかね／＼待つてゐた雲坪のことだから大いに喜んで迎へて與れた。で、當分其所に足を留めることになつた。柏原は、信越の國境に近く、妙高山の麓で、其處は俳人一茶の出生地だつた。

雲坪は畫作をしたり、六左衛門の子の男の子二人に、畫や漢

學を教へたりしてゐた。彼は其處では快心の作を澤山遺した。

一年ばかりで中村家を去つた。そして今度は飯山に遊んだ。飯山の稱念寺といふ寺の住持は頗る好事の人で、雲坪の畫を愛賞して、寺へ置いて心切に世話をして與れた。

世話好きの和尚は、雲坪が獨身でゐるのを見て氣の毒に思つて、女房を世話しやうと云つた。雲坪は女房では懲り〳〵だつたけれども、宜しく賴むと冗談半分に云つてゐると、何時の間にかそれが本物になつて緣談が始つた。先方は稱念寺の檀徒の山崎兼松といふ者の長女で琴子といふ名であつたが、筋目のいい家柄であつた。直ぐに緣談は成立して、雲坪は琴子と結婚した。琴子は温順貞淑の婦人だつたので、雲坪には眞に好配遇だつた。稱念寺の和尚は、雲坪を其の土地に永住させやうと考へてゐたらしかつたが、雲坪はそれを斷つて、長野へ行つて家を持つことにした。

雲坪は長野へ出て、東ノ門町の寶慶寺といふ寺の門前の處に借家をして世帶を持つた。其處を根城にして信州の各地を遊歷した。松本、大町方面から、或時は飛彈の高山附近まで足を伸ばした。

或時雲坪は長野から戸隱へ登山した處が、其の山上の風景がすつかり氣に入つてしまつた。すると、戸隱神社の神官の中にも好事家がゐて「それでは此處にゐて畫作をなすつてはどすか」と云つて與れたので、雲坪は其の儘山の上に留まつてしまつた。寶光社の神官山本某といふ人は非常に畫が好きだつたので、主に山本の世話になつて其の家に泊つてゐて畫作をした。

長野の留守宅では、いつ迄も雲坪が山を下りて來ないので、細君は心細くなつて、自身も山へ行くことにした。其の頃彼女は懷胎してゐた。それで山上の生活も淋しくなくなり、雲坪に取つては益々以て理想郷となつた。

當時雲坪は瑞岩といふ號を用ゐてゐた。あるひは戴月仙窟とも號した。戴月は雲の坪を意味するのだつた。また南華山人とも號した。彼は其處であらゆる山水の形態、雲煙の變化を研究することが出來た。深山四季の變遷は居乍らにして悟了した。それから殊に彼が有難く思つたことは、寫蘭の研究の自在なことだつた。彼は鐵翁の感化を受けて常に蘭を描いたが、近來に至つて漸く眞に蘭の神髓を解し得るやうになつた。彼は毎日蘭の寫生をした。或時は幽谷に分け入つて、懸崖の蘭や、巖壁に密生してゐる蘭や、または水邊の蘭を寫したりした。然し、研究すればする程蘭はむつかしくなつた。雲坪は、終生蘭を描いてゐた先師鐵翁の心持に全く共鳴することが出來た。

[illegible]

した。[illegible]から數人が遊びに來て、冗談に

「先生、藏月仙館の名はいかにも低くて頭がつかえさうですね。奥さんが入らしつて、坊ちやんも出來たことですから、何とかもう少し賑々した名に變へてはどうですか」と云ふと、

「それもさうだな、では、是れから窟を廢して藏月仙館としやう」

と云つて、其の後は居號を藏月仙館と號した。

おもに山本に居たが、中社の宮澤菜の家にも泊つて居た。山上生活を四五年續けた。そして多少の貯蓄も出來た。そこで彼は明治十七年の春を迎へてから山を下りた。彼は長野に永住の計を立てゝ、戸隠に居る間に稼ぎ溜めた金で、善光寺の堂裏に小さな家を建てゝそれへはいつた。其の家を玉蘭堂と號した。間も無く二男が生れた。

山を下りてから、十七年以後は、再び舊に返つて雲坪の號を用ゐた。得意の作に遇ふと、蘭華山人[illegible]々子雲坪と款した。其の前後が、雲坪の比較的得意の時代だつた。彼は既に信州では完全に認められてゐた。信州の南畫家と云へば、誰でも先づ雲坪に指を屈するのだつた。當時、信州には、知名の南畫家が三人あつた。加藤半渓と、兒玉果亭と、長井雲坪とがそれであつた。其の中で[illegible]たが、其の實の手腕は、雲坪に次ぐに半渓、果亭の[illegible]とも[illegible]い地位だつた。半渓は岡田半江の門人で、[illegible]健實だつたが、風韻が乏しく、果亭は才筆なれども正法に缺けてゐた。半渓も果亭も共に雲坪には推服して、親しく交り、且つ彼に學ぶ處が多かつた。

兒玉果亭は、信州高井郡澁村の生れだつた。貧家に生れたけれども熱心に書を讀み、幼にして神童の名があつた。十二歳の時父を喪ひ、飯山の佐久間雲窓の門に入つた、雲窓は南蘋派の畫家だつた。其の後郷に歸つて、隣村の興隆寺の住職上條[illegible]に就いて經史を問ひ又禪を談じた。慶應二年に澁村に火災があつて果亭の家も燒けたので、玄楽院に遁れ、此所で繪事を研究すること多年であつた。其の後東京へ出で、更に京都へ行つて直入の門下となつた。直入も彼の筆を見て常に推賞措かなかつた。果亭は既に郷に還り、犀川の畔に居を結び、竹僊山房と名け、また得中庵と稱した。果亭が名を成したのは、明治十八年の繪畫共進會に青緑山水及び花鳥圖を作つて出品して銀賞を得たのが初めであつた。其の時銀賞を得た者は、田崎草雲、瀧和亭、橋本雅邦等皆一代の名家で、而も果亭は其の末席だつた。それより果亭の其の畫は天覧を辱うして特に御用品となつた。

名聲は頓に高くなつた。

かうして果亭は世間的には大を成したけれども、而も彼の畫には常に一脈の匠氣が存し、雲坪の道ふべからざる仙氣を藏する畫と比較する時は、氣韻に於て數等下るものだつた。雲坪は、戸隱から下山して以來俄かに畫態に變化を來した。それ迄の彼の畫の枯淡淸痩から一轉して却つて用墨秀潤となつた。彼は好んで密畫を描き、殊に着色秋景山水に至つては彼の最も得意として描くところの畫題だつた。彼は戸隱山上に籠居して、紅葉の風趣と、幽蘭天然の容姿とは、遺憾なく研究したのだつた。五彩の着色を施し研麗眼も綾なる山水を描いても、自から深山晩秋の靜氣畫面に漾溢して一點の俗氣を留めなかつた。彼の蘭を描く法も其の頃から變化した。壯年時代迄は石濤風の葉の太い力の強い蘭を描いたが、戸隱以後は葉の細い柔かな蘭と變つた。それはかの馬湘の蘭を髣髴せしむる態があつた。山を下つて後も彼は毎日蘭を寫生することは怠らなかつた。戸隱と長野との間を上下する馬方などに賴んで置いて、折り／＼蘭を取寄せ、椽先にそれを吊して寫生した。寫生してしまふと、花を鹽漬けにして食べた。

九

明治十八年の三月、雲坪は十三年振りで東京へ行つた。それは長崎時代の友人である川村雨谷や瀧和亭等から度び／＼の書面で、是非一度遣つて來いと勸められてゐたので今度繪畫共進會見物旁々、東京行を決行したのだつた。其の頃はもう汽車が通じてゐた。三月十三日の夜長野を發ち、十五日の午後四時に上野へ着いた。宿を取つて、翌日は雨谷を訪問した。日曜日で雨谷も家に居て、雲坪の顏を見ると非常に喜んで「よく遣つて來た、よく遣つて來た」と云つて、手を執るやうにして、座敷へ招じ、さて一別以來の物語りを始めるのだつた。

川村雨谷は其の頃大審院の判事を務めてゐた。彼は名は應、心天保九年八月江戸青山に生れ、父は川村幽對と稱して、幕府の士で、書畫を能くし、詩歌俳諧にも堪能だつたので、雨谷は幼時から父の教を受けた。安政三年家督を繼ぎ、慶應の初め長崎支配定役を命ぜられて在勤中、鐵翁逸雲等に就いて六法を學んだ。明治維新の後東京に歸り、外國奉行支配定役に入り、後轉じて刑部省から司法省に出仕した。爾來司法部内に職を執つて、控訴院部長から終に大審院判事に進んだ。そして彼は官途の餘暇筆硯を友として、終には南畫家中有數の作家となつたのだつた。

雨谷は奇才を有し、資性恬淡にして快活で、人に對するや媚ぶることも傲ることもなく、常に溫容親しむべき人だつた。或

[illegible]詠んだ。すると某僧が出て[illegible]して曰く、

「雨谷先生は[illegible]を好きせられるさうですが、何卒一句御所望申し度い」

其の僧は小肥りに肥つて艶々した顔をしてゐた。雨谷は言下に筆を執つて

紅梅や肥たる僧のにく〳〵し

と書いて示した。僧は苦笑して卒々にして座を去つた。

午後、雲坪は雨谷の許を辭して、渡邊小華を訪問したが是れは不在だつたので、其の足で瀧和亭を訪問した。和亭も喜んで迎へた。此處でも一別以來の話で、それから久し振りだといふので大いに御馳走になつた。さうしてゐる處へ來客だと云ふので誰かと思ふと長三洲だつた。是れは〳〵といふわけでます〳〵座が賑やかになつた。

瀧和亭は、天保元年の生だから、雲坪より三つ年長だつた。長三洲は雲坪よりも一つ若かつた。和亭は東京の人で、初め大岡雲峰の門に入り、雲峰沒後長崎へ行つて鐵翁に就いて學んだ。旁ら清人陳逸舟、華昆田等と交つた。居ること二年で、更に京都に遊び、又南海諸州を歷遊し、安政元年江戸に歸つて幕府に仕へたが間も無く故あつて致仕し、北越地方に漫遊すること[illegible]つた。明治六年墺太利[illegible]に出品して[illegible]を受けた。[illegible]種の共進會に出品して[illegible]に[illegible]つた。山水人物いづれも能くしたが、殊に花鳥は絶妙であつた。これが爲めに數回皇室の命を蒙つて皇居の壁に描き、又其の技は貴顯紳商の間に持て囃された。

長三洲は豐後日田郡馬原の人だつた。其の父は梅外と號し、醫を學び書を修め、廣瀬淡窓に師事した。幕末勤王派[illegible]門へて、禍が身に及ばんとしたので、妻子を携へて長州に逃れた。其の子の三洲も同じく淡窓に學び、父に從つて長州に入つて毛利侯に仕へ、明倫館教授に任ぜられた。維新の際王事に奔走し討幕の軍に從つた。亂平いで後權大史に任ぜられ、明治四年大學少丞に轉じ柳原大使に隨つて清國に赴き條約を締結して還つて大いに功績を認められた。彼は木戸松菊の知遇を受け、松菊の沒後は官を辭して、專ら詩文書畫に優遊してゐた。彼は明治天皇の恩寵を蒙り、屢々書畫を上つて、名聲一時に高かつた。

其の翌日雲坪は繪畫共進會を見物した。其處に陳列されてある滯山の諸派の畫を一見したばかりで、彼が東京を離れてゐた十數年の間に畫壇の大勢が著しく變化したことがはつきりと[illegible]

つた。文人畫は最早下火になりかけてゐた。そしてそれに代るものとしては、四條圓山及び狩野一派の繪畫だつた。それとても昔の畫風とは餘程變つてゐた。總ての物が移り變る事を彼は感じさせられた。

雨谷や和亭等の肝入りで、雲坪の爲めに書畫會を開いて異れることになつたので、雲坪は其の揮毫をし乍ら東京に滯在してゐた。杉、東久世、吉井などといふ世にときめく人々からも依頼を受けた。それは皆雨谷の周旋だつた。

雨谷や和亭は雲坪に向つて、

「君も田舍を引き上げてもう一度東京へ出て來てはどうか」

と眞の友情から勸說することもあつたが、

「いや私は田舍の方がよい」

と雲坪はにべもなく斷るので、友人も其の上勸めはしなかつた。雲坪は長野の堂裏の家がすでに戀しくなつてゐた。

雲坪の會は、四月五日に日本橋の料亭で開かれた。其の日は夜來から時候外れの雪が降り出して當日は大雪になつた。それでも、雨谷、和亭、小華、長三洲などといふ名家が出席するので會は非常に盛會だつた。華々しい空氣に包まれて流石に雲坪も若やいだ氣持になつた。

それから二三日經つて雲坪は長野へ歸つた。彼はそれきりついに東京の土は踏まなかつた。

其の頃を一轉機として、さしもに全盛を極めた南畫は り流行らなくなつて來た。其の原因は種々あるけれども、一 の狀態が秩序を回復して一般人士の趣味眼が向上するにつれて文人畫家の疎放な筆致が漸く世人から飽かれて來たのと、當時畫壇にも國粹論が勃興し偶々時代思想と一致して、米人フェノロサや、狩野芳崖、岡倉天心等を中心とせる畫壇刷新の運動が漸く優勢となり、南畫は次第に凋落して、四條、圓山土佐、狩野などの畫家が一時に擡頭して來たのだつた。そして明治廿年に東京美術學校が設立されると、芳崖、雅邦、玉章等が入つて教授となり、南畫は全然繪畫の外に驅逐せられてしまつた。安田老山は既に明治十五年に物故し、奥原晴湖は時世の非を悟つて熊谷に隱遁し、南畫の巨星悉く地に墮ち、わずかに瀧和亭、野口幽谷の如き花鳥を得意とする者だけが辛うじて孤壘を守つてゐるに過ぎなかつた。

中央畫壇の大變動は、山深き信州にも影響せずにはゐなかつた。長野附近でも南畫は頓と賣れなくなつた。もと〳〵微々たる生活をしてゐた雲坪の如きは、其の頃から殆んど衣食にも窮する有樣となつた。加ふるに續々として子供が生まれ、男の子ばかりで四人あつた。

畫の依[illegible]も無[illegible]た。[illegible]畫[illegible]の[illegible]で[illegible]しお[illegible]たなかつた。其[illegible]村といふ處に竹下[illegible]といふ者があつた。畫が好きで雲坪の處へよく遊びに來た。雲坪の氣の毒な有様を見るに忍びなくて、或時

「先生、實に詰らぬ仕事ですが、おひまな時小遣取りになさるお積りなら内職をお世話いたしますが」と云つた。

何かと聞いて見ると、それはブリキの茶筒に蘭の繪を畫く仕事だつた。三輪村の天宮伸吉といふ製罐屋があるが、そこから蘭を描く畫工の世話を竹下が頼まれてゐるといふのだつた。

「それは忝けない、窮すれば勞働でもしなくてはならない。其の事を思へば假りにも繪を畫くのだから結構です。是非お世話を願たい」雲坪は喜んで頼んだ。

雲坪は其の内職をやり始めた。然し、一本の畫き賃は僅か三厘だつたから終日畫いても何程にもならなかつた。が、雲坪は不平も云はず、その茶筒へ彼の最も得意とする蘭を入念に描くのだつた。處が彼の蘭は例の馬湘の風で極めて葉が細くて長い。すると製罐屋は「どうも蘭がへろへろしてゐて面白くない。もう少し上手な蘭が畫けないものかなあ」などと云つて小言を持ち込んで來たりした。それでも其の内職は永く續いて雲坪の唯一の定收入となつた。

長野在の今井村の醫[illegible]といふ人があつた。雲坪の畫の好者だつた。雲坪が困つてゐるのを氣の毒に思つて、或時一枚の畫を御依頼したいからお遊びかた〴〵おいでください」と使を遣ると、雲坪は早速やつて來た。が、見ると、十二月の末だといふのに、單衣物を着て慄へてゐる。

「いやどうもお寒いことで」と雲坪は云ふのである。

「先生、なんぼなんでもそれでは困りますまい、私の着古しで失禮ですが是れをお召し下さい」

醫者は綿の入つた着物と羽織を出して雲坪に着させた。

「や、是れは暖かい、暖かい」と雲坪は子供のやうに喜んだ。

醫者は酒肴をとゝのへて御馳走した。雲坪はますます好い氣持になつた。氣持がよくなると自然筆を持ちたくなつた。

「時に、今日は何を畫きませうかな」と雲坪は催促した。

すると醫者は

「さうですな。何でも先生の氣の向いた物を畫いて頂きませう。然し先生、人間といふものは妙なもので、懐ろが淋しいとどうもいけない、自然畫もいぢけてくる、ですから今日は畫料を前金で差し上げて置きませう」と云つて五圓札を一枚雲坪に

與へた。

すると雲坪は急にソハ／＼し出した。

「甚だ、失禮ですが、本日は是れで歸宅を………」

醫者は驚いて

「然し先生まだ揮毫をなさらぬではありませんか」

「いや、揮毫は何れ後日……實は、頂戴した此の金を早く家內に見せて喜ばせて遣り度いので」

雲坪はお辭儀をしてサッサと家へ歸つてしまつた。

妻の琴女は何時もぼろ／＼の着物を着て、帶など締めてゐたことはなかつた。締めたくも帶が無いからだつた。しまひには、髮も切り下げにしてゐた。髮結錢を儉約する爲めだつた。

屏風一双を揮毫して大概二三圓位の畫料だつた。尺五絹本で一圓位持つて來た。中には雲坪が酒が好きなことを知つてゐて、銚子を一本持つて來て畫かせたりした。それでも雲坪は酒を貰ふと喜んで、日記へ德利の繪を描いて「何々君より到來」などと特に達筆を揮ふのだつた。扇屋といふ宿屋の主人が繪を描いて呉れと云ふから、描いて遣ると、其の禮に雀二羽持つて來た。

それでも强ち假借したわけでもなかつた。其の頃長野に雲坪の畫を金を出して買ふ人は殆んど無かつた。雲坪は、畫を依賴して呉れる人が無くて退屈するので、よく善光寺へ行つて僧侶達と碁を打つたりしてゐた。冬の寒い日に雲坪は白地の單衣物を重ねて着たりして、懇意な家へ遊びに行つたりした。爐ばたへ座り込んで、袂から粉煙草を抓み出して鉈豆の煙管へ詰めて吸つた。彼は煙草入れを持つてゐたことはなかつた。煙草も煙管も袂へぢかに入れてゐた。白地の着物の袂の端が煙草のやにで眞赤に染まつてゐた。で、さういふ恰好で煙草を吸ひ乍ら

「酒が吞み度いな、繪を描くから一合買はないかな」などと云ふのだつた。

すると、大概の人が

「先生、酒は買ひますが、繪の方は御免です」と云ふ始末だつた。

雲坪の家は道端だつたから、通り掛りの馬方だの、薪を背負つた男などが這入り込んで覗いてゐると「一枚畫いて遣らうか」と云つて、得意の蘭竹などを畫いて呉れた。さういふ生活だつたから、子供達が大きくなつても教育費を掛けて遣る見込みはなかつた。

「お子さんも繪師になさいますか」と人が云ふと、

「否、子供は決して繪かきにはしません」と雲坪は云つた。

或家の子供が、雲坪の子供と友達でよく遊びに行つて

「[illegible]くさん、わしに[illegible]へて下さいな」と[illegible]

と

「いけないく\、決して綺なんぞ習ふものではないぞ」と雲坪はいつにない恐い顔をして咬めるやうに云ふのだつた。

それでも、勿論彼自身は、畫より外に面白いと思ふものは無かつた。そして、自分の畫に對しては非常なる自信を持つてゐた。兒玉果亭の畫が幾ら賣れやうと平氣だつた。或る時も、親しい人との間で果亭の畫の話が出ると雲坪は「果亭さんの繪もうまいが、どうもチト俗でなあ」と莞爾り笑つて云つた。

或る時、東京で一寸名のある某といふ詩人が長野へ來て雲坪を訪問した。初對面ではあつたが、話が面白く快談數刻して詩人は歸つた。東京へ歸ると詩人は手紙を寄越した。其の手紙の終りに詩が書いてあつた。それは雲坪を賞揚する意味の詩だつたが、讀み下すと其の中に「畫風學大雅、人物復相似」といふ句があつた。すると雲坪はさツと氣色を變じて、ビリく\と手紙を引き裂いてしまつた。

或年、伯爵東久世通禧が長野へ旅行した。其の時の隨行の一人に大倉雨村が居た。雨村も雲坪とは長崎時代の友だつた。其の上雨村は新潟の産だつたので、特に雲坪とは親しく交つた。雨村は初め新潟の畫人松尾紫山の門人となつたが、父の歿後江戸に出て、[illegible]に[illegible]手の中で[illegible]畫を[illegible]へてゐた。維新後、[illegible]り、副公使、張[illegible]の大家と交[illegible]し、[illegible]領事館の書記官となつた。居ること多年にして[illegible]進んだ。官途を辭して東京に歸つて後は悠々として風月を友とし、或ひは諸國を遊歴した。雨村の畫は一點の俗氣なく、最も山水に長じてゐた。

雨村は郷里新潟へ往復する時などに、長野へ立ち寄つて、時時雲坪とは會つてゐた。今度も彼は其の友達を訪問した。兩人はしばらくの間は愉快さうに話してゐた。其のうちにどうしたはづみか談が少し面白くない問題に觸れて來た。それは雲坪が餘りに時世を顧みない獨善的な畫を描いてゐることを、雨村が批難したのが原だつた。勿論雨村の其の批難は、少しも自負や侮蔑の心から吐いた言葉ではなく、自分の尊敬してゐる友人であり、而も絶妙の手腕を持つてゐる雲坪が、餘りと云へば世間から葬られ自からも葬つてゐるやうな此の生活をしてゐるのを傍視するに忍びなく、何んとかして世間へ引き出して遣り度いと思ふ眞の友情から云つた言葉だつた。これは雲坪にも解つてゐた。が、彼は矢張り面白くなかつた。さういふことには、[illegible]

道を知らぬ者の云ふべき言葉だ、彼も他人の畫を觀て善惡を區別する力のある人間が、殊更に善を捨てゝ惡に就けと勸めるとは何事ぞ、自分が俗流に媚ずして困苦してゐるのは自業自得である、誰を恨んでも羨やんでもゐない。せめて友達なれば其處を認めて與れさうなものだのに、反對に、如才無くしろの、もうちつと俗な畫を描けだのと云はれると、たとへそれが友情であらうと何んであらうと、雲坪は面白くないのだつた。雨村は利巧な男だつたが、其の日は少しどうかしてゐた。

「知己を後代に俟つのも宜いが、當代に知己を得るも同じ事ではないか、後代の人間必ずしも當代に勝るとは限らないからね」などと雨村は屁理屈を吐いた。

「知己なんぞは、何時だつて有つたつて無くたつて構はんのさ」

「それが君の獨善主義だと云ふのだよ、觀て與れる人が無かつたら、物の價値は付きはしない」

「さうかな、鐵翁はさうは申されなかつたやうだがな、蘭は幽谷に在つて獨り香し」

「や、是れは參つた、僕の云つた事は當座の屁理屈さ。だが然し、それは君だけのことだ、君には奧さんもあれば子供もある、それを何とする？　見玉へ、奧さんの有樣を、僕は君の奧さんのあの姿を見る度びにお氣の毒で……」

と雨村が猶も云ひかけた時、雲坪は突然甲走つた聲で叫び出した。彼は滿面朱を注ぎ、口角泡を吹き、劇しく吃り乍ら「キヤツキヤツキヤツ」と猿のやうな聲を發して叫んだ。それは彼が激怒した時の特徴で、何を云ふやら解らなかつた。雨村も驚いて立ち上つたが、すると雲坪は雨村の胸倉を取るやうにして、猶も叫び乍ら座敷の外へ突き出すのだつた。琴女といま一人丁度居合せた門人の馬場磯松とが何事ぞと驚いて茶の間から飛び出した時には、雨村は既に三疊の玄關から土間へ下ろされて、挨拶どころではなく、這ふ々々の體で、表の破れ障子を明けて逃げて行つた。

雲坪は後で「ハアハア」と息を吐いてゐた。

「まあ一體どうなすつたんで御座います」

「何んでも宜い、琴、水を汲んで來い」

細君が井戸水を汲んで來ると、雲坪はしきりに耳を洗ふのである。それでも彼の憤りはまだ納まらないのである。

「琴、琴、酒を買つて來い」

細君がいつもの小さな德利を持つて出掛けやうとすると、

「そんな物では駄目だ、是れを持つてこつて買つて來い」と云つて雲坪は番茶の土瓶を差し出した。

村[illegible]の[illegible]村といふ[illegible]へ行つて[illegible]たか
り買つて來た。
「あゝ面白くない、雨村の馬鹿野郎が……さい[illegible]、[illegible]」
處へ來て吞め」
雲坪は其の冷や酒を、門人と二人で吞むのだつた。
一方大倉雨村は這ふ／＼の體で旅館へ歸つて來た。東久世伯の前へ出ると、
「大倉、何處へ行つて來た」と伯爵は云ふ。
「いや、どうも、今日はゑらい目に遭つて來ました」と云つて雨村は雲坪を訪問した一伍一什を話した。東久世は大笑ひして
「さうか、それは貴公少々云ひ過ごしの觀がある、雲坪が怒つたのも無理はない」
東久世も雲坪の事はよく知つてゐたので、特に氣の毒に思つた。東久世は其の翌日改めて人を介して雲坪の畫を所望した。雲坪も既に平靜に復してゐたので快く承諾して蘭竹を畫いて贈つた。東久世は長野を去るに臨んで、時服一襲を雲坪に贈つた。

十一

潛吉香と、雲坪とは、一度も逢つたことはなかつたが、久し[illegible]の[illegible]に[illegible]た[illegible]の知己だつた。彼は常に雲坪の[illegible]して[illegible]たが、[illegible]來を盡いては、竹田、米山人に劣らず、[illegible]に出づ、和漢を通じての[illegible]である[illegible]雲坪を[illegible]した。雲坪も此の知己に[illegible]して吉香に對しては常に[illegible]して一度吉香を訪問し度いと思つて居たが、その機會が無くて過ぎた。

其の潛吉香といふは、武州川越に近き比企郡松山町在野本村了善寺（淨土眞宗東本願寺派）第十世つた人であつた。上人、諱は潛、字は俊嬰、法號を俊海と云ひ、吉香は其の雅號である。幼より同宗の松山町淨蓮寺了英上人に從いて法道を[illegible]を學び後大沼沈山の門に入つて詩を學び、枕山門下の高足と稱せられた。吉香の師了英上人はまた隱れたる篤學者として其の宗の同人間には有名な學僧だつた。了英は近江の妙蓮上人の下に在錫苦學し、其の頃、大谷派の管長現如上人に學師を務めたこともあつたが、後辭して故郷に歸り風月を友とし詩書に閑日月を送つた。了英上人の莊嚴に對する[illegible]は土藏に一坏あり、頗る篤學の人で、號を塵滿または松陵、或ひはまた夢門在と號し維新後姓を松林と稱した。明治十一年頃六十有餘にして示寂した。吉香師は日々野本村から松山町へ通學した。十五六

頃から、松山の歸り途に、農夫が本を置いて教へを乞ふのが常だつたといふやうな、若い頃から頴悟の人であつた。其の頃の了善寺は極く貧乏寺だつたが、古香の門人が澤山になつたので、其の人々の喜捨と檀徒の淨財を以て後には立派な堂が建つた。其の堂を五鬣軒と云ひ、五葉の松の老樹があるので、塾を五鬣塾と稱した。それは詩友小野湖山の選命であつた。もう一つの堂を春桂眞林と云ふ、是れは古香老師の師たる大沼沈山の命名である。かの江戸繁昌記を著はして江戸拂ひの厄に遇つた寺門靜軒は、初め熊谷に來てそこから松山在兜山の根岸友山といふ人の家に移つて其處で終つたが、其の靜軒居士は、古香老師や其の師松陵老師と交遊してゐたのである。古香老師は交遊頗る廣く、現在せる尺牘によりて知るだけでも、湖山、半嶺、星洲、蘭台、果亭、雲坪、拜山、井上淑蔭、根岸武香、靜軒、青厓、草雲、晴湖、菊池三溪、中島撫山、小田容亭、等多々あつた。門下は實に三千有餘に上つた。然し古香は常に自から雅名の喧傳せらるゝことを厭ひ、隱君子として無欲恬淡な生活を終へ、古香一掬、破寂小稿、耄叟囈語等の著書があり、詩の門下は比較的少なく、多くは素讀の門人であつた。八十歲まで教へたが、其の後は只々雲烟に任せ詩稿に世を送り、悠々一詩一吟古香詩屋に閑雅清談し、大正八年三月十日八十三の高齡を以て示寂し

た。其の學德詩文を以て名利に走らず、超然として雲中の白の如く、故庵の裡を出ずして里人に教へを垂れて終つた老師の生涯は、尊ぶべきものであつた。

古香老師の書は良寛に習つたもので頗る脫俗してゐた。書家の字と、詩人の詩と、君子がることの三つが老師の嫌ひなものであつた。偖て、上毛四萬湯亭の主人で川村某といふ人が老師の詩の門人で、四萬溫泉で詩莚を開いて老師を正客に招待したことがあつた。老師は常の如く邊幅を飾らず、上毛の仲の城迄徒歩で行つた。仲の城町の或旅宿に泊つたところが、宿の主人が來て「お客樣は四萬の詩會にお出掛けになるのですか、」と云ふ。「さうだ」と答へると、「四萬では其の詩會に元老院議官で上毛出身の金井之恭樣御招待で國旗を出すやらビラを貼るやら山中大變な騷ぎです、今一人の先生は埼玉の松山在の先生ですが、餘りお名前を伺ひません」と古香とは知らず頻りに詩莚の話をした。古香は世相の餘りに官位に在る人を重く敬つて其の詩書を賞するに呆れて、其の宿に一詩を遺した儘四萬を訪はずして、飄然として仲の城から松山へ歸つてしまつた。處が、四萬では古香老師の見えぬのを案じて仲の城迄來て宿を尋ねると、一詩が殘して作つた。それで初めて前記の次第と判つた。其の詩を金井之恭が見て、古香の學識の高い詩に敬服して、逢はな

かつたのを殘念がつたといふ話がある。これとは反對のこと、金井之恭が別莊を造つて、自分が故郷の赤城山を眺め得ると、小野湖山の富士山の詩と、今一つ筑波山の詩とを合して、三山莊と命名したく思ひ、其の筑波山を讀む詩を何人に依頼すべきかと湖山に相談すると、湖山曰く、近來詩人多しと雖も識見高きは萬古香老師の外になし、余の最も崇拜するは古香詩僧也と答へて、湖山より依頼の手紙を古香の許へ寄越した。古香は再々辭したが、湖山の懇篤なる情を否みかね、遂に筑波嶺を讀んで贈つたのだつた。

或人が枯木寒鴉の圖を寫して古香に贈ると、古香の即吟に曰く

輕蹀與沈霞　寫來顏日頭
寒鴉游蕩子　枯木老成人

其の詩を畫に題した。

雲坪は、明治二十五年の春、萬古香を訪ねやうと思つて出發した。が、途中で病氣に罹つて引き歸して來た。家に歸ると病が重くなつた。窒扶斯であつた。

雲坪は、今度も矢張り醫者にも掛らず藥も飲まなかつたが、どうやら病氣は全快した。彼は、一旦心に誓つたことを自分から破るやうな人間ではなかつた。

[illegible]何か[illegible]つても、[illegible]と言ふ[illegible]と三人の[illegible]れた[illegible]持つてゐた。彼は[illegible]雲坪から貰つた[illegible]の中は、[illegible]大切にして、[illegible]佛壇みたいに造つてある高い棚の上に載せて置いて、使用する時は必ず拜し頂いてから使用するのだつた。彼は其の佛壇を[illegible]に禮拜を祀らなかつた。只彼が祀るものは自分が恩を受けた人々の靈ばかりだつた。彼の机の上には小さな位牌みたいな物が幾つも並てゝあつて、それに紙を貼つて、叔父の「長井次郎八之靈」だとか、「フルベツキ氏之靈」だとか、さういふ風な文字が書いてあつた。さうかと思ふと、其の中に「鳩之靈」といふのがあつた。それは彼の家で飼つてゐた一羽の鳩が或時死んだので、庭の隅に葬つた其の靈を祀つてゐるのだつた。

六疊の座敷の壁向うには、掛け下しを附け、其庭が北向きの長四疊で仕切が切つてあり、手習りの取れるやうな低い窓が北側の往來に向つて附けてあつた。それが雲坪の畫室だつた。其のほかには、狭い茶の間と三疊の玄關とがあるだけだつた。

雲坪は死ぬ迄畫を描いてゐた。夜は其の狭い畫室で、一分心のランプの明りの下で、矢張り畫を描くのだつたが、彼は常に[illegible]で見ては「まだいけない、まだいけない」と獨り言を云つ

た。新聞紙へでも、反古へでも、何んでも蘭が畫いてあつた。彼の晩年の蘭は、花の蕋の通例心といふ字を書く處が、略されて只圓い輪を書くやうに變つてゐた。病氣で寢てゐる時でも、空間へ指で蘭を畫いてゐた

彼は山水蘭竹を最も得意とした。人物花鳥は寧ろ不得手であると云つてゐた、が畫けば極めて韻致の高いものを畫いた。彼の山水には大概人物が點じてなかつた。で、「どうも淋しくていけないから人物を畫き込んで下さい」と云つて賴むと「さうかなア」と云つて、たつた一人杖を突いてゐる向うむきの人物を畫き込むのだつた。動物では、猿を最も得意として畫き、虎も畫いた。猿は是れも戸隱山上の研究の賜物だつた。其の頃の戸隱では猿は平氣で人の家まで這入つて來た。彼は往々山水の中へ七八十匹の猿を描き込んだりした。面白いことには、彼は猿を畫いてゐると自分も猿になつたやうな氣持がすると見えて、絕えず口のうちで「キヤツ、キヤツ」と云ひ乍ら筆を動かしてゐた。

雲坪は、支那で書家で通した程だから、書も頗る美事だつた。彼は青年時代に大師流を學んだ。中頃には畫と同じく書も張瑞圖に倣ふ風があつたが、晩年再轉して純然たる大師流に歸つた。其の草書に至つては殊に美事だつた。或時善光寺の宿坊で門へ掛ける看板の揮毫を雲坪に依賴してそれを掛けてと、東京から來た有名な書家がそれを見て驚嘆したといふ話があつた。書でさへそれであるから、畫に至つては、東京の畫家でも上方の畫家でも、長野へ來ては顏色が無かつた。或年も川能村直入が長野へ來たが、雲坪の畫を初めて觀て驚いて「恁んなうまい人の在る土地では私など恥かしくて書けない」と云つて心底恐縮したといふ話もある。

雲坪には門人と云つては幾人も無かつた。が、長崎で木下塾の塾頭として、師に代つて後進の面倒を見たことは頗る多かつた。晩年の雲坪に就いて學んだ者には、柏原の中村家の兄弟、木村其樵、前島碧水、馬場鬼笑、高橋某等があつた。名前は判らぬが、長沼といふ處の獵師の某といふ男が或時雲坪を訪ねて來て「私は獵師ですが、繪を習ひ度いと思ふので、敎へて頂き度いが如何でせう」と云つて賴むと雲坪は即座に承諾して手本を畫いて遣つた。其の獵師はなか〳〵熱心で、折り〳〵雉子だの山鳥だの持つて繪を見て貰ひにやつて來た。坂城の人鈴木甫圃は、福島柳圃の門人であつたが、雲坪の愛好者で、よく其の世話もして、且つ畫法も問ふたりしてゐた。柏原中村家の次男は名は六郎、祖卿と號し、長野へ來て箱淸水に住まつてゐた。雲坪の家とは近くなので殊に親しく交つてゐた。雲坪は中村家

には病苦になつたので、每年廿月には一日づいて溫泉へ歸るのを例にしてゐた。

明治二十九年十一月には、果亭、半溪と連れ立つて三人で同國の別所溫泉へ遊んで一週間滯在した。

三十二年になると、先年の窒扶斯の結果で肝臓病を發した。が、例の如く雲坪は藥を用ゐないので病勢は次第に進むばかりだつた。處が、門人の中村祖卿が來て頻りに其の非を說いて醫師に掛るやうと勸告するので、雲坪も仕方無しに「それでは醫者に診て貰ひませう」と云つて、關某といふ醫師の診察を受け藥も貰つた。が、矢つ張り病氣は癒らず、到頭病褥となつて、夏の初め頃から危篤に陷つた。

雲坪の家の近傍に法華宗の寺があつた。朝夕、其の寺で太鼓を打ち經を誦する聲が彼の家まで聞えた。雲坪は病床で其の聲を聞く度びに、五十餘年のむかしのことを思ひ出した。故鄕の沼垂から長崎へ行く時、隣家の婆さんから法華の名號を書いた白衣と、團扇太鼓とを貰つて、法華の行者となつて行つた十六歳の時の思ひ出がまざ／＼と眼の前に現はれて來るのであつた。其の白衣と團扇太鼓は、可成り長い間行李の底に藏つてあつて、時々見ては懷かしく思つたものだつたが、それも何時捨てたのだつたか、無くなつてしまつて、それからでも四十年位にはなる。

「然し……あの頃に聞えもあつた……」

すると、老いと病ひとの爲めに痩れ果てゝゐる自分の耳が、急に賑やかしくなるやうな氣持がするのだつた。雲坪は、每日其の太鼓の音が聞え出すと、床の上で兩手を高く差し伸べて

「あゝ愉快だ……あゝ愉快……」

と叫んで歡喜するのだつた。

「俺が死んだら法華の寺へ葬つて呉れよ」と、雲坪は妻に向つて云つた。死んだ後までもあの勇ましい太鼓の音を聞いてゐたいと彼は思つた。

「それでも家は淨土眞宗ではありませんか」と妻が云ふと「いや、家の宗旨などは構はん、俺は是非法華のお寺へ行き度い」と雲坪は云ひ／＼した。

「然し……」

また或日彼は妻に向つて云つた。それは臨終の期が近付いてからだつた。

「俺が息を引き取つても、誰れにも知らせることは要らんぞ、お前獨りで骨にして寺へ持つてつて葬つて來い、それから墓などは建てなくても宜い」

妻女は、夫が死後の葬式の費用すら無いことを知つて

で、殊更さう云ふのだらうと思つた。あるひは彼女の推量も中つてゐたかも知れなかつた。

「そんな事まで御心配なさらんでも宜しう御座いませう」

と彼女が云ふと、雲坪は首を横に振つて

「いや、左うではない。俺は死なゝいからだ」と云つた。

六月二十九日といふ日に雲坪は死んだ。

死後の所置はすべて遺言通りにすることにした。近隣の人だけで火葬に附し、遺骨は長野市妻科の日蓮宗原立寺に埋葬した。法名は玉蘭堂雲坪居士。

死んだ後で病室の整理をすると、本箱の中や蒲團の下から、水藥と散藥が少しも手を付けず其の儘出て來た。

追記　雲坪山人の遺跡を尋ねて

一

私が長井雲坪の名を覚えたのはさう古いことではない。此の數年來のことである。何んでも其の頃瀧田樗陰君の處へ行くと、座敷に雲坪の畫が常に一二幅は掛つてゐた。其の上同君は最近買ひ込んだといふ雲坪の畫を必ず一二三點位は持ち出して來て見せた。これで私も雲坪の畫に自然親しむやうになつたのだつた。瀧田君は其の頃恐ろしい雲坪熱にとり憑かれてゐた。元來が書畫好きで、漱石先生の遺墨蒐藏家として又百穂先生の藏幅家としては夙に聞えてゐる位な同君ではあるが、雲坪に逆上せてゐた頃は一際劇しかつた。人に逢へば必ず雲坪の講釋をして聞かせるし、往來で逢つても大概毎も二幅位の雲坪は抱へてゐたし、中央公論の編輯室には勿論雲坪が掛つてゐた。其の當時瀧田君自身の口から聞いた話だが、同君がどうしてそんなに熱心な雲坪贔負になつたかに就いては一寸面白い逸話がある。順序として私も其處から話しを進めよう、が、話は更に前に遡るのである。或時瀧田君が俥に乘つて青山邊を通ると、ケチ臭い一軒の書畫屋がある、其の頃から少しばかり書畫熱に罹り掛けてゐた瀧田君は、俥から下りて其の書畫屋の店先きに立つて眺めて見た。すると、其の時ふと眼に入つたのは、松樹を一本書いてある半切の文人畫風の物である。一寸題詩か何か入れてあつて、聞いたことのない名前だが、筆つきが面白いと思つたので「是れは幾許か」と訊くと、五十錢だと云ふ、尤も表裝も紙表裝のボロ〱のものではあるが、何しろ安いので云ひ價で買ふと、其店の主人は、同じ人の畫がまだありますといふて、竹と蘭を描いたものを出して見せた。何れもみな同じ大いさのもので、價もみな五十錢宛だつた。瀧田君は三幅共買ひ取

つて、宅へ持つて來て見たが實に面白い。落款は「瑞岩」としてある。更に向二枚を持つて來た。すると又夏目漱石先生が遊びに見えた。それ迄も瀧田君の書畫趣味には大分漱石先生に依つて啓發されてゐたわけたので、早速、近來大奮發で六十五圓を投じて買ひ込んだ應擧の半折の三幅對をそれへ持つて來て

「先生、應擧を買ひましたから觀て下さい、六十五圓です」と斷つて座敷へ掛けた。

すると漱石先生はつい通りにざつと其の繪を觀た後で「成る程ね」と云つた。感心したてもなし、しないでもなしといつた風である。瀧田君は少々物足りない。

「先生、それが六十五圓なんですよ」

「さうか。併しこの繪は何だネ、六十五圓だから此位描いて置くが百圓出せば、もつと描き足さうと云ふやうな繪だネ」

瀧田君は仕方がないので、應擧はそれまでにして、次ぎに例の五十錢の松の樹の方を出して

「是れは五十錢で此の間買ひましたが」と矢つ張り默つて漱石先生に見せた。すると漱石先生は一見して

「や、是れはいゝ、是れはいゝ」と大層感心された容子で「是れは君、六十五圓の應擧より餘つ程繪が上のやうだぜ」

[illegible]が、[illegible]て見へたいてた、若し[illegible]六十[illegible]なかつたやうな[illegible]だが、それでも[illegible]た。

「先生、其の瑞岩といふのはどういふ人ですか」

「どういふ人だか知らない、僕も初めて見るんだ。然し繪はたしかにいゝよ」と、漱石先生は云つた。

それから又少し經つと、平福百穗先生が遊びに見えた。で瀧田君は又雲坪の松の樹の繪を出して百穗先生に見せると

「成る程、これはいゝ繪だ、うまい」と百穗先生も賞めた。

「此の間夏目先生も來て賞めましたがネ、瑞岩つて何處の人でせう」と瀧田君が訊くと、「分りません」といふて居つたが、其次ぎに瀧田君の家に來られた時に、「先達て拜見した繪は何でも信州の畫家で雲坪と云ふ人ださうですよ」とだけ百穗先生は云はれた。

それから瀧田君は其三幅の表裝を仕替へて九尺床に掛けて又君と共に眺めてゐると、其繪のよい所が次第に明かになつて雲坪に對する興味が加はる許りである。そしてチョイ／＼何かを調べて見たりしてゐるうちに、雲坪といふ畫家は頗る不遇で[illegible]つた人だが中々勝れた手腕を持つてゐたといふやうな消息が

蹟でも知ることが出來た。そこで、一つ雲坪の畫を澤山集めて見やうと考へて、それから東京中を俥で驅け廻つて、書畫屋と見れば飛び込んで「雲坪といふのはありませんか」と遣り始めた。賣れない畫家とは云つても流石に廣い東京のことだからチヨイ〳〵目付かつた。五十錢から一圓二圓三圓、五圓十圓と、眞逆瀧田君一人が買ふからでもあるまいが段々高くなつて來て「有ることはありますがお安くありませんよ」などと云ふ書畫屋も出來てきた。其の時分は瀧田君も一ぱし書畫通殊に雲坪通になり濟まして、俺こそ人の顏を見ると「雲坪が」と切り出すやうな次第であつた

お蔭で私なども幾らか雲坪通になつたのであつた。そして私は私で、雲坪の傳記を書かうと思ひ立つた。——斯う云ふと、何やら瀧田君が雲坪の發見者で、私が其の祖述者でもあるかのやうに聞えるが、實は決して左うではない。雲坪は既に生存中に於ても專門家や識者の間では十分認識され且つ畏敬されてゐたといふことは、本傳を讀まれた人には解つてゐる筈である。が、然らば沒年後は全然沒却されてゐたのかといふと是れも決して左うではない。雲坪の崇拜者は現代にも澤山有る。就中雲坪黨として聞えてゐる人々には、菊池惺堂氏、奧田抱生氏、昨年故人となつたが黑木欣堂氏等の如き錚々たる斯道の大家が居る。以上の三先生の如きは、夙に雲坪の優秀を認めて、或は講演に、或は雜誌に傳記を書き、稱揚宣傳大いに努めて來て居られる。殊に菊池氏に至つては雲坪の上作傑作合せて百有餘點を蒐藏し、東京に於ける雲坪愛好者中の第一人者であつたが、不幸にも昨年秋震災の砌り同家も燒かれて、萬卷の書卷、藏に盈たる什器書畫の類と共に一點餘さず灰にしてしまつたといふのは、誠に惜んでも餘りあることだ。其の他長野市の名望家宮澤長治氏、佐治木清七氏の兩氏も鄕黨中の雲坪崇拜者で、各々家藏する處の名幅數百點に上つてゐる。

大正八年には、長野市の有志相圖つて、長井雲坪顯彰會の催しがあり、東都の名士多數參列して盛會を極め、市の公會堂城山館に於て遺墨の展覽を行つた。其の頃の書畫熱の旺盛と共に、雲坪の名聲漸く顯はれ、嘗ては反古にも等しかつた其の斷簡零墨にも市價を生じて、人々爭ひ求めるやうになつた。

雲坪はついに「死なゝかつた」のである。彼の臨終の一言茲に至つて意味深く思ひ返されるのである。さるにても、法華寺で打ち鳴らす太鼓の音と經の聲を聽き乍ら、安らかに眠つてゐる雲坪の靈が是れを知らば、彼果して得意の一笑を漏すべきや、將たまた苦笑一番して其の坊主頭を掻くや否や、著者は其の何れなるべきかを知らないのである。

二

長非雲坪

十月一日夜十時上野發の汽車で私は長野へ向つた。

雲坪の傳記資料として其れ迄に私の手にあるものは、菊池惺堂氏の書畫骨董雜誌所載の雲坪小傳、奥田抱生氏の書道及畫道所載の雲坪傳記、野山秋軒氏の繪畫清談所載の雲坪逸話等が重なるもので、それで大凡故人の生涯の經緯並びに人物性行の如何を知ることは出來たが、まだ少し物足りない、でいつそ私も長野へ行つて詳しく調べて來やう、まださう古い事ではないから、彼地には遺族の方も居られるかも知れない、其の他門人知友であつた人々に會つて親しく故人の面影を話して貰ひ度い、且つは長野には雲坪の代表的作品が澤山殘つてゐるといふことだから、それも觀て來たい、ともう一つは、多年雲坪が籠居して其の精神作畫の上に多くの影響を與へられたといふ北信の靈峰戸隱にも登山して、彼の生活氣分の一端を味はひ、旁々自分も山上の觀光を恣にして來度いと、それからそれと慾が起り、只さへ旅行氣分をそゝられる秋の好期節を利用して、久し振りで長野へ行くことになつたのだが、今度の仕事に都合のいゝことは、長野新聞の編輯長矢ヶ崎賢次氏とは、未だ面識こそないが、間接には年來相識の間柄であり、且つ同氏は頗る博學多趣

[illegible]

同行の[illegible]手筈になつてゐるのである。

汽車は空いてゐるので樂々と横になつて眠つて行つた。夜中に寒さを覺えて眼を醒すと碓氷峠を登つてゐた。又もや眠り續けて、夜が明ける頃起き上つた。川中島邊りは霧に包まれてゐて、遠くの山は見ることが出來ない。六時過ぎに長野へ着き、直ちに驛前から腕車を雇り、大門前の本陣藤屋旅館に入つた。其の頃は霧も晴れて朝日が爽やかに障子を照らしてゐた。

朝食を命じ、直ぐに矢ヶ崎氏に電話を掛けると、九時頃に矢ヶ崎氏が宿へ來訪された。矢ヶ崎氏の令兄である同姓篤峰先生は、長野縣下に於ける有名な教育家であるが、先年しばらく東京住ひをされた頃私は親しく交際したことがある。それは矢ヶ崎氏兄弟が、私の先輩歌人窪田空穗先生と同郷同村の出身である處から、自然私とも相識るやうになつたのだ。さういふ關係だから、矢ヶ崎氏とは初對面のやうな氣持はしないのである。

「都合のいゝ事には、奥田抱生さんが先頃から長野へ來て現に今此の宿へ泊つて居られるのです、後に逢つて見ませうな。それから此家の主人も中々好事家で雲坪の書幅のいゝ物を持つてゐます から、それも見せて貰つたりするやうに御願ひ申し

う」と矢ヶ崎氏が云ふ。奥田氏は前にも話したやうに、雲坪の鑑賞家としては大先達である、其の奥田氏が折も折長野へ來て居られるとは誠に勿怪の幸で、是れも何かの因緣であらう。兎に角矢ヶ崎氏を煩はして當家の主人公に面會することにした。主人は態々私の室へ來て與れた。溫厚にして親しみ易い人であつた。それから主人の案内で矢ヶ崎氏共々奥田氏の室を訪れた。奥田氏は名古屋の産ださうだが、夙くより東京に在つて漢學に因つて一家を成し、詩文墨竹を善くし、博學精通、多藝多能の士で、よく外國の文字を讀み、近年は漢學に厭きて埃及の研究を始めたと云つて、倫敦出版の埃及研究書を旅行先きまで持つて來てゐるといふ、其の茶色の道服とは似合はしからぬ趣味もあつて、頗る面白い方であつた。

奥田氏が書道及畫道に載せられた雲坪の傳記は、其の冒頭にも斷つてある如く、中村六郎氏の談話を元として筆を執られたもので頗る精密なる記述である。中村氏は、柏原中村家の二男で、謙齋又は祖卿と號し、幼にして雲坪に就て漢學と畫を學び、後長野へ來て箱清水に住つたが、同氏はまた俳人一茶の跡を繼承して其の遺稿什器の全部を收藏してゐて、一茶同好會を興し、各種の遺稿や版刻の筆蹟を刊行して、一茶研究に對して勘なからぬ功績を擧げた人である。處が、不思議なことに私は故あつてその中村氏を識つてゐて、今より十五六年前に土地に遊んだ時中村氏を箱清水の寓居に訪ふたことさへあつた。それで今度も滯在中に同氏を一訪して久濶を叙し、旁々雲坪の事を尋ねる積りでゐた處が、中村氏は昨年あたり既に沒したといふのであつた。其の時聞いた話だが、柏原の本家も近年沒落して其の所藏の雲坪の書畫を全部一纏めにして長野の佐治木氏が讓り受けたといふのである。

奥田氏の許を辭し、午後は矢ヶ崎君の案内で佐治木氏秘藏の雲坪の畫を拜見に出ることになつた。佐治木氏は田町の會津屋といふ醬油醸造業を營む舊家である。早速主人の居室へ通されて對面した。舊家の主人らしい上品な人で、私の來意を大層喜んで與れた。爐が切つてある其の座敷には、蘭竹を畫いた掛物が掛つて居り、青綠山水の額面が揭げられ、水墨山水畫の屛風が立てゝあり、それが悉く雲坪の作である。

「私は雲坪先生以外の物は何も持つて居りません」と佐治木氏は云ふ。それから氏は、先年態々松山迄行つて畫古香老師を訪ねた時の話などされた。

「老師が、お前の商賣は何かとお尋ねになりますから私が、醬油屋で御座いますと云ふと、左うか醬油屋ならお前に所望した

い物がある、[illegible]
遣つたが、あの醤油の味噌を氏に附けて貰つた味がまだに忘れられぬ、お前今度岡へ戻つたら是非醤油の味噌を少々送つて呉れないか、といふお話しで、へい畏りました、そんな物ならお易い御用で御座います、必ずお送り致しますと私が申して、歸ると早速四斗樽でお送り申したら、老師から大層お喜びのお手紙を頂きましたつけ」

と、そんな談のあとで、佐治木氏は幅物を自身で座敷へ運んで、襖や唐紙の上へ順々に掛けては外し掛けては外しして見せて下すつた。流石は中村家傳來の書幅だけにどれも見事な物ばかりだつた。それまで私が東京に居て見た雲坪の作は多く疎畫だつたが、今初めて彼の力作に接して見て、ますます其の技倆に傾倒してしまつた。世間には雲坪の畫といふと蘭竹や水墨の山水に限られてゐるかのやうに思つたり、或ひは彼がさういふ疎畫しか描けなかつたかのやうに誤解してゐる人も少なくないが、雲坪は所謂文人畫流のさういふ狭い畫家ではなかつた。勿論蘭竹は最も長ずる處で、寫蘭の術に至つては古今無類であることは定評だが、猶且つ着色細密の山水を描かせても其の特技を發揮してゐる。殊に[illegible]山水の妙に至つては本傳中に記した通りである。それから、[illegible]することは、彼が使用した[illegible]

[illegible]る。だから、[illegible]日掛いたやうに、墨色淋漓とし、[illegible]てゐる。佐治木氏で拜見したものに何れも見事だつたが、其の中でも、横幅の[illegible]山水と、水墨を以て渓流に蘭竹を描いた六曲屏風一双に至つては双絶で、天下一品の名作だつた。

佐治木氏から暇を告げて出ると矢ヶ崎氏は、「是れから與笑園を訪問して見やう」と云ふた。それは雲坪の門人となつた馬場磯松氏のことである。馬場氏與笑と號し、長野に於ける有名な庭師である。[illegible]に[illegible]其の弟子分になつてゐたにも拘はらず、雲坪を崇拜して彼の門人となつた。庭師ではあるが趣味の饒かな人物で、煎茶に通じ、俳句もやり、彫刻もやれば小細工物も能くし、造園の術に至つては東京の庭師と雖も此の味の深さに於て及ぶ者は尠なからうといふくらゐで、而も容易人に下らず、是れまた長野に於ける一奇人であるとのことだ。與笑園は市より東北に中る[illegible]の中にあつて、門前を小川が流れ、土橋を架け、小笹の繁みを[illegible]込んだ一見閑雅な[illegible]造りで、[illegible]く風流な住居だつた。[illegible]

不在だつたので、留守居の人に明朝の訪問を云ひ殘した儘で元來た道を引き返した。

三

三日の朝、七時頃に床を出ると、朝食も取らず、私は單獨で鬼笑園を再訪した。今朝は主人が在宅で直ぐに面會した。廣椽を繞した八疊の座敷で主人は私と對談しながらも、盆の上で幾度びか茶を立てゝ與れる。床には矢張り雲坪の小幅が懸つてゐる。「私は皆人に遣つちまひました、惜がつて藏つて置いたつて自分が死んじまやあ仕方がありませんからね」

と言つた調子で、主人は七十の老翁とは思はれぬ元氣さで、いろ〳〵話された。特に私が面白く思つたのは、大倉雨村が雲坪の閑居を訪問した時の一伍一什で、是れは雲坪の逸話中でも最も有名な一條だが、是れまで書かれた人の文では、其の時雨村が手土産代りに一封金を贈ると雲坪も喜んで受けたが、其のあとで雨村が俗畫を描けと云つて勸告すると、雲坪は忽ち顏色を變じ、先に贈る處の金を雨村の懷中へ押し入れ、同人を戸外に突き出した、といふことになつてゐる。而して、雨村の友誼、雲坪の貞潔、並に千古の美談とされてゐる。が、鬼笑老は當時其の場に居合せた人で、老の談によると雨村も別に金を贈りはしない、只彼の忠言が偶々家庭にまで觸れたので、感情家の雲坪が赫怒したのだと云つた、で私は老の談を眞なるものとして筆を執つた。

「貴老は大變多藝ださうですが、目下は何をなさるのです」と私が話頭を轉じて鬼笑老に尋ねると、老は謙遜して

「いや、何も出來ません、皆素人です、が、老後の樂しみとしては能を少しばかり眞似をしてゐます、一寸御覽下さい」

と云つて起つて間の襖を明けると、向うの間は五六寸高く一面板張りの舞臺になつてゐて、あたりに裝束や面やいろんな道具が置いてある。

「成る程これはいゝ趣向ですネ、併し、失禮だがよく能を始める氣におなりでしたね」

「いや始まりは妙なきつかけで、私は僂痲質斯を患つて脚が立たなかつたもんです、すると妙に舞が舞つて見度くなつたので、仕舞の師匠に來て貰つて、私は御覽の通り脚は立たないが舞を稽古して頂きたい。といふと脚が立たなくては舞を稽古しても無駄でせうと師匠は云つたが、なに私は舞へなくつてもいゝ、心持だけでいゝんだからと云つて、無理に稽古して貰ひました、處が、心持がわかつて來ると矢つ張り立つて舞つて見たくなつた、で柱に掴つて漸う立つといふわけ。すると醫者が來て

今こんなでこんな事をするに金が無いと云ふて[illegible]お出しましたが、何アに[illegible]やつてゐても後悔はないと強情を張つて相変らずやつてゐるうちに不思議なことに私の脚が立つて来た。到頭今では普通の體になりました。能のお面もそれ以来ですが、私なぞは貧乏人だから道具を買つてなんかやれやしない、装束でも面でも皆自分で製へたものばかりです」

私は呵笑老の談が面白いのでもつと遊ばせて貰ひ度いと思つたが、時間の都合があるので一時間ばかりでお暇をして、門前に待たせて置いた車に乗つて歸つた。宿へ歸ると矢ケ崎氏から電話で「今日は正午から宮澤氏を訪問する約束であつたが、只今宮澤氏から電話で、裁判所の用事を早く片付けて歸宅したから直ぐから来て貰ひ度いと云つて来ました。然し僕は新聞社が忙しくて一寸抜けられさうもないから貴君一人で先きに行つて貰ひ度い」といふ報らせだ。私は即座に起つた。

宮澤長治氏は、長野市辯護士界切つての元老で、縣會議長を十数年勤續し、代議士にも推されて出た、縣下での名望家の一人だが、同時に非常なる雲坪の渇仰者で、佐治木氏と並んで二大蒐藏家の一人である。數に於ては遙かに佐治木氏をも凌駕し、雲坪の幅物だけ長持ちへ三杯持つてゐるといふ。その他たつた一枚しかない雲坪の寫眞、日記、座右品なども藏して居ら

たるが、[illegible]すべきに、[illegible]いつぞや[illegible]公園になつたについて家屋を取り除けなければならぬ様になつた。其の家は[illegible]誰も買手はなかつたのを、宮澤氏が、此の雲坪の作つた家をあつたらたき物としてしまふのを遺憾に思へ、相當以上の價格で遺族の人から譲り受け、市の東北一里ばかりの地にある氏の經營してゐる林檎園の山上に移し建てゝ永遠の保存を圖つてゐるといふ事である。私は今日は其の雲坪居宅、即ち蔵月仙館なるものをも見せて貰ふ約束である。

宮澤氏の邸は善光寺に近い何やら云ふ町で、宿からも近かつた。昔風の大きな玄關へ書生君が出て来て直ぐに奥の座敷へ通される。廣い美事な庭園があつて、古風な家造りは昔の武家の住居のやうだと思つたが、後で主人に尋ねると、そこは以前善光寺の寺侍が住んでゐた家なんださうだ。。床の間には某畫伯の筆になる雲坪山人像の一軸が掛つてゐる。直ぐに主人が出て来られた。年齢六十前後の、偉大な體格をした、溫和の好紳士である。

「私も忙しい體ですが、今日は貴君の爲めに一日體をあけました、午後には矢ケ崎君や奥田抱生さん達も誘つて、雲坪堂で今日清遊をして貰はうと思つて居ます」

どそれから例に依つて雲坪の談を少々した後で作品を見せて戴くことにした。三人の書生さんがセツセと土藏から軸箱を運んで來ては、高い欄間の上へ張つてある針金の軸掛へズラリと掛け並べる。それらの畫は何れも美事で、昨日の佐治木氏での驚きを又茲でも繰り返すばかりだつた。書生さんは幾らでも運んで來る。百幅近く見ると私はもう眼が眩んでしまつた。

「もう結構です、どうかその邊でお仕舞ひ下さい」と私が云ふと書生さんが笑つて

「まだ三分の一も御覽に入れませんですよ、尤も全部お目に掛けてゐたら夜まで掛るでせう」

　すると宮澤氏が

「以前はもつと澤山あつたんですが、私は極端な獨占主義は嫌ひで、懇望されゝば人にも分けて遣つたので、是れでも大分減つた分です」と自慢をされる。

　雲坪の日記は、半紙を四つ折りにして卅枚位宛綴ぢた物で、今日何處そこへ行くと、こんな畫を見たとか、こんな題詩を見たとか、それを寫してあつたり、何處から畫を賴まれたとか、畫料何程頂戴とか、何を買つたとか、極く簡單な心覺へを例の達筆で記したもので、全部で十七冊あつた。彼の生活狀態を研究する好個の材料なので、是れは後で綴り見せて戴くことにした。

午飯を御馳走になる、宮澤さんも私と一緒にテーブルについた。西洋料理二品、スープ、鰕フライ、松茸おろしあへ、初茸つくだ煮、トーストパン。

「何も無くてお氣の毒ですが、一寸腹ふさげですから、又山で詩句でも差し上げます、一寸、此の初茸を上つて見て下さい」

　其の時書生さんが矢ケ崎氏と奧田氏に電話をかけると、どちらも差支えがあつて行かれないといふ返事。私と宮澤さんと二人で行くことにした。

　宮澤氏の宅から、靜かな町を二丁ばかり行くと善光寺の堂裏へ出た。其處らには大きな松の樹が立つてゐる。公園地の一隅に「善光寺忠靈殿」とした新らしい堂が立つてゐた。其處は道の曲り角になつてゐた。

「此處が雲坪先生の家の在つた所です」と云ふて宮澤さんはステツキで指し示し乍ら其の位置や模樣を詳しく私に說明して呉れた。堂後の往來の方へ向いた北向きに小窓があつて、其處が掛け下しの長四疊で即ち雲坪の書齋だつたのだ。其の窓から大峯山を正面に望むことも出來たのだ。

　私達は田舍道をぽくり、ぽくりと歩いて行つた。一點の浮雲も見られぬ秋日和で、少し汗ばむ位の暖かさだ。呑氣な談を交し乍らブラ〳〵行くと、向ふから來た一人のお百姓が宮澤さん

と云ふ[illegible]

「何んですか其の人は」と云ひ[illegible]に近づく、

「事件の依頼人です」と云ふで

「刑事ですか民事ですか」

「刑事ですが、何、下らん事件です」

と宮澤さんは興味の無ささうに答へる。山の根に沿つた村を通る。其の邊はいかにも雅致のある田園だ。一寸した坂があつて古い農家が二三軒立つてゐる邊りには、柿や栗の葉が紅葉して、樋の水が流れ、其處に野菊が咲いてゐる。二十三夜塔だの道祖神だのと彫つてある石が道ぎわに立つてゐる。何とも云へない長閑な氣分である。

「先生足が疲れやしませんか」と宮澤さんは私の足を心配してくれる。

「私は若いから是れ位の道は平氣です」

「さうですか、私はまた肥つてゐるから道を歩くのは極く下手で。然し先生今日は俥れの無い方が却つて宜ろしかつたな、俥れがあれば私も幾から其の人達の氣分も重んじなければならんが、恁うして二人切りですと、私の誠意を悉く先生に捧げることが出來るといふもので、それがまた雲坪先生に對する供養ともなるわけですからな」

宮澤さん[illegible]

はんな[illegible]

で、大いに困つたけれ[illegible]に

と答へてゐる。昌[illegible]といふ[illegible]の上に

林間になるのだが、寺の裏山には亭々たる松樹が[illegible]な

り、小鳥が啼き、風は[illegible]

める。私が實に佳い處だと云ふと宮澤さんは喜んで

「雲坪堂を安置する場所としては惡い處ではないでせう、先生此處をどう書かれますかな、えゝと、昌福寺の裏山、白砂青松風涼しき所ですかな、嗚呼雲坪先生の永へに眠るの地なりですかな」

私は面白くて溜まらない。宮澤先生は餘程御自身の名句に感心されたと見えて、ステツキを振り廻し〳〵「昌福寺の裏山、白砂青松風涼しき所」を聲高らかに繰り返されるのである。

山の中ば頃まで開墾されて林檎園になつてゐる。紅玉といふ眞紅の林檎が一面に生つてゐる。林檎園の上の高い處に建物が見える。宮澤さんは途中の番小屋へ立ち寄つて働いてゐる人達と暫時話しをして、それから又急坂を先きに立つて登つた。突き出したやうな山の頂上に瀟洒とした瓦葺きの家があつた。然しそれは雲坪堂ではなく、觀月堂と稱して、平常は林檎園の技

手夫妻を住はせて置く家だと宮澤さんは云つた。私達は其所で小憩した。が、此處からの眺望は頗る壯大なパノラマだつた。脚下に點々たる村落を俯瞰し、中央に信濃川を抱く北信の平野を隔てゝ、高井の連峰と相對してゐる。遠山は飽く迄も青く澄み、平野の稻は黄に熟し、溪谷を隔へた彼方の山の山腹の村落からは、炊煙のどかに立ち昇り、鷄犬の聲が遙かに聞えてくる。

「あれが須坂、そのこちらの方が小布施」

と宮澤氏は一々指差して説明される。北齋が三年間暮したといふ小布施はあれかなあと思ひ乍ら私は眺めた。山の上には可成り廣い平地があつた。觀月堂から三十間ばかり奥に板葺きのさゝやかな家があつた。それが雲坪堂だつた。雨戸は用意して明けてあつた。私は昔自分が來たことのある懷かしい家へでも來たやうに、座敷や茶の間へ這入り込んで見たり、三尺の腰の、破れた門障子を明けて見たり、家の背後へ廻つて見たりした。が、見れば見る程さゝやかな住居である。掛け下しの四疊の茶室の所は、用材が使用に堪へなかつたとかで附いてゐなかつた。堂後は直ちに小松林の山で、其の山頂は奇岩怪石が峙立して巖上に面白い木振りの松を育てゝゐる。其の岩を里人は餓鬼岩と呼ぶさうだ。此の山全體を楠松山と云ひ、元龜天正の昔武田信玄が城を此處に築いた跡だと云ふ。

雲坪堂から北の方へ三四十歩行くと、山の尖端へ出る、其處から北の方の山や溪を望む風景は宛然一幅の南畫だつた、中央の近くに岩石ばかりで形成されてゐる山がある。其の山には松ばかり生へてゐる。其處には左甚五郎作と云ひ傳ふるブラン堂と呼ぶ古い堂があつて藥師を祀つてあるといふ。其の山の根方を廻つて谷川が流れて來て、途中から瀧となつて落下する。瀧の上には木立が繁り、繁みの間から草葺屋根が半ば現はれてゐる。其の奥には滿山紅葉した山が見える。更に遠く見える山は飯綱山であるといふ。

私は其の景色を飽かず眺めたが、眼を脚下に轉ずると、私の立つてゐる處から一丁餘り下の方に、一面に岩石のごろ〳〵した廣い平らな場所がある。其處には草も疎々生へてゐない。

「此下の方は妙な處ですね」と私が云ふと、宮澤さんが側へ來て

「此處は昔昌禪寺のあつた處です、それが弘化年間の大地震で上の山が崩壊して、堂塔悉く地下に埋沒してしまつたので其の趾です、昌禪寺は其の後現在の場所へ移つたのです、なか〳〵の大寺ですから歸途に時間があつたら寄つて見ませう」

地中深く堂塔が埋沒してゐるのかと思ふと、私には其處が地獄の河原のやうに見えて來た。

芝地の中にあるあづま家で取り立ての林檎だの梨だの食べ

[illegible]ていた。[illegible]宮澤さん[illegible]肝だの牛肉だの持つて來てゐた。牛肉は皆から貰つても、たばかりの野菜とごつた煮にした。眞つ青な枝豆が出る。お見れはなし生活でだつたので、宮澤さんも私も溜まらなくなつてペッペッと唾を吐いた。酒も持つて來たが、ふたりとも下戸だつた。

遊び疲れ、牛肉と酢で肥滿した腹を抱えて山を下りかけた頃には、日はとつぷりと暮れて、林檎園の頭上には淡い弦月が懸つてゐた。彼方の山の村落には燈火が點々として輝き、其處から横笛の音が手に取るやうに聞える。黑い風が颯々として耳元で鳴る。犬の聲、蟲の合唱、谷川の響。

六時頃町へ戻つた。私は善行寺の仁王門の前で宮澤さん達と別れて、籠に入れた林檎と山で取つた秋草の束とを貰つて宿へ歸つた。

其の晩矢ケ崎氏が遊びに來てくれた。二人で話しをしてゐる處へ、宮澤先生が、雲坪の日記を持參してやつて來られた。私達は其の日記を順々に繰り乍ら讀んで、そして面白がつて笑つた。

私は獨りになつて床へ這入つてから、其の日記を拾ひ讀みにした。然し、其の憐れな生活の有樣を最早笑ふことはできなかつた。私の眼には泪が滲んでゐた。

四

四日の朝に氏は少し快しいが。[illegible]日に[illegible]戸隠へ登る積りだ。[illegible]。午前十時頃、草鞋ばきで宿を出發した。通り道で宮澤氏へ立寄り、昨夜拜借した雲坪の日記をお返しゝた。善光寺の裏手の[illegible]の前を通り抜けると間も無く山道へ掛るのだつた。其處から上を七曲りと云つて戸隠道での難所だと聞いてゐた。坂の右手に赤松林が連なり、左は溪で、溪の彼方の山はもう既に美しく紅葉してゐる。坂は可成り急で、ゴツゴツした石が露出してゐる。荷を附けた馬に澤山行き逢ふ。

凡そ十五六丁も登つたかと思ふ頃、朝は晴れ渡つてゐた空が俄に曇つて、山風はます／＼劇しくなり、到頭雨が降り出して來た。いつそ茲から引つ返さうかとも思つたが、それも殘念で、道ばたの老松の根に腰掛けてとやかう思案にくれてゐると、幸ひ雨が止んだので又もや登り始めた。七曲りを登り越すと後は樂だつた。高い山の中腹を其の道が通つてゐて、下の方に村が見える。途中で又雨が降つたり止んだりしたが、今度は躊躇せずに進む。十一時過ぎに荒安といふ村へ着いた。大きな茅屋根の立派な茶店で小憩した。あたりの山々は紅で染められ

たやうに見える。「あの紅葉は何の木か」と茶店の主人に尋ねると「山漆だ」と答へた。其處を出て先へ進むに從つて眼界がひらけ、道はさう困難でない、大きな風呂敷の荷を負つた若い商人體の男と道伴れになつて行く、長野の者で、吳服類を持つて戶隱へ往來してゐるのだと云ふ。荒安から一里で仁王坂といふ險坂へ掛る。其の坂を登り盡すと、濶然として四圍がひらけて來る。其處はすでに飯綱原の入口であつた。原の端れに茶店が一軒ある。天氣が佳いと其處から富士山が見えるので富士見茶屋と云ふ。私は此處で辨當を開いた。道伴れの商人も寄つた。

飯綱原は、丘陵が起伏し、廣漠たる高原だ。山漆がてうど躑躅のやうに紅く燃え、邊り一面に秋草が咲き亂れてゐる。人にはも逢はず、其の光景は太古の趣きを留めてゐる。原の中頃近達すると遙か彼方に一の鳥居が見えて來る。何物も無い高原の眞ん中が一とすじに通つてゐて、其の盡くる處へ遙かに鳥居が浮き出したやうに現はれてゐる。神秘とも云ひやうはない。鳥居の下で憩んで居ると、女同士の二人がやつて來た。一人は七十位の老婆、いま一人は四十前の年頃、どちらも少しの荷を背に負ひ、甲斐絹の脚袢を附け、藁の草履をはいてゐる。一緒に行くと何彼と話し掛ける。此の二人は戶隱の神官達の內儀らしい、私に宿は何處にするかと尋ねるから、長野の宿屋から中社の神原といふ家を敎はつて來たと答へると、二人は顏を見合はせて妙な表情をして「神原さんでは喃う」と一人が云へば「左うだとも」と一人が答へる。神原家がどうしたかと訊いて見ると、其の家の主婦は久しく病氣で長野の病院に入院してゐたが、昨日病院で亡くなられました、それでまだ死骸も山へ運ばぬ始末、一體其の家は近年不幸續きで、七八人も亡くなられましたゞ、去年からでも三人續いて死にました、今度後へ殘つたのは子供ばかり、喃うおつかさ、神原さんの家は一體どうしたといふことだらう、おゝ恐い〳〵と問はず語りのやうに話すのである。さう聞いては私も神原へは行かれない、他は何といふ家がよからうかと尋ねると、宿は何軒でも御座りますと老婆は云ふ、若い方は、おつかさお前樣の家へ伴れて行つて泊めてお上げなさいと云ふ。お宅も宿をするのですか。はい致しますよ、わしらの家は中社の武井と申します。わしは年寄ゆへ今では橋はず、今度も長野で半月程遊んで、ゆうべは河合武雄といふ役者の芝居を見物したが、えらい面白いことで御座んしたっ それから今日は此のかみさまと御一緖に家へ歸る處で御座いますが、家は若い者が蹝りやつて見れますから安心で御座いますよ、お蕎麥がお好きなら名物の手打蕎麥も差し上げますと婆樣はなか〳〵よく話すのである。それでは大抵御厄介になりませ

[illegible]

たといふ[illegible]は[illegible]つたから。ここ[illegible]一[illegible]た心で

はゐへた[illegible]時代は中[illegible]を合して三十六の宿坊があつたが、維新の際佛法は廢毀され坊院が廢されたので、以後には其の跡を神官が繼承して依然として登山者を泊めてゐる。

大久保のくゞり水といふ茶店で休み、それから先は道作れが無くなる。途中で中社道と寶光社道とが分れる。私は左へ取つて寶光社へと急いだ。十二三丁で着いた。もはや黄昏間近だつた。阪の兩側に大きな茅葺屋根が並んでゐる、部落の後ろは一むら濃き杉木立の山である。山中雨氣を帶んで、暮色と共に雲烟が低迷してゐる。幽邃極りなく、眞に是れ塵表世界である。阪を登つて行くと正面が神社で高い石段が續いてゐる。其の下の處で遊んでゐる子供に向つて、山本といふ家はどれかと尋ねると、あれが山本だと云つて指差して教へて呉れた家は、往來から半丁餘り東へ入つた處にある一際眼に付く構へであつた。茅葺きの大屋根は見るからどつしりとして、外部は白壁塗り、邸中には赤松の老松がすく／＼と立ち、其の幹に絡んでゐる蔦は血よりも紅い。床しさとも物々しさとも喩へんやうはなく、古への長者の館といふは斯くもやあらんと思はれるばかりだ。石段を昇り、長屋門を這入れば、正面が苔むした檜皮葺き

[illegible]

一[illegible]なさい[illegible]と[illegible]は[illegible]た、[illegible]い、[illegible]

はなるに違ひなく、家の何處かに[illegible]の話し[illegible]てゐる。其のうちに私はふと[illegible]になつて、[illegible]なふことを止めてしまつた。私は何んだか怖くなつて來たのだ。今夜此家へ泊めて貰ふはいゝが、此の大きな家の奧座敷にでも寢かされたらどうしやうと考へた。其の重たい雨戸が堅く鎖されて、其の外には青い苔の庭が取り卷いてゐる。母屋からは遙かに遠い客殿みたいな方を眺め遣ると、もう一度訪なふて見る勇氣が失せてしまつた。私は盜人のやうに、人に見られぬうちにそつと此の家の門から拔け出してしまつた。

もう暗くなるに間は無かつた。早く宿をきめなければといふ不安があつた。私は初め戸隱へ登つたなら、成る可く古さうな家に泊り、深山幽邃の氣を味ひ度いと空想してゐたのだつたが、今の家に恐れをなし、今度は反對に成る可く陽氣らしい宿な家はないかしらと考へるやうになつて、阪の中途に佇んで邊りの家々を見廻したが、何れも山本と大同小異である。春から夏へかけては登山客で賑ふさうだが、秋の戸隱は實に物寂しいのである。そこで私はいつそ中社へ行かうと考へた。中社は宿

數も多いといふから適當の宿があるかも知れん。私は直ぐ樣石段を登り、神寂びた寶光社に參拜して、社殿の横から杉の森林の中の道を歩いて中社へと急いだ。途中から又雨が降り出した。十丁ばかりで中社に着いた。其處は往來の幅も廣く、平らで、家並みが繁く、名物土産物を賣る店なども見えた。さて何處へ宿を取らうかと考へた時私はふと今日道伴れになつた婆樣のことを思ひ出しそこを訪ねやうと思つて、武井といふ家を聞くと直ぐに分つた。が、行つて見ると、其の家は崩れた土塀を繞らし、門を這入ると壁の剝げた藏が建ち、玄關は眞黑く煤び、山寺のやうに淋しい家だつたので、一寸覗いたばかりで畏ぢ毛を慄つて止めてしまつた。雨は降るし暗くはなるし氣が氣でなかつた。あちこちを迷つた揚句、一番下の端れの宮澤といふ家の前迄行くと、そこばかりは割れ返るやうな騷がしさである。小學校の修學旅行の團體の宿泊所になつてゐるのだつた。

私がはいつて行つて泊めて貰ひ度いと云ふと、若い主人が出て、「此の通り上も下も子供で一杯ですが、騷々しいのを御辛抱なれば」と云ふ。騷々しいは此方の望む所、靜かなのは懲り懲りだからと、早速草鞋を脱ぐことにした。突き出した玄關の眞上に當る二階の六疊の室へ通された。が、階上階下に二百人ばかりの生徒がはいつて、男生は階下で角力を取り、女生は階上でお手玉をやるもあれば、輪になつて「チヨンキナチヨンキナ、チヨン〳〵キナ〳〵、チヨンが茶の葉デチヨチヨンガヨイ」といふ遊戲をやる。蜂の巢をつゝいたやうで、耳を聾せんばかりだ。

若い主人が六枚屛風を立てゝくれたから見ると、之は如何に雲坪である。瑞岩の款で山水の疎畫乍ら、之れは一面の染班でおまけに拳骨大の穴が二つ三つ明いてゐる。物解りのよさゝうな其の主人を捉へて「私は此の雲坪といふ人の事を調べに來た者だ」と話すと、

「雲坪先生は私の家にも居たさうです、階下の唐紙には先生の畫がありますから明朝お目に掛けませう。それから寶光社の山本は私の家内の實家ですから、明日もう一度お訪ねなら手紙を書いて置きませう」と主人は云つた。

宜しく頼み、風呂に入つて、戻つて來ると膳が出た。女中が蕎麥を持つて來た。それは直徑一尺四五寸の圓形の笊の上に手打蕎麥の玉が九ツ載つてゐた。つゆは土瓶で持つて來る。大根おろしの藥味。膳の上は、茶碗蒸し、きうりもみ、向付皿は莢豆、乾し鰕、蛤蜊のつくだ煮。蕎麥には一種格別の風味があつた。

八時頃床に入る。戶外は雨の音が劇しい。

五

五日町七時が[illegible]寺は並んで、一[illegible]に流れてゐる[illegible]の下駄を借りて中社に詣でる、石[illegible]く、[illegible]段に[illegible]ふる、[illegible]山の木立が紅葉して美しい。拍手をうつて拜み、次ぎに有名な狂齋の龍の天井を觀、神符を十枚ばかりうけて戻る。名物を賣る店で繪葉書や戸隱案内といふ小冊子を求めて宿へ歸つて見ると案内記に紅葉狩傳記が載つてゐた。それに依ると、鬼女紅葉は奥州會津に生れ幼名を呉羽と云つた。呉羽は成長するに從ひ天性の利發と玉の如き美貌を以て世上萬人の噂に上つたが、十六才の時近村の豪家の息子に見染められ、縁談首尾よく調つて息子の許へ輿入れした。が、呉羽は間も無く其の生活に厭氣が差し、草深い片田舎で一生を終るよりは都へ上つて一花咲かせんものと考へ、或夜夫の側を脱け出して來て、双親を唆のかし親子三人京都を差して逐電した。取り殘された呉羽の夫は氣も狂亂になり遂に狂ひ死にをしてしまつた。都へ出た呉羽親子は四條邊りで髮道具を商つてさゝやかに暮してゐた。がやがて呉羽の美貌は三位經基卿の御眼に留り召し出されて公の側女となつた。然るに呉羽の增慢心は性來の惡性を發して、經基卿の正妻を亡き者にし己れ獨り寵を恣にせんと企んだが、此の事露顯したゝめ、親子共々信濃國戸隱山へ山流しにされた。時は天曆十年、呉羽は廿歳だつた。呉羽はその後紅葉と名を變へ、戸隱山中で[illegible]の岩屋を住家と定め、[illegible]は手下共に向つて[illegible]をさせたり、[illegible]生血を吸つたりした。戸隱山の[illegible]に[illegible]ことを[illegible]に達し、冷泉天皇深く宸襟を惱ませられ、是ぞ戸隱山の鬼女退治すべき旨勅命あり、公卿一同評議の上平維茂を信濃守に任じ賊徒退治に向はしめることになつた。維茂是れを武門の譽れとなし、二百五十の强兵を率ゐて信濃國に向ひ、戸隱山に攻め登つて惡戰苦鬪の末遂に賊徒を退治した。首魁紅葉は三十三歳を一期として維茂の太刀先に命を終つたといふのである。

又、昨日私が道連れになつて來た老婆の家武井家は、行勝院と云ひ、承元元年親鸞上人が百日間錫を留め玉ひし所で、自作の木造を始め御眞筆三方正面阿彌陀如來六字の名號あかさの杖等其の他數種の遺物が今も尙傳はつてゐるといふ事が、同じ冊子に載つてゐた。

朝の膳は生玉子一つ、味噌汁少々、豆腐つゆ、鹽蚫、別に今日の辨當握り飯に澤庵の漬物を竹の皮に包んで貰ふ。宿料二圓辨當代十二錢。身支度を調へたあとで、階下の雲坪の唐紙を見せて貰ふ。本間の唐紙八枚、片面は悉く蘭を描き、片面には全部竹を描いてある。頗る美事な物だ。然し心の無い道者達が其の上に手拭を掛けたり合羽を掛けたりするとかで、多くは穢[illegible]

が出來、綺麗なのは三四枚ほか無い。

「かうして置くのは勿體ない物ですね」と私が云ふと、學校でも出たらしい若い主人は

「以前はよく剝がして賣れと云つて來た人もありましたが、剝がせば代りを張らなければならず、結局同じ事ですから賣りませんでした」と云つてゐた。

宿で呉れた新らしい草鞋を履いて、近道を敎はつて寶光社へ下つた。山本家の主人に會つて雲坪の事を尋ね度いと思つたのだが、朝から他行したとのことで不在なので本意なく其處を出た。寶光社を外れて原へ出て昨日來た道を戻つた。高原の秋は今朝は殊に美しかつた。丈の高い月見草が露に濡れて見渡す限り咲き亂れてゐた。すゝきの穗が亂れ、名も知らぬ花が一めんに咲いてゐる。山漆が一際紅い。四方の谷々からは霧が白く立ち昇つてゐる。私は夢心地で歩いた。

餘程行つた時分に、何だか昨日と道が異ふやうな氣持がし始めた。それでも構はず進むと一つの村落へ出た。道端の家で草鞋を作つてゐる爺さんに道を尋ねると、此處は上野といふ村で是れは本道ではないが、然し此の道を眞つ直ぐに行けば長野へ出られると爺さんは深切に敎へてくれた。今朝の案内記で見ると、上野といふ村は、維茂將軍の臣河原太郎定國の子孫が開いた村だ。村を外れると道が二つに分れてゐる。眞つ直ぐに行く方が確かだらうとは思ふが、其の確かも實は餘程不安なので、私はいつそ横道へ這入つて本道へ出やうと考へた。其の道は直きに細くなつて林の中へ這入つた。行け共〳〵本道に出逢はない。すると林の中の道で、三十五六位の女が手に鎌を持つて立つてゐて、側には十ばかりの女の子が遊んでゐる。栗でも取るものと見えて籠が置いてある。

「大久保の方へ出るには、此の道を行けばいゝんですか」と尋ねると女は手拭に一寸手を掛けて莞爾り笑つた。

「はい、是れを登つて行けば出られますよ」

「まだどれ位ありますか」

「もう僅かですに、二三丁位のものですよ」

「どうも有難う」

私は少し行つて振り返つて見たが、其の時はもう母子の姿は見えなかつた。林の中の細徑は縱横に分れた。私は盲滅法に進んだが、何處まで行つても本道へは出なかつた。其の時私はふと今の母子は狐が化けたのではなかつたかしらと考へた。けれども狐でも鬼女でも怖いことはないやうな氣持がした。それは何んたる美しい林であらう。木々の葉は黄に紅に五色に染めなされて、其の中を通る私の顏までが紅く染まつてゐるだらうと

思になつた。こんな美しい林の中でさ迷ふなら、幾日さ迷つても悔はないやうな氣になつた。さうして、道に迷へる私の前へ妖艶花の如き美女が忽然として現はれて呉れるならば、縦令地獄の鬼女であらうと何んであらうと有難いのだがと考へた。

二時間ばかり林の中をさ迷つた揚句に、私は不意に眼を遮る物もない廣々した原へ出た。それはどうやら飯綱原の一角であるらしく思はれた。小高い丘の上から絨毯を敷いたやうな原を見渡した光景はえも云はれなかつた。原は只一面に紅葉して人影とては見られなかつた。遙か彼方の山の根を霧が流れてゐたが、やがて其の霧の中から忽然として鳥居が半分ばかり現出した。それは一ノ鳥居に相違無かつた。私は勇氣百倍して歩いた。

原を通り抜け、坂道を下り、どん〳〵下つて行くと、十二時半頃漸く人家二三軒ある處へ出た。古い農家の庭では年寄だの女だの子供だのが何か仕事をしてゐた。一人の若者は門先の小便溜めへ向つて小便をしてゐた。が、私が其處で立留つて「此處は何といふ處ですか」と尋ねると、若者は不意を喰らつて驚いたやうに、反り身になつて後ろを向き乍ら

「はア、此處でやすかへ、此處は何々郡芋井村軍足でやすに―」と、丁寧に郡名まで呼はつて教へて呉れる。挨拶極りなく、まことに山家の風情である。

下り坂を三里ばかり歩いた。ところどころに一人二人の通行人はあつたが、宿屋といふものには一軒も遇はない。今日中に何處か宿のある處へ出やうと道に迷つたお陰で小用をせずにおき續けたが、時計を見れば最早一時である。路傍の石に腰打ち掛け辨當の握り飯を頬張つて一休みした。坂の上より十二三才と見える童子が手に何やらを持つて下りて來る。此の山中で魚が捕れるのかと不思議に思つて呼び留めて問けば意外にも「鯉を捕るのだ」と云ふ。「何處で捕るのだ」と更に私が尋ねると、童子は得意さうに「大蛇ヶ池で捕るのだ」と答へてサッサと下りて行く。恐ろしい事を云ふ小僧ではある。

更に一里ばかり行くと、道は廣くなり、山の中腹を廻つて、遙か下を川が流れてゐる。川の彼方にも廣い道が見える。風景頗る佳いので足の疲れも忘れてしまふ。此處の景色は箱根邊りに似てゐる。途中で花嫁に行き合つた。羽織袴で古風な山高帽子を冠つた仲人と見える男が一名附き添つてゐる。

谷の底に人家の密集した部落が見えて來た。四面の山は屏風を立てたやうに高く險しい。道がつゞらに曲つて、頭上から部落をさして降つてゐる。此處は茂菅といふ處で、鑛泉旅館の看板などが出てゐた。長野はもう間近であつた。

十一月の初め帝國劇場の震災後の初興行を看に行つた。梅蘭芳が人氣を呼んでゐた。其の時廊下で彫刻家堀進二氏に逢つた。すると堀氏は私の書いた北齋傳を讀んだと云つて、信州の小布施の話をした。四五年前堀氏は長野に遊んだ時態々小布施へ行つて、北齋や高井鴻山の事を調べたことがあつたと云つて、其の土地の話をした。その後で私も最近或畫人のことを調べる爲めに長野へ行つて來ましたと云ふと

「誰の事を調べに行かれたのです」と堀氏は尋ねられる。

「餘り知らない人ですが、長井雲坪といふ南畫家があつて」と私が云ひ掛けると、堀氏は意外だといふ顏をして

「雲坪ですか、雲坪の事は私も少しは聞いてゐました、そしてあの人の畫が私は好きでして、二三幅は持つて居ります」と云ふ。

私は一層意外だつたが、自分が傳記を書かうと思つてゐる人の知己が此處にも一人あつたのかと思ふと嬉しかつた。それから長野行の模樣をざつと話した處が、堀氏が

「私の知人にも雲坪の事をよく知つてゐる人があります。其の人は現在東京に出てゐますが、元來長野の人で、子供の時分よく雲坪の家に遊びに行つたりしたんださうですから、可成り詳しく知つてるやうです。若しあなたが其の人に逢つて見る積りなら、私が紹介してもよし、御同道して上げてもいゝ」

と云はれるのだつた。私は大いに感謝して

「是非紹介して下さい」と云つて頼んだ。

「それでは先方へ一應書面で通じて都合の宜い時を聞いた上で私が御案内することにしませう」と堀氏は云はれた。

それから四日ばかり經つと堀氏から日取りの通知があつたので、其の日は私は谷中の堀氏のお宅を訪ね、同道を願ふことにして先方へ出掛けた。それは府下下尾久町の小瀧平治氏と云はれる方だつた。小瀧氏は私達を待つて居られて、二階の一室で同氏が秘藏の幅物など十數點出して見せた上、雲坪の事を、こまごまと話された。雲坪の息子と小瀧氏は幼な友達であつふ。子供が「叔父さん繪を教へて下さい」と云ふと「いけないいけない、繪なんぞ習ふものではない」と雲坪が叱つたといふ其の子供は即ち小瀧氏だつたのである。

「手細工なども上手な人でした、紙屑籠へ紙を貼つて鐘を拵へたのなぞを見ましたつけ、鐘の銘は忘れましたが、何でも其の一句が「元是祇園精舍聲」といふだけおぼへてゐます」

そんな話もされた。

夕景、堀氏と私は小瀧氏の許を辭して田端の方へ歩いて歸つた。

小瀧氏を訪問する二三日前のこと、未知の人、埼玉縣川越市

つ[illegible]氏から[illegible]けいた。同氏は[illegible]十一日[illegible][illegible]傳を讀んで、[illegible]の傳を書かんとして居ることを知つて、[illegible]並びに嵩古香の事を知らせて下すつたのだつた。嵩古香の事は特に私の知らんと欲するところだつたゆへ、同氏へ宛てゝ古香の事を更に詳細に示教に預り度いと云つてやると、殆んど折り返しに返事が來て、註文通り詳しく知らせて下すつた。本傳中に、嵩古香の傳をさし加へることが出來たのは偏へに岸氏の賜物である。

私は、以上の資料を取り纏めて長井雲坪傳を草したのだつた。顧みれば、私一個人の仕事の爲めに隨分多くの人々を煩はせたものである。片々たる一個の傳說を編むだけの仕事の蔭にも、[illegible]これらの人々の[illegible]言つて置くことは、本傳中に[illegible]お用ゐてある。それに人た[illegible]人物の場合である。著者の雲人傳は、正確なる傳記であると同時に常に一篇の小說たらんことを期して筆を執るのであるから、文飾上さうした手段も免がれ得ない場合のあることを承知して貰ひ度いのである。

猶、本傳の長篇なるに加へて、更に山鳥の尾のながながしき追記にて、讀者もさだめて退屈したまひつらん、著者も疲れたり、玆に筆をさし擱きて、大方と倶によき正月を迎へばやと思ふ。

千牛譜

鎮目桃泉

牛は馬と共に我國にては最も重要なる家畜の一つで、古く支那朝鮮から輸入されてより、その歷史の古い丈けに、傳說を生み迷信を捏ち上げ又樣々な俚諺や歌謠をも作らるゝに至つた、今丑年の首にその知れる一二三を掻き寄せて、強いて千牛の譜と題けた、

【牛の異名】 牛の異名も數多く

喚中、胖力、夜光、大武、玄獸、土畜、不佞、夜見、吉朝、龍頭、觳觫、一元大武、黃甘北生、桃林處士、桃林[illegible]

などがある。又古語には「ゐ」といひ、洒落て「黑牡丹」といひ又單に「牡丹」ともいはれる。

【牛の方言】うしといふ言葉が既に普遍的であるのに、方言は猶これを冒していろ〳〵なことをいふ

川鹿たじし（關東地方）、こら（關西地方）

べ　こ（東北地方）、うしんべい（甲斐）

だしごろ（隱　島）、べゞのこ（仔牛）（壹岐）

べ　べ（仔牛）（壹　岐）、べんご　　　（壹岐）

でんご（仔牛）（鳥　取）、こぼおし（仔坊牛か）（紀伊印南）

ほ　う　（佐渡の童語）、めようじ（牝　牛）（佐渡）

すつて（牡牛）、でてこ（牡牛）、ばつこ（牛）、ちんこ（仔牛）

べつこ（牡牛）、ほつこ（牛）、（以上金澤地方）、

べこつこ（仔牛）（弘前）、　べいこ（牛）（福島地方）

などで靑森邊神戶近傍等は牛の緣が深い丈けに變つた通り名もあるらしい。

【牛を牡丹といふ】馬を櫻といひ、鹿を紅葉といふ樣に牛を牡丹といつてる、これは異名の黑牡丹から出たもので又一に愚牡丹の名もある、鹽尻第十一卷に

『愚牡丹は唐末に劉訓といふ者有り其頃京師の人春遊に牡丹を見ると思ひて遊べり劉訓客を迎へて花を見ようとて水牛數百を前につなぎて劉訓が愚牡丹なりといひしより牛の異名とせりと事元類聚に有り』

と誌されてある、又牡丹といふ名はその斑紋がよく似たるより起つたものである

【牛の鳴聲】牛の鳴聲ばかりは方言に捉はれずに一樣にもうといふ言葉で表はされてゐる。

守武千句にも

ことのはをいひ逆ゆるは牛に似て、けふもとはれず心もう〳〵　とある。

【牛の始め】牛生成の始めは神代記に

『保食神の口より毛麁毛柔出』とあるが是は獸の始めであるといふ。又舊事記に

『保食神の目に馬牛化』とあつて牛の始めだといふので保食神とは五穀を司る神で豐受姬神のことである

【牛の渡來】牛は古く朝鮮より渡來したのが段々押弘まつたので支那の史家は日本に牛が無いといつた者もある。鹽尻第三十六卷に

『後漢書東夷列傳に我日本の事をいふとて牛馬なきよし記せり後の史家また是をいふ』とあるが眉唾ものである、

我國に歐洲牛の始めて輸入されたのは明治六年岩山某が米國

[illegible]

【牛と丑】[illegible]といふ字も[illegible]によると[illegible]ある
ことを示してある、又牛の字形については午の字の第四畫の中棒が上方に突き拔けて角をなせるものが牛の字を作つたといふ說があるが附會らしい。

丑は牛と同義で十二支の第二位に置かれ陰陽師は之を十干と組合して年に配し、木火土金水の五行と結合して日に割當て居る。又方位に應用し、時刻に結び付けて居る。即ち丑の方位は北と東の中間よりやゝ、北へ寄つた方をいひ、丑の時は午前二時から四時迄の二時間をいふので丑滿は丑の時の頂點午前三時に當るのである。

【牛の鼻木】馬は幸にして長面である爲めに手綱をつけるに都合がよいが牛はとりとめた所がないので生れると間もなく鼻孔の障壁に綱通しの孔を穿つて鼻木を貫くのである。古い俚言に『牛は願によつて鼻を貫し芥子は願から鼻を通す』といふことがある。もういゝ加減に進化して孔のある種族が出來そうなものだ。

【牛は鼻で聞く】牛には耳の孔が無くて鼻で聞くのだといふ珍說をなすものがある。鼻で聞くとは人間が名香の鑑別の時ばかりではないと見える。

[illegible]

[illegible]

【牛の玉】[illegible]
もない。言泉に『牛の腹中に生ずる石のごときもの、寺院にては之を牛黄と呼びて寶玉とす又白きものは偽りて白馬の玉といふ』とある。大寶令にも官牛の斃死した折に角と膽を取り牛黄ある時は別に之を進献せしむると定めてあつた位で餘程珍寶と見える。

和漢三才圖繪に牛の黄色なるものは小兒驚風癇の藥となりその腹中より出る牛黄は諸病を治すといふ。又酉陽雜俎に『牛黄在膽中、牛有黄者吐之』とあるが牛に生ずる膽石の如きものか。それ黄膽汁の爲めに黄色なのであらう。

【牛の血】隨尻第二卷に
『武后之時僧懷義命ジテ牛ヲ殺シテ血ヲ取リ大佛堂ヲ畫イテ天堂ニ置ク其首高サ二百丈』と記してあるが今は牛血をギウチ又はギウチユウと稱へて貧血病者が親しく屠牛場へ出かけて迸り出る流血を啜つて居る。

【傳說に見えた牛】牛に關する話も亦少なくなく、俗に緣があり[illegible]に立つ說話が多いやうだ。

(仔を助けた牛) 昔京の片田舍に一人の百姓があつて牛を飼つてゐたが、其牛が子を生んだので非常に喜んで畑へ出る時も仔牛を連れて行つた。或る夕暮方歸りを急ぐまゝに母仔の牛を畑に放したまゝで歸つてしまつた。とり殘された牛は月傾く夜半に一疋の飢えた狼に襲はれ仔牛に摑みかゝらうとした。母牛は驚いて狼を近寄らせてまいと防ぎ爭つたがその内に崖近く退路を失つた狼を怒れる双角で突き殺してしまつた。それでも尙安心せず突き貫いたまゝの姿勢で一夜を明かし、飼主が飛んで來た姿を見て始めてホツとした樣子で放したといふ（本朝語園）

(法師に生れた黑牛) 興福寺門跡一條院（貞觀の頃）の頃高野山に安勝といふ恐ろしく色の黑い一人の僧があつた、世を捨てた身ながら人にも疎まるゝ身を喞ちて大和國長谷寺に參籠してその宿世を尋ねた。

滿願の夜半に貴女の姿を現じ『お前は元大津の浦で飼主が山へ捨てた黑牛であつた。枯野をさまよつて死に瀕して居たのを近くの寺の僧が法華經を誦し聞かせて慰めたため、その功力で今人間界へ生を得たのである。尙信心怠らずば來世は必ず佛果を得るであらう』との垂示があつたので大いに喜び修業怠りなく安樂往生をしたといふ（三國傳記）

(牛瀬の由來) 和銅元年駿河國椎田池が晝夜鳴動して居たが五月滿月の夜に光眩ゆい、一顆の果物を負ふた黑牛が池の底から現はれたので、村の人々は此珍しい牛を御所に獻納しやうと大勢で守護して白須計といふ渡まで來ると照りつける暑さの爲めに池底から出た程の牛とて死んでしまつた。今も其處を牛瀨といはれる。（駿河風土記）

(助命の禮をした牛) 昔加州の八幡の市右衛門といふ男が其飼牛を知人に賣つたが、食用にすると聞いて可愛相に思ひ又買戻して愛撫した

然るに其夜のこと夢ともなく聲あつて市右衛門を呼びさまし『今日は危い命を貴所の御情で助かりました御恩は決して忘じませぬ』としみ〳〵と禮を述べたと思へば枕邊に其の牛が立つてゐた（因果物語）

(盜みが報ふて牛となる) 大和國添上郡の山里に有德があつた。或る罪消滅の爲めに僧を呼んで有難い經を上げて貰つた。僧は其夜掛けてくれた夜着の立派なのを見て明日御布施を手に入れたら此夜着も盜んで行かうと心中に企んだ。『こらその夜着を盜むことならぬ』と罵るに驚愕して見廻すと門前に牛が一疋居た。牛が僧に云ふやう『おれは當家

[illegible]
[illegible]た因果で牛になつた　[illegible]ない
申た』と戒められて恐入つたが、翌朝、家人に此話をしたので
で伜は情ない事に思ひ上座に藁を敷いて請じ入れ、あなた
の爲た事は御心配なさいますな皆御存し申します』といふ
と牛はホロ／＼と落涙して喜んだが其日の内に眠るやうに
死んで行つた（日本靈異記）

（佛が牛に現ず）　逢阪關寺の住僧が彌勒菩薩の像を安置する爲めに萬壽二年大堂造營の工を起した。

その時巨材をたゞ一疋の牛が易々と曳行くのを見て、その大力を他の雜用に振向けやうとしたが、その住僧の夢枕に現はれた牛は『我は迦葉佛で佛堂建立に助勢はするが雜役に使つてはならぬ』とあつたので大いに驚き里人ども此牛を禮拜しやうと集つた。其後牛が死にさうになつたのでこの靈牛を繪師を呼んで繪姿に寫しとらせたが、繪師が最後の仕上の點睛を終ると同時に往生してしまつた。

此靈牛は牛佛と稱へて諸人の崇崇を集めたといふ（榮花物語）

（死期を告げた牛）　昔京の瓦町に牛飼があつた、或夜の夢枕に『私は牛ですが實は日那寺の三代前の住職の偷盜戒を破

[illegible]
日の[illegible]』といふ[illegible]
其女房も同じ夢を見たといひ、[illegible]
も同じ知らせをうけたので[illegible]けに來たといふので、
牛飼も涙を流して厚く葬らつたといふ。（新著聞集）

（牛になつた僧忠勝）　延興寺の僧釋忠勝は湯を沸さうと薪をとり出したまゝで死んだ。其寺の一疋の牝牛は間もなく仔牛を生んだ。その仔牛は生長の後薪を積んだ車を曳いて寺に歸つて來たが、そこに見知らぬ僧が立て居て『忠勝はお經はよく讀めたが重い薪車は曳かれまい』といふと、仔牛は首を垂れ切りに涙を流して居たが、そのまゝ其所で死んでしまつた。

お上役人の命によつてその僧の繪像を畫いた畫師が役所に納めたその繪を繰りひろげてよく／＼見ると、紛ふ方なき觀音の御姿であつた。

その時から僧の姿は見えなくなつた。（日本靈異記）

（觀音が牛と現ず）　信濃國の片山里に心邪なる老婆があつた。或日布を晒して居ると一疋の牛が來て庭に布を二の角にかけて走り出した。老婆はこれをとり返さうと何處までも追ひかけていつか善行寺へ來て日が暮れてしまつたが、翌

來の光り眩ゆく淫文字も光を添へて
　牛とのみ思ひなわびそ菩提なる
　　道に入るべきおのが心を

と詠まれたので、一心發起して佛縁にすがつたといふ。

【隱語としての牛】手元にある隱語五百餘語のうち牛を扱つたもの僅かに拾語ある。

●うしの角文字　雅言化したる隱語で『い』の字のこと、其形が双角に似たるよりいへり。

●うしの舌　四人間に行はるゝものでこんにやくの義、その形態より出づ。

●うし　不逞漢同士の隱語でよく睨込むをいふ、睨牛の語より出でたのであらう。

●うし曳き　狐鼠々々の小賊を目的の所に手引することで、惡徒間の隱語。

●うしの斛　野呂間を導くの意か。

●う　し　物知りの義、言泉に『小供の語に牛をもうといふよりもうの尻をつづめて物知の意に通はせていふ隱語』とある。

●う　し　錢勘定の時の百文の義で、揚弓又は大弓等にて賭錢する時の隱語で語源は判らない。

●水　牛　昔の淫具の隱語、牛角に作りしよりいひ、又罪に。

●う　し　ともいふ。昔より川柳子の好材となり類句百に餘る。

●う　し　伊豆下田に於ける私娼の名で方言化せる隱語、よく睨視するよりいふ。

●うしんべい　上野前橋に於ける私娼の名で、語源は前項下田のものと同意である。

【俚言と諺に見えた牛】成句となつた俚言又は普通的な諺は可成澤山ある、その大部を略説する。

(牛ツ根性) 無口で根氣強き性質をいふ。牛に比べた言葉で、民間修養法としての淘官術の教訓にも『丑年は辛抱強く根氣強く言葉少なく信用もあり』又『丑年は好き嫌ひあり押強く腹立つ時はとめ樣もなし』とある。

(牛驚くばかり) 物の黒きことをいふ古諺で、牛は黒いものとしてあつた。

(牛の歩み) 歩行の遲き又は物事の捗らぬにいふ。

(牛の小便) 長きに過ぐるものゝ意にいふ。又

(牛の長小便) ともいひ(牛の小便十八町)ともいふ。

《牛に[illegible]》 [illegible]

《牛に喰らはる》 一杯喰はされたとの意、牛には[illegible]つくものではない故。

《牛に經文》《牛に[illegible]》《牛に對して琴を彈く》は共に馬の耳に念佛と同義である。

《牛に引かれて善光寺》 自分の欲せざる所に伴ひ行かるゝを布引牛の傳說に擬へていふ諺。

《牛の一散走り》 物事に遲延せず時に妄動するをいふ。鷹筑波集に『夜よなかたが乘る牛の一散ぞ寅より先に駈出しにけり』

《牛車を曳出すやう》 いびきの大きなのを擬へていふ俚言。

《牛を馬に乘りかへる》 今の惡しきを捨て善事に就くをいふ。鷹筑波集に『武家に似て知行給はるお百姓牛を馬にぞ乘り替へにけり』

《牛の仔に味噌》 物を賄はるをいふ。牛は鹽を好む。仔牛に味噌を與へるといふ諺。

《牛の鞦はづれなし》 失敗することの無いとの義。

《牛の角を蜂がさす》 作頑くして虞辨し難きをいふ諺。本朝俚諺に『蚊子上二鐵牛一汝下レ嘴無レ處』とあるのと同義である。

《[illegible]して牛[illegible]》 [illegible]ある。

《牛は牛づれ》 氣の合つたもの同士といふ義。牛と馬とを合せたら大變が出來やう。

《牛を曳く》 怠け怠るを嘲る時で、たとへば遲い牛を曳くには閑がかゝる。奴俳諧に『ぶらぶらと市のかりやにのめり出でやら見たくたし牛を曳くなり』とある。

《廿坊主に牛の睾丸》 若年の僧は墮落しさうに見えて眼間なる牛の睾丸に擬へていふ諺。

《牛の喉から引出したやう》 衣服などの黑く汚れたるを云ふていふ諺。

《闇黑から牛を引き出したやう》 居措動作のぐずぐずしたる人を嘲りて云ふ諺。

【繪馬に見えた牛】 繪馬とは神社佛閣に納められる、繪額で、その起原も中々古く初めは神前に生きたる馬を獻じた[illegible]であつて、額繪馬と小繪馬との二つに分けることが出來る。額繪

馬は奉懸するもの丶獨創的製作にかゝるもので圖柄に指定されて居るものもある。小繪馬は民間俗信の爲めの多産的賣品で、漸く方八寸位書きなぐりの筆致却つて雄勁で素朴なる鄙びた氣分に言はれぬうま味がある。新しい人々は之を民衆藝術と稱へて蒐集するものが多く、自分も參百五十種を集めた。牛に關する繪馬は全國に普ねく、その大部分は信心者自身の干支を表はしたもので、即ち身代りとして納める。又天滿宮へは菅公の愛撫された故を以て納められるが、伊豆大島の如き畜牛の盛んなる所では牛自身の代參として飼主によつて奉納せらるゝものもある。其數枚を列記して見やう。

東京府下千住附近　牛繪馬の內最も奇警な圖柄。
羽後國秋田及附近　寢牛の圖。
岩代國福島市及飯坂町附近　立牛及寢牛の圖。
安房國丸村石堂寺　立牛の圖。
東京府下豐多摩郡天滿宮小祠、
同　同　中野町天滿宮
靜岡市及近在　立牛の圖、枠なし五角形のヘギ繪馬。
上總國東金町天王社　立牛の圖。
名古屋市大光院及近在　立牛、枠付假形。
同　七ツ寺　立牛の圖。
同　菅原町櫻天神　寢牛の圖、梅鉢の紋及さくら天神の烙印あり。
大阪北區天滿天神のお牛様。
同　天王寺不動堂
同　同　牛神堂
伊豆國大島本村附近　立牛の圖、背白盡にて圖柄が色々ある。
大和國奈良附近　枠なし方形小形のもの
同　奈良南圓堂一言觀音。
同　郡山町辻地藏堂。
信濃國上田附近　立牛の圖。
東京府下板橋街道踏所　立牛の圖、枠付假形。
播磨國姫路市伊和明神　立牛の圖。
德島市附近の天神祠

此外淡路國福良町、土佐國高知市、阿波國池田村、攝津國西ノ宮町、同池田町、常陸國水戸市等にもあるが見聞が狹いのでこれ丈しか判つて居らぬ。

【牛の玩具】　牛は動作が不活潑なので自然に小供と馴染が薄く、馬や猿のやうに喜ばれない。從つて玩具に作らるゝことが少ないのである。大人から見ても亦鄉土味のある面白いもの

ない、

●[illegible]牛　[illegible]のもの、俵を二俵背負つた上に宝の[illegible]のあるものである。

●三春牛　岩代國三春で作らるゝ張子製のもので、俵二つを振分に背負つて居る形で薄い杉の紙敷の上に膠付してある。

●東寺の牛車　京都東寺近く賣るもの、二つ車の素朴なものである。

●木牛　東京府下八丈島に木製のものがある。多く手製である。

●土の牛　京都伏見人形の内に土牛があつて、大小形態様々ある。

●厩除牛　大阪天滿天神で毎年一月初天神の日境内で賣つて居る伏見燒の一寸五分ばかりの臥牛で厩除になるとて必ず買つて歸る。背部には梅鉢の紋がある。

●金澤牛　加賀國金澤附近のもので同市特有の技物（[illegible]と土で型拔にしたもの）で作られた立牛である。

●會津牛　會津牛とはその通名ではない。岩代國會津に技

●[illegible]車　[illegible]たもので、[illegible]いて居る。[illegible]になつて居る。古い頃は車に[illegible]つたといふ。

●伏見の一文牛　京都伏見燒の中に一寸位の立牛がある。古い頃に三騎を一冊盆りにして賣つたこともあつたといふ。價が安いので一文人形といつた。江戸の一文人形と同樣であらう。背中に㊐の印あるものがある。

●伏見の俵牛と斑牛　伏見燒が多い。俵三つを振分に背負つたものがある。俵のない斑牛もある。

●大黒牛　京都松ヶ崎大黒天で施與するものに土燒の臥牛があつて、黑く塗つた額には金色の大黒天が附いて居る。

●祭牛　伏見製、額に大黒天のあるもの。

●臥牛　仙臺在堤村製、堤人形のうちにある。長さ二寸ばかりの[illegible]もない臥牛である。

●麥桿牛　東京府下大森村川崎大師門前にて賣るもので紫色の麥桿細工である。

●布引牛　信濃國長野善光寺門前にて賣る拔物の立牛で花形車が四つ附いて居る。傳說の「牛に引かれて善光寺詣り」を題材としたもので、左の角から背にかけて白布を懸け、花鞍には善光寺と誌し牡丹花で飾つてある。

●首ふり牛　東京淺草仲見世にて見るもので、張子製首振牛で四つ車が附いて居る。古くはどこの玩具屋にもあつたものである。

【神名にある牛】　上は官幣大社から下は村々の鄉社まで我國には四千餘社の神社があるが、其内神名に牛あるものは僅かに次の四社しかない。

《牛島神社》　東京府の鄉社で本所區向島にある。牛の御前ともいふ。祭神は須佐之男命、四品眞辰親王、天善日命の四柱である。

《牛尾神社》　新潟縣の鄉社で佐渡郡新穗村にある。祭神は大巳貴命、素戔嗚命の二神で外に四柱を配祀して在る。

《牛鼻神社》　三重縣の鄉社で南牟婁郡御船村にある。祭神は高倉下命、國靈日女神、大屋島子命、外に相殿三社。

《牛窓神社》　岡山縣の鄉社で邑久郡牛窓町にあ神は神功皇后、應神天皇、武内宿禰の三柱を祀る、

【牛に因める神事と行事】

《太秦（うづまさ）の牛祭》　山城國太秦村の廣隆寺では每年十月十二日に牛祭を行ふ。當夜五大尊に象り厚紙で作つた方尺餘の大假面を被り、牛に跨り、太刀を帶し、御幣を持ち、他の鬼面四人は槍を持つて警固し、從者は松明を振つて之に從ひ、本堂の傍から西門に出で、正門から本堂に入り、祖師堂に立つて祭文を讀んで式終る。

《宇和島の牛鬼》　伊豫國宇和島の三島神社の神事で一名牛鬼祭ともいひ、此祭に出る牛鬼といふのは數間もある隋圓形の竹籠を作りこれに馬毛、色紙、彩色を以て鬼形を作り力强い靑年が此中に入つて荷ひ上げ鬼形の首を上下させながら氏子の門前を縱横無盡に荒れ狂ひつゝ訪れてお賽錢を集めて步くのである。

《紀州の牛換》　紀州附近では舊正月から三月迄の間に賣牛の仔牛と自分の飼牛と交換する行事がある。相談が決すると恰も人間を片付るやうに仔牛の主は媒代と

[illegible]
[illegible]つ引網のあつた時には[illegible]
特別の油[illegible]をかけて置り、一帯に[illegible]し[illegible]す
のである。

《隠岐の闘牛》　闘牛はうしかけといひ牛の突合などゝいつて古い風習で隠岐と伊豫とにある。

闘牛は三歳から八歳のもので八尋位の取綱をつけて二尺位の處を右手に緊かり握りその綱取人によつて呼吸を見合せて角闘を始めるので牛本來の性質として角折れ皮破れても角ひをやめず、綱取は絶へず綱を締め弛めしつゝかけ聲をして激勵する。かくして勝敗の決するまで引放すことなく、勝牛は多人數味方の人々三四十人に擁せられつゝ囃し喚きつゝ歡聲を擧げて場内を一周するので壯烈なる觀物である。

《宇和島の闘牛》　伊豫國宇和郡一圓に行はるもので、凹地を利用して方五間から十間位の處を二間斗り掘り下げ棚を設け土堤を築きそこで見物する。闘士となる牛は前々より玉子や米麥で愛撫され當日は數十金を費した帶を脊より垂らして引き出される。角は特徴ある直立形で前々より尖端を鎗の様に鋭く磨き立てゝ

[illegible]
毛を[illegible]てしまふ[illegible]
る。此時に[illegible]用することが大部分に[illegible]つては[illegible]
始めて角を攻める[illegible]りもなくなつたものに[illegible]
たのである。

《牛乗根兵衛》　明石町の東鄰きの大藏谷の稲爪神社の神事には十月八九日に行はれ當番の若者宿より牛乗根兵衛といふ催し物をする。

牛乗を爲す者は白粉を塗りて前額に大の字を墨書し袴をつけ五色紙で貼つた笠を頂き笠の周圍には色紙のバレンを下げ頂上に三尺餘りの細割竹を挿み、手に竹の弓と鏑矢を持つて牛に乗りて社前に詣で

東西々々大藏谷の濱におきまして、大同小鯛千も
二千も曳きくさつて候

と高らかにいふと見物一同ドツト鬨の聲をあげる。かくして來年の大漁を祈願するのである。

【神様と牛】　神社より施與する牛、奉納する牛、又は祈願をかける石牛など二三ある。

《石神堂の土牛》　大阪四天王寺境内に石神堂といふのがある。又牛の宮ともいひ、同寺建立の時勞役に服した牛を[illegible]

つたもので足の病を祈り小供の疳を願掛して御禮に土燒の牛を納めるので無數の土牛で山をなして居る。

(岩津天神の牛) 三河岡崎在の岩津天神では土牛の守を施與する。

(秋月の瓦牛) 紀伊海草郡宮前村秋月の日の前宮から瓦燒の牛を頒布する。小兒疳毒の願掛で有名である。本體はその末社で御禮の土牛が納められてある。

(石　牛) 東京向島牛島神社々殿の左側木柵内に八尺許の臥牛がある。小供の延綠りを願掛する爲めに小供の用ゐた涎かけを石牛の頸に結びつけるので、袋のやうになつて居る。

(天神の石牛) 東京麹町平川天神の社前に丈餘の石の臥牛がある。足の病の願掛をしてその患部に相當する處を撫でゝ來るのである。

(龜戸の石牛) 東京本所龜戸天神社の右側に柵を高く廻らした内に石牛がある。牛の額頂が方二寸ばかり平であるが參詣者は柵の外より錢貨を投げて其狹い額にうまく載せようと腐心する。一錢又二錢五錢……十錢と銅錢は額の上に落ちても反撥されて中々うまく載らぬ。載せ得たものは頭痛を病まぬと信ぜられて居る。柵の内側には金網を張り地上は、三和土にしてあつて宛然の賽錢箱である。

【牛に關する俗信】 牛に關する俗信は馬のそれよりは少ない。

●牛の角を赤く塗るか又は赤い布で捲いて置くと、その牛が病氣にかゝらぬ(朝鮮)

●牛を繋いだ綱をまたぐと商人は損をする(朝鮮)

●牛に逢つた夢を見たのは先祖に逢つたのである(朝鮮)

●土用の丑の日に紫陽花を切つて軒に吊すと下の病にかゝらぬ(東京)

●土用の丑の日に紫陽花を切つて軒にかけると蟲がつかぬ(岡崎)

●女が途中で赤牛に出逢ふたら袂を隱さぬと嫁入の時に口紅が附かない(岡崎)

●娘が赤牛に出逢つたら口を隱さぬと嫁入の時口紅が剝げる。(京都)

●和漢三才圖繪に

牛涎ハ反胃嘔吐ヲ治シ、水ニテ二匙ヲ服スレバ身ヲ終ルマデ噎バズ　とある又

糯米ノ末ヲ用ヒ牛涎ヲ以テ拌ゼ小丸ト作シ煮熟シテ食ス　とある

●同書に

[illegible]

取[illegible]

とある。とても富にはならぬ。

●うし浴　阿波の風習に土用の丑の日に海水に浴すると病にかゝらぬとて皆湖水を浴びる。之を牛浴といふ。遠江にも此俗がある。

●丑紅　又は土用の丑の日冬は寒の丑の日に買つた紅を用ゐると口中のあれを防ぎ小供の疱瘡と便秘に奇効ありと信ぜられ、東京年中行事の一つとなり、買ふ者には土製の牛を添へる。牛は金牛と黒牛とあつたが今は黒牛さへ出さぬ小間物屋がある。

●丑の日の鰻　東京の俗に土用の丑の日に鰻を食ふと病疫を拂ふと信じてゐる。色々な說があるが、平賀源内が窮乏せる鰻屋を救ふ爲めに考へた奇智に始るともいひ、丑は虛宿觜宿曜で丑の日に鰻を食はぬので從つて廉いので貧人も口に上り得るので『今日うしの日』と貼札をしたに始るともいふ。

●牛が吼ると空が曇つて風になる。

●丑の日に灰を取ると火に祟る。

●巳寅丑には爪を摘らぬ。

●[illegible]

を小さき[illegible]

[illegible]

布團一枚を持して行くつて七八枚の上に[illegible]も珍らしくない。

【牛追ひ言葉】　牛を使役する者を牛飼といひうしつかい。又はうしつきともいひ昔殿上には牛飼の舍人が居つた。牛を使ふにも馬を追ふ樣に號令的の牛追言葉がある。

○播磨國印南では牛を左へ廻すには『アイシ〳〵』と云ひ右へ廻すには『シカイ〳〵』といひ又『リア〳〵』といふ。又歩みを止めるには『シイ〳〵』といふ。馬とは反對である。又

○兵庫邊では左へ廻すには『チョウノ〳〵』といひ右へ廻すには『ホウセ〳〵』とかけ聲する。

○伊豫の大洲では左へ廻すには『ハセョ〳〵』といひ右の時は『ヒョセ〳〵』といふ。又

○伊豫の松山では左の時は『トゥセ〳〵』といひ右の時は『オルケ〳〵』といふ。

【童謠に見えた牛】　今手元に資料のある歌謠一萬七千餘首の內牛を取り扱つたものは僅かに三つしかないやうた。

○かあじや（火事は）何所だ丸山だ牛の金玉まるやけだ（東京）

○べーこ〱かなべーこ、ぬしやかか（主の嬶）死んだワ、めめーとなきやれ（會津若松）（べーこは牛の方言）

○ちご（思ふ男）の門に立つたればばびう（牛の仔）の樣な角蟲（蜂）がどたま（頭）のぢよけん（まげ）をちよいとけぬホンダエ〱（琉球蛇皮線の歌）

【器財の名としての牛】

（うしばり）　建築の用語で重量の主要部を負ふ梁をいひ又（うしびき）　牛曳ともいふ。

（うしたけたば）　矢彈を防ぐに用ゆる竹を束ねたる武具

（うしばこ）　牛の飼料をいれる桶。

（うしかひぶえ）　牧場にて牛を追ふ爲めにふく笛。

（うしぐわ）　からすきのこと、文字の上にも牛の字がある。即犂とかく。

（うしごろも）　うしに着せる上覆。

（牛追日記）　玩具十六むさしのことで、三角形の劃線の中を牛部屋といふ。

（うし丸太）　芝居道具の一つ、太き竹に細き孔をあけ並べたる、本雨を降らせる道具

（うし車）　牛に曳かせる荷車及乘物で上天皇より下大臣迄で位階に應じて制式があり十三種に分れて居る。上より唐庇、雨眉、檳榔庇、檳榔毛、青糸毛、紫糸毛、赤糸毛、半部、網代庇、八葉車、金作車、飾車、黑簾車等である。

（うしわく）　竹束にて枠形にしたる武具。

【牛を冠する動植物】

うしの角貝　　うしの爪貝
うし海老　　うし蛇
うしこ蟲　　うし虱
うしふいばら（ひしがね）　　うしぶい〱（ひしがね）

草木では

うしもめや　　うしのけ草
うしの舌草　　うしのしつぺい
うしのにんにく　　うしのこぼれ
うしのはなづら　　うしのひたひ
うしのふし　　うしひく花（朝顏）
うしたきさう　　うしたたき
うしあなぎ（八ツ手）　　うしいちご
うしうろう　　うしおい

うし[illegible]さ[illegible]　うし[illegible]り
うしぐさ　うしごう[illegible]
うしこべ　うしこ[illegible]
うしこうし　うしせり
うしくど　うしくさ
うしはこべ

【燐寸の圖としての牛】燐寸の函に貼らるゝレッテルの圖は實に多種多様で如何なるものでもとり入れてある。或人が盗賊と娼婦の圖がない丈けだといつた位で象の圖だけでも六百種に及ぶさうだ。座右にある四萬八千種の内牛に關するものは

横の圖のものは百二十五種

縦の圖のもの二十一種

でそのうち珍種とされるものは三種しかなく一枚一圓位で取引されるにとゞまる、

【牛の町村】大正十年末日の統計によると我國の町村數は殖民地を除いて、市が八九、町が一・三八三で、村は一萬七百拾六村ある。その内牛を名乘るものを克明に調べて見たが僅かに次の四ケ町六ケ村である。

○牛澤町　熊本縣天草郡　○牛久村　茨城縣稲敷郡

[illegible]
○[illegible]牛川町　宮城縣[illegible]田郡　○牛道村　岐阜縣[illegible]
○野牛町　北海道　○[illegible]牛村　[illegible]
○乙牛村　北海道　○牛田村　廣島縣安藝郡

【統計から見た牛】此千牛譚を終るに當り數から見た牛を記して見る。

(牛の生産頭數)

廣島	19.752
岡山	16.564
兵庫	15.572
長崎	9.748
鹿島	15.317
山形	7.636
大分	17.887
島根	15.311
熊本	8.936
福岡	6.000
愛媛	6.553
鳥取	12.228

(大正十年末調)

(日本の牛の數)

明治42	1.250.404
大正 3	1.387.233
8	1.344.865
9	1.376.049
10	1.427.254

(世界の肉用牛の數)

亜細亜　一千七百萬頭
歐羅巴　三千五百萬頭
合計五千二百萬頭

日本は世界の第十五位で殖民地を加へて參百六萬頭である。

(大正十三・十一・一、琦)

弟を送つて

岡田信一郎

船

大正十三年十一月六日午前十一時・私達の乘つた郵船會社の箱根丸は、汽笛を合圖に緩く岸壁を離れた。船と陸と、送らるゝ人と送る人の手と手とを繋いだ五彩の紙テープは、さながら虹のやうに船と陸とに架つて、行く人と留る人のお互の胸を繋いだ離愁を其のまゝに具體化したやうに美しい。蜘蛛の巣の如くに紛つれたテープは愛着にもだえた心の表徴とも見られやう。船の進むにつれて追々に斷たれて行くテープに斷ち難い愛着の想は一層強くなるのであらう。弟の握つた水色のテープは最後まで殘つて私達は誇らしい輕い滿足を覺えた。此んな事を喜ぶのも著しく感傷的になつた旅客の心の常であらう。斯う書て來ると私が歐洲へ出かけるやうに思はれるかも知れないが、實は歐洲へ見學に行く弟を送つて私と妻とは神戸まで洋行するのである。其れでも大勢の見送りを受けて、半分は洋行氣分になつた。遠ざかつて行く波止場の群集の振る白布はもう一人と一人との應答ではなく、陸と船との挨拶である。然しほんとうに遠く行く人達の中には其群集がたゞ一人にしか見えない人もあらう。

思へば長い間私も洋行を夢みた。今の時世では洋行が必しも唯一の研學の途でもない事は心得て居ても、學校を卒つた數年間は一途に歐洲留學を熱望した。二三の機會は色々な事情でいつも逸さねばならなかつた。早く父を亡つて大勢の弟妹と共に、母の手一つで育てられた私は、自分だけに都合のよい旅に出かけるわけにも行かなかつた。日英博覽會の開かれた當時などは、塚本博士と正木美術學校長との推薦で絶好の機會であつたが、之れも病の爲め見捨ねばならなかつた。あの時分の感傷的な心を想ひ起すと今でも暗い氣持になる。其後遂に適當な機會もなくて、既に十八年を經過して、いつとはなしに其熱も薄いだ。蓋し年を取つたからでもあらう。私が洋行を熱望した一

家に取つては優れた作品を見に行く事は何にも況した快事であ
る。又特に建築史に興味を持つた私には、渡欧の渇望は必しも
芸術の壮心からばかりではなかつた。其故にもう熱のさめた今
になつても建築史研究の途次何かの問題に觸れると、油然とし
て發作的に刺激される。最近には佛蘭西の古寺に關する諸家の
結果、飛驒の匠にもたとふ可きマギストレー、コマキネの事を
知りたく、コモの湖を見たくなつた。ゴチツク建築彫刻の由來
を探つて、プロヴァンスやアール地方のロマネスクの寺々を見
たく成つた。別してモリアァンヴァールや聖ドニの穹窿を仰い
で交錯格線の變遷を知りたくて渡欧の希望が又むら〱と頭を
上げて來た。茲に弟の洋行問題が起つた。然し私には渡欧の機
會は或は遂に來ないかも知れない。かくて今弟を洋行させる事
の出來るのは私にとつては二重の喜びである。

私の末弟捷五郎は父の第六子で五男である。彼は明治廿七年
十一月の末に生れたが、其時分軍職に就いて居つた父は、日清
戰役に召集されて廣島へ行つた留守であつた。父は病氣の爲め
翌廿八年の春歸京し、其初秋に遂に永眠した。其故に捷五郎は、
殆んど父を知らずに育つた。末子である事と、父の居らぬ事と
は、彼が育つ上に善惡二つとも少からぬ影響があつた。母も私

られたのである。其結果彼には[illegible]
であるが一面洋行の基となつた。

父が死んだのは母が三十七、私が十二で中學一年の時であつ
た。父はまだ幼い五人の男子と、一人の女子と、及び僅かの
財産とを遺した。母は此の苦境に立つて雄々しく奮鬪した。少
ない資材と母の僅かな扶助料とで、追々中學に進み、生意氣に
なつて行く數人の男子を育て上げる事は決して容易な事ではな
い。其の時分の有様を今も明瞭に思ひ浮べる事が出來る。而し
て常に私は母の強い意志を心から尊敬する。母は所謂良妻賢母
といふ意味から言つたなら決して人後に墮ちはしない。薄志弱
行の私などが、今どうやら世の中に立つて行く事の出來るの
は、一に母の強い意志に感化した結果に外ならない。斯く永い
間困難して女の手一つで數人の小供を育てた母に對して、報ひ
られた處は甚だ薄かつたけれど、今私達の兄弟は一人は會社員
となり、一人は新聞社員となり、一人は内科醫師となり、一人
は文學者に嫁し、而して私と末弟とは建築を專攻して、之を職
として立つてゐる。斯うして誰もどうやらやつて行けるのは一
に母の教導によるのである。母はか細い痩せた小柄の女であつ
たが、心は常に緊張してゐた。私達がかけた苦勞の爲に年より

は早く老けて、六十八の今七十五以上にも見られる。心のしつかりした母も今は老いて穏やかな老媼に過ぎない。

老いたる母の心は一に末弟に繋る。母は彼には特に鍾愛を加へた。私達も柔順な彼を愛撫した。而して特に年齢の距離のある私は、殆んど兄弟の感と父子の感とを交へた感じで彼を教導した。氣の弱い溫順な彼は兄弟の誰れ彼れからも親愛されて、三十才を超えた今日まで「坊ちやん」の俗稱で呼ばれてゐた。

彼は中學を出てから美術學校の圖案科で建築を履習した。卒業後軍役に就き、之を果してからは私の手許で一緒に建築の設計をやつて居た。其間片手間に友人前田君と共に色々の建築懸賞競技に參加して僥倖にも其二三に當選する事が出來た。即神戸市公會堂、早稻田大學大隈侯記念講堂の設計の競技では一等當選を贏ち得、最近の大連市滿鐵停車場の設計競技では三等に當選した。此等の賞金を蓄積したものが漸く渡航の費用を支辨する事が出來るに達して、彼は洋行の志を立てた。自分自身長い間留學を渴望して、併も遂に其機を得なかつた私には、彼の心を察する事が出來る。今の私の身分では洋行費の支出は決して容易な事ではないが、之を負擔する事は兄の義務であり又喜であらねばならない。私は渡歐の輕い羨望を感じながらも彼の旅裝の世話を燒いたりした。

歐羅巴の優れた建築を視に出掛ける前に、自國の優れた作を、もう一度確かり氣をこめて視て置く事は、決して無駄な事ではない。別して今南都正倉院御曝凉の期に際し、之を拜觀する事が出來たら非常に有益であると考へたので、弟の建築の旅は先づ自國から始める事になつた。私も亦、古建築を見たかつた。建築を藝術の一と考へ其の意匠考案を仕事とし樂とする私は、日頃古い優れた建築を見る事を自分の必要なつとめと考へてゐる。奈良附近の優れた建築は我々の制作に對する強い刺激になり、又何とはなしに心の糧となる。情操の貧しい私等はせめてかゝる方法でゞも心の養分を取り入れる必要がある。優れた建築を見る時には或は製作の欲望の強い興奮を感ずる事がある。又時としては自分の平素のだらしない製作を省みて苦痛な程強い刺激を受ける事がある。

日頃吾々はあまりに西洋の建築ばかりを見すぎて居る。其れは週に月に送らるゝ雜誌や書籍の上に於てではあるが、我等の多く見るのは西洋の作例である。而して汎世界的てふ美名の下に辨別なしに雜誌の挿圖を不徹底に模倣する事も多い。斯くして煮え切らない、輕薄な建築が多くなる事も事實である。藝術に關與する一人として作物には強く自分を出したい、此希望は先づ第一に民族の特色を許容せねばならない。東洋の、日本

の、而して其後に[illegible]ユニークな[illegible]若い時に持つた[illegible]は段々[illegible]くなつて行つた。[illegible]う云つたとて私は過去の日本建築の形式を再興しやうと云ふのではない。震災後の復興建築について、従来のビヤード博士が日本式建築の再現を欲求したが、之は東京を遊覧地と考へて居る観光外人の定りきつた月並の希望に過ぎない。其時立つて雄雄しく駁撃した若い野田君を待たずとも、我建築界で之に耳を貸すものは一人だにあるまい。此れからの都市の建築の殆と全部が欧米の形式を追ふ事に就ては否む事の出来ない時勢である。然し其洋風建築はやはり日本人のものでありたい。之を意匠するものにとつては日本人の情操が要る。創造の強い力を恵まれて生れて来なかつた私等は、せめて古人の優れた作からでも自分の情操を養育しやうと考へるのである。それには古建築をたゞ眺めればよいのである。優れた作物の与へる感化は机の上で容に論ずるやうな浅薄な力の弱いものではない。其故に私は時々休養を名として、奈良に遊ぶ。時としては休養にはならぬ程苦しい刺激を受ける事すらあつた。昨年大震災の後建築復興の問題に興奮した私は是非奈良に遊びたいとも思つたが遂に果す機会もなかつた。今秋は正倉院拝観を機として是非古社寺に遊ばうとの希望は、春の老いた時分からであつた。かくて私の旅に[illegible]と、[illegible]と、而して[illegible]満足する事と、其等の様々な事を一時に果して[illegible]であると考へた。斯くして私の[illegible]頁と、私の旅路の旅とは同じに書かるゝ事になつたのである。

私は船に落付くと共に、連日の疲労が一時に出るのを覚えた。實は昨日、私が世話を引受けた親戚のもの、結婚式が済んであつたので夜深けて帰宅するやうな始末であつた。今朝は又出発当日の事とて未明から騒ぎ立てた。結婚の準備やら、留守中の始末等の為め此二三日を狂奔して頑壮ならぬ私は非常に疲労して居つたが、船の門出に興奮したため、今迄は知らずく動きつゞけて居たのであつた。暫時船室に仮睡した其間に船は相模洋を過ぎて、左なれば伊豆七島と伊豆半島の間を航行して居た。地図でばかり見た七島を目の当りに見る事は珍らしい[illegible]興であつた。右舷には天城の山脈が連つて、岸の漁村が目近かに見えた。連山の間の低い処から富士の頭だけが僅かに見えた。御子之島の燈台を左に伊郎崎の燈台を右に見る頃から、低く垂つた秋の日は暮れて、暫時にして船尾に此等の燈台の輝くのを見た。期待した駿河湾の富士は遂に暗に葬られて了つた。此頃から空は少しく荒れ模様で、海に馴れない私達は、名に聞き

怖ぢた遠州灘を不安に思ひつゞけた。併し幸に船には機關の微動の他は少しの動搖もなかつた。

船に乘つた人達の總ての信頼は一に船長に繋る、其の船長は幸に私達の舊知であつたので、弟を托するに無上の便宜を得た。又弟の船室の相客は豫て懇意の若い建築家のＩ君であつて之も非常な好都合であつた。船は大きかつたが横濱からの乘客は割合に少なかつたので、船客は直に知り合になつた。國史を研究する眞面目のＴ文學士も居た、著名な鋼鐵問屋の若旦那のＭ君も居た、皆弟のためには善い交友と思はれて陰かに弟の幸運を祝福した。

夜食の前後私達は船長の室を訪れた。廣からぬ船長の室は各國の珍奇な品々で處せまく埋められて骨董屋の店頭のやうに賑かであつた。埃及の小像やスカラベ、印度の彫刻や瓜哇の面、希臘や羅馬の彫刻、又は西歐の美しい道具、佛蘭西の華かな電氣の傘など、雑多な集合は如何にも航海に忙がしく絶えず東し西する船長其のものを表象して面白い。船長の机の前には嘗て此の船で渡航された高貴の殿下達の御影を始め、私の知つた人、知らぬ人の寫眞が飾られて在つた。船長は又美術好きであるために、室の欄間には油繪が一ぱいに掛かつて居た。風景もあつた。花もあつた。女もあつた。而して其多くは私の交友の畫家達の手になつたもので、話に就て其人達の面白おかしになつた。私達は夜深けろまで談した。狹い船室も一日の勞れには充分である。私は聞き怖じした遠州灘や熊野浦の不安を抱きながらも、連日の疲勞と、弟を托し得た安心とで日頃にない快眠を貪つた。

翌七日、目覺れば船はもう紀州沖を航行して、對岸の連山は朝霧に明けて居た。帆をあげた漁船は兵法ならば長蛇の陣とでも言ふのであらう、長く一列に連つた。まだ紅味を含んだ曉け方の日が、白帆を射て目ぶしいばかりに輝いた。船腹より湧沛する海水の飛沫は散じて雲霧となり、映る朝日に七彩の虹を現出した。船は虹に乘つて行くのだ。快き眠りに飽きた私は、心ゆくばかり海氣を呑吐して眞の神氣の爽快とは斯う云ふ境地かと感得した。久しく燒土の塵中に喘鳴した私達は心から海の幸福をたゝえた。

朝食後船長は親しく船の要部を案内して呉れた。私は船の事務所で壁に並べられた繪はがきを數葉購つた。嘗て建築家の洋行といふのは、繪はがきを買ひに行く事だと、行かれぬ負惜しみの皮肉に友達をいやがらせた事もあつたが、私も之れで洋行の目的を果し得たのかも知れない。船橋では船長は親切に色々の裝置を說明して呉れた。又双眼鏡を採つて遠近を仔細に指示

して呉れた。[illegible]

戸の本城についたのは[illegible]

達は一日に過ぎない[illegible]に過した[illegible]を終つた。弟は之から永い船の旅を續けなければならない。彼の旅の平安に幸であらん事を祈りながら、自分達の行手をまとめた。

船には弟の小供の時からの親友で今は大阪に住む[illegible]君が出迎へて呉れた。小供からの親しい友達は兄弟よりも親しいものである、彼等は確く手を握つて暫時言葉もなかつた。

奈良への途中大阪で高島屋呉服店へ立寄つた。此の建築は大きい建物としては私の始ての作である。其の出來不出來は人の評にまかせるが、何れにしても自分の作品はなつかしい。子を持たぬ私には子の感は分らないが、恐らくは其のかあいいものが今の感ではあるまいか。下足を世話する人の中にも見知つた顏があつた。店員の誰れ彼れは多く見知り越しであつた。店内は何處も此處も賑かに繁昌して、他の店でならばうるさくも思はるゝ雜踏を此處では反つて嬉しく感じた。店員達が建築が都合よく出來てゐると賞めて呉れるのをお世辭とは聞きつゝも、快くて自分の所でもあるかのやうに無遠慮に其處此處をうろついた。エレヴェーターの上部の狂ひ獅子に牡丹唐草のガラス・モザイクは和田三造君の圖案で小川三知君の努力の作であつた。

[illegible]

[illegible]た、私には[illegible]

だつた。[illegible]には小供の時から私の手[illegible]業し遂に早大まで卒業した[illegible]合で[illegible]作つて呉れたのであつた。工事を監督する現場の人達の[illegible]の苦勞も思ひ出さるゝ。竣工間際の不眠の活動も思ひ出さるゝ。其時分を顧ると酬ひられた苦心もある、酬ひられぬ苦勞もある。私は當時を思ひ出して、雜踏の中にしばらく感慨に耽つた。弟は其中に旅の用意の不足の品々をもとめた。

高島屋を出て大阪で夕食を共にした。弟と彼の友と私達夫妻と四人であつた。船の食事は洋食であるし、奈良のホテルも洋食であるので弟には最後の日本食であるのだ。弟は幼い小供の時から特に甲芋を好んだ。而して其嗜好は變らずに今も續いて居る。喰辛棒の私は、何んでも品種に限らず、うまいものなら好きである。甲芋も其一つだ。早く産する紀州芋もうまい、京の芋は特にうまい。[illegible]が濃くなる時分には、粒の揃つた攝州大の小芋を知人から送つて貰つて、料理店のより自宅の方がうまい等と云つても居た。弟はどんなのでも甲芋ならば好きであつた。夫故に彼の旅立つ日が近づくにつれ甲芋は屢々弟の食膳を見舞つた。倫敦に永らく暮した某氏の話に、甲芋の無い事を何

つて弟は多少がつかりして居た。今日も里芋を望んだが不幸にして里芋は遂に彼の最後の食膳を飾らなかつた。此れからは私は里芋が食膳に登るたび毎に弟の顏を想ひ浮べるに違ひない。

奈良に着いたのは夜遲くであつた。ホテルには建築家の中條君夫妻が宿つて居て、私達の到着を聞いてわざ〳〵見舞つて呉れた。中條夫人には久し振で會つた。一度は失明を傳へられた夫人が、再び其明と健康とを恢復せられつゝあるのを心から祝福した。

正倉院と法隆寺

暖房のスチーム・ハムマリングのけたゝましい音で目が覺めた。空は濃い鼠色の雲が一ぱいに蔽ふて遙か遠方の空がかすかに明るく淡白く見えた。前庭はしつとりとして、今は霽れたが夜來の雨を思はせた。雨？晴？弟の許された日は今日一日であるので、既に出發の時から今日だけの快晴を祈つて居た。正倉院の開扉の如何は一に天候によるので、拜觀に來る奈良の客の第一の心がゝりは天候である。晴れの日は喜び勇んで拜觀しやう。雨の日には止むなく諦めることも出來やう。陰霽不定の今日の如き日には客は不安と焦燥とに悶々しなければならない。私達も此運命に置かれたわけだ。十一時頃にはお倉の開否が決定するとの報を聞きつゝ、弟にとつては替へ難き一日を其儘も浪費しまいと春日野に向つた。名物の鹿は去月角切りを終つて、老いたる大鹿まで散切り頭のやうに淸々しく然し物足りなく見えた。六月生れの今年子も、もう大きくなつて乳をのむ姿が不調和におかしい。

弟を送るとて今日東京から遙々來て呉れたK氏は奈良が始めてゞあると言ふので、お登りさん並に先づ春日社に參詣する。春日神社に參詣するには、先づ若宮に詣つて行くがよい。そうすると、深綠の老杉の並木の正面に見通しに丹塗りの樓門を仰ぐ事が出來る。秋は黃葉を交へて特に美しい色彩である。春日の樓門と廻廊とは治承二年高倉天皇の御宇に其以前瑞籬であつたものを改造したもので、藤原時代の末期に屬する美しい建築である。檜皮葺の屋根も寺院の山門とは別趣の味を出して優雅である。組物や蟇股等を無暗に濫用しない所謂和樣の手法は典雅な上品なものを造り上げる。春日の他の社殿は德川末期（文久）の建設ではあるが其形式は舊い型によつて居る。先を急ぐ私達は樓門を潜つて社殿に額づいたばかりで裏門へ通り拔けた。手向山の八幡社も表から拜したばかりで素通りした。若草山の麓を廻つて東大寺の構内へ出れば直に三月堂の前だ。

三月堂は美しい。のび〳〵と緩く流れた屋根、廣い緣、簡素

なほ[illegible]描き出された[illegible]氣分は、今日[illegible]で一二を爭ふ名作である。別して西側面の姿が美しい。後代の大きな入母屋破風に見馴れた私達には、南正面の屋根の破風は小さ過ぎるやうに思はれる。特に破風尻の下からの小さい下り棟は、いよ／＼破風の開きを小さく見せるやうに思はれる。然し側面では此の小さい鎌倉の破風が、元の天平の四注の屋根と照應して具合のよい美しい、對比を描き出す。

毎年三月法華會が修行さるゝため、三月堂、四月堂と並んで三月堂と稱さるゝが、法華堂が此堂の本名である。或は本尊の御名によりて羂索堂とも稱され、又金鐘寺とも言はれる。此堂は東大寺の殆と總ての堂塔が古來幾度かの災禍で皆燒失して、天平時代の原態を變へた中に、幸にあらゆる災禍を免れ得て、此堂獨り當時の結構を傳へて、奈良では最古の建築である。

伏惟法會本施主故僧正院下（良辨）、迴遊普門、示普門之一形、恒廻迷津、救迷津之多苦（中略）以去天平年、始奉爲四恩、窺目連之德功、慕毗首之一制匠、敬造不空羂索觀自在菩薩之像、爲其像也、立身丈余德圓相滿、疑補陀之眞儀、青蓮眦娟婆昏、似安養之正軀、其像雖就未卜居處、後經數年、京城東畔崇山麓、占定此地（中略）又道力冥感、朝野歸崇、芟荊棘、破荒途、構造大廈殿、安置觀音像。此は東大[illegible]

[illegible]

[illegible]建築に先立つ事十年である。今の堂は此の天平の建立になる本堂と、鎌倉時代の建增しの禮堂とから成立つて居る。本堂は正面五間側面四面で屋根四注造の結構であつた。治承四年平重衡の包圍により、東大寺伽藍の多くが兵燹に炎上し盡した時、獨り燒け殘つた此の堂で總ての佛事が行はれた。あまりに其狹隘の爲遂に正治元年、重源の勸功で五間二面の禮堂が前方に建增されたのであると言はれる。本堂と禮堂との間は中堂で繋ぎ、今では正面五間側面八面の堂宇となり四周に勾欄を附けた縁を廻らして居る。本堂構架の手法は、簡素な出組の組物で深い軒を支へ、軒は二重垂木で、支輪小天井を持たない。屋根は四注で、緩かな勾配に此時代の好尙を示して居る。禮堂は此天平の古建築を出來得る限りスポイルしないやうに骨折つて居るが、然し其手法は敢て古式に則る事なく、自分の時代の特殊な所謂大佛樣の挿肘木等を使用して、よく鎌倉時代の手法の特色を出して然かも總體としての調和を破らない。此堂の天平の工匠の手腕は今更讚へるまでもないが、鎌倉時代に建增した工匠の苦心と成績とは充分に認められねばならない。古い建物を修繕するとか、建增をするとか言ふ事は、新しい建物を作るより

も、餘程むづかしい仕事で、且酬ひられない仕事である。然るに彼は此處では其の困難な仕事に成効した。彼は自分達の手法を捨てゝ奈良の様式に追從する程臆病ではなかつた。然し原の本堂の美觀を保護するのに充分謙抑であつた。而して彼の手腕と細心な注意とは、美しい本堂を活かし、又彼自からの建増しを活かした。彼は讃へらる可きである。此本堂と禮堂との優秀さを比較したら誰れでも本堂を揚げるであらう、然し工匠の苦心は後者に認めなければならない。

堂内拜觀の勝手は以前とは違つた。拜觀料の十錢も値上げされた。而して堂内の様子は白い布を張つて禮堂と本堂との境を仕切つたために反つて具合が惡くなつた。禮堂は中の間を含めて五間三面、これに木の床を張つて高く成つて居る。本堂の方は南側の廂の間を入れて奥行五面七間であつて一段下つて居る。本堂は三間二面の内陣を周りと取り圍んで外陣となり、内陣の部は總べて須彌壇となつて居る。須彌壇の前には嘗て本堂の南側のであつた柱四本が、今は遊離して立ち並んで居る。内陣の天井は折上組入天井で、柱間に從つて三間に分ち、各間毎に美しい天蓋がついて居る。外陣の四方軒裏は單に粗大な垂木を露出して化粧裏として居る。簡單な組物や、粗朴な虹梁等で構成された此の堂の内部は、全く裝嚴である。天平の工匠達は巧まなかつた。素直であつた。彼等はあるがまゝを示して直ちに人の心を捉えた。内部に至つては鎌倉の工匠は全く天平のの比では無い。天井の格間や支輪間は多く剝落して居るが、猶僅かに彩色の跡を遺して居る。嘗ては天平風の艶麗な色彩に裝飾され、心毎に寶鐸を附けた、八出の小花を持つた瑞花の天蓋と美しく映じた事であらう。内陣長方形の壇上更に八角二重の須彌壇が設けられてある。壇は又美しい格狹間、卍形の組子、蓮形の束を持ち、當代の建築工藝の粹を誇示するものである。

法華堂の建築は美しい。其内部も優れて居る。然し其處に在す諸佛は猶一層優れて美しい。暗い堂内は暫くすると目が慣れて追々に明るくなる。瑞花の天蓋の下、八角二重の須彌壇の上に蓮座を重ねて、本尊不空羂索觀世音菩薩が立つ。左右にやゝ小さき日光月光兩菩薩が、其をさし狹んで脇立の梵天、帝釋の二天が立つ。壇の四方は四天王によつて守護せられ又、金剛、密迹の二力士が前に立つ。其他辯才天、吉祥天が厨子の中に又本尊の背後北面した厨子中には秘佛執金剛神の像が安置される。何れも天平藝術の精粹たる此等の諸像が所狹く立ち並んで、其處に壯大な佛教藝術の世界が現出される。其の建築も、其の裝飾も、其の壯嚴も、又其の諸佛も皆悉く逸品づくめである事は誠に稀有の事例である。諸佛の内でも本尊不空羂索觀世

背に實に素ばらしい出來である。而して[illegible]の上に於て拔き差しならぬ調和がある。一丈二尺の身長で、偉大な體軀の堂々たる本尊に、傑出た光背と、合致したる臺座、對照した六臂で釣合よく此の堂宇に納まる。後壁の柱間にも嵌つたりとはまる。櫻井緣起にあるやうに先づ此の本尊の佛像が出來て、然る後に其の周圍に堂宇が計畫されたとしたら、此の調和の功績は工匠が擔ふ可きで、私達は其の顧慮と用意に驚倒する。此佛像は造形的にやかましく論議立てしたら或は完全とも云へない點もあらう。若し博物館の陳列室へでも出陳されたなら、或は其全形の釣合に於て、或は其細部の不整に於て、多少の缺陷を暴露するかも知れない。此處に於ても其頭部の大きすぎる事や、肩巾の割に脚元の貧しい事など氣にならないでも無い。然し總體の雄偉な印象、嚴肅の氣、粗朴な味は、觀者を拜跪せしむるに充分である。且其感じは建築の感とぴつたり吻合する。光背の優麗な唐草風の光焔、放射する後光、寶玉珍珠を鏤めた蔓草の寶冠等は本尊を一層立派に引立てる。奈良時代に於ける最も巧な像ではないかも知れないが、最も傑れた像である事は確實だ。而して安置せられたる建築と調和する點に於ては、之に勝るものを知らない。

然し猶充分を希望するならば私は此の堂内を舊態に引戻した

い、[illegible]其他の佛像に就つた時、寺に秘藏された[illegible]堂へ移し置かれたのである。日光月光（梵天帝釋かとも云ふ）は誠に美しい塑像である。巧さに於ては或は本尊を凌駕しよう。然し本來此の堂のものではなからう。[illegible]からは下されなければならない。二力士は本尊とは同じ形式ではあるが此壇上の[illegible]云ふまでもない。此等が總て博物館にでも出陳されて、此堂内に本尊と之を挾む兩脇立と、守護する四天王とが具合よく安置されたら、其れこそ無双の法場となるであらう。

三月堂を出ると又大氣が氣に掛る。仰ぐと心爲しか空は少しく淡くなつたやうに思はれる。急いで正倉院へ行くと幸に開扉されてもう四五の拜觀者も參入して居る。私達もそれに續いた。

正倉院は大佛殿の乾、三四丁の處にある。天平勝寶八年聖武天皇崩御の七々の諱辰に孝謙天皇と皇太后光明子とが、帝の御遺物を東大寺大佛に奉獻せられた事に創る。今は所謂校倉造で、間口十八間、奥行五間、高五間、床下九尺で屋瓦の他は總體木造である。屋根は瓦葺四注形で棟は一重棟である。壁は即三角形の大材を井字形に組んで積重ねた井樓組で、あぜ倉の名稱は之から來るのである。床は大なる自然石の礎石の上に建つ太い圓柱

で支持されて、庫は高さ九尺の中空に掛り、床下は全く吹き抜けである。此事と、木壁とが地濕並に空中の濕氣を遮斷して、珍寶の保存を千年を超す久しきに延ばしたのであらう。寶倉は三區に劃されて其兩端南北兩倉は眞の校倉であるが、中倉は壁に厚板を使用して、初め双倉ありて後其中間の空地を閉んで中倉とせられし事を明示してゐるが、今は一棟の大寶庫である。天平寶字五年の文書に藥品を双倉の中間に置くとある由なれば、此の中倉の附け足しは、やはり天平時代に行はれた事である。或は双倉の工成つて手狹の爲に直ちに建増されたのかも知れない。

私達は曝涼拜觀の季節にだけ特に取付けらるゝ高い階段を登つて參入した、倉は窓がなくて僅かに入口から光射が射入するばかりであるので、到底隅々までは明りは透徹しない。拜觀者は各々用意した懷中電燈の薄明りで、精巧な寶物に眺め入るのである。舊知奈良美術院の新納氏、博物館の關氏等が居られて詳細な説明を聞く事が出來たのは幸福であつた、此の人達の交る〴〵の委しい説明で私達は天平藝術の馥郁たる遺香に醉ふ事が出來た、珍藏の寶物は佛具、劍鏡、樂器、調度、衣類、服飾品、武器、文房具、娛樂品、圖書、藥品、香料等に亘つて其數三千點に登ると言はれ、而して其の何れものが皆精巧なる美術の至寶である。素より一日の拜觀の見盡す所ではない。私は先年嘗て拜觀した事があるし、又東瀛珠光や正倉院の栞などで一通りは皆承知したつもりで居たが、今日再び拜觀すると、又再び未見のもの丶如くに感ずる。あまりに美しく、あまりに數多い珍寶の一々に關する感想は到底書き記す事は出來ない。私は爰にたゞ全般に對する二三の感想を錄して、又明年の曝涼を樂しみ待たう。

正倉院の御物の貴きが上に貴きは其が獻物帳と兼備する事である。此の如く由緖明瞭な千古の遺物は天下決して多くはない。正倉院に於てすら獻物帳記載中の多數は散佚して今は其十中の二三を存するのみである。物の傳はる事の難いのは昨年の大震火で目の當り經驗した。正倉院の御物は如何にも貴い。獻物帳記載以外のものを合して三千點の多類である事と、且其多種類の存する事は又稀有の事象である。此等が左程の美術品でなくとも傳へられたる其價値は充分にある。況んや其何れもが、今の文化を以てしても決して模し易からぬ精巧な美術品ばかりである事は全く驚嘆を値する。

舊い時代の品々が一纏めに殘つた事例は、最近では埃及ツータンカーメン王の發掘された墳墓に見る事が出來る。神秘な信仰から、秘し隱しに隱した埃及王の墳墓すら屢々荒掠されて、斯く多くの遺品を埋藏するものは稀有である。（ツータンカーメ

ン王の墓は一度盗賊の侵入を受けた形跡はあるが左したる破損も
なく比較的無事に殘つて居る。況して地上に於ては殘されて
千二百年近くも保存し得たと云ふ事は、如何に封印の堅きによ
るとは言へ、天祐と云はねばなるまい。

ツータンカーメンの墓も美しき珍寶の品々を藏する。正倉院
のやうに器具や調度や、服飾品、家具等、大小種々の生活用品が
雜多にある。[illegible]
寶を鏤めた玉座もある。彩畫美しい櫃もある。金銀のコルセッ
トや、履もある。高貴な指輪もある。寶杖もある。カーターの著
書はまだ充分に書き盡しては居ないが、夫れですら驚く可き珍
貴の世界を擴げて見せる。定に此等の珍寶が發掘發表された時、
英米に一流行を生じたのも尤もな事である。其流行は我國に迄
流れ寄つて多少の餘波をも揚げた。今此發掘品と正倉院の御物
とを比較すると、金銀を鏤め、寶玉を嵌して、高價である點で
は、或は埃及王の遺品の方が、高價と言へるかも知れない。然し
美術工藝の立場から見たら、埃及王の遺品は到底聖武天皇の御
手澤品には及びもつかない。其豐富な意匠、精妙な工作、高貴
な風趣に至つては到底比較にもならない。定に此處に藏する天
平の工藝品は世界に誇示して決して恥ない稀有の珍寶である。
正倉院御物の多くは何れも工藝の至寶で、其工作は今の文化

でさへ[illegible]
が文化程度の現代にして[illegible]する。譬へば
中倉階下に殘せらるゝ[illegible]にしても、何れにしても、其
何れもが一々意匠を異にして豐富な形態を示して居る。又樂器
文様の花文にしても、樂器にしても、極めて[illegible]變化と自由な手
法を示し、一々敬服さるゝ所が多い。又諸種の技巧が同時に併
せて使用せらるゝ事[illegible]。或は象嵌、或
は鏤金技、或は螺鈿、或は撥鏤、或は木畫等の諸技が一度に併
用せらるゝ事である。今の工藝の大家達は殊に一技には秀るか
も知れないが、他の技を併せ行ふ事は出來ない。或は二三協力
して統一されたる作品を作り出す事もむずかしい。天平の工藝
家は獨りで諸技に通じたか、或は諸家協力を協せたか(恐らくは
前者?)は知らないが、出來上つたものは諸技を併せ納めて、
作品は豐麗であり、意匠の變化極りなきものを現出して居る。
此は特に今の工匠圖案家達の潛心すべき所ではなからうか。御
物に表はるゝ、色彩に對するわだかまりなき態度も私達を敎へ
て呉れる。天平の建築の色彩は今は剝落したものが多い。僅か
の餘彩殘色を探り、又は佛像の文様の色彩を辨りて、僅かに天
平を髣髴する事が出來るが、此處に諸器物の豐かな色彩を見る事
の出來るのは幸である。

最後に私は正倉院御物保全の方法について考へたい。斯る珍奇の寶物が、木造の倉庫の内に一千二百年を持ち越したのは、實に有難い事である。然しこれからは人爲で、千載の後に傳へなければならない。度々の兵燹や雷火を免れた事は全く天祐である。現に東大寺續要錄によれば「建長六年六月十七日、雷寶庫に震し、東面北端の扉を燒き、下柱を抓裂く、龍神出でゝ火を消止めたり」とある、定に其處の木壁には正しく燒けた跡がある、而して今も前庭に龍神の小祠がある。けれども、生駒山の中腹に大トンネルを穿ち、大阪から文化風の吹き込む今日、萬一雷火があつたとてもう龍神も出て來まい。避雷の設備で雷火は安心しても、飛火もある、野火もある。火災に對する萬全の策は忽に定められねばならない。盜難も亦安心出來難い、既に寛喜二年十月には盜人寶庫の御鏡八面を窃取し、售る能はずして悉く之を毀ち、現に其破片は遺存する。又慶長十五年七月には寺僧北倉の下床を切りて盜を爲し、捕へられて遂に奈良阪に刑されたとある。今は警護も嚴重ではあるが、せち辛き今後盜難なしとも言ひ難い。盜難よりも目立たずして、然かもより恐るべき害は、濕氣と日光との難である。今の校倉は濕氣には非常に有効のやうである。一は此の地方の氣候にもよるであらうが、一は木倉高床の利にもよらう。然し陰濕不定の、容に濕氣多き日開扉せらるゝ事は決して保存に有利ではない。私は日拜觀の便を得た事を、弟の爲には非常に幸とするが、珍寶の爲には不幸とする。近年の例の如く毎年定時に曝涼せらるゝ事は果して保存の上に有利であるかは考察されねばならない。又度々の開扉は日光の直射はなくとも射入する光線により、色彩の退滅を來す事は必然である。過去の歷史でも、ある永い開閉扉曝涼せられなかつた事がある。之は果して保存の上に惡かつたであらうか。又度々の曝涼が寶物の爲に果して有利であるか否かは、充分に驗覈せらる可き事である。

正倉院の曝涼は寶物の保存の爲めであつて拜觀は從である。此の期を幸するに過ぎない。其故に拜觀に多少の不便はあつても保存が主でなければならない。夫れには先づ最良の保存法が研究さる可きである。勿論保存だけが最後の目的ではない。千古の美術品によつて現代の工藝を砥礪する事は必要な事でもある。又之れによつて過去文化の研究資料とする事も大事な事である。たゞ暗黑裡に秘め殘す事は全く無意味である。寶物の中に、光線に放置して、或は多少の濕氣に會つて、變質せさるものもある。此等は宜しく常時展觀せらるれば最も佳である。其他の變化破損し易きものは、或は複製を完成 [illegible] 庫に納め、複製は常に展觀する事が出來る。而して原物は其保

保存に移さ[illegible]せらるゝ[illegible]の時に、其の[illegible]を有するものを、公[illegible]の間なく深く拝観せしむるが宜い。假りに曝涼の期を定められるとも、其時日に制限多ければ遙かに開扉を止めらるゝもよからう。僅々数日に亘るときは之に曝涼せらるゝも宜からう。真の拝観を値する人達は、百里を遠しとせず、又、時の相違に堪えて馳せ参ずるであらう。室に稀有の珍寶はかゝる困難な拝観をも値するのである。今の曝涼の如きは決して寶物保存に有利ではない。のみならず、真の拝観を値する人達を拒否する事も多い。或は慎重なる考慮の下に適當に改められて然る可き事では無からうか。たゞ併し、之を實例に見て複製模作の頗る遺憾多きを難とする。譬へば南倉階下の密陀繪の辛櫃の如き其複製の描畫は原物の雄大奔放な筆致なく、少しも其趣を傳へては居ない。又南倉階上の有名な古樂器箜篌の複製の如きも、原物の破片に對比すると、其黒柿柱の下部獅子頭の彫刻の如き、精は精なりと雖原作の雄大な趣はない。複模は全く困難であつて或は到底真相を傳へ得ないかも知れない。

正倉院を出ると頓に空腹を覺えた。中食をしたのはもうお八ツ刻に間近かつた。直ちに法隆寺にと急ぐ。途は三條通りを真直に一路都跡村を指す。佐保川の小さい流を渡ればもう平城京

つ[illegible]されたる。[illegible]には[illegible]して、それ[illegible]間々まで[illegible]された[illegible]てゐる。[illegible]は[illegible]大に建てられても家屋の安々まで[illegible]たゞ[illegible]てはない。都市の中空地のまゝであつた[illegible]も多かつた事と思はれる。されど、整然たる區劃が定められた事は今の復興に行き悩む市民の目からは羨しく思はずには居られない。

行き悩む復興は獨り東京市の事であるばかりでなく國家發展の大きな障碍だ。曠日彌久にもう此頃では市民の復興の勇氣も挫けてしまつたかに見える。區劃整理の不確な事實である事には同情を惜しまないが、其の遅々たる状態には焦燥な情緒も感ぜられる。而して今の難局に際して、市の高級幹部達は一局長の進退に[illegible]して、最善を盡す事なく、功慧にも其行き詰つた責任ある地位を逃れ去つた。市會議員は黨派の競と感情の爭ひのために長く議長すら定め得ない。或は國の復興局は區劃整理の容易な地區だけを先取して、困難な部分を市の其の局に押し付けたとか、或は國の復興局は有能なる其途の吏員の大部を拉し去つて、市のその局には人手が備はないとか、或は内務省は市長不在の職務管掌の時期を幸として、大藏省出の土木技師の大先輩たる市の道路局長を誘して、日頃其の土木局が目の上の瘤[illegible]

た邪魔物を除いたとか、曰く何々と言ふ流言は吾等閑人の耳にまでうるさく聞える。此等皆齊東野人の言であるとしても、區劃整理が、復興計畫が進行しない事は確實な事實である。此の爲め削された三千萬金は緊縮の財政に危かつた地方工事の中止を救ひ得て、政府と政黨とは便宜を得たかも知れないが市民は大なる不幸を見た。今更愚痴を零すのもやぼであるが、私は市會議員に、市當局に、政府の吏員達に愛市の念の無い事を遺憾とする。斯くして復興の完成は永久に延ばされたやうなものである。市民達は全く自力の氣魄を失つてしまつた。

區劃整理の進まない一の理由は市民の或るもの丶利己の念である、互助共存の精神のない事である、二の理由は當局の巧慧に過る事である、責任を廻避する事である。計畫には充分愼重な考察と研究が要る。然し實行には意志である、斷である。此の不斷の爲に、未決の爲に、動搖の爲めに變更の爲に、亡はれつ丶ある市民の氣魄を惜しんで止まない。私は奈良の都跡を過ぎ乍ら遙に東京の行き難む復興を氣にした。登つた客は重く、私の心は暗くなつた。

横領で南折して、古の右京一坊の通りを行く、左には唐招提寺の森が見える、續いて藥師寺の東塔が見える、やがて車は郡山の町に入つた。其の町除れで不意に車が止つた。見れば街は人だかりして賑かだ、花嫁さんの門出である。花嫁の乘つた自動車に嫁入道具を山積した貨物自動車が續く。私達の車も花嫁の行列のやうに前の車を追つた。先の自動車の後の小さい窓から花嫁の角かくしが見える、後からは美しい。私は此の出來事で思はずも輕いユーモラスな氣になつた。法隆寺ももう間近かで、法起寺の塔から法輪寺の塔までが見え出した。

道の順からは車は法隆寺の南大門の直ぐ傍につく、然し龍田街道を廻つて松の馬場の松並木の正面から南大門に入るが宜い。眞つ直ぐに正面から近付いて先づ伽藍の總體の感じを得る事は何處の寺でも必要な事である。南大門は永享十一年の再建で足利時代の作品である。其主要な組物の間に二ツ斗を用ひた事が、河内國の觀心寺本堂等と同じ手法で其の時代の特徴を示して居る、屋根は少し大き過ぎるが決して惡い建物ではない。されど優れた古建築に富む環境からあまり珍重されずに看過される事が多いやうだ。

南大門を潛ると正面に、松林を前にして一段高く特色のある樓門が立つ、之が中門である。其の右に金堂の反り上つた大屋根が、其左に屹立した五重塔の上部が見える。もう此邊へ來ると強い期待の念に胸がわく〳〵するのを覺え[illegible]

[illegible]の[illegible]だが中門前まではいつも[illegible]の記憶が遺る。

ちたにいつも強い刺戟を受けたもの[illegible]へつて起る[illegible]すると[illegible]は不思議である。一歩中門に踏入ると、[illegible]に全く現代を離れて仕舞ふ。時間を超絶した不思議な靜寂の感に打たれて仕舞ふ。古びた、しつかりした建物が建並んで、反つた屋根、黒づんだ朱色の柱、くすんだ灰色の櫺子窓、大きい屋根の下や廻廊の中に漂ふ暗色、此等が一緒になつて、閑寂なしかし雄大な音樂を奏して居る。夫れは靜かではあるが强い調子である。法隆寺に詣るものは先づ其の全觀を視なければならない 門も、塔も、金堂も、講堂も、其他の諸堂宇も全體として感得されねばならない。之れが第一段である。而して各建築を夫れ〳〵鑑賞する事は第二段の事である。

抑法隆寺の創始は推古天皇の十五年（西暦六〇七）である。初め用明天皇の元年天皇の御不豫により、皇后及厩戸皇子に詔して寺を建て藥師の尊像を作らしめ給はんとしたが、崩去のため果さなかつた。推古天皇、即位後皇太子と共に先帝の遺願を繼ぎ玉ひ元年工を起し、（或は六年といふ）其十五年に藥師三尊の佛像が出來、金堂亦從つて此時に成就した。其他の堂宇七堂伽藍此前後に經營されたものである。一體我國の佛教寺院は聖德太子から始ると言つてもよい。太子は夙く佛教を信した第一人である。推古朝の始より攝政として賦務につとめられた

だ。生涯に[illegible]成した。而して其十五年には法[illegible]た言ふ太子建立の七寺とは、四天王寺、法[illegible]寺、中宮寺、橘寺、蜂丘寺、池後寺、葛城寺であるが、四天王寺は物部守屋滅亡後、其田宅を沒收して、其費用で建てられ、推古天皇の元年に創立された官寺である。此處では本寺を敬田院とし其他施藥院、悲田院、療病院の三より成り立つて、今の所謂社會的設備があつた譯である。法隆寺の規模は四天王寺を凌駕して、所謂七堂伽藍の制が立ち、其宏壯華麗な事は遙かに勝れたらしい。其の堂宇の內中門、金堂、五重塔、及び廻廊の大部分が現存するのである。定に落成後年を閱する事千三百年、地球上最古の木造建築である。但し此處には多少の疑問があつて論難の問題となつて、法隆寺再建、非再建の論爭が湧き上る。日本書紀天智紀九年の條下に「災法隆寺一字無餘」とあるのが問題の始りである。記錄を信憑する歷史家達は燒失再建の說を立てる。七大寺年表には和銅三年法隆寺を作るとあるにより一層此の說は支持される。然し建築家の建築實物に立脚する論定では、此建築は當初よりのものであると見て居る。構架の技法より、或は尺度の遺制より之れは强く立證される。併し書紀の誤りであるとの反證はあがらない。書を誤りと斷ずるのはあまりに[illegible]

である。此處に於て疑問はまだ解決されないで、結局まだ未決定のまゝである。然し非再建、再建の何れにもせよ今の法隆寺の建築が、推古朝創立當時の樣式を遺憾なく傳へて居る者である事に於ては誰も異存は無いやうである。

推古の遺制である法隆寺の堂塔は極めて特異な特色を持つて居る。而して各建物の配置からして異つて居る。中門を正面にして、金堂を右に塔婆を左に双方に對峙して、其中央突當りの奥に講堂がある。後代の伽藍は正面に金堂を、其左右前面に東西双塔を對立させて、金堂の後に講堂を置いて壯重な趣を示して居るのが常である。法隆寺は斯く極めて變態ではあるが然し總觀としては大なる成果を收めて居る。後の寺院の塔は常に堂の大なるに比して小さくなるが、法隆寺では堂と塔との大さと形との釣合が具合よく對比して居る。塔が金堂に對して同等の重さを以て平衡を得て居る。此權衡は堅苦しい均齊の觀を破つて卓拔な對照を現出して、莊嚴の中に一種言ふ可からざる風趣を收め得て居る。私は此の成功を法隆寺建築計畫の中最大なものとして崇敬する。

法隆寺の建築の特色は一に建物總體の形態が安定な嚴丈な形をして居る事である。之は主として建築の建つ二重の石壇と大きな深い屋根によるのである。二に其構架が簡單で勁健な事である。三に其の屋根の軒の出大にして且勁健に反りたる事である。四に其細部の技法が特異である事である。即其柱は太くして膨みを有し、上方に細くこけ落ちて、俗に徳利柱と云はれる、希臘のドリヤ柱を想起せしむるが其曲率は強くして決してドリヤ柱のやうに洗練された形ではない。併し木柱としては或は此の位に強調する事が必要かも知れない。柱の上の大斗には皿斗がついて居る。組物は所謂雲斗雲肘木で、其輪廓の曲線は秀逸であると同時に雄勁で、其細かい繪樣までが極めて律調的である。此の雲肘木と雲斗とは連繫して一の力強い集合となつて、其支ふる簡素な、構造的な尾棰と一所になつて、突出の大なる一重棰の重大な軒を支へる。快き曲線の集合ではありながら大きな重さを支へて、強い感を與へる所に技術の神巧が秘められて居る。上層の勾欄は特異な形狀で、優麗な風があつて、反つて建物の強い調子を引き立てゝ居る。此の建築のかゝる樣式は百濟より傳へて、元來支那南北朝の系統に屬すると言はれて居る。奈良朝の建築は唐の影響を受けて、此の樣式とは異つた展開をした。其故に此の法隆寺の建築の樣式は遂に後に傳はる所が無かつた。而して日本の建築は次第に優麗に發達したため、此法隆寺の建築はどことなく異國的情趣を忍ばせて居る。

金堂は高く廣い二重の石壇の上に立つて、五間四面、重層、入

[illegible]いて居るので、其形が悪くなり且、力強いエンタシスのある肝心の柱が蔽ひ隠されてゐる。構架の手法は簡單明瞭で、構造が其儘装飾の由因となつて雄渾な感じが溢れて居る。軒の深い釣合のよい總體の形が、崇高雄壯な觀を與へて居る。手法は簡單であるが、重層入母屋であるため外觀は多少賑かな感じがする。而して奈良朝の建築は東大寺大佛殿其他の重層のものが殘存しないで、現存するものは單層四柱か兩下切妻であるため、法隆寺金堂は特に壯麗に感じられる。

五重塔も同じく二重の石壇の上に立つて構架の様式は全く金堂と同様である。各層の軒の出が非常に多く、且軸部が低くして屋根の勾配が緩かであるため、塔の總體の形は、普通の五重塔のやうに細長くなく、割合に低い釣合で、安定な壯重の外觀を以て居る。其故に金堂と左右に相對して權衡が取れるのである。而して此塔では、上程つぼまつて行く五重塔の形で、つぼまり方が大きい故一層安定の形になる。猶五層の軒が次第に小さくつぼまつて行く中で、二層四層の二つだけは、他のより心持餘計に引込んで、五つの軒を連結した線が一直線にならずかすかに折線を成して居る、こんな微細な注意が、生硬な單調を破つて美しい流動の感を與へる原因になるのかも知れない。又[illegible]軒柱の[illegible]て居る。此の手法は[illegible]方三間、二層三層は方二間になつて、同じく統一の内に[illegible]る効果を收めて居る。古人の深い用意は私達技術者にとつては特に深い感銘を與へる。法隆寺の五重塔は其の大膽な軒の出、流麗な組物、高雅な勾欄、秀麗な九輪等の諧調と、其優秀の釣合とから、一番最初に出來ながら最も立派な作品である。後世は寔に古人に耻ぢなければならない。私は金堂よりも此の塔の方が勝れて居ると思ふ。

中門は四間三面の樓門で、正面四間の中二間が通路になつて眞中に柱が建つて居る不思議な配置である。普通の門は一戸又は三戸で正面の柱間は奇數であるが、此門では偶數である。眞中から參入する儀式的な壯嚴の感から言つたら不都合だが、出入を主にする近代的の考へからは反つて合理的とも言へる。又普通の門は奥行が二面であるが此門では三面で、其爲め一層壯重な趣を増して居る。實際此の中門のやうに深い軒や、大きな屋根を持つた門で、普通のやうに二面の奥行であつたら到底斯うした莊重の趣は得られまい。此の門はやはり石壇の上に立ち、下層に比して上層が低いため形は優れて見える。手法は金堂や塔婆と同様であるが、柱のエンタシスは此層で最も効果を擧げ

て居る、簡素な斗栱が白い漆喰塗の壁に浮き上つて實に簡古な觀を呈して居る。

中門の正面、金堂と塔婆との中間の突當りに大講堂が泰然と建つて居る。九間四面の大堂宇で、其素樸雄大な感じは、優秀な金堂や塔と對比して少しも懾服される觀がない。此大講堂は本寺伽藍の中で最も廣大なもので、舊時の堂宇は醍醐天皇の延長三年に燒亡したのを、其後一條天皇の正曆元年に時の本寺別當觀理僧都が所領近江庄を代償として山城の普明寺の堂宇を求めて移建したものと傳へられて居る。數度の修理はあれど古態依然として藤原初期の建築である。簡素な三斗組で大きく蔽ふた入母屋の屋根を支へて、技巧を弄せず素樸な所がよい。並び立つ數多の優秀な建築に對しても貧弱な觀のないのは先づ優良なものと見てよいのだらう。

此等の建築を取り卷く四面の廻廊は大部分飛鳥期のもので、之も簡素な力强い手法と深い奥行、割合に大きな△子窓等で落付いた閑寂な趣を呈して居る、廻廊の講堂に近い部分は後の藤原時代で、其相違は明瞭に見學する事が出來る。講堂の左右にあつて廻廊の一部を占むる、經藏鐘樓の中前者は奈良後者は藤原期のもので之も各の特色を見る事が出來る。

私達は此等の優れた建築にゆつくり陶醉するだけの餘裕をもたなかつた。もう參詣者も絶えて、案內者も歸りを急いで、せき立て氣味であるので直ちに金堂へ參入する、金堂でもあまり落付いては居られなかつた。內部では中央三間二面を內陣として外周を廂の間とする。內陣には少しく高く、土壇を築き、中央の間に釋迦三尊、東の間に藥師三尊、西の間に彌陀三尊を安置して、四隅に四天王の像を立て、更に後方には其他二三の佛像と、有名な玉蟲の厨子、橘夫人の厨子等が配置される。內陣の天井は折上組入で、各間の佛像の上には奇古壯麗な天蓋が吊されてある、廂の間は單に組入天井である。外部では雲斗雲肘木で組立てられた組物が內部では簡單な三斗が使用されて居る。木部は內外とも主として丹土を塗り窓の櫺子には緑青を塗つてあるが今は共に蒼古な色調を呈して居る。天井格間及び支輪間には寶相華文樣を彩繪して、今は殆と剝落して居るが往古の壯麗を想はせる。四壁には又有名な壁畫が繪かれてある。

壁畫は鳥佛師の作とも傳へられ、又僧曇徵の筆とも云はれるが、勿論不詳で、たゞ白鳳期のものである事だけが諸學者の間に一致して居る。此の畫の美術的價値に至つては、日本や東洋のと言ふ版圖は超越して、世界に於ける稀有の珍寶である。此の希世の名畫も一千二百年を超す長い歲月と、近年連日の開扉展觀のため、著しく損傷して、其の彩描はあせ、其の壁體は破

發し二[illegible]つゝある。[illegible]に念にあはて出して、其保護を計つた。政府は先づ多くの學者達を集めて委員會を組織して其保存法を議したが、未だに[illegible]れて適確の方法も定まらない。一部に施された硬化法等も成績を擧げたとは認められない。更に外光線に觸れる事は漸く無いに定まつて居るので平素は白布を以て嚴重に掩つて保護し、唯春秋二季、四月一日より五月十五日迄と、十月廿二日より十一月廿日迄と白布を捲き上げて公開される。今は此の時季であるので私達は堂塔の建築美を味ふ事を第一とし、壁畫を見る事を第二の目的として來たのである。

私は正倉院御物拜觀のために用意した懷中電燈を先づ西壁に差し向けた。西壁に描かれた阿彌陀淨土の圖は、此の優れた壁畫中で最も傑出したものとして知られて居る。壁の中央に少しく高く、説法の印を結んだ等身よりは大きい阿彌陀如來が趺坐して座る、上には美しい天蓋が、下には蓮瓣の座が、而して佛の後には變つた形の華やかな屏障が描かれて居る。本尊の左右には脇侍觀音と勢至とが美しい姿態で立つ、誠に美しい彌陀三尊である。

中央の彌陀は男性として描かれて居る。其顏は色彩の變色でやゝ黑ずんで見えるが、端麗な無垢な相貌である。穩かな眉は

心[illegible]勢、結んだ[illegible]はれる。本尊を包む[illegible]き、對して印を結ぶ佛の手は實に美しく描かれて、[illegible]と技巧とを完全な結合を見る事が出來る。脇侍觀音と勢至とは女性的の半裸の像である、其姿態の少しく腰を曲げたたよやかさや傾けた首に美しさが溢る。其顏は地上美人の顏ではあるが天上の氣高さがある。女人の柔かさの中に佛の威嚴がある。滑かに落ちた肩、圓い腕、ふくやかな胸に、現身の濃艶さは認められても、總身に佛の莊嚴が備はる。此繪の美しさは又其布置からも生れる。眞中に端座した彌陀佛を挾んで、左右の脇侍は共に本尊の方に腰部を捩り上半身後に引いて均齊の姿態をとつて居る。而して本尊の佛も脇侍の菩薩も、其の半眼に開いた眼から下界を觀るやうに各の視線が下方前部のある一點に集合して居る。又上の天蓋は平たく大きく描かれて三尊を共に蔽ふかのやうな氣勢を示して居る。斯うした構圖から此の三尊の繪畫は極めて緊縮である。然しよくある三尊像に見るやうな嚴肅しい冷たさは微塵もない、此の壁畫を論ずる人は多くアヂヤンタ石窟の壁畫と比較して説く。私はアチヤンタの繪は不完全の印刷と模寫で見たばかりであるので深くは知らない、たゞ此の脇侍などの形

態に、腰を曲げた姿勢に似た所は認められるが然し果して此の繪のやうな清淨な美しさを持つかは私には疑はれる。此の繪の系統等については學者の深い研究を煩はす所が多いのであらう。今私達はたゞ此の繪の美しさを見ればよい。北壁には中央入口を挾んで左右の大壁に藥師淨土と釋迦淨土とが、又東壁には寶生淨土が描かれて在る。尚各大壁の間の小壁八面には佛菩薩の像がある。此等の壁畫は數人の畫家に描かれたものと見えて多少の出來不出來がある。小壁のものに優れて美しいものも見られるし、東壁の寶生淨土などは際立つて劣つても居る。

金堂の今の本尊は釋迦三尊の金銅佛である其の右手に安置された藥師三尊と共に所謂止利式で、飛鳥時代佛像彫刻の代表作である。簡古なアルカイツクな趣の此等の像は一寸見た所では近づき難い氣がするが、見つめるにつれて次第になつかしい優し味がにじみ出て來る。六朝の形式を傳へた硬い衣紋のひだ、不整な體軀、古拙な面貌の何處にも温味が認められないに關らず、不思議な慈悲の光が流れ出る。鞍作の馬を始め造像に與つた工人達の崇佛敬虔な柔かい精神が、硬い金銅の佛體から反映するのかも知れない。此の二つの三尊佛は其光背に有名な造像銘が彫つてある。夫れによれば、藥師三尊の方が元來此の寺の本尊で、用明天皇の御造願に基き推古天皇と聖徳太子が作られたのである。釋迦三尊の方は聖徳太子の御發病により、妃及王子諸臣等は深く之を愁へて、共に發願して、尺寸王身の釋像を造らんとしたが、未完成中太子薨ぜられて翌年に成就し、願の如く釋迦尊像並に脇侍及莊嚴具を敬造し竟つた、司馬鞍首の止利佛師をして造らしめたとある。して見ると元來本尊の藥師三尊の方が、或は其の大さが多少小なるためか、或は又他の理由によるか、何時の頃にか釋迦三尊に其正座を讓る事になつたのである。

金堂の壇上には其他優れた多數の佛像が並ぶ。壇の四隅に立つ奇古な簡素な四天王は其素樸な手法で人の心を惹きつける。其他藤原時代の吉祥天や多聞天、天平や藤原時代の聖觀音もある。しかし、餘り慾張つた日程の私達には落付いて凝視する暇も無かつた。先を急ぐ私達も、玉蟲の廚子と橘夫人念持佛の廚子とだけは見遁す事は出來ない。建築家として格別に教へらるゝ事が多いのである。而して其形態や手法からも、裝具の金物等からも既に屢々暗示を受け新しい設計に應用した事も少くない。私には恩師であり舊知であるのである。けれど今又懷中電燈を突き付けると、新しい美に打たれ、及びも付かぬ行き屆いた技巧に感心させらるゝ。

玉蟲の廚子とは人も知る其の裝飾金具の透し文樣の下に玉蟲

の羽を伏せた事より起つた名である。天平十九年二月の法隆寺資財帳には宮殿像二具一具金埿押出千佛像、一具金埿銅像とある。其名前が之れであらう。顯眞の古今目錄抄には、次向東戸有厨子、推古天皇御厨子也、其形腰細也（畫須彌坐）以玉蟲羽以銅彫透唐草下臥之（此橘寺減滅之時所造也内一萬三千佛。御高七尺）とあるが推古天皇の御所用であつたかは明かでない。此厨子は須彌座の上に宮殿形の龕を置いたもので、其宮殿は恰も法隆寺金堂の如き建築の模型であるかのやうに精巧に出來て居る。即宮殿は壇上に立ち正面に階がある、柱は角柱だが、斗組は皿板を有する大斗と雲形肘木から形成され、軒は圓桷の一軒で入母屋造で行基葺を模して居る。屋根の大棟には鴟尾を付けて居る。宮殿及須彌座の要所には漆地の上に金銅透彫の金具で一面に裝飾して居る。特に宮殿の方だけは此金具の下に玉蟲の羽を伏せ、今も電燈を借りて精視すると其破片を辨ずる事が出來る。此の金物の文様は雄勁奇巧の唐草文より成つて面白いものである。龕の内部には金銅押出の千佛像の板を張り付けてある。猶、宮殿及び須彌座の四面は黒漆地の上に密陀繪にて色々の圖像を描いて居る。宮殿の扉には二天、菩薩の像を寫し、背面の壁には多寶塔の圖があり、下の須彌座には、舍利供養、捨身養虎其他の奇古な圖様が描かれてある。此等の繪畫は油と密陀僧（一酸化鉛）とを主材とし、黄、赭、緑、青、白等の顏料を混じて油繪のやうに描いたもので、古代に於ける雄力奔放自在の趣がある。我國に現存する最古の標本として知られて居る。又各所に密陀繪の文様が描かれて居て、中には希臘風の忍冬唐草文様等もある。蓋し此厨子は意匠の奇巧豐麗な點に於て、文様の多趣な點に於て、製作技巧の行き届いた點に於て、實に稀世の珍寶である。

橘夫人念持佛厨子は今は内陣佛壇上北面の中央にある。前に引用した緣起資財帳の宮殿像二具とある中の後者であらうか。古今目錄抄には、次西方有厨子、黒漆須彌座、光明皇后之母橘夫人所造也、内在彌陀三尊、以金銅敷地作波文、中座蓮花三本、其上令坐三尊、とあり、實に顯眞の記載の通りに今も遺つて居る。併し橘夫人の所用かは定かではないが、其時分の物であらうとは推定される。此厨子は其形と、裝飾の豐麗との點では玉蟲の厨子に一籌を輸するけれど、龕安置の彌陀三尊と及其莊麗とは極めて奇巧優麗なもので、厨子としても玉蟲の厨子と別趣の妙味を有つて居る。

厨子は須彌座、龕、天蓋の三部から成つて須彌座は玉蟲の厨子と同様で一層腰細である。龕は角形で單に四隅に柱を建て上下に長押を置いた普通の構架で四面に扉を附して居る。上部は

天蓋形をなし、其様式金堂の天井の大蓋に似て居る。須彌座、天蓋は全く飛鳥時代の造制による事は明かである。此厨子は天蓋と須彌座四面の鏡板とを除き他の部は悉く漆で塗り密陀繪で或は草花文様を描き、扉には天人、四天王等を畫して居る。天蓋は胡粉地の彩色で、須彌座鏡板には同じく胡粉地に彩色で天人羅漢を描いて居る。文様には飛鳥時代と似た點があるが、此等の繪畫は全く別で、純然たる唐風の影響を認める事が出來る。

厨子の内には金銅彌陀三尊を安置する。其の意匠、其製作共に優秀である。厨子の中には下に波文を刻みたる金銅の座板を敷いて、其上に三枚の蓮葉波文の中より突出し、其先端には各蓮華がついて居る。中央の蓮花は大きく且半開に開いて上に彌陀の座像を安置して居る。左右のは花は小さく且球形に窄んで居る上に脇侍の菩薩の立像が立つて居る。其の裏に屏障がある。本尊の背に金銅透彫の圓光がついて居る。佛像の様式手法は飛鳥の鳥佛師系と新派唐式との混合と云はれるが、私は其の優しい雅味のある所に日本風の情緒の潜在するのを見逃さない。屏障の彫刻も亦何たる美しさだらう。其の意匠の富麗で自由な事、薄肉の菩薩の肉づけの美しさ、天衣や其他の線條の流麗な事、恍惚と見とれるばかりである。背屏の中央上部、彌陀の背光に相當する圓光は金銅の透し彫りで洗錬された美しいものである。此のやうに我等の祖先が輕快に驅使した流麗な曲線の使ひかたを今の私達は忘れてしまつたのである。此の厨子や佛像はたゞ其が優れて美しい許りでなく飛鳥時代の製作に新渡の唐風の影響の加はつたものとして、飛鳥と天平の間に立つものとして貴重な美術品である。

朝來私達の眼は頭はあまりに飽食しすぎた。もう綱封藏の寶物を受け入れる餘裕はなかつた。然し斷念するには未練で、切りに急きたてる案内人の後に從つた。寶庫には、佛像や工藝品が夥しく並べてある。少さい佛の美しいのもある。正倉院の御物と同じやうに、當時の文化を偲ばせる雜多の工藝品もある。而して其或る者は正倉院の秘藏と同じく獻物帳によつて寄進されたものもある。落ちついて見物すれば盡きざる興味の湧き出す事は必然である。法隆寺を訪ふいつでも、堂塔の建築を眺め、金堂の壁畫に見惚れて、いつも此の寶物をゆつくりと觀覽する暇を失ふ。而して此の次ぎこそと思つて歸る。今日も又同じく此次ぎこそと思ひ乍ら一巡りしたゞけで綱封藏を見捨てた。

法隆寺の草創は實に聖徳太子の祈願に基づく。其の太子は伽藍内廓の外東側にある聖靈院に奉祀される。今の建築は鎌倉時

代の作で、妻入造、本瓦葺で時代がついて居る。外觀は左程の事はないが、内部は其の小組格天井を始めとし、時代の特徴をよく示して居る。手法は纖麗瀟洒の趣致で、特に内陣厨子の正面の唐破風と其欄間の裝飾は其精粹である。寺院の壯嚴な趣はなく反つて持佛堂の幽雅な感がある。此の厨子には正面に聖德太子講讚の像を奉じ、左右には四人の侍者の像を安置する。私は太子が建築や工藝に貢獻された功蹟を思ひ浮べ乍ら謹んで禮拜した。

聖德太子の功業に就ては今更述べ立てるにも及ぶまい。推古天皇の治下、太子攝政として立ち萬機に參じて大に治蹟を擧げられた。憲法の制定、冠位の制定、國史撰修等の功も此間に成就した。歐羅巴の文明が基督教文化を基礎とするに對し、日本の文明は佛教文化に負ふ所が多い。太子が佛教を崇奉され其文化を攝取して我國文化の根本を培養された事は非常な功蹟である。我國文化の大恩人である。太子は幼より聰敏で、上宮廐戸豐聰耳の皇子とも言はれたやうに生來の聖智で對内にも對外にも立派な治蹟を擧げられた事は歷史の明瞭に證する所である。蓋し太子は我國史上稀有の大人物である。私の關與する建築や工藝の具體的の進步は特に太子に負ふ所甚大である。太子はたゞ年紀による創始者ではない。實際に種を蒔かれ、培はれ、而して其收穫を後世に遺された。

太子は蘇我馬子の[illegible]たる、其の[illegible]の渦瀾の中に立つ。久米博士の上宮太子實錄によれば、此弑逆の責任者は東漢直駒、嬪妃小手子嬢、馬子、其女河上娘其他の連累者であつて、太子の身にかゝつた暗雲は多少淡らいだやうだ。然し太子が馬子の天皇弑逆を默過した事に就ては史家の間にも色々の議論があるやうだ。又太子の功業を稱讚する人達は何とかして太子の責任を排拭しやうと試みて、種々の說明や辯解を加へる。然し我國體に於ては天皇は神聖である。此大義に對して名分正しからざるものは、如何に他に大功あつたとて世の讚仰を贏ち得る事は出來ない。如何なる大人物に對してゞも、正は正で、非は非である。今併し實際を想像すると、太子が彼の場合決然として立つて大義を唱へられたら、或は太子自身も危かつた事であらう。而して我等は太子の聰明英邁により開發せらるゝ事の出來た、推古朝の文化、延いては奈良朝の文化を或は失つたかも知れない。斯う考へると太子の大勢順應は或は止むを得ざる事で、又後世を幸した事であつたかも知れない。併し太子の大義名分に對する責任は決して解除されるわけに行かない。建築家として工藝に携はる一技匠である私自身は、太子があまり聰明にして大勢に順應した結果後世の批難を受けるのを惜しみつゝも、猶太子が文化上に[illegible]大なる

獻をされた事を感謝して太子を贊崇せざるを得ない。

法隆寺には猶見るべき建築としては奈良時代の食堂を始め細殿三經院及西堂、上御堂、西円堂、新堂等がある。併し就て見るにはもう時間もない。降り出さんばかりに雨雲の低く〻か〻つた夕ぐれ、特に秋の日の、私達は急がねばならなかつた。東大寺を出て東院の夢殿に嚮ふ。東院に對して今迄見て來た方は西院と言はれる。方位から生じた區別である。

法隆寺は聖徳太子と終始する。東院は元と聖徳太子斑鳩宮の舊址である。太子薨去後、蘇我の蝦夷斑鳩宮を攻めて皇子山背大兄王を亡ぼし宮殿を燒いた。其後久しく荒廢して居たのを天平時代に行信僧都の念願で、其十一年に此の廢址に伽藍が出來た、即ち法隆寺東院である。其本堂が夢殿で、之を中心として後に舍利殿、繪殿が並び其後に傳法堂が建つ。夢殿の前には禮堂があり此の一廓を歩廊で取圍んでゐる。地域は狹隘で、兩院の莊重な觀はないが、小ぢんまりして落付いた別の趣はある、或は此方が斑鳩宮址といふ思ひ出に適當するのかも知れない。伽藍の正面に南門が立つが、道途に近き關係等から此門は締切つて俗に明けずの門と呼んでゐる。參詣者は西院の東大門の突當りにある西の門から出入するのである。門を入ると直前に美しい夢殿の八角堂が建つ、私達が參入したのはもう夕方であつたので諸堂の扉は堅く閉されて居たが、内部の拜觀は上も角も の美しい夢殿や、側面の構架に奈良時代の特徴ある手法を現じて、建築上の好參考である傳法堂の建築を見やうとて構内をうろついた。西門の傍に主殿する寺男は私達を見かけて出て來たが諸堂の扉は彼の手ではどうする事も出來なかつた。彼は氣の毒さうに私達を導いて諸堂の案内をして呉れた。彼れの說明して呉れる總ては私の既に承知した事ばかりではあつたが、此の陳腐な話も、寺男の京訛りの鄙びた語調で談されると、別のまだ聞き知らぬ話のやうに珍らしく耳に響いた。彼は先づ聖徳太子について話した。彼の話す太子は私達が歷史で讀む太子とは全く別の世界の人である、彼は夢殿の前では、フエノロサ氏が熱心な根氣で寺僧を口說き落して數百年間未開張の秘佛を發いて、救世觀音の優れた推古佛を發見した、あの有名な話もして呉れた、私は夢殿の開かぬ扉の前に立つてするりとした百濟傳來の推古佛を思ひ浮べずに、白晳の立派なエフノロサ氏の面影を想起した、フエノロサ氏は實は私の先生である。私がまだ年少でお茶の水の中學校に通つた時分、其處で先生から英語の會話を教はつた、其後數年前東京美術學校の玄關前に先生を記念する壽像石が立つたとき其の設計に參劃した、フエノロサ氏の功績は此の秘佛を發見したばかりではない。氏は實に其の外

國人からも尊く崇れられてゐた日本の古代美術を發見して呉れた古美術の恩人である。

夢殿は一に上宮王院といふ。天平十一年の建立で、其の平面は八角形の圓堂で、二重の石壇の上に立つてゐる。石壇の四面には石階があつて、猶石の壇上に勾欄を廻らしてゐる。八角の四方に扉を設け、殘餘の四隅に櫺子窓を作り、柱も八角形で多少の膨みがついて居る。組物は簡單な出組で二重垂木の軒を受けて、屋根は緩い氣持のよい勾配で集中して其頂上に、美しい金銅の寶珠露盤を載せて居る。軒の反りも優雅で、全體の形態は釣合よく美しい效果を收めて居る。西院金堂の雄勁な壯嚴な趣に對して、之れは温雅な、豐麗な情緒を漲らして居る。

傳法堂は、夢殿の後に並び立つ舍利殿と繪殿との間の廊下の奥に見える。之は東院の講堂である。天平寶字五年の緣起資財帳によれば創建當時光明皇后の母橘夫人の宅より遷し建てたもので、和銅に近い建築で、奈良時代の貴族の邸宅の構造を傳へる唯一の標本として珍重される。當時の寺院建築は何れも床は土間又は石敷であるが此建物では内部に床板を高く張り、且前面に廂椽を設け、住宅建築の樣子を殘して居る。此堂は七間四面の平家で屋根は兩下切妻造で構造は極めて簡單であるが、雄大な趣がある。堂の側面に虹梁や、板蟇股や二重虹梁等の特徴あるのを見る事が出來る。

東院の建物だけを見て、次の中宮寺へ行つた。中宮寺又中宮尼寺は又斑鳩尼寺と云ふ。太子七ヶ寺の一で推古天皇の十五年、聖德太子が御母穴穗部間人のために創建されたもので、乳母二人比丘尼として奉仕したとの事で、今も矢張り尼寺である。法隆寺とは違つて此處には見る可き建築は一つもない。然し本尊如意輪觀音は、美しい佛像に富む奈良地方でも特に美しいので有名で、法隆寺に參詣する數奇者だちは必ず此處に參拜する。東院の佛像を見そこなつた私達も此の佛だけは是非拜したいと思つた。特に平素話をきゝ、寫眞を見てまだ一度も本佛を拜した事のない妻は、是非この觀音を拜したいとせがんだ。夫は寔に女人の讃崇にふさはしい優しい佛である。中宮寺では恰度御見學に見えた山階宮藤麿王殿下が御退出成さるゝ際であつた。御伴には御教導の任に當る黑板博士を始め十數の人達と大學の學生達が居て、混雜して居たが、其中に岸奈良縣技師の顏が見えたので、氏に托して名刺を通じた。

尼さんに導かれた本堂は持佛堂のやうな建物で、其厨子の中に有名な本尊如意輪觀音は安置される。尼さんのかゝぐる帳に眞黑な、なよやかな半跏の像があらはれる。何と云ふ美しいやさしい佛であらう。私達は暫時うつとりと眺めた。佛として拜

跪するには、あまりに快しい感がある清浄な慈悲の靈光に、哀愁と云はうか甘い涙ぐましい氣分になる。木彫ではあるが像はなよやかに、美しく流動して、漆のやうに黝黑な光澤をもつて居る。併し夫は金屬のやうに冷たくはない。簡素な彫像ではあるが、肩や腕の肉付けも微妙である。かるく頬にあてた右の手、半跏の足を抑へた左の手、佛像と見るにはあまりに溫かい。生きて居ると言はんにはあまりに神々しい。御顏は天平の佛達のやうに寫生的な美しさがあるわけでもない。眉間のびのしたやうに簡朴であるが、併し表情は柔かく、細かで、優しい慈愛が溢れ出る。私は顧みて弟に云つた、行つて、西歐の寺々、別してシャトルや、ランスやアミアンの本寺の彫像に、素朴な中世の人達の心に生れて、母としての慈愛と、處女としての淨らかさとを體現した、聖母の像を見るときに、必ず此の美しい觀音の像を思ひ起すならば、我等の祖先達の心に陰そみ、又我等の血に流れる特別な情緒を明かに認める事が出來るだらうと。實際何人も感受性に鋭い日本人と、美しい大和の自然との背景なしに此佛を考へる事は出來ない。萬葉の歌を口ずさむ人の同じ血が此の黑い漆のやうに光る佛中にも閃るやうに思はれる。批評家達は云ふ『按に小治田朝時の製作たるは一見これを疑ふの點なく、而も技藝頗る醇熟の域に來り、いまだかの特有なる形式の狀態を脫する能はずと雖かの法隆寺金堂三尊若しくは夢殿秘佛の佶倔生硬なるに比すれば遙に婉麗温雅の工を盡しうるに至れり、思ふにこの中宮寺觀世音像は大陸派直接の技に非ずして、幾分我民性の要求に應ぜんとしたるものならざる可らず、吾人は小治田期彫塑中の妙技と稱するに躊躇せざるものなり。』(國寶帖解說) 蓋し理屈はさうであらう。

法隆寺からの歸途はもう、たそかれであつた。藥師寺や唐招提寺の建築だけでもと思つたが、今は其のどちらか一つを撰まねばならなかつた。弟は唐招提寺と言ふので、其處の南門に廻る。二三級の石階を踏んで、南門の開放しに立つと、左右の松林に限られて正面に金堂が建つ。薄暮の淡明るい空を背景として金堂の輪廓だけが眞つ黑に浮き出す。私は曾て是程明瞭に此のプロポーションを鑑賞した事はない。深い軒と、簡素な大きい屋根とでどつしりとした影が浮ぶ。誠に心なしか、屢々批評されるやうに屋根が少しく急峻に過るやうにも思はれる。數十歩進んで、金堂正面の石燈籠の十歩ばかり前から見ると、屋根と家との釣合は全く美事である。側面に廻ると近く仰ぐ位置の關係からか、建物の釣合はまたなく美しい。側面は前方の柱列が薄明に黑く浮いて、面白い黑白の影絵を描く。もう暗くつて細部を見る事が出來ないため、反つて全體の恰好を見るには都

合よかつた。私達が建築の設計をする際にも細部は一切省略して建物の全形だけで其釣合を見る事がある。又窓と壁とだけの釣合を攻究する事もある。實は外形の研究では之れが一番大事なことなのである。私達は薄暮と云ふよりはもう暗くなつてしまつた閑寺の庭をあちらこちらとうろついた。

ホテルには弟の親友K君が大阪から來て待つて居た。此夜は別れの夜食であるので、私達の食卓には洋酒の瓶が飾られた。旅の疲勞で私の夙く寢た後でも、弟と彼の友とは遲くまで話して居た。

送別

九日はいよ／＼弟の神戸出帆の日である。夙く旅宿を出て大軌電車で大阪に向つた。電車から自動車、又電車と幾つか乘り繼いで神戸の波止場に急いだ。船にはもう見送の人達が所狹く一ぱいにつまつて居た。弟を見送りに來て與れた人もあまり大勢であつたので驚かされた。十二時出帆の豫定が積荷の都合で三時に延びたので出帆までには三四時間の餘裕が出來て、急いだ氣も漸く落付いた。此日は朝は晴れて好天氣であつたが、其少し前から空もしぐれ、風さへ激しく吹き出したので、船の前途まで多少は心配にもなり、別れは一層淋しく思はれた。人波を

付けて[illegible]長の室に行けば、船長の室も[illegible]し、[illegible]達は奈良から携へた春日神社の大麻を獻じて船長の[illegible]し、併せて弟達の海路の平安を祈つた。其室で貰つた寫眞には[illegible]長の額が大きく寫つて居た。岡田大人悲作、鵬樓雪作と書かれた篆字の手蹟は似げなくも美事であつた。船長は碧梧桐氏の門について、句と字とを好くする。後に歸京後上海から届いた繪はがきには「一殘されたばらをまたかいで捨てた」とあつた。ばらは妻が船長室の化粧に挿した花束を云ふのだ。

私は又人混みの中で友人木下君を見付けた。彼は中學時代お茶の水の學校で數年間机を並べた僚友である。併も二人共チビで級中の最末に列したため、文字通り机を並べた仲である。秋になると私はよく初茸の煮たのを辨當の菜にした。彼は其を珍らしがつたので、其後今でも初茸が食膳につくと私は木下君を思ひ出した。其後彼は京都帝大の最初の總長となつた彼の父の轉任と共に京都に移り、其處で高等學校、大學と進學し、數十年前渡歐して獨逸に留學し、大戰の障害にあつて英京に避け、留る事數年今は倫敦大學に教鞭を採つて居る。今夏家庭の用務の爲一時歸國した彼は、偶然箱根丸で倫敦に行くとの事で、弟を托するのに此上もない好教導者を得たので、萬事を彼に依した。彼は神戸から乘船したので此船で又くど／＼と[illegible]

頼んだ。眞摯な學者であり紳士である彼の一諸は、實に頼もしく思はれる。此の友と船長とに依頼して私はすつかり安心した。

突然狂つた時間の猶豫は別れを惜しむのには都合のよいやうな、又手持無沙汰のやうなものであつた。三時迄はあまり時間があるので、見送の人達には强いて返つて貰つたが、夫れでも親しい人達は遂に弟の出發の最後迄見屆けて異れた。昨の送られたもの、今日は送る身となつた。船に溢るゝ見送の客を追ひ出す合圖のドラはけたゝましく鳴響いて暫時の用捨もない。私達は再び船長の室を音づれて弟の身の上を頼んだ。神戸の出帆間際は横濱にもまして賑かな送別であつた。五彩のテープは美しい織布をのべたやうに、船と陸とを繋いだ。出發間際には雨は幸に霽れたが、風は寒く吹き切つた。別離のやるせない懐を僅かに繋いだ紙テープも無惨に吹き捲られて、もつれて、果ては吹き切られて仕舞つた。船の進むにつれて私達も人波に混じて突堤の端まで驅け出して手巾を振つた。弟も船橋の最端で之に應へて居る。僅か一二年の歳月、今日の交通機關の發達を說いて、暫時の別れとたしなむるのは理智である。しばしとは言へ別れを惜しむのはもろい凡人の情緒である。兄弟の別れですら私達の心は暗くなつた。況して親子、夫妻の別れに、紛れた心を取り靜めかねるのも無理ではない。弟の出發を見送つてれた人達は神戸でも多數であつた。弟の名を呼んで萬歲を叫んで異れた聲は、他の一團のと同じやうに勇ましく響いた。私達夫妻の他二三の彼の友人だけで淋しく見送られる事と豫期して居たのに、思ひもよらず盛大に送られてどの位彼の氣を引き立てた事であらう。私達も心强く嬉しく思つた。荒模樣に岸壁は寒かつたが、船を見送つて立去りかねたのは私達ばかりでは無かつた。私達は阪神急行の電車で直ちに奈良に引き返した。神戸の東の山手から出發する電車は海を見下す山腹を通つて居る。車窓から振り返つて望めば、海は脚下に廣がるが、船は多くて、何れとも見定めかねる。遙かに煙を吐くものを其れと假定して、僅かに氣安めにする間もなく、西に行くものと、東に馳せるものとの距離は須忽にして遠ざかつて仕舞つた。

今日は始め正午の出帆と聞いて居たので、午後は直ちに奈良に引き返して、日のある中に新藥師寺を見やうか、夫れとも大阪で、文樂座に淨瑠璃でも聞かうかと定めかねて居た。古社寺の見物は出帆時刻の遲延から不可能になつた。文樂新加入で問題を起した友松と津太夫の布引の四つ目も聞きたいとは思つて居たが弟を送つて一旦暗く淋しくなつた心にはもうそう云ふ氣も起らなかつたので、一路奈良に直行した。

數百で見送に出る中で、山階宮殿下御一行をお見受けして今夜此處に御宿泊の事を承知した。而してホテルは何時もの人々で賑はつた、鈴木知事も見えた。新納氏水木氏等の奈良の美術の主とも言ふやうな人達も見えた。夜食後大每社が殿下の旅情を慰めまゐらすため、此處の喫煙室で開いた活動寫眞を幸にも陪觀する事が出來た。寫眞には各宮殿下の新聞社御見學やら運動競技御覽の光景もあつた。蘇浙の戰の映畫もあつて、雨傘を携へて戰線に向ふ兵士の群や、演習のやうに活動する外國陸戰隊などが面白く映出された。中でも秩父宮殿下の日本アルプスで登山の寫眞は最も私達を興奮した。山嶺の絕頂を征服に案人達轉して、崇め奉らるゝ英姿を仰いだ時には、思はずも、手に汗を握つた。名のみ聞く、燕、槍高、鎗、其他の俊峰が映し出された時には氣持よく胸が開けた。戶外では荒れ模樣の空は思はぬ初雪となつたが、ホテルの中は蒸氣暖爐で暖かかつた。此夜若草山は初雪に眞白になつたと翌日に聞いた。

あなたまかせの春の酒

田中貢太郎

大正十四年の春は迎へざるに又匆匆として來た。信州の一茶は、「おらが春」の卷頭で、『目出度さも中位なりおらが春』と云つてゐるが、この茗荷谷の逸民の新年は、中位にまでもゆかないので、そこは話があはないが、ただ『門松立てず、煤掃かず、雪の山路の曲りなりに、今年の春もあなたまかせになん迎へける』と云つてゐるのは、大に我が意を得たるものがある。

由來天地の化に參して形骸の盡くるを待つてゐる『あなたまかせ』の工夫に日も是れ足りない達人の前に、門松とか煤掃きとかの正月の形式は、塵のやうなものである。あなたまかせの春に屠蘇杯をあげて、刹那の充足によしなしごとを云ひちらすも、思へば無益の戲れであるが、まだ芭蕉の『この一筋』の執着が滅しないためであらう。

酒のことを云へば大町桂月翁、毎年正月元旦には、桂月門下の人々が翁の許へ集まつて、屠蘇杯をあげることになつてゐるが、集まつて來る者も來る者も、それぞれその道に覺えのある者ばかりであるから、非常にその座が賑つて面白かつたが、翁が酒を病んで以來、時の推移にもよるだらうが、それが衰えて來たのは淋しい。

その桂月翁の屠蘇に集まつて來る門下の中に、『禁句云ひ』と云ふ渾名をとつてゐる酒徒がゐる。その酒徒は屠蘇の杯を持つと吉例のやうに、『奥さん、あんなことを坊ちやんがたにさしては、いけない、あんなことをさしちやだめですぞ、』などと家庭のことにたち入つてゆく。『先生、あの額の字は、俗字ですね、あんな字をかけちやだめです。』その酒徒は日本主義者であつた。令嬢のために買つたオルガンの置いてあるのを見ると、『あんな物を家に置くのは、けしからん、あんな物は何所かへすてゝしまふが良いです、』と云ふやうなことを云つた。

翁の家の傍にこれも桂月門下の弘田東行の家がある。ある年の元旦、彼は翁の家と弘田の間を二三回も年賀に往復して、往くたびに初めに往つたことを忘れて、『明けましてお目出たう、』と云つたので仲間の間で有名になつてゐる。その醉つぱらいは高木斐川で、私が今に四五日おきに酒を飲みあつてゐる友人である。この高木の禁句に對して、桂月夫人は初めは厭な顔をしたものだが後には、『吉例の禁句よ、』と云つて笑ふやうになつた。

震災前まで向島で芸妓を弄つてゐた高木利兵衛と云ふ老人があつた。その老人の家は美濃の笠松の酒造家で、家は伜がやつてゐた。歳はもう七十餘であつた。その老人は『高瀬社』の同人で、『俵狄てふ男可愛し酒の春』といふやうな句を作つてゐた。

それは高木老人が若い頃で、笠松で酒屋をやつてゐる時のことであつた。高木家では『正月の一日二日三日の三ケ日間に店へ來て、一升の酒を息をつがずに桝飲みにする者があれば、五兩の金を與へる、』と云ふ懸賞を出した。

すると二日の夜になつて一人の乞食のやうな男がやつて來た。

『俺が二里以内の所にゐるに、けしからんこつた、』

と云つて、もうかなり醉つて赤くなつてゐる顔を見せた。それは笠松の在の者で、家にはかなりの財産があつたが酒のために無くしてしまつて、女房には子供をつけて實家へ返し、自分は畑のへりに掘立小屋を建てて乞食をしてゐる者であつた。店

の火鉢に倚りかゝつて、物好きの酒飲みの來るのを待つてゐた利兵衛君は、

『それぢや、一升飲めるかね』

と云つた。乞食は冷笑して、

『俺は家も田も、皆飲んでしまつた男だよ、』と云つた。利兵衛君は、

『では、きれひに飲んでもらはふ、息をつかずに飲んだら、約束どほり五兩あげよう、』

と云つて、番頭に、

『一升注いで來い、』

と云ひつけた。乞食は利兵衛君の方を見て、

『金はいらない、そのかはりに醉つてるから、一息か二息は吐くよ、』

と云つた。そこへ番頭が主人に云ひつけられたとほり、一升桝になみなみと注いで持つて來た。乞食はそれを受取つて飲んだが、やはり一息には飲まずに三息ばかりついで飲んだ。

『明日は早く來て、息をつがずに飲む、』

乞食はさう云つてから蹣跚として出て來つた。利兵衛君は乞食の足許が氣になつたので、番頭の傍にゐる小僧に、

『後からついて往つてみろ、倒れるかも判らないから、』

と云つて後からついて往かしたところで、果して迚ても往かないうちに倒れてしまつた。利兵衛君はそのまゝにしても置けないので、番頭にじめ店の者に云ひつけて、乞食を擔ぎ込んで來さし、それを土間の竈の上に寢かしたが、朝になつてみると何時の間にか歸つてゐてゐなかつた。利兵衛君は乞食がまだ醉の醒めないうちに歩いてゐて、萬一間違ひでもあられてはと思つたので、店の者を家にやつたところで歸つてゐない。利兵衛君は自分の豫感が合つたやうに思つて、人をやつて彼方此方と探さしたが、何所へ往つたのか、見つかりもしなければ、その消息を知つた者もなかつた。

そこで利兵衛君は、これほどまでにしても知れないところをみると、どうしても池の中か谷川の中へはまつたものだらうとんでもないことになつたものだと思つて、水にはまつた者などの噂に耳を傾けてゐたが、しかし、それらしい男がどうとかふやうなことも聞えなかつた。聞こゑなかつたが、てつきりさうと思ひ込んで厭な氣持でゐたが、そのうちに一年の日子が過ぎて、二年目の正月となつた。

正月の一日二日三日の三ケ日は、例によつて吉例の囃賀がある。利兵衛君は店に坐つてゐると、元日の夕方になつてひよこひよこと入つて來た乞食があつた。それは忘れることのて

い御の乞食であつた。

『や、お前さんは、』

利兵衛はそれと定めてゐたものが生きてゐたので嬉しくてたまらなかつた。

『明けましてお目出たうございます、』

乞食は新年のあいさつをしたが、利兵衛君はそれよりも早く乞食が何所にゐたかを聞きたかつた。

『それよか、お前さんは、何所にゐたんだね、心配してたが、』

すると乞食は頭をつるりと撫でた。

『いや、旦那、あの時は、面目次第もありませんや、僅か一升位の酒に足をとられるなんて、わたしや、それが恥かしかつたから、あの晩、名古屋へ逃げて、名古屋にゐたんですが、今年は何時かの恥ぬぐひができると思つたので、やつて來たんです、旦那飲ましてください、』

利兵衛君は乞食の詞が非常に氣に入つた。

『さうか、それはさすがぢや、今日は目出たく飲んでもらはふ、』

利兵衛君はそこで自分で一升桝へ酒を汲んで來て乞食に渡した。乞食は桝をかかへるやうにして持ち、一方の隅に口をつけるなり、一息にぐうと飲んでしまつた。

『見事、見事、さすがぢや、』

利兵衛君は帳場にかまへてあつた水引をかけた五兩の包み一つ持つて來て、それを乞食にさし出したのであつた。

昨年の震災で灰燼になつたが、淺草の花屋敷に入つてそこの五層樓に入つた者は、その樓の下の床の間の柱に南畫の山水を彫刻してあつたのを見てゐるだらう。それはもと深川木場の富商として知られてゐた信濃屋傳兵衛、通稱をシナデンと云つた人の別莊の建物であつたのを改築したもので、南畫を彫刻したのは、堀田瑞松と云ふ彫刻家であつた。

それは明治二十三四年頃の話らしいが、その時堀田瑞松はまだ名もない京都から出たばかりの彫刻家で、銀座の二等煉瓦地にゐたが、暮の三十一日に迫つて餅を買ふ錢すらない。しかたがないので小伜を寢かして、その半纏を細君に持たして質屋へやり、それで僅の錢をこしらへて、餅を買ひ、屠蘇にする酒を買つて、形ばかりの正月のかまへ、落漠たる元旦を待つことにしたが、萬感こもごも胸に迫ると云ふ有樣で、眠くもなければ寢やうと云ふ考へも起らない。夫婦は薄暗い洋燈の傍で默然として坐つてゐた。そのうちに夜が更けて除夜の鐘が鳴り、時はもう新春に入つた。とその時、二階の雨窓をすうと開けて入つて來た者があつた。それは顏を黑い衣で包んで、片手に刀を持

つた強盗であつた。しかし夫婦はどうでもなれと云ふ捨てばちな氣があるので、平生のやうに怖くはなかつた。

『おい、靜にしろ、』

強盗は夫婦の横に來て立つた。

『聲を立てると生命がないぞ、』

瑞松は冷然として強盗の顏を見たが、何も云はなかつた。

『金を出せ、有りたけの金を出せ、』

強盗のさし出した刀は二人の眼の前にきら〱と光つた。

『私の家には、金はありませんや、』

瑞松はあざ笑ふやうに云つた。

『無いとは云はさない、さア痛い思ひをしないうちに、有りたけ出してしまへ、』

『それや無理ですよ、有ると思ふなら、二人を縛つといて何所でも探しておくれ、一錢もありませんや、明日の正月のかまへができないから、今、此所に寢てゐる小僧の半纏を質に置いて、餅と酒を買つて來たところですよ、』

『そんなことはなからう、』

『ないことがあるもんか、小僧の着物をしらべたら、すぐ判るぢやないかね、』

『さうか、それほど貧乏か、』

『貧乏ですとも、』

『さうか、』

『私は京都から來てゐる彫刻家ぢやが、仕事がないので、死なうか生きやうかと思つてるところぢや、』

『これは氣の毒だ、』と強盗はちよと何か考へてから、刀を腰の鞘に收めるなり、それをはづして、『俺は千兩の金がゐるので、急に思ひついて、強盗に入つたが、もうよした、俺を暫くかくまつてくれ五百兩持つてゐるから、これをお前にくれてやる、俺はもう五百兩の金をこしらへて、千兩にしなくちや顏が出されない、もう今から強盗に入つたところでだめだらう、』

強盗は刀を放りだして坐り、懷から包みを出した。包みの中には五百兩の金があつた。強盗は明治の初年に名を知られてゐた實業家であつたが、瑞松が決してこの名を口外しなかつたので何人であつたと云ふことは判つてゐない。その夜瑞松はその金で先づ酒と肴を買はして、強盗と一緒に屠蘇杯をあげた。

三ケ日が終ると瑞松は深川へ行つて、唐木を買ひ入れ、それでたくさんの盆を作つて、南畫を彫り、それを名士の家へ配つて、半年位して訪問して往つた。名士の家では珍らしい盆をもらつてゐるので、皆が逢つてくれた。機智に富んだ瑞松は、それ〲その名士に取り入つて日ならずして名をなした。

明治三十七年の正月、遞信屬篠田雅四郎君は横濱から汽船に乘つて北海道へ向つた。それは日露戰役のはじまつた年で、日本では既に開戰の準備に着手して、要害の地域にはそれ〴〵設備を施し、假設望樓なども設けたので、我が篠田雅四郎君も函館と福知山との間になつた辨天島の望樓手となつて赴任することになつたのであつた。

その時篠田君の受け取つた旅費が五十三圓あつた。酒徒で正月氣分の篠田君は、その船が青森に著くなり、汽船賃を引いた後の旅費を持つて郊外御原の遊廓へと足を向けた。青森まで來てしまへば、向ふは函館へ渡ると聯絡船と、函館から福知山の手前まで行く車があるばかりで、たいした旅費も入らないと云ふことを一方に考へながら。

やがて一軒の妓院に入つて、酒と女とを呼んだところで、酒も惡くはないうへに、女がうつくしかつた、

『お前は佳い女だから、他へ行かないで、俺の傍ばかりにゐろ。』

篠田君が良い氣持ちになつて云ふと

『お酒をたんとあがつてくださるなら、他へ往かないで、このお座敷ばかりにゐるんですよ、お酒をたんとあがつてください。』

と女があまたれるやうに云つた。篠田君は大きく頷づいて、

良いとも、うんと持つて來い。』

そして飲んでゐるうちに、女もチヤブ臺も銚子も室の中も、皆一樣にちらちらとしはじめた。そして渾沌たる眠におちてゐたが、何かの拍子に眼を覺ましてみると、自分は宵のままの引付けの室で、ごろ寢をしてゐるのに蒲團をかけてあつて、無論宵の女もゐなかつた。

『それぢや、飲み倒れてゐたのか。』

と思つて、顔をあげると枕頭のチヤブ臺に、銚子とビールの壜が林立してゐた。肴の丼鉢もかなりある。これを見て我が篠田君驚くまいことか 持ちこしの醉が一度に醒めてしまつた。

『こんなに飲んだ覺えはないぞ。

なるほど考へてみれば、自分の知つてゐるのは七八本の銚子と二三本のビールで、それ以上は覺えがない。

『けしからん、俺の知らないまに、こんなに持つて來るとは。』

そこで手を鳴らして人を呼んだ。

『はアイ。』

鳥のやうな聲で返事をして、宵に來てゐたやりて婆さんが入つて來た。

『おい、俺は、こんなに酒を飲んだ覺えはないぞ。』

篠川君は起きあがつて不倶戴天の仇敵のやうにチヤブ臺の上の物に指さした。

『旦那、御冗談おつしやつちやいけませんよ、御注文しない物がどうして此所へ來ます。』

『そんなことが俺に判るもんか、だけど、俺はこんなに飲んだ覺えはないぜ。』

『酔つてらしたから、お忘れになつたんでせう。後で苦情があつてはいけないと思つて、それでかうしてあるんですよ。』

篠川君はいくら云つたところではじまらない、とにかく金を拂つて出やうと思つたが、さて懐が心配である。そこで又函館へ渡る船賃と函館から先の車賃とを考へてみる。それは兩方で五圓もあれば充分であるが、わるくすると拂ひに足りない恐れがある。しかし、そこは我が篠川君である。懐を心配する一方で、ままよ世の中のことはなるやうにしかならないと云ふやうな氣持ちになつて來た。

『勘定を持つて來い、けしからん。』

と云つて待つてゐると、やりて婆さんが冷たい顔をして勘定書を持つて來た。篠川君はさすがにはらはらして手に取つてみると、拂ひはやつと足りて、殘りが函館へ渡るだけしかなかつた。篠川君はちよと當惑したが、それと一緒に頭にのぼつたことがあつた。

『函館へ行けば……』

函館の望樓には酒徒で同僚の大岡君がゐる。篠川君は居さうに勘定をすましてそこを出、その日の聯絡船で函館へ渡つて、望樓へ行き、大岡君に逢つて旅費を借り、それから辨天島の望樓へと赴任した。

我が篠川君は、かうして北海道の人となつて酒徒としての面目を發揮することになつた。赴任の翌月、篠川君は雪を踏んで福地山へ行つて、日本銀行の支店で月給を引いたが、そのまましらふで歸ることは、酒徒としての掟を破ることになる。そこで篠川君はちよとした家へ入つて、松魚の罐詰を肴にして飲みだしたが、一本が三本となり四本となつて、良い氣持ちに酔つて來たので、そこを出て二里あまりの途を歩き、辨天島へ舟の往來してゐる總社堂と云ふ所へまで歸つて來た。

『おぢさん、』

『篠川さん、』

唯ある駄菓子屋の前に十人ばかりの小供が遊んでゐたが、この中に篠川君を知つてゐる小供があつて、聲をかけた。良い氣持ちになつてゐる篠川君は、小供に聲をかけられると嬉くて、そして、その小供が可愛ゆくてたまらなかつた。

『ヤア、皆遊んでゐるな。』
と云つて、ふと見ると駄菓子屋が見えるので、
『どうだ、おぢさんが菓子をおごらうか。』
篠田君はつかつかと菓子屋の店頭へ往つた。
『おい、この菓子を買はふ、皆でいくらだい。』
菓子屋の亭主は眼を圓くして驚いたが、見知りごしの望樓の旦那であるから安心して値を云つた。
『さア、まア×圓位のもんですよ。』
『よし、ぢや×圓で皆買つた、金を拂ふ。』
篠田君は俸給袋を洋服のかくしから出して、その中に入つてゐる五十錢銀貨を七八枚數へて亭主に渡して、集まつて來てゐる小供達に、
『おい、皆、菓子を喫へ、菓子をやるぞ。』
と云つた。小供達は我れがちにと菓子箱に手を突つこんだ。
篠田君は旨さうに喫ふ小供の容を見てにこにこしてゐたが、ふと手にしてゐる俸給袋に氣が注くと、その銀貨を投げて小供に拾はしたくなつて來た。
『おい、俺がこの金を投げる、拾つた者にやるぞ。』
篠田君はさう云つて五十錢銀貨を持つて、雪の積んでゐる路の一方へ向つて投げた。銀貨は夕陽の下をちらちらと飛んで、遠くの雪の上へと落ちた。小供達は走つて往つた。小供達は貨が落ちたと思はれるあたりへ散らばつて、雪の上に手を突く者もあれば、踏む者もあつて一心になつて探しはじめた。
『オーイ、また投げるゾーウ、』
篠田君はさう云つて相圖をしながら又投げた。銀貨は子供達の方へ向つてちらちらと光つて往つた。子供達の姿がぐるぐると渦をまいた。
『オーイ、また投げるゾーウ、』
篠田君は又銀貨を投げた。さうして投げて投げて金を皆無にして望樓へ歸つて寢たが、朝起きて、俸給のことを思ひ出したので、洋服のかくしを探した。かくしの中には俸給の袋だけあつて金はなかつた。篠田君は驚いて、彼方此方と探したがもとより金のあらうはずがない。そこで手を組んで考へてみると、總社堂へ歸つて來て駄菓子屋で菓子を買つて金を拂つた記憶が朧氣に浮んで來た。とにかく總社堂の駄菓子屋へ往けば事情が判るだらうと思つて、舟をだしてもらつて總社堂へと往つた。そして、或る一軒の家の前へ往つたところで、家の中からお神さんらしい女が走つて出て來て、
『旦那、昨日はどうも、子供にありがたうございました、』
と云つた。篠田君は意味が判らないので面喰つた。そして、

[illegible]

『ヤア[illegible]の日本[illegible]日に[illegible]にどうもありがたうございました、』

篠田君はどうしても意味が判らない。そこで駄菓子屋へ赴いて、駄菓子屋の亭主に聞いて見ると、判りすぎるほど意味が判つたので、しよげてしまつた。が諦められないので、銀貨の落ちたと云ふあたりへ往つて探したが、一枚も拾ふことが出來なかつた。篠田君はすごすごと辨天島へ歸つて來た。

その宿樓には釜の良い風呂桶があつて大事にして使つてゐた。その風呂には、入る人の順番と時間とが定めてあるので、順番の來た時に入つて置かないと勝手に入れなかつた。ある日のこと、その風呂が立つて我が篠田君の入る順番となつたが、篠田君は例によつて酒を飲んで醉つてゐる。酒に醉つてゐる者を湯に入れてはわるいと思つたが、それでも順番であるから知らすだけは知らさなくてはならぬ、小使は篠田君の所へ來て、

『篠田さん、お風呂の番ですけれども、』

と云ふと、

『入るよ、湯に入つたらさつぱりする、』

さう云ふかと思ふと篠田君ふらふらと起きあがて湯殿の方へと往つた。小使も入つてはいけないとも云へないので、後からついて[illegible]に驚いた、我が篠田君は溫袍のままで入つて、[illegible]あたせて悠然として坐つてゐる。

『ひやツ、篠田さん、溫袍のままぢやありませんか、あんたは、』

小使はあきれて叫んだ、篠田君はその聲に氣が注いた。

『うん、溫袍か、』

『うん溫袍かぢやありませんよ、溫袍へ湯が浸みたら、ちよと乾きませんよ、』

篠田君は溫袍をづぶ濡れにして桶から出て來た。

『おい、お前が乾せ、一枚しかない溫袍を濡らしちや困るぞ、』

桶の湯は溫袍に浸みてすくなくなつてゐた。小使の聲を聞きつけて集まつて來た者は、釜を痛めないやうに水を足したりした。我が篠田君のその日の失敗は、非常た安價な失敗であつたがその次にやつた失敗は、恐るべき高價のものであつた、それは醉つたあげくガラス戸に頭を突き當てて、頭を破れたガラスの間に入れて大怪我をしたことであつた。が、天この好漢を捨てず、すぐその傷も癒えると共に内地へ轉任になつたのであつた。

篠田君の逸話は、篠田君の朋友で私の俳友である大槻鶴卿君から聞いたものである。

就職に惱む青年と馘首された老人との對話

生方敏郎

所　都會の場末の或カフェーの片隅。

時　現代、寒い冬の夜。

人　神經質さうな青年と遲鈍さうな老人。

青年　寒く成つて參りましたね。何か暖い物でも取りませうか。

老人　いや。私はさう寒いとも思はん。君欲しければ注文なさい。

青年　紅茶でも。ちよいと。おい。お花さん。ここへ紅茶を二つ。

女給　お召しでございますか。

青年　ああ。ここへ紅茶を二つ。

女給　はい。

青年　あ。それから、ストーブに石炭をもつと入れておくれ。寒く成つて來た。

女給　はい。

老人　それでは、君も仲々若いに似合はず、苦勞したね。まだほんの初まりだが。

青年　ええ。今も、まあ、それですから、ちつとも呑氣ぢやないんです。更けて來ましたね。外は大變靜に成つたやうだ。

老人　なに、まだ、さう遲くはあるまい。

(女給紅茶を運んで來て)

女給　ミルクをお入れいたしませうか。

(青年だまつて頭を振る。女給老人のコップにだけミルクを入れストーブに石炭を足して去る)

老人　それで職業紹介所へ行つてみましたか。

青年　まだ行つてもみませんが、何れ行かねばならぬやうに成るかも知れません。併し行つたとて、到底ムダでせう。求人は少く求職の方はずつと多いのですから。

老人　しかし、我儘を言つて、いつまでも遊んでゐてもつまりますまい。

[illegible]

るなら、何でもする積りでゐます。それでも口が無いんです。

老人　何でもやるとは口で言ふけれど、いよ／＼と成ると、何でもやれるなんてものではないよ。勤め口が見付からなくてぶら／＼してゐる時分には、誰しもそんな風に考へるが、いざ奉公人と成つてしばらく腰辨をやつてみると、いろ／＼癪にさはる事件が出て來るものさ。さうして結局すまじきものは宮仕へ、などと變に悟るやうに成るよ。だが、君のやうに一度も奉公したことの無い人間には、その苦味は分るまい。

青年　僕は不幸にして、その宮仕への苦味さへ之を味はふの光榮に浴しないのです。全くの話が、何の爲す可きこともなく、下宿屋の二階にぶら／＼して暮す位、有爲の青年にとつて、心苦しい經驗は有りますまいよ。

老人　その暇を利用して、大に遊蕩したら何うです。少くとも芝居を見たり活動を見る位のゆつたりした心持には、成れませんかね。

青年　そんな金も無いし又心の餘裕も有りませんね。何處の會社なら會社へ何時々々から入社出來ると、チヤンと確定してゐるなら、それ迄の間、何んなことでもして樂む心持に成れませうが、僕みたいに、ただ何の當もなしにぶら／＼してゐるの

[illegible]

老人　そんなものかなあ、[illegible]て却つてサツパリした樣な氣がしないでもないですがなあ、君は職を求めはじめてから、何の位にお成りです。

青年　いや、ずゐぶん長いですよ。學校を出たのは、もう去年の夏のことですから、かれこれもう十五六ケ月もぶら／＼してゐるわけです。

老人　なに、十六五ケ月。それが君にはそんなに長く感じられますかな。さうしてみると、遊んで暮す者は幸福なものだ。私のやうに年が年中朝から晩まで勤めに束縛され、仕事に追はれ通して來たものには、三年や五年は短い夏の夜の夢のやうなものだつたよ。私は年月の早く去るのを悔んでゐるのだが、君はその反對に年月の長いのにくたびれてゐるらしい。では、君は學校出身なんですか。そりや、世の中を渡るに大變な强味だ。

青年　ところが、何うして、それが些とも强味どころの話ぢやないんですよ。ヘツポコ學校を卒業したものは、無學のものより却つて厄介です。

老人　そりや、また、何うしたわけで

青年　生仲、學校なんか出てゐなければ、湯屋へ行つて頼めば三助にもして貰へる。お葬式の旗をかつぐことも出來る。移

口商人にも成れる。經路の工夫にも何にでも成れます。

老人　それが學校出だと何うして出來んものかね。

青年　こちらは出來ないことは有りませんが、先方が使つてくれないんです。工夫に成ると云ひましても、學校出の青びやうたんぢや迚も鶴嘴は持てまい、と云ふし、三助にならうと云つても、してくれません。たま〳〵法學士で巡査に成つたものでもあらうものなら、直ぐ新聞の種にされて、世間で問題にしてしまひます。さう成ると、もう何んだか注意人物みたいなものに出來上つてしまつて、後で何んとも困る相です。

老人　そんな事も有るかなあ。それで、君も巡査を志願してみたのですか。

青年　僕は巡査志願はしなかつたけれども、若し學校出でなかつたら、スリにでも巾着切にでも自由になれるところを、我々は巡査にすら平穩無事には成れないと思ふと、つく〳〵情なくなります。そんな下らない束縛さへ無かつたら、僕等の友人にはいよ〳〵困れば牛太郎にでも易者にでも成るんだが、と云つてるものも有る位なんですが、自分にも學校出は浮つかりした職業に就けないので、閉口します。

老人　うん。そりや、併し、君、贅澤だよ。學校出といふことが邪魔になるなら、そんな邪魔物は溝へ打捨つて、素裸の自分に成つて働くのでなけりやあね。とは云ふものの、私なんかも、若い時分は矢張り贅澤なことを云つたものさ。君たちと違ひ學問も何もないくせにな。これで仲々威張つたことを云つてたもんだよ。それにしてもまだその時分は、探せばぢき何かしら職業に有り付くことは出來たね。無論、その時代にも、就職口が容易に見當んで、ぶら〳〵してゐる樣な人たちも有るには有つた樣だが。そりや、今の時代のやうなことはなかつたなあ。

青年　へえ、昔も矢張就職難の人は有りましたかねえ。

老人　有つたともさ。

青年　それは例へば何んな人たちでした。

老人　昔は何より賄より引と云ふことが、一番大切での。何うも引の無い者は、何うにも仕樣がなかつた。

青年　そりや、今だつて同樣ぢやありませんかね。今も相當の縁故を社會の有力者と結んでゐる人たちには、就職難なんてものは見舞はないでせう。たとへば自分のお父さんの友人が會社の重役をしてゐると言つた樣な場合なら、そこへ入れて貰ふことには、別だん骨は折れますまい。たゞ僕たちみたいな、田舍から出て來て、東京に何の縁故も持たない者は、學校から方々へ紹介して貰ふくらゐなものなんだから、仲々捗らないのでせう。

老人　そんなものかなあ [illegible] るなら、雇ひ入れる方でも、却つて個人の紹介よりも、よつぽどよさ相なものだが、さうも行かんものかな。

青年　決して學校の紹介だから惡いといふことはないのです。併し、世間の需要が少いのに、學校出の卒業生は多いのでせう。それだから仲々學校の紹介くらゐではダメですよ。

老人　でも、學校から特別いゝ紹介狀を附けて貰つたら、よかり相なものだが。

青年　それでもダメです。といふのは學校の紹介狀は實に餘り好すぎるのです。學校の校長からの紹介狀に依れば、卒業生は一人として學術優等品行方正でない者はないのでせう。だから、紹介狀を受取る方の雇入れ先きの會社でも銀行でも、新卒業生の學術優等品行方正には、あんまり慣れすぎてしまひ、もうそれくらゐな能書では、何の感じも起さないらしいのですね。

老人　そいつは、お終ひだね。君等のやうな新進氣鋭の若手ですら、さういふ良い紹介狀も役に立たないところを見ると、私みたいな老ぼれが之から新規に口を見付けるのは、とても出來ない相談だらうな。

青年　さうかも知れません。僕も之で仲々方々歩いてみたの

[illegible]

その年の卒業生をまだ大分遊んでゐるやうですね。それにもう學生の間に就職のことに氣づきましてね。

老人　うん。そりや、お若いに似合はず、よく氣が付いたものだ。

青年　自慢するわけぢやありませんが、本當のことですから、お話するんですが、僕たちは友人とも相談し、まだ學生の中から、あちこち先輩や友人を訪ねて、口探しにかかつたのでした。

老人　なるほど。

青年　しかし、いよ〳〵先輩なんかを訪ねてみると、全く癪にさはる事ばかりで、もう其時から、世の中つて、實にお話に成らない厭なところだつてことが分りましたね。

老人　どんな事が有つたい。

青年　どんな事つて、とてもお話にならないことです。或る[illegible]師の紹介狀を貰つて、出版業をやつてる先輩を訪ふてみたのです。忘れもしない、夏の小雨のしと〳〵と降る日でしたよ。門を入つて玄關の動きの悪い格子をガタ〳〵させて明けてゐると、はやその音を聞きつけて、大分かつ揺ひとでも考へたのでせう。下女が出て來て迚散臭い顔付をして、こちらをぢつと見て

ゐますから、これは恰度いゝところと思つて、懐から紹介狀に自分の名刺を添へて出しましたよ。あ、さう〳〵、その前にまだありました。僕は女中を見た時ですね。すぐ訊いてみたんです。（御主人は御在宅ですか）つてね。

老人　乾度留守だつたね。そんな用事で人を訪問すると、大抵留守なものだ。居ても留守を使ふ奴が多い。

青年　ところが、そんな平凡な話と違ふんです。まあ、お聞きなさい。下女の曰くですね。主人は在宅でございますが、お目にかかりますか何うか分りません、と云ふのです。居留守を使ふから見れば正直と云へるが、ゐても會ふか會はぬか分らぬと云ふんですから、ずゐぶんこちらの人格を蹂躪した話ぢやありませんか。

老人　左様さ。押賣か何かと間ちがへたのだらう。間ちがひの無いところ確に押賣だつたんだからな。

青年　女中は紹介狀と名刺を受け取ると、僕を待たせたまゝ奥へ入りましたが、容易に出て來ませんでしたよ。しばらくしてやつと出て來ると、（こちらへお上り下さい）と云ふから、では矢張面會の許可が出たのか、と思つて靴をぬぎ、玄關――狹い、さうだ二疊か三疊の間でしたよ。そこへ上つて、帽子をそこの釘にかけて、更に奥の座敷へ案内されることだらうと思つて、僕はつつ立つたまゝでゐましたね。けれども下女君は僕の前の何の襖をも開かないんです。そして手に持つてゐた坐布團をそこへ置きましてね、僕にそこで待つやうに云つたのです。僕はその坐布團に乘るには乘りましたが、固く成つて坐つて待つてゐました。それは大方、今、奥の客間を片附けてゐるか、又は主人公が用事を足してでもゐるのであらうから、それがすみ次第、いつ先輩氏が襖を開けて「ヤア」と云つてにこ〳〵した顏で出て來て自ら私を奥座敷へ招じ入れないとも限らないと思ひましたからね。それで體に一寸の隙もないやうに膝さへ崩さず待つてゐました。

老人　今時の青年には一寸珍らしい形だね。

青年　それはこちらも一生懸命ですもの。他の事と違ひ將來のパンの問題ですからねえ。すると何うです。さあ、私はずゐぶん待ちましたね。いつ迄待つても主人公が見えないから、之はことに依つたら、自分のここにゐる事が或は忘れられてしまつたか、又は下女の取次方が悪いので、最初からよく先方へこちらの事が通じてゐないのかなどと、心配しはじめました。

老人　しかし紹介狀がすでに渡してあるのぢやないかい。

青年　そこです。僕も又考へ直してみて、そこに氣が付いたものですから、又落着いてまつてゐました。さうする中に僕は足

にしなれを切らして何度か坐り返したりしてゐますと、不意にすゝ〳〵と襖が開きました。しかし襖を開けたものやら、その開けた人の姿は見えませんでしたが。

老人　まるで化物屋敷へ行つたやうだな。

青年　いえ、それ以上の不思議です。で、僕は起つて行かうかと思つて前を見ると、闇からずつと離れて奥に桐の長火鉢が見えるのです。勿論、鉄瓶が乗せてありましてね、口から湯気を噴いてゐます。その向ふに額の廣い、そして頭も少し禿げてゐたせいでせう。何だかてか〳〵してゐました。成金然たる、年齢五十歳位の男が、安坐をかいてゐるのでせう。少し體を前かがみにしてゐましたから。僕が起つてその坐敷へ行かうとすると、彼はやおら手を少し出して、押へるやうにして止めましたね。（そこにゐなさい）つて。

老人　はてね。大抵の場合なら、（こちらへお入り）と來るところだが。うん、少し勝手がちがつてゐるね。

青年　大ちがいです。それ故、僕は之が即ち先輩氏だと思つたので、一つ輕いおぢぎをしました。初對面の挨拶の意味で、すると、先輩氏は鉄瓶を取り急須へまづ湯をつぎ乍ら話しかけましたよ。

老人　ふん。

青年　曰くですね[illegible]

ですゝ今〳〵[illegible]

さうない）こして[illegible]来まつい、

下女を呼び、一つの[illegible]ました。に

は閑[illegible]しに[illegible]のたゝみを[illegible]してゐるのです。その光景は今尚ほ私の眼には明らかですが、あなたにもそんな光景が想像されますか。

老人　うん、面白い場面だな。君も将来に出世して、この珍談を笑ひ話の一つにしてやるさ。

青年　そりや、出世すりや、之も笑ひ話の種でせうが、今以て奉公口さへ見付らないやうた調子で行くとすると、之は永久に笑ひ話の種とならないで、屈辱と憤怒の素因なりませうね。

老人　その後何うしました。

青年　それからですね。先輩氏の曰くですよ。（さうして君の専門は何だい）（私は英文科です）（ふん、英文科か。まあ哲学科出よりや幾分役に立つな）幾分役に立つといはれたから、こちらも幾分讃められたものとの思つてゐると、その次へ來て（だが、俺のとこの仕事は通俗文科に關する出版だから英語讀みの男にや分らんのだ）といふのです。

老人　高飛車に御託宣遊ばしたものだな。

青年　そこで之は僕を斷るつもりなんだと思つて、すぐ退き下らうとも考へましたが、一寸踏付けられたやうな氣がしたので、辨解したくなつたんですね、僕もよせばいいのに（それは英文科はやつたけれども、日本の文學だつて丸つきり讀まなかつたわけではなく、尙ほ日本文學を讀んだ方が多い位です）とやりました、すると今まで傲慢ではあつたが御機嫌でゐらせられた先輩氏の虎鬚に觸れたものと見えまして、（そんな講釋はせんでも分つてゐる）と一喝しましたよ。分つてるなら、初めから、あんな侮蔑的言辭を弄さなければ宜かりさうなものを、分らんことを云ふから辨明してやれば、今度は講釋は止せ、と怒鳴る。雇ふ方といふものは、ああ迄、勝手なものかとしみ〲雇はれる者の悲哀を感じましたよ。

老人　まあ、それや、煽動でこき使はれても結果は同じことだがな。意久地無し野郎だと思へばこそ侮蔑するんだが、バカ野郎と見れば煽動るだけのものさ。

青年　さうですか、ぢやあ、僕はバカに見られずに、やくざ者に見られたんですね、そりや恐らくバカと見られたより恥辱だ。

老人　それつきりの話かい。

青年　いゝえ〲、何うして、まだ有りますよ。僕もすつかり先輩氏の御機嫌を損じてしまつたら、之で脈が無いものと覺悟した時に、何う思つたか、再び先輩氏は穩やかな顏に返つて、（よし〱。俺のところじや、牛込大學卒業生を使ふことにしてあるから、お前も歸つて履歷書を持つて又來い。）そこ迄は上等だが、その後に何うです。（國文學院出の頭のいゝ奴が二人ゐるから、君等はどんなガラクタでもいゝんだ）と來ましたね。

老人　緣日で植木を買ふ奴がさんざケチを付けてから買ふのと同じ心理だ、むやみと植木を讃める奴は決して買はないもんだ相だよ。

青年　成程、あなたみたいな年取つた經驗の有る人は、さういふ諦意な判斷をなす餘裕があるでせうが、僕等若い者はダメですね。ケチを付けられゝば、たゞ腹を立つだけです。

老人　やれ〱。それでその口を捨てゝしまつて下されたか。

青年　僕を紹介した先生も、あなたと同じやうなことを言つてすゝめて下さいましたが、僕は行く氣に成らなかつたから、止めましたよ。其處にばかり日が照りやしないと考へましたからね、糞でも食へ、と云ふ氣もありました。

老人　その氣慨があれば、先の屈辱を後に笑話の種とすることができるだらうよ。

青年　いや、そんな[illegible]氣慨があるになれで、[illegible]更に屈辱の上塗をしましたよ。

老人　さうさ、氣慨のあるといふ事はサラリーマン階級には身の毒かも知れんね。氣慨のある奴に限つて誠に成る。

青年　あなたなんかも矢張氣慨が有りすぎる爲めに。やられたのですね。

老人　なあに、私のはあんまりお人好しのためさ。お人好しも勤人階級には禁物の性格だ。お人好しは昇級の時には後廻しにされ、その代り馘首の際には一番先きにやられる。うん、それから君は何うしたね。

青年　恥の上塗をして廻りましたのさ。その事が有つてから間も無くの事です。或日中學時代の教師に道で會ひましたところが、その教師が新聞社へ世話をして下さいましたよ。新聞社の政治記者をしてゐる某氏へ宛て紹介狀を書いてくれたんです。そこで僕は新聞社を訪問してみると、今外出してゐるが、大抵毎日正午前後に來れば居ります、と受付の爺さんが敎へてくれたのです。で、翌日その時間に行きますとね、果して本社で會つてくれましたよ。汚くて狹い應接室でしたつけ。これからして全く僕等の想像を裏切りましたね。でも僕は新聞社なんてずゐぶん立派なところとばかり思ひ込んでゐましたから。

老人　[illegible]

青年　さうです。そこでその人に會つてみますと、既に中學にゐた時分僕を紹介した教師の家で、一度會つたことの有る人でした。その時には吾々學生などにも大變可愛な人で、いろ〳〵將來の志望を訊いたり又我々の前途を勵ましてくれたりした人でした。それが求職の爲めに會つた其日は、全く前とは別人かと思ふほどいやな顏をしてきました。しばらく應接室に僕を待たせてから、コツ〳〵靴の背をさせて入つて來まして、につこりして、ごく簡單な挨拶をしたと思ふと、（今日は一寸これから外出せねばならんので、誠に失敬ですが、何うか面會は五分間にして下さい）と卒直と云はふか、そつけ無いと云はふか、そんな斷りを云つて、僕から手短に志望を聞きとり、（兎に角履歷書を持つて來て貰ひたい、それから何か書いたものでも有つたら見せて貰へると、話を進めるに甚だ好都合だが）と云はれた。そして、それから先きは唯こつちの話を聞くばかりで自分からは一言も話されない。大變忙し相に見えたし、初めから五分間といふ約束も有つたことだから、その日はそれでお暇しました。

老人　さう〳〵。我々も何處へ入るにも、一々履歷書を書かされるには、ずいぶん閉口したものだつけよ。殊に私らのは惡筆と來てゐるから。

青年　全くですよ。學校にゐる時分には、字なんかどうでもいいと思つたし、それに何だかバカな奴ほど字が巧いやうに見えたので、僕等も字の下手をむしろ自慢にしてゐたところが、矢張履歴書を書く時に成ると、惡筆はいけませんね。書きそこなつたり、又は拙く出來たりするんで何度も〳〵書き直してゐるから、一通の履歴書を書くのに一日かかつて漸く出來る位の骨折でした。文章の方は恰度なぐさみに書いた三十枚ばかりの外交問題を論じたものがありましたから、それを添へて、更に新聞社を訪ねたものです。その時はほとんど何の話もせず、先方を煩はさぬ樣に書類だけを手渡して引取りました。さてそれからは毎日、今日は入社の知らせが來るか、明日は採用の報知が來るかと、首を伸ばして待ちましたね。その日の經つのの長かつたことつたら、眞に一日千秋の思ひでしたね。

老人　さうさ。良いことを待つ時間は長いものよな。そのくせ歳に成るのなんかは思ひも寄らぬ時にさへ來る。電光影裏斬春風といふ味だから怕れ入るよ。あははは、何かにつけ、兎角我儕のグチが出るやうだが……。時に、それから何うしましたい。

青年　全く待てど暮せど便り無しです。それで、もうとても我慢し切れなく成りましたから、押しかけて行きましたよ。そしたら、その記者先生、落し物をした樣な、驚いた樣な顏をしてましたつけが、僕に向つて曰くですね。(君、體がお弱さうですね)と云ふのです。僕はごらんの通り痩せてはゐますが、病氣は殆んどしたことの無い男なんです。ですから(いえ、そんなに弱いことは有りません)と答へましたね。すると尚ほ記者先生は(しかし、あんまり御丈夫相には見えませんね)と押し返して訊くのです。で、僕は(さうです、さう頑丈といふのやだ有りませんが、これでも病氣したことは滅多に有りません。)(何うですかね。)といやに人の言葉を疑つたりして、そして(何うも此職業は體が頑健でないと勤らない商賣でしてね。あなた方素人の御方は、机の上で作るもの、文章が巧ければいい樣にお考へでせうが、實は文章なんて何うでもいいんで、新聞は僕より足で作る時代に成りましたからねえ)と云ひやあがる。

老人　なあに面の皮に出鱈目を混合させて製造するものだ。と云つてやりあよかつた。

青年　で、たうとう體が頑健でないから、といふ口實の下に断られてしまひました。少しもこちらの健康診斷をしたわけでもないのに。

老人　なあに會社に依つては、身體の目方を聞いたりする相だ。まるで相撲取の弟子でも取る樣なわけだ。あははハハハ

[illegible]

キズを付けて[illegible]免職されます、[illegible]過ぎますた

老人 [illegible]ないばかりか、[illegible]〳〵[illegible]従つた[illegible]て、キズを付けて馘にするのが近頃の流行さ。以前には、馘首なんてよく〳〵の場合でなければない事だつた。

青年 さうでせうねえ。近年に成つて求職者が激増した結果でせうね。

老人 それも原因の一つだらうが、兎に角、雇ふ方も雇はれる方も薄情に成つたんだな。一般の人情がここ十年の間に、恐ろしく變つたよ。以前には、免職されれば大恥辱だつたが、その代り免職なんかは、金でも盗んだとか賄賂でも取つたとか酒を飲んで度々亂暴するとか、迚もひどい人間でなけりや、免職することはなかつた。それが、この頃ぢや當り前のことに成つてしまつて、馘首されても恥でも何でもない。少しでも餘計首切り手當が出さうだと、却つてこつちから志願して免職される。全く、變つた世の中に成つたものさよ。

青年 あなたなんかは、最初就職した時から數へたら、今度お止めに成る迄、ずいぶんお役所に長くゐられたわけですね。

老人 いや〳〵。私はまた免職の方の博士でね。また私くらゐ何處へ行つてもよく馘られた人間は、あんまり有りますまい。

[illegible]た

青年 ありますとも。首つ[illegible]上〳〵してきたさ。

老人 君は、最初から聞けば、就職に困難されてゐるやうだが、私はまた何うしたものやら其の方はさう骨折らずに見付かるが、勤めても長つづきがしないで、三年五年、短いのは半歳くらゐで首に成り又は自分から止めたのもある。

青年 最初入つたところにずつとゐられたら、ずゐぶん樂してゐたでせうにね。

老人 なあに、長くゐても出世するとは限らんよ。五十年勤續の大臣てえのは無いけれども、五十年勤續の小使だの五十年勤續の女中だのといふのは、よく有ると見えて其表彰されるのが新聞に出るぢやないかね。

青年 さうしてみると、あまり長年の勤續も幸福とは云へませんね。

老人 さうさ。私の友人には可惜一生涯を判任官で留まつて判任官で終つた男が有るよ。何だか此世へ判任官に成るために生れて來たやうなわけさ。私もあの男と同じやうにしてゐたら、矢張同類の判任だつたらうよ。何年ゐたつて、我々は出世なんぞ

しつこないさ。今更もうそんな野心も何もないから、一生判任官でも平氣だが、若い時分は之でも野心滿々でのう。藩長閥族の奴らばかり昇給すると、とても悶々しくてぢつとして居れんかつたのだ、まづ第一回の仕官は不平で辭めた。次には學校の教師をしたが師範出の何も知らん校長が新たに來たので、こいつと議論して止めなければならなく成つたので辭職した。今は人間が悧巧に成つたから、まさか上役と議論して止めるコケはなからうが、あの時分には幾らも仲間が有つた。議論してもしないでもいい様な詰らん事を議論して辭職する。それが仲々自分でも痛快でなあ。一般からも男子として潔よいことゝ考へられてゐたんだ。

青年　ずゐぶんいろんな仕事をおやりになりましたね。

老人　やつたねえ。外國商館の小使をやつたことも有れば、三月ばかりだが坊主に成らうと思つて身延へ行つたこともある。うん、それから新聞記者をした經驗もあるよ。

青年　新聞社は何うです。面白いところでせうね。

老人　うん。そりや面白い。何しろ豪傑揃ひのところだからの。併し馘られる段になると、新聞社くらゐ無慈悲なところはあるまいよ。そのくせ馘首は年中やつてる。殆んどのべつ幕なしだ。毎月の様に編輯室の壁に、（誰々誰々君は此度退社被致候）と認めた貼紙がしてある。

青年　あなたがやられた時の模樣は何んなでした。

老人　いやはや、言語同斷、全くお話に成らない。新聞社では、何處の社でもさうだが、中にいくつもの黨派が有つてな。それが常に互に嫉視反目してゐて、一寸でも勢力の均衡が取れないことがあると、直ぐ反亂が勃發する。クウデタアが行はれる。と云つたもんだ。それは恰度私らの方の親分が社から洋行を命ぜられて、ロンドンへ行つた留守中のことさ。

青年　クウデタアがあつたのですか、

老人　クウデタアもクウデタアも、それは素敵な目に合はされた。我黨の士は一網打盡に全部社から追拂はれ、又は無勢力な閑職に祭り込まれて、手も足も出ない。

青年　ははあ、その時ですね。

老人　ところが免職された連中を顧みろと、成程皆一つ二つはキズを持つてゐる。自分の懇意な文士に原稿の執筆を依賴して、金は前金で渡して置き乍ら、いつ迄しても原稿が出來て來ないので板挾みに成つてゐるのや、匿名のつもりで他所の雜誌へ社の內狀を暴露したところが、先方の編輯者がヘマで、うつかりこちらの本名を印刷した爲めに社の裏切者として一番先きに血祭りに上げられたのや、待合で無錢遊興をしたのが露見したの

[illegible]にこつたわけさね。

青年　あなたも何か決點を見付けられましたか。

老人　ところが僕にも、そのキズが無い。そこで反對派の計略に乘せられてしまつた。

青年　計略つて何んな計略です。

老人　なあに詰らない計略さ。金、子供だましみたいなものなんだが。それでも私は乘せられたね。皆が馘首される前の晩さ。灰色の社員が一人私の自宅へ來やがつてね、今度内密で社で君を馘首するといふ噂がある。理由つて別に無いが社の經費節減の爲めの冗員淘汰なんだ相だ。と云ふのさ。それを聞くと私は持前の腹が立つてね、私を免職するなんて實に怪しからん、經費節減の方法は他にいくらも有る。我々社員を一片の斷りも無く無暗と馘首されて堪るものか。我輩は馘首される位ならむしろ潔く辭職する。と怒號して直ぐ其場で辭表を書いて社へ叩き付けてやつた。併し後で聞いてみると私はバカな事をしたんだね。大人しくしてゐて向ふから首切られるのを待てば、三ケ月や四ケ月分の月給は涙金として貰ふことが出來たんだ。現にその時馘首された連中は、少しづつだけれど皆貰つた。何も貰はんのは私一人さ。

[illegible]ねえ。

老人　ある〱。私もその時初めて知つた。[illegible]いい人は上手に馘首されて置いて直ぐに他の會社へ入るなら、馘首手當だけは丸儲けだ。一年の中に[illegible]つて、[illegible]馘首[illegible]ついた。私の知つてゐる男にもあつたよ。又[illegible]學教授を止める手當として博士にされた者もある。世の中はいろ〱だ。

青年　さう聞いてみると、馘首も左迄恐るるには足りませんね。

老人　何うして〱、そんな理屈はない。サラリーマンは馘首されたら、丸で木から落ちた猿も同樣だ。その惨めさ加減と云つたら無いぞ。私は今以て忘れん。初めて罷められた時の苦痛をな。罷められたことが親族朋友に知れたら何うだ、といふ羞恥の苦みと、今持つてる少しの貯へが盡きたら乞食に成るより他はない。といふ樣な生活上の不安と、いや、それは〱[illegible]悶したものだ。無論、その晩は酒を飲んでぐで〱に醉拂つて寢るは寢たが、眼が覺めちや、矢張その事が一番先に頭へ來るよ。それから何度も就職して何度も馘首されたが、馘首はいつだつて好い氣持はしないさ。奉公も樂ぢやあないが、浪人の

生活はそれどころぢやないからな。一仕事初めたいにも資本は無し、と云つてまさか筋肉勞働はつとまらず、たゞぶら／＼家にゐて講談本か雜誌でも讀んで日を送り、買ひ度いものがあつても見たい物があつても、妙に氣が小さく成つてゐて出懸けて行く氣にも成れない。そのくせ懐にはまだ多少の金を持つてゐながら、後金の入るあてがないから、持つてる金を使ふことも出來ず、一文無しの乞食よりは、もつと憐れださ。

青年　さういふ點では僕等も矢張同じことですよ。取るあての無い間は安心して使へないものですね。人は、使はないから取れないんだ、とも云ひますけれど、だから、僕等就職難の連中も乞食には劣ると思ひます。乞食は毎日幾らづつは收入が有るせいか、呑氣さうな顔をして街を歩いてゐますが、我々と來たら、一圓の金も取る機會がなく、大學まで出てから、まだ送金しろと國元へ云つてやるのは羞ぢますしね。同級の友人達に口が見つかつて、就職するのを見ると、(お目出度う)とは口には言ひますが、實に胸さはぎがして變な氣分に成りますね。それが若し嫉妬であるとすれば、如何にも、淺間しい話ですが。

老人　そりや、馘首の時にも同樣だ。自分だけ首に成つて友人が切り殘されてゐるのを見ると、(まあ、君だけでも助かつてよかつた。我黨の爲めに一つしつかりやつてくれ給へ)と口には笑つてゐても、心中あまり平かでないよ。だからサラリーマンの心理なんて淺間しいものさね。

青年　知識階級の悲哀ですね。

老人　資本家は資本と云ふ城があり、勞働者は勞働といふ武器がある。併し、裸で人生の戰場へ投げ出されてゐる樣なのが、我々無産知識階級だな。

青年　就職だの馘首だの、眞に厭なことばかりですねえ。詰らない。／＼。

老人　そんなもので年が年ぢう不安に驅られてゐなければならんとは、情けない話だね。考へてみれば、實際つまらない。つまらない／＼。(終)

年改まるに方つて「年齢」に就て思ふ

年齢考

近松秋江

西鶴は辭世の句に

浮世の月見過しにけり後二年

といつて五十二で死んでゐる。芭蕉翁も五十一で死んだ。私も明けて五十になつた。芭蕉や西鶴の不朽の名を思ふと、實に慚愧の至りである。

明治の文學者には短命の人が多い。樋口一葉は僅かに三十五才で死んでゐる。尾崎紅葉は三十七で死に、國木田獨歩は三十八、長谷川二葉亭は四十六、島村抱月は四十八、北村透谷も二十六才であつたか。夏目漱石も西鶴に近い五十一であつた。高山樗牛は漸く三十一才で死んだ。不思議に、其等の若くつて死んだ人には、いづれもそれ相應に生涯の仕事を完成してゐるかのやうに思はれる。彼等が、もつと長命したならば、或は又新局面を開展したかも知れぬが、死んだ人は、死ぬまでに銘々の仕事を済ましてゐる。

ところが、假りに近松が四十六七歳で死んだとしたら、どうであらう。やう〳〵「長町女腹切」を書くか、書かぬであつたらう。彼の傑作といふ傑作は、彼の著作の上で新しい試みであつた所の此の世話狂言をきつかけとして、その以後に續發されたものばかりであつた。「曾根崎心中」は五十一歳の作。「お夏清十郎」が五十六歳。「冥途の飛脚」が五十九歳。「博多小女郎」が六十六歳で。「天網島」に至つては六十八歳の高齢である。天は我が近松翁に七十餘歳の長壽を惠んだ。即ち吾等は取りも直さず日本の文學に其等の傑作を惠んだも同然である。近松がもし西鶴と近い年齢で死んだならば、吾々は「梅川忠兵衛」も「紙

屋治兵衞」をも有しなかつたであらう。「女殺油地獄」は、翁が最後の傑作で、實に六十九歳の作である。翁はそれから七十二歳で逝くまで作を成さなかつたが、六十九歳で、その長かりし著作生涯の筆を擱いたものとすれば、最後を飾る作としては最も人生的に意味のある、有力なる傑作を打留めとしたものである。六十九歳の作としては、まだ／＼綽々たる餘裕を示した作である。翁は實に晩年になるほど次第上りに力の籠つた傑作を成してゐる。多くの著作者の中には、中年に振つて、爾後一向振はないといふやうな者もあるのだが、翁はさうではなかつた。

鈍才は幾ら長命をしても駄目であるが、それでも翁のことを思ふと長命をしなければならぬ。

豐臣秀頼が餘り賢明でなく、淀君の如き婦人が居つたために、いづれにしても豐臣家の末路は悲慘に終るのが運命であつたであらうが、私は、何かあの時代に關する物を見るたびに秀吉がもつと長命したらばよかつたらうにと惜む。家康と秀吉とは六七歳しか違はぬ。秀吉の方が年長者であつたらう。家康が七十五歳の長壽を保つたことは、日本全體の上からいへば、此の大經世的政治家を有したことは幸福であつたらうが、石田三成などの雄圖、それから片桐且元などの苦衷を察すると、家康の長壽がどれだけ殘念であつたか知れぬ。

私は屢々、日本憲政の發達のことから、大隈公と山縣公とが、どちらが早く死ぬであらうかと考へて、興味を有してゐた。山縣が早く死んだら日本の憲政は新局面を打開するであらう。又大隈が早く死んだら、日本の憲政は一層逆戻りをするであらうと思つてゐたら、此の二元老は恰も前後して死んだ。それで、日本の憲政はやつぱり、差引勘定なしの、同じ處に停滯してゐる。

私も明けて五十年になつた。振顧つて過ぎ來し方のことどもを思ふと、蒼茫として夢のやうである。そして三十代四十代の、最も人間一生の働き時代を空費して來たことが殘念である。私には、自分の十代の時が最も好い感じの追憶を殘してゐる。二十代もそんなに惡くもないが、その時から生存の不安や苦惱が始まつてゐる。十三、四、五、六、七の時代は實に純白な、好い記憶である。私は十三歳の時分から學問が好きになつた。それから四五年はひたすら少年の美しい空想に驅られつゝ勉學した。十九二十の頃から、ぼつ／＼前途のことについて迷ひはじめた。それでも學問を止める氣にはならなかつた。やつぱり學

円つ身を立てたいと思つてゐた。二十四五六の頃に熱心に實際を好んだ。そして又た現實生活といふものに餘り觸れてゐなかつた。

が、二十七、八から三十を過ぎ、それから、ずつと四十代にかけて、學問にいそしむよりも、妙な自身の心に囚へられて殆んど二十年間を空しく費したことが、返へすがへすも殘念で溜らない。此の生涯は一度と繰返へすことの出來ぬ生涯でありながら、最も人間盛生の力を仕事に仕込むべき三十代と四十代を無駄にしてのけたといふことは、やがて一生をウエーストしたも同様である。自分の生涯はウエーストされた生涯であつた。もう今となつては取返しが付かぬことである。

しかしながら、人間一生の仕事らしい仕事もしなかつたことは實に慚愧に値するが、年を取るといふことは必ずしも悪い感じのするものではない。もし悪かつたとて、それを免かれる術もないのであるけれど。

振顧つてみると、私は生れて以來二十一度まで、自分の郷里の家で越年をした。そして二十二の時始めて東京の正月を見た。二十三は又郷里で越年した。が、それから後二十四からずつと二十七度の正月を、三十八の正月、大阪の堺港に流浪してゐて迎へたのが一度、四十四の時京都へ放浪してゐて迎へたのと、その翌年四十五の正月に、[illegible]一年置いても一度四十七の正月を京都で迎へたほかに二十四度の正月を東京で迎へてゐる。その中四十六の正月は長田幹彦氏に誘はれて、箱根の塔の澤で越年した。

東京の正月も以前は何となく樂しかつたが、自分の年齢とともに、そんなことは何んでもなくなつた。これが私には悲しいやうな、寂しくて堪えられないやうな心地がする。しかし、此の數年又心の持ち力によつて、その、何の意味もないやうなお正月が何となく樂しいものにも考へられて來るやうになつた。いくら歳を取つても、何故か正月は決して悪い氣持ちのするものではない。何となく淸々しく新しい氣分になるのも不思議である。これは、さうありたいものだ。古い句であるが、

　門松は冥途の旅の一里塚目出度うもあり目出度くもなし

とも考へられるが又

　　元日や神代のことも思はれる

といふ心持ちもする。

又年を一つ加へたといふことも忘れて、正月は理窟なしに長閑な心地のするものである。つとめて長閑にしてゐたいものである。人生を茶化して考へるところにも眞理はあるが、殊勝な心持ちで人生を見るところに、やつぱり懐しみが深い。私にも十代ま

では正月が樂しかつた。三十代の十年間と四十代の初めの間は正月も來たやうな氣持ちもせずに通り過ぎたことが多かつた。それが此の頃になると、少しは落着いた氣持ちで幼年の頃の正月の懷しみが思ひ出されて來て、漸く老境に入らんとする今に到つて又その幼時の心持ちがいくらか復活して來たやうに思はれる。年を取るといふことは老いることではあるが、又長命をするといふことにも考へられる。

それにつけても、私の老母は明けて八十四歲になつた。父が五十四で亡くなつたので、母だけはせめて七十までもと思つてゐたら、いつかもう八十四になつた。これは子として悅ばしいことである。そこで私は時に、こんなことを空想する。父母の年を合計して、それを二つに割つた歲ほど生きてゐたいものと思ふ。すると母を八十四として六十九になる。とても自分は六十九までは生きられない。それまでには尙ほ二十年の歲月があると思ふと、少し長過ぎるやうにも考へられる。

一生のうちの無風帶

豊島與志雄

年齡などゝいふものは、人にとつて――自分自身を觀る場合にも他人を觀る場合にも――大して問題にすべきことではない。高齡になるまで常に若々しい人もあるし、低齡で早くも老い込む人もある。要はその人の精神如何にある。精神がいつも元氣で潑溂としてをればいゝ。それは年月とは關係がない。

然し一般的に云つて、人は誰でも、自分自身だけではいつまでも若々しいつもりでゐる。頭髮に白いものが交つてきたり、體力が次第に衰へてきたりしても、自分だけでは、若いつもりでゐる。「自分の年取るのは分らない。」といふのは誰でも持つてゐる幻の作用である。そして自分一人その幻をみ續けてゐても、いつのまにか後進の人達から、老人のうちに――舊時代のうちに送り込まれる。

人達のうちに、——新時代のうちに這入るのは、いつも、若い人達——新時代の人達である。新時代は舊時代と自分との間に區劃線を引きたがりはしない。舊時代は、自分が既に舊時代になつてゐても、いつまでも新時代のつもりでゐるし、新時代と一緒に嬉戯したがる。然し新時代は、極めて排他的で利己的で、舊時代と自分との間にはつきり區劃線を引きたがる。

私が以前よく行つてた撞球場の常連のうちに、愉快な老人が一人あつた。頭髮も髯も殆んど眞白くなりかけて、背も少し前屈みになりかけてはゐたが、心は若々しい人であつた。いつも温顔に微笑を浮べて、孫と云つてもよいほどの中學生年輩の人達をも相手に、皆と同じやうな氣持でゲームを爭つてゐた。若い人達の間に交つて若い人達と同じやうに遊んでゐた。彼にとつては、自分と若い人達との間に何等の區劃線も引かれてはゐなかつた。それは見るも愉快な光景だつた。然し若い人達の方はさうでなかつた。同年輩の人達を相手にする時と彼を相手にする時とは、心持の上に相違があつた。「この老人が……」といふ氣持が、態度や冗談口の中に現はれてゐた。彼と自分達との間に、知らず識らず區劃線を引きたがつてゐた。

若い人の氣持は、かういふ心の若い高齢者に對してさへ、さうである。[illegible]若い[illegible]に對して[illegible]こして高齢者の方でも、[illegible]自然さに、若い人達と自分との間に區劃線を引くやうになる。さういふ風にして、新時代と舊時代とが別れてゆく。

新時代と舊時代との境界は、私の觀る所では、通常二十五から四十二三頃の間の年齢らしい。そしてこの年齢が、人の一生の最も大事な時期である。これは云はゞ一生のうちの無風帶である。

神は六日の間に天地萬物を拵へて七日目に休息したといふ。云ひ換へれば、七日間に仕事と休息とをし了せたのである。佛の說に從へば、人の靈は七日目毎に轉生するといふ。我國の習慣によれば、人は生れて七日目に命名の式を擧げられる。私のきゝかぢりの耳に從へば、人體の細胞組織は七年毎に全部更新するさうである。其他種々。七といふのは面白い數である。

そこで、人の年齢を七つづゝに分けてみる。

初めの七年は、渾沌たる赤兒から次第に一個の人間へ生育してゆく時期である。動物もしくは天使的な時期である。天眞爛漫な本能的な時期である。

次の七年は——八歳から十四歳までは、あらゆる方面に於て、善惡ともに、人として一歩を踏み出す時期である。——こ

の故に、初等教育は滿八歳から初めて可なりである。

次の七年は——十五歳から二十一歳までは、最も攝取と生長との盛んな時期である。性慾もこの時期に眼覺める。

次の七年は——二十二歳から二十八歳までは、體力の全盛期である。體力を必要とする仕事はこの時期に最も多くなされる。——この故に、もし軍隊が必要であるならば、徴兵は滿二十二歳に初めて可なりである。

次の七年は——二十九歳から三十五歳までは、精神力の全盛期である。この年輩の人達が社會革命を成し遂げる。

次の七年は——三十六歳から四十二歳までは、秋の所謂一生の無風帶である。これについては後で詳しく說く。

次の七年は——四十三歳から四十九歳までは、所謂不惑の時期である。最も偉大な作品がはぐゝまれる。

次の七年は——四十九歳から五十六歳までは、前の時期にはぐゝまれたものが實を結ぶ。人の能力の成熟期である。

次の七年は——五十七歳から六十三歳までは、人間としての完成の絶頂期である。

次の七年は——六十三歳から七十歳までは、完成が爛熟し次で停滯する時期である。

次の七年は——七十歳から七十七歳までは、古來稀……として片附けておかう、面倒だから。

次の七年は……から一々述べるのは厄介である。この以後は死、老いたる小兒へ轉落する時期としておく。

さて、私が云ひたいのは、三十五歳から四十二歳までの無風帶のことである。

一般的に云つて人は、體力の全盛期と精神力の全盛期とを經て、一種の衰退と倦怠とを感ずる。肉體的にも精神的にも、もはや充分の攝取をしてきたし、可なり世間に働いてきたし、可なり世の中に生きてきたので、あらゆる意味に於て慾望の減退を感じ出す。そして、自ら働き出すのが何となく臆劫になり、惰性で動くの安易さから誘惑を受けてくる。

食物を腹一杯つめ込むと、その滿ち張つた腹の上に兩手を組み合して、ついうとうととしたくなる。さういふ風な狀態である。人は大抵三十五歳を過ぐる頃から、どんな痩せた人でも、腹部が多少張り出してくる。失敗や成功や失意や得意や、要に約これまで生きてきたといふ經驗を、可なりにつめ込むものだから、腹部が張り出してくる。さて腹部が張り出してくると、その上に兩手や兩腕を組み合してみたくなる。これは人間の自然な姿勢である。さて腹の上に手や腕を組み合してみると、つい眼を閉ぢたくなり、うつらうつらとしてみたくなる。そして

……こういふ風にして段々に迫つてくるのである。

ここでもしうつかりしてゐると困難なものになる。その人の生活は停滞してしまふ。緊張一番奮起して歩み出さうものなら、新たな生活が開けてくる。

かういふ無風帯を如何にして乗り越すか、その乗り越し方によつて、人の一生の運が定まる。この無風帯からすでに、本當の老と若との――新時代と舊時代との道がはつきり分れる。それて、多くの者は舊時代の安穏な道へ踏み込んでしまひ、少数の人だけが、たとひ頭は白くなつても、本當の意味で新時代の道を辿つてゆく。

蠶の頭は、前後四回の休眠と脱皮とを經て充分の生長を遂げ、繭を作つてその中に入り、すなはち蛹となつて、しかし羽化して蛾となつて、こゝで人間も、〔illegible〕期間、經て充分の生長を遂げ、繭をつけてその中に籠り、〔illegible〕の七週間を經て完成し、羽化して蝶となる……のならば最も幸福であるかも知れない。私ならば人の年齢が三十五歳ときまつてゐたなら、決して人生の如きを論ずる要はない。一年の期間蠶が百六十五日に當る稚蠶期を、一年の期間が蠶が八十八日に當る承期は、決して長くない筈である。

然し人間は、誰もが云つたやうに、懸案の晩年である。いつまでも若くいつまでも新時代であたがる。だから人間は、新五回の七週間を――三十五歳から四十一歳頃までの私の新調無風帯の時期を、最も注意して乗り越す必要があるのである。

机前に空しく過ぐ

小川未明

私は、机の前に坐つてゐるうちに、いつしか年をとつてしまひました。床屋が、他人の頭の格好を眼にしながら、鋏をカチ〳〵やつてゐるうちに、自分の青年時代が去り、いつしか、その頭髪が白くなつて、腰の曲つた時が来る如く。また、〔illegible〕所が

仕事場に坐つて、他人の靴を修繕したり、足の大きさなどを計つてゐるうちに、いつしか、自分の指頭に皺が寄り、眼が霞んでくるやうに、私の青春も去つてしまへば、また、やがてその壯年期も去らんとしてゐるのであります。

年といふものを忘れてしまひたい。毎日、新しく生れ變つたやうな氣持になつて自然に接して見たい。今となつては、かうも思つて、自分のやゝもすれば、沈み勝な氣持を引立てたいとしますけれど、東洋流の思想が、子供の時分から頭にはいつてゐる私達には、人生五十年といふやうな言葉がいまでも思ひ出されることがあるのです。時勢が積極的となり、事實また、ほんたうに、社會のためにも働いてゐるやうな人々が、五十以上の人にも多いのを知ると、昔の人の言つた、この厭世的な見解は誤つてゐたといふことを知るのであります。そして、自分も、これからだと思ひ、また、眞劍に、しなければならぬと考へます。

しかし、私は、四十の坂を越しました。自分は、常の如く、机の前に坐つて、毎日、同じやうにペンを採つてゐるうちに、いつしか、ひとりでに年を取つてしまつたのでした。とは、いふもの、この間、街頭の響きから、人間との接觸から、そこに感じられた複雑な人生の幾多の變遷と推移が、文壇の上にも、もしくは、他の社會の上にもあつたことを考へ出さずにはゐられません。私自身にとつても、憧憬、煩悶、反抗、懐疑、信仰、いろ〳〵と、心の推移と、其の時代々々の思想と生活の異つた有樣とを顧みて、それ等をあり〳〵と目の前に描くことができます。

何といつても、私が最も、年齢について、悲哀を感じたのは、その三十の年を過ぐる時でありました。

「あゝ、もう青春も去つてしまつたのか?」

四季について言へば、三十までは、春の日の光りの裡にまどろむ自然の如くでありました。柔らかな、香はしい風に吹かれる、若葉のやうに、うつとりとした時節でありました。たとへ、その光には、赫々とした夏があり、樂しみの多き、また働き甲斐の多き、雄壯な人生が控へてゐたとはいへ。自分にとつて最も、美しい幻の如く、若やかな、そして熱い血の胸に躍つた、なやましい日のつゞいた、憧がれ心地に途をさ迷つた、二十時代を送ることは、たとへ、當時は、私の、一番生活の逆境時代にあつたにかゝはらず、尚この悲しみとやるせなさのために、深く悲しんだものでありました。

それに較べれば、人生の夏も過ぎんとする、四十を越した時でさへ、さまで心を動かすこともなくて濟んだと記憶してゐま

す。

かのロマンチシズムの汪洋たる波に揺られて、年若くして死んだ、キイツ、シエリー、透谷、樗牛、其の詩人等を惜しみ、人間は、若く、美しい時分に死すべきものだ。年をとつて、感情が涸渇し、たゞ利害のみに敏く、羞恥をすら感ぜぬやうになつて、醜悪の姿をいつまでも晒らすものでない。から眞に、考へたことも、やはり、當時であつたのでした。

たとへ、其の人の事業は、年をとつてから完成するものだとはいふものゝ、すでに、其の少時に於て、犯し難き片鱗の閃きを見せてゐるものです。若くして死んだ、詩人や、革命家は、その年としては、不足のないまで、何等か人生のために足跡を殘してゐました。

人は、年齢により、また、その時代により、生活の意識も、理想も異なるものです。この世の中が、一人の英雄によつて左右されると考へられた時代には、誰しも、英雄に對する讃美を惜しまなかつたこともあります。また、天才が、時代に超越すると考へられた時代もありました。その時分には、天才を人間以外の人間の如く、天才には、すべてが許されなければならないと、特權あるものゝ如くに考へた時代もありました。

いま、それ等が、いかに愚であつたかといふことを悟るので

ころでした。本當も、[illegible]もたゞ自由に生きることが[illegible]いふ眞實に、[illegible]たものもなかつたのでした。

この時に至つて、私に、やうやく虚名からも、また利慾からも、心を煩はされなくなりました。たゞ、自分の理想に生きるといふこと、正義のために戰はなければならぬといふこと、そして、要するに、人間は、いかなる職業にあつても、その心がけが、社會のためにつくすといふ一事に於て、全的生涯が完うされるものだといふことを感じてゐるのであります。

善良な理髪師の如く、善良な靴匠の如く、私は、また眞實な一文筆者として使命を果たしたいと思つてゐます。幸に、男子にとつて、厄年である四十二も、無事に過ぎたことを祝福します。

――十三年十二月――

年齢美

上司小劍

芭蕉に『衰へや齒に食ひあてし海苔の砂』とかいふ作があつたと思ふ。いかにも老を嘲つ句として、寂しさと哀れさとをおぼえしめる。私の知れる限りの文人では、芭蕉ほど老を嘲つ……といふよりも、老を歌つた人は尠い。どうもあの人は年齢といふことに於いて、敏感であり過ぎたやうな氣がしてゐる。たいして病弱な肉體をもつてゐたとも思はれぬのに、彼れの一言半句は、盡く年齢への反省、若しくは追懷である。漸く五十そこ〳〵で身まかつた彼れが、早やくから翁と稱し、死後もまた所謂『をきな』として、これに無上の尊崇の意味を籠めらるゝのをみても、一面から言へば、彼れは最もよく年齢を利用した詩人、少し下品な口調を用うるならば、老を賣り物にした藝術家だとも言ひたいほどである。

芭蕉の崇拜した詩人で、芭蕉とゝもに、日本の二つの大きな隱遁家と見るべき西行法師には、どうも年齢を氣にした痕が見られない。だいぶ時代が遠いので、ハツキリしたことはわからないが、彼れは月を歌ひ、月を讚美する詩人として、殆んど其の一生を貫いてゐるやうな氣がする。月光美と西行法師、彼れの生涯は、一つの月光曲であると言つてもいゝ。天文學の進歩しなかつたあの時代に、月が一個の老廢物として、空しく天體の一隅に彷徨してゐるのだとは知らう由もないけれど、なんだかかう、一種の蒼白い悲し氣な光を投げるものとして、哀愁を歌ふ詩人の眼に映つたのであらう。『なげけとて月やはものをおもはするかこちがほなるわが涙かな』

西行は哀れをうたひ、芭蕉は寂しみを歌つた。さうして其の遁世的心は一つだ。遁世には『老』を作なふ。若くとも老の心もちにならなければ、遁世の情趣は浮んで來ない。西行の如き、二十歳そこ〳〵で、若い妻を棄て幼い兒を蹴倒して、嵯峨野の奧に逃げ込んだ時、彼れの肉體は青春の血に燃えてゐても、胸には老翁の心を抱いたのであらう。年齢に屈託せぬといふ點では、芭蕉よりも西行の方に、のんきな點がある。芭蕉が五十

ここ〳〵で身を求め、西行が八十餘歳の天壽を保つたのを羨んで
あらうか。

○

今の世の文人で、年齢を氣にする人に、近松秋江氏がある。たゞに自分の年齢を氣にするばかりでなく、他人の年齢をも數へて、いろ〳〵と氣を揉んでゐる。隣りの財貨を數へるのと、他人の年齢を數へるのと、どッちが詰まらないか。年齢に無頓着な私なんぞは、どうでもいゝと思つてゐることを、秋江氏はよく氣にしてゐる。總じて身體の虚弱な人に、年齢を氣にする傾向が甚だしいと思ふ。正宗白鳥氏もよく、年齢を話題にするが、しかし秋江氏ほど神經的でない。年齢を氣にしさうで、一向さういふことに話を向けないのは、徳田秋聲氏である。私は曾つてこの人の五十の賀に、この人を芭蕉翁にたとへた一文を書いたことがある。それは『寂』といふことを、藝術の基調、詩の本體にした點に、双方の共通を見出したのであつた。しかし、秋聲氏には幾つになつても青年の心もちが失せない。これは芭蕉と正反對で、この人の藝術が年とゝもにいよ〳〵冴えを増し、青年作家と角逐して、些かの衰へを見せないゆゑんであらうと、私は心私かにたのもしく思つてゐる。それは日本の作家が、これまであまりに、年齢に對する考へが古すぎて、七十八十になつて始めて大作を出さうといふやうな大きい心だけをもたなかつたのを心細く思ふ反映であらう。とにかく、秋聲氏が、さう健康な體質も持ち合はせないのに、少しも『老』を喞たないのはえらい。外國の作家にはトルストイの如く、八十にしてなほ作の衰へを見せない人がなか〳〵多いけれど、日本の作家（ばかりでないが）の早老は心細いと言はねばならぬ。

故岩野泡鳴氏もまた年齢を氣にしない人であつた。年齢は氣にしないが、老衰の襲來を恐れてゐた。もちろん人間として、誰れしも、老衰を厭はないものはないが、泡鳴氏は常々、『若し自分の精神が老い、肉體が衰へて、性慾にも食慾にも不如意のことが多くなるやうだつたら、自分は舌を嚙み切つて死ぬんだ。』と斷言してゐた。さうして、この男ならやりかねないだらうと、私はさう思つたのであつたが、彼れはまだ老衰の來ないうちに、大病の襲ふところとなり、病中にもかゝはらず、可なりに不攝生なことを演じ、まだ折れないものを無理に捩ぢ折つたといふやうな死に方をしてしまつた。私から見れば、彼れの生前、多く思想上に反對の點があつたけれど、いかにも快男兒として、彼れの死は、文壇を寂しいものにしてしまつた。生きてゐれば、まだ〳〵元氣な生活をつゞけてゐたにちがひない。

惜しいといふことをば、多くの故人の中で、最も多量に持つてゐる彼れ。

○

大抵の人は、無條件で信用してゐるけれど、最も疑はしいものは人の年齡である。いや自分の年齡である。樹木のやうに一年／＼一つゞゝ木目を增して行くものなら、幹を切斷せずとも、太さによつて年齡を計ることも出來やうが、人間にはさういふ確かな年齡の測定法がない。お前は何年に生れたのだから幾歳だ、と他人から決定されて、あゝさうですか、と無條件で承服してゐるやうなものゝ實はこれほど不確實な話はない。生れた時は赤ん坊でなにも知らない。成長して東西を辨ずるやうになつてから、初めて、自分の生年月を他人に教はるのだもの、疑へば限りがない。自分が確實に見屆けたことでなければ、他人の言葉は信ぜられないとすれば、自分の年齡は信用のおけないものゝ第一で、他人の年齡ならば、正確に見屆けて正確に知ることも出來やうけれど、自分の年齡に至つては、疑へば疑ふ餘地がいくらもある。唯一つの證據となるべきものは戶籍簿だが、これまた人間の手に作成されたもので、的確に信用はおけない。或る人がこれを區役所の反故紙だと言つたのに、一面の理屈はある。この點から行くと、自分の親といふものからしてが、子の方では正確にそれだときめる確實な證據は一つもないのであつて、親、特に女親が、これは自分の子だといふことを明白に知つて生れた時の現場を見屆けてゐるといふほどの確實さは、子の方に全くないのである。たゞ、さう言はれるから、さうだと信じてゐるやうなもので、これまた疑へば疑ふ餘地がいくらもある。世間にはよく、今の今まで自分の親だと信じてゐた人が、さうでなかつたとわかつて、驚くといふ例がある。たうたうわからずにしまつたといふやうなのもあつたにちがひない。自分のしつかりした眼で見とゞけたことでなければ、一切他人の言ふことは信用しないといふ流儀から行けば、自分の年齡は、最も不確實なものとなつて來る。

○

老人は駄目だ。若いものでなければならない。若いものゝ時代だ。……といふやうなことを頻りに聞きながら、今の世は老人崇拜の絕頂だ。ピットが二十三歲で宰相になつたといふやうな話も古いが、今の世の二十三歲は、まだ大學に居る。少しまご／＼してゐる人間だと高等學校の入學試驗準備なんかやつてゐる。私がよく父に聞いた話だが、昔しは男女とも十五歲に

なると一人前の人間としてとほつたものださうだ。八十歳までゝも十五歳だと言つたばかりに、一人前の待遇を受けた。ところが今の十五歳は赤坊に毛が生えたくらゐもので、一人前はおろか半人前にもとほらない。十五や六で一人前のやうな口の利きやうでもすると、生意氣だと、頭ごなしにやられる。源爲朝が十三歳で、妻の父阿蘇某を先鋒として九州を淘(と)へたといふやうなことは、夢物語のやうだ。二十歳になつたとて今は一人前でとほらない。年齢が一種の階級を作つて、文官武官とも高い地位に登るには、老年といふことが必要になつてゐる。源義經のやうに二十幾歳で、元帥大將として、大きな戰功を立てることは、今の世で絶對に出來ない。屋島や壇の浦の義經は今ならまだ少尉か精々中尉で、陸軍大學校の入學試驗を受けやうといふ時である。

そんなに遠い昔のことを振りかへるには及ばぬ。近い話が、尾崎紅葉と言へば、いかにも老文豪のやうな氣がしてゐるけれど、亡なつたのが三十七歳で、今ならそれくらいの年の新進作家もある。紅葉が賣出しの頂上は、二十六七であつたらうか。最も若いものゝ持て囃さるゝ文壇に於いてさへ、今では年齢がずつと延長されて、追々は七十歳八十歳で、色事小説を盛んに書く人が現はれるかも知れない。老人のノサバルのも困つたものだが、若い者の[illegible]れなしに、逆に[illegible]によつ技能をもつて、役頭に老人を[illegible]必要は不合理だが、しかし、青二才の一語をもつて、若いものを侮蔑するのにはいけないことだ。老若ともに、役に立つ人間はドシ〳〵働いて、下らないものは年齢にかゝはらず引ッ込むがよい。歐洲戰爭の大難に當つて、挺然身をもつてフランスを救つたものは、八十幾歳のクレマンソオであつた。虎(タイガー)と呼ばれつゝ、老いてます〳〵壯なりと言ふ言葉を文字どほりに現はしたこの人などには、眞に年齢美を發見する。パリの街上で、自動車上のクレマンソオを見つゝ、美しい女學生が、『虎よ、虎よ。』と囁くなぞは、面白い光景でないか。歐洲大戰は全然老人の手で收拾されて、若い者顏色なしであつた。あの當時の立役者で一番年少だと言はれたウイルソンさへ、六十いくつであつたと思ふ。日本からは七十幾つの西園寺さんが出かけた。西園寺さんと最も縁の近かつた故原敬氏の六十幾歳の姿には、健かな麗はしい、さうして、力強い年齢美といふものがあつた。あんなのは、早衰早老の日本人に珍らしい。

不惑

長田秀雄

私は今年四十歳である。もつとも西洋流に勘定すれば、まだ、三十九歳にちがひないが、兎も角も、所謂不惑の齢には達してゐるのである。

さて、歳晩にのぞんで、己れをふりかへつてみると、不惑どころか、年とともに惑が深くなつてゆくの感があるのである。

昔から四十過ぎての道樂はやまぬと云ひならはしてゐるが、若い時の惑は、さう底が深くない、忘れゝば忘れ得られる――が、然し齢初老に及んでの惑はそれこそ、終身ついてまわる深い惱である。私はこの頃になつて、いつぞや、島村抱月氏が亡くなられた三七日かに藝術倶樂部の追悼會の席上で、中桐確太郎氏から伺つた話が、感銘ふかくも思出されるのである。

ある時、抱月氏が中桐氏を訪問して、いろいろ雜談の末、かう云ふ話をされたさうである。

「自分は今年四十二になる。四十二は昔から男の厄年と云はれてゐるが、單に生理的にさうであるのみならず、精神的にも、ある人生の危期ではないかと思はれる。少年の時から、自分は功名を夢みて、一心に書を讀んできた。が、然し、今になつてよく考へて見ると、これまでの努力は、全たく空な物のやうな氣がしてならない。人生には限りがある。自分の四十年間の努力の結果が、今のやうな物とすると、あと十年や二十年生きてゐても、どれ程のことが出來やう。

自分は未來のために、全たくこれ迄享樂の生活を考へなかつた、これが間違ひではなかつたか、享樂生活の内に、本統の人生があるのではなからうか……と云ふ事がこの頃しきりに考へられてならない。」

中桐氏はその時、抱月氏の考へを反駁されたさうである。

その時の中桐氏のお話では、それから間もなく、早稻田文學誌上に抱月氏の戀の歌が現はれた。そして、有名な松井須磨子

との情事がついて、新聞に發表されたと云ふ事があつた。

この話を伺つたのは、もう七八年前の事であるから、或は思ひちがひがあるかも知れないが、とに角、眞摯な一學究であつた抱月氏が、四十を過ぎてから、あゝ云ふ情事に深入りして、松井須磨子と一緒に旅から旅へと芝居を打つて歩いた心理の推移の一端が分るやうな氣がしてならなかつたのである。二人の生活は、須磨子の縊死によつて、美しいローマンスとなつた。

私はあの時、抱月氏が三十未滿の青年學者であつたならば、まだ〳〵深入りは出來なくはなかつたかも知れないが、

髮の毛が薄くなつたり、自分の餘力の制限がハツキリ分つたりしてくると、つい、人間はあせらないではゐられない。——孰れくも物慾の心が、われとわが身を責めるからである。

精神上のかう云ふ餘剩が、いまや、私たちの上にも近づいてきた。心が死灰のやうに冷えてしまふまで、まだまだ、消しまなければならないであらう。

三十歲臺は人生の花

高島米峰

曾て、一青年の述懷を聴く、曰はく、『私も、來年は、いよ〳〵三十歲になるのですが、もうこれで、二十臺と緣が切れるのかと思ふと、……そして、戀をするなら今のうちだといふやうな焦燥さも手傳つて、全く遣り切れない程のさびしさを感じます』と。假令ば五十歲、二十臺の過去を顧みて、特に三十歲とならむとせる時の心持を廻想するに、四十臺より五十臺に移りし時の如く、しかく無頓着なること能はざりしが如しと雖も、『戀をするなら今のうちだ』といふが如き、焦燥さといふよりは寧ろ、孔子の謂はゆる『三十にして立つ』といふが如き、思想に支配せらるゝこと深く、自ら省みて、その不德と微力とは、到底謂はゆる『而立』するに足らざることを、衷心から慚愧し、平常の行道進德に於て、怠慢なりしことを懺悔す

甚だ切なるものありしが如きを覺ゆ。

惟ふに、二十臺より三十臺に移るは、即ち青年期より、壯年期に入る重要なる時にして、この時期は、少年期より、青年期に入る時の重要なるよりも、更に一段と重要なるを見るなり。孔子が、『三十にして立つ』と言へりしは、彼に、君子としての資格備はり、世に道を行ふに足るといふ、自信を得たるを告白したるものにして、徒らに、彼が内生活を誇示して、自ら快としたるものと解すべきにあらず。これを釋尊に觀るに、その三十歳の十二月八日の曉天、明星の現ずるを見て、菩提樹下に忽然として大悟し、玆に無上の大道を體得して、佛果を圓成し給ひしこと、恰も、孔子の『三十にして立つ』と言へりしに似たりといふべし、たゞ、孔子が『四十にして惑はず』と言ひ『五十にして天命を知る』と言ひ『六十にして耳順ふ』と言ひ『七十にして心の欲するところに從ひて矩を踰えず』と言へるが如く、十年毎に、その心境次第に進歩せるが如きを、釋尊に在りては、三十にして大悟徹底して、一氣に絶對の心境に到達し給ひしを異とすべきなり。

釋尊が、十九歳にして出家し、十一年間の苦行と研鑽とは、遂に三十にして成道の大功を收め給ひしに比し、親鸞上人が、九歳にして出家して比叡山に上り、廿年間の修養と學習とは、彼をして、遂に隠遁の志を起さしめて、比叡山を降りて、決然上人の吉水の禪房を訪れざるを得ざらしめしは、これ、釋尊と親鸞上人との、機根の相違にも歸すべく、印度と日本との、風土、氣候、社會組織、生活態等の相違にも歸すべく、二千五百年前と、七百年前との、時代の相違にも歸すべく、理由は、求めて甚だ乏しからずと雖も、親鸞上人の時代、尚、隠遁の志を起せるもの、多くは俗世間の煩累を厭ひ、羈絆を脱せむと欲して、里を出てゝ山に入るを常とせるに、獨り親鸞上人のみは、出世間の煩累を厭ひ、羈絆を脱せむと欲して、山を出てゝ里に歸りしを珍とすべく、こゝに親鸞上人の人間性を認め得べく、こゝに日本佛教の特色を捕へ得べきなり。而して、かゝる重要なる事件が將に三十歳に垂んとせる、廿九歳の親鸞上人によりて決行せられたること、これを孔子の『而立』と、釋尊の『成道』と並べ稱して、毫も遜色あるを見ざるなり。

孔子が『十有五にして學に志す』と言へるは、單に今日言ふところの學問を、習ひ始めたりといふが如くに解すべきにあらずして、修身齊家治國平天下の道、即ち君子の道に志せるものと解するを妥當とすべく、又、釋尊が、十九歳の時、四門に出遊して、老病死の相を見、世の無常を觀じて、遂に王宮を捨てゝ苦行林に入れるは、もとより厭世悲觀の極、人生を不可解なり

とし、如何にかして、この不可解の人生に、解決の光明を[illegible]し、自他共に、無常の人生に、常住の樂地を發見せむと念願せるがためにして、彼と此との間に、淺深廣狹の別ありと雖も、その動機は、必ずしも同じからざるにあらず。これを、親鸞上人が、僅に九歳にして出家せしめられたるに比する時、彼等の自覺的にして、此の他律的なるを、否むこと能はざるなり。

親鸞上人が、日本の釋尊と崇め、『和國の教主』と讃歎せし聖德皇太子は、天資聰明にして、日本最古の官選國史たる『日本書紀』の編者は、徹頭徹尾、太子を聖人として記錄したる程、しかく非凡の偉材なるが、推古天皇の皇太子として、同時に、推古天皇の攝政として、萬機を知し召すことゝなりしは、實に御齡僅に二十歳にましませし時の事なり。爾來十年、太子は、學ぶべきを學び、修むべきを修め、御齡三十にして、官位十二階を定め、三十一にして、十七條憲法を作り給ふ。この官位の制定と、憲法の發布とは、太子新政の大眼目にして、當時氏族制度の弊、その極に達し、閥族、朝野に威を揮ひ、天皇の御稜威、國民に徹底せず、建國の精神、甚だ明かならざるものありしを、これに依りて、始めて根本的革新を見ることを得たるものにして、正に、『而立』『成道』の境地に、到達し給ひしものと、稱せざるべからず。

聖德太子が攝政たる時、[illegible]、中大兄皇子も、[illegible]即し[illegible]なり。皇子が、[illegible]天皇の皇太子として同時にその攝政となり給ひしは、恰も聖德太子の如く、御齡正に二十歳の時なりしなり。而して、この青年にましませし皇子は、大化の改新を斷行して、國史上に一新時期を劃し給ひし偉人なり。御齡三十歳にして、齊明天皇の皇太子攝政となり、[illegible]七歳にして、帝位に上り給ひ、律令政治其に始まりて、日東帝國は、更に一段と、國家的躍進を試みるに至れりしなり。

建國以來、皇太子にましまして、攝政の大任を帶び給ひしは、聖德太子と、中大兄皇子と、而して、畏くも、我等の皇太子と崇め奉る、皇太子裕仁殿下との、御三方のみなり。我等の皇太子殿下、天資英邁に渡らせ給ふこと、世界の仰ぎ奉るところ、御齡二十一歳にして、今上陛下の攝政となり給ひ、國步艱難の時に處して、帝威倍々揚り、國光愈々輝くもの、實に我が皇太子殿下の、御鴻業と讃嘆し奉らざるべからず。かくて御齡三十歳にも及び給はむか、その御功績、夫の聖德太子の御功績にも、中大兄皇子の御功績にも、勝れさせ給はむこと、期して待つことを得むかと、恐察し奉るところなり。之れ此くの如く、國史上稀有の攝政皇太子が、御三方共、二十歳前後にして、大任を帶び給ひしといふ事實は、孔子の『三十にして立

つ』を、更に十年低下して『二十にして立つ』となさゞるべからざるを見ると雖も、しかも、これ偉人の事にして、常人に在りては、三十にして立つ能はざるのみならず、河野鐵兜が『四十未だ家を成さず』と慨嘆せるが如きもの、比々皆然らざるはなし。

廿臺の青年にして、國家を負擔せしもの、英國にピツト(小)あり。彼が始めて下院議員に選出せられたるは、實にその廿二歳の時にして、國王ジョージ三世の命を奉じて、內閣を組織し、自らその首班に列せるは、廿四歳の時なり。時恰もフランス大革命に際し、ピツトは、民主的思想の、英國に波及せむことを憂へ、極力、これが防遏に努め、且つ、海上に於ては、フランス及び其の與國の植民地を奪ひ、以て、英國をして、世界に雄飛獨歩せしめたり。これに比しては、やゝ見劣りのするを如何ともすること能はざれども、我が、明治の功臣中、廿臺にして活躍したるもの、甚だ少からず。明治元年に於て、伊藤博文は廿五歳、大隈重信、山縣有朋、後藤象次郎は共に廿八歳にして、板垣退助は廿九歳なりしなり。三十臺なるもの、三條實美と、木戸孝允とは、共に三十二、江藤新平は三十三、大久保利通と、大木喬任とは、共に三十四、寺島宗則と、副島種臣とは、共に三十五、而して、四十臺なるもの、僅に、西鄉隆盛の四十二と、岩倉具視の四十三とを數ふべく、幕府側の代表として、最も年長者たる勝安房さへ、尙、四十五歳を出でざりしなり。これに由つてこれを觀るに、國家が、國家的に大躍進を試みる場合、そは多く、時の青年の力に待つところ多きを見るべく、必ずしも、三十にあらざれば立つこと能はずといふが如き、制約の存するにあらざること、もとより論なきなり。

孔子又曰はく『君子に三戒あり、少き時(青年期)は、血氣未だ定まらず、之を戒むる色に在り。其の壯(三十歳以上)なるに及びてや、血氣正に剛し、之を戒むること鬪に在り。其の老ゆるに及びてや、血氣旣に衰ふ 之を戒むること得るにあり』と。能く、人間の病弊を捕へ、弱點を指摘し得たりと謂ふべし。僕、少時、『論語』を讀みて此の章に至る、しかもその眞意を解すること能はず、又、强ひてこれを解し得むとする興味も有せずして過ぎたりしが、今や漸く、老境に入らむとするに當りて、始めて、孔夫子の、僕を欺かざるに畏服すると共に、自ら省みて、大過なくして今日に至れることを、悅ばざる能はざるなり。しかも僕今、尙、孔子が、五十にして到り得たりと言へる、一身の窮通、四圍の毀譽を離れて、心自ら天地と融和し、天命を知り 天命を樂しむの境地に、到り得たりと言ふこと能はざるのみならず、孔子が、四十にして到り得たりと言

へる、己を信じ　道を信じ　希望に燃え、逆境に屈せず　憂患に屈せず、毅然として、行はむと欲するところを行ふといふ境地にさへ、到り得ざるを愧づ。されど今尚、到り得ざるの境地あるは、當に到り得べき希望あり。存する所以にして、この希望と、この希望を達成せむとする意氣と、努力とだにあらば、老境必ずしも悲觀を假せざるなり。

『人生五十』とは、何人の定めたる相場なるやを知らずと雖も、輓近、世界の人壽は、平均三十八歳なりとか聞く。果して然らば、『人生五十』は、果報と謂ふべく、從つて　香山居士の、『人生七十古來稀』を眞とすべし。されど　事實は、七十以上の人間頗る多く、寧ろ、『人生九十古來稀』とせざるべからざるが如し。殊に、現代の日本は、政治界と言はず、宗教界と言はず　學術界と言はず、實業界と言はず、餘りに老人の多きに辟易せしめられ、壯年のものさへ、容易に天下を取ること能はず、況んや、青年に至りては、『青二才』呼ばはりの下に一蹴せられて、如何なる場合に於ても、その力を伸ぶる機會を與へられざるなり。これもとより、青年の意氣地なきにも依ると雖も、老人萬能の謬想が、國民の頭腦に固着せるがためならずんばあらず。

勿論、青年と老人との區別を、單に年齢の差のみに依つてせむこと、必ずしも當を得ず、壯者にもまさるべく、老いてこそ益々圓熟なるものも少からず。四十五十にして老衰したる者、世途りは八九十歳その意氣、誠に壯夫の概ありと言ふべし。これに反し、漸く中年、身心共に衰へて、老衰の路に投ずることを厭はざるのみならず、遂に、後輩に追ひ越されて、落伍の悲哀に涙を絞るものも少からず。憐むべしとせむか、悼むべしとせむか。こゝに於て、僕、年來『廿歳前後主義』を主張して今日に至る。漸く老化し來らむとする昨今、聊か電氣鍍金を施して、齋藤實盛の故智に、學ばむとするものならむと、邪推することなくむば幸甚なり。曰はく、

『頭は禿げる、鬚に白髮が交つて來る。それがどうした。元氣が禿げて、意氣が白くさへならなければ、以て誇るに足るではないか。腰に梓の弓を張つても、氣分はいつも、二十歳前後で居られないといふ理窟が、どこにある。』

これを　夫の『戀をするなら今のうちだ』と焦慮りし、廿九歳の青年に贈らむを欲す。（大正十三年十一月、蛙鳴成道の日の夜。）

『年齢』についての考方を改めよ

文學博士　三宅雪嶺

年齢は並木街道を通行するに似て居る。近い所は木と木との間が廣く、稍遠くなつて接近し、遂に全く重なつて見える。進行すれば重さなつて見えるのが、重さなつて居るのでなく、隔りが前と違はず、振回つて、前に廣かつた木と木との間が狹くなつて居るのを見る。四五歳頃までは二十歳以上悉くおぢさんで、頭の黒いのも白いのも、皺の有るのも無いのも、折り重つて見える。二十と云へば餘程の年齢で、おぢさんになれば、それで終りのやうに考へる。二十になれば四五十以上が悉く老人で、先きが短いやうに思ふ。四五十になれば七十までに間があり、七十になれば八十まで間があり、間がかなりに廣々として居る。現在の年齢より十年前及び十年後が割合に廣く、これを越えて、前が次第に重り合ひ、後も次第に重り合つて居る。年齢を過ぎ行く間に、重り合ふと見えるのが、重り合つて居るのでなく、相應に間隔あるを知るのであつて、其處に年齢の經驗があり、經驗なくて無暗に識別する事が出來ぬ。もはや老人であり、老耄れであるとなつてから、その老人又は老耄れに幾つも段階がある。初め一緒に取扱つたのが、後に區別して取扱はねばならなくなる。老人とより老人との區別があり、より老人と最も老人との間に區別があり、同じく老人との間に、幾つも段階を設けるを得、老人の世界が隨分廣い事になる。九十になり、百になつても、その趣があらう。

併し年齢の長ずるに隨ひ、同年の者は次第に凋落し、何時ともなしに運命を知り、死んで惜しくないやうに感ずるに傾く。若い時病院に入つて癒るか癒らぬかと煩悶し、老いてその煩悶が減じ、靜かに運命を待たうとする所がある。若くて平氣なのがあり、老いて愚痴を滾するのがあるけれど、多數の上でその傾向を認めるとしてよい。元氣の消耗する所もあらうが、米壽を祝賀せられても、其の年齢で死んでも多く變りがなく、それ以

生きてもお目出度く、死んでもお目出度いやうに具合になる。

併し人の壽命が何時迄生きるか豫め分らず、またさうで早く死んだり、屢々病氣に罹つて長生きしたりするので、年齢順に行つて居る譯に行かぬ。老人は若い者より早く死すべきプロバビリテイあつても、割合に生き殘つたりするので、何處に死期を置くべきか、當がつかぬ。順當に生きて行けば相應に長續きするのであつて、たゞ老人は彈力に乏しく、老いて矍鑠といふ狀態で、何時コロリと仆れるか計り知られぬ。小さな石に躓いて倒れたりする。其處が老人の脆い所であつて、躓かねば、死にさうでなかなか死なんだりする。他から見れば老耄して生き存らへるのが悲慘であり、大抵に世を終る方がよささうであつて、さう望み通りに行くものでなく、人に厄介掛けて生き存らへたら恥もある。若い時不治の病氣で死を餘儀なくせられると同じく、老いて重荷を負はされる事がある。何れも世の中の不本意で仕方がない。

併し一般に年齢相應になつて行くものと、見做すべきであつて、年齢が長ずるに從ひ自然の壽命を恬み、行くべき所に行き。自ら遺憾と感ずる事も少く、人も遺憾と感ずる事が少くなる。壽命は自分で決定する事が出來ず、殆ど運命の神に左右せられる勢であつても、若い時には先きが長いと思ひ過ぎ、老いて先きが短いと思ひ過ぎる[illegible]らうとし、尚ほ早きの感を深くする。[illegible]いよいよ事業に取掛らうとする時、日暮れて道遠きの感なきを得なくなる。實は日暮れたのでなく、尚ほ日が照つて居つても、取越し苦勞が多く、あれも欲しく、これも欲しく、もはやさういふ苦勞に堪へないかに感じてしまふ。四十年で早いとし、五十年で晩いとするのが珍しくない。世間で普通以上の能力を備へながら、特別に見るべきないのは、その邊より來るのが多さうに思はれる。

日本人は歐米人と較べて此邊で何の狀態になるか。少しばかりの程度の差にせよ、歐米人は日本人程尚ほ早いとせず、既に晩いとせぬでなからうか。歐米もいろいろなれど、或る代表的人物を取出して考へれば、さういふ跡があるらしい。まだ、早いと思ふよりも、或る期間で斷然着手し、若し晩れたならばもはや既に晩いとせず、着々準備に取掛る例に乏しくない。身體が強健な結果とも云ふが、精神的の事業は必ずしも身體の健康如何に係はない。不健康で大事業を爲し遂げたのが何程あるか知れぬ。日本人は今こそ運動を盛んにすれ、それも若い期の事であつて、初老で運動場に出れば、自分も可笑しく人も可笑しがり、それだけ體力の劣るものとし、精神的事業に差支へある

べくもない。四十で早きに過ぎ、五十で晩きに過ぎるとなつては、あたら能力を使はずに過去る事になる。年齢に關する心持でこの邊に何とか改める事が出來ぬものか。四十で尚ほ早いどころか、遲れたとして取掛り、若し思ふやうに働ばなんだら、五十で晩いどころか、六十でも晩くなく、更にその後でも晩くないとしてよからう。

年齢は何でもないやうで、年齢相當の心持ちがある。若くて老人のやうに想へず、老いて若い者のやうに想へず、知らぬ間に心持ちが違つてゐる。若し豫めこれを察し、尚ほ早頃、尚ほ早いのでなく、現に晩いと思ふ頃が既に晩いのと知つたならば、年齢の計算に特殊の意義を具へるやうにならう。日本には相當に能力を具へる人が少くなく、事業の見るべきものもあれど、一層事業が多い筈であつてさう行かぬのは、尚ほ早いと既に晩いとの見方に足らぬ所あるが爲めでないか。新年に臨みこれを慮るのが無益でなからう。

年更まるに當つて年齢に就きて思ふ

水野廣德

また正月が來た。冥土とかに一里近づいたと思へば、目出度いのやら、不目出度いのやら。馬齢に對して一寸挨拶に窮せざるを得ない。「少年易老學難成」などゝ大文字を書いて天神樣に捧げたのは、左程昔の樣にも思はれないのに、何時の間にか、人生五十功無きを恥づる年に手が屆き掛けた。實にや學未だ成らずして老既に到るの感無くんばあらずである。過去を顧みれば、喜も、憂も、苦も、樂も、昔として唯一炊の夢の如く、喰ふて、寢て、遊んで、稼いで、家を持つて、子を生んで、時怒り、時に悲んだばかりで、青春の戀を味ふ暇さへも無かつた。今後幾年生き延びるか知らぬが、過去よりも一層枯淡無味な生活を繰り返して此世に御暇するのであらう。

働かざる者は食ふべからずと、レニンはむつかしく叫んだ

い、[illegible]生まれ出でたるものか[illegible]にかくの[illegible]ふ。考へれば考へる程人生の迂遠なるものか判らなくなる。今を時めく大臣も、路傍にさまよふ乞食も、金殿に美人を擁する富豪も、觀音堂の椽の下に虱を潰す乞食も、火葬場のカマドより出づれば平等無差別の灰色の骨となる。死んで後の大きな墓は却て肩が張るであらう。觀ずれば人生本來是空ぢや。今更ら醉生夢死などと皺子張るにも及ぶまい。四十、五十は洟垂小僧、七十男の花盛りなどと大隈さんを氣取つて見ても、時々醜面を鏡に照らして、髭や鬢に殖へ行く白髪の光を見ては、あまり嬉しい氣はしない。あぢやくくした薄い髪毛を透して、赤黒い頭の輝きを電燈の下に眺めては、我老いたりとの感を深うせざるを得ない。四肢の弛み、目尻の皺、駆ければ息苦しく、重きを持てば腕たるく、満滿の昔と二個ばれる。衰弱は獨り肉體のみかは、目にこそ見えね、心の白髪、心の皺を否定することは出來ぬであらう。

人間二十までは、學生なれば試驗に追はれつつ、唯食ふて、あばれて、無意義に過ぎ行く。二十代は戀と野心に夢うつつ。王侯相將何ぞ種あらんやで、意氣は旋潮心は純眞。生活苦にも煩悶せず、就職難にも屈托せず、死ぬるも、生きるも唯我一人。天下は我物、欲する儘に行ひ、好む儘に進み、前途は洋々として大海の如く。誠に人生の春である。唯惱むものは戀ばかり、[illegible]命拾ひできないと叫んでゐるのたい。

人間三十を登り、すでに[illegible]、更に始めて家庭の系累が出來る。妻子の桎梏に縛られて、最早や我身に我身が儘ならず、漸く世路の難きを覺り始める。しかもなほ未だ消へずして理性漸く長じ、思慮も出來れば分別も出來る。肉體の發育、氣力の充實正に其の極に達し、努めて屈まず、働いて疲れず、人生最盛最旺の黄金時代である。而して生涯の運命は多く此の時代に於ける賽コロの振り方に依つて決する。勤め、勤めと敎へてやりたい。

四十にして惑はずと孔子は言つたが、人間惑ふは却て此時代である。人生四十、多くは宿志と違ひ、青少時代の大志途に伸びずして、纔に靜用をスキ焼の團欒に散ずるに至る。浮潮の意氣は世路の險難に鎖磨し、純眞の心は世相の醜惡に濁り、情實を知り、妥協を覺り、不平を忍びながらも御無理御尤と頭を下げ、不滿を抑へながらも長い物には從はれろの利害觀念が發達する。之を融通が利くと云ふ。而も壯心雄志は未だ全く亡びず、反抗の意氣は時々頭を擡ぐるも、時已に遅く多くの場合に於て失敗である。斯くて生活に悩み、家庭に飽き、漸く人生を考へ始める。煩悶懊惱、逢に或者は信仰に依つて安心を得んとし、或者は係累を棄てゝ世を遁れんとし、時に或者は中年の戀に陥つて家庭を破壞する。

而して極めて少數の者は飽くまで新運命の開拓に奮闘するも、大多數は風のまに〳〵、波のまに〳〵、諦めの妥協生活に入るのが常である。此の諦めを不惑と云へば云へるであらうか。

人間生活の運命は略ぼ四十代に於て決せられる。進む者は進み、停まる者は停り、落ちる者は落ちる。同じ素質を持ちながら環境一つで、順風に帆を張つて順潮に駕する好運兒もあれば、逆風に檣を折られ、逆潮に舟を覆へさるゝ不運兒もある。最初投げられたる運命の賽の目の出方一つである。杓子にして耳掻に用ゐられたる者は落第である。毛拔にして釘拔に使はれたるものは落第である。人間棺を蓋ふを待つ迄もなく、少數特異の人物を除くの外、名を成すも、富を作るも、人生四十は運命の決勝線である。フレー〳〵四十男！。

人間五十となれば體力衰へ、氣力弛み、理性は情實と利害とに曇り、思慮は因循と苟安とに囚はれる。最早や乾坤一擲の壯擧を決行するの勇と斷とに乏しく、野心は消へ、覇氣は亡び、唯運命に任せて一日の安きを貪ぼるが常である。之を天命を知るとでも言ふのであらう。革命二十、改革四十。革命は欝勃たる熱情の力で行はれる。改革は聰明なる理性の力で行はれる。

五十以上の人間に依つては革命は素より、思ひ切つた改革さへも望まれない。由來向上第一、事有れ主義が青年の常態心理で、安全第一、事無かれ主義が老人の常態心理である。人政界に跋扈すれば苟合妥協に依つて政治は停頓腐敗する、人社會に跳梁すれば情實因緣に依つて社會は沈滯墮落する、

生あれば死あり、盛なれば衰ふるは生物普通の天則である。人生七十古來稀れなりと云ふが、醫術と健康法の進步したる現代に於ては人生七十甚だ稀れならずである。人間定命六十であるか、七十であるかは知らぬが、人間三十代は體力に於ても、氣力に於ても、盛滿の絶頂である。正月の餅を待ち兼ねたる少年時代は人生の坂の上り途である。二十代三十代は頂上の平地である。四十を越ゆれば下り坂である。月日の經過の速さこと眞に白駒の隙を過ぐるが如く、五十に近づけば速度益加はり、二年三年夢の間に飛んで行く。

悠久の宇宙より見れば人間一代朝露よりも尚ほはかない。而かも露の命と終りと知りながらも、棺桶に兩足突き込んだ身を以て、尚も人を苦め、人を陷ゐれ、先の世に持つても行けぬ財產や肩書の奪ひ合ひ取り合ひに、皺くちやの浮身を窶して居る。そこに人生の不可解があるのであらう。

人間五十、天命を覺れば華族も富豪も羨ましくはない。大臣大將も偉いとは思はない唯羨ましきは青年ばかり、今二三十年も若かりせば。スタインナツハに賴まうか？。

四十以上

徳田秋聲

人間も四十以上になると、大抵な愚かものでも、どこかに重みが加はつてくる。四十にして惑はずと云ふのは聖人のことで、凡人は益々惑ひが多くなるばかりで、足下が危くなり、さすがに今迄強い自信と勇氣とを持つて氣負つてゐたものも、ちよつと後を振顧なければならないやうな氣持になる。現代のやうな思想の變動し易く、生活の不安定な時世では、少年青年老年おしなべて惱みと惑ひの絶える間はないが、四十と云へば普通子供の二三人もある時代で、自分自身がまだ確立しないうちに、早くも生活の分裂が見舞つてくる。これは中等以下の階級では、殆んど誰れもがさうで、思はず大地に足を踏みしめて見るやうな時であるが、それだけ本當の生活に入つて來たともいへる。顏や態度も四十くらゐにならないと、どこかに頼りないところがあつて、味ひに乏しいが、五十となると、日本人はもう何となし蒼枯の感がある。しかし顏などに味ひの出て來るのは、むしろ老年者で、毛が白くなつたり、頭が禿げたり、皮膚に汚點が出たりして、威重が加つてくる。政治家や實業家などの重んぜられるのもそれからで、丈夫な體の持主でありさへすれば、精神力も旺盛になつて來るし、若いとき病身なものも、寧ろ病氣がなくなつて、氣持も豁如として明るくなる。頭をつかふものは、必ずしもさうでないやうで、日本の文藝家は、五十前後になると、もう影が薄くなつて來るやうだが、それは必ずしも老いるからではない。時代の潮先きが、他の社會に比べて迅速だといふ原因もあるだらうし、修養の暇もないからでもある。若いものは若いものゝ仕事を爲し、老人は老人の仕事を享け樂しむと云ふやうなことは、貧乏で性急で、狹隘な日本の文壇では許されないことだ。

老境には老境の惱みもあるが、むしろ樂しみの方が多い。それは段々に生活慾望が少なくなると同時に、氣持で生活を樂しむやうになるからである。精神的になるとも言へるが、また一方からは反へて慾望が深まり、大きくなつて來るのだとも、

る。大規模の仕事は、大抵年取つてからで それは必ずしも新しく産み出されるものではないにしても、少くとも蓄積されたものである。實際社會では殊にさうで、社會民人のために大きな仕事をするのは、年取つてからのことである。文藝の仕事が、果してさういふ風に行くか何うかは、興味のある問題である。私はどの社會でも、年取つた人の出しやばるのは餘り好かないが、さればといつて若い人ばかりの跋扈する時代も、健全な時代とはいへないであらう。

老年の不幸は、友人がなくなることと、死の近づくことだが、しかし大自然のなかに生きてゐる寂しさを味ひつめたものには、それも大した悲しみではない。

四十を超えた「年」の悩み

法學博士　吉野作造

自分の年齢が自分の思想生活と切つても切れぬ或る特殊な關係を持つといふことを、今更ながら此頃に至てしみ〴〵感じさせられる。冷靜に考へれば、若い時だつて同じ樣なことがいへる譯であるが、若い時分の元氣は實の所「年」なんどいふことを寸毫念頭に置かしめなかつた。之も「年」だなアと感ずるやうになるのは矢張り四十を超えてからが普通であるまいか。餘人は知らず、私自身はこの二三年頻りにこの事が氣に掛る。氣に掛り出した始めは何時頃かと考へて見るに、今はつきりと分らぬ。強て記憶の糸を手繰ぐると次の樣な出來事からであつたやうに思ふ。或る年私は一人の先輩と田舍に講演に往つたことがある。田舍の人はその先輩よりも私の方を地位が上とでも誤認したのか、私を最後の順番に据へてあつた。すると此先輩は無雜作に『僕のあとでやつては君も苦しからうから順序を換へてやらうか』と如何にも私をいたはる態で親切に云ふて與れるのであつた。自分の口から云ふのは憚るが、正直のところ若輩ながら私があとにやつた方が却てあの人の爲にも都合がよか

きり位に私は考へて居た。併しそれは又た聽き合つて見れば自ら分ることゝ思ふが、其後さる席で私が一人で講演することになつた場合に、『聽衆が來ないと見つともないから僕も前座に出てやらうか』といふのを聞いて、矢ツ張り自信の強い男だなアと思つた。其後また何かの機會の話で分つたことであるが、彼は私を彼自身より十も年下の小僧と思つてゐるらしい。實際は彼と私との年齢の差はたつた三四歳に過ぎぬのである。

この時私は始めて、年下の者の事は動もすると實際あるよりもヨリ多く年に隔りがあるかの如く誤想し易いものだ、といふことに氣が附いた。夫れから幼時田舍に居つた時の私の周圍の友達のことを想ひ出して見た。親しくしたのは考へて見ると殆んど皆同じ年配の者で、丸で別個の仲間として十も年下の樣に観て居つた連中は此頃になつてよく調べて見ると皆二つか三つしか違はぬのである。斯んな風に自分の年下の者となると、とかく非常に年が違ふやうにひよつと錯覺するものらしい。

この錯覺は單に年齢について丈けならいゝが、時によると、事實あるよりもヨリ未熟なもの、ヨリ低級なものと速斷するといふことにも現れるやうに思ふ。私は前記の先輩とあんな交渉があつた時――私の口からいふのも變なものだが――彼はもう我々年配の者の事になると適當の評價が出來ないのだと感じたのできまつたが、併し[illegible]みたが、同亦私の事でもあつたのだ。現に私自身によく反省して見ると、例へば、私には今日の三十歳の思想家諸君のことに就ては實は餘り深く知る所なきのみならず、彼此の間に相當の評價を附するが如きは全く出來ないのに今更ながら狼狽して居るのである。人事ではない。油斷がならぬぞ、といふが實に私の昨今の一つの惱みなのである。

私の專門の學問に就て云つて見る。私より先輩の人々に就ては、誰がどの程度、彼がどの程度と、點數を附けて出せと云はれても直ぐに之に應じ得るだけの自信はある。けれども私より年下の諸家に就ては之でも常に若い人々の論述にはつとめて注意して居るつもりなのであるが――一と通り名前を列擧する位のことは出來るけれど其等の人々の學界に於て占むる地位、その思想の傾向深淺等になると、お耻しいが甚だ朦朧なる觀念を有つてゐない。斯うして見ると、可なり努めた積りでも、若い人の間の事情といふものは、我々年寄の者になると段々分りにくゝなるものと見える。そしてウツカリすると所謂老人の獨り好がりに墮するの恐れがある。思想界に生活するものにとつて之れ程危險なことはない。此點一段と反省奮勵を要すると昨今つくぐ考へてゐる次第である。

數年前私は或る學問上の用件で政界と學界とに兩股をかけてゐる云はゞ元老格の老先生に遇つたことがある。「君の書いたものは新聞雜誌等で絶えず拜見して居ります」などと御世辭は馬鹿にいゝ。けれども二三度私の名を聞きただした癖に結局私を吉本君〳〵といふのでガツかりした。段々話して見ると、美濃部博士などの如き一方の權威たる學者の名さへよく知らぬ。憲法學では日本では穗積八束西洋ではブルンチリーに限るといふやうな權幕なので、老骨遂にどしがたしとあきらめたのであつたが、今考へて見ると、程度の差こそあれ、此類のことは我々自身にもある。否。此種の傾向が我々の年配からソロソロ萌し始めるものではあるまいか。青年には自ら青年の修養あり。中年にはまた之に相應する修養の工夫を要する所以である。

もう一つ私が「年」に就て脅威を感じたことは、時代の脈動に對應する感受性がどうしても二十臺三十臺の人の樣に鋭敏でないといふことである。之は十數年この方大學の教職にあり青年學生の答案などを澤山讀んだ經驗でつく〴〵感じさせられたことである。皆がさうだといふのではないが、最も優秀なる二三の學生になると、實に私共をアツと云はせる樣な鋭利なる透察力を以て、時代の趨向を批判し多大の暗示を私共に與ふるものがある。それは勿論多年の讀書思索に依て私共にも達せられることはないが、そうした素養のある筈なき學生にしてあの境地にまで足踏み入れたのを觀て、私は一つには時代の脈膊の自ら教ふる所とは考ふるが又一つには若い人の感受性のかくも鋭きに今更ながら驚かざるを得ないのである。私は本來之等の人々に比較し特に感受性が弱かつたとも思はない。故に若い時には其時代相應に鋭い見識を立てゝ先輩の固陋を笑つたことなどもある。併し感受性が年と共に鈍るのは如何ともすることは出來ない。怠けてる譯ではないが之が即ち「年」なのだ。故に私は一つには出來るだけ若い人達に接して彼等を通して時代の脈動に觸れんことをつとめると共に、又一つには或點に於て若い人達の識見に謙遜して聽くべき必要を感ずる所以である。

「年」の惱みなどいふと甚だぢゞ臭く響いて一寸外聞がわるい。けれども私は此の惱みに氣附いたことを別に不愉快にも思はない。「年」が自分を如何なる境遇に持つて往つたかに頓着もせず、飛んでもない頑迷不靈を臆面もなく振り廻す老先生方の多いのを見るとき、私は寧ろ早く之に氣付いた結果之等の人々と同類たるを免れ得るだらうことに限りなき滿足を感ずるものである。

冨山房發行新刊重版名著

著者	書名	體裁	定價・郵稅
文學博士 桑木嚴翼著	倫理學概說	菊大判布裝 五百頁	定價 貳圓六十錢 郵稅 拾貳錢
ロジャース原著 北昤吉新譯	西洋哲學史	菊判布裝 七百六十頁	定價 五圓 郵稅 十八錢
東北帝大司書官 田中敬著	圖書學概論	菊判布裝 六百頁	定價 四圓五十錢 郵稅 二十四錢
文學博士 幣原坦著	朝鮮史話	四六判布裝 五百四十頁	定價 三圓五十錢 郵稅 十二錢
文學博士 箕作元八著	フランス大革命史 全二冊	菊判布裝 千二百餘頁	定價 各五圓五十錢 郵稅 各二十四錢
文學博士 箕作元八著	ナポレオン時代史	菊判布裝 千三十頁	定價 六圓五十錢 郵稅 二十四錢
文學士 大森金五郎著	大日本全史 全三冊	菊判布裝 各九百頁	定價 各七圓 郵稅 各二十四錢
文學博士 吉田東伍著	日本歷史地理之研究	菊判布裝 千三十頁	定價 六圓五十錢 郵稅 二十四錢
文學博士 吉田東伍著	新編日本讀史地圖	四六倍判 六十六葉	定價 六圓五十錢 郵稅 十八錢
文學博士 箭内亙著	新編東洋讀史地圖	菊倍判 三十數葉	定價 七圓 郵稅 二十四錢

東京神田 通神保町

冨山房

振替東京 五〇一番

新刊圖書目錄進呈

詩壇の散步

日夏耿之介氏著

價〇、〇〇圓 〒〇、〇〇圓

耽秘主義詩人日夏耿之介氏の過去十年間は勝ち誇これる民衆詩人との激しい論戰であつて、その問題こそ正しき詩道が加へられたにもかゝはらず、その時々正しき詩歌の本質と價値とを闡明にして來た。そのエッセイ集とも云ふべきものが本書である。いやしくも最近詩壇十年間の推移を直接その一方の陣頭である作家の口からきかんとする者は本書を讀め。

文學研究書類

片上伸氏著 文學と社會

社會と文學とが如何に關係交渉してゐるか一々最近に於けるロシヤの文學作品を引用して說明論評したものである

價0.90圓 〒0.06圓

北村喜八氏著 表現主義の戲曲

世界的藝術運動とならんとしてゐる表現主義、特に戲曲に就て綜合的考察と概觀的紹介とを與へたものである。

價1.20圓 〒0.06圓

宮島新三郎氏著 短篇小說新研究

近代文學の珠玉なる短篇小說の起原構造及び內容等を徹底的にあらゆる方面より研究したものである。

價1.20圓 〒0.06圓

島村民藏氏著 劇の創作と鑑賞

本書は劇の創作と鑑賞に關する理論と實際を平易に解說した書であつて劇研究家たるものゝ一讀の必要がある。

價1.30圓 〒0.12圓

圖書目錄進呈

小說の創作と鑑賞

木村毅氏著

價一、八〇圓 〒〇、〇八圓

本書は小說を味はひ又は創作しやうと志してゐる人々の爲に書かれたものであつて、全二十章の設問法、圖解法等最新式の小說作法によつて說いてある。文章もまた平易にして、東西古今の名作を解剖して紹介してあるから、これを一讀すれば、如何なる初心者も小說を作り得るやうになるであらう。著者は批評家で作家を兼ね得たる早稻田派の新進、殊に多讀を以て聞えた人である。

東京市牛込區甲良町 **新詩壇社** 振替口座東京三一〇〇四番


マツダ瓦斯入電球
音もなく降りしきる
雪の中靜に更け行く睦月の夜
お室には煌煌として溫き氣分の漲る
マツダ瓦斯入電球を……
又若し御風氣の時には先づ
正確なるギバ体溫計を
お用ひになる樣御勸め申上ます。
東京電氣株式會社
F-CT.-1.
TEC
ギバ体溫計

想華

瞑想

武者小路實篤

○

美しい木だと思つてよつて見ると
之は澤山の毛蟲
ぞつと身ぶるいして
たちのいて見ると
又美しい木。
あんなに毛蟲がたかつて
よくも枯れないと思ふ、
どん／＼そだつてゆく不思議さ。

○

蟲の害の方が生長力よりずつとひどい時は、木はやられてしまふであらう。だが生長力が蟲の害より強すぎる時、木は蟲が多くついても生長してゆく。蟲がゐないのにこしたことはあるまい。だが蟲が少しゐるのを見て、木に見切りをつけるものは賢いとはいへない。

○

人間社會の蟲をとるのも決してわるくないが、しかし蟲をとることは大變である。寧ろ不可能である。それより生長する力をどん／＼發達させる方がよくはないか。彼等が喰ひつくされる前に、内の力で生きぬく。

内の力こそ我等の生命。

勿論我等は、外のものを内にとり入れることは大事だ。

○

ヘボの學者は學問の境界線が見えない。そして學問こそ廣大無邊のやうに思ふ。だが大學者は、人間の學問の限りを知つてゐる。人間にわからないことの多すぎるのにおどろく。そしてまだとけない謎を少しづゝとくことに大なるよろこびを感じてゐる。

○

火星に人間がゐるか居ないか。

又ゐればどんな人間がゐるか。

その人間について想像した畫を科學畫報に出てゐるのを見たが、それは眞面目に考へられたものか、どうかは知らないが、隨分幼稚な醜いものであつた。もし我々が人間と云ふもののたまるでない處で想像したらどんなものをつくり出す

か。人間と同じものを考へ出せたか。之より美しいものを考へ出せたか。

考へ出せないと思ふ。人間が神を考へる。そして考へ出した點は何處だ。貴い所々は人間そつくりである。それ以上のものは人間には考へ出せない。そして下八の神にたゞ羽をつけることを考へ出せたゞけだ。

他に考へやうがあるか、ない。處が自然は實に内容と外見とぴつたりした、いろ〳〵の美しいものを作り出してゐる。それは驚くべきである。實に他に考へやうがないやうに實にぴつたりしてゐる。之は人間の想像力が不足してゐるからと云ふよりも、自然と云ふものは内容があつて外見があるものではないかと思ふ。

蚊の小面にくさ、なぞでも實にぴつたりしてゐるし、青空の色でも、海でも、星でも實にぴつたりしてゐる。廣大無邊と云ふ氣がする。實に自然は、とても想像が出來ない程小さいものから、とても想像が出來ない大きなものに至る迄、實にぴつたりした具體化を行つてゐる。支那では鳳凰や、龍や、麒麟を考へ出した。中々よく考へ出されてゐるが、それも一種のよせあつめである。自然に手本がなくては考へ出せない。

自然は氣持のわるいものや、滑稽なものも考へ出してゐるが、それも中々面白い。章魚なぞも一種の傑作である。猶フグなぞも、龍のおとしご、マンボー、河馬なぞも滑稽である。氣味のわるい方は、ずつと前にもあげたが、その他、實に澤山ゐる。あまり高尚なものにはゐない。自然は決して一色ではなく、單純ではなく、その方、その方で思ひ切つてゐる。

人間の想像力なんかそれ等にくらべると貧弱すぎ、幼稚すぎ、又無責任すぎる。とても內から生きてゐるとはゆくまい。

○

人間の顔だけでも實によく作つてゐる。そして内容とぴつたりしてゐる。

トルストイの顔をあれ以上トルストイらしくつくることは出來ない。

ドストエウスキーの顔なぞも實にぴつたりしてゐる。

ホイツトマン、一々あげては切りがない。

ソクラテスなぞも中々こつてゐて面白い。

そんな有名な人間許りをあげないでも、實に内容と顔とは一致してゐる。それは實に一見して矛盾してゐるやうに見へても、微妙な處で一致してゐる點では感心する。

上等、下等、中等、とりまぜてさてもいろいろの種類をつくり出したものだ。

心の出來ではなほいろいろであらう。其處が面白い。純粹なものは美しいが、單調なのは自然はいやがる。

一人がいくつもの顔はもたない。一人は一人だが、皆あつまると、五百羅漢ではきかない。一々實に感じがあつて面白い。

○

それから又一人の人間が赤坊から老年になるまでの變化の面白さ。

赤坊は實によくつくられてゐる。赤坊の可愛らしさは特別である。

そして子供はどうだ。七つ八つは憎まれ盛りとも言ふが、しかし子供の美は特別である。

少年、少女に至つては更に美しいと云ひたい。

だが滿花の時の男女の美しさも又特別である、そして中年、老年、又實に特別の美しさがある。

勿論、個性の醜しさが出ては、美はうちこわされる。又美しいと言へない場合もあらう。だがどこかともなく、

いつが一番美しいと云つていゝか。

いつもその味、その味で特別な味をもつてゐる。子供の無心。少年、少女のつぼみのやうな美しさ、若々しい美しさ。青年の力にみちた美しさと、女の豊富な美。中年のしぶ味、併、老年の精神的な顔。

勿論之は誰もがとは云へないかも知れないが、一人々々にとつて、どの時々も、その人が、その年齢でもつべき感じを質に露骨にあらはしてゐる。その變化の味のふかさ。

しかもその時々の顔が又その人のその時々の氣分でかはる表情の複雑さ。どんな色合でもちやんと中からあらはすことの巧みさ。

内と外の一致。

肉眼で見て醜くゝとも、心眼で見れば、人々の心の動きの、あらはれの面白さが、實によく感じられ、美しい心の美しさは何にたとへやう。

だが美しい女、男性的の美しさ、精神的の男、それは地上のかざりである。

○

人間の心の動きの面白さ。

千變萬化

美しき心の動きの美しさは

神の如きもの、

地上第一の美、
不滅の美。

○

四季折々の變化、天候の變化。
そのたび／＼にかはる自然の表情、
人間の心のやうによく變化する。
そのたびに空の色、雲の形の變化。
いろ／＼の風、雨、雪、あられ、電、雷、それ等の變化の複雜さ。そしてその變化は、時に恐ろしい時や、うつとうしい時があるが、面白いことも、亦、面白く、隨分氣持のいゝ時は氣持がよく、美しい時は美しい。
決して單調ではなく、規ちやう面ではなく、自由自然で、しかも自然からはみ出す。その時その時にすなほである。

○

人間はそれ等のことに無關心であらうと、又不愉快を感じやうとそれ等のものは一向平氣である。それ等のことに美や、よろこびを感じることが、出來るかどうかは、當人にとつての幸不幸がきまるだけで、他の人は別に困らない。尤も一人の人の不機嫌は近處迷惑でないこともないが。損するのは第一は當人である。
自然の美を感じないことを傲るものは、自分に與へられた寶をすてゝ歩く男にすぎない。自分を不幸にすることを自慢にすることにすぎない。それに反して、本當に美を感じられるものは、幸福と云つていゝ。

○

我山を見てよろこべども
山よろこばず
我山を見てかなしめども
山かなします
我よろこぶ時、我かなします
我かなしむ時、我よろこばす。

○

汝、大なるものを愛し得ざるは、汝の幸福には非ずして、汝自身の不幸なるを知れ。

汝、人類を愛さずとも、人類は平氣なり、されど汝の心は平和を失なふ。空虚になる。それは汝の損以外には非ず。

汝、自然を愛さず、自然至つて平氣なれども、汝の心の荒むのをまぬかれず。自然を愛することが出來ないことは、傲りにはならず、汝の心臓のたゞ餓えるのみ。

○

美徳は他人の爲にも至つてよきものなり、されど汝、自身にとつて更によきものなり、汝の生命を永遠のものに結びつけない美徳、そんなものがあればそれは僞善と思へ。

○

他人から何等かの報酬を得るための行爲は、汝を奴隷にしやすい。報酬は拒ばむ必要ないが、損してもやりたい仕事、金錢上にも損もし、他人から惡口を云はれても、それでもしないと氣がすまない仕事をする者が、本當の仕事をもつてゐると云へる。

自分は金も名譽も嫌ひではない。だが金や名譽のためにのみ、仕事をすることは恥ぢる。いくら金がとれ、賞讃されても心が空虚になつてはたまらない。外界から愛されたつて、それは一時的で、更に空虚なものがのこる。內心の充實、內から生れる權威、心のおちつきこそ我等の求めるべきものである。それは我をつくりしものに從順になることである。

外界のものは內界を生かすためにのみ、攝取すべきである。

○

傍から見てどんな不安な道を歩いてゐるやうに見へても、その人が內心の要求、內心の要求と進んでゆく人は、何處かで自分にぴつたりした仕事を見出す。

他人のいゝと思つたことより、自分のいゝと思つたことをしろ、しかしそれには一通り以上の勇氣がゐる。又それでいゝのだ、その勇氣のない人は、社會の要求に從ふ方がいゝ人であらう。

一々社會の要求することに反對するものは自己のないもの。自己のあるものは、自分の生命から役立つものは何處からでもよる。彼は四方、八方に根をはる木である。一つの主義に後生大事としがみついて他の木を見おろした氣になつてゐる寄生木ではない。

○

僕は獨立した人間を尊敬する。

他人に似るのを恐れすぎたり、又似ないのを恐れすぎたりするものには組しない。自分の內心の要求が、他人と似たら、似ていゝ。

ちゞつたらちゞつてゐる。自分は自分の要求に從ふものだ。與へ[illegible]ものは、[illegible]れた

ば、のこらずとる。とるものがなくなると自づと自分が出る。

小さい人間は他人の影に入つて、世間から注意されないのを恐れる、又他人本位だから、他人に眞似てると笑はれるのを恐れる、元々內心の要求がなく、たゞ時代の要求許りを氣にしてゐる。だから時代の流行が要求すればどんな私當でもやる。

しかし內心の要求の强い人は、自分の要求ですゝむ。全力ですゝむ。妥當は出來ない。

〇

たまには遊ぶのも大いにいゝ。年中あそぶのは心を空虛にする。その空虛を、快樂でうづめやうとするものは、大馬鹿、こん〳〵ちきである。

天意を知らぬものである。人間は道樂するためにつくられてゐるのではない。他の目的でつくられてゐる。だから快樂、心の平和に反する快樂許りを逐ふものはつひに厭世家になる。彼は地獄の人間、惡趣味の人間になる。

尤も道樂にもいろ〳〵ある。その方で天意を知り、又示すことが出來、或はその方でます〳〵深い美を知ることが出來れば別であるが、しかしそれは例外の例外である。多くの人は遊びは日曜日のもの、普段は働くことが大事である。

〇

勞働、一人前の勞働の程度は、はつきりわからないが、病人、子供、年よりの他は何かの形で、働くことは必要である。定職をもつことは、人間の生活に安定を與へる。毎日ぶら〳〵してゐることは、特別の人以外はよくない。その特別な人は働けないものか、[illegible]面的に發達した人かである。

自分は金も名聲も嫌ひではない。だが金や名聲のためにのみ、仕事をすることは恥ぢる。いくら金がとれ、賞讃されても心が空虚になつてはたまらない。外界から愛されたつて、それは一時的で、更に空虚なものがのこる。内心の充實、内から生れる權威、心のおちつきこそ我等の求めるべきものである。それは我をつくりしものに從順になることである。

外界のものは内界を生かすためにのみ、攝取すべきである。

○

傍から見てどんな不安な道を歩いてゐるやうに見へても、その人が内心の要求、内心の要求と進んでゆく人は、何處かで自分にぴつたりした仕事を見出す。

他人のいゝと思つたことより、自分のいゝと思つたことをなしろ、しかしそれには一通り以上の勇氣がゐる。又それでいゝのだ、その勇氣のない人は、社會の要求に從ふ方がいゝ人であらう。

一々社會の要求することに反對するものは自己のないもの。自己のあるものは、自分の生命から役立つものは何處からでもよる。彼は四方、八方に根をはる木である。一つの主義に後生大事としがみついて他の木を見おろした氣になつてゐる寄生木ではない。

○

僕は獨立した人間を尊敬する。

他人に似るのを恐れすぎたり、又似ないのを恐れすぎたりするものには組しない。自分の内心の要求が、他人と似たら、似ていゝ。

ちよつたらちよつていゝ。自分は自分の要求に從ふものだ。[illegible]ば、のこらずとる。とるものがなくなると自づと自分が出る。

小さい人間は他人の影に入つて、世間から注意されないのを恐れる、又他人本位だから、他人に似てると笑はれるのを恐れる、元々内心の要求がなく、たゞ時代の要求許りを氣にしてゐる。だから時代の流行が要求すればどんな藝當でもやる。

しかし内心の要求の強い人は、自分の要求ですゝむ。全力ですゝむ。藝當は出來ない。

○

たまには遊ぶのも大いにいゝ。年中あそぶのは心を空虚にする。その空虚を、快樂でうづめやうとするものは、大馬鹿、こん〳〵ちきである。

天意を知らぬものである。人間は道樂するためにつくられてゐるのではない。他の目的でつくられてゐる。だから快樂、心の平和に反する快樂許りを逐ふものはつひに厭世家になる。彼は地獄の人間、惡趣味の人間になる。

尤も道樂にもいろ〳〵ある。その方で天意を知り、又示すことが出來、或はその方でます〳〵深い美を知ることが出來れば別であるが、しかしそれは例外の例外である。多くの人は遊びは日曜日のもの、普段は働くことが大事である。

○

勞働、一人前の勞働の程度は、はつきりわからないが、病人、子供、年よりの他は何かの形で、働くことは必要である。定職をもつことは、人間の生活に安定を與へる。毎日ぶら〳〵してゐることは、特別の人以外はよくない。その特別な人は働けないものか、一面的に發達した人かである。

病身の人は身體を大切にしなければならない。身體のいゝ人は、身體のいゝことを生かさなければならない。

人間は何か仕事をして、その餘暇で遊ぶことが健全な生活と云ふべきである。

○

生活のだらしがないことに、平氣になつてはいけない。其處に感じる空虛を更に高いものに生かすことが出來る人は、別としても、かつちりした生活をするくせはつけておくべきである。心も身體もしつかりする。

たゞ今の社會では、內心の要求が殺されすぎる仕事でないと飯が食へないのは、大いに困ることである。自分はその點新しき村の生活の仕方が一番まちがひがなく、いゝと思ふ。たゞまだ現存の新しき村の貧弱であり、生長し切らないのを殘念にも思ひ、恥かしくも思ふが、しかし目ざしてゐる方にゆる〳〵進んでゐることは實にうれしい。

その方は新しき村の仕事に任せておく、よき兄弟達によつて、この問題は美しく解決される時が、やがてくるであらう。

○

自分は人間の本能は全部人類の生長にとつて役立つものとして尊敬出來るものと信じてゐる。しかし全部の本能を調和的に美しく生かすことは容易ではなく、多くの人はある本能を病的に發達させてそれで快樂をぬすみ取らうとしたり、得をしやうとする。

その結果の面白くないことは云ふ迄もない。

其處で社會が健全だと、お互同志の間で、うまく制裁が行はれ、又修業が行はれ、全體にとつて害のある本能の病的發達は出來なくなり、全部が調和して生きることを、全體として強いられることになるが、社會に病點があると、その本

前に萌芽して、それの發達、完成させうるやうにし、それ〳〵それ〴〵を生しやうとする……、し……、……
中横行するやうになる。
貪慾、性慾、野心、食慾なぞが病的に發達する社會は健全な社會ではない。之等の本能も適當な位置に踏みふかく置かれてゐると、決してわるい本能とは云へないのだが、それのみが、一面的に、又病的に發達されては困る。昔の暴君達の逸話は、人間同志の、禮儀遠慮がなく、殊に君主の恩澤を占有したい人々がおだてると、人間の本能がどの位ゐまで病的に發達し得るかを示して、人に恐怖の感じを與へる。
親友の間には無遠慮、無禮講はいゝが、全體としては虚禮にならない、他人の生命の尊嚴を犯さないための禮儀が必要である。
禮儀も形式的になつては隋分うるさい、不愉快で、人の生々することの邪魔をするものであるが、正しい禮儀は、人と人との間を美しくし、人々の内にある横しまになりやすい本能を正しくする。

○

人間は自己の内に缺點を持たないことはむづかしい。それは出來るだけ自分で用心すべきである。しかしそれはたゞ壓迫するだけでは駄目である。その力を他に廻さなければならない。
慾望は壓迫されるためにあるのではなく、正しく生かされるためにある。自己を殺すためにあるのではなく、自己を生かすためにある。戀愛を例にとる、戀愛は自己を殺すためにあるのではない。更に自己を立派な人間にするためにある。妻子を養なふ力を、獲得させるためにもあり、又心靈界に目ざめるためにも與へられてゐる。
野心だつて、相手をやつける方に働かす、自分を立派にする方に働かせば決して惡いものではない。又そのために與

へられてゐる。らくな道、ずるい道を通つて通用するのは、社會がまだ進歩しないからである。

すべて慾望は一つの力である。それは自分の生命を高めるために與へられてゐる。決して自分を低くゝするため、賤しくするために與へられてゐない。しかし實際においてはさうはゆかない。それで本能がその人を賤しくしないために、各自に目けりか與へられて居る。つまり恥を知る心がそれである。恥かしいことは恥かしいことであり、耐えがたいことである。侮辱されて平氣で居られる人間は、侮辱される以下の人間か以上の人間で、それはむしろ例外で、大がいの人は侮辱される位いなら死を撰ぶと云ふ氣になる。恥を知る心は實に强よい。

人間は自己の本能を正しく生かすためには、この恥ぢを知る心を正しく生かすことが必要である。しかし恥ぢを知る心は人間をいぢけさすためにあるのではなく、それ以上に出させるためにある。

卑劣なこと、不正なこと、悪だくみ、眞價以上に人に見られたく思つたりすることは、恥かしいことである。しかしそれは自分の眞價を高めることで、打ちかつことが出來る。

他人と競爭してまけるのは恥かしい。しかしずるして勝つのはなほ恥かしい。ずるせずに勝たうとすれば實力が必要になる。

人間が自分の短所をなくなすためには、健全に恥を知ると云ふことが必要である。社會以下の人間は、社會から侮辱されることは唯一の恥である。そのかはり社會から侮辱されないやうに用心してはどんなことでもやる。しかし自分の心をたよりにするものは、自分の生命を完全にする方に向ふ力がないことを恥ぢる。眞價で生きないことを恥ぢ、眞價の低いことを恥ぢ、自分を世間にいつはることを恥ぢる。ありのまゝに人々に見せないことを恥ぢる。鍍金を恥ぢる。その結果、少しづゝでも自分を高めてゆかないとおちつかない。仕事にしても世間全體はあざむけても、自分の良心に恥

することとては我等には出來ない。自分の仕事により忠實になつたために世間から誤解されてもそれを苦にしない。そし
て

「天知る、地知る、我知る」

などと本氣に思つて、心の内に落ちつきを感じる。

そして自分の仕事、殊に生命を大きく生かすことに邪魔になる性質を少しづゝなほして、自己完成の道にすゝむ。彼は他人の思はく、流行、まちがつた社會の要求なぞに動かされることを恥ぢる。

かゝる人が自己完成を成就して、ゆくことは、社會から裁かれるやうに見えても、實は社會を裁くのである。社會に反省を與へ得るものは内心の要求をきくものである。

耶蘇は裁かれたのではなく、裁いたのだ。ソクラテスも勿論その一人である。孔子も當時の人々を裁いた。近代ではトルストイはその最大の一人である。唯一人かも知れない。

裁き方には全然賛成は出來ない時でも深かき反省を與へられる。そして心を嚴粛にしてくれる。しかし裁くのも、相手を殺すのではなく、より完全に生かすのでなければならない。

○

この生かすと云ふことを目的にしない道徳や、思想や、行動は、反人類的なものである。

個人及び人類を完全に生かすことに役立たない議論は要するに、議論の遊戯である。

偶像破壞だけで滿足できるものは、生る力のなくなつた人々である。

○

人間らしく生ると云ふのは
もつとよく生きやうと云ふことである。
人間らしい仕事と云ふのは
今度はもつといゝものがつくりたいと云ふことである。
毎日々々、同じものをつくつて滿足出來るものは、器械である人間ではない。
漁師や、農民の生活には、もつとうまくやつてやるとか、もつといゝものをつくつて見せると云ふ意氣が、生き得るから未だ人間らしい處がある。それがなくなつては面白くない。その意志が強く、全部的により完全へ目ざしてすゝみうる仕事が一番、人間らしい仕事である。

○

工場、鑛山に働くものも絶えず、もしこの仕事はどう云ふ方法でやることが、一番人類の意志に叶ふだらうと云ふことを考へ、そして勞働の仕方、又生活の仕方なぞはどうしたら一番いゝかをはつ切り考へておくことが必要と思ふ。金や、暴力に支配されずに働く氣になれるためにはどうしたらいゝか。それ等のことを考へながら働くことは人間らしいことである。

○

やがてくる時代、又我等の目ざす時代は、どう云ふ時代でなければならないか、それをはつ切りしておくことは必要である。第一に設備のわるい點は段々なほし、人々が健康を損ねず、又よろこんで進んで働けるやうに、そして勞働時間をへらしても能力がさがらないのにはどうしたらいゝか、そんなことも實際にあたる人は考へ、又出來る範圍で實行

することが必要である。

金をもうける仕事はどうしても面白くない。

損してもしたい仕事でなければ本氣になれない。

金がない方が、金のありすぎるより、人間の決心を强くすることは事實だ。しかし金のない時人は氣の毒である。又金のなさすぎるために、自分の性質に逢はない仕事をしなければならないことは氣の毒である。

○

金でやれる仕事では金持には叶はない。

金がありすぎては出來ない仕事をやつてゆくより仕方がない。

○

自分はしたいことが多すぎるが、出來ることは少ない。その少ないことを忠實に、忠實にやつてゆくより仕方がない。

○

神と人間が歩いてゐた。

人間は神に云つた。

「人生は短かすぎますね」

其處で神は、その人間を戰場につれて行つた。人間は始め彈丸がとんでくるたびにふるへ上つてゐた。其處に女の人

が逃げて來て、その人間に助けてくれと云つた。その人間は承知した。兵士がせめて來てその女を見つけ出し、その女の泣きさけぶのもかまわずつれて行かうとした。人間はそれを見て怒つた。そしてその女を助けやうとした。神は「助けにゆくとお前も殺されるぞ」と云つた。

「だが見殺しには出來ません」

そしてその人間はとび出してその兵士に劍でさし殺された。

神はその人間をよみがへらして云つた。

「お前は人生は短かいと云つた。それをなほ自分の手で短かくした。しかしあの瞬間後悔しなかつたらう」

「はい」

「人間はさう云ふ風につくられてゐるのだよ」

○

人間は其處で神に云つた。

「死といふものはさう怖いものではありませんね」

この言葉が終るか終らない内、近所の山の内から虎のなき聲が聞へた。

「あの聲はなんですか」

「虎だ」

「虎ですか。こつちへ來るでせうか」

「死ぬことは怖くないのだらう」

虎の吠ゆる聲を聞へる。

「近づいて來ましたね」

「近づて來た」

人間は逃げやうと考へた。だが、前と後ろに虎があらはれた。

「怖くはないか」

「どうぞ許して下さい」

「怖いか」

「はい」

「死にたくはないか」

「はい」

神は相閭すると虎は逃げて行つた。

○

「あなたは殘酷ですね、生きてゐるものは死なゝければならないと云ふことは」

人間がさう云ふと同時に、一人の老僧があらはれて、向ふからやつて來た。後ろから、一人の武士が來た。そして老僧をよびとめた。

「お前の生命をくれ」

「私の生命が何にかになりますか」

「お前は敵の間者にちがひない」
「私は敵の間者ではない」
「生意氣云ふとかうだぞ」武士は老僧を切らうとしたが老僧は少しもおどろかなかつた。
人間はその老僧の顏を見、その態度を見てすつかり感心した。
「お前は生命が惜しくないのか」
「私は殺される時がくれば殺されることを知つてゐる。私はもうするだけのことをして來た。もうそろ〳〵死んでもいゝ時分らしい。さあ安心して切つて下さい」
武士は刀をあげて本當にその老僧の首を切つた。そして「矢張りこいつは本當に生命が惜しくなかつたのか、珍らしい奴だな」と云つて、森のなかに入つて行つた。すると弟子らしい坊主が出て來て、それを見ておどろいた。死骸に抱きついて泣いた。
人間はそれを見て考へこんだ。
「お前は何を考へてゐる」
「私はあの切られた人は本當に悟つた人だと云ふことを知りました。あの人の死ぬ時の樣子の靜かなのには私は感心しました」
「あの男にとつては死ぬことはなんでもなかつたらう。あの男はこの世に思ひのこすことはなく、死ぬ時を靜かに待つてゐたにすぎない」
「あの人はいくつですか」

「[illegible]」

人間はわけのわからないへんな気がした。

○

「死が怖くなかつたらいゝでせうね」

人間の言葉が終らない内に、二人の男が出て來て、お互に切りあつた。そしてお互に平氣で死んでいつた。

「死の怖くない人間が羨ましいか」

「あゝ馬鹿でも困りますね」

○

「私には何にもかもわからないのです。何んだか不安で仕方がありません」

「草や木を見ろ。彼等は考へないが、不安ではない」

「考へるから不安なのですね」

「本當のことがわかれば不安はないのだ。考へ方が足りないから何となく不安なのだ」

「さうですかね」

人間がさう云つた時、一人の男があらはれた。

神はその男を見て云つた。「あれに聞いて見ろ。」

人間はその男に云つた。

「あなたは何となく不安を感じることはありますか」

「私は自分の知慧で考へてゐた時不安を感じたことがありますが、すべてを何かに任せてしまつたら、心がおちつきました。人間は一人で生きてゐるものではなく何かにあやつられて生きてゐるのです。そのものに全部を任せて、その自分がすることを命じられたことだけこつ〳〵してあとの責任は全部そのものに任せてしまうと安心です。その〔？〕ものに任せずに、自分の智慧で考へると不安な時もあります。私にわるい處があつたら、なほしますから許して下さい。そして私を見捨てないで下さい。さう云ふ時は祈ります。そしてそのものに自分全部を任せる時はおちつきます」

「それなら敵が來てあなたを殺さうとしても」

「私に敵はありません」

「敵はないのですか」

「人間が人間を敵呼ばりするのは、まだ知らなければならないことを知らないからです。人間は他人と自分とが同一人である方面を知らなすぎます。人間はまだまちがつた考へをもちすぎてゐます。その罰をうけすぎてゐます。人間が本當に悟ると、他人と自分は、同じく人間であり、同じく人類の子であり、根が一つであり、お互に協力者であることがわかるのです。處が人間はまだわからなければならない方面がわかつてゐないのです。そして無理に敵をつくつてよろこんでゐるのです。馬鹿にあつては叶ひません」

「それでもいつ死ぬかわからず、いつどんな目に合ふかわからない人間は不安を感じるのがあたりまへでせう」

「處が人間は、不安は感じないですむやうに出來てゐるのです。尤も人間は出來るだけよく生きたいと思ふように、よく死にたい、犬死はしたくないと云ふ氣持を與へられてゐます。しかしこれも悟つて見ると、人間の智慧で考へただけ

の話で、私達が犬死にだと思つてゐることが、犬死にでもないし、私達が立派な死だと思つてゐることが、犬死にだつたことがあるのです。私はすべてそんな自分にはつ切りわからないことは何かに任せてしまひました。死ぬ時には死ぬのであつて、生てる時は生てゐるのです。自分の智慧よりもつと大きな智慧、自分の生命よりもつと大きな生命に自分を任せてしまへば、人は敵もなく、不安もないのです。しかし少しは不安がある生活も私はわるいとは思つてゐません。ですが、不安をなくしたい時は、いつでもなくなせる用意は必要と思ひます。すべてをまかせてしまうことの出來るものを持つものは仕合せです」

人間はまだ合點がゆかなかつた。

○

「あなたは肉體の苦痛を平氣で耐へられますか」

「それは出來ません」

「それならけがをしたら大へんと思ひませんか」

「けがしないやうに注意は十分しますが、負傷をするまでは氣にしません。あらゆる場合を考へて心配したら切りがありません。明日大地震があつたらどうしよう。明日大風があつたらどうしよう。明日大病になつたらどうしよう。今晩强盗が入つて來て切りつけられたらどうしよう。さう云ふ空想してゐては切りがありません。その場にぶつかつて見ないと本當のことのわからないことは、心配しては切りがありません」

「切りがなくとも心配なら仕方がないでせう」

「本當にあなたは心配してゐますか、それならあなたは何處か、神經でもいためてゐるのです。健全な人間は、空想も

しますが、それでぐよ〳〵はしません。いざと云ふ時に腰をぬかさない用心が出來てゐるものは、いざと云ふ時が來ない前から恐れて許りはゐません。仕方がないことは仕方がないのです。その時のことはその時の自分に任せればいゝ。今の自分は天氣のいゝ時は、天氣のいゝのをよろこび、小あめが降る時は、矢張それをやめさせることは自分の力にないことですから、その内に美を見出すのが賢いと云ふものです。嵐の最中小言を云つたつておいつかない。人間は人間にたいしてのみ、小言も、不平も云ふことが出來るがその他には云つたつて何にもならない。人間にたいしても相手が馬鹿だつたら、まだ人間になり切れない無情漢にあつては叶はない。私はいざと云ふ時が來た時の用意はしておくが、その時、その時の心の喜びをそれによつて失なはうとは思はない」

○

不幸は閉口なれども
來てしまつたら甘受しなければならないのが人間、
人間はどんな人でもやがては死ぬのだから、
愛せるだけ愛しておあげ、
たゞ自己の生長を害してくるものだけは
はねとばせ、
自己を生長させ切ることは大事なことだからね。
だが我慾をのさばらすことは
他人許りではなく

自分もきづゝけることだと云ふことはよく知ることが必要である。

○

人間に幸福すぎるものなし、人間に強すぎるものあることなし、
鈍い人間はあるが、無情な人間もあるが、
その人間も、最後は死ぬものであり、
最も見じめな生き方をしてゐる人間であることを知れ。
かゝる人間は憎惡する價へなし、輕蔑すべし。
憎惡さるゝことは人間の傲りを傷つけない。だが輕蔑されることは人間の傲りを傷つける。
たとかゝる輕蔑すべき人間のために、ひどい目にあふものは同情しなければならない。そして他人を平氣で不幸にするものは、その故だけで制裁されべきである。

○

自分は今迄、社會の事實にたいしては非難すべきことも默つて來たが、今後、その方面も十分注意して見、その病氣の元因をなくすために、個人の反省をうながしたり、又人類の名によつての制裁もしやうと思ふ。元より努力はつかはない。

○

日本の軍隊は思想的に最もおくれてゐる。戰爭をしなければ日本は決してつぶれない。戰爭をすれば日本は必ず破産

する。恐ろしいことが起る。

日本は世界の内で、精神的に最も進んだ國にしたい。

しかし馬鹿の多すぎることは殘念なことである。自分達は日本を救ひ得る道を知つてゐる人間なのに、自分達は輕蔑されてゐる。この罰をうけないことを彼等のために望むものである。

○

自分は自分達の力で田園都市をつくつて見たい。自分達は生活の方法も、勞働の方法も少しづゝ會得して來た。今に面白いことが出來ると思ふ。

○

貧乏は恐れない。

眞理、人類の意志が我等の味方をしてゐることがわかるから。

それが信じられなくなつたら、おしまひであるが、このことは疑へない事實である。

世界の何處へ行つたつて、自分達の「新しき村」の仕事より人類の意志に叶つた仕事はあり得ないと思ふ。この位外見貧弱な運動もないだらうが。今に内から力があふれ出る。

○

内から生命があふれ出るのでなければ面白くない。内から力があふれ出て、自づと外が出來てくるので美しい。

貧乏もよし、決心更につよまる。

○

男は神に云つた。

「私は淋しい」

「失戀したからか」

「さうです。私はその淋しさと隨分戰ひました。しかしあまり淋しすぎます」

から男が云つた時、一人の女が出て來た。

男はそれを見て、おどろいた。

「美しい人もゐるものですね」

「お前は今になつて失戀したことをさう後悔はしまい。女は一人ではない。それでゐて、一人としか思へない處がまた面白いのだ。しかしお互に愛しあはない時は、思ひ切ることが必要だ。他人の意志はどんな時でも尊敬しなければならない」

「あの女の人には許嫁の人があるのですか」

「ない」

「私を愛してくれるのですか」

「お前が自分の内にある最も美しいものを生かすことが出來たら、あの女はお前のものになるだらう」

「本當ですか」

「自分の内にある最も美しいものが、生かせるか」

「やれるだけやつて見ます」

「やつて見ろ」

○

結婚は戀の墳墓かも知れない。
だが何か新しいものゝ生れる處、
人間は結婚に快樂だけを求めてはいけない。
更に嚴粛なおちついたものを、
仕事を、子供を。

○

夫婦は二人である。調和するその調和の仕方が大事である。兩方が生るか、片方が生るか、兩方死ぬか。
兩方生て、更に協力が完全にゆくのが一番上等。
お互の幸福が望める夫婦、一方が自ら進んで屈服し切る夫婦、お互がゆづりあふ夫婦、中等。
一方が他方を牢屋におしこむ夫婦、一方が他を奴隷にする夫婦、一方がはなれたくつても他がはなさない夫婦、地獄的である。
兩方が骨の髓まで憎惡しつゝもはなれられないストリンドベルヒの「死の舞踏」の夫婦なぞも地獄的である。作者は何度も離縁してゐる處が、一寸面白い。

○

赤坊は一つの生命、

親がなくとも育つ生命、
だが親の方では
何處までもはなれたくない生命、
うるさい時は、
隨分うるさい生命。

○

赤坊を
之以上
赤坊らしくつくることが出來るか。
出來ないね。

親の愛
赤坊の愛を
之以上にうまく作ることが出來るか。
出來ないね。
矢張り偉いね

自然は。

俺達にはとても考へつけないことをやつてのけるね。

○

男。神様に云ふ。

「私の子供をながき生させて下さい」

神様は帳面を出して

男の願ひをかきつけさした。

「親の願ひの欄、子供の長生きを請願者の人名のかいてある處をあけろ」

天使。「はい」。

「さあその帳面を男にわたして名をかきつけてもらへ」

男その帳面をうけとつて見ると、名がかいてあるのないの、濱の眞砂の數にもまけない程の人名がごちや〳〵にかいてある。

「大へんなたのみ手ですね。一々覺へてゐられますか」

「覺えてなんてゐられるものかね。だが帳面に名をかいておくだけで、安心してゐるものは仕合せだよ。だが親と云ふものはありがたいものとは思はないかね。尤もさう思ふやうにつくられてはあるがね」

男、がつかりして。「へー」

○

「愛するものが死ぬと云ふことはたまらないことですね」

「愛するものゝ死ぬことが平氣につくられてゐたらどうだ」

「他人の死には冷淡すぎますね。それで人殺しなぞが出來るのですね」

「しかし他人が死ぬ度に仕事が手につかなくなつたら困るだらう。俺の與へた目的に叶ふやうにすればいゝのだ」

「しかし戰爭の話なんかは聞くと勇ましいものですね」

「今にそんな話をきくと、人間の馬鹿だつたのにおどろく時がくるだらう。見ろ蟻が戰爭して、お互に死につこしてゐるのを、利口に見へるかね、勇ましく見へるかね」

「馬鹿に切り見へません」

○

「祖國を亡ぼすものと戰ふのはわるいことではないでせう」

「それは攻めこむ方がわるい。しかし兩方で攻めこまないと思ふ戰爭があるかね。防禦だけの戰爭がたまにはあるが、それも強かつたら攻めこみたいのだが、弱いから遠慮したにすぎないのではあまりほめられないね」

○

親が子供を愛するのは美しいが、他の子供よりも自分の子供の方が出來がいゝと思ひすぎるのは馬鹿氣て見へる。又他人が自分と同じやうに自分の子を愛してゐると思つて、子供の話許りするのも、利口ではない。他の人と一緒になれる程度を越して、他人に同感を強いるのは、近所迷惑である。又自分の子供さへよければ他人の子供はどうなつてもい

ゝと云ふのが間違ひなのは云ふ迄もない。たゞ親としてまちがひのないことは子供を出來るだけ立派にそだてやうと思ふことだ。子供は親の思ふ通りに育つものでもないが、子供を立派に育てた話は美しい。

○

すべて人類の完全を目ざして進んでゐることを知るべきである。そしてそれに役に立つ行爲は立派であり、役に立たないことはどうでもいゝが、害のあることはよくないことゝ思つて大體まちがひがないのである。

之が道德のより所である。今の多くの人はこの本を忘れて、一家の利益とか、家名とか、社會の缺點から起る名譽心なぞを道德とごつちやにしてゐる。道德まで自己本位である。或は自國本位である。人間の内心の聲、本位でゆかなければならない。

○

しかし人類はこせ〳〵したものではない。一つの主義によつて完全に統一されるものではない。例外は認めなければならない時がある。トルストイのやうに人類は嚴格ではない。其處が人類のわるい處でもあるが、いゝ處でもある。面白い處である。だが背骨になつたり、理性の役をしたりする特別の人間としては、トルストイのやうな人もたまには出てくることが必要である。あゝ云ふ人はさう澤山出る必要はない。殊にちつぽけなトルストイはうるさい。本ものは中々わかつた爺さんの方面も持つてゐる。

○

耶蘇と聖フランシスと歩く。

耶蘇は御馳走をもらうと、平氣で食ふ。聖フランシスは御馳走に灰をかけて食ふ。

「君は矢がすきなのか」、耶蘇はおどろいて云つた。

「私には御馳走にうますぎるのです」

耶蘇は聖フランシスの言葉がよくのみこめなかつた。

「へんな奴だな！」と思つた。

聖フランシスは「耶蘇は矢張り神様の子だ」と思つた。

○

聖フランシスが小鳥に說教してゐるのを耶蘇はうれしさうに見てゐた。

「お前は偉いな、いつ小鳥の言葉を覺へたのだ」

聖フランシスは又狼と話して、狼に人を殺さないやうにした。耶蘇は益々感心して。

「お前は俺に出來ないことをする」

○

神は又耶蘇が死人をよみがへすのを見ておどろいて云つた。

「お前は俺に出來ないことをする」、

○

たがこれ等の場合出來ない方が偉いらしいとある人が云つた。

○

聖フランシスは十字架にかゝりたがつた、耶蘇の受けた苦しみが、いたはしくつて仕方がないので。しかし耶蘇はそ

れを聞いておどろいた。彼は十字架にかけられるのは、もう御免だと云つた。

○

自分は聖フランシスを實に愛し、尊敬する。しかし耶蘇は更に更に崇拜する。

○

耶蘇は自分を罪人とは思はなかつた。神の子だと思つた。天父の心のまゝに生ればよかつた。彼は好んで苦しむ必要はなかつた。たゞ父の心に背くことは出來なかつた。十字架を荷ひたがりはしなかつた。だが我々が苦痛をさけるのは、耶蘇と同じ動機とは云へない。少し段がちがひすぎる。

だが自分は耶蘇の弟子にならうとは思はない。自分の使命のまゝに生きやうと思ふ。自分の使命は何處にあるか。それはもう少し見てほしい。

○

自分のまく種は
何處かではへる
思はぬ處ではへる
自分の使命は
自分がしたくつても
出來ないことを

他人にしてもらう
ことだけはたしかだ。
自分は信者をつくらない
獨立した人間に
力を與へて、
ます〳〵深い内心の要求で
進めと云ふだけだ、
自他の生命を生かせと云ふだけだ。

○

自分を殺して
全部と合致するよりは
自分を生かし切つて
全部と合致する方が
生命の王はよろこぶと
自分は信じる。
このことはやさしくはないが、
さうむづかしいことゝも思はない。

赤子の心で生きよ
ひねくれずに
平氣で生きよ。

○

自分は努力を尊敬するが
實力以上の生活、鍍金の生活はほめない。
自分のありのまゝで自由自在に生きよ。
自分の頭を全部的に生かせる道で。

○

食ふためには何をしてもいゝが、しかしなるべく餘暇のとれる仕事をさがして、自分を生かすことが必要、自分の柄にあつた生活に入りこむこと必要、そして出來るだけ、他人の禍の元因にならない仕事をして生きられる機會を見のがすな。

なるべく自分の仕事をしつゝ境遇をつくるために質素な生活に安じることが必要だ。自分に之と云ふ仕事のないものは、何か自分の身體に適當な、生産的な仕事をさがしておくことが必要と思ふ。さもないとよき世界のくることを恐れる傾向が出來、人類の將來にたいして希望がもてなくなる。このことはその人の一生について非常に損なことである。

正しい世界がくればくる程、なほよく生きられる生活をするものゝ風儀（前にもかいたかと思ふが、何度でもいゝ）腹の底に決心を、そして心の動きは自由に。そして生活は確實に、仕事は忠實に、他人には思ひやり深く、苦しみが來た時はおちついてそれをのがれ、喜びは感謝して謙み深く受け取る。之が人間らしい生活である。

○

人間は神と歩く。

小鳥が蟲を食ふのを見て、人間は云ふ。

「生きものを食はなければ生きられないやうに生きものをつくつたのはよくありませんね。食ふものはいゝでせうが、喰はれるものはたまりませんね」

「人間らしいことを云ふね、自分は生き物を殺すことが嫌いでもないくせして、」

「しかしさうあなたにつくられたのですから」

「おい冗談はよしてくれ、私はお前につくられたので、私がお前をつくつたのぢやないよ、私は何にもつくりかへる力なんかないのだよ。ただ私を愛するものにだけ、私は生きてゐるにすぎないのだよ。私に苦情を云ふ人間は、大馬鹿だよ、私は苦情を云はれるために人間につくられたものじやないよ、人間に感謝されるため、又祈られるため、人間の精神の平和のためにつくられたものだよ。自分のつくつたものをうまく生かすのが人間だと聞いてゐたが、お前さんは帽子を草履のかわりにはいてあるくやうな人だね。あんまりうまい譬へでもないがね」

神は晴々しく笑つたが、人間は腑に落ちない顔をした。

○

「神は何のためにあるのだね」Aは Bに問く

Bは Aに答へる。

「神は信心されるためにある。鰯の頭も信心されゝば神になるに一向さまたげない。電氣は何から生じたつて電氣である。神は何から生じても神であり、人の心に祈りと、感謝と、平和と、永生の感じを與へるものである。之を信じるものは、首を切られても心やすらかなりと云ふ。まあこんな所だね」

○

神は、自力で生きられる間、不必要なものである。だが自力で生きられない限り、人間は何かの力をかりたい。其處でその要求に應じて出て來たのが神である。

人間に耳があり、いゝ音をきくのをよろこぶ、その人間の耳を通して人間を最もよろこばすために音樂が生れて來た。誰が音樂はないものだと云はう。そして音樂によつてうける感じを嘘なものとは云へない。事實我等の心がそれによつてよろこぶのだから。

神だつて、人間の心の要求で生み出されたものにしろ、力がないとは云へない。神はないものだとも云へない。

少くも自分は神に守護されてゐると思へる時と、神からはなれてゐる感じのする時と、兩方ある。神に守護されてゐると思へる時は何ものも怖くない。神にはなれられた時、實は自分からはなれたのではあらうが、その時は又心を入れかへて、神へかへらないとおちつかない。この神は、孔子の云ふ天と同じであらう。天と云ふ方が日本人にはわかるかと思ふが、天と云ふ言葉よりは神の方が自分にはまだぴつたりする。ともかく自分の心をおちつけて利害得失で動かす眞理のまゝに自分を生かしたく思ふ時、もつとわかりやすく云ふと人類の爲に役にたつことをしたいと純粋に思ふ時、

我は自分をよりいゝ生活に近づけやうとする時、何かに守護されてゐることを感じるのである。[illegible]中々よく感じてゐたやうに思ふ。陽明學なども或時は中途半端なものであるが、お題にしつかりつかまへてゐるやうに[illegible]ふ。夏目さんの則天去私もそれをさしたのではないかと思ふ。去私は、自我を殺すことを意味せず、小我を殺して大我になる意味ととれば自分も賛成である。しかし私と云ふものにも中々面白いものはあると思ふ。それをたゞのさばらしすぎるのがいけないのだ。他人の私と衝突するのがいけないのだ。

○

人類をつらぬく力にすなほに押されて進む時、何かに守護されてゐるやうに感じるやうに思ふ。そして人類をつらぬく力は、又宇宙をつらぬく力の出店ではないか、一つの小血管ではないか。

大は宇宙、小は電子にいたるまで、何かの力がつらぬいてゐる。その力からはみ出す時、つまり人間が人類からくる力、又宇宙からくる力、即ち生命の力のくる道を自らとざして入れないやうにする時、人間は内の力がしなびるのではないかと思ふ。

すなほに内からくる力を生かすことが大事なのだと思ふ。金をとることを、生命を生かすことよりも大事と心得るものは、阿呆である。共に語るに足らずと云ふ奴である。

生活のために、自分の生命を内から生かせないものは、何處までも、革命を起してもいゝから自分の生命を生かせるやうにすることが必要だ。しかし内から生命を生かすことを本願にしない革命は、人類を墮落させる。

他人を殺すこと許りで革命が出來ると思ふものは人間を侮辱するものである。

○

人類の底からわき上る力を國家的におさへつけることは恐ろしいことである。實力がますに從つて社會は自づからよくなるやうに出來てゐない社會は、生た社會とは云へない。實力相當の生活を望まず、實力以上の生活をすべての人が望むやうになるのは、又恐ろしい。人は實力相當の生活が出來ることを望まなければならない。國民の實力をますこと、そしてすべての人が實力相當に生きられること、協力が完全にゆき、他人の利益を奪はず、自分の利益は隣人によろこんでわける傾向は大いに賞讃すべきことである。

○

蟲のいゝ考をすべての人がすてた時、しつかりした、健全に生長する社會が生れる。他人を損さゝなければ得が出來ない。だから他人は損さしてもいゝなどと考へるのは蟲がよすぎる。

日本の軍人は軍備がなければ日本がつぶれると思つてゐる。それはいゝ。しかし戰にかつたら領土を廣げてやらうと考へてはゐないか。その考は蟲がいゝ。得する目的なく、損する一方の戰爭をする氣になるなら、同感してもいゝ。僕も日本が外國の屬國になるのは好きではない。しかし戰爭しかけない國民に無理やりに戰爭しかけてくる時代はもう通りこしたやうに思ふ。それも日本のやうな島國では殊に安心と思ふが、どんなものか。こつちがいくらおとなしくしてゐても攻めてくるなら、その時は止むを得ない。戰ふだけ戰ふのはいゝだらう。しかし日本の軍人にこれまで辛抱が出來るか。自分から災を生み出したいのではないか。

○

他人の奴隸になるのがいやなのは實によくわかる。他人を奴隸にしなければいやだと云ふのは蟲がよすぎる。

他人に殺されたくないと云ふのは實によくわかるが、他人を殺したいと云ふのは虫がよすぎる。
自分が損したくないと云ふのも賛成だ。だが他人を損させても得したいと云ふのは虫がいゝ。
自分が過度に働きたくないと云ふのは無理はない。だが他人を過度に働いてもかまはないと云ふのは虫がいゝ。
自分は他人に嫌はれることをして他人に愛されたく思ふのも虫がいゝ。
自分が他人に輕蔑されることをして、他人に尊敬されたいと思ふものも虫がいゝ。
虫のいゝことを考へない人間は人間ではないと云ひたい程、人間は虫がよく出來てゐるが、現實は虫のいゝ人間には中々冷酷だ。
虫のいゝ考へは引こめなければいけない。

○

尊敬されるべき人が輕蔑されるのは見てゐて氣持がよくない。同時に輕蔑すべき人間が尊敬されるのも恐るべきである。
尊敬すべき人から輕蔑されるべき人が、居るべき處にちやんとゐる社會が正しい社會である。そして輕蔑されるのがいやだつたら、努力して尊敬される資格をつくるべきである。

○

勿論、他人に尊敬されることを唯一の望みにして仕事をするものはラホンテーンの粉屋の親子とロバの話のやうな目にあふであらう。
親子がロバをかついでゆけば笑はれる。子供だけのつても笑はれる。父だけのつても笑はれる。二人のつても笑はれ

る。共處でどうせ笑はれるなら自分の考へ通りにやらうと云ふことになる。

だから自分の考へで進むより仕方がない。だが自分の考のはつきりしない人はどうしたらいゝ。流行思想のおともをするのが、身分相當と云ふべきである。

○

社會以下の人間は社會の云ふことをきけ。

法律以下の人間は法律の云ふことをきけ。

○

法律は法律以上の人間の云ふことをきかなければならない。

社會は社會以上の人の云ふことをきくものだ。

耶蘇はその當時の社會に殺されても、社會を導いた。ソクラテスも決して社會に亡ぼされはしない。社會は先見者のあとをついて動くものである。そして多くの人は社會のあとをついて動くものである。

中々一年や二年、五年や十年では動かないが。

○

死んでも生る道を歩くのはうれしい。

自分の死後にも人間のために働けるとうれしい。

人に氣づかない寶を後世のためにのこしておくものゝよろこびが感じられる。

死後自分の死骸をそつとそのまゝにして火葬にする時、皆をあつめて自分の死骸が燒かれると同時に花火があがるや

うにして、神のおどろくさまを心に描きながら死んだ男と、死に行きつゝ充實してゐたことにはかはりないと

自分も死んだのちの人の待つことを考へると明るい氣持ちになれるのは可笑しなことである。

○

誰にもわからないと知りながら、一生懸命に良心を働かせながら仕事をするものは尊敬する。それはわからないやうに見へて、實はわかるのではないかと思ふ。

ダヴインチ程、當時理解されない淋しさを味はつたものは少ないであらう。今でもダヴインチの心はわからないかも知れない。だが何かわかると思ふ。

セザンヌは自分の畫が賞められてゐるのを聞いて、そのほめられた畫が自分の自信のない畫なのを知つて自分が十分理解されてゐないのにがつかりする話をよんだことがあるが、自分はわからないやうでゐて矢張り何處かでわかるやうな氣がする。世評だけが、人間の本當だとは思はない。

事實はわからないでも、天が知つてくれると云ふやうな感じを持つことは、決して空ではないと思ふ。

○

自分の云ふことは實際とはかけはなれてゐるやうに思ふ人があるかと思ふが、水は何と思はれても、自分の流れる方に流れるやうに、人間は何と云つても、内心の要求でまつしぐらに進むべきだと思ふ。進めない時は仕方がない。しかしいくら進めない時でも進みたいと思ふ方に、進めるだけ進まうとするより仕方がない。しかしそれはその人の境遇次第、力次第である。倒れ切るまでは、自分は進んで見たい。

○

人間は神に云つた。

「人間は生れて死ぬものなのですね。生て何にゝなるのでせう。死んでも生れても同じものではないのですか」

神は人間の手をねぢ上げた。

「いたい、いたい。いたいぢやありませんか」

「人間は生れても死んでも同じなのだが、いたいと、痛くないとは隨分ちがうだらう」

「ちがひます」

「痛いめにあふのはいやだらう」

神は又何か云つて人間の腹を杖でさわつた。

「あゝ腹がへりました―」

「腹がへつてはいくら人生がつまらなくても困るだらう」

「困ります」

「さあ、この果實でも食つたらいゝだらう」

「はい」

「どうだ、實にうまいだらう」

「えゝ、本當に無限の味がします、何とも云へないおいしいものですね」

「之でも生てゐるのがいやになるか―」

「今は實にいゝ氣持です」

「人間と云ふものはまあ、そんなものだよ。一寸したことで實に悲觀し、一寸したことで實によろこぶ。悲觀にくらべることは、實にうれしいだらう」

「なんだか、いやな臭いがしますね。あゝ、なんだか胸がわるくなりました」

「今度はどうだ」

「いゝ香がして來ました。まるで春のやうないゝ氣持がして來ました」

「人生には實に多くのよろこびが與へられてゐる。その内の永遠のよろこびを味ふ時、人は生てゐることを無意味とは思はないのだ」

「へー、永遠のよろこび。そんなものが人間に與へられてゐるものですか」

「與へられてゐる。しかしそれはさうたやすくは與へられてはゐない。喜びにも安價なのと高價たのがある。高價なほど上等だが、それを買ふには中々もとでがいる」

「矢張り金がいるのですか」

「金ぢやない。人間社會では金は力があるが、人生の最も深い喜びは金では買へない。生命で買はなければならない」

「それでは死ぬのですか」

「死んでも惜しくないと云ふ喜びだから、生命以上のよろこびだ。だからそのために生命をなげ出してもかまわないわけだ。そのかはり、さうどん〳〵生命をなげだされても困るので、中々得られないやうに出來てゐる。日常の喜びの方がやさしくつて親しみよく、味もあつさりしてゐる。日常の喜びを知るものの方が仕方せになつてゐる。それは人間をつくつたものは人間が、毎日心うれしく平和にくらすことをのぞんでゐるからだ。そのかはりにそのよろこびはすぐ消

える。今お前に味はゝせたよろこびがそれだ。その喜びは決して淺くはない。だがそのためになほ生きたいとは思つても死にたいとは思ふまい。永遠のよろこびを味はふものは、生も死も同じやうなものになる。生命の執着がなくなる」

「効能はよくわかりました。そのよろこびを味はゝせて下さい」

「それは一寸やそつとで味はふことは出來ない。悟つた人とか、眞理のために戰ふ人とか、信仰のために死ぬ人とか、でないと味はへない。尤もその人が死ぬ方が、人類の生きるために役に立つやうな場合は、その人に死ぬことを生きることよりも、なほ生ることだと云ふ氣持を與へることもある」

「どんな時ですか」

「お前はそれを味はつて見たいのか」

「いゝえ。私は死ぬのは澤山です。死んでもいゝなぞと云ふ氣持になりたくはありません」

「それなら日常のよろこびで滿足し、そして人生を否定するやうなことは云はないがいゝ。お前に力がないだけの話なのだから。お前が自分を本當に生かさないだけなのだから」

「私はもつと樂に人間がいつまでも生られるといゝと思ひます」

「だが人間は鈍くなるに從つて喜びも鈍くなり、人間は下等になるに從つて喜びも下等になることを知らなければならない。朝はねむくつても、無理して起きたものには、朝のすが〳〵しい喜びが毎日味へるが、寢床にゐるものはそのよろこびは知らない。働くものでなければ休みの喜びはわからない。適當な苦しみは人間には苦しみだけではない。腹がへらないのは一種の苦痛である。身體がだらけて、樂だと云つても、度をこせば喜びは生れない。人間は今でも鈍すぎる。之より鈍くなつては困る。尤も勞働しすぎたり、苦しみすぎてゐる人は少し樂をするのはいゝであらう。しかし人

間合器で賢く働くやうになれば、人間は丁度いゝ工合になつてゐるだらう。と云ふ風に思ふやうに人間がつくられてゐないことに喜びを感じる方が、利口さうだ」

神がかう云つた時に、

人間は向うからくる一人の男を見た。

その男は神を見ると、禮拜してさうして云つた。

「私はもう死んでもいゝ時が來たのでせうか。皆は私を殺したがつてゐます。私の云ふことをとり消さなければ殺すと云ふのです。私は殺されても、自分の確信はまげられません。人間が人間を奴隷にしてはいけないこと、人間は誰でも同じく人間であるから、自分のいやなことは他人にさせてはいけないこと、さう云ふわかり切つたことを云つて、他人を奴隷にすることに反對したのです。其處で人々は私を殺したがつてゐます。いくら私は殺されても、私の確信は動きません。私の心は分つて下さいますね」

その時、大勢の人が來てその男を石でたゝき殺した。その男は神を見ながら微笑して死んだ。人々はその死骸をもつて凱歌をあげて歸つて行つた。

「殺したものが仕合せか、殺されたものが仕合か」

「殺した人々のあの時の顏は實にいやな顏でしたね。それに反して殺された人の顏は實に立派でした。あの瞬間私も殺されてもいゝやうに思ひました。だが私は矢張り生きたいのです」

「あたりまいさ。お前のやうにまだ何に一つ仕事もせず、實力もない人間が、すぐ死にたがられては困るよ。死んでもいゝと云ふ人間になるにはお前はまだ修業が足りなすぎるよ」

「足りないで結構です。生てゐることは、わるいものではありません。だが死ぬことも存外、樂なものかも知れませんね」

「又、そんなことを云ふとひどい目にあはしてやるぞ」

「いゝえ、殺されたら、なぶり殺は閉口です。私の言ふのは天命を全ふしたものが、壽命がつきて死ぬことです」

「その時になつて見ればわかるよ。今からそんなことを考へるより身體を大事にした方がいゝだらう」

「そして、心うれしくくらせるだけくらすことにしませう」

○

よき社會が來て、人間は自分の仕事さへしてゐれば平和にくらせる時のくることを自分は切にのぞんでゐる。靜かに、自分の仕事をして、逢ひたい人に逢ひ、又散歩したい處を散歩することが出來るとうれしい。平和は、清水のやうなすんだ生活はうれしいものだ。たまには華かなこともわるくはないが、自分は靜かな、おちついた氣持を愛する。しかし他の人同志、舞踏をしやうが、酒をのまうが、他人を害せず、自分の健康を損ねないのならこれはよろこんで見てゐたい。

自分の好きな生活を自分はしたいが、他人は他人の好きな生活をするのは當然である。たゞ自分の好きな生活をするために他人を犧牲にすることはよくない

すき〱である。パツカスの行列の畫も、芝居の歡樂の場面も見るのは自分は好きである。しかし自分は一人で本をよんだり、考へたり、散歩したりする生活の方がぴつたりする。

食ひものにも好き好きがあるやうに生活もすき好きがある。自分の好きな生活をめい〱するのが本當である。たゞ

そのために他人の生命を傷つけてはいけない、好き同志で遊ぶのは決して悪いこととは思はない、しかしそれに淫して自分の仕事に不忠實になつたり、他人の安眠、平和を奪つてはいけない。

しかし世の中には他人の喜ぶことの嫌ひな人があるものだ、そんな人は物好きだから、勝手に嫌はしておく方がいい。

○

よき料理人はまづいものをつくることの名人を云ふのではなく、うまいものをつくり出す名人を云ふ。

よき音樂者は、それを聞く人に不愉快を多く與へるために苦心する人を云ふのではなく、聞く人によろこびを多く與へる人を云ふ。

畫家もさうである。見る人を不快にするのが目的でないことはわかり切つてゐる。

文學だつてさうだ、より深いよろこびを與へるためには、惡の味つけも必要の時があるが、全部的に不愉快な文學は、誰もよろこんでよむわけはない。

人生は殊にさうだ。好んで苦勞するものが利口なのではない。又深刻なのでもない。さけられない苦痛だから深刻になりうる。その苦痛を輝くものにかへ得るものは聖者である。顏回は貧しくも苦しまず、樂しんでゐたのは顏回が賢かつたからで、淺薄だつたからではない。好んで苦しむものは利口ではない。やむを得ず苦しむものは、同情すべきである。自ら好んで自分を不幸にして、不幸だ、不幸だと云ふものは馬鹿である。このことはわかり切つたことであるが、人々は往々意味をとりちがへて、苦勞さへすればいゝやうに思つてゐる人がある。

勿論、すべての人が顏回であれと望むものは望む方が馬鹿である。

○

いゝ道があるのに、わざ〳〵泥田にとび込んでもがけばもがく程、深みへ入るのを見て賢いとは云へない。つひ知らずに入つたなら同情すべきである。だまされて入つたのなら、だまされた方がわるい。またわざとさう云ふしかけをして他人をおとして得をしやうと云ふものがあれば憎むべきである。

注意して泥田に落ちないものを馬鹿とは云へない。

○

社會の罪だけ社會の罪に歸せよ。

他人の罪だけ他人に負はせよ。

自分の罪は、自分でいさぎよく認めよ。

○

日常生活のよろこび

それをすべての人が味はへるやうにしたいものだ。

金もうけの仕事は閉口

金がもうからないでもしないでゐられない仕事をする時は實にうれしい。

○

しかし人間はまだ遊戯だけでは生活は出來ない。

次號完結

中央公論第四十年新年號創作

戯曲　隣家の夫婦……正宗白鳥

小説　くだかれた心……悦田喜和雄

小説　見殘した夢……宇野浩二

小説　狂つた時計……野上彌生子

戯曲　短夜……久保田万太郎

小説　大導寺信輔の半生……芥川龍之介

小説　挿話……徳田秋聲

小説　敗北……菊池寛

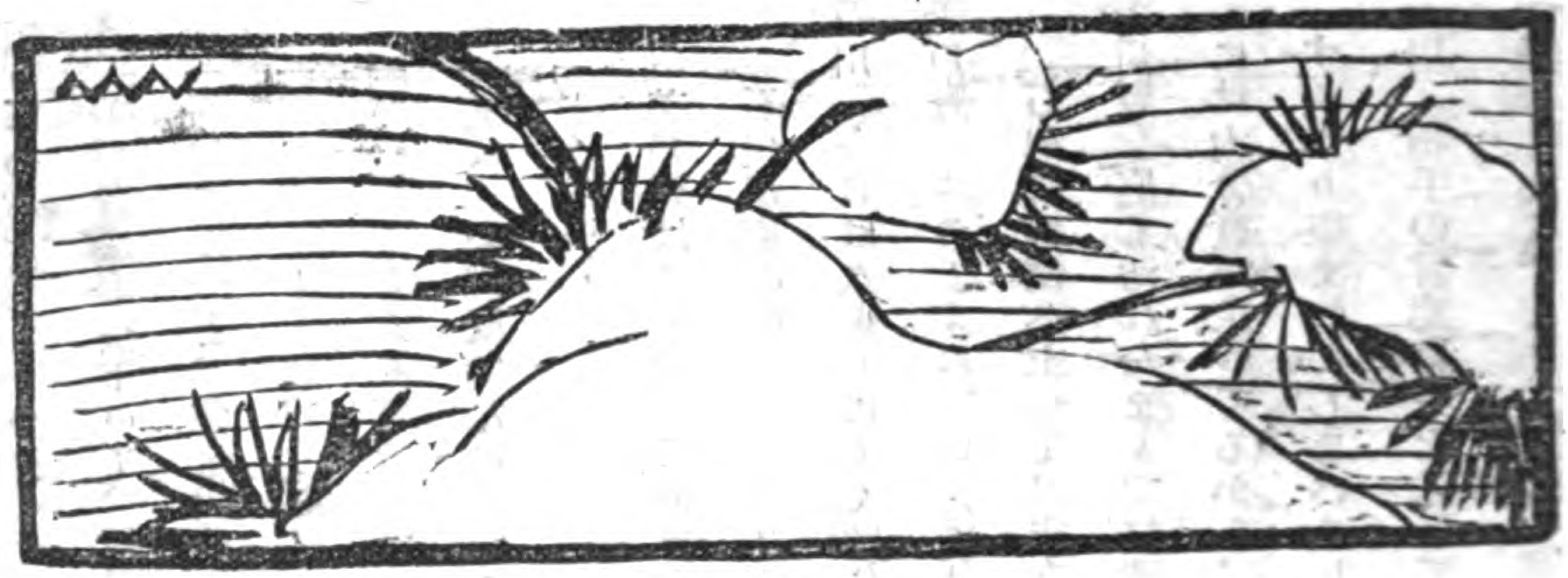
戯曲　彼者誰……佐藤春夫

小説　きいぷ・さいれんす……廣津和郎

小説　インテリゲンチャ……長谷川如是閑

小説　血を吐く……葛西善藏

戯曲　平將門……眞山青果



隣家の夫婦

正宗白鳥

人物

美戶野昌一（二十七歲。吉村家の寄食者。風采よろしからず、むしろ惡相を帶びてゐる）
石川貞吉（美戶野と同じくらゐな年輩、文學者、弱々しい男）
吉村寅藏（四十二歲、容貌醜くして瘦身。相場師）
たみ子（吉村の妻君。三十歲。肉體が年齡よりも老けてゐる）

（一）

十月末の午後。
別莊建ての小さな家の一室の、あたりまへより廣い緣側に贅澤な、寢臺のやうな椅子が持出されてゐる。部屋の中はすべての粧飾物を剝取られてガランとし

てゐる。

美戸野は庭へ下りて、板塀の近くに立つて、隣家の二階を見上げてゐる態度をして、

「石川さん」と、聲を掛ける。

「やあ。………此間うちは大變お忙しかつたやうですね」といふ聲が隣家の方から聞えて來る。

「いやどうも大混雜でしたよ。僕は今日は非常に退屈してゐるんですが、遊びにゐらつしやいませんか」

「えゝ、お邪魔でなければおうかゞひしませう」

「どうぞ」

美戸野はさう云つて板塀の側を離れて家の方へ戻つて、奥から、椅子を一つ持つて來て縁側に置く。

石川が庭の横手からノソ〳〵入つて來て、懐つこい目を向ける。

石川　今日は久振りによく晴れましたね。

美戸野　さうですね。いゝ天氣になりましたね。………さあお掛けなさい（椅子に手を掛けて勸める。）

石川は縁側へ上つて、突立つたまゝ荒れた部屋の内を見廻はす。美戸野は反對に庭の方へ目をつける。

美戸野　庭も汚れたまゝで打遣らかしとくんです。コスモスもみんなへし折つて近所の子供にやりました。裏の柿の木には大分實が生つてるから、もつとよく熟したら自分で食べようと思つて樂しみにしてゐたんですが、昨夕のうちにすつかり盗まれてしまひました。油斷がなりませんよ。

石川（相手の言葉を身を入れては聞かないで）家の中はすつかり片附けておしまひになつたんですか。

美戸野　えゝ。

二人は向合つて椅子に腰をおろす。

美戸野　一昨日の晩、あの雨のしよぼ〳〵降るなかを、大あはてで荷造りをして、貨物自動車に積込んで逃出したのが、夜中の二時頃でした。ちよつと戰爭のやうでした。僕はすつかり疲れちやつて、昨日は一日寢て暮しましたよ。

石川　あの晩、わたしは眠つきが惡かつたものですから、たび〳〵起きちや窓を開けて、此方の騷ぎを覗いて見たのですが、吉村さんの昂奮した聲が時々聞えて來ましたよ。……御主人が商賣に失敗なすつたつて、本當ですか。

美戸野　今度は、どうも本當の破産らしいですね（感慨を籠めて）どうせ商賣が商賣だから、いつかこんな目に會ふのは當然なんでせうが、主人に取つちや時期が惡かつたので、もう浮び上られないでせう。……この別莊だつて、大きな顏して住んでゐたつても、自分の物ぢやないんですからね。こんな小さな家一つだつて、いろ〳〵に入組んだ事情が絡んでるくらゐですから、商賣の方のいきさつは複雜で、我々にはまるで解らないんですが、家庭の内情――と云つて、夫婦きりの關係ですが――それが近頃變挺になつてるので、主人は今度は二重に苦しまされてる譯なんです。……全體こんな空屋同樣で、しかも自分の所有物でもない家に、僕がわざ〳〵留守番をしてゐるのは滑稽なんですが、そこが破産者の憫むべき心理狀態なんでせうね。ここの地所は酒屋の梅屋の所有で、家は、相場をやつて銀行の金を費込んで銀行を破産させた東陽銀行の重役の坂本の名義になつてゐますが、主人は僕を此處に頑張らせといて、地主からは移轉料をせしめて、坂本にも何か因縁をつけていくらかせしめようと企んでるらしいんです。いや實際企んでるんです。坂本の奴も喰へない奴で、東陽銀行の破産の時には、僕の主人と共謀して、自分の財産はうまく隱蔽して自分の損害を輕くしたやうですよ。

石川　ひどい奴ですね。あの銀行は休業したつきり、一年經つても目鼻がつかないんで、土地の者は非常に迷惑してる

てゐる。

美戸野は庭へ下りて、板塀の近くに立つて、隣家の二階を見上げてゐる態度をして、

「石川さん」と、聲を掛ける。

「やあ。……此間うちは大變お忙しかつたやうですね」といふ聲が隣家の方から聞えて來る。

「いやどうも大混雜でしたよ。僕は今日は非常に退屈してゐるんですが、遊びにゐらつしやいませんか」

「えゝ、お邪魔でなければおうかゞひしませう」

「どうぞ」

美戸野はさう云つて板塀の側を離れて家の方へ戻つて、奥から、椅子を一つ持つて來て縁側に置く。

石川が庭の横手からノソノソ入つて來て、懷つこい目を向ける。

石川　今日は久振りによく晴れましたね。

美戸野　さうですね。いゝ天氣になりましたね。……さあお掛けなさい（椅子に手を掛けて勸める。）

石川は縁側へ上つて、突立つたまゝ荒れた部屋の内を見廻はす。美戸野は反對に庭の方へ目をつける。

美戸野　庭も汚れたまゝで打遣らかしとくんです。コスモスもみんなへし折つて近所の子供にやりました。裏の柿の木には大分實が生つてるから、もつとよく熟したら自分で食べようと思つて樂しみにしてゐたんですが、昨夕のうちにすつかり盗まれてしまひました。油斷がなりませんよ。

石川（相手の言葉を身を入れては聞かないで）家の中はすつかり片附けておしまひになつたんですか。

美戸野　えゝ。

二人は向合つて椅子に腰をおろす。

美戸野　一昨日の晩、あの雨のしよぼ〳〵降るなかを、大あはてで荷造りをして、貨物自動車に積込んで逃出したのが、夜中の二時頃でした。ちよつと戦争のやうでした。僕はすつかり疲れちやつて、昨日は一日寝て暮しましたよ。

石川　あの晩、わたしは眠つきが悪かつたものですから、たび〳〵起きちや窓を開けて、此方の騒ぎを覗いて見たのですが、吉村さんの昂奮した聲が時々聞えて來ましたよ。……御主人が商賣に失敗なすつたつて、本當ですか。

美戸野　今度は、どうも本當の破産らしいですね（感慨を籠めて）どうせ商賣が商賣だから、いつかこんな目に會ふのは當然なんでせうが、主人に取つちや時期が悪かつたので、もう浮び上られないでせう。……この別莊だつて、大きな顔して住んでゐたつても、自分の物ぢやないんですからね。こんな小さな家一つだつて、いろ〳〵に入組んだ事情が絡んでるくらゐですから、商賣の方のいきさつは複雑で、我々にはまるで解らないんですが、家庭の内情―と云つて、夫婦きりの關係ですが――それが近頃變挺になつてるので、主人は今度は一層に苦しまされてる譯なんです。……全體こんな空屋同様で、しかも自分の所有物でもない家に、僕がわざ〳〵留守番をしてゐるのは滑稽なんですが、そこが破産者の憎むべき心理狀態なんでせうね。ここの地所は酒屋の梅屋の所有で、家は、相場をやつて銀行の金を費込んで銀行を破産させた東陽銀行の重役の坂本の名義になつてゐますが、主人は僕を此處に頑張らせといて、地主からは移轉料をせしめて、坂本にも何か因縁をつけていくらかせしめようと企んでるらしいんです。いや實際企んでるんです。坂本の奴も喰へない奴で、東陽銀行の破産の時には、僕の主人と共謀して、自分の財産はうまく隠蔽して自分の損害を輕くしたやうですよ。

石川　ひどい奴ですね。あの銀行は休業したつきり、一年經つても目鼻がつかないんで、土地の者は非常に迷惑してる

やうですが。

美戸野　(尤もらしく重々しい口吻で) それは銀行は無論不都合ですが、田舍の人間は狡猾なくせにあまいんですね。家の大將はよくさう云つてゐましたよ。……家の店でも今まで田舍のお客をうまく騙しちや捲上げたんでせうが……

石川　(相手の言葉を身を入れては聞かない風で、部屋の方を顧み勝ちで) 此方には贅澤ないゝ道具が澤山あつたのに、みんな運んぢやつたんですね。

美戸野　えゝ、無我夢中で運べるだけ運びました。明日にも債權者に差押へられるかと恐れて急いだのでせうが、主人の頭の調子も、今度は鐵の棒でどやされたゝめに、いくらか狂つてるやうです。あの雨ぢや大切な荷物が大分汚されたでせう (ふと、自分が腰を掛けてゐる寢椅子へ目を落して) 御覽なさい。この椅子だけは、僕が妻君に懇願して殘して貰つたのですよ。……昨日は一日この上で晝寢をしました。このクツションは柔くて大變寢心地がいゝですよ。

石川　(今度は言葉に惹かれて目をそちらへ注いで) さうでせうね。……奧さんはこの上でよく新聞なんぞ讀んでゐらつしやいましたね。

美戸野　(言譯らしく) これは妻君專用の椅子といふ譯ぢやありません。主人は一週に一度此方へやつて來た時に、頭や身體を休ませるために、この上でよく寢てゐました。商賣の掛引も此處で考へてゐたらしいんですよ。全體僕の主人は、大磯へ來ても、海水浴を一度やるぢやなし、散歩をするぢやなし、無論書物を一ページも讀みもしないし、寢ても醒めても金の事ばかり考へてゐるんだから、不思議な動物ですね。

石川　動物はひどいですね (微笑して) しかし、御主人も藝者遊びはよくするやうぢやありませんか。

美戸野　主人が藝者狂ひをすると云ふんですか (怪訝な顔して) それは誰れにお聞きになりました？

石川　誰れに聞いたつてことはありませんが、さういふ文字がありますよ。

美戸野　そりや石川さん御自身の空想の産物ぢやないですか（面白さうな表情を浮らして）相当[illegible]だらう。鉄斧なら役者買ひくらゐするだらうといふのは、平凡な、誰れでも思ひつきさうなことなので、従て、野卑なるあなたの想像力を俟たなくつてもいゝ訳ですね。……しかし、石川さん、空想といふ奴は面白いものですね。こんな柔いクッションに腰掛けて、秋の日に浸つて、空想を逞しうするのは、悪かありませんね。

石川　さうですとも、だから、僕も内々かういふ贅沢な腰椅子は欲しがつてゐたのです。

美戸野　へゝゝゝ。全く坐り心地がいゝですよ。ためしに腰を掛けて御覧なさい。

　美戸野は立つて、石川をその椅子に腰掛けさせ、自分は石川の腰掛けてゐた方の椅子に腰をおろす。

美戸野　さういふいゝ椅子を僕のために置いて行つてくれた主人夫婦の悪口ばかり云つちやいけませんね。……實際相場師に謹直な君子はないでせうが、家の大将は割に女には淡白らしいです。金銭慾が旺んなために、女欲の方に比較的衰へてゐるんでせう。……いや、本當はさうでないかも知れないな（考込む）

石川　それで、あなたはいつまで此處で留守番をしてゐらつしやるんです？お一人で此處にゐちや淋しいでせう。

美戸野　なに、獨住ひも昨日からだから、まだ淋しいつてことは感じませんが、しかし、僕も長くかうしちやゐられません。七月のはじめから大磯へ來て、七八九十と、四月も居候で暮してゐたのだから、主人が失敗しなくつたつて、僕は僕で方針を立てて引上げようと思つてゐたんです。……そこで、石川さん、今日は一つ、僕や主人の内輪話をしますから聞いて下さい。此間あなたをお訪ねした時に、ちよつと机の上を拜見したら、「隣の夫婦」といふ題で何か書いてゐらつしやつたが、今日はその隣の夫婦の材料を供給しませう。

石川　あれはこちらの御夫婦のことぢやありませんよ。

美戸野　それはどうでもいゝです。僕はあなたに聞いて頂きたいことがあるんですよ。今朝からこの椅子の上に寢ころんで、雨上りの秋の空を見ながら、久振りで自分一人で靜かに物を考へてると、僕のやうな愚鈍な人間の頭にでも、いろんな面白い感想が浮ぶんですからね。……さうだ。一昨日荷物の整理をした時に、一本だけこつそり葡萄酒を取つときましたから、今日はその口を開けて、聞き賃として御馳走しませう。

美戸野はさう云つて奥へ入る。石川は寢椅子に身體をのび〳〵と伸して快感を覺えてゐると、そこへ、吉村の妻君たみ子が、飾りつ氣のない、そして容色に年齢よりも老けた生地を現はして入つて來る。着てゐるお召縮緬も雨に汚れたものらしい。側へ寄つて來るのを、石川は暫く氣づかないでゐる。

たみ子　石川さん、お話しに來てゐらしつたの？（愛嬌を見せて云ふ）

石川はそれに氣がつくと、慌てて身を起して、極りの惡さうな顔して挨拶する。

たみ子　いゝお天氣になりましたね。戸外を歩くと溫か過ぎるくらゐですよ。

彼女は縁側へ上つて部屋の中を見ると、口を噤んで感慨に打たれる。そこへ、美戸野が、奥から葡萄酒の壜とコップ二つを提げて入つて來る。

美戸野（驚いて）奥さん、どうなすつたのです？お一人ですか（口早に云ふ）

たみ子（何氣ないやうに）急に此方に用事が出來たから、一人で飛出して來たのよ。……あの晩あんな思ひをして持つて歸つた荷物はね。彼地へ着くと、そつくりそのまゝ、待つてゐましたと云はないばかりで差押へられたんですよ。だから、わたしが云つてたやうに、此方で仕末をつければよかつたのに、間の拔けたことつたらありやしない。

美戸野　そいつは何處を見ましたね。

たみ子　お葡萄酒があつたの？それはよかつたわね。わたしもあとで頂くから、石川さんに差上げたらいいよ。わたしはちよつとあちらへ行つて見て來ますわ。

たみ子奥へ入つて行く。美戸野はコップを石川に渡して酒を注ぐ。

美戸野　僕の今朝からの感想も、奥さんがやつて來たので、やり直しだ。

石川（相手の言葉には耳を留めないで、葡萄酒にもちよつと口をつけたゞけで、コップを下に置いて）わたしはお暇しませう。晩にでもお遊びにいらつしやい。

美戸野　折角僕の感想を聞いて頂かうと思つてゐたのに、生憎でしたね。おや、晩にでもこの壜を提げてお宅へうかゞつて、ゆつくり飲むことにしませう。

石川が庭へ下りて歸つて行くのを、美戸野は見送つたあとで、奥の方へ耳を留めながら、自分のコップへ酒を注いで一息に飲んで、椅子に身體をもたらせる。しかし、絶えず奥の方へ氣を留める。

たみ子は、前よりも生氣を含んだ態度をして入つて來る。

たみ子　石川さんは？

美戸野　あなたに遠慮して歸つて行きました。

たみ子　わたしが落ち目になつたところを他人に見られるのをいやがつてると思つての御遠慮なの？詰らない御遠慮ね。……そのくせに、あの人はわたし達のことを氣にしてゐるやうな目をして、遊びに來るたんびに家の中なんそころ〳〵よく見てゐるんですよ。獨りで家借りしてゐると、かういふ家の生活でも羨ましいのかしら

美戸野　わたしの境遇をさへ羨んでたことがありましたよ。

たみ子　同い歳だつていふけれど、あなたとは體格が大ちがひね。若い盛りに肺が惡くつちや可愛想ね。どうせ長持ちはしないんでせう。

美戸野　それはさうと、あなたは何か大切な忘れ物を捜しにいらつしやつたんですか。

たみ子　さうなのよ。

美戸野　お忘れ物はありましたか。

たみ子　えゝ。ありましたとも。それについて、あなたに手助けして貰はふと思つてるの。

美戸野　わたしが何かお役に立つんですか。

たみ子　夜逃げの荷造りや留守番なんかとは違つて、あなたも張合ひがあることなの。

美戸野　（乘出して）それは何ですか。

たみ子　あとで分るわ（寢椅子へ腰をおろして）わたし疲れてゐるんだから、その葡萄酒を裝んで下さいね（黑い縮緬の羽織を脫いで抛出して）下手なことをしたものだから、わたしの衣服までもみんな捲添を喰つて押へられちやつて。雨に濡れたこんな衣服一枚きりになつたのよ。吉村のしをれ方は、それはひどいんだけど、わたしだつてあなたの目にはどんなにか見窄らしく見えるでせう。昨夕寢なかつた上に、お湯にも入らなけりや、顏さへろくに洗はないで來たんですもの。

美戸野は默つて、たみ子の顏をぬすみ見しながら葡萄酒を注ぐ。たみ子それを快げに飮干す。

たみ子　零落した人間はいやなものだと、あなたは、昨日とは違つたわたしの樣子を見て、さう思つてるんぢやないの

？……わたし、今日は疲れてゐて、面倒くさい思ひはしてゐられないから、あなたに、泣き付いたり繰言を云つたりなんぞしないで、自分の思つてることを勝手におしやべりしてしまひませう。……あなたには、わたしの不斷の氣持は分らなかつたでせうけれど、わたしは、今度のやうなことを、今か〳〵と待つてゐて、準備にちやんと出來てゐたのよ。（ゆつくり自分の話を自分で樂しむやうな態度で）……吉村といふ人はね、世間並みに藝者を落籍せて圍つたりしてゐるけれど、お金の事では一分一厘の拔け目のない男で、それで、どんな女にも鼻毛を讀まれるやうな男ぢやないやうに、世間の人からも云はれて、自分でも己惚れてゐたんですがね。本當は間の拔けたところがあつたの。利口さうに見える男だつて、案外利口ぢやないものよ。……だからさ。あの人は今度破産する目に會つたのでせうし、わたしは、自分で一生口過ぎの出來るやうな準備が平生に出來てゐたのよ。……お體裁はどうだらうとも、眞實のところを云ふと、吉村の有つてるお金と結婚したやうなんだから、吉村にお金のなくなつた時が、お互ひの縁の切れ目になるのがあたり前ぢやありませんか。吉村の方だつて、疾つくの昔わたしには飽いてゐたのだけれど、大して邪魔にはならないし、それに世間體もあるものだから、事を荒立てないで、今まで妻といふ名義を取上げようとはしなかつたのだわ。わたしの方だつて、吉村の家を出て行つても、お膳立てしてわたしを待つてゐて呉れる者が何處にもある譯ぢやないのだから、遊んで生きてゐられゝば、それだけが得だつていふ氣持で、今の今まで辛抱してゐたのですよ（ふと、目を上げて）あなたよく聞いてゐるの？

美戸野「よく聞いてゐる」といふ様子を目顔に現はす。

たみ子　わたし座興に話してるのぢやないのよ。親身に聞いて下さいね。……遊んで生きてゐられるだけが得だつていふ氣で、夫の妻として、今まで辛抱してゐたんです。わたしが變り者だからさう思ふだけで、世間の奥さんはさう

ちやないのか知ら。……そんな理屈はどちらでもいいとして、美戸野さん。わたし、これから吉村の側を離れて、一人立ちで世を渡らうと思つてゐるのよ。あなたはわたしの味方になつて下さらなくつて?。お金はちつとは持つてゐるのよ(少しの間口を噤んで、何かを索るやうに相手の顔を見て)吉村といふ人は、お金にかけちや敏い男で、人の懐中にもしよつちゆう探りを入れてゐて、わたしの預金帳の金嵩でも、わたしの持つてる指環でも衣服でも、ちやんと頭の中に覚えてゐて、必要な時には、自分の商賣の資金に融通させようとするのだから、あたり前ぢや、秘密でしまつとく譯に行かないの。………でもい、美戸野さん。わたしえらいでせう。二萬や三萬のお金は、あの吉村の目を晦ませてしまつてあるんです。

美戸野は興味をもつて聞いてゐたが 二萬三萬のお金といふ言葉を聞くと 昂奮して相手の顔を見据えて ─

美戸野 そんな大金をあなたは何處に持つてゐらつしやるんです?(詰責するやうな語調で云ふ)吉村さんは、今度二萬いくらとかの金が急場の間に合ふやうに手に入らなかつたゝめに、今まで持ちこたへてゐた風船玉が破れたと落膽してゐたぢやありませんか。あなたはなぜ、御自分が秘密で持つてゐるといふ大金を投出して、主人の危急を救はなかつたのです。第一吉村の店が破産すりや、あなた御自身も非常な損害を受けるんぢやありませんか。

たみ子(動じないで、しかし、今までよりも言葉に力を入れて)わたしを夫婦の情愛のない女だと云つて、あなたは怒つてゐるの?。美戸野さんがそんなことを云つてわたしを責めるのは滑稽に思はれてよ。……それはね、わたしだつて此處で吉村の前へ有りたけのお金を差出して喜ばせようと思はないぢやなかつたのですけど、ここが大切な時だと、心を鬼にして引こたへたんですよ。あなたはわたしがさう思つた心根を責めるんですか。

美戸野 心を鬼にして何の得になるんです?。あなた夫婦は敵同士といふ譯ぢやないんでせうに。

たみ子　そりや敵同士ぢやないでせうね。不倶戴天の敵が、ダイヤの指環を買つて呉れたり、時節々々の流行の衣裳を買つて呉れたりすりやしないでせうから（少しの間口を噤んでから、じれつたさうに）わたし、どう云つたら自分の胸の中の氣持が人樣に分るやうに云へるんでせう？。石川さんにでも智慧を借りたら、いゝ言葉が見つかるかも知れないけど。………

美戸野　なたの悪口を御主人の口から聞かされたことはありませんでしたよ。

たみ子　さう？。……吉村は女にはお金さへやつて置けばいゝと思つてゐたのだから、破産したゝめに女に逃げられるのは、自業自得で當然なの。去年でも一昨年でも　吉村が羽振りがよかつた時に、わたしの方から逃出したなら、吉村は、勝手にしろと　猫の子一匹ゐなくなつたくらゐに思つて、またお金の力で他の女を連れて來て、平氣でゐたにちがひないの。だから、わたし、今まで蟲を殺して我慢してゐたのだけど、今度は吉村も思ひ知るだらうと思つてよ。

美戸野　それは殘酷ですね。假りに敵同士だつたにしても、相手の弱つた時を狙つて苦しめるのは卑怯ぢやありませんか。

たみ子（冷笑して）誰れでも上べでは云ひさうなことを云つてるのね。……美戸野さん。わたしが吉村にねだつて特別に造らせたこの柔かい寢臺椅子は、寢心地がよかあなくなつて？（媚びを寄せる）

美戸野（ドギマギして）柔くていゝですね。しかしそれがどうしたのです？

たみ子　わたしを卑怯だと責めても、男のあなたゞつて、隨分卑怯だわよ。白ばくれてゐても、わたしにはちやんと分つてるわ……（自分の話を自分で樂んでるやうに）あなたは、吉村の手下になつて相場師の作業をしようつて氣があるのぢやなし、他所の會社へ勤めようと思へば勤められない人でもないのに、なぜわたしの家の居候なんぞになつ

て、詰らない小倅か書生つぽの役目なんか勤めてゐたのです？。それに何のために、大儀に三月も四月も愚図々々して日を暮してゐたのです？。身體が弱いから養生のためだつて？。嘘仰有いよ。石川さんぢやあるまいし、そんな頑丈な身體をしてゐるくせに。……わたしには、あなたのお腹の中は分り過ぎるくらゐ分つてゐたんですよ。

美戸野、相手の目を煙たがり、首垂れて、口を噤んでゐる。たみ子快心の微笑を洩らしてゐる。

たみ子　もう遠慮することないわ。……わたし、正直に云つちまひますがね。わたし、最初のうちは、あなたがいやでならなかつたの。氣味が悪いやうにさへ思はれて、吉村をつゝいてあなたを追出さうとしたこともあつたのですけれど、家へ出入りをしてゐるいろ〳〵な男のうちで、あなただけが慾も得も忘れて、わたしの側にゐたがつてることが分ると、不思議にあなたが好きになつたのです。生れてからはじめて、あなたのやうな人に出會つたんですからね。だから、あなたになら、掛引なしに、わたしのお腹の底の底にしまつてることでも打明けていゝといふ氣持になつてゐたのだけれど、さつきのやうに、わたしの云ふことにケチをつけられちや、わたし當てが外れちやつた。

美戸野　奥さんがさうお思ひになるのは止むを得ませんが、不斷お世話になつた吉村さんをどういふ意味でも傷めるやうなことは、わたしには出來ません（ポツリ〳〵云ふ）

たみ子（意外に感じたらしく稍々氣色ばんで）ぢや、あなたはわたしが今打明けたことを吉村に知らせようと思つてるんですか。わたしが秘密のお金を持つてることを、吉村に告口しようと思つてるんですか。

美戸野　いや、そんな餘計なことは云ひたかありません。地主や家主から移轉料をゆすらうとするやうな惡埒な人に、手近な金の在所を敎へるやうな同情心を、わたしは持つちやゐないんです（稍々力づいて云つて、今まで外らしてゐた目を動かして正面に相手を見る）

たみ子　同情心は持つてゐないかも知れないけど、あなたは[illegible]のね。あの[illegible]………

美戸野　わたしはあなたが恐ろしくなつたのです。

たみ子　わたしに附合ひをつけちや、あとが怖いと思つてゐるの？（ふと笑つて）可笑いわね。長い間わたしの側にゐたあなたぢやありませんか、たとへ、わたしが悪人だつたにしても、わたしの頼み事を聞いて、わたしに力を貸して呉れたつて、別段あなたが迷惑する譯はないのでせう。世間の人に爪はじきされる道理はないと思はれるわ。現在あなたは、性のよくない、人聞きの悪い役目を吩咐かつて、その吩咐を後生大事に守つて、こんな所にしよんぼり留守番をしてゐるんぢやないの………それとも、あなたは、わたしの味方になつて附合ひをつけられるのを、變た風に考へてるのぢやないか知ら。わたし、吉村を離れて自由な身になつたからつて、あなたを誘惑しやうと思つてやしないわ、誤解しないやうにして下さいね、それは純粋な氣持であなたに附合ひをつけやうと思つただけなの、吉村のやうな男からでも離れると、女一人ぢや、何かにつけて心細いんですもの。

歳に似合はぬ甘たれた言ひ方をして、全身に媚態を現はす。美戸野はまた極りの悪い思ひをして目を外らす。

美戸野………外の事はとに角、あなたは何萬といふ大金を、御主人に隠して銀行にでも預けてゐらつしやるんですか。

たみ子（首を振つて）吉村の側にゐてお金を銀行へなど預けて、いつまでも秘密にしてゐられるものぢやない。あの人は家の中にある紙幣の匂ひまで嗅ぎつける人なんですもの……。わたし、あの人から貰つたお金は、みんな自分のお飾に費つたり娯み事に費つたり、氣前よく無縁な人に撒き散らしたりしてゐたのぢやないの。あの人もそれによく知つてるのよ。

美戸野（好奇心を起して）ぢや、奥さんは、そんな大金をどんな手段でこしらへて、どこにしまつてゐらつしやるん

です？

たみ子　大金々々と、あなたも二萬や三萬のお金に驚くやうぢや、將來大金持になれさうぢやないわね。

美戸野　わたしの將來をさう輕卒に極められちや困りますよ。…………御主人に取つても、二萬といふ金は、店の浮沈に關するほどの大金だつたぢやありませんか。

たみ子　わたしに取つても、生命（いのち）の種（たね）の大金なのよ。……だから、わたしの頼みも聞いて呉れない信用のない人に、その大金の在所（ありか）なんぞうつかり明かされないわね。……（相手の熱心な態度を眠つたさうな目で見て）わたし、此間からの疲れが出て、眠くつて爲樣がないから、この椅子の上で一眠りしませう、その間に何か三品ばかり、おいしい物を蟠龍館へ誂へといて、目が醒めたら直ぐに御飯が頂けるやうにしといて下さいね、葡萄酒のせいで眠くつて慾も得もなくなつちやつた。

寢臺椅子の上に身體をのばして、ハンケチを顏にあてゝ目をつぶる。美戸野はたみ子の方へ身を寄せて、

美戸野　吉村さんは東京の何處にゐらつしやるんです？

たみ子　何處と云つて、お妾（かけ）さんの家の外に泊る所はないぢやないの。お妾さんが、今までの御恩返しのつもりで食べさせて呉れるんでせう。感心ね（眠さうな聲で云ふ）

美戸野　それであなたは安心して眠つてゐられるんですか。二萬圓の大金さへ御自分で持つてればいゝんですか。

たみ子　二萬圓々々々と、大きな聲で云つて、若しも泥棒や借金取りに聞かれたら大變ぢやないの？（眠さうに）

そこへ、電報と呼ぶ聲と、門の戸を叩く音とが聞える。美戸野、返事をして庭へ下りて、片隅へ姿を消す。

電報配達の聲　伊藤たみ子といふ人が此方に居りますか。

美戸野の聲　伊藤たみ子さ？。家が違ふんぢやありませんか。……あゝさうか、吉村としてあつたんだな、……だな……。

美戸野電報紙を見ながら元の所へ戻つて來る。

美戸野　奥さん。電報ですよ（と、二度續けて云ふ。たみ子が目を醒まさないので、肩に手を當てゝ搖起す）奥さん、電報が來ましたよ。

たみ子（横になつたまゝ、寢呆聲で）誰れから來たの？讀んで下さいな。……澤井からぢやない？

美戸野（電報紙の封を切つて）今夜歸れ、あしこで待つ梅浦、とありますよ。それで宛名は伊藤たみ子としてあります。

たみ子　梅浦？へえ……よく分つてよ。有難う。

美戸野（椅子の側に添つて立つて）ぢや、あなたは今夜東京へお歸りになるんですか。

たみ子　どうだか分らないわ（また眠りに落ちかける）

美戸野　梅浦といふのはどんな方なんです？わたしの聞いたことのない名前ですね。

たみ子　さう？。今度紹介するから待つて御覧なさい。大した人ぢやないの。

美戸野　奥さんは、もう吉村の姓を棄てたんですか。

たみ子　……だから、わたし、もう奥さんぢやないのよ。

美戸野（氣を變へて）ぢや、わたしは料理を誂へて來ませう。電報の返事は出さなくつてもいゝんですか。

たみ子は答へないで熟睡に落ちる。美戸野は、他の椅子に腰をおろして、電報紙を穴の開くほど見詰めて考へてゐたが、やがて、それを抛出して廊下へ下りて外へ出て行く。

自働車の音や荷馬車などの物音が、閑寂な空氣を破つて聞える。奥の襖が開く。脊廣を着て中折帽子を横つちよに被つた吉村が、著るしく憔悴した顏して入つて來る。美戸野の腰掛けてゐた椅子に、倒れるやうに腰をおろして、暫くたみ子の寢姿を見る。やがて立上つて、彼女を搖動かす。容易に目を醒まさないので、烈しく搖動す。

たみ子、薄目を開けて吉村の顏を夢のやうに見ながら、だるさうに身體を起して、

たみ子　ぐつすり眠つてゐたのに（と呟いて、不平らしく）あなた何しに此處へいらしつたの？

吉村　おれも大磯へ寢に來たのだ。昨夕も一昨夜も二晩つゞけて一睡もしなかつたのだから。

たみ子　ぢや、そこでお休みなさい。葡萄酒でも飲んで。

吉村（はじめて葡萄酒の壜に目をつけて）これはいゝものがあつた。（コップに酒を注いで、一息に飲干して）お前はいつ此處へ來たのだ。

たみ子（眠足らない頭を興奮させて）わたし、今來たばかしなの。……あなたはわたしのあとを追つて來たんですね。

吉村　いや、さうぢやない。昨日の朝お前に別れてから、おれは方々驅ずり廻つて、いろ〳〵後仕末をして、いよ〳〵素裸になつて、何か小さな事業でもやりださうかと決心をしたのだが、どうにも身體が疲れてならないから、不意に思ひついて此處へ眠りに來たのだ。……おれは何十年の神經の疲れが一度期に出たのか、東京のやうな騷々しいところではとても眠られない。汽車の中でも眠れなかつた。

たみ子　でも、あなたは東京でよくお休みになれる所が一軒あるぢやありませんか。わたしには落着いて寢られる所がどこにもないのだけれど。

吉村　おれにだつて、落着いて寝られる所はどこにもありやしないよ。

たみ子（皮肉に）高砂町には御立派な御別宅があるぢやありませんか。

吉村（相手の皮肉を感じないやうに）かうなつたらあしこも他人だ（力なく云つて）おれももう一日持耐へてゐたなら

こんなに襤褸を出さないで濟んだのだが。……昨日と今日の二日ぶつ續けに、天まで届くぐらゐに相場が騰つた。

おれも、今度こそ、いよ〳〵運に見放されたことが分つたよ。

たみ子（夫の言葉には感動しないで）高砂町ではあなたを寄付けないんですか。そんな薄情な女なんですかね。（獨言のやうに云ふ）

吉村　さうぢやないが、あいつの事は今云つて呉れるな。おれは此間うちからいろ〳〵なことで頭がゴタ〳〵して目が眩んでゐたから、頓間なことばかりやつて、取返しのつかない大失敗をやらかしたのだが、おれはもう諦めてる。それで、當分は此處にすつ込んでゐようと思ふ。お前も此處にゐるつもりなんだらうな。（親しみを持つて云ふ）

たみ子（呆れた顔して）わたしは今夜のうちに東京へ歸るつもりにしてゐるんです。あなたは當分此處にすつ込んでゐるんですつて？。……へえ。不思議ねえ。あなたの量見が分らないわ。……昨日あなたとあんなに打明けたお話をして、今度の事を機會に、わたしはわたしの道を歩いて行くやうに、お話が極つたのぢやありませんか。あなたに拵へて頂いた衣服をそつくり差押えられて、わたしだつて、今日から裸同様の身になつてるんです。それで、わたしのやうな者が側にゐちや、手足纏ひで、あなたも御迷惑でせうから、昨日お話ししたやうに、これを限りにわたしに取合はないやうにして下さい。……今日此處であなたにお目に掛らうとは、わたし夢にも思はなかつたんですからね。

吉村　お前が昨日云つたことは自暴自棄と云ふものだ。その年齢になつておれを離れていゝ事のあらう筈はないんだ

……此間うちお前が時々云つてゐたやうに、腐れ縁なら腐れ縁でもいゝ。その腐れ縁を一生續けて行つた方が、お前のために結句いゝことなんだよ。

たみ子（目の前の虻か蚊を拂ふやうな手付をして）親切ごかしはもう澤山です。……わたしをこんな所に押籠めて置いて、あなたは東京で勝手な眞似をしてゐたのだけど、これからはあなたの思惑通りにはなりませんよ。高砂町の女や東京の懇意な人に見くびられたからと云つて、わたしの後を追つてなぜこんな所へやつて來るんですよ？。（憎さげに云つて）……意氣地のないつたらありやしない。

吉村（威嚴を保つた聲で）此處はおれの家だ。おれの家へおれが入つて來たのがどうしたと云ふのだ。

たみ子　へえ、ここがあなたの家ですつて？。わたしにそんなチヤラツポコを云つたつて駄目よ

吉村（淋しい笑ひを洩らして）さうだな。おれにもお前にも家はない譯だつたな……。（ふと、疲れてゐる目を光らせて）しかし、お前はまだちやんとおれの家の籍に入つてゐる。夫婦といふ名義はしつかり殘つてゐるぢやないか。

たみ子（ふと不氣味に感じて）それがどうしたと云ふんです？。法律を楯にいつまでもわたしを御自分の者にして置かうとするの？。勝手な時には法律を潜つて人の物までも自分の懷中へ入れたり、法律を楯に人を虐めて來たりしたあなただ。あちらもこちらも八方塞りになつたから、せめてわたしをでもふん掴まへて、お金になるものならお金にしたいと思つてゐるんでせう。（わざと戲談らしい口調で云ふ）

吉村　お察しの通りだ。お前の身體が金になるものなら、手を切つてゞも耳を削いでゝも金にしたいと思つてるよ。：：これは戲談ぢやないぜ。：……おれは美戸野を相手に一杯やつて、一晩ぐつすり眠らうと思つて大磯までやつて來たのだが、お前に會つたのは不思議だ。腐れ縁でも何でもお互ひに離れきれない縁があるんだね。お前は東京の何處

かで、その汚れた衣服を脱いで、汚れた顔を拭いてお化粧でもしてゐるのだらうと、おれはおもつてゐたのだが、お前が昨日別れた時のまゝで此處に來てゐたのは、意外だつた。……（意外に感じてゐるやうな目で相手を見詰める）

たみ子（相手の目差しを眩しがつて）わたしは氣兼ねのない所で眠りたいと思つて此處へ來たゞけなの。……折角いゝ氣持で眠つてゐたのに、眠入りばなを起されて、氣持の惡いつたらない（獨言のやうに言つて、目をつぶつて、頭を椅子にもたらせる）

吉村　眠たきや遠慮なしに寐るがいゝ。おれも我慢にも目を開けちやゐられなくなつた。……大事な話は一眠りしたあとのことだ。

吉村も椅子に頭をもたらせて目を閉ぢる。が、二三度止切れ〲に薄目を開けて、相手がそこにゐるのを見て安心したやうに、また目をふさぐ。たみ子も二三度薄目を開けて相手がそこにゐるのを氣にしては、また目をふさぐ。

やがて、二人とも寢息を洩らして、前後不覺の眠りに落ちる。

そこへ、美戸野が入つて來る。二人のだらしない寢さまを、あちらを見こちらを見して、呆れた顔をして、二人の間を通つて奥へ入る。　（幕）

（二）

同じ家。元妻君の化粧部屋であつた部屋。今は序幕の部屋と同じやうに荒れてゐて、何の粧飾もない。幕を上げて床板が一枚めくられてゐる。

美戸野が床の下から埃に汚れたまゝの身體を起して、額の埃を手の平で拂つて、大きく息を吐く。

そこへ吉村は、かの電報紙を讀み〳〵入つて來る。

吉村　君は何だつて床の下なんぞへ潜り込んだのだ。さつき目を醒ますと、ゴト〳〵音がしてゐたから、氣になつて見に來たのだよ。

美戸野　此處へ落し物をしたから取りに入つたのです。

吉村　落し物をした？。何を落したのだ？（床下を覗く）

美戸野（ドギマギして）銀貨を落したのですが、暗くつて分りません……なに、十錢銀貨一つだけだから、どうでもよろしいです。

美戸野が上へ上つて、床板を元のやうにしようとしかけるのを、吉村は押止めて、

吉村　この中へ金を落したつて？。いゝ加減な事を云つちやいけないぜ。この部屋はたみ子のお化粧部屋で、おれにも迂濶に足を入れさせなかつたところだ。ここに何か秘密が潜んでゐるに違ひない。（ふと電報紙を美戸野に見せて）これを見ろ。今、これがおれの足に觸つたので取つて見たのだが、君はこの電報を知つてるんだらう。

美戸野　えゝ、それはわたしが受取つたのです。

吉村　君はこの梅浦といふ男を知つてるだらうな。

美戸野　いゝえ、知りません。

吉村　眞實に知らないのか。………夏から、君に大磯にゐて貰つたのは、梅浦のやうな奴の來るのを監視させるためだつたのだ。君が若しもたみ子に買收されて知らん顔してるのなら、おれを裏切つたことになるんだぞ。（目顔で脅かす）

美戸野　斷じてそんなことはありません。

吉村（獨言のやうに）しかし、いゝものがおれの手に入つた。……この電報は落ちてたところに置いといて呉れ、そして、今夜たみ子を東京へ歸らせないやうに、君も監視して呉れ。……この電報だつて金儲けの出しにならんとは云へないんだ。

美戸野（不平らしく）わたしは、奥さんの監視をするために、この別莊に置いて頂いた筈ぢやなかつたのですが。……そんな不愉快な役目を吩咐かるくらゐなら、わたしは、今夜にでも東京へ歸らせて頂きます。

吉村（怒を含んで）おれが零落したから、君までもおれを見棄てようと思つてるんだな。大して役に立たない人間を、長い間食はしてやつて、氣儘にさせといたのだが、恩を恩とも思つてやがらない。

美戸野（動しないで）わたしは、あなたの周圍の人だちのやうに、それほど現金ぢやありません。しかし、今まで大きな勝負をやつてゐらつしやつたあなたが、急にケチ臭い、さもしいことを仰有るのを、心外に思ふんです（稍々聲を强めて）奥さんを監視させたり、電報を金にしようとしたり、家主から移轉料を取らうとしたり、いくら商賣に失敗したにしても、考へ方があんまりケチ臭いぢやありませんか。……それが平生の吉村商店の御主人の本性だつたのですかね。

吉村　それをケチ臭いと思ふなら、勝手にさう思ふがいゝ。おれは大きな勝負に負けたから、小さな勝負にでも勝ちたいと思つてるのだ。

美戸野（冷嘲を浮べて）あなたは、まだ物に勝てる自信を持つてゐらつしやるんですか。……監視しなければならんほど奥さんはあなたの心を離れてゐるし、わたしだつて……（相手の顔を見て言淀む）

吉村　おれも此間から、金にも家にも、いろんな人間とも、一人々々絶交して來たやうなものだが、君にまで侮辱されりや申分のない譯だね。高が、自分の家の居候の美戸野昌一くらゐに……（自から嘲けるやうに云ふ）

美戸野は、また床板を元のやうにしやうとする。吉村は、饑ゑたる犬が食物を嗅廻つてゐるやうな樣で、部屋を見廻してから床の下へ目をつけ、鼻をピクつかせて、何か思ひついたやうに、卑い笑ひを浮べる。

吉村　君は十錢銀貨を一枚落したと云つたね。……（勢よく）よし、おれが中へ入つて拾つてやらう。君も一しよに搜さないか。たみ子が目を醒まさないうちに早く。

美戸野　そんなものはどうでもいいぢやありませんか。衣服が汚れますよ。

吉村　ここから何が出て來るかも知れないよ。金鑛の脈はどんな所にあるかも知れないんだ。おれも多少思當ることがあるんだからね。

吉村は渾身の力を揮つて床板を剥ぎ取る。美戸野は手出しをしないで、不安な樣子をして傍觀してゐる。

吉村　たみ子の奴、此間家を片付ける時に、頻りにこの部屋を氣にしてゐた。おれがこゝへ入つて來るのさへ頻りに氣にしてゐやがつた。あいつのことだから、この床の下を堀つて金でも溜めてゐるのかも知れない。さつきのあいつの口吻（くちぶり）は、秘密で多少の金でも持つてゐさうな人間の口吻だつた。一錢の金のない奴にあんな氣強い口が利ける筈はないよ。おれも、今思當つた。（美戸野を顧みて）君はおれの手助けをしろ。見當がついたら直ぐに堀出すのだから、向うの米屋からでも、シャベルか鍬か借りて來なきやなるまい。

美戸野　そんな下らないことは止した方がいいでせう（不安な態度で相手を見てゐる）

吉村　何が下らないことがあるものか（ます〳〵意氣込んで）さういふことでもなけりや、あいつが今日（けふ）わざ〳〵大磯

まで來る譯がないのだ。

　床の下に入つて姿を隱す。

吉村（床下から）君がさつき此處へ入つてゐたのもどうも變だ。君までも勘付いて、おれたちが默つてる間に、どうかしようと思つてゐたのぢやないか。油斷がならないな。

　美戸野も氣に掛けて、知らず〳〵床の下を覗く。

吉村　有る〳〵（悅しさうに）たしかに何か埋めてあるよ。間違ひなしだ。……早くシヤベルでも借りて來て呉れ。素手ぢや掘れないよ。

美戸野　本當に何か埋めてあるんですか。驚いたなあ。あなたは慾にかけちや嗅覺が强いんだからかなはない。金のにほひがしますか。

吉村　金のにほひか何か、馬鹿に臭いよ。……オイ美戸野。無駄口を利かないで、早くシヤベルと蠟燭とを持つて來て呉れ。

　吉村は汚れた半身を現はし、苦しげに息を吐く。

美戸野　眞實(ほんとう)なら奥さんに訊いてからにしたらいゝぢやありませんか。

吉村（汚れた手で額の汗をこすつて、威嚇的な目顏をして）それは正體を見屆けてからのことだ。今告口しちや承知しないぞ。……君は信用の出來ない人間になつたのだから、一歩も此處から外へ出す譯に行かない。おれが自分で臺所を搜して何か持つて來よう。君は此處で番をしてゐろ。

　吉村は嚴命を下して出て行く。その姿が見えなくなると、美戸野は慌たゞしく床の下へ入る。

たみ子、寝呆顔で氣だるさうな樣をして入つて來る。

たみ子　床板をめくつてどうしたのだらう。（獨言を云ふ）

美戸野、汚れた半身を現はす。

たみ子（噴出して）その顏つたら、そこで何をしてるの？

美戸野（眞面目で）大將が金を見つけたつて、これから掘出すところなのです。

たみ子　お金を？吉村がこんなところへお金を隱してるといふんですか。本當にさうなの？。わたしにも債權者にも隱して落ちぶれた時の用意に、こんな所へお金を埋めてゐたのか知ら。……呆れつちまふわ。剛慾なあの人の考へさうなことだけれど。

美戸野　さうぢやないんですよ（聲を潛めて）あなたは、秘密で何萬圓とか持つてゐると仰有つたぢやありませんか。その金は此處に隱してあるんぢやないですか。

たみ子（笑つて）今時誰れがお金を床の下なぞへいけて置くものですか。あなたも馬鹿な人ねえ。

美戸野　さういへばさうですね。御主人のやうな人は、なほ更そんな馬鹿な眞似はしないでせう（と云つて、腑に落ちない樣子であたりを見て）だけど、奥さん。さつき、あなたがこの家へゐらつしやつた時に、わたしが偶然この部屋を覗くと、疊が上つて床板もめくつてあつたんですよ。

たみ子　あなたも、吉村と同樣に、今日はどうかしてるのね。この部屋は此間うちひどい雨洩りがして、疊は疾つくから上げてあつたのぢやないの。

美戸野　あゝさうか。

たみ子　あなたも慾に目が眩んだのね（氣遣はしさうに）でも、あなたを自分の味方だと思つてさつきお話ししたことを、まさか吉村に打明けやしないでせうね。

美戸野　それは斷じて云ひません。（床の下へ目を落して）だけど、たしかに此處には何か埋めてありますよ。

たみ子　吉村が秘密でお金をいけてるんぢやないんですね。………ぢや、何でせう。お金らしいの？

吉村が錆びた鍬を持つて入つて來る。たみ子を見ると、「しまつた」といふやうな表情をしたが、

吉村（威壓的な口調で）お前も手傳ひをしろ。………話はあとのことだ。掘出すものを掘出したあとのことだ。

吉村は床下へ入つて、鍬で土を掘る。美戸野も助力をする。たみ子は好奇心を寄せて覗いてゐる。

吉村　そら出て來た。……壺だ〳〵（活氣づいて叫ぶ）

美戸野　壺だ〳〵。汚ない壺だな。金なんか入つてゐさうぢやないな。

吉村　まあ、中を見てから云へ。……そら出すぞ。

吉村はどす黒い小型の壺を抱へて上へ上る。三人はその壺を圍んで一しよに目を注ぐ。

吉村　秘密の正體をよく見ろ。

吉村はたみ子の方をちらと見てから蓋を取る。三人は一度期に中をのぞく。

美野戸は笑ふ。吉村は苦澁な表情をして目を壺から離さない。たみ子は呆氣に取られる。

美戸野　石ころ一つ入つてゐないぢやありませんか。

たみ子　何のためにこんな者が此處に埋めてあつたんでせう。

美戸野　何かのおまじないかな。

たみ子　でも、氣味の惡い者が入つてゐなくつてよかつたわね。

吉村は絕望の表情をして目を睬み、壺を取つて床へ叩付ける。壺は壞れないでころがる。

たみ子　秘密の正體はこれだつたの？

吉村は默つてゐる。

たみ子　この中に小判か何かゞ入れてあるとでも思つてゐらしつたの？。……大の男が鍬を持つて、二人がゝりで、隨分なお骨折だつたわね。……御自慢のあなたの目や鼻も泥細工の目鼻と同樣になつたのぢやないの？わたしの耳や鼻なら、削ぎ取つてもいくらかになるかも知れないけど、あなたの身體は潰しにしても一文にもなりやしませんよ。（笑ふ）それよりも、あなたも美戶野さんも、早く着物の埃を拂つて、顏でも洗つて、いらつしやいよ。二人のさまつたらない（可笑しくてならない仕草をして）人が見たら何と思ふでせう。

吉村（悄然として、言葉にも力なく）お前は今夜一人で東京へ歸るのか。

たみ子（ふと氣を取直して）えゝ。わたし、どうせ爲方がないわ。

吉村　梅浦から電報が來たゝめなのか。

たみ子　梅浦の名前など云つて脅したつて駄目よ（吉村がかの電報氏を指差すのを見ても動じないで）あなたがそんなものを脅かしの種にしやうと思つてゐるのなら、大事にしまつといて、梅浦さんの所へ持つていらつしやいよ。いくらかに買つて貰えるかも知れないわ。

吉村（强いて力を揮つて）おれはお前の夫だぜ。法律上、お前はおれの妻で、おれはお前の夫だ。

たみ子（負けない氣持を見せて）法律のうしろ立てゞ、わたしに向つて、威張つてるつもりなの。……いくら威光

を見せやうとしたつて、あなたは、吉村富蔵と云つてた人の木伊乃よ、幽靈ですよ、[illegible]た時のあなたには、まだ血の氣が通つてゐたけれど、あれからどこをどううろついて血の氣を無くしたのやら、[illegible]た敵を持つて床の下を掘つてるあなたは幽靈見たいだ、お金に執念の残つた幽霊見たいよ、……美戸野さんにでもよく聞いて御覧なさい。

吉村（強いて力を挿つて）勝敗は時の運だ、おれのやうな男の心は、お前には分らないのだ。

たみ子　ぢや、こんな窮屈な汚い床の下なんぞを嗅ぎ廻つてゐないで、どこか大きな金山でも掘當てゝ御覧なさい。その時には、どんな美しい女でも、あなたの御機嫌を取りに寄つて來ますよ、だけど、木伊乃になつたあなたの鼻には、眞實の金の匂ひは嗅げなくなつてのるね。

吉村（今度は、薄ら笑ひを浮べながら、勢ひの弱い聲で）利口ぶつてあたり前のことを云つてやがる。おれも夫婦の由縁で敎へてやらうか。お前はその顏でそのしなびた身體で、外の男が誘惑出來ると思つてゐるのか。お前は昔のお前ぢやないぜ。おれに生血を吸はれたあとの出し殼だ。（ふと、美戸野の手を執つて引寄せて、たみ子の顏を指差しして、やゝ震へた聲で）君は第三者としてよく見てよく批評して呉れ。この顏に男が迷はされるか、この艶のない荒れた皮膚に男の心が惹寄せられるか。遠慮なく云つて見て呉れ。……今直ぐ、君がおれを棄てゝ出て行つても、おれはもう苦情は云はないから、長年のよしみに、今おれの訊いたことに、眞實の返事をして呉れ。おれとたみ子の前で、ハツキリ君の批評を聞かせて呉れ。

美戸野、目を外して默つてゐる。

たみ子（兩手で耳を塞いで）下らないこと聞かせて貰はなくつたつていゝのよ。（暫くして）わたし此處を出て行くから、

あとから來てわたしを搜へないやうにして下さい。（部屋を出ようとしながら、何となく心殘りがするやうに出かねる）

吉村（ふと命令的に）美戸野、さつき君に賴んだやうに、たみ子を監視して吳れ。

美戸野（顏を上げて、泰然として）それよりも、わたしが留守居役を御免被つて、これから東京へ歸りますから、お二人は此處で御一しよにお暮しになつたらよろしいぢやありませんか。……東京のお家は債權者に差押えられてゐても、此處は、たとへ移轉料は取れないにしても、當分立退かされやしないでせう。飯米はわたしが昨日どつさり買込んであります。當分は、ぢつとしてゐらつしやつても、餓死する心配はありませんよ。……奥さんがお誂えになつた料理も、疾つくに來てゐますから、お二人でお上んなさい。料理は臺所に置いてあります。それからわたしのために殘して頂いた柔かい籐椅子をもお返ししますから、お二人は安心してお休みになれるでせう。……（獨言のやうに）わたしには貨物自働車なんか入らない。鞄一つぶら下げて出りやいゝのだ。

たみ子　美戸野さん、本當に行つちまふの？。わたしがあれほど賴んでゐたのに。

吉村　君に行つちまはれると寂しいよ。

美戸野　僕は東京へ行つて、中味の空つぽでない壺を掘出しませうよ。……いろ／＼お世話になりました。

美戸野は二人に挨拶して未練なく出て行く。二人は呆然として無言で見送る。

（幕）

その夜。

吉村夫婦は緣側の椅子に對座してゐる。部屋にはちやぶ臺が出てゐて、すべて食事の濟んだあとの有樣。

吉村　蟲の音が細くなつたね。

たみ子　あなたが蟲の音の強い弱いに氣がつくのは可笑しいわね。

吉村　さうだな。……今夜は月もよく照つてゐる。かうしてゐると、おれは今島流しにされてゐるやうな氣持がするよ。(氣怠るさうに)腹が空いてたところへ、どつさり詰込んだから、おれはまた疲れが出て眠くなつた。お前もまた步れてるやうだが、どうしても今夜歸らなきやならないのか。一しよに飯を食つて一しよに葡萄酒を飲んだのだから、おれも心殘りがない譯さ。……本當に今夜歸つて行くのなら、停車場まで見送つてやらう。これが最後だ。一生お前に會はれないかも知れないな。

たみ子(氣遣はしさうに)そして、あなたはこれからどうなさるの?。

吉村　さつき云つた通りだ。

たみ子　おや、日當てのつくまで、當分は一人ぼつちで此處にゐらつしやるの?。お氣の毒ね。美戸野でもゐて呉れるといゝのだけれど……

吉村　おれやお前はあいつにまでも馬鹿にされてゐるのだ。ひどく落ちぶれたものさ。美戸野が出て行く時に、振返つておれたちを見た目付は、今も目の前に見えるやうだよ。

たみ子　わたしもあの男に馬鹿にされたんですかねえ。(歎息して)……美戸野の奴、スリ見たいな顏してゐるくせに生意氣ぢやないの?。

吉村　おれは金があつた時に、威張りやうが足りなかつた。かうと知つたら、金のある時に、金の力で威張れる限り、思ふ存分に威張つとけばよかつた。今は美戸野のやうな男の前に膝を突いて頼んでも、云ふこと一つ聞いて貰へなくなつたのだ。

たみ子　あなたも可愛相ね（憐む如く夫の顏を見て）わたしが耳を塞いでた間に、美戸野はあなたに何を云ひました？

吉村　異つたことは云やあしないが、あいつはお前をも侮辱してるんだよ。お前に美戸野を買收する金力も、男を蕩す若さもなくなつたのに氣がついてるからね。

たみ子（我れを忘れたように）嘘ですく。美戸野の奴、たびくわたしにいやらしい素振りを見せたんですもの。それに、わたしがお金を持つてることもよくしつてるんです。

吉村　美戸野がお前に對していやらしい素振りを見せたつて？。出鱈目を云つちやいけないよ。

たみ子　出鱈目ぢやないのよ。この寢椅子を美戸野が熱心に所望したのは、わたしが不斷この椅子を使つてゐたからなんです。椅子よりもわたしの移り香を慕つたためなんだわ。あなたには察しがつかなかつたの？

吉村（苦笑して）ちよつと信じられないが、それならそれでいゝさ。

たみ子　あなたは詰らないことにはよく邪推を廻すくせに（じれつたさうにして）それにわたしにはお金があることを、美戸野はよく知つてゐるんです。二萬圓くらゐ持つてることをよく知つてるんです。

吉村（ふと、驚きと喜びに勢ひづいて）二萬もの金をお前が持つてゐる？。それは本當かい。

たみ子（俄かに我れに返つたように、口を噤んだが）現金が手元にある譯ぢやないんですけれど、ある人に預けて利廻りのいゝやうに運轉して貰つてるんです。

吉村　さうか。……現金に手元になくても、證書か何かは持つてるだらう。

たみ子　預證書はわたしの部屋の袋戸棚に仕舞つてあつたのを、此間忘れてゐたのです。誰れにも取られなくつてよかつた。（氣乘りのしないやうに云ふ）

吉村（目を据ゑて）證書は今持つてるのか。おれに見せないか。………利廻りのよしあしをお前も考へる女だつたのか。

たみ子　さういふお金をわたしが秘密で持つてゐたことを喜んで下さる？

吉村（微笑して）それは極つてるさ。

たみ子　……（獨言のやうに）大きな金儲けをして贅澤したり威張つたりしようと思はないで、持つてるお金で、田舍でヒツソリ暮したらいゝかもしれない。（夫をよく見て）お互ひに身體が衰へてるし、年齢も取つてゐるのだし……

吉村（もどかしさうに）全體誰れに預けてゐるのだ？

たみ子（何氣なく）澤井さんに……

吉村　澤井に？（身體を震はせる）

たみ子　店員のうちで、あの男だけは頭もいゝし、信用が出來ると、昔あなたが云つてらしつたぢやないの？

吉村　昔はどうだつたにしろ、今はおれには敵だ。おれを潰した仲間の一人見たいなものだ。

たみ子　そんなことわたし知らないわ。

吉村　……ぢや、不斷澤井と共謀になつて、おれの身代を削つてゐたのだな。此間ぢゆう澤井が倒れりやおれがよくなる、おれが倒れりや澤井がよくなると、おれとあれとは、揃つていゝ目は見られないことになつてゐたのが、お前には分らなかつたのか。（興奮してさう云つたが、ふと怒りを鎮めて）しかし、以前おれが、澤井は頭もいゝし信用が出

來ると云つてゐたのを、お前は一圖に信じてゐたのだから爲方がないやうなものだ。……兎に角、その證書をおれに見せてくれないか。

たみ子　あなたの前でうつかり口に出したのだから、もうどうしようもない。（後悔しながら帶の間から證書を取出して）粗末にしちや困りますよ。大切なんですよ。……さあ（と、ソツと渡す）

吉村（恭ふやうに受取つて、熟視してさも悅しさうに）兎に角、おれだちはこれで饑ゑないで濟むのだ。

たみ子（不思議さうに）ぢや、あなたはわたしが秘密で澤井さんにお金を預けてたことを怒らないのね。

吉村（その言葉を聞流して、獨言のやうに）おれは明日の朝、澤井の所へ行つて、貰へるだけの金を貰つて來なきやならん（その證書を大事さうにポケットへしまつて）おれに葡萄酒をもう一杯飲まして呉れ。

たみ子　驚いた。あなたは斷りなしにわたしの財産を沒收するの？

吉村　お前がこれを持つて行つたつて、澤井が素直に金を渡すものぢやない。おれにまかせとけよ。………十日も早く、これがおれの手に入つてゐたら、おれもこんなみじめな境涯に落ちてやしなかつたのだが、おれは今になつて役に立たない愚痴を云つて、お前を責めることは止さう。

たみ子　さうして、わたしは何時までもあなたの側で、生命だけつないで行くんですね。（他人事のやうに云つて）どうせ爲様がないわ。

そこへ石川が入つて來る。「美戸野さん」と遠くから聲を掛ける。

たみ子（そちらを見て快活な聲で）石川さん。いらつしやいましな。

石川（近寄つて吉村に挨拶して）美戸野さんは居りますか。

たみ子　美戸野は急に思ひ立つて東京へ歸りましたよ。もう此方へはまゐりますまい（[illegible]）まあお掛けなさいましな。

石川　いえ、わたしは此處で結構です（緣側に腰を掛けて）美戸野さんは此間會つた時には、そんなに早く歸りさうな話はしてゐなかつたのですが、變ですね。

たみ子　あの人も氣紛れ人なんですよ。あなたと御懇意にして頂いて、お蔭で學問が出來ていゝと喜んでゐましたのに、お別れの御挨拶にも伺はないで、隨分失禮ぢや御座いませんかね。

吉村（ふと思ひついたやうに）さうだ、石川さんが遊びに來て下すつたのは丁度よかつた。あの壺を持つて來て見て頂かう（獨言のやうに云つて、椅子を離れて奥へ入る）

石川　壺と云つて、何か由緖のある壺なんですか。

たみ子　それは汚らしい詰らない壺なんですよ。吉村は商賣に手ちがひをしたゝめですか、神經病み見たいになつてゐますの。壺を掘出したのを金の茶釜でも掘出したやうに思つて、これから商賣にいゝ運が向いて來るやうに思つてるらしいんですから、石川さんは、吉村に力をつけておやりになるやうに、壺を御覽になつたら、何とか吉村の喜びさうなことを仰有つて下さいましな。馬鹿らしくお思ひになるでせうけれど。

石川　えゝ、……どうせわたしには、骨董品の鑑定は出來やしないんですがね。でも、そんなものをお掘出しになつたのは珍らしいですね。

たみ子（突然に）今は何時頃で御座いませうか。

石川　今七時が鳴つたばかりですよ。

たみ子　まだそんなに早いんで御座いますかね。わたし、もう夜が更けてるやうに思つてゐました。

石川　今夜は此方にお泊りになるんですか。

たみ子　さうしてはゐられませんのですが、美戸野に歸られちや留守番が御座いませんから……

吉村が汚い壺を提げて入つて來る。石川は、壺よりも吉村の不樣な態度に注意の目を向けてゐる。たみ子も夫の態度をのみ氣にしてゐる。

吉村　これですがね。見て鑑定して下さい。たゞの壺ぢやないと思ふ。

石川　拜見しませう。

汚い壺を手に取つて、横にしたり逆さにしたり、指先でコツ〳〵音をさせて見たりする。夫婦は、專門家の鑑定を見てゐるやうに敬意を寄せて左右から見てゐる。

石川　可成り古い時代の者ですね。形も面白いぢやありませんか。

吉村（喜んで）相當に價値のあるものでせうね。わたしなぞ無風流で一向分らないが、しかし形が面白い。ここの凹んでるところがいゝ。何に使つたものでせうな。

たみ子（も目を留めて）何に使つたものでせうね。（手に取つて、石川のしたやうに指先で叩いて見て）いゝ音がするぢやありませんか。美戸野は馬鹿ねえ。あの男なぞ、學問がないから、かういふ者を見ても價値が分らないのね。

吉村　何に使つたものでせう？。人間の骨を入れたのでもあるまいな。

たみ子　まさか。……乾度何か貴いものが入つてゐたんですよ。

吉村　もつと貴いものつて。……ぢや、誰れかの先祖が、子孫が零落した時の用に立つやうに、小判でも入れといたの

かな。
たみ子　何にも入つてゐなかつたのは幸ですね。
吉村　誰れかゞ中味を取つたのかも知れないよ。惜しいことをした。
石川（考へ深さうに）人間の害になる何かを、おまじなひに、この中へ封じて、土の中へ埋めたのかも知れませんね。
西洋の昔のお伽噺には、悪魔を壺に封じたなんてことがありますよ。
吉村（はじめて分つたやうに）成ほどそれだ。はじめて分つた。鬼か悪魔か、人間に仇をなすものをこの中に封じ込めたのに違ひない。（壺を取つて庭へ抛投げて）こいつを堀出して蓋を開けてから、美戸野はおれの側を逃出した。おれもお前も氣拔けがしたやうに萎びてしまつた。
たみ子　さう云へば、わたしもあなたに見せなくつてもいゝ者を、うつかり見せてしまつた。今日此處へ來た時のわたしは、こんなぢやなかつたのに。
石川　惜しいことをしましたね。その壺がおいやなら、わたしが頂いて行けばよかつたのに。
吉村　壺の格好がよくつても面白くつても、こんな縁喜の悪いものはお止しなさい（さう云ひながらも惜しさうな目付で、壺の壊れを見入つて、獨言のやうに）見たところ雅致があるのだから、封をしたまゝで誰れかに賣りつけてやればよかつた。
たみ子　石川さんには、縁喜の悪い壺よりも、この寢臺椅子を、おいやでなけりや差上げませう。美戸野がゐなくなつたんですから、この椅子も不用になりましたよ。
石川（喜んで）それが頂ければ何よりですが、頂いてもよろしいんでせうか。

たみ子　わたしの大磯生活の最後の贅澤をあなたにでもお讓りすれば、それで、わたしせいせいしますわ。わたし、には何にも自分の者は御座いませんのよ

吉村　（苦笑して）美戸野の慾しがつてたものを石川さんに差上げるのか。お前はそれでいゝのかい。いろいろに注文をつけて拵えさせて、長い間お前の氣に入つてたものだつたが。

たみ子　わたし、これでもう何にもたいんです……石川さん、今直ぐにでもこの椅子を持つてゐらつしやい。……もうわたしのものぢやない。今からあなたのものなんだから（と云つて、椅子から立上つて、自分の着てゐる衣服を見下して）わたしは、着たつきりの無一物なんですよ。

吉村　その椅子が無くなると、今夜此處で寢ることが出來ないぜ。やはり今夜のうちに東京へ歸るつもりなのか。

たみ子　どちらでも。

吉村　おれと一しよに此處で一夜を明かしてもいゝつていふ氣になつたのかい。

たみ子　だつて、わたし無一物なんですもの。どうしようもないわ。

吉村　おれが東京へ歸るなら、お前も一しよに東京へ歸つてもいゝと思つてるのか。

たみ子　仕方がないわ。無一物のわたしは、生殘つた自分の身體はあなたにおまかせする外ないぢやありませんか。

石川は居づらさうにして庭の方を見てゐる。

たみ子　石川さんにこんなことをお聞かせして、可笑しな夫婦だと思つてゐらつしやるでせうね。

石川　いや、わたしこそお邪魔しました。（つと立上つて）わたしは、差迫つた書き物を今夜ぢゆうに仕上げなきやならないんですから、もうお暇しませう。

吉村　それは御苦労ですなあ。

たみ子　それでは、椅子は誰れかに頼んで、あとからお届けしませう。あなたのやうな方に使つて頂けたら、わたし大變嬉しいんですわ。(最後の別れをおくる)

石川　たゞ頂くのは何ですから、御不用なら、相當な代價で讓つて頂くことにしませう。……いづれ後ほど……(挨拶して出て行く)

吉村　(たみ子に向つて皮肉に)椅子に染みてるお前の身體のにほひを、あの男に嗅いで貰はうと思つてるのか。

たみ子　どうせそんなものなのよ。……あの椅子はあの肺病患者の臨終の寢床になるかも知れないの。

吉村　いろ／＼な文句を云つてあの椅子を遠くやつた時には、まさか他人の臨終の床に使はうとは思つてゐなかつたらう。……(調子を變へて)邪魔が入つて話が中切れたが、梅浦は今夜お前が來るのを待つてるんぢやないか。お前はあの電報を見ても打つちやらかしといていゝのか(詰問のやうに云ふ)

たみ子　梅浦さんだつて、わたしのお金を待つてるんです。お金のないわたしが、こんな、雨で汚染の出來たやうな衣服を着て、青い顏してころげ込んで行つたのぢや、何で歡迎して呉れるものですか。

吉村　ぢや、今からは梅村なぞに寄付かないで、おれと生死を共にしようと思つてるのだな。お前も氣まぐれで、云ふことが當てにならないよ。

たみ子　……わたし、長い間手頼りにしてゐたものを。わたしの生命同様のものをあなたにうか／＼渡したんですもの。

吉村　なるほど。お前が長い間懷中に入れて育てゝゐた生命はこれだつたな(あの證書をポケットから出してつく／＼

眺める）

たみ子　その生命同様の者をあなたに渡したつて、あなたからその代りの、お金以上に貴いものを授かるやうな氣持はしないのだから、心細いつたらありやしない。……いつそその證書をあなたの面前で破いてしまひたいわね。

吉村（急いで證書をポケットへしまつて）これを破られてたまるものか。

たみ子　破りやしないわよ（微笑して）それでも破いちやつたら、お金で買へないものが、わたし達に授かりやしないかと思つたゞけなの。

吉村　お前も慾に落ちたものだね。

たみ子　本當にさうだ。（ふと親しみを含んだ口調で）此處にゐるとも歸るとも、あなたの御自由になさるといゝわ。わたし、髮でも解付けて、顏でも洗ひませうよ。（頭に手をやつて）挨だらけで、見つともない様して。（と呟く）

吉村　それがいゝ。おれも顏でも洗はう。美戸野の奴、あんなざまで飛出して、今時分どこへ行つてやがるだらう？

（幕）



くだかれた心

悅田喜和雄

1

上田勇は小學校を卒業すると、父母達と一緒に百姓をしてゐた。そして、その年の冬になると村の規則で、『若い衆』と云ふ青年團のやうなものに加入した。しかし勇は、若い者が毎晩寄り集まつて、唄をうたつたり、めいめいに自分の戀してゐる女の話をする、弘法大師を祀つた、大師庵と云つてゐる、年とつた、梅毒のために鼻の落ちた尼がゐる、その庵へは行かなかつた。若い衆はそれでも加入した始めの年は許してゐた。しかし十七の秋になると、もう晩には自分の家にゐることは、若い衆の規則が許さなかつた。若い衆の仕事は毎年秋になると村の祭禮の雜用集めをするそれである。

勇はある年上の男から、

『勇さんよ、ちと出て來て雜用集めせえよ！』と云はれて赤い顔をした。

その晩勇は暗い道を怖々大師庵へ行つた。

庵には、集まつて來た七八人の若い衆が、爐を離れて、何かを中に置き皆が這ふやうにして頭をならべてゐた。

『オヽ！來た〱！』と云つて中の一人が笑ひながら頭を上げた。

『オヽ、勇さん上れ！』

他の者も頭を上げて笑ひながら勇の方を見た。

『……』勇は恥かしい氣がしたので俯向た。そして、じつとそこの土間に立つてゐると、

『上らんせまァ！恥かしがることがあるかへ！』と鼻のかげた尼は云つた。

勇は恥かしさうに、すぐ傍の爐の間に這ひ上つて、客に行つた七つ八つの子供のやうに怖々爐の傍に胡坐した。

『オイ！來い勇さん、ハイカラ（娘）のくぢ引じや』勇と同年に加入した、加入するとすぐその晩から大師庵へつめてゐる、杉本と云ふ男が云つた。

『うん！』勇は顏を赤くしてから云つた。

『來いさア勇さん、これどれでも押せ！』勇より四つ五つ年上の男が又かうすゝめた。

『えゝ！』勇はかう云つて俯向てにや〱笑つた。

『俺がやつたろか？』勇より一つ年上の、勇の家のすぐ隣の家の、虎吉と云ふ男は云つた。

『他人がやつちや駄目じや！』中の一番年嵩の男が云つた。

『まだこゝへ出て來るのがいやなやうではこんなことの組入は出來んはなァ！』と尼は瘠せた、細長い顏を、こゝろもち爐の火でほてらせて　ぬけ殘つて黑く汚れた長い下前齒を二本と、でこぼこになつた赤い上はぐきをむき出して勇の

顏を見て笑つた。

『どら、俺がつれて來てやる』から云つて一人の男が、胡坐してゐる、勇の後に來て勇を抱き上げようとした。

『すなア！』勇はま赤な顏をして、頸を左右に振つてそれを避けた。

『まだこれ、こゝら見いこれ、垢がついとるもん、この垢が落ちるやうにならんとお前等と一緒に遊べんわいなア！』

尼はかう云つて笑ひながら勇の耳のあたりを指さした。

勇は耳まで眞赤になつた。眼に一杯涙を溜めて俯向た。

『どら、行かんか！』と云つて勇の後から兩腕の下へ手を入れて抱き上げた。

『……』勇は聲を出さずに、親にだゝをこねる子供のやうに體を振つた。もう勇の眼からは涙がぼろ〱こぼれてゐた。

『うちの子は云ふことをきかいで困る！』其男はかう云つて、『何に！』と云つた風に力を入れた。勇は抱き上げられた。

勇の足はずう〱膝の上を引きずつて皆の傍へ行つた。

『あら！』抱へてゐた男は、吃驚したやうにとんきような聲を出して勇を離した。勇はどつかと、そこへ坐つた。抱へてゐた男は手を洋燈の方へ向けてよく見た。

『あら！鼻汁（ハナ）落された。』其男はかう云つて顏をしかめた。皆は笑つた。勇も何だかをかしくなつてふき出した。とたん、勇の鼻の尖で、鼻汁が石鹸玉のやうに膨れて、パツ、と消えた。

『イヤ！』皆はくもの子が人を見たやうに逃げ散つた。勇は鼻汁をすゝりあげて、もと通り鼻穴へ入れ込むと、誰にも氣づかれないやうにと思つて、手早く涙を拭つた。

皆は又頭を寄せて來た。

ハイカラ（娘）のくじ引と云ふのは、半紙一枚へ、村の十五六から二十二三までの娘の名を全部書て、その名の頭へ長い棒をひき、名だけを一人が隠してゐる。他の者は一人づゝ其棒の頭へ自分の名を書きつける。そして皆が濟んでから其紙を作つた、名を隠してゐる男は手を除けてその名を出すのである。

勇は皆に知られないやうに爐の傍へ行つてゐた。そして俯向てゐた。

――皆の方を見るといけないあんなことといやなやうに見せかけやう――と思つてもいつか知ら皆の方を見てゐたことに氣づいて爐の中を見た。

『勇さん一番さきやれ！』紙を作つた男は、片手で女の名を隠して勇の方を見て云つた。

『…………』勇は爐の中を見つめて返事をしなかつた。

『どら俺がさきやる。』中の一人が云つた。

『勇さんにさきやらせ、』紙を作つた男は笑ひながら云つた。

『來いさア！勇さん、』又他の男が云つた。

『まア！この人がそんな組入するのは來年位じやわへ、けんどなアこんな人が色の道へでも這入つたらなか〳〵しつこいぜ、それ〳〵……』と云つて彼は若い者の方へ向ひて笑つて見せてから

『ちやうど友さんのやうなもんぢや、始めはいゝる（加入）のがいや〳〵云ひよつて、一年ほどこゝへ來なんだけんど、來だしたが限り、居りだしすりや毎晩かゞしたことがないでないけ！』

『おゝ！誰やつて一緒じや、ハイカラの味でも知つて見い、來ずに居るか！』友吉は赤い顏をして云つた。

『いやなものは除けとけ、どら俺がやるぞ！』かう云つて中の一人が笑ひながら筆をとつた。

『これにする、チョイベツサン』と云つて栫の頭へ印をつけた。

『どら、ドイカイチクラチのブプイノプイ！これにする！』皆は次々と印をつけた。

『待つて呉れよ、俺が大師さんにたのんでえゝのを當てゝもらう、』と云つて大師を祀つてある方へ行つて、手を合せて弘法大師の入つてゐると云ふ箱のやうなものを拜んで來てから印をつけた者もあつた。

『神さん拜んだり、お大師さん拜んだりしてやくにたつか、自分が思つたのを取らないと本當でない、』と云つて筆を取るとすぐ印をつけたものもあつた。

皆は濟んだ。

『勇さんやれさア！』かう云ふと勇は俯向た。恥かしい氣がした。

『やれさ勇さん！』又た他の男が云つた。

『……』勇は俯向て、にや〳〵笑ひながら眼をこすつたり、鼻をこすつたりした。

『俺がやつてやろか？』一人の男がかう云つて筆を持つた手を高く上げて勇の方を見た。

勇は怖さうに額で見るやうにして其男を見るとすぐ又俯向て了つた。勇の胸はダク〳〵踊りだした。をかしい女が當りはせぬかと心配した。しかし、自分が當てたのとちがつて他人にやつて貰つたらをかしい女があたつてもよい、――でもをかしい女があつたらわらわれる、とも思つた。

他の來てゐない者も代理で濟した。

『そら開くぞー！』名を隱してゐる男がかう云ふと皆は又頭を寄せて行つた。

勇も頭を上げて其方を見た。

聞くと皆はそれ〲自分の名を印した棒の下を見た。二十位で二十四五の女の當つてゐる男もあれば、いつも皆と話しする時自分の妻のやうに云つてゐる、好きな女があたつて喜んで踊る男もあつた。

「勇さんは？」中の一人がかう云ふと、皆がユの印のついた棒の下を見た。そして又勇の方を見て笑つた。

勇は俯向た。顔は赤くなつた。胸がだく〱するのを覺えた。

「勇さんよ、えゝんが當つたぞ、おしかさんじや！」と中の一人が云ふと、

「云ふな、泣くぞ！」と誰かゞ勇に聞えないやうにと思つて小聲で云つた。しかし勇にはそれが聞えた。

——そりや始めからわかつてゐる、他人があてゝやくにたつか、おしかさんは俺が當てたのでない、俺のかわりをした男のものだ——勇は心でかう云つた。

おしかと云ふのは勇と同年で猿のやうな顔をした、小ガラな女で皆がきらつてゐるのである。

「そこ〲當るもんじやなう、それ〲思ふとる女が當つたでないか、」中の一番年當な男がかう云つた。

勇は俯向たまゝ、指尖で爐へ、勇と云ふ字を書ては書き、書ては書きしながら、——俺があてたのじやない、俺があてたのじやない、と心の内で繰返した。

皆が爐の傍へつめこんだ。そして、隣村におつやと云ふ綺麗な女があるとか、町の料理屋へ來てゐる若い女がよいたちだ、綺麗になりさうだ、とか云つて話してゐるうちに十二時が鳴たので其夜は雑用集めに行かなかつた。

勇は俯向たまゝ、手をコソ〲しながら、話を聞て笑つたり、胸を躍らせたりした。

『消れ勇さん！』勇がマッチを擦つて時計を見てゐると虎吉が云つた。

雑用は二組になつて集めてゐた。他の集めに行つてゐた組は、大師を祀つてある、本堂と云つてゐる方の八畳間でイリコでもまいたやうに足と頭がごた〱になつて寝てゐた。

勇の方の組は四人であつた。他の三人は歸るとすぐ爐の傍で煙草を吸つてゐた。勇は歸らうと思つて時計を見た。――今十二時か、もう少ししたら一時が來る――と考へてゐると『消らんか勇さんよ、ちつと他が仕入たゐは、さうせにや男にならんぞ！』勇と一緒に雑用集めに行つてゐた、たい長の木村と云ふ男が云つた。

『布團出してこうかなう？』他の一人がかう云つて立つて行くと、

『俺も！』と云つて虎吉も一緒に立つた。勇も後からついて行つた。

爐の次の間の居間と云つてゐる狹い間に神樣を祀つてある、その神樣の方へ頭をして寝てゐる尼を跨いで暗い奥の間へ行つた。

『二枚かないは、あいつ等がさきへ布團ばつかりとつて、破れが殘つとるらしいぞ！』さきに行つた男が暗い中で云つた。

『俺も持つて行くは！』

『もう後にないか見て來い、そら行くぞ！』さきの男はかう云つた。

『うわツ！』

『フッフッノッ！』勇は布團につきあたつて笑つた。布團は勇の足の上に落ちた。

『誰な？吃驚したは、勇さんか？』と勇の鼻の下で云つた。

『吃驚した！』布團を拾ひ上げると其男は出て行つた。

『あるか？』勇は今のやうにつきあたらないやうにと思つて兩手で暗い中を探しながら云つた

『もうないけんど尼さんがお客布團じや云ふて出さんやつがあるは、眠つとるのつて怒れへんは、そら、お前後の敷布團持つて來いよ！』と虎吉は小聲で云つた。勇はつきあてられないやうにと思つて、片方の壁にひつついてゐた。

虎吉の足音が遠くなると、勇は這ふやうにして手で探した。そして敷布團らしいものを持つてそこを出た。

勇が敷布團を持つて出て來た時、早さきの男とたい長の木村とは寢てゐた。二人は抱きあつてゐるやうに、顔と顔が向きあひになつて頭がコロ〳〵ころげてでもゐるやうに動いてゐた。

『それなんな、年寄たてらが、そのざまなんなそれ！』虎吉がかう云つて笑つた。勇も寢てゐる二人を見て笑つた。

『勇さんよ、こゝへ來て敷布團敷け、二人が後さしに寢んか。』と虎吉は云つた。

『……』勇は默つて云はれるまゝに敷布團を敷た。

『年寄がはずむんじやもんなう。』と云つて虎吉は勇が敷た敷布團の上に布團をひろげた。

『……』勇は默つてにや〳〵笑つてゐた。

『もう一時が來るぞ、早よう寢んか！』と云つて虎吉が帶を解きだした。勇もそろ〳〵帶を解いた。虎吉は襦袢一枚になつて布團の中へもぐりこんだ。

勇は枕はないかとあたりを見た。寢てゐる者には枕をしてゐる者はなかつた。勇も襦袢一枚になつた。そして脱だ着

物を丸くしてその上から股引を卷て枕をつくつた。

『枕一つもないんじや』仰向に寝てゐる虎吉は勇の枕を見て云つた。

勇は虎吉の足と竝んで寝た。

少したつと虎吉の鼻は鳴りだした。時計が『ブン』と一時を打つた。

勇は皆の鼾を聞くと一層眼がさえて來た。──眠らう──と思ふと胸がダク／＼して氣がせか／＼して來る。寝苦るしいので片足を出して布團の上へ上げた。眠れるやうにと思つて、一つ二つと數へだした。千まで數へてもやはり眠れない、時計が『ジヤツ』と二時を打つさき知らせをした。泣きたいほど氣がせか／＼して來た。眠れなかつたら明日仕事が出來ない、頭が痛くなるかも知れない、──と思ふと息苦るしくなつて來た。出してゐた足を布團の中へ入れて身體を小さくした。しかし、やはり駄目だつた。眼を開けて頭を上げあたりを見た。ぼんやりともつてゐる二分心のつり洋燈の向ふで、腹這ひになつて、龜のやうなかつかうで尼は煙草を吸つてゐた。

『尼さん、俺眠れんのだうしたんだらう？』勇は足だけを布團の中へ入れて坐つたやうに身體を起して云つた。

『寝間が變ると眠れん人があるもんじや、わたしらも若い時はさうであつた。疊一枚ちがうても眠れいで困りよつた。光明眞言でも云ふてみんせ！』尼はやはり同じ風にして、煙草を吸ひながら云つた。

『さうけ！』と云つて勇は又寝た。光明眞言は知らないので南無大師ヘンジョウコンゴウを口の内で繰返繰返唱へた。

やはり駄目だつた。──歸らう？──と考へた。道の怖い處を思ひ出した。竹藪のある處、墓地のある處──それ／＼怖しいお化の話のあることを思ひだした。泣きたくなつて來た。『ブンブン』時計が二時を打つた。

──早く眠らないともう少ししたら夜が明ける──胸がだく／＼して氣がせか／＼して來る。眠らう、眠らう？──

眼が涙で洗つたやうになつた。――眠らう、南無大師…………時計のきざむのを數へてやらう？一ツ二ツ三ツ四ツ…………――いつの間にか眠つた。

『勇さんよ、勇さんよ！』と虎吉が呼ぶと勇はやつと氣がついた。皆は寢床を上げてゐた。それを見ると勇ははね起きた。

『よう眠つたなう勇さん』と虎吉が眠むさうな勇の顏を見て云つた。勇は返事もせず眼をじやく〳〵させながら寢床を上げた。

3

勇は毎晩庵へ行くやうになつても『まだこれ、こゝの垢が落ちるやうにならんとお前等と一緒に遊べんわいなア！』と尼が云つたことを思ひだすと、ゾク〳〵身の毛がよだつ氣がするのであつた。他人に顏を見られると、尼に指ざされたこめかみのあたりを小さい虫でも這ふやうにゾガ〳〵した。それですぐ顏を反向(そむけ)て視線を避けるのであつた。これと同じに氣にかゝるのは頭であつた。學校へ行つてゐた時分に父に刈つて貰つた頭を

『上田みいこら、これなんな魚食ひ髮かこれらをいこら！』と云つて、上級生や、同級でも強い者に、耳の上や首に殘つた髮をひかれたことがよくあつた。その時分からくらべると父もうんと上手になつてゐるが、それでも父に刈つて貰ふとすぐ耳の上へ手をやつて魚食ひ髮が殘つてはゐないかと檢べてみるのであつた。そして――本職が刈つたのであればどんなにまずくてもえゝけんど、素人が刈つたのじやいくら上手に刈つてあつたつてやはり素人じや、恥じや！――と考へたりした。

――いつか散髪屋へ行かう――かう思つて考へて見ると、又何だか恥かしいやうで怖しい氣がする。――行つて、下手なことをして、十七にも八にもなつて散髪屋へ來るのが初めてじや――と知られたら恥かしい、田舎者だ――と云はれると思ふと怖い氣がする。

――ナニ！嗤れたつて行つてやる、散髪屋一人しかゐない時だつたら嗤ふやうなことはないだらう、俺よりまだうんと田舎者が行くだらう。お金入の口金を開けるすべも知らないやうな人も行くことがあると云ふことだ、田舎者には馴れとるのつて嗤ふやうなことはないだらう、先方は商賣だから嗤ふやうなことはないだらう？――勇はかう考へた。

――今日こそ元氣を出して行つてやらう――勇はかう思つて朝肥取に出る時五十錢銀貨を帯に卷きこんで家を出た。散髪屋のある町へ廻つて、散髪屋を覗てみたが七八人の客がは入つてゐた。勇は止して肥を取つて歸つた。二荷目には又他の散髪屋のある方の町へ曲道して行つた。しかし、又そこも客がこんでゐた。三荷目に又朝見て行つた方の散髪屋へ廻つた。客は今刈つてゐる人だけであつた。

勇が重い硝子戸を、開かないので搖ぶつてゐると、散髪屋が刈るのを止して戸の方へ來て開けて吳れた。そして、『おは入やす、どうぞこちらへ！』と頭も下げずに云つてから、又客の傍へ行つて刈りだした。勇は早一本めんくらつた氣がした。赤い顔をして怖々散髪屋の顔色を覗いた。しかし散髪屋は嗤つたやうな顔色を見せなかつた。客と散髪屋はしきりに兎狩の話をしてゐた。――ナニ！大丈夫だ、おど／＼せずに歌でもうたつてやらう？――勇はさう思つて小聲で歌をうたつてみた。客は椅子をかわつた。と、勇はドグンと胸を打たれたのを感じた。――あれが濟んだらあの椅子、あれが濟んだらどれだらう？　よく憶へてゐないと始めて來たと云ふことがわかるぞ――それから勇はあたりを見まわした。と鏡の傍に、

鋏刈三十錢
散髪二十五錢
丸刈二十錢
毛剃十五錢
子供月代 十五錢

右の通り相定め候也、と書て何々理髪組合之印と入つた大きな判をおした、大きな紙がはりつけてあるのを見た。

——鋏刈三十錢か——と勇は何度も何度も心の内で讀んだ。散髪二十五錢、丸刈二十錢……前長はどれだらう？散髪を前長と云ふのか知ら？前長にしてやらうか？しかし前長にして歸つたら父母達に怒られるかも知れない？……前長にしよう、丸刈と五錢しか違ひがないんだから、しかし、散髪は前長か知ら？鋏刈はドイツワケと云つてゐるあれだらう、耳が隠れるほど延びてゐる、あれだらう？しかし、散髪はどれか知ら？前長はないぞ、散髪？たゞ髪を刈ることを散髪といふ。しかし、散髪が前長だらう、前長にしてやらう、——勇は髪を長くして、左分けにしたいきた風采をした男のことを考へてみた。自分もそんな風に、いきな左分で歩くことを考へた。

『前長にしてつかはれ！』つて云つたらえいだらう、しかし前長と云ふ刈方があるか知ら、云つてもしなかつたら嗤れる　こんなことを考へてゐるうちに前の客は濟んだ。その客は丸刈に出來上つた頭を鏡に寫して見てゐた。

『どうぞこちらへ！』散髪屋は勇の方を見て云つた。勇はさきの客がゐた椅子へ行つた。

『これ！』と云つてさきの客は五十錢札を一枚つまんで散髪屋の方へ差出した。

『どうもありがたうさま！』散髪屋はさう云つて大きな鏡の下へ行つて、小さい箱に手を入れてお金をチン〈云はせ

た。

『これおつり』と云つて散髮屋はつまんだ銀貨を客の方へ出した。

『いや、もうつりよろしい！』と客は云つた。

『だうもありがたうさま！』散髮屋はかう云つてつまんでゐた銀貨をしまつてから勇の傍へ來た。

『さようなら、』客がさう云つて歸りかけると、

『まアごゆつくり、ありがたうさま！』と散髮屋は云つた。

『どんなにするで、前置くで？』散髮屋はかう云つた。

『……』勇はどんな意味かわからないので默つてゐた。

『丸刈にするで？』散髮屋は又訊た。

『えゝ！』勇はかう云つた。散髮屋はジヤキ／＼器械を鳴らして刈りだした。と又戸口の戸が開いた。

『おは入やす、だうぞこちらへ！』散髮屋はかう云つた。若い男が二人入つて來た。勇はそれを鏡でみた。漁師らしかつた。その二人は前長の頭をごじや／＼にしてゐた。と、又勇は初めて來たと云ふことがこんな人達のよいお笑ひのたねになるんだ、と思つて恥かしくなつて來た。――うつかりせられない、この椅子からあの椅子へ行つて毛剃して頭を洗つたらもう濟んだ、さうだ頭に澤山垢がついてゐるかも知れない、二人が見ないやうにと心で祈つた。――散髮屋だつたらいくら垢がついてゐても嗤ふやうなことはあるまい、勇は二人に顏を見られたくなかつた。鏡を見てゐると、鏡に寫つてゐる自分の顏を二人に見られさうな氣がするので眼を閉ぢた。

散髮屋は又二人に漁の話を持かけた。

勇は散髪屋に頭をまかし、云ふ通りに動くと思つたやうに不體裁がなくて濟んだやうな氣がした。頭を洗つてからは、さて困つた。椅子はどれか知ら、どうしてよいのかわからなくなつた。勇は散髪屋の顔を見た。しかし散髪屋は話がはずんで二人の客の方ばかり見てゐる。勇は不體裁を隠すため腰の手拭を取つて頭や顔を拭つてもじ〳〵してゐた。

『こちらへ！』散髪屋が椅子をしめして呉れたので勇はあわてゝその椅子へ行つた。散髪屋は顔へ何かよい匂の物を擦りこんで呉れ、頭へもよい匂ひのものをつけた。それが濟むと、

『へい！』と云つた。勇は濟んだことを知つた。

『お前へ先き行け！』

『お前が行け！』二人の客はから云ひあつてから其内の一人が、勇の除いて來た椅子へ行つた。

勇は帶に卷てゐた五十錢銀貨を出して、

『これ！』と云つて散髪屋の方へ差出した。

『おつり』と散髪屋はそれを取つて云つた。

『よろしい！』と勇は云つて戸口の戸を開けた。

『ごゆつくり、ありがたうさま！』と散髪屋は云つた。勇は散髪屋を出ると、前長にしたらよかつた——と思つた。——いつたい丸刈は何程だらう？さきの人は五十錢出した。それに『おつり』と散髪屋は云つてゐた。書てあるのはずつと前の値段で、今はもう高くなつて四十錢ぐらひになつてゐるのだらう、丸刈が四十錢であつたら前長は五十錢位で刈つて呉れるだらう、五十錢出すのであつたら前長にしたらよかつた。しかしまアよい——勇は頭が輕くなつたやうな氣

祭の夜だつた。

『山車を引き込むまで散らばるなよ、ハイカラ（娘）の後をつけたりせられんぞ。』勇の頭にはたい長の木村が云つたこの言葉がこびりついてゐた。宿で――宿といふのは若い衆が酒を呑む場處に借りてゐる家――酒を呑んでゐる時でも、自分は酒が呑めないので皆から離れて縁側に出てゐても、やはり木村から云はれたことを忘れることが出來なかつた。一番上座をしめて、酒を呑んでゐる木村が何かのひようしに勇の力を見ても、勇はすぐ視線を避けた。と、同時に、自分が席を離れてかうしてゐるのを怒りはせぬかと、おど〱してゐた。

町のそこゝと、太鼓の音がしだした。勇等の組も太鼓を打ち出した。木村が第一番に歌ひ出した。

町の漁師の組の若い衆が山車を引く騒々しい音がしだした。もう戸外は薄暗くなつてゐた。

『もうこつちも引くか？』酒を呑んでゐる中の一人が云つた。

『まて、虎公から下の者は皆行つて提灯をつけて來い、後の者はもう一いき呑んでから行かんか、皆が一緒に行つたつてどうなりや！』木村はから云ひはなすとすぐうたひ出した。

『行かんか、行かんか！』虎吉がかう云ふと虎吉より年下の者は全部立つた。土間へ下りると、皆は、揃への黄色の手拭で頬冠をねじこんだ。縁側にゐた勇は、木村の云つたのを聞くと、すぐ頬冠をねじこんで戸口に立つてゐた。

『行かんか勇さんよ、』一番先になつて來た虎吉はかう云ふとすぐ勇の後から抱きついた。勇は酒臭い虎吉の息をかぎな

から肩をこして、胸の上に來た虎吉の手を輕く握つて、薄暗い小路を歩た。

　左へ曲つて明るい四つ辻へ來るとそこには人が一杯であつた。漁師組の東の若い衆は早そこまで山車を引いて來てゐた。音頭取は山車の上に上つてうたつてゐた。大勢の若い衆はその前で踊つてゐた。

『醉つとんぞ、そら知らんぞ、のいとれよ！』虎吉は勇の肩の上に膊を上げて云つた。そして勇を押したてた

『どら〳〵、あぶないは、どら！』勇はかう云つた。虎吉が後から押すので勇は自分の身體が自分の自由にならなかつた。

『あぶないは！』

　勇は人の隙を見てそこから入らうとすると、後から押すので身體が左右に搖れた。

『ア痛い！この人みい！

『やかましぞ！』と前の方から怒る。

『醉とんぞ、そら知らんぞ！』虎吉はかう云ふ

『押すな、押すな！』勇が人の中へ割りこむと又前の方からかう云ふ、

『やかましわへ！ぶん毆るぞ』又誰かゞかう怒鳴る、

『醉つとんぞ、知らんぞ！そら！』虎吉は又かう云つて勇を押す。

『どこの若い衆ぞへこりや！』勇のすぐ傍の女の人がかう云つて勇の顏を覗きに來る。

『押すなへ！』少し勇が割りこむと前からかう怒る。虎吉はどん〳〵押す。

『そらのいとれ、若い衆ぢや！』

『何程若い衆らや云ふたつて、こりやここの若い衆でへゝ宮川口に行きやええのに、いやがた[illegible]、としたんこりや又？』

『そら、酔とんぞ、そら知らんぞ！』虎吉は又から云つた。

『押すな押すな、あぶないわい！』

『やかましいふとぶん殴ろぞ！』

歌を聴いてゐる人群は波のやうに揺れた。

勇と虎吉はやつと薄暗い山車の裏へ出た。そこには七八人の娘がゐた。虎吉は勇をその娘の群へ押こんだ。娘達は逃げ散つた。

『酔とんぞそら、知らんぞ！』虎吉は勇の後から云つた。

『厭味ななア！』

『どこの若い衆ぜ？』

『誰ぜ？』

勇と虎吉は娘達のから話してゐるのを聞きながらゆらり〳〵と薄暗い町を歩た。

勇と虎吉が自分達の山車の傍へ行つた時、もう他の男達は山車に乗つて、提灯に火をつけてゐた。

『だうしたんな遅い！』山車に乗つて灯をつけてゐる男がから云ふと、

『なか〳〵来れるか、じように（澤山）人が居るのに！』虎吉はから云つて勇を離した。勇は慌てゝ山車に乗つた。

『とろこい奴じやなう又、こつちの小路から来てみい、誰れも居れへんは、』

『知らんもんじやもん！』虎吉はすぐ傍の下水へ小便をしながら云つた。
『又あれ、ハイカラをねんがけて行つたんぞなう？』
『さうだらうが勇さん？』
『……』勇は默つて提灯に灯をつけた。
『俺が一つ音頭やろかなう？』虎吉は醉つたやうな聲を出して云つた。
『阿呆云ふな、早よう上つて灯をつけェ！』
『いや、一つやる、皆下りて踊れよ！』虎吉はかう云つて音頭取が上がる處へ上つた。
『かいらじやなう、そんな歌に誰が踊りや！阿呆よ！』山車に乘つて灯をつけてゐる誰れかゞかう云つた。
『皆下りく、下りて踊れ！』虎吉はやはり醉どれ聲で云つた。
右手の小路がドヤく云つて十人ほどの若い衆が出て來た。
『もうえいんか？引くぞそらそら』かう云つて山車の前に積んである綱を引て行つた、
『エイヤくく！』
『待てくく！』
『待つて吳れ、もう一つじや、引たら灯がつかんぞ！』誰かゞ山車の上から云つた
『來いく、エイヤくく！』
『下りく、下りて皆引け！』
『エイヤくく！』皆の聲は揃つた。

『エイヤ！〳〵』山車の車に『キ……イイイ……』と哀れな聲を出して動いた。

『そら氣をつけよ、家へあたるぞ！』

『來い！〳〵！山車へ來い』かう云ふと山車の左右へ四五人づつ來た。

『よし〳〵！』こんな聲がすると山車は止つた。乘らうとして子供が四五人來た。

『乘るな、乘るな！』山車についてゐる男は怒つた。

『こらへ、乘るな！』又誰かゞ怒鳴つた。

『ハアよつこにせ！ハアよつこにせ！』皆の聲が揃ふと山車は『クウウ〳〵』と苦るしいやうな聲をたてて右へ向いた。

『エイヤ！〳〵！』皆が聲を揃へて引きだすと、子供は死んだ蛔を見つけた蟻のやうに山車の周圍へたかつた。

『あぶない〳〵！』

『下り、下り！乘つたら耳いわい！』前の方から怒鳴る。

『けがしても知らんぞ！』山車の左右から叫ぶ。

『こら丈吉！あぶない！』見てゐる人がかう子供を怒る。

『そら家を氣をつけよ！』前の方から叫ぶ。

山車は、――キイイ……――と哀れな聲を出して動て行つた。

勇達の山車が四つ辻へ行つた時はもう他の山車はゐなかつた。

『こゝで一つやるか、先生（音頭取）呼んで來い先生どこに居るんな！』誰かゞから云つた。

『綱はなせ！』

『そら二列にならべ！』木村がかう云つた。

一時ごた〳〵まぜかえしてから皆は二列にならんだ。

音頭取がひようたんを持つて山車に上ると皆は踊りだした。

歌を聴く人達はだん〳〵集つて來た。

拍子木を持つて二列の先頭になつた木村と岡田とは揃つて

『たうざい、たうざい、たうざい！』と云つて拍子木を打つた。と、他の者も皆が揃つて、

『たうざい、たうざい、たうざい！』と云つた。と、音頭取が眞赤な顔してうたひだした。聴き手は黒くなつて來た。

若い衆は音頭取の顔を見て踊つた。

口を開いて、音頭取の顔を見つめて、踊つてゐる勇の脊を後からコツン〳〵つく者があつた。

『誰な？』勇はかう云つて後を見た。

『あら！』と云つて踊つてゐる右の手を長く延した。

『誰な松さんか？』勇はかう云つて黄色の手拭で頬冠をねじこんだ顔を覗た。

『踊れ！踊れ！』其男は云つた。

『松さんか？』勇は傍で聞きわけてから云つてから、松吉のしめした右の方を見た。と、勇のすぐ傍に、踊てゐる手を少し延すととどくやうな處に、町で評判のおつやといふ芙蓉亭といふ料理店にゐる女と、も一人知らない、おつやより若い女がゐた。勇は胸をドキ〳〵させて前の男の脊をこつ、いた。

『おう！』前の男は一寸あとを見ると罵たやうに云つた。

『やかましわい！』聴き手の中からかう怒鳴つた。

『誰な！やかまし！』前の岡田がかすれ聲で云つた。

『たうさい、たうさい、』聴き手の中から又かうせいした。

又後からコツン〳〵勇の脊をこついた。勇は踊りながら後を見た。松吉は勇の肩へ顎を載せて、誰かゞ後の方から紙の揉んだやうな物を投げつけた。

『おつやとおこま！』と云つて顎をひいた。勇は名を知るとも一度女をよく見た。誰かゞ後の方から紙の揉んだやうな物を投げつけた。女は顔を引いて、額で見るやうにして、ニヤ〳〵笑ひながら紙の飛んで來た方を見た。と又、松吉が踊つてゐる手をニユツと、延して女の鼻の尖へつき出した。女はその大きな手をパチツ、とたゝいて、

『誰れ？これ？』と云つて顎の下へその手を隠すやうにした。

『俺が行つて抱きついてみようかなう？』松吉は又勇の肩の上へ顎を載せて云つた。勇は踊りながら頷づいた。

『――キイ――誰れこれ？』女が變な聲を出したので皆は聲の方を見た。

黄色の手拭の頬冠はおつやを抱ていた。

踊つてゐる列は亂れてさわついた。

『誰れこれ？誰れこれ？』おつやは笑ひ聲でかう云つてゐた。

『列をくずして誰れか？』木村は大きな聲で怒鳴つた。皆はわれにかえつて踊つた。

しばらくして音頭取の歌は済んだ。岡田はかすれ聲でいゝせ節をやりだした。皆は手を拍つて列を崩して踊りだした。

音頭を聞てゐた人達はぽつり〳〵減つていつた。

勇が手をうつて囃してゐると、虎吉が後から抱ついていつた。そして耳の傍で

『ハイカラが居るんじや、行かんか』と云つた。

『虎やんか？』勇がかう云つたが虎吉は返事もせずに勇を踊の中からつきだした。

『怒られるは！』勇は小聲で云つた。

『かもたか、怒つたつて知らん顏しとつたらえゝんじや、』虎吉はやはり小聲で云つた。

勇は押されるまゝに暗い處へ出た。

『奥（勇達の村）のハイカラ皆來とるは！』虎吉は暗い處でかう耳語た。勇は虎吉に押されるまゝに海の方へ出た。山車からはかなり離れた。家がなくなつて、ほとんど灯の助けのない暗い處へ來た。そのあたりには何か白い材木のやうなものがある。そこから少し行くと虎吉は力限りに勇を押した。勇は黒い物につきあたつた。それはハイカラの群だつた。

『どしたんあぶない！』

『誰ぜ痛い！』黒いハイカラの群からは泣くやうな聲もした。虎吉は又兩手で力限り勇をつきとばした。勇は誰か知れない女に抱きついて倒れかゝつた足をふみとめた。

『虎やんけ？』と云つた者もあつた。

勇はやつとハイカラの群から出た。そして一間位離れてぼんやり立つてゐた。

『なにしよん虎やん！』こんな聲も黒い中から出た。白い材木の傍の黒いものは搖れ動た。勇は淋しさうな眼つきでそれを見てゐた。その搖れてゐる中へ這りたかつたが恥かしいやうな氣がしては入ることが出來なかつた。胸を踊らせて

[illegible]いてゐる女の群を見てゐた。女の群からは笑ひ聲が起つて出た。

しばらくすると、

『たうざい、たうざい！』と云ふ木村の聲が聞へて來た。

『行かんか虎やん怒られるぞ！』勇はかう云ひ殘して、一人で山車の方へ走つた。

5

『毎晩遊びに行つて何のことな！』母からこんな小言を云はれても勇は止めずに遊びに行つた。遊びに行くのを止めて、仕事から歸るとすぐ夜飯を食つて寢ても、何だか息がつまるやうで眠れなかつた。なんでもないやうな話であるが爐の爐をかこんでする話は不思議に勇の心をひきつけた。

『この頃他の若い衆は皆働きに出て居らんのつて尼さんが淋びしいんで困つとんじや、そんでうち（自分）と虎やんとに來て呉れ云ふのつて行くんじや！』と云つたりした。勇は晝の仕事を濟して歸ると父母達の手前を思つてすぐ繩を打つた。そして夜飯の用意が出來るまでに草履を二足作るのである。二足作るともう謎が餘つても止して湯を使つて飯を食ふのである。飯を食つてから家を出る時になると、草履を作つて夜の仕事は濟してゐても父母達の手前が怖ろしいやうな氣がするので、小聲で歌をうたつた。

『長野へ行くか、お馬さんとお竹さんとが蹈合しよんぞ！』爐の傍で長い間話してからもう夜がくたつて眠むさうにシヤクシヤクさせてゐると虎吉はかう云つた。――蹈合といふのは二人が手傳合つて米や麥を蹈むのである。お馬は勇より一つ年下でお竹は二つ年下であつた。――

『勇さんと虎やんとが行つたら丁度えゝ角力じや、虎やんはお馬さん、勇さんはお竹さん、具合も丁度よし、』尼は[illegible]云つて、すぐ傍にゐる虎吉の顏と、勇の顏を見くらべるやうに見てニヤ〳〵笑つた。

勇は赤い顏をして俯向た。

『行くか！』虎吉は景氣づいて、にこ〳〵しながら云つた。

『………』勇は默つてゐた。『うん！』と返事がしたかつたが恥かしい氣がした。

『行かんかよう！』虎吉はかう云つて立つて、坐つてゐる勇の手をとつて引きたてた。そして勇が立つと、虎吉はすぐ土間へ下りた。

『だうなえまア！』勇はいやなやうに云ひながら土間に下りて草履を穿た。

『早よう來い！』虎吉は戸口の障子を開けて云つた。

『だうなえまア！』勇が又いやなやうに云つて戸外へ出ると、虎吉は勇に抱きついた。そして小聲で、

『お馬さんが晩にいつでも來てつかつて云ふんじや！』と勇の耳へ口を持つて行つて云つた。勇は胸をダク〳〵させながら、後から肩をこして來て首にからみついた虎吉の腕を握つた。

『突くなよ、あぶないぞ』勇はかう云つて、後から抱きついてゐる虎吉を氣づかいながら足下にも氣をつけて、虎吉の腕を握つた手に力を入れて、暗い道を下りて廣い村道へ出た。

『お馬さん！』虎吉はかう云つて、勇を固く抱きしめて、頬づりのやうなことをした。

『すなア』と云つて勇は避けようとした。しかし虎吉は離さなかつた。勇は顏を振つて、生ぬるい虎吉の息を避けた。

少し行くと、お竹がうたつてお馬が囃してゐるのが聞えた。

『はい（早よう）行かう、はい行かう！』と云つて虎吉は勇を押したてた。

『だうなえまア！』勇はいやなやうに云つてやはり足を運んだ。

長野の門口に行くと勇は立とまつてふんばつた。さすがの虎吉も恥かしかつた。勇をさきに行かせようとした。虎吉はふんばつた勇を後から押したてた。

『行けさア、行けさア！』と虎吉は小聲で云つた。勇はふんばつた足の力を急にぬいてうまく避けた。虎吉はりか餘つて門口の戸につきあたつた。ゲワッタ——と大きな音がした。

『痛かつた。戸へ氣色ようどやしあげた！』虎吉は勇の傍へ來て云つた。

『フフフ……フフ！』勇はをかしくなつて笑つた。

『ナニ！俺がさき行つたる！』虎吉はから云つて腕を振つて大將歩きの眞似のやうにして行きかけた。勇は笑ひながら後からついて行つた。と、門の戸の處へ行くとすばやく後へ向いて勇を捕へた。

勇は笑つた。虎吉も笑つた。

『行けさア、行けさア！』又から云つて虎吉は勇を押し入れようとした。

『なんすんな、去たんか！』勇はから云つて動かなかつた。

『行けさア、行けさア！』虎吉はしつこく又押した。勇は又力をぬいて避けた。

『俺がさき行つたろか？』虎吉は獨言のやうにから云つたりしたがやはりさきになつて入るのは恥かしかつた。

『お馬さん、お竹さん！』虎吉は生垣に隠れてから口笛を吹た。

お竹の歌と、米踏む音は祥燈を消したやうにやんだ。

『お馬さん、お竹さん！』虎吉は續けて口笛を吹いた。
『あら？誰だらう、虎さんかいの？』お馬がかう云つたのを聞くと虎吉は續けて、
『お馬さん、お竹さん！』と口笛を吹いた。
門口の方へ足音が近くなつて來た。その足音がバッタリやむと、
『虎さんけ？虎さんでないんけ？』とお竹の聲で云つた。
勇は逃げようと待かまへてゐたが虎吉が逃げないので、見えないやうに、ぺつたり生垣に凭れてゐた。
『今晩は！』虎吉はかう云つてお竹の問ひに答へた。
『早よう來て手傳つてつかさア！』お馬があまえたやうな聲で云つた。
『勇さんよ行かんかさア！』と虎吉は門を這入つてから云つた。
『あら！勇さんも來とん？は入り勇さん！』とお馬が云つた
『行かんか、行つて手傳つてあげんか！』虎吉は又、かう云つたが勇はやはり生垣に凭れて動かなかつた。
皆が行つて了ふと、勇は門の戸に凭れて中を覗た。三人が小聲で話してゐるのを聞くと胸が踊つた。何を話してゐるのか知らーと思つて耳を澄して聞てゐると、足音が近づいて來た。勇は足音をたてないやうに逃げて又暗い生垣に凭れた。
『勇さん居るんけ？』とお竹は呼んだ。勇はダク〳〵する胸を生垣に押しつけて默つてゐた。
『居らないんけ！』お竹が門から出てかう云ふと、中で話してゐたお馬と虎吉が出て來た。
『勇さんよ、勇さんよ！』虎吉がかう云つて探しかけたので勇は息を殺して小さくなつた。
『ハアハ……ハハ……』虎吉は生垣に凭れてゐる勇を見つけだして、勇の肩に手をあてゝ笑つた。勇は其時わけもなく

泣けさうな氣がした。

『行かんか！』虎吉はかう云つた。

『…………』勇は故意に默つてゐた。

『行かんか、行つて手傳つてあげんか！』虎吉はかう云つて勇の手をとつて引た。

『行かんけ、行つて手傳つてつか！』かう云つて又お馬が一方の手をとつた。

『……』勇は默つて、二人に引かるゝまゝになつて唐臼場へ行つた。

『お前等明日の晩からもつと早ようから來てつかよ！』とお竹が云つた。

『今夜もう一臼踏むけ？』とお馬が云つた。

『もう遲いのつて明日の晩にせんけ』とお竹が云つた。お馬と虎吉は竝んでもと踏をした。勇とお竹は竝んで左側で踏んだ。

『木岐の二本まアツ……』とお馬がうたふと、三人は『ドツコイショ……』と囃す。

勇は、お竹が前に垂れてゐる繩へ手をやつて、その繩に縋つてゐるのを見付けて、お竹のその手の上へ自分の手を持つて行つた。お竹の手の溫た味を自分の手に感じて、酒にでも醉つたやうな氣持で、心臟の動悸を自分で聞きながら汗をかいて手傳つた。

勇はぜひ前長にしたい、と思つた。『いきな左わけ』と云ふ歌の文句をよく思つた。プンと匂ふ香油のことも考へた。

着物のことも考へた。お竹とお馬とどちらがよいかと考へてみた。――綺麗なのはどちらが綺麗なか知ら？　お竹もいお馬もよい、二人とも好きだ、と、どちらが深く俺を思つて呉れてゐるだらう？……お竹とお馬……お馬は虎公に惚れてゐるかも知れない。お竹は手を握つても、帯の間へ手を入れて行つても避けようともしない。お馬も昨晩俺が歸る時、あの納屋と家との間の暗い狹い處でお馬に抱きついて行つたが避けようともしなかつた。あの時虎公が來かゝつたから俺はお馬を離したのであつた。それからその前の晩、お馬が持つてゐる蜜柑を、だましでにひつたくつて逃げたらお馬は門まで追つて來て、俺を門の生垣へ壓つけた。そのときお馬の頬と俺の頬はぺつたり合つた。俺は力を入れてお馬を抱きしめた。お馬は俺を抱きしめた。……お竹はおとなしいんだ、こちらから手を握つても帯の間へ手を入れて行つても避けようともしないが、お竹の方から手を握りに來たり抱きついて來たりすることはない。しかし、大きな聲で歌をうたつたり、暑いと云つて兩肌をぬいで米を蹈む。おとなしいんでなく、まだお馬より年下だから、それだけ若いから初心なのだ――勇はこんなことを考へながら藁を打つた。そして納屋の暗い處で草履を作つた。

『勇よ、ちつと藁をよう打つてから作れまア、十ばし打つたつてそれがおへるか、おへくさしの藁で作つたつてじき破れて損じや、遊びに行くのにちつと位遲かつたつて早かつたつて何の出入がありア！』父が母屋から大きな聲で云つた。

『……』勇はおへてゐない固い藁でせつせと草履を作つた。

――虎公今晩ももう行つたか知ら、昨晩もさき行つとつた。毎晩あゝして早くから行つても虎公の父母達は怒らないんだ、よい父母達を持つてゐる。――勇はこんなことも思つた。

『もう湯沸たけ？』勇は納屋から草履を作りながら大きな聲で云つた。

『オヽ！湯沸とるぞ。』母は仕屋からかう云つた。

『勇よ！』父は呼んだ。

『エヽ！』勇は返事した。

『草履作つたら毛をむしつて衆けるやうにしとけよ、毛をむしつてないと急ぐ間にあわんでないか、いつでも履がわるいんじや、草履作つたつて作りつぱなしでだうなりや！』父が又かう云つた。

『……』勇は返事もしなかつた。いつもの如く二足作ると、似合つたやうなのを、ひきそとひきそとをつなぎ合せていつも作ると投込んで置く納屋の隅へ投げこんで仕屋へ歸つた。

『毛をむしつとかいでだうなりや、一足下して行かうと思つたつて毛をむしらんたらんと大儀でしようがないは！』父は爐の傍で煙草を吸ひながら勇の顏を見て云つた。

『湯を使ふか？』勇は父の云つてゐる小言が氣持惡いので誰に云ふともなく云つた。

『こらおつぎ、おさきさへ眠らんのに大けなりしてなんのことな、こらへ、こらへ！』父がまだ小言を云ひさうなので、勇はその小言を云はれるのがいやさに、爐のふちに足を上て寢てゐるおつぎをゆすぶつて云つた。

『うう：ううう』おつぎは頭を上げて、眠むさうなしかめづらで、細い眼をまたゝいた。そして、又寢て了つた。

『んね（姉）よ、んねよ、』妹のおさきがかう云つたが姉はたわえなかつた。

『あんや（兄）よ來い來い、どら湯ちつと呉れ、こゝへ入れて呉れ！』おさきは手盥に湯を入れて行く勇の方へ手を出した。

『阿呆よ、なんすんな！』

『どら〳〵！』と云つておさきは土間の勇の方へ手を出して手盥の湯の中へ手を入れた。
『阿呆よ！悪いことしよつたら怒つてうどまされるぞ！』勇はかう云つて戸口の方へ出て行つた。
『うはツ！』おつぎはかう叫んで飛び起きて耳をたゝくやうにした　耳へ湯を入れたおさきはクツ〳〵笑つた。
『があきやア、があきやア！』おつぎはかう云つて、手を振上げて敲きかゝつて行つた。
『イヤ！』と叫んでおさきは客間へ逃げこんだ。おつぎが追かけた。おさきは又他の障子を開けて中の間へ出て爐の傍へ來た。おつぎはすぐ追つて來た。又おさきは逃げた。
『阿呆！男の子のやうに、大けなりしてなんのことな！』と父が怒鳴つた。
『ほひたつておさきが！』とおつぎは爐の傍に立つて泣き聲になつてうつたへた。
『大けなりしてわれ（お前）が惡るいんじや、たぶ寢しとるのつて』と母が又土間から怒鳴つた。
勇は戸口で湯を使ひながら家の中の喧嘩を聞てゐた。

7

勇は冬になつても長野の唐臼場に通ふてゐた。
最初お竹の家で泊つてゐたお馬は、冬になつてからは、蹈物が濟むと三町ほど町の方へ出た自分の家へ歸るやうになつた。勇と虎吉は交替で家に歸るお馬を送つた。
蹈物が濟むと、お馬は蹈んだ米を搗で歸る時と、お竹の家の米を蹈んだ晩はたゞ灯提だけ提げて歸るのであつた。
送り番が勇にあたつてゐる晩であつた。丁度お竹の家の米を蹈んだので提灯だけ提げて歸る晩だつた。

先にたつて、提灯を差出して、勇の足もとに氣使ひながらぼと〳〵步て行くお馬の後について行くと、勇の口には鹽辛い唾がたまつて來た。勇はすぐ前を行くお馬の身體を見てはそのたまつて來る鹽辛い唾を呑みこみ呑みこみした。と、胸がダク〳〵して頭がハチ〳〵し、手足の指尖の血管までがサラ〳〵鳴るやうな氣がした。

ふと、勇は二人がどちらからも口をきかずに默つて一町ほど步たことに氣づいて、何だか氣まずい思がしたので、

『寒むいなア！』と云つて、力を入れて胸で手を組んだ。

『オチ（妾）寒むうない！』お馬はかう云つた。そして又話は切れた。二人は默つて步いた。

廣い村道から曲つて細い川の中の道を通りぬけて、こんもりした、ドス暗い木の下の道にかゝると、勇の胸は一層だく〳〵して、身體中の筋肉のへだが一つ〳〵別の方向へ動くやうな氣がして、息がつまるやうにどん〳〵鹽辛い唾がたまつて來る。その唾をゴト〳〵音をさせて呑んだ。もう十間も行けば『ありがたう、もう結構！』とお馬が云つて、一人で歸つて行つて了ふ處だ、と思ふと身體が挿れて來た。

『寒むいなア！』勇は兩手を開いて、お馬の後から抱きついてから慄へ聲で云つた。

『すな！』と云つて、お馬は避けるため身體を振つたが勇は離さなかつた。そして、お馬の頭へ自分の頭をへつたりつけた。勇の身體はブル〳〵慄へた。

『灯消さうかなア？』少し行くとお馬は立ち止つて小聲で云つた。

『えゝ！』勇はのどの奥ばかりで云つた。そして、口の傍へほつれて來たお馬の髮を舌を出して、舌で口の中へナメこんだ。

お馬は提灯の口に手をかけて、『ホッ！』と灯を消した。

『行かんけ！』お馬は又小聲で云つた。
『……』勇は聲が出なかつた。
『行かんけ！』お馬は又かう云つて歩きだした。勇は、だうかするとお馬の足を踏むので踏まないやうにと氣をつけながらお馬に抱きついたまゝそろ〳〵お馬と一緒に歩た。
お馬はいつも『ありがたう、もう結構』と云ふ處へ來ると立ち止つた。そして、
『ありがたう、もう一人歩ぬ！』と云つた。しかし勇は離さなかつた。
『そんなら行かんけ！』お馬はかう云つて歩きだした。そして、十間ほど行くと又立ち止つて、
『ありがたう、もう結構！』と云つた。勇は一層力を入れてお馬を抱きしめて、頬擦のやうなことをした。
『いやん！』お馬は泣くやうに云つた。勇はふとわれにかえつた。あまりいやがらせをしすぎたやうな氣がしたので、
『もう歩ぬぜ！』と慄へたがら云つてお馬を離した。
『ありがたう！』とお馬は云つた。
勇は嬉しい氣持で、子供のやうに、トビトビして村道へ出た。

8

『虎やん擔でつかさあ！』お馬は蹈んだ米の荷が出來るとかう云つてぼんやり立つてゐる虎吉の脊をたゝいた。
『痛いわ！』虎吉はかう云つて米の入つたふごを擔いだ。
『オヽ！さうやつて歩んだらよう似合は夫婦に、それに子がついて歩いたらなう！』とお竹は云つた。

『ぬかすな！』と云つて虎吉は歩きだした。

『何ぬかすんな、われら（お前等）なんな、よう似合は！』お馬は後を向いてから云つてから提灯を持つて虎吉の後について行つた。

『あゝ！暑い！寒ぶうても仕事したらぬくもるなア！』お竹がかう云つたのでぼんやり立つてゐた勇はわれにかへつてお竹の方へふり向いた。

『あ！あゝゝゝ』お竹は欠をしてからすぐ傍の蹈臺に腰をかけた。勇もそこへ行つて並んだ。そして汗ばんだお竹の腕を握つた。

『お前よう肥とるなア！』勇はやつとこれだけのことを考へ出して云つた。

『何が肥とるぜ！』と云つて、お竹は他の手でお竹の腕を握つた勇の腕を握つた。

『お前もよう肥とるんないけ！』とお竹も云つた。

『虎やんよう肥とるぜ、わしらよりだいぶ太いがなア！』と勇は云つたが頭には、今頃虎吉とお馬は何處らへん行つてゐるかを考へてゐた。——ありがたうもう結構！といつもお馬が云ふあたりを行つてゐるかしら、あのドス暗い處かも知れない、あの擔でゐる米を道に置て、二人が抱き合つてゐるかも知れない、いや？二人はもう家の傍まで行つてゐるかも知れない、俺であつたら『ありがたう、もう結構』と云ふ處でも虎吉であれば默つてゐるかも知れない——と思ふと勇は胸が狭くなつて息苦しくなつて來た。

『おて（妾）お前の肩ぎりかないなア、おなご（女）つちや大けなやうでも男の傍へ行つたら小まいなア！まだお馬さんおてより一寸位い低いんぜ』お竹がこんなことを云つて、勇の肩の上へ手を上げたりしたが、勇はお馬と虎吉のこと

ばかり考へつゞけてゐた。

『もう寢えよう！』勇はじつとしてゐられないやうな氣がして立つた。

『ありがたうよ、又あしたの晩も來てつかよ！』と云つてお竹も立つて勇の傍へ寄つて行つた。勇はそのまゝ歸るのが悪いやうな氣がしてお竹の手を握つた。

『又明日の晩！』と云つて勇は走るやうにして門を出た。廣い村道に出ると勇は町の方へ急いだ。これからお馬の家への道へ曲ると、そろ〳〵歩いた。手で双眼鏡をして、ドス暗い處を見た。誰れもゐさうにないのでどんどん歩いた。お馬が『ありがたう、もう結構、』と云ふ處が近くなると又双眼鏡をして見た。しかし誰も居さうにない、勇はザウーと身の毛のよだつやうな氣がした。同時に寒氣を感じた。――いよ〳〵お馬は俺にはこゝでありがたうを云ふけれど虎公になると家まで送らせるのだなア！――と思ふと、たまらなく息苦しくなつて來た。――二人がどうしてゐるかを見てやらう？――勇はかう思つて、歩きながら時々双眼鏡をした。家が近くなると足音がしないやうにはだしになつた。

門口に人らしいものが見えるので立ち止まつて双眼鏡をして見た。いよ〳〵人らしいが話はしてゐないらしい。――小聲で話してゐるのかも知れない、何かの蔭へしのびよつて傍まで行つて隠れて聞てやらう？――あたりを見たが何にもない。手に持つてゐた草履を懐に入れて、四つ這ひに這ひだした。二三間這ふと頭を上げて双眼鏡をして見た。又一間ほど這ふと頭を上げた。暗い蔭へ向いて這ふた。何か黒いものが見つかつてそこへ這つて行つた。その黒い物は新にすゐ乾いた芝らしかつた。一寸と手を觸れると、ガサと音がした。なるべくその芝には觸れないやうにして、そこから聞かうと思つて耳を澄した。話はしてゐないらしい、何にも聞えない、たゞ家の方で馬がコト〳〵何か桶の中に入つてゐる物を食ふやうな音をさせてゐた。勇は黒い中から頭を出して双眼鏡をして見た。いよ〳〵人らしい、何か話をしさう

なものだと思つて叉耳を澄した。自分の息が邪魔になるやうな氣がした。何か話してゐるやうだがはつきりしない、叉双眼鏡をした。確かに虎吉が捨て來たふごらしい物もある。そのすぐ傍に人らしい黒い物がある。二人は何かに腰をかけてゐるらしいかつた。――俺も行つてやらうか？――と勇は思つた。――待てよ、俺が今行つたら叉明日の晩俺が送つて來る時、俺のやうに虎公がつけて來るかもしれない、俺もあゝしてこゝまで送つて來てやらう？今行つてもよいがさうしては明日の晩がぜろになつて了ふ、もうこのまゝ歸つてやらう？――勇は這ひ出した。十間位這ふともう立つて草履を穿いた。そしてぼと／＼歩き出した。しかしこのまゝ歸るのが何だか物たりない氣がした。――虎公は俺が送る番の時でも、俺があの――ありがたうもう結構――とお馬が云つて歸つて了つた後で、どこかに隱れて居てそこから出て來て、いつもあゝしてゐるのかも知れない、俺はいつでも氣弱いんだ、いくらお馬が『もうありがたう……』と云つたつてあそこから歸ることはないんだ、無理に家まで行くんだ、あまり無理をしちやいけない、と思ふなど氣弱いんだ、明日の晩はいくらお馬が何んと云つたつてお馬が家へ這入つて寢るまで見とゞけてやる、無理に泊りこんでやつてもよい――勇はこんなことを考へながらぼと／＼歩いた。

9

椿の花が咲きだした。

勇と虎吉はやはり長野の唐臼場に通ふてゐた。

勇はお正月が近くなつた頃から頭は前長にしてゐた。そして、それに香油をぬつて左わけにしてゐた。

勇は父母達の手前を思つて、いくら疲れてゐても歸るとすぐ藁を打つて草履を二足作ることはやめなかつた。何が何

んでも二足作つてから飯を食つて湯を使ひ、頭に香油をぬつて家を出るのであつた。

その夜勇が庵へ行くと、虎吉と友吉と尼と三人が爐を圍んでゐた。

勇が爐の傍へ行つて坐ると、友吉はジロ〳〵勇の顏を見た。そして、にた〳〵笑ひながら

『オヽ！若衆は違ふなう、頭見い、光りよるなう！』と云つた。

勇は赤い顏をして恥かしさうに俯向いた。

『かんまんもんでなア、よう垢が落ちて來たぞなア！』すぐ傍にゐた尼も勇の顏を見て笑ひながら云つた。

『又今夜も行くんか、毎晩かよしたことがねいんじやつんないか？』と友吉が云つた、

『フフ：フフ：：』と虎吉は笑つた。

『虎公は椿の下、勇さんは何處な？』と友吉は笑ひながら云つた。

勇は胸を刺されたやうな氣がしてそつと虎吉の方を見た。虎吉はニコ〳〵笑ひながら、胡坐してゐる友吉の膝をこついた。勇はそれを見るとすぐ俯向いて了つた。――さうか？あの椿の下でか？――と勇は考へた。お馬の家の西側に大きな椿がある。――あの椿の下でお馬と虎公の戀人があつたのかも知れない、友やんが今そのことを云つてゐるのかも知れない？俺がお馬を送つて行つた夜でも虎公はこつそり後からついて來てどこかに隱れてゐて、俺とお馬とが別れて歸つたら其後へ出て來てあの椿の下へお馬を引出して？：：しかし嘘だらう、友やんが見たじやなし、虎公だつてそんなことしやべりさうもない、いかげんのこと云つてひやかしてゐるのだらう？――勇はかう考へた。嘘だと思つても何だか本當らしく思へて、胸がだく〳〵踊り、息はつまつて來た。

『お前ら又、二人が一人の女をまわりに送つたりせずに、お馬さんは虎さんにまかせて、勇さんはお竹さんにすりやえ』

のに！』尼は笑ひながら云つた。

『そりや尼さん、ちやんとお馬さんは虎公がもの﹅に﹅しとるんぜ！』と友吉が云ふと、虎吉は又友吉の眼をこついた。

『二人がなかま（共有）じやないのかへ？』尼は又二人の顔を見くらべるやうに見て、笑ひながら云つた。

『なかまであつたつて何であつたつてかもたか、行くか勇さん？』と云つて虎吉は立つた。

勇はこゝでかうしてこんな話を聞くのがいやであつた。あんな話を聞かされておめ／＼虎吉について行くと云ふのも何だかいやな氣がするし、と云つて、こゝで『いや』と云つては何だか二人に今の自分の心を見ぬかれるやうな氣がした。そして、このまゝ顔を上げては顔に出てゐる心の様がすぐ二人の眼に入るやうな氣もした。勇は故意に笑顔を作つて立つた。

『オヽ！又一緒か、勇さんちよつと氣をきかしてやれよ、』

勇が土間に下りようとすると友吉はかう云つた。

戸外に出ると又いつものやうに虎吉が勇に抱きついて行つた。

勇はいつものやうによい氣になつてゐるわけには行かなかつた。避けようとして跳たが虎吉はなか／＼離さない。勇は足の後筋（うしろすぢ）を蹴られたりして、細い道を下りて廣い村道に出た。

『俺なう！』廣い道に出ると虎吉は小聲になつて云つた。

『今朝肥取に行つとつてお馬さんのお母に逢つたらなう、『晩に遊びにおいでよ！』つて云ふんぞ！』と虎吉は云つた。

『……』勇は默つてゐた、口にたまつて來る唾が呑んでも呑んでも咽喉に殘るやうな氣がして、胸が狹くなつて來た。

『俺困つたがなう！』虎吉はかう云つて少し間を置て、

『俺困つたがなう、お馬さんに子を姙ませてなう！』と云つた。

勇は默つて考へた。――嘘だらう？俺が行かないやうにこんなこと云ふのだらう？……しかし本當かも知れない、お馬をとられて了つた！――と思つてはすぐ『嘘だらう？』と疑つた。

『子を姙んだらだうしても嫁にせにやならんし、嫁にする云ふたつてまだ徴兵檢査も濟まんのになう！』と虎吉が云つたが勇は『ふん』ととらなかつた。

『俺の家の親父にお前が話して呉れるか？』と虎吉が云つたが勇は默つてゐた。

『お前が久本の小父さんに賴んで呉れたらえゝけんど、久本の小父さんと俺の親父とは朋輩じやのつて、あの小父さんが云ふことなら俺の親父も聞き入れるだらうと思ふんじや、もう子まで姙ませたら否でもなんでも嫁にせにやなう！』と虎吉は云つた。

――いよ／＼本當らしい――かう思ふと勇はすつかり氣ぬけがしたやうになつて、ホツとした。自分の身體の中の物がなくなつてからつぽになつて了つたやうな氣がした。

何だかかうして虎吉に抱かれて歩くことが馬鹿らしいやうな氣がして來た。

『はなせ！はなせ！足踏んで痛いは！』勇はかう云つて左右の肩を越して來て、胸の上で組んでゐる虎吉の手をはねのけた。

『誰にも云ふなよ、此間お竹さんや北のお常さんが『椿の下』つて云つて困つた、云ふてお馬さんが泣て困つたんじや、俺お前じやのつて云ふんじや、誰にもこのこと云ふなよ！』と虎吉は云つた。

勇は死んだ人のやうになつて歩てゐたが又かうして一緒に歩くのがいやになつて來たので村道から長野へ曲る處を曲

らずに町の方へ向いて歩いた。

『行かんか勇さん！』虎吉は立ち止つて云つた。

『……』勇は默つて歩いた。

『行かんか？』虎吉は又云つた。勇はそ知らぬ風ですたく町の方へ歩た。勇は歩きながらも考へた。――本當か知ら？……子を姙んだ、晩に遊びにおいで、本當かしら、お馬のお母さんが云つたか知ら？お馬が子を姙んだからそのことを虎公に話す心算か知ら、お馬は子を姙んだことを父母達に話したか知ら？全部嘘だらう、俺を欺したのに違ひない、行つてやらう？勇は引きかへした。が又馬鹿らしい氣がする。秋からほとんど毎晩といふ位長野の牀臼場へ通ふた。そして、お了ひには馬鹿にされて了つて……本當か知ら、本當だつたら虎公はお馬が歸る時俺には送らせはしないだらう、俺が送つて行く番になつて、俺がお馬と一緒に行つても平氣で後に殘つてゐた。……あれが惡るいんだ、虎公はお前さきに行つて早く歸つて來い、後は俺だ。と云ふ氣でゐたのだらう。俺だつて虎公とお馬が一緒に行くのを見て平氣でゐられない、それに平氣にかまへてゐると云ふ處が臭かつたのだ、それを知らずにゐた俺が馬鹿だ。馬鹿にされてよい氣でゐたんだ。と、いつの間にか長野の前に來てゐた。――行つてやらうか、このまま歸らうか？――勇はそこに立つて考へた。

トンく米を踏む音がしてゐた。大きな聲でお竹がうたひだした。

――行つてやらう――勇は村道を右に曲つた。默つて隱れて行つて話してゐることを聞てやらう――勇は門を這入ると暗い納屋の陰へ行つた。納屋の軒を通つて馬屋の口へ行くと、

『フウフ……フウフ』と馬が鳴いて、足でコリコリ土をかくやうな音がした。

勇はしばらく立つてゐたがいつまでもかうして隱れてゐたくはなかつた。ポカツ、と納屋の軒から出て唐臼場の横に立つた。

『あら！誰ぜ？勇さんけ？』とお馬が云つた。

『……』勇は故意に默つてゐた。

『吃驚した、手傳つてつかさア！』又お竹が云つた。

『……』勇は默つてゐるのが氣持よかつた。踏物が濟むまでかうして默つてゐてもよいと云ふ氣がした。

『踏まんかまア勇さんよ、』虎吉もすゝめた。

『手傳つてつかさア！』とお竹は云つた。

『……………』

勇はこのまゝ默つて歸つて了ふ方がよい、と云ふ氣がしだした。――エ、イ！歸る――勇はかう心で呟て、ほと〳〵そこを去つた。

10

勇には、虎吉の云つたことがだうも嘘らしくもあり、又本當だとも考へられた、

――だうしよう？――と勇は考へた。何かしたいやうな氣がした。お馬や虎吉に、『惡かつた。』とでも云はせたい氣がした。――あてつけに今日からもう長野の米踏場へ行くのを止してやらう、そしたらお馬や虎吉の心にあたるだらう、おれ等が『勇さんはなぜ來ないのだらう？』と思つたゞけでもよい――と思つたが、又それだけでは何だか小さすぎる

やうな氣もした。

――しかし虎公の云つたのは本當か知らゝ又晩に行つてやらうかゝ――

――エヽイ！きつぱり止さう、なんだあんたくされ女にノロケこんで、他人に聞かせたら恥かしいことだ。――勇はから自分を怒りつけた。

――しかし、嘘かも知れない、虎公の云ふやうなことはない筈じや、虎公のものになりきつたお馬なら、虎公はあんなに平氣で俺に逢はせよう筈がない、第一お馬の母が『晩に泊りにおいでよ！』なんて云ふやうな人じやない、嘘だ、嘘のこつちようだ、俺を欺すんだ、よし！こりずに行つてやらうゝ――夕方になつて勇は又こんなに考へた。そして、だうにもかうにも長野の唐臼場へ行かずにはゐられないやうな氣持になつて來た。

勇は仕事が濟んで歸つたが草履を作る氣はしなかつた。大急ぎで湯を使ひ飯を食つて頭に香油をこてゝぬつて家を出た。――虎吉よりさき行つてやる――と云ふ氣であつた。氣がソワ〳〵して落ちついては歩けなかつた。小走りでまづ庭へ行つた。そして、すぐには這入らず足音を殺して、虎吉は來ていないかと戸外に立つて中の様子を聞た。

『ニヤア！』と猫がないた。

『タマ（猫の名）よ、お前そんなに魚を食べたがつたつてこの頃魚はないんじや、干物（鹽物の魚）をやれば吐く癖に、そら、このいりこでも食へ！』尼が猫にかう云つた。其外には誰の聲もしないので、勇はすぐ引きかへして村道へ出て、長野の唐臼場へ急いだ。

虎吉は來てゐないか、と又長野の門口に立つて聞てみた。まだ米に踏んでゐない、何かグジヤ〳〵話してゐるが誰か來てゐるのかはつきりわからない。やがて、トン〳〵踏物を始めた。月で明るいので勇は身體を小さくかゞめて唐臼場

へしのんで行つた。踏んでゐるのはお竹とお馬とであつた。しかし、嬉しくはなかつた。今晩は——と云ひたくなかた。默つて、唐臼場へ二間位の處へ行つて立つてゐた。

『誰ぜ？勇さんけ？』お馬が見つけて云つた。

『……』勇は默つてゐた。

『今晩虎さん來んのけ？』とお竹が云つた。

『知らん！』勇は故意にぶつきら棒に云つた。

『虎さんが來んとお馬さんが怒つてしよがないんぜ！』とお竹が笑ひながら云つた。お馬は手を延ばしてお竹の腕をつめつた。

『ア、、もう云ゝへん、こらえてつか！』とお竹は云つた。そして少しすると又、

『虎さんとなう！』と云つてお馬をなぶつた。

『いツ、石さんになう、ほ、ほ、さうかまア、惚れとんぞ！』とお馬が云ふとお竹は平手でパン〳〵お馬の脊をたゝいた。

『あゝ！もう云はん、もう云はん、仲よしにしよう』とお馬は云つた。

立つて見てゐた勇はたまらなく淋びしくなつて來た。

——お馬はいよ〳〵虎公のものになつてゐる、お竹の奴石吉に惚れやがつてゐる、——勇は立つたまゝグツと力を入れて胸の上で手を組んだ。他に好きな男のあることを知らずに毎晩かゝさず通ふた自分の馬鹿らしさと、二人に馬鹿にされた自分を思ふと腹だたしくなつて來て立つたまゝ動けなかつた。

『手傳つてつかさアー！』お竹はかう云つた。

『……………』勇は默つて歸りかけた。

『勇さん、お前が去んだらお竹さんが泣くぜ、早よう來て手傳つてつかさア！』とお馬が云つた。

『お馬さんが泣きよるぜ、早よう來いさア！』

と又お竹が云つた。

『何ぬかす、馬鹿！そんな女奴いらないわい！』勇は心でかう叫んで後ふりむきもしなかつた。

勇が長野の門を出て村道の方へ曲つた時、お竹とお馬とが笑つたのが聞えた。勇の頭の中の血は、サツといふ勢で一時に足の下へ下つて了つたやうに思つた。

勇は血のなくなつて痺れたやうな頭の中で『なアに！あんな女、なアに！あんな女！』と屡々云つた。

勇は家に歸つた。家は灯がついてゐた。母が一人爐の傍の洋燈の下で縫ひ物をしてゐた。

勇は默つて母の傍を通り、自分の寢間へ行つて寢た。そして『なアにあんな女、なアにあんな女！』と心の中で呟て少しでも早く忘れるやうに、學校で習つた、勇の一番好きだつた春風の歌を小聲でうたつた。

……………春風清く

わたれる枝に……………

『もう夜遊びには行かない』と勇は心で云つた。

仕事から歸ると湯も使はずに寢間に這入つた。寢床へ這入ると頭から布團を冠つた。——もう何にも考へないやうにしよう——かう思つて眼を閉ぢた。少しすると息苦しくなつて來た。呼吸の調子がとれないやうになつて、吸時に吐いて、吐く時に吸ふやうになるらしく苦るしくなつて來た。自分では吐かうと思つてゐるのに吸ふたり、吸はふと思つてゐるのに吐くやうになると思つた。苦しくなつて來たので布團から頭を出した。仰向になつて大きく吸つてみた。又吐てみた。同じだつた。やがて又息苦しくなつて來た。

『ハア／＼』と小さく吐くばかりの息をしてみた。『エヘン／＼』と咳拂ひをしてみた。しかしやはり息苦しい。起きて寢間から出た。土間で草履を作つてゐる父の前を通つて戶外に出た。

………春風滿く

………漫れる枝に……

勇はうたひながら門口へ出た。そして、暗い防風木の下に立つて呼吸運動見たいなことをした。それから枯草の中を通つて川堤の柿の木の下へ行つて、そこの草の中に寢ころんだ。そして、葉のない柿の枝の間からチロチロする星を見て、又春風のうたをうたつた。やがて起きて廣い道に出て、行つたり來たりした。それから家に歸つて又寢床に這入つた。又息苦しくなつて來た。——眠たらよいだらう眠てやらう——勇は眠れないとよくやる、一つ二つを數へだした。しかし駄目だつた。——たとひお馬が虎公のものになつてゐても知らなかつたら氣持よく、喜んで長野の唐円場へ行つてゐたに違ひない、知らなかつたらよかつた。何故知らうとしたのだらう、しかし知らずに長野の唐円場へ通ふと云ふのも虎公やお馬の方から見たら悲慘なものだらう？それじやだうしたらよかつたのだらう、……なに！お馬がだうあつたつて、お竹がだうあつたつてそれは何でもないことだ、爪の垢ほどにも俺にはかゝわりのないことだ、馬鹿なことを考

へた／＼でも早く眠ることだ！　又一つ溜息をした。長野の唐円場が浮んで来た。——だうして此様に女がほしいのだらう、よほど俺は女好きだ、女がなくては生きてゐられない人間になるだらう？あの村長さんなどあれだけの財産を持つてゐて、あれだけ偉くてなぜ嬶を持たないのだらう、女がきらひなのか知ら？……あの人は酒をよく呑むと云ふ、女のかわりに酒を呑んでゐるのかも知れない、俺も酒を呑んでやらうか？…しかし俺は酒を呑んで女のかわりになりさうにない、やはり女がなくてはやりきれない、俺は女で失敗する人間だ。村長さんはなぜあゝして女のかわりに酒を呑んで辛抱が出来るのだらう？……勇は四十位でまだ獨身でゐる村長さんのことを考へた。——馬鹿なこと考へなくても眠らう——勇は頭から布團を冠つた。そしてすべてのことを忘れるために、眠らう眠らうと呟た。そして又一つ二つと數へた。長野の唐円場のことは考へまい、と思ふと見られない物は見たいやうに、長野の唐円場が出よう出ようとする。——俺のやうな女好が此世間に五人も六人もあるだらうか、俺の頭に女のことを考へなかつたら他に何にも考へることはない、今までお馬のことを思つて仕事の疲れも感じなかつた。又精出して仕事もした。明日からはだうしよう、何を思つて仕事をする、何を樂しみにして働く。お馬に捨てられたら又他の女を戀しなくちや生きてゐられない——又息がつまつて來た。今晩こそ今から行つて、いよ／＼虎公の云つたことは本當か嘘かをたしかめてやらう？——

勇はかう思つて起きた。

もう家の者は皆寝てゐた。暗い爐の間を這ふて、土間へ下りて足で草履を探した。

家を出ると勇は走つた。道すじの百姓家は全部寝てゐた。爬も寝てゐた。勇は寝てゐる暗い爬を下の村道から見て、又すぐ走つた。長野の前で又立とまつた。長野ももう寝てゐた。勇は又走つた。そして村道からお馬の家への細い道にはゐるとぼと／＼歩いた。どす暗い木の下の道を通つてお馬の家が見えるやうになると、双眼鏡をして歩た。しかし誰

も見えなかつた。勇は門口まで來ると立ちとまつて、うろ〳〵あたりを見廻した。さすがに何だか恐しいやうな氣がした。しかし、ナニーと云ふ氣になつて、すた〳〵行つて戸に耳をつけた。そして、小聲で、

『お馬さん、お馬さん！』と云つてみた。勇はお馬が何處に寢てゐるかは知らなかつた。又少し西へよつて寢息でも聞えさうなものだと思つて戸に耳をつけた。トントントンと輕く三つ戸をたゝいた。そして、『お馬さん、お馬さん！』と呼んでみた。又駄目だつた。勇は西のいらかの方へ行つた。すると人聲がしだした。ぶす〳〵話すやうなのが聞えた。勇の胸は高く動悸がうちだした。――虎公とお馬に相違ない――と思つてそこの壁にぺつたり身體をつけて耳をすました。聲が次第に近くなつて來て、足音が聞えて來た。案のじようお馬と虎吉は奥の方の小さい小屋のやうなもののある方から出て來る處だつた。勇は彼等に知られるため、つかつかと二三歩あるいた。二人は立ち止つた。

『誰ぜ？』と怖しさうな聲で云つて、お馬が寄つて來て勇の顔を覗くやうにした。

『勇さんけ！吃驚したえまア！』と小聲で云ふと、二三間離れて立つてゐた虎吉も寄つて來た。

『勇さんか！』虎吉もかう云つた。

『…………』勇は默つてゐた。

勇は息苦しくなつて來た。ドグンと深いおとし穴へでもは入つたやうな氣がした。逃げるやうに走つた。そして村道へ出ると、大きな聲で春風のうたをうたつてぼと〳〵歩いた。

12

勇はやはり、重い頭をもてあましてゐた。馬鹿になつたらどれだけ嬉しいだらう？と思つたり子供のやうな氣持にな

ちろ、とも思つたりした。

もうこれから人に逢つても物を云はぬやうにしよう、と思つた。

肥取に行つて人に逢ふとすぐ顏を反向た。それでも向ふから『今日は！』と云ふ。しかし勇は我慢して默つてゐた。又人に逢ふ、今度は俯向て顏を見られないやうにする。其人はいぢ惡く顏を覗くやうに思つた。次には頬冠をした。頬冠をすると隱れることが出來たやうな氣がした。しかしやはり逢ふ人は『今日は！』と云つた。――ナニ！故意に云はないんだ、お前達がいくら云つたつて俺は怒つてゐるんだぞ――と『今日は』を云ふかわりに心で云つた。

いつも肥取に行く家へ行つても肥は取つたが默つてゐた。しかし、これも何荷も何荷も運んでゐるうちに――馬鹿らしい――と云ふ氣がして來た。いくら世間の人に物を云はなかつたつてそれはなんでもないことだ俺とお馬とのことは知らうはずがないんだ――と思つた。しかし、それでは何だか物たりない氣がした。世間の人をうんと困らせてやるかい、とつぴなことして世間の人を驚かせてやるかしたら氣持よくなつて頭が輕くなるだらうと思つた。――何か耻さらしをして世間の人に嘲笑れてやらうか、とつぴに快活な面白い人間になつてやらうか、怒りつぽい人間になつてやらうか、この暗い氣持を晴らすには怒りつぽい人間になる方がよいだらう、なんでもかんでも怒鳴つて怒鳴つて怒鳴ちらす人間になつてやらうか、それより泣て泣て泣き死ぬまで泣いてやらうか？……それも無駄だ、怒つたつて泣たつて何にもならない、どうすれば一番よいか知ら？――

『今日は』女の人がかう云つた。

『……』勇は默つてぼと／＼歩いた。

――仕事もせずに十日でも二十日でも寢てばつかりゐてやらうか、――

勇は非常に身體が疲れて來たのをおぼえた。この月になつて今日が一番暖かい、と思つて仰向て太陽を見た。目映い眼をチャク／＼させて——今日はいつもより二時間餘り遲いわい——と呟た。一時間位前までは腹が空つてゐたが今はもう空腹を感じなくなつてゐた。肥料場へ肥桶や棒を置て、何も持たずに疲れた足を運んだ。

家は戸口だけ雨戸が締つてゐた。いつもだつたら中の間と云つてゐる間の障子の中頃へ庇の蔭が行つてゐる時に正午飯であつたが、勇が家に歸つた時は、庇の蔭はもう雨垂落まで來てゐた。——山へ行つたんだなア——と勇は思つた。身體が疲れてゐるためか色色の物が、今まで見なかつた物のやうに眼に入つて來た。丁度母屋と向きあつてゐる馬屋では、背の低い栗毛の馬が『フフフ！』と云つて前足で、ゴリ／＼中の藁をかきよせるやうにした。馬は何か呉れないか、と云つたのであつたが、勇は見ただけで藁を入れてやらうともしなかつた。左手の納屋の入口に木臼が置いてあつて其上に積み重ねた色々の物までが珍らしいもののやうに眼に入つて來た。

戸口の名札の三十三番屋敷農上田彥吉と書てあるのを讀んで、戸口の右手にある小便處へ小便をした。それからもう一度名札を讀んだ。勇が十一か二の時、すぐ家の裏の、春さんと云ふ友達の家へ遊びに行つた時、春さんが『爺さん上田の名札に農と書いてあるのにうちのだうして農と書いてないん？』と云つて訊くと、『あしこが本當の百姓でうちは小作じや、農でないんじや！』と春さんの爺さんが云つたことを思ひ出して、今は大阪へ行つて洋紙商をしてゐる春さんのことを思ひながらすゝけた戸口の障子を開けた。

家の中は暗かつた。

壁の破け目から、擂棒ぐらいの太さの光線がさしこんでゐた。その光線の中で銀の粉のやうな小さい塵が一杯踊つてゐた。

暗くて何にも見えないので土間をぬけて往つて半間だけ開いて戸が一枚入つてゐる表口を閉けた。すると、爐の上は明るくなつた。天井から爐の上へ垂れてゐる大きな、竹と木で拵へた自在にかゝつてゐる茶釜は、ペッタリ爐の中におろしてあつた。

勇は飯も食ひたくないので、土間から爐の間の上りたてへ腰をかけて、何を見るともなく、おつと眼をすえて爐の方を見つめてゐた。すると、大きな聲を出して泣きたいやうな氣がして來た。泣て泣て咽喉が裂けるだけ泣いたら氣持がよくなつて心が明るくなるだらう、と思つた。しかしだうしても泣けなかつた。

13

お馬に逢つても虎吉に逢つても物を云ふまい——と勇は思つてゐたが駄目だつた。しかし、先方から、『寒むいなア！』と云つても『寒むいなア』と云ひ、先方なら話して來ても、『フウフウ……』と云ふだけで勇の方から話かけはしなかつた。それが勇には非常に氣持よかつた。その時だけでも——やつつけてやつた——と云ふ氣がするのであつた。しかしその後が又非常に淋びしいのであつた。

子供と一緒に遊んで、子供の氣持になつてやらう、と勇は思つた。そして、このうつな氣持からのがれて快活な氣持にならう、と考へた。ひようきんな人間になつてもよいと考へた。

休日には子供の遊んでゐる處へ行つて、子供と一緒に遊ぶことにした。

勇が子供と遊んでゐる處を大人が見て、

『オヽ！勇さんみい！子供になつたんじやなう！』と云ふと嬉しいと云ふまでゞはなかつたが氣持よかつた。

『いイ公よ！』と云つて子供が呼ぶと、

『ウオイ！』と云つて故意にどんぎり聲を出して返事をした。そして、子供がよく云ふやうに、

『泣かすぞ！』と云つた。

肥取に行つて、人糞の一杯入つた肥桶を擔でゐても子供が『いイ公よ！』と呼ぶと、『ウオイ！』と大きな聲で云つた。

『いイ公の阿呆よ！』と子供が云つて逃げると、

『泣かすぞ！』と云つて肥桶を擔だまゝ追つかけたりした。そして、子供の傍へ行くとすぐ其子供の頬をつめつた。すると子供は、

『ひねくり（つめる）まめよ、いイ公！の阿呆よ！』と云つて逃げた。又あくる日でもその子に逢ふと、だまし手にその子の頬をつめつた。

小さい、チョコ〳〵歩きしてゐるような子供を、

『泣かすぞ！』と云つて睨みつけて泣かして了つたりした。子供と云ふ子供は皆、勇を見ると、『いイ公が來よる』と云つて逃げるやうになつた。そして、逃げてから、

『いイ公の阿呆よ、ひねくりまめよ！』と大きな聲を張り上げて云つた。すると勇は、

『ウオイ！泣かすぞ！』と云つた。

『阿呆が、そんなに大人なぶりするもんがあるか！』子供が云つてるのを大人が聞くとから云つてゐた。

『勇さんよ、すなよ、ひねくるなよ！』勇が肥桶を擔で歸つてゐると、子供が一人笑ひながら勇の傍へ寄つて來た。

『今日學校は休みじや、いね〳〵！』と勇は云つて、持てゐる肥桶と身體とで通せんぼうをした。

『阿呆よ！すな〳〵後れるんじや！』と云つてその子供は身體を振つて、泣くやうに顔をしかめた。

『ほりや！ほりやあ！』と云つて勇は今にもその子供に肥桶をつきあてるやうにかまへて、故意にちよつと道を開けた。

と、其子はすぐその開た處から逃げ出した。

『阿呆よ、いイ公のひねくりまめ！』と云ひながら其子は走つた。

『おどれ！泣かすぞ！』と勇は又云つた。

『いイ公の阿呆よ、阿呆のひねくりまめよ！』と子供は勇の方へ向ひて大きな聲を張り上げて叫んだ。

勇が庇の下へ來た時、小さい女の子をつれた友吉の母が出て來た。その小さい女の子は勇を見ると、きり〳〵母の周圍をまわつて泣た。

『だうしたんな、淸水のハイカラ？』と勇はそれを見て云つた。

『まア！をかしいつてなア、いイ公が來よるのつて怖しいつて云つて泣くんよ、この小まい子までがいイ公つてなア、こら、こら、おしげ、上田の兄さんでないか、何が怖けりや！』と友吉の母はその小供を見て云つた。

『こら、淸水のハイカラ、泣かすぞ！』と勇が云ふとその子は母の前かけに顔を押あてゝ泣た。

『嘘じや、泣かすかなア！』母は子の頭を片手で撫でながら笑つて云つた。勇は笑ひながらほと〳〵歩た。

山鼻をまわると、道は二つになつてゐる、廣い道は山ぺりを通り、その道から少し下りると、細い田圃道になつてゐる。勇は田圃道の方へ下りた。そして、田圃道をほと〳〵肥溜場の方へのぼつてゐると、山岸の道から、

『いイ公よ！』と子供が呼んだ。

『ウオイ!』と勇は答た。
『阿呆の、いイ公のひねくりまめよ!』又かう云つた。
『ウオイ!泣かすぞ!』と勇は云つた。そしてぼと〱奥へのぼつた。

勇はその日三番草時の稲に石灰の肥料をやることを、父から云ひつけられてゐた。石灰を田に振るのは、朝露があるうちにやると、葉についてゐる露と石灰とで足を擦つて、火傷のやうになつて腐るので、八時か九時頃になつて、露がなくなつてから振るのである。

八時頃になつて勇は、いつも石灰を振る時だけに着る、一番古るい仕事着物一枚で、股引も穿かずに、石灰入の桶を二つ擔で家を出た。

夏の太陽はがん〱てりつけてゐた。道端の草は黒くひなびたやうになつてゐた。道にてつた光線は、處々とつ〱と出た小さい石にあたつてハチ反つてゐた。青田の稲の葉をなびかせて送つて來る涼しい風の後へはまだ沸てゐない湯のやうな、なまぬるい空氣を送つて來た。

勇は眼前にうじよ〱してゐる光線が眼にくひ入つて來るので、細い眼をしてぼと〱歩いてゐた。

『勇さん!』と云つたので勇は後へふり向いた。

『暑いなア!』と云つてお松は笑ひながら勇の顔を見た。

『暑いなア!』と勇も笑ひながら云つた。

『働いてないけ、暑いのに！』とお松は云つた。

『えゝ！』と云つて勇は默つて了つた。

お松は勇より四つ年上で、勇の家から三軒目奥の百姓の娘であつた。お松は三年ほど前に隣村の百姓家へ嫁入して子が出來ずにゐたが、ふと夫が他に女をこしらへてたうとう離縁されて、一ケ月ほど前に歸つたのである。——あのお松さんも淋びしいだらう、俺のやうに淋びしいだらう——とお松が歸つたといふことを聞くとすぐから考へたりした。夜眠れないと云つて夜中頃に、子供のやうに泣き出すことがある、とお松の母から聞たと云つて、勇の母が話してゐたのを聞て、勇は非常に同情してゐた。——道で逢つたら抱きついて一緒に泣てやるのに——と思つたりしたことがあつたこんなことがあつた勇は恥かしい氣がして、胸がだくだくした。

『百姓もこんな若い時でも働かんならんといやになるなア！』とお松は云つた。

『何處ぞへ行つたらなア、遍路でも百姓よりましじやなア！』勇のかう云つた聲は慄へた。

『勇さんらもう何處へも行けんは、早よう嫁さんもろてお父さんにならんならんなア！』

『俺やつて行かうと思や何處へでも行けるげ！』

『二人が大阪へ行くけ！』とお松は云つた。

『行くけ……』勇はやつとかうだけ云へた。まだ續けて云ひたかつたがのどで喉にひつかゝつて出なかつた。

『嘘じや、そんなことしよつたら、お松の奴が勇を引き出したつて云ふて、勇さんの父さんや母さんからしかられて駄目じや！』とお松は云つた。

『……』勇は何か云ひたかつたが何と云つたらよいか考へがつかなかつた。

『勇さんこれからお化粧じゃなア！』

『お前にも白粉つけてあげよけ？』と云つて勇は後へ振向て、石灰がついて白くなつてゐる桶の中へ手を入れた。

『きたない、すなつちや！』笑ひながらお松は云つて後ずさりした。勇は笑はふと思つたが笑へなかつた。左右の頬がビリ〳〵と慄えたのを覺たのですぐ向きかへて歩きだした。勇は默つてゐるのが何だか不體裁な氣がするので何か云はふと思つたが慄へ聲になりさうなので止した。

『勇さんら若いのつてえゝけんど、おてら年とつてあかんがなア、大阪へ行つたつて相手にして吳れんえ！』とお松は云つた。

――一緒に行くけ？二人が！――とのどまで出て來たが勇は聲が出なかつた。

『いにしな（歸）に一緒にいなんけなア、早かつたらまつてつかよ！』お松は川堤から右手へ下りる處へ來るとかう云つた。

『えゝ、待つとるぜ！』勇はかう云つたが聲が慄えた。お松は右の方へ下りて行つた。

――大阪へ一緒に行かんけ！と云つた。一緒に行く約束をしたらよかつた、白粉つけてあげる、と云つて手を握つてやつたらよかつた。俺が子供らしいのでお松さんは何を云つても張合がなかつたどらう、――勇はこんなことを考へながら川堤から下りて田の畦へ行つた。

勇は田の畦に積んである石灰の俵の口を開けて桶にうつした。石灰の粉は煙のやうに渦まいた。勇は後ずさりして煙を避けた。

『シッシッ〳〵〳〵』風が吹て來て鼻へ入つて來る石灰の煙のやうな粉を吹き返して、その煙の消えるのを待つた。煙

おなくなると、桶のひもを首にかけて、ちようど小さい子供が襷をかけたやうにして田に這入つた。稲の間に[illegible]つて投げると、パツ、パツ、と投げだまが破裂するやうに白い粉が煙のやうに開いて飛ぶ。五握くらゐ投げると後ずさりして、飛んで來る石灰の粉を避ける。石灰の粉が飛んで了つてなくなると又投げる。桶の石灰がなくなると、畦へ出て石灰の俵から桶にうつして來る。

何同も何同も繰返してやつてゐると、もうさきやつた方には、石灰に醉つた鮒が、ポチヤ〱水をならして跳てゐた。死にかゝつた鮒は、畦の足の水のない處へ頭を上げて最後の泡を吹いてゐる。鳥がそれを知つて、勇の頭の上を、がア〱鳴きながら、あつちこつちと飛びまわる。そして、鮒を掴んで飛んで逃げる。

勇がその田を濟ませて次に振る田の畦を歩てゐると學校の子供は歸りかけた。

「ウオイ！」と勇が呼ぶと、寺の下を通つてゐる三人連の子供は立ち止つた。

「大けな鰻じや、この位あるは來い〱！」と云つて、勇は兩手をあげて、兩手の拇指と人指指とを合せて鰻の胴をしめした。子供達は勇の方へ田の畦づたひで走つて來た。

「嘘んないけ、嘘んないけ！」一番さきに來た子は疑ひ深さうな眼つきで勇の顏を覗て云つた。

「こんなんじや、こんなんじや、」勇は又かう云つて兩手で形をして見せた。

「どこぜ？どこぜ？」後の二人も來た。

「どら？」眼をキロ〱させて田の中を見た。

「こら、こゝじや」勇が指さすと頭をならべて田の中を覗いた。

「嘘んなえ！」

『こら、こらこれが見えんか！』勇はそこに死んでゐる箸のやうな鰻の子を指さして云つた。
『ウエエイ、損やつたせこいのに走つて！』
『わかつとんじや』
『ウエエイ、いゝ公の阿呆！』一人の子は逃げる身がまへをして云つた。
『こら、わこら（お前等）この鮒やるは、持つて去んで食え、これうまいんぞ！』と勇は云つた。
『そんなもんが食えるけ、どぎたない！』又他の子供が云つた。
『こら、俺らこのまゝ食ふんじやこら！』と云つて勇は畦の足に頭を上げて死んでゐる大きな鮒をつまみ上げて、も一度
『こら！こら！』と云つて大きな口を開いて、口の中へその鮒が觸れないやうに氣をつけて入れた。そしてすぐ出した。
『ウエエイ、嘘んなエ、嘘んなエ！』不思議さうに見てゐた三人の中の一人が云つた。
『この田であつたら鰻がゐるぞ、』勇は持つてゐた鮒を次の田へ投げ捨てゝ云つた。
『居つたら取つといてつかよ！』と一人が云ふと、
『おてもよ、』
『おて（私）もよ』とそろつて云つた。
『をゝ、居つたらとつといてやるのつて、三人がなかま（共有）にせえよ！』勇はかう云つた。三人は田を覗きながら鰻のことを話して奥へ歸つて行つた。勇は石灰を桶にうつして、又次の田へ振る用意をした。

勇はお松に逢つて話をするのお何より嬉しかつた。家にゐて、裏の道を通るお松を見ると他の道から近道をして行つて逢つた。朝、冬青の防風木の際から見て、お松が肥取に行つてゐるのを見つけると勇は他に仕事があつてもそれをやめて肥取に行つた。冬になつて山働をするやうになつて家の前の山へ行つて、その山からお松の家の方をよく見た。そして、お松が見つかると嬉しかつた。もし見つからない日があると淋しかつた。何處へ行つたかしら？と心配した。

正月の七日であつた。夜飯の時母が、

「お松さん八日か九日に大阪へ行くんじやつゐエ」と云つて話した。

「お松さんも折角荷物をじやうに拵へて行つたんのになう、けんどなう、否があれば應がある、つてなう、又何處へでも行けるは、あしこよりえゝ處へ行けるは男がきらう處に居らいでも」と父が云つた。

「大阪へ氣ばらしに行くのだらうぞ、たいがいえゝ辛抱したんじやつけどなア」と母が云つた。

「お松さんの母親が俺にも話して泣たは、お松さんが時々氣違のやうになるんじやつは、爽時の時分にも云ひよつたは、氣が違づたやうになつて、コロを引きまわして遊ぶんじやつは！」

「大阪へ行つたら忘れてあきらめもつくだらうぞ、」と母が云つた。

勇はすぐ寢間へ行つて寢た。折角浮んでゐた心が又沈んで了つた。淋しくなつて來た。

勇は仰向になつて眼をジヤク〳〵させてゐた。

――「大阪へ一緒に行かんけ！」と云つて約束をしたらよかつた。一緒に行つて嘔れたつてよかつた。……大阪へ行か

ずにこちらにゐてくれたら今までのやうに話しするだけでも非常に助かつてゐた。もふお松さんに逢ふ、と思ふ樂はなつた。もうやけだ、二日か三日か寢てゐたる、――勇はあくる日の朝起きて行かなかつた。我も寢てゐた。正午飯に歸つた母がお粥を炊いてくれてそれを食つて又寢た。

『どんなに惡るいんな、惡けら醫者に診てもらへよ！』と父が云つたが默つてゐた。

勇は――お松さんは今日行つたかいの、明日かいの？八日か九日、と云ふ母の話だつた。今日もう行つて了つたか知ら、お松さんが行くのをみ送つてやろか、それより見ないのがよい、明日行くのかも知れない――こんなことを心で繰返した。そして、その夜はまんじりともしなかつた。大きな聲を張上げて泣かうと思つたが泣くことも出來なかつた。

明る朝勇は起きた。顏を洗つたが寢不足の眼はやはり痛かつた。氣が遠くなつたやうな氣がした。

ぼんやり爐の傍で坐つてゐると、

『もう癒つたか？』と母が云つた。

『惡けりや用心せんといかんぞ、少しのうちに癒さな根に入つて來たら困るぞ！』と父も云つた。

『今日道つくりに行く！』と勇は云つた。（道作りと云ふのは毎年正月の九日に、九日正月と云つて仕事休みであるので、村の全部の家から一人づゝ出て、村道を修繕するのである。）

勇は朝飯を食つてから、鍬を一つ擔で家を出た。かうして起きてゐると寢てゐるよりか氣が晴れてよい――と勇は思つた。

『ウオイ！道つくりに出て來いよ！』と勇は大きな聲で呼んだ。勇は呼んでから、皆が集るまでと思つて、村道の日あたりのよい處で日なたぼつこをしてゐた。

ぼつり〳〵人は集まつて来た。

『火を焚んか、』と一人が云ひ出した。それぞれ焚寄せを始めた。勇はすつかり晴れた気持になつて田の方へお礼に行つた。竹片や木片を集せて来て皆は火にあたつた。勇は黙たのふだりして何かやつてみたいやうな気になつて来た。

『オヽしげちやんよ、えゝハイカラになつたなう、俺が勇さんの嫁さんに世話しようか？』杉山と云ふ五十位の人が父の代理に来た。しげといふ十四五の娘の肩に手をかけて云つた。

『知らもん』しげちやんはかう云つて身體を振つて、恥かしさうに俯向た。

『勇さんいやうな人の嫁さんになつたらえゝぞ。俺が世話したには、今こゝで約束せえモア！』と又杉山と云ふ人は云つた

『知らん、知らん』と云つて娘は、肩に載つてゐる杉山の小父さんの手をはねのけた。

『おて（俺）の嫁さんになつて呉れるけ？しげちやん！』と勇は云つた。

『そら〳〵、もうだうなりや、勇さんに、惚れられたもん、おれだうなえ！』又他の人が云つた。

『俺が仲人じや今日約束せえ！』と杉山の小父さんが俯向てゐるしげちやんの顔を覗くやうにして云つた。

しげちやんは默つて了つた。

『返事がないんならお前若い衆にたのんでかたいでもらえ！』と杉山の小父さんは云つた。

『かたごか？』勇は赤い顔をして笑つて云つた。（かたぐ（擔）と云ふのは、あの娘よいと思つたらその男が、あの娘をかたいで呉れ！』と若い衆にたのむのである。すると若い衆は七八人も集つて、その娘が仕事してゐる時でも、夜その娘の家へ忍んで行きでもして、擔ぐやうにしてその娘を盗んで来ると云ふ習慣である。しかしそれは十年も前のことで勇等はやつたこともなし、かついでゐるのを見たこともないのである）

『しげちやんのお母やお父が歸つて來たらお前云ひわけして見れるけ！』と勇は云つた。

『オヽ、引き受けるは！』と杉山の小父さんは默つて俯向てゐるしげちやんを見て云つた。

『どらかたいだろ！』勇がかう云つてしげちやんの方へ行くと、しげちやんは逃げだした。勇は追つかけた。一町ほど逃げると、しげちやんは田の畦へ倒れるやうにしやがんだ。勇が傍へ行くと顏を隱して寢て了つた。

『しげちやん、しげちやん！』勇がしげちやんの脊をたゝいてかう云ふと、しげちやんは泣きだした。泣て了ふと勇は皆の方へ行つた。

『泣いたんか？』と中の一人が云つた。

『泣て了ふた！』にこ〳〵しながら勇は云つた。

『惡い男じやなう、勇さん云ふたらもう子供でも怖がつて、俺家の一番小まい奴やかしは、もう一町も向ふに勇さんが見えても逃げるは、惡い男じや！』と云つて又他の一人が云つた。勇はにこ〳〵してゐた。

『もうやるかへ、正午が來るぜ！』中の一人がかう云ふと皆は鍬を持つた。

『來い！しげちやん！』杉山の小父さんが呼んだがしげちやんはこなかつた。

16

勇は正午飯の茶が沸いてから、いつも自分の坐る方へ中の熾火をかき出した。そしてその上へ焙籠をかけて餅を焙つた。餅が焙れた頃父と母が山から歸つて來た。父は齒が達者なので焙れた餅をバリ〳〵かんだ。母は茶につけると云つて、焙れた餅を茶碗に入れてそれに茶をかけて食つた。勇は味噌をつけて食べるのが好きなので味噌をつけてたべた。

「榊木の大工さんが云ふて來て呉れた娘はたいてい呉れと云たら！」父は熱い餅を口一杯はうばつて、舌の先に、口をアップ〱させて云つた。

「大いがい來て呉れようんたいか、」と母も云つた。勇は黙つて搗臼の餅をいじつてゐた。

「まだ嫁を貰ふのも遅いつことはないけんどもう貰ふてえゝ時じや、他家も皆貰ひよるのつて、」と父に云つた。

「貰はな、何が何でも貰ふ時分に貰ろとかた後れてもう相手がないやうになつたら困る。」

「そして、働手もなし、早よう一人でも多うなつたらくつろぐ！」

「榊木の大工さんがあつちへ行く時勇も一緒につれて行つてもろうて見て來たらどうだらうぞ、」

「さうしてもえゝけんど、來て呉れりや見なんだつてえゝでないか、」

「それもさうじや！」

勇はどんな女であるか見に來てもよい、と思つた。父母達の話について何とか口が入れたかつたが何故か恥かしい氣がした。しかし、笑ひながら、いゝやおとけ口であつたら云へさうに思つた。妹達がゐたら、嗚貰ふ云ふたつて見せにたうねえなう！」と父母達にでなく、妹等にであつたら云へさうに思つた。

「寒いでないかへ！」と云つて戸口の戸が開いた。

「叔父やんが來た。」と勇は云つた。

叔父は土間を爐の間の方まで來た。

「叔父やんかへ、上らんか。」と云つて母は持つてゐた茶碗を置いた。

「上れ食べんか！」と父も云つた。

『上らんせ、今餅搗つてたべて居る處じや！』と云つて母は後の戸棚から勝に茶碗を出した。

『わし、何にもいらんぞへ、今朝九時頃に起きて飯食つてから來たんじやのつてまだ茶とらん』と叔父は云つた。

『遅に起きたつてもう正午じやないけ、餅でも食べんけ！』と母はすゝめた。

『いゝや、わし何にも食ひたうない！』と叔父は斷つた。

『食べりやえゝのに！』と母は云つた。

『うち（自家）の近處にえゝ娘があつてなア、あの娘だつたら與れるだらうと思ふんじや、そりやえゝ娘じや！』叔父は父と並んで坐つて煙草を吸ひながら頭を掻つて云つた。

勇は、顔を見られるのが恥かしいやうな氣がするので、俯向て、倍籠の上の餅の手入をした。

『さうか！』と云つて、父は長い大きなソツ歯をむき出して、搗つた餅に食ひついた。

『さうかえ！』母は嬉しさうに叔父の顔を見て、から云つてから續けた。

『栫木のなア、あの大工さんが當家の方へ大工の仕事に行とつたら、どこやらあそこの近處にえゝ娘さんがあると云ふてなア、あの人の口振だと來て與れさうなんよ、ちつと遠いけんどなア』母はから云つてから又茶碗を取り上げた。

『さうかへ、そりやえゝ工合じや、お前等はどう思ふとるやら知らんけんど、皆他家に嫁とつたり、聟とつたりしよんのにこゝには何の音もないのつて心配しよんじや、早よう貰ふたらお前等もくつろぐだらうがえ？』叔父は俯向て煙管に煙草をつめながら云つた。

『早よ貰ふ云ふたつて誰も世話に來て與れる人がないもんぢやのつて、此間初めて栫木の大工さんが云ふて來て與れたんじや！』父は口一杯餅を入れて、猿のやうに口をモグ〳〵させながら云ひにくさうに云つた。

一郎の様じや、ちつと勇らな氣になつて[illegible]
『うち（家）らへ來て見えるる人があるけ！』勇は俯向きまゝそう云つて、父親の位牌の下に[illegible]た
『こんなことでどうなりや、それじやいつていかんのじや、お前から頭を下げて世話人に頼め』と云つて[illegible]た
勇は叔父から叱られると泣いてやりたいやうな氣がした。　そら、わかつてゐるがな、[illegible]へ行く時までにたい
か——と泣いて怒りつけてやりたい氣がした。
『親も親じや、親から云はつて子の嫁を探すにただ坐つて居つて誰が云ふて來て呉れる者！』と云つて叔父は父母達を怒つた。——それ見い、お前達が悪いのだ、と勇は心の中で云つた。
父も母も黙つてゐた。叔父も黙つた。
『餅一つでも食べんせ！』と母が茶碗の蓋つた餅を叔父の方へ出して云つた。
『わしいらん、お前等よう氣をつけとらんせ、嫁の世話に來て呉れた人には必ず、餅は出さんようにせんせ、餅を出すときつとその嫁の話はおじやんになつてしまふんじやわえ！』と云つて叔父は母の出した餅を断つた。
『さうかへ？』と云つて母は心配さうに父の顔を見た。そして續けた。
『桝木の大工さんが云ふて來て呉れた時餅搗つて出したんじや！』
『それやいかん、おじやんにならねばよいが？』と云つて叔父は煙の中を見た。
『もしあの桝木の方がやくにたゝたんたらすぐ云ふて行くのつて頼む世！』と母は云つた。
『えゝ、なるべく早よう便してつかよ、あしだつたら見れるだらうと思ふけんど、もう年頃の娘さんじや、何處へ約束が出來るやらわからんのつてなア！』と叔父は云つた。

『そりやわからん、自分の子じや云ふても親の云ふ通りにはならんもんじやいつぺたら』と父は煙草を吸ひながら云つた

『初めに云ふて置くがなア、そのかいわしの云ふとる娘は荷物は出來んぞへ、女の子が六人もあるのつてなア!』と叔父も煙草を吸ひながら云つた。

『えゝ、そりや荷物いらん、たゞ來る時着て來る着物があつたら上等よ、仕事着物やつて又家で拵へて着せるわへ!』と母は云つた。――荷物の話したつて來て吳れるやらどうやらわかるか――勇はかう心の内で云つて俯向いて餅を食つた。

叔父は少しして飯を食つて、夕方まで話してから歸つた。

樫木の大工さんが云つて來た娘は駄目だつた。先方の娘が年まはりが悪いので今年は嫁入は出來ない、と先方に云つた。と大工さんが云つて來た。それで、『そんなら叔父が云つて吳れた娘!』と云つてその晩父と母が相談してあくる朝早くから、叔父の養子に行つてゐる隣村へ母が訊きに行くことにした。

「あれも駄目であつた。どこやら、古い親類にえゝ處があつて約束が出來てゐたんじやつはえ、叔父が今日そこへ訊きに行つたんじやはえ、そしたらそこの娘さんのお父さんが云ふのには、その娘がそこの親類の若い主を好かんのじやつはえ、もう一ト月早かつたらつて口惜いやうに云ふんじやつはえ、それはお上手で云ふんだらうけんど、』と母が云つた。

「そりや嘘じや、先方が上手で云ふんじや!』と云つた父の顔の力はぬけてゐた。

「ところがなア、他にえゝのがあるんじやはえ、おたへ（姿）その娘も見て來たんじや、一寸話もして來たんじやはえ、そりやえゝ娘じやはえ、』母は生き生きした顔になつて云つた。しかし、父の不安さうな顔は癒らなかつた。

「『さうか?』と力なげな聲で云つた。

――わかつてる、そりやそれ目で[illegible]――見てすぐわかりやつた。しかし、目下の[illegible]ことになつて[illegible]は恥かしい氣がしたので默つてゐた。

その夜勇はまんじりともしなかつた。何か父母達に反抗してやりたいやうな氣がした。自分に嫁が出來ず、嫁に來て呉れる女もないのが父母達のためのやうな氣がした。そして父母達にさう云つてやりたい氣がした。

その朝はとりわけ寒むかつた。父母達や妹一人は起きて爐を圍んであたつてゐたが、勇はまだ寢てゐた。頭から布團を冠つて、小さくかゞんで、そこへまけ出さうになつてゐる小便を、身體を慄はせて耐へてゐたが、たまらなくなつて起きた。

勇はすぐ戶口へ出て小便をした。そして、そのついでに門口の小川へ顏を洗ひにいつた。顏を洗ふと、勇は寒さを耐へるために、フウンフウンフウと息を吹きながらそれを拍子取にして家へ走りこんだ。

勇が爐の間へ行くと勇の坐り場處にゐた妹はあはてゝ母の坐つてゐる傍へ行つた。

勇は坐るとすぐ、傍に立てゝある火箸をとつて爐の中の燠火を自分の前へかき寄せた。そして其の燠火の上へ手をかざし、足を爐のかばち（緣）に出して焙つた。

皆は勇の起きて來るのを待つて、飯を食はずにゐた。

母は後の戶棚から、膳箱や飯櫃を出した。そして、一番さきに、勇の方へ勇の膳箱を出した。また子の父や、足の父がさきに捧れてゐるので、勇は母の出した膳箱を取ると、すぐ後へやつて了つた。他の者もそれぞれ母の出した膳箱を取つた。

『茶出せえ！何んなア！』父は母にかう云つた。

『今朝は味噌じや！』母はかう云つて味噌の入つた鉢を父の方へ出した。

『味噌やかしか朝からだうなるぞ、漬物上げてくりやあえゝのに！』と勇は云つた。

『今朝楽いのつてたう、又正午頃に上げて来るは！』と母が云つた。父が味噌の入つた鉢を勇の前の座のかばちへ置た。勇はムカツと腹が立つて来た。顔が熱して来て、涙がバラ〳〵落ちた。

勇は前の鉢を取つて力を入れて土間へ投げつけた。鉢はこわれて飛んだ。

『母親が女の子をかばいまわつて、なぜおつぎに云ひつけて上さゝな！』と云つて父は母を怒りつけた。

勇の眼からは止めどもなく涙が流れ出た。勇は大きな聲を出して泣き出した。

『女の子がドきまゝたのつてじや！』父は又おつぎを怒りつけた。

勇はやはり泣た。泣ても泣てもまだたりないやうな氣がした。

『だうしたんな、泣くつちだうしたんな、この位のことに！』と母が泣きかゝつて云つた。

『漬物上げて來い、早よう行け！』父は又おつぎを怒りつけた。

勇はなほ泣た。

『だうしたんたまア、喧嘩も何もせんのに、何にかわけがあるんか、こら勇、だうしたんた！』父は泣きさうな顔をして救ひでも乞ふやうに云つた。

『何んぞ他に氣にくわんことがあるんか、なんぞと氣にくわんことがありや云えよ、親子や兄妹じや何遠慮がいりや！』

母は涙をこぼしながら云つた。

おつぎが漬物を上げて來ろらしい音がすると、

『こら、おさき断板の用意しとけ！』父は下の妹にから云ひつけた。

おつぎが這入つて來た。おさきはあわてゝ断板の用意をし包丁を持つたて。おつぎは手が痛いので顔をしかめて断板

の上へ漬物を置た。そして、すぐ寒くなつた手を、フウフウ吹いた。
『そら、おさきが斷つてやれ、ちつとおつぎ手を焙ぶれ！』と母は云つて爐の中の埋火を上りたての方へかき出してやつた。おつぎは土間から腹這ひになつて來て爐の縁へ肘を立てゝ母のかき出した埋火の上へ手をかざした。そして、痛むのを耐へるために、俯向た。
勇は何だか頭が空つぼになつたやうな氣がして泣けなくなつた。胸がスーと開いたやうな氣がした。今まで頭にこびりついてゐた汚ない垢を綺麗に拭ひとつたやうな氣がした。
『茶出來た、飯たべんか！』父は勇が泣きやんで少しすると云つた。
『……』勇は默つてゐた。
『ぐわいが惡るけりや仕事せいでも寢とれ、癒つたら何程でも出來るは！』母がかう云つた。
『……』勇は默つて胸の上で手を組んで坐つてゐた。
皆は飯を食ひだした。
『飯がいやなら又後でお粥でも炊てやれ！』と父は飯を食ひながら云つた。
『エヽ、お粥でも雜炊でもえゝもん炊たるはえ、』と母も云つた。
『どこが惡るうても始めのうちであつたらじきに癒る、仕事はようなつたらいつでも出來る、惡い時は養生しとかんと！』と父は云つた。
皆は飯を濟ませた。勇はやはり默つて坐つてゐた。妹達は中の間へ行つて學校へ行く用意をしだした。
『姉！今日水車に氷あるかいの？』とおさきは姉に訊た。

『あるは、今朝位寒い朝じやもん！』と姉が云ふと、
『あゝ！嬉しい、きくちやんが持つて來て呉れ云ふたんじや！』
『阿呆！この寒いのに氷や持つ阿呆があるか！』と姉は怒りつけた。
『水車へ行つたらあしこの箍にかゝつた水がみな凍つとるのつて、その箍の柄を持つて居つたら一つも寒ならないわいな！』と妹は云つた。
『阿呆！』と姉は云つた。
勇は何だか晴れ晴れした氣持になつて來た。身體に非常に元氣が出來た氣がした。
『オヽい！呼んでゐたぞ！』と勇は云つた。
『……』妹達は默つて不思議さうに勇を見た。
『呼びよるぞ！』と又勇は笑ひながら云つた。
『誰が？』勇の方を見てゐた妹は笑ひかゝつて云た。
『そら！そら？』と勇は云つた。
『誰が…』と妹達はけゞんな顏をして云つた。
『そらそら？……水車の氷が！』と勇は笑つて云つた。
『アラ！』
『あゝく！』と云つて妹等は笑つた。勇も笑つた。
勇が飯を食つてゐると母が粥の米を洗つて來た。

『お粥炊たるぞー！』と母が勇を見て云つた。

『いらん！』と勇は云つた。

『お粥炊て呉えほらおにや（兄）よ！』とおつぎが云つた。

『もう飯たべたは！』と勇は云つた。

『炊とくのつて正午飯にたべるか！』と母は云つた。

『なんすせどこも悪るうないのに！』と勇は笑ひながら云つた。

『そんなら、大根でも入れて雑炊でも炊かうか？』と母は一人言のやうに云つた。

『わこら（お前等）一緒に行かんか。俺肥取に行くんじや。』と勇は妹達に云つた。

『先き行けほら。まだ早いのつて學校なか／＼始まらんもん！』とおつぎが云つた。

勇が肥を取つて肥桶を擔で歸つてゐるとぼつ／＼學校へ行く子供が出て來た。

『こら、通さん、通さん！』と云つて勇は道のまん中に立つて通さんぼうをした。

『いや！いや！』その子供は泣くやうに云つた。そして石を拾つた。

『すな、すな、石投げなよ。』と勇は云つた。そして道を開けた。その子供は道が開くと走つた。そして、石を投げた。

石は桶の中へ入つた。人糞は飛んで勇の着物にかゝつた。

『汚ないは阿呆！』と勇は云つてツウ／＼唾をはいた。

『いイ公の阿呆よ、いイ公の阿呆よ！』その子供は遠く逃げて行つて云つた。

『泣かすぞー！』と勇は云つてひよくり／＼與へのぼつた。

勇が田の中の道を通つてゐると、山岸の道を五六人の子供が通つてゐた。その子供が、

『いイ公よ！』と呼んだ。

『ウオイ！』と勇は答へた。

『踊るんぞ、勇さん面白ちんじや！』と一人の子供が云つた。

『ヤツトオナソレつて云ふて見い！』と又他の一人が云つた。

『ヤツトオナソレ！』と一人の子供が云つた。

勇は肥桶を置て踊つた。

『ありや！おかしい奴じやなう！』と云つて又一人が笑つた。

『又云ふたろかなう』始め云つた子供が笑ひながら云つた。

『大人なぶりするなこら悪い奴じやなう、』と他の一人が又云つた。

勇は肥桶を擔で奥へ奥へのぼつた。

又他の子供の群が通つた。その子供が又、

『いイ公よ！』と呼んだ。

『ウオイ！』と云つて勇は答へた。

勇は肥留場へ來て、肥を置くと、何んだか悲しくなつて來た。棒を枕にして立つて俯向てゐると、涙がぽろ〳〵落ちた。つひに勇は聲を出して泣てしまつた。泣けるだけ泣くと勇の頭は輕くなつた。心が明るくなつてから又肥桶を擔で肥留場から出た。

（一一、一三）



見殘した夢

宇野浩二

一　妙なあひゞき

考へて見ると、俺はこれからあひゞきに行くには違ひないんだぞ、妙なあひゞきもあつたものだ。タクシ自動車よ、なるべくゆつくり走れ、いや〳〵、タクシ自動車よ、出來るだけ早く走つて、この氣の向かぬあひゞきを一刻も早く切り上げるようにしよう。彼はふところから袖時計を出して見て、午後七時、おゝ、もう約束の時間だ！――××の電車の停留所では、彼女と、そして彼女に手を引かれた子供とが、時間より十五分ばかりも早目に來て、彼とはまつたく違つた思ひで待つてゐるであらう。

＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊

つまり、彼の住居は小石川の山手にあつた。そして彼女の家は麻布の町はづれの

方にあつた。で、今彼等がおいとまをしようとする××の停留所といふのは、どちらの家からも略々同じ道のりの、丁度中程の位置に當るのだつた。

初めのうち、彼は、一體彼女のあの家がいけないのだと思つたものだ。それは東京のあらゆる場末に見られるやうに、市内電車の終點か、或は終點に近い停留所で降りて、しばらく行つたところで、人は思ひの外繁昌した一劃を見出すだらう、が、同じ賑かといふうちにも、市内の賑かな商店町などと違つて、そこでは妙に田舎臭い、垢抜けしない、ごたごたした印象を受取る。——自動車の代りに目について荷馬車などが往來してゐる、凸凹した道の大通を横にそれると、更にもつと賑かな、こせこせした町が目の前に現れる、小料理屋だの、八百屋だの、洋食屋だの、藥屋だの、女髪結所だの。——ところで、彼女の家といふのは、その豆腐屋の向ひで、女髪結所の隣にあつたのだ。

その町ではどこの家でも小商賣家で、軒並に大なり小なり店をかまへてゐる中に、その家と隣の女髪結所とだけが同じ作りの二軒長屋になつてゐて、どういふつもりで建てられたものであるか、兩方とも一軒間口の入口が、全體四枚の磨硝子の戸で閉ざされてゐた。餘りよく似てゐるので、一度目に行つた時、彼は間違つて、髪結所の方の入口をあけたことがあつた位である。だが、よく見ると、髪結所の方には軒燈が出てゐて、そこに「何某」といふ名前を認めてある外に、出入する一枚に、「入口」と朱で書いてあつたが、彼の行くその家の方はそれ等のどんな目印もない代りに、矢張り硝子戸の一枚の或部分に、「地玉子あります」と女文字で認めた紙が貼りつけられてあつた。「地玉子あります」か。——彼は無意味にそれを口の中で讀んで、彼がさうしてその硝子戸を開けるのを、豆腐屋のお上が見てゐはしないか、向うの鍛冶屋の若いものが指さしてゐはしないかと心配しながら、その戸を開ける時まではわざと落着いてするのだが、開けると共に、中へ入るのと、後を閉めるのとは一瞬間の早さでするのが常であつた。

硝子戸を入つたところは三疊敷りの廣さで、一面に土間になつてゐるのを見ると、これも矢張り店向きに建てられたものに違ひないと思へたが、その土間が普通に見るやうに、土が叩きつけたやうに固くなつてゐる代りに、耕きかへした畑地のやうになつてゐた。多分足駄でこの中に踏み込んだなら、それの歯がことごとくその土の中に喰ひ込んだに違ひない。おまけにそれ等の土のところ〳〵に鷄の糞が撒きちらされてあつた。無論それの鼻をつくやうな臭がした。そしてそれの主が、突然闖入して來た客に驚いて、今迄そこらを散歩してゐたらしいのが、こけツこ〳〵と警戒の鳴き聲を立てながら、羽ばたきと共に片隅に驅け込んで行くのだ。

すると、その時突當りの障子に四足のものが驅けつけて來る氣配がして、忽ちわん〳〵と障子越しに吠えかけるのである。聲と騷ぎとで察しると、犬は二疋であるらしかつた。

「これ、これ!」と、その途端に、それ等の犬をたしなめる聲と共に、障子に嵌めてある硝子の覗き窓の中に、皺だらけの彼女の老母の顏が現れるのだつた。

足掛け三年の間に、彼がこの家の入口を潜つた數は恐らく半ダズンを越さないだらう。そして、彼が彼女を知つてから、この家を見たまでの間が、又足掛け三年ほどもあつたらう。彼女――といふのは、或カフエーの女給をしてゐたものであつた。名前を藤といつた。その以前の足掛け三年の間、彼は彼女が勤めてゐるカフエーに、絶えたり續いたりして、飲食に行くのを例としてゐた。そのうちに、或時は嫌ひであつたり、或時は嫌ひでも好きでもなかつたりして、到頭終ひに好きになつた。そして、話が出來て、或秋の日、彼は彼女と伊香保に旅したことがあつた。三日ほど旅して、歸つてから一ケ月ほど後、彼は彼女にすゝめられて、或日初めて今いふ彼女の家を見たのである。――「地主子あります」と硝子戸に貼られた、家の中に鷄と、二疋の犬と、彼女の老母と、そして彼女との住んでゐる家。

下の間は、土間が半分と、それと同じ程の大きさの疊の間が半分とで成立つてゐた。疊の間は六疊敷でゞもあらうか、ぼろ〳〵の、恐らく何十年と使ひ古されたらしい長火鉢と、部屋の隅には木綿の煎餅蒲團のかけられた置炬燵と、その炬燵には、寒くなるともぐり込み、熱くなると這ひ出して來るところの、二疋の犬が屬してゐた。そしてそのうちの一疋は盲目であつた。それから長火鉢の傍に、本箱のお古であるか、それとも元からさういふこしらへであるか、どちらにしても年代物には違ひない、硝子戸のついた鼠入らずと、富山の藥賣の配達して來る袋と、それだけがその部屋にある全部であつた。

彼は行くといつもその家の二階に通された。下の疊の間の片隅にある唐紙を開けると、塔にでも上るやうな急な梯子段があつて、それを上つたところは二疊敷で、そこは物置部屋に當てゝあるらしく、古い長持や、箪笥や、小箪笥や、鏡臺や、（その鏡臺だけが彼女の代に買つたものと見えて、稍々新しいものであつたが、）その外に挾箱のやうなものや、行李のやうなものや、ことごとく下の間の長火鉢の兄弟姉妹であるらしく、今は古道具屋にも見かけないやうな古風な、そしてぼろ〳〵のものが積み重ねてあつた。おゝ、これ等の古道具は何と人を憂鬱にさせることだらう！

そこを通り抜けると、この家の唯一の座敷である六疊の部屋があつた。こゝには置床があつて、古いものではあるが、無名な畫家の軸などが掛つてゐる外に、欄間に一つの油畫の肖像畫の額がかゝつてゐるのが目についた。肖像の主は背廣の服を着てゐて年頃は二十五六歳と見えるが、英吉利の皇太子にそつくりの容貌で、而も日本流の中々の美男子であつた。しかし、この人物がこの家のどんな關係の人に當るのか、彼は今だに知らない。多分死んだ人であるのだらうと思はれる。部屋の眞中に、彼が行くと、これだけは割合に新しい紫檀の机が、片隅から運び出されて、その前に一枚切りらしい稍々大型の座蒲團が敷かれて、これが近頃では滅多に見られない古風な縮珍の布切で、恐らくは彼女の老母が

若年の頃帝に使つたものを、數年前、[illegible]た數年前、何か[illegible]
つた。一枚切りの、大型の座蒲團、[illegible]而もそれは彼が初めて敷くのではなく、數年前に造られた[illegible]
に、それが割合に屢々使用された跡が見えないのが、妙に彼の注意を引いた。

いつ誰れからとなしに噂として聞いたことには、彼は以前、カフエーに出る前か、或はカフエーに出てからもか、或老人の妾になつてゐたことがあるとのことであつた。して見ると、この古風な緞珍の布切の座蒲團はその老人の旦那が敷き初めたものだらうか。そして、若しさうだとすれば、そんな小娘を妾にする程の者であるから、多分は隨分無神經に違ひないそんな老人でさへが、この座蒲團を忌避したものに違ひない、いや、それはこの座蒲團をか、或はこのプリンス・オブ・エールスに似た肖像の額をか、座敷の中を横行してゐる犬をか、鷄のゐる土間をか、おゝ、そして最後に彼女そのものをか！

だが、彼は彼女に就いてその外には何にも知らないのである。一體彼女は誰の子であるか？　彼女が現に母と呼んでゐる老女は、或時彼女のいふところに依ると、實は彼女の祖母に當るものであるとのことであつた。そして、彼女はその祖母が今時めいてゐる一等俳優の片岡某といふもの、糟糠の妻であつたとか、或は今若手俳優としてうたはれてゐる別の片岡某といふものは、彼女が襁褓の中から十幾歳になるまで手鹽にかけて育てたものであるとか、さういふ話を時々することはあるが、彼女自身の父とか母とかに就いては一度も話したことがない。老優片岡某の妻であつた老女から、いきなりその孫になつてゐる彼女との間に、どんな人たちが介在してゐたか、彼は今だにそれを詳かにしない。唯大方察しられるのは、彼女と彼女とを立つなぐ人々は、大抵死んでしまつたのだらうといふことだけであつた。

現に角、彼ははつきりと彼女なり、彼女の持つてゐる雰圍氣に厭氣を感じたのは、この家を見てからのことであつ

た。向ひに呉服屋があつたり、鍛冶屋があつたり、隣に髪結所があつたりすることが、さういふ忙しい姉妹の住んでゐる家に出入りする彼に、後日たまを燃えさせた一つの譯でもあらうが、しかし一旦その家の中に入つたところで、その家の中が小ざつぱりとでもしてゐたらどうだつたらう？　けれども亦その家の中に鶏の横行してゐる土間があつたり、犬どもが這ひ廻つてゐる古びた家具の並んでゐる居間があつたところで、それ等の一切を越えて、彼が彼女を心から好きであつたなら、やつぱり何のいふ事もないかも知れないのである。所詮、彼が彼女に飽いたといふことが一番の原因であるのだらう。

飽きる、——といふ程にも、實は彼は到頭彼女と接近しないでしまつたのである。何故といつて、それ迄はカツエーの廣間で會つて、冗談をいひ合つてゐたに過ぎなかつたのが、ふとした機會で少しばかり親密になつて、浮かれた心で二三泊の旅をしたゞけの結果で、それから他所で二三度あひゞきした末に、一ケ月ほど後初めて彼女の家へ行つたところが、旅した時分から少しづゝさういふ氣持がきざしてゐたのが、忽ちはつきりと形を整え出したのである。だから、彼はその後彼女と一度外で會つたのと、時々元のカツエーで彼女を見る切り、妙に彼女をうと〳〵しく振舞ふやうになつた。ところが、或日彼女に是非家の方へ來てくれ、話したいことがあるからと申し込まれた。それで、彼は二度目に——それが例の隣の髪結の家と入口を間違つた時のことである。——プリンス・オブ・ヱールスに似た人の肖像の額の下で、古風な縮珍の座蒲團の上に坐つた。

彼女は言葉の少ない女であつたが、彼の顔を見て、

「ちつとも店の方へもお見えになりませんが、お飽きになつたんでせう、」といつになく嫌味らしくいつた。

「えゝ、多少、」と彼は心の中でいひたかつた。が、さうもいへないので「いや、ちよつと忙しいもんだから。向うの方

へも出かけたいんです、」と答へた。といふのは、その時、[illegible]

たからである。

「わたし、もうしばらくあちらの方を休んでゐるんですよ、」と彼女にいつた。

「どうして、どこか悪いんですか？」

「別に……」と彼女は後を答へなかつた。

だが、又しばらくしてから、彼が所在なささうに、黙つて煙草ばかり吹かしてゐた時、

「あの、わたし少しお話があるんですけど、」と彼女は妙にいひにくさうに、「あなたはわたしに何かあつても、今まで通り附合つて下さいますか？」

「何かあつてもつて、何です？」と彼は多少冷やかされた形で、聞き返した。

「ね、それは今話しますけど、それを聞かして下さい。今まで通り附合つて下さいますか、ね、どうか？」

「それや、附合ひますよ、」と彼は多少不安な思ひになつていひながら、若しか……そんなことではないかな？ と心の中でちらと思つた。

「ぢやあね、いひますけど、わたし此頃の具合が變なのです、」と呉して、彼女は恥かしさうに、しかしぢつと彼の顔を見ながらいつた。

彼は心の中で多少ひやりとしたものを感じたが、そんなにあわてはしなかつた。それといふのも、彼自身の家の方に子がないので、若しさういふことなら貰ひ受けてもいゝ、と咄嗟の間に考へたからである。しかし、それにしても、辯護の噂話もあるが、彼と彼女とのやうな、そんな簡單な交渉で、この世に一人の人間が出來るものだらうとは容易に信

じられなかつた。

「身體の具合が變といふのは、子供のこと？」と彼は疑はしさうに聞いて見た。

「えゝ、」と彼女ははつきり答へた。

「だつて、醫者にでも見てもらつた？」と彼が聞くと、

「いゝえ、それはまだですけど、確にさうらしいんです、お母さんもさうだといふんです。」

「それはそれでもいゝけど、何にしろ醫者に見せなけや……。明日でも一度早く見てもらつて御覽、」と彼はいつた。

「えゝ、さうしますけど、愈々さうだつても、あなた、大丈夫？」と彼女は聞いた。

「大丈夫も大丈夫でないも、出來たら僕よろこんで貰つて行きますよ、」と平氣さうにいひながらも、彼は怪しく胸の震へるのを覺えた。

だが、彼女の言葉は間違つてはゐなかつた。それから二三ヶ月後、彼が彼女の家を訪問した時は、以前に隣の髪結の家と間違つたことがあるので、入る前にその入口を注意して見ると、「地玉子あり」の紙札は剝がされたと見えて、その跡だけが殘つてゐた。入つたところの土間は元のまゝであつたが、鷄はどこか別のところへやられたのか、それとも賣られてしまつたのか、彼が入つて行つても別に羽ばたきの音を立てるものはなかつた。そして、相變らず障子の向うで、犬どもの吠え立てる聲だけが起つた。と、例に依つて、一寸俳優の先妻であつた、彼女の老母が、そこの硝子窓から皺だらけの顏をのぞかした。

この老母は彼を見ると、いつでもおどおどしたやうな態度で挨拶した。初、私は藤から彼女の母親が俳優の妻であつたといふ話を聞いた時、少からず心に恐れを抱いた、何故といつて、そのやうな種類の女の年取つたものなら、どんな

に次て出ての[illegible]たといふやうな口實が得たなら、彼女はそれを武器として、どんなに彼をいぢめるだらうと[illegible]だけに、その彼の心配は思ひ過ぎだつた。彼女は彼等のこと[illegible]いて、いつ時でも非難がましい口を出したことがない、それよりも、彼女はいつ彼が彼女等に反きはしないか、と唯おど／＼しながら、それを口に出さずに心配してゐるやうに見えた。聞くところに依ると、彼女の夫であつた片岡某といふ俳優は、俳優の中で有名な氣むづかしい男だつたのであるが、そんな男に二十年近く連れ添つてゐるうちに、彼女は男といふものがどんなに氣むづかしいものだといふことを、肝に銘じたのであるかも知れない。ずつと後のことであるが、彼は或時或友人の又友人から、その片岡某と彼の先妻の話が出て、いふには、彼女はふとした過ちから、同じ俳優の澤村某といふものと密通した廉で、片岡某から離縁になつたさうだ、といふことを聞いた。その話の出所は確であるから、本當の事だと友人は斷言した。時々、彼女たちのいふところに依ると、彼女は今は當の片岡某とは會ふことはないらしいが、その一門のものとは今だに手紙など往來してゐるやうだし、その一門の法事の時などには孫の勝を連れて參詣にも行くらしい樣子である。しかし、彼女の口から彼は一度も片岡某に就いて、非難を聞いたことがない代りに、時とすると、彼の思出を懷しげに聞かされることが屢々あつた、彼が大阪の何々座に出てゐた時分にはとか、彼はこんな風に几帳面た男だつたからとか、彼は始終かういつたとか、――。彼が彼女の秘密を聞いたのは最近のことで、その後彼女に會ふ機會がないが、彼女が七十歳に近い今だに、彼などに對してもそんなにおど／＼してゐるのは、遠い昔の過ちが骨身に沁みて、世間に對して顏向けたらない、人の風上に立てないといつた風な後悔が、彼女をそんな風にしたのではないかと想像させる程である。

ところで、そんな風で、三度目に彼が彼女の家を訪れた時には、井上や、彼等の間に疑問が殘されてゐなかつた、とい

ふのは、彼女の身體は彼のやうな男から見ても、着物の上に、わざと前掛けをしてゐたが、それでも變つた形になつてゐることが見てとられた。彼女が下に下りてゐる間に、おど〳〵した恰好で二階に上つて來て、彼の前に座つた彼女の老母は、彼の顏をうかゞひうかゞひ、

「飛んだことで。」といつた。「まるで淨瑠璃にある辨慶さんのやうなお話で……」

「えゝ。」

「あなたもいろ〳〵御心配でございませう。」と彼女は一寸言葉を切つてから、「わたしはかう思つてゐるんですが、どうでございませう。女の子でしたらわたしたちがお預りしますし、けれど男でしたら、わたしたちのやうな者が何してはどうかと思ひますから、あなた樣の方に貰つていたゞいて……」

「えゝ、それがいゝでせう。」と彼は答へる外なかつた。

「子供にはいけませんから、もう少し土地柄のいゝ所へ引越さうかと思つてゐたんでございます。」と彼女は云つた。

「それがいゝでせう。」と彼は答へた。

彼女は無口な彼を扱ひ馴れたやうに、長い煙草を持つて來て、煙草を吹ひ出した。若い時分には美しい人であつたらうとは思はれるが、かういふ細面の美貌が年取つて、きたなくなつたのは、おかめ型の年取つたのよりは、凄くて醜いものだと思ひながら彼は氣がついて、

「猫がゐなくなりましたね。」と聞くと、

「いゝえ、ゐるんですが、裏の方へ置きました。表だと汚いものですから。」

「表だと汚いといふことが、今頃になつて氣がついたのはをかしい。」と彼は心で思つた。

歸りがけに、側の[illegible]て來ると、その下のところに[illegible]でもう目が見えないのか、死んだやうにぢつと二三粒の飯が乾きついてゐるのを見たので、

「こんなところに鷄が、」彼はびつくりして聞いた。「どうしたんですか。」

「こゝで寢させるんです、」と老母は答へた。

そして、彼は又長い間彼女等の家に行かなかつた。あの土間と、鷄と、犬どもと、そして彼女たちと考へると、何とも氣が重くなつて、氣がとがめながらも、時々手紙で用事にかこつけて、辨解するだけで、顏を出さずに居た。すると、それから二三ヶ月後の或日、預め彼が上書をして渡してある封筒によつて、向から手紙が來てゐたのを見ると、急に相談があるから來てほしいと書いてあつた。行つて見ると、彼がその家の表でしばらく躊躇した程、その構へが變つてゐた。いふのは、入口は矢張り硝子戸であつたが、隣の事務所との境に半間ばかりの菓子の陳列窓が出來てゐて、軒にカフエーといふ看板が掛つてゐるのだ。彼は注意して、入口の柱のところに彼女の姓名を認めた表札のあるのを確めてから、やうやく思ひ切つて中に入つた。

それに就いて老母が例のおど／＼した調子でいふところに依ると、娘がかういふ身體になつたから、最早や以前のやうに勤めに出る譯にも行かないし、といつて生れて來る子供の爲には遊んでゐる譯には行かないので、こんな商賣を始めることにした。それには前以て彼に相談したかつたのだが、生憎お目にかゝれなかつたので、とあべこべに言譯たらしさうにいふのだつた。

彼もそれ迄、子供の話を聞いてからは、時々心がけて、氣のついた時に少しばかりの物を送るやうにはしてゐたが、つひだらしのない生活をしてゐるので、月々定つてといふ程にはしてゐなかつた。それ等に對する不平を少しもいふこと

となしに、或はまた彼をたよりにし難い男と見たのでもあらうか、女の智慧でさういふ商賣を思ひついて始めたのを見て、何ともいぢらしい氣がした。が、さうかといつて、土間が漆喰のタヽキになり「地玉子あります」が「××カフエー」になつたところで、彼にはやつぱりその家がどうにも好きになれないのである。

その次に彼はその家へ行つた時は、彼女が身二つになつてから十日も後のことであつた。子は男であつた。けれども、その時老母がいふには「もう少しお家の方へお話ならないで下さいまし。どうも、あの子も私もこれを手離すのが厭でございます。そんなことをいつてられなくなるかも知れませんけど、今しばらくお待ち下さいまし。これが女の子でしたら、お家の方にも騷ぎをさせずに、一生濟ませるかも知れないんですのに。」

子が生れた日は、指折つて見ると彼が彼女と伊香保へ行つた日から八ケ月餘りにしかならなかつた。彼は友人の醫師に、それだけの月日で子が生れることがあり得るだらうかと聞いて見たことがある。別の友人の話に、彼女は彼と知る前に外にも親しくしてゐた者があると聞いたことなどを思ひ出したので。が、醫師の答に、それはあり得るだらうとのことだつた。が、それがあり得てもあり得なくても、たとへ彼と彼女との關係が辨慶のやうなものであつたとしても、又明らかに彼でないものゝ子であつたとしても、かういふ因緣の元に生れたものを、彼は彼の子と呼ぶのに躊躇しないつもりである。

だが、最も重要な點は、こゝにどういふ惡魔がゐるのか、その頃から最早や足掛三年にもなるのであるが、彼はこの子供に對して少しも愛を感じないことである。あの四枚の硝子戸を持つた家と、鷄と、犬と、古道具と、老母と、そして彼女とを見るやうに、彼はその子供に對しても、愛の代りに、若し感じるものがあるとしたら、憐憫の外のものではなかつた。もし彼が眞にその子の父だつたとしたら、彼は何といふ鬼の父であらう。

さういふ風だから、彼はなるべく彼女と交通しないようにしてゐた。よく／＼の[illegible]を従つて彼女の子をも見ないで過ぎた。これはいけない。こんな風ではいけないと彼は屢々思ふのであるが、といつても彼の足がその家の方に向かないのである。おゝ、そして足掛三年になるのである。彼は自分の我儘な氣持を反省するにつけて、彼女なり、彼女の老母なりの音無しい氣質を思はない譯に行かなかつた。殊に、賢は最早十四歳になるかと思ふが、彼との立入つた交渉は、かの辦慶的な出來事以來一度もなく過ごしてゐるのである。餘り彼がたよりもせず、顔も出さないと、彼女は幼稚な言葉を三十一文字に綴つて、自分と子の寂しさとを訴へて來ることなどがある。すると、彼は飛んでもないことをいはれたやうに、急いでその手紙を切々に破つて、その返事に用事が忙しいとか、それが少しでも暇になつたらとかいふやうな、その場限りの言葉を二つ三つ認めてやる。しかし、それもいつ何日に行くかはつきり書いたことはなかつた。だが、實際彼はそんな忙しい身體であるどころか、暇なていふと、忙しいのは心持だけで、日が暮れると毎日のやうに、友達と一緒に活動寫眞を見に行くし、或は三味線の音のする町へも出沒するのである。

不思議なことは、彼の母親の氣持が同じやうに、その子に對して迫つてゐないやうに思はれることであつた。といふのは、或譯があつて、彼と彼女とのことを、彼の母は彼からでなく聞いて知つてゐた。それに就いて、彼女と彼との間に話が出たこともある。

「お前、早く何とかして片をつけてしまつたらいゝぢやないの！」と彼の母がいつた。

「えゝ、ですけど、向うでは子供を離さないといふもんですから、仕様がなくそのまゝにしてあるんです。」

彼女はそれに就いてそれ以上何の意見も述べなかつた。しばらくして、

「私が聞いたからいゝやうなもの、よし子（彼の妻の名）が聞いたら、隨分心配するだらう、」と彼女はいつた。

彼は答へる代りに、「我儘た話だが、どうも私はその女が嫌ひなんです、そのせゐか、子供にも一向愛を感じないんです、」といつて見た。「これは一體どうしたらいゝでせう？」と彼は自分を産んだ者に對して、心の中で訴へて見たのだ。

「そんな事をいつてもお前……、」と彼女もさういつた切り口を噤んだ。

又別の時には二人の間に、誰か彼の友人の家に子が生れて、それの祝をするとかしないとかの話が出た後で、

「うちももう何とかしなければいけないとわたしも思つてゐるし、よし子もさういつてゐるんだけど、」と彼の母はいつた。

彼はその意味は分つてはゐたが、わざと、

「何とかつて、何です？」と聞いて見た。

「子供のことさ。よし子はどこかいゝのがあつたら一人貰ひたいといつてゐるんだが、わたしにいつてゐの、貰ふのなら二三人一遍に貰つたらいゝだらうつて、一人やそこらでなしに。」

「それや僕も賛成だな、」と彼はいつた。さういふのに、彼の母にどういふ意見があるのか分らなかつたし、それに賛成する彼には別段これといふ意味はなかつたのであるが、「僕も一人貰ふのはいやだが、二三人といふのは賛成ですな、」と景氣よく、書生でも置くやうなつもりでいひ返した。

「一人なら惡い子にしても、いゝ子にしても心細いが、二三人なら、中に一人位いゝのがあるだらうからね、」と彼女はいつた。が、それが彼女の眞意であるかどうか、彼には受取れなかつた。多分、彼女も世の中が寂しいので、成るべく景氣よくと考へたのではないだらうか。

ところが、この彼[illegible]の作品の話の中に、恐らく一人の[illegible]、一度も[illegible]いてはならな
かつた。彼の母は、普通世間に見る老人と別に變つたところのない[illegible]あるから、たとへそれが[illegible]のこ
ろにせよ、そして又孤獨な彼の妻への[illegible]はあるとしても、一度くらゐ[illegible]い子供を見たいと思ひ出しさうなもの
であるのに、と彼は屢々考へた。しかし、それが一度もなかつた。父に棄てられた子は、父の母にも知らず知らず棄てられ
る運命を背負つてゐるのであらうか。

「お前、あの方はどうなつてゐるの？」とその時も彼の母は唯かういつただけであつた。「早くどうとかしなければいけないぢやないの。でなければ、何より女の人が可哀さうぢやないの。」

すると、彼はやつぱり哀願するやうに、「だけど、困つたことに、どういふ譯だか好きになれないんです。」

「それは一緒にゐないからでもあるだらう。」と彼女は他所事のやうにいふのだつた。

それで、彼はこの半年といふもの、すつかり藤の家へ顔を出さない代りに、或時は少しばかりの附けとゞけのものを送つてやる手紙の中に、病氣してゐるとか、用事が忙しいからとかいひ譯したり、又別の時には成るべく素晴らしい子供の玩具をとゞけてやつたり、さてどうしても顔を合はさねばならぬ時には、考へて、彼女の家と、彼の家との略々まん中に當る邊の、今いふ△△の電車の停留所で、日が暮れた頃を選んで待ち合はすやうなことにしたのである。

「おゝ、暫く。」と彼等は唯の友達のやうな挨拶を交はした。

この前の時も、彼女は最早や三歳になるところの、小さい靴を穿いて歩いてゐる子を連れてやつて來たが、彼はなるべく簡單に別れるために、その邊にあるカフエーに入つた。彼女はいつの時でも何か話したいことを胸に一ぱい持つてゐるやうだつた。それは無理のないことに違ひない。だが、いつの時でも、何にもいひ出さなかつた。そして、子が

どんなに達者であるかとか、或晩急に引きつけた時はどんなに心配したかとか、縹緻よしだといつてみんなに可愛がられるとか、やんちやんで仕方がないとか、いふやうな話に終始した。だが、いくら話に耽つても、カフエーの卓子では二時間以上坐つてゐることは困難だつたから、やがて彼等はそこを出なければならなかつた。彼にしてはそれが望みなので、唯別れ際をごまかすために、タクシを見つけてそれに乘らせるとか、子供に珍らしい玩具を買つてやるとかして、そしてそのまゝ別れるのが常であつた。恐らく彼女は彼がどんな氣質であるのか、解し兼ねてゐることだらう。無理もないので、彼自身が解し兼ねてゐるのであるから。

そんな往來と、カフエーとで、合はして一時間か二時間會ふのみであるが、それが彼に五時間も十時間もある思ひだつた。が、恐らく彼女には反對の感じであるに違ひない。彼は別れる時、彼女に次に會ふ時の日取を約束されることを恐れて、必ず先廻りをして今度は少し仕事が忙しいから、都合のいゝ時此方から知らせようとか、二三日したら仕事をしに旅行して來るとか、曖昧な言ひ譯をして、逃げるやうに別れるのが常であつた。そして、彼は彼女に別れると、自分の家の方へは歸らないで、友達の家か、でなければ仕事する爲に借りてゐる神田の下宿の方へと歸つて行つた。この下宿に就いても、彼はいろんな友人たちには悉く知らしてあつたが、彼女にだけは、彼女に來られることを恐れて知らしてなかつたのである。

二　古い女友達

その彼の下宿へ、或日突然古い女友達が尋ねて來た。彼女は彼の全く古い、――十三四年來の友達であつた。彼等は

一口に友達と呼ぶよりは、もつと不思議な、離れられない關係をつゞけて來た[illegible]で、彼が下宿の机にもたれて、ぼんやりと考へ込んでゐた時、「今晩は、山根さん」（私は彼の名を明かすことを忘れてゐたが、山根啓吉といふのである）「御免なさい。」と[illegible]に聲がしたかと思ふと、もうそれが開かれて、相變らず彼女はコケティッシュな、くづれさうな恰好で彼の机の傍に進んで來た。

下宿に來る客は、誰でも一應玄關に案内をこうて、番頭がそれを當人に傳へて、彼の承諾を得てから通すことになつてゐるのであるが、彼女はどんな風にいひなして來るのだらう、この前——といつても、一年ばかり前に二三度來た時もさうであつたやうに、いつの時でもこん風にいきなり現れるのが常であつた、いきなり現れて、ばた／＼と傍に寄つて來て、くづれるやうに机の傍か、火鉢の向側かに坐るのは、考へて見ると、彼女との彼が十幾年來の交際で、いつも同じ仕方に違ひなかつた。そして、それ等の日の間に、互に三四年も往來が絶えたり、或は五六月目位に會つたりするが、彼女は現れると、いつもかういふ風に歳月を無視する形をとつた。多分彼は彼女のかういふ仕方にも、今だに魅せられてゐるに違ひないのだ。

さうだ、彼が彼女に初めて會つたのは、彼が二十歳の頃であつた。彼は彼女を見るなり、忽ち二十歳の血を傾けて熱をした。だが、到頭彼がそれを打明けそびれてゐるうちに、彼女は彼の大學の同級生だつた[illegible]の男と共に[illegible]てしまつたのである。——とかういつただけでは餘りに簡單であるが、詳しいことはこゝでは餘計にわたるから省かう。

さういふ譯で、彼女が十七頃から三十歳になる今までの、いろ／＼な時代、いろ／＼な場合を彼は知つてゐる、それは彼女が彼を知つてゐる以上にである。初めて彼が彼女に會つたのは、彼女の故郷の京都に近い或海岸で、夏の末であ

つた。短艇に乘つて、海の上で戀愛に就いて話したことを彼は覺えてゐる。自分たちはこの汚い、うるさい人生を、飽く迄若く美しく生きたい、自分はだから三十迄は生きてゐないつもりである、と彼がいふと、彼女も即座に贊成した。

その後、彼は屢々彼女の家を訪問するやうになつた。如何にも彼女に適はしい、瀟洒な門構の家で、門から玄關まで植込があつて、敷石に依つて通じてゐた。ずつと後に知つたのであるが、それは以前宿屋をしてゐたといふことであつたから、家の中が隨分廣かつたのは當然であらう。そこに父親がなくて、彼女は母親と、三人の姉たちとで住んでゐたのである。その頃、彼女はまだ女學生であつた。その家にも、門を開ける音と共に、玄關の内から吠える一疋の犬がゐた。が、それは番犬などではなく、彼女のすぐ上の姉が寵愛してゐたといふ、美しい小犬であつた。彼等は――山根ばかりでなく、彼女を知つてゐる彼の多くの友達も、この大きな、何か薄暗い、そして男氣のない、甘酸つぱいやうな空氣の漂つてゐる家そのものを懷しいものに思つた。現に、初め彼女を戀してこの家に通つてゐた彼の友達の一人までが、彼女の姉たちと戀に陷ちた。そのうち、糸子は上京して、山根の同級の友達の河本と戀に陷ちたのであるが、その以前既に彼女には、彼等と知る前から、一人か或は數人かの戀人があつたことも、彼は後になつて聞いた。或は又河本と戀に陷ちてからも、彼女に數人の愛人があつたといふことも、山根は聞いたことがある。そして、その間彼は始終彼女の傍に取殘されながら、彼女と「唯の友達」として附合つて來たのである。彼女は彼を唯の友達として、いろ／＼な相談を――戀の惱みや煩悶をさへも、臨時に打ち明けた。自然山根もいつとなく氣持が變つて、彼女の唯の友達のつもりになつてしまつたのである。

そのうち、彼女は河本と同棲するやうになつた。河本は當時俳優を志してゐた。彼女も國を出る時から同じものを志してゐた。が、山根は昔ながらの文學青年で、當時、彼女たちが同棲してゐる家の傍に、母親と二人で小さな家を持つ

て、貧乏の長い生活をしてゐた。それに反して、彼と同じ年に[illegible]、彼等は何不足なく暮してゐるやうに見えた。その頃、彼女のすぐ上の姉といふ人が、夫に別れたとかで、彼女をたよつて來て、彼女の家で女中代りに働いてゐたが、その人がいふには、糸子の以前の主人で、そして[illegible]である人が、ずつと彼女に仕送りをしてゐるのだとのことであつた。やがて、國にゐた彼女たちの母親も死んだ。彼等の[illegible]であつた彼女等の大きな家はどうなつたであらう。やがて、彼女に子供が生れた。彼女の姉のいふところに依ると、内緒のことであるが、それは河本の子ではないといふ話であつた。それから又二三年して、彼女に次の子が生れた。彼女の姉のいふところに依ると、それも亦別の誰かの子であるとのことであつた。

だが、河本はさういふ事を氣にかけてはゐないやうであつた。彼はそれよりも彼が志を立てた俳優の道を一心に進んでゐるやうに見えた、そして、彼は少しづゝ世間から認められつゝあつた。その頃のことに、山根は或商賣人の女との間違ひから、急に二百圓ばかりの金の必要が起つて、當時二十圓の金さへ自由にならなかつた河本だつたので、無理に頼んで、彼女が河本に内緒で、秘密の保護者から貰つてもらつてたくはえてゐた着物を、質に入れるために借りたことがあつた。それを彼が戻す期日が遅れた爲に、すべてのことが河本に知れて、氣まづい事件が起つたことさへあつた。當時、河本も俳優として認められかゝつてゐたとはいふものゝ、可成り逆境時代であつた。それに、これ迄は糸子に内内貢いでゐた保護者が到頭彼女に愛想を盡かして、見放してしまつたとかで、彼女の方からの收入もなくなつたものだから、河本は内外の苦しさから免れるために、或日契約が出來て、京都の方で一旗揚げるために彼女と共に出發することになつた。その別の日に、彼女は河本と一緒に、或友人の下宿の部屋に居候してゐた山根を尋ねて來た。

「どうか、あの、いつか君に用立てした着物を返してやつてくれないか、」と河本に彼は代つていつた。

「あゝ、あれは濟まないことになつてゐる、大變氣にかゝつてゐるんだけど、」と山根は途方に暮れていつた。

「君の困つてゐることは分つてゐる、しかし僕等も人氣商賣で、これから身を立てる爲に旅に出るのに、あんまり見すぼらしい裝もして行けないから、」と河本はいひながら、しかし何とも相手が無能らしく、閉口してゐるのを見ると、彼は考へを變へたらしく、「では君、君は今何か本屋の仕事をしてゐるんだらう、その本屋に頼んで、君の仕事が出來上る時の、先附の約束手形でもいゝから貰つてくれないか、そしたら、僕はそれを今度の興業主に頼んで割引してもらふから、」といつた。

で、山根は本屋に電話で頼んで、やうやくの事で先附の手形を出してもらうことになつた。それを受取りながら、河本はいつた。

「君、困つてゐる時はお互だ、然し、僕はかういふ人氣商賣だから、どんな事でどつと當らないものでもない、そしたら、その時は、君、君にこれだけのものを改めて進呈するよ、どうか僕の成功を祈つてくれ給へ、」といつて、勇んで出發した。

ところが、河本はその言葉の通り、それから二三年のうちにめき／＼と成功した。が、その時分から、彼と糸子との間に別れ話が持ち上り出した。現に一度などは、半年ばかりは別居してゐたといふやうな噂さへも聞いた。が、その頃、山根も亦文學の道で少しづゝ方針が立つて行きつゝあつた。しかし、その三四年、或は四五年の間、彼と糸子とはずつと交通が絶えてゐたのである。それには、彼が彼の仕事である小説に、彼女を題材にして、ある事ない事を綴つたといふので、ひどく彼女の恨を買つたといふ理由もあつた。やがて河本は出世して、東京に歸つて來た。無論糸子も一緒にであつた。

だが、上京して來た時分から彼等の夫婦間は一層面白くなくなつて來たやうだつた。久しぶりで山根は彼女の訪問を

受けた。彼女は女の常として、いろ／＼と夫の河本の不足を、「唯一つの逃げ道」である山根の同情を求めるやうにしてゐた。が、別れるといつて、何よりの障碍は、彼等の間の、今は十歳前後にもなる二人の子供のことでなければならなかつた。彼女は不足いひいひ、夫の愛に引かれて別れ兼ねるとも見えるし、子供の始末に氣を引かれて別れ兼ねてゐるとも見えた。が、元々、夫婦のことであるから、山根は彼自身の判斷は別としても、何とも彼女に注告することが出來ずに過ぎた。

現に、去年の暮などは、河本は旅から旅へ興業ばかり續けてゐて、滅多に家に歸つて來ることはなかつた。殊に柔子の堪えられないことは、河本がその率ゐる一座の中に、現在の妻である彼女よりも、もつと信頼し合つてゐるらしい女優をこの二三年來もつてゐることであつた。或日、彼女はやはりいつものやうな恰好で、二人の子供を連れて、ひよつこり山根の下宿に現はれた。彼は彼女にはこの數年の間、絶え絶えではあつたが、時々會つてはゐたが、彼女の二人の子供を見るのは、彼等がまだ彼女の懷に抱かれてゐる時分以來のことだつたので、彼は思はず目を見張つた。

「このをぢさんを覺えてる？」と彼女は母親らしい調子で、彼と連れて來た子とを見比べながらいつた。

子供たちは二人とも大急ぎで彼女の背中にかぢりついた。

「大きくなつたね、忘れたらうね、もうこのおぢさんの顔を、」と彼はをぢさんらしい口調でいつた。「二人とももう學校へ行つてゐるの？」

上の子は尋常五年で、下の子は尋常三年だと彼女はいつた。この二人の子供を抱いて　彼等が未だ三歳と一歳とであつた時分、彼女が河本と口爭ひをした後の仲直りに、「この子の顔はあなたにそつくりだわ、」「この子は又あなたの口元に生き寫しだわ、いゝとこはちつとも似ないで、」などといつた。「馬鹿いへ、この目は俺だよ、」「その口附はお前ぢやな

いか、」などと河本は笑ひながらいひ返した。――呪はれてあれ 女よ！ 山根はそれを傍で聞きながら心の中で叫ものである。何故といつて、彼女の姉のいふことが本當なら、これ等の子は二人とも河本に關係のないものではないか。それに、今の言葉の何といふ白々しさ！ 女といふものはこんなにも顔色を變へずに嘘がつけるものだらうか、女の靈は惡魔のものであるに違ひない、と彼は心の中で叫んだ。しかし、その時、一人の子は無心に眠り 他の一人の子は一心に彼女の乳を吸つてゐた。――

「どうです、家庭は？」と彼は冗談のやうな調子で聞いて見た。

「もう別れる外に方法がないんですけど、一向埒があかないんです、」と彼女は答へた。「いやな女が附いてますからね。その女の差金で、大方話が出來かゝつても、僅な金を出し惜しむものですから。それに、河本といふ男は世間的なことにかけては あれで中々悧巧な男ですから、人氣にかゝはることを一番恐れるんです、だから離縁などといふことが世間に發表になるのが何より恐いんでせう。」

「何にしても、それでは子供たちが一番可哀さうぢやありませんか。」

「子供は私が放しません。」

その時、上の子が退屈になつて來たと見えて、

「お母さん、早く行かうよ、」と催促した。

すると、彼女も氣がついたやうに、

「山根さん、今日は散歩に行かうと思つて、誘ひに來ましたの、どこか郊外へ行きませうよ。自働車を表に待たしてありますの、」と彼女はいつた。

彼は幾分ためらつてゐると、

「ね、行きませうよ、行きませうよ。」と彼女は娘の時に返つたやうに、甘へるやうな恰好で身體を左右にねぢらしていつた。

そこで、彼と、彼女と、そして彼女の二人の子供と、一つの自動車に乘つて、明治神宮から目黒の不動なぞへと出かけて行つた。日が暮れたので、四人でとある家に入つて、食事をすると、女中たちが旦那樣、奧樣、坊ちやんと彼等のことを呼んだ。

「あなたはさうしてゐると、本當にいゝお父さん振りだわ。」と彼女は彼にいつた。

「あなただつてさうですよ。」と彼は苦笑しながらいつた。「肥りましたね、十五六貫もあるでせう。」

「いやですよ。十五貫あるなしだわ。」

「おんなじですよ、十五貫と十六貫なら。あなた丁度になりましたか？」

「二十九よ。」

「いゝ子持だな。」

「さうさう、あなたはないんでしたね。」と彼女はいつた。

「えゝ、僕の細君は三十まで子なしに藝者に出てゐた位ですからね、望みはありませんよ。」と彼は答へたが、ふと、その時彼は例の辨慶の話のやうにして生れた子供のことを思ひ出して、思はず赤くなつた。で、それをまぎらすやうに、

「あなたのを一人もらひませうか？」といふと、

「いやだわ。」と彼女はいつた。

そこで、彼はちよつと皮肉をいつて見たくなつたので、

「お互に三十になつたが、死ぬ氣はありませんね、どうです？」といふと、

「死んでもいゝわ、子供さへなければ。」と彼女も負けずにいつた。

「あなたと初めて會つた時、あの短艇に乘つたことを覺えてますか？」

「さうさう、短艇に乘りましたわね。あの時分はよかつたわ。」――

その晩別れた切りで、それから丁度一年近くになるのである。その間に一度、彼女からの手紙を彼は受取つた、それは東京からでなく彼女の故郷の京都からであつた。彼女は愈々決心して夫の家を出た、但まだすつかり解決したといふ譯ではないが、自分はこれから獨立で生計の立つて行ける修業をするもりである事、しかし、向う何年間、河本から相當の慰勞金をもらふつもりで、今それの談判をしてゐる事、などと書かれてあつた。だが、彼の察するところ、彼女と河本との交渉は、彼女が不しだらだつたり、つまらぬ小細工をしたりする爲に、その度にいろ〱不都合な事が起つて、第二回は第一回より、第三回は第二回より、といつた風に、交渉の數を重ねる程、彼女に不利益な相談になるのではないかと思はれた。彼はだからその時の返事に、これから出來るだけ眞面目な生活に入られるように希望すると書いてやつた。

その彼女が突然又彼の下宿の部屋に現れたのである。

「どうしたんです、いつ此方へ來たんです？」と彼が驚いて聞くと、

「一週間ほど前、」と彼女は答へた。

「やつぱり河本の家に？」

「いゝえ、他所の家に……愈々話をつけようと思つて、人に仲に入つてもらつてゐるんです。」

「子供たちは？」
「それが河本の家に取られてしまつたんです。」
「それはいけないな、どうしたんです？」と彼は聞いた。
　彼女の話をつけるといふのは、所謂手切金の問題らしかつた。だが、それが前にいつたやうな譯で、だん／＼引延らされたに、河本の方にも都合があるのだらう、今すぐに出せないとか、もう少し待てとかいふらしいのである。彼女のいふところに依ると、さうして延ばさしておいて、彼女に落ち度を見つけて、結局河本は出さない所存だらうといふのだつた。それに、河本の方では、この前彼女が故郷の町に歸るにつけて、子供の話が出た時、學校のことなどをいひ立てゝ、彼等を彼女に渡さなかつたので、彼女は夏休みを待つて、子供だけでも引取らうとしたのだが、それも許さなかつた、だから、今度は彼女は一か八か、談判がどんな風な解決になるとしても、どうしても子供だけは連れて行きたいといふのである。
　彼はそれを聞いて、外の話は兎に角、子供を引取りたいといふ彼女の說には同感した。子供はどんなにしても、父のものではなく、母のものだと彼は信じてゐるからである。
「河本君は子供たちに對して愛はあるのですか？」
「わたしよりはないでせう、」と彼女はいつた。
「なる程、あなたよりはないでせうな、」と彼。「それをどうして子供をあなたにくれないのです？」
「子供の爲に惡いとでもいふんでせうね、――決して子供の爲にいゝやうな生活をあの人だつてしてゐないんでせうがね、それに、あの人のことだから世間の體裁なども考へるんでせう。」

「しかし、どつち道子供といふものは女親のものだと思ふがな。」と彼は重ねていつた。
「わたしね、愈々渡さないとなつたら、あの子たちが實はあの人の子でないといつてやらうかと思ひますの。」と彼女がいつた。
しかし、この言葉は彼を戰慄させた。彼は彼女がそれ等の二人の子を抱いて、この子の額附はあなたのものだとか、この子の口附はあなたそつくりだとか、河本との口爭ひの後で、和解しながら言ひ合つてゐた昔の場面を思ひ出した。それを、今になつて彼の子でないといふ證據などを擧げて、彼から取戻さうといふやうな考は、これは惡魔でも男なら敢てしないことだと思はれたからである。
「わたし、今度はもうぎりぎりの談判をして、お金なぞくれてもくれなくてもいゝと思つてますの。」と彼女は又いつた。「だけど、わたし、どうしても、子供と別れることは出來ないんですもの。」
彼女は涙ぐんでいつた。と、彼はすぐ又その涙に誘はれて、
「それぢやあ、あなたも決心して、お金の方なぞ斷念して、子供だけ連れ出したらどうなんです？」といふと、
「實は、この夏一度連れ出したことがあるんです。」と彼女がいふには、「あなた御存知でせう、わたしのすぐ上の姉――あの姉が河本の馬丁と一緒になつてますの、今はもう免職になつたんですけど、――その馬丁に頼んで、子供たちを連れ出さしたことがあるんですよ、それがわたしの所へ來るまでにつかまつてしまつたんです。」
「だけど、連れ出すといふ決心があるのなら、又何とでも出來るでせう。子供たちは毎日學校へ行つてるんでせう。」
「えゝ、だから、わたし今度は自分で連れ出さうと思つてるんですけど、何といつても河本の方には手が多いんですから、折角連れ出しても、又つかまつたら今度こそどうにもなりませんから……」

「どこかへ隠れたらいゝぢやないですか。」

「それにはお金が入るでせう。」と彼女。「それで、わたし河本の方から幾らでも取れたらと思つてるんですけど、今ではその方をあてにしないで、わたし別の方でお金の用意をしてゐますの。それにしても、隠れるツて、どこへ行つたらいゝでせう。」

「まあ、東京とか、京都とかはいけませんね、すぐに見付かりますから。」

「えゝ、だから、わたしもさう思つてゐますの、子供には可哀さうですけど、學校を一年棒に振らせるつもりで……わたしこの前の時もさう思つたんですけど、どこか田舎の温泉町へでも暫く行つてたらどうでせう。」

「それもいゝかも知れませんね。」

「それで、わたしあなたに相談してもらひたいと思ひますの。」と彼女は膝を乘り出した。

「あなた信州のS――をよく御存知でせう、奧さんの出てらしつた所でせう、今でも時々入らつしやいますか？」

「滅多に行きませんよ、あそこには僕の細君より前から僕の好きだつた女が今でもゐますから、時々行きたいんですが、細君がそれで行かせないんです。」

「その女の方もやつぱり藝者？」と彼女は輕蔑するやうに聞いた。

「えゝ、ですけど、子供が二人もあるんです。」

「あなたの子？」

「殘念ながらさうぢやないんです、そんな關係の少しもない女なんです。」

「ゆめ子さんといふんでせう。」

「知つてるんぢやありませんか。人が悪いな。」

「えゝ、あなたの小説で讀んだわ。」と彼女はいつた。「わたし子供を連れ出したら、當分そのゆき子さんの町へ行きたいと思ふの。あなた案内してくれない？」

「當分ツて、どの位行つてるつもりなんです？」と彼は多少好奇心を動かされて聞いた。

「わたし、よかつたら半年位もゐたいと思ふわ。いゝ事があつたら一生でも……」といつて彼女は笑つた。彼女の笑は昔から妙に人の心を掻き亂すやうな響きを持つてゐた。

「S――なら、何とかして僕も行つてもいゝな。」と彼もつひ調子に乘せられていつた。「それにしても、子供を連れ出すのはうまくやれるんですか。その方の手傳ひは、僕はあなたの友達でもあるが、河本の友達でもあるんですから、御免蒙りますよ。」

「その方は大丈夫。」と彼女は自信ありさうにいつた。「唯、連れ出すことは連れ出しても、後をつけられる心配がありますから、立つ時はまる切り違つた停車場にしたいと思ひますの。」

「それぢやあ、S――なら、飯田橋からでなく、上野から廻つたらいゝでせう。」

「えゝ、さうしますわ。」と彼女はいつた。そして一寸言葉を切つてから、「わたし今ゐる家はそれや窮屈でいけないんですの、あなたのこの下宿においで下さるといゝんですがね……？　昔のあなただつたら置いてもらふんですけど……」

「僕だつて、昔のあなたゞつたら置いて上げるんですが……」

まつたく、彼等は十年ばかり前には同じ下宿の同じ部屋に二三ケ月も一緒に住んだことがあつたのだ。それは彼女が河本とまだ一緒にならない前のことであつた。そして、山根もまだ學生であつた。學生で下宿生活をしてゐた彼のとこ

ろへ、彼女は京都から女優を志して上京して來て、しばらく俳優生活をした後で、それでこの家へ來るといふので彼の下宿に來たのだつた。その頃から、彼女の男友達の中で、彼だけは石と認められたものだつた。いや、友達ばかりでなく、彼女自身までが彼を石に見立てたのだ。だから、彼女のやうな若い女の周圍に集まるどんな男たちも、彼女が、外の者でなく彼と一緒にゐるといふことは、石と一緒にゐるやうに安心してゐたのだ。そして、彼も止むを得ず石になつてしまつたのだつた。

大勢の若者たちが、幾人となく彼の部屋を訪問して來た、が、彼等は彼の名を呼んで入つては來たが、目的は彼女を見に來たのだつた。考へて見ると、その頃が彼女の全盛であつた。彼女が今その者の爲に苦み、その者に捨てられて泣いてゐる河本も亦、その頃の取卷の一人であつた。下宿屋の六疊の部屋で、彼はいつの間にか彼女の從僕か、番頭かのやうな格になつて、毎晩彼女の傍に床を並べて寢た。或晩は、一時二時になつても彼女は歸つて來なかつた。彼は何といふ譯もなく彼女を待ちながら、小說本を讀みさしたまゝ眠つてしまつて、明け方頃驚いて目をこすりながら、一尺と離れないところに敷かれてある彼女の空の寢床を見ては、溜息をついて又眠り入つた。或朝は前の晩彼女のおごりで確に一緒に蕎麥を食べて寢た筈だが……と彼女の寢床が空になつてゐるのを首を傾けながら覗いて見た。それから便所にでも行つたのかと思つて待つてゐても、到頭彼女の姿が見られなかつた。時計を見ると、連日の疲れで彼自身が寢坊したものだと見えて、十時近くなつてゐるのだ。女中に聞くと、彼女は早く、誰か迎へに來た男があつて出かけたといふ返事である。如何にも、急いだものと見えて、彼女の寢床は掛蒲團を剝きたまゝの恰好に引つくり返して、その上に出來るだけ延び延びと寢間着や細帶を脫ぎ散らし、片足の足袋は机の下に、片足の足袋は出口の障子の際に捨てられ、机の上には洗面所から持つて來たらしい洗面器が、眞白な水と、四五筋の髮の毛を浮べて、置き放しになつてゐる。彼は

やうやくのことで起き上つて、最早や下宿の女中にも輕蔑されて、相手にされないので、それ等の掃除をしなければならなかつた。

だが、稀に彼等は二人切りになる事があつた。すると、彼女は彼の顏をつくぐ見ながら、「あなたゞけが友達だわ、あなたのやうな人は珍しい、私はあなたが一番好きだ、だけどそれは友達としてよ、だから一生好きだわ、」といつた。

「さうですかね、」と彼はいつた。

今、彼女はいふには、「あなたが昔見たいだつたら、本當にこゝへ一緒においてほしいわ。だけど、今は奥さんがあつたり、外にも隨分發展してらつしやるといふぢやありませんか、本當？　わたし信じられないわ。」

「今ぢや、もしあなたが僕と一緒にゐたら、河本だつて疑ひますかね？」と彼は話をかへて見た、

「疑はなくつたつて、それをいゝ口實にするかも知れないわ、」と彼女はいつた。「だけど、あなたも變りましたわね。」

「別に變つた譯でもありませんよ、あなたが變らないのと同じ程度ですよ、」と彼はいつた。

「ぢやあ、やつぱりこゝへ來ようか知ら？」

「やつぱり來ない方がいゝでせうな。」

「さう、」と彼女はしなをしていつた。「それぢや、わたしもう歸るわ。愈々といふ手筈が定つたらもう一度來てよ。お願ひしますよ、屹度ね、」と彼女は駄目を押して、來た時のやうにあわたゞしく歸つて行つた。彼女のあわたゞしさが又昔ながらに彼の心を亂す何かを持つてゐるのだ。

三　風變りな旅

それから半月ほど後の或晴れた朝、山根は軽い旅装をして、上野驛から長野行の汽車に乗つた。途中大宮驛を通る時、かねて約束してあつた通り、糸子は二人の子を連れて、乗り込んで來た。彼女はその四五日前、二人の子供の通つてゐる學校へ行つて、その前にもさうしたやうに、先づ係りの教師に向つて、彼等を受取らうとしたところが、既に河本の方から學校に頼んであつたと見えて、どうしても渡してくれなかつたので、考へを變へて、彼女は學校の近くで、彼等の課業が終つて歸つて來るのを待ち受けた。彼女はそんな事があらうかと豫期してゐたので、すぐ上の姉の情夫で、嘗て河本の馬丁をしてゐた男といふのを連れて來てゐたのだつた。その男に學校の門のところで張番させて、半町ほど離れた町角で彼女は待つてゐた。やがて、彼女の前を大勢の子供たちが雀のやうに囀りながら、かたまつたり、離れたり、駈けたり、道草を食つたりしながら通つて行つた。久しぶりで子を見るといふ喜びと、泥棒の眞似をするといふ恐れとで、さすがに彼女の胸は震へ出した。その間の三分、五分といふ時間は一秒よりも短い氣がしたり、一時間よりも長い氣がした。が、實際は五分と經たなかつた時に、彼女はそれ等の子供たちの群の中に、背廣服を着た彼の相棒の馬丁の姿を、それと同時に、いや、或ひはそれよりも早く、彼女の久しく見なかつた二人の子供が何か頻りに話しながら歩いて來るのを認めた。彼女は思はず目が熱くなるのを覺えた。が、泣いてゐる場合ではないと思ひかへして、手早く半巾で目を抑えてから、つかつかと近づいて來る子供たちの方へ進んで行つた。見馴れない田舎出らしい拵せた書生が、彼等の送り迎へをする者と見えて、すぐその後を歩いて來た。

「………」

彼女は其の時何と呼びかけたか覺えてゐない。多分何とも云はなかつたのだらう。が、子供たちは彼女を見ると一緒に聲を合はして「母さん！」と叫びながら、駈け寄つて來た。それは一勢に往來の人々の注意を引いた位だつた。彼女

は目に一つぱい涙を溜めながら。しかし夢中で、

「母さんと遊びに行きませう、行きませう、」といひながら、二人の子の頭に手をかけた。

「あなた、いけません、いけません、」とその時子供たちに附いてゐた書生が、氣の拔けたやうな聲で叫んで、一人の子供の肩にかけてゐる袴の紐をつかみながら、「坊ちやん、お父さまに叱られますから、坊ちやん、坊ちやん！」

「何です、お前さんは！」と彼女は權威をもつて書生を叱りつけた。

「おゝ、坊ちやん、坊ちやん！」とそこへ馬丁が顏を出した。

「あなたこそ誰です？」と書生は糸子に向つて食つてかゝつた。

「何を云つてやがるだい、」とそれを馬丁が買つて出た。

その間に、子供たちはいそ／＼と糸子に手を引かれながら、人込みを分けて、待たしてある自働車のところまで來た。そして、馬丁の歸つて來るのを待たないので、糸子は子供たちを自働車の中に追ひ入れるやうに乘せると、「すぐ出して下さい！」と運轉手に命じた。――

が、彼女は汽車の中で彼にその話をする時には、もういつもの陽氣な調子で、人のことのやうに面白く話した。

「その馬丁といふ人はどうしたんです、後で？」と山根は聞いた。

「その書生が、家まで來てくれとか、警察まで行かうとかいふので、しばらく一緒にどことかまで歩いたさうですが、結局うまくごまかして歸つて來ましたわ」と彼女は云つた。

その日の夕方彼等は長野について、そこで一泊して、翌日は一日宿屋の部屋で寢轉んだり、名所を見物したりして暮した。そして翌日の午後、改めて長野から飯田町行の汽車に乘つて、愈々目指すS――に向つて出發した。

おゝ、この國を見舞ふのも、早いものだ、もうかれこれ二年振りになる、と彼は汽車の中で溜息と共に考へるのだ。

「彼女も今年はもう二十六か……」

彼女——といふのは、彼等が目指して行くS——町の、嘗て（そして今も！）彼が戀してゐるところの、二人の子を持つてゐる藝者である。その同じ町で、今の彼の妻も以前藝者をしてゐたものだ。だが、彼は彼の妻となつた女よりも先に彼女を知つて、而も見るなり彼女に戀したのである。もう半年彼が彼の妻となつた女を遲く見たなら、その別の女が今彼の妻となつてゐたかも知れない、當時彼女は一人の子の母親であつたから——誰を父に持つた子であるか、もしかすると、彼は彼女と共にその子を引取つて、今頃はその子の父となつてゐたかも知れないのである。彼女は彼が初めて見た時二十歳であつた。それから六年位經つのである。

彼女にも、彼は到頭彼の戀を打ち明けずにしまつた。彼女はどういふ兩親の子であるか。兎に角、今の家には養女となつて乳飲兒の頃から育てられた。彼の朋輩の誰彼のいふところによると、彼女は子供の頃から、この事は決して人に云つてはならぬといはれたことは、口を切られても話さないやうな性質で、これから後はいざ知らず、二十歳になるまでに、嘗て一度も男にだまされたり、男の情にほだされたといふことを聞かないといふことであつた。では、どうしてあゝいふ子を生んだのかと聞くと、無論それは養母の指圖に從つただけだとのことである。おゝ、人と生れて、殊に女であつて、嘗て一度も男にだまされたことがなく、人の情にほだされたことがないといふのは、どういふ血であらうか。だが、彼の已惚心が見る偏見であるかも知れないが、彼は彼女をそんな風に見ることは出來ない。先にも云つたやうに、彼は到頭彼女に戀を語らずに終つたが、初め彼が彼女の町に現れて、一週間。次に二ケ月半、——とさつと三月ほど滯在してゐた間、主に彼女をばかり呼んでゐたのであるが、彼女は彼の泊つてゐる宿屋に殆ど毎日ほど花を插けに來て

くれた。花を活けに來て、たとへ五分間でも無駄口を開いて行くかといふと、彼女は殆どそれをしなかつた。「今日は」、といつて彼の部屋の唐紙を開けて、「御勉强ですか」、といひながら、音を立てないやうにすり足して、片手に花を持つて床の間に行つた。そして彼女はその間殆ど無言で花を活け終ると、ペンを手にしてはゐるが、ぼんやりと空を見つめてゐる彼の方に向つて、もう一度「御勉强ですか、」といつて「ぢやや、今晩、又」といつて歸つて行くのが常であつた。彼は彼女のかういふ行動にも甚だ魅力を感じた。

彼女も彼も無口であつたし、それにどちらも酒をたしなまないしするので、客と藝者として會つてゐても、つひ所在がなくなつて困ると、彼は彼女に三味線でもひいたらどうかといつた。すると、彼女はいつの時でも「わたし下手なんです。」といつて、それを彼が「さういはずに……」とも一度强ひると、彼女は必ず素直に樂器を取上げて「何をやりませう。」と聞いた。そして、恐らく彼女は何でも一通りの唄は心得てゐるやうに見えた。それにも拘らず何をやつてもぎこちなかつた。それに就いて、後に、彼女と同じ家に育つたところの、彼の妻になつた女に聞いたところに依ると、彼女の養母が喧しい人で、五六歳の時分からあらゆる藝を物尺で叩きながら教へたのださうであるが、彼女は覺えが悪い上に、質がよくないので、中々はかばかしく進まなかつた。それを無理耶理に養母が覺えさせたのださうである。だから上手ではないが人の三倍も五倍も時間を費して、數だけは人並以上に知つてゐるといふことであつた。かういふことも、彼女の性格を語るものであらう。

兎に角、その三月ばかりの彼等の出會ひの間には、彼等のやうな性質のものとしては可成り親しくなつてゐたのだつた。すると或夜、彼女に連れられて、彼は町の演藝會に出かけて行つた時、彼女が幕の向うから、一人の女の手を引いて、彼に紹介しに來た。どうして内氣な彼女がその時は珍しくはしやいだ樣子で、そんなことをしたのか分らない。そ

の時彼女が彼に紹介した女といふのは當時その町で見さん坊であつたり、一番といはれてゐるものだといふことで、彼はその女と氣が合つたのか、すぐに親しくなつた。だから、その次、彼が再び東京から出直して其の町へ行つた時は、二人の女を半分／＼の割合で呼んだ。彼の浮氣な氣持から、彼は彼女とは全く別の性質である其の女にもふと興味を引かれたのである、そして彼女より積極的だつたその女と、彼は到頭結婚までしてしまつたのだ。だが、その別の女と結婚すると共に、彼は急に一層以前の女を戀しく思ふやうになつた。しかし、これからといふあの彼女は彼と會つても、滅多にそれを顔色には出さなかつたが、徹頭徹尾冷い女になつてしまつた。彼は今の妻と一緒になつてからも、彼女に隠れて屢々昔の町に昔の女に會ひに出かけたが、會ふには會つても女の氣持に妙なこだわりを感じねばならなくなつた。これは元より當然のことに違ひない。彼女は最早や花を活けに來てくれなかつた。

私は先に彼が彼女に到頭戀を語らずにしまつたといつたが、それは彼がまだ今の細君と一緒にならぬ前までのことで、その後彼はそれを妙な方法で語つたことになつた、といふは、彼女の朋輩である女と夫婦になつた後に、彼は彼の仕事である小説に、彼女に如何に戀したかといふ顚末を綴つたのである。彼女――その名をさち子といつた、それを彼は彼の幾つかの彼女を取扱つた小説に、彼女が彼の夢であるといふ譯から、ゆめ子といふ名で書いた。その後、おゝ、誰の子であるか、彼女は再び身持になつて、一旦藝者を止めた、そして今度は隣の町から出るに就いて、その町には彼女と同じ名前のものがあるといふ理由で、彼の小説の名のゆめ子を名乘つたのである。何故前の町を避けて隣の町から出るやうになつたかといふことを、この前、即ち二年前、彼が彼女と會つた時何氣なく彼女から聞いたことを彼は思ひ出した。――それはこれ迄の彼女の家は丁度坂の上にあつた。おゝ、阪の上の彼女の家――六年前、彼がまだ獨り身でこの町の客であつた頃、しばしば彼はこの阪道を通つた。宿屋や料理屋が軒を接して、如何にも温泉場らしく並んでゐる町

が、突然阪道になつてゐた、その阪道の上で、阪を下りる道と、右にそれてゐる道があつた。右にそれてゐる道は町をはづれて山に上つて行つた、彼はよくこの山への道を散歩した、それは四方を見渡す山も彼の心を引いたには違ひないが、この山に行く道の左手に、彼女の家があつたので、その前を往復するのが彼の別の樂みであつたのだ。家は阪道に半分かゝつてゐたので、斜めに石垣が築かれてあつて、その上に一際目に立つて眺められた、古びた、くすんだ二階家であつたが、阪道の上に石垣を築いてあるだけの分が、庭になつてゐて、その手前に二本の棒を立てた門があつた。そしてその門の柱に「何々家」と書いた軒燈が出てゐるのだが、そこから住居の家までは庭を隔てゝゐる譯なので、妙に奥ゆかしく見えた。彼は朝早く、未だ町の家々が寢しづまつてゐる頃、その前を通る時、誰に見られるといふ氣恥かしさもないので、口の中で「ゆめ子寢てるか起きてるか、」と子供のいふやうな句を口ずさみながら、つく〲と立止まつて眺めたものである。しかし、その時彼女がいふには、冬になると湖水でさへ凍つてしまふ程の寒い國のことであるから、彼女の家の前の阪道も鏡のやうに凍つてしまつて大人でさへ一日に何度といふ程、その道で轉ぶのださうである、「子供が大きくなつて、表に遊ぶやうになると、あそこには危くていけませんから、その時は隣の町へ私だけ變るつもりです、」と此前からいつてゐたのである。その隣の町にも彼女の養母の經營してゐる藝者家があつたので、養母は始終その方へ行つてゐた。そしてその阪の上の家の方は彼女が經營してゐる形になつてゐるのを、つまり養母と入れ交りになればいゝ譯であつた。彼女が二度目の子を腹に持つて、その子を生み落した時、さうだ、最早や上の子は表で遊ぶ年頃になつた筈である、即ち彼女が隣の町に引越して改めて藝者に出た譯である。

その町へ、去年の春のことであつた、彼は彼の妻の手前は上州にゐた友達のところへ行くといつはつて、出かけて行つた。その時、彼女を見たのは彼れ此れ二年ぶりであつた。二年見なかつた間に、彼女は次の子を生んでゐた譯だつた。

「坊やは達者？」と彼はたづねた。

「お蔭樣で、」と彼女は靜で、恥かしさうに俯向いて答へた。

「今度の坊やも……達者？」と彼はたづねた。

「えゝ、」と彼女は一層恥かしさうに口の中で答へた。

彼も亦自分の戀した女が、どこの誰となしたであらうところの、子の安否を尋ねる心苦しさを變へるために、

「上の坊やはもう五歲、六歲？」とわざと磊落らしく聞いた。

「今年六歲になります、」と彼女もやつと顏を上げて、「腕白で困ります、」といつた。

「明日連れて來ない、晝間でも。」

「えゝ。」

「今度は男の子、女の子？」

「やつぱり男ですの、」と彼女は答へた。

その翌々日、その晩彼が東京へ立つといふ日、彼女は六歲になる上の子を連れて彼の宿に遊びに來た。

「小さい方も連れて來ればよかつたのに、」と彼がいふと、

「えゝ、ですけど、餘り小さくて、きたないんですもの、」と彼女はいつた。

だが、彼女が歸る時に、彼が買物がてら町の方へ送つて行くと、鐵道の踏切のところで偶然子守に負はれてゐる彼女の小さい方の子に出遇つた。見ると、彼女がきたないといつたのは、上の子の縹緻よしに比べて、その子が、——生れて半年になるといつたが、變に頭と鼻とが大きくて、目の小さい不縹緻な顏であるのを恥ぢていつたのに違ひなかつ

た。彼女はその傍に長く立つてゐるのを好まないやうに見えたので、彼等は間もなく手を放して歩き出した。それから一町ばかり行つたところで、彼は彼女と別れたが、彼はふと彼自身の子（もしそれが彼のであるならば）と、彼女の下の子とが、年齢も生れ月も同じであることを思ひ出して、道を歩きながらひとりで赤くなつた。彼はまだその事をいはなかつたが、あの鶏と犬の家で子供が生れた時、子の母親から名をつけることを頼まれたことがあつた、彼はそれを承知しておいたが、妙にその事が後目たく考へられて、そのまゝにしておいたところが、そのうちに役所に出生を届けなければならぬ日が迫つたので、母親の方から年命判断屋へ頼んで、かういふ名に定めたからといつて来たのを見ると、義経とか為朝とかいつた風なひどく古風な、馬鹿げた名だつたので、余りひどいと思つて、早速、速達で彼の方から名前を与へてそれにするやうにいつてやつた。その名前は実はその前に藤に頼まれた時から、彼の心の中で考へては消し、又考へては消ししたものだつた。それは、S——町の彼女の以前の名前であるさち子をとつて、幸夫といふのであつた。が、彼の速達が着いた時は、子の名を既に届けた後だつたので、それは間に合なかつたが、母親や藤は彼に対する遠慮から、戸籍の名を呼ばずに、今でも幸夫と呼んで居ることであつた。おゝ幸薄き幸夫よ。——

汽車が松本の駅を放れて塩尻に向ふ迄の窓の外の景色は、曾て彼は二三度しか通つたことのない道であるにも拘らず、妙に彼に昔馴染のやうな、懐しい印象を呼ぶのである。恐らくそれは、彼が妻に隠れてS——に行くやうになつてから、三度に二度までこの廻り道を取つた為の記憶からであらうか、多分汽車がこの辺の道を走る頃になると、彼は何度も何度も窓の外の景色を眺めては、この山の峯が隠れたら何駅に近くなるとか、あの山の森の下を走る頃には、最早やS——まで一時間半の道のりだとか待ち侘びたことがあるからだらう、さうでなければ、縁もないこの辺の山野の景色が、彼にそんなに印象深く刻まれる筈がない、やがて塩尻の駅を出ると、汽車は今迄と全く違つた方角に、山麓を蛇のや

うに這ひながら走る、左手に見える松本平の視野がだん／＼狹まつて來ると共に、汽車は全く陰鬱な山狹の間を喘ぎなぎ上る、この山狹を通り拔けたところがS——の湖と、S——の盆地である、彼は糸子にも、彼女の連れてゐる二人の子にもかまふことを忘れて、汽車の硝子窓に額をくつ附けるやうにして外の景色に眺め入つた。

だから、彼は糸子から耳打されるまで、いつその不快な男が乘り込んで來たかさへ氣がつかなかつた。が、後で考へて見ると、多分そんな男が鹽尻から乘つたやうな記憶を持つてゐる、だが、彼は殆ど注意しなかつたのだ。鹽尻からは、それまで割合にまばらであつた二等室が、五六人の人が乘り込んだゞけだが、妙に賑かになつたやうだつた。それは二三人の男たちの外に、二三人の藝者らしい女の一組が乘つたためであらう。彼女等は彼と糸子の二人の子供と、彼等を狹んで糸子とが並んで腰かけてゐる丁度向側に、空席があつたので席を取つた。彼女等が乘つて來た時、彼はその中に誰か以前に顏見知りの者でもゐはしないかと思つて、ちよつとその方に一瞥を投げたが、どれも知らない顏なので、すぐ又窓硝子の方に向つたのである。ところが、後で聞くと、その不快な男といふのは、隣の三等車の方から、それ等の藝者たちを知つてゐるものと見えて、闖入して來たとのことであつた。如何にも、三等客にしても、隨分思ひ切つてぼろぼろの背廣を着た、六十近い老人であつた。手には同じやうにぼろ／＼の手提鞄を持つてゐた。彼はそれ等の藝者の中の一人のすぐ傍にくつ附くやうに坐つて、何かぺちや／＼と喋りはじめた。が、暫くした時、一人の車掌が隣の列車から入つて來て、彼等の列車を通り拔けながら、その汚い老人の方を胡散さうな目でぢろ／＼と見て行つたので、彼は車掌の姿が見えなく／＼なると、あわてゝ鞄を抱えて、隣の三等車の方へ歸つて行つた。が、五分としないうちに、又のこのこと歸つて來た。

糸子が彼に「いやなお爺さん」と耳打ちしたのは、それからのことである。彼女がさういつたのは、その老人が相變

らずその馴染らしい同乘の藝者と絶えず何か私語しながら、目だけ始終彼等の一行の方につけて、一分も離さないからであつた。無論、その男は彼の方をも見るが、主に彼女と二人の子供たちの方に目をつけてゐた。が、子供たちは無心に、「あの山に狼がゐる?」とか「をぢさん、もうすぐ?」とか「母さん、お腹がすいた」とかと、彼や彼女に話しかけたり、さうでない時は腰かけの上へ上つたり、それから下りたり、麵麭をかぢつたりしてゐたから、その老人のことなどに不注意であつたが、なる程、大人の糸子は不快で堪らなかつたに違ひない、そんな汚ならしい老人が、而も出合藝者とふざけながら、無禮な目附でどういふつもりだか、彼女の方を迂散臭さうに睨んでゐるのだから。彼も彼女に氣をつけられると、堪らなくその老人が不快に思はれ出した。

が、こちらが幾ら不快に思つて、先方を睨み返しても、こちらがさうすればする程、相手は執念くその視線を反らさなかつた。老人はその執念深い、不快な視線を、彼や彼女のみならず、無邪氣な子供たちの上にもぢつとそゝぐのである。彼は幾度その男に向つて「無禮者!」と呶鳴りつけてやりたい衝動に襲はれたか知れなかつた。そこで、彼は負けないで、なるべく相手の目を睨んでゐる自分の目を反らさないやうにした。さうして、睨み返してゐるうちに、彼はふとその顏に見覺えのあるやうな氣がして來た。しかしこんな不愉快な人相に見覺えがある筈がない、恐らくはもつと立派な人相で而もこの男の顏立と似た顏に見覺えがあるのだらうと考へた。が、幾ら思ひ出さうとしても、どうしてもそれは迚も思ひ出せないやうな、彼の記憶の薄い部分に違ひないと思つたためで止めた。

が、その時、突然車室の一方が空いて、先の車掌が現はれたと思ふと、今度は通り過ぎて行く代りに、帽子を頭から一寸浮かして、切符を拜見しますと叫んだ。彼は咄嗟に、これは面白いことになつて來た、この不愉快な老人がどんな目にあふだらうかと思つた。すると、その男は一瞬間狼狽したやうに見えたが、車掌が彼の前に進んで來る少し前時分

から、急にポケツトの中に手を入れたり、帽子の裏側を探したり、わざとらしく手提鞄を開けたりして、何か探してゐるやうな風を裝つた。そして車掌が傍に來た時、「ちよつと待つて下さい、今切符をしまひ忘れたから探すまで、」といひながら、同じポケツトの中や、帽子の裏や、さては手提鞄の中やを探し廻る風をしてゐたが、車掌が同じ列車の中の人人の切符をすつかり調べ終つて、再び彼の前に戻つて來た時も、彼はやつぱり一生懸命に身體中を探す振をしてゐた。車掌が「どこからどこまで、」と聞くと、「驛尻からS――まで、」と彼は答へた「切符がなくちや困りますが、」と車掌がいふと、「なアに、大丈夫S――へ着くまでは見付かるよ、」と彼は答へながら、相變らず同じポケツトや帽子の裏やを探す風をしてゐた。車掌はそれを待つてゐるのに根を切らしたと見えて、「ないと困りますから、よく探しておいて下さい、」といひ捨てゝ、次の車に移つて行つた。すると、彼は車掌の姿が見えなくなると共に、切符を探すことをけろりと止めてしまつた。――

同じS――町でも上と下とに分れてゐて、その間が一里ばかり離れてゐた、ゆめ子が二度目の子を生んで、移つて行つたのは上――町の方であつたが、何といつても彼が馴れ、彼の思出がとある横町の電信柱にさへ殘つてゐるのは、下――町の方であつた。無論、行きつけの宿屋もその町の方が馴染が多かつたので、たとへ半年でも糸子が盜み出した自分の子等と共に住むのに、家を探すにしても、入用品を買ふにしても、それ等を頼む人を見付けるにしても、下――町の方が便利だつたので、彼等は初めそこへ下りることになつてゐた。汽車がその驛に近づいたので、彼等がそこで下りる仕度をしてゐると、例の彼等の前に坐つてゐた紳者たちも、かの不愉快な老人も彼等と前後して下りた。切符を失くしたといふ老人が、改札口を通る時、どうするかしらと見てゐると、彼は先の車掌が見てはしないかと、車の方に氣を配りながら、素早くポケツトから赤切符を出して改札口を通つてしまつた。彼がそれを見て、糸子の方を見ると、彼女

もそれを見て、彼の方を見た。二人は眼を見合はして、出來るだけ輕蔑の微笑を交した。

だが、その翌日の朝のことであつた。糸子も彼女の子供も未だよく眠つてゐたが、山根は何故か早く目が醒めたので、温泉に入つてから、宿屋の庭を一人で散歩してゐた。彼はこの家には四年ぶりであつた、何故といつて、この前の時にはゆめ子に會ふ關係から、上――町の知らぬ宿屋に泊つたからである。四年前、五年前、六年前、――六年前には彼は未だ氣樂な獨り身であつた「六年は經過せり、か、」そんな言葉を口ずさみながら歩いてゐると、以前からの馴染である番頭が「お早う、」と聲をかけて近づいて來た。彼が妻でもなさうな、といつて妙に親しさうな子供づれの女と一緒に來たことを、宿の者たちは不思議に思つてゐるに違ひなかつた。五年前今の彼の妻と知つたのもこの宿でのことであるし、その前にゆめ子を初めて見たのもこの宿でのことである「近頃だから藝者でも見ようかな、」と彼がいつた時、「つひ近頃お披露目をした、音無しい、人柄なのがありますから、お呼びして見ませうか、」とゆめ子を呼ぶことをすゝめたのもこの番頭であつた。その頃、彼女は初めの時の子を生むのに、一年ばかり休んでゐた後で、新しくお披露目をしたばかりだつたからだ。――

「先生、」と番頭は彼のことを呼んだ、そして何か事ありげに聲を低くして、「妙なことがございます、――先生、昨日驛尻から先生のお乗りになつてゐた汽車に乘り合はした藝者がございましたでせう、お氣づきになりませんでしたか、あの中に、先生、あの……」と彼は急にいひにくさうにして、「その、……以前先生の奥さんに抱へられてゐた子がゐたんでございます、いや、先生は御存知ないでせう、先生のお出の頃はちよつと止めて居りましたと思ひますから。先方では先生の顏を存じてゐるのでございます。」

「何だ、そんなことか、」と彼は心の中で思つた。

が、番頭の話はまだその先があつた。「その藝者たちと一緒に六十からみの年寄が、――えゝ、洋服を着たのが、乘つて居りましたでせう、何でも、三等の切符を持つてゐて、女たちの方へ乘つて來たんだといつてましたが……」

「あゝ、知つてるよ、汚い、厭なお爺さんだつたよ、」と彼はいつた。

「へゝゝゝ、」と番頭は番頭らしい笑ひ方をしながら、手を揉んで、「あの年寄がその、へ、その……」と彼は再びいひにくさうにいひ淀んでから、「あのさち子でございますね、先生の小說のゆめ子、――へえ、そのゆめ子の父親なんでございます。」

「お父さん、本當の？」と彼は驚いて、急に眞面目な顏になつて聞きかへした。

「へえ、本當の父親でございます、I――といつて、こゝから七里ばかりあります、天龍川の岸の町の者でして、かういふと何ですが、名なくせに道樂者で、へえ、商賣といふと、さあ、何といつたらいゝでせう、繭買ひもしますし、保險の勸誘員のやうなこともしますし、それからまあ詐欺のやうなこともしますし、誠に評判のよくない人物ですが……もつともさち子に幾の上から今の家――叔母、といつても、あの年寄の上さんの姉になる人ですが――そこへ貰はれて來たんですから、親子の情合なんかちつともないやうでございます。ずつと以前のことですが、あの年寄はさち子をお座敷に呼んで、口說いたことさへあるといふ話です。その爲ですか、さち子は本當の親ですけど、決してあの年寄には會はないさうです。もつとも、それに今のあの子のお母さんといふ人も、あの年寄を決して家へ寄せつけないさうですから……」ゆめ子に關係したことだからと思つて、番頭はそんなに熱心に、あの不愉快な老人のことを彼に話すのだらうが、この話は彼を二重にも三重にも憂欝にした。だが、彼は默つて彼の話を聞いてゐた。

「ところで、そんな譯分らずの親爺なんですが、妙なものでしてね、」と番頭は更につゞけた。「もうこの六七年も七八

年もの間、向うからもこつちへは近かづかないやうにしてゐたんですが、あの、さち子に子供が出來ましてからは、よい〳〵顔を出すやうになつたんでございます。それもさち子の家へ行つたところが、寄せつけられないんですから、家へは行かずに、子守が守をしてゐる傍へ行つたり、つまらない玩具のやうなものを買つて、子守の背中で持たしてやつたりするんです、さち子の家ではそれを厭がるんですけど、表ですることですからね、どうとも仕樣がないんだらうです、だから、昨日も亦その孫を見に來たんだらうと思ひます。」

「ぢやあ、こちらで下りないで、上――町の方で汽車を下りたらよささうなものぢやないか、」と彼が聞くと、

「それが、この一週間ほど、こちらの母親が病氣してゐるものですから、さち子が二人とも子供を連れてこつちへ歸つてゐるんです。さういふことを、離れたところにゐて、あの爺さん、どこで聞くんですかね、」と番頭はいつた。「本當に妙なお爺さんでございますよ、あの年をして、今だに女が好きなんですが、女より又子供が好きなんです、殊にさち子に子供が出來てからさうらしいんですが、子供といふと、誰彼なしに好きと見えまして　愛想を振りまくんですが、あんな恐い顔をしてるもんだから、知らない子供はすぐに泣き出すんですよ。先生、汽車の中で先生の坊ちやんたちにからかひませんでしたか?」

「僕の子ぢやないよ、」と彼はあわてゝいつた。

「いやこれは、へゝゝゝ、つひ御一緒なもんですから、」と番頭はいつた。そして獨言のやうに、「昨夜は爺さんどこへ泊りましたかな。」

「だつて、藝者なんかと大分馴染らしいぢやないか、」と彼が聞くと、

「へえ、馴染といつたつて、お座敷で知り合つたといふ譯ぢやないんです、狹い町のことですから、」と番頭はいつた。

彼はその時、白づと膝を打つやうに思ひ出したことがあつた。それは昨日初めてあの老人を見た時、見たやうな顏だと思つたのは、それは娘のゆめ子に似てゐたのではなくて、彼女の不結穩な二番目のに似てゐたことであつた。そこで「さうかね、あの爺さんが……」彼は感慨深く獨言つやうにいつた。

「をぢさアん、」とその時目を醒まして起きて來たらしい糸子の子供が、二階の欄干から下を見下ろしながら叫んだ。

「もう起きたの、早いね、」と彼は下から聲をかけた。「そんな裝をしてたら風を引きますよ。母さんは？」

「まだ寢てるの、」と上からの聲がいつた。

「おやあ、をぢさんが着物を着せて上げやう、」と半分口の中でいひながら、彼は番頭と別れて、家の中に入つて行つた。

番頭の話のやうに　ゆめ子が養母の病氣でこつちへ來てゐるとすると、彼が豫定して來た二三日の滯在の間には、彼女に會ふことが出來ないかな、と彼は梯子段を上り上り殘念に思つた。

部屋に歸つて行くと、糸子ももう起きる仕度をしてゐた。彼女は自分より先に子供たちの着物を着更へさせやうとすると、上の方の子は彼が入つて來たのを見て、「僕、をぢさんに着せてもらふんだ、」と叫んだ。

「よしよし、をぢさんが着せてやらう、」と彼はいつた。が、彼女に向つて、「それより、それより直にお湯に入つて來たらどう？」といふと、

「さうしませう。――さあ　母さんとおぶうに行きませう、」と彼女はいつて立上つた。

その日、彼は宿屋の番頭を呼んで、當分こちらで住む人のために、手頃な借家と女中とがないだらうかと相談したが、すぐにはそんなものは見當らないだらうとの返事であつた。しかし、尙主人にも相談し、心當りを探しては見ます

が、といつて、番頭は下りて行つた。夕方、彼は糸子と、彼女の子供たちを連れて町を散步した。

「こゝを右の方へ行くと山の方へ行くの。坊や、明日のおひるでも、をぢさんと山の方へ行つて見やうね、」といひながら、彼はゆめ子の家の前の、坂道の上に立ち止まつた。そして、山の方の道を指しながら、別の目で、左側の彼女の家の方を盗み見た。昔の通り、それは石垣の上に、小さな庭を扣へて、一本の門の柱に、「何々家」としるした文字が最早や半分剝げてゐる軒燈と、その奥にひつそりした、家があつた。だが、家の中はしんかんとして、明りの影も薄暗く、彼の欲する聲も姿も得られなかつた。だ、坂道を下りて、歸りにその前を通る時、その家の中から赤ン坊らしい泣き聲が聞えた。彼はふと、あの汽車の中の老人が、彼と同じやうにこの薄暗がりの町を徘徊してはゐないかと思つた。

その翌日、彼が今日明日のうちに一度東京へ歸るといふと、糸子は「わたしも歸るわ、」といつた。

「だつて、折角來たんぢやありませんか、」と彼はいつた。「それに、さつき番頭が手頃な貸してくれる家がありさうだといつてたぢやありませんか。」

「だけど、わたし、」と彼女は持前の艶つぽい恰好に身體を拈ぢらせながら、「わたし、矢張り東京の方がいゝわ。同じ住むなら矢張り東京に住みたいわ、何とかして、」と駄々をこねるやうにいつた。

彼は無理がないと思つたので、何とも答へなかつた。

「それとも、あなた一緒に住んでくれる?」と彼女はしばらくしていつた。「そしたら、わたしゐてもいゝわ。あなたは好きな人のゐる町だからいゝでせう。」

「だけど……」

「いや? いけないわね。やつぱり東京へ歸りませうよ、」と彼女はいつた。

子供たちも傍から彼女の兩方の肩にとまつて、東京へ歸りたいと叫んだ。

「だつて、これから東京へ歸つて、どういふ風にして暮します？」と彼が聞くと、

「當分、あなたの下宿……」といつて、彼女は彼の顏色を見ながら、それを冗談のやうに笑ひ消してから「嘘、嘘。わたし郊外にどこか探すわ、」といつた。

「それもいゝでせう。S――に住むといふのも少し氣まぐれ過ぎましたね、多少は僕の責任もあるかな、」といつて、彼も仕方なく苦笑した。

その翌日、彼等は再び東京に歸つて來たのである。飯田町に着いた時は、彼も彼女も變に不機嫌に陷ちて、無口になつてゐた。

「これからどこへ行きます？」と別れる時彼が聞くと、

「どこへでも、……當分下宿でもします、」と彼女も怒つたやうな聲で答へた。

「だつて、今夜のことを？」と彼も少し心配になつて聞くと、

「わたしこの近くに、以前ちよつと泊つたことのある宿屋がありますから、當分そこへでも……」

「ぢやあ、さうなさい。坊や、さよなら、」といつて、彼は彼女たちと別れた。

一週間ぶりで家に歸つて來ると、机の上にたまつてゐる手紙の中に、彼は彼の手蹟で書いた、彼に宛てられた手紙を發見した。いふ迄もなくそれは滕からであつた。それには「坊やが父さん父さんと毎日いつてゐます。家がおいやなら、いつものところで宜しいから、御都合のいゝ日と時間とを知らして下さい。その節は坊やを連れて行つても宜しうござ

いますか、」と書かれてあつた。彼は人に見られぬように、讀み終るとすぐにそれを切れ切れに破つた。が、彼はしばらく消息に殘されたまゝで、外の手紙を開く勇氣を失つてしまつた。が、十分後には、彼は今の手紙のこととは全く別の、「あゝ、糸子の行くといふ宿屋の名を聞いておけばよかつた、」などと思つた。

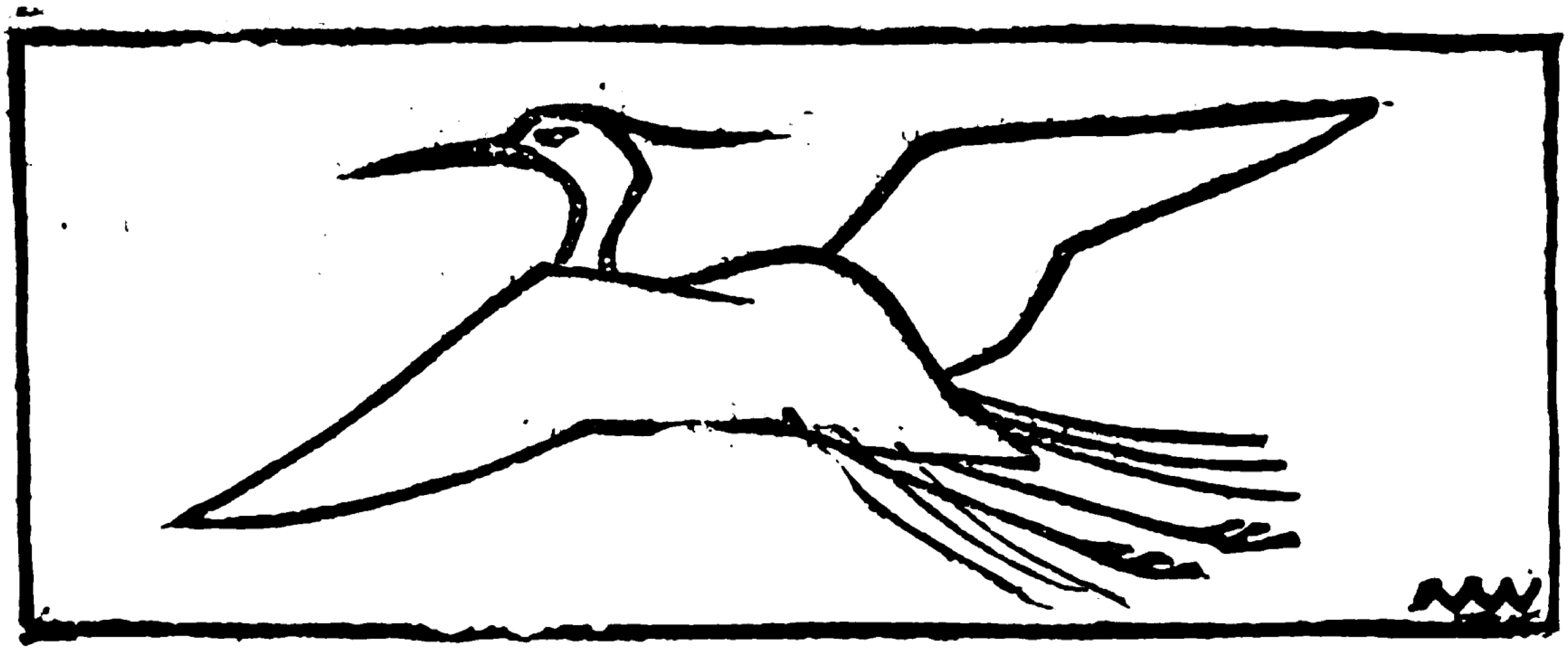
* * * * * *

* * * * * * *

「××の停留所はどの邊ですか？」とその時、タクシの運轉手が聞いたのである。

はつとして、見ると、自動車の行手の四半町ばかり先に、見覺えのある××停留所の、路傍の電柱に取りつけられてある赤い電燈が目についた。

「よし／＼、こゝでいゝ、こゝでいゝ、ストップ！」と彼はあわてゝ叫んだ。



狂つた時計

野上彌生子

三月下旬の或る日、澄子は午前九時の汽車で上京する筈の伯父の小兵衛を父に代つて出迎へるために、新橋の停車場前の廣場を急いでゐた。時節にすると少し寒かつたけれども、雨の後の清潔な感じのする朝であつた。廣場のところ〴〵に出來た水溜りには、空の雲の一片が浮かんでゐた。土もまだほこりをあげなかつた。車がその上に淺い轍をつけて輕快に駈けた。旅客は車上の者も歩いてゐる人も皆んな愉快さうにしてゐた。まつ赤な郵便馬車がけたゝましくベルを鳴らして彼等の間を突つ切つた。丁度その時河岸の廣告塔の上に昇つてゐた大きな太陽の放射を受けて、廣場の一切のものが新鮮に晴れ〴〵と輝いて見えた。

澄子はなるたけ混雜に卷き込まれないやうに、廣場の右の端を運送屋の店に添うて歩いた。彼女は相變らず瘦せて青白かつた脊がます〳〵伸びたので、小さいしやくれた顔が尚小さく見え、持前の黒瞳を一層目立たせた。この黒瞳のみが澄子の僅かな美しさであることは、今年十七になつた今でも子供の頃と變りはなかつた。眼

裝も丁度身體に似合つた程度の平凡なものであつた。人に依つては、中古の矢絣銘仙の着物と色の褪めかけた袴を貧臭いと思つたかも知れなかつた。現に停車場の石の段々に近づいた時、春休みを鎌倉の別莊へでも行くと云ふ風な派手な女學生が二人連れで後から追ひつき、ちらと輕蔑の一瞥を投げて通り過ぎた。澄子は彼等が自分のつぎの當つた左の靴を見遁さなかつたのを知つてゐた。でも、それで屈しはしなかつた。澄子は目の前の石段を驅け上る彼等のきら〳〵した踊り靴のやうな二對の高い踵を、落ちついて、寧ろ冷然と眺めた。

『やあ。』

プラットフオームに入るのを避けて、わざと開札口で待つてゐた澄子を、いち早く見つけた小兵衛は、群集の中から帽子を振つて見せ、切符を渡してしまふと、いつもの機嫌のよい笑顏で近づいて來た。伯父と姪は、三年ぶりで逢つた。

『よく來てくれた。』

『父が參る筈ですが、今朝は早くから人を訪ねる約束があつて失禮しますつて。』

『いや、それには及ばん。――皆んな變りはないかの。』

『えゝ。』

二人は話しながら出口の方へ歩いた。赤帽が荷物をまとめて待つてゐた。伯父は序でに人力車の切符を買はせにやらうとして、何氣ない風に横井の家が三月程前新たに引越した家に就いて聞いた。

『神田××町と云ふのは、どの邊ぢや。』

「和泉橋つて橋を御存じですか、伯父さん、あの近所です。」

「すると外神田おつやな。」

伯父さんはそれ以上は尋ねなかつた。この一家の二三年來のはげしい引越が何を意味するかは云ふまでもなかつた。澄子としてもそれに就いては、既に自分のつぎの當つた古靴や着物に對して持つてゐると同樣の可愛い哲學を持つてゐた。格の低い町や小さい家が決して住む人の價打に影響はしない。――澄子は一心にさう信じようとしてゐたに拘はらず、今度の家だけは久しぶりの伯父に恥かしかつた。三十分の後、二臺の人力車は澄子の云つた橋を渡つてから段々賑やかな町から外れて行つた。案内役の意味で前の車に乘せられてゐた澄子が車夫に曲り角を教へる度に、一層淋しい通りと一層見すぼらしい家並が現れた。最後に、片側は何かの倉庫らしい灰色に塗つた建物に塞がれ、一方は小さい酒屋、駄菓子屋、ちよつとした格子戸の家、ペンキ屋、古道具屋と云ふやうなもの丶續いた裏町に入つて、中程の建具屋とミシン屋に挾まれた一つの粗末なくゞり戸の前に來た時、澄子は車を留めて、伯父をその中へ導いた。けれども其處がすぐ彼女の家ではなかつた。戸の後は細長い露次になつて、右側には二軒の小さい家が並び、左側は材木小屋になつてゐた。而して二人が近づいて行つた奥の正面の格子戸の上には新しい木札に藤田と出てゐた。これはお加代の苗字であつた。

お加代は表での足音を聞きつけると、昨夜不意に大阪から小兵衛の電報が來た時の不機嫌は微塵も表さない、愛想のよい笑顔で出迎へた。――來た以上、大事にして損の行く客ではなかつた。――二三匹の猫が相變らず前後に纏れてついて出た。

「さあ、どうぞこちらへ。お疲れでございませう。――お前たちはあつちへ行つてお出でな。――仕樣がないねえ。――

「澄ちゃん、連れて行つて下さいよ。」

澄子はこの命令で自分も一緒に追ひたてられたのを知つた。で、猫を呼び集め、それを抱へて引つ込んだ後は、もう出て來なかつた。それがこの家では不自然に見えなかつた。

小兵衛の通された部屋は、臺所を入れても六間以上はないこの家での唯一の客座敷であつたが、ひどく暗く、住み荒らしてあつた。壁や唐紙には雨洩りの跡が現はれ、疊も赤く燒けたまゝであつた。小兵衛には見覺えのある紫檀の卓と黒い革張の長椅子が、度々の差押えから免れて其處に殘つてゐた。この部屋の中ではそんな金目な裝飾物が却つて不自然に見えた。而して床の間に懸物がはりに吊されてあるナポレオンとミル——元は準造の書齋の壁に掛つてゐた二枚の古風な銅版の肖像畫や、反對の長押に張つた何處かの稻荷樣の大きなお札と共に、贅澤と貧乏と知識と無知の變な混亂を作り出してゐる中で、部屋ぢうの一切のものが、かち、かち、かち、かちと云ふ律動的な金屬性の響を立てて絶えず鳴つてゐた。

「いちんちこれですから。」

お加代は上手に肩を寄せて見せながら、壁一重の後が飾り屋である話をした。けれども今までは兎に角山の手の門構の家だけは離れなかつたのに、どうして斯んな露次の奧なぞへ越して來たかに就いては説明しようとはしなかつた。それは自分たちの落目な話に觸れまいとする痩我慢のみではなかつた。お加代は引越の本統の理由は知らなかつた。準造が一人で突然に極めてしまつた。その事で二人は喧嘩したほどであつた。小兵衛としてもその問題に深入りはしなかつた。彼はたゞ斯んな露次の中によくこれだけの家でもあつたと云ふ風にあたりを見廻した。

「一體この家はどうした家かな。隨分古い樣ぢやが、木口はさう惡くはないな。」

「大星の先代がゐたのだとか申しますよ。」

『成るほど。』

其處へがらりと格子戸の開いた音がして、

『おい、また直ぐ出るんだから車はその儘でよろしい。――何？さうだ、一時間位なものだ。』

と云つてゐる高い聲が聞こえたと思ふと、出先から歸つた準造が、

『やあ。』

と快活に入つて來た。彼はぱつとした若々しい時代がない代りに、いつまでも決して年寄らない不具者の共通な特長に依つて、三年前とちつとも變らぬ顏をしてゐた。ふとつて丈夫さうに見えた。これは彼の健康を普通の人に對する以上に氣にしてゐる兄に取つては何より安心であつた。が、準造はそんなことを話題にする暇は與へなかつた。彼は座に着くと行きなり聞いた。

『今度は何の用事です。』

『何と云つて色んなことで引つ張り出されて來たのぢやが。』

小兵衛は話しかけて急に氣がついたやうに自分から尋ねた。

『お前は□□會社のA――さんは知らんかの。』

『A――？知つてゐるとも。昨年或る事で喧嘩してそれつきりになつてゐるが。A――がどうしたのです。』

『あの人が國の輕便へ金を出すことになつて、今度逢はねばならんのぢやが、中々やり手らしいな。』

『彼奴は盗人だ。』

準造は一言吐き出すやうに云つてポケットを探り、煙草を取り出して火をつけた。もう葉卷ではなかつた。

『X――社の紐育支店長時代には石油の二三十萬圓から飲んだ男なんだから、ふんだくることにかけちやお拔目はないが、その他はなんにも分かる男ぢやない。』

『金は出來てるんぢやな。』

『それだつて世間で云ふ程ありはしない。たゞ××銀行のB――を旨く抱き込んでそれで仕事をしてるまでです。B――と來たらまた手のつけられない馬鹿でね。豚が洋服を着て頭取室に收まつてると思へば間違ひのない男です。だからA――にいゝやうに利用されてるんだ。』

『さうばかりも云へまいて。』

『なあにさうだとも。彼奴等に限らずそこいらの連中が悉くそれなんだ。馬鹿でなけりや悪黨だ。さうでない奴は意久地なしの幇間だ。』

小兵衛は自分も煙草に新しく火をつけ、濃い煙の間からにこ／＼したがら、眼だけは、でも非常に注意深く弟の顏を見据えてゐた。

『しかしどんな金でも價値に相違はない。社會は要するにその金に支配されて行くのだから、空手ぢや何をしたつて駄目だ。代議士だつて下らんことだ。實際、あんな馬鹿騷ぎに金を使つたのを僕は今ぢや後悔してゐる。あの金が惜しくなつた。』

『なんぢや、七郎の云ふやうなことを云ひ出したぢやないか。』

小兵衛は面白がるやうに聲を出して笑つた。併し兄がその瞬間に本氣に感じたものは、笑聲とは反對な一種の淡

然とした怖れであつた。準造が誰の惡口でもづか〳〵云つてのけるは珍らしいことではなかつたが、今日の言葉には輕蔑や冷笑とは別なものがあつた。殊に無駄に捨てた金に就いて惜んだ時の彼の小さい嚴つい顔には、これまでの彼には、少くとも三年前までの彼には、どんな失意の間にも見られなかつた烈しい燃え立つやうな焦燥が浮かんでゐた。

『分家の兄貴があの金を惜しむのとは僕は惜しみ方が違つてゐる。』

準造は興奮を抑へた口調で斷言し、兄に説明すると云ふよりは、寧ろ、自分自身に云ひ聞かせるかのやうに續けた。

『分家の兄貴はたゞ溜めて置き度いから惜しむ。僕は最後に大に使ふために惜しむ。根本の相違だ。——チエンバレンつて男のことをこの頃よく考へるが、あの男の偉いのは金が出來るまでは決して政治界に手を出さなかつた點だ。やる時には大きな力を提げて飛び込んで行く。あれでなければ本統の仕事は出來ない。僕は高い犧牲を拂つてやつとこの平凡な眞理を知つた。專攻の學問からすれば、誰よりも最もよく知つて居るべきであつた金の眞の價値を、今やつと悟つたのだ。——併しこれからだつて遲くはない。僕はまだ五十にならないのだから、これから十年間一生懸命に金を拵へるとして、六十までにはまだ大分利用が出來る。僕の斯んな身體だつて六十まで生きない筈はないからな。——生きるとも。この儘貧乏して死んぢやたまらない。』

小兵衞は今度は最後まで批評の言葉を挾まないで聞いてゐた。どんな事でもやると云つた以上やる人間であつた。何物も止めることは出來なかつた。併し彼の云ふ十年は金を溜める日數としては決して長い時間ではないのを、地道な商人として小兵衞は誰よりもよく知つてゐた。

『何にしても、あんまり、妙なことはして貰ふまいぞ。』

小兵衛はこの不安な言葉を口から出しはしなかつた。準造も自分の計畫に就いてそれ以上の説明は與へたかつた。

弟は默つた。

ナポレオンとミルは冷靜にこの沈默を見下ろしてゐた。飾り屋の金槌は壁の後から不斷の苛立たしい單音を送つた。

その時隣りの茶の間の方で、かすかに彈條の解けるけはひがして、今一つの別な高い響が起つたと思ふと、それがけたたましいテンポで鳴り續け、終に二十七まで打つて突然止まつた。

『あの時計は滅茶苦茶なんだ。時によると四十位打つ。』

準造は驚いて顔をあげた兄を痛快さうに見て笑つた。

『一つ買つたらよからうに。』

『そんな金があるものか。』

準造は突つ放すやうに云つてから、後を振り向き、大きな聲で聞いた。

『おい、十一時かい。』

『十分前ですよ。』

茶の間からは、話の途中で座を外づしてゐた加代の冴え〲した聲が答へた。針だけはどうにか時間の通り動くのであつた

『ぢや、僕はまた行かなけりやならない。――おい、出掛けるから、さう云つて呉れ。』

お加代は今度は返事はしないで座敷に戻つて來た。

『まあ、あなた、お久しぶりにお兄さんとお晝御飯を召し上つて行らしつたらよろしいでせう。――何にもございませ

んけれども　御用用でもと思つて——』

『いや、いや、わしにならか今日はおいて貰はう。』

小兵衛はお加代の後半の言葉は當然自分に云はれたものとして忙しく遮つた　彼は同じ用事で前から來てゐる連中に早く逢なければならないこと、從つて今度は京橋の宿屋にゐる筈だと云ふ話をした。

『その方が僕の方も都合がいゝ、この家には兄さんを泊める部屋はないんだ。』

準造はきつぱりとさう云つて斷り、兄を殘したまゝ出て行つた。

『本統にあんな人つてございません。』

お加代は見送りをすまして歸ると、準造の冷淡を取りなすやうに、その癖、小兵衛が宿屋へ泊まるので肩の重荷を下ろしながら、熱い茶を注いだりした。

『子供の時からあれで通つたのぢやから德な男ぢや。』

小兵衛は弟の調子には馴れてゐた。また彼の顔や言葉の中に感じたさつきの不時な悴れに就いても　お加代を相手にそれを口に出すほど無思慮ではなかつたので、最後まで機嫌よく茶を飲み、菓子を摘まんだ末、靜かに云つた。

『どれ、わしもそろ〳〵お暇としよう。』

彼はその前に用意して來た紙包を置いて行くのを忘れなかつた。お加代はまた小兵衛の手が側の小鞄にかかるのを見ると、傍を向いて、準造が放り出して行つた朝日の空袋を拾つた。宿屋へ泊まるとすればいつも程多くはないかも知れない。——そんな心配は色にも見せなかつた。きちんと水引がかかつた一封がいよ〳〵膝の前に差し出された時さへ、巧みに濟まないと云ふ顔をした。たゞ同じ紙包を受け取らせるために[illegible]だけは、さつき[illegible]と一緒に[illegible]

ひやつた時とはまるで違つた調子で優しく響いた。

『澄ちやん、いらつしやい。――伯父樣にお土産を頂きましたよ。』

小兵衞はお加代が呼ばうとした車を斷つたので、澄子が電車まで見送ることになつた。家を出ると、伯父は三年ぶりに見たものについて、またお加代には決して話し出さなかつた事について、姪に尋ねようとした。小兵衞の態度は一時間前、停車場で家のことを聞いた時よりはずつと積極的になつてゐた。

『お父樣は毎日あゝ忙しく出歩いてゐるのか。』

『えゝ。』

『身體は丈夫なやうぢやな。』

『えゝ。』

『今は何をやつてゐるのぢや。』

『――――』

『どんな人が來る。』

『お客樣ですか――』

伯父は念のために近年まではまだ確かに準造が往來してゐた二三の知名な人の名前を擧げて見た。澄子はそんな人が訪ねて來たことがあるか覺えない位であつた。少くとも今は客らしい客はなかつた。その中で尙訪ねて來るやうな者は準造の方で遁げなければならなかつた。今度の家をお加代の名前にしたのもそんな人達の目を晦ます手段に外ならないのを澄子は知つてゐた。同時にそれに依つて引き起される不安や悲しみ、または父親の上に確かに起りつゝある新たな

怖ろしい轉機に就いて、信頼して話される人はこの伯父一人であり、伯父もそれを求めてゐることがわかつてゐて澄子は思ひ切つて打ち明ける勇氣がなかつた。と云ふよりは、孤獨の中で養はれた彼女の強い獨立性が、何事も容易に口から出させなかつた。

小兵衛は默り込んだ姪と一緒に自分も無言の儘歩いた。彼は時々姪の血色の惡い小さい顔をぢつと見た。——これも親父の娘で中々いこぢ者だわい、と云ふやうに。——が、頓て電車通りに出て、品川行の電車を待つてゐる間、彼は今一つの事を尋ねるのを止めはしなかつた。

『お加代はこの節は落ちついてゐるやうかの。』

『えゝ。』

澄子は思はず顔を赤くした。伯父さんは矢張りあのことを知つてゐらしたのだ。——電車が來た。小兵衛は乘つた。動き出した。澄子は靜かに赤い電柱の前を離れながら、三年前の忌はしい出來事に就いて新たに思ひ出してゐた。この事を思ふと、お加代が二月目に父親や新吉に連れられて歸つて來た當座のことがはつきり目に浮かんだ。終列車で家についた時、お加代は殆んど氣狂ひであつた。化石したやうな物凄い顔をして、誰とも口も利かなければ返事もしなかつた。久しぶりの女主人を見て懐かしさうに鳴き寄る猫さへ見向きもしなかつた。直ぐ寢たきり明けの日から病人のやうに、實際幾らか病氣になつて、當分起きなかつた。準造はその間お加代のあらゆるヒステリを忍んだ。彼は外の世界とその活動を忘れた。一歩も家を離れなかつた。お加代はまたそれを怒つた。時には優しい笑顔と言葉で部屋に入つて行く彼を部屋から追ひ出した。

『あつちへ行つて下さいよ。うるさいつちやない。——さ、行かないか。——行かなきや私の方でまた行つてやる。』

お加代は怖ろしい見幕で叫び、枕許にあるものを手當り次第取つて投げつけた。

澄子はこれ等の顛末を默つてぢつと眺めて來た。その頃には父親の心持が、今十七になつて分かるほどよく分からしなかつた。すべてが異様で汚なく、怖ろしく、悲慘に見えた。殊に不貞な妻の横暴に對して、犬のやうに忍び屈してゐる父親を見るのが、他の場合では人一倍、傲慢な彼であるだけに、口惜しかつた。澄子は一切の責任者としてお加代を憎むと共に考へた。それにしても、不幸な父親に誰か一人でも眞實を盡すひとがないであらうか。——澄子がそれを思ふ時は、いつでも何處に生きてゐるかも知らない母親を思ふ時であつた。

澄子は電車道に續いた柳の並木の下を考に耽りながら歩いた。家へ曲る通りをわざと意識して通り過ぎた。歸り度くなかつた。と云つて何處へ行かう。澄子は小學校からさうであつたやうに、家まで訪ねて行つたり來たりする友達は、女學校になつてもなかつた。斯んな場合の僅かな避難所であつた女中部屋さへ、昔のやうな意味ではもう存在しなかつた。新吉とおよねはあの事件の後間もなく暇を出された。お加代の一種の復讐であつた。二人は新吉の兄のゐる朝鮮へ行つてしまつた。

澄子は何處を歩いてゐるのか、何を見てゐるのか分らない氣持で歩き續けた。もう少しで河岸に出ようとするところの一本の柳の傍にさしかかつた時、澄子はふと足を留めた。柳の陰には五つばかりの汚ない女の子を連れたかみさんがゴム風船の屋臺を出してゐた。其處へ荷車を曳いた一人の人足らしい男がやつて來たと思ふと、男は車を屋臺に曳き寄せ、腹で梶棒を支へたまゝ立つてかみさんと二言三言話した。側で商賣用の風船をおもちやにしてゐた子供にも何か云つた。子供は甘へるやうな様子をして笑つた。人足は屋臺を離れた。でも、彼の荷車がまだ三間とは進まないうちに女の子は駈け出して追つかけ、甲高い、子供らしい聲で呼んだ。

「お父つあん」

人足は振り返つた。かみさんは屋臺の下から出したビール瓶のやうなものを差し上げて見せた。人足は逞ましい顔でうなづいた。而してまた車を曳いて行つた。澄子は人足が風船屋の屋臺を離れた時やつと自分も歩き出し、子供に呼び留められた時にはまた我ともなく立ち留つた。かみさんの見せた瓶が何を意味するか、瞬間には見當がつかなかつた。すぐその後で、水素を作る鹽酸かなんか買つて來るのを頼んだものだと思ひついた。澄子は胸の底から溢れ上るものを喉で押へつけ、うつむいて去つた。

それから二三日した夕方であつた。一人の新參らしい若い郵便屋が、左の手に一束の郵便物を握り、制帽の庇の下の顔を不機嫌にしかめて、せか／＼した足取で露次の中へ入つて來た。郵便屋がこんな顔と歩調で歩いてゐる時は、乾度手紙か葉書のどれかが餘計な世話を焼かせてゐるに相違なかつた。實際彼は怒つてゐた。で、突當りの家まで眞直に歩き、その格子戸を亂暴に引き開け、同じ位亂暴な聲で怒鳴つた。

「郵便。」

澄子が出て來た。お加代は女中と洗湯へ行つた留守で、他には誰もゐなかつた。

「此の家に横井準造と云ふ人がゐるかね。」

怒つた郵便屋は田舍訛りで、戸籍調べの巡査のやうに詰問した。澄子は返事の聲が出なかつた。彼女はたゞ顔で肯定した。

「同居人なら同居人のやうに藤田方を書いてなけりや配達は出來ないね。どれも××町二十番地だけだから分らないしねえ。でなけりや今一つ表札を出して貰ふんだ。ちやんと横井準造と書いた奴を。――いゝかね。」

郵便屋は今まで散々探させられた時間をこれでやつと晴らしてしまふと、今度はわざと落ちついて、左の手の束二三枚の手紙と葉書を抜き出し、土間へ投げ捨てゝ去つた。澄子は暗い玄關で唇を嚙んでゐた。寧ろ發信人に云ふべきであつた郵便屋の不當な叱責に抗議しようともしなかつた。澄子はこれを不當とは云へなかつた。父親の出す手紙にしても決して藤田方とは書かなかつたし、澄子自身にしてもこれを書く勇氣はなかつた。郵便屋の叱責はこの家の痛い傷を突いたのであつた。

けれども土間に散らばつた二通の手紙と一枚の葉書を拾ひあげた瞬間、澄子は不意に手易くその屈辱を忘れた。封書の一つは思ひがけもないおよねから自分に當てたものであつた。所番地が三年前の家になつてゐるので附箋が何枚もついてゐた。澄子は父親の分をきちがひ時計――狂つた時計を家ではさう呼んでゐた――の下の書簡入に挾む間がもどかしかつた。急いで封を切つた。

「あんまりごぶさたをいたして何から申してよいかわかりません。おじようさまおかわりはございませんか。だんなさまもごきげんのことゝ存じます。てうせんはつまりません。ぐちをこぼして新吉にしかられます
さておじようさま。あなたがびつくりなさることがございます。あなたのお母さまになるかたがこのあいだ東京へいらつしやいました。加藤くにさんと申す人です。あなたのことをはなしてあげましたらよろこんでなきました。一どでもよいから見たいと云つてゆきました。でも新吉にあんなしようぶんですから、私がよけいなことを云つたやうにおこつてゐます。――」

　だからこれも新吉には內證だと云ふ斷り書があつて、およねの半紙一枚の手紙はぽつんと終つてゐた。澄子は夢中で讀んだ。下手な象形文字のやうな假名の一字々々が、きら〳〵して火の玉のやうに眼の前を飛んだ。およねは臺所の小使帳には一錢の葱も附け落さないくせに、手紙だけは漢字を知らないのを恥かしがつて書かないのを、澄子は知つてゐた。殊に彼等が横井を出る時は喧嘩別れの形であつたから、新吉さへ葉書一枚寄越さなかつた。その中でおよねにこの手紙を書かせたのは、何かよく〳〵の事情だと云ふことは開けて見ないうちから分つてゐた。でもこんな重大な內容を持つてゐようとは――今になつて自分の母親が現はれて來ようとは――夢にも考へなかつた。澄子は既に餘り長く待ちすぎた。それ故母親に對する澄子の觀念は、その存在の確信には何等の搖ぎもなかつたに拘はらず、だん〳〵現實性を失つて、一種夢現的なものになつてゐた。寧ろそれが氣安かつた。現在の澄子はもはや單純に自分の母親を理想化することが出來なくなつてゐたから。若し母親が澄子の幼い胸に描かれてゐたやうな、美しい、正しい身柄の――お伽代の前生涯に對する厭惡から、澄子は殊にその點を重く考へた――申分のない婦人であつたならば、何故皆んながあれまで嚴重に押し隱して來たか。どんな事情の中にしろ誰か一人位裏切り者があつてよい筈ではないか。大きな聲では云はれないけれども、お前の母親は斯う〳〵した人だ。さう囁いて吳れる者が何故なかつたらう。――いつも澄子の心を暗くするこの疑念は、およねの手紙の上にも擴がつた。殊に『新吉はあんな性分ですから――』以下の言葉は多くの暗示を以つて澄子を打つた。彼女はおよねを餘計なお饒舌屋にしてゐる新吉の怒を、およねの云ふやうに單に彼の氣の小さい律氣な性質から、旦那に內證でそんな一大事を浮つかり洩らすと云ふ法はないと信じたのだ、とのみは考へなかつた。畢度何かの秘密な杞惧か、今まで他のすべての人の口を塞いだと同じ杞惧が、彼の口をも塞いでゐるのを推した。では
それは何か。――

澄子は何遍讀み直したか知れない手紙を膝の上に置き、電燈の下から涙の一杯たまつた目でじつと正面の時計を
めてゐた。八時三分前であつた。澄子はその狂つた時計が三日に一遍位どうかすると時間通り打つことのあるのを
てゐた。若し今正しく八つ打つて呉れさへしたら――澄子は何故ともなくそんな氣がした。――一切の疑慮は消散する
而して親子は近い内に必ず何處かでめぐり逢はれる――澄子は奇蹟を待つやうにそれを待ち、信じた。せめて八に近い偶數を打つただけでも幸福の表示だと思はうとした。併し運命の冷靜な二つの針が、やつと百二十度の角を作つた時、時計はかんとたゞ一つ鳴つたきりで、素氣なく沈默した。

表のくゞり戸の開いた音がして、二人の足音が露次の中をまつ直ぐに急いで來た。澄子はそれで漸く、我に返ると、あわてゝ手紙を懐に仕舞ひ込み、同じ位あわてゝ上り口の二疊に飛び込んで其處を明るくした。斯んなことが一分おくれてもお加代は八釜しかつた。けれども、格子戸に近づいた足音で、歸つて來たのは父親と車夫であつたのが分つた。

『お歸りなさいまし。』

『皆んなゐないのか。』

『お湯に參りました。――御飯は？』

『すんだ。』

澄子は上り口から眞直ぐに奧の部屋に行かうとする父親に先刻の手紙と葉書を持つて來て渡した。彼は二つとも差出人をちよつと見たゞけで、開きもせず、引き裂いて、丸めて捨てた。どの手紙でも殆んど大部分、同じ日に出逢ふのを

知つてゐる澄子は、それが別に異様には見えなかつた。が、その瞬間、澄子はふと感じた。――自分の懐に入つてゐるこの手紙が、どうにかして他の二つのものと一緒にその手に落ちたとして、準造が何心なく封を切つて讀んだとして、今借金の催促狀を破いたやうに、平氣に裂いて捨てたであらうか。

『およねが斯んなことを云つて來ました。』

さう云つて懐の手紙を出して見せ度い、一切のことを何もかも明白にその口から聞き度い物狂ほしい衝動に捕へられた。が、勇氣がそれを言葉にする前に、準造は部屋に引つ込み、彼女自身には當面の急ぎの仕事が殘された。新吉が出た後は、どの車夫も半年とは居つかなかつた。今では、車だけは元の自用のものを捨てなかつたけれども、車夫は車を預けてある近所の車宿から通つてゐるので、澄子は彼が毎晩置いて行くことになつてゐる定紋付の提灯を臺所の壁に掛け、膝掛には輕くブラシを當てた上、きちんと疊んで茶の間の押入に仕舞つて置かなければならなかつた。一方から云へば、今何かすることがあつたのは、胸に充滿してゐる、而して誰に洩らしやうもない情感を紛らす意味で惡くなかつた。澄子は膝掛を上り口の電燈の下に廣く擴げて、いつもより念入りにブラシを使つた。そのブラシは彼女の舌が父親に打ち明けようとして打ち明け得なかつた秘密を、自由にその深い毛の間に囁いてゐた。――寧ろ、全世界に、向つて、母親が見つかつたこと、自分はもう決してひとりぼつちではないことを聲の限り叫んでゐた。澄子の心の底を熱くしてゐた、母親が果してどんな人であらうか、と云ふやうな不安は跡方もなく消滅して、たゞ純粹に一人の娘が一人の母親を戀ひ懐かしむ強い愛のみが燃え上つた。

『お母さん。』

澄子は斯う云つて表に駈け出し度いやうな、今は乾度何處かにゐるに相違ない東京ぢうの家を、一軒殘らず搜し

き度いやうな焦慮を感じた。母親も同じやうに探してゐるに相違なかつた。澄子が此處であこがれ求めてゐたやう何處かゝら自分の娘の名を呼んでゐるに相違なかつた。澄子はたしかにその聲を聞いた。

『澄子。』

彼女は喫驚してブラシを投げ出し、立ち上つた。

『澄子。』

『はい。』

先刻から父親が呼んでゐたのにやつと氣がついた。澄子は手早く膝掛を片づけ、奥の六疊へ行つた。

準造は高窓の下に据えた彼の古い櫻の書き物机に向つて左の肱をつき、同じ古馴染の廻轉椅子に唐紙を後にしてかけてゐた。煙草の煙が彼の不平均に大きな、仰向いた頭の向からまつ直ぐに、糸で引つ張つた電燈を目がけて白く上つてゐた。唐紙の開いた音もその姿勢と煙の棒を亂さなかつた。澄子は默つて隅に立つた。二三分間位待たされるのは珍らしくなかつた。

澄子の目は知らず〳〵左の壁際を塞いでゐる一つのまつ黒に塗られた岩丈な金庫に注がれてゐた。少くとも八ケ月前までは父親の部屋に斯んなものはなかつた。先の家で何度目かの差押に逢ひ、彼の多くの書物と書棚が賣拂はれた後間もなく、この全然別種類の物件が、彼の書齋に入つて來て、書物と書棚の場所を占めた。この變化は以後彼の部屋を書齋よりは事務室か會計室に近い感じにしてしまつた。

澄子は最初は父親が何故そんなものを必要とするか分らなかつた。それが段々分つた時分には、他の重大な變化を悉く知つた。——準造は彼の書物や書棚を敢て競賣にかけた時、すでに一切の知的生活に、今までのすべての社會生活に

離別を告げたのだつたと云ふことを。——斯んな階次の奥で、名前さへ憚るやうな暮しをしてゐたから、その家の中には確かに纏まつた金があること、それをまた法外に高い利子でひそかに廻してゐるのだと云ふことを。——おつと見てゐると、澄子は汽罐車の巨大な鐵の釜を見る時に受けるやうな威脅と怖れをその金庫から受けた。殊に丁度準造の眞後に、彼自身よりは十分一尺高く、まつ黑に默つて突つ立つてゐるところは、前の人間が普通でないだけに、その奇異な肉體を支配してゐる一種超自然な力の表象の如く見えたと共に、取つ付き場のない冷淡と無愛想な沈默に於て、それはまた澄子が父親と二人つきりになつた場合、彼から受けるものに似てゐた。澄子は懐の中の手紙に就いて今では父親に話さうとは夢にも思はなかつた。

準造はやつと煙草を捨て、廻轉椅子をぎりりと半分廻して云つた。

『此方へ來てくれ。』

澄子は書き物机の傍に進んだ。

『これを寫すのだ。』

準造は机の上にあつた一冊の雜誌を取り上げ、ばら／＼とめくつて或る頁を示した。この仕事はこの頃こそ殆どなくなつたが、彼が先に論文を書いたり講演をしたりする時分にはよく命ぜられたものであつた。心得て雜誌を持つて引つ返さうとすると、準造は其處で書くのだと云つた。澄子は思はず父親の顏を見た。これまでは彼の傍で寫したことはなかつた。が、彼の暗い冷たい顏には言葉以上の意味は何んにも現れてゐなかつた。澄子は向ふの隅にあつた小さい腰掛を持つて來て机の右の一端にかけ、其處にあつたペンで一枚の洋紙に丁寧に指定されたものを寫し始めた。

英　國

年度	輸出	輸入
1900	354,374千磅	523,075千磅
1901	347,864	523,990
1902	349,239	528,391
1903	360,374	542,600
1904	....	....

澄子はうつ向いた横顔に父の強い視線を感じた。監視されてゐるのだと思つた。紛れ安い數字を一生懸命氣をつけて寫した。けれども一九〇四年度に移らうとした時、不意に嚴つい聲が中止を命じた。

『もういゝ。』

澄子は驚いてペンを止め、おづ〳〵と聲の方へふり向いた。表はまだ半分も進んでゐなかつた。彼女は何か書誤りをしたに相違なかつた。而して氣短かな彼を怒らしたのに。――が、澄子の怖れた目は父親の不思議な顏とぶつつかつた。彼は怒つてはゐなかつた。怒り以上に烈しい何かの感情を壓へつけた異常な表情でぢつと娘を見詰めてゐた

『伯父さんの京橋の宿は知つてたね。』

準造はその表情を變へないで、突然聞いた。

『えゝ。』

『明日の午後お前をやるやうに云つて置いた。』

『買物へいらつしやるのでせか。』

その時には來てくれと伯父が云つてゐたのを澄子は思ひ出してゐた。乾度父は今日宿を訪れたのだ、而して彼に云ひ含まれたのだ。――同時に澄子は父が自分を呼んだのは輸出入表を寫させるよりは、そのことを傳へるためであつたやうに不圖理由なしに感じた。けれども、彼女の言葉には答へず、また瞬間に不斷の冷淡を取り戻して素氣なく向をむいた父を見ると、澄子は何故それだけのことを書齋に呼びつけていふ必要があつたかを疑ふ餘裕はなかつた。澄子はたゞ餘計な質問を後悔しながら、ペンを拭き、立ち上つて腰掛を元の位置に直し、その儘靜かに部屋を去らうとした。が、閾の上で彼女は振り向いた。呼び戻されたれ氣がした。丁度その時、格子戸の外にお加代たちの話聲と下駄の音が近づいた。すると慥かに呼んだ準造がはつきり否定した。

『呼びはしない。』

澄子は思はずぱたんと唐紙を閉め、今一度上り口を明るくするために飛んで行つた。

伯父は晝飯の後にちよつと近所の骨董店まで行つたと云つて、澄子が訪ねた時は留守であつた。澄子は部屋で待ちながら、今まで曾て知らなかつた力と希望を感じてゐた。およねの手紙を伯父に見せ、それに就て彼の助けを借りようと決心してゐた。今日宿を訪ねる用事も出來たのが偶然ではないやうな氣さへしてゐた。

小兵衛は一つの小さい紙包を下げて歸つて來た。

『これはお出で。大分待つたかの。』

『二十分ばかり。』

『それまでには歸つて來る積りで出掛けたのぢやが。』

伯父はゆつたりした態度で座に着くと早速その紙包を解いて見せた。紫檀の蓋を持つた一面の古硯が出て來た。誰かの土産物らしくなつた。

『歸る前では氣忙しいと思つてぼつ〳〵買つておくのぢやが、さて目につく程のものはえらい値で、田舍者には手が出せんて。』

斯んな物にも目の利く伯父は、好事家らしい滿足で膝の前に置いた買物をぢつと眺め、煙草を吹かしはじめた。澄子はそれを見てゐると伯父の落ちつき拂つた態度が恨めしくなつた。手紙のことを今すぐ云はうか、それとも買物に出るのなら、それをすましてからゆつくり話した方がよいか、思ひ惑つた。どちらにしてもこの場合古つぽけた硯なんぞ眺めてゐるのは餘計な暇潰しであつた。

『今日は三越へでも參りますの、伯父さん。』

澄子は思ひきつて硯から彼の注意を轉じさせようとした。伯父は煙管を口から離し、不審らしく彼女の方へ顏を向けた。澄子は少しまごついた。

『　買物へいらつしやるので、それで私に來いと仰しやつたのかと思つて。』

『ふむ。——ぢや。お前は準造からまだ話を聞いてないんぢやな。』

『話つて。』

昨夜の不思議な父の態度がふと意識に甦つた。併しそれに就いて疑惑を費す間もなく、伯父は改まつた口調で語り出した。

一度にお前が生んだ女が遠方から東京へ出て來て、是非お前に逢ひ度いと云ふ[illegible]やつてくれと云ふから、わしもよからうと引き受けた次第ぢや。一二時間迄には訪ねて來る筈になつてゐるのぢや。

澄子は二つのまつ黑な穴になつた眼で伯父を打ちまもつたまゝ咽喉には言葉が出なかつた。彼女は反射的に帶の間に手をやり、持つて來た手紙を伯父の前に置いた。手紙を讀むと今度は伯父の方で驚いた顏をした。

『これはいつ來たのぢや。』

『昨夜。』

『準造には見せたのか。』

『いゝえ。――今日伯父さんに御相談してからと思つて。』

澄子はもう落ちついてはつきり答へ、伯父からも聞かうとした。

『お父樣はどこかで逢つたのでせうか。』

澄子は伯父の前ではまだお母さんにとは云へなかつた。

『いや、委しい話はわしも聞かん、たゞ昨日の夕方例の調子で飛び込んで來て、斯う〳〵で二人を寄越すから賴むと云つて行つただけなのぢや。』

父はそれから眞直ぐに歸つて來たのだ、而して自分にすべてを打ち明ける積りであつたのだ、と澄子は思つた。而かも終に何んにも話しえなかつた父に對して彼女はかすかに同情に似たものを感じた。この心持に取つては、父が書齋に呼んでくれたことが、既にその話をしてくれたことであつた。

『兎に角、斯うして思ひがけなく逢へるのはよく〳〵お前達も親子緣が强かつたので誠に目出度いが、たゞこちらには

お加代と云ふものがあり、先方にしても獨り身ではなからうで、そこのところはお前が十分注意して、輕率な行動のないやうにせんちうと面倒ぢやてな。』

小兵衛は靜かに硯の始末をしながら、何氣ない調子でこれだけの言葉を添へた。澄子はその時初めて先刻から伯父が硯を見てゐたのは、本統はその忠告を自然に云ひ出す機會を探してゐたのだと云ふことを知つた。同時にその忠告は彼女の母親が結局は他人であることを忘れさせまいとする巧妙な暗示ではないか、――およねの手紙を讀んだ時の最初の不安がまた頭をもたげた。今なら何もかも聞けるのだと思つた。彼女の氏素性について、自分を生み、自分を捨てたまでの一切の顛末に就いて。

『伯父さんは先から知つた人なのですか。』

『おくにのことか。』

『――』

『あれはたしかお前の家に小間使に來てゐたのぢや。』

澄子は赤くなり、悄れてうつ向いた。それ以上聞く必要はなかつた。

番頭が待つてゐた客を取りついで來た。

『加藤さんと仰しやる方がお見えになりました。はい。御婦人の方で。』

伯父は通すやうに云ひつけた。澄子は隣りの控えの間から座布團を持つて來て、向側の伯父の下手の位置にそれを置いた。彼女の心は不思議に平靜になつてゐた。自分の母が下女であつたのを悲んでゐないばかりか、それが極めて自然であつたやうにさへ感じてゐた。實際彼女の胸の底にひそかに根を張つてゐた想像も、今から思へばそれ以外のもので

なかつた。若し[illegible]
その人の坐り場所を拵へたりすることは出來なかつたであらう。

小刻みなちよこ／＼とした上草履の音が階段の方から聞こえて來た。其處まで案内して來たらしい女中が早口で部屋を教へた。足音は進んで障子の前の廊下で止まつた。

『御免下さいまし。』

おづ／＼した低い聲と共に障子が八寸ほど開いて、その間から丸髷に結つた女の頭と、黒繻子の襟が現れた。澄子は淺黑の手絡の色から銘仙の縞柄まではつきり見て取る餘裕があつた。

『さあ、ずつとお入り。』

伯父は高い快活な聲をかけた。中年の小さい瘦せた女が入つて來た。何處かおよねに似てゐる。――猫毛の薄い生え際とそばかすの多い顏を見ながら、澄子はまたさう思ふ餘裕があつた。が、およねよりは黄色くやつれた顏をしてゐた。

而して障子際にぺつたり坐り、窪んだ小さい目をあげて素早く澄子の姿を捕へたと思ふと、その盤石の樣にぢつと見詰め、何か尋ねて口を動かしたが、言葉にはならないで、行きなりわつと泣き出した。澄子はこの泣き聲を批評する餘裕はもうなかつた。熱い刺戟性のものが鼻柱に沿うて突き上つた。涙が左右の眼から競うて溢れ出た。澄子はやつと袖からハンケチを探し出して、それで顏を蔽ひ、聲を飲んで泣きはじめた。

親子は五分間何んにも云はないで泣き續けた。その後でおくにはやつと涙に濡れた兩手を顏から離し、小兵衛に對して云はなければならない挨拶と感謝を口に出した。

『本統におかげ樣で――これで若しお孃樣に逢へなかつたら、私は船から下の關の沖に飛び込んだかも知れません。』

おくには思ひ詰めた口調で斯んなことまで云ひ、およねに出逢ふまでは、澄子が生きてゐることさへ知らなかつたのだと話した。

『丁度八十日目でございました。仲に立つた人が來て、産後が惡くて家でまだ臥せつてゐた私の手から赤ん坊を連れて行きました。その後で一目でもよいから見せて下さいと頼みますと、田舍へ里子に出してあると云ひ、その内に其處で亡くなつたと云つて相手にもしてくれません。今から思へばその人が惡者で、すつかり欺されたのですが。何しろ私はやつと十九、たつた一人あつたお袋は佛性で、人を疑ぐるなんてことは出來ない人間でしたから、眞逆そんな嘘まで吐くとは知らず、云はれた通り亡くなつたものと今日まで思つてをりましたのに、それが無事でまあこんな立派なお嬢樣になつてゐるなんて。』

おくには泣いたり笑つたりして話した。笑ふと幾らか突き出た額とそばかすの多い頰のふくらみ方でおどけた顏になつた。若い時にはその表情は可愛らしかつたかも知れなかつた。今では、小兵衞に今日までのことを何もかも聞いて貰はうとしてまくし立てる稍お饒舌らしい話し方と共に、單純な人の善い性質を表はしてゐるやうに見えた。澄子は彼女よりも百倍も美しい、またその位冷たい、無口なお加代に思ひ比べて、その對照を殊に强く感じた。娘は一種の痛はりと微笑と安心で、生れてはじめて出逢つた母をつくづく眺め、心に囁いてゐた。――可哀想なお母さん、でもいゝ人でよかつた。

母親はまたこの娘から一瞬間も眼を離すのが惜しい風で續けた。

『およねさんに斯う〳〵だと澄子さんのことを聞いた時は、私は夢ではないかと思ひました。夢でも作り話でもない本統のことだと分つてからは、さあ逢ひたくて〳〵、半月ばかりと云ふものは毎日することが手につきません。幾ら思つても自分のやうな者で現[illegible]出[illegible]ますまいし、却つて[illegible]見[illegible]るやうになりますれば、お[illegible]のお心にさはるだらうし、只最[illegible]

りあん坊の時に亡くなつたのにして[illegible]のお父様だと云つても、どうしても會ひたいと[illegible]ことと、
れ合の手前は今年で十三年忌になる母の墓詣りをしたいからと云つて[illegible]山で[illegible]代用して來つたのですが、おくにさんの
舘の青山のお家は疾くに引越してゐらつしやらないし、これだからと云つて大つぴらに訪ね廻る譯にも行きませんし、
一時は途方に暮れました。でも、運よく只今厄介になつてをります千住の遊廓の者の知り合ひに、旦那をちよいちよい
兜町の家で見かけると云ふ人が出て來ましたものですから、昨日思ひきつてそちらへ訪ねて參りました始末で。』
おくには北處で漸造に逢つて今日の會見の約束をして、小兵衛の上京中であることをも知つたのだと云つた。
『亡くなつた母が觀音様を一心に信仰してをりましたので、今日のこともみんな觀音様のお引合せたと思つて、私は來る時に淺草へお詣りをして來ました。——澄子つて名前も、お袋があすこの子育觀音様から貰つて來た名前なのでございますよ。——澄ちやん、よく覺えておくといゝわ。』
お嬢様と云つたり、澄ちやんと云つて見たり、話の間に何遍もまごついてゐたおくにが、この時やつと本統の母親らしい呼び方で娘に直接呼びかけ、それが自分にも不意で嬉しかつたやうに泣きはれた顔を輝かした。
『ぢや私の名前はおばあさんがつけて下すつたの。』
澄子も釣り込まれ、自然に甘へて問いた。その『おばあさん』が生れ落ちるから云ひ馴れたやうな調子で出た。
子育觀音様から貰つた名前には、澄子の外に秋子だのおせきだのと云ふ名前があつた。その中から最後の選擇をしたのは矢張り父親であつたのだとおくには數へ、それから急に悲しげな嘆息を洩らした。
『お父様は澄ちやんの生れた時には、初めはそれは悦んでゐらしたのですがねえ。——』
先刻から思ひやりの深い態度で、でも、決して感傷癖には陷らない落ちついた顔で、おくにの話に耳傾けてゐた小兵

衛は、彼女の溜息に續いた新たな涙を見て、もう親子二人だけにすべき頃だと思つたらしく、吹殼をはたき煙管を筒に收めた。併し座を外す前に、彼はおくにからまだ二三の必要な話を聞いて置かうとした。

『さうすると、おくにはこちらでおよねを知つてゐたのかの。』

『いゝえ。私が世話になつてをります時分には、およねさんはまだゐませんでした。』

二人はほんの近頃京城で知り合ひになつたのだとおくには答へた。

『かれこれ二た月にもなりませうか。私が新しく入るやうになつたお得意先が、新吉さんの兄さんの家だとかで、およねさんとも其處で初めて逢ひましたやうな始末で。』

『では何か商賣でも。』

小兵衛は『私のお得意先』と云つた言葉を取り逃さなかつた。

『私はあの髮を結つてをります。』

おくには率直に云つてのけ、流石に恥づかしさうに、また詫びるやうに小兵衛から娘へ眼を轉じた。澄子は母親の膝に垂れたと云ふよりは握りしめられ、而して明かに震えてゐる骨太な油じみた手を見詰めた。彼女の今の感情には、母親が女髮結であつたのは、女中であつたのと等しく不自然ではなかつた。寧ろその油で黄ばんだ手に對して、初からそれが自分の母親とは切り離されなかつたものゝやうな親しみと安易を感じた。

『朝鮮へ參りましたのは六年ほど前ですが、連ひ合の仕事が思ふ様に行きませんでしたので、つい私もそんなことを始めるやうになりまして。』

『いや、結構ぢや。何をしたつて働くほど大威張なことはないからな。――それで小さいのは。』

『一人もございません。』

この返事でまた急に湧き立つて來た涙をおくには兩手で押え、咽び聲で叫ぶやうに續けた。

『ですから澄ちやんだけはよく〳〵私に授かつた子供と思ひ、旦那樣のことだつて決して恨んではをりません。いゝえ、恨むどころぢやございません。何か餘つぽど不思議な緣があればこそ、あんなことにもなつたのだと今では思つてゐます位で。』

母親のこの言葉が澄子は嬉しかつた。それからまた自分だけが彼女のたつた一人の子供であると知つたことに、氣安い滿足と潔癖に近い快さを味つた。その時何故と云ふことなしに四日前に見た柳の蔭の風船賣りの親子が目の前に浮かんだ。

『お父つあん。』

子供は呼んだ。若し澄子があんな調子で父親を呼びかけることが出來たら。――例へ思ひ切つて呼んだとしても、準造はあの人足のやうに優しくふり向く代りに、冷然と二人の傍を行き過ぎるであらう。澄子は自分たちがどんなに不幸な親子であるか、初めて強く知つた。

その日から澄子には全く新たな世界が開けた。彼女には母親があつた。他の千萬人の娘たちと同じやうに、お母さんと呼ぶことが出來た。伯父の名前はすべてを自然に運ばせてくれ、その宿は二人に最も便宜な足だまりを提供した。親子は其處で落ち合つた。

嫉妬と云ふほどではないが、それでも平氣ではない輕い敵對心と、一つはまたそんな話の好きな一般の女らしい興味

から、おくにはお加代のことを聞きたがり、自分でもむきになつて話した。

『私が澄ちやんと一緒にゐられなかつたのも、云つて見ればあのひとのせゐなんですよ。旦那は私に一軒家を持たせて、其處で澄ちやんを育てさせると云つてゐらしたのですからね。ところへ丁度あのひとゝ云ふものが出來たものだから、すつかり氣が變つてしまつたのですわ。——そりやあのひとは先の奥様とは違つてあんなに綺麗なのだから、男の迷ふのは無理もないし、殊に私なんか初めから太刀打は出來ないと思つて諦めてゐたのだけれども、およねさんに聞けばひどい女だつて云ふぢやないの。本統に何んて圖々しい。——だけど考へると情けないものね。お父様ほどの方がそんな女に馬鹿にされるなんて。』

おくには澄子を最初お孃様と云つたり澄ちやんと呼んだりしてゐたと同じやうに、準造のことをも旦那だのお父様だの交ぜこぜに呼んだ。

「人の云ふほどそんなにいゝ女なの。——いゝえ、私は見たことはありませんよ。尤もあの時分の古い文藝倶樂部に寫眞が出てゐて、それだけは一遍見たやうに思ふけれども。——どつちみち、もういゝお婆さんでせう。さうでもない？本統にどんな女だか見てやり度いわねえ。』

澄子はなりたけその話題を避けようとして、別な話を持ち出した。

『おつ母さんが訪ねていらつした時、お父様はどんな風をなすつて？突然で喫驚したでせうねえ。』

『どうして。——私が訪ねた時はもうお晝近くで、事務所見たいになつた二階で一人で何か書いてゐましたがね、入つて行つた足音でふいと此方を向くと、何んだお前か、用事でもあるのかつて、まるで二日前逢つた人のやうな顔で斯うなの。——だけどもお腹の中ぢや乾度驚いてたでせうよ。私はたゞ加藤とだけ取り次いで貰つたので、誰か他の同じ名

前の人と一緒へて逃したらしいのですわね。』

おくにが上京の目的を話すと、準造は黙つて一分間考へ、それからまた黙つて傍にあつた紙を[illegible]て、書いてゐた間も放さなかつたペンで、京橋の宿の番地を書き、それを渡した。

『國の兄貴が來てるから、明日二時頃其處へ行けば澄子をやると云つて呉れたので、まあ有り難いと思つたら、どうでせう。すぐその下から、用事がすんだらお歸りつて、斯うぢやありませんか。あんまりだから何か云つてやらうかと思つたけれども、そんなところで見つともないと思つて辛抱したわ。でもね、これだけは云ひ返したよ。私は自分のことはもう諦めてゐます。だけれども、澄ちやんはあなたのかけ代へのないお嬢様なのだから、餘計な苦勞はさせないで、どうか思ひきり大事に可愛がつてやつて下さい。これが私の一生のたつた一つのお願ひですつて。さうしたら何んと云つたともつて、――馬鹿つて、それつきり。』

おくには口眞似をして見せ、却つてそれが嬉しかつたやうに笑つた。澄子も引き込まれた。準造の傍を通る時、その言葉がつけて來る特殊な意味を二人は知つてゐた。澄子はひそかに考へた。――それならば、お父樣は心からお母つさんに殘酷ではないのかも知れない。

二人が連れ立つて外へ出る時はちよつと奇妙であつた。澄子の山の手風なつくりは、おくにの黒い襟のかかつた縞と調和しなかつた。少くとも親子には見えなかつた。おくにもお作の女中のやうに、よく二三歩引き下つたり、斜になつたりしてついて歩いた。けれども、これは二人の不似合を悟つての謙遜でもなければ、誰か具合の惡い人から見つけられるかも知れないと云ふ用心でもなかつた。そんな周到な氣配りをするには餘りに悦びすぎてゐた。おくにはたゞ並ん

でゐては、僅に一面しか分らない娘の姿を、歩きぶりから、手の動かし方まで、出來るだけよく見ようとしたのであつた。而して云ふまでもなく、その、のつぽの色の惡い娘が、母親の目には、あたりを歩いてゐるどの娘よりも美しく立派に見えた。

『あら、襦袢の袖が出てる。』

おくには時々斯んなことを大げさに叫び、ちよこ／＼と追ひついて直してやる。それも振からたつた一寸はみ出してゐるかゐないかの袖を。――一寸でも二寸でも問題ではなかつた。おくにはたゞ娘に觸つて見る機會を捕へたに過ぎなかつた。で、序でに襟許を繕つたり、裾を引つ張つたりしながら、着物の柄や羽織の色を嬉しさうに褒め、而して云ふ。

『――あのひとが見立てゝ呉れたの。あんなことをしてただけに矢張り旨いんだわねえ。――よく似合ふこと。』

斯んな時、澄子はそのお召の袷と紫の紋羽二重の羽織が取つて置きの一張羅であるやうな顔は決して示さなかつたと同じやうに、自分の現在の境遇や、家の細かい事情に就いてもすべては打ち明けなかつた。殊に、今露次の奧に住んでゐると云ふやうなことは氣を付けて洩らすまいとした。それはその家を伯父に恥ぢた氣持とは全然別であつた。見えでもなかつた。澄子は餘計なお饒舌で、不幸な母親が自分の娘の上にかけてゐる唯一の樂しい幻影を破るまいとしたのであつた。

『どんな家なの、今の家は。廣いんでせうね。外から見ただけでもいゝから一遍通つて見ようか知ら。』

斯んな話が出る時は當惑した。決して見に行く程の家ではないと云ふ口實で僅かにそれを防がうとする。でもおくには斷念しなかつた。

『折角斯うして逢つたのに、澄ちやんの寢起してゐる場所も知らないで歸るのは殘念ぢやありませんか。一遍見てさへ

[illegible]
立派なお母さんで暮らしてゐるのだともつて。ね、さうでせう。本當にそれを思へばこそ、私は自分はどんなに[illegible]したつて諦めてゐられるのです。』

明けの日、いつもは十時過に來て澄子を待つてゐる位のおくにが、中々來なかつた。澄子は何度も出て往録つた後の賤い部屋に一人坐りながら、あの汚い裏通を、決して見つからない名刺を探し歩いてゐるであらう母親を思ひやつて、憐み、恥ぢた。幾度失望してゐるに相違なかつた。想像とはまるつきり違つた町の格や、周圍の光景に驚いて、がつかりしてゐるに。——

けれども十二時近くなつてやつと來たおくには、嬉れ〳〵と滿足さうにしてゐた。

『遲くなつちやつて。——でもいゝことをして來たのですよ。』

おくにはこれだけ云つてからやつと坐り、當てゝ見よと云ふ顏をした。澄子は當てようがなかつた。でもその笑顏で、今まで想像してゐたやうに、母が自分の家を見に行つたのでないことだけは分つた。

『澄ちやんの學校を見て來ましたよ。』

澄子が驚いたので、おくには得意になつて話した。

『初はね、外神田の方へ寄つて見る積りでゐたんですが、考へて見ると誰に逢はないとも限らないし、それにあの人が居るのだと思ふと、いゝ家ならいゝ家だけに癪だからよしちまつたの。でも、電車の切符が萬世橋にきつてあつたでせう。だから急に思ひついてね、あすこから本郷臺まで廻つて來たのです。——大したものだわね。澄ちやんは一日ここいらでお稽古をするのかと思つて、私はあの煉瓦作りの洋館の窓を一つ〳〵眺めて來ましたよ。表の方ぢやないの。さ

うですか。――全く、これで私が學校のはじまるまで東京にゐられるのだつたら、澄ちゃんがあの門を入つて行くところを見て行けるのですがね。』

おくには話してゐるうちに初めの悅びを失つて、いつとなしに嘆きの調子になつた。

『今更愚痴を云つたつて始まらないけれども、私はどうして一人身でゐなかつたらうと思ひますよ。さうすれば何も朝鮮なんかへ歸らなくたつて、いゝんだし、どんな貧乏したつて、東京にゐさへすれば澄ちゃんにだつて時には逢へもしませうしさ。そんなことを考へかけるとつく／＼厭になつちまつて。』

この消息は、澄子がこれまで一番聞きたくつて聞きえなかつた。而してまた他のことには割に口數の多いおくにが、一何んとなしに包んでゐた一つの問題に話を持つて行つた。

『でも、あの、なには――』

娘は母親の良人ではあるが、決して自分の父親ではない一人の男に對して、適當な名詞を探し出さないでまごつきながら續けた。

『――お母樣によくしてくれるのでせう。』

『加藤？』

おくには娘の問には直接に答へず、たゞそれで遠く殘して來た人をはつきり描き出して見る機會をえたやうに話した。

『あの人も根は決して惡くはないんですけれどもね。あちらでする事なす事皆しくじつたせゐか、變に意久地がなくなつて困り者なの。私が髮でも結つてゐれば、いゝ氣になつて自分ちや遊んでゐようつて風でせう。斯んな性分だから私

は何んにも云へはしませんよ。自分さへ[illegible]には、[illegible]けれども、時に依ると憎らしくつて。――えゝ澄ちやんのことですか、それがねえ』

澄子が、自分のことをいつまでもこの人に知らせないでゐたらうかと訊ねたので、おくには、言葉を切り・顔を袂につけた。

おくには二十五で、その時分小さい玩具工場を持つてゐた今の良人と結婚した時を、過去のことを隠さなかつた。從つて今度の澄子のことをも話して話されなくはなかつたのだけれども、わざと默つて來たのだし、歸つても默つてゐる積りだと云つた。

『この節ぢや妙に疑り深くなつて、何を云つても素直には聞いて呉れないんだから、餘計な話をするだけ面倒なんですよ。殊に詰らない因縁でもつけられた日には、澄ちやんたちにすまないし、だいち、斯うして何もかも飲み込んで話はして下すつたお國の旦那樣に對しても、私が顔向けが出來ない譯ですからね。さうでせう。』

澄子は身の入つた話になると目立つて黒く浮いて來る母親のそばかすを見詰め、その唇から辷り出る意外な言葉に聞いて、もつと委しい説明を無言で求めた。

『と云つて、決して加藤がそんな人間だと云ふのぢやないんですよ。』

おくには娘の顔色に心づいて正直にあはて、急いで自分の不用意な言葉を繕はうとした。

『たゞ、斯んなことがぱつとなると、誰がどんな意地をつけないとも限らないと思つて、私はそれを心配するだけなの。あんな土地まで流れて行く位の人間は、皆んなたちが悪いのですから。――それを思ふと加藤なんか立派なんですわ。色んな苦勞させたのが可哀想な位なの。』

おくにはそんな辨解はすればするほど、女房の努力によりかゝつて、呑氣に長火鉢の前に坐つてゐる男に就いて、またその人がどんな周圍を持つてゐるかに就いて、深刻に説明してゐるのだと云ふことには氣がつかなかつた。澄子はおとなしく母親の話に耳を貸しながら、心ではおよねの手紙に表はされた新吉の反對を思ひ浮べてゐた。その眞の原因は、おくにの元の境遇や、また今人の髮を結つてゐると云ふやうな事だけではなかつたかも知れないと考へた。同時におくにが自分の現在の良人を少しでも善いものにして見せようとする心遣ひに對して、露骨な悪口や愁訴よりも人間的であり、可愛い女らしさであるのが分つてゐたに拘はらず、澄子は一種嫌悪に似た淋しさを感じないではゐられなかつた。獨身であればよかつたの、東京にゐ度いのと云ひながら、決して朝鮮のことを忘れてはゐないのだ。――意地悪く氣を廻した。

若し、本統に歸らないと云つて呉れたら。――そんな男はもう他人だと云つてくれたら。――十七年目に見出した娘のために純粹な母親とならうと云つてくれたら。――澄子はそんな要求をする權利はないのを知つてゐた。少くとも彼女自身が一緒に父の家を捨てない限り。お加代の支配から脱しない限り。貧乏な女髮結の娘として、今の路次の奥よりもつとひどい何處かの長屋の片隅で生きて行く決心がつかない限り。――

親子が出逢つてから五日目の日、小兵衛は姪と二人だけでゐた時聞いた。

『おくにはいつまでゐる積りぢや。』

『一二日うちには立ち度いやうなことを云つてゐましたわ。』

『それより後れん方がよいぞ。』

伯父にさう云つたあとで改めて尋ねた。

『小遣ひが要りはせんかの。』

澄子は下を向いた。母親が何かの序でに問はず語りに洩らしたことを思ひ出してゐた。千住の叔母の家では、おくにが朝鮮で金でも溜めたと思つたか、來る早々に借りられた。ちよつと云つたのがまだその儘だと云つて、おくにはその時當惑さうにこぼした。澄子は今一つのことをも思ひ浮かべることが出來た。二人は昨日呉服屋へ行つた。おくには得意先に風呂敷の一枚づゝも持つて歸り度いやうに云つてゐたに拘はらず、とうとう買はなかつた。おくにはまた澄子にも何か一反殘して行き度いと云つて、長い間銘仙の賣場に立つてゐた。伊勢崎や秩父の幾つかの堆積の中から、あれこれと引つ張り出して見る。柄や地合のよいことを賞める。そのそばから織耳に結びつけてある定價表をちよいとめくつて見て、その儘默つて反物を下に戻す。同じことが何遍も繰り返された。後では定價表の方を先きに見ないでは、柄にも地合にも注意しなかつた。終に澄子は着物は十分持つてゐるから、若しどうしても買つてくれ度いのなら、丁度新しい半襟がないのでその方が欲しい。それも刺繍や模樣ものは嫌ひだから無地が欲しいと云ひ出すことに依つて、やつと母親を苦しい立場から救つた。

『わしの頼んだ用事で、今日は夕方にも準造が見えるかも知れんから、何んなら話してやつてもよい。』

澄子は素直に伯父の親切に縋る代りに、思慮深い悲しげな眼を前の煙草盆に注いだ。併し澄子が本統に其處に見たものは決して煙草盆ではなかつた。もつと大きい、もつと嵩のある一つの鐵の箱が怖ろしい力で彼女の視線を吸ひつけた。澄子は父の部屋の金庫をこの時ほどはつきり見たことはないやうな氣がした。同時に知つてゐた。あの堅い扉は、單なる憐れみや同情の合鍵では決して開かないのだと云ふことを。

『少し位なら私でもどうにかなりさうだと思ふのですけれども。』

併し朝鮮まで樂に歸れる位の金となれば、澄子には六ケ敷かつた。本統は小兵衞が來る度に置いて行つたり、國から手紙の中に入れてよこしたりするだけを貯めておいても、澄子はもつと多くを持つてゐられる筈であつた。にも拘はらず餘分の金はなかつた。澄子は自分の必要なものは大抵自分で買つた。學校の敎科書さへも。時に依ると月謝さへも。

小兵衞は勿論そんな事情は知らなかつた。彼はたゞ澄子に母親の旅費の心配をさせるなんてことは間違つてゐると思つた。それ位なら自分が出してやつてもよい。併し準造が知らん顏ですませる譯のものではないのだから、誰よりも彼自身で責任を負ふべきだと云つた。

『あんなところにくすぶつてゐるから餘つ程困つてゐるのかと思へば、準造は金があつて、人に貸してまでゐると云ふぢやないか。それも大分無理な貸方をしてゐると云ふ噂がちらと耳に入つたので、心配してゐるのぢやが、一體それは本統の話かの。』

澄子の眼の前には今一度金庫が現はれ、消えた。そのまつ四角な黑い怪物が、父を全く別人にしてしまつた。その怪物の曲つた長い爪が、彼の頭腦と心臟から、一切の智慧と人間らしい情操をほじり出し、目の飛び出るほど高い日歩のついた公正證書や、天引や、證文の書換や、乃至、執達吏と差押の夢に詰め替へたのだと云ふことが、たとひこの伯父の前にしろ正直に話されたであらうか。

澄子が直ぐ返事をしなかつたので、それがまた明白な認定であつたので、小兵衞は、今度は別のことから聞き出さうとした。

『×町の事務所と云ふのはいつから出來たのぢや。』

『昨年の秋でしたでせうか、よく知らないのですが。――はじめは彼處から雜誌が出てゐましたの。』

『その雜誌はもうよしたのか。』

『話がないやうですから、乾度さうだと思ひますわ。』

『準造は毎日其處へ通つてゐる譯なのぢやな。』

『え丶、』

『それで――』小兵衛はちよつと言葉をとぎらせながら、『おくにの事に就いてまだ直接に話はないのか。』

『何んにも。』

食事が別なので不斷でもさうであるが、殊にこの四五日は澄子が不規則に外出してゐるために、二人はめつたに顏を合せる場合はなかつた。たつた一度逢つた、それも丁度澄子が電車でおくにと別れて、家の前まで歩いて來た夕方であつた。反對の路から父の車が歸つて來た。娘は父を先に通すために、躙次口に立ち留つて待つた。その時準造は何處へ何の用事で澄子が外出したか氣がついた筈であるのに、ぢろりと車上から一瞥しただけで、知らん顏をして車を下り、木戸を入つた。

『あんまり構はれないのも、斯んな時にはい丶のですね。伯父さん。』

澄子は笑ひながら序でにお加代のことも話した。彼女は毎日出掛ける時はたゞ、行つて參りますと云へばよかつた。それから歸つた時は、只今と云へば。それで無事にすんだ。何んにも尋ねられはしなかつた。澄子は猫でなかつたから――井戸に落つこちたり、猫さらひに連れて行かれたりする氣遣ひはなかつたから。

『どうもお前の家はいつ行つて見ても――』

變な家だ、と伯父は云はうとしたのであらう。けれどもそこへおくにが來たので、話はやまつた。今日は郊外の遠い寺にあるおくにの母親の墓詣りをすることになつてゐた。

花見客で混み合ふ省線をＸ——驛で下りて、昔の街道を北に八九町行つた右側に、百姓屋や、田舎風の店や、大きな植木屋や、既に菊の根分をした植木畑や、麥畑と並んで、寺はあつた。親子が小つぽけな、古い山門を入つた時、後に杉木立をしよつた本堂の二枚の障子が、正面に遠く白々と見渡された。

親子は庫裡口で線香と樒を買つて、後の森にある墓地に行つた。おくにの實家の墓は割に立派で、吉田家累代の墓と誌された墓石も大かつた。おくには自分の家がもとは幕臣であつたこと、瓦解後に父親が餘計な仕事に手出しさへしなかつたら、決して今のやうな境遇には落ちなかつたのだと云ふ、澄子にはもう三遍位話して聞かした。恐らくまた昔の江戸に代々住んでゐた者の過半數が、乾度何處かで同じことを話してゐるに相違ない話を、今一度其處で繰り返した。

『ですからお祖母さんなんか私見たいぢやなくつて、そりや品のいゝ人でしたよ。同じ長屋にゐても、近所の者が御隠居さまて云つた位ですからね。——澄ちやんでも血統では誰に何んと云はさせやしないと思つて、それだけは私も威張つてゐられるのです。』

おくにはその話になると、たしかに誇つて自信のある話し方をした。それを聞いてゐると、これまでどうかすると起つた果敢ない望み——若しお祖母さんでも無事にしてゐたらと云ふ夢想が、今は一層明らかな輪廓を以つて澄子を捕へた。お祖母さんが立派なよい年寄りであつたのは、血の說明以上に賴もしかつた。實際、そのお祖母さんさへゐて呉れたら、物事はもつと氣持よく變つてゐたに相違なかつた。少くともお母さんは年寄りを見捨てて朝鮮に歸るとは云はな

いであらう。――こんな遠くに行くやうな人とは最初から結婚しなかつた筈だ。お祖母さんとお母さんとは二人つきりで何處かでほそ／＼と、でも感じのよい暮らし方をする。さうだわ。斯んな田舍にゐてもよかつたのだわ。――山門から出て、今一度停車場の方へおくにと並んで歩いて來た澄子は、無意識に足をゆるめ、目の前に白くまつ直ぐに伸びた街道を、その兩側の木立を、生垣を、その中にまばらに續いた人家を、道ばたの二三人の子供を、瘠せた犬を、それ等の一切を浸して長閑かにきら／＼してゐる四月の日光を、またそれ等の一切を蔽うて高く沈默した透明な青い天の壁を、これが初めから現實に存在してゐたのもではなく、自分の空想が丁度その時其處に鮮明に生み出した形象のやうな驚きと、甘い放心で眺め、それからまた歩き續けて、また考へ續ける。――私は日曜の度に訪れて行く。お祖母さんとお母さんが悦んで待つてゐて呉れる。お土産の菓子包を出す。三人で樂しく話しながら食べる。勿論お晝は一緒に食事をする。私の好きな玉子燒を拵へてくれる。その位の卵は買はないでもすむやうにちやぼが二三羽飼つてある。小さい鷄小屋。そのまわりの丁度カステラの焦げた上皮のやうな色をした、おいしさうなふか／＼した土。お祖母さんとお母さんは屹度其處にお茶と胡瓜と茄子を作らうと云ふであらう。私は花畑にし度いと云ふ。で、兩方で譲り合つて半分を野菜畑にし、殘りの半分には花の種子を蒔く。――さう考へた時、種子はすでに花であつた。野菜畑も一面に青い葉であつた。その中に圍まれて小さい鷄小屋が見える。鷄小屋よりあんまり大きくはないお祖母さんとお母さんの家が見える。日曜日だ。よいお天氣だ。澄子は急いだ。――一臺の自轉車が少し坂になつた向からまつしぐらに駈けて來た。鈴を鳴らした。澄子はその鈴を聞かなかつた。彼女はたゞ目の前の花畑と野菜畑と鷄小屋とお祖母さんとお母さんの家を眺めて歩いた。と、はづみきつてハンドルの利かなくなつたゴム輪の車は、その儘氣違ひじみた勢で駈け下りて、あつと云ふ間もなく花畑から野菜畑に轉がり込み、鷄小屋のお祖母さんとお母さんの家を滅茶々々にした。

『ぼんやりしてるない。間抜け！』

はね出された乘り手は、呆れて立ち留まつた澄子を戶口に憎々しく浴びせかけ、車を引き起こして今一度乘つて行

『何んて危い。何處か打ちやしなかつたの。』

向側に飛びのいたおくにが心配さうに寄つて來た。

『いゝえ。』

素つ氣ない返事が出た。お母さん、今まで私がどんなことを考へてゐたと思つて？澄子はさう云つて見度かつた。

してその樂しい夢想を今一度話すだけでも話して見たかつた。でも澄子は二尺左にある、母親の眞面目らしく默つた黄色い横顏を覗いただけで口に出すのをやめた。斯んな樣子をしてゐる時、おくにが何を考へてゐるか、またそれが自分の今までの夢想とどれだけ遠いかを澄子は知つてゐた。

『今日ね、伯父さんから斯んな話がありましたよ。』

澄子は改めて母を眺め、きつぱりした口調で話した。

『歸るに就いてお小遣でも要れば、お父樣に云つてあげようつて。』

『それぢやあんまりですもの。』

併し聲は、否定の意味とは反對に悅びの調子で響いた。同時に今まで何となしに沈んだ色の見えてゐた頰が勢づき、急に言葉數が多くなつた。

『でも、どうにかしなけりや私も困るのでね。――なにしろ千住の家のがその儘なんでせう。今度は色々世話にもなつたから無理に催促も出來ないし、と云つてそれを待つていつまでも斯うしてゐる譯には行かないんですからね。――朝

鮮からは昨日は京城まで來たの、あんまり歸らないものだから怒つてるんですよ。なあに、幾ら怒つたつてそんなことは構やしないけれども、お得意さんにいつまでも迷惑をかけてちやすまないし、こつちでも困ると思つてね。これだけが心配なの。』

さうだ。お母さんはたゞそれだけを心配してゐたのだ。私がお祖母さんと三人でどんなに樂しく暮らされたかを夢見てゐた間に。――輕い腹立たしさと失望と憎みに似たものが澄子をかあつとさせた。お母さんは本統に私が可愛いのですか。――いゝえ、そんなことは聞く必要はない。聞き度いのはたつた一つのことだ。――お母さんはお父様に貰つたお金で、平氣で朝鮮へ歸れるのですか。――澄子は嚴つい皮肉な目で母の方を振り向いた。でも、その、人の善ささうな、而して妣の口から出た一言で確かに安心してゐる顏を見ると、娘はまるで反對なことを云つた。

『屹度伯父さんがよくして下さるでせうから、大丈夫ですよ。』

一臺の空の人力車が、梶棒を此方に向けて、既に灯のついた旅館の前に留まつてゐた。澄子はおくにと連れ立つて電車道からその横町へ曲つた時、一番にその車が目に入つた。夕方準造が訪ねて來るかも知れないと云つた小兵衛の言葉を思ひ出した。

『お父様の車らしいわ。寄らないで行きませうか。』

澄子は立ち留まつて母に囁いた。斯んな事情の許にある父母が、斯んな旅館で、殊に伯父の前で顏を合せるのを見るのは、理由なしに厭な恥かしいことのやうな氣がした。けれどもおくには珍らしく娘の極めて安心しようとしてゐるの言葉に反對した。

『でも他の人かも知れないぢやないの。もつと行つて見ませう。そうしたら分るから。

おつ母さんは寧ろ逢はうとしてゐるのだ。而して恐らく旅費の問題を一時間でも早く極めて安心しようとしてゐるのだ。――新たな、どうしようもない不快と、強い悲しみが沸き上つた。同時に澄子はこの厭な事が終に避けられないのなら、一と思ひにこの機會に片附けて仕舞つた方がよいのだとも考へた。考へながら足を動かしてゐたので、角から右側で丁度五軒目に當る旅館は直ぐ目の前にあつた。想像した通り父の車であつた。車夫はゐなかつた。夕飯を食べに行つたのだと思つた。親子は並んで、部屋の贅澤な割には古風にちんまりとした店先に入つた。併し、小兵衛の特別の心附けで、二人は宿では泊まり客と同様の出入りをしてゐたに拘はらず、その時は直ぐには上らなかつた。澄子は番頭の一人をやつて伯父の都合を聞かした。差し支へないと云ふ返事を得た。で、上つた。

澄子とおくにが部屋に入つて行つた時には、二人の兄弟は晩飯を終つたところで女中が急いで後始末をしようとしてゐた。二つの膳、酒の道具の載つた盆、皿、小鉢がまだ座に散らかつたまゝであつた。おくにはそれを見ると女中と一緒になつて、膳を引いたり、食器を片附けたりしはじめた。

『恐れ入ります。もう、どうぞ。』

女中は口先だけではあつたけれども、何遍も氣の毒さうに斷つた。若い女中は、本統は自分の方がその間の悪い客を助けてゐるのだと云ふことを知らなかつた。

準造は澄子の後について入つた來たおくにに對して初から何等の注意も拂はないで、たゞ盛んに食後の煙をあげてゐた。小兵衛はいつもの床の前に弟を右にしてきちんと坐つた儘特別な言葉もかけなかつた。澄子は父と對して稍斜な位置に、彼の前ではそれが最も自然であつた沈默で、靜かに坐つてゐた。さうなるとおくには何處にどうゐていゝか分ら

ないやうに見えた。最後の盆の一枚が引き去られるまで。而して娘からその上手の場所をさして目くばせされるまで。女中の後にくつついて座敷と廊下の間をうろ〳〵してゐた。

『これは澄子までにはちよつと話したのぢやが――』

座が落ちついたのを見て伯父は頓て話し出した。彼は遠方に歸るとなれば思はぬもの要りの多いものだと云ふ風にきり出した。で、準造に先刻その話をしたところが、本人に逢つて事情を聞いた上で考へて見るといふことになつた。で、おくにも遠慮なく云つた方がよい。――これだけのことを小兵衛はいつもの落ちついた態度と口調で傳へた。顏の一つの筋肉も、言葉の一句の調子も、不斷と何んにも變らなかつたに拘はらず、澄子は伯父がその恰幅のよい、太つた胸の中に何かの強い感情を隱してゐるのを見逃さなかつた。その問題に關して、兄弟は今まで愉快には話してゐなかつたのを感じた。彼女は無意識に眼をあげて、伯父を等分に眺め、それからまた眼を伏せ、今までの沈默を守つた。

併し娘の感じたものを同じやうに感じるには、おくにはあんまり單純すぎ、あんまり悦ひすぎ、またその悦ひを圖々しく見られまいとの骨折で一生懸命になつてゐた。

『なにあなた、千住の方へ立て替へたものが歸つて參りさへすれば、決してそんな御迷惑をかけるのぢやございませんが。そちらが手違ひになつたものですから、つい――』

が、おくにのはじめた長い言ひ譯は、向側に起つた無遠慮な聲で遮斷された。

『そんな事を此處で饒舌つたつて何んにもなりはしないよ。それよりは幾ら金が要るのか、それだけを云ふさ。』

準造の調子はおくにを脅かした。おくには臆した獸のやうな上眼を彼に投げ、默つてしまつた。

『金額が分らないぢや初めから話にならないぢやないか。――要するに旅費がないのだらう。正直に何故さう云はない

のだ。』
おくには返事をしなかつた。準造は無頓着に續けた。
『旅費なら計算して見りやすぐ分かる。えゝつと、――下の關まで三等でたしか九圓七十錢だ。それに下の關から釜山までの船賃と、おい、覺えてゐるだらう。あの間は幾らなんだ。』
『七圓です。』
おくには顔を上げ、意外にきつぱりと答へた。準造の沒感性な態度が、相手をも事務的にしたのであつた。
『高いぢやないか。』
『私はすぐ醉ひますからね。船だけは二等でなけりや乘れません。』
この說明をおくには半分怒つたやうな、半分自慢さうな口ぶりでした。併し準造はそんな餘計な說明に注意を留める暇はなかつた。彼は九圓七十錢に七圓を加へれば幾らになるかを頭で計算してゐた。それから直ぐと、またその後を聞き足した。
『釜山から京城までは。』
『七圓ばかしです。』
『よし、それなら東京から下の關までの汽車賃に、下の關から釜山までの二等の船賃を加へて十六圓七十錢と、それに釜山から京城までの七圓を入れて二十三圓七十錢あれば旅費だけは間に合ふのだから、辨當その他の雜費を入れるとしても三十圓もあれば十分な譯だ。』
『でも東京から歸るのに幾らなんでも手ぶらでは歸れませんからね。』

『ふん。』

準造は鼻を鳴らし、顏をしかめた。金もない癖に何を云つてるのだと云ふやうに。それ以上の非難と侮蔑がその表情には示されてゐた。金もない癖に何んだつて朝鮮くんだりから出て來たんだと。――不幸な母親が、十七年目に初めて生きてゐることを知つた娘に逢ひに來たのも、經濟的約束を無視した以上、この父親には單に無考へな愚な行爲としか見えなかつた。

それでも彼は幾ら要るかを聞いた。

『その方は十圓もあれば結構なんです。』

おくには云ひかけて言葉をとぎらした。今では準造自身の顏つきよりは、却つて小兵衛と娘の思はくを氣にしてゐるらしかつた。併し長くは躊躇しないで、恐らくそれまで何遍かひとりで思ひ惱んだであらう金額を打ち明けた。出來るならば全部で五十圓欲しいと云ふのであつた。

『長い道中のことで、少しは餘裕も見て置かなければ心配ですから。』

『それにしても五十圓は多いぢやないか。必要な金は明白に分つてるんだ。先づ下の關までが九圓七十錢として――』

準造は高い聲で小學校の生徒のやうに今一度汽車と船の賃錢から計算しはじめた。而かも非常に熱心に、寧ろ愉快さうに。――金の勘定はどんな場合でも、またどんな性質のものでも、數字を口にするだけでも、一種の悦びと親しみを彼に與へることが出來た。同時に、彼の頭の中でその瞬間に本統に行はれてゐた數字は、彼が聲に出してゐたやうなそんな簡單な加算ではなかつた。もつと委しく云へば、金の價値に對する準造の現在の觀念に於ては、汽車賃にしても、船賃にしても、單なる九圓七十錢、單なる七圓と云ふものは存在しなかつた。丁度すぐれた作曲家の聽覺にはすべての

音響が單音でなく、必ずそれに伴ふ特殊の諧律と階調を以つて聞こえるやうに、あらゆる金額が彼の意識には常に何割何分の利子、またその利子に附隨する筈の夥しい複利をつけて現はれた。

『それでも、どうしてもそれだけ欲しいと云ふなら都合しないでもないが、併し——』

月一割の利子としてやつても、五十圓なら二ケ月に十五圓だ。その十五圓を天引するとは、つまり年十二割の利廻になるので、いつもの日歩四十錢の十四割六分に較べれば引合はないが……と、計算をすますと、彼は極めて冷靜に話し出した。

『斷るまでもなく僕は金持ぢやない。殊にたゞ人に呉れてやるやうな金は一文もないのだから、僕の金を使はうと思へばそれだけの手續は正當にして呉れるだらうね。』

おくにはぼんやりした驚きで、さう云つた時の伴造の酷薄な短い顎を眺めた。言葉の意味がちよつと飲み込めないらしかつた。たゞ決して優しくはなかつたが、意外に話しに乘つて呉れると思つた彼が、何か急にむつかしい事を云ひ出したのに當惑したやうに見えた。

『おくに、おれが判をついてやるから、貸して貰へ。』

その時まで一言も挾まないで二人の問答を聞いてゐた小兵衛が、初めて口を切つた。おくには一層びつくらし、一時譯が分らなくなつたやうに見えた。それに就いて娘の判斷に縋らうとするやうに澄子をふり返つた。澄子は母の視線に答へる餘裕はなかつた。伯父の一言は大きな鐵板のやうに彼女を打つた。澄子は、あの金庫を背景にしてはじまつた父の新なる生活、その眞の姿を、その一言に聞くまではまだ十分明瞭に知らなかつたのだと云ふ氣さへした。死ぬほど恥かしかつた。にも拘はらず、その胸の一隅には別な或る考が頭をもたげてゐた。——父があの母にさへ金を與へることが出來ないのは、あの母に取つては一つの救でなければならぬ。——母はそれで誰に咎められることもなく、大手をふ

つて朝鮮の待つてゐる人のところへ歸つて行けるのだ。――決して貰つた金ではなく、正當に借りた金なのだから。

準造は兄の一言が目の前の娘、若しくは彼に依つてその娘を生んだどんな影響を與へたかそんなことは考へようともしなかつた。これから始まらうとする自分の事務には關係のないことだから。實際、兄の一言にはたゞいよ／＼取引が決定され得ることを知らせた以上の意味はなかつた。で、彼は傍の大きな黒革の鞄を引き寄せ、平然とした態度で念を押した。

『ぢや、あんたが判をつくんですね。』

兄は弟に負けない沈着で答へた。

『それでなきや、お前は金を出す積りはないぢやろ。』

準造は答へなかつた。小兵衛は續けた。

『準造、お前の金貸の噂は矢張り本統のことぢやな。』

『いや、たゞの金貸ぢやない、僕のは高利貸なんだ。』

準造は皮肉な、寧ろあてつけた調子で最後の言葉を云つてのけると、今まで無知覺なほど冷靜に見えた彼の小さい顔が、急にゆがみ、燃え立つた。

『それも特別高い利子を取つてゐるんです。日歩三十五錢以下ぢや御免です。――併し僕はあんたの酒屋や分家の兄貴の呉服屋より不當な儲け方をするつもりはありませんよ。酒屋や呉服屋には限らない。一般の商人や會社銀行の如きは資本と組織がある。その下に隱れさへすれば泥棒のやうな金儲けをしたつて決して分りはしない。彼等は悉くそれをやつてゐるんだ。が、僕はさうぢやない。腕一本だ。けちな元手だ。微塵もからくりはない。だからどんな高い利子

つたつて、最初からそれを標榜しておくだけ最も正直な商賣だと思つてる。いやな奴は借りなけりやそれまでだ。』

準造はこれだけを殆んど夢中に續けた後で、兄に對してもきつぱり宣言した。

『あんたもそんな高利の金は借りないと云ふなら、先刻の話はよしませう。』

「いや、よさないでもよい。』

やつと感じられた程度の躊躇を見せながら小兵衛は云つた。

『併し、これだけは斷つて置く。わしがお前の金を借りるのはおくにの爲ぢやない。それ位ならわしの紙入から出せばすむことぢや。わしはたゞ人が云つても信じられなかつた、いや、お前が自分の口で高利貸ぢやと云つてもまだ本統に出來ないお前の商賣振りを、一つはつきり見度いだけなのぢや。』

小兵はこれだけの言葉を、澄子が決してこの伯父さんから聞いたことのなかつた感動を以つてつくり、刻むやうに云つた。

準造は默つて鞄をあけた。それが彼の答へであつた。彼は馴れ切つた手つきで鞄の中からいつでも用意されてある手形用紙を引き出し、契約人の署明と判を求めた。それがすむと、書かれた文字に今一度嚴密に目を通し、それを膝の前に置いたまゝ右のポケットから古い鰐皮の金入を出して、その中から三枚の十圓紙幣と一枚の五圓紙幣を取り出した。

弟は無造作に兄の前に置きながら、すまして說明した。

『これが僕の商賣のやり方です。是非五十圓持たせたいなら、不足の分はあんたが出してやるといゝ。あんたは金持だ。』

斯う云つた時には、五十圓の約束手形は、三十五圓の現金と交換に鞄に收まつてゐた。取引はすんだ。彼は立ち上つた。その大きな、彼の身體に着くと尚一層大きく見える、而して變に不氣味な甲蟲類のやうにぺつたり腰についた鞄と

共に、一座の呆然としてゐた目送の中を部屋から去つた。

一時間の後、準造は彼の書齋の馴れた机に向つてかけてゐた。三年前ならば、屹度この時刻に前に擴げられてあつた筈の厚い書物が今はもうなかつた。また彼の頭の中に往來してゐたものも、日本の現在の逼迫した經濟狀態をどう救ふべきかの問題でもなければ、倫敦の銀塊相場がこの二三日何故續けて下落したか、ローズヴェルトのトラスト征伐は果して成功するか、その結果が米國に、否世界の金融界にどんな影響を與へるかの考察ではなかつた。そんな事は彼が先刻歸つた時、お加代がひとり何處かへ遊びに行つてゐなかつたのを氣にしなかつたと同じ位、彼の意識からは冷淡になつてゐた。一切が餘計な下らないことだ。大きな圖體をして、どんな經濟的恐怖が來ようが、自分は決して困りはしない位置を持つて、而して學者面をし度い奴に任せて置けば、それで丁度いゝ遊戲だ。――聞いたら屹度さう云ふだらう。誰も聞かないから彼は考へもしなかつた。もつと大事な、もつと直接な仕事が彼を待つてゐた。

彼は書物の代りに算盤と鞄を机の上に置いた。而して鞄の中から取り出した何枚かの紙片の金額をいち〳〵算盤にはぢき出した。それが今日の貸附高である。それがすむと今度は同じ鞄の中から幾束かの紙幣と銀貨を取り出して、滿足さうに、また非常に丁寧にそれを數へはじめた。それが今日の收入である。二つの仕事がすむと彼は今一度證文と金を皆んな鞄の中へ入れてしまつて、靜かに椅子を離れ、後の金庫に近づいた。

築地の或商館の出物だと云ふその金庫を六ケ月前偶然京橋の古物商の店で發見したのは、準造に取つては一つの啓示であつた。彼はその時、あらゆる方法でかき集めた千圓あまりの金を持つてゐた。それは彼自身を今一度運命の計算器に載せ得る最後の掛金だと云ふことを知つてゐた。どんなことがあつても無駄にしてはならなかつた。それどころで

ない。最も有利に使ひ加速度に殖やすことに成功しなければ、自分は終にこの社會で何んにもする暇がなく死んで行くであらう。――現代のあらゆる制度、あらゆる機關、あらゆる組織に浸み込んで、それを獨裁してゐる資本の威力を、彼は今は學説や原理としてではなく、その刺にさゝれ、その獨自の冷たさに觸れた者のみが知る痛みと辛辣で知つてゐた。併し踏みにじられ踏みにじられても、尙ほ新しく立ち上る勇氣を失はなかつた。彼の生命力は、この時も今一度不敵な强い額を現はした。若い時代の彼が、不具な醜い身體を人生の底で蟲のやうに壓し潰されないために學問に突き進んだ――精神的なもののみが持つ高貴な飛揚力に依つて、自分の運命的な地位から離脱しようとした當時の發奮が、怖ろしい勢で逆つた。同時にその熱情は今度は一切の精神的なもの――學問と智慧と高貴と品性を振り捨てさせ、まつしぐらに逆な全く逆つた谷の方へ彼を追ひ込んだ。徹底的な現實主義に基礎を置いた、極言すれば、金の絶大な價値の研究であつた彼の專攻科學は、どの學問よりもこの轉落の危險性に富んでゐたと云ひ得る。彼はこの暗い谷の底で今は何んにも考へなかつた。も一度人生の戰に臨むために、人の持つてゐる武器を自分も持たう。――金を拵へようと云ふこと以外には何んにも考へなかつた。同時に彼は今握つてゐる千圓を最も短い時間で最も多い額に變化させることの出來る二つの方法を知つてゐた。それは株か高利貸だ。彼の見出した中古の金庫は、彼に第二の方法を選ばせた。――それは株のやうな不安定を伴はない、また彼自身の名義ではどこの銀行にも預ける譯に行かない掛けかへのない元手を、確實に保管するであらう。

準造が金庫口の前に立つと、彼の方が低かつた。併し後に電燈をしよつた彼の影は尨大に擴がり、まつ黑な異形な塊まりになつて金庫にかぶさつた。その中で、金庫の扉の右側の上部に取りつけた眞鍮の暗號盤がきらりとした。この暗號盤には、1から72までの數字を時計の時表面のやうに刻み込んだ二重の圈から出來てゐた。準造は最初內側の小さい圈に手をかけて、それを右から左の方へ三遍廻した。その度に內圈の7の數は、外圈の1の數字と正確に出逢はなければ

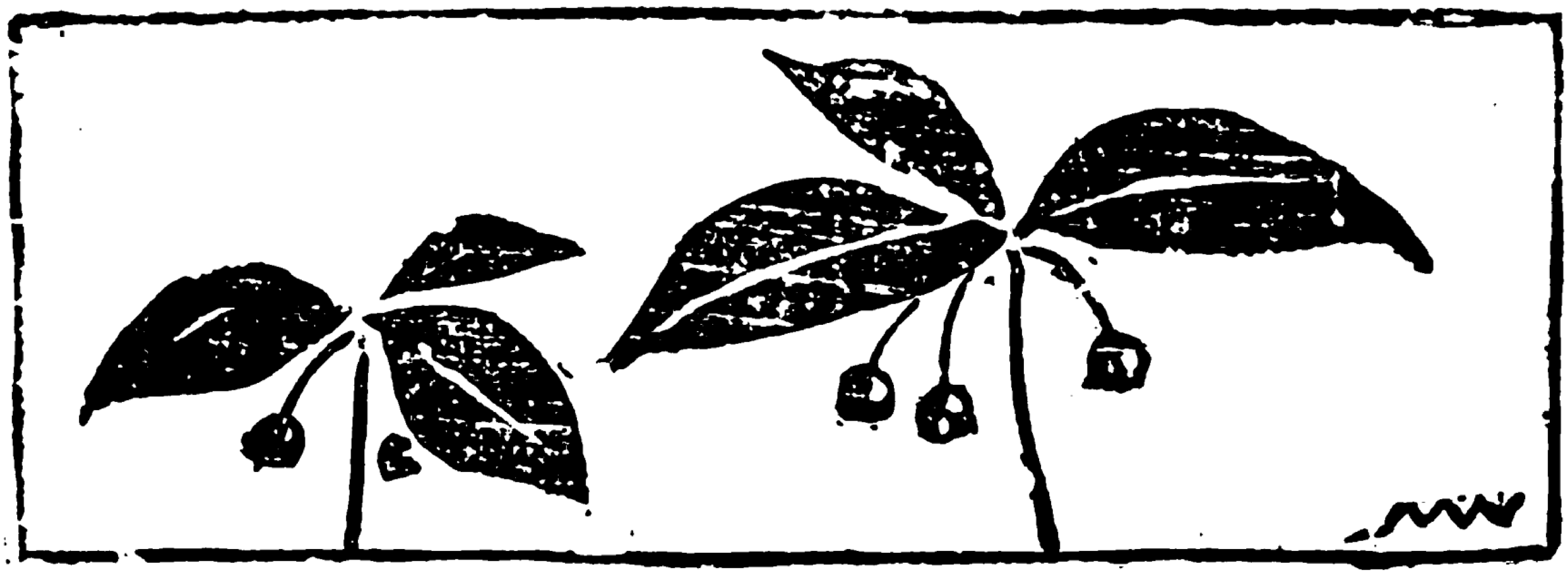
ならなかつた。次に彼は内圏を反對の方向にまた三週廻した。今度はその圏の3の數字が、外圏の19の數字の下に三遍とも止まらなければならなかつた。3と19が三度目に出逢つた瞬間扉の左の下にある同じ真鍮製の小さい槓杆が、かちやりと開いて、その下に初めて鍵穴を現はした。

この複雜な暗號の扱ひ方は、數字の組み合せのほんの僅かな食ひ違ひも決して槓杆を動かし得ない嚴重な構造と共に、最初から準造の氣に入つた。而して金庫に馴れ、中に貯へられたものが殖えて行くに從つて、この魔法じみた秘密は一層強く彼を引きつけた。或る場合彼の心は、金庫の嚴重を賴もしがるよりはその秘密を樂しむ樂しみで一杯になつた。自分より外には何人もこの扉を開け得ないのだと云ふこと、他の者の目には單に數字の羅列に過ぎない暗號盤が自分だけに解せられると云ふこと、7と1と19と3との強い切り離されない親しみ、それを自分だけが知つてゐると云ふこと、而してこれ等の記號がその目に見えない手を絡み合つて自分の隱してあるものを守つてゐると云ふことに、或る子供らしい、彼の感情の中に決して存在しさうもない位な無邪氣な悅びを味はつた。

彼は腰の後のポケットから探り出した鍵束の鍵の一つを槓杆が示してくれた鍵穴に入れた。厚い扉が主人を迎へる門の戶のやうに左右に開いた。勿論內部に異狀のある筈はなかつた。準造は鞄を引き寄せ、先づ紙幣と音のする銀貨をそれ〴〵の抽斗に收めた。最後に彼は證書の束を取り出して、それを一番上の廣い戶棚に收める前に、中から今夜檢査を終へて仕舞つておいた證書の四五枚を取り出し、今一度熱心に調べた。これは明日一番に着手しなければならない仕事の內容であつた。彼は不都合な利子の滯納者に對して腹立たしげに眉をしかめた。また明日のおそくも午前十一時までには、彼の貸した金の殆んど五倍を返す筈の借手に對して、滿足さうににこ〳〵した。それがすむと彼は今一束の紙片を取り出し、それに今日の新しい證書を加へて、自分の現在の貸つけ高を知り、またその利子を計算することに依つて、そ

れが何倍になるかの可能性を見ようとした。彼は机の上から算盤を持つて來て、金庫の前に小さく坐り、一切の證書の金額を片つ端から置きはじめた。本統を云ふと彼は既にそれはそらんじてゐる筈であつた。——少くとも二日に一遍は繰り返されてゐる大計算であつたから。併し彼は十年も打つちやつておいたやうな眞劍さで、殆んど夢中で黒い珠を動かした。何枚目かに、今日の夕方の新しい約手が現はれた時さへ、五十圓の金額と、月一割の利息と、三箇月の期限と、それ以外には、何んにも準造の注意を引くことは出來なかつた。

茶の間で時計が三十二打つた。



短夜（一幕）

久保田万太郎

□

専造。　彫金師

伊三郎。

重吉。　鐵物商

おさわ。　おふさの母

おふさ。　伊三郎の女房

およし。　専造の女房

□

大正八九年ごろ。

□

浅草駒形河岸附近。――專造の住居。

……專造、伊三郎、重吉、おさわの四人、食卓をかこんですわつてゐる。――食卓の上には、そこに手のつかた一品二品の西洋料理（ごくついとほりの、カツレツとか、野菜サラダとかいつたゝぐひの）だの、二三本の、空いた銚子だのがさびしくならんでゐる。――酒が出て、すくなくも、二時間はもう經つてゐる

七月はじめのある夜。深更。

幕のあかないまへからの沈默が、幕があいてからも、なほ、しばらくのあひだ慘めにつゞく。――專造も、伊三郎も、重吉も、おさわも、誰もこれ〴〵自分たちの心もちをみまもることによつて押しだまつてゐる。燈火のいろばかり空しくあかるい。

專造。（急にとなりの部屋つはうを向いて）おい、また……？

およし。（となりの部屋で）えゝ、いま……

再び沈默。

…外に支那料理屋の笛の音きこえる。――だん／＼遠くなる。

間。

およし、となりの部屋の長火鉢のまへを離れて、あたらしくついた銚子を専造のそばへ持つて來る。――専造うけとる。――そのまゝ、また、およしはとなりの部屋にかへる。（火を直したり銅壺に水をさしたりする）

専造。（重吉に）さア、熱いのを……

重吉。いえ、もう……

専造。まア…………

重吉。おそれ入ります。（自分のまへの猪口を取上げる）

専造。あゝ、其奴は…………

重吉。いゝえ、もう……（ついだッぱなしになつてゐた冷えたのを干す。――改めて専造のまへに猪口を出す）

専造。…………（酌をする）

重吉。へえ、もう。――おそれ入ります。（一くち飲んで、また、猪口を下に置く）

専造。（伊三郎に。――きはめて冷かに）伊三さん……

伊三郎。…………（呼ばれたまゝ顔を上げる）

專造。熱いのをどうだ。

伊三郎。………………（默つて、また、眼をふせる）

專造。（間。——おさわのはうを向いて）おつ母さん………

おさわ。わたくしは、もう。——お酌いたしませう……（手を出す）

專造。いゝや、……（自分で自分のまへの猪口につぐ。——銚子を下に置く）

重吉。（時計を出してみる。——急に）どうも、これは、遅くまで……（猪口の飲み殘しをあける）

專造。まア、もう一つ………

重吉。いゝえ、もう……（食卓のうへに猪口を伏せる）——とんだ、どうも、御厄介になりまして……（手拭だの煙草入だのをしまつする）

專造。何の。——なんにもお構ひ申さないで…………

重吉。では、これで。——まことに勝手でございますが…………

專造。ぢやア、いま、お茶を。——一寸……（押へておよしを呼ばうとする）

重吉。（それを、また、押へて）あゝ、いえ、もう結構でございます。………

專造。まア………

重吉。いえ、時間がもう何でございますから…………

專造。さうですか。

重吉。いづれ、二三日うちに、改めてまたおうかゞひいたします。

専造。（遮ぎるやうに）あゝ、其奴は。——今度はこつちから出ます。——わたしのはうから上ります。——いつもいつもお呼立てばかりして……

重吉。いゝえ、もう、そんなことは……

専造。お忙しいところをほんたうにすみません。

重吉。何のお役にも立ちませんで。——（伊三郎に）では、伊三郎さん、お暇しませう……（立ちかける）

伊三郎。…………（無言）

重吉。（かさねて）伊三郎さん……

伊三郎。………（無言。——身じろぎもしない）

専造、伊三郎を強くみる。——おさわも、顔を上げて、ぬすむやうにみる。

間。

重吉。（それとなく再び）出かけませう。——さ、出かけませう。——いつまで、何して、こちらのお宅も御迷惑です……

伊三郎。…………（無言）

重吉。ねえ……（促す）

伊三郎。…………（無言）

間。

専造。（こみ上げて来る心もちをおさへて）話が分らないのか、伊三郎さん……

伊三郎。…………………（無言）

専造。（かぶせて）まだ分らねえのか、お前には……

伊三郎。…………………（無言）

重吉。（なかをとつて）さア、伊三郎さん。——（聲を落して）惡いやうにはしません。——ね、とにかく惡いやうにはしませんから……

伊三郎。……………………（無言）

専造。（急に叩きつけるやうに）まだ、俺に、怒鳴らせ足りねえのか……
　およし、おさわ、専造のはうをみる。

重吉。（伊三郎に）それがいけない。——あなた、それがいけない。——このうへこなたに世話を燒かせるつてことはない。——あんまり勝手すぎる。——あんまりそれぢやア勝手すぎる。——わが儘すぎる。——ほんたうですよ……

伊三郎。……　…………（無言。——ふかくうなだれる）

重吉。（専造に）どうぞ、まア、こゝは。——わたくしからお詫びいたします。——お氣にどうぞおさへ下さらないで……

専造。あなたにさう被仰られると面目ない。——いゝえ、この男はもうあなたにお任せしたんだから、何もわたしが、側からよけいなさりやくをすることはないんですけれど。——それにしても、あんまり、ふんぎりがつかなすぎます。——大てい小自労つたくなります……

重吉。が、まア、それも。——話が分らない——分らないからどうといふわけでもないと思ひます。——得心はもう行

つてゐるにきまつてゐます。——得心が行つてゐればこそ……

専造。（割りこむやうに）これだけ是非善悪をいつて分らなければ……

重吉。（押へて）宅へ行つて、また、よく。——腹蔵のないところを、また、よく、聞いてみるつもりでをります。——伊三郎さんにしても、工合で、いひたいと思つていはなかつた　いひたいと思つてもいへなかつたことが、これで、あるだらうと思ひます。

専造。…………（無言）

重吉、伊三郎になんどりと何かいひ聞かせる。——さゝやくやうに……

やゝ長き間。

重吉。（改めて）まことに、どうも、遅くまで。——とんだお邪魔をいたしました。——（およしに）お内儀さん、何度上りまして、どうも……

およし。（火鉢のそばを離れて）お構ひ申しませんで。いつも、失礼ばかり。——どうぞお宅へよろしく被仰つて下さいまし。

重吉。有難う存じます

およし。日中はお熱くつていけませんけれど、夕刻、お涼しくなつてから、観音さまへお詣りながらお小さいのをおつれになつて、どうぞ、おかみさんにお出かけ下さいますやうに……

重吉。有難う存じます。——かへりましてさう申しますでございます。——疾うに出なければならないのでございますが、始終もうごたごたしてをりますもので、つひ……

およし。大ぜいさんでいらつしやるんだからお大抵ぢやアございません……

重吉。おつひでもございますまいが。あの邊を、もし、お通りがゝりでございましたら、是非、どうぞ。手前どもへもお立寄下さいまして。……

およし。是非、一度、わたくしもうかゞひます。

重吉。（おさわに）おふくろさん、失禮いたしました。――御免下さい……

おさわ。まことに、どうも……（あわてゝ座蒲團をすべる）

重吉、伊三郎を立たせる。伊三郎、斷念めたやうにぼんやり立つ。――格子口のはうへその部屋を出る。――專造、およし、おさわ、送つて出る。

間。

格子の音。――「お休み」「お休み」とたがひにいひ交すのが夜更らしいさびしさを持つて聞える。

間。

戸外で、犬、一しきり吠え立てる。――專造をさきに、およし、おさわ、もとのところに返つて來る。

誰も無言。

舞臺　たとへば、汐の退いたあとのやうな白けた心もちに支配される。

間。

專造。（およしに）何時だ、もう……？

およし。（食卓の上の汚れたものを下しながら）先刻がた一時をうちました。

専造。一時を？

およし。え〻。

専造。そんなになるのか？

およし。え〻。

専造。みんな、さきへ寝かしたか。

およし。寝かしました。——台所の人だけは、まだ、起きてゐますけれど……

専造。早く寝かした方がい〻。

およし。え〻。

専造。（襟さきを掻合せる）さすがに夜がふけると冷える……

およし。それは、あなた……

女中、出て来る。——汚れものを下げやうとする。

およし。それを持つて行くまへにおもてを閉めておくれ。

女中、そのま〻、格子のはうへ行く。

専造。（銚子の殘つてゐるのを取つて）一寸、これ、熱くしてくれ。

およし。（うけとつて立つ）——（おさわに）あ〻、おつ母さん、さうやつて置いて下さい。——いま、おかねがやりますから。

おさわ。へえ、……（手傳ひごころに、とも〴〵、手を出して片づける）

およし、火鉢のそばへ行く。

間。

女中、戸じまりをしてかへつて來る。――おさわの手から盃をうけとつて出て行きかける。

およし。流しへ出して置けばいゝよ。――明日のことにして……

女中。へえ。

およし。で、お前さん、すぐおやすみよ。

女中。有難うございます。

およし。（專造に）おふささんを何しませうか？

專造。うむ。

およし。それから、あつちへ行つたらおふささんに此方へみえるやうに……

女中。………………（出て行く）

間。

およし。（燗の直つたのを持つて來る）少しぬるいかも知れませんけれど……

專造。…………（うけとる。――無言。――ついで、すぐ、一くち飲む）

おさわ。（手を突いて）いろ〳〵どうも有難う存じました。

專造。（押へるやうに）いま、まア、おふささんが來る……

おさわ。…………（默る）

（煙火のいろ滲む

おふさ、出て來る。――おさわに引添つてすわる。

專造。おふさに）おふささん、とにかく筋書どほりに行つた。――伊三は重さんがうちへ連れて行つた。

おふさ…………（無言）

專造、これで、まア、お前さんもおつ母さんも一と安心だ。――もう大丈夫だ。

おさわ。有難う存じます。――とんだお骨折をかけまして……

專造、で、離緣狀といふ奴だが

おさわ。へえ。

專造、これは重さんのはうで當人に書かせることになつてゐる。――重さんが書かせて、いづれ持つて來る事になつてゐる。――だからそのつもりで……

おさわ。有難う存じます。

およし。（側から。――氣づかひなやうに）ですけど、重さんのいふなりに音無しく書くでせうか？

專造。（突つ放すやうに）書かないといつたところではじまらない。――いまさら強情張つたところで、此奴、どうなるものでもない。

およし。でも……

專造。いつもの傳に不貞腐れたり飲んだくれたりしてことをすませます。――ぐづ／＼にことをすまさうつたつてさうは行かねえ――なかに、今度は、俺が入つてゐるんだ。――俺といふものが入つてゐるんだ。

およし。大ぜいさんでいらつしやるんだからお大抵ぢやアございません……

重吉。おつひでもございますまいが。あの邊を、もし、お通りがゝりでございましたら、是非、どうぞ、手前どもへもお立寄下さいまして。……

およし。是非、一度、わたくしもうかゞひます。

重吉。（おさわに）おふくろさん、失禮いたしました。――御免下さい……

おさわ。まことに、どうも……（あわてゝ座蒲團をすべる）

重吉、伊三郎を立たせる。伊三郎、斷念めたやうにぼんやり立つ。――格子口のはうへその部屋を出る。――

專造、およし、おさわ、送つて出る。

間。

格子の音。――「お休み」「お休み」とたがひにいひ交すのが夜更らしいさびしさを持つて聞える。

間。

戸外で、犬、一しきり吠え立てる。――專造をさきに、およし、おさわ、もとのところに返つて來る。

誰も無言。

舞臺　たとへば、汐の退いたあとのやうな白けた心もちに支配される。

間。

專造。（およしに）何時だ、もう……？

およし（食卓の上の汚れたものを下しながら）先刻がた一時をうちました。

おふさ、顔を上げる。——およしと、おさわも、話をやめて専造のはうをみる。

専造。此奴、念のために聞いて置くが……

おふさ。………………（無言）

専造。假りに。——二年と三年と假りに經つて、だね。——伊三郎が、もし、料簡をすつぱり入替へて、酒も飲まない何もしない、大道の眞中で一杯五十のアイスクリームを賣つても親同胞にひもじい思ひはさせない。——となつたとする。——おふささん、お前さんどうする？

おふさ。………………（無言）

専造。どうするといふのは、縒をもどすか、もどさないか、だ。

おふさ。………………（無言）

専造。おつ母さんの肚はこのあひだ聞いた。——おつ母さんはどんなことがあつてもゝう縒はもどさない。——はつきりさういつた。

おふさ。………………（無言

専造。が、おつ母さんの亭主ぢやアない、お前さんの亭主だ。——とにかくお前さんの料簡を聞かないことには——聞いて置かないことにはあと〳〵どんな間違ひが、此奴、出て来ないともかぎらない。——そのときになつて、高慢な面をしても彼奴は無駄に年をとつた、と、俺としてもいはれたくねえ。

おふさ。………………（無言）

間。

　およし、火鉢のそばへ行く。

　間。

　女中、戸じまりをしてかへつて來る。――おさわの手から煙盆をうけとつて出て行きかける。

およし。流しへ出して置けばいゝよ。――明日のことにして……

女中。へえ。

およし。で、お前さん、すぐおやすみよ。――

女中。有難うございます。

およし。（専造に）おふささんを何しませうか？

専造。うむ。

およし。それから、あつちへ行つたらおふささんに此方へみえるやうに……

女中。……………（出て行く）

　間。

およし。（燗の直つたのを持つて來る）少しぬるいかも知れませんけれど……

専造。……………（うけとる。――無言。――ついで、すぐ、一くち飲む）

おさわ。（手を突いて）いろ／＼どうも有難う存じました。

専造。（押へるやうに）いま、まア、おふささんが來る……

おさわ。……………（默る）

専造。どうして？

およし。どうしてつて無理ですわ。――（おふさに）ねえ、おふささん……

おふさ。………………（無言）

およし。話がもうこゝまで來て。――書いたものをうけとるまでになつて……

専造。（いつそ嘲けるやうに）離縁狀だの起請だのつていふものは引裂いてしまへば紙屑だ。

およし。
おふさ。｝………………（無言）

間。

専造。（猪口をとり上げかけて、ふと、おふさに）何年になる、一しよになつて？

おふさ。（辛うじて聞きとれるほどに）五年でございます。

専造。（自分にいふやうに）早いものだ。……（飲む）

おさわ。……あんなにまで、いろ／＼。お骨折をかけまして。――折角まとめていたゞきましたのを……

専造。………………（無言）

およし。あの時分の伊三さんは、やさしい、氣の弱い。――思つたことでも半分も口へ出していへない風でしたのにねえ。――わづかなうちにどうしてあんなになつたんでせう？

おさわ。それを思ふとわたくしも不思議でございます。――かはつたと申してあれほどかはつた方はありますまいと思ひます。――お酒でも、以前は、それほど深くは飲まず……

およし。…………………（無言）

專造。ふざけた眞似をすれば俺が承知しねえ。

およし。（附け足すやうに）それには、まあ、重さんといふ人だつて係合つてゐるんですから……

おさわ。あちらにもいろ〳〵御心配をかけまして……

およし。（專造に）重さんといふ人は、けど、實のある人ですね

專造。…………………（無言。――一人でついで飲む）

およし。以前の義理をいつまでも忘れないで伊三さんの面倒を見る。――熱湯を飲まされるやうな目にあつても愛想を盡かさず。――出來ない事ですわ。

おさわ。（うなづく）全くでございます。

およし。大旦那にはお世話になつたが若旦那には何にもお世話にならない？――さういつてしまへば――つむじを曲げて、もし、さういつてしまつたらそれつきりの話ですわ。――一くちに不人情とはいへません。…………

おさわ。それは、もう……

およし。自分に苦勞すると、やつぱり、人のいたはりが違ひます。

おさわ。あれだけお仕出しになる方は、やつぱり、それだけのところがおありになります。

およし。人間、運だといひますけれど、必ずさうばかりもいへません。――それだけの、また、甲斐性がなければ……

おさわ。さうでございますとも。

專造。（急に）おふささん。

おふさ、顔を上げる。――およしと、おさわも、話をやめて專造のはうをみる。

專造。此奴、念のために聞いて置くが……

おふさ。…………………（無言）

專造。假りに。――二年と三年と假りに經つて、だね。――伊三郎が、もし、料簡をすつぱり入替へて、酒も飲まない何もしない、大道の眞中で一杯五十のアイスクリームを賣つても親同胞にひもじい思ひはさせない。――となつたとする。――おふささん、お前さんどうする？

おふさ。…………………（無言）

專造。どうするといふのは、緒をもどすか、もどさないか、だ。

おふさ。………………（無言）

專造。おつ母さんの肚はこのあひだ聞いた。――おつ母さんはどんなことがあつてもゝう緒はもどさない。――はつきりさういつた。

おふさ。……………（無言）

專造。が、おつ母さんの亭主ぢやアない、お前さんの亭主だ。――とにかくお前さんの料簡を聞かないことには――聞いて置かないことにはあと〳〵どんな間違ひが、此奴、出て來ないともかぎらない。――そのときになつて、高慢な面をしても彼奴は無駄に年をとつた、と、俺としてもいはれたくねえ。

おふさ。……………（無言）

間。

おさわ。……これの（おふさのはうをさして）うけこたへが悪いといつては打つたり蹴たり。仕打が氣に入らないといつては二日も三日もうちをあけたり。――やうやくかへつてまゐつたと思へば、もう、生體もなく醉つてをりましたり。――何かいへば、うるさい。出て行け。――お前たちに用はない。――二言目にはさう申して夜よなかで構はず怒鳴り散らします。――それもよろしうございます……

專造。（遮る）おつ母さん、それは聞いた。――いまゝでにさん〲聞いた。

おさわ。…………（だまる

專造。だから、いつてるぢやアないか。――當人がすつぱり料簡を入替へて、酒も飲まない何もしない、大道の眞ん中で一ぱい五十のアイスクリームを賣つても親同胞にひもじい思ひをさせない。――さうなつたとしたら。――さうなつたとしたらと、はつきり、さういつてゐるぢやアないか、

おさわ。へえ。――いえ……

專造。おつ母さんは愚痴が多くつていけない。

おさわ。…………（無言）

專造。（もう一度おふさのはうを向いて）どうだね、おふささん。

おふさ。………（無言）

專造。ほんたうにもう未練がないかね？

おふさ。……………（無言）

およし。（み兼ねるやうに）それは、あんた。――それは無理です。

おさわ。（全く意外に。——いつそほと／＼したやうに）樺にいたさせようと仕込んだつもりはございませんでしたが……

およし。……　………（無言）

間。

専造。いつまで饒舌(しやべ)つてゝも切りがない。——寝るとしようぢやアないか。

およし。さうですね。——ぢやアこゝを片附けて……

専造。おつ母さんの蒲團はいゝのか？

およし。えゝ、二階へおふささんのと一しよに敷かせて置きました。

おさわ。いゝえ、わたくしは。——近いんでございますから……

専造。幾ら近いつたつて、この時間に、女一人でかへれるもんぢやアない。

突然、戸外(そと)で、犬けたゝましく吠え立てる。——遠く、また、近く……

間。

雨戸を烈しい感じに叩く音……

專造。耳を立てゝ何誰……？

「わたくしです。――おあけになつて下さい。――すみませんがお開になつて下さい……」と上づつた聲でいそがしくいふのが――勿論はつきりではなく――聞える。

專造。重さんだ。

およし。ほんとうに……

專造、およしへ開けに行けとこなし。――およし、引きかけた食卓をそのまゝにして立つ。

專造。（おふさに）おふささん、あつちへ……

おふさ、いはれるまゝに急いでそこを立つ。

間。

戶をあけるのにつゞいて外から何かのなだれこむやうな物音。――「まア重さん。――あら伊三さんも……」と驚きと狼狽とでおよしのさういふのが聞える。――間もなく、およし、かへつて來る。

およし。あなた重さんと伊三さんとが怪我をして……

專造。怪我を？

およし。（おさわに）おつ母さん、一寸……

間。

といへば、隨分、不仕合せです。――日家になるのも、仕方がないとは、それは、思ひますけれど……

尋造。…………（無言）

およし。でも。――それにしても……

尋造。…………（無言）

およし。それならそれのやうに料簡をしめなければ。――料簡をしめて勝見のうちを立てる考へをしなければ。――伊三さんがやらないで外にだれがそれをやる人がありますか？

尋造。…………（無言）

およし。（そのまゝおさわへ）ねえ、大切なからだぢやありませんか。

おさわ。お店のあゝいふことになりましたのを、世間では、伊三郎さんにかづけていろ〱申します。――伊三郎さんが、いへば、おふさのやうなものと一しよになつたから。――さうといはないばかりのことをいろ〱申します。――聞くたびに、わたくし、お内儀さんのまへでございますけれど、それは人さまに知れない辛い思ひをいたしました。

尋造。それが、また、愚痴だ。――世間で何といはうとお前さんの退けめに思ふことはなんにもないぢやアないか。

おさわ。へえ……

尋造。いま、おつ母さんは、いろ〱お骨折をといつたけれど、さういはれるとこつちは何といつていゝか分らない。――面目しだいもない。――もと〱おつ母さんの堅いことをいつたのを――堅いことをいつてうんといはなかつたのを、こつちが無理に口說いてもらつたおふささんだ。……

おさわ。とんだことを……

東洋。（つゞけて）それもいゝ。――以前はどうでも、いまぢやア、伊三郎はおふささんの厄介ものだ。――おふささんに伊三は喰はしてもらつてゐるんだ。……

おさわ。…………（無言）

およし。（おさわに）全くおふささんのおかげですわ。――おふささんが思ひ切つてあゝいふことをはじめて下すつたから伊三さんも……

おさわ。とても、いゝえ、人さまにお教へ申すの何のといへる……ではないのでございますけれど。――外にどういたすことも出來ないもので……

およし。…………（うなづく）

おさわ。でも、有難いことに、さういふことならと被仰つて藏前のお師匠さん。――御存じでございませう、あの……

およし。えゝ、お政さん……

おさわ。あちらがたいへん肩をお入れ下さいましてね。――お弟子をお世話下すつたり、これの（おふさへこなし）ばじない、このごろの、新規のものをうつして下すつたり。――いろ〳〵御親切になすつて下さいます。

およし。結構ですわ、それは……

おさわ。これもさう申します。――わたくしもさうなれば安心でございます。――出來ませんまでも、このさき、これで、まア、細くもやつてまゐりたいと存じてをります。

およし。おふささんほどお出來になるものを持腐れになさるのは勿體なうございますわ。――それは、もう、さうなさるはうが何ですわ。

おさわ。（全く小聲に。——いつそほと〳〵したやうに）稼業にいたさせようと仕込んだつもりはございませんでしたが……

およし。……　………（無言）

間。

專造。いつまで饒舌つてゝも切りがない。——寝ようとしようぢやアないか。

およし。さうですね。——ぢやアこゝを片附けて……

專造。おつ母さんの蒲團はいゝのか？

およし。えゝ、二階へおふささんのと一しよに敷かせて置きました。

おさわ。いえ、わたくしは。——近いんでございますから……

專造。幾ら近いつたつて、この時間に、女一人でかへれるもんぢやアない。

突然、戸外で、犬けたゝましく吠え立てる。——遠く、また、近く……

間。

雨戸を烈しい感じに叩く音……

專造。…………………？（重吉のはうをみる）
重吉。一寸、わたくし、申上げたい……
專造。わたくしに？
重吉。へえ。
專造。………………（うなづく）
重吉。（出してゐた足を無理に折つてすわり直す。——手をついていんぎんに）改めて、わたくし、あなたにお詫を申上げます。
專造。重さん………
重吉。（つゞけて）自分のふつゝかを棚に上げて、今日まで、伊三郎さんのことにつき皆さん御親類の方々おそろひの中へさし出たことをいたしたり、また、申上げたりいたしました。——さぞ分にすぎた奴といふ思召もあつたらうと存じます。——何とも申譯がございません。
專造。…………（無言）
重吉。……が、わたくしは、御承知のとほり勝見の先代の大旦那に一方ならない御恩をいたゞいてをります。——十二の年から御厄介になり、どうにか今日、一人だちの出來ますやうになりましたのもみんな大旦那のおかげでございます。——その御恩の幾分でも。——せめて、その萬分の一でも、と、さう思ひますばかりに、わたくし、何か伊三郎さんのお役に立ちたい。——出來ますならばさういたしたいと考へました。……
專造。…………（無言

重吉。したが、今晩といふ今晩、わたくしどもが出る幕でないといふことがわたくしによく分りました。

専造。…………（無言）

重吉。わたくしどもの彼是いたすことは、反つて、伊三郎さんのおためにならない。――反つてさういふことになるといふことが、はつきり、わたくしに分りました。

専造。…………（無言）

重吉。口ほどにもない奴といふおさげすみをいたゞくことは存じてをります。――いたし方ございません。――お叱りを覚悟のうへで、わたくし、一まづ引取らせていたゞきたいと、その……

間。

専造。いや、分りました。……

重吉。…………（だまる）

専造。御尤もといふ外わたしにはいひやうがない。

重吉。…………（無言）

専造。あなたなればこそいまゝで我慢をして下すつた。――大ていの肝の煮えたこつたらうと思ひます。

重吉。…………（無言）

専造。すまないといふせりふは此方でいふ台詞です。

重吉。とんだことを。……

専造。…………（無言）

間。

重吉。では、甚勝手でございますが、これでわたくしはおいとまさせていたゞきます。

専造。どうぞ御随意に……

重吉。(およしに)とんだ、どうも、お騒がせいたしまして相済みません……

およし。(言葉すくなにたゞ)失禮いたしました。

重吉。(おさわに)おふくろさん、お聞きのとほりのしだいでございます。——どうぞ悪しからず……

おさわ。(力なく)まことにどうも……

重吉、座を立つ。——およし、おさわ、ともぐ\立つ。

重吉。どうぞ、もう……

専造。わたしはこゝで……

重吉、そのまゝ、伊三郎から眼をそらして出て行く。——およし、おさわ、従つて出る。

間。

専造。湯呑に酒を滿たす。——飲む。……

伊三郎、なほ、石のやうにうごかない。

(燈火のいろいよく\白く澄む)

專造。此奴を片づけてくれ。

およしとおさわのかへつて來たところで、專造、食卓を下げさせる――いはれるまゝ、およし、おさわと二人でそれをとなりの部屋に運ぶ。

戸外に犬の聲。――一しきりで止む。

間。

專造。(伊三郎に)此方へ來ねえ。

伊三郎。…………(無言)

專造。そこぢやア話が分らねえ。――もつと此方へ來ねえ。

伊三郎。…………(無言)

專造。(こみ上げて來る心もちをそのまゝ)何といふ眞似をしやあがるんだ、手めえは……

伊三郎。…………(無言)

專造。(かぶせて)何だつて、重吉に、手めえ、……(いひかけて、ふと、伊三郎の顔に眼をとめる。――咎めるやうに)何を、手めえ、泣いてゐるんだ?

伊三郎。…………(無言)

專造。…………？（重吉のはうをみる）

重吉。一寸、わたくし、申上げたい……

專造。わたしに？

重吉。へえ。

專造。……………（うなづく）

重吉。（出してゐた足を無理に折つてすわり直す。——手をついていんぎんに）改めて、わたくし、あなたにお詫を申上げます。

專造。重さん………

重吉。（つゞけて）自分のふつゝかを棚に上げて、今日まで、伊三郎さんのことにつき皆さん御親類の方々おそろひの中へさし出たことをいたしたり、また、申上げたりいたしました。——さぞ分にすぎた奴といふ思召もあつたらうと存じます。——何とも申譯がございません。

專造。…………（無言）

重吉。……が、わたくしは、御承知のとほり勝見の先代の大旦那に一方ならない御恩をいたゞいてをります。——十二の年から御厄介になり、どうにか今日、一人だちの出來ますやうになりましたのもみんな大旦那のおかげでございます。——その御恩の幾分でも。——せめて、その萬分の一でも、と、さう思ひますばかりに、わたくし、何か伊三郎さんのお役に立ちたい。——出來ますならばさういたしたいと考へました。……

專造。…………（無言

重吉。したが、今晩といふ今晩、わたくしどもが出ろ幕でないといふことがわたくしによく分りました。

專造。………………（無言）

重吉。わたくしどもの彼是(かれこれ)いたすことは、反(かへ)つて、伊三郎さんのおためにならない。――反(かへ)つてさういふことになるといふことが、はつきり、わたくしに分りました。

專造。…………（無言）

重吉。口ほどにもない奴といふおさげすみをいたゞくことは存じてをります。――いたし方ございません。――お叱りを覺悟のうへで、わたくし、一まづ引取らせていたゞきたいと、その……

間。

專造。いや、分りました。……

重吉。…………（だまる）

專造。御尤もといふ外わたしにはいひやうがない。

重吉。…………（無言）

專造。あなたなればこそいまゝで我慢をして下すつた。――大ごい肝の煮(に)えたこつたらうと思ひます。

重吉。…………（無言）

專造。すまないといふせりふは此方(こちら)でいふ臺詞(せりふ)です。

重吉。とんだことを。……

專造。…………（無言）

間。

重吉。では、甚だ勝手でございますが、これでわたくしはおいとまさせていたゞきます。

専造。どうぞ御随意に……

重吉。(およしに)とんだ、どうも、お騒がせいたしまして相済みません……

およし。(言葉ずくなにたゞ)失禮いたしました。

重吉。(おさわに)おふくろさん、お聞きのとほりのしだいでございます。――どうぞ悪しからず……

おさわ。(力なく)まことにどうも……

重吉、座を立つ。――およし、おさわ、とも〴〵立つ。

専造。わたしはこゝで……

重吉。どうぞ、もう……

重吉、そのまゝ、伊三郎から眼をそらして出て行く。――およし、おさわ、送つて出る。

間。

専造。湯呑に酒を満たす。――飲む。……

伊三郎、なほ、石のやうにうごかない。

(燈火のいろいよ〳〵白く澄む)

專造。と、手めえ、俺のいふことが聞かれねえんだな？

伊三郎。………………（無言）

專造。どうしても聞かれねえといふんだな？

伊三郎。……聞かれゝば、素直に、重さんところへ行きます。……（せきあげて來る涙をくひしばる）

間。

伊三郎、出て行く。──誰も無言。

長き間。

戸外（そと）に、また、犬の聲。──むしろ陰鬱に………

おふさ、だれも知らないうち奥から出て來て忍び泣く。──とも〲、およしも、おさわも泣く。

專造。（ふとその方を見て）何を泣いてるんだ、お前たちは？──たんにも泣くせきはないぢやアねえか？

おふさ。
およし。　………………（泣く）
おさわ。

專造。（わざと）おふささんは、まア、仕方がねえ。──とにかく亭主にわかれたんだ。──が、おつ母さんの泣くところはねえ。──何が悲しくつて、おつ母さん、泣くんだ？

專造。何が悲しいんだ？――泣くほど何が悲しいんだ？

伊三郎。…………（無言）

專造。ふざけるのもいゝ加減にしろ……

間。

伊三郎。（急に顔を上げて）おねがひがあります、小父さん……

專造。何？

伊三郎。おふさに逢はせてください。………（涙をおさへる）

專造。（冷かに）何のために？

伊三郎。逢へば分ります。――逢はせて下されば分ります。

專造。…………（無言）

伊三郎。わかれろと被仰るならわかれます。――わかれますからそのまへに。――そのまへに一度……

專造。手めえ、そこで何をしてゐたんだ？――今まで何をしてゐたんだ？

伊三郎。…………（だまる）

專造。手めえには俺のいまゝでいつたことが耳に入らなかつたのか？

伊三郎。…………（無言）

專造。おふささんは手めえに愛想が盡きたんだ。――愛想を盡かして手めえとすつぱり切れる料簡になつたんだ、

伊三郎。…………（無言）

專造。だが、どうたらた、ふんぎりのつかねえ手めえのこつた。——おめの勝手について喰ひ醉つたりすると出て行けがしにするくせに。——それだつて、いへば、手めえのはうで嫁なら出て行くのが本當なんだ。——いざとなると、こけ未練に、ぐづぐづえうもねえ御託をぬかすにきまつてゐる。——それをみ越して、おふささんは、手めえがうちを空けてゐる間に神戸の姉さんのところへ足を拔いたんだ。——はつきり、先刻、さういつたぢやアねえか。

伊三郎。そんなことをいはないで、小父さん。——お願ひです。——逢はせるだけあはせて下さい。——お願ひです。……

專造。…………（無言）

伊三郎。逢つて一と言聞けばいゝんです。—當人の胸を一と言聞けばいゝんです。—たつた一と言でいゝんです。……

專造。そんなことをいつて、手めえ、俺のいふことをうろんに思ふのか？

伊三郎。うろんに思やアしません。——うろんに思やアしませんけれど。——（幾分いひにくいかたちに）神戸へなんぞ行つてるわけがありません。……

專造。神戸へ行つてなくつて、ぢやア、どこにゐる？

伊三郎。…………（無言）

專造。俺がかくしたとでもいふのか？

伊三郎。…………（無言）

專造。そんならそれで探したらいゝだらう。——手めえのこゝにゐると思ふところを探したらいゝだらう。

伊三郎。…………（無言）

專造。ことによると俺のところにゐるかも知れねえ。——さがしねえ。——さがしてみねえ。——遠慮はねえから家探



大導寺信輔の半生

――或精神的風景畫――

芥川龍之介

一　本所

大導寺信輔の生まれたのは本所の回向院の近所だつた。彼の記憶に殘つてゐるものに美しい町は一つもなかつた。美しい家も一つもなかつた。殊に彼の家のまはりは穴藏大工だの駄菓子屋だの古道具屋だのばかりだつた。それ等の家々に面した道も泥濘の絶えたことは一度もなかつた。おまけに又その道の突き當りはお竹倉の大溝だつた。南京藻の浮かんだ大溝はいつも惡臭を放つてゐた。彼は勿論かう言ふ町々に憂欝を感ぜずにはゐられなかつた。しかし又、本所以外の町々は更に彼には不快だつた。しもた家の多い山の手を始め小綺麗な商店の軒を並べた、江戸傳來の下町も何か彼を壓迫した。彼は本郷や日本橋よりも寧ろ寂しい本所を――回向院を、駒止め橋

專造。と、手めえ、俺のいふことが聞かれねえんだな？

伊三郎。……………………（無言）

專造。どうしても聞かれねえといふんだな？

伊三郎。……聞かれゝば、素直に、兄さんところへ行きてえ……（せきあげて來る涙をくひしばる）

　　間。

　　伊三郎、出て行く。――誰も無言。

長き間。

戸外に、また、犬の聲。――むしろ陰欝に………

　　おふさ、だれも知らないうち奥から出て來て忍び泣く。――とも〳〵、およしも、おさわも泣く。

專造。（ふとその方を見て）何を泣いてるんだ、お前たちは？　――なんにも泣くせきはないぢやアねえか？

おふさ。
およし。
おさわ。
……………（泣く）

專造。（わざと）おふささんは、まア、仕方がねえ。――とにかく亭主にわかれたんだ。――が、おつ母さんの泣くところはねえ。――何が悲しくつて、おつ母さん、泣くんだ？

おさわ。…………（泣く）

専造。（およしに）手めえまで一しよになつて何のざまだ。……

およし。…………（泣く）

専造。彼奴（やつ）はうぬで堀つた穴へうぬで落ちたんだ。――音無（おとな）しく、あれで、重吉についてさへ行けば、いのちは、まだ、つなげたんだ。――あゝ、選（えら）んだもの、改めて重吉から、どうでせう、こゝをもう一度、と、いはれゝばいけないとはいへねえ。――おふささんにしても、おつ母さんにしても、とにかく一度は重吉の顔をたてなければならねえ。――（おふさとおさわに）さうだらう？

おふき。
おさわ。｝…………（無言。――泣く）

専造。それをあの馬鹿（ばか）が向うみずな真似をしやアがつてよ。――怪我までさせれば世話はねえ……

おふさ。
おさわ。｝…………（無言。――泣く）

専造。これでもう重吉とも縁切（えんきり）だ。――俺とも綺麗さつぱりだ。……

おふさ。
おさわ。｝…………（無言。――いよ〱泣く）

専造。なぜ、おつ母さん、わらつてやらねえッ――ざまアみろと、なぜ、いつてやらねえッ――心からでいゝ気味（きみ）ちやアねえか……

おさわ。でも、旦那。――みすみすたよるところが……

専造。いゝぢやアねえか。――どう路頭にまよはうと先方の勝手だ。――他人のことをよけいな心配だ。……

およし。さういつたつて、あなた。――それは……

専造。何がそれはだ？――手めえだつてさうだ。――いまの今まで、あんな人はない、あんな料簡の人はない、と、一しよになつて伊三のことを敵の末のやうにいつてゐたんぢやアねえか。――これをいまさらになりやアがつて……

およし。でも、あの、惨めな……

専造。惨め？――惨めといふのは俺のこつた。……

およし。…………（無言）

専造。手めえたちに泣かれて俺はどうすればいゝんだ？――どこに俺の立つ瀬はあるんだ？

およし。…………（無言）

専造。誰のためにしたんだ？――誰のためにしたこつた？――いやさ、誰にたのまれて横へ押した車と思ふんだ？

およし。…………（無言）

専造。（叩きつぶすやうに）いゝ加減にしろ、ふざけやアがつて……

　おふさ、およし、おさわ、泣く。

　専造、ふいと窓のそばに立つ。――戸をあける。

専造。……有難え、もう空が白んで来た。（胸に満ちた苦澁を惨んで来る泪ぐましさ……）

　三人、泣きつゞける。……

（幕）

（十三年十二月）

しかし彼の迷信は幸にも次第に消えて行つた。のみならず彼は西洋史の中に少くとも彼の迷信には反證に近いものを發見した。それは羅馬の建國者ロミユルスに乳を與へたものは狼であると言ふ一節だつた。彼は母の乳を知らぬことに爾來一層冷淡になつた。いや、牛乳に育つたことは寧ろ彼の誇りになつた。信輔は中學へはひつた春、年とつた彼の叔父と一しよに、當時叔父が經營してゐた牧場へ行つたことを覺えてゐる。殊にやつと柵の上へ制服の胸をのしかけたまゝ、目の前へ歩み寄つた白牛に干し草をやつたことを覺えてゐる。牛は彼の顏を見上げながらに、靜かに干し草へ鼻を出した。彼はその顏を眺めた時、ふとこの牛の瞳の中に何にか人間に近いものを感じた。空想？——或は空想かも知れない。が、彼の記憶の中には未だに大きい白牛が一頭、花を盛つた杏の枝の下に柵によつた彼を見上げてゐる。しみじみと、懷しさうに。……

三　貧困

信輔の家庭は貧しかつた。尤も彼等の貧困は棟割長屋に雜居する下流階級の貧困ではなかつた。が、體裁を繕ふ爲により苦痛を受けなければならぬ中流下層階級の貧困だつた。退職官吏だつた、彼の父は多少の貯金の利子を除けば、一年に五百圓の恩給に女中とも家族五人の口を餬して行かなければならなかつた。その爲には勿論節儉の上にも節儉を加へなければならなかつた。彼等は玄關とも五間の家に——しかも小さい庭のある門構への家に住んでゐた。けれども新らしい着物などは誰一人滅多に造らなかつた。父は常に客にも出されぬ惡酒の晩酌に甘んじてゐた。母もやはり羽織の下にはぎだらけの帶を隱してゐた。信輔も——信輔は未だにニスの臭い彼の机を覺えてゐる。机は古いのを買つたものの、上へ張つた綠色の羅紗も、銀色に光つた抽斗の金具も一見小綺麗に出來上つてゐた。が、實は羅紗も薄い

し、抽斗も素直にあいたことはなかつた。これは彼の机よりも彼の家の象徴だつた。體裁だけはいつも繕はなければならぬ彼の家の生活の象徴だつた。……

信輔はこの貧困を憎んだ。いや、今もなほ當時の憎惡は彼の心の奧底に消し難い反響を殘してゐる。彼は本を買はれなかつた。夏期學校へも行かれなかつた。新らしい外套も着られなかつた。が、彼の友だちはいづれもそれ等を受用してゐた。彼は彼等を羨んだ。時には彼等を妬みさへした。しかしその嫉妬や羨望を自認することは肯じなかつた。それは彼等の才能を輕蔑してゐる爲だつた。けれども貧困に對する憎惡は少しもその爲に變らなかつた。彼は古疊を、薄暗いランプを、蔦の畫の剝げかかつた唐紙を、——あらゆる家庭の見すぼらしさを憎んだ。が、それはまだ好かつた。彼は只見すぼらしさの爲に彼を生んだ兩親を憎んだ。殊に彼よりも背の低い、頭の禿げた父を憎んだ。父は度たび學校の保證人會議に出席した。信輔は彼の友だちの前にかう言ふ父を見ることを恥ぢた。同時にまた肉身の父を恥ぢる彼自身の心の卑しさを恥ぢた。國木田獨歩を模倣した彼の「自ら欺かざるの記」はその黃ばんだ罫紙の一枚にかう言ふ一節を殘してゐる。——

「予は父母を愛する能はず。否、愛する能はざるに非ず。父母その人は愛すれども、父母の外見を愛する能はず。貌を以て人を取るは君子の恥づる所也。況や父母の貌を云々するをや。然れども予は如何にするも父母の外見を愛する能はず。……」

けれどもかう言ふ見すぼらしさよりも更に彼の憎んだのは貧困に發した僞りだつた。母は「風月」の菓子折につめたカステラを親戚に進物にした。が、その中味は「風月」所か、近所の菓子屋のカステラだつた。父も、——如何に父は眞事しやかに「勤儉尚武」を敎へたであらう。父の敎へた所によれば、古い一冊の玉篇の外に漢和辭典を買ふことさ

幸福だつた。

或朝燒けの消えかかつた朝、父と彼とはいつものやうに百本杭へ散歩に行つた。百本杭は大川の河岸でも特に釣り師の多い場所だつた。しかしその朝は見渡した所、一人も釣り師は見えなかつた。廣い河岸には石垣の間に舟蟲の動いてゐるばかりだつた。彼は父に今朝に限つて釣り師の見えぬ訣を尋ねようとした。が、まだ口を開かぬうちに忽ちその答を發見した。朝燒けの揺らめいた川波には坊主頭の死骸が一人、磯臭い水草や五味のからんだ亂杭の間に漂つてゐた。――彼は未だにありありとこの朝の百本杭を覺えてゐる。三十年前の本所は感じ易い信輔の心に無數の追憶的風景畫を殘した。けれどもこの朝の百本杭は――この一枚の風景畫は同時に又本所の町々の投げた精神的陰影の全部だつた。

二　牛乳

信輔は全然母の乳を吸つたことのない少年だつた。元來體の弱かつた母は一粒種の彼を産んだ後さへ、一滴の乳も與へなかつた。のみならず乳母を養ふことも貧しい彼の家の生計には出來ない相談の一つだつた。彼はその爲に生まれ落ちた時から牛乳を飲んで育つて來た。それは當時の信輔には憎まずにはゐられぬ運命だつた。彼は毎朝台所へ來る牛乳の壜を輕蔑した。又何を知らぬにもせよ、母の乳だけは知つてゐる彼の友だちを羨望した。現に小學へはひつた頃、年の若い彼の叔母は年始か何かに來てゐるうちに乳の張つたのを苦にし出した。乳は眞鍮の嗽ひ茶碗へいくら絞つても出て來なかつた。叔母は眉をひそめたまま、半ば彼をからかふやうに「信ちやんに吸つて貰はうか？」と言つた。けれども牛乳に育つた彼は勿論吸ひかたを知る筈はなかつた。叔母はとうとう隣の子に――穴藏大工の女の子に固い乳房を吸つて貰つた。乳房は盛り上つた半球の上へ青い靜脈をかがつてゐた。はにかみ易い信輔はたとひ吸ふことは出來たに

恐怖を。……

丁度大學を卒業した秋、信輔は法科に在學中の或友だちを訪問した。彼等は壁も襖も古びた八疊の座敷に話してゐた。其後へ顔を出したのは六十前後の老人だつた。信輔はこの老人の顔に、――アルコオル中毒の老人の顔に退職官吏を直覺した。

「僕の父。」

彼の友だちは簡單にかうその老人を紹介した。老人は寧ろ傲然と信輔の挨拶を聞き流した。それから奥へはひる前に、「どうぞ御ゆつくり。あすこに椅子もありますから」と言つた。成程二脚の肘かけ椅子は黒ずんだ椽側に並んでゐた。が、それ等は腰の高い、赤いクッションの色の褪めた半世紀前の古椅子だつた。信輔はこの二脚の椅子に全中流下層階級を感じた。同時に又彼の友だちも彼のやうに父を恥ぢてゐるのを感じた。かう言ふ小事件も彼の記憶に苦しいほどはつきりと殘つてゐる。思想は今後も彼の心に雜多の陰影を與へるかも知れない。しかし彼は何よりも先に退職官吏の息子だつた。下層階級の貧困よりもより虚僞に甘んじなければならぬ中流下層階級の貧困の生んだ人間だつた。

四　學校

學校も亦信輔には薄暗い記憶ばかり殘してゐる。彼は大學に在學中、ノオトもとらずに出席した二三の講義を除きさへすれば、どう言ふ學校の授業にも興味を感じたことは一度もなかつた。が、中學から高等學校、高等學校から大學と幾つかの學校を通り拔けることは僅かに貧困を脱出するたつた一つの救命袋だつた。尤も信輔は中學時代にはかう言ふ事實を認めなかつた。少くともはつきりとは認めなかつた。しかし中學を卒業する頃から、貧困の脅威は曇天のやうに

しかし彼の迷信は幸にも次第に消えて行つた。のみならず彼は西洋史の中に少くとも彼の迷信には反證に近いものを發見した。それは羅馬の建國者ロミユルスに乳を與へたものは狼であると言ふ一節だつた。彼は母の乳を知らぬことに爾來一層冷淡になつた。いや、牛乳に育つたことは寧ろ彼の誇りになつた。信輔は中學へはひつた春、年とつた彼の叔父と一しよに、當時叔父が經營してゐた牧場へ行つたことを覺えてゐる。殊にやつと柵の上へ制服の胸をのしかけたまゝ、目の前へ歩み寄つた白牛に干し草をやつたことを覺えてゐる。牛は彼の顏を見上げながら、靜かに干し草へ鼻を出した。彼はその顏を眺めた時、ふとこの牛の瞳の中に何にか人間に近いものを感じた。空想？――或は空想かも知れない。が、彼の記憶の中には未だに大きい白牛が一頭、花を盛つた杏の枝の下に柵によつた彼を見上げてゐる。しみじみと、懷しさうに。……

三 貧困

信輔の家庭は貧しかつた。尤も彼等の貧困は棟割長屋に雜居する下流階級の貧困ではなかつた。が、體裁を繕ふ爲により苦痛を受けなければならぬ中流下層階級の貧困だつた。退職官吏だつた、彼の父は多少の貯金の利子を除けば、一年に五百圓の恩給に女中とも家族五人の口を餬して行かなければならなかつた。その爲には勿論節儉の上にも節儉を加へなければならなかつた。彼等は玄關とも五間の家に――しかも小さい庭のある門構への家に住んでゐた。けれども新らしい着物などは誰一人滅多に造らなかつた。父は常に客にも出されぬ惡酒の晩酌に甘んじてゐた。母もやはり羽織の下にはぎだらけの帶を隱してゐた。信輔も――信輔は未だにニスの臭い彼の机を覺えてゐる。机は古いのを買つたものの、上へ張つた綠色の羅紗も、銀色に光つた抽斗の金具も一見小綺麗に出來上つてゐた。が、實は羅紗も薄い

し、抽斗も素直にあいたことはなかつた。これは彼の机よりも彼の家の象徴だつた。體裁だけはいつも繕はなければならぬ彼の家の生活の象徴だつた。……

信輔はこの貧困を憎んだ。いや、今もなほ當時の憎惡は彼の心の奧底に消し難い反響を殘してゐる。彼は本を買はれなかつた。夏期學校へも行かれなかつた。新らしい外套も着られなかつた。が、彼の友だちはいづれもそれ等を受用してゐた。彼は彼等を羨んだ。時には彼等を妬みさへした。しかしその嫉妬や羨望を自認することは肯じなかつた。それは彼等の才能を輕蔑してゐる爲だつた。けれども貧困に對する憎惡は少しもその爲に變らなかつた。彼は古畳を、薄暗いランプを、蔦の畫の剝げかかつた唐紙を、――あらゆる家庭の見すぼらしさを憎んだ。が、それはまだ好かつた。彼は只見すぼらしさの爲に彼を生んだ兩親を憎んだ。殊に彼よりも背の低い、頭の禿げた父を憎んだ。父は度たび學校の保證人會議に出席した。信輔は彼の友だちの前にかう言ふ父を見ることを恥ぢた。同時にまた肉身の父を恥ぢる彼自身の心の卑しさを恥ぢた。國木田獨歩を模倣した彼の「自ら欺かざるの記」はその黄ばんだ罫紙の一枚にかう言ふ一節を殘してゐる。――

「予は父母を愛する能はず。否、愛する能はざるに非ず。父母その人は愛すれども、父母の外見を愛する能はず。貌を以て人を取るは君子の恥づる所也。況や父母の貌を云々するをや。然れども予は如何にするも父母の外見を愛する能はず。……」

けれどもかう言ふ見すぼらしさよりも更に彼の憎んだのは貧困に發した僞りだつた。母は「風月」の菓子折につめたカステラを親戚に進物にした。が、その中味は「風月」所か、近所の菓子屋のカステラだつた。父も、――如何に父は眞事しやかに「勤儉尙武」を敎へたであらう。父の敎へた所によれば、古い一冊の玉篇の外に漢和辭典を買ふことさ

や、今はいつのまにか當時の憎惡を忘れてゐる。中學は彼には惡夢だつた。けれども惡夢だつたことは必しも不幸とは限らなかつた。彼はその爲に少くとも孤獨に堪へる性情を生じた。さもなければ彼の半生の歩みは今日よりももつと苦しかつたであらう。彼は彼の夢みてゐたやうに何冊かの本の著者になつた。しかし彼に與へられたものは畢竟落寞とした孤獨だつた。この孤獨に安んじた今日、――或はこの孤獨に安んずるより外に仕かたのないことを知つた今日、二十年の昔をふり返つて見れば、彼を苦しめた中學の校舍は寧ろ美しい薔薇色をした薄明りの中に横はつてゐる。尤もグラウンドのポプラアだけは不相變鬱々と茂つた梢に寂しい風の音を宿しながら。………

五　本

本に對する信輔の情熱は小學時代から始まつてゐた。この情熱を彼に教へたものは父の本箱の底にあつた帝國文庫本の水滸傳だつた。頭ばかり大きい小學生は薄暗いランプの光のもとに何度も「水滸傳」を讀み返した。のみならず本を開かぬ時にも替天行道の旗や景陽岡の大虎や菜園子張青の梁に吊つた人間の腿を想像した。想像？――しかしその想像は現實よりも一層現實的だつた。彼は又何度も木劍を提げ、干し菜をぶら下げた裏庭に「水滸傳」中の人物と、――一丈青扈三娘や花和尚魯智深と格鬪した。この情熱は三十年間、絶えず彼を支配しつづけた。彼は度たび本を前に夜を徹したことを覺えてゐる。いや、几上、車上、厠上、――時には路上にも熱心に本を讀んだことを覺えてゐる。木劍は勿論「水滸傳」以來二度と彼の手に取られなかつた。が、彼は本の上に何度も笑つたり泣いたりした。それは言はば轉身だつた。本の中の人物に變ることだつた。彼は天竺の佛のやうに無數の過去生を通り抜けた。イヴアン・カラマゾフを、ハムレツトを、公爵アンドレエを、ドン・ジユアンを、メフイストフエレスを、ライネツケ狐を、――しかも

恐怖を。……

丁度大學を卒業した秋、信輔は法科に在學中の或友だちを訪問した。彼等は壁も唐紙も古びた八疊の座敷に話してゐた。其後へ顔を出したのは六十前後の老人だつた。信輔はこの老人の顔に、――アルコオル中毒の老人の顔に退職官吏を直覺した。

「僕の父。」

彼の友だちは簡單にかう其の老人を紹介した。老人は寧ろ傲然と信輔の挨拶を聞き流した。それから奥へはひる前に、「どうぞ御ゆつくり。あすこに椅子もありますから」と言つた。成程二脚の肘かけ椅子は黒ずんだ椽側に並んでゐた。が、それ等は腰の高い、赤いクッションの色の褪めた半世紀前の古椅子だつた。信輔はこの二脚の椅子に全中流下層階級を感じた。同時に又彼の友だちも彼のやうに父を恥ぢてゐるのを感じた。かう言ふ小事件も彼の記憶に苦しいほどはつきりと殘つてゐる。思想は今後も彼の心に雜多の陰影を與へるかも知れない。しかし彼は何よりも先に退職官吏の息子だつた。下層階級の貧困よりもより虛僞に甘んじなければならぬ中流下層階級の貧困の生んだ人間だつた。

四　學校

學校も亦信輔には薄暗い記憶ばかり殘してゐる。彼は大學に在學中、ノオトもとらずに出席した二三の講義を除きさへすれば、どう言ふ學校の授業にも興味を感じたことは一度もなかつた。が、中學から高等學校、高等學校から大學と幾つかの學校を通り拔けることは僅かに貧困を脫出するたつた一つの救命袋だつた。尤も信輔は中學時代にはかう言ふ事實を認めなかつた。少くともはつきりとは認めなかつた。しかし中學を卒業する頃から、貧困の脅威は曇天のやうに

尤も貧しい信輔は到底彼の讀むだけの本を自由に買ふことは出來なかつた。彼のかう言ふ困難をどうにかかうにか脫したのは第一に圖書館のおかげだつた。第二に貸本屋のおかげだつた。第三に吝嗇の譏さへ招いだ彼の節儉のおかげだつた。彼ははつきりと覺えてゐる——大溝に面した貸本屋を、人の好い貸本屋の婆さんを、婆さんの內職にする花簪を。婆さんはやつと小學へ入つた「坊ちやん」の無邪氣を信じてゐた。が、その「坊ちやん」はいつの間にか本を探がす風を裝ひながら、偸み讀みをすることを發明してゐた。彼は又はつきりと覺えてゐる。——古本屋ばかりごみごみ並んだ二十年前の神保町通りを、その古本屋の屋根の上に日の光を受けた九段坂の斜面を。勿論當時の神保町通りは電車も馬車も通じなかつた。彼は——十二歲の小學生は辨當やノオト・ブツクを小脇にしたまま、大橋圖書館へ通ふ爲に何度もこの通りを往復した。道のりは往復一里半だつた。大橋圖書館から帝國圖書館へ。彼は帝國圖書館の與へた第一の感銘をも覺えてゐる。——高い天井に對する恐怖を、大きい窓に對する恐怖を、無數の椅子を埋め盡した無數の人々に對する恐怖を。が、恐怖は幸ひにも二三度通ふうちに消滅した。彼は忽ち閱覽室に、鐵の階段に、カタロオグの箱に、地下の食堂に親しみ出した。それから大學の圖書館や高等學校の圖書館へ。彼はそれ等の圖書館に何百冊とも知れぬ本を借りた。又それ等の本の中に何十冊をも知れぬ本を愛した。しかし——

しかし彼の愛したのは——殆ど內容の如何を問はずに本そのものを愛したのはやはり彼の買つた本だつた。信輔は本を買ふ爲めにカフエへも足を入れなかつた。が、彼の小遣ひは勿論常に不足だつた。彼はその爲めに一週に三度、親戚の中學生に數學（!）を教へた。それでもまだ金の足りぬ時はやむを得ず本を賣りに行つた。けれども賣り價は新らしい本でも買ひ價の半ば以上になつたことはなかつた。のみならず永年持つてゐた本を古本屋の手に渡すことは常に彼には悲劇だつた。彼は或薄雪の夜、神保町通りの古本屋を一軒々々覗いて行つた。その內に或古本屋に「ツアラトストラ」を一

發見した。それも只の「ツアラトストラ」ではなかつた。二月ほど前に彼の賣つた手垢だらけの「ツアラトストラ」だつた。彼は店先きに佇んだまゝ、この古い「ツアラトストラ」を所どころ讀み返した。すると讀み返せば讀み返すほど、だんだん懷しさを感じだした。

「これはいくらですか？」

十分ばかり立つた後、彼は古本屋の女主人にもう「ツアラトストラ」を示してゐた。

「一圓六十錢。――御愛嬌に一圓五十錢にして置きませう。」

信輔はたつた七十錢にこの本を賣つたことを思ひ出した。が、やつと賣り價の二倍、――一圓四十錢に價切つた末、とうとうもう一度買ふことにした。雪の夜の往來は家々も電車も何か微妙に靜かだつた。彼はかう言ふ往來をはるばる本郷へ歸る途中、絶えず彼の懷ろの中に鋼鐵色の表紙をした「ツアラトストラ」を感じてゐた。しかし又同時に口の中には何度も彼自身を嘲笑してゐた。……

六　友だち

信輔は才能の多少を問はずに友だちを作ることは出來なかつた。たとひどう言ふ君子にもせよ、素行以外に取り柄のない青年は彼には用のない行人だつた。いや、寧ろ顏を見る度に揶揄せずにはゐられぬ道化者だつた。それは操行點六點の彼には當然の態度に違ひなかつた。彼は中學から高等學校、高等學校から大學と幾つかの學校を通り拔ける間に絶えず彼等を嘲笑した。勿論彼等の或ものは彼の嘲笑を憤つた。しかし又彼等の或ものは彼の嘲笑を感ずる爲にも餘りに模範的君子だつた。彼は「厭な奴」と呼ばれることには常に多少の愉快を感じた。が、如何なる嘲笑も更に手答へない

や、今はいつのまにか當時の憎惡を忘れてゐる。中學は彼には惡夢だつた。けれども惡夢だつたことは必しも不幸とは限らなかつた。彼はその爲に少くとも孤獨に堪へる性情を生じた。さもなければ彼の半生の歩みは今日よりももつと苦しかつたであらう。彼は彼の夢みてゐたやうに何冊かの本の著者になつた。しかし彼に與へられたものは畢竟落寞とした孤獨だつた。この孤獨に安んじた今日、——或はこの孤獨に安んずるより外に仕かたのないことを知つた今日、二十年の昔をふり返つて見れば、彼を苦しめた中學の校舍は寧ろ美しい薔薇色をした薄明りの中に横はつてゐる。尤もグラウンドのポプラアだけは不相變鬱々と茂つた梢に寂しい風の音を宿しながら。………

五　本

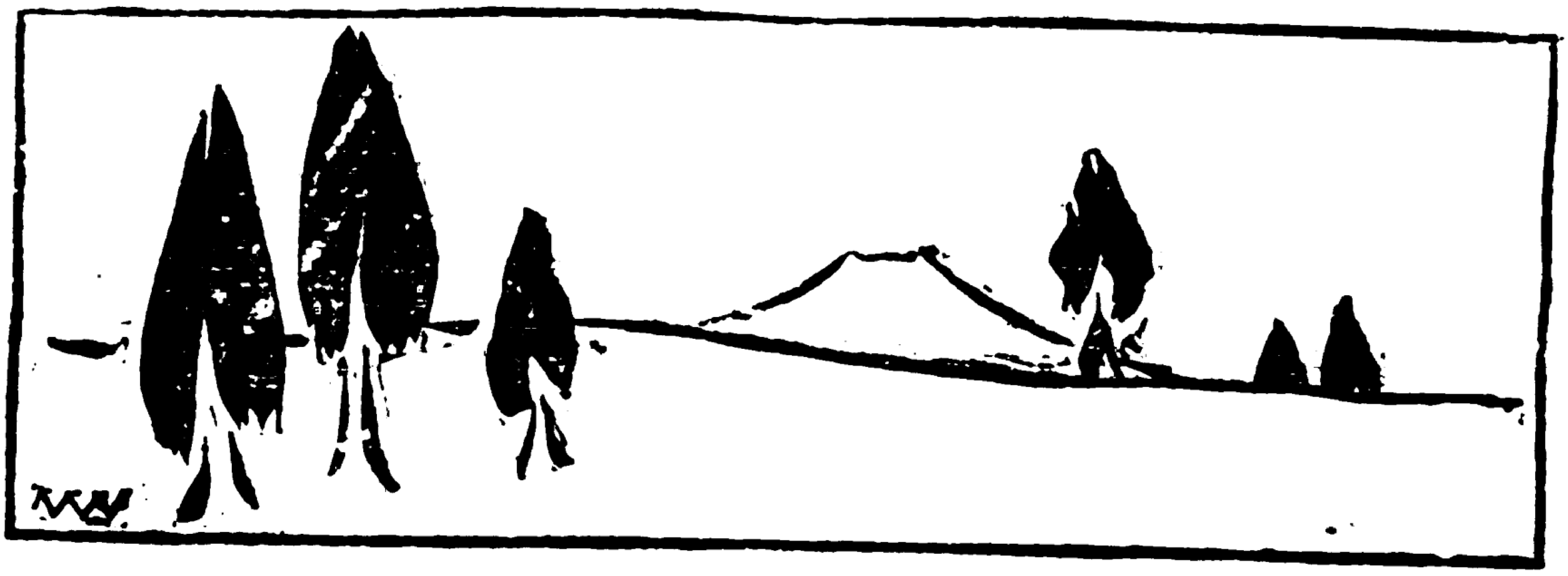
本に對する信輔の情熱は小學時代から始まつてゐた。この情熱を彼に教へたものは父の本箱の底にあつた帝國文庫本の水滸傳だつた。頭ばかり大きい小學生は薄暗いランプの光のもとに何度も「水滸傳」を讀み返した。のみならず本を開かぬ時にも替天行道の旗や景陽岡の大虎や菜園子張青の梁に吊つた人間の腿を想像した。想像？——しかしその想像は現實よりも一層現實的だつた。彼は又何度も木劍を提げ、干し菜をぶら下げた裏庭に「水滸傳」中の人物と、——一丈青扈三娘や花和尚魯智深と格鬪した。この情熱は三十年間、絶えず彼を支配しつづけた。彼は度たび本を前に夜を徹したことを覺えてゐる。いや、几上、車上、厠上、——時には路上にも熱心に本を讀んだことを覺えてゐる。木劍は勿論「水滸傳」以來二度と彼の手に取られなかつた。が、彼は本の上に何度も笑つたり泣いたりした。それは言はば轉身だつた。本の中の人物に變ることだつた。彼は天竺の佛のやうに無數の過去生を通り拔けた。イヴアン・カラマゾフを、ハムレツトを、公爵アンドレエを、ドン・ジユアンを、メフイストフエレスを、ライネツケ狐を、——しかも

これ等の或ものは一時の轉身には限らなかつた。現に或晩秋の午後、彼は小遣ひを貰ふ爲に年とつた叔父を訪問した。叔父は長州萩の人だつた。彼はことさらに叔父の前に滔々と維新の大業を論じ、上は村田清風から下は山縣有朋に至る長州の人材を讃嘆した。が、この虛僞の感激に充ちた、顏色の蒼白い高等學校の生徒は當時の大導寺信輔よりも寧ろ若いジュリアン・ソレル——「赤と黑」の主人公だつた。

かう言ふ信輔は當然又あらゆるものを本の中に學んだ。少くとも本に負ふ所の全然ないものは一つもなかつた。實際彼は人生を知る爲に街頭の行人を眺めなかつた。寧ろ行人を眺める爲に本の中の人生を知らうとした。それは或は人生を知るには迂遠の策だつたのも知れなかつた。が、街頭の行人は彼には只行人だつた。彼は彼等を知る爲には、——彼等の愛を、彼等の憎惡を、彼等の虛榮心を知る爲には本を讀むより外はなかつた。本を、——殊に世紀末の歐羅巴の産んだ小說や戲曲を。彼はその冷たい光の中にやつと彼の前に展開する人間喜劇を發見した。いや、或は善惡を分たぬ彼自身の魂をも發見した。それは人生には限らなかつた。彼は本所の町々に自然の美しさを發見した。しかし彼の自然を見る目に多少の鋭さを加へたのはやはり何冊かの愛讀書、——就中元祿の俳諧だつた。彼はそれ等を讀んだ爲に「都に近き山の形」を、「鬱金畠の秋の風」を、「沖の時雨の眞帆片帆」を、「闇のかた行く五位の聲」を、——本所の町々の教へなかつた自然の美しさをも發見した。この「本から現實へ」は常に信輔には眞理だつた。彼は彼の半生の間に何人かの女に戀愛を感じた。けれども彼等は誰一人女の美しさを教へなかつた。少くとも本に學んだ以外の女の美しさを教へなかつた。彼は日の光を透かした耳や頰に落ちた睫毛の影をゴオテイエやバルザツクやトルストイに學んだ。女は今も信輔にはその爲に美しさを傳へてゐる。若しそれ等に學ばなかつたとすれば、彼は或は女の代りに牝ばかり發見してゐたかも知れない。……………

た。信輔は未だにありありと目もとに殘酷な微笑を浮べた彼の友だちを覺えてゐる。彼の友だちは人並み以上に語學の才能を具へてゐた。しかし又確かに人並み以上に鋭い犬齒をも具へてゐた。………（以下續出）

附記　この小說はもうこの三四倍續けるつもりである。今度揭げるだけに「大導寺信輔の半生」と言ふ題は相當しないのに違いないが、他に替る題もない爲にやむを得ず用ひることにした。「大導寺信輔の半生」の第一篇と思つて頂けば幸甚である。　大正十三年十二月九日、作者記。



挿話

徳田秋聲

一

道太が甥の辰之助と、兄の留守宅を出たのは、ちようどその日の昼少し過ぎであつた。彼は兄の病臥してゐる山の事務所を引揚げて、その時K市のステイションへ着いたばかりであつたが、旅行先から急電によつて、兄の見舞ひに来たので、ほんの一二枚の着替へしかもつてゐなかつたところから、病氣が長引くと看て、必要なものだけ一ト鞄東京の宅から送らせて、當分此の町に滯在するつもりであつたが、嫂も看護に行つてゐて、留守宅には女中が二人ゐるきりなので、どこぞ外に宿を取らうといふ算段であつた。兄の家では、大阪から見舞ひに来てゐた、X會社の重役である嫂の弟が、これも昨日山からおりて、今日歸る筈で立つ仕度をしてゐた。

「こゝもなか〳〵暑いね。」道太は手廻りの小物のはいつてゐるバスケットを辰之

助にもつてもらひ、自分は米の袋を提げて、扇子を使ひながら歩いてゐた。山では病室の次ぎの間に、彼は五日ばかりゐた。道太の姉や従姉妹や姪や、そんな人達が、次ぎ／＼にK市から来て、山へ登つて来てゐたが、部屋が暑苦しいのと、事務所の人達に迷惑をかけるのを恐れて、彼はK市で少し吻としようと思つて降りて来た。

「何しろ七月は莫迦に忙しい月で、すつかり頭脳を滅茶苦茶にしてしまつたんで、少し休養したいと思つて。」

「それなら姉の家は何うですか。今は静かです。」

「さあ。」道太は姉の家も廣くはあるし、水を隔てゝ青い山も見えるので、悪くはないと思つたけれど、未亡人の姪が、子供達と静かに暮してゐるので厄介になるのも心苦しかつた。

「とにかく腹が減つたね。」

「え、何處か涼しいところで風呂に入つて御飯を食べませう。途中少し暑いですけれど、少しづゝ片陰になつて来ますから。」

それから古道具屋などの多い町を通つて、二人は川の縁へ出て来た。道太が小い時分、泳ぎに来たり魚を釣つたりした川で、今も多勢子供が水に入つてゐた。岸から綸を垂れてゐる男もあつた。道太は殊に無邪気であつた自分を懐ひ出した。崖の上には裏口の門があつたり、垣が續いたりして、好い屋敷の庭木がづつと頭の上へ枝を伸してゐた。昔しから打續いた港の富豪の妾宅なぞがそこにあつた。

「あれは何うしたかね、壽田は。」

「あゝすつかり零落れてしまひました。今は京都でお茶の師匠をしてゐるさうですが……。」

道太は辰之助からその家にあつた什器品の話などを聞きながら、崖の下を歩いてゐた。飯を食ふ店には、その途から見

見える山の裾にあつたが、ぶら〳〵歩くには適度の距離であつた。道太は到るところで少年時代の自分の[illegible]めくさい[illegible]に打つかるやうな氣がしたが、どこも昔しながらの靜かさで、近代的産業がないだけに、發展しつゝある都會のやうな混亂と惡趣味がなかつた。歸る度に入りつけた料理屋へついて、だゝつ廣い石疊の入口から、庭の飛石を傳つて行くと、そこに時代のついた庭に向いて、古びた部屋があつた。道太は路次の前に立つて、寂のついた庭を眺めてゐた。この町でも別に好いといふほどの庭ではなかつたけれど、乾いた頭腦には、おとなさいやうな木石の布置が、殊に懐かしく映るのであつた。

「少し手入をすると好いんですけれど」辰之助はさう言つて爪先に埃のついた白足袋を脱いでゐたが、彼も東京で修業した或種類の藝術家なので、この町の多くの人がもつてゐるやうなお茶の趣味はもつてゐた。骨董品――殊に古陶器などには、優れた鑑賞眼もあつて、何を見せても時代と工人とをよく見分けることができたが、粗野に育つた道太も、年を取つてからさうした東洋趣味にいくらか目があいて來たやうで、若し金があつたら庭でも作つて見たいやうな氣持に偶にはなることもあつた。

料理を誂へておいて、辰之助が馴染の女でも呼ぶらしく自身電話をかけてゐる間に、道太は風呂場へ行つた。そして水をうめてゐるところへ彼もやつて來た。

「去年の九月を思ひ出すね。」道太は湯に浸りながら言つた。

「さよ〳〵。あの時は何うも……」

去年のあの頃、道太の頭腦はまるで鐵槌で打のめされたやうになつてゐたので、それを慰める積りで、どうせ今日は立てないからと、辰之助は彼をこの家へ引張つて來た。それは四日の日で、道太は途中少し廻り道をして、實家をして

から、こゝへ遣つて來た。そして大きな絹楊枝で草色をした牛皮を食べてゐると、お湯の加減がいゝといふので、湯殿へ入つて行つた。すると親類の一人から電話がかゝつて、辰之助が出て行くと、今避難者が四百ばかり着くから、その中に道太の家族がゐるかも知れないといふのであつた。道太は覺束ないことだと思ひながら、何だか本當に來るやうな氣がして、あわてゝお湯を飛出した。誰誰がこゝまで來る幸福をもつてゐるだらう。其でも生殘つた一人か二人を迎へることができるか知ら――彼はそんな事を思ひながら、ぽつ〳〵落ちて來る雨をくぐつて、氣ばかり驛へ急いだものであつた。道太は湯に浸りながら、驛で一人々々救護所へ入つて行つた當時の避難者の顏や姿まで思ひ出すことができた。

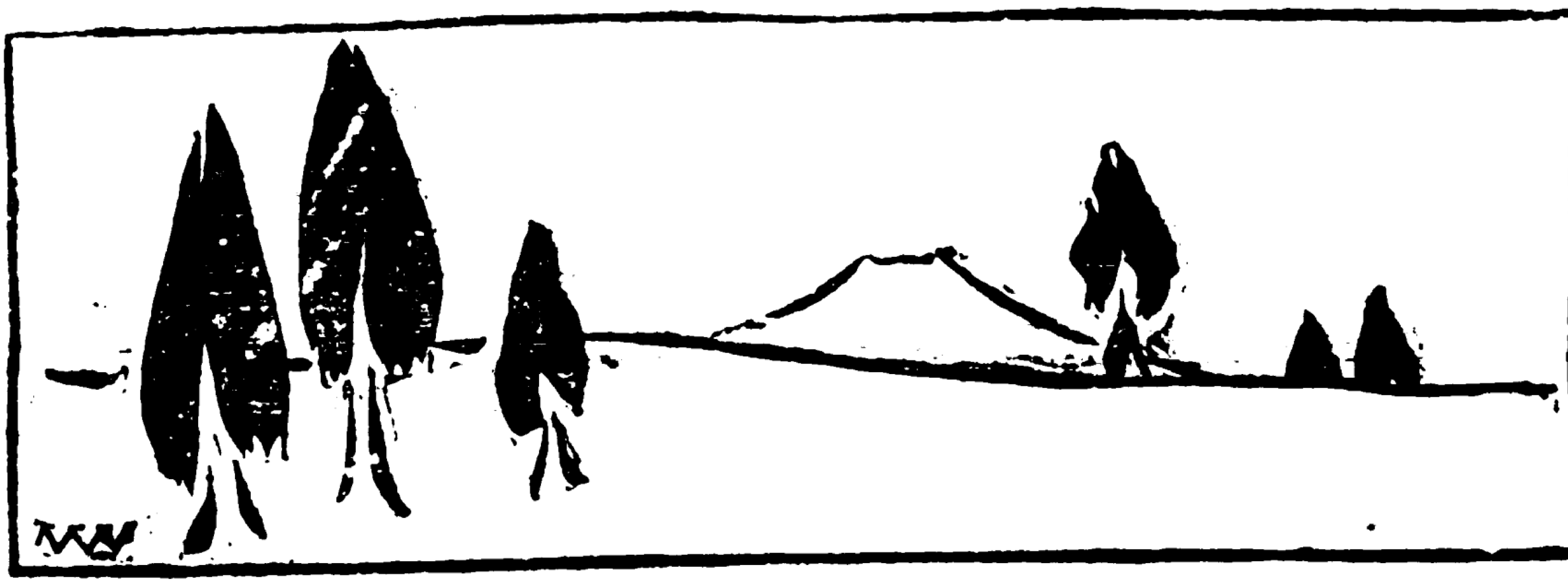
「今日の容態はどうか知ら。」道太は座敷へ歸つてから、大きな鮎の鹽燒などに箸をつけながら兒が今頃どうしてゐるかを氣遣つた。

「さあ、後程電話できいて見ませう。」さう言つて辰之助はどつかり胡座を組んで、酒を呑んでゐた。

そこへ女が現はれた。おひろと言つて、道太も子供の時から知つてゐる女であつた。その家も少年のをり、父につれられて行きつけてゐた。道太の父祖の代に、古い町家であつたその家へ、緣組があつた。何時頃そんな商賣をやり出したか知らなかつたが、今でも長者のやうな氣持でゐるおひろ達の母親は、口の嗜好などのおごつたお上品なお婆さんであつた。時代の空氣の流れない此の町のなかでも、こんな人はまた珍らしかつた。小柄なおひろはもう三十ぐらゐになつてゐる勘定であつた。

「お久しぶりですね。」おひろは瘠せた膝をして、ぴつたりとそこに座つた、

「相變らず瘠せてゐるね。やつぱり出てゐるんだね。」道太は淺黑いその顏を見ながら話かけた。



挿話

徳田秋聲

一

道太が甥の辰之助と、兄の留守宅を出たのは、ちようどその日の晝少し過ぎであつた。彼は兄の病臥してゐる山の事務所を引揚げて、その時K市のステイションへ着いたばかりであつたが、旅行先から急電によつて、兄の見舞ひに來たので、ほんの一二枚の着替へしかもつてゐなかつたところから、病氣が長引くと看て、必要なものだけ一ト鞄東京の宅から送らせて、當分此の町に滯在するつもりであつたが、嫂も看護に行つてゐて、留守宅には女中が一人ゐるきりなので、どこぞ外に宿を取らうといふ算段であつた。兄の家では、大阪から見舞ひに來てゐた、××會社の重役である嫂の弟が、これも昨日山からおりて、今日歸る筈で立つ仕度をしてゐた。

「こゝもなか〳〵暑いね。」道太は手廻りの小物のはいつてゐるバスケットを辰之

太は父親につれられて、詰所(檢番)の二階で見たことがあつたが、お絹の母親は、新調の衣裳など出して父に見せてゐたことなどもあつた。今はもう四十五六にもなつて、暫らくやつてゐた師匠も止めて、こゝの世話をやきに來てゐるのであつたが、地藏眉毛が以前より目立つて頬は殺げたけれど、涼しい目や髮には、お婆さんらしい處は少しもなかつた。丈はすらりとした方だが、さう大きくもなく、姿態が程よく整つてゐた。

道太たちが、長火鉢に倚らうとすると、彼女は中の間の先きの庭に向いた部屋へ座蒲團を直して、

「そこは暑いぞに。此處へおいでたら。」と勸めた。

「この家も久しいもんだね。また取戻したんだね。」

「え、取戻したといふ譯ぢやないけれど、お母さんが長く遣つてゐた處ですから。」

庭も、庭の向ふに見える細流のかゝつた厠も、その上に見える離房の二階も、昔のまゝであつた。十年も前に一旦人に取られたことは、道太も聞いてゐたが、おひろの又た下の妹が、その頃別に一軒出してゐて、お絹は母親と一緒に、廓の外に化粧品の店を出す傍ら、廓の子供たちに踊りを教へてゐた。道太はそこへも訪ねたことがあつたが、廓を出てからの親子は何となし寂しげに見えた。

「この家も古いもんや。」辰之助は庭先の方に、道太と向合つて坐りながら言つたが、古びてゐたけれど、まだ内部は何うもなつてゐなかつた。以前廂など傾いでゐたこともあつたけれど、いくらか手入もしたらしかつた。

「古びのついた處がいゝね。」

「もう駄目や。少しお金をかけると可いけれど、私の物でもないんですから。」

「おひろさんのかね。」

「えゝまあ。」

「僕はあすこに居て惡いかしら。」道太は離れの二階を見上げながら言つたが、形式ばかりに拵へてゐるこの部屋も、年中寂れてゐて、この家なぞは殊にもぱつとしない方らしかつた。

「どこか靜かで氣樂なところをと思つてゐるんだけれどね、此處なら滅多にお客もあがらないし、いゝかも知れませんぜ。」辰之助も言つた。

「おいでなさい。離れでなうても、二階は廣いから、何處でも介意ひまん。」

「さうお決めになつたら何うです。さうすれば後で荷物を取りにやりますから。」

「さうしても可いが、温泉へ行くとしたら何處だらう。」

「極近いところで、深谷も此頃はなか〳〵好いですよ。」

「宿屋なら好い座敷がありますけれど、あすこも割に安くつかんぞな。」

「差當つてちよつと觸れたくない問題があるんでね。何うせ何とかしなくちやならないにしても、今は誰にも觸れたくないんだ。」道太はあの時病軀をわざ〳〵そのために運んで來て、その翌日あの大地震があつたのだが、纏めて行つた姉の縁談が、双方所思ちがひでごた〳〵してゐて、その中へ入る日になると、物質的にも隨分重い責任を背負はされることになる譯であつた。それを解決した處で、今迄のやうにルーズな姉の生活と、無能な甥や、虚榮心の強い氣儘な姪の性質を、根本的に矯正しない以上、何を仕出來すか判らなかつた。道太は宿命的に不運な姉や其の子供達に、面と向つて小言を言ふのは忍びなかつた。それに弱者や低能者にはそれ相當の理窟と主張があつて、それに耳を傾けてゐれば、際限がないのであつた。

から、こゝへ遣つて來た。そして大きな新楊枝で草色をした牛皮を食べてゐると、お湯の加減がいゝといふので、湯殿へ入つて行つた。すると親類の一人から電話がかゝつて、辰之助が出て行くと、今避難者が四百ばかり着くから、その中に道太の家族がゐるかも知れないといふのであつた。道太は覺束ないことだと思ひながら、何だか本當に來るやうな氣がして、あわてゝお湯を飛出した。誰誰がこゝまで來る幸福をもつてゐるだらう。其でも生殘つた二人か三人を迎へることができるか知ら――彼はそんな事を思ひながら、ぽつ〱落ちて來る雨をくぐつて、氣ばかり驛へ急いだものであつた。道太は湯に浸りながら、驛で一人々々救護所へ入つて行つた當時の避難者の顏や姿まで思ひ出すことができた。

「今日の容態はどうか知ら。」道太は座敷へ歸つてから、大きな鮎の鹽燒などに箸をつけながら兄が今頃どうしてゐるかを氣遣つた。

「さあ、後程電話できいて見ませう。」さう言つて辰之助はどつちり胡座を組んで、酒を呑んでゐた。

そこへ女が現はれた。おひろと言つて、道太も子供の時から知つてゐる女であつた。その家も少年のをり、父につれられて行きつけてゐた。道太の父祖の代に、古い町家であつたその家へ、緣組があつた。何時頃そんな商賣をやり出したか知らなかつたが、今でも長者のやうな氣持でゐるおひろ達の母親は、口の嗜好などのおごつたお上品なお婆さんであつた。時代の空氣の流れない此の町のなかでも、こんな人はまた珍らしかつた。小柄なおひろはもう三十ぐらゐになつてゐる勘定であつた。

「お久しぶりですね。」おひろは瘠せた膝をして、ぴつたりとそこに座つた。

「相變らず瘠せてゐるね。やつぱり出てゐるんだね。」道太は淺黑いその顏を見ながら話かけた。

「えゝ効性がないんもんですから。いつお出でたんですの。」おひろは銚子を取り上げたまゝお民と道太に聞いたりした。
「伯父さんの病氣でね。」
「あゝ、松山さんでせう。あの體の大きい立派な顔の……二三日前にききましたわ。もう少し生きてゐてもらひたいんと云るつて、伊都喜さんが話してゐらしたわ。」
伊都喜といふのは、道太の兄のやつてゐる會社の社長の弟であつた。
それからその一家の經濟的窮狀や、死活問題の繋かつてゐる鑛山の話などしながら、次ぎ〳〵に運ばれる料理を食べてゐた。

二

おひろの家へ行つてみると、久しく見なかつたおひろの姉のお絹が、上方風の長火鉢の傍にゐて、薄暗いなかに、ほの白いその顔が見えた。涼しい瀧縞の暖簾を捲きあげた北國特有の陰氣な中の間に、着物を着かへてゐるおひろの姿も見えた。
「おいでなさい。」お絹は二人を迎へたが、母親とは又た違つて、もつと繊弱な體の持主で、感じも瀟洒だつたけれど、お客にお上手なんか言へない質であることは同じで、もう母親のやうに大様に構へてゐたのでは、滅亡するより外はないので、色々苦勞した果に細かいことも考へるやうになつてはゐたが、氣立は昔し踊り子であつた頃と少しも變らなかつた。
道太はこの子の踊りを見たことはなかつたけれど、七八つ時分から知つてゐた。秋祭の時、廓に毎年屋臺が出て、

太は父親につれられて、詰所(檢番)の二階で見たことがあつたが、お絹の母親は、新調の衣裳なぞ出して父に見せたことなどもあつた。今はもう四十五六にもなつて、暫らくやつてゐた師匠も止めて、こゝの世話をやきに來てゐるのであつたが、地藏眉毛が以前より目立つて頬は殺げたけれど、涼しい目や髮には、お婆さんらしい處は少しもなかつた。丈はすらりとした方だが、さう大きくもなく、姿態が程よく整つてゐた。

道太たちが、長火鉢に倚らうとすると、彼女は中の間の先きの庭に向いた部屋へ座蒲團を直して、

「そこは暑いぞに。此處へおいでたら。」と勸めた。

「この家も久しいもんだね。また取戻したんだね。」

「え、取戻したといふ譯ぢやないけれど、お母さんが長く遣つてゐた處ですから。」

庭も、庭の向ふに見える細簾のかゝつた廁も、その上に見える離房の二階も、昔のまゝであつた。十年も前に一旦人に取られたことは、道太も聞いてゐたが、おひろの次た下の妹が、その頃別に一軒出してゐて、お絹は母親と一緒に、廓の外に化粧品の店を出す傍ら、廓の子供たちに踊りを教へてゐた。道太はそこへも訪ねたことがあつたが、廓を出てからの親子は何となし寂しげに見えた。

「この家も古いもんや。」辰之助は庭先の方に、道太と向合つて坐りながら言つたが、古びてゐたけれど、まだ内部は何うもなつてゐなかつた。以前廂なぞ傾いでゐたこともあつたけれど、いくらか手入もしたらしかつた。

「古びのついた處がいゝね。」

「もう駄目や。少しお金をかけると可いけれど、私の物でもないんですから。」

「おひろさんのかね。」

「えゝまあ。」

「僕はあすこに居て悪いかしら。」道太は離れの二階を見上げながら言つたが、格式ばかりに拘泥つてゐるこの廓も、年年寂れてゐて、この家なぞは殊にもぱつとしない方らしかつた。

「どこか静かで氣樂なところをと思つてゐるんだけれどね、此處なら滅多にお客もあがらないし、いゝかも知れませんぜ。」辰之助も言つた。

「おいでなさい。離れでなうても、二階は廣いから、何處でも介意ひまん。」

「さうお決めになつたら何うです。さうすれば後で荷物を取りにやりますから。」

「さうしても可いが、温泉へ行くとしたら何處だらう。」

「極近いところで、深谷も此頃はなか／＼好いですよ。」

「石屋なら好い座敷がありますけれど、あすこも割に安くつかんぞな。」

「差當つてちよつと觸れたくない問題があるんでね。何うせ何とかしなくちやならないにしても、今は誰にも話したくないんだ。」道太はあの時病軀をわざ／＼そのために運んで來て、その翌日あの大地震があつたのだが、纏めて行つた姪の縁談が、双方所思ちがひでごた／＼してゐて、その中へ入る日になると、物質的にも随分重い責任を背負はされることになる譯であつた。それを解決した處で、今迄のやうにルーズな姉の生活と、無能な甥や、虚榮心の強い氣儘な姪の性質を、根本的に矯正しない以上、何を仕出來すか判らなかつた。道太は宿命的に不運な姉や其の子供達に、面と向つて小言を言ふのは忍びなかつた。それに弱者や低能者にはそれ相當の理窟と主張があつて、それに耳を傾けてゐれば、際限がないのであつた。

ゐて、一人の肥つちようの銀杏返しが、根からがつくり崩れたやうになつて、肉づいた兩手が捲れた掻卷を抱込むやうにしてゐた。

お絹は電話で、昨夜道太が行つた料亭へ朝飯を注文した。

「御飯も持つて來てね一人前。」

それから又臺所の方に居たかと思ふと、道太が間もなく何か取り旁々襦袢を着に二階へあがつた頃には、お絹は床をあげて、彼の脫棄の始末をしてゐた。

「こゝもいゝけれど、晝間は少し暗い。」道太はさう言つてちよへと直しさへすれば、ぐつと引立つて來るだらうと、そんな話をしかけた。

「そんな事も考へるけれど、私のものでもないんですから。」

「誰のものなんだ。」

「一旦人手に渡つたのを、京ちやんの旦那が買つたんです。あの人はこゝへお金をかけるのは損だから、賣つてしまはうと言つてゐるんですけれど、何しろお母さんが長くやつてゐた所ですから。」

「ぢや絹ちやんが借りてやつてゐる譯だね。」

「此處のお神さんはおひろちやんですよ。私は世話燒に來てゐるだけなんです。いつまでこんな事もしてゐられないんです。働けるうちに神戶へ行つて子供の守でもしてやらなければ」そして彼女は汚れた肌襦袢を取りあげて、

「これ洗濯に出してもいゝんでせう。」

「さうね。出してもらはうか。」道太は東京から立つ時から繃帶をしてゐた腕首のところが昨夜飲みすぎた酒で少し痛

山のあることを認めない譯に行かなかつた。

道太は溫泉へ行かうか、こゝに御輿を据ゑやうかと考へてゐたが、そのうちに辰之助がかけた若い女が來たりして、二階へ上つて、前にも二三度來たことのある奥座敷で、酒を呑んでゐた。常磐津のうまい若い子や、腕達者な年増藝者などが、そこに現はれた。表二階にも誰か一組客があがつて、藝者たちの出入する姿が、簾戸ごしに見られた。お絹もそこへ來て、藝事の話がはづんでゐた。

道太がやゝ疲勞を感じた頃には、靜かなこの廓にも、太鼓の音などがしてゐた。

三

離れの二階の寢心地は安らかであつた。目がさめると裏の家で越後獅子のお浚ひをしてゐるのが、哀愁ふかく耳についた。

「おはやう、おはやう」といふ人間に似て人間でない聲が、隣の方から庭ごしに聞えて來た。その隣の家で女達の賑かな話聲や笑聲が連りにしてゐた。

「おつるさん、おつるさん。」こわれた器械からでも出るやうな、不愉快なその聲が連りにやつてゐた。

道太は初め隣に氣狂でもゐるのかと思つたが、九官鳥らしかつた。枕もとを見ると、舞妓の姿をかいた極彩色の一枚折が隅に立てゝあつて、小さい床に春琴か何かゞ懸かつてゐた。次ぎの間にも違棚があつて、そこにも小さい軸がかゝつてゐた。青蚊帳に微風がそよいで、今日も暑さうであつたが、こゝは山の庇にでもゐるやうな氣分であつた。お絹はもう長いあひだ獨身で通して來て、大阪へ行つてゐる大きな子息に子供があるくらゐだし、すつかり色の褪せた、おひ

ろも、辰之助の話では、誰れかの持物になつてゐた。抱えは一人あつたけれど、藝道には熱心らしかつたけれど、器量のけたやうな子はゐなかつた。道太はといふと、彼は口振が殆んど眞白であつた。彼をこゝへ連れて來たことのある、その頃の父の時代をも、恐らく通り過ぎてゐた。お絹の年をきいて、彼は昨夜驚いたのであつた。道太の妻よりも一つも上であつた。しかし踊りやお茶の修養があるのと、氣質が傳統的に磨かれて來てゐるのと、様子が好いのとで、どことなし落着いてゐた。辰之助の言ふとほり、現在別に世帯をもつてゐるおひろの妹と、他國へ出て師匠をしてゐるお絹の次ぎの妹と、都で四人もの娘がありながら、家を人手に渡さねばならなかつたほど、彼女達の母子は、揃ひも揃つて商賣氣がなかつた。

「いゝわいね、お金ができれば持つていらにゐる。」いつも氣輕さうに長火鉢の前に坐つてゐた彼女達の母親は、いつでもさういふ風であつた。

「また好いこともある。悪いことばかりは無いもんや」それも彼女の口癖であつた。

實際また彼女の若い時分、身分の好い士達が、祿を金にかへてもらつた時分には、黄金の洪水がこの廓にも流れこんで、その近くにある山のうへに、素破らしい劇場が立つたり、巖にお茶屋ができたりして、絃歌の聲が絶えなかつた。道太は少年の頃、町へおろされた其の芝屋小屋に、二十軒もの茶屋が、兩側に並んで、柿色の暖簾に、造花の櫻の出しが軒に縣けつらねられ、觀客の子女や、食物を運ぶ男衆が絡繹してゐたのを、學校の往復りに見たものであつた。延若だの團十郎だの鰕十郎だの、名優の名がその頃彼の耳についてゐた。金が夢のやうに費ひはたされて、彼等が零落の淵に沈む前に、さうした此の町相當の享樂時代があつた。道太の見たのは恐らく其の末期でしかなかつたが、彼女はその時代を知つてゐた。

下へおりて行くと、お絹が流しの方にゐた。白い襷掛に白い腰巻をして、冬大根のやうに滑らかな白い脛を六分ほど出してまめ／＼しく、しかしちんまりと靜かに働いてゐた。

「お早やう。」道太は聲かけた。

「お早やう。眠られたか何うやつたやら。」

「よく寝た。」さう言つて道太が高い流しの前へ行くと、彼女は棚から銅の金盥を取りおろして、ざあ／＼水をあけはじめた。そして總楊枝や粉をそこへ出してくれた。道太は楊枝をつかひながら、山水のやうな味のする水で口を漱いだ。

「昨夜はお客は一組が。」

「え、一組。四時頃に歸つてしまひました。」

「それぢや商賣にならんね。」

「ならんわに。」お絹はさう言ひながら、かん／＼炭をたいて飯をたいてゐた。幅一間ばかりの長い廊下で、黒い板がつるつる光つてゐた。戸棚や何かゞそこにあつた。

廊下つゞきの入口の方を見ると、おひろがせつせと雑巾がけをしてゐた。道太は茶の室へ出て行つて、長火鉢の前に坐つて、煙草をふかしはじめた。

「みんな働くんだね。」

「働かんと姉さんが口煩いから。」おひろは微笑で答へたが、始末屋で奇麗好きのお絹とちがつて、面倒くさゝうにさつく／＼と遣つてゐた。

箪笥や鏡臺なんか並んでゐる店の方では、昨夜お座敷の歸りが遅かつたとみえて、女が二人未だいぎたなく熟睡して

ゐて、一人の肥つちようの銀杏返しが、根からがつくり崩れたやうになつて、肉づいた兩手が捲れた掻巻を抱込むやうにしてゐた。

お絹は電話で、昨夜道太が行つた料亭へ朝飯を注文した。

「御飯も持つて來てね一人前。」

それから又臺所の方に居たかと思ふと、道太が間もなく何か取り旁々襦袢を着に二階へあがつた頃には、お絹は床をあげて、彼の脱棄の始末をしてゐた。

「こゝもいゝけれど、臺間は少し暗い。」道太はさう言つてちよへと直しさへすれば、ぐつと引立つて來るだらうと、そんな話をしかけた。

「そんな事も考へるけれど、私のものでもないんですから。」

「誰のものなんだ。」

「一旦人手に渡つたのを、京ちやんの旦那が買つたんです。あの人はこゝへお金をかけるのは損だから、賣つてしまはうと言つてゐるんですけれど、何しろお母さんが長くやつてゐた所ですから。」

「ぢや絹ちやんが借りてやつてゐる譯だね。」

「此處のお神さんはおひろちやんですよ。私は世話焼に來てゐるだけなんです。いつまでこんな事もしてゐられないんです。働けるうちに神戸へ行つて子供の守でもしてやらなければ」そして彼女は汚れた肌襦袢を取りあげて、

「これ洗濯に出してもいゝんでせう。」

「さうね。出してもらはうか。」道太は東京から立つ時から繃帶をしてゐた腕首のところが昨夜飲みすぎた酒で少し痛

て、場席の手入れや大道具の準備に忙しい中を覗いてみたが、その時はもう繪看板や場代なんかも出てゐて、四つの出しもの丶うち、大切の越後獅子をのぞいた外、三つとも揃つて大物であることが判つて、その割り澤山ないにいくらか興味を感じたので、つひ一桝おごることにしたのであつた。

姉さんが電話をかけてくれた時分には、場所は大抵約束済みになつてゐた。そして桝が四人詰であつたところから仲間を誰れと誰れとにしようかと、そんな評定をしてゐるうちにお絹が少し困つた立場に立つことになつて來た。女達が三人行くことになれば、辰之助には氣の毒なことになるし、辰之助を誘へば、誰かゞ一人ぬけなければならなかつた。

「京ちやんは自分で行けばいゝのに。」お絹は陰で言つてはゐたが、やはりお義理があるらしいので面と向つてこさはきした事は言へなかつた。

「辰之助が當然遠慮していゝんだ。東京で好いものを見て來たのだから。」道太は言つた。

「そや／＼、どつちか一人ぬければいゝ譯だわ。姉さん京ちやんにさう言つたんですか。」おひろは言つた。

「私何だつてそんな事言ふもんですか。でも京ちやんは一緒に行くことに決めてゐるさかえ。」

「だから可いぢやないか。辰之助にさう言つておけば。」

「それも工合がわるい。あの人も一緒に行くつもりにしてゐるのやさかえ。」

お絹から言へば、道太に皆ながつれて行つてもらふのに、辰之助を差措くことはその間に何か特別の色がつくやうで、氣に咎めた。辰之助を除外すれば、色氣はないにしても、飲氣か何かの意味があつて、道太を引着けておくやうに、道太の姉たちに思はれるのが厭であつた。それでなくとも辰之助の母である道太の第一の姉には、お絹たちは餘り好感をもたれてゐなかつたし、持つてもゐなかつた。それは辰之助が今は隣國で郡のお師匠さんをしてゐる、お絹の直

「こゝへ來てお掛んなさい」と言ふので、道太は長火鉢の傍を離れて、そこへ行つて坐つた。
「今日は辰之助を呼んで鶴來へでも遊びに行かうぢやないか。」道太は言ひだした。
「鶴來なら鮎もおいしいし、岩魚や鯀料理もありますよ。」
「それからあの奥に吉野谷と云ふ仙境があるだらう。子供の時分遠足に行つたことがあるんで、一度行つてみようと思ひながら、いつも何處へも行かずに歸つてしまふんだ。まだ山代さへ知らないくらゐだ。」
それから遊び場所の撰擇や、交通の便なぞについて話してゐるうちに時が移つて行つた。山風のやうな風が微かに出て來て、離れの二階の簾を時々捲きあげてゐたが、それも一時であつた。お絹達は京阪地方へも、大抵遊びに行つてゐて、名所や宿屋や劇場のことなぞも知つてゐた。最近では去年大阪にゐる子息のところへ暫らく行つてゐたので、その嫁の姻戚で又た主人筋になつてゐる人につれられて、方々連れて歩かれた。
「それぢや辰之助さんに電話をかけませうか。」お絹自身は餘り悦びもしなかつたが、行きたくなくもない風で、さう言つて電話をかけたが、辰之助は少し忙しいので、餘り進まないらしかつた。道太も女達ばかりで行くのは、いくらか氣が差した。
いつの間にか電話をかけたとみえて、昨夜酒のあとで、辰之助が言出した夏の季節の鯨餅といふ菓子が取寄せられて、道太の前へ現はれた。寒晒の粉のつぶ〳〵した、皮鯨に似た菓子である。夏來たことが滅多にないので、道太には珍らしかつた。
「おいしいか何うだか、食べてごらんなさい。」
「これあ美い。色々んな菓子があるんだね。」道太は一つ摘みながら言つた。

それから無駄話をしてゐるうちに、直きに夕刻になつた。道太は辰之助が來てから何か食べに行かうと思つて待つてゐるとやがて彼は還つて來た。そして三人そろつて外へ出た。おひろだけはお化粧中だつたので、少し遅れて來た。

四

道太はすつかり御輿をすゑてしまつた。離れの二階は陰氣だつたけれど、奥の方の四疊半の窓の下へ机をすゑれば、裏の家の羽目に鼻が閊へさうであつたけれど、結構仕事はできさうであつた。

お絹はいつでもお茶のはいるやうに、瀟洒な瀬戸の風呂に火をいけて、古風な鐵瓶に湯を沸らせておいた。

「こんな風呂どこにあつたやらう。」道太を見に來た母親は、二階へ上ると、さう言つてその風呂を眺めてゐた。

「茶入れやお茶碗なんか、家にはずゐぶんよいものもあつたけれど、下の戸袋のなかへ仕舞込んでおいたものは、いつの間にかお客がみんな持つて行つてしもうて……。」お絹はそんな話をしながら、

「軸ものも何やら知らんけれど、好いものださうだ。多分山水だつたと思ふ。それも辰之助が表裝をしてやると言ふて、持つて行つたきり、しらん顔をしてゐるんですもの。」

「蕪村ぢやないかな。」

「何だか忘れたけれど。今度さう言つて持つて來てもらはう知ら。」

それでも酒の器などには、ちよつと古びのついたものが未だ殘つてゐて、ぎやまんの銚子に猪口が出たり、ちぐはぐ

「さあ格式を崩したら、何いかんぢやないか知ら。東の特徴がまるで亡くなつてしまやしないかね。」辰之助は言つてゐた。

「けれど少し腕のあるものは、皆なあちらへ行つてしまふさかえ。」

「さうや。此の頃では西の方に何うしてなか／＼美しい子がゐる。」

お絹の說明によると、おひろは踊りも一としきり高潮に達した時期があつて、お絹自身が目を瞠てたくらゐだつたが、やつぱり色々な苦勞があつて、藝事ばかりにも沒頭してゐられなかつた。

「今の人はほんとに、ちよろつかなもんや。私に限らず、家の人はみな內氣で駄目なんですわ。行るだけのものを、何うしても働かして行けない運命にできてゐるの。私達に比べると、世間の人はそれこそしやあ／＼したもんや。私なんか傍ではら／＼するやうなことでも平氣や。」おひろは珍らしく氣を吐いた。

「いつ見ても何となしぱつとしないやうだな。」

「ぱつとできるやうなら、今時分こんな苦勞してゐませんよ。それで好いもんや。さんざ男を瞞した人の行末を見てごらんなさい。づゐぶん酷いもんや。」

そしてお絹がさういふ女の例を二つ三つ擧げると、故近客と京都へ行つてゐて、遽かに氣の狂つた近所の女の噂で、また一としきり持ち切つた。

道太は何をするともなしに、うか／＼と日を送つてゐたが、お絹とおひろの性格の相違や、時代の懸隔や、今は一つ家にゐても、やがて各々分裂しなければならない運命にあることも、お絹が今やちやうど生涯の岐路に立つてゐるやうな事情も、ほゞ呑込めて來た。そして一番寂しい道に立つてゐるのは、何んと言つてもお絹であつた。

て、揚席の手入れや大道具の準備に忙しい中を覗いてみたが、その時はもう絵看板や場代なんかも出てゐて、四つの出しものゝうち、大切の越後獅子をのぞいた外、三つとも揃つて大物であることが判つて、その盛り澤山なのにいくらか興味を感じたので、つひ一桝おごることにしたのであつた。

森さんが電話をかけてくれた時分には、場所は大抵約束済みになつてゐた。そして桝が四人詰であつたところから仲間を誰れと誰れとにしようかと、そんな評定をしてゐるうちにお絹が少し困つた立場に立つことになつて來た。女達が三人行くことになれば、辰之助には氣の毒なことになるし、辰之助を誘へば、誰かゞ一人ぬけなければならなかつた。

「京ちやんは自分で行けばいゝのに。」お絹は蔭で言つてはゐたが、やはりお義理があるらしいので面と向つてきばきした事は言へなかつた。

「辰之助が當然遠慮していゝんだ。東京で好いものを見て來たのだから。」道太は言つた。

「そやく、どつちか一人ぬければいゝ譯だわ。姉さん京ちやんにさう言つたんですか。」おひろは言つた。

「私何だつてそんな事言ふもんですか。でも京ちやんは一緒に行くことに決めてゐるさかえ。」

「だから可いぢやないか。辰之助にさう言つておけば。」

「それも工合がわるい。あの人も一緒に行くつもりにしてゐるのやさかえ。」

お絹から言へば、道太に皆がつれて行つてもらふのに、辰之助を差措くことはその間に何か特別の色がつくやうで、氣に咎めた。辰之助を除外すれば、色氣はないにしても、慾氣か何かの意味があつて、道太を引着けておくやうに、道太の姉たちに思はれるのが厭であつた。それでなくとも辰之助の母である道太の第一の姉には、お絹たちは餘り好感をもたれてゐなかつたし、持つてもゐなかつた。それは辰之助が今は隣國で廓のお師匠さんをしてゐる、お絹の直

ならないし、人の出入りの多いのに、手數をかけるのも忍びないことであつた。それに山でもさうだつたやうに、看護や食べものの事について、出過ぎた世話をやいたりしても可けないので、少し離れてゐる方が好いと思つた。

その後も、花を生けに行く辰之助と連れ立つて見舞に行つたが、病狀には目立つた變化もなかつた。何うかすると、兄は悶えながら起きあがつて、痩せた膝に兩手を突きながら、體をゆすり／＼苦痛を怺えてゐた。

「人の知らない苦勞するよ。」

我慢づよい兄の口からさうはれると、道太は自分の怠慢が心に責められて、さう遠いところでもないのに、なぜもつと精を出して毎日足を運ばないのかと、自から悔ゐるのであつた。それにも拘はらず、少し勉强しすぎた道太は、この月こそ、旅で頭腦の保養をしようと思つてゐたので、毎日辰之助に電話をかけてもらひながら、つひ出るのを臆劫にしてゐた。

そんな話をしてゐる處へ、屆けて來た月並を、お絹は菓子器に盛つて、道太の前へ持つて來た。

「お茶をいれませうか。」

「さうね。何だかんだと言つて、毎日菓子ばかり食つてゐるね。」

「ほんの少ししか食らんぢやありませんか。此の頃はそれでも能く食るけれど。」

「辰之助もよく食べるね。」

「あの人は何でもや。來るたんびに何かないかつと、茶棚を探すのや。お酒も好きですね」お絹は癖で、詰つたやうな鼻で冷笑ふやうに言つた。

「今でもやっぱり遊ぶのかな。」

「何うやら。家へ餘りいらしやらんさかえ。前かつて、まうお金を貰つたといふ方ぢやないさかい。」

道太は嫂達が騒ぐのに對する「辯解だな」と思つた。

「たゞあの人はあゝ云ふ人ですから、何處でも知つてゐるんですわ。それに妓たちにもてる方や。今は男振もちよつと悪るなつたけれど。若いとき綺麗な人は、年取ると醜になるものや。でもなか〳〵賢つこにおけんのや。何しろ胡蝶さんが、あの人に附文をしたんですさかえ。」

「胡蝶は僕も一番藝者らしい女だと思ふ。」

「神田で産れたんですもの。なか〳〵氣前の好い妓や。延若を喰へ出して、温泉宿から電報で家へお金を言つて來ようといふ人ですもの。あゝいふのが藝者でせうね。何うして賢つこきですよ。あの人が……それもこの家で、ちらと辰之助さんを見て、すぐ呼出しをかけた譯なんです。」

「成程ね。それぢや家に燻ぼつちやゐられない譯だね。今でも續いてゐるの。」

「さあ何うやら。」お絹は擽つたい顏をしてゐた。

「あれは兄弟中で一番素直だ。僕の家でも評判が好い。」

「十圓もする香水なんか奥さんに貰つて來たんですて。」

「少し吹いてやしない。」道太は苦笑した。

「さう少し喇叭の方かも知れん。」

「家の奴も人を悦ばせるのは嫌ひな方ぢやないけれど。」

「庄ちゃん（お絹達の弟）が讃めてゐたから、好い人でせうね。けど奥さんもずゐぶん骨が折れますわ。幾歳だとか……
…。」

「絹ちゃんより少し若い。巳年だ。」

「巳は男好きだと言ふけれど……。」お絹は聊か非をつけるやうに言つて、軀を壁ぎわの方へ去らして横になつた。

「それあ何だね。」道太は何だか一杯入つてゐる亂函の上にある、二捲反物に目をつけた。

「これ？何だかこんなもの置いて行つたんですけれど。何といふお品や。」お絹は起きあがつて其の反物を持出しながら、「わたし一反だけ羽織にしようかと思つて。やがて大阪へ行かんならんさかえ。どつちも四十間がらみのもんや。」

それは色のくすんだ、縞目もわからないやうな地道なものであつた。

「こんな地道なもの着るの。僕なんかに好いもんだ。」

「私は人のやうに派手なこと嫌いや。それに澤山もないさかえ、こんなものなら一枚看板でも目立たんで、可いと思つて。」

道太は一反買つてやつても好いと思つたけれど、何か意味があるやうに思はれるのが厭なので、わざと言はないでゐた。

「僕も何かお禮をしなけあならんけれど、いづれ後にしよう。」

「何のお禮をいに。阿呆らしい。芝居で澤山や。多勢短冊も書いてもらひましたし。」

「おれも金があると、資本ぐらゐ少し助けてもいゝんだが、金に縁のない方で。」

お絹は微笑してゐた。

「あんたももう一、二年やろがいに。」

「さうかも知れない。」

「私も大阪へ行きさへすれば、こんなことしてゐないでも可いのやけれど、こゝも芳ちやんが旅から帰へつてくると、一緒にやりたいやうな事も言ふし……。それも還るとなれば、少しお金をかけて貰れる子を一人も抱へなければ……」

お絹はしみじみ話し出した。

「大阪の方は餘程いゝのかね。」

「あの子は誰にでも可愛がられる質やさかえ。御主人にも信用がありますけれど、お祖母さんといふ人に、大變に氣に入られてゐるんです。嫁さんも御主人の親類筋の人で、四國で好い船持ちだといふことです。健ちやんなんか行つて、私をむづかしい女のやうに言つてゐたんですけれど、逢つてみればそんなおやないなんて、づゐぶん好くしてくれるんです。それや何うして學校出のちやきちやきですから、氣の利いたもんや。だけれど健ちやん此の頃少し遊びだしたやうで……今年の春も、えらいハイカラな風して來たのや。洋行でもするやうなお荷物でもつて。ちよつとも私なんかと話しちやゐないですわ。方々飲みあるいてばかりゐるんです。年も行かないのに大酒飲やさかえ、私も心配でこの間少し入ることがあつて、千圓ばかり送るやうに言つてやつたけれど、何とも返事がない。」

「こゝは借金かね。」

「借金と言つては別にある譯もないけれど……。」お絹は微笑した。

「とにかく此處を續けようと言ふんだね。」

「先きのことはわからないけれど、お婆さんのゐるうちはね。」

ならないし、人の出入りの多いのに、手數をかけるのも忍びないことであつた。それに山でもさうだつたやうに、看護や食べものの事について、出過ぎた世話をやいたりしても可けないので、少し離れてゐる方が好いと思つた。

その後も、花を生けに行く辰之助と連れ立つて見舞に行つたが、病狀には目立つた變化もなかつた。何うかすると、兄は悶えながら起きあがつて、痩せた膝に兩手を突きながら、體をゆすり〳〵苦痛を怺えてゐた。

「人の知らない苦勞するよ。」

我慢づよい兄の口からさうはれると、道太は自分の怠慢が心に責められて、さう遠いところでもないのに、なぜもつと精を出して毎日足を運ばないのかと、自から愧ぢるのであつた。それにも拘はらず、少し勉強しすぎた道太は、この月こそ、旅で頭腦の保養をしようと思つてゐたので、毎日辰之助に電話をかけてもらひながら、つひ出るのを臆劫にしてゐた。

そんな話をしてゐる處へ、届けて來た月並を、お絹は菓子器に盛つて、道太の前へ持つて來た。

「お茶をいれませうか。」

「さうね。何だかんだと言つて、毎日菓子ばかり食つてゐるね。」

「ほんの少ししか食らんぢやありませんか。此の頃はそれでも能く食るけれど。」

「辰之助もよく食べるね。」

「あの人は何でもや。來るたんびに何かないかつと、茶棚を探すのや。お酒も好きですね」お絹は癖で、詰つたやうな鼻で冷笑ふやうに言つた。

「今でもやっぱり遊ぶのかな。」

「何うやら。家へ餘りいらしやらんさかえ。前かつて、さうお金を貸つたといふ方ぢやないで[illegible]

道太は娚達が騷ぐのに對する「辯解だな」と思つた。

「たゞあの人はあゝ云ふ人ですから、何處でも知つてゐるんですわ。それに妓たちにもてる方や。今は男振もちよつと惡るなつたけれど。若いとき綺麗な人は、年取ると醜になるものや。でもなかく隅つこにおけんのや。何しろ胡蝶さんが、あの人に附文をしたんですさかえ。」

「胡蝶は僕も一番藝者らしい女だと思ふ。」

「神田で産れたんですもの。なかく氣前の好い妓や。延若を唸へ出して、溫泉宿から電報で家へお金を言つて來ようといふ人ですもの。あゝいふのが藝者でせうね。何うして臍つこきですよ。あの人が……それもこの家で、ちらと辰之助さんを見て、すぐ呼出しをかけた譯なんです。」

「成程ね。それぢや家に逆ぼつちやゐられない譯だね。今でも續いてゐるの。」

「さあ何うやら。」お絹は擽つたい顏をしてゐた。

「あれは兄弟中で一番素直だ。僕の家でも評判が好い。」

「十圓もする香水なんか奧さんに貰つて來たんですて。」

「少し吹いてやしない。」道太は苦笑した。

「さう少し喇叭の方かも知れん。」

「家の奴も人を悅ばせるのは嫌ひな方ぢやないけれど。」

「庄ちゃん（お絹達の弟）が讃めてゐたから、好い人で言うね。けど奥さんもづゐぶん骨が折れますわ。幾歳だとか……。」

「絹ちゃんより少し若い。巳年だ。」

「巳は男好きだと言ふけれど……。」お絹は聊か非をつけるやうに言つて、躰を壁ぎわの方へ去らして横になつた。

「それあ何だね。」道太は何だか一杯入つてゐる亂函の上にある、二捲反物に目をつけた。

「これ？何だかこんなもの置いて行つたんですけれど。何といふお品や。」お絹は起きあがつて其の反物を持出しながら、「わたし一反だけ羽織にしようかと思つて。やがて大阪へ行かんならんさかえ。どつちも四十円がらみのもんや。」

それは色のくすんだ、縞目もわからないやうな地道なものであつた。

「こんな地道なもの着るの。僕なんかに好いもんだ。」

「私は人のやうに派手なこと嫌いや。それに澤山もないさかえ、こんなものなら一枚看板でも目立たんで、可いと思つて。」

道太は一反買つてやつても好いと思つたけれど、何か意味があるやうに思はれるのが厭なので、わざと言はないでゐた。

「僕も何かお禮をしなけあならんけれど、いづれ後にしよう。」

「何のお禮をいに。阿呆らしい。芝居で澤山や。多勢短冊も書いてもらひましたし。」

「おれも金があると、資本ぐらゐ少し助けてもいゝんだが、金に縁のない方で。」

お絹は微笑してゐた。

「あんたももう二三年やろがいに。」

「さうかも知れない。」

「私も大阪へ行きさへすれば、こんなことしてゐないでも可いのやけれど、こゝも芳ちやんが旅から歸へつてくると、一緒にやりたいやうな事も言ふし……。それも遣るとなれば、少しお金をかけて貰れる子を二人も抱へなければ……」

お絹はしみ〲話し出した。

「大阪の方は餘程いゝのかね。」

「あの子は誰にでも可愛がられる質やさかえ。御主人にも信用がありますけれど、お祖母さんといふ人に、大變に氣に入られてゐるんです。嫁さんも御主人の親類筋の人で、四國で好い船持ちだといふことです。庄ちやんなんか行つて、私をむづかしい女のやうに言つてゐたんですけれど、逢つてみればそんなぢやないなんて、づゐぶん好くしてくれるんです。それや何うして學校出のちやき〲ですから、氣の利いたもんや。だけれど健ちやん此の頃少し遊びだしたやうで……今年の春も、えらいハイカラな風して來たのや。洋行でもするやうなお荷物でもつて。ちよつとも私なんかと話しちやゐないですわ。方々飲みあるいてばかりゐるんです。年も行かないのに大酒飲やさかえ、私も心配でこの間少し入ることがあつて、千圓ばかり送るやうに言つてやつたけれど、何とも返事がない。」

「こゝは借金かね。」

「借金と言つては別にある譯もないけれど……。」お絹は微笑した。

「とにかく此處を續けようと言ふんだね。」

「先きのことはわからないけれど、お婆さんのゐるうちはね。」

「お婆さんは庄ちんが見れば可いぢやないか。」
「何うして、おべこべにお婆さんが出す方や。庄ちやんが困つてゐると、そんなら私のお金が少しあるさかえ、あれ使ふことや、と言つたやうなもんや。」
お絹の口吻によると、弟嫁がいつでも問題になるらしかつた。そして非を言ふのはお絹だつた。弟は妻のために、お絹姉さんを、少し文句の多すぎる小姑だと思つてゐた。
しかし、お絹は、此處でも餘りおひろと氣の合つた方ではなかつた。おひろには森さんがあつた。次ぎのお京には、靑物問屋の旦那があつた。
「けれども、偶に行けばお互ひに懷かしいが、大阪の家だつて、長くゐれば面白い日ばかりは續かないだらう。」
「だから私も自分の小使ぐらゐもつて行かなければ。子供を連れだしたつて、一々嫁さんから小使もらふのは厭やし、お寺詣りするにしても、餘りけち／＼した眞似をしたくないと思ふから。」
「月々大阪からいくらか仕送つてもらつて、こつちで暮すわけに行かない。商賣するにしても、何か堅氣なものでなくちやあ。お絹ちやんなんかには、こんな商賣は迚も駄目だ。」
「けど女のする商賣といへば、外に何にもないでせう。」
「さあね。」
お絹はやがて、風呂の火を見に立つて行つた。
風呂は滅多に立たなかつた。綺麗好きなお絹は人にお湯を汚されるのをひどく嫌つた。その上心臟が弱いので、水を汲込むのが大仕事であつた。その日は、辰之助が昨夜水を汲み込んで行つてくれた。お絹は炭火で、それを沸かした。

道太はやがて風呂場へ行つた。もう電燈がついてゐた。

「何んなです、沸いてゐませう。少し少いけれど、多いと湯が溢れて」お絹はさう云つて、竈の下を覗いたり、バケツに水を汲んで來たりした。

湯から上ると、定連の辰之助や、道太の舊知の銀行員淺井が來てゐた。

六

觀劇は案じるよりも産み易かつた。

節が秋に入つてゐたので、夜の散歩には、何うかするとセルに給羽織を引きかけて出るほどで、道太はお客用の縕袍を借りて着たりしてゐたが、その日はやはり帷子でも汗をかくくらゐであつた。

その前々晩に、遠所に居るお芳から電話がかゝつて來て、芝居の景氣をたづねて、場所の都合がどうかと云つて來た。お芳の居るのは土地の大きな妓樓で、金瓶樓といふ名を、道太はこゝへ來てから、度々耳にしてゐた。これはお絹も、家が沒落したとき、土地にゐるのが恥しくて、其處でしばらく師匠をしてゐたので、何かの話のをりにその家と樓主の噂が出るのであつた。

「商賣の出來るくらゐの金は、きつと持たして返すといふ話やつたけれど、あつちの人はすす鋭いから結局旅のものが取られることになつてしまう。私もあすこへ行つてから、これでも餘程人が悪くなつた。」お絹はこんなことを言つてゐた。

でもお芳の方はいくらか溜めてゐるらしかつた。

その金瓶樓主が、きつと多勢引率して芝居にくるだらうと、お絹は思つてゐたので、電話がかゝつて來ると、飛んで行つて受話機を取つた。

「芳澤さんや。」お絹が掛け手の聲をきくと、さう云つて笑ひながら、いつにない浮立つた調子で話してゐた。お芳も出て來て、三通話にわたつた。

「芳澤さんつてお爺さんのことか。」

「うゝん、運轉士。どこも景氣が惡いと見えて、芳ちやんとお神さんと二人しか來んのや。」

「けど此の二人も來ちや遣り來れないぢやないか。僕は明朝辰之助にも斷らうと思つてゐる。」

「あの人達はあの人達で、何うかなりますわ。」

「そんな氣樂なことを言つてゐちや困るぢやないか。」

そこにおひろも居て、話がまた紛糾を來した。道太は別に强く言つたつもりではなかつたけれど、心臓でも昂進したやうにお絹が少し目をうるませて、困惑してゐるのに氣がつくと、遽かにいぢらしくなつて、その日は道太は加はらないことにしてしまつた。兄の養嗣子の嫁の實家で、家族こぞつて行くといふことも、辰之助から聞いてゐたので、寧ろ遠慮した方が穩當のやうにも考へられた。

「私も行かれるやら何うやら。」お絹も言つてゐた。

彼女はあひにく二三日鼻や咽喉を惡くして、呼吸が苦しさうであつた。腹工合もわるいと言つて、一日何んにも食べずに中の間で寢てゐたが、昨夜按摩を取つたあとで、いくらか氣分が快くなつたので、茶の間へ出て來て、思ひ出したやうに御飯を食べてゐた。

その日になると、お絹は豊田髪を結ひに行つて、歸つてくると、珍らしくおひろの鏡臺に向つてゐたが、おひろはお湯に行つてくると、自分の意匠でハイカラに結ひあげるつもりで、抱えの歌子に手傳はせながら、丹念に工夫を凝してゐたが、氣に入らなかつたらしく、暫くするとまた別の女優髷に結ひなほしてゐた。おひろはお絹に比べると十二三も年が少かつたけれど、髮が薄い方なので、お化粧をするのに時間が取れた。蠟燭を二挺も立てゝ一筋の毛も等閑にしないやうに、襟に毛筋を入れてゐるのを、道太は屢見かけた。それと反對で毛並の好いお絹の髮は二十時代と少しも變らなかつた。殊にも生際が綺麗で、曇のない黒目がちの目が、春の宵の星のやうに和らかに澄んでゐた。藝人風の髮が、やゝ長味のある顔によく似合つてゐた。

お絹は着ものを着かへる前に、棚から辨當を取出して、昨夜から注文をしておいた、少許りの御馳走やおすしを、お箸で詰めかへてゐた。山遊びの辨當には酒を入れる吸筒もついてゐて、吼嗆の蒔繪がしてあつた。

「今でもこんなもの持つて行くのかい。」道太はその辨當を物珍らしさうに眺めてゐた。

「餘り好いものでもないけれど。」

「この辨當は。」道太は子供のやうに今一の辨當を捻くつてゐた。

「それは演舞場へお稽古に行くときのお辨當や。」

「しかし芝居見物もこんな風にして行くと面白いね。」

「こちらかつて、森のうちもあるし、鮨でも何でもあります。でもこれも樂しみやさかえ」お絹はさう言つて、これから此の間どこからか買つて來た大きな燕鮑を、母親に切つてもらつてゐた。老母は錆びた庖丁を砥石にかけて、ごしごしやつてゐた。

「これおいしいんですよ。私大事に取つておいたの。」お絹は言つてゐた。
「その庖丁ぢや覺束ないな。」道太はちよつと板前の心得のありさうな老母の手つきを、揶揄ひ半分に眺めてゐた。
「庖丁はさびてゐても、手が切れるさかえ。」老母はさう言つて、刄にさはつて見てゐた。
やがて辨當の仕度を母親に任かして、お絹は何か知ら黑つぽい地味な單衣に、ごり〳〵した古風な厚ぼつたい帶を締めはじめた。
「ばかに又た地味づくりぢやないか。」道太がわざと言ふと、お絹は處女のやうに羞かんでゐた。
道太は今朝辰之助に電話をかけて、場所がないから、女連だけやることにした。後で二人でゆつくり行かうと言つて斷つておいたけれど、お絹が勸めるので、やつぱり行くことにして、二階で着物を着かへて、下へ來てゐた。お芳はまだ着かへなかつた。
しかし劇場へ行つてみると、もう滿員の札が揭つて、ぞろ〳〵歸る人も見受けられたに拘はらず、約束しておいた棧敷のうしろの、不斷は場所のうちへは入らないやうな少し小高いところが、二三人分あいてゐた。お絹にきくと、いつもはお客の入らないところだけれど、場代さへ拂へば融通してくれる筈だといふのであつた。
「これあ好い。こんな所があるなら、二人くらゐ來たつて平氣だ。こゝを取つておいて、辰ちやんを呼ばう。この位なら、何もさう案じることはなかつたぢやないか。」
「一人や二人何うにでもできますよ。」
「折角かういふ處があるんだから、辰之助に電話をかけよう。それとも車をやるか。」
しかしお絹ははき〳〵しなかつた。お芳と其の連が來たときのことも考へてゐるらしかつたが、やがて座を立つて行

つた火、やがて幕があいた時分に宿とかへつて來た。

「こゝの電話ぢや金のことには埒があかないから。わたしお隣りの銕軒でかけて來ましたわ。」お絹にさう言つて、外顔ににじみでた汗をふいてゐた。

辰之助は序幕に間に合つた。

「河内山」がすんで、「盛綱陣屋」が開く時分に、先刻から場席を留守にしてゐたお絹が、漸と清々した顔をして、やつて來た。

「お芳さんがあすこに立つてゐたから、行つて見て來ましたの。好い鹽梅に、平場の前の方を融通してくれたんですよ。」

「さう。お芳さんも久しく見ないが、どこにゐる。」

お絹は指さしして教へてくれたけれど、疎い道太の目には入りかねた。

肌でもぬぎたいほど蒸暑い日だつたので、冬の衣裳をつけた役者はみな茹りきつてゐた。

「勧進帳なんか無理だもんね。舞臺も狭いし、こゝぢや矢張り腕達者な二三流どこの役者がいゝだらう。」

「さうかも知れません。」

「雁二郎はよく掛聲か何かで飛びあがるね。」

「ほんとうに可笑しな人。私あの顔嫌ひや。」

「面白い役者ぢやないか。」

大切の越後獅子の中程へくると、淺太郎や長三郎の踊りが、お絹の目にも目だるつこく見えた。

川端へ出ると、雨が一粒二粒顔に當つて、冷やかな風がふいてゐた。

すると姉が直ぐ引取つて、興奮の色を帶びながらその子供の病氣の今迄の經過について語りだした。手術をすれば、多分癒るであらうが、青木の親達は、手術は慘いから忍びないと言つて、成行きに委すことにしたのであつた。

姉の口吻がひどく感傷的になつて來たので、道太は妙な感じがした。

「それに話しがちがふとか仕度がないとか言つて、この頃老人達が私に當つてばかりゐるんです。」

「萬事は僕がよく話しておいたんだが、そんな事を言へば、此方だつて當てが違つたんぢやないか。莫迦に好いやうな話だつたからね。」

「それは惡いことはない。」姉が言ふのであつた。

「ふみ江ちやんなんかの仕事は、兎角山かんだから困るよ。どうせ人の厄介にならないで遣らうといふのなら、もつと何とかいふのを見立てるがいい。あんな吝つたれな百姓なんか仕方がないぢやないか。だから財産はなくても、ちやんと獨立のできる男でなければ。青木も意氣地がないぢやないか。あれ程望む結婚なら、もつと何とか出來さうなものだ。あれでは丸でこつちの親類を背景にして、ふみ江さんをもらつたやうなもんだからな。」

「え、あの人兩親の前では、何にも言へないんです。」

「しかし、もうさうなつちや、孰らも面白くなからう。動機がお互に不純だから、到底うまく行くまい。」

「さあ、さうでせうかね。」姉は太息をついてゐた。

「ふみ江さんも人の言ふことを肯かんから可けない。何でも皆んなに相談してやるやうにしなさい。お父さんがゐないんだから、その積りでもつと眞面目になつて、今迄のやうに、ぴらしやらして樂をしてゐないで、自分で自分の運命を切拓いて行くやうに、心を入れかへなくちや可かん。こゝの家なんか、こんな稼業をしてゐるけれど、名々自分の生活

については、相當苦しんでもゐるんだからね。」
「それあさうやあ。」姉は頷いてゐた。
　それから別れる場合の、話しのつけ方と、交渉にあたる人とを、道太は指命した。
「何うも僕ぢや少し工合がわるい。つい厭なことも言はなけあならないから。」
「さうや。向ふも法律を知つてゐると言つて、力んでゐるさうやさかえ。」
「まあしかし、聞く行くものたら、このまゝ納めた方がいゝ。さうなれば、金の方は後で何うにか心配するけれど、今はちよつとね。」
「二度ばかり松山の伯父さんとこへお尋ねしたさうですが、青木さんが叔父さんに逢つてお話したいさうですがいづれ私たちの惡口でせうと思ひますけれど。」
　道太はそれは逢つてもいゝと思つた。幸ひに彼の話を受容れることができさへすれば、道太自身にももつと此の問題に深入りすることができるかも知れないと思つた。
　二人はいくらか氣が安まつたらしく、やがて引取つて行つた。
「どうもお世話さま。」道太は茶碗を片づけに來たお絹に言つた。
「奥さんもえらい年をお取りになつて。ふみ江さんも縹致が少し下つた。」
「姉だけなら來てもらひたいつて、家でも言つてゐるんだけれど、何か自分でなさいつかに遣らうとするもんだから、反つて苦しなんだ。」
「誰でもさうや。なか〳〵思ふやうに行くもんぢやないんです。おひろさんだつて、姉さんのとこへ納まつたにしたと

ころで、姑さんもあるし、あの體で、あの大屋台の切りまはしは迚もできませんわ。」

日が暮れると、判で押したやうに、辰之助がやつて來た。道太は少し泪げてゐたが、お絹がこの間花に勝つたゞけおごると言ふので、やがて四人づれで、この頃披露の手拭をつけられた山の裾の新らしい貸席へ飯を食べに行つた。それはお絹から見ると、また二た時代も古い、藝者あがりの女が出したものであつた。

道太はそんな物も、ちよつと見ておきたいやうな氣がした。が、それに拘はらず、お絹も道太が時々氣をぬきに來るやうに、若し手頃な家を一軒かりてゞもおくなら、留守番をしてゐてもいゝやうな話もあつたので、それも頭腦に描いてゐた。

八

お絹が大分前から苦にしてゐた大掃除の日が來た。頼んでおいた若い稼ぎ人が來て、道太の陣取つてゐる離れの方から手をつけはじめて、午後には下の部屋へ及んで來た。お絹たちは單衣の上っ張りを着て、手拭を姐さん冠りにして働いてゐた。「さあ京ちやんところへ行かう。」老母はさう言つて、孫と一緒に道太を促したてた。

お京の家はつひ近くの屋敷町の方にあつた。その邊も道太が十三四の頃に住つたことのあるところで、川添ひの閑靜なところにあつた其の頃の家も、今は或る料亭の別宅になつてゐたけれど、築地の外まで枝を蔓らしてゐる三抱もあるやうな梅の老木は、昔と少しも變らなかつた。

お京はちやうど來客があつて、下座敷で話してゐた。いつでも脅かしに男下駄を玄關に出しておくのが、お京の習慣で、その日も薩摩下駄が一足出てゐた。米材を使つてはあつたけれど住み心地好く出來てゐた。

不幸なお婆さんが、一人そこにゐた。お絹の家の本家で、お絹達の母の從姉にあたる女であつたが、外に身寄りがないので、お京のところで何かの用を達してゐた。おばあさんは幾年振りかで見る道太を懷かしがつて、同じ學校友達

せ、夭折した夫共の一粒種の子供の寫眞などを持つて來て、二階に寢ころんでゐる道太に見せたりして、道太の家と自分の家の古い姻戚關係などに遡つて、懐かしい昔しの追憶を繰返してゐた。

「和田さんの家は器量統で、その人も美しかつたといふ話や。お士から町家へお片着きなすつた。」

とかく道太と、そして道太と同じ腹から生れた姉妹とは、その系統はづれであつた。

「しかし何歳です。」

「もう七十四です。このお婆さんより二つ上です。少い時分私がこの人を始終お負ぶしてね。」

道太はそんながり／＼した老婆を嘗て見たことがなかつた。

「奥さんのお墓参りなさいましたか。」

「いづれ歸るまでには……。」道太は笑つてゐた。

「私も一遍おまゐりしたいと思うて。」

道太はお絹の母である方のお婆さんにも、度々それを言はれてゐた。

そのお婆さんは、自分で手拍子を取りながら、唄を謳つて、四つの孫に「春雨」を踊らせてゐた。子供に扇子を持つて、くる／＼踊つてゐたが、角々がきちんと極まつてゐた。

「お絹ばあちやがお弟子にお稽古をつけてゐるのを、このちびさんが門前の小僧で覺えてしまうて……。」老母は氣だるさうに笑つてゐた。

それがすむと、また二つばかり踊つて見せた。御褒美にバナナを貰つて、いつか下へおりて行つた。

「ここでも書きものが出來ませうがね。」老母はさう言つて、目の先きに木の生茂つてゐる山を見上げながら、

すると姉が直ぐ引取つて、興奮の色を帯びながらその子供の病氣の今迄の經過について語りだした。手術をすれば、多分癒るであらうが、青木の親達は、手術は惨いから忍びないと言つて、成行きに委すことにしたのであつた。

姉の口吻がひどく感傷的になつて來たので、道太は妙な感じがした。

「それに話しがちがふとか仕度がないとか言つて、この頃老人達が私に當つてばかりゐるんです。」

「萬事は僕がよく話しておいたんだが、そんな事を言へば、此方だつて當てが違つたんぢやないか。莫迦に好いやうな話だつたからね。」

「それは惡いことはない。」姉が言ふのであつた。

「ふみ江ちやんなんかの仕事は、兎角山かんだから困るよ。どうせ人の厄介にならないで遣らうといふのなら、もつと何とかいふのを見立てるがいい。あんな吝つたれな百姓なんか仕方がないぢやないか。だから財産はなくても、ちやんと獨立のできる男でなければ。青木も意氣地がないぢやないか。あれ程望む結婚なら、もつと何とか出來さうなものだ。あれでは丸でこつちの親類を背景にして、ふみ江さんをもらつたやうなもんだからな。」

「え、あの人兩親の前では、何にも言へないんです。」

「しかし、もうさうなつちや、孰らも面白くなからう。動機がお互に不純だから、到底うまく行くまい。」

「さあ、さうでせうかね。」姉は太息をついてゐた。

「ふみ江さんも人の言ふことを肯かんから可けない。何でも皆んなに相談してやるやうにしなさい。お父さんがゐないんだから、その積りでもつと眞面目になつて、今迄のやうに、ひらしやらして樂をしてゐないで、自分で自分の運命を切拓いて行くやうに、心を入れかへなくちや可かん。こゝの家なんか、こんな稼業をしてゐるけれど、名々自分の生活

については、相當苦しんでもゐるんだからね。」

「それあさうやあ。」 姉は頷いてゐた。

それから別れる場合の、話しのつけ方と、交渉にあたる人とを、道太は指定した。

「何うも僕ぢや少し工合がわるい。つい厭なことも言はなけあならないから。」

「さうや。向ふも法律を知つてゐると言つて、力んでゐるさうやさかえ。」

「まあしかし、圓く行くものなら、このまゝ納めた方がいゝ。さうなれば、金の方は後で何うにか心配するけれど、今はちよつとね。」

「二度ばかり松山の伯父さんとこへお尋ねしたさうですが、青木さんが叔父さんに逢つてお話したいさうですがいづれ私たちの惡口でせうと思ひますけれど。」

道太はそれは逢つてもいゝと思つた。幸ひに彼の話を受容れることができさへすれば、道太自身にももつと此の問題に深入りすることができるかも知れないと思つた。

二人はいくらか氣が安まつたらしく、やがて引取つて行つた。

「どうもお世話さま。」 道太は茶碗を片づけに來たお絹に言つた。

「奥さんもえらい年をお取りになつて。ふみ江さんも縹緻が少し下つた。」

「姉だけなら來てもらひたいつて、家でも言つてゐるんだけれど、何か自分でなまじつかに措らうとするもんだから、反つて苦しんだ。」

「誰でもさうや。なかなか思ふやうに行くもんぢやないんです。おひろさんだつて、森さんのとこへ納まつたにしたと

ころで、姑さんもあるし、あの儘で、あの大屋台の切りまはしは迚もできませんわ。」

日が暮れると、判で押したやうに、辰之助がやつて來た。道太は少し沮げてゐたが、お絹がこの間花に勝つたどにごると言ふので、やがて四人づれで、この頃披露の手拭をつけられた山の裙の新らしい貸席へ飯を食べに行つた。それはお絹から見ると、また一た時代も古い、藝者あがりの女が出したものであつた。

道太はそんな物も、ちよつと見ておきたいやうな氣がした。が、それに拘はらず、お絹も道太が時々氣をぬきに來るやうに、若し手頃な家を一軒かりてどもおくなら、留守番をしてゐてもいゝやうな話もあつたので、それも頭腦に描いてゐた。

八

お絹が大分前から苦にしてゐた大掃除の日が來た。賴んでおいた若い稼ぎ人が來て、道太の陣取つてゐる離れの方から手をつけはじめて、午後には下の部屋へ及んで來た。お絹たちは單衣の上っ張を着て、手拭を姐さん冠りにして働いてゐた。「さあ京ちやんところへ行かう。」老母はさう言つて、孫と一緒に道太を促したてた。

お京の家はつひ近くの屋敷町の方にあつた。その邊も道太が十三四の頃に住つたことのあるところで、川添ひの閑靜なところにあつた其の頃の家も、今は或る料亭の別宅になつてゐたけれど、築地の外まで枝を延らしてゐる三抱もあるやうな梅の老木は、昔と少しも變らなかつた。

お京はちやうど來客があつて、下座敷で話してゐた。いつでも脊かしに男下駄を玄關に出しておくのが、お京の習慣で、その日も薩摩下駄が一足出てゐた。米材を使つてはあつたけれど住み心地好く出來てゐた。

不幸なお婆さんが、一人そこにゐた。お絹の家の本家で、お絹達の母の從姉にあたる女であつたが、外に身寄りがないので、お京のところで何かの用を達してゐた。おばあさんは幾年振りかで見る道太を懷かしがつて、同じ學校友達



敗北

菊池寛

一週間も前から、ボンヤリ保合つてゐる相場は、今日もちつとも動かなかつた。

秀一は、場が引けてから、仲買店の二階で、將棋を二三番指してゐたが、それもつまらなくなつたので、堀留の家へ歸つて來た。足のわるい乳母が、長男の信一を、おんぶして電車通にゐた。

「それ、お父樣！」

子供は、ニツと目を細くして、身體を二三度躍らせた。秀一は、頭を一つ撫でた丈で、店の中へは入つた。小間物と云つたものが、バラックの生活にはあまり必要でもないのか、客足が地震前の五分の一もなかつた。店の次ぎの三疊で、去年の暮生れたばかりの次女に、乳を呑ませてゐたおしづは、子供を二人生んで、すつかり汚くなつてゐた。秀一が、たまには化粧でもして呉れゝばいゝと思つてゐるのだ

が、いつも眞黒な顔をしてゐた。

「お歸りなさい！　何う！　今日は」

「アカン、アカン、ちつとも動かん。」秀一は、堂島で、修業をしたことがあるので、時々大阪言葉が、交じつた。場所の模樣を聽いて一安心すると、おしづは極まつて、病んでゐる老婆についての報告をした。今日はおしづは、ニコ〳〵した。老婆の容態が惡ければ惡いほど、おしづは元氣づいて話した。

「今日は、岡田さんが、來てお祖母さんを診て下すつたのよ。もう今度は、駄目だつて。お藥も呉れようとは云はないんですよ。もう、老衰だから仕樣がないと言ふのよ。でもお婆さんが、お藥をくれと云ふもんだから、何か水藥を持つてよこしたのよ。」

六疊一間を隔てた向ふの三疊に老婆が寢てゐるのだが、耳が遠いので、おしづは可成り大きい聲で話した。秀一は、老婆のことは、善惡に拘らず、聽くのが嫌だつた。

「本所の伯母さんも、先刻來たのよ。お婆さんの顏色を見て、何ていやな顏色だらう、死相が出てゐると云ふのよ。」

おしづは、秀一が老婆に對して、どれほど敵意を持つてゐるかを知つてゐるので、秀一の機嫌を取るために、いつも出來る丈老婆の容態を惡く云つた。秀一には、おしづのその心持が分つてゐるので、おしづの話に乘つて行けなかつた。」

「ちよいと、高橋のお伯父さんも可笑しい人ね。お婆さんが死んだら、お葬式は、秀一さんには分らねえから、俺が一人で取りしきつて、世話をやいてやると云つてゐるよ。昔の和泉屋と違つて、此際だから、萬事儉約でいゝ。お婆さんのお葬式に金を使ふなんて盜人に追錢で馬鹿々々しいから、萬事二百兩ですませるなんて、さつき豫算を立てゝゐるのよ。」

秀一は、苦笑した。だが、彼は、相手の手剛いのを知つてゐた，八十八になる骨と皮丈の身體だが、長い間の生活で鍛えられた身體には何處となく底力があつた，その骨が露出してゐる胸の中に、心臓が――鞣皮か何かで出來てゐるやうな丈夫な心臓が、しつかり動いてゐるのを知つてゐた。

秀一夫婦を初め、乳母と女中、老婆の看護に當つてゐる遠縁の漆屋の伯母さん、一家の者はみんな老婆が、一日も早く死ぬのを祈つてゐた。漆屋の伯母さんは、老婆の身寄なので、地震の後で、和泉屋を頼つて來たのだが、老婆が動けなくなると、さしづめ此の人が、看護の役に當る外はなかつた。六十を少しこしたばかりの年だつたが、弱い身體で背い大きい額にかゝるほつれ毛を掻き上げながら、曲つた腰をやつと伸ばしながら、立ち働いてゐた。

「あれぢや、お祖母さんよりも、漆屋の伯母さんの方が先きへ死なないかしら。」

おしづが、心配するほど、弱々しく見えた。老婆は、不淨物の世話をさせながら、この身寄りの老人を口汚くのゝしつた。初は、「伯母さん〳〵」と呼んでゐたのが、おしまひには「婆や〳〵」と呼び出した。

「お祖母さんはヒドい、自分の身寄の者を「婆や」と、呼ぶ奴はありやしない」

おしづは、さう云つて憤慨した。漆屋の伯母さんは、よく〳〵苦しいと見え、一度は飛び出したが、外に行くところがないと見え　二三日するとまた舞ひ戻つて、老婆の看護をしてゐた。老婆が死ぬまでは、脱け切れない業だつた。

和泉屋の一人娘であるおしづと、秀一とが關係が出來て、秀一が入婿になつた時、老婆は極力秀一を斥けた。だが、親類がみんなおしづに味方したので、二人は一緒になることが出來たが、それ以來おしづは幾度肉親の祖母と喧嘩をし

たか分らない。若いとき深川の船宿の女將であつたと云ふ老婆は、年が寄つても剛情で、きかん氣で、云ふことが[illegible]皮肉で、憎々しかつた。おしづの母は、三四年前に五十幾つで死んだのだが、一生涯いぢめぬかれてゐた。おしづと同じに、一人娘で養子をしたのだが、おしづの父である此養子も、老婆と喧嘩して出て行つたのである。おしづが、十二三になつた後でも、母に連れられてお詣りになど行つて遲くなると、老母は別れてゐる亭主に逢ひに行つたのだらうと云つて、母にイヤ味を云つて當りちらした。おしづの母が、死んだのも、老婆と大喧嘩をした翌日だつたので、喧嘩したゝめに、心臟麻痺を起したのだらうとさへ思はれた。

だが、秀一が老婆と特に不和になつたのは、地震以來である。地震の時、老婆はその頑なあさましい根性を皆に見せた。秀一は、折あしく商用で横濱へ行つてゐたので、家には女ばかりであつたが、電車通に避難した後も、老婆は揺れ止まない家の中へ幾度も取つて返さうとした。

「お前達、臆病者は玆においで。わたしは荷物を取り出しに行くよ。コレシキの地震を恐がるなんて……」

そんな事を云ひながら、ひよろ／＼した足で、少し傾いてゐる家の中へ取つて返さうとした。それを、七八ケ月の腹を抱へたおしづが止めた。

「まあお婆さんおよしなさい。年寄りのくせに、見つともないぢやないの。近所の手前だつて。」

「いゝよ、／＼。放つといてくれ。和泉屋の大事な品物を出して來るんだから。」

孫と祖母とは、幾度も爭つた。火が迫つたときにも、老婆は容易に立退くとは云はなかつた。

「お前達のやうな生意地なしは、先きへお逃げ。わたしは、家の燒けるのを見屆けてから逃げるから。」

さう云つて、肯かないのを、おしづはやつと、手を取つて引きずつた。世間の手前、八十八になる老婆を、彼自身が

殘るからと云つて燒しては行けなかつた。長男を殘してある乳母は、片足が惡かつた。外には、年の若い女中、一人である。おしづは、手數をかける老婆が殘ましくて、淚が流れた。

いよ〳〵逃げ出してからも、老婆はおしづに手を引かれるのを嫌がつた。

「邪魔つ氣だから手を放してくれ。手を引かれると、歩きにくいよ。お前だつて、人に手を引かれると嫌だらう。」

さう云つて、おしづの手を振り拂つて、ひよろ〳〵歩いた。放して置くと、道がちつとも捗どらないので、手を取ると、また手を振り放した。何遍目かに、おしづの手を振り放して、二三間歩いたかと思ふと、荷車に左の足を轢かれて、小指を碎かれてゐた。

動坂に在る秀一の智見の家で、おしづはその翌日の午後、横濱から馳けつけて歸つた秀一に會つたが、秀一は老婆の剛情を聽くと、腹を立てた。

「殘ると云へば、殘して置けばいゝに。燒け死んだつて、勝手ぢやないか。お前達が、かまつてゐて、萬一の事があつたら、馬鹿々々しいぢやないか。俺がゐて、そんなことをぐづ〳〵云つたのなら、サッサと捨てゝ來るのに。」

さうすれば、どんなにせい〳〵するか知れないと思つた。だが、秀一はもつと老婆と不和になつたのは、銀行の通帳の事からだつた。老婆は、和泉屋の有金を、自分の手に握つてゐたが、銀行に預けた通帳を、持ち出し損つて、みんな燒いてしまつてゐた。

秀一は、二つの銀行へ幾度も——足を運んでやつと新しい通帳を、こさへて貰つた。兩方で六七千圓の金高だつた。それは、老婆の金といふよりも、和泉屋の金だつた。從つて、世帶をやつてゐるおしづが持つてゐるべき金だつた。

「これからは、通帳を、お前が持つてゐるがよい。お婆さんに渡す必要はありやしない。バラックなんか、此のお金で

建てればいゝんだ。いゝか、お婆さんに渡さなくつてもいゝよ。」

秀一は、おしづに云ひきかせた。だが、おしづが持つてゐたのは、二三十分間であつた。

「おしづ、通帳が出來たのなら、見せてをくれ。」

次ぎの間に居る老婆が云つた。

「あなた見せてもいゝでせうか。」

秀一も、惡いと云ふ口實はなかつた。おしづが、次ぎの間へ行つて老婆に見せた。

「どうも御苦勞樣だね。大變御苦勞をかけて。」

そんな聲が、秀一にきこえたかと思ふと、おしづが泣きさうな顏をして秀一の所へ來た。

「お婆さん、自分でしまつておくと云ふのよ。」

「だから、よく云へばいゝぢやないか。これは、和泉屋の金だから、わたしが持つてゐるつて。バラックや何かにお金が入るからつて。」

「だつて、そんなこと聽きやしないんだもの。」

「よし、それぢや、俺が云つてやる。」

秀一は、次ぎの間へ云つて老婆と顏を見合はした。

「お婆さん、通帳はおしづに渡しといたら、どうです。貴方が持つてゐるから、燒いたり何かするのですよ。まだどんな事があるか分らないんだから、當分おしづに渡して置いたら、どうです。」

「いゝえ、わたしの名前だから、わたしが持つてゐますよ。」

「でも、また焼いたり何かするといけないから、おしづに渡して置いたらと云ふのです。」

「いゝえ、今度は焼きはしませんよ。」

「今度は、焼かないと云つて、一度焼いてわたしに手數をかけたのでせう。其れにおしづに渡して置いたら何うです。」

「いゝえ、いやですよ。通帳なんか、焼けたら、幾度でも呉れますよ。その位なことで、私のものを捲き上げようとしても駄目ですよ。そんなお婆さんとお婆さんが違ひますよ。」

秀一は、カツとして、意地わるく出ばつてゐる廣いお出額を、張り飛ばしてやりたくなつたのを、やつとこらへた。

「勝手になさい！」

彼はさう云つて座を立つた。

「えゝ、勝手にしますとも、わたしのお金ですもの。」

秀一は、米相場師として相當の位置もあり腕もあり、和泉屋へは入つてから、家計は一人で背負つて來てゐた。女房の家のものを、當にするやうな氣は少しもなかつた。だが、今度の地震では、さすがの彼も叩きつけられてゐた。塲が、何時立つかさへ分らなかつた。老婆の金を、自分の資本に引き出すやうな氣は少しもなかつたが、バラックの費用などは、老婆の持つてゐる金で、支辨するのが當然であると思つてゐた。それが、和泉屋の金である以上、當然であると思つてゐた。そんな當があつたればこそ、彼は幾度も銀行へ足を運んで、通帳をこさへて貰つたのだ。所が、それが出來ると、手もなく老婆の懐へ藏ひ込まれてしまつたのである。その上、捲き上げる云々など、痛くない肚を探ぐられて、彼は心外でならなかつた。彼は、どんな事があつても、以後老婆と口を利くまいと思つた。

同じ町内の人々が、バラックを建てゝ段々歸つて行くと云ふ噂を聴くと、秀一もおしづも何だか取り殘されるやう

な氣がしたので、秀一がバラックを建てる金を、千圓ばかり工面して來た。そして町内の頭をしてゐる高橋の伯父に建築を頼んだ。高橋の伯父は、それを聽くと、老婆が大金を持ちながら、こんな非常な場合に出さないのを憎くんだ。

「よし、俺が婆さんに文句を云つてやらう。婆さんから、千圓出させるやうに云つてやらう。兩方から、千圓宛出して二千圓のバラックを建てれば立派なものだ。」

だが、高橋の伯父が、老婆にその話をすると老婆は、てんで取り上げようとしなかつた。

「へえ。ケチな男ですね。わづか二千兩ばかりの金を、わたしに半分出させようとするのですか。ケチな了簡の男ですね。だから、わたしがあの男が、おしづの婿になるときイヤだと云つたのですよ。こんなときガラック(老婆は、バラックと云ふ言葉を訛つてゐた)位、建てるのが、男の働きぢやありませんか。」

秀一は、陰でそれを聽いてゐて、思はずそこへ飛び出して行つて蹴倒してやらうかと思つた。だが、八十八になる身體に手をかけては、此方に幾何理屈があつても、此方の負だつた。それかと云つて、義理人情を説いて、やつつけるのには耳が遠くて、此方の云ふことが分らなかつた。

だが、その頃から老婆の腰が立たなくなつた。そして不淨物の世話まで、周圍の者にさせた。今年になつてからは、めつきり衰弱が見えて、此の冬は越しさうもなかつた。

秀一も、老婆が死ねば家の中が、カラリとすると思つてゐた。おしづも、老婆が死ねば、亭主と祖母との間に、狹まつていやな思ひをすることがなくなると思つてゐた。それよりも、此の家に頼つてゐるために、否でも應でも、口汚く罵しられながら老婆の世話をしてゐる米屋の伯母は、一番痛切に老婆の死ぬのを望んでゐた。

「ねえ。おしづさんお祖母さんもう長くはありませんねえ」

何氣なく、そんなことを云ひながら、自分の苦役の明くのを待つてゐた。

老婆は、どの醫者もはか〴〵しい診立をしないもんだから、醫師を次ぎ〳〵に變へた。でも、少しでも良心のある醫者は、癒るなどと安請合は決して云はなかつた。たゞ、どの醫者も、老婆の心臟の強いのに驚いた。

「こんなに心臟が丈夫だから、今日明日などと云ふことはありませんがね。」

醫者は同じことを云つた。老婆は、醫者の診立がはかばかしくないのが、不平らしかつた。彼女は、近所の漢法の醫者を迎へさせた。誰も賴み手のない漢法の醫者に取つては、いゝ患者だつた。毎日のやうに診察に來た。往診料が、一日一圓宛だつた。

「お祖母さんとは、いゝ相手だわねえ。氣安めには、あれで澤山だ。」

おしづは、そんなことを云つてゐた。今迄、彼女は祖母と喧嘩する度に、よく周圍から、慰められた。

「何と云つたつて、もう一年か二年かの辛抱だ。お金だつて、いくら慾ばつてゐたとて、持つて行かれるものぢやなし。」

そんなことを、幾度聞かされたか分らない。もういよ〳〵辛抱の仕甲斐の現はれるときが來た。祖母が、死ねば長男の信一にだつて、今度生れた次女の久美子にだつて、ちやんとした着物も買つてやれるのにと思つてゐた。第一家の中だつて、秀一が老婆と顏を合はすのを嫌がつて、店の次ぎの間より奥へは、足を入れないので、いろ〳〵不便が多かつた。

老婆は、朝からお腹が痛いと云つて、喰物を喰べない日があつた。長男の信一丈は、時々老婆の顏を、のぞき込みに

行つたり、老婆の顔を見て、笑つたりした。頑な老婆の心も、曾孫丈には、目がたかつた。

「坊やの顔を見せてをくれ。」

信一が傍へ行かないと、乳母などにさう云つた。だが、反感を持つてゐる家中の者は、信一を老婆の傍へやらないやうにした。

「お祖母さんは、臭いから〳〵いや〳〵。」

そんなことを云つて、老婆の傍へ行かうとする信一を、抱き止めたりした。

「あんまり、お祖母さんがシヤクにさはると、わたし信一にちやいなさいと云つてやるのよ、すると、信一が、物指しなんか持つて、ぶちに行くのよ。」

おしづが、秀一にそんなことを報告した。

二月には入つてから、老婆は益々死期が近づくやうに思つた。秀一は、隔ての障子が開いてゐるとき、六疊間を隔てゝ向ふの三疊に寢てゐる老婆の顔を、ちらと見ることがあつた。彼は、そんなとき直ぐ目を外らしたが、汚い蒲團にへばりついてゐるやうにねてゐる顔が、氣味がわるいほど蒼かつた。

「お婆さんが死んだら……」

おしづは、晩餐のとき、いろ〳〵なことを秀一に話した。今まで、もう今年はもう今年はと云ひながら、四五年過ぎてゐるので、秀一も直ぐその氣にはなれなかつたが、何だか今度丈は、一家の覊が除れてしまふやうに思はれた。

二月には入つてからは、ひどい寒さが來た。バラツク建てである家は、寒さが床下からも、天井からも、壁からも滲み入つて來るやうな氣がした。疊までが水のやうに冷たかつた。

らこの婆さんぢや、お婆さんはもつまい。この冬はとても越せさうはない。」

そして春には、本當に家のうちにのび／＼とした春が來るだらうと、一家の者は心の底で同じやうなことを考へてゐた。

すると、二月の十日前に、去年の暮生れたばかりである久美子が、風邪をひいた。バラックなので、子供には風邪をひかさないやうに、出來るだけ用心をしてゐたのだが、狹い家に大勢の人が居るので、出入のたびに空氣が冷やされて、小さい火鉢などでは、部屋が温まらないのであつた。

久美子の風邪は、初めは七度幾らかの熱が毎日續いてゐたのだつたが、なか／＼快くならなかつた。

奧の三疊には老婆が寢てゐる。店の次の間には秀一が寢るので、子供はその間の六疊の居間の窓際に寢かしてあつたのだが、窓にはカーテンさへかかつてゐなかつた。冷たい夜の外氣が、室內の暖氣を遠慮なく吸ひ取つて行つた。

秀一は夕方歸つて來ると、妻に言つた。

「おい、カーテンを懸けなきや駄目ぢやないか。」

「えゝ、えゝ、懸けますわ。」

おしづは安請合をした。

「それから、向ふの三疊の間の襖を、閉めとかなきや駄目だ。」

「だつて、お婆さんが閉めさせないんですもの。」

三疊の間の襖を閉めるか閉めないかで、老婆と家族とは、幾度喧嘩をしたかわからない。老婆はその襖を開けさせて置いて、家內の者の行動を見て居たかつた。そして、何かと口を挿みたがつた。老婆に取つては、今のところそれが唯

一つの生活だつた。家内の者は、それがうるさいので、閉めて置きたがつた。おしづが老婆の皮肉を怒つて、外からぴしりと閉めると、老婆は襖へゐざり寄つて、力一杯に開け返した。

「だつて、子供が病氣な時だもの。どんなに怒つたつて、閉めて置くさ。」

「ねえ、ちよいと。わたし氣になつてしまふのよ。久美子が風邪をひいてからは、お婆さんがだん／＼快くなつて行くやうよ。家の中に二人病人があると、競爭になるつて、本當か知ら。」

「馬鹿な。これから五十も六十もまで生きようとする子供が、八十八のお婆さんに負けてたまるものか。」

さうは言つたものの秀一は、何だか厭な氣がした。意地になつたつて、子供を殺してたまるものかと思つた。だが、子供は同じ容態が幾日も續いた。秀一はその頃、千石ばかりの買玉を踏まうと思ひながら、戻すのを待つてゐるうちに三百丁ばかりも引かれてゐたので、子供の病氣は氣になりながら、十日ばかり碌に容態も聞かずにゐた。だが、カーテンが懸かつてゐないのを見ると、二三度おしづに注意した。

月を越しても久美子は癒らなかつた。こんなに長く患つてゐては、小さい身體がとてももつまいと思つた。三月に入つて間もなく、秀一は妻に言つた。

「どうだい、山田さんに入院させなくてもいいかと、訊いてごらん。」

「いつもさう言つて訊いてゐるのですけれども、大丈夫だ／＼とおつしやるのよ。」

「いくら大丈夫だつて、癒らなきやしかたがない。」

だが、翌日秀一が歸つて來ると、醫者が、入院しなくても大丈夫だと言つたと、おしづが言つた。彼は、その言葉が少し不安であつたが、相場での痛手が大きいので、こちらから進んで入院させる氣も起らなかつた。

だが、久美子が急性肺炎を起したのは、その翌日の午後であつた。生後百日にも足らない子供は、直ぐ呼吸困難を起して、苦しさうに喘いでゐた。小さい眼で一點を見詰めたまま、今にも息が絶えさうに、ぜい〳〵言つてゐた。熱が四十度に近かつた。よく見ると、枕許の窓には、やつとカーテンが懸かつてゐた。秀一は、今まで放つて置いた妻に腹が立つた。

「おい寒暖計を買つて來て見ろ。」

彼はさう言つて、女中に直ぐに寒暖計を買ひにやらせた。寒暖計で計つて見ると、部屋の温度は、四十四度しかなかつた。彼は、妻の今までの暢氣さが、腹が立つてならなかつた。

「これごらん。何時もより火鉢を一つ増し、ネルのカーテンを懸けてあつてさへ、四十四度ぢやないか、今までは何度だつたと思ふんだ。おれがあんなに幾度も言ふのに、カーテン一つ懸けてやれないのか。見ろ、この温度を。」

彼はさう言ひながら、寒暖計を幾度も妻の兩眼のところへ押しつけた。おしづは、しく〳〵泣き始めてゐた。

「この襖を開けて置くなんて、べらぼうな話があるか。」

さう言ひながら、老婆が起き返つてこちらを見てゐるのに拘らず、その面前で襖をぴつしやり閉めた。彼は、入院しなくつてもいいと言つた醫者までが、腹が立つた。町醫者が入院させない、それはなるべく費用をかけないで治してやらうといふ親切よりも、入院させるといふことは、結局自分の手に了へないといふことを告白することであり、同時に自分の患者を、他の人の手に渡すといふ、職業上の損失であるので、入院させたがらないのだと考へた。さう思ふと彼は、すべてが癪に障つた。だが、彼の憤慨も、抵抗力の少しもない、弱い生命を、どうすることも出來なかつた。

翌日、彼が場所の歸りに、ちよつと寄り道をして歸つた時は、久美子はもう五分前に息を引取つたといふところだつ

た。彼は、雀の子か何かのやうに小さい死骸の、かさ〳〵した胸の邊りを弄つてると、口惜しさの涙が止め度もなく出て來た。

「まあ、死んでもいいものは死ななくつて、生きてゐなければいけないものが、死ぬなんて、なんて倒さだらう。」

悔みに來てくれた人が、みんな同じやうなことを云つてくれた。

「お婆さんなんかが、何時までも生きてるから、子供が死ぬんですよ。」

秀一は、老婆の生存と、久美子の死とが比較されるのが、口惜しくてならなかつた。だが、どんな强情な老婆でも、曾孫に先立たれると、少しは自分の生きてゐることが氣恥しくなるにちがひない。そんな意味で老婆の心を、少しでも傷つけることが出來たら、少しは腹癒せになると思つてゐた。だが、老婆は逆に肉親である曾孫の死に、涙を流したが、

「わたしが代りに死ねばよいのに。」

とは、一言だつて云はなかつた。

老婆が死んだら、葬式は一切引受けてやつてくれると云つた高橋の伯父が、久美子の葬式を一切やつてくれた。秀一は、地震後に生まれた子だつたので、何一つ娘らしい着物は買つてなかつた。何れ物心がついてから、いくらでも償ひをしてやるつもりでゐたが、死んで見ると、さうした償ひは永久に出來なかつた。せめて形のあるうちに、女らしい着物を一度でも着せてやらうと思つたので、葬式の出る日の午前に、白木屋へ行つて、友禪の袖の着物を買つて來て、死體に着せてやつた。死體を棺に納めた時、肉親の者が、石で釘を形式的に棺を打つ行事があつたが、秀一はそれを行ふことを拒んだ。八十八の老婆に棺の釘なんか打たれると、死んだ者はとにかく、生きてゐる者は、浮かばれさうにもな

かつたからである。いざ出棺となる時に、初め葬儀馬車が來た。すると、十分ばかりして、今度は葬儀自動車が來た。その葬儀屋は最初葬儀會社へ、馬車を注文したのだが、馬車が時間がかかるのがわかつたので、自動車に變へたのだが、その振替がうまく行かなかつたので、馬車も自動車も兩方共來たのだつた。

馬車は斷つて返したが、馬車と自動車と二つ來るなんて、みんな厭な氣がした。

「あゝ、緣起でもない。あの馬車は誰を迎へに來たのか知ら。」

「無論お婆さんさ。」

「ほんとにね。赤ちやんは一人で淋しいんだから、お婆さんが一緒に行つてやると、みんな都合がいいんだがなあ。」

集つてる人達は、秀一夫婦を慰めるために、みんなそんなことを云つてくれた。

「久美子が死ぬと、いくら强情のお婆さんだつて、氣が弱るから、もう間もなく死にますよ。」

みんなは、さう豫想してゐた。だが、その豫想と反對に、老婆は目に見えて快くなつた。食慾が出て、顔色が日に日によくなつた。秀一はかなはないと思つた。

老婆は少し快くなると、漢法醫はよして、今度は揉み療治を呼んでゐた。揉み療治で、起たない腰を起てようとするのであつた。八十八の老人の腰が、揉み療治で起つわけはなかつたが、その揉み療治をやるといふ男は、毎日缺かさずやつて來て、治療代を二圓づゝ持つて歸つた。

もう老婆が春までには死ぬだらうなどゝいふ豫想は、誰の頭からも消えてゐた。みんなは、口に出しては云はなかつたけれども、めい〳〵、まだ一二年の老婆との不快な接觸を覺悟したらしかつた。

直接の被害者である漆屋の伯母は、たのしい豫想が裏切られると、たまらなくなつたと見え、また家を飛び出したが

行くところのない彼女は、三日目に歸つて來て、見えない鎖に自分自身を繋がなければならなかつた。

だが、餘分の葬儀馬車が、誰を迎へに來たかが、直ぐわかつた。それは久美子が死んでから半月も經たないのに、長男の信一が風邪をひいたのだつた。その十日ばかり前に、乳母を離したので、彼は胃腸を害してゐた。初めは腸から來る熱だと思つてゐた。山田といふ醫者は、久美子の記憶が生ま〳〵しかつたので、かけたくなかつた。木内といふ、新聞などで小兒科のことをよく發表してゐる博士がよばれた。秀一は、どんな犧牲でも拂ふつもりでゐた。

二三日經つたが、はかばかしくなかつた。秀一は久美子のことがあるので、入院さしてくれと云つた。博士はそれには及ばないといつた。だが、さう云つた晩に、信一は三十九度の發熱で、呼吸困難を起してゐた。秀一夫婦は慌てた。この博士も何だか信用出來ない氣がした。信一が去年、肺炎に近い毛細氣管支炎で、長い間かかつてゐた醫者があつた。とにかくその醫者は、信一の病を癒してくれた。地震で山の手の方へ避難して開業してゐるところへ、電話をかけた。その醫者は直ぐ來てくれた。そして、信一を診斷すると、こんなところへ置いて置けば、命がないと云つて、同じ自動車で入院させてくれた。

入院したので、夫婦はとにかく安心した。だが、その安心は、翌日から直ぐ裏切られた。信一は病勢がぐん〳〵進むばかりで、入院してから五日目に、死んでしまつた。

秀一もおしづも、一言も口が利けなかつた。二人共起き上れないほど叩きのめされてゐた。久美子が死んだ時、知合ひの人達は、

「これが坊やさんでなくつていいんですよ。」と云つて慰めてくれた。だが、今度は周圍の人も、何と云ふ言葉もなかつた。

老婆は、冬の間の衰弱はすつかり恢復してゐた。さすがに可愛がつてゐた曽孫を失つて、彼女も幾日もの間泣き悲しんだ。だが、秀一はそれがちつとも嬉しくなかつた。そんな哀悼などは、子供が続けざまに二人死んで、八十八の老婆が、けろりとして生きてゐるといふ皮肉な嘲罵を、少しも緩和しなかつた。秀一は、どうにも出来ない自然の嘲罵の前で、身を悶えた。

老婆は、今度もわたしが代つてやればよいとは、一言も云はなかつた。

「可愛い坊やが死ぬんだもの、わたしも何時死んでもいいと諦めましたよ。もうもみ療治の山崎さんも断りませうよ。」

と云つた丈であつた。

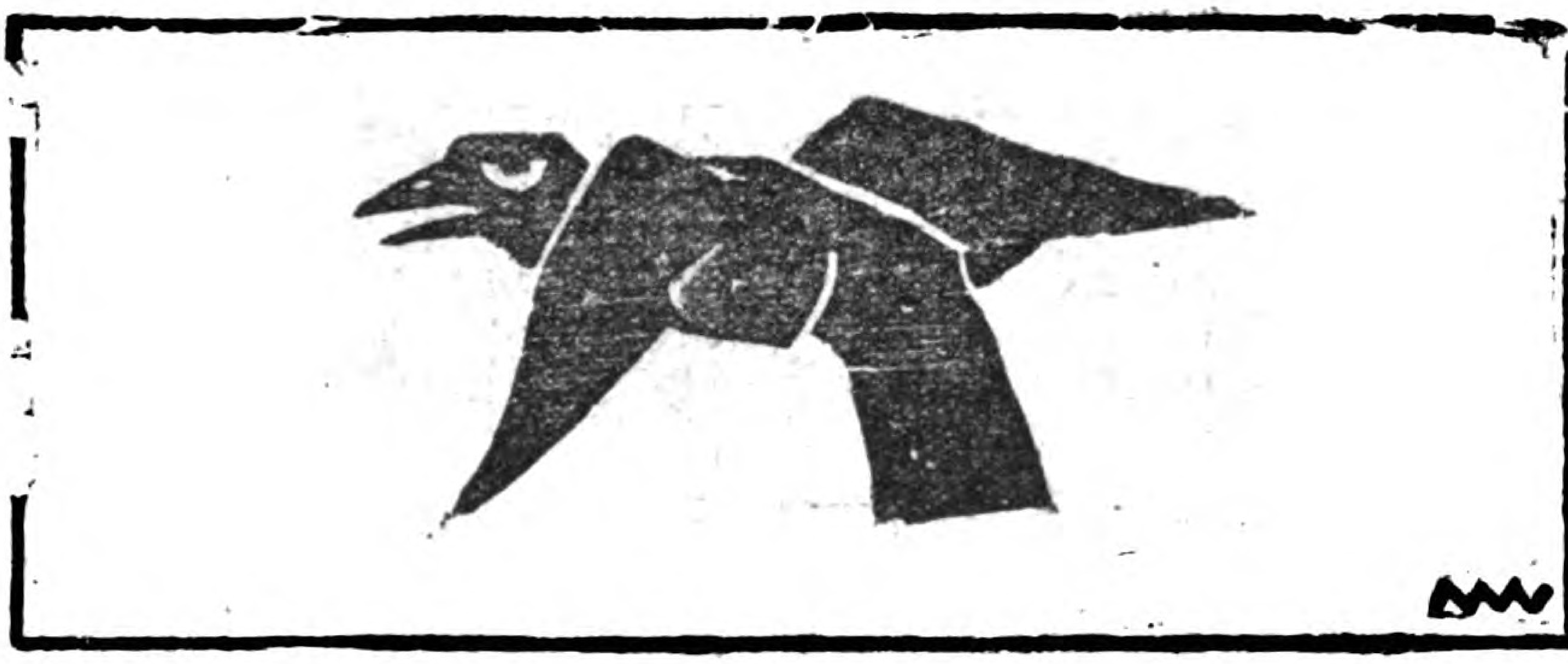
「ふん。體裁のいいことを云つてら。もうそろ〱一命が惜しくなつたんだよ。」

おしづが、さう云つて嘲笑つた。

秀一は、生の執着、丈夫な心臓の怖力、そんなものが考へられた。或夜、夫婦ばかりのさびしい床で、妻を顧みて云つた。

「おい。お互に氣をつけなきや、いけないぜ。お婆さんが死ぬより前に、俺達のどつちかが、死ぬやうな氣がするよ」

彼は明かに敗北してしまつた自分を、意識してゐた。



彼者誰

——一幕もの——

佐藤春夫

景中の人物

病的な人

その細君

健康な人

噂に出る人物

保田

峯子——保田の妻君

西岡

久保

大坂。川に沿うた或る宿屋の一室。

晩秋。——灯のともる前のこと。

病的な人は宿屋のどてらを着てゐる。

健康さうな人は背廣服を著てゐる。

彼等ふたりとも三十二三ぐらゐ。

細君は二十二三。くつきりした顔立。清楚な透明な感じ。極めて柔順な態度。

健康さうな人は今この部屋へ來たらしい。

細君は坐ぶとんなどをすすめてゐる。

健康な人　（坐りながら）で、何かい。まだ二三日はゐるつもりかい。

病的な人…………

細君　それがでございますよ。急にいやになつたさうにございまして。海が心細いやうに申しましてね。今朝などもまた東京へかへりたいと言ふのでございますよ。

健康な人　へえ？どうしてまた。海と言つてもほんの十時間かそこいらでせう。（病的な人に）それに靜かな天氣ではないか。ここはいつもかう凪つたやうなのだぜ。

病的な人…………

細君　え、船のことは、ともかくも、海岸に住むのはいけないと氣がついたのださうで、遠い水平線を毎日見るのはい

やだと申しましてねえ。
病的な人　さうぢやない。單にいやなのぢやない。僕のからだのためによくないのだ。
健康な人　西岡の別莊は、しかし——
病的な人　（遮る）君、別莊ではないよ。ほんの果樹園のなかにある小舍だよ。
健康な人　さうかい。それぢやその小舍だが、そこは一たい山の方だといふぢやないか。そこから、いつかまだ學校の時分に、手紙をもらつたことがあつたが何とか山房と書いてあつたぜ。
病的な人　昏枝山房さ。
健康な人　だからさ。山ならばいいではないか。西岡がすすめるんだものきつと君の氣に入るよ。我々の連中ぢや、君と西岡ががらにない詩人だ。前から氣が合つてゐたね。
病的な人……
健康な人　それにあの邊はきつと溫いよ。閑がある身分なら、奧さん、僕もお伴をしたいくらゐですよ。
細君　ほんとうにそれだと、主人もどんなにか樂しいでございませうにねえ。ほんとうにお暖かですつて。十一月の半には、もう水仙が咲くつて、西岡さんのお話でございましたわ。
健康な人　いいな。……どうだい、君、今さらそんなことを言はずに行つてみたまへよ。
病的な人　暖いのはいいのだ。——海がいけないのだ。——海の空氣はいけなくない。——海を見ることがいけないのだ。
健康な人　だからさ。海を見なければいいだらう、山の方ばかり見てゐれば。（笑）ねえ、奧さん。
細君…………（微笑、さびしいが自然なもの）

病的な人　（彼女等の笑ひに誘はれること無しに、この人の言葉は常に異論を拒絶する如き口調。）こんなわけに行くものか。いいなかにあつて海が見えるのだ。見えれば見たくなるよ。――誰が片方ばかり見つめて暮せるものかね。これには海が好きなのだ。――その好きな海を見てはいけないのだ。――あまり強すぎる景色は、そのうへにそれが単純だと來ては、神經には害になるのだ。――さういふことを書いた本を僕は見たことがある。

健康な人　でも、ここまで來たのだものね。それに西岡にも悪いやうだなあ。

細君　せつかく御親切に御心配下さつたのですものねえ。

病的な人　さうだ。それはよくない。

（間）

健康な人　（細君に）え――何とかいふところでしたねえ。

細君　船は串本とかで下りますさうで、潮ケ岬の近くでございますつて。

病的な人　潮ケ岬ではないと言つてゐるのに。潮の岬といふのだよ。西岡がさう教へてくれたぢやないか。潮ケ岬と言つたのは俺の間違ひだ。西岡が言ひ直してくれたぢやないか。地名だからめちやを讀んではいけないのだ。

細君　（從順な微笑）ほんに、さうでしたわ。

健康な人　は、は、は。けふはだいぶん機嫌が悪いやうだね。

病的な人　…………（ごく無意味な微笑）

細君　お天氣がはつきり致しませんものですから。主人は日のかつと照るのが好きなのでございますわ。

健康な人　それは誰しもその方が愉快ですなあ。（病的な人に）まあ、しかし氣が進まないなら急いで行くこともないさ。

少しここで遊んだらいいぢやないか。奥さんをつれて紅葉でも見に行くがいいよ。さうして行きたくなつたら細君へも行くさ。（思ひ出したやうに）さう〳〵、奥さん。どこかお出かけのところぢやありませんでしたか。私にはどうぞお構ひなく。

細君　よろしかつたのですわ。用事ではございませんの。歩きがてらそこまで、手紙を入れて來ようと思つてゐました――あまりちよい〳〵女中さんたちを氣の毒だと思ひましてね。いつでもいいのんきな手紙なのでございますよ。

健康な人　はあ。――でも、せつかくですから行つていらつしやいませんか。その間に僕は御主人と内緒話をしたいんだがなあ（哄笑）

細君　おや、私にもうかがはせて頂きたいこと（笑）

病的な人　（顔を上げて、先づ彼を、それから彼女を見る）

細君　それでは、わたし、ちよつと御免を蒙つて出てまゐりますわ。ね、あなた。

病的な人　………（うなづく）

（細君、立つて隣りの間へ行くのを呼びかけながら――）

健康な人　外は案外さむございますよ、川風で。

細君　（こごんで襖間をあけながら、ふりかへつて）さようでございますか。では手袋をしてまゐりませう。（出て行く）

病的な人　君は保田や米子さんの噂をしようと思つたのだらう。それであれを退席させたのだね。それには及ばなかつたのに。

健康な人　奥さんは知つてゐるのかい。

病的な人　知つてゐるどころぢやない。君が今からその話をしようといふことまでも知つてゐる。

健康な人　どうして？

病的な人　僕は君が這入つて來た時から、君の今日の用事はちやんと知つてゐるよ。——あれがけさ教へてくれたものね。

健康な人　へえ？

病的な人　あれの言つたとほりの事ぢやないまでも、何かそれに關係のあることがあるに違ひないことはわかつてゐる。あれはね、峯子さんがここへ尋ねて來る夢を二晩も見たのだ。

健康な人　君の細君は峯子さんを見た事がある？

病的な人　ない。だがいろ〳〵様子を聞くと、どうしてもそれが峯子さんなのだ。——だからをかしいのだ。（障子に嵌まつたガラス越しに外を見る——ながく）君、あの女はね——僕の家内さ、あれは不思議な女だよ。これから起ることを、それに大變似た事を何でも知つてゐるのだ。夢で見るのだ。——だから、僕は毎日あれに夢がたりをさせるのだ。——あれの母の妹は落ちぶれて田舍で巫女をしてゐるさうだが、あれも不思議な官能を持つてゐる。僕は時々、ぞくつとすることがあるよ。——あれの妙な美しさは、——いつも月の光で濡れてゐるやうな美しさは、さういふ妙なところから來てゐるのだよ。君の前だが。（ガラス越しの外を見る——ながく）

健康な人　（しばらく相手の横顔をみる）——要するにそれぢや、細君は峯子さんのことは知つてゐるんだね。

病的な人　それは晴ででも知つてゐるようさ。僕も話した。それに今あの人がここに住んでゐることもねえ。——だか

ら、何もあれに内緒にすることはなかつたのだ。それどころか、あれは今、君と僕とが何を話してゐるかもちやんと知つてゐるよ。――だから、君はあの女をなにも外へ出すことはなかつたのだ。君は困つた事をしてくれた。

（外を見る）――あの女はまたすつかり鎧戸をおろすよ。

健康な人　え？どうするつて？

病的な人　あの女は自分の心を閉めきるんだ。すつかり鎧戸をおろして、その隙間からぢつとこちらの心を覗くのだ。さうしてあの女は石になる――大理石にね（ガラス越しに外を見る――遠く）

健康な人（相手の顔をためすやうに見る）それや一たいどういふことだい。

病的な人　すつかり冷たくなるんだ。――いや、それが、決して反抗的ではない。――何も拒まない。それで、ただそれだけの事なのだ。――大理石が鑿のとほりになるやうに。さうして何の暖かさもない。――僕は一人ぼつちで放り出されるのだ。

健康な人　君のいふことはどうもあまり詩的で、僕にははつきりわからないが、君、君がそんな氣がするのぢやないのかい。君がさう思ふのだよ。

病的な人　さうさ。僕が思ふのだらう。さうして、世界の事は、何だつて、誰だつてみんなさう思ふのだらう。

健康な人　なるほどこいつはむつかしいな。その相手はちよつと僕にはむかないな。――ともかくもそれは詩人のかゝる病氣さ。

病的な人（ガラス越しに外を見る――遠く）何もかも今にわかるよ。（間）……君、君にだけ僕の秘密をいふが、あの女は、あれは二重人格だぜ。――僕を悩ますのはそれだ。――それが僕を憂鬱にするんだ。――今にわかるよ。あれが今

に歸つて來たところを見たまへ。心が石になつて、表情までが大理石像のやうに變はつて………

健康な人………

病的な人　君は信じないね。言葉では判るまいよ。今に歸つて來たらよく見たまへ。――さつきこゝを出て行く時から、あれはもう第二人格を現はしてゐた。君は氣がつかなかつたのかい。

健康な人　(相手を疑はしげに見ながら) いいや。

(間。病的な人は、やつぱり時々、ガラス越しに遠く外を見る)

健康な人　……時に、話は違ふが、君は久保を知つてゐるかね。おぼえてゐるかね。

病的な人　あゝ、あの同期生のだらう。あの久保だらう。どうして？

健康な人　あれが、今、やつぱりこちらに來てゐてね。

病的な人　(全く無興に) ふうん。

健康な人　君のことを噂すると、逢ひたがつてゐたぜ。逢つて話したらどうだい。久しぶりだ。

病的な人　僕はあの男は好かない。あれはバルガーな男だ。

健康な人　さうかな。無遠慮な奴だが、面白いがね、快濶で。さう〳〵、君が氣分が重くつて西岡の別莊へ養生に行くのだといふとね……(しばらく躊躇してから) 君があんまり奥さんと仲がいゝからだらうと言つてゐたよ。ハ、ハ、ハ。

病的な人　(相手の言葉には殆んど注意を拂はずに、小聲で呟く)………

健康な人　え？何か言つたかい。

病的な人　保田の話を早くしたまへ。

健康な人　あ、保田も君がここへ來た事を知つてゐるよ。久保が言つたのだらう。――先生たち同じところへ勤めてゐるからね。保田が久保を世話したのさ。

病的な人　（無感興に）ふふん。

健康な人　保田がね、久しぶりだから君に逢ひたいと言ふのだよ。君、逢つて見る氣はないかい――久保や僕やみんなして。奧さんを見せてやり給へよ。

病的な人　（外を見てゐた目を相手に向けながら）保田が？保田が僕に、僕に逢ひたい。君、嘘を言ひ給へ。でも、保田が僕に逢ひたいなどといふ筈はない。もしそんな事を言ふなら、それは保田の虚榮心だ。あの男は君、年月が經つほど僕が憎くなる筈なのだ。

健康な人　そんな莫迦なことはないさ。どんな事だつて年月が經てば濟んでしまふよ。水はどん〳〵と流れたぢやないか。

病的な人　澤山の水は流れても、その中に流れないで立つてゐる岩がある。――君は知るまいが、保田は峯子さんと僕とをだましたのだ。うまくだまして峯子さんを自分の方へつれて行つたのだ。目隱しをして、こつちが南ですよと言ひながら、無理に手を引いて北の方へつれて行つたのだ。僕は知つてゐる、保田は峯子さんが自分のものになればなるほど、あの時の彼自身が鮮やかにきつぱりと思ひ浮ぶに違ひない。あの時は手段を擇ばなかつたが、今になつたならば擇びたかつたらう。さうして僕が憎くなるのはわかつてゐるのだ。

健康な人　（當惑げに）さういふ理窟になるかな。

病的な人　さうだよ。だから保田が僕に逢ひたいなどといふ筈はないさ。君、お世つかいはやめたまへ。君は保田のところへ行つては、僕が保田に逢ひたがつたやうなことを言つたのだらう。僕には保田が逢ひたがるやうに、二人ながら。ふたりを結局君がだまして、――あの時保田が峯子さんと僕とにしたやうなことを返して、今度は反對に仲なほりをさせようといふのだね。

健康な人　君のやうにさう何もかも氣をまはしては困るなあ。

病的な人　いいや、君が何と言つても保田はそんなことを言ふ筈はない。僕はあの男をよく知つてゐる（突然、言葉を切つてガラス越に外を見る）

健康な人　何だつてさつきから、さう外ばかり見るのだい？

病的な人　――で、峯子さんも知つてゐるのかい、僕がここにゐることは。

健康な人　さあ、もしかすると久保が話したかも知れないね。

病的な人　――それでわかつた。やつぱりさうだ。峯子さんはもう二度もここへ來かけてゐたのだぜ。――おとつ日もきのふも、夕方にね。ちやうど今時分。――川の向ふのあの道を通つた。さうしてたうとう來ずにしまつた。――その姿なら僕は見た。――それを知つてゐてあれは――ちやんと夢に見たのだ、一日も。（外を見入りながら）――まるで魔法使ひだ。……やあ（突發的な感激。立つ）峯子さんが來てゐる！（傍に兼てからあつたらしい双眼鏡を持つて。障子を少しあける。双眼鏡を目にあてて覗く、――健康な人も同じやうに立つて障子をあける。）

遠景――二十間ほどの向岸に、川沿ひの片側町。灰いろの大きな石造建築物とそれに附屬する長い石塀、落葉した並木。未だ輝きを現はさない街燈。夕ぐれの曇つた空、水の反映。すべて透明で白つぽい寒い景色。

病的な人　（双眼鏡に見入りながら）やあ、お辭儀をしてゐる——

健康な人　どれ〳〵、どこに？

病的な人　（見入りながら）そら、ちやうど我々の真向ふだ。

健康な人　——どれ、ちよつと僕にも見せたまへ。立つてゐる人かい。——はつきり見えない。

病的な人……（双眼鏡を渡す）

健康な人　（覗きながら）成る程、こつちを見てゐるね。黑い手袋をしてゐる。幸子さんなものか。だが、——見たことのあるやうな人だが……おや…（愕然として、目から眼鏡を外す。病的な人を凝視する）

病的な人　さ！　も一度それを貸したまへ。

健康な人　は、は、は、（一種の笑）何を言ふのだ。さあよく見たまへ、（双眼鏡を返しながら）君の好きな人には違ひないが、あれは幸子さんなものか！　（手を上げて、遠くの人に相図をする——去れと）

病的な人　（相手の言葉に耳を借さずに眼鏡をのぞき込みながら）あ、歩いて行つてしまつた。（視野をおもむろに變へながら）橋のうへの人ごみへ雜つてしまつた……

健康な人　（不氣味さうに）君、もうよしたまへ。こんな彼者誰時に、あんなに遠くの人の顔や姿が見わけられるものかね。（相手を憫み労はるやうに）ね、もう座りたまへ。そこが開いてゐると寒いから……

（病的な人坐る。健康な人障子をしめる。後者は前者のうなだれてゐる姿をぢつと見入る——永い沈默）

細君の聲　（次の部屋から）おゝ、ほんとうに寒いこと。

病的な人　（低い聲に力をこめて）お！　あれが來た。――君！僕を苦しめるあれの第二人格をよく見給へ！　――あいつがもうそれなのだ。（言ひながら部屋の電燈をともす。）

（夕方の光りと灯の光とが交錯する。）

（細君入つて來る。――黒い手袋。）

健康な人　やあ。おかへりなさい。――お寒かつたでせう（細君を見る）

細君　失禮をいたしました。――ほんとうに川のところの寒うございますこと。東京はまだこんなぢやございませんわ、きつと。――（極めて無邪氣に）よく私をお見つけ遊ばしたことね。わたしがお辭儀を申し上げたのがわかりまして。――わたし、序に川の向へ行つて、こちらがどんなに見えるか眺めてゐましたの。――おふたりで障子をあけてわたしを御覽遊ばしたでせう。

健康な人　（病的な人に注意しながら、こつそりと強くうなづきながら）何しろ、もううす暗がりではあり、遠くもありますからね。何だかあんまりはつきりしませんでしたよ……

病的な人　（健康な人の言葉を遮つて、險しい口調で、細君に）何だ！　お前は。手袋をはめたままで失禮ではないか。

細君　（夫の口調に別に驚かずに）おや、まあどうしませう。つひうつかりして。御免下さいまし。

（慌てて手袋をとる細君を、健康な人はよく見る――彼は彼の女の言葉と動作とのなかに最も自然な從順を見るだけである）

健康な人　……（病的な人を見つめる）

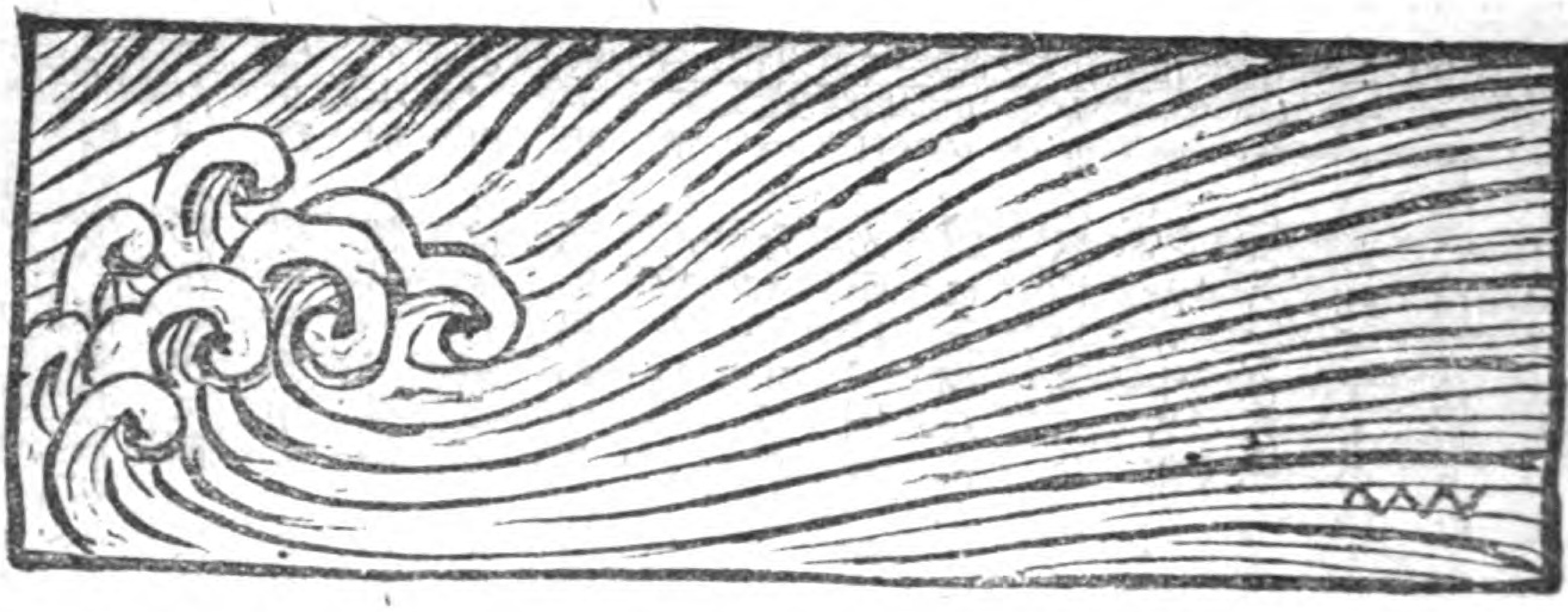
病的な人　（健康な人に）ね、どうだ。君はまさか僕を氣違ひあつかひにするつもりではなからうね。

健康な人　（相手を劬はる口調で）何を言ふのだい、君は。――ただ僕はさつき君、君は詩人のやうな病氣にかかつてゐる

と言つただけぢやないか。

病的な人（うなづく）全くさ——たつた一ぺん自分の女房の顏を夕やみのなかで外の女のと見そこなつたぐらゐなことで、氣違ひにされちやひどすぎるからな、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、（笑。長い笑。その笑は、しかし、狂人のものに非常によく似てゐる。その陰氣な大笑のうちに）

——幕——



きいぷ・さいれんす

廣津和郎

自分は大友の書室で、大友と話してゐた。そこに大友の細君が、外出着に着更へて出て來た。

『あなた、どうしてもお厭？』

『ああ、どうも氣が向かない』

『昨日はあんなに約束なさつた癖に、今日になつてお厭なんて、ひどいわ』

『しかと約束したわけぢやないよ。氣が向いたらといふ條件づきだつたぢやないか』

『それで、今日は氣がお向きにならないの？』

『ああ、氣が向かないな』

『たよりない方……』

結婚して一年ほどにしかならない細君は、細君と云ふ感じよりも、未だ娘々してゐた。小柄で、美人といふ程ではないが、可愛らしい顔をしてゐた。大柄の、紺黒

い顔をした。だが目鼻立の整つた、暢氣な大友は、この細君を大變愛してゐた。——二人が作つてゐる家庭は、四て、暢氣で、陰氣な影が少しもなかつた。自分のやうな獨身者がたづねて來て時間を潰すのには、持つて來いの家庭だつた。忘れない中に斷つて置くが、大友と自分とは中學時分の同窓で、大友は美術學校を出て洋畫家になつたが、自分は文科大學に在學中で、これから小説家にでもならうかと考へてゐるのである。

小柄な細君が、身體をひねるやうにして、半分甘へたやうな、半分すねたやうな顔付で、鼻を鳴らしてゐるのを見ると、自分は少し氣の毒になつて來た。

『一體何處に出かけるんです？』と自分は訊いた。

『三越なんですの。——この前あたしがひとりで買つてまゐりましたら、「こんなもの」つて、一口にけなすんでせう。羽織の裏なんですけれど。——ですから、今度こそは一緒に行つて、撰んで下さいつて、頼んでゐるんですのに、そして昨日なんかは、明日一緒に行つてやるつて、約束して置きながら、いざとなると、これですもの』

『女と一緒に三越なんか歩けるかい？』

大友は無性臭さうに云つた。と云つて別段不機嫌なのではないらしかつた。もつとも、この男は大概機嫌が好かつたり、惡かつたりする事が、特になく、いつも同じやうに細い眼と鼻のあたりに微笑を浮べてゐる男だつた。今も投げ出すやうにさう云ひながらも、やつぱり眼や鼻のあたりに微笑を浮べてゐた。

『すぐ、あれですもの』と細君は半分大友に、半分自分に訴へるやうに云つた。

そこで、自分は取りなし顔に笑ひ出して、

『それでは、三越までは大變だが、その邊までぶらりと一緒に出ようぢやありませんか。そして何處かで珈琲でも飲ん

で、これから奥さんは三越に、我々は少し散歩してゐると云つた事に。——さあ、奥さんも云つたところで構はないんですな。兎に角、こんな風になつた場合、ひとりで家を出るといふのは、出悪いものですから。その出悪さに僕は同情しますよ。もつとも、三越までどうしても引つぱつて行かれるとしたら、今度は寧ろ、大友君の方に同情するかも知れませんがな』

『さうだな、珈琲ぐらゐ飲みに行つてもいいな』

大友も愉快さうに立上つた。

そこで我々三人は外に出た。そこは郊外なんだが、山の手線に乘つて、牛込で一先づ降りて、神樂坂のある喫茶店で、珈琲を飲んで、そこで大友と自分とは、大友の細君に別れた。細君は三越へ、我々は牛込の他の友人のところへ。細君がもう一度良人に向つて三越行きを懇願して、良人が再びそれをはねつけたといふ事などは、書く程煩くなるから省くとして、兎に角、細君は三越へ、我々は牛込の友人のところへ、出かけるために、そこで別れたわけたのである。

『あんなに云はれるんだから、君もたまには三越位つき合つて上げたら好ささうなものだのに』

『だが、實際、三越なんていふところは、俺の柄には合はないからな。——誰かの小説、フランスの誰かの小説で讀んだんだが、「瀬戸物店の牡牛」といふ言葉があつたよ。——どうも女づれで三越などに行くといふ事を考へると、自分がその「瀬戸物店の牡牛」と云ふ氣がして來るんだよ。何しろ柄に合はないからな』

往來を歩きながら、大友は大きな身體をゆするやうにして笑つた。髪の毛を無造作にのばして、くしやくしやさせて、西洋畫家らしい無頓着さで、薄くすりへつた下駄を穿いて、服裝などに何の注意も拂はない大友が、若い細君と一緒に三越へ——なるほど「瀬戸物店の牡牛」と彼が考へるのも無理はない、兎に角、あんまり彼の柄に合つた話でないといひ

ふ彼の氣持はよく解る。

『それに、どうも我々の神經と云ふ奴は、朝眼が覺めるとから、晩寢るまで一緒にゐる女房が、往來に出ても、自側にゐるといふ事を我慢しないよ。――女房を愛する愛さないは別問題なんだ。どうも女房と一緒に三越に行けるなどといふのは、我々とは人種の違ふ人間のやうな氣がするね』

『そんなものかなあ』と獨身者の自分は、感心したやうに云つた。

二人は友人をたづねた。これはやはり同じ中學を出て、早稻田の文科を卒業した男だが、同人雜誌なんかやつて、小說を書いてゐた。我々は畫の話だとか小說の話だとかをして、夕方までその友人の下宿にゐた。それから再び郊外の大友のアトリエに引つ返して行つた。といふのは外でもない。その晩、大友の家で、牛肉を煮て酒を飮むといふ事になつてゐたからだ。それは大友の細君の發議で、細君が三越の歸りに、その牛肉を買つて來るといふ事になつてゐたのである。自分は何の拘束もない下宿住ひの身だものだから、誘はれるままに、又のこのこと、牛込から再び山の手線の電車に乘つて、大友の家まで引つ返して行つた。

大聲に話をしたり、笑つたりして行く我々の足音を聞きつけて、いつも、アトリエの入口まで出て來る細君が、その夕方は出て來なかつた。

『もう歸つてる時分なのになあ』と大友は小首を傾げて呟いた。

『おい』と彼はドアのところで呼んだ。

薄ぼんやりした女中が出て來た。

『奥さんは未だ歸つて來ないのか?』

『へえ』と女中は答へながら、おびえたやうな顔をして、『唯今巡査さんがまゐりまして、旦那様に直ぐ警察まで來てくれと申しました』

『警察まで？』

『へえ。奥様のことでお訊きしたい事があるからと申しまして……』

『奥さん……千代のことで？』

『へえ』

大友と自分とは顔を見合はせた。彼の顔には見る見る不安の色が表れた。

『千代がどうしたつて云ふんだ？――巡査は何とも云はなかつたか？』

『へえ、別に心配なことではない、少し訊きたい事がある、とさう申して居りました』

『ふん』と彼は呟いて、心の不安を落ちつけようとするやうな眼付をしたが、『兎に角、直ぐ行つて見よう。――君には失敬だが、僕一寸行つて來るから、待つてゐてくれないか』

『いや、僕も一緒に行かう』と同じ不安に捉はれてゐる自分は云つた。

有らゆる不吉な觀念が、自分等の頭に來た。電車の事故、自働車の事故、病氣、卒倒……そんなことで、頭が一杯になつた。二人は殆んど駈けるやうにして、停車場の方へ引つ返した。大友の住宅は畑の中の一軒家だつたが、その日は晝間が暖かだつたので、霜溶けの赤土の畑道が、つるつる下駄の下に滑つた。

『あれはかなりの貧血だから、卒倒したんぢやないかと思ふが、卒倒ぐらゐだといいと思ふがなあ』

『いや、大した事はないよ、大丈夫だよ』と自分は極度に不安になつてゐる彼の顔を見て、慰めるやうに云つたが、

ういふ自分の頭にも、大友の細君の頭が割れて、血の迸り出てゐる無慘な光景などが、想像されてゐた。

停車場まで行くと、そこで二人は車に乘つた。警察までは五六丁だつたが、大友は歩いて行くのが我慢がた稍〻氣が急いてゐるらしかつた。そして警察の前で車を下りると、彼は駈け込むやうにして、その新式な青ペンキの西洋館の建物の内に這入つて行つた。——自分はその建物の前で待つてゐることにした。若しか自分などの聞いてはならない事だと困る、と云つたやうな氣が急にして來たからである。

せいぜい二十分ぐらゐのものだつたのだらうが、一時間以上も待つたやうな氣がした。ドアを開けて、大友が出て來ると、自分は直ぐ彼の側に行つて、

『どうしたの？』と云つた。

『う…………』と云つたまゝ、彼は何とも答へなかつた。見ると、彼の顏は土氣色をして、いつも微笑んでゐるやうに見える鼻や眼の邊が、別人のやうに緊張してゐた。——腕組をして、うつむきながら、全く憑かれたる人と云つたやうな表情をして、彼はふら〳〵と歩いてゐた。

『どうしたの？』

『…………』

そのまゝ彼は停車場の方へ歩き出した。自分も彼と並んで歩き出したが、何だかそれ以上彼の答を追窮する事が出來なかつた程、彼の態度は異常だつた。

警察署から七八間離れたところまで來ると、大友は顏を上げて、昂奮を押し隠すやうな低い聲で呟いた。

『君、大變な事が出來てしまつたんだよ。何とも彼とも云はれない事が出來てしまつたんだよ。どうしてこんなことが

なつたのか、僕には想像もつかないんだ。——あゝ、僕はほんたうは君にも打明けたくはないんだが』と云つて、彼は兩手で顏を蔽うて、身體ぢゆうをぶる〱顫はせてゐた。

『………』自分は彼のその樣子に、何事が起つたのかと思ひながらも、唯はらはらしてしまつて、言葉も出なかつた。

『ねえ、君』とやがて彼は顏から手を放しながら云つた。『君、千代が萬引したんだよ』

『えツ、奥さんが？』

『あゝ、三越で半襟を。……今N署の留置場にゐるんださうだ』と大友は吐き出すやうな調子で云つた。『N署から電話でこゝの警察に照介して來たんださうだ。微罪ではあるし、ほんの出來心だといふ事が明瞭だから、說諭放免するから、僕にN署まで引取りに來いといふんだよ』

『………』

二人は默々として停車場まで步いて行つた。全く夢のやうだつた。先刻神樂坂の喫茶店で別れた時の大友の細君の姿が自分の眼にあつた。——意外と云つて、こんなに意外な事が又とあるものではない。自分は大友の家では一人の『家庭の友達』と云つたやうなものになつてゐた。自分は大友夫婦の新婚の最初から知つてゐた。あの明るい、娘々した細君、いつでも快活で、正直で、無邪氣な細君、牛肉を買つて來ると云つてにこ〱してゐたあの細君、それがどうして萬引などをしたのだらう。

自分は大友の心を考へると、何だか泣き出したいやうな氣がして來た。この平生温和な、善良な男が、この意外な出來事に、どんなに心を痛め、狼狽し、且つ煩悶してゐるかを考へると、どうして彼の氣を引立てて好いか解らなかつた。

「先刻、君が一緒に三越まで行くと好かつたんだね」さう云ふより外言葉がなかつた。

「ああ、一緒に行けばこんな事にはならなかつたらうけれど。……あれは丁度今、月の病氣だから、やつぱり世間で云ふ通り、さういふ時、女といふものは精神に異狀を呈するんだらうか。それにしても、こんな事が起らうとは……」

「いや、奥さん自身の不幸だよ。僕はさう思ふよ。――ほんの出來心、と言ふ言葉さへも强過ぎると僕は思ふよ。――ほんとうに一種の病的なものだよ。酒に醉つたやうなものだよ。乾度女には、我々に解らないやうな病的な發作があるんだよ。さう云ふ發作が起つたと云ふ事が、奥さん自身の災難だよ」

實際、自分にはそんな風に思はれて來た。あの細君、大友の細君が、さういふ事をするといふ事は、さういふやうに解釋する外、解釋のしやうはなかつた。――ほんとうに彼女自身の災難だ、良人に向つて、一緒に三越に行つてくれと云つてせがんでゐた時の彼女に、そんな氣持は微塵もなかつたに違ひない。いや、彼女自身が、半襟の前に立つた時にも、そんな氣持はなかつたに違ひない。……實際一種の發作的な惡夢に違ひない。

停車場に著いた時、自分は大友に云つた。

「君、決して叱つちやいけないよ。叱つちやいけないよ、慰めて上げ給へ、慰めて……」

「ああ、ありがたう」と彼はうなづいた。「僕もさう思つてゐるんだよ」

「それから、僕も一緒にN署まで行きたいと思ふが、その方が君のために氣强いだらうと思ふが、併し奥さんの氣持を尊重して、行かない事にするよ。僕までが顏を出したら、奥さんの心を餘計に苦しめる事になるからね。――僕は飽くまで知らない事にして置いた方がいゝ。君もそのつもりで」

「ああ、ありがたう。何も彼もありがたう」

……の澄んでゐるのを見て、自分も喉が熱くなるのを覺えて來た。

▽

それは今から數へると、丁度七年前の出來事だつた。

自分はその七年の間も、昔と變らぬ大友の最も親しい友人だつた。今もやはり變らぬ親しい友人だが。

その間に、大友はめきめきとその名を世の中に賣り出した。彼は二年間フランスにも行つた。フランスから歸朝してからは、彼の名は益々有名になり、彼の繪は益々進歩した。或新興の洋畫家の團體は、彼を中心人物として、畫壇の舊勢力に挑戰した。

大友の妻君は二人の子供を生んだ。男の子ひとりと女の子ひとりと。——何も彼も理想的と云つていいだらう。相變らず暢氣な、身體の大きい大友が、その二人の子供に對して表し始めた子煩惱は、實際見物だつた。

『食はせて行く能力さへあれば、子供は多い方がいいなあ。僕はいつもさう思ふよ。澤山の子供に取りまかれて、子供に三脚だのカンヷスだのを持たせて、寫生に出かけたいとね。……年を取つたら、大勢の子供達に取り卷かれて、愉快に、暢氣に、子供達の相手になりながら、暮したいと。……』

『さうかなあ。僕はその反對だね。年を取つたら、どう考が變るか知れないが、今のところはたつた一人だけでもうんざりだよ』と自分は彼に反對した。云ふのを忘れたが、自分もその七年の間に、學校は卒業したし、結婚はしたし一人の女の子の父親にもなつてゐたのである。そして小說家として、まあ文壇の片隅にも出られたわけである。『何しろ神經を消耗られる事がひどいからね。無論可愛らしくてやり切れないのだ。可愛らしくてやり切れないから困るんだよ。

——やつぱり畫家と文學者の違ひかな。自分の精力がみんな子供に對する氣づかひの方へ奪はれてしまふと思ふと、僕なんかはいらいらして來るがな——」

自分達がそんな話をしてゐる時、大友の妻君はいつもにこにこ笑ひながら、女の子を抱いて、ぢつとそれを聞いてゐた。娘々してゐた彼女は、今は二人の母親である事を思はせる成熟した女になつてゐた。何の波風も立たない、平和な、明るい家庭の主婦、と云ふ感じに出來上つてゐた。

七年前のあの出來事については、自分はその後大友に何も訊ねなかつた。大友も自分に何も云はなかつた。N署でどういふやうにして大友が彼女を引取つたか、それから大友が彼女に對してどんな態度を取つたか、自分はそれを知らうと思はなかつた。大友はプラットフォオムで、自分が彼にした忠告を守つてくれたに違ひない。彼は叱る代りに、妻君を慰めたに違ひない。——人が過失で犯した暗い行爲は、それを責めるよりも、寧ろ、慰める事によつて、その人の心からその暗い痕跡を消すことが出來るものだといふ事を、大友は十分知つてくれてゐたに違ひない。

殊に好都合だつたのは、その出來事が新聞種になどされなかつたことだつた。これはほんたうに幸運な事だつた。——大友を除いては誰も知らない、と細君が思ふ事が出來たといふことは、細君に取つては、幸運なことだつた。その良人が、叱る代りに慰めてくれる。——その喜びを感ずると同時に、細君の心の暗い痕跡は薄らいで行くのだ。

自分は大友の一家の明るい氣分を見るにつけ、あの出來事がたうとう惡結果を與へずに濟んだといふ事を喜んだ。自分はあの出來事を誰にも語つた事はなかつた。自分の妻にも語つた事はなかつた。いや、自分の頭からその出來事は、だんだん消えて行くと云つても、決して誇張ではない。何故かと云ふと、大友の細君の顏を見ると、直ぐ頭に浮ばずにゐなかつたその出來事が、近頃は彼女の顏を見ても、思ひ出さないやうになつて來たからである。

自分等と同じ中學を同期に出たものだけやつてゐる會がある。年に二回か三回何處かで集まつて、大いに飲み、食ひ、且つ語る――文字通りにさう云つた具合の會である。もう中學を出てから十年からになるので、行く方面はめいめい違つて來てゐるが、併し割合にみんな氣が合ふ。いや、氣が合ふ連中ばかりが集まるのかも知れない。その證據には下戶は殆んどやつて來ない。それだから、つまり一緒に酒の飲める連中ばかりが集まるのである。

自分はさう酒の強い方ではない。併しさういふ集まりに出ると、まあ人並のつきあひだけはして行ける。そこに行くと、大友はたしかに立派な豪酒家だつた。一體彼は暢氣な顏をして、こまかい事にくよくよしない質の人間ではあるが、相當に意志の強い男だつた。それだから彼は平生は酒に淫するやうなことはなかつた。酒に淫して自分の仕事の方をおろそかにする、と云つたやうなことが殆んどなかつた。繪に對する彼の精進は見上げたものだつた。

けれども年に二三回あるこの酒のみばかりの同窓會の時は、彼はいつもと違つて、はめをはづして飲む事に決めてゐたらしい。

『さあ、今日は俺は飲むぞ』と彼はあぐらを搔いて、愉快さうに、駄々ッ子のやうに呼び出す。中學時分の駄々ッ子振りが、彼の顏にも様子にも心にも溢れて來る。さうなると彼は實際無邪氣に飲んだ。五人や六人は一人で引受けると云つた調子で飲んだ。

さう云ふ會が、極最近或處で催された。

その席上で大友は例によつて飲んだ。他の連中も飲んだ。みんな醉つ拂つた。自分も醉つぱらつた。

めいめいが、酔つ拂つて、喋つて、笑つて、その騷々しさつたらなかつた。たうとう自分は本當に醉つぱらつてしまつて、頭が痛くなつたので、部屋の片隅に横になつた。女中が搔卷をかけてくれた。

それからどうなつたのか、多分自分は十分か二十分そのまゝうとうとと眠つてしまつてゐたものに違ひない。誰だか何か喋ると、それにつれてみんなが笑つてゐるのが、遠いところから聞えて來るやうに聞えてゐた。

『面白い、面白い。――よし、それぢや今度は大友の番だ』と誰だかが叫んだ。

『さうだ、大友の番だ』

『うん、待てよ』と大友の濁聲がそれに應じた。『よし、それぢや俺が喋らう。いや、こいつはかなり滑稽な話なんだよ。――まあ聞いてくれ』

何か順番に、失策談と云ふやうなものを喋り合つてゐたらしいと云ふ事が、自分に想像出來た。――それが今度は大友の番にまはつたらしい。何を喋り出すかな、と自分はぼんやりした頭の中で考へた。

『今年の夏なんだがね。俺はかうして酒を飲むと、大酒のみ見たやうに見えるが、平生は割合に飲まないんだよ。それは水野が知つてゐるよ。なあ水野』と大友は自分の名を呼んだ。自分は面倒臭いので默つてゐた。『水野はどうした。うん、そこに寢てゐるんだな。相變らず弱い男だな。だが、いいや、いいや。寢てゐろよ。……それで俺は平生はそれ程飲まないんだ。それが今年の夏なんだが、俺のところに、若い畫家達が四五人やつて來たんだ。畫家と云つても未だほんの書生達で、まあ、云はば俺のところに、いろいろ繪の事なんか聞きに來る連中なんだよ。ふとした氣紛れで、俺はその連中を引つぱつて、銀座通を飲んで歩き始めたものさ。初めはその青年の一人がカッフェに好きな女があるといふので、それを見に行かうといふことになつたんだが、そこで飲み始めたのが始まりで、鳥屋だの他のカッフェだの

轉歩きまはつた末に、どうしたはづみか、S――遊廓に行つてしまつたものだよ。――俺が遊廓に行つたなぞいふ事は、それこそ滅多にない話だ。獨身時分には行つたものだが、それからもう七八年行かなかつたよ。それがふら**ふらと出かけて行つてしまつたものだ。**

『そしてそこで又飲んで、たうとう醉ひつぶれて、そこに泊る事になつてしまつたが、時間にすれば、未だそんなに遅くはなかつたんだ。さういふ場所の未だ盛り時分だつたよ。――そこで、自分が醉つて、眠つてしまつてゐると、障子の外から、「先生、先生」と呼ぶ奴があるぢやないか。

『俺はその聲に眼をさましたが、好い鹽梅に……と後で思つたのだが……俺のあひかたの女はそこにゐない。俺はすつかり醉ひつぶれてゐたので、どんな女が俺のところに來たのか、それさへも知らなかつたがね。』

『どうだか』と誰か云つたものがあつた。みんなが笑つた。

『まぜつ返しちやいけないよ、まぜつ返しちや』と大友も笑ひながら、更に言葉を續けて、『そこで俺は起上つて、障子を開けて見ると、園田といふ男――無論その晩一緒に飲んで歩いた書生の一人だが――が立つてゐるんだ。それが眞蒼な顏をして、ぶるぶる顫へながら立つてゐるんだ。

『「どうしたんだ？」と訊くと、

『「先生、飛んでもない事が出來上つてしまつたんですよ」と云つて、園田は頭を掻きながら、「先生、これを何とかして頂けますまいか。何とかして？」さう云つて俺の前につき出したのが、蟇口ぢやないか、つき出しながら、園田の手はぶるぶる顫へてゐるのだ。

『「何だいこれは？」

『「先生、實はかうなんです。先刻僕が自分の部屋に這入ると、寢床が前から敷いてあつたわけなんですがね、その寢床の下の……枕の下が固いので、手をやつて見たら、これが出て來たんですよ。そつと開いて見ると、三十圓這入つてゐるのですよ。それを僕はふところに入れてしまつたんですよ。これだけあれば、明日又木村や村瀨と飲めると、そんた事をふらふらと考へて。……」さう云つて、園田は又頭を掻きながら、「ところが、今その蟇口の持主から電話がかかつて來たと云つて、番頭がやつて來て、部屋中を探したんですが、その時、僕はつひ出しそびれてしまつたんですがれ。……先生、これをどうしたらいいでせう。番頭と女とが電話口に行つた間に、僕は先生に相談に上つたのです。先生、これを何とかして頂けますまいか?」

『「莫迦だな」と俺は叱るやうに云つたが、俺も醉つてゐた。よく考へれば、そんな事はどうでもしようがあつたし、又園田が醉つぱらつた紛れに、それをふところに入れたんだからと云つて、俺から笑ひながら番頭に出してやれば、園田は少々バツが悪くつても、何とかならない事はなかつた筈なんだが、つまり俺も醉つ拂つてゐて、頭がどうかしてゐたわけなんだね。——園田のバツの悪さだけが、誇張して考へられて來たわけなんだよ。なに、構ふものか、俺が隱してやれと云つたやうな氣がして來たんだよ。

『「よし、俺に渡せ」と止せばいいのに、俺もふらふらとさう云つてしまつたのだ。

『「どうもありがたうございます」と云つて園田は自分の部屋にこそこそ歸つて行つた。

『併し何しろ、その蟇口をどうにかしなければならない。——そこで思案に暮れた末に俺は便所に行くふりをして、寢床の澤山積んである暗い部屋の、なげしの裏にそれを投げ込んで、知らん顏をして歸つて來て、それから蒲團の中に深緄り込んでゐたものだよ。——後で考へれば、智慧のない話さ」

『ふん、それからどうしたい?』と誰だかが促した。

自分もそんな話は初めて聞いた。始終大友と往來してゐるのに、つひぞそんな事は聞いた事がない。――もつとも、自分の頭はやはり醉つぱらつてゐるので、大友からその話を未だ聞いた事がないと云ふ事を不審になど思はないで、ほう、そんな事があつたのかなあ、と云つたやうな事をぼんやり考へながら、やはり搔卷をかぶつたまま聞いてゐた。

『ところが、それから大騒動さ。――俺は寝たふりをしてゐたがね。暫く經つてから、女が俺をゆり起すのだよ。

『「今、お連さんが警察につれて行かれましたよ」さう云つて起すんだ。

『「えツ、なに、警察に」と俺は白つぱくれて云ひながらも、ぎよつとした。これは大變なことになつたと思つた。

『「お連さんのお部屋で、お金を忘れたといふお客さんがあるんですよ。それで警察から調べに來て、兎に角、一應署まで同行しろと云つて引つぱつて行かれたんですよ。そのお客さんの思ひ違ひなんでせう。」

『「それは大變だ、兎も角、かうしちやゐられない」と俺は云つて、起き上つたが、扨て、かうしちやゐられないと云つても、どうしたらいいのか。

『他の書生連中も起きて來た。

『「園田が警察に引つぱられたんですつて?……莫迦にしてゐるぢやありませんか。これからみんなで警察に行つて、證明してやりませうよ」

『「さうだ、みんなで警察に行つて、園田がどういふ男だか、證明してやらう」

『みんな昂奮してゐる。昂奮するのに無理はない。しよげ切つてゐるのは俺一人だ。

『が、兎も角、そこは勘定をすまして、外へ出たが、外へ出ると、俺はみんなに今の顛末を打明けたんだ。ふらふらと

飛んでもない事になつてしまつた事を打明けたんだ。

『「弱つたな」

『「弱つたな」

『みんなもすつかり悄氣返つてしまつた。

『「ほんたうに弱つたんだよ。どうしたらいいかな」

『俺も實際弱つてしまつて、何の思案も浮ばなかつた。S――遊廓を出ると、川がある。その川つぷちを警察の方へ歩いて行つた。その警察はその川添ひにあるんだ。その前まで行つて見たが、ドアがしまつてゐて、横の窓から見ると、夜勤らしい巡査が、何だか帳簿を繰つてゐる上に、電燈が光つてゐるのが、外が暗いだけ、へんに冷たく嚴めしく見える。――何しろ、この建物の奥の方に園田が引つぱり込まれてゐるわけなんだ。

『我々――四人だつたがね――は暫くその前に立つてゐたよ。併し堂々と威張つて中に這入つて行くわけに行かない。と云つて、外に立つてゐる姿を、巡査達に見られるのも困りもんだ。そこで警察の前を通つて、川添ひに、何のわけもなしに、半丁ほど歩いて行つた。

『「どうしたらいいでせうね？」うつかりすると、先生だつて隱匿罪だからな」

『「おい、おどかしてくれるなよ」と云ひながらも、ほんたうに俺はおびえてしまつたよ。――實際、隱匿罪には違ひないからな。

『「兎に角、かうなつた上は、園田が何處までも否定し通すんですな。それより外仕方がない」

『「さうだ、それより外仕方がない」

『「あいつ案外氣の弱い奴だからな。喋つてしまはないとは限らないよ」

『「喋られたら堪らない」と俺は云ひもし、腹の底からさう思ひもした。

『「すると、一人が――それは木村と云ふ男だつた――かう云ひ出した。

『今晩だけ、園田が白狀しないで呉れゝば、明日の朝僕は叔父のところに行つて來ます。叔父はへへ署長なんですよ。Ｓ――に行つたといふ事が少々まづいが」と云つて、一寸考へるやうな顏をして、「併しそんな事を云つてゐられる場合ぢやありませんからな。叱言を云はれるには違ひないけれど、何とか話をつけてくれるでせう」

『「君、それはほんたうかい？」と自分は思はず叫んだ。

『「ほんたうですよ。醉つた紛れだと云へば、もと〳〵大した事件ぢやないんですから、何とかなりますよ。――その代り、先生だつて說諭ぐらゐ食ひますがね」

『「やつぱり說諭は食ふかな。弱つたな、併しさうなつたら、その位の事は仕方がない」

『「けれども、それまでに園田が白狀してしまつて、檢事局にでも送られるといふやうな事になれば、なか〳〵面倒になりますよ。これはどうしても一つ園田に白狀させない事だな」

『「と云つて、君、園田はあん中にゐるんだし、我々は外にゐるんだし、困つたものだね」

『何を措いても、園田に白狀させないやうにしなければならない、と自分達はそればかりに腐心し出した。だ、今も云つたとほり、我々は往來、園田は警察署の中だ。

『「おや、こゝに舟があるぞ」と一人が、川の中を見て云ひ出した。見ると、なるほど、川ぷちに石の段々がついてゐて、その段々の下に小さい舟が一艘つないである。

『「先生、これに乘りませうよ」
『「乘つてどうするんだい?」
『「乘つて、警察の裏側に行つて、何とか一つ園田に合圖しませうよ。――僕の考では、留置場は、川に向つた方にあると思ふんですよ。だから、何とか合圖のしようもあるだらうと思ふんですがね」
『アテになる話でもないが、併し愚圖々々そこに佇んでもゐられなかつたので、我々はそこでその舟に乘り込んだもんだ。』
『しやれてゐるね』と誰だかが云つた。
『時は夏だし、川に舟を浮べると云やあ、今から考へると、しやれてもゐるし、面白くもあるが、その時はなかなかしやれてゐるどころの騷ぎぢやなかつたよ。はははは』と大友は大聲に笑つて、言葉をつづけた。『それから警察の裏側まで、漕いで行つたものだよ。――川に向つた方に三つ程窓が開いてゐる。どうも窓の開いてゐるところは、留置場ぢやないらしい。窓の開いてゐない部分が留置場らしい。――いづれにしても、何と合圖をしたらいいだらう。
『我々の舟は警察の下を一二回往復した。好い思案も浮ばない。――兎に角、我々がそこに來てゐるといふ事だけを、園田に知らせたい。我々が來てゐるといふ事を知つただけで、園田は氣が強くなるに違ひない。
『「歌を歌ひませうか。美校の歌を」と木村が云つた、
『「うまくやれよ。窓の開いてないところが留置場らしいから、あの下に行つて、小聲で歌ふんだよ。――窓の近くや巡査に聞えるから」
『そこで舟は、窓の開いてない部分の、窓からなるたけ離れた部分の下に近づいて行つた。そして木村が、小聲でか

う歌ひ出したものだ。

　チヤカホイどころか今日此頃は、
　色の加減で苦勞する。チヤカホイ

『うんともすんとも云はない。無論云ふ筈がない。だが、聞えてゐるんだか、聞えてゐないんだか、これがたよりない。

　何だこの野郎、柳の毛蟲、
　拂ひ落せば、又のぼる、チヤカホイ

『二度目には、少々大膽になると同時に、心に餘裕も生じて來た。チヤカホイと云ふところを、みんなで思はず合唱したので、聲が大きくなつたのに、ぎよつとして首をすくめた。が、窓から巡査の顔も擡出しはしなかつたので、安心すると同時に、顔を見合はせて、クスリと笑ひ合つた。

『そこで一つ明日になると、大丈夫迎ひに行くから、それまで自狀するな、どうしても自狀するな、といふ事を傳へなければならない。――それも木村が即吟でやつた。

　キイプサイレンス、キイプサイレンス
　あすは迎の舟が行く、チヤカホイ

『眞面目な顔をして歌つてゐる木村の顔を見ると、又みんな口を抑へて、ふき出すのをこらへた。――半分どころか、もう七八分は面白くなつて來た。

『「それぢや一つ引上げよう。もう大概解つたらう」

「「引上げる前に、もう一つ、みんなで合唱してやりませうよ」

『よからうと云ふ事になつて、

キイプサイレンス、キプサイレンス、

あすは迎の舟が行く、チヤカホイ

『と云ふより早く、どんどん逃げ出したんだ。すう〃すう、と、これで俺は學生時分には、ボートの選手だつたんだから ね。すうすうと水の上を滑るやうにして逃げ出したんだ。そして半町ほど來て振返つて見ても、別段巡査の姿が窓から出もしないので、安心したよ。と同時に、園田に聞えたか聞えないか〃心もとない氣がしたがね。——もつとも後で聞くと、實際窓のない部分が留置場だつた事は留置場だつたんだが、園田はその時丁度他の部屋で調べられてゐたので、歌は聞えなかつたさうだ。あつははははは』

『面白い、面白い。歌をうたふところが面白い』と誰だかが云つた。

『やつぱり畫家だな。畫家ぢやなけれや出來ない藝當だな。——あすは迎の舟が來る、チヤカホイか』

みんな一齊に笑ひ出した。聞いてゐた女中達も笑ひ出した。搔卷の下で自分も笑ひ出した。

『これは面白い話だ』と自分も思つた。

『それで結局どうしたんだい?』と誰だかが云つた。

『いや、割合に簡單に濟んだよ。翌朝木村が叔父さんのところに行つて、その話をしたら〃大目玉を食つたが〃併し直ぐうまく示談になるやうにしてくれたよ。——無論俺もお目玉を食つたさ。併し警察なんていふものは〃商賣は商賣で、その道にかけては拔目のないもので、園田の身體を檢査した時、直ぐこれは園田の仲間——つまり俺達だ——が隠

してゐると睨んださうだからね。——併しあぶなく罪人になるところだつたよ。ほんの氣紛れの出來心からだからね。木村の叔父さんがゐなければ、實際どんな事になつたかも知れないよ。さうでなければ、俺も立派な罪人だからな。新聞には名を出されるし、あぶなかつたよ』と急にしんみりした調子になつて『ほんたうに盜みなんていふ事は、ふらふらといつ誰がやるか解つたものぢやない。岡田といふ男だつて、ほんの酒の上の氣紛れなんだからね。平生は眞面目な、無論暢氣な點はある男だが、併し若し新聞にでも出たら、あの男がと知つてゐる者は吃驚するに違ひないやうな男なんだからね』

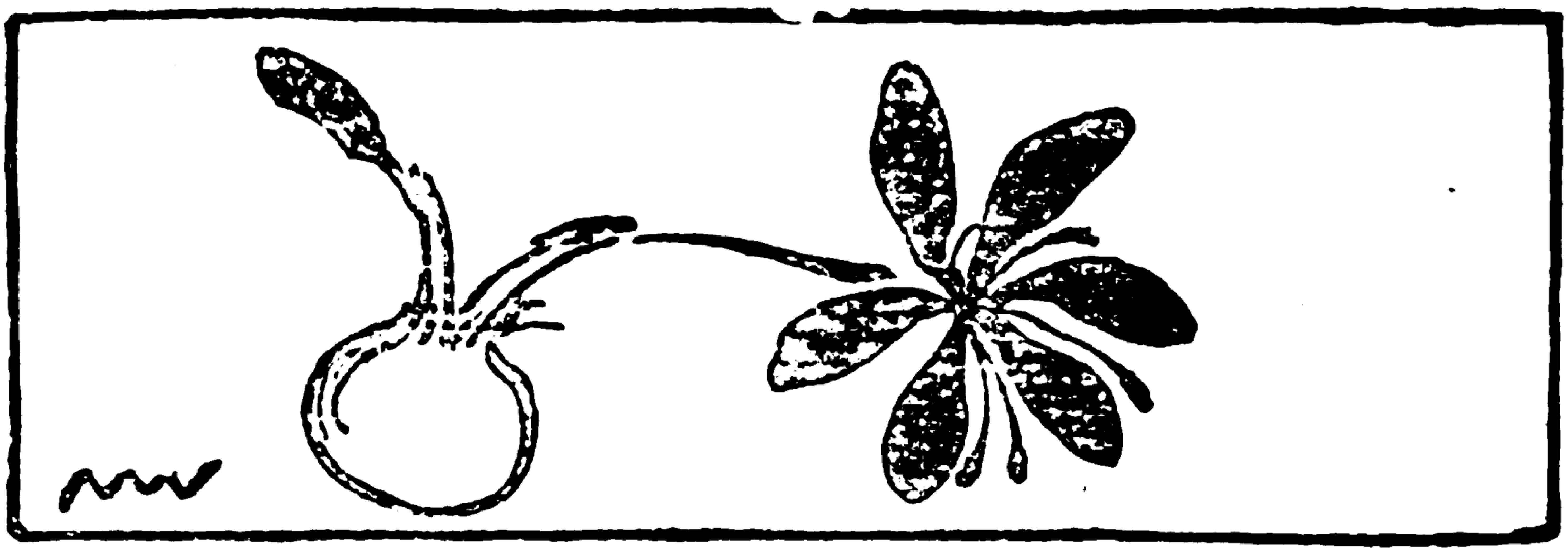
大友はさう云つて、かすかに溜息したらしかつた。併し他の連中はその話が面白いと云ふので、『キイプサイレンス、チャコホイ』『キイプサイレンス、チャコホイ』と今の歌を繰返したり、大聲に笑つたりしてゐるので、大友の溜息には氣がつかないらしかつた。『キイプサイレンス——畫家らしい思ひつきの英語だな』と或大學の助教授をしてゐる男は、愉快さうにそんな事を云つた。さういふ自分だつて、その話の面白さに、搔卷の下でくつくつ笑つて、チャカホイ節を歌ひながら、舟で逃げて來る光景を頭に描いてゐたのだが、ふと大友が溜息をしたらしい事に氣がつくと、自分の醉つぱらつた頭の中で、急にひやとしたものがあつた。さう云へば、あの暢氣な調子で語られてゐた大友の話の結末が、暢氣な話全體から云へば、少し沈み過ぎ、しんみりし過ぎてゐた。大友は語つてしまつてへんに憂欝になつて來たに違ひない。恐らく話の性質から、七年前のあの出來事——細君の萬引事件で、警察に呼び出された時の事を思ひ出したに違ひない。『盜みなんていふ事は、ふらふらといつ誰がやるか解つたものぢやない』と云ふ事を、ひそかに論じ立てたところにも、彼のさうした心づかひが思ひやられる。——だが、それにしても、今までこの話をどうして自分に向つて語らなかつたらう、と少しはつきりして來た自分の頭は、この時になつて、急にそれを前へ出した。始終往來して、どんな事でも語り合つてゐる自分に、どうしてこの無邪氣な失錯談を語らなかつたらう。

さう思ふと、自分は彼の氣持がよく解る氣がした。その話は、彼と自分との間に、七年前のあの出來事を直ぐ思ひ出させる種となる。七年前のあの出來事、自分と彼とはその後、一度もそれに觸れ合つたことはなかつたのだ。それは彼の最も恐れてゐる問題であるし、自分としても亦、彼の氣持に對する同情から、觸れることを恐れてゐる問題である。――それを思ひ出す種となるといふ恐れから、この畫家らしい失策談を、彼が自分に語らなかつたに違ひない。それだから、自分はさういふ點で、彼に取つては一つの脅迫に違ひないのかも知れない。――

ところが、大友は今日は酒を飲んだ上で、元氣にまかせて、その畫家らしい失策談をやり出してしまつた。やり出してしまつて、彼は昔を思ひ出して、憂鬱になつてしまつたに違ひない。自分が片隅に搔卷をかぶつて寢てゐるといふ事は、彼に取つては、せめてもの救ひかも知れない。――自分は寢ついてゐたのを幸にして、その話をまるで聞いてゐなかつたと云ふやうに、寢通してゐたといふふりをしてゐなければならなくなつた。

自分の頭はまたこんな風にも考へた。――或は大友のあの話全體が、細君に對する辯解ではないのかと。人間が惱みをするといふ動機が、どんなに何でもない、氣輕なものであるかといふ事を、彼が辯解するために作つた作り話ではないのかと。――自分と彼との間ではその話は出ないし、呑氣な彼は如何にも幸福な家庭の主人らしくしてゐるが、あの七年前の出來事が、彼の心の影になつて、今も尚ずつと彼を苦しめ通してゐるのではあるまいか。そのために、こんな場合に、その彼の氣持が、あんな風な創作となつて語られたのではあるまいか。

いや、これは餘りに小說家らしい想像に過ぎるに違ひない。――いづれにしても、自分は部屋の片隅に、搔卷をかぶつて、彼の話を聞かなかつた程醉ひつぶれてゐたといふ風を、裝はなければならないといふぎこちなさを心の底に感じてゐた。キイプサイレンス――その言葉を今は自分に向つて云はなければならないやうな氣が自分はしてゐた。（十二年十一月）



インテリゲンチア

長谷川如是閑

『お嬢さん、だから駄目なのよ。さん〲踏みつけられながら、恩に被せられて、いゝ加減馬鹿〱しいんぢやありやしない。こんな家、さつさつと出てッてやるがいゝんだ。』おさくは持前の肝癪聲を一層尖らせて、ふき子を怒鳴りつけた。

『そんな大きな聲しちや聽えるぢやないの。』

さう云ひながら不安らしく四方を見廻して、慄へないばかりにおづ〱してゐるお嬢さんなる女を見てゐると、おさくは、女全體が馬鹿にされてゐるやうで無性に腹が立つた。

『聽えたつてかまふもんか。一體あなたが駄目なんだわ。何をそんなにびく〱してるの？』

『でも私、ともかくも世話になつてゐるんぢやないの。』

ふき子は、險どい眼がグル〱廻轉してゐるやうなおさくの顏を、恐ろしい物を

見るやうにそつと見たが、その顏に抑へつけられたやうに俯向いてしまつた。

『だからあんたは意氣地なしだつていふのよ。いつぞやあなた何とおつしやた？「もう私もお嬢さんぢやない、おかんなんかでゐちや生きてかれない」て仰つしやつたぢやないの。口ばつかりだからしやうがありやしない。何です、そのビク〳〵しやうは。しつかりおしなさいよ。全くの一人ぼつちになつてしまつたてのに、そんな氣の弱いことでどうするの。もうあなたのことなんか考へてゐる人、此の世界に一人だつてありやしないのよ。自分一人を賴りにしないで、誰れをあてにする氣なんですよ。死んだお父さんやお母さんにはもう生きて返つちや來ませんよ。……あれ又泣くんだよ、此人は。』

おさくが、このお嬢さんと向ひ合つてゐる時のむしやくしや腹は、お嬢さんを怒鳴りつける外に癒やしやうはなかつた。がお嬢さんがメソ〳〵泣き出すのを見ると、いくら怒鳴つてもちつとも腹が癒へないで、一層むしやくしやするので、肝癪のやり場がなかつた。

『チヨツ』おさくは忌々し相に舌打して『いやになつちやうね、此人は……なんてへと泣き出すんだもの、そんなにメソ〳〵泣くから馬鹿にされるんですよ。戯談ぢやない、泣ツ面見せると何うかなつたのは昔の事ですよ。今日びでは、泣ツ面なんか見せた日にや、なほのこと踏みつけられてしまひますよ。しつかりなさいな。』

むきになつて怒鳴りつければ怒鳴りつけるほど、段々小さくいぢけて行くふき子をみると、おさくも、どうしていゝかわからなかつた。人間がこんなにもグツ〳〵してゐられるものかと思ふと、こつちも心細くなつてしまふ。いゝ加減にして貰はないと遣りきれない。

『よこさんす。お嬢さんがそんなにぐづ〳〵してゐるなら、私、こゝの繁吉に談判して、すぐとお嬢さんを私のところに

連れて行きます。こんな家にゐなくつたつて、日本中どこへ行つたつて人間の生きて行かれない所てありませんよう。ちつともく／＼なんかすることありやしない。』

ふき子は、おさくにそんな風に怒鳴られると、無性に心細くなつて、たつた一人頼りにしてゐるおさくまで、自分を置き去りにして、永久に他人になつてしまうのぢやないかと思はれて、深い所に沈んで行くやうに、気が遠くなつて涙さへ止つてしまふ程であつた。

ふき子は震災で兩親も縁者も無くして、おさくのいふ通り、全くの一人ぼつちになつた不幸な娘であつた。父は古い辯護士だつたが　辯護士といふものは貧乏で玄關を張るものといふ因襲的の解釋に、余りによく一致してゐた爲に、突然の災害が彼れ自身と彼れの妻とを奪ひ去つた後には、此の纖細い十八の娘一人と可なりの借金との外、奇麗さつぱりと、何一つ殘されてゐなかつた。彼れの築地の邸宅の、玄關や、たとへ滅多に自動車の入つてゐたことはないにしろ大業なガレーヂなどを見せられてゐたものには何んぼ何でも、それが燒かれしまふと、たゞ娘一人と借金とが殘る勘定になつてゐるのだとは思はれなかつた。何しろ自動車商會にとつても、辯護士風情で五六年の間に、自動車を三臺も買ふといふ珍しい得意だつた。尤もその自動車を半年と持ち堪へたことは一度もなかつた。最後のを賣りつける時には、自働車屋ではそれをセコンドハンドで差し向ける得意先を拵へてゐた位であつた。四十位まで獨身だつたが、それまでの彼れの事務所は、辯護士の事務所だか、醫者屋の事務所だかわからないと、近所で陰口をきく位、景氣のいゝ有様で、從つて事務所が繁昌すればする程、彼れは貧乏した。四十過ぎて、娘のやうな妻君を貰つたが、それも素人ではないといふ噂だつた。けれども、間もなく産れたふき子に、今でもこの母を可なり教養のある婦人だと信じてゐる位で、無論、その身分などは知らなかつた。のみならず、その實家さへも何處にあるのか知らなかつた。母は決して[illegible]

所へは出なかつたけれども、ふき子と姉妹としか見へないやうな派手な風をして、家にゐるのに、夜會にでも行くな洋裝をしてピアノなんぞを彈いてゐることさへあつた。父は友人などに、母のことを『家のクヰンだ』といつてゐが、友達はそれを、口眞似して『家の喰へんぼ』などゝ冷やかした。ふき子は、一から十までその母そつくりに育て上げられたのであつた。母が社交界に出ない理由の一は、上流の婦人連が、文藝、音樂、新しい劇等の趣味に乏しくて、てんで話相手にもならないといふことであつた。その點だけは、ふき子は母の說に反對で、社交界の婦人達にも、母よりはそんな方面のことがよくわかつてゐる人があるやうに思はれた。ふき子も、時々小說や劇について母と議論するが、母はちつとも敗けはしないけれども、よくわかつてゐないことがあるやうに思はれた。何處の學校の同窓會にも關係のない母は、學校教育なんかは碌にうけなかつたらしいのに、何うしてそんなに學問したのか、ふき子には不思議だつた。

そんな家庭に、つひ地震の年の春に入つて來たのがおさくであつた。女中に對しても可なり文化的の教養を要求する母は、とてもおさくのやうな、オートミールの發音も出來ない、さうして恐ろしく反抗的の風采態度をして、忌々しい相に敬語を使ふ女なんどが氣に入る筈はなかつた。隨分女中には困つてゐても、こんな風の女は半日でも家に置かないだらうと思はれる母も、おさくの手剛わには、たゞ、出て行けといふだけのことが、一番言ひ出しにくいらしかつた。何しろ、徳川時代の魚がしの阿兄の頭に髷を載せたやうな恰好、態度、物腰で、やゝもすると、當の辯護士が大に手控へてゐるクヰンを叱り飛ばしたりするので、一寸手がつけられなかつた。自分より僅か二つ三しか年の違はないふき子をまるで赤坊同様に扱つて、てんで口も利かせなかつた。恐ろしい見識とそれに伴ふ風采とで、家に出入する青年や老人やを掌に飜弄してゐるつもりのふき子も、おさくの鼻の穴からフンと吹き出す空氣には、一たまりもなく吹き飛ばされてしまうのであつた。『活動寫眞の西洋のお姫様なんか駄目！あつちへ行つてらつしやい。』おさくの仕業に何か干渉でもす

ると、さういつてふき子に二の句を次がせなかつた。ふき子も、『生噛た野蛮人め。』と思ふだけで、何うにもならなかつた。比較的老弁護士を尊敬してゐたが、これら老よりは可愛相だ位の慈悲心からで、言ふことやなす事は悉く間拔けてゐると定めてゐるらしかつた。だからあんな女優のやうな妻君に舐められてゐるのだと、仲働きの中婆さんが主人の弁護をするたびにきめつけた。旦那さんだつて、何處の土ツ方かと思はれるやうで、それ者の果てとは誰れが見ても見へないやうになんなさるにはどれほど内々で勉强もなされたか知れやしないんだよ。』など、仲働きはよくおさくに、もう少し主人達を尊敬するやうに忠告したが、おさくは此の仲働きが地震で行衛不明になつてしまうまで、その忠告の意味がわからずしまひだつた。

『クインて何だらうね、おばさん。』そんなことをいつて、おさくは仲働きの婆さんに尋ねた時に、婆さん、眞面目臭つて『クヰンてのは西洋ガルタの何たらで、お花でいへば桐に鳳凰見たいなもんだらいふぢやないの』と教へたので、おさくは『成る程うちのレコ相應の綽名だね。』といつた。

所が震災で借金とふき子だけが殘つたが、借金はクヰンのおかげ、ふき子は全くおさくのお蔭で殘つたのであつた。よもやと思つてゐた火の手が、急に八方から襲ひかゝつて來たので、海嘯のやうな人波の渦を、辯護士はクヰンを、おさくはふき子を引張つて一緒に逃げ惑つたが、六十近くの肥りかへつた辯護士は、血氣盛なおさくに續くことが出來ないで、度々落伍するのを、おさくは阿修羅のやうになつて、突き飛ばしたり、引ずり廻したりしたが、つひに人波に引剝がされて、辯護士夫妻は、おさくの手を離れると同時に、永久に見失はれてしまつた。おさくは、辯護士の生前の友人の一人が市川にゐることをふき子にきいて、三日目にそこに辿りついて、ふき子をそこに預けてから、月島で同じ災難に逢つた自分の兄夫婦の生死も抛つて置いて、毎日〳〵燒跡を巡ぐつて主人夫婦の行衛を尋ねて歩るいた。さうして漸く、

れで歸つて來ると、例の鮮人騷ぎで、おさくは女だてらに、毎晩長い鳶口をかついで、青年に混つて夜警に廻る始末であつた。その頃のおさくは、ふき子には、恐ろしいやうな頼もしいやうな、男のやうな女のやうな、人間離れのした一種の怪物に見へた。さうして此の女（？）さへ自分の傍にゐてくれゝば、地震が來やうが火事が來やうが鮮人が來やうが、恐いことはないと思つた。

今ふき子が世話になつてゐるといふのは、即ちその父の友人の山西といふ老人の家であつた。おさくは主人夫婦が絶望となつてからは、今度は自分の兄夫婦を探がし歩いた。兄も毎日〳〵おさくの行衛を探がし歩いてゐたのだが、兩方が探しあてたのは、二ケ月近くも後のことであつた。おさくの方も親類縁者も皆燒けて、兄夫婦はしばらく龜井戸天神の茶店に轉ろがつてゐたが、敗けじ魂の兄は、バラツクに入ることを嫌つて、もと居た燒け跡にブリツキ小屋を作つて、前からの一ぜん飯屋を野天で開業した。それが當つて、新しいバラツクで景氣のいゝ正月を向へることが出來た。

その間も、おさくは始終ふき子を訪ねて何かと世話をしてゐた。着のみ着のまゝのふき子は、日常の小使も、何處から貰うあてもなかつた。厄介になつてゐる家は、父とは特別の親しい間柄といふではなく、たゞ昔父が先輩の辯護士事務所にゐた時一緒にそこの事務員をしてゐたことがあるといふだけで、その後は餘り繁々出入もしてゐなかつたのであつた。何處かの會社に出てゐたのだが、震災後はそれもやめて、少しばかりの家作を持つて、傍ら小金でも貸してゐるらしかつた。何處にもあつた事だが、始めのうちはふき子に同情していろ〳〵親切にしてくれた。その年の秋冬の仕度なども、妻君が自分の古いものを直してくれたりなんかしたが、その妻君から、段々疎々しいそぶりを見せ出して、主人もそれに準じていゝ顏を見せないやうになつた。その癖、ふき子が、自分の身の始末を相談した時には、こゝの夫婦は、丁度家にも女中が欲しいと思つてゐた際で、友人の令孃を女中代りといつては誠に相濟まない譯だが、何かと用を

足して下されば添けないといふやうなことをいつたので、ふき子も其の氣になつて、全く忘れたい次第に心つらい想をして來たのであつた。さうして月末には、三圓くれたり五圓くれたり、それも次第に延びて次ぎの月の中頃になり、末になり、何もわからないふき子にも、一月分がぬけてしまつたことを、自分のちよいとした買物にさへ不自由を感ずるところから、自然氣がつくやうになつた。それはまたいゝとして、いよ／＼また夏が來て、ふき子はその仕度にも思案がつきて、顔を朱くして妻君にそれをいふと、妻君は仰々しく、自分の氣がつかなかつたわびをいつて、例によつて自分の古るをなほしてくれたはいゝが、その次ぎの月末には、一文も渡されないので、ふき子は、幽みがさを買うことも出來なくなつて、始めてそれをおさくに訴へたのであつた。

　この女中の貰い時節に、半年あまりも、無給同樣で友人の娘をコキ使ひながら、人を世話してゐるやうな大きな顔を、いまゝでおさくに見せてゐたのだと知つて、おさくは武者振ひをして腹を立てたのであつた。

『一體お孃さんあんたは何て人だらう。そんな目に逢ひながら、半歳もそれを人に隱してゐるなんて、あんまりだわ。人を何だと思つてゐるの。そんな泥棒見たい奴等を「親切だ／＼」なんて出目も休み／＼仰つしやい。私はあんたがどんな思ひをしてゐるかと思つて、かうして遠いとこをテク／＼やつて來るのぢやありませんか。それを木偶の坊扱ひにしてよくも今までだまくらかしてゐたのね。

　泥棒なんか相手にしない、お孃さんが相手だ、とでもいふやうに、おさくはムキになつてふき子に喰つてかゝるのであつた。ふき子がそれを嬉しいと思ふには、余りにおさくの險幕が恐ろしかつた。で、ふき子はまるで自分が主人の娘をこき使つた當人でもあるやうに、いろ／＼とおさくをなだめるのだが、それは益々おさくの憤怒に油を注ぐに過ぎなかつた。さうしてとう／＼『こんな家、さつさと出てツてやるがいゝんだ』と怒鳴り出したのであつた。

おさくは震災前から、一旦いゝ出したことは少しも後へ引かなかつた。辯護士やクヰンが立ち塞つても、[illegible]押し破るよりも安々と通りぬけてしまつた。今ふき子を此家から連れて行かうと云ひ出したら、その前に立塞が[illegible]の煙もなかつた。

ふき子は何と云つても、全く頼りのない身を、今日まで家に置いてくれて、その上少しでも小使錢までくれてゐた人達と、今更ら喧嘩分れするやうな大それた眞似は出來ないと思つた。あの當時のことを思へば、どんな慘めな境遇に陷てゐても仕方ないのに、とにかくも雨露にも曝らされず、三度の食にも事缺かなかつたのは、こゝの主人夫婦の情けだと思つて、偶にはいやな顏位見せられても、そんな事で喧嘩する氣は愚か、不平らしい心持になるさへよくないことだと自分を抑へてゐた。無給の女中を使ふ氣だなんていふけれども、そんなら誰でもこんな場合に、困つた女子供を引取つてゐさうなものだが、それをしたがる人の少いところを見れば、やつぱりこれも親切な行爲として尊敬してゐるがいゝ。どうしても善意に解釋されないやうな取扱を先方がしたのなら、それは何と思つてもよからうが、女がたとへ古いものでも、命か[illegible]一代目にしてゐる着物や帶を、殊にまさかに女中達が着るやうなものではない軟か物を、お着なさいといつて出してくるのは、經濟上の話を別として、惡意で出來ることではない。主人や妻君が風儀のわるい女事務員などに出ても行末碌なことはない、といつてくれるのも、萬更ら利己的の理由ではなく、こつちの爲めも考へてくれてゐるのだと思へなくはない。おさくのやうに、何もかも向ふの惡意のやうに思ふのは、下賤の者のひがみで、無理もないが、誰れも彼れもが互ひ〳〵をそんな風に考へたら、世の中はまるで喧嘩ばかりになる。右の頬を打たれて左の頬を出さないまでも、撫でられた頬を打たれたのだと强いて考へる必要はない。ふき子には、おさくが口汚たなく罵れば罵るほどに反對にこゝの主人夫婦を庇ふ氣になつた。

『お前のやうに云つたら、何處にいつてもいゝ心持でゐられやしない。人間といふのは、自分の心で先方の心を推しはかるものだから、お前のやうにいふと、結局お前の心持が、そんな風に溫か味がないといふことを白狀してゐるやうなものなのだわ。私だつて、お前の考へてゐることは考へられないことはないけれど、自分の心持がさうでないと、たとへ先方の心持がさうであつても、そんな風に考へられやしないのよ。赤子のやうに何も知らない無邪氣な心でゐると、强盜に遭つても平氣で笑ひ顏を見せられるから强盜も手を出せないのぢやないの。私たちはもういろ〳〵汚れた心持になつてゐるから、とても赤坊のやうに、誰れにでも美しい笑顏を見せることは出來ないけれども、心懸けだけでは、さうありたいと思つてゐるわ。お前のやうに、人を見たら泥棒と思ふなんて、自分の心持が泥棒に似てゐるからだわ。でなければ、そんな泥棒のやうな心持が、お前にわかる筈がありやしない。ほんとうにお前は、私のためといふと命がけでつとめてくれて、私こんな嬉しいことはないんだけれども、お前のそのひがんだ心持だけは、ずいぶん情ないと思ふわ。竹を割つたやうなお前の氣象で、もう少こし無邪氣に考へられないの？』

『さあ、もうこんな家出て行きませう。』

おさくは、ふき子のしやべるのを默つて聞いてゐたかと思ふと、だしぬけにそんな見當違ひのことをいふのであつた。

ふき子は又々泣き出したくなつた。

『何んですよ。お孃さん、もうベソかいて。私いやー私達は忙しい身體で、心持だの氣分だのつてのんきなこと考へてゐる暇はないのよ。行くと定まつたらすぐ出掛けなくつちや。私が愚にもつかないおしやべりなんか始めたんで、お孃さんまでつり込れて、七日間目列へ出すんだよ、私もよすから、あんたもよして頂戴。さあ、早く仕度して、日の暮れないうち家につかないと見きにがなられツちやわ。こんなに西日の當る部屋で凝つとしてゐたんで、これ、汗びつしより

になつしやつた。お嬢さんのお相手はほんとうに容易ぢやないよ。』

『さくツ!』ふき子は、余りに専断的なおさくの態度に腹に据へかねて叫んだ。

『おやツ、久しぶりで震災前の聲が出たわね。嬉しい!お嬢さんも、あれ以來漸く人心地がついたのね。もうしめたもんだ。さあ早く御仕度〳〵。』

『知らないツ。』ふき子は、勢込んでさういつたが、腹の裡は、情けない、頼りない、心細い氣持に占領されて、力の強いおさくに捻ぢ倒されてゐるやうに感じた。無性に口惜しいがそれを刎ね返す力があるやうに自分ながら思はれなかつた。でも、意地にも、おさくに引ずられて行く氣はしなかつた。

『私こゝにゐるわ。お前一人でお歸り。私には何うしても、そんな風にして、此家を出ちや行かれない。この人達が何か私に悪いことをしたのか、私にはちつともわからないんだもの。お前喧嘩するんなら勝手におし。私はお前の味方はしないよ。私には私の考があるからね。人を何だと思つてゐるんだい。私、お前の奴隷ぢやないんだよ。お前のおかげで助かつたにや違ひないから、それは充分恩に被るけれど、何もかもお前のいふなりになる必要なんかありやしない。恩返しは何れするけれども、私の自由を束縛するのはよして頂戴。それが私のお前に對する恩返しになる譯でもないんだからね。』

『ヘン、お嬢様おむづかりかい。』おさくは外方を向いてそんなことをいつた。『こゝの家がそんなにいゝんなら、一生涯おゐでない。唯だこゝの人達は喜ぶでせう。さうして丁度こゝの夫婦には子供がないから、あの禿頭の養女になつて、お婿さんでも取つて貰つて、素寒貧のお嬢さんが、家作持ちにおなんなされば、お仕合せでござりますだ。』

『何をいふの、さくは。人が零落ぶれたと思つて……』ふき子は、次ぎをいへないで咽び泣いてしまつた。

『私なら石にかじりついたつてこんな家に居るもんか。お嬢様のお小使くらゐの給料の奴どもにどなられ通しだわ。生きるか死ぬかつて人間の一人や半分助けたつて、こんなに大きな顔をすることはありやしない。助けなかつたら「人殺し」ぢやないか。』

おさくはふき子の泣いてゐるのを、何處を風が吹くといふやうに知らん顔で、そんなことを喋り散らし、歸つて行つた。歸りがけに、ふき子は、おさくがあんなにムカ腹を立てたのも、つまりは私のことを思つてくれてゐるのだと思ふと、此女とそんな風に不機嫌で別れるのが辛らくなつた。で優さしくさう云つた。

「さく、ご生だから機嫌を直して歸つておくれ、ね。私、お前の心持はだ分よくわかつてゐるんだから。ほんとうに有りがたいと思つてゐるのだわ……』

『よして頂戴よ。そんな擽ぐつたいことといふの。』おさくは噴んではき出すやうに『お嬢さんはそんな風に、こゝの若や禿頭にもいゝ加減のことをいつてゐるんでせう。だから馬鹿にされるんだわ。腹にあることは構はずぐん／＼お仰いよ。何も遠慮してゐることはありやしない。』

『でも私、お前にばかりは、遠慮なんかしてゐやしないんだよ。』

『嘘ばつかり！』おさくはせゝら笑つて『そんなら私なんか、怒つて歸らうと泣いて歸らうと構つたことないぢやありませんか。御世辭なんかいつていたゞかなくつてもいゝ事よ。』

『でもお互にちつとも惡く思つてゐない同士が、怒り合つたりなんかして、つまらないぢやないの。私は、お前きり、力になつて貰う人がゐないんだもの、お前と喧嘩するなんて、私ほんとうにいやだわ。後生だから機嫌を直してくれない？』ふき子は泣き顔でそれを訴へた。

『いゝぢやありませんか。親子同士だつて始終ニコ〳〵ばかりしちやゐられやしません。腹が立つのに笑つて見せたて、それこそつまらないぢやないの。私、今日は忌々しくつて、何うしたつていゝ機嫌なんかになれないんですよ。うつちやつといて頂戴、これが私の氣象なんですから。死んだら癒るでせう。』

そんなことをポン〳〵いひながらおさくは外に出て『人面白ろくもない。』と獨言をいつて門を出てしまつた。

おさくは、むしやくしや腹のやり所がないので、あの禿頭何うしてくれやう、正面からあのツル〳〵した頭をグワンと喰はしたら、せい〳〵するだらうなどゝ考へながら、ノソ〳〵往來を歩いた。

『おさくさん。もう歸るのか。』

云はれて眞ともを見ると、その禿頭の山西が立つてゐた。

『エヽ。』無愛相にさういつて、立ち止りもせず摺れ違はうとすると、

『今日は家内が少し工合がわるくていけなかつたんだが、起きて居たかね。』と山西は立止つて餘計なことをいつた。

『何うでしたか、私、今日はお目にかゝりませんでした。』

『さうだつたかい。まあ遊んでおいでな。大變忙し相に。何か用事でも出來たのかい。』

うるさい爺だと思ふと、いらないことも云ひたくなつた。

『えゝ今日は、私、お孃さんを私のところへお連れ申さうと思つたんですけれど、お孃さんは何うしてもお宅の方がいゝといつて、おきゝにならないから、それでは御勝手になさいつて、私だけ歸りますの。何うぞお孃さんを末長くよろしくお願ひ申します。』

『何だい。急に改まつて。』山西老人は面喰つて、ポカンとしておさくの姿を眺めたが、おさくは、いやに丁寧な會釋をしたまゝ行き過ぎてしまつた。

『相變らず變挺な女だなあ。』山西は別段氣にもとめないやうに、さう呟いて帽子をとつて禿頭を一寸日に曝らした。

その晩、山西は、ふき子を自分の座敷に呼んで、いやに改つた調子で云ひ出した。

『何、別に改つたお話でもないが……女の云ふことなんぞを取り上げてかれこれいふやうで、お耻しい次第だが、……今日おさくさんが何か私共の事を大層罵倒してゐたといふぢやないか。實は家内が縫ながら一寸耳に入つたので、すまないことだが立ち聽きをしたといふんでね、餘計なことをするつてわしは小言をいつたのだが、然し聞けば聞き腹で、多少氣になるんでおきゝをする次第なんだが……』

さういつて山西はふき子の返事を待つやうに默つてしまつた。ふき子は、山西に呼ばれた時から、不安な豫感がしてゐたが、かう打ちつけに問ひ詰められると、飛んでもないことになつてしまつたやうで、穴へでも入りたかつた。でも默つてゐると益變な破目になり相なので、

『ほんとうに私も困つたんですの、私がこちらのご厄介になつて、おかげで何不自由もなしに日を送つてゐるのに、何かこちらでそれを恩被せがましく被つしやりでもしたやうに、いつもの調子でポン〳〵怒つて手がつけられないぢやありませんか。おばさんも定めしお腹が立つたでせうけど、私がおわびしますから、何うぞ、氣にかけて下さらないやうに。おぢさんからもよくおつしやつていたゞきたいんですの。ほんとうに私何うしやうと思ひましたわ。』ふき子は顔を燃へ上り相に赤くして、吶り〳〵そんなことをいふのであつた。

『いんや、おさくさんのいつた事なんぞ決して私共が氣にかけてゐる譯でもなんでもないんですが……』山西は暫らく

默つて、これも吶りがちに『實は、おさくさんが、何うしてだしぬけにそんなこと云ひ出したんだらうつて、心中からきいたので、そのいきさつがよくわからんで、大に氣に病んでゐる譯なんです。あれも元來が少しヒステリ方だから、そんなことを一々取り上げるんぢやないんですが、わしとしても、およばずながらあなたのお世話をしてゐて、何かお互の間に蟠りのやうなものがあつては、頗る面白くないと思うんで、お互にざつくばらんに打ち明けることにしたいと考へたまでなんです。いくらおさくさんが、あんな氣象でも、つけもなくそんなことをいひ出す筈はないやうにも思はれるんで、そこが家内の氣にしてゐる點なんです。』

さういつたが、山西はふき子がひどく心配するのを氣支ふやうに、少し調子をかへて、

『いやひどく氣にしちやいけませんよ。高がヒステリーの話なんだから。わし共は決して、そんな些細なことで、折角今日までお互に美しくして來たこの家の内を煩たくする氣はちつともないんです。まあ、打ち明けていふと、わし共も、めい／＼忙しい身體で、自分にかまけて、つひあなたのことについても行屆かない點がありがちだと思ふんです。あなたとしては、それは御遠慮もあらうけれども、わし共の方になつて見ると、遠慮されてゐると實際困るんで、長い間のことだから、始終にはぬけた所も出來やうといふものなんで、それをあなたの方で遠慮してゐた日には、とても辛棒が出來ないで時が來る譯で、お互にまづい思ひしなければならないてもんでせう。ですからまあ、……』

山西は言ひ難く相に廻りくどいことを云つてゐるが、要するに、その意味は、ふき子が何か山西夫婦の悪口をおさくにいつたのでおさくはあんなに罵倒したんだらう、その悪口は何だつたか聽かせてくれ、といふだけのことらしいとふき子は思つた。そんならそれと手取り早くいへばいゝものを、昔の人間といふものは、つまらないことに尻ごみしてゐるものだと、ふき子は、却つてもどかしかつた。無論、世話になつてゐながら、待遇に不平で、つまらないことをおさ

くに訴へたのは、自分の通りだつたにしても、それはちつとも、山内夫婦の善意を疑ふ心からではなかつたことは、おさくの罵倒に極力反對したのでもわかつてゐる筈で、從つて、自分としては、ちつとも後ろめたいことはない。ふき子は、そんなことなら何でもないと思つた。

『あゝそのことでございましたか、』ふき子が案外平靜な顏色に返つてさういつたので、山内は大に安心したやうに、禿頭の汗をふき〳〵、

『いや改まつて話していたゞく程のことでもないんだが、たゞ家内の一種の病氣なんで實は……』

『いんえ、ちつとも私。却つて露骨に聽いて下すつて、私大變氣が輕くなりましたの。それにあの、元來、何でもないことを一寸その時の氣分で申したまでゞすから、今更改めて繰返へすのも變挺ですけど、……それに大變濟まない我儘なんで、ほんとうに聽き流して下さらなくつちや、私困るんですの。實は私、身のまわりのものを少しばかり買ひたいと思つたんですが、相憎頂戴したお小使がお手ばらひになつてしまつたので困つてゐると、丁度そこへおさくが來たもんですから、そのことをいつて、少しあれの小使を分けて貰つたんですの。その時の私の話しやうが惡るかつたと見へて、おさくはあんなに怒り出して、ほんとうに手古摺つてしまひましたわ。私そんな風にいつたつもりはないんですけれど……かうなつたら打ち明けていつてしまいますわ……あの私、ほんとうに濟まなかつたんですけど、お小使をさうこちらにばかりおねだりするも何だし、さうかといつて、外から何うするといふことも出來ないし、何もかもなくしてしまつたので、暑さ爽さには、すぐとさし向きに不自由するんでせう。ですから私、何うかして、せめてそんなものにまで人樣の御厄介にならないやうな……おばさんのを頂戴するたんびに、そんなに思つて、ほんとうに濟まないと考へてるのですけど、何うにもならないもんですから……』

ふき子は、いつの間にか自分が、さつきの山西同然　一つところをぐる／＼廻つてゐることには氣がつかないりにそんなこと云つてゐる。

『成る程ね。よく解りました。』山西も、ふき子同樣、敵の間接射擊の意味を會得して、いくたびも諾いて見せて、『こいつは全く濟まない一件だつた。實は……全くです……今日女中奉公しても、暑さ寒さに不自由するなんてことはない筈で、東京の山の手邊へ行くと、下手な給金取りよりは身入りがいゝなんてこともきいてゐます。こいつは山西一生の失敗。ふき子さんに、家のことを一さいやつて貰つてゐて、そんな不自由をさせては、全く申譯がないといふんです。これは、打ち明けて貰つてほんとうによかつたです。』

ふき子は、根つから打ち明けた譯でもなかつたが　山西は非常に恐縮して、更めて濃い湯氣を吹き出してゐる禿頭を振りながら言葉をつづけた。

『いや、それは全くこちらのしくじり、いんや、わし共が年中變もなくぬかつた次第で、何うぞ惡く思つて下さるな、決して底意があつての事ではないんだから。いやそれで漸く安心した。實は、その、家内は、あなたが大層わしどもの肩を持つて下さつて、おさくさんを叱つてゐたすつたといふので、ほんとうに涙が出たといふんですがね。それにしても、何か此方に手落ちがあつたのを、あなたがおさくさんに話されたんぢやないか、さうだとすると、あれほどわし共の肩を持つて下さるのに　その手落をそのまゝにして置いてはすまないから是非何つて見てくれと、かういふもんですから、いかさま尤もな話なので、甚だ失敬な次第だが、露骨にお話しを願つたやうな譯なんです。いやはや、年はとりたくないもの。おさくさんに叱かられても一言もない譯だ。すつかり呑み込めました。はい／＼。』

山西はそんなことをいひながら、立つていつて、細君の寢てゐる部屋に入つて、しばらく何か云つてゐたやうだつた。

が、やがて出て來ると、寢間着のまゝの妻君が後からついて來た。

『かうなつたら、何もかもおはなししてしまはなければならないが、實は、此方だけ勝手にきめた話で、たゞ何んなものかと思つてゐるだけの話だが……』山西は物々しく妻君を顧みて『今もこれに以前のいきさつを話したんで、これもそれはほんとうに手ぬかりだつたつて、大に恐縮した譯で……所がです。實は本家の方に一寸話したゞけで誰れも知らん筈だが、今日おさくさんが何かそんなことをあなたに云つたとかで、家内も驚いてゐるんです。……わし共も、此の年でもう子供は出來んものときまつた譯なんだが、それについて、これが、今更ら子供を貰うのも苦勞だといふし、まあ婿養子でもする氣でゐたんですが、それも格別心當りのあるといふことではなし、わし共の老後の心配は、たゞこの一點だつたのだが、幸ひ……といつては濟まんが、あなたが孤獨になられて、及ばずながらかうやつて御世話をするやうになつたのも、因緣といふものだらうと思つて、失敬な話だが、わし共だけの考へで、養女になつて貰つて、婿でも取つて、あなたのうちの名籍は、子供につがせるといふやうなことに、……アハハハ、全く取らぬ狸の皮算用だが、まあ、そんなことを考へたので、此春、本家で相談したやうな譯なんです。然しかういふことは、さう輕々しく申出られる筋のものではなし、殊にあなたを少しばかり世話をしたのを笠に被て、押しつけがましくそんな話を持ち出すやうに思はれてもいけないし、といつて、內々相談をしやうといふあんたの方の身內は全く無くなつてゐるので、實は直接談判の機會を覗つてゐた譯なんで。……』

ふき子は、養女云々ときいた時に、思はず寒氣がした位面喰つたのであつた。山西は、一人で嬉し相に饒舌つて、ふき子の樣子には、氣も止めないので、靑くなつたふき子の顏色にも氣づかないらしく、まだ何かくど〳〵いつてゐる。

今日おさくにそれをいはれた時に、ふき子は此の位零落した自分を侮辱した事はないと感じたのであつた。もう一

度あんな地震に出喰はしても、そんな屈辱に追ひ込まれるやうな自分では斷じてないと、譯もなく憤慨されたのだが、無論そんなことが事實上の問題になつて現はれて來やうとは思ひもよらなかつたので、それは全くおさくが、墮落した自分を侮辱するための言葉に過ぎないと信じてゐた。然るに、それが半日經たないうちに、現實な問題になつて自分の鼻の先きに現はれたので、ふき子は全くぼうつとするほど面喰らはせられたのである。

それにしても、山西夫婦がそんなことを考へついたのは、この春だといふが、さうすると、夫婦が段々ふき子に面白ろくない顔を見せると、ふき子の感づいたのと同じ頃であつた。ふき子を養女にしやうといふ相談を始めたものが、僅かにふき子に面白ろくない顔を見せ出す筈がないから、これは全く自分の思ひ違ひだつたと、ふき子は考へた。それほど深い好意を持つやうになつたのが、相手方に正反對に理解されるところを見ても、人間同士の心持の當て推量ほど的を外づれ勝ちのものはないとふき子は思つた。全くおさくにもいつて聽かせた通り、他人の心などを、自分の氣分で押し量るものではなかつた。その時もいつたやうに、ふき子自身山西夫婦に對して隔りを持つたことが、そんな正反對の誤解を惹起す基であつたのだ。ふき子は、自分の誤解の爲めに、自分の信じてゐた道理が證據立てられたので、赤面しながらも一種の誇りを覺へた。

それはそれとして、自分を養女にしやうといふのは、山西夫婦の好意には違ひないが、……好意の外に、いろ／＼の意味に、おさく流の解釋が施されないことはないが、それは、一つの一番いゝ解釋ですむことを、さうしてそれが人間同士の心持を一番美しい對象にさせて置くものを、ひねくれた根性から、無理にその一番いゝ立場をすてるのであつて、世の中にそれほど要のない態度はない譯である——さうしてふき子自身からいつても、一番安易な、さうして幸福らしい道を行くことになるのだが、然し更らに考へると、女とはいへ人間ひとりが、他人の都合と自分の都合とで、た

と便利といふ標準の下に片づけられてしまへるものか何うか、またそんな風に扱ふ時に、人間はどこに人間らしい情を働かしてゐるのだらう。

それに山西夫婦が、此春頃に、本家にも相談してふき子を養女にする話を決定しながら、いまゝでそれをふき子に言ひ出さなかつたのは、山西のいふ通り、直接談判の機會を覗つてゐたにしては餘り長過ぎる。その理由を推測すれば、山西の方では、それと同時に、適當の養子を探して、やつぱり婿養子の形式で一擧に問題を解決する腹ではなからうか。それがはしなくおさくの口から洩れたので、今夜打明けられたのであらう。或はもう養子の心當りでも出來たのではなからうか。

さう思ふと、ふき子は屈辱にしいにうをかけられたやうな氣をした。そんな廻り氣をして、無理に反感を挑發させるのはいけないことではあるが、現實はどうしてもその通りであるとしか思はれない。

山西はひとりで面白う相に喋舌つてゐたが、ふとふき子を見ると、青い顔をして、ぼんやり畳を見詰めてゐる様子が、餘りこの話に興味を感じてゐるやうにも見へないので、これはしたりと云つたやうに、正直に、すぐと調子をかへて、

『何んだ、わしに自分の勝手なことばかりいつて……アツハツハ。まあ、俄に何うといふ問題でもないし、ふき子さんの方にもいろ〳〵考へもあんなさることだらうしするから、まあとくと考へて置いていたゞきたいんです。』

ふき子はそんな問題にもならないことを、考へるも何もあつたものぢやないと思つた。山西夫婦が、その答をいかにも期待してゐるやうな様子を見ると、露骨に此方の考をいつて失望させる氣にもなれないが、然し、いゝ加減なことをいつて、後で失望させるのは一層氣の毒なことでもある。殊に、妻君が、いかにもふき子の嬉しがる話でもしてゐるやうに、いつにない笑顔を見せて、無論、ふき子が喜んで承知することゝ思ひ込んでゐる様子を、ふき子は面と向つて見

るに堪へなかつた。この無智の、さうして全く無邪氣な老人達の好機嫌を、たつた一言で慘じめな失望に突き落は、いかに勇氣を振つても、ふき子には躊躇された。

『私、さういつて下さるの、ほんとうに嬉しいのですけれど……でも私の考へてゐる事が……』ふき子はこれをいふのが精一杯であつた。

『いやもう、それは尤もな話だ。藪から棒にこんな話をもち出して、すぐと事をきめていたゞかうなんとは思つてゐやしません。ほんとうによく考へて下さい。』

その晩は、こんな風な不得要領な文句が交換されたのみで、ふき子は、とう〳〵自分の氣持を表はせる機會をさへ逸してしまつた。

それはふき子にとつて、悔ても及ばない失策だつた。山西夫婦はふき子の態度を、處女らしいきまり惡さからの月並のはにかみと解釋して、ふたりの獨斷で、ふき子の腹とは正反對のことを考へてゐたらしかつた。それは、その後の夫婦の態度が、ふき子を全く身内のものゝやうに扱つてゐるので、ふき子にも十分察しられた。さうして際立つてそれをするやうに思はれては困るといふ懸念から、ふき子の衣類や手廻りの諸道具などを、家のものを求める序といつたやうな調子にしては買つて呉れる。その上に、近く行はれる本家の主人の還暦の祝にふき子も參列させるといふので、式の晴着まで註文したが、それだけは、全くふき子の知らない間に取計らはれて、仰々しい包紙を突然眼の前に突きつけられて、そのことを話された時には、ふき子は全く泣きたくなつた。

かうやつてゐたら、何んなぬき指しならぬ破目に陷るかもしれないと、ふき子は、日一日と不安の氣持が嵩じて來た。或る日何かのきつかけから、女の獨立についての話が出たとき、ふき子は、自分も將來は何かの職業を覺へて自活の

自信だけは得て置きたいといふやうなことをいつて、彼を話をそつちへ持つて行かうとしたが、[illegible]は、その[illegible]く抽象的にしてしまつて、全然の同意を表したので、ふき子も二の句がつげずに本問題に入るきつかけを失つてしまつた。

日が經てば經つほど、何うやら屈辱の生活のうちに半分足を突込んでゐるとしか思へないやうになつた。さうして、殊にふき子の恐れたことは、一種の誘惑が、次第に蠱惑的の幻像をふき子自身の胸の裡に作らうとしてゐることであつた。いつの間にか、いくら此問題を考へても、おさくに始めてそれを云はれた時に感じたやうな、身慄のするほどのいやな感じがしなくなつて、態々それを回避して、生活の危險を冒したがるのが單なる物好きとしか思はれないやうな氣がし出した。

ふき子はそれを恐ろしい誘惑だと思つた。さう氣のつくところにまだ生命があるのだとも思つたがぐづ〳〵してゐると、さういふ正氣をさへ失つてしまう虞れがあつた。ふき子はもう躊躇してゐる時ではないと思つた。

毎日〳〵、おさくが來たら、一切を打ち明けて、この陷穽からぬけ出る方法を講じやうと思つてゐたが、あの物別れ以來、おさくは姿を見せなかつた。そんな風に切端つまりながら、ふき子はなほ、惨めなさうして或る意味で自分と同じやうに孤獨な老夫婦を失望させるに堪へないで、どうしてもそれを切り出すことが出來なかつた。

『ほんとうに私は勇氣が足りない。』ふき子はつく〴〵そんなことを思つた。さうして結局、置手紙をして一先づ此家を出る外に、自分の心持を老夫婦に傳へる道はないと考へた。

すると差向き問題は行き先きだが、やつぱりおさくの家の外になかつた。あんなに腹を立てゝも、おさくは、此方から頼つて行けば、勝ち誇つた心持で、ふき子を歡迎するに違ひないことはわかつてゐた。

震災の一周年が近づいた八月の末に、ふき子はその決心を斷行した。暑い日の午後、ふき子は平生のまゝ、つひそこ

らへ買物にでも出るやうな風をして、傘さへ指さずに、小さいバスケット一つを額の邊にかざして日よけにしたから西の門を出た。山西夫婦にあてゝ書き遺した手紙には、長々世話になつた禮と、自分の主義と氣持とから、折角の好意に應じられないことゝ、一先づおさくの家に行つて身の振方をつけるといふ事と、決して輕はづみはしないから心配してくれないやうにといふことゝ、老夫婦の將來の幸福を祈ることゝを書いた。それを書く時には涙が止度なく出て、死にゝでも行くやうな氣がしたが、おさくの元氣な怒罵の聲を思ひ浮べると、不思議に氣が輕くなつた。」

漸く探がしあてた一膳めしやの前に立つた時には、ふき子は、日盛りを傘もさゝずに歩るき通した身體の疲れと氣疲れとが一時に發して、卒倒し相になつた。よろけるやうに入口の柱につかまつて家の中を見たが、客は一人もなくて、薄汚たない食卓が二列に列んでゐる奥の方の、料理場の窓の中に眞裸の男と半裸體の女の上半身が湯氣の裡から見へてゐた。そこから來る異樣な臭ひが鼻をついてふき子をムカ／＼させた。

『一寸ご免。』ふき子がさう聲をかけると、裸の男はこつちを見て

『何かご用ですかい！』

『あのおさくさんはうちにゐて？』

『おさくですかい。』男は、鍋に眼をやりながら、ふき子がビクリとしたほどの突調子もない大聲で『おい、さく坊ゐるか、出て來ねへか。』

『まあ、お孃さん。』奥から出て來たおさくはさういつて、ふき子に抱きついて、そのまゝグイ／＼背中を押して奥へ連れて行つた。こゝに人間が住むのかと思はれるやうな粗末なバラック小屋で、隙間だらけ板の張りの板目に、荒壁の

毛の生へたやうなぶく〳〵疊の汚れ腐つたのを敷いて、六疊に四疊の續いた部屋が日に當らぬ奧にあつて、おまけにとなりに囲むやうな廊下の隅の便所の臭ひが、蒸されるやうな暑い空氣と一緒にふき子の顔を撲つた。ふき子はそこにゐるのが薄氣味惡かつた。

『何んだつて、この暑い日盛りに出て來なすつたの？　何か急の御用だつた？』おさくはさういつてきいた。

『私もお前のいふ通り、山西の家を出て來てしまつたの。』ふき子は、さういつたが、此の家が、とにかくこれから自分の寢起きする家かと思ふと、後悔に似たやうな感じが頭の底にムク〳〵動いてゐるやうだつた。

『まあ何うして？　この間はあんなに柔順の肩を持つてなすつた癖に。』

ふき子は、かうして山西の所を逃げ出して來たら、おさくが、いつもの調子で囃し立てるやうに喜んでくれるだらうと思つたのに、腑に落ちないやうな平凡な顔を見せてゐるのが物足りなかつた。

ふき子は、あの日おさくが歸つた後に起つた出來事と、その後の經過とをかい摘んで話して、

『これでね、あすこにゐると、お前のいふ通り、素寒貧のお嬢さんが家作持ちになつて、六婿さんを貰はなければならなくなるから、逃げ出さずにゐられないぢやないか。』

『さうだつたの？　私そんなこと〻知らないで、あんな出鱈目云つたのがすつかり中つちやつたのね。』

さうはいつたが、おさくは合點が喰つたのだ。あんな出任かせをいつたが、事實、お嬢さんが山西の養女になるといふ問題が起つたとすれば、おさくは、少しもそれを惡くいふ心持はないのであつた。あの時は、お嬢さんが、その正反對に、あすこで虐待をうけながら、それを恩に着て、あの家の肩を持つのが癪に觸つたので、虐待されながら一ぱしもてなされてゐる氣で、養女にでもされるやうに自惚れてゐるのを笑つたのであつた。事實、山西がふき子を養女にするの

だつたら、そんな事をいつてふき子を笑つたのは、全く見當違ひだとおさくは思つた。

『まあ私済まなかつたのね。山西さんが、そんな氣でゐるとはちつとも知らなかつたもんだから、あんな悪口いゝ**まつて。』**

さういつておさくが済まないやうな顔をしてゐるのを見ると、ふき子は急に心細くなつて泣き出したい氣がした。異常な決心で親切な老夫婦を跳飛ばしてまでも、自分の生きて行く途を求めやうとして、それが亦たつた一人の味方のおさくの同感を得るに違ひないと信じて、死んだ氣で決行したことを、當のおさくは、何をして來たといはぬばかりのポカンとした調子で迎へるので、ふき子は張りつめた勇氣が一時にゆるんでしまつた。今度は先日のやうな喧嘩でなしに、お互の心持を存分いひ合つて、これからのいき〱した生活の力にしやうと思つて來たのに、二人とも氣のぬけたビール瓶を二つ列べたやうな恰好で、つまらなさうな顔を見合せなければならないなんて、ふき子は、あんまり殘酷な幻滅だと思つた。

『さくまでそんなことといつてくれちや私心細いぢやないか。親切な恩人達に、後足で砂をかけるやうな眞似をしたのも、これから全く自分の力で生きて行かうと決心したからぢやないの。養女なんかにされて、あてがわれた婿なんかを貰つて、治まり返つてゐるのがいゝ位なら、貧乏なお前のところの厄介になんかなりに來やしないんだよ。お前いつか何てつて私達に威張り散らしてゐたの？貧乏人〱て馬鹿にして貰うまい。泥棒と乞食の仲間入をしないから貧乏なんだつて云つたぢやないの？赤貧のわたしなんかゞ、いつの間にか家作持になつてるのは乞食の親類ぢやないか。人間は、**自分を生かして**生きて行かなくつちや、お金持になつたつて、何になつたつて意味はないんだよ。私が自分の眼の前に**ぶら下つてゐる**幸福をふりすてゝ來たのも、自分を生かして行かうと思ふからぢやないの？』ふき子はそんなことをいひながら、事實問題にぶつからないで抽象的にそれを云つてゐる時のやうな眞劍な氣分になれないのがもどかしかつ

た。いつもそんなことを冷淡と論じてゐる時には、饒舌つてゐるうちに身體が碎々と熱するほど昂奮して來て、聲も調子も生き／＼として來るのに、現實それにぶつかつた今は、いくらそんなことを云つてゝも、ちつとも昂奮もせず熱くもならないのみか、考へが、坂の中途で車力を失つた車のやうに、ガラ／＼後戻りをし相で、それを喰ひ止めるだけで一生懸命だつた。その上何だか、後戻りが出來たらした方がいゝやうな氣がして始末にいけなかつた。然し考へだけは後戻が出來ても、事實がもう戻れないんだといふことに氣がつくと、何だか心細くなつて、むやみに捨てゝ來た平和や幸福がふり返へられてならなかつた。おさくはそんなことにお構ひなく

『私にやお孃さんのちんぷんかんぷんはちつともわからないけれど、養女にでも何でもおなりなさるがいゝぢやないの。向ふがしてやらうといふのに、ちつとも遠慮することなんかないぢやないの？』

『さくはわからないから駄目！』ふき子は、匙を投げると同時に、恐しく疲れが出て、いにや眠氣がさして、もう口を利くのも大儀になつた。するとおさくは急に元氣な聲で、

『まあ何んでもいゝや。もう山西へ歸る譯にも行かないでせうから、當分こゝで辛棒して、そのうち紹介局へでもいつて事務員の口でも探せば、いまはフッコーで景氣がいゝからいくらでも口がありまさ。お孃さんなら月に三十圓や四十圓は文句なしだから、いゝ下宿でも探してのんきにやんなさるさ。それにしも、お孃さんの荷物は何處に置て來なすつた。』

『荷物なんか何も持つて來やしなくつてよ。皆山西さんのものだから、たゞ着てゐる分と、給金だけは貰つて來たけれども、着更へ一枚、傘一本持つて來なかつたわ。』

『やつぱり「お孃樣」は違つてゐるよ。つまらない遠慮をしたものね。私なら、手に觸つたものは、火が投げたんだと思て失敬して來ちまうわ。此方に何もなくつて向ふにあり餘つてゐたら、さうでもしなきや平均がとれやしない。まあ

いいや、今更ら取りに行くことも出來ないんだから、涎なんかたらしつこなしにして、何しろ、今夜から、此處の狹い方にお嬢さんがあたしと雜魚寢よ。』

そんなことをいつてゐるうちに電燈が灯つた。薄暗く汚なかつた部屋が、明かるくなると、今度は更めて判然とちゞ穢さかつた。着物や臺所道具が一緒に積み重なつて、あつちこつちの隅を占領して、眞中に漸く身體を横にする位の空地があるに過ぎなかつた。周圍にだけは障子があるが、六疊と四疊の隅の襖も何もなく、家中が、その眞中の空地に一塊りに寢るらしかつた。それを見廻してゐると、ふき子は、明日にも地位が見かつてくれゝばいゝがと、たゞそればかりが考へられた。

いつの間にか、土間は半ぶん過ぎお客で埋つてゐた。酒の香や煮物の臭ひが、料理場から來る濃い湯氣と一緒になつて、奥の方まで濛濛とたなびいて、お客の管を卷くだみ聲と、陶器の觸れ合ふ音が、その空氣に相應しい樂音を漂はしてゐる。

『今は又べらぼうに暑いぢやないの。お嬢さん一緒に行水を使ひませう。』

おさくがさういふので、ふき子はこんな家にも行水を使ふ所があるのかと思つて、おさくの尻について行くと、おさくは、すぐ店の土間につゞいた物置場になつてゐるところの狹い空地に盥を揃へて、傍の土竈の大釜の湯をそれに取つた。

『さあ温泉が出來ましたよ。お嬢さん一緒に一風呂浴びませう。』

おさくは、こんなことといひながら、する〳〵と帶をといて、見る間に赤裸かになつて、色艶のいゝ立派な體格を、電燈の光に照らさせた。

ふき子は呆れて口も利けなかつた。一緒に浴びろといはれたつて、土間のお客から丸見への所で、何うして此の野蠻人の眞似が出來やう。ひとの事だが、ふき子は眞赤になつて、皆の視線が此方に向けられてゐることゝ思つて、そつと土間の方を見ると、意外にも、誰れ一人、此方に顏をむけてゐるものもなかつた。



血を吐く

葛西善藏

おせいが、山へ來たのは、十月二十一日だつた。中禪寺からの、夕方の馬車で着いたのだつた。その日も自分は朝から酒を飲んで、午前と午後の二回の中禪寺からの郵便の配達を待つたが、當てにしてゐる電報爲替が來ないので、氣を腐らしては、醉いつぶれて蒲團にもぐつてゐたのだつた。

「東京から女の人が見えました」斯う女中に喚び起されて、

「さう……?」と云つて、自分は澁い顏をして蒲團の上に起きあがつた。

おせいは今朝の四時に上野を發つて、日光から馬返しまで電車、そこから二里の山路を中禪寺までのぼり、そしてあのひどいガタ馬車に三里から搖られて來たわけだつた。自分は彼女の無鐵砲を叱責した。おせいはふだん着の木綿袷に擦り切れた銘仙の羽織——と云つて他によそ行き一着ありはしないのだが——そんな見すぼらしい身なりに姙娠五ケ月のからだをつゝんでゐるのだつた。

「そんなからだして、途中萬一のことでもあつたら、たいへんぢやないか。誰がお前なんかに來いと云つた！默つて留守してゐればいゝんぢやないか。それに女一人で、來るやうなとこぢやないぢやないか！」自分はいきなりガミ〳〵怒鳴りつけたので、彼女は泣き出した。

「これでも、いろ〳〵と心配して、ゆうべは寢ずに……そして……斯うしていろ〳〵と心配してやつて來たんですのに……」彼女は、斯う云つてしやくりあげた。

雜誌社に金を借りに廻つたこと、下宿でも、自分が二ケ月も彼女ひとり打ちやらかして置いて歸らないので非常に下機嫌なこと、そんなことを冗々と並べ立てた。聽いて見ると尤もな話だつた。が折角の彼女の奔走甲斐もなく、彼女の持つて來た金では、またも、宿料に追付かなくなつてゐた。

「よし〳〵、わかつた。それではまた、なんとか一工夫しよう。折角來たついでだから、四五日湯治するもいゝだらう。それにしても君は、亂暴だねえ！そんなからだして……」

二三日前に初雪があつた。その雪どけのハネが、彼女の羽織の脊中であがつてゐた。

「兎に角ドテラに着替へて、ひとはいりして來よう。……何しろこの通り寒いんだからね。冬シヤツにドテラ二枚重ねてゐて、それで寒いんだからね。それに來月早々宿でも日光にさがつちまふんだからね、毎日その準備をしてゐるんで、こつちでも氣が氣でないもんだから、此間から毎日酒ばかし飮んでゐた」木管でひいてる硫黄泉のドン〳〵溢れ出てゐる廣い浴槽に二人でつかりながら、自分は久しぶりで孤獨から救はれたホツとした氣持で、おせいに話しかけたりした。

宿では、千本から漬けるのだと云ふ來年の澤庵の仕度も出來、物置きから雪がこひの戸板など引出して、毎日山をく

だろ準備に忙がしかつた。今日中に二組の滯留客の荷物を受けてゐるほかには、新らしい客は日に一人も來なくて、一時はいつぱいの客もほとんど來なかつた。紅葉は疾くに散つて、櫟、楢、檜類などの濁つた緑りの間に、大色の蔦や櫨の紅葉を照らしてゐた。湯の湖は、これからの長い冬を思ひ佗びるかのやうに、漠然と、冷めたく湛えてゐた。

夏前から文官試驗の勉强に來てゐて、受驗後も成績發表まで保養かてら呑氣に滯在してゐる二人の若い法學士――F君は二十五、N君は二十四――二人とも學校を出てすぐ大藏省に入つたのだが、試驗準備中は何ヶ月役所を休んでゐても月給が貰へるのだと云ふ、羨ましいやうな身の上の青年たちだつた。彼等は白根山、太郎山などと、毎日のやうに冒險的な山登りをやつてゐた。足にも身體にも自信のない自分は、精々湯の湖畔を一周して石楠花のステッキを捜したり、サビタの木のパイプを作りに出かけるやうな時に彼等のお伴をしたが、すつかり懇意になつてゐた。が N君は成績發表前、月初めに歸京して、廣い宿にF君と自分の二人だけになつた。それから暫く成績が發表されたが、二人とも見事にパスしてゐた。

十日頃に自分の仕事も一片附いたので、それからは、天氣さへいゝと、F君につれられて、湯沼、金精峠などと、自分も靴に卷ゲートル着けて、そこら中を歩き廻つて、はつきりしない金の當てを待つてゐるもどかしさ、所在なさの日を紛らして送つてゐた。晩には大抵、自分の部屋か、彼の部屋かで酒をのみながら話し合つた。畠違ひの斯うした青年と近づきを持たない自分に、F君は未來のある新時代の青年官吏――官吏と云ふ言葉はヘンだが――として、甚だ好ましい印象を與へた。健全で、頭腦が明快で、趣味あり教養ある一個の立派な青年紳士だつた。文學などの鑑賞力に就いても、かなりに磨かれてゐることを思はせた。

「いつしよに歸りませう。私の方はどうせ二日や三日は延びても構はないのですから」F君は斯う云つて呉れた、

自分も、十五六日頃には引拂へるつもりだつた。それで、一日々々とF君に延ばして貰つてゐるのだが、F君の口頭の日割が新聞に發表され、その都合で彼はどうしても十六日には山をくだらねばならぬことになつた。その前日、自分は最後の散歩を、戰場ケ原の奥、幸徳沼の牧場に——いつしよにした。晝飯後、往復三里の道だつた。F君に聞いてゐた以上に、いゝ景色だつた。「この沼は一等綺麗だ」とF君が云つた。小徑の上に寢そべつてゐる牛の群れ、F君に寫眞機を向けられてのそり〱白樺の林の中を遠退いて行く逞しい黑斑の牝牛、男體山太郎山の偉容、沼に影を浸す紅葉——こゝの景色が一等明るく、そしてハイカラだと云ふF君の言葉が、自分にも首肯れた。「牧場の家」で、焚火の爐邊で搾り立ての牛乳を飲み、充分に滿足して、自分等は日暮れ方宿に歸つた。そしていつしよに湯にはいり、別れの晩餐を共にした。が彼はその翌日も、一日延ばして吳れたのだつた。彼は、一人取殘される自分に、同情して吳れたのだつた。自分が宿の女中たちにも飽きられ、厄介者視せられて、みぢめな、たよりない氣持で日を送つてゐるのを、青年の純な心から、同情してゐて吳れたのだつた。何と云ふ親切！……牧場行きの場合でも、彼は始終先きに立つて熊笹に蔽はれた細徑の樹の根、刺のある枯蘚——さう云つたものにまでも注意して吳れ、また彼には自由に飛び越えられる小川だつたが特に自分のためにそこらの大きな石を搜して來て川の中に路を造つて吳れたりした。酒を飲んでゐる場合以外の、自分のさびしげな、物悲しげな姿が、すくすくと眞直ぐに伸びた若い彼の心を、何かしらそゝるところがあつたのか知れない。……

いよ〱の十七日は、朝から霧のやうな雨が降つてゐた。馬返しまで五里餘の道を、彼は歩いてくだるのだつた。すつかり仕度の出來たところで、彼は自分の部屋で、別れの杯を擧げることになつた。「かつきり一時間だけ……」彼の時計を見ながら斯う云つて酒をすゝめはじめたが、もう三十分、もう十分と云ふことで　たうとう十二時近くなつてしまつた。

「私のはキザなんですけど……」斯う云つて 彼は肩書附きの名刺を自分に渡した。その裏に 音もなく秋雨けぶる湯の宿に、くみかはしけり別れの酒を――彼は斯う書いて呉れた。

辭退するのを、自分もまたゲートルを卷きレーンコートを着て、途中まで送つて行くことにした。

「僕に構はないで、あなたはドン／＼先きを急いで下さい。あなたの姿の見える間、僕はついて行くんですから。あなたの姿が見えなくなつたところで、僕は引返すことにしますから、あなたは僕に構はないでドン／＼急いで下さい。時間を遅らしてしまつたのですから……」湖畔の道を足弱の自分と並んで行く彼を、自分は斯う云つて促し立てた。

一町遅れ二町遅れして――が道がグルりと曲がると、三四町先きをステッキを振りながら大股に歩いて行く彼の後姿を見出して 自分はその度に「オーイ！オーイ！」と怒鳴つた。が彼の步調はだん／＼と早まつた。自分は一里十町――戰場ケ原の中程の三軒家の茶店までは追付いて行つて、そこで茶を飲んで別れたいと思つたのだが、二十町も來ないうちに自分は息が切れてしまひ、路傍に打倒れさうになり 彼の姿を失つてしまつた。で自分は最後の「オーイ！」を長く叫んで、悄然として雨の中を引返したのだつた。

それからの五日間、自分は朝から飯も食はずに酒を飲み、睡むり、そしてまだ醉のさめ切らないうちに湯に飛び込んで來ては、また飲み出す――そんなことを繰返してゐたのだつた。

が、たうとう、おせいが來た翌々日、自分はまた朝から酒を飲んで、夕方、飲食物共だつたが、洗面器にほとんど三杯――殊に最後の一杯は、腐つた魚の腸のやうなものを、何の疼痛も感ぜずにドク／＼と吐いてしまつた。その晩はほとんど昏睡狀態だつた。夕方からの霰か、翌日は大吹雪になつてゐた。胃藥か松脂のやうな血便が、三四日續いた。そ

れが止んだ時分にポカリとまゐるのではないかと云ふ氣もされたが、しかし無意識のうちに捜してゐたのかも知れない。死場所としては、この山の湖畔はわるくないと思つた。田舎の妻子、おせいの腹の子のことで、おせいに遺言した。

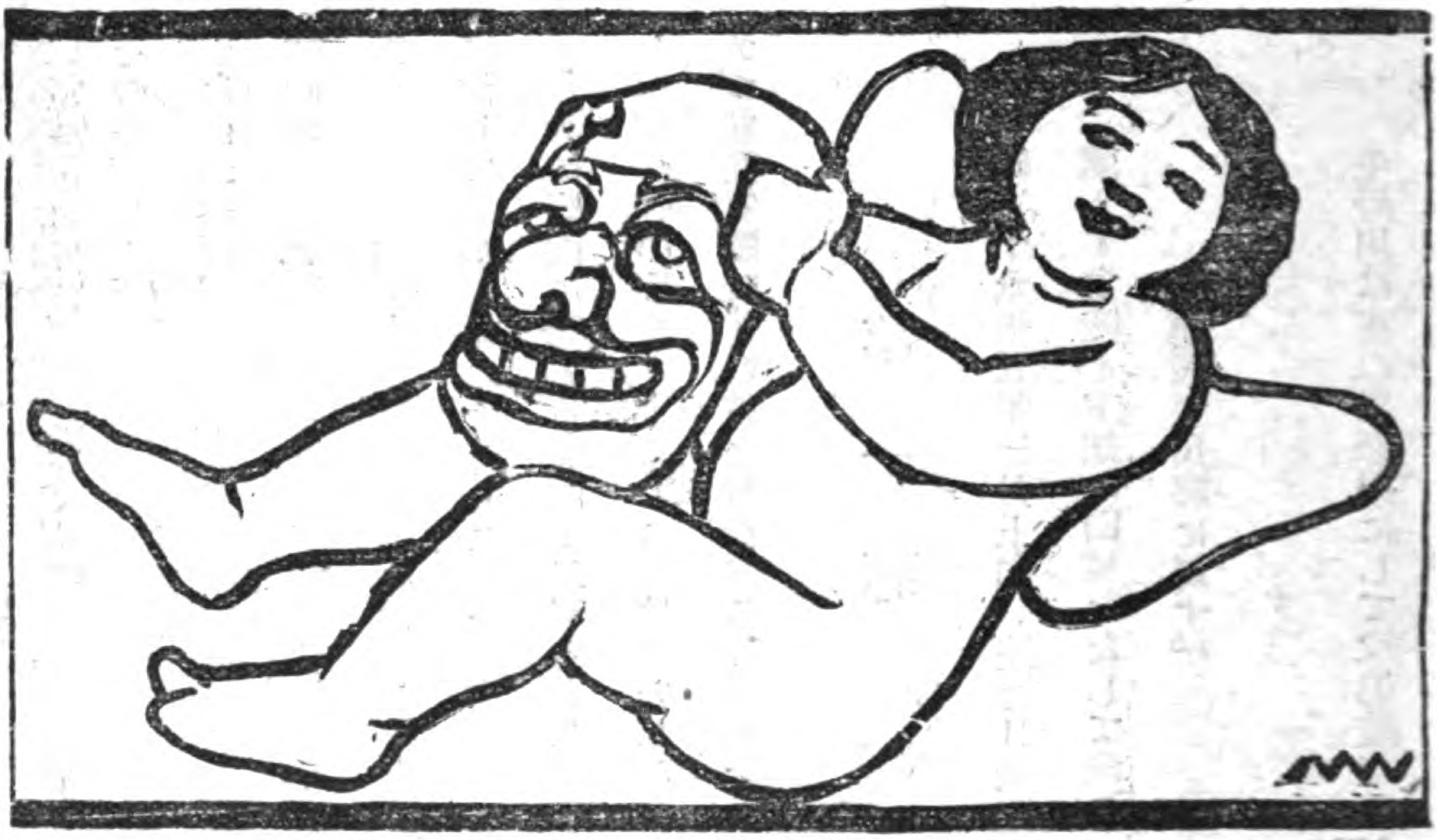
「酒のせいですから、よくあることですから、あなたが今度が初めてゞしたら、決して心配なことはありませんから、力を落さないで……」

宿の主人は斯う繰返して力を附けて呉れたが、しかし結局中禪寺からおせいの分と二臺俥を呼びあげることになつた。そして、馬返しと日光の間の淸瀧の古河製銅所の病院へ、中禪寺から電話で交渉して呉れた。

「俺はこゝにゐたいんだがなあ、山をさがりたくはないなあ……」

自分は眼を開くのも退儀な氣持で、斯う駄々子らしく枕元のおせいに呟いたが、ふと――くみかはしけり別れの酒を――あの好青年の殘して行つて呉れた歌が頭に浮んで來て、自分はほゝ笑ましく溫かい氣持から、合はした瞼の熱くなるのを覺えた。

――十三年十二月――



戲曲

平將門（四幕）

眞山青果

平氏系圖

○高見王——高望王——

- 國香　常陸大椽、鎭守府將軍。本名良望。爲二將門一被レ害
  - 貞盛　鎭守府將軍左馬助。陸奥守、正五上。號二平將軍一、武略通神人也
  - 繁盛　陸奥守、正五下。母家女房。
  - 兼任　下野守
- 良兼　下總介、從五上
  - 公雅　武藏守、從五上。
  - 公連　字六平。
  - 公元　下總介。
- 良將　從四位下、鎭守府將軍
  - 將持
  - 將弘
  - 將門　瀧口小二郎、號二相馬一。號二外都鬼王一。貞盛誅レ之
  - 將頼　御厨三郎
  - 將平　大葦原四郎　母　相模守
  - 將文　母
  - 將武　母
  - 將爲　母
- 良孫　從五下、上總介。鎭守府將軍。
- 良廣——經邦　從五下　母
- 良文　村岡五郎。從五上。
- 良持　下總介。
- 良茂　常陸少椽——良正　下總介

系圖は主として尊卑分脈に據り、坂東諸流綱要等を參考とす。ゆゑに將門記のみによりて書きたるこの脚本と一致せざる點なきにあらず。良正は多くの系圖に高望王の孫となせども、脚本は將門記を信據してその末子となせる如き、その一例なり。

なほ云へば、この脚本は『將門記』を一種の人生劵證と見て研究せるものにて、『本朝文粹』『扶桑略記』その他の當時の記錄と認むべきものを參照せり。今昔物語以下の後出書はすべて採らず、又從はず。されば貞盛の性格などの如き、今昔物語等の編纂書に相違する點を發見して怪しまるゝ讀者もあらんなれど、その點かへつて作者のひそかに潛沈して考察を重ねたるところなり。

作者は將門に關する戯曲を二部曲として發表せんと企てたり。即ち、私鬪時代の將門、反逆時代の將門の二篇にして、著作の眼目とするところは、むしろ反逆時代の彼を描き、彼を見んとするにあり。されどこゝには順序として先づ前篇私鬪時代の彼を發表することとせり。謂ふまでもなく、この篇のみにて一箇獨立せる戯曲をなすなり。」

第一幕

時――承平五年三月上旬。遠き日光連山の雪解くる頃。午後より夕暮。

處――常陸と下總の國境をなして流るゝ毛野川の河原。地點は今の下妻(しもづま)町の西南部、今里と呼ばるゝ邊にて、下總國豐田郡に屬す。

毛野川は後の鬼怒川にして、氾濫つねなき大河なり。背景に廣茫たる砂礫地の河原を見せ、雪消時(ゆきげどき)の藍を溶せ

ろごとき急流激湍その間を帯のごとく流がる。河をへだてたる對岸は常陸平野にして、肥沃の田圃はるかに春光の中に打煙ぶるなかに、筑波の峻嶺眉を壓して屹立す。その間の距離三里にやゝ遠きほどなれども、際限なき平野中の孤峯なれば、山容廓然として近く、極めて威嚇的に此地方より仰瞻せらる。

舞臺は上手丘陵の矮樹林より次第なびきに、河原地（下手）にうちつゞく心にて、柳、櫟、赤松その他の雑木ところところに立ちて、一面の藪地をなす。河流の朽木切株など沓にうづもれてあり。地には落葉ふかく、木はすでに青葉を出したるもあれど、黄葉のまゝ春を待つもあり。大氣あらく、厲しく、一體に荒凉たり。時々、名も知れぬ小禽の聲、林間より聞え來る。

肩あつく、眉太く、手足逞しく、常に汗ばみて呼吸せはしげに、やゝ膽汁質とも見える大男　朽木に腰かけ、興奮せる目を固めて對者の顏を見詰めてゐる。三十一歳の小次郎將門なり。平常服とも見える水干の狩衣。鞭を持つ。その傍に立つは將門の次弟、大葦原の四郎將平なり。十八九ぐらゐ。病身にて虚弱なる體質、顏面蒼白く、眸は黒く、頤の痩せてするどき青年にて、時々目前の一點を凝視する癖あり。衣裳なども正しく着けたり。百姓三四人、從僕比都目、二十六七、心配さうに遠くより將門を見詰む。

將門　けれども、あゝまで云ひきつていゝものかなあ――總領たるおれに、あゝ云ふ言葉を投げていゝものかなあ――

四郎　あれは三郎の癖なのです。氣にはやり立つと、自分を抑えることが出來なくなります。

將門　然うだらうなあ――。あゝ云はれるとおれは膽が煮えて、目さきがクラクラして來る。

比都目　何處も……怪我はございませんでしたか。

將門　（笑つて）眞逆あれに撲たせはしない。然しわぬしは聞いて、どつちが道理だと思ふ。

比都目　はい、わたくしづれの分際には……。（と手を擦りゐる）

將門。　なる程今日まで、常陸の伯父者を訪づねそびれてゐたのは、わしの怠りだ。しかし兄の落度をとつて、大勢の前であゝまで責めるといふことはない筈だ。（弟を見て）四郎お前は何う思ふ。

四郎　はい……。（と悲しげに俯向く）

將門　わぬしは菅原家の學問所にも通ふて、學生の數にはいつてゐる人だ。遠慮なく云つて見てくれ。おれが無理か。

四郎　（當惑して）兄者を無理などゝは思ひません。

將門　かまはない、端的に云つてくれ。おれは人を壓しつけることは嫌ひだ。お前が無理といふなら、すぐ行つて三郎の前に手を擦つて詫びる。

四郎　（口籠りつゝ）わたくしは何方へも方人しませんけれど……平に聞いてゐて、三郎があゝ云ふにも……條理はあると思ひました。

將門　然うかなあ――。（對者の目を見詰めて）何う云ふ處だ。

四郎　（足許の小石を蹴りて）けれども又……兄者に叱られます。

將門　いや、然うでない。おれはお前に聞きたいのだ。お前がおれを判斷するやうな齢になつたのが嬉しいのだ。

四郎　（小石を足に弄びながら）兄者。何う考へてもわたくしは世の中が斯う――今のやうに進むものでは無いと思ひます。今の御代には――正しい權衡といふものが失はれてゐます。

將門　ふん、然うかな。

四郎　京都の貴族たちは、この田舍の衰微を何う見てゐるのでせう。世の限り。亂世濁世といふは、かゝる時代を云ふのではないのでせうか。

將門　さあ。どう云ふもんだなあ。（と鞭を鳴らしてゐる）

四郎　（青年らしき熱心を加へつゝ）この頃わたしは初めて、三善清行公が先帝延喜の御門に奉つたと云ふ有名な意見封事を讀みました。三位公は切りに時弊を指摘して、當世を澆季の世と慨いてゐますけれど、その二十年のちの今日では、農民百姓にいたるまでが先帝時代を、往古の聖の御代にも勝さるやうに崇がめ偲んで居ります。博學の説に、國の政事衰へる時は、必ず人民は前代を追憶するものだと聞いてゐます。

將門　何んだ。（急に、耳を立て）木貝が落葉を渡るのか。——うむ、それで。

將門、百姓の方を見つゝ、ニヤ／＼笑つてゐる。

四郎　今日わたしは、常陸街道をソロ／＼と妻子を馬に乘せて、陸奥の方へくだる無籍流浪の農民の群れのいたましい姿を見て、思はず目のうちが熱くなりました。

將門　ほう。今日も通つたか。何處の者どもだ。

四郎　上總の國武射の郡、ある郷の者だと云ひました。租稅未進の追捕があまりに酷しいので、無智の農民等ももう怺えかねたのでせう、一村三十八戸の男女が申し合せ、徴發に向つた國檢非違使の見る前でわが家の棟に火をつけて、大手をふつて村を立退いたと聞きました。その他、上野の國でも苛酷の税に苦しんで、馬を賣り、家を捨てて、流亡の群に入つた百姓が無數にあると聞きました。およそ諸國に、當時の世ほど流浪漂泊の窮民の多い時代は、史にも書にもないやうに思ひます。斯う云ふ時代は——

将門　待て。（手にて制し）お前、人の言葉を借りてはいけないぞ。

四郎　は？

将門　（笑ひながら）おれはお前の言葉を聞いてゐるのだ。お前の學問の師匠菅原の景行卿は天滿宮道實公の三郎で、なるほど名ある學者だ、博士だ。しかし何人の言葉でも、ひとに借りるのは恥だぞ。（百姓を觀て）なあ、然うではないか。はゝはゝゝ。

百姓は他人事のやうにボンヤリ聞いてゐる。

四郎　武藏の國の山地などには、村々にもう男の數はつきてゐるさうです。租税をのがれるために、正丁といふ正丁はみな諸國の新しい開墾地に流れ込むか、西國の莊園に身を奴隸に賣るかして、田畠はみな雜草に蕪れはてゝ手をつけるものもないさうです。それなのに、京都貴族といふうちにも、たゞ春日明神を氏神とする一族ばかりが世にはびこつて、諸國の富も、位も、名譽も、みなおのが一つの手に握つて、戀と、歌と、管絃と、野遊と、寫經、物詣でとに、うつゝ心もなく、この春の日の長きを送りかねてゐます。兄者。世にかゝる不義が行はれて好しいものでせうか。たとへ正しい權衡のない世の中と云つても、斯うまで人は人を凌ぎ、人は人の頭を踏むことが出來るものでせうか。

将門　うむ、然うだなあ。（と、獨りクツクツ笑ふ）

四郎　藤原氏の專横を惡む者は、三郎一人ではないと思ひます。凡そ惡政暴政と云つても、恐らくこの世ほど苦しい時代はないと、わたしは思ひます。天下の人の憤りはみな藤家の家門に向つてゐます。（兄を見て）何うしたんです。

将門　何を笑つてゐるか知るまい。はゝはゝゝ。お前の身振りは間違つてゐる。景行卿の癖は、頸を斯う……こつち

から振るのが癖なのだ。あれは昔、父君と一緒に筑紫の太宰府に流されてゐて、若布や荒布ばかり食つてゐたゝめなのだ。(と笑ひながら立ちかける)

四郎　何んです……。(目を据えるやうに黒き瞳にて、兄を見る)

將門　(その視線に少し狼狽してさ、それで、それで何うだ。

四郎　私は眞面目に云つてゐるのです。自信のないことは云ひません。天が下には今、藤原氏に對する呪咀がみちみちてゐます。

將門　(又腰を下して)おれは無學だ。お前たちのやうに、然う大きく掴んだ話は出來ない。天下の政治を論議するよりも、おれは現にこゝに、壁に馬を乘りかけてるやうな、危急の問題に心を痛めてゐるのだ。おれの一生の苦勞は、この毛野川一つにある。

四郎　けれども、事は起る時に起るのではなく、因緣は遠いところにあります。今の世は治める者も治められる者も、ともに正しさを失つてゐると思ひます。兄者のやうに、さう藤原氏をはゞかることはないと思ふ。われわれの家だつて、三代以前に遡れば皇室から分脈してゐるのです。

將門　わからない男だなあ……。(苦笑しつゝ立つ)藤原氏は用地を流しはしない。この河は、流すのだ。

四郎　兄者はこの頃の常陸源氏――殊に讓父子の濫妨を何う見るでせう。山林の開墾にことよせて、河を越えて、次第にこの豐田分へ侵略して來るではありませんか。それも好いが、百姓どもは前の常陸大椽と云ふ威名に怖ぢ利益にまどはされて、續々と讓方の農園へ逃げ込んでゆくさうです。たゞでさへ作人が不足して、用地が荒廢するのに、この儘に置いたら今年の苗代時は、殖人が不足して、植付も出來なくなるだらうと思ひます。

將門 それだから、國香の大伯父を賴んで話をつけると云ふのだ。俺は現に今日、石田まで馬を走らしたのだ。都合で會ひかねたが、明日にも行つて必ず話をつけて來る氣だ。（作人等にも聞かする意味にて）わし達は、伯父をたゞお人好しのやうに、無能者のやうに云つてゐるが、兎も角も大國の大椽をもつとめ、またわれらの父上にとつては、一の兄なのだ。踏切れば、必ず決斷のある人だ。何事も伯父御のはからひに委せて置けばよいのだ。（と二三歩あゆみ、立止り）それになあ、四郎。讓父子のことも考へやうだ。一昨年の河普請には、こちらからも常陸百姓へ手を入れて、作人を大分こつちへ逃げ込ませて、先方に憂き目を見せてゐる。非遂を云へば、雙方にあるのだ。それだけで彼等が、藤氏の威權を笠にきるとは云はれない。何あに、あつちで遣れば、こつちでも遣るだけさ。はゝはゝ。

郎從作人等は二人の傍をはなれて、河の方を望みゐたりしが、互に何か囁き合ふ。

黑人 館のとの、やはり正しく、常陸の河原には人が出て居ります。

子諸 蛇籠を沈める用意らしう御座います。

將門 何。（と額に手を翳して）うむ、出てる。

比都目 との。噂通り常陸方ではあれに石堤を築くのでは御座りませぬか。

將門 うむ、その用意かな。うむ、人は出てゐる。（と切りに眺めゐる）

四郎 兄者。

將門 好いく、わしに委せて置け。明日は早く常陸へ罷らう。（百姓を見て）ぬしたちには用はないあちらへ行け。

作人郎黨等は互に呟きつゝ去る。

四郎　（やゝ急き込んで）兄者。常陸の野心が眞實ならば、兄者はどうなさるお心でござりまする。

將門　まあ好い……まあ好い。（と何か考へつゝ歩みゐる）

四郎　兄者。

將門　四郎、お前は係はるな。お前は學者になる人だ。煩はしい田畠の問題などは、兄のおれに任せて、お前は紀傳道によつて家の名を揚げなければならないお前だ。（と歩み廻り、ふと立停まりて）三郎やおれは、うちがまだ艱難の時に生れて、童の頃から家の事に鞅掌して、馬が秣を食つて年をとるやうに、たゞ徒らに年をとつて來たのだ。おれは自分に悔んで、お前を兄弟のうちの寶石と思つてゐる。學者らしく大樣に、氣高くしなければならない。ほ、何うだ——。筑波の山の色があんなに煙り深くなつた。もうすつかり春だ。

將門河原に突立ち、兩手を腰骨にあてゝ、深呼吸でもするやうに、對岸の景色を見る。

小禽の囀り聞えて、やゝ暫くの間無言。

將門　それにだなあ。われ／＼の家は、父上の頃から藤原家に音信を通じて、今の太政大臣殿忠平公には、家祿同樣の禮をとつて來たのだ。だからわしは去年の京都のぼりにも、親しく小一條の大臣家に祗候して、父に代つて忠節をちかふ名符をも奉つてゐる。それは、一つはお前のためもあるぞ。わぬし達は京都の藤原氏の繁昌を目前に見ぬから、今にも新らしき時勢が來るやうに云ふが、何うして／＼藤原氏の根據は確實なものだ。諸國莊園から歲々に積み上せる富だけでも莫大なものだ。あの富のある間は、藤原一門はびくりともしない。

四郎　然し、兄者……。

將門　まあ、聞け。藝能文學によらず、藤氏の蔭をたのまなければ、生きられない世になつてゐるのだ。お前なども違

かれ早かれ京都に出て、初めて氣がつくことだ。おれはそれを思ふから大臣家に作法をつくしてゐるのだ。常陸源氏の輩も、その關係は知つてゐる。様なくしておれを侮り、蔑にすることは出來ないのだ。

四郎　わたくしは違ふと思ひます。名符を奉り、音物を納めたぐらゐでは、藤原家の欲望は滿足しないと思ひます。藤原氏の希望は、天が下の富を全部わが一人の手に掌握することです。それほど京都を貴く思ふなら、いつそのこと土地の全部を忠平公に奉つて、大臣家の莊園に劵面を改め、國司不入の無税地にしたら好いでせう。

將門　何。

四郎　莊園の管理者となつて、大臣家の配分をうけてゐる方が、安心でもあり又利益もあるでせう。今の世の習に、一人の跨をくゞりて、萬人の頭を越ゆるといふのはそれでせう。苛酷な租税に苦しめられ、百姓作人の寄合に氣をつからせてゐるより、その方が遙に賢い仕方だと思ひます。とても今時、地主の立行かないのは知れたことなのです。

將門　輕々しく口を利く男だなあ――。(ヂロリと弟を見て、間)お前は小兒で覺えなからうが、おれや三郎は、父上がこの沼地を開發して、この水田をつくりあげるまでの辛勞を見てゐるのだ。前國司の皇族のわかれのと云つても、土の上に人間の鬪ひは何時の世にも免れない。地主と作人は、生れながらの敵だ。壁にいごく榾火のかげに透して、父上の髪が一年々々に白くなつてゆくのを、おれは童ごころにも悲しく見てゐたのだ。また、父上も時にはさう云つた。土の上の爭ひには疲れた、と云つた――。父上は京都の殿上づきあひに投げ出されて、この東路のはての人煙もない澤地に、寂しく一生懸命の地を見つけてゐた人なのだ。

四郎　…………

將門　おれの代になつて、その土地を他人の名田にうつすことが出來ると思ふか。關白家でも、大臣家でも、おれはこの土に新らしい主人を持たせたくない。おれは收穫を云ふのではないぞ。土だ、この土だ。父の名によつて保たれた土を、子の名を持つてうけ傳へて行きたいと思ふのだ。おれの望は、その外にない。

四郎　けれども見す〳〵新ら農夫が散亂して、田地が荒廢してゆくやうでは、何を云つても駄目でせう。

將門　それは知つてる。このまゝでは可いけない。

四郎　兄者の賴みは、常陸の伯父の大椽でござりませう。それは今時には舊い考へだと思ひます。伯父御は現在その職にゐてさへ、護等源氏の横暴をふせぐことの出來ない人なのです。どうして甥の家の疲弊までを救ふ力などありませう。

將門　いや、おれは考へてゐる――考へがある。

四郎　所詮今の政治や制度が、われ〳〵地主を生きさせないやうにしてゐるのです。何う免れやうとしても、それは姑息手段です。踠き苦んで繕ふだけ、新らしく來る日を遲れさせてゐるやうなものです。

將門　（突然、弟の肩に手を置き）四郎、好いか。おれの云ふだけに答へるのだぞ。餘計なことを云ふなよ。第一おれは、百姓作人を虐げたことがあるか。作人を苦しめたことがあるか。何うだ。

四郎　……

將門　有るまい、おれは無い。第二におれは、公家に對して忠がないと云はれるか。租稅を未進し、課役を怠つたことが一度でもあるか。

四郎　……（不審さうに兄の顏を見詰むる）

將門　無いだらう、無い。それにおれは、一族として常陸の三人の伯父たちにも、禮儀を失つたことがないぞ。一家の兄として、お前たちにも爲るだけのことをしてゐる。それで好いではないか。その上に何を望むのだ。國司に盾を衝いたり、國の制度を論じたりするばかりが勇者ではないぞ。おれはあの三郎の、粗暴不禮儀は嫌ひだ。あれは餘りに、わが生を急ぐ。あの男は小兒の時から、餘りに父母の辛勞ばかりに見懲りして、ほかを考へるゆとりが無くなつてゐるのだ。お飯を食ふ時のあれの姿を見ろ、あいつは飯を嚼んだことのない男なのだ。眠る時には、死んだやうになつて鼾をかいて眠る――おれは嫌ひだ。

四郎　（嘆息するやうに）……云つても無駄だ。（と俯向く）

將門　お前は學者だ。世上の論議にかゝらつてはならない。田舍に住んでも、血統の氣高さを保たなければならぬ。皇子の裔として、百姓に敬はれなければならない人だ。

四郎　ではもう……何も云ひますまい。（と兄を離れる）

將門　怒るなよ、三郎。（笑ふ）お前は今に京都に出て、初めておれの言葉がわかるのだ。おれはお前のために富を積んで、せめて兄弟のうち一人だけは、心ゆたかに都の生活をさせて見たいと思つてゐる。田舍で考へてゐる都とは違ふぞ。はゝはゝゝ。

四郎答へず、其邊を歩む。

將門　お前には從兄だが、貞盛の出世を見ろ。都でも常平太と云へば、上づとめする女房たちの間にも賴もしがられてゐるさうだ。おれは在京のうちたゞ一度、仁和寺式部卿の宮の御門前で遇つたが、東國人とは思はれぬほどみやびやかな扮裝であつた。おれは自分の鳥のやうな田舍姿を恥ぢて……はゝはゝゝ、逃げるやうにして別れた。後

で、然うしては惡かつたと思つたが……何しろおれは耻かしかつた。はゝはゝ。（と誤間化すやうに高聲に笑ふ）

四郎　平太は左馬允に任官して、その披露ながら近々に常陸へ下降すると云ふ話ではありませんか。

將門　そんな話だ。が、おれは會ひたくない。

四郎　何故でございますか。

將門　うん？（弟を見て、羞らふやうに笑つて）まあ、それは好い。おれ一人のことだ。

家の從僕、丈部の子春丸、六十三四、よぼよぼに衰へたる老人、淺葱上下にて入り來る。

子春丸　御子さま、御子さま――四郎さま。（と遠くより招く）

將門　（見て）何んだ。

子春丸　ねい、少し四郎さまに……。

將門　三郎が何うかしたのではないか。また、暴れてゐるのか。

子春丸　ねい、酒がすこし過ぎました。

將門　困つたやつだ。四郎、お前行つて介抱してくれ。おれの顏を見ると、また拗ぢ上げる。

子春丸　それに常陸側から、眞樹のとのがゐらせられました。

將門　眞樹が來た？何の用で。

子春丸　何か……源氏方の河普請のことで、仲人を頼まれたと申しました。

將門　三郎に會はせては面倒だ。四郎、はやく行け。

　　四郎は遁々として去る。

子春丸　（下手を見て）おう、そこに眞樹のとのが見えられました。

將門　三郎も連つてゐるな。困る。（と眉を顰む）

子春丸　聞きますところ、やはり常陸側ではあの川曲に堤を築いて、蛇籠を埋めるさうで御座ります。するとこの鎌輪岡崎の一帶は、眞向に水勢をうけることになりませう。

將門　（不快さうに）それは客人から聞くのだ。

子春丸　それでは分内の百姓どもは、代掻きする氣力もございますまい。………あゝあ、豐田一萬束はみな水の底だ。誰も働く者はあるまい。あゝあ。

　　子春丸は獨語のやうに呟きて、トボ〳〵と去る。

　　常陸の住人、平眞樹、武人らしき服裝にて來る。三十四五、輕卒さうな言語態度の人なり。その後より將門の弟御厨の三郎將頼、泥醉して舍弟四郎の肩にぶら下り、何か喚きつゝ出て來る。烏帽子もゆがみ、着衣も取亂して、苦しげに酒氣を吐く。筋骨飽くまで逞しく、下賤粗野とも思はるゝほどの風俗。

　　眞樹は始終、三郎の亂暴を恐るゝものゝ如く、將門は弟の爛醉を見て顏をしかめる。

將門　（眞樹の方に進みて）おゝ、稀らしいことだ。

眞樹　——いつ來ても、河を渡ると羨しいなあ。この邊は、麥のほさきまで違ふやうだ。それに大分桑をしつけたな。

將門　水田では食へないからなあ——。

眞樹　云ふ通りだ。この頃では何處でもみな、上田をつぶして畠作物にかゝつてゐる。これでは國府の收納も年々減る

わけだ。はゝはゝ。

三郎　（グツと兄を睨めて立ちしが）放せ、おれの體だ。

　三郎、介抱する弟を突き除けて、フラ〳〵しつゝやゝ離れたる河原の石に腰掛ける。」

將門　（弟を見ぬやうにして）そして今日は何か――し。

眞樹　貴所は怒つてゐるだらう。然うだとも、怒る筈だ。はゝはゝ。（と輕薄さうに笑ふ）

將門　（その笑聲を不快さうに）河普請の話なのか。おれは見てゐる――讓父子に然う云つてくれ。―

眞樹　そうれ、然うだ。おれは然うだらうと云つたのだ。はゝゝ。全體が今日までに、そこへ話をつけずに置くといふのが輕忽過ぎたよ。

將門　四郎。（苦々しげに舌打して）その醜態は何んだ。客人の前に放ち髻で。連れて行け、四郎。

三郎　好いよ、好い、好いんだ。

　四郎しきりに宥れども、三郎はふて〳〵しく動かず。

眞樹　何しろ前大掾家でも、息子とも、三人が血氣にまかせて事を計らふので、家のかどめも立たぬと云ふものだよ。おれが今日行向つて騷ぎ出したので、初めておれに口入を頼むやうな次第で、讓のとのも齢のせいか、餘りらちくちが無さ過ぎると思つたよ。

將門　然し毛野川は、常陸一國の河ではないのだ。

眞樹　然う〳〵、然うだ。

將門　あの百曲りの河瀨に、堅固な石堤を突き出したら、この豐田一帶は何うなると思ふのだ。

眞樹　然う〱、然うだよ。

將門　だから、おれは見てゐる、と然う云ふのだ。

眞樹　しかし何と云つても、あの石垣を築かせては貴所が困るだらう。

將門　築けば先方の無法なのだ。

眞樹　例へ無法にしてもだ。築いた後では話になるまい。言分があるならば、今のうち、普請にかゝらないうちに云ふべきだらう。

將門　おれには然う考へられない。無法か、無法でないか、考へるのは先方にある。こちらから彼是を云ふことではないのだ。

眞樹　然う考へるかなあ——が、護どの父子には前大掾といふ權柄があるのだよ。藤原氏を通じて國府の頭のおぼえもめでたく、娘たちはみな所在の豪族と縁組みして——現に、貴所の水守の叔父者も上總の叔父御も、護どのとは舅の間なのだ。常陸一箇國は今、源氏一族の威勢に掩はれてゐると云つても好いのだ。

將門　待てよ、客人。では護その身は、この河普請を無法とは思つてゐないと云ふのか。

眞樹　それは知らないよ。けれどもこの雪解水の前に堤普請をしないでは、前大掾家の田地何百畝は、秋の出水に砂利の底に埋められてしまふのだ。野本の館一面は、去年も一昨年も水をかぶつてゐるのだ。

三郎　(突如として)はゝはゝゝ。(と、大聲に笑ふ。四郎に制されて)だつて、だつて 聞いてゐられるか。はゝはゝゝ。

將門、不快さうに、三郎を見る。

將門　（眞樹に）それにおれは――最う一つ分らない。

眞樹　何んだ。

將門　この河普請は、和主には何うなのだ。同じ河向の常陸でも、和主の所領は瀬をまはして河上にある。こゝに堅固な石堤を築いたら、水勢が逆卷いて、おれの田地に突つかける前に、かならずお前の田に氾濫すると思ふのだが………。和主、それに氣がつかないのか。

眞樹　（少しく狼狽して）それだからだ、それもあつて來たのだ。はゝはゝゝ。この普請は、わが身の上にとつても大事なのだ。

將門　それなら最初から然う云ふが好い。和主の言葉には、いつも表裏がある。

眞樹　然うとられては困る。然うぢやないよ。おれの持分などは、貴所の所領の何箇一にも足らないほどの瘦地だ。それに大椽家の莊園と、貴所のにはさまれて、始終………何んしてゐるのだから、自分の德分などを考へるより雙方の便益をはからなければならないことゝ思つてゐる。

將門　（苦々しげに笑つて）あまり然うでも有るまい。

眞樹　いや、兩家に不和が起れば、間に立つて一等苦しむのはわしだ。何方から仕掛けても、わしの田地は踏み荒されるのだ。賴まれもしないのに斯うして出て來るのも、兩家を大切に思ふと共に………長く睦しい隣り人であつてほしいからなのだ。決して一己の利欲などは、おれは考へてはゐないのだ。

三郎　（突如として）喉が塞る。おれは叫びたくなつた。

將門　（それを睨んで）四郎、連れて行け。

三郎　おれは叫ぶ。臆病者！

將門　（ムラ〳〵する忿激を抑へて、眞樹に）それで讓は何うするといふのだ。斯う仕向けるからには、何か考へてるだらう。

眞樹　讓方の申し狀は、水捌きのために、二筋の堀割を作らうと云ふのだ。一つは小飼に流し、一つは涸沼の方に流さうと云ふのだ。

將門　たゞ二筋ぐらゐの新堀で、毛野川の出水が捌けると思つてゐるのか。

三郎　（四郎の制止を聞かず、手足を振つて）わあい、臆病者、臆病者！

將門　（怺えかねて）三郞。それは誰に云ふ惡態だ。

三郎　權門に諂つて、公家の役人を畏れるやつに云ふんだ。

將門　何。

三郎　河は間に流れてゐるんだぞ。一つの河は兩側の土を生かしはしない。取らされば取らるゝ——今の時勢を知らないか。

將門　（唾を嚥んで靜に）お前は醉つてる。それだから客人と話をしてゐるではないか。權門に諂ふとは………何事だ。

三郎　讓の背後には、常陸の國司がついてゐる。臆病者には、それが恐ろしいんだ。

將門　ぬしのやうな狂人と話しはしない。

三郎　へん。（と嘲り）京都へ行つて、大臣家の大庭にへいつくばつた時の姿を見たかつたよ。

將門　何。

三郎　ありや犬だぞ。そこへ踞ばつて見ろ。そつくり形からして番犬だ。

將門　………

三郎　大臣家ではな、家人の家隷のと云ふ名目をつけて、諸國の富をはこんで來る番犬を待つてゐるのだ。それを有難がつて、足を舐ぶり尻尾を振り、名符など奉つて得意がつてゐる馬鹿者がこゝにあるんだ。

四郎　(うろ〳〵して) 三郎、後で悔む。酒が過ぎたぞ。

將門　(三郎を睨みつゝ、蒼白な顔にて) 好し〳〵、闘はん。云はせろ………云はせろ。

三郎　(その兄の目を睨みつゝ、頬に涙を流しながら) 知つてるぞ、臆病者！お前は藤原家に、檢非違使の職を願ひ申して、體よく撥ねつけられ、恥を撥いて田舍へ歸つて來たのだらう。

將門　(ギヨツト立竦みて) 何んだ！

三郎　卑怯者！

將門　この…………！

將門顫えながら三郎に躍りかゝらんとする。三郎と眞樹は狼狽して、將門に縋りとゞむる。

三郎　畜生！………恥知らず！恥知らずめ！(三郎は自分の兩膝を掴んで、顫え泣きながら) 何んで………何んで、おれのやうな奴が家に生れやがつたんだ。

眞樹　(おろ〳〵して將門を宥めつゝ) 酔つてるのだ、あらがつては惡るい。酒が醒めれば、善い肚校なのだ。怺へろ。怺へろ。

將門　うむ、何んでもない………何んでもないんだ。(と肩で呼吸しつゝ、弟を睨む)

眞樹　聞いてくれ、今の話だがなあ。（と將門を他方に引張り行き）所詮、二筋の堀割だけでは、大川の出水の捌けないことは、讓方でもよく知つてゐるのだ。それに就いて、大椽方からわしに賴んで、そこに話をつけてくれと云ふのだ。兩家の和平のために、是非賴むといはれたのだ。

將門　だから、聞いてゐるよ……聞く。（目は執拗に弟を睨みつゝ、口先のみに云ふ）

眞樹　常陸がたで新しく水路をひらくからは、片落ちのないやうに下總がたでも新堀をひらいてもらひたいと云ふのだ。大椽がたでは內々そこの土地も檢分したが、鎌輪宿の川上から繩引きして、水を大沼へ落すやうに仕掛ければ、骨折も大したことはあるまいと云つてゐた。若し百姓が手不足ならば、人夫はこの方からみついでも好いと云つてゐた。

將門　（弟から目を放して）おれに新堀をひらけと云ふのか。自分が築く河工事のために、豐田の地に新堀をひらけと云ふのか。

眞樹　然うだ。大椽家では然う云ふのだ。

將門　お前その言分を、もつともと思つて、仲人に來たのか。

三郎　（突立つて）兄。

將門　喧ましい。

三郎　臆病者！

將門　四郎。何を見てゐるんだ、連れて行かないか。

四郎　わたくしなどの自由になる人ではありません。

四郎は河原に俯向き、小石にて砂に文字を書く。

三郎　兄。承知して見ろ。豊田の地面は、總領でも、お前一人の自由にはならないのだぞ。

將門　誰が、誰が承知するものか。（憤然として眞樹に向ふ）

三郎　兄。お前は長男だけに、まだ豐かに育つた。おれを見ろ、おれを……。おれは小兒の時から、玩具といふものを知らないぞ、五つ六つから母者に手を引かれて、足に小さな草鞋をはかせられて、この新開地の畠に麥を蹈ませられたんだ。その時の母者の言葉も、今に覺えてゐる。わたしは大人だから百づゝ蹈む、お前は小兒だから二百づゝ蹈め……然う云つてな、小さな足で麥の根を蹈み固めて開いた土地なのだ。たとひ一歩でも、一畝でも、出來るなら自儘に差配して見ろ。その時はおれにも覺悟があるぞ。

將門　引込んでゐろ。お前の知つたことではない。

三郎　その、落付きはらつた面がおれには我慢ならないんだ。

將門　眞樹。和主は好い使ひに來てくれた、禮を云ふ。然しおれには一族もあるし、伯父どもゝある。いづれ相談だけはして見るが、若し返事がなかつたら不承知だと思つてくれ。

眞樹　いや、その伯父御ならば……わしは相談の上に出向いて來たのだ。だからなるべく返事を聞いて歸りたいと思ふ。

將門　何。石田の伯父に會つた。何處で逢つた。

眞樹　伯父御は、野本の護との館に、昨日から來てゐられる。大體は、前大掾に頼まれて、伯父御がこの話をつけに來る筈であつたが、いろ〳〵仔細あつて、わしが最初の使をうけることになつたのだ。

將門　嘘を云ふな。おれは今日、石田の館に國香の伯父を訪ねたのだ。伯父は物忌みの札を掛けて閉籠つてゐるので、
　現に今のさきに、おれは歸つて來たばかりなのだ。
眞樹　いゝや、現に河向ふの館に來てゐて、わしは會つた。
三郎　（頸を上げて）兄。見ろ。それだからおれは云つたのだ。あんな素破人を賴んで何になるのだ。
將門　うゝむ、嘘ぢやない、俺は石田に行つたのだ。比都目に聞いて見ろ。
三郎　（赫つとして）行つた行かないを云ふんぢやない。まだあのおいぼれを賴んでゐるお前の馬鹿を云つてるんだ。
　四郎も顏を上げて、凝つと將門を注視する。
將門　好し、おれは行つて、會つて來る。鬼に角、伯父だ。一應の話だけはしなければならない。
三郎　（兄の前に立ち）何しに行くんだ。向ふから仕掛けて來た無法だ。こちらから謝まりに行く筈はあるまい。
將門　お前なぞと、口は利かない。（と振り拂ふ）
三郎　（また縋りついて）お前は謝まるやつだ。伯父や讓の前に出て、犬のやうに頭を垂れるやつだ。行くならおれが行く、おれが行つて話をぶち壞して來る。お前には昔物の幽靈がついてゐるんだ。おれが、目が覺めるやうにしてやる。
將門　（涙を溜めて）三郎。お前……お前、兄をそんなにまで云つて……好いのか。（とワク〳〵顫えゐる）
三郎　云ふとも、云ふ。おれは怺えられない。兄、何が何んでお前は然うまで官人が畏いのだ。（兄の目を見詰めて、ホロ〳〵と頰に淚を流しつゝ）耕し紡ぐ者は其生を送りかねて、詩歌管絃に世を送るやつどもだけが、現世の業欲を擅にしてゐるのを不都合とは思はないのか、不正義とは思はれないのか。兄、兄、（と摑んだ手を握り締め

て）お前には、何故この道理がわからないんだよ。今の盲人などには、もう人を支配する力がないのだ。彼等は
たゞうるさく律令をまうけて、田舎の富を都會へ搬ぶより外に、何んの考へもない蛆蟲どもなのだ。

眞樹　（恐れつゝ、遠くより）小次郎……小次郎のとの。

將門　うん？（と、弟より目を離さず）

眞樹　そこが出向くにも及ばないことだ。わしが歸つて伯父御にさう云はふ。伯父御の方からこゝへ來て貰ふやうに、わしから頼んで見やう。

將門　然うか。それなれば、何より、好い。（と言葉がきれぐ\になる）

眞樹　何あに、川一つだ。すぐ來てもらはふ。たゞ何うか、くれぐ\も、中に立つわしの身も立つやうに頼む。右様はおれも兩家の間に立つて、ほと／＼當惑してゐるのだ。土は持つて遁げられないから、おれなつても思案にはざけるのだ。小次郎のとの、それではな、何うか、頼んだぞ、おれを助けると思つてな、好うしてくれよ。

眞樹將門に哀願して、遁げるやうに去る。

川千鳥鳴いて、舞臺やうやく夕暮れる。將門は蒼白き薄靄のなかに立ちて、無言、鋭く三郎を見詰める。

四郎　（やゝ不安さうに）兄者、兄者………、兄者………。

長き間。やがて三郎は撥ね返すやうに叫ぶ。

三郎　何んだ、その目は。」

將門　うゝ、畜生！

將門突如として、滿身の腕力をもて三郎を撲ち倒す。

三郎　（不意の襲撃に驚きつゝ）何をするんだ。

將門　畜生、うぬ、撲殺してくれる。死ね、死ね……死ね！

血に狂ふ猛獸の如く、將門忿怒に燃えて三郎を打つ、蹴る。驚いて仲裁する四郎をも鞠の如く投げ飛ばして、夢中になつて荒れ狂ふ。

その光景を遠くより望みたる百姓二三人、舞臺に馳けつけ來りしが、手の下しやうなく、遠卷きにして眺むるのみ。

三郎も初めは抵抗したるも、兄の腕力に敵しかねて、悲鳴をあげて倒れ苦しむのみなり。

將門　（やがて突立ち、死骸の如く横はる三郎を見下し、自分も肩呼吸になりて、言語を整へつゝ、間）おれが、大臣家に、國檢非違使の職を願ひ申したのは……家の爲めだ、家の爲めだつたのだ。（間）おれは官位など欲しいんではない、恐れても居ないんだ。この……この酷しい租稅の催促に……然うでもする外は、ないと思つたのだ。

三郎　うむ……うゝむ……。

三郎は兩手を土にバタリ、バタリと投げて低く唸る。

將門　（顫へる聲）お、お、おぬしは弟だ。……弟だから何んでも云へるんだ。天にも、頭にも口のあいたやうなこと……弟だから云へるんだ。（流るゝ涙をはらつて）兄には、兄には、それが云へないんだぞ、兄を苦しめて、お前は惡鬼だ、惡鬼だ……。

三郎　うむ……うゝむ……

百姓等、布に川水など浸して來て三郎の口にそゝぐ。

將門　おれは、お前を憎いと思つてゐるんだ。憎い………!。(言葉つまりて語をなさず、焦れつたさうに土を蹈む)

この時、河の方を見てゐたる四郎來りて云ふ。

四郎　兄者。常陸の伯父のとのが、河を渡つてこちらに來られる。

將門　うん、然うか。伯父御が見えたか。然うか。わしが行く。今、お目にかゝる。

將門、慌てゝ衣裳などをなほして、上手の河原の方に走り出せしが、また戻り來りて、言葉せはしく三郎に云ふ。

將門　三郎。お、お、お前は今、わしが檢非違使の職を、大臣とのに撥ねつけられて、恥をかいて京都から歸つたやうに云つたな。それは嘘だ。おれの方から……後になつて、お斷りしたのだ。おれは恥など掻いてゐないぞ　恥など掻かないぞ。京都がいやだから、歸つて來たのだ。恥など掻かないぞ。

將門、上手より百姓に呼ばれて、狼狽しながら走り去る。

三郎、兄の足音を聞き終りて、急に啜り泣く。

四郎　(顏をさし寄せて)三郎、苦しいのか、何うした……苦しいのか。

三郎　……。(泣く)

四郎　三郎、何うしたのだ。何を泣くのだ。三郎。

三郎　………

四郎　兄の癇癪は、今日に初つたことぢやない。怒つた後は晴れるのだ。泣くことはない三郎、心配するな。和主は、家のために爭ふたのだ。

三郎 ……

四郎 (悲しげに三郎を揺ぶりて) 泣くな。誰れに聞かれても、お前が惡いんではない。何んでもないんだ、泣くな。みな、みな家のためなんだ。三郎、泣くな。

三郎 ……

三郎の泣聲次第に高く、噎ぶやうに聞え來る。

夕靄蒼し。

(舞臺ゆるやかに半廻しとなる)

河原につゞきたる疎林。落葉ふかく、青苔生ゆ。

毛野川を脚下に見ゆるほどの小山の裾なり。舞臺空虚。川千鳥の啼音を聞き、遠き水車の音。

郎從黑人、比都目の二人。當所より持ち來りしところにて、牀几やうのもの、毾㲪(かもしとね)など捧げて、上手の林中に一度入りしが、暫くして品物を持ちたるまゝ出で來り、下手なる家の方へ去る。舞臺また空虚。

やゝありて林中より、伯父なる常陸の大掾平國香、將門を從へて話しながら出で來る。國香は七十に近き年配。狩衣姿なれども、官職の威權を保ちて、品位をおとさゞる服裝。人物はやゝ老衰して、腰など少し曲れり。白き髯。貴族らしき面貌、態度も優雅なり。

國香 いつも和主に聞くことぢやが、それはあられさうな相談ではない。

將門　しかし――。

國香　銘々おのが土地をもつて、各處に割據すれば、例へ兄弟と云ふても、もう一つ心に纏めらるゝものではない。上總の叔父は上總、羽鳥の叔父は羽鳥、村山にしろ相馬にしろ、みなわが家の富、わが家の田面よりほか見えなくなるのだ。

將門　然し叔父上は一門の長者でござります。ほかの叔父たち五頭は、あなたの下知につくはずのものと思ひます。

國香（響きある聲にてから〳〵笑つて）大昔にはそんなこともあつた。氏と族とに一家一族がまとまつて、家長の下知のもとに働いてゐた時代もあつた。けれども唐風の行はるゝ御代となつては、兄弟親子とてもみなちり〴〵に、おのれの土を探しに出るやうになつたのだ。兄弟は父の家を出る時、もう既に他人になつてゐる。

將門　けれども、わたくしは何う考へても、昔の制度の方が懐しいと思ひます。銘々この世に一人立ちして、爭ひ、凌ぎ、憎み、咀ふ……そんな不安な日を送るよりも、一門親類が一つ盾、一つ棟の下にまとまつて、互に敬ひ互に憫れむと云ふやうにするのが、正しくもあれば又うるはしいことだと思ひます。舍弟が兄に背くやうになつてから、世の中は斯う亂れて來たのではないでせうか。

國香　さあ……何う云ふものだなあ。（と林を出づる）

將門　他家は兎に角、伯父上、わが一族だけはその結黨が出來ませう。羽鳥、村岡、豐田、大串、相馬、みな伯父上の弟たちは、伯父上の館石田を中心にして常陸下總の各地に孤立してゐます。その分たれた力を伯父上の手に集めれば、何者の侵略をもゆるさない、強い勢力になると思ひます。

國香　若し、然う出來ればの話だなあ……。（と歩む）

將門　（その後を追ふて、熱心に）伯父上、然しわたしは出來ると思ふ。あなたの決斷一つです。それに、われ〳〵の家も皇室から分れて、三代になります。あなたや父の代までは、百姓どもも御子の裔として崇めてくれましたが、この頃はもう次第に疎略になつて……腹立たしいことばかりです。次の代になつたら、農民どもにどんな輕侮をうけるでせう。わたしは、考へても口惜しい。何事をするも今だと思ふ。すこしでも皇族の裔といふ光りの殘るうちと思ひます。

國香　土着の農民は、われ〳〵京都くだりの者を憎む筈だよ。

將門　伯父上、あなたさへ踏切つて下されば、羽鳥にも村岡にも上總にも、わたくしが行向つてはたらきます。叔父たちにしても、みな近所の豪族と結んで、やつと不安なその日を送つてゐるのです。あなたを長者と仰いで外の敵を禦げば、力強い麗はしいことです。

國香　小次郎。和主はわしを立てゝくれるか、わしはそんな働きのある者ではないよ。はゝはゝゝ。上總にも羽鳥にも、始終優柔さを歯痒がつてゐられるのだ。それで好いのだよ。はゝはゝゝ。（と、朽木に腰掛ける）わしにはとても荒々しい土の上のあらそひは出來ない。もう年だ、疲れてゐるぞ。

將門　けれども…………。

國香　わしには何うも、この東國の氣風が適はないと見える。やはり戀しいのは京都だよ。十六の歳に京を出て、長年東國に流浪した。せめてもの晩年だけも、都近く送りたいと思つてゐる。

將門　伯父上、あなたは氣が弱過ぎます。

國香　然うぢやない。わしは世上の爭闘より、靜かに風月を娛しみたいのだ。去年であつたか、紀の貫之卿の任國土佐

の國より歸京する女文字の日記を讀んでな、わしは染々と身のさすらひの寂しさに、胸をせめられた。貫之卿とはむかし一緒に、貴船詣でしたこともあつた。

將門　はゝはゝ。伯父上は昔の京都にあくがれてゐるのだ。

國香　四季のうつり變りの明かなること、都のやうな土地はない。霧も霞も京都だ。はら／＼と北山しぐれして、山々の紅葉が落日に色づく夕暮……武德殿の松原から、ほんのりと朝霧に明けゆく大宮の神々しさを拜む時……ほとり、ほとりと、屋根をつとふて土に落ちる雫の音が、今でも斯う……耳に聞えるやうな氣がする。

將門　わしは又、眠ぶたくなる。雷鳴（かんなり）もなければ、夕立もない國だ。

國香　都びとのゆたかさは、天地自然の風物と爭はずして、ゆつとりとその自然のなかに、われを順應させやうとするところにあるのだ。阪東びとのやうに、野とも山とも鬪ふ氣では、一日も京都の生活は出來さうにないな。はゝはゝ。

將門　何んだか知らないけれど居棲（ゐす）みの土地で、胸膈がひろ／＼としません。それに一體、都びとには男ごころが失なはれてゐます。みな女ごころに媚び過ぎてゐます。

國香　お前には、然う見えるかも知れないなあ。はゝはゝ。

將門　伯父上。あなたはそれほど浮世の所務が煩はしいなら、上總の叔父御を目代にして、あなたは靜かに詩歌風月をたのしんでも、一家の結束がつきませう。現職にもゐながら、前大椽の讓父子の濫妨狼藉を拒ぎかねるのは、國司（くにつかさ）としての伯父上の恥辱になりませう。それもこれも、みなあなたに武力がないからでせう。

國香　もう好い。わしはたゞ貞盛の出世を待つばかりだ。彼が京都に時めけば、かならずわしを迎へてくれる。

將門　伯父上、それでは一族の者は何う浮沈するのです。

國香　小次郎、和主は餘りに世事に齷齪するが、今の時代はそれほど望みある時代ではないぞ。佛の教へも五々百歳と云つてな、正法千年像法千年を過ぎ、二千年にして鬪爭堅固の末法の時代に入ると現示してゐる。もう今年で佛の滅後二千三十何年——世は寛平の頃から、明かに末世になつてゐるのだ。今の世の亂れは、佛が在世の時からの約束なのだ。心ある人はみな後世に望みを絶つてゐる。靜かに身後のはからひをする時だ。わしは貞盛にも、それは好く聞かしてゐるのぢや。——明るいと思つたら、薄月が出てゐる。(と立ち上がる)

將門　然し、差當つての話、護への話はして下されるでせうな。

國香　それは云ふとも。

將門　先方がしきつて非法に出るなら、其時はわたしにも覺悟があります。わたしは何んな場合にも、彼等の無理を忍るしませんよ。弓矢をもつてでも爭ひますよ。

國香　そりや分つてゐる。お前の氣性は護も恐れてゐる。

將門　伯父上はその場合、いかに强請されても、護に荷擔しませんね。舅の家を敵とするやうな事はありませんね。

國香　小次郎。それは和主が知つてゐる筈だ。

將門　けれども伯父上は弱い人です。

國香　大丈夫だよ。はゝはゝゝ。兎に角、前大椽にはよく〳〵話をつめて、豐田分に災害のないやうに賴んでみる。いや話す。たゞお前の方も、血氣に騷ぎ立てないが好いぞ。近頃の農民はみな自暴自棄になつてゐるから、頭取る者だけ心を締めなければならないぞ。

將門　それは、心得て居ります。

國香　供の者が、松火をもつて來さうなものだ。靜かな夕暮だ。少し歩かうか。

將門　はい。

　　二人は疎林を河原の方に歩む。

國香　(ふと立止り)そしてお前は、貞盛と幾つ違つた譯だ。

將門　六つ違つて居ります。

國香　するとお前が父に別れて、わしの館に引取つたのは。

將門　十……四の時でした。太郎は九つでした。

國香　よくお前は貞盛を可愛がつてくれた。童の時は弱い子でなあ。

將門　しかし氣高い、物思ひの深い子でした。指先など白く女のやうにしなやかで、わたしはいつも幼い從弟の前に、この手を出すのを恥ぢてゐました。

國香　はゝはゝ。

將門　俯向いてものなど考へる時、黑い睫毛が、匂はしく影をつくつて。……わたくしは今でも時々、思ひ出します。

國香　何故去年の上京に、和主は貞盛を訪ねなかつたのだ。

將門　わたくしが從弟を……?それは……訪ねる氣になりません。(と羞らひ口籠る)

國香　何うしてだらう。貞盛の方では、その後の書狀にも殘念がつて來てゐるが――

將門　何んですか、その時は……氣が引けて伺はれませんでした。

國香　はゝはゝゝ、可笑しげな男だ。

將門　はゝは……はゝはゝゝ。

國香　然し、もう歸るよ。あと……十四五日だ。

將門　えゝ……。（赤くなり俯向く）

國香　はゝはゝゝ。

郎黨松火を持ちて迎へに來る。

（幕）

第二幕

時――前幕より二十日ほど過ぎたる日。午後。

處――豐田本鄕なる將門の館。今の向石下村の附近。

藁葺きなれども京都貴族の四阿造りを模したる建築にて、棟高く柱太く、宏壯なる家の構ひなり。舞臺正面は謂ゆる母屋にて、階段つきの床高く、上手に向ふ細殿ありて、東の對の屋に通す。但し勾欄をつけず。母屋の下手は切かけ垣にて圍はれ、中門あり。その外部に輿寄、厩などあるこゝろなり。

前栽には植木二三種。乾葉、蒜苗など掛け忘れられたり。

母屋の正面は塗籠（主人の寢所）なるも、壁代の唐紙障子を立てありて見えず。廂の間は略されて、直ちに簀子となる。四方は板蔀を引き上げて、簾を垂れたるところもあり。屋内の調度器物は京風なれども、素朴にし

て纖細ならず。長押には弓矢、胡籙、その他

郎從作人など十二三人、廣庭に居みだれて、武具馬具の修繕をなしてゐる。鋒に淬する者、征矢を矧く者、弭を卷く者、鎧の革胴を繕ふ者、鞍の手入などする者あり。そのなかに前に出たる比都目、子諸、黒人などの作人郎從も立ちまじる。

郎從丈部の子春丸、旅でたちにて外より疲れて歸り、階段に腰かけて休息してゐる。

比都目　（子春丸の前に立ちて）然うか。そんな樣子か。

子春丸　まづわしは、氣もないと見た。國府の廳も深閑としてゐて、官人の出入りにも、常とかはつた模樣がなかつた。

比都目　厩を見たか。

子春丸　それも氣をつけて見たが、やはり例の通り、馬は大牧に放し養ひであつた。

黒人　それではこりや……押して來さうもないな。

子春丸　おれも然う思ふ。三郎の御子が、騷ぎ過ぎさつしやるのだ。

比都目　うむ、來ない〳〵。（と笑つて仕事に戻りつゝ）常陸百姓は全體鼬鼠の性だ。追はれに逃げる時でなけりや、頭を上げないよ。はゝはゝ。

黒人　ふだん下總百姓はがさつの强盜のとぬかしくさるが、斯う云ふ時しやツ面を見てやりてえもんだ。

子諸　わるく都近い顔をしやがつて。常陸者はあれで底が悪いぞ。

作人甲　川手前の者は口が荒くても、あの諸ほど裏腹がねえだ。なあや。

黑人　いゝ氣味だ〱。はゝはゝ。女子小兒まで喜んでゐるだ。

比都目　これから常陸百姓にや、笠をとらせべえよ。

子春丸　何んのもう、笠は脱いでゐる。はゝはゝ。野木、石川、大串、筑波眞壁の郡まで焼拂はれても、仇返しにも來ないのだ。常陸も源氏もあつたものではない。

黑人　ほんとに、いゝ氣味だつたな。はゝはゝ。河越しに睨め合つてゐた永年の遺恨が、さらりと晴れたやうな氣がする。なあや、皆。

一同　然うだ〱。（一同萬鳥のやうに笑ふ）

比都目　もうこれで、豐田百姓の世だ。官の司が來やうと檢非違使が來やうと、怖れるところはねえ。稲米はみな百姓のものだ。なゝはゝゝ。

子春丸　やれ〱。（と背を伸ばして）青草の路はくたぶれる。そして、館のとのは、まだ那須の温泉から歸らつしやらぬのか。

比都目　大方まだ野山を狩り暮してござるべえ。

子春丸　あれも病ひだなあ。殺生と女房ごとには、目から血を吹くまでは突き詰めてみる人だ。はゝはゝ。

一同笑ふ。

弟三郎將頼、栗栖院常羽御厨の別當、多治經明と共に、話しながら出て來る。經明は二十八九、京都人なれ

ども長く東国に住みて、態度も無骨粗笨にて、音声ことに大なり。狩衣に腹巻。

経明　しかし兄者も、まだ那須から歸らぬとは、ちと等閑過ぎるな。

三郎　(圓座に導きつゝ) 兄には時々、不思議なわる度胸があるんだ。

経明　兄者は勇者だよ。たしかに勇者だ。(と笑ひつゝ胡坐を組む)

三郎　わたしとて、兄を臆病者とは思ひはしない。唯しかし……

経明　急に兄者に勿體をつけたな。はゝはゝ。

千春丸　(手を擦つて) ねえ、三郎のとの。(と立つ)

三郎　聞いた、いま聞いた。貞盛は押寄せる氣がないと云ふのだらう。

千春丸　死に行かれた父御さまの佛教供養に餘念もござりませぬ。京方より何んとか云ふお使人を、遙々とお呼迎へなさるさうでござります。

経明　平太も都人になつたなあ。はゝはゝ。父の仇を何う見る氣だ。

三郎　(笑つて) 然う云ふ貴所は何處人なんだ。

経明　おりや坂東人の灌頂をうけたのだ。生温るい公家づきあひはもう厭だ。和歌を詠まねば女子のできないやうな國は、おれ等の住む國ぢやないよ。はゝはゝ。

作人等は仕事を片付け初める。

三郎　しかし然うまで鳴を鎮めてゐるのは、貞盛の謀計ではあるまいか。彼にしても人の子だ。人に打たせてわが名を何んとする氣だ。或ひはこれは、公家に媚つて、問罪の官使でも申し下すこゝろかも知れないぞ。

經明　兎に角、兄者は急ぎ京都にのぼる用がある。牧の馬を十頭も曳いて、砂金の百斤も貢へばそれで好いのだ。今の官府ほど請託のきゝめのあるところはない。諸國の群盗もみな賄賂でゆるされてゐる。ことにこの家などは、太政大臣家の息がかゝつてゐるのだ。

三郎　おれも然うは思ふ。常陸方の愁訴だけを取上げられては、この方の落度にならうも知れない。何れにしても、早く兄が歸らねば困る。

經明　三郎。饗應は何うした。

三郎　おゝ、その事だ。子春、北廂の間に饗設をしてくれないか。

子春丸　ねえ。(と去る)

經明　それにしても、兄者は、貞盛の下國を知つて那須に旅立つたのか。

三郎　知つて居るどころか、まるでその時は逃げるやうな騷ぎであつたよ。

經明　逃げる?

三郎　その狼狽ぶりがだ。今日貞盛が常陸に着府したと聞くとその晩、急に思ひ立つて兄は那須の湯に發足したのだ。

經明　和主、それを止めなかつたか。

三郎　わしは四五日、兄と口を利かなかつた。兄はたゞ護等の本據、野本の館を燒き拂へば、それで郎黨を引き上げるつもりであつたといふのだ。それをわしが先に立つて、大串石田まで狼藉を働いたといふ心らしいが、これは兄が、伴類郎黨の心を知らないと云ふものだ。川を隔てた常陸と下總とは、昔からの敵地だ。相互の鬪憤が百姓どもの骨の髓まで染みこんでゐるのだ。

經明　山を隔てゝ故人あり、河を渉れば敵地なり——歌にさへ云つてゐる。

三郎　兄はそれを、わしが百姓を煽り立てでもしたやうに思つてゐるらしいが、おれは何も云はなかつた。何う憎まれても、わしは爲るだけの事は爲る。

經明　兄者は、伯父の大椽を死なせたのを悔いてゐるのではないか。

三郎　あれは伯父が悪いのだ。舅のとのゝ爲めにも、源氏には縁座しないと、伯父は堅く兄にも誓つてゐるのだ。それを護の館の燒跡から、その義を背ふた舅の手で、おのが屍體を堀り出されるやうにしたのは、伯父の心があさましいからだ。權門利欲に媚びて、伯父は舅の家を奪らうとしたのだ。死骸を焦土の中に見た時には、兄も心から伯父を賤しめ憎んだやうであつた。（と不自然なるほど激昂せる調子にて云ふ）

經明　何んにしても、下總びとの頭を擡げる時が來たな。この勢に乘じて、多年侵略されてゐる川下前の土地を、常陸源氏の手から回復しなければならないのだ。力の世の中だよ、強い者が正しいのだ。

三郎　然うだ、おれも然う思ふ。

經明　今の政府は京都市中の盗賊すら追捕することが出來ないのだ。

三郎　然うだ、たしかに變革の時勢になつてゐる。

經明　こゝだぞ、三郎、こゝだぞ。

三郎　然うだ。然うだ。（と、強くうなづく）

突然、耳近き地藏院の鐘三つほど大きく鳴り響く。

三郎　あ——。（と頭をたげて）石毛寺の鐘だ。

経明　斥候の相圖だ。寄せて來たのかな。（と立つ）郎從作人等も武具をかなぐり投げて、「常陸勢だ。」「馬に鞍置け。」「來れば子飼の渡だ。」「押せ、押せ。」「馬だ。馬、馬。」など叫び廻はりながら狼狽する。

経明と三郎とは細殿の方より駈け出し、下人等は叫びつゝ中間より頽れ出づ。外にも喧騷の音聞え、厩には馬の嘶く音、武具の音など暫く聞えて、舞臺は空虚。

子春丸、中門と反對の方より出で來る。

子春丸　との、四郎のとの。北庇の間の饗設は出來ました。との……との……。あ、今の撞鐘で飛び出さしやつたか。來ないく、來るものか。この黒い目で見て來たのだ。はゝはゝ。來ない、來ない。

子春丸、獨り呟きつゝトボくと去る。

舞臺空虚。やゝ長き間ありて、外には騷音ピタリと止む。

將門、東の對の屋の方より廊を渡りて、生後百日ほどなる嬰兒を産衣のまゝ兩手に高くさしあげて愛し笑ひつゝ出て來る。狩裝束にて胡籙を負ひ、行縢をつけたり。

その後より乳母、羽生の女、鄙びたる田舍姿にて、心配さうにうろくして跟いて來る。

將門　そうら高いく。そうら、笑へ、笑へ。はゝはゝ。そら笑ふのだ……笑ふのだ……笑ふのだ。はゝはゝ。

乳母　申し、との、との。吾子がものに怖ぢさせます。館のとの。

將門　心配するな。もう吾子も日の目を見ていゝのだ。垂れ籠めてばかりゐては、吾子も男そだちはせぬぞよ。なあ、吾子。はゝはゝ。

將門、嬰兒をあやしつゝ簀子を歩み廻はる時、對の屋に住む將門の妻（東の君と呼ばる）不安さうに跟いて來る。東の君は叔父良兼の娘にて、將門とは從妹にあたれり。二十一歳。打衣に袴、やゝ色目うるはしき表衣を着たり。初めは露出をはゞかりて、御簾にかくれて姿を見せず。

東の君（壁代の間より羞らはしげにさし覗いて）吾子よ、吾子よ。

將門　吾子は厭だ、厭だ。（笑ひつゝ歩み廻はる）

東の君　百日の産養ひがすまぬうちに日を見ると、鬼に憑かれると云ひます。

將門　吾子は東人だ。鬼など恐れはしないなあ。

東の君　それでも外はまだ風も寒い、吾子よ。

將門　母君こそ御簾を出てござれ。羞かしくもないわが男に、顔を見せるを羞ふさまするは京都風俗といふものだ。吾子は嫌ひだ、なあ。はゝはゝゝ。

東の君　わたくしとて、出れば出られます。たゞ女の習はしゆゑ、それで。

將門　惡い習はしだ。出ろ〳〵、なあ吾子。

東の君　この頃は事につけて、都の手ぶりを破るのが面白さうに見えます。

東の君、笑ひながら几帳の間より半ば姿を出す。

將門　その答だ。和主とてもとは上總乙女なのだ。はゝはゝゝ。（と歩みつゝ、外方に耳を立て）騒動は止んだな。おれは知らないから撞鐘を突いたのだ。久しぶりにわが本郷に歸つた嬉しさに、着到のつもりで鐘をゴーンと突いたのだ。すると何うだ。人は騒ぐ、馬は驅ける。はゝゝゝ。面白い見物であつた。はゝはゝゝ。

東の君　三郎のとのは、お留守中の館を心配して、夜籠油斷の用心に氣を配り、諸街道へは始終物見の者を出して置かれました。

將門　然うか………。

東の君　それにお出ましの前から、何となく御不興らしく見ましたゆえ、餘計こころをつかつてゐるやうに思ひました。

將門　おれを、臆病者とは云はなかつたか。

東の君　いゝえ。たゞ旅先のお身を心に掛けてゐられました。

將門　あいつは何にか云ひたいやつなのだ。おれはあれの目を見ると、又何を云ひ出すかと、體がひやりとする。あいつ、嫌ひだ。

東の君　けれども兄思ひの心は、誰よりも頼もしく見えます。

將門　――嫌ひだ。

乳母　（遠くから手を伸して）との、それ、吾子君がむづからせます。

將門　おゝ、おゝ、惡い〳〵。（と抱き歩いて）吾子を忘れて惡かつた。惡い、惡い、………おゝお惡かつた。（と簀子に出て揺ぶり歩く）

中門をくゞりて弟の三郎、急ぎ足に入り來る。

三郎　何、兄者が那須から歸られたと。然うか。何處だ。（門外に喜ばしげな聲を聞かせて後、走り入る）

將門はその聲を聞いて、本能的とも云ふ一種の憎惡を感ずるものゝ如く、その方に耳を立てゝ眉を曇らす。

三郎　おゝ兄者、歸られたか。見らるゝ通り、館は無事だ。留守に怪我あらせまいとして、おれはどんなに辛勞したこ

とか——歸つてくれてほつとした。

将門　(悠々と) 御苦勞だつた。

三郎　しかし常陸方は手も出ないぞ。まづその安堵からしてもらひたい。それに聞けば、相模の國にも群盗が起つて、國府津の穀倉を燒いたさうだ。武藏國でも百姓が一揆してな、官物を横領して貢進を拒んだといふことだ。兄者、何うだ。わしが云つた通り、時代が變つて來たぞ。おれは兄者に、自慢しやうと思つてゐた。

将門　うむ、そんな話だつたな。

三郎　それに、なんだ、西國には海賊がはびこつて、貢船の通路がとまつたといふことだ。御厨の別當が、京都の注進によつての話だから、これほど確かな話はない。何うだ、兄者。斯うなれば藤原も太政官もあつたものではあるまい。はゝはゝゝ。(と得意げに笑つて) けれども京都はまだ目が覺めないぞ。相變らず諸寺諸山の祈禱と御修法とで、この動亂一揆を鎭めやうとしてゐるのだ。それに兵衛府の官人どもの足腰のないには呆れる。暴徒追討の官符をうけながら、みな逡巡して征討に發向するものはないさうだ。ことに伊豫の海賊は倔強なさうだ。

将門　聞いたよ。その話はもう那須で聞いて來た。

三郎　ほう早いな、誰に聞いた。

将門　直樹が來た。

三郎　あいつ、那須へ行つたのか。

将門　うん。一昨日來た。

三郎　あいつ——然ういふやつだ。おれ等が寄せつけないので、兄者を口說きに行つたのだ。白い歯を見せると、何

をたくらむか知れないぞ、兄者。

將門　强勢な隣り人をもつ者には、みなその悲しみがあるのだ。動かない土をもつてゐるためなのだ。

三郎　兄者。また眞樹のやつに引込まれては不可ないぞ。

將門　誰が……。(苦笑して、妻に) 四郎は何うした。やはり菅原の學問所に精を出して居るか。あゝあ、あれには學ばせなければならない。(と嘆息。兒を抱いたまゝ胡坐して) あゝあ、やはりわが家だな。旅籠の飯は身にならない。

三郎　そして眞樹は今日――。

將門　だが、照射と云ふ獵は――(弟と同時に云出せしが、强いて調子を張りて三郎を沈默させ) 面白い獵だ 照射は面白かつた。しゝ垣と云つてな、山路に垣をゆつて、火串といふものを點してな、火に迷ふて來る牝鹿を待つのだ。夜――深更だ。水に濡れたやうな木下闇が、顔に觸れるほど重く暗いなかに、鏑矢をつがへて、垣根に身を寄せて、呼吸もつかずに鹿を待つ間の心持が、何んともどうも……言葉ではないなあ、はゝはゝ。青草の匂ひが急にムンと胸につまるやうで、動悸が皷のやうに鳴るのだ。はゝはゝゝ。(と壯快に笑つて) すると鹿垣の上に、突然に、きらりと闇に光るものがある。途端に引絞つた征矢を、へうと放つ。ドサリと土に音して、大きな牝鹿が倒れるのだ。はゝはゝゝ。

東の君　その闇に光りますのは？

將門　目だ。

東の君　目……？

將門　孕み鹿の目なのだ。はゝはゝ。獵師の話には、産のなやみに山を逐ふて、牝鹿を探しに來ると云ふが、そんな事が……やはり火串に引かれて來るのだ。馬鹿な獣よ。はゝはゝ。然し如法の闇だ、狙がない、火影にチラと動く鹿の眸を的に矢を放つのだ。

東の君　（怯えるやうに）まあ……孕み鹿をおとすのでございますか。

將門　あゝ悪かつたか。はゝはゝ。上﨟がたの前でいふことでない。しかしわしの射るのは、都びとが歌に詠むやうな雅びな獣ではない。やはり田畠を荒しに來る、憎い畜生を打殺すのだ。はゝはゝ。

妻戸の方に經明の聲聞ゆ。

經明　三郎。兄者が歸つたさうぢやな。（と入り來つて）おゝ、小次郎。

將門　御厨の別當か。いろ〳〵世話であつた。

經明　內君もそろふて――睦じさうだな。狩は何うだつた。

將門　今その話をしてゐるところよ。七ツ星の鹿のしゝを八九匹も落したらうか。

經明　それは手柄だつた。手柄と云へば、この頃そこの名聲はどうだ。下總百姓一體は、そこを蘇へりの救ひ主のやうに云つてゐるぞ。長年苦しめられた常陸から自由になつた百姓どもは、雷雨をよろこぶ稲穂のやうに氣負ひ立つてゐる。

將門　また油をかける。

將門は力なく苦笑ひして、膝の兒をあやして居る。

經明　しかし、止めやうと云つても弦をはなれた征矢だ。中途で止まるものではない。遣るところまで遣つて見なけれ

ばなるまい。無論、下總方は一致してゐる。みな方人だ。川手前の土地を回復して、國府にせまつて安堵の…をとらないうちは、百姓ども丶枕を高く寢られぬと云ふものだ。こ丶で逡巡しては、常陸を燒亡したのも伯父を殺したのも、みな無駄ごとになつてしまふぞ。

將門　(チクリと心を螫されしように)經明、その話はもう好い。

經明　三郎もどんなに氣を揉んでゐるのだ。こ丶で挫けては、せつかく聽かした武勇の名に傷がつく。貞盛が怯懦で、合戰のこ丶ろがないのは貴所の僥倖だ。押せ〱、氣力を出せよ。

將門　今日は旅歸りだ。ゆつくり聞くよ。なあ――はゝはゝ。(と俯向いて、太き指にて乳兒の頬など突つついてみる)

經明　けれども、まさかにそこは、貞盛を恐れてゐはすまい。

將門　おれは恐れはしないよ。(狼狽したやうに顏を上げ、振つて見せる)

經明　例へ武官でも左馬允でも、あいらは京都をはなれると、百姓一人にも劣る人間なのだ。今頃はお前の名を聞いて顫え上つてゐるに相違ない。

將門　(妻に氣をかねて、キヨト〱しつゝ)わからない男だ。お、おれは、貞盛などを云つてゐるのではない……外のことを考へてゐるのだ。

經明　今になつて、何を考へる。

將門　(妻に鋭く)おい、何を聞いてゐる。おれはまだ裝束のたゝなのだ。――空腹だ。

東の君　それでは、吾子を連れて參ります。

將門　うむ、然うか。（と慌て、立つて、嬰兒を妻に渡す）

東の君去る。

三郎、凝つと先程より兄の爲體を見詰むる。

三郎　兄者。

將門　何んだ。

三郎　兄者は何んでこの頃、然う姉君をはゞかるのだ。

將門　おれが憚かる？

三郎　憚かつてるとも――恐れてゐる。兄嫁の前で貞盛の名を云ふと、兄者はいつも顏色を變へる。

將門　（狼狽して）おれは合戰の話が嫌ひなのだ。女小兒の前で誇りらしく、面白づくに話すことではないと思ふ。

三郎　然うぢやない、兄者は、姉君が一度貞盛と婚を結ぶ約束があつたので、それを恐れてゐるのだ。それなれば何故、上總の叔父が不承知なのに、無理に姉君を盜み出したのだ。

將門　夫婦のなかに、お前の言葉は入れないぞ。

三郎　夫婦のなかではない、お前の心を云つてるのだ。お前は上總の叔父が怒るか責めるかして來れば、却つてしぶとく逆ふ男だ。叔父が佛法顏して、その後ち知らぬ顏してゐるので、お前は次第にそれが苦しくなつて來たのだ。臆病者といふのはそれだ。

將門　何。何んとでも云へ。

三郎　今更ら悔んでも、盜み出した後ではないか。若し罪があるなら、その罪は悔んで消えるものではない。お前の

る事は、何日も顚倒してゐる。姉君を上總へ盜みに行く時の、あの狂はしさを考へて見ろ。まるで猛獸ぞ。

將門　（顏の汗を平手で撫で、經明を見て）はゝはゝ。（と愚かしく笑ふ）

經明　これ三郎、和主も最う潔山だ。何うして然う兄者に突き當りたいのだ。小次郎も然し、決斷がなさ過ぎると思ふなあ。何うして然う踏切りがつかないのだらう。あの日、野本の館に襲ひかゝつた時のやうな、あの勇氣を出せ。

將門　打明けるがなあ、經明。おれはそれを褒められると、實は苦しいのだ。川を越して堤普請の百姓を逐ひ散らすまでは、まだ好かつたのだ。それ、芥川の土手に折敷いて、館の動靜をうかゞつてゐた間があるだらう。あの時おれは、ひとりでに奥齒がカタ〳〵と鳴つてな、鉾の柄にすがらなければ、立つてもゐられなかつたのだ。誰の顏もみな眞蒼に吊り上つて、目ばかりキラリと光つてゐた。

經明　そりや誰でも……みな然うだらう。

將門　おれは苦しくつて、土に唾液ばかり吐きながら、今遁げやう、今引かうと、それはかり考へてゐたんだ。引けば背後が恐ろしいやうな氣もした。その時だ、和主來ておれの肩を輕く打つた。

經明　然う、和主は飛び上がるやうに驚いたつけな。

將門　お前は何んとか云つたのだらう、それがおれには聞えなかつた。夢中になつて館の方へ駈け出した。頭の上に日のあるのは知つてゐる。それでも目先が土煙りのやうに暗くつて、丁度落葉時の暮方ぐらゐな足元だつた。おら目をつぶつた、死んだち好いだらう……と、然う思つた。雨のやうに射かける征矢のなかを、何うして隙を越え

て、何うして土居に取りついたか、今考へてもまるで夢中だ。(經明の言はんとするを抑へて) だからな、だから……おれは今でも、考へると腸内が冷たくなる。勝つたから好い。勝つたには相違ないが……しかし、おりや矢張りひやりとする。夜寢てゐても、ひやつとして眼が覺めると、胸のこゝが火のやうに熱いのだ。おれは勝つたぞ、死なゝかつたと云つて自分を紛らして見ても……何んだか、メク〳〵と眼の裏に熱い涙がにじんで來るのだ。(羞るやうに横向きつゝ、空に手を振つて) いや〳〵、それだからおれは、合戰が恐いと云ふんぢやない。恐いと云ふより——何か以上のものがある。何と云ふか……おれには言葉がないが、たゞ勝つと云つても、負けると云つても、その時の機分、拍子……そんなものでもない。もう少し上から來るものだ。斯う……上からおれを支配しゐるやうな、何か……別な力がある。慥にある。

經明　(引入れられて、嚴粛に) うむ、その心持はおれなどにもわかるやうな氣がする。(と頷首く)

將門　わかるかい、經明。おれは合戰が恐いんでも、この後戰ひを避けやうと云ふのでもない。たゞ、なんと云ふか、……あの時、糞! 何うともなれ!と目をつぶつて、おれは夢中になつて吶喊して闘つたが、おれはその夢中になつてゐた時の間を思ふて恐しくなるのだ。好いか、經明、おれはその、おれの知らない間に、勝つてもゐられゝば、負けてもゐられるんだぞ。生きてもゐれば死んでもゐるんだ。何うだ、恐しい事ではないか。おれはそれを思ひ出すと、身が顫へて來るんだ。わかるか。つまり自分が恐しいと云ふのかも知れないな、自分に支配されずに、何か知らないものに支配されて働いてゐる自分——恐ろしいと云へば、それが恐しいのかも知れない。そして又、おれほど直ぐ夢中になつて、前後を忘れてしまふ男はないのだ。三郎に今嘲られた、上總の娘を引取つたでも然うだ。おれは……あれに戀してゐたには相違ない。しかしおれは……自分の無骨を知つてる、私

さも知つてゐる。恥ぢて、抑へて、自分と鬪つてゐた時の苦しみが遙かに長かつたのだ。その苦しみに耐えかねて、おれは最後に……到頭おれは、やはり自分の支配を忘れる時が來てゐた。そして自分に復つた時には、三郎などに妻を盗んだと云はれても、奪つたと云はれても、爲方のない方法をもつて、おれは叔父の手から娘を奪ひ取つてゐたのだ。おれは何うして斯う……常に自分を失ふのだ。經明、おれは那須の湯につかつて、おれは毎日それぱかり考へてゐた。

經明　それは、斯う云ふのぢやないか。和主は伯父御を殺した、その悔恨に心を噛まれてゐるのではないか。

三郎　わしも然う思ふ。

將門　舍弟は口を出すな。（と激しく叱り）國香の伯父の死んだのは、おれの知つたことではない。伯父は自から恥ぢなければならない。

經明　それならば、何も然う氣を苛つことはないではないか。

將門　（頭を抑へて）なんだか、おれにはわからない。考へるほど頭がグラ／＼して、總べてがわからなくなるんだ。

經明　何うしたんだよ、小次郎。

將門　あゝあ、おれにはわからない／＼。（後方に倒れる）

文部の子春丸、入り來る。

子春丸　三郎のとの、暖めた酒が冷めます。

三郎　うん、然うだつたな。

子春丸　それから作人等にも、粥酒をやる日でござりますか。

三郎　うん、然うだ。

千春丸　氣の立つてゐるところに酒など飲ませて、又悪騷ぎになります。

三郎　でもおれが、約束をしたのだ。

千春丸、去る。三郎と經明は立上る。

將門　（倒れたるまゝ獨語のやうに）それに………貞盛の心も考へなければならないのだ。

經明　貞盛！（見る）

將門　おれと貞盛とは、あの時の前までは、何んの怨みも憎みもなかつたのだ。それなのに、いま貞盛はおれを父の仇と憎まなければならない。おれも又、彼に押掛けられゝば、彼と戰はなければならない。若し押し寄せて來なければ、貞盛は一代不覺の名をとつて、世を狹くしなければならない。あゝあ、何うすれば好いのだ。それが皆、おれが自分の支配を失はれてゐた間の出來事の結果なのではないか。おれは自分といふものが厭になる。呪はしくなる。

二人は見詰める。

將門　貞盛だつて、おれを本心から罪ありと云ひ得るだらうか。おれも又、貞盛を本來の敵として打物をあはせることが出來るだらうか。あゝあ、おれは苦しい……苦しい。

將門、疊に腕を投げて、呻きつゝ寢返りする。

經明と三郎は、目を合せて、うなづきつゝ靜かに去る。

中門の外ガヤ〳〵と騷ぎて笑聲聞ゆ。作人等の酒初りしなり。

長き間ありて、東の君、塗籠の方より出づる。

東の君　との。裝束をもつて參りました。宿直衣とお換えなされませ。風が寒くなりました。（傍に來りて）との、との………。（と揺り起さうとする）

將門　（目を瞑りしまゝ）知つてゐるよ………眠つたのではない。（と懶げに云つて、嘆息）

東の君　臺飯の用意も出來ました。

將門　（むつくと起き）おれは今日、上總へ參つて來やうか。

東の君　え？

將門　そなたは何う思ふ。やはり行つて來た方が、好さゝうではないか。

東の君　………

突然の言葉を不審さうに、妻は將門を見詰める。

將門　叔父御は會ふだらう。眞逆に、會はないやうなことはあるまい。

東の君　何んのために急に、上總の父上をお訪ねなさるのでござります。

將門　二人で、叱かられやうではないか。その方が、心が美しくなる。詫び入つて手をついてゐる間でも、心が淨められさうではないか。

東の君　弟の君は何んと云はれませう。

將門　あれに關はることではない。そなたに聞くのだ。そなたも晴れて上總に行き通ひする方が――第一、吾子のためにも、やさしい祖父君の膝をおぼえさせて置くがいゝではないか。老人の膝はいつになつても懷しいものだ。

おれにもおぼえがあるのだ。

東の君　今更ら父に、お詫びなさることはないと思ひます。事が改まつて、却つてあなたを低くなさるやうに思ひます。

將門　それでは何日までも盡期がない。洗つたやうにサツパリした方が、わしは好いと思ふがなあ。

東の君　わたくしはこの儘で、好いと思ひます。もう間に……嬰兒も生れて、父上とて何うにもならないことに思つてゐませう。

將門　然うかなあ。無理にすゝめはしない、けれども、老人に謝まるのは、見ても美しいものだぞ。決して恥にはならないぞ。

東の君　何うして急にそんなことをお考へなさるのでせう。

將門　急に？

東の君　わたくしはこれで好いと思ひます。なにもあなたは、ひとを負ひ掠めたと云ふではなし……父上も最う今となつては、諦めてゐるだらうと思ひます。

將門　諦める？（唇を噛む）

東の君　（將門を見て）何うかなされましたか。

將門　諦めると云ふのは、お前自身の心を云つてゐるのではないか。

東の君　え。

將門　おれには然う聞える。

東の君　わたくしが諦める……と？

將門　分明云つたら好いではないか。齒を鏧らすには及ばない。
東の君　それでも、わたくしはそんな………何うしたのでござります。
將門　お前の父御は、そなたを貞盛にめあはせやうとして、傳きそだてゝ來たのだ。それを横間から、小次郎と云ふ無法者があらはれ出たのだとよ。はゝ………。（と細かに、カラ〳〵と笑つて）然うなんだとよ。はゝはゝ（ゴロリと横に寢る）
東の君　………
將門　お前だつて子心に、その話を聞かないことはあるまい。はゝはゝ。
東の君　………
將門　はゝはゝ。（高らかに、少しく神經的に笑ふ）
東の君　………
將門　然う云つたら好いではないか。おれの無法を怨むと、はつきり云つたら好いではないか。はゝはゝ。女には——假面がある。
將門、笑ふ間にも鋭く妻を注意してゐる。
中門外の酒盛りに、百姓どもの賑かなる笑ひ聲聞えて、鄙びたる風俗歌に似たる雜謠、斷續して聞え來る。
將門　はゝはゝ。何うした——默つてしまつた。
東の君　わたくしには、何ういつて好いかわかりません。
將門　貞盛とおれを較べれば好いではないか。あれは………歌も詠む。官名もある。きらびやかに鎧ふて、太刀を手挾

み切斑の矢を負ふて、行幸の警固に、前驅として立ちたり、若様は、京上﨟三八川をうけたことと云ふ。引換へて、小次郎は鳥か、獣だ。この手だ、この足だ。はゝはゝ。

東の君、ほつと嘆息して立上がる。將門、がばと起きあがる。

將門　何うしたのだ。

東の君　また吾子が、むづかつてゐるやうでございます。

將門　はゝはゝ。

東の君　（膝を突き）思つてもゐぬ事を責められるほど、苦しい事はござりませぬ。（涙を溜めて）この頃は……好くお責めなさる。

將門　子が啼いてゐる。（と投げつけるやうに云ふ）

東の君、消然として細殿を渡りて去る。

將門、妻の後姿を毒々しき目にて睨みつけゐたるが、やがて絶望的なる瞬にて、執拗に笑ふ。

平眞樹、中門より入り來りて、階下に立つ。

將門　（喫驚して氣が付き）眞樹か、まあ上れよ。

眞樹　今、常陸の國府から戻つて來たところだが、果して貞盛は歯痒ゆい男ぢや。武官の貞盛があの為體では、なる程、京都のことは思はれる。

將門　上れよ。まだ供養騷ぎをしてゐるのか。

眞樹　都びどの優長さには驚き入る。男が泣いても、恥にはならんと見える。はゝはゝゝ。（と同じ云ふ言葉のうちに、

（前幕よりは際立ちて、將門に對する慇懃のさまを顯はす）

將門　太郎、泣いてゐたか。

眞樹　泣くかと思ふと、片手間には前大掾の乙の姫の寢屋に夜な〳〵通ふてゐられる。あれが都風俗かも知れないよ。はゝはゝゝ。

將門　それが厭だ。おれを悅ばせやうとする要はない。

眞樹　嘘ぢやないよ。現に前大掾は、新しく泉殿を新築してゐる。貞盛を婿に引かうといふ結構なのだ。おれは慥に聞いて來た。

將門　貞盛は親思ひの深い男だ、そんな筈はない。伯父は卑屈さから源氏に緣坐して死んだのだが、おれはしめやかな靜かな從弟の心を傷けたことを悔んでゐるのだ。貞盛を貶しておれが喜ぶと思はれては顏が熱くなるやうだ。

眞樹　それは貴所の間違だ。おれは便佞を云ふのではない。貞盛が貴所の勇名に怯じて、貴所へ和睦を申込まふとしたのだ。それを羽鳥の叔父御良正のとのが苦々しがつて、躍起として常平太を折檻されてゐるといふ、石田ではもつぱらの沙汰であつた。

將門　貞盛がおれと和睦する？父を殺されてゐるんだぞ。馬鹿なことを云ふもんではない。彼は武人だ。名を何とする。置かれたる位置を何うするのだ。

眞樹　それだからおれは、彼の怯懦を憫れんでゐるのだよ。大體常陸の百姓の間にも、伯父國香のとのゝ評判が好くないのだ。貞盛もそれを聞いては考へたらう。父御の燒死は、源氏に媚びた自業自得と、思はないものでもないのだ。

將門　國香の伯父は、常陸の百姓に信望がなかつたのか。

眞樹　ある筈はないではないか。大掾は老後のたづきのみ悲んで、國の富を京都にばかり運んでゐた人だ。たゞ一日も早く常平太の官途をすゝめて、それにかゝつて晩年を靜かに送らふとするほか何の望みもなかつた人だ。貞盛の立身の爲めには常陸の穀倉を空しくして、京都の權門に賄賂して悔まなかつた人だ。

將門　うん。その心もちはあつた人だ。

眞樹　この國に永住の心のないもの、豺狼のやうな心になるは當り前だ。農民どもに無理に官稻を貸しつけて、五割・倍の利息をむさぼつた人なのだ。だから百姓どもは、誰一人こころから大掾の死亡を悲しんでゐる人がない。みな天罰のやうに云つてゐる。

將門　………。(凝つと何か考へる)

眞樹　貴所は全體、氣が弱過ぎるよ。少しも悔むことはない。貴所は下總百姓を救つたばかりでなく、併せて常陸の難儀も救つたやうなものだ。誰に對しても恥づるところはない。大手を振つて歩いて好いのだ。貞盛が和睦を願つてゐるのも、確かにそれがあるのだらう。

將門　(思はず、屹つとして)眞樹。

眞樹　(驚いて)何んだ。

將門　お前はおれが伯父を殺したのを、間違ひだ、知らなかつたのだ、と云つてくれゝばそれで澤山だ。何んのために伯父を惡者、邪人に貶さなければならないのだ。お前は恥知らずの便佞者だ。おれはお前などに、この心を救はれやうと思つてはゐない。

眞樹　しかしわしは、事實のまゝを話したまでだ。

將門　(叫ぶやうに) おれは伯父を、その非道を憎んで農民等のために殺したのではない

眞樹　そりや然うでなくとも、結果は然うなる。

將門　間違だ、知らなかつたのだ、然う云つてくれゝば澤山だ。

將門、簀子の板敷を踏み鳴らして叫ぶ。中門外の百姓等はその高聲に驚きて、一人二人來りて樣子を窺ふ。

三郎將賴、醉つて走り來る。

三郎　兄者、何うしたんだ。

將門　うん、何んでもない。

三郎　眞樹が何か云つたのか。こいつ――。(と醉眼に睨む)

將門　何んでもないんだ。お前は行つて飲め。

三郎　こいつ、借りて行くぞ。田樂舞を舞はしてくれべえ。

眞樹　また醉つて、てんがうする。はゝはゝゝ。(と臆病笑ひして尻込みす

三郎　來い〱、常陸者に糟酒を食はせてやるぞ。(と眞樹の襟頭をつかむ)

百姓等どつと笑ふ。

三郎　來い〱、さ、來い。

三郎は無體に眞樹を引擦りて、高笑ひしながら去る。百姓等も笑ひながら去る、

將門は頤に手を置いて、睨めるやうに一箇所を見詰む。

門外の百姓は酒に醉ふて、手拍子にて賑かに笑ふ。

弟四郎歸り來る。

四郎　兄者。いつ那須から歸られました。

將門　びつくりした。(と鋭く見て、四郎と知りて)今、歸つて來たのか。

四郎　兄者、貞盛の話を聞かれたか。菅家の學問所でも大評判であつた。

將門　博士の病氣は何うだ。

四郎　京都を下つて、藤原の專橫を見ぬためか、風土が體にかなつたのか、この國に下つてからはだいぶ病ひもくつろいだと云ふてゐられました。

將門　開墾はどんな模樣だ。

四郎　沼地を搔乾して、段々莊園を廣められます。それに京都北野の天滿宮を莊內に勸請して、父君道實公のために、廣大な社殿を營まれるさうでございます。藤原家に對する反抗でござりませう。

將門　然うかなあ………。(興味なく聞いてゐる)

四郎　それにしても兄者。從兄の常平太はそれほど腑甲斐ない男でござりませうか。

將門　和睦の一條か。おれにも分らないのだ。たゞ太郎は童の時から、控え目に、內氣な、行き屆いた………もの柔かな性質であつた。弱いと云へば弱からうが、しかしおれ達のやうな我殺な、潤ひのない、騷ぎやすい厭はしい性質ではなかつた。ものを爭はずに、柔和に、おつとりとして、靜かに世間を眺めてゐる若者であつた。彼が京都に上つたのは十………三の年であつたか、おれは今にはつきり覺えてゐるよ。

四郎　そのやうな性質で、よく武人の職についてゐられますな。

将門　それだ。おれも去年上京して、それは不思議に思つた。彼は弓矢などとるには、餘りに痛みやすい心を持つてゐた。（追想するやうに）むらさき裾濃の指貫に千草摺りの衣が、よく似合ふ少年でな……黄昏などその姿でよく欄に立つて、暮れ行く野づらの容などを凝いつと眺めてゐた。おれは、彼と従弟と云はれることが、心の誇りでもあつたが、また恥かしくもあつた。彼はわれ等が一族にないものを持つてゐる。弱さの誇りと云はうか、動かぬ静けさと云はうか、兎に角、彼はわれ／＼と違つてものを深く見詰める目をもつてゐた。おれは彼の悦ぶ顔を見るために、人知れずどれほど心を苦しめたか知れない。獣に逐はれて、泣き叫びながら逃げまどふ姿を眞似て見せたり、川に流されて死んだ人の姿をして見せたり……一度などは酢を呑んで噎んだ人の形ちを見せるとて、ほんとうに酢を呑んで、病ひづくまで苦しんだこともあつた。彼はカラ／＼とは笑はない、匂はしい睫毛の深い目で、たゞニツと片頰に微笑んでおれの戯れた所作を眺めてゐるのだ。おれはいつも後で、自分の愚しさを恥ぢるのだが、それでも幼ない従弟のよろこぶ顔が見たかつたのだ。はゝはゝゝ。

百姓等の手拍子、賑かに聞ゆる。

将門　（やゝ間を置き、弟に心付きて）おれはな、伯父のことでは決して悔んではゐない。けれども、この従弟を思ふと………心が重苦しくなる。あの弱々しい、慎ましい従弟の心を擾し悲しませたと思ふと………おれは断らなく苦しくなるのだ。おれは何んと云ふか………あの従弟の脆弱さうな、遣瀬なげな、斯う………便りなげな後姿を思ひ出すと………心の底から悲しみを覚える。おれはあの従弟に憎まれることも辛らい、けれどもまた赦されることも辛らい。そして第一は、おれの従弟は、もうおれのものでなくなつた………と思ふことが、何より苦しいのだ。

四郎　それほど思案してゐながら、あなたは何故上京の時、貞盛を訪ねなかつたのでせう。

將門　それがだ。おれは斯う云ひながらも、太郎の前に出るのが苦しいのだ。自分の粗野が恥しいばかりではない。太郎の眸にあふと、おれは………………己れの底まで見透されるやうな氣がするのだ。四郎、おれは何うしたら好いのだらう。

四郎　しかしそれは、もう已を得ないことではありませんか。

將門　已を得ないことは分つてゐる。(と聲を尖らし)おれは何うすれば好いと聞くんだ。

四郎　何うするといつて………今更ら仕方のないことでせう。

將門　えゝ聞かない！その冷かな目を見ろ。お前は他人の事のやうに聞いてゐるのだ。この苦しみがわからないのだ。

四郎　(少しむつとして)それは、兄者の心になれないかも知れません。

將門　賴まない。何も云はない。おれはお前の目を見ても、三郎の目を見ても、たゞイラ／＼と氣を炒られるばかりだ。

　　將門、苦しげにゴロリと寢轉れる。眼を大きく一所を見詰む。やゝ長き沈默。

四郎　兄者。それは無理でないでせうか。今の兄者はそれを悔んでゐて好い時でせうか。來るか來らぬか、必死の窮境に立つて、兄者は何を迷ふてゐるかと思ひます。

將門　(突然立つて、中門の方に)眞樹、眞樹、眞樹々々。(と叫ぶ)

　　酒席の騷擾一時やみて、眞樹入り來る。

將門　(言葉急しく)眞樹。御苦勞だが馬を石川の館まで飛ばしてくれないか。

眞樹　（不審さうに）石田の館？

將門　貞盛に會つて來てくれ。和睦を望むんではない、彼を恐れるんでもないぞ。たゞ從弟の心に、これまでの一部始終を知らせたいんだ。それには幸ひ、お前は初からの事を見てゐる。お前の見た通りの次第を、隱さず飾らず從弟に話をしてはくれないか。

眞樹　と、云ふと……？

將門　おれの心持を從弟にわからせればそれで好いんだ。和主の智慧は要らないのだ。

眞樹　よし。行くが好いなら、行つて來やう。

將門　お前はおれを庇つてはならないぞ。飾つても不可ない。おれはたゞ有の儘に、正直に貞盛に見られたいのだ。お前は今後の成行を計つて、事を押繕つては不可ないのだ。お前の話のために、貞盛がおれを餘計に憎んでも、その時は是非ないと思はふ。おれはたゞ貞盛に、誤つて見られたくない。正直に見られたいんだ。

眞樹　行つて來る。

眞樹は小頸を傾けて、不審さうに去る。

四郎は俯向いて嘆息。將門は惱ましげに簀子を步む。

外に、どつと笑聲、手拍子。

四郎　（やがて顏を上げ）兄者。

將門　………

四郎　兄者。

将門　………（歩む）

四郎また嘆息して俯向く時、門外にどつと百姓等の鬨の聲聞え、やがて森然となる。

将門　何んだ。（と耳を立つ）

四郎　大方農夫等が食べ醉つて、河原に出て踊るのでござりませう。然し兄者。今日も菅家の學問所で兄者の話が出て、師の博士もいろ／＼に噂してゐられました。

将門　（立停り、鋭く）景行卿がわしの批判しておた？何んと云つた。

四郎　はたして武人の起つ時が來た。法しげくして政事紊るゝ時には、武によつて救ふよりほかはないと云はれました。

将門　そのやうな難かしい話ではない、おれを何んと云つた。お前は景行卿に、おれが野本の館を襲ふた時には、伯父も一緒にそこに泊つてゐるとは知らなかつたと、かねてその話はしたのだらう。爲たな、爲たのだな。それなれば景行卿は何んと云つた、おれを何んと云つた。

四郎　兄者の武勇の抜群なのを驚嘆してゐられました。

将門　その事ではない。博士はおれを何んと批判してゐると聞くのだ。博士は明經の學に通じて、道徳の標的にもなる人だ。おれは博士のやうな碩學に審かれたいのだ。何んと云つた。

四郎　それは伯父者のことでござりますか。

将門　何んと云つた。罪人だと云つたか、惡人だと云つたか。

四郎　…………

將門　和主。おれが全く、全く、伯父の事を知らなかつた、間違であつたとは、師の博士に話したのだな。
四郎　事後のことは……悔んでも爲方がないと云はれました。
將門　悔む、悔まんではない。善いか悪いかなのだ。えゝ何うだ。何んと云つた。えゝ、聞くまい。もう好い、わかつてる。聞くまい、お前は景行卿に、おれの心持すら話しはしなかつたのだ。おれが家のために苦しんでゐるのを、お前たちは自分のために苦しむやうに嘲笑つてゐるのだ。お前だちには、家もない、兄もないのだ、好い、もう聞かん。然うだ、然うなのだ。

石毛寺の撞鐘の音と共に、遙かに群集の鯨波の聲聞ゆ。

將門　（愕然として）おゝ鐘がなる。常陸勢が來た。
四郎　えゝ。（と色を喪ふ）
將門　三郎は何處へ行つた。經明はゐないか。四郎、門前を見て來い。見て來い、見て來い。おれは對の屋や吾子を見なければならない。四郎、早く見て來い。

四郎、走り入る。

屋内に走せちがふ男女の足音、悲鳴など騷がし。

將門、立ちて長押なる鉾、鎗の類を悉く簀子に投げ出す間も、始終狼狽のさま見ゆ。

對の尾より東の君と乳母ら〳〵して走り來る。

東の君　との、との。常陸勢が押し寄せて參りました。
將門　（次第に沈着き）大丈夫だ。心配するな、おれがゐる。鎗を持つてこい。矢軍の間は、吾子を抱いて、女どもは

寄隙にかゝんで居るのだ。常陸勢に川を越させるものか、心配するな、みな鎭まれ、鎭まらせろ。

東の君、乳母などにて楽籠より主の武具箭脊長など取出し、將門も上帶を解かんとする時、四郎馳け戻る。

四郎　兄者。常陸勢ではござりませぬ。

將門　何。

四郎　御厨の三郎が酒に狂ふて百姓をそゝのかし、川手前の常陸分を燒拂ひに行つたのでござります。みな酒に荒れ狂ふて、狂人のやうに躍り騷いでゐます。

將門　然うか。三郎の狼藉か……。

四郎　兄者が出て下知しなければ、とてもわたくしどもの力には及びません。三郎は砂地をゴロ〳〵ころがつて、泥のやうに醉つてゐます。經明は笑の凋れるほど、大聲に怒鳴つてゐます。

將門　（何か決心して）四郎、厩の馬を引出してくれ。

四郎　えゝ。

東の君　何うなさるのでござります。

將門　石田へ行つて來る。自身貞盛に會つて詫びる。眞樹をやつたゞけでは安心がならない。遣つたのが間違ひだ。おれは貞盛に打たれなければならない、然うだ、打たれに行くのだ。

人々將門の興奮せる顏を見上ぐる。

將門　然うだ。打たれるんだ……打たれて、そして赦されなければならない。おれは卑怯だつた……打たれて赦されるんだ。

同第二場

時――前場と同日。二時刻ほどの後。夕暮に近し。

處――石田の館、平國香の邸宅の燒跡。石田は今の眞壁郡石田村。

常陸大椽として威權ありし館なれば、林泉亭宅の規模も宏大なるべく、燒跡なれどもそのさま思はる。舞臺にあらはるゝは倉庫に近き一部にて、泉水、樹木、巨石など燒失の慘狀のまゝ荒涼たるなかに、辛夷一ぷ、半ば燒けたるまゝに花をつけたり。

正面に筑波山見ゆ。

幕明く。近傍の貧民百姓の男女十數人、燒跡の灰を掻きて燒金具などを拾ひゐる。小兒等は釘を得ても爭ひ呼び、大人は默々として地上を探がす。

館の郎黨、牧の右源次出て來る。質朴さうなる老人なり。

右源次　さあ出ろ〳〵。日が暮れる。お山の裾が暗くなつて來た。何時まで灰を掻き廻しても、何も出る筈はないのだ。燒亡の後二十日のうへも、毎日〳〵灰を掻いたではないか。何も無い、無い。わしは柵の木戸を下さねばならないのだ。さあさ、みな出てくれ、出てくれ。

百姓等は無言。右源次は樹の根に腰を掛ける。

右源次　しかしおのれ達も困るであらうなあ。下總びとの亂入で家は焼かれる、穀倉は掠められる、青麥までも秣に刈り散らして行つたのだ。明日〱の苗代時にも、種籾さへないであらう。この秋の成熟時まで、何うして食ひつゞけて行くことか……氣の毒でならない。

百姓無言にて動く。郎黨を見る者すらなし。

右源次　さあ、出てくれ。捜したところで、ろくな焼釘も出まい。歸れ〱。女どもは兒が啼いて待つてゐる。あゝあ、七年の旱魃よりも一期の合戰と云ふが、戰あとの百姓ほどみじめなものはない。さあ、木戸をおろさねばならぬ。みな出てくれ。出ろ〱。

右源次、膝を抱いたまゝ、言葉のみにて云ふ。

男女は答へず、袋などさげて默々として歸り行く。

暮色せまる。

右源次　(その後姿を凝つと見送りつゝ、獨語)あゝあ、人ごとではない。おれらの都も遠くなつた。この生にもう一度、叡山の姿を拜めることではあるまいなあ……。(と寂しげに嘆息。やがて上手を透し眺めて)誰方でござります。もし、もし〱……。將殿ではござりませぬか。

薄闇の間に、塗沓の音のみ聞えて答はなし。

右源次　おゝ、やはり將殿だ。何かうち案んじてゐられると見える。

右源次、土に跪きて畏まる。

微かに朗詠やうの聲して、跫の音のみあざやかに聞ゆる。

やゝ長き間ありて、跫の音は次第に近づく。

貞　盛　（姿は見えず、聲のみ聞ゆる）――右源次か。

右源次　ない。（と禮する）

貞　盛　（聲）富も家も、燒けてしまへばそれまでのものだなあ。

右源次　……

貞　盛　（聲）凡そ財に五つの主ありと云ふ。わしは燒亡を慨くのではない。父君の心を考へて……それを傷ましく思ふのだ。

右源次　……

貞盛　（聲）父君の一生も……悲しい一生であつた。悲しい努力の一生であつたと思ふ。父君みづからが、この燒跡を見られたら、わが過去の努力を何う考へられたであらう。わしは今……それを考へてゐたのだ。

右源次　……

又しばらく跫の音。

貞盛　（跫音止みて、聲）父君もやはり世に弱いお人であつた。やはり人と、爭ふことが出來なかつた。常陸源氏の勢力に壓倒せられて、吾がわれを立てることが出來なかつた。殺した者ばかり怨むべきではない……。

右源次　……

跫音近くなりて、喪服すがた（背の帶、鈍色の藤衣）の貞盛夕闇の間より出で來る。二十七歳。この頃の愛

・愁にやつれて、面も痩せたり。

貞盛　（やはり歩みつゝ）打たれた石はわが手にあつたのだ。羽島の叔父君のやうに、あゝ一徹に小次郎を憎むものではないと思ふ。わしは小次郎を知つてゐる。小次郎は心からわが父君を愛して居つた。殺されたから憎めるといふものではないと思ふ。

右源次　羽島のとのは前大掾護のとのに婿君にならせられます。北の方の御兄弟、扶、隆、繁の三人の若との達が、枕をならべて将門のとのゝために戦死されたので、そのお憎みが強いのでござりませう。

貞盛　それよりは土だ、とわしは思ふ。（と、そこの木株に腰掛けて）護方を敵としては、羽島の所領は安穏を保たれまい。甥将門と合戦しても、護がたとは結ばなければならないのだ。

右源次　……

貞盛　右源次。やはり都は好いなあ。この苦しい、突きつめた人の争ひを見ずとも済む。大宮に祇候して、世の擾乱の外に、静かにわが日を見詰めることが出来る。わしは兵馬の職にあつても、その雅懐は失はぬつもりでゐる。それに何時まで武職にとゞまるものでもない、やがてわが仕途も殿上にひらけるであらうと思ふ。

右源次　（喜ばしげに）それでは、督殿には、再び京都に参上りたまふお心でござりまするか。

貞盛　わしも父の子ぢや。阪東言葉のとげとげしい——讒訴ぶかい高音聲には憎みをさへ覚える。わしは争ひの外に生きたい……。

右源次　しかしそれでは、羽島の叔父君がゆるされますまい。この頃は常陸ちゆうを駈けめぐつて、大殿の弔ひ合戦の徒黨を集めてゐられまする。

貞盛　あれは、要らぬことだ。父君は常陸源氏のために死なれたのだ。叔父君はわしの武名を何うすると云はれるか、わしは田舎の名などは何うでもよいと思つてゐる。名を思はゞ都の名だ。

右源次　しかしながら……

貞盛　争ひずきな東國氣性には、敵をもつ人の心の苦しさがわからぬと見える。わしは人を眺める人になりたい。敵をもつ人の慌しい心にはなりたくない。それは、靜かな自分を失ふやうなものだ。（伸び上りて見て）何か、門前が騒がしいやうではないか。

右源次（これを見てから）いや、然やうにも思ひませぬ。（と戻り來て）然りながら、督殿。そのやうに仰せられても、この所領は何となされます。父君が辛勞あそばされて、これまでに開發された土地でござります。また京都の任官の昇進にも、今は田舎の富がなければ、ひらける途もひらきかねる御代と聞いて居ります。

貞盛　それ故にわしは小次郎と和睦したいと思ふのだ。

右源次　何んでござります。

貞盛　いや、この話は今宵、上總の叔父上が到着の筈ぢや。その思案にまかせねばならぬことであつた。（また耳を立つ）蹄の音のやうだ、右源次、そちの耳には聞えないか。

右源次（立つて）なる程……そのやうにも思はれます。

貞盛　一騎ではない。――遠く後からも、續くやうだ。

貞盛等の叔父にて、常陸國眞壁郡羽鳥の住人、平良正（高望王の妾の子）入り來る。平常の服装にて、五十歳前後、剛腹なる阪東型の老人なり。

良正　（低聲にて）太郎、太郎………そこか。聲を立てるなよ。（と歩み來る）
貞盛　叔父上。何事の騷動なのでございまする。
良正　靜かにせよ。將門が門前に來てゐるのだ。
貞盛　（流石に仰天して）え、小次郎が寄せて參りましたか。
良正　いや、合戰ではない。そなたに會ひたいと云ふて來たのだ。
貞盛　小次郎がわしに………何用でございませう。
良正　靜かに………丁度同時に、上總の良兼のとのも到着したのだ。右源次、上總の介殿に、太郎はこゝに居ると案內して來い。
右源次　ない。
　右源次、走り去る。
良正　將門には身が對面して、そこは結城寺詣りして、館に居らぬと云つたのだ。聲を立てると、わしがあれに仇をうけるぞ。
貞盛　（顫えるやうな聲）小次郎はわしに………何を求めるのでございます。小次郎は………猛り立つて居りまするか。
良正　門內に馬を立てゝ、言葉もはげしい。それに追々、闇を衝いて續く郎黨もある樣子だ。こちらの手答のつかぬうちに荒立てゝは、どのやうな狼藉を働くかも知れない。今日は賺して、わしが歸してやる。おゝ、上總の兄者が見えた。太郎、かならず聲を立てるな。

良正、走り去る。引違ひに上總介、平良兼入り來る。六十前後、貞盛等の叔父、將門の舅なり。戰鬪の服裝にて、その上に法衣を着し、念珠を持つ。

良兼　（低聲にて）小次郎の無法者が來てゐるさうだの。

貞盛　（叔父の扮裝に驚きつゝ）小次郎はわたくしに會ひに參りました。

良兼　軍兵の到着が遲れたため、みす〳〵助けて歸さなければならないか。またとない機會を逃がして、殘念なことだ。

貞盛　それでは叔父君。あなたは小次郎と合戰の覺悟で、上總の國を出られたのでございますか。（と當惑さうに良兼を見る）

良兼　甥のとの、それは云ふまでもあるまい。舍弟良正からの催促狀によつて、上總下總二箇の軍勢を驅り催して、昨日武射の郡を發足したのだが、済前の渡りに思はぬ暇をとつたゝめ、總勢は今宵、水守の營所に宿陣を張らせ申した。わしはそなたに面會を急ぐので、急ぎ一人だけ拔驅けをして參つた。

貞盛　上總の官兵を動かすには、公家の允可を申し下されたのでございますか。

良兼　この際、とかうの官符などを待つてゐらるゝものか。それでもわしは公家に遠慮して、官の關所を避けて、間道から兵を進めて參つた。

貞盛　………（唇を嚙む）

良兼　甥のとの。老人がかく計ふたのも、そなたへのわび心ぢや。娘のことについて、わしはそなたに面目ない身なのだ。將門の無法をゆるす氣はないが、わしにはどうも力が及ばなかつた。

貞盛　叔父上。その斟酌には及びませぬ。わたくしは何うで、この田舍に住む者ではござりませぬ。姫御前のためにも

卻つて悅んで居ります。

良兼　上總の帆手祭の夜でな、わしは娘を盜み出されたのを翌日まで知らなかつた。今はどうあるか知らぬが、娘とても將門などを夢にも思ふてゐなかつたのだ。

貞盛　叔父君。それよりもわたくし、小次郎に面會しては惡いのでございますゐか。京洛にても伺ひかねました。彼の話も聞きたいと思ひます。彼は童の時わたくしを……それは愛してくれました。

良兼　（むつとして）太郎、わしは何んによつて上總から出て來たのだ。

貞盛　しかし夜陰に馬を驅つて、彼がわたくしを尋ねるには、何事かあると思ひます。彼は堅固な甲のなかに、優しい心を抱いてゐる青年でございました。わたくしに害を加へるなどゝは、何うしても考へられません。

良兼　（屹と聲を勵まし）貞盛。

貞盛　何んでございます。

良兼　兵は名をもつて先とす。お身はその言葉を忘れたのか。お身の父は誰の手に死んだ、分內の百姓は誰のために苦しんだ。わしは讓の娘を妻とするために云ふのではない。左馬允といふお身の職名のために云ふのだ。

貞盛　けれどもわたくしは、父と小次郎との間には、父が臨終のその時まで、何んの憎みもなかつたことゝ思ひます。二人は互に敬愛して居りました、父上が今こゝに蘇れば、笑つて、喜んで、小次郎と手を握るだらうと思ひます。

良兼　その父が死んでゐるのだ。――――えゝ、わからぬ和郎だ。

貞盛　死んでゐます、死んでゐます………。（と俯向き、又顏を上げ）けれども、わたくしは何うしても小次郎を、心か

ら憎む氣になりませぬ。…………憎まない小次郎を憎めと云ふのは、無理かとも思ひます。怨まば寧ろ、父に從僕を強いた常陸の源氏を怨みます。

良兼　えゝ！（と足踏みして）その公卿ぶりの怯懦さを、莊內の百姓どもに見られたら何んとする。京都には流行つても、その仁義だては東國には行はれないのだ。

貞盛は闇を見詰めて、何か凝つと考へゐる。

良兼　（言葉をやはらげて）貞盛。お身は、莊內の伴類百姓の輩が、家の下知に從ふのは何故だと思ふ。諸國ともに農民等は他人豪族の庇護のもとにかくれて、國司郡領の誅求を免れやうとするのだぞ。從つて家々も武勇の名を馳せて、百姓を便らせ賴もしがらせなければ、家の富は保たれない世の中なのだ。

貞盛　叔父君。裏門の方が騷がしいやうでござります。松明が見えます。

良兼　貞盛。兵の名と云ふも、恥といふも、つまり百姓を安堵させ、信服させるための方便なのだ。お身のやうな怯懦を示しては、百姓はみな賴みがたき主として散亡するのは知れてゐる。お身はこれから、大きな地主として、百姓を庇護しなければならない身なのだぞ。

貞盛　わたくしには、とてもそのやうな事は出來さうにありません。

良兼　何。

貞盛　京都へ歸して下さい。わたくしの天地は都の外にありません。伯父上、それだからわたくしは、小次郎と和睦を遂げたいと思ふのでございます。土地の管理をすべて小次郎に賴んで、年々の富を京都に送らせたいと思ふのでございます。わたくしのやうな弱い者には、敵をもつ人の生涯が、身の顫ふほど恐しく思ひます。人を憎まずに

生きたい―　これは父の願ひでした。同時にやはりわたくしの願ひなのでございます。

良兼　馬鹿なことを云ふな。家の名を何うする。

貞盛　けれどもわたくしは、家よりも名よりも、先づ第一に弱い自分を考へられます。伯父上。わたしを靜かに、爭鬪の外に生きさせてもらふことは出來ないのでせうか……。

良兼　松明が來る。小次郎の伴類ではないか。

貞盛　えゝ。

良兼と貞盛は傍なる木蔭に身を忍ばす。

三郎を先頭に將門の郎黨六七人、兵杖を携へ、松明をふり翳して來る。

三郎　兄者、兄者。兄者に對面したい、兄者は居ぬか。(透し見て)向ふに火が見える。兄者、三郎が迎へに來た。兄者、兄者。

將門、經明及び郎黨に護られ、松明の火のうちをうなだれつゝ出て來る。

三郎　(喜ばしさうに走り寄り)おゝ、兄者。何故わしに敎へずに一人來たのだ。怪我があつたら何うする。そして貞盛は何んと云つた。

將門　太郎は留守だ……。會へなかつた。

經明　兎に角、本郷に引上げやう。こゝは敵地だ。さあ、何を思案してゐる。敵地だぞ。(と將門を守護して、鋭く周圍に注意する)

三郎　さ。兄者。歸らう。何處から征矢が飛んで來ないものでもない。

將門　うむ……。

經明　さ、何を考へてゐる。みな貴所の身を氣遣ふて馳付けて來たのだ。

將門　やはり來るのではなかつた。貞盛はおれを避けた……。

經明　さあ歸らう。歸らう……。（後方より背中を押す）

將門　うむ……。

將門は押さるゝ背中を、足にて怺えるやうにヂリ〳〵と押されつゝ、何か考へながら力なく歩み出す。

貞盛と良兼とは木蔭より透し見送る。

（幕）

第三幕

時――承平七年八月下旬。午後より夜まで。

處――幸島郡葦津江のほとり。今の下總國結城郡安靜村蘆ケ谷の附近なるべしと云ふ。

當地の地形にあはせて、一帶に卑濕沮洳の沼澤地にて、舞臺の下手より中央にかけて、大江の如き大沼の水面をあらはす、眞菰その他の水草繁茂して、處々に人の背をかくすほどの青蘆茂り立つ。舞臺は沼に沿ふたる往還のこゝろにて、上手寄りに三抱もあらんと思はるゝ松の古木、沼に向つて枝を垂れたり。樹幹に落雷のあとあり。

筑波の山は水面を越して、遙かに遠く見ゆ。下手の空は土煙りとも見ゆる黒煙濛々として天に漲る。

暮明く。上手の松の根かたに平田船に似たる船の半ばを見せ、船夫佐留夫、小國、船べりに立ちてボンヤリと黒煙を眺めゐる。ともに鹽鈍さうな男。船には石を積む。

その傍に、村をさらしき白髪の老人、松の根にうづくまりて、憂はしげなる表情にて對岸の騒動を打戍りゐる。

戰亂を避けて、家財など持搬ぶ百姓の男女、時々舞臺を下手より上手に走り過ぐ。

耳を澄ませば遠く人馬の騒擾を聞くやうに思はる。

佐留夫　土煙ではない。ありや家を燒く火の煙りだ。

小國　然うだなあ——」合戰の雄叫びがかすかに聞えて來る。

佐留夫　子飼の渡しの邊りでもあるかな。なあや、小國。

小國　（額に手を翳し見て）うんや、まだ近い、豐田分だ。

佐留夫　間の惡るい時分に下つたものだ。傍杖くつてはならねえぞ。

小國　然うだのことだ。船を逆井の方へ廻はさゞなるまい。

佐留夫　だが、そのさきがよ。船が通れべえかなあ。

小國　それも然うだ。

二人は伸び上りて、心配さうに黒煙を見詰めゐる。

避難の農民通りかゝる。

佐留夫　(避難者に) やれ、まをし、合戰は大事になりさうな様子かね。

農民　(逃げながら) 豐田岡田の兩郡を燒拂ふとのことだ。

佐留夫　やれ、それは大變だ。寄手は何處の勢だね。

農民　上總常陸の軍兵だ。

農民等は叫びつゝ走り去る。

佐留夫　なあや、小國。こりや難儀なことになつたぞ。

小國　船を歸すべえにも、行手も安心ならねえだ。何ぜうするや、われ。

佐留夫　はて、困つたことだ。惡日に船を出してしまつた。

小國　あアあ、ありや黒煙りが段々ひろがるわ。

佐留夫　困つたことだ………こりや何うしやうもねえ。

船夫等うろ／＼する時、又避難民の一群れ通る。

佐留夫　やれ、申し、合戰の場は何處でござります。

農民　鎌輪、國生、郡内一面だ。(と叫びつゝ去る)

佐留夫　なあや小國。鎌輪國生まで寄せて來たとよ。

小國　あアあ、こりや何うするだ………。

船夫等狼狽する。その時白髯の老夫初めて聲を掛く。

老夫　こなた達は一體、何處からわせた衆ぢや。

佐留夫　はあい。下野の者でござります。石井の營所に石を積んで下ります。

老夫　それは氣の毒な、豐田のとのも普請どころではあるまい。上總常陸の軍兵は、去年の仇返しに寄せたことゆゑ、この合戰はよく〳〵大事になりさうな。

佐留夫　常陸上總の軍兵と申しますと、上總介良兼どのと左馬允貞盛どのゝ手勢でござりますか。あれはもう和睦になつたのではござりませぬか。

老人　何んの睦和にるなものか、去年の三月、やはり兩國勢をもつて豐田を襲ふた時には、將門のとのが逆擊ちに擊つて、常陸勢を筑波の山まで逐ひ込み、すでに良兼良正の兩とのも陣歿のところを、將門のとのは不思議に伯父甥のよしみを思ふて、包圍を解いて伯父君二人の生命を助けられたのだ。

佐留夫　然やうなさうで、在所でも聞いて居ります。それが常陸大椽の弔ひ戰の、最初でござりませうな。

老人　それから六月、時の青田をめがけて、羽鳥の館からまた仕掛けて來た。この時も將門のとのが散々の勝軍さで、良正の叔父御は這々の體で常陸に逭げ歸つたのぢや。丁度今度は、三度目の復讐戰だ。

佐留夫　わしどもは又、去年の暮に將門のとのが上洛されましたのは、その兩國和睦のためと聞いて居りましたが、然うではなかつたのでござりますか。何んのための京のぼりでござりました。

老夫　あれはな、和睦どころではない、去年兩度の戰爭とも打負された腹癒せに、上總の介殿から公家に將門のとのゝ罪狀を訴へて、近國濫妨の罪と伯父殺しの惡名とによつて、豐田のとのを罪にとつて落さうとしたのだ。みな叔

父のとの二人の謀計であつたのださうな。

佐留夫　それでは京都へは、召によつて上られたのでござりますな。

老夫　然うなのだ。例へ甥のとのでも川をへだてゝ强者と隣りすれば、わが所領の安堵が得られぬ。兩度の勝軍に百姓作人の贔負が、自然豐田方に傾くことになる。それこれとともに、是非ともに將門のとのを罪にとつて落さうとはからはれたと見えるのぢや。

小國　でもはあ豐田のとのは、難なく京都から歸らしやつたではないか。

老夫　さればだ。將門のとのも上洛して、檢非違使の廳に立つて、事の次第を陳辨されたであらう。それと同時に、だいぶんの財も所々にまひなふたらしい。天下御供養の大赦によつて、面晴れて公家から罪狀赦免のゆるし文が下つたのぢや。それと云ふも、太政大臣忠平公の御寵任があつたゝめぢやよ。はゝはゝゝ。財でなうては道理も通らぬ世の中ぢや。

佐留夫　これで次第がわかりました。叔父のとの達には、去年數度の弔ひ戰には負けるわ、京都へ訴へて罪におとさうとした綾ははづれる、豐田分內はますます發行するので、その憎みがかさなつて、又のこの亂入になつたのでござりませう。

老夫　その通りぢやよ。何しろ此度の京都のぼりには、畿內京洛に武勇の名をとどろかし、散々の名譽をほどこして歸つて來られたのだ。下總一國の百姓は、わがなかに虎の子でも生れたやうに悅んで、みな將門のとのゝ莊園に田地をさゝげて、まるで日ののぼるやうな勢だ。常陸の叔父のとのたちも、その儘には置けないところだ。作人郎黨は次第に豐田方に流亡するので、おのが所領をまもるためには、所詮合戰はのがれぬ場合になつて ゐたのぢ

や。

佐留夫　しかし、斯う戰つゞきでは、百姓も難儀なことでござりますなあ。

老人　昔からの諺にも、千人泣すれば草木も渦むと云ふてゐる。川をへだてゝ斯く數度の責合ひでは、農民がつかれ苦しむばかりだ。

佐留夫　なあや、小國。だいぶん戰場が靜かになつたやうではないか。

小國　然うも云へぬぞ。また北がたに黑煙りがあがるやうだ。

老人　えゝ。（と驚き、立上りて）どれ、どれ、おゝ藏持か吉間木の邊ぢや。これでは、今日の合戰は豐田方の敗軍だ、敗軍だ。（と驚き）それではこのあたりまで、押して來ぬとも限らぬ。おゝ、吉間木にも火がかゝつた。

佐留夫　小國、小國。船をいづくにかはさう、小國。

小國　うん、この上は、遠岸を漕ぐより仕方あるめえ。

老夫　わろ達もはやく遁げさつしやれ。わしも村うちを觸れて來やう。

佐留夫　それ小國。櫂を突ッ張れ――櫂だ。

老夫は蹌踉として走り去る。船夫等も狼狽して纜を解き、船と共に漕ぎ去る。

遠く陣鐘銅鑼のひゞき、馬の嘶き、群集の騷音らしきが微かに聞えて、黑煙り次第に濃厚になりつゝ、舞臺はやゝ長き沈默。

その沈默を破りて急に、雨を呼ぶ一匹の雨蛙の聲、けたゝましく際立ちて聞ゆる。後また沈默。

將門、病床より遁がれ來りし取亂せる姿にて、白衣のまゝ襞に乳兒をつゝみてこれを抱き、泣き叫ぶ乳母羽

生の女を引摺りつゝ出て來る。はなち髮、跗草履。

郎黨二人、その後にうろ〳〵して跟き來る。

將門　（乳母に）泣くな。泣くな。大丈夫だ。にしの村まで燒き拂はせるやうなことはない。泣くな。にしが騷いで吾子を何うする。にしばかりの生命ではないのだ、騷ぐな。

乳母　はい……はい……。（と泣く）

將門　斯うなれば誰も同じだ。自分の身ばかり掩つてはならないぞ。泣くな、――泣くんぢやない。にし達に泣き騷がれると、おれまで顚動してしまふ。わかつたか、わかつたか。

乳母　いゝえ、わたしは遁げませぬ……遁げませぬ。（と跪く）

將門　斯う云ふ時、人のこころが知れるのだ。吾子を棄てゝ遁げでもしたら、おれは一生怨むぞ。

乳母　いゝえ。いゝえ。決して遁げは致しませぬ。

將門、乳母を突き放して、興奮のあまり、そこに立ち、こゝに立ち、少しも沈着かず。強いて自己を悲壯化せんとするものとも見ゆるほど、頤を固め、目を瞠りて、擧止平常を失ふ。

將門　（郎黨の一人に）眞樹は何うした。眞樹が居ない。

郎黨　眞樹のとのは、今みちまで一緒にゐられましたが……。

將門　彼奴逃げたか……。（と思はず叫び）行つて搜して來い。あれは油斷ならない――謀叛するやつだ。愚圖々々云はず引摺めて來い。

郎黨　ない。

郎黨は走り去る。

子春丸、比都目等に護られて將門の妻東の君、召使ひの女二三人、被衣すがたにて遁かれ來る。

將門　おゝ、皆來たか。こゝまで來ればもう氣遣ひはない。敵の足も然うは續かない。心配するな、みな落着け。比都目、にしは民家へ行つて、糧秣物の用意して來い。えゝ、女どもを休らはせるのだ。そこのその青葉のなかに、陣の幕を張つてやるのだ。

比都目、去る。

將門は黑煙を見て落付かず、そこここと立ちて見詰める。

子春丸　との、農人の噂には、鎌輪の渡しにも敵が押し掛けたと申します。營所は無事でござりませうか。あの穀倉まで燒かれては、豐田分は滅亡でござります。との……との。

將門　何。（と睨みて、心付き）心配するな、今に回復して見せる、おれがゐるんだ。はゝはゝゝ。（と聲のみにて、無意味に哄笑する）そして何はどうした、何は――三郎は。

東の君　三郎のとのは、せめて國生だけも守りたいとおつしやつて、部內の眷屬を驅り集めて、路から別れて行かれました。

將門　あいつ、馬鹿だ。怪我したら何うする。四郎は。

子春丸　四郎のとのは先程のお言付にて、館の財寶絹卷の類を大船に積んで、その宰領をして廣河の江の方へ落ちられました。

將門　うん、然うだつた。あれはおれ等より先に遁げた。しかし子春、にしは年寄りだ、斯う云ふ時にははにしが

て、一人でも人を散らさないやうにするのだぞ。みな纏つて……一族を散亂しないやうに氣を配ばるのだ。

生、それ、吾子を賴む。えゝ何を泣く。にしの村まで燒かせはしない。

將門、乳兒を乳母に渡し、又立つて黑煙を見る。

比都目等、蒿菰の類を徵發して來て、莘の間に坐を設ける。

東の君（一歩進みて）との、それでは……斯うまで敵に侮られながら、禦矢の用意を、なさらぬのでございますか。

將門（異樣の言葉を聞くやうに、屹と妻を睨めて）何んだと――

東の君　領內は一面の火でございます。百姓は右往左往に走り狂つて、みな敵の蹄の下に泣き叫んで居ります。

將門　それが何うした。

東の君　領內百姓の心が、とのに叛きは致しますまいか。賴みがたき主と思ふて、敵方につくやうなことはございますまいか。

將門（菰を敷く郎黨に）そ、そこは往來から淺間過ぎる、まだしも隱れるには、こゝが好い。（と位置を指示してから、妻に）それでは何か、出て戰はない俺を、卑怯とでも云ふのか。

東の君　（夫の激語に氣をのまれて）えゝ？（と、見る）

將門　誰と戰つてゐるのだ。（忿しく唾を飮み）脚氣の病ひにかゝつて床に寢てゐるおれを、今日不意に襲ふて來たのは誰なのだ。

東の君　…………

將門　おぬしの父だ。おれの舅だぞ。去年は二度までおれを襲ふて、その度におれは逐ひ退けたのだ。二度ともに取れ

ば取るべき生命なのを、おれは骨肉のよしみを思ふて助けたのだ。それなのに京都の官附に訴へ出た。おれは京にのぼつて、明かに陳狀した。公家の裁判にも、わたくしの爭闘にて他意なきものと認められ、彼我ともにその罪を問はずと、大赦の免狀を下されたのではないか。兩家の爭端はあの赦免狀と共に消えてゐるのだ。

東の君　しかし斯うして——

將門　待て、聞け、好いか。おれはもうその時から、過去の一切を洗はれたやうな輕い心になつてゐるのだ。貞盛にも誓狀を送つて、おれはその心持を話して置いた。貞盛からも懇情をつくして、二心なきの誠實を、誓狀をもつて誓ふて來てゐる。彼とおれとの間には、怨讐ともにないのだ。それなのに、今日、突然、身のとのはおれの柄中と知つて、河を渡つて子飼の渡しから攻め入つて來たのだ。しかもその先陣の眞向には、祖父君高望の尊像と伯父國香ぬしの靈牌とを正面に立て、旗を靡びけ鉦を擊つて、堂々と殺到して來たのだ。おぬしはわかるか、おれにはわからない。おれはこの春京都から歸國以來、叔父者に對して何をした、何んの惡事をした。何を怨みにおれは攻められるのだ。おれはその後、叔父にも貞盛にも何をした、何をした。

東の君　けれども斯う攻めて來れば、それを禦ぐより外はありますまい。あの通りみな、百姓は塗炭に苦しんで居ります。

將門　（黑煙を見て）おゝ、火の手が仁江戶の方にもあがつた。郡內を總て燒き拂ふつもりだな。（狼狽しつゝ妻の方に來て）おぬしの父君は思慮に富んだ人だ、また佛法の信者だ。樣もなくこの狼藉を働く筈はない。何か、おもはくあつておれを攻めるに相違ない。人間はたゞ利慾のためばかりで、然うまで人を惜めるものではない。叔父御は何を思ひ違ひしておれを攻めるか。それを知りたいのだ。合戰は何日でも出來る。勝つた、負けたで、人の

心底が知れるものではない。おれは何んで憎まれるか、それが何う考へてもわからないのだ。叔父君はおれの何處を憎む、何處を惡いと云ふんだ。

東の君、將門の目を見詰む。

將門　（妻の視線に心づき、苦しげに呼吸して）戰ふことは何んでもない。何時でも今でも戰つて見せる。けれどもおれは、昨夜と今朝、二度つゞいて明神の祠に不吉を見てゐる。一度は大幣が倒れる、今朝は神前にものゝ血が滴り落ちてゐた。明神は何かおれに驗示を垂れ、誡めをさづけてゐるのだが、凡夫のおれには……おれにはそれがわからないのだ。戰ふのは何時でも戰ふ。しかしおれはその前に、何んで叔父者に攻められるかを知りたい。それでもおぬしは、おれに出て戰へと云ふのか。

東の君　是非ないと思ひます。百姓を安堵させなければ、あなたの武名が地に墮ちます。それが悲しうござります。

將門　おれは病氣だ。（と口惜しげに叫ぶ）脚氣で寢てゐたのだ。

東の君　けれども、その――

將門　えゝ、云ふな。おれは卑怯ぢやない、卑怯で遁げたのぢやない。戰ふなら何日でも戰ふ、何日でも死んで見せられるのだ。おぬしのその、おれを勵ます石のやうな顏を見ろ。名だ、名だ？はゝはゝゝ。世間の名のためには、おれの眞實を殺しても好いと云ふのか。おぬしの面は石だ、おれは今日ほど恐しくおぬしの顏を見たことがないのだ。あつちへ行つてくれ。

その時より比都目、郎黨等は隱れ所の用意をなしゐたりしが、子春來り一市の君に何か囁き云ふ。

東の君、夫を悲しげに見て、嘆息しつゝ葦の間に入る。將門はたゞ、そこゝに立ちて黑煙を見るのみ。

やゝ近く人馬の騒音聞ゆる。御厨の別當多治經明、大童の姿にて駈け來る。

經明　(手を握りつゝ) おゝ、小次郎。無事でゐたな。病氣だつたさうだな。

將門　うん、寢てゐたのだ。出拔けに不意をうたれた。三郎は。

經明　うん、そこの堤に引上げて息を吐いてゐる。

將門　何んしろ……酷いことになつた、酷いことになつた。

經明　南は藏持、北は鎌輪宿からかけて一面だ。

將門　そしてお前の栗栖院の厨は。

經明　もう今頃は、火がかゝつてゐるだらう、仕方がないよ。

將門　勘忍してくれ、おれは不意の大軍に、一刻ためらつた。その立遲れが最後になつたのだ。怺へてくれ〳〵。

經明　なあに、最う仕方がない。

將門　かならずおれは回復して見せる、おれは常陸に押寄せて、三度も四度も燒き拂つた男だ。いつでもおれは回復して見せるぞ。おれを信じてくれ、おれを見失はないでくれよ。(經明の手を固く〳〵握りて、ホロ〳〵と涙流る)

經明　うん、何あに……これも運だ。(力なく將門の手をはなるゝ)

郎黨二三人に圍はれて、平眞樹不安さうに連られ來る。

眞樹　何うしたのだ。おれを逃げたと思つたのか。おれは女連れのために、渡りの船を探してゐたのだ。(と面を膨らす)

將門　うん眞樹か。おぬしはおれの傍にゐてくれ、おれをはなれては不可ない。

經明は岸に立ちて、慨然と黒煙を見詰むる。

眞樹　しかし敵方は圖に乘つてるぞ。寄せて來たら何うする。それともそこが許すなら、おれは常陸方へ使者に立つても好い。條理を說いたら和睦にならない筈はない。行つて來うか。

將門　眞樹　それが不可ない。おぬしは敵方に裏切りたい男だ。みなの目もおぬしを疑つてゐるぞ。自分を表裏者にしては、おぬしのために惜しい。凝つと我慢して、おれの傍をはなれるな。おぬしの所領は、かならずおれが取返してやる。

眞樹　今頃は燒土になつて、おれの家など塵も殘るまい。もう何うだつて好いのだ。

雨蛙、又けたゝましく泣く。

人聲、遠く近く聞ゆ。將門いら〳〵して又黒煙を眺めゐる時、弟の三郎將頼、鎧下の直垂など燒けちぎれ、疲勞困憊の極ヒヨロ〳〵して來る。將門ふと弟を見て、神經的にビクリとして二步ほど遁げる。

三郎　（目の底より兄を見上げて）何に驚くのだ。

將門、弟の目を避けて、羞るやうに俯向く。

三郎　（冷かに）見る通りだ。これで滿足したらう。

將門　……。（脣を嚙む）

三郎　あゝあ。

三郎、絕望的にうめきて、路傍の草地に身を投げる。兩手を後頭部に置いて、凝つと蒼空を見詰める。

眞樹　（頂垂れし頭をあげて）あ、また人聲が近くなつた。小次郎のとの。おれを使者にやつてくれ。見す〳〵一郡を

焦土にしてはゐられない。おれが行けば、かならず和平のはからひする。（立上りて）行つて來るぞ、行くぞ。

一同答ふる者なく、雨蛙の音のみ際立つて聞ゆ。

、眞樹は力なく溜息して、また蹲まる。地面を見つめる。

經明　（先程より無言にて黒煙を凝視せしが、後向きのまゝ寂しく笑つて）はゝはゝゝ、三郎。到頭……おれの御厨も燒け落ちた。

三郎　（空を見たまゝ）あの微かな鐘の音が然うなのか。

經明　うん。さつきから燃えてゐたのだ。これでもう最後だ、最後だ。

經明、他人事のやうに寂しく笑ひつゝ、兩手を振りつゝ何處ともなく歩み去る。

眞樹、又むつくと起つ。將門の目を見て、臆病らしく又蹲まる。

三郎　あゝ……。（と手足をバタリと投げ出す）

將門　（弟の嘆息に逐はるゝやうに、急に眞樹に）眞樹。自分を卑しくしてくれるなよ。男は自分を見失つてはならないぞ。强くなれ、おぬしは全體弱い人なのだ。おれはこの場合に、弱さから罪に落ちる人を見るのが苦しくてならない。おれの傍を離れるなよ、おぬしは今、自分を救はなければならないのだ。何うか勇氣を出してくれよ、賴むぞ、眞樹。（といふ聲、止度なく流るゝ淚にしどろとなる）

眞樹は無言、嘆息。

舞臺沈默。栗栖院の早鐘微かに聞ゆる時、突然、耳元に男女の泣き叫ぶ聲起りて、避難民七八名、家財など荷擔つて罵り叫びつゝ通り過ぐ。

丈部の子春丸、走り出づ。

子春丸　との。敵騎の蹄は近くなりました。この地も安穏とは云はれませぬ。何うなされます、との、との、何うなされます。

將門　うん、然うだ。女どもは落せ、六軒か、水口か、何處へ落す。

子春丸　いや／＼、街道筋は尙もつて危なうござります。

將門　それでは何處だ。

眞樹　（立上りて）おれが案内しやう。この上は沼を渡して、常陸川に落ちのびる外はない。丁度渡し場に知つてる者がある。船を用意させやう。

將門　然うか、然うしてくれるか。恩に着るぞ。何處でも好い。助つてさへゐれば、後は何うにもなる。

眞樹　あの松原が船もちの家だ。直ぐ女房たちを將來してくれ。

將門　好し、直ぐ後から遣る、頼む。子春、直ぐ用意しろ。

眞樹、急に勇氣づきて走り去る。

將門は妻の方に行かんとせしが、三郎の倒れゐるに心付きて立止まる。避難民また通り過ぎる。

將門　（弟の手を執りて）三郎、さあ立て。一緒に逃げやう。兎に角、一先づこゝを落ちて置くのだ。あとはおれに考へがある、さあ三郎。

三郎　………。（荒らかに手を振拂ふ）

將門　強情を張るな。さあ、三郎、おれを信じてくれ、三郎。こゝで散り／＼になつては、何うすることも出來まい。

一族纏まつてゐての相談だ。三郎。

三郎　………

將門　お前はおれに云ひたいことがあるのだ。この場合は、賴む。さつきおれがお前を見てドキリとしたのは、お前の目に讀んだからなのだ。兄弟喧嘩してゐる時ではないぞ。

三郎　………

將門　三郎！それは執拗過ぎると云ふもんだ。起て。

　女どもは避難の用意して、奔の間を出づる。

東の君　との、との。

將門　待つてくれ、先へ行つてくれ……。三郎、全體お前は何處までおれを苦しめるのだ。お前はおれを、苦しめるために苦しめるのだ。お前は家のためと云ふか知らないが、然うぢやないぞ。

東の君　との、との。

將門　待て。三郎、おれはこの頃然う思ふ。兄弟と云ふものは、つく／＼敵だと思ふ。この世のみの敵でなく、あの世から持つて來た呪咀があるのだと思ふ。弟といふものは、兄を咀ふために生れて來たものだ。お前は右と云つて、左と云つて、そして、おれがうろ／＼苦しむのを見たいのだ。

　三郎、むツくと起きて兄の目を睨む、顏面蒼白。

東の君　との、との。人音が近くなりました。との。

將門　先に行け。（と叱り）おれが京都の藤原家に、檢非違使の職を願つた時にも然うだ。お前はおれを何んと嘲つた。

三郎　（初めて口を開き）今それを云つて何になる。

將門　云はなくてはならない。おれは溜めに溜めて置いたのだ。お前は小兒の時から、かならずおれに異を樹てした。どんな時でも、かならず兄の外に弟といふものを見せやうとした。

三郎　何。

子春丸　との、敵が間寄せたら何うなされます、との、との。

將門　えゝ、その要領が出來ないか。連れて行け。直ぐ行くと云つてるのだ。

　將門は夢中になりて、摑みし三郎の手を離さず、睨む。三郎も憎惡に燃えて兄を睨む。

　子春丸、女だちをなだめて去る。

將門　おれはな、兄だから／＼と思つて、我慢して來た。その我慢がお前には氣に入らないのだ。お前はいつもいつも事の破れを願つてゐる。お前の本心はいつも、兄、弟の約束をほどきたいのだ。兄から離れた、一人の人間になりたいのだ。見ろ、見ろ、その眼が――お前はおれを咀つてゐる。それをおれは、兄だから怺えて、この兄弟の結び目を解くまいとして苦しんで來たのだ。

三郎　何……。

將門　今日の合戰に、なるほどおれは逃げた。上總の叔父は、今日の襲撃に、祖父君高望王の尊像と叔父國香の靈牌を先陣にかゝげて、正面から押し寄せて來たのだ。おれはそれを見て顚動して、心に一刻躊躇した。その躊躇の間に、敵は子飼の渡しを渡つてしまつたのだ。

三郎　木で造つた木像が何んで畏いのだ。責められて死ぬのは人間だ。

將門　それ、それが弟の言葉だ。おれは木像が畏くて逃げたのではない。

三郎　何、何……。(睨めたる目を離さず、膝を詰め寄せる)

將門　おれは、おれはな……考へる間が欲しかつたのだ。

三郎　何。

將門　おれは死身になれば、容易に自分を忘れる男だ。それだけに怖かつた。叔父が押し立てゝ來たこの木像位牌に、弓を引くは善いことか惡いことか、後に悔みを殘さないか、たゞそれだけのことを考へる間がほしかつたのだ。おれは兄だ、家長だ、おれが考へなければ一族を誤まると思つたのだ。お前が伴類に下知して、鏑矢に飛び出すのを止めたのはその時だ。お前は考へずに直ちに動ける、それが弟だ。おれは考へなければならない、兄の約束なのだ。その、その間に、敵は鬨の聲をあげて間近く寄せた、門前の民家に火を放つた、火煙が館のなかまで煽いて來たのだ。

三郎　それなれば、何故、常陸の伯父を殺した。

將門　(顔色をサツと變じて)何。

三郎　數度の戰に、兩叔父どもに矢を射かけてゐるではないか。何故、木像だけがそんなに恐しい。怯懦者！

將門　……。(顳顬として言葉出ず)

三郎　お前は何人にも褒められたいのだ。何人にも善き子と云はれたい、くだらない欲情があるのだ。それが怯懦者の證據だ。百姓作人のこの慘狀を見ても、顫え立つことの出來ない臆病者だ。お前は一族を滅すやつだ。おれ達はお前のために滅されるのだ。

將門　それはおれの云ふことだ。おれの家を滅ぼすのはお前だ。お前は家の結合(ロック)を內から解き放さうとする惡魔だ。

三郎　お前こそ魔王だ。うぬが怯懦に一族の者を犧牲にするのだ。

將門　何。

三郎　何。

將門　死ね！

三郎　うぬこそ、死ね！

將門　………

三郎　………

二人は肩に呼吸を苦しめて、憎惡の目に激しく睨み合ふうちに、兩方より手が出てゝ取組み合ふ。將門は病中にて氣力なく、互に轉がり合ひつゝも危くなる場合多し。

夕暮。舞臺暗くなる。後方の黑煙は火となりてパッと背景を染むる。

避難の少女、泣きながら親を呼んで通り過ぐる。

子春丸、慌しく馳け來る。

子春丸　との、との、どれに御座る。眞樹のとのゝ謀叛だ。眞樹のとのが謀叛なされた。との……との

將門　何、眞樹が謀叛した。

將門、飛起きんとするを、三郎跨つて動かさず。

子春丸　(その體に驚き)これ、何うなされた。それどころではない。眞樹のとのが、所在の百姓を語らつて、對の君

さまも和子さまも大勢に引つゝんで、敵方へ降人に出られました。お二人の生命が危い。との、との………三郎の御子、………との。

子春丸は引分けんとしてうろ〳〵する。

兩人はなほも激しく組合ひ、轉び合ひつゝ。

—（幕）—

第四幕

時——承平七年十月中旬。深更より曉に至る。

處——將門の假營。地點はほゞ第二幕に同じ。

本邸の燒失後に、假に營める將門の營所を內部より見たるところ。上手に丸太柱の柵矢來あり、物見櫓をあげたる粗末なる木戶門あり。その外は毛野の川原なり。薄闇を透して、遙かに筑波山を望む。下手には武者溜に似たる板廂の小屋あり、陣の幕など張る。內部は板敷。上手の大臣柱にかけて、板屋の側面を見する。廿日頃の弦月、荒涼として空にかゝる。

庭上、門外には數ケ所の篝火。深更らしく火勢衰へたるもあり。楯を築き、武具を飾る。

幕明く。庭上には戰爭に負傷せる者ども數名倒れ呻き、百姓等それを介抱して裏庭に搬びゐる。

篝火に手を暖めつゝ、郎黨比都目、黑人、子春丸など何か小聲に話しゐる。比都目は戰場より歸りし姿にて、

臀部を負傷す。

深夜の犬の聲。毛野川の瀨音のうちに聞ゆる。

比都目　いや實に舌を卷いた。とのゝ此度の働きは、佛說に聞く阿修羅王の荒れ狂ふ姿といふて、あゝはあるまいと思つた。

子春丸　然うであつたとの。追々と手負人（ておひと）の注進でそれを聞いたよ。

比都目　此度（こんど）七日の合戰に、夜も晝も先陣（さき）をかけるはかならず殿だ。葦毛馬に駈（かけ）を入れて、眞向不亂に敵陣へ跳り入る姿は、まつたく鬼神が憑かせられたかと思ふた。

黑人　戰場で、眞樹を見付けて追駈けられたと云ふではないか。

比都目　その時さ――。われも人も手に汗を握つた。

黑人　うむ、うむ。

比都目　あれは何日であつた……一昨日か、その前の日か――戰場（いくさば）の昨日は去年のやうで、日は思ひ出さぬが、場所は筑波の南野であつたよ。おれはその時、草鞋の緒でも結んでゐたか……何んでも土にかゞんでゐたが、あれあれと云ふ聲に、思はず顏をあげて見ると、とのはたゞ一騎、鉾を宙に舞はして眞樹のあとを追駈けてゐるのよ。敵前だ、矢が雨のやうに降る。

黑人　眞樹は恐れて、蝗のやうに飛んだとの。はゝはゝ。

比都目　ほんによ。はゝはゝ。

子春丸　無理もないな、眞樹にかゝる怨みは深い筈だ。

比都目　もの丶十尋も距てぬまでに追ひつめて、貞樹は這々の體で敵陣の盾のうちへ逃げ込んだ。とのは如何に無念であらせたか、鉾を三度まで地に投げて、大聲に泣かせられたよ。恐しいことだつた。

子春丸　うん、うん、然うであらうともなあ。貞樹は憎いやつだ。

黒人　だが、此度これほどにとのが奮ひ立たしやつたも、貞樹のやつ憎さの一心からだ。貞樹があるため常陸にこの仇返しが出來たやうなものだ。

比都目　然う云へば、まあ然うも云はれるなあ、はゝはゝ。

三人笑ふ時、板屋のうちより三郎出で來る。

三郎　おゝ比都目歸つたな。兄者は何うされた。

比都目　もうやがてゞござりませう。大國木の宮前から、先を駈けて參りました。

三郎　疲れて歸られるだらう。子春、それ、篝を焚いて、祝ひ酒の用意も出來てゐるな。

子春丸　すでに調ふて居ります。(と立つて、黒人と共に篝など焚き添ふる)

三郎　何んとしても、みな無類の働きだつた。勝軍の注進を聞くたびに、おれは凝つとして陣屋にゐられなかつた。留守に殘された不運を、今度といふ今度はしみ〴〵と悔ませられたよ。はゝはゝ。

比都目　此度の戰場だけは、實お目にかけたうござりました。まるで七日の間は、野山に兎を逐つてゐるやうなものでござります。

三郎　兄者は、何んといふても一族の棟梁だ。さあと云ふ時、あの最後に奮ひ起す勇氣は恐しいものだ。わしなどは面も向けられぬ。

比都目　ほんに然うでござります。難戦に向ふほど氣力を加へて、顔の相好まで生々とせらるゝには、一同皆たまげて居ります。

三郎　兄者は眞樹を狙ふたとな。はゝはゝゝ。

比都目　今もその話でござりますが、物凄いほどでござりました。

三郎　眞樹の憎みがこの戰を勝たせたのだ。憎みなしには戰へないのが、兄者の氣性と見える。はゝはゝゝ。そして上總の叔父は。

比都目　殘つた軍兵を引纏めて、命から／＼落ちゆかれました。あの爲體では、所詮再擧は難しう思はれます。

三郎　度々の敗軍だからな、はゝはゝゝ。そして貞盛は何うした。やはり搔暮れ行衞が知れないのか。

比都目　筑波を破つて、弓袋の山に閉んだまでは、慥かに所在が知れて居りましたが、それからの先が知れませぬ。遠く東濱にでも落ちられましたか、あるは陸奧路を指されたものか、何んでもそんな評定でござりました。

三郎　京都侍め。今度は懲りたか。はゝはゝゝ。それにしても、比都目。豐田岡田二郡の百姓の人氣は大したものだぞ。評判を聞いて、みな追々とわが家の被官を願ふて來るわ。遠く下野所在の豪族までが、音物をもつて詣ふて來るわ。今に近隣近鄕みなわが家の下風に立つやうになるぞ。はゝはゝゝ。

比都目　との、合戰には勝たねばなりませぬな。

三郎　然うだ。勝つための戰なのだ。はゝはゝゝ。

子春丸　（門外を見つゝ）もし、との、人聲が聞えまする。

三郎　うん、兄者が歸られたのだ。（と慌てゝ出で迎ふ）

將門、軍裝にて、門外より大聲にカラ〳〵と笑ひつゝ、鉾を杖いて歸り來る。多治の經明も軍裝にて引き添ふ。郎黨六七名、これを警護し來る。

三郎　おゝ兄者、めでたう凱陣されたの。

將門　(小兒らしき誇にて)三郎、和主の顏を見に歸つて來た。今日は何んと云ふ。はゝはゝ。

三郎　言葉がない。無類だ。

將門　恐れ入つたか。もう惡垂れは云はせないぞ。

三郎　それどころか、みな拜みたいやうな氣でゐる。

將門　狡るいやつだなあ。もう手の裏を返してゐる。はゝはゝ。

三郎　そこが次男ものゝ、怜悧さなのだ。はゝはゝ。

將門と三郎、手を握つて笑ふ。

一同どつと笑ふ。

三郎　(黑人に)それ、兄者が歸られたのだ。家の者をみな起せ。

將門　いや、それには及ばぬ、みな戰場から疲れて來てるのだ。明日のことだ、明日だ。おれも今日は疲れた。(持てる鉾を千春丸に渡し)これを明神に供へて來い。(と、板屋の前なる牀几に腰掛く)

經明　疲れる筈だ。(と自分も踞りつゝ)十九日に館を出て……今日で七日七夜だものなあ。われ乍ら好く驅けめぐつた。

將門　おれは惡い癖で、戰場となると夜眠られないのだ。

經明　誰でもだ。軍ぢゆうはさて眠つたと云ふ心はないものだ。

將門　あゝ、ほつと呼吸をついた。(と直ぐ後なる柱に後頭部を凭たせる) この疲勞もみな三郎だ。三郎のやつに口を利かせまい〳〵と思つて、おれは夢中に働いたのだ。今になると騙されたやうな氣もする。

三郎　なら、おれは、兄者のための軍神ではないか。

將門　さて、面憎い軍神だなあ――

兄弟顏を見合はせて、又どつと笑ふ。

經明　三郎。留守した和主は羨しからうぞ。明日になつて見ろ、常陸中から分捕した金銀財寶は、馬の背中に何十駄となく搬ばれて來るのだ。恐らく此度の戰ほど分捕品のあつたことはあるまい。

將門、柱に頭をもたせたまゝ心地よげに笑ひゐる

三郎　いや、然う云へば此方にも羨しがらせる用意があるのだ。恐らくその分捕品とて、こちらの賭物には及ぶまいぞ。兄者、その時に驚くな。

經明　何かあつたのか、何んだ。

三郎　和主たちの口が憎い。それはまあ云ふまいよ。はゝはゝ。それよりも酒だ。みな疲れてゐるやうだ、早く酒にしやう。

將門　(手を振つて) おれだけは酒は飲まぬぞ。斯うして置いてくれ。

三郎　何うしたのだ。

將門　斯うして凝つとしてゐるとな、耳の底でシインと蟋蟀が啼くやうな音が聞えるのだ。酒を飲んで醺ごころになつて、この靜けさを破りたくないのだ。軍がへりには何日もこれだ。悲しいと云つては强いが、心が秋の水のやう

に沈んで來る。

三郎　はゝはゝゝ、又、何か云つてる。それ、酒だ。

　　三郎郎黨等に云ふ。郎黨立つ。

將門　お前は笑ふがな。然う云ふものではない。恐らく人の心のまことはこの境にあるのだ。わしはいつも斯の時に心の濁りを清められるやうな氣がする。

三郎　はゝはゝゝ。兄者、それではおれが、その蟋蟀が耳に聞えたくなるやうにして見やうか。

將門　何。（と微笑）

三郎　驚くなよ。姉の君が常陸の敵から歸つて來られた。

將門　（流石に愕然として）何、妻が上總から歸つた。吾子も無事なのか。

三郎　何うだ。はゝはゝゝ。こりや軍の分捕より賭物が重たいだらう。はゝはゝゝ。

將門　然うか。二人は殺されたのではなかつたか……

三郎　はゝはゝゝ……。何うだ、兄者。はゝはゝゝ。

　　三郎は腹を抱いて笑ふ。

　　將門は却つて悚然たるものゝ如く、凝つと一點の空を見詰める。

經明　それは不思議だ。（と手を打つて）何うして歸られた。よもや二人を助けて歸すやうな上總びとではないが……

將門　（屹として、立ち）何處にゐる。

三郎　疲れはてゝ歸つて、あの假屋に四郎に介抱されてゐる。

將門　(立つたまゝ)會はれるか。

三郎　それはお身の自由だ。何を聞くのだ。はゝはゝ。

將門　(又牀几にかけつゝ)いま歸つた時、四郎は何うしたと聞かうと思つたのだ。けれども四郎の安否を聞いた直ぐ後に……何かおれの心に空胴(うつろ)が出來さうに思つた。吾子はと問はれない寂しさなのだ。はゝはゝ。(と寂しく笑つて)それでおれは、四郎にまで口を緘ぢてゐたのだ。(と又、柱に後頭部を凭たせる)

三郎　呼んで來やうか。直ぐ會ふか。

將門　うん、何方でも好い。——生きてゐるとさへ聞けば、明日でもかまはぬ。

三郎　似合はないことを聞くものだ。餘程疲れてゐるな。

經明　酒だ、酒だ、酒でなくては、その元氣が出まい。はゝはゝ。

三郎、郎從の一人に目くばせする。郎從、去る。

將門　(頭を凭せつゝ)經明。

經明　何んだ。

將門　おれには不思議なこゝろがある。

經明　ほ、何んだ。

將門　また笑はれる。云はずに置かう。はゝはゝ。

經明　死んだと思つた人が蘇つたので、氣が顚動してゐるのではないか。

將門　それなら好いが……まるで違ふのだ。(と靜かに小聲で、止度なく笑つてゐる。)

東の君、壺装束に似たる姿にて、乳兒を抱き、四郎と共に躓くやうに走り來る。

四郎　お丶兄君、歸られたか。

東の君　との——。（と懐かしげに走り寄りて泣く）

郎黨等、酒器、行器など持來りて傍に置く。

將門　（頭を柱に動かさず、目のみ見遣りて、靜かに懶げなる聲にて）何うして生きゐられたのだ。貞樹はお身を、上總の陣に渡さなかつたのか。

東の君　船に積まれて、常陸川を流れ下りました。そして羽鳥の陣屋に送られました。番の人を嚴しくつけて、閤閉のやうなところに置かれました。

將門　父君は對面をゆるさなかつたか。

東の君　はい。（と泣く）

將門　それにしては、何うしてその獄屋を出られた。

東の君　………

將門　女の身で、陣屋を脱け出ることはならぬ筈だ。何うして出た。

東の君　………

將門　（柱より離れて）何うしたのだ。誰か救ふ者がなければ、身が逃れぬ筈だ。何うして出た、何うして逃げた。泣いてゐては濟まぬ。云へ。何うして獄屋を出た。何うした、何うした。

東の君の答なきに苛ち、且つは或る不安に襲はるゝものゝ如く、次第に言葉急しく、屹つとなる。

東の君　その人の名は、明してくれなと云はれました。

將門　何………。(と唇を嚙んで妻を見詰める)

東の君　との〻心を騷がします。その名は問はずに置いて下さいまし。

將門　(投げるやうに) お身、貞盛に助けられたな。

東の君　え〻？

將門　貞盛に相違ない。貞盛だ。………む〻、彼が陣屋に繫がれたのか。(と太息する)

東の君　との。それでは太郎のとの〻恩をうけては、不可なかつたのでござりまするか。

將門　誰が然う云つた。生きて歸つたのはめでたいことだ。

經明　(酒杯をとつて、立ち) さ、小次郎。祝ひ酒だ。そこから酌んで廻はしてもらひたい。小次郎、酒だ。(と肩を打つ)

將門　酒か。今宵は飲みたくない。

經明　何うしたのだ。では、われ〱ばかりで酌むぞ。三郎も、みな寄れ。四郎、和主は何うだ。

四郎　わしは酒は嫌ひだ。

經明　然うだ、和主は菅家仕込みの學生であつたな。は〻は〻。

經明と三郎、郎黨と篝火の傍に團坐して酒を始む。

將門、うむ………と呻きて、又柱に凭れる。瞑目。

東の君　との、との………何か、お氣にそむいたのでござりまするか。

將門　(瞑目のま〻更に靜かに) お身は貞盛に面會したのだな。

東の君　はい。（と不審さう）

將門（間を置いて）貞盛はわしを何んと云つて居つた。（苦しげに口籠りつゝ）やはりわしを怨んでゐるのか。

東の君　いゝえ、そのやうな樣子は氣振りにも見えませぬ。却つて、懷かしがつてゐられました。

將門（ドキリとして）何。

東の君　今の小次郎は思はふに思はれもせぬ。思ひ出されるのはやはり髫髮(うなゐがみ)の頃の凛々しい優しい小次郎ぢや、尫弱なわしは、從兄の小次郎のあの逞しい肩の肉、肱の强さを、どれだけ賴もしう思つたか知れない。小次郎の掌の下にかゞめば、わが世の敵はないものとさへ思ふた。その小次郎の子を產んだ御身は仕合せ者だと、わたくしまで褒められました。

將門ヂロリと目を開きて妻を偷視る、又目を瞑づ。

東の君　十三の歲、京上りの時、國府の松原のはてまで見送つて、さりとて言葉もなく、寂しさうに人の陰にションボリと俯向いてゐた小次郎の姿が、思ひ出すたびに目に見えると云ふてゐられました。

將門（快き感傷心を撥ね返して）然し、敵だ。おれは彼に逐はれた。彼はおれに……度々破られてゐるのだ。

東の君　將門を本意の敵とは、何う考へても思はれぬ。いつも逐はるゝ時に心が輕く、攻める時には心が痛むと云ふてゐられました。

將門　貞盛、ほんたうに然う云つたか。（間）然し、然し……お前を奪つたことは何んと云つた、伯父を殺したことは怨んでゐる筈だ。

東の君　いゝえ、そのやうな怨みは聞きませぬ。

將門　お身を遁れさせたのは何日の日だ。

東の君　一昨日の朝。との〻先勢が石島の館を圍んだ時でございます。供の者をつけて間道から、藤代道に出て歸りました。

將門　然し貞盛は何うする氣だ。爭鬪をこのま〻には置けまい。

東の君　太郎ぬしは、一日も早く京都へ歸りたいと云ふて居られました。

將門　と云ふのは。

東の君　苦しい爭鬪の巷から、その身を退きたいのでございませう。都には婿入りすべき家も定まり、權門の便宜もあると云ふて居りました。

將門　所領は何うする。名は何うする。

東の君　爭ひの上に立つ名など、惜しう思はぬのでございませう。たゞ京の風雅に憧れてゐるやうに見えました。所領は何人の手に渡つても、年々の貢物さへ送られゝば、それで好いのかと思ひます。

將門　然うか……然う云ふ心もあられるかなあ。(氣が付いて急に)四郎、夜が更けて朝霜が降り初めた。稚兒の顏にか〻つては好くない。姉御前を導いて、假屋に臥所を設けてやりやれ。

四郎　兄者。そこは無事に歸つた稚兒の顏を、見てやらうとは思はぬのでございますか。

將門　おゝ、然うであつた。どれ〳〵。

　東の君、抱きたる兒を差寄せて見せる。

將門　うむ。好く眠つてゐる。格別面變れもしなかつた。

東の君　これでも合戰の恐しさが、兒心にもわかるかして、キツシリと胸に張りつき、常のやうにむづかりもしませぬ。

將門　合戰は大人でも厭だ。(と生欠伸を噛み、又柱に凭れる)

四郎と東の君は去る。

遠く人馬の騒音聞ゆ。

三郎　(耳を立てゝ)おゝ、殿軍が引上げて來たやうだ。もう間もなく夜が明けるだらう。

經明　(坐つたまゝ將門に)そこ、そこ。

將門　うん………。(とうつら〳〵してゐる)

經明　どうだ、まだ蟋蟀の音が耳に聞えるか。

將門　うん………。

經明　はゝはゝゝ、何うした小次郎。

將門　(間を置きて)先刻おれは、自分に不思議な心を見たと云つたな。それを考へてるのだ。おれは妻子の生命が無事と聞いた時に、打たれたやうにガツカリしたのだ。助かつた嬉しさは云ふまでもないが………同時におれは力が脫けた。うつぷんに眞樹を怨んで張りつめた心が、挫かれたやうにプツリと弓弦が斷れたやうな心持がする。

經明　しかし然う云つても眞樹はそこの妻子を賣つたのだ。信賴する味方を賣るほど、賤しい鄙しい心はないと思ふ。

將門　うゝん、おれは眞樹を云ふんぢやないよ。それより大きいものだ………上の方にあるものだ。何か大きな機關があつて、おれ達はその糸に操られて、逐つたり逐はれたり………怨んだり、憎んだり、そんな事を一生してゐる

のぢやないかと思ふだけよ。誰か玩具にする者があつて、そいつに笑つて見てゐられるやうな氣がするだけよ。

經明　また初めたた、はゝはゝ。それ、それ、それ〳〵見ろ、三郎の目が睨んでるぞ。また何か云ひ出すぞ。

將門　云はれたつて好い。おれは疲れた。

將門ゴロリと板敷に寢る時、門前急に騷がし。

三郎　（突立つて）何んだ、後軍の到着にしては人音が險しいやうだ。また喰ひ醉つて、同志討ちでも初めたのではないか。厄介なやつらだ。（將門に）兄者、ひどく疲勞してゐるやうだ。臥所へ行つて、身を休めたらいゝだらう。

將門　うん、何あに……。斯うしてゐる方が、心が細々として氣持が好い。もう、夜が明けるだらう。

經明　然うだ。もう間もない。

郎黨比都目走り來る。

比都目　との、との、大變が起りました

將門　何んだ、騷々しい。

比都目　左馬允のとのは急に今宵常陸路に顯はれて、信濃路かけて急に京都へのぼられるさうでございます。後陣の者はその報に聞いて、路からとつて返し、文の宰好を上兵として、一人も逃がすなと貞盛のとのゝ後を追かけたさうでございます。

三郎　そりや大變だ。宰好を見殺しにならない。別當、後を賴むぞ。この援兵にはおれが行く。

將門　（起上つて）三郎、三郎。

三郎　後で聞く。

三郎と比部目走り去る。将門、又倒れて寝る。

経明　（不安さうに）大丈夫かな、小次郎。三郎だけで間違ひはなからうか。誰か行かんでも好いか。

将門　（うと／＼しつゝ）大丈夫だ。貞盛にろくな軍勢のある筈はない。

経明　然うだらうなあ……。然し何を急に思ひ立つて、貞盛は京都へ逃げるのだらう。争闘はまだ緒の上にさきつてゐないではないか。褌を投げ出すには早過ぎると思ふがなあ。

将門　うむ。……然うだ。

経明　これでは、武夫の世が来るよ。都びとはもう駄目だ。はゝはゝゝ。田舎者だ／＼、なあ小次郎、これからが田舎の世だぞ。

将門　うむ……然うだ。

経明、から／＼と笑つてひとり酒を酌む時、門外にどつと笑声聞ゆる。夜は白々と明けて、板屋に霜白し。

三郎、高笑に笑ひつゝ、士兵、文の宗好の臂をとり入り来る。

三郎　萬歳だ、萬歳だ。この男宗好に大手柄をさせた。兄者、宗好が大手柄して帰つたぞ。

将門　（やつと起き上り）おゝ、何うした。

宗好　（蹶きて）貞盛のとのが急に思ひ立つて、今宵常陸街道を都に逃げ帰らせられると聞きました。下部につく／＼眼もござりませぬ、御坐なれ、この敵見逃しにはなるまいと思ひまして……

将門　（頻さげに手を振り）もう好い。感言は後にしろ。追駈けて貞盛に矢を射たのだな。貞盛は何騎ぐらゐだ。どんな風體で都へのぼるのだ。

宗好　夜目ゆゑ、確とはわかりませぬが、凡そ五十騎あまりと思ひました。敗軍の後とて、後もなく、先もなく、眞黒に押かまつて、路を照す松明の灯をたよりに、疲れ馬をトボ〳〵と打たせられました。

將門　そして、貞盛を打取りはすまい。

宗好　殘念ながら、打ち洩しました。その代りには、眞樹を生擒つて歸りました。門前に引括つて置きました。

將門　そして、五十騎のうち幾騎ほど打ちとつた。

宗好　凡そ、二三十騎と思ひます。

將門　兵糧、駄馬は。

宗好　一匹も殘しませぬ。みな打ちとりました。

將門　では貞盛には手勢もないのだな。

宗好　はい。

將門　すると貞盛は、あの雪の信濃路を、續く從者もなく、後を恐れつゝ逃げるのだなあ。憐みのない將門に追はれて、彼は身を苦しめなければならないのだ…………

宗好　………

將門　然うかなあ――。貞盛はあの碓氷の峠を越えて……雪の千曲河原を……換馬もなく木曾路にかゝるのだなあ………逐ふ者はおれで、逐はれる者は貞盛なのか。然うかなあ……おれは今、貞盛を追つてゐるのかなあ……………。經明、おれはわからなくなつて來た。おれは誰に欺かれて斯うまで身を苦しめて蹤躡するのだ。誰がおれを動かし、おれを疲れさせるのだ。

曉天の鷄の聲。三郎は凝つと將門を見詰める。經明は用ありげに門外に出入する。

將門　あゝ………。おれは寧ろ、妻子が貞盛に殺されてゐれば好かつたとさへ思ふやうな氣がする………おれの方が貞盛に逐はれてゐるやうな氣がする………經明、おりや疲れたよ。

經明戻り來りて、三郎と囁き合ふ。

三郎　兄者。用意が出來たさうだ。さ、打立たう。

將門　（目を閉いて）用意とは何んだ。

三郎　貞盛を追擊ちするのだ。そしてこの期をはづさず、常陸國内から貞盛の勢力を拂ひ除けるのだ。わが家の禍ひの根を絕つのだ。

將門　………（怨めしげに弟を凝視する）

三郎　百姓も作類もみな奮ひ立つて、あの通り出陣の用意が出來てゐる。こゝで躊躇すれば、彼等の心を失ふ。貞盛の命ある間は、農民等は安心して耕作に從ふことが出來ない。侵略と强奪の恐れに、始終顫えおのゝいてゐなければならないのだ。

將門　お前は又おれを………

三郎　家のためだ。こゝで躊躇すれば百姓等が離散する。百姓より先に、おれが叛く。泣いても叫んでも、お前は陣頭に立たなければならないのだ。

將門　（小兒のやうな泣聲になりて）厭だ、厭だ、おりや厭だ。（と板敷に倒れて）おりやこの上お前の自由になりたくない、厭だ、厭だ。

經明　小次郎。（傍に來て）それに貞盛が急に都に逃げ歸るのは、恐らくお前の罪狀を讒訴して、官符を申しうけて、追討の軍勢を下さるゝに相違ないのだ。貞盛を助け歸せば、所領どころかそこの生命もないのだ。豐田の土は誰が開發した地だ。それを見す〳〵敵に與へる氣なのか。家を忘れるな、親の名を忘れるな。

三郎　兄者。何うした。取らなければ取られるのだぞ。さ、立て、立て。

經明　小次郎、何時まで世話をかけるのだ。若し貞盛を追撃ちしなければ、伴類百姓の謀叛が見えてゐるのだ。さ、小次郎。

將門、悄然として立ち上る。

（幕）

中央公論大賣捌所

所在地	店名
同 京橋區銀座三丁目	東海堂
同 京橋區元數寄屋町	北隆館
同 日本橋區本石町	至誠堂
同 本郷區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同 北區東梅田町	立盛社
京都市七條停車場前	共盛社
同 新町通り七條南入	大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◉定價 金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）

册數＼國別	內國	外國
六册	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二册	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾與圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂　萬年社　告天社

正路喜社　豐國通信社　日本廣告社

信暢社　金蘭社　一星社

一振替貯金 口座番號は東京三三四番 長野三三〇五番なり

一郵券代用 は謝絶す 但し郵便切手の使用は一割増にて申受せらるるを断ります

一代金引替 小包の取扱は一切謝絶す

一集金郵便 御希望の方は拂込金額に對し左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領書にあらざれば難致せす

一金二圓以上五圓迄　金七錢（集金手數料及送料共）

一金拾圓迄　金八錢

一中央公論及婦人公論 代金取纏め御拂込みの場合には各誌割當にて金額御指定を乞ふ

一受領證請求 は必す返信料を要す

大正十三年十二月廿一日印刷納本
大正十四年一月一日發行（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木鳥三

發行所　東京市丸ノ内ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話 丸ノ内三〇二二（當分不通）
牛込五〇八九
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社秀英舍

◉本號特價金壹圓八拾錢　郵稅金五錢

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

◉本號特價金壹圓八拾錢

郵税 金五錢



東京小石川研精社印刷